AE
35
.2
K6
1933
v.59
East
Asiatic
Studies

Koji ruien

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

神宮司廳藏版

古事類苑

植物部
金石部 二

古事類苑刊行會

AE
35
.2
K6
1933
V.59

LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

植物部第二册目錄

植物部十七
草六
植物部十八
草七
植物部十九
草八
植物部二十
草九
植物部二十一
草十
植物部二十二
草十一

植物部二十三
草十二
植物部二十四
草十三
植物部二十五
草十四
植物部二十六
草十五
植物部二十七
菌
苔蕨
植物部二十八
藻

古事類苑

植物部十七

草六

參 名稱 種類 產地 栽培 用途 …… 一
薺苨 …… 七
藍 大青 名稱 種類 用途 產地 栽培 製藍 …… 一五
羊蹄 …… 二三
赤地利 …… 二五
酸模 …… 同
水引草 …… 二六
鼠麴草 …… 二七
虎杖 …… 同
蛇銜草 …… 二九
萹蓄 …… 同
牛面草 …… 三〇
何首烏 …… 同
紫參 …… 三一

拳參（イブキトラノヲ） 三二
大黃 同
酸模（スイバ） 三四
蓼 三六
唐苣（タウヂサ・フダンサウ） 三七
菠薐（ハウレンサウ） 三八
菘菜 三九
地膚（ハヽキヾ） 同
大根 名稱 用途 種類 產地 栽培 [illegible] 四二
蕪菁（アヲナ・カブラナ） 名稱 用途 種類 產地 [illegible] 五五
菘 六二
芥（カラシナ） 六八
芸薹（アブラナ） 七三
薺（ナヅナ） 葶藶（アレナヅナ） 七五
山葵 名稱 用途 產地 八〇
蔊菜（イヌガラシ） 八一
甘藍（ハボタン） 碎米薺（タネツケバナ） 八二
播娘蒿（クヂラグサ） 八三
紫羅欄花（アラセイトウ） 同
白花菜 八四

茅膏菜　同
景天 以知要　八五
壁生草　八八
佛甲草　同
岩蓮花　同
仙人掌　同
虎耳草　九一
升麻　九二
梅鉢草　九四
[illegible]草　九五

植物部十八

草七

覆盆子　九七
蛇含　一〇五
[illegible]　一〇六
地楡　一〇七
草下毛　一〇八
狼牙 木狼牙　一〇九

翻白草（ツチグリ）河原柴胡（カハラサイコ）　一一〇
莧（ヒユ）　一一一
鷄冠（ケイトウ）　一一四
雁來紅（ハゲイトウ）　一一五
青葙（ノゲイトウ）桃朱術　一一六
牛膝（イノコヅチ）　一一八
千日紅　一二〇
商陸（ヤマゴボウ）[illegible]　一二一
紫茉莉（オシロイバナ）　一二二
瞿麥　一二三
王不留行（ドウクワンサウ）　同
石竹　一三〇
剪紅羅　一三二
蘩蔞（ハコベ）　一三四
巻耳（ミミナグサ）　一三七
蓮　一三八
睡蓮（ヒツジグサ）　一五二
蓴（ジユンサイ）　同
芡（オニハス）　一五四
骨蓬（カハホネ）　一五五

蕎麥　一五七
五味子　同

植物部十九

草八

牡丹　一六三
芍藥　一七八
草牡丹　一八六
[illegible]露草　同
女萎　同
鐵線花　一八七
風車草　同
仙人草　一八九
唐松草　同
白頭公 翁草　同
獐耳細辛　一九二
黃連　同
秦艽　一九五
莵葵　一九六

絡手巻　一九八
烏頭　一九九
石龍芮　二〇五
牛扁　二〇六
立金花　二〇七
淫羊藿　二〇八
鬼臼　二〇九
通草　郁子　木蓮子　二一一
防己　千金藤　二二一
罌粟　虞美人草　二二四
華鬘草　二二六
シヽヤキ草　同
延胡索　同

植物部二十

草九

大豆　名稱　物見　種類（黃大豆　黑大豆　青大豆　鵲豆　珂字豆　穭豆　毛豆）栽培　利用　產地　雜載　二二九
小豆　名稱　物見　種類（白豆　綠豆）栽培　利用　產地　二四八

大角豆（ササゲ） 二六〇
豌豆 二六七
豇豆 二七〇
藊豆 二七四
刀豆 二七八
黎豆 二七九
落花生 二八〇
葛 本用 附 葛粉 二八一
藤 小藤 附 各藤 二九三
萩 三〇一
黄耆 三〇八
ワンジユ 同
碎米薺 三〇九
鵝草 同
菫菫菜 同
土圞兒 三一〇
蔓藤袴 同
決明 三一一
茳芒決明 三一二
甘草 三一三

黃耆　三一五
百脈根　三一七
苦參　同
零陵香　三一八
胡盧巴　三二〇
狼牙　同
苜蓿　三二一
草合歡　鬼皂莢　同
補骨脂　三二二
榼藤子　三二三

植物部二十一

草十

酢醬草　三二五
牻牛兒　三二七
蒺藜　三二八
芸香　香燈草　三二九
白鮮　三三〇
遠志　三三二

大戟　三三三
澤漆　三三五
甘遂　三三六
續隨子　三三七
閭茹　三三九
草麻　三四一
地錦　三四二
鈎吻　三四三
[illegible]　三四四
鳳仙花　三四六
ツリフネ草　三四七
清風藤　同
[illegible]　三四八
紫葛　三五二
烏蘞苺　三五三
白蘞　三五四
葛　三五五
葵　錦葵　蜀葵　冬葵　黃蜀葵　三五七
草綿　木綿　三六五
苘麻　三七四

項目	頁
[illegible]花金錢	三七六
金絲梅	三七七
弟切草	同
菫菜	三七八
西番蓮	三八三
秋海棠	三八四
仙人掌	同
使君子	三八六
芰	三八七
人參	三九〇
常春藤	三九五
獨活 [illegible]	三九六
芹	四〇〇
三葉芹	四〇三
前胡	四〇四
茈胡	四〇五
當歸	四〇七
蛇床	四一一
芹葉鉤吻	四一三
胡荽	四一四

懐香 四一五
芎藭 四一七
藁本 四二〇
白芷 四二二
積雪草 四二四
防風 四二五
防葵 四二九
石胡荽 同
胡蘿蔔 四三〇

植物部二十二

草十一

鹹草 四三三
鹿蹄草 四三五
イハナシ 四三六
紫金牛 同
百両金 同
硃沙根 四四一
櫻草 四四二

山萵苣（ヤマニガナ） 四四三
虎尾草（トラノヲ） 四四四
番木鼈（マチン） 同
龍膽（リンダウ） 四四五
當藥（センブリ） 四四八
荇（アサザ） 四四九
睡菜（ミツガシハ） 四五一
絡石（テイカカヅラ） 同
丁字草 四五二
蘿藦（ガガイモ） 同
白兎藿（イケマ） 四五五
徐長卿（スズサイコ） 四五六
白薇（フナバラサウ） 四五七
白前（スズメノオゴケ） 四五九
旋花（ヒルガホ） 四六一
牽牛子 名稱 栽培 利用 雜載 四六三
甘藷 異名 種類 栽培 利用 雜載 四七四
兎絲子（ネナシカヅラ） 四八四
留紅草（ルカウサウ） 四八五
紫草（ムラサキ） 同

馬鞭草	四九〇
龍牙草	同
蠅取草	四九一
荏 名稱 利用 栽培	同
紫蘇 名稱 種類 利用 栽培	四九五
草石蠶	四九八
鼠麴	同
茺蔚	四九九
鏨菜	五〇一
羅生門	同
鼠尾草	五〇二
藿香	五〇三
夏枯草	五〇四
香薷	五〇五
石香薷	五〇七
爵床	同
荊芥	五〇八
薄荷	五〇九
雞通	五一二
麝香草	同

水蘇 五一二
延命草（ヒキオコシ） 五一三
迷迭香（マンネンロウ） 同

植物部二十三

草十二

茄子 名稱 種類 栽培 利用 產地 雜載 五一五
瑠璃茄 五二五
番椒（タウガラシ） 名稱 種類 傳來 栽培 利用 產地 雜載 五二六
馬鈴薯 名稱 種類 栽培 利用 五二九
酸漿（ホホヅキ） 五三三
龍葵（イヌホホヅキ） 五三七
龍珠（ヤマホホヅキ） 五三九
蜀羊泉 同
白英（マルバノホロシ） 五四〇
莨菪（ハシリドコロ） 五四一
烟草 名稱 傳來 禁制 產地 栽培 製方 利害 烟草商 雜載 五四二
曼陀羅花（テウセンアサガホ） 五八三

植物部二十四

草十三

瓢 五八七
瓜 五九七
南瓜 六二八
西瓜 六三二
苦瓜 六三八
絲瓜 六三九
栝樓 六四一
仙沼子 六四四
木鼈子 六四七

植物部二十五

草十四

忍冬 六四九
葡萄 六五一
女郎花 六五二

胡麻　六五六
名稱　種類　栽培　利用　(青蘘)　產地
玄參　六六五
地黃　六六六
黃芩　六七〇
馬先蒿　六七二
通泉草　同
鈴掛草　六七三
威靈仙　同
列當　同
肉蓯蓉　六七四
茜草　同
巴戟天　六七七
ヘクソカヅラ　六七九
八重葎　六八〇
釣藤　同
桔梗　六八一
沙參　六八五
薺苨　六八六
澤桔梗　六八七
半邊蓮　六八八

菊 名稱 賞翫 種類 利用 栽培 雜載 同
野菊 七〇九
佛頭菊 同
濱菊 同
常磐菊 同
蓬 同
茵蔯蒿 七一四
庵䕡 七一五
白蒿 七一六
青蒿 七一八
莪蒿 同
黄花蒿 七一九
牡蒿 同
九牛草 同
蓍 七二〇

植物部二十六

草十五

牛蒡 名稱 利用 栽培 雜載 七二三

萓ヘナデサ 七二七
茼蒿(シュンギク) 七三一
菊 名稱 種類 利用 産地 七三二
薊(アザミ) 名稱 産地 種類 利用 七三七
蒲公英(タンポポ) 七三九
母子草 七四一
父子草 七四四
苦菜(ノゲシ) 七四五
薺蒿 七四六
薇銜 [illegible] 草 兎兒傘(ヤブレガサ) 七四八
劉寄奴草 七五〇
旋覆花 七五一
向日葵(ヒマハリ) 七五二
紅藍花(ベニバナ) 同
漏盧 七五七
飛廉 七六〇
苦芙 七六一
葈耳 七六二
豨薟 七六三
天名精(ヤブタバコ) 七六四

紫菀	七六五
女菀	七六七
金盞草	七六八
狗舌草	七六九
鼠把草	七七〇
タカラカウ	同
續斷	同
鬼鍼草	七七一
項王草	七七二
千里及	同
朮	七七三
三七	七七七
水前草	七七八
鬼督郵	同
款冬	七七九
熊谷	同
蘭草	七八〇
山蘭	七八五
澤蘭	七八六
馬蘭	七八八

木香　七八八
[illegible]草　七九〇
白蘞草　七九三

植物部二十七

菌

名稱　七九五
靈芝　七九七
木耳　八〇二
椎茸　八〇四
杉茸　八〇六
檜茸　同
榎茸 鼠茸　同
椋蕈　八〇七
栗茸　同
柳茸　八〇八
桃茸　同
楡茸　同
平茸　同

桑茸　八一二
鷄[illegible]眼　同
石茸　同
松蕈　八一四
初茸　八二一
黄蕈　八二二
紅蕈　同
シメヂ　八二三
鹿茸　八二四
舞茸　八二五
金茸　八二七
針茸　同
アコフ　同
[illegible]　同
地茸　八二八
土菌　同
葛花菜　八二九
雚菌　同
竹蓐　八三〇
松露 土[illegible]　同

馬勃（オニフスベ）　八三一
茯苓 附等　八三二
菌培養　八三七
茸狩　八三八
菌毒　八三九

苔蘚

名稱　八四四
地衣（ヂゴケ）　八四五
石蕊（ハナゴケ）　同
紫衣（ムラサキゴケ）　八四六
松蘿（サルヲガセ）　同
垣衣（カキノコケ）　八四七
屋遊（ヤネノコケ）　同
石衣　八四八
桑花（クハノコケ）　同
艾納（マツノゼニゴケ）　同
土馬騣（スギゴケ）　同
忍草 骨碎補 烏韮　同
石葦（ヒトツバ）　八五二

植物部二十八

金星草　八五四
石長生　八五五
白龍鬚　八五七
虎尾　同
雁足　同
蜈蚣草　同
蛇眼草　八五八
[illegible]△貫衆　同
齒朶　八六五
海金沙　八六六
[illegible]　同
木賊　八六八
土筆　八七〇
石松　八七二
玉柏　八七四
松葉蘭　同
卷柏　八七五
地柏　同

藻

名稱　八七七
昆布 海帶　八七八
和布 海藻 鳥頭布　八八三
荒布 搗布 相良布　八八九
莫鳴菜　八九一
鹿尾菜　八九四
水雲　八九五
松藻　八九七
海松　同
靑苔 滸苔　八九九
紫菜　九〇二
川苔　九一三
鷄冠菜　九一四
於期菜　九一五
石花菜 海髮　九一六
角俣菜　九二〇
海蘿　九二一
石蓴　九二三

白藻 九二五
鷓鴣菜 九二六
海索麪 同
石帆 九二七
水苔 同
雜藻 九二九
雜載 同

古事類苑

植物部十七

草六

〔新撰字鏡〕蓼（力了反、上、又六音、太〇氏、又太〇夏〇）

〔本草和名（十八）〕蓼實（仁諝音了）紫蓼、一名香蓼、青蓼、（人所食）馬蓼、（大葉）一名龍鼓、一名莸草、（仁諝音紅、楊玄操作葒、江、已上六名出陶景注、）一名蘢（大者）水蓼、（已上二名出蘇敬注）香小蓼、（葉似）蚊蓼、（已上大蓼）大蓼、又有毛蓼、（已上四名出雜要訣）天蓼一名澤蓼、（出雜要訣）一名女情、（今人除蟲以鰻魚煮之、出於崔禹）和名多天、

〔倭名類聚抄（十六）〕蓼 崔禹錫食經云、青蓼、（力鳥反、和名多天、）人家恒食之、又有紫蓼矣、

〔箋注倭名類聚抄（四）〕蓼（訓）多天、依輔仁、新撰字鏡、靈異記同訓、〇中略 按證類本草引陶隱居云、人所食有三種、一是紫蓼、相似而紫色、一是香蓼、亦相似而香、並不甚辛、而好食、一是青蓼、人家常有、其葉有圓者尖者、崔氏蓋本之、今本證類本草一是香蓼作一名香蓼、本草和名引同、蓋誤、今改引說文、蓼辛菜也、蜀本圖經云、紫赤二蓼葉小狹而厚、青香二蓼葉亦相似而俱薄、諸蓼花皆紅白、子皆赤黑、李時珍曰、古人種蓼爲蔬、故禮記烹雞豚魚鼈、皆實蓼于其腹中、而和羹膾亦須切蓼也、後世飮食不用、今但以平澤所生香蓼青蓼紫蓼爲良、小野氏曰、青蓼今俗呼眞蓼、本蓼、其圓葉者又名藍蓼、尖葉者又名柳蓼、香蓼今俗呼多蓼、寒蓼、紫蓼今俗呼唐蓼、或呼牟良左岐多天、皆味辛辣、堪食用、按蓼又蓼葅、見內膳司式、

〔類聚名義抄（八）〕蓼（下正、音了、タデ、）

〔伊呂波字類抄 太植物附植物體〕蓼 タデ

〔八雲御抄 三上草〕蓼　やほたて

〔下學集 下草木〕蓼 タデ

〔易林本節用集 太草木〕蓼 タデ

〔多識編 二隰草〕蓼、多天、今案阿奈多天、　紫蓼、今案阿加多天、　香蓼、今案布由多天、　木蓼、今案豆留多天、

〔東雅 十三穀蔬〕蓼 タデ　倭名鈔に、崔禹錫食經陶隱居本草註等を引て、青蓼はタデ、人家恒食之、又有紫蓼、また荭草一名游龍は、イヌタデといふと註せり、タデの義詳ならず、イヌとは其似て非なるをいふなり、

〔萬葉集 十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

吾屋戸之。穂蓼古幹、採生之、實成左右二、君乎志將待、

〔萬葉集 十六有由縁并雜歌〕平群朝臣嗤歌一首

小兒等、草者勿苅、八穂蓼乎、穂積乃阿曾我、腋草乎可伎禮、

〔古今和歌六帖 六〕たで

みな月のかはらに生るやほたでのからしや人にあはぬ心は

〔新撰六帖 六〕たで　家良

さぎのとぶ川邊のほたで紅に夕日淋しき秋の水かな

為家

かひもなしほたでふるからからからくのみ身のうきふしはおもひつめども

〔本朝食鑑 三菜〕蓼 訓多天

集解、蓼有數種、其俗所用者有三種、葉狹小似小竹葉者、葉小厚不狹有微文、或葉不甚尖而圓廣有微文、俗謂藍蓼(アヰタデ)者、葉長大似鴨跖草葉、俱甚辛而足食、至秋開紅白花作穗、采穗而食亦佳、又有紫蓼赤蓼、惟用形氣之殊、然遲滑爲多用耳、野蓼者平原所生、水蓼者水澤之畔生、或有狗蓼(イヌタデ)者、葉濶大、上有黑點、有毛蓼(ケタデ)者、葉大多細毛、有大蓼(オホタデ)者、葉廣略似狗蓼而陰、莖粗大有毛、花淡紅作長穗、結子形扁、外黑內白、此則荭草也、此等之類、俱不甚辣、今葉凋後以蓼花穗作食、又以花穗及莖葉作鮓、越年尚佳、僧家煮乾蓼家、味甘代鰹魚汁、此俗謂精進煮出也、近時好事之人、燒狗蓼作黑灰、以點火、則終日不滅、復剪松節杉節及剛堅之木、作小圓榾柮、半埋灰裏、用狗蓼灰像米泔、浸其剪痕、晒乾、點火則亦不滅、世以爲奇、家家試之者多矣

〔和漢三才圖會〈九十四末濕草〉〕蓼　青蓼　和名多天〇中略

〇按青蓼、高而強也、二三月生苗、四五月繁茂、至秋作穗、開細花、紅白色、播州津田每出穗蓼、年中有穗、亦一異也、

〔重修本草綱目啓蒙〈十二隰草〉〕蓼　タデ〈通名〉　唐蓼〈和方書〉〇中略

集解、弘景ノ說、靑蓼ハ家蓼〈本經下品〉トモ辣蓼〈事林廣記〉トモ云、和名マタデ、ホンタデ、卽食用ノタデナリ、コレニ二種アリ、圓ト云ハアヲタデナリ、葉ノ形濶クシテ藍蓼(アヰタデ)ノ葉ニ似タリ、尖ト云フハヤナギタデナリ、葉形細長ニシテ柳葉ノ如シ、二種共ニ味辛辣、食用ニ堪ユ、七八月苗高サ二尺許、枝梢ゴトニ長穗ヲ出ス、花ハ白クシテ蒂ハ綠ナリ、故ニ青蓼ト云、

〔本草和名〈十一草〉〕水蓼　和名美都多天

〔醫心方〈一〉〕水蓼〈和名美都多叉〉

〔類聚名義抄〈八艸〉〕水蓼〈ミヅタデ〉

〔伊呂波字類抄〈見植物附植物具〉〕水蓼〈ミヅタデ〉

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕水蓼　虞蓼　澤蓼

本綱、水蓼生二下濕水澤中一、葉似二馬蓼一、大二于家蓼一而長五六寸、莖赤色水挼食レ之勝二于蓼子一、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕水蓼　増、一名辛菜說文

二種アリ、釋名註馬志ノ說ニ、生二于淺水澤中一ト云フハ、カハタデ、一名ミヅタデト呼ブモノニシテ、陸草ニ非ズ、城州下鴨泉河ノ中ニ多ク生ズ、葉ハヤナギタデヨリ細クシテ長シ、味至テ辛シ、食用ニ可ナリ、又時珍ノ說ハ、ヲホイヌタデト呼ブ草ナリ、水旁ノ陸地ニ多ク生ズ、苗高サ五六尺、葉長サ七八寸、濶サ一二寸、背ニ微シク毛アリテ糙澀ス、秋穗ヲ生ズ、常ノタデヨリ粗大ニシテ淡紅色、又白色ノアリ、又葉ノ中央ニ墨記相對スルモノアリ、

〔夫木和歌抄雜二十八〕たで　光俊朝臣

うき世には身をのみつみし水たでのからきめにこそなみだおちけれ

後光明峯寺攝政

水たでのほづみにかよふ村とりのたちゐにつけて秋ぞかなしき

〔本草和名九草〕葒草〇仁諝音紅　一名鴻䕸仁諝胡茁反　一名遊龍、一名蘢古草、已上二名出陶景注和名以奴多天、

〔倭名類聚抄二十草〕葒草　陶隱居本草注云、葒草一名遊龍、葒音紅、和名伊沼多天、

〔醫心方一〕葒音紅、和名、伊奴多天、

〔類聚名義抄八艸〕葒音紅、イヌタデ、　葒草同　遊蘢イヌタテ

〔伊呂波字類抄伊植物〕葒草イヌタテ、亦作レ葓、　荭草イヌタテ　水蘇　鴻䕸仁諝音　遊龍　蘢古草已上二名出陶景注、見二于本草一也、已上二名イヌタテ、

〔易林本節用集伊草木〕葒草イヌタデ

〔和漢三才圖會九十二末濕草〕葒草〇中略　和名伊沼多天〇中略

按葒草犬蓼之大者也、凡物大者曰馬、(馬藺馬藍之類是也、)相似而可紛其物者、以犬爲和名、(犬山椒、犬豆之類是也、)犬蓼亦有斂稱、水蓼、馬蓼、其爲蓼、六月六日、製神麴用蓼汁者、以水蓼爲良、犬蓼之莖燒爲炭、爲懷爐之炭佳、勝於茄竈之炭、能保火、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕葒草　オホケタデ　イヌタデ古名　ホタルタデ　トウタデ同州　ヒラクチヤウドシ肥前　マムシグサ紀州　守鐵草同上　オニタデ備後　チヤウセンタバコ　ハチグサ丹波中國　○

野生ハナシ、春時種ヲ下ス、一タビ種レバ子落テ年々自生ス、苗高サ六七尺、莖大ニシテ拇指ノ如シ、叢生ス、形チ烟草葉ニ似テ尖リ、柔ニシテ毛茸多シ、故ニ大ケタデト云、葉ノ柄筋脈及ビ節ヲ裹タル薄皮、皆深紅色ナリ、八月枝梢ゴトニ穗ヲ成シ花ヲ開ク、淺紅色、蓼穗ヨリ長大ニシテ下垂ス、後實ヲ結ブ、圓扁大サ一分餘、黑褐色ニシテ光アリ、酸棗仁ノ小ナルガ如シ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、

〔夫木和歌抄二十八〕貞應三年百首　民部卿爲家

からきかなかりもはやきのいのたでのほになる程にひく人のなき

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕馬蓼　大蓼　墨記草(見物大全、貝原名、)

本綱、馬蓼生下濕地、高四五尺、莖斑葉大、每葉中間有黑跡、如墨點記、有兩三種、其最大者卽水葒也、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕馬蓼　イヌタデ　オニタデ　一名天蓼(本草原始)　墳、一名藻(品字箋)

品類多シ、野生シテ辛味ナク、食用ニ堪ザル者ヲ皆イヌタデ、或ハ河原タデト呼ブ、皆馬蓼ナリ、葉長ジク、青蓼ニ似タルモアリ、葉濶シテ長キアリ、又短キアリ、秋ニ至リ、紅葉觀ベキ者アリ、又葉ノ中央左右對シテ黑斑アル者ヲ、河內ニテスツポンノタデト呼ブ、是釋名ノ墨記草ナリ、是モ一ノ斑大ニシテ色深キモノアリ、斑小ニシテ色淡シキモノアリ、又色深シテ八ノ字ノ形存スルモノア

リ、又青蓼ニ似テ牟葉黑キ者アリ、是ハ秋ニ入テ莖葉穗共ニ深紅色トナル、俗ニホタデト呼ブ、葉ノ味甚辛シ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕毛蓼。　ケタデ

原野稀ニ生ズ、長葉圓葉ノ二種アリ、長葉ノモノハ馬蓼ニ似テ白毛アリ、圓葉ノモノハ茳草葉ニ似テ小ク、土牛膝(イノコヅチ)葉ノ大サニシテ、背ニ白毛アリ、四月花ヲ開ク、淡紅色、苗高サ數寸、又一二尺許ニ至ルモノアリ、穗ノ形蓼ト同ジ、

蓼栽培

〔農業全書五山野菜〕蓼

たでは正二月水邊濕地にうゆべし、たね色々あり、常に水邊に生ずるも、又春のすゑ穗を出し、四季絶ずうるはしきも、所によりてありと見えたり、莖葉ともあかく、葉丸ながきは和にして、取分辛し、

蓼利用

〔宜禁本草乾五菜〕蓼葉　辛温、生取汁以造麴、多食發心痛、損骨髓、令人寒熱、歸舌、除大小腸邪氣、利中益志、煮汁服、治霍亂轉筋、二月食水蓼、傷腎、實明目、温中、耐風寒、下水氣面目浮腫、多食子損陽氣、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菜料、○中略　干蘭、干蓼、海菜料、各以二一把一充二四口一、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

口別一斗、○中略　蓼十把、准二二升一、自二四月一迄二九月一、

漬年料雜菜

蓼葅四斗、料鹽四升、楡一升六合、○中略　右漬秋菜料

〔大草殿より相傳之聞書〕一ゑびかざみの料理の事、まづゆでゝ、身をとり、能酒とすとすたでを等分に合て、ひたしてもる也、

〔四條流庖丁書〕一イト膾ト云ハ、鯉膾ノ事也、山吹膾ト云ハ、王餘魚ナマス也、マナガツホハ蓼ヌニタ可レ參ラス、總ジタ蓼出來ヌレバ、ナニ魚ニテモ蓼ズ良也、

蓼用途

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥　攝津國卅四種、中略　蓼子蜀椒各三升、

〔農業全書 五山野菜〕蓼　○○○豐州彦山の名物とするは、葉ふとく厚く少しはみて、葉青く、見かけ藍のごとし、和らかにして、苦辛からず、秋になり大きなる穗を、一所より十ばかりも出し、見事なり、彦山の蓼穗、大蓼と紫蓼なおほく作り、二色の蓼なおほに取、田畠の下にしき、なれて後畑の蔬物にわけ、蓼なくてなし、是は蓼力にして、蔬物よし、

蕎麥名稱

〔本草和名 十九菜〕喬麥　和名曾波牟岐、

〔倭名類聚抄 十七菜〕蕎麥　孟詵食經云、蕎麥喬音、一作䔾、和名曾波牟岐、一云久呂無木、性寒者也、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕按廣韻、蕎、蕎麥、音喬、又云、蕎、麥名、一名大麥、音驕、二音其義不同、此併引、一音誤、下總本有和名二字、曾波牟岐伎、輔仁下總本曾波作曾末、按本草和名亦作波、且曾波有稜角之義、蓋蕎麥以其穀有稜角得是名、則作末爲非是、一云以下六字、昌及山井本下總本皆無、本草和名亦無此名、獨廣本有之、今附存、伊呂波字類抄有是訓、按久呂牟岐謂其實黑色、中略○　孟詵食療本草三卷、見新唐書、所引食經蓋是、今無傳本、醫心方引孟詵云、寒難消、與此少異、證類本草引嘉祐本草載蕎麥、云見陳藏器孟詵蕭炳陳士良日華子、李時珍曰、蕎麥立秋前後下種、八九月收刈、性最畏霜、苗高一二尺、赤莖綠葉、如烏桕樹葉、開小白花、繁密粲粲然、結實累累如羊蹄實、有三稜、老則烏黑色、性寒者也四字、昌及山井本下總本並無、獨廣本有之、今附存、

〔類聚名義抄 八禾〕蕎麥下正、音驕、一音喬、ソハムギ、一云、クロムギ、　蕎麥ソハムギ、クロムギ、

〔伊呂波字類抄 所植物附植物具〕蕎麥ソハムギ　蕎麥ソハムギ

〔下學集下草木〕蕎麥（ソバ）

〔大上﨟御名之事〕女房ことば

一そば　あをい

〔多識編三穀〕蕎麥、曾波牟岐、今案曾波、異名烏麥、（央瑞）

〔日本釋名下米穀〕蕎麥　そばむぎと云意、まことの麥にあらず、麥につぎてよき味也と云意也、民の食として麥につげり、胡瓜をもそばうりと云、是も瓜に似たる意なり、

〔東雅十三穀蔬〕蕎麥ソバムギ　倭名鈔に、蕎麥はソバムギ、一にクロムギと註せり、ソバとは其三稜なるをいふなり、我國の俗、凡物の觚稜あるを云ひてソバといふ、孤稜木をソバノキといひ、胡瓜をソバウリといふが如き即是也、其實の老て黑くなりしをもて、又クロムギとも云ひし也、（今も工匠の詞に、木の稜を削り去るをいひて、ソバを取るなどいふは、即此義也、）

〔倭訓栞前編十三〕そば〇中略　蕎麥を訓ずるも、實の三稜なるより名とせるにや、倭名抄などに、そばむぎともいへり、今くろむぎともいふ、實大にして稜高きを高倉といひ、實小にして稜卑きを米そばと名づく、仁明紀に令畿内國司勸種蕎麥とみえたり、此事既に元正紀にも出、西土は宋の時より蕎麥の用、尊卑に通ずとぞ、

〔和漢三才圖會百三穀類〕蕎麥　荍麥（與蕎同字）　烏麥　花蕎　和名曾波牟岐〇中略

本綱、蕎麥立秋前後下種、八九月收刈、性最畏霜、苗高一二尺、赤莖綠葉、如烏桕樹葉、開小白花、繁密粲粲然、結實累累如羊蹄、實有三稜、老則烏黑色、磨面爲麪、作煎餅、配蒜食、或作湯餅、謂之河漏、以供常食、滑細如粉、亞於麥麪、〇中略

按凡木三稜曰柧、（音孤）四方曰觚、（音孤、作棱、）木柧棱、（和名曾波乃木）然蕎麥葉子共三稜、故名曾波牟岐、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀部〕蕎麥　ソバムギ（和名鈔）　クロムギ（同上）　ソバ　一名花麥（南寧府志）　木麥

〔[illegible]本草〕[illegible]蕎　〔[illegible]〕[illegible]蕎〔和州府志〕　[illegible]蕎〔[illegible]志會編〕

莖高サ一二尺、圓ニシテ赤ク光リアリ、葉互生ス、形蕎麥葉ニ似テ短薄光滑、秋莖梢ニ花アリ簇生ス、白色、後實ヲ結ブ、三稜ニシテ皮黑、仁ハ白シ、本邦遠原ニ、須北方者良、南方者味苦性劣、不堪服食ト云、本邦ニテモ、信州及江州鵜井伊吹山ヲ上トス、

〔清良記 七上〕五穀雜穀其外物作分號類之事

蕎麥之事

一大蕎麥 是ヲ[illegible]ト云也　一小粒

此蕎麥に、二品有無の論有、同じごとく蒔て、其實否を糺せり、されば六月蒔たるは大蕎麥と成て實多し、遲く蒔たるは小粒となりて、其種子末々悲小粒也、依之大小にして上下あるに定たり、

〔經濟要錄 四雜穀〕蕎麥ニモ甜蕎二種アリ、且苦蕎麥ヲモ穀類ノ内ニ算ルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀〕蕎麥〇中品類多シ、常品ハ三稜ナリ、カクソバハ四稜ナリ、大カタソバアリ、又コメソバハ稜ナク米粒ノ如シ、又信濃ソバ、尾タネソバ、コンソバ、ヒメソバ、ブニソバ、大ソバ、小ソバノ品アリ、

〔二物考〕題言

按ズルニ、北極地方ノ國、寒威凛冽ニシテ、地ノ融スルコト、一歲ニシテ纔カニ一二月ノミ、然リト雖ドモ、其民ノ飢エザルハ何ゾヤ、是其風寒暑濕ニ畏憚セザル物ヲ植テ、以テ食トスレバナリ、余〇高野長英嘗ニ其種子ヲ得ザルヲ以テ憾トナス、今茲ニ丙申〇天保七年兩濕連綿、三月ヨリ八月ニ達ス、其間ノ晴日僅カニ數フ可シ、時氣ノ寒冷、癸巳〇天保四年ノ歲ニ過グ、各州水災多ク、米價漸ク貴ク、人心洶々トシテ安カラズ、今歲八月中浣、余上毛澤渡ナル福田宗禎ニ逢フ、宗禎世々瘍科ヲ業トス、

其術甚ダ精シ、又和蘭書ヲ讀ミ、益其術ヲ研究ス、余固ヨリ交リ厚シ、一夕閑談シテ更將ニ闌ナラントス、時ニ一掬ノ蕎麥ヲ出シテ、余ニ示シテ曰ク、凡ソ人ノ凶歳ニ斃ル丶所以ハ、糧食足ラザレバナリ、而シテ糧食ノ足ラザル所以ハ、一歳數熟ノ物ナケレバナリ、此蕎麥一歳三熟スベシ、是レ救民ノ鴻寶ニ非ズヤ、余且ツ驚キ且ツ謝シテ曰ク、北極地方ノ國、穀類ヲ揀ムニ早熟ノ物ヲ以テス、此ヲ暖地ニ移サバ、其成熟スルコト一歳ニ再三ナルベシ、余之ヲ欲スル所以ハ、之ヲ此ニ移シ以テ糧ヲ增シ、飢ヲ防ントスルニ在リ、余嘗テ之ヲ遠キニ求メ、今ヤ之ヲ近キニ得タリ、是レ子ガ貽ナリト雖モ、實ハ天ノ賜ナリト、悅ンデ之ヲ受ク、○中略

丙申重陽之夜、高野讓譔、於東都麴街甲斐坂之大觀堂、

早熟蕎麥和名ハヤソバ、サンドソバ、ソウテイソバ

此ノ蕎麥ノ種子ハ、其始メ何レノ地ニ產出スルト云コトヲ詳ニセズ、近歳民間之ヲ傳エテ、處々ニ之ヲ播植ス、莖葉俱ニ常ノ蕎麥ニ異ナルコトナシ、唯其實稍大ヒニシテ、且ツ早ク熟スルノ性アリ、故ニ一歳ノ中ニ三次成熟スルナリ、漢名未ダ詳カナラズ、假リニ之ヲ名ケテ、早熟蕎麥（ハヤソバ）、又三熟蕎麥（サンドソバ）ト謂フ、

〔紀伊續風土記物產二〕不蒔蕎麥（マカズソバ）　牟婁郡四村莊平治川村領トウジといふ處の山に、三四十間の間、鎌をも入れば、種子を下さずして蕎麥を生ず、常品と同樣に食用とすといふ、

〔多識編三穀〕苦蕎麥、今案仁加曾波、

〔和漢三才圖會百三穀〕苦蕎麥（にがそば）　俗云田蕎麥

本綱、苦蕎麥出南方、春社前後種之、莖青多枝葉、似蕎麥而尖、開花帶綠色、結實亦似蕎麥、稍尖而稜角不峭、其味甘苦溫有小毒、農家磨擣爲粉、蒸使氣餾滴去黃汁、乃可作爲餻餌食之、色如豬肝、穀之下者、聊濟荒歳爾、

按苦蕎麥、今無稱之者、疑此今云田蕎麥乎、見于左、

一種田蕎麥　生濕地、似蕎麥而莖赤、葉微闊不尖、秋開花、亦似蕎麥而淡紅白色、子亦似蕎麥、

一種溝蕎麥　生深澗溝邊、葉細長、秋開花、似田蕎麥、結子作小穗、以之爲伊之美加波者非也、伊之美加波名未地利草、見于山草部、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 隰草〕苦蕎麥　ミゾソバ　ミブソバ　カイルグサ 加州 勢州、　タソバ　イヌソバ 豐州　カイルタデ 紀州　カイルコグサ 石州　モグラ 能州　ウシノヒタヒ 佐州　ウシノカラビタヒ 津輕 南部　ギウノンサウ 豐後　カイルマタ 備州　コヤメバナ 丹波　タハガタサウ 濃州　ハチモンジサウ 江州　ハチノジサウ 濃州　ギヤルタナ 能登、

路傍溝中ニ多シ、春子生ズ、長ジテ數寸、或ハ一二尺ニ至ル、莖弱シテ藤蔓ノ如シ、葉互生ス、蕎麥葉ニ似テ長ク、上ニ一尖アリ、下ニ兩尖アリテ、牛面ノ形ノ如シ、葉ノ中央ニ黑ク八ノ字ノ形アルモノアリ、故ニ八文字草ノ方言アリ、夏月梢上ニ花アリ、紅板歸花ノ如ク、白色又紅色ノ者アリ、後實ヲ結ブ、小ニシテ三稜アリ、蕎子ニ似タリ、霜後苗根共ニ枯ル、子落テ地ニアリ、春ニ至テ生ズ、

〔農業全書 二 五穀〕蕎麥

そばを種る事、五月に地を耕し、廿日廿五日もして、草腐りたゞれて後、又耕す事二三遍、晴天を見て細かにかき、立秋 七月の節の事也 の前後たねを下すべし、厚く蒔べし、薄ければ實少し、大かたはちらし蒔にすべし、灰を合せたるこゑを以てうゆべし、瘠地ならば、横筋をせばくきり、糞を多く敷て、灰や牛馬の糞を以ておほふべし、そばはこゑはけを好むゆへ、若鹽屋に近き所ならば、鹽竈の焦灰、又は其邊りの鹽こみたる土を用ひてうゆれば、實甚多し、又云、そば地は耕すこと三遍なれば、三重に實がなる物なり、下の二重は黑く、上の一重はいまだ青き時刈收むべし、殘らず上まで黑きを待べからず、刈こはをそければ、實落る物なり、又蕎麥を蒔に、必雨濕にあはざるやうにすべし、蒔時雨にあひ、又はこめりたる地に蒔たるは、いか程こやしを用ひても、盛長しがたく、瘠て實少

し、そばをまく時、路次にて水汲にあひても、其實のりよからずと、野俗云ならはせり、ことの外水濕を忌と玄るべし、又山畠燒野などに蒔事あり、山中などは夏土用の中に早く蒔べし、遲ければ風霜にあひて、損ずる事あり、かならず一日も早く蒔べし、燒野に蒔には、なたねを入子まきに玄たるがよきものなり、そばはあくけの有物にて、草の根是にあひて痛かれ、土も和らぐゆへ、春になりて蕪菜さかへ實り多し、跡の地和らぎて、あら地もこなしよく、彼是利分多し、

〔王氏農書二十八穀譜集〕蕎麥

蕎麥、赤莖烏粒、種之則易爲工力、收之則不妨農時、晩熟故也、農桑輯要云、凡蕎麥五月耕地經二十五日、草爛得轉、并種耕三遍、立秋前後皆十日內種之、待霜降收刈、恐其子粒焦落、乃用推鎌穫之、推鎌見農器圖譜北方山後諸郡多種、治去皮殼、磨而爲麪、焦作煎餅、配蒜而食、或作湯餅、謂之河漏、滑細如粉、亞於麪麥、風俗所尙、供爲常食、然中土南方農家亦種、但晩收磨食、搜作餅餌、以補麪食、飽而有力、實農家居冬之日饌也、

〔地方凡例錄 二〕田畑名目之事

一燒畑と云は、里方にはなし、山中にあり、信州抔は多し、上州榛名山赤城山抔の樣成所、畑地には無之、山の片岨の小柴萱草立候處を、小柴萱草共燒て、一兩請、灰の濕りたる所江蕎麥粟稗等を蒔付、糞も不致、灰計に而生立たる作物故實入不宜、中略○中蕎麥計は燒畑之分極上也、夫故信州上州山中蕎麥格別宜、勿論年々一ツ所に作付難成、當年仕付たる所、來年は萱草生立次第に致置、外の所を燒畑にして作物仕付、右の萱草立生たる場所の草立の樣子に隨ひ、翌春翌々春燒畑にいたし、一年二年替りに作付致故、切替畑と云、

〔成形圖說十七五穀〕曾槃穀紀中略○

田家の常言に、麥と蕎麥と嘗相諍、麥曰、吾は疊八枚を蒙とも猶生拔べし、蕎麥曰、吾は三角の稜が

一角地に就ほどならば、速生べしとつのりしとかや、蕎は兩種ながら、其發生の極て易を稱り、(中略)農家諺に、すばるまむ時蕎麥蒔と云は、すばるは昴星也、(此星の僞、玉の數、東の網紋に似たり、故にすばると云、)まむ時は正中時にて、秋夜半子の頃、昴星の天中する時分に、蕎を蒔べしとの傳なり、又曰、蕎穗の出初時を見當に、蕎麥を蒔ともいへり、凡風土に由て節の遲速ありといへども、此ものは一候七十五日にして實熟也、さて蕎霜を畏る、九月に早く霜降ば、田家切に此ものゝ傷むことを歎なり、かくぞ收獲の節ある種にしあれば、むかしより諺にしよしも傳りけめ、

〔續日本紀九〕養老六年七月戊子、詔曰、(中略)宜令天下國司勸課百姓、種樹晩禾蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年七月庚子、令畿內國司勸種蕎麥、以其所生土地不論沃瘠、播種收獲共在秋中、稻梁之外足爲食也、

〔類聚三代格八〕太政官符

應勸課播種蕎麥事

右蕎麥之爲物也、不擇土沃瘠、生熟有繁茂、孟秋始播、季秋乃收、稻梁之外、能足療飢、右大臣宣、奉勅、宜仰諸國、守時勸種、令國司介以上一人、專當其事、勤加巡檢、

承和六年七月廿一日

〔古今著聞集十二偸盜〕此僧都(○澄憲)の坊のとなり也ける家の畠に、そばをうへて侍けるを、夜る盜人みな引て取たりけるを聞てよめる、

ぬす人はながばかまをやきたるらんそばをとりてぞはしりさりぬる

〔二宮翁夜話五〕翁曰、天保四年、同七年、兩度の凶歳、七年尤甚し、(中略)下野國眞岡近郷は、眞岡木綿の出る土地なれば、木綿畑尤多し、其木綿畑を潰して、蕎麥を蒔付るを、愚民殊の外歎く者あり、又苦

蕎麥利用

情を鳴す者あり、仍て愚民明らめのため、所々に一畝づゝ、尤出來方の宜敷木綿畑を殘し置きたるに、綿實一ツも結ばず、秋に至て初て予が說を信じたりと聞けり、愚民の諭し難きには、殆ど困却せり、又秋田を刈取りたる干田に、大麥を手の廻る丈多く蒔せ、夫より畑に蒔たる菜種の苗を田に移し植えて、食料の助にせり、凶歳の時は油斷なく手配りして、食料を多く作り出すべし、是予が飢僅を救ひし方法の大略なり、

〔本朝食鑑〈一穀〉〕蕎麥

去殼磨之爲麪、飛羅極細、而用熱湯或水、煉作平圓餠子、令粘堅以拗棒頻拗、別撒麪粉、不令粘著于拗棒、卷而捍之、至極薄而放擴、疊之者三四重、從端細切作細筋條、投沸湯而煮、久煮則硬、少煮則軟、隨意取出、或洗冷水、或洗溫湯、此號蕎麥切、〈○中略〉或用麪入沸湯、緩火煉熟如飴、和汁而食、此號蕎麥搔、〈○中略〉凡陳蕎麥氣和性平而可入、故用至三五年者及歷年者爲珍、或用好蕎遲熟者連殼入俵子緊封置寒處、則經五六年亦不敗、寒曬者臘月用連殼好蕎麥、浸水三十日、立春日取出、曬乾收藏、用時杵磨爲麪食、最不中人也、或蕎麥能去舊垢、不減赤小豆、故浣衣洗髮、然勢悍易損物耳、

〔宜禁本草〈乾五穀〉〕蕎麥　甘平寒、實腸胃、益氣力、續接丹石、久食動風頭眩、和猪肉食、患熱風、脫眉鬢、葉作茹食之、下氣利耳目、多食卽微泄、風温麻痺不仁之人禁之、

〔二物考〕早熟蕎麥　釀酒

蘭人此ヲ以テビイル〈酒名ナリ、少シク苦味アル者ナリ、〉ヲ製ス、然レドモ單味之ヲ以テ製スルコト稀ナリ、常ニ他ノ麯ヲ加フ、其法蕎麥殼ヲ去ル者ヲ取リ、蒸シテ熱スルニ至リ、取リ出シ器ニ納レ、熱湯ヲ注ギ、麥麯及ビ原酷ヲ加エテ攪動シ、密封シテ溫處ニ安ジ、沸醸セシメ、酒成ルニ至リ、上淸ヲ汲ミ取用ユ、

〔營中秘策〈二十年中行事〉〕年中諸大名獻上物之事

十月〈寒中獻上此月ニ入〉

蕎麥產地

松平右近將監
土岐美濃守

一穀蕎麥

一蕎麥　郡鑑〇中略

〔本朝食鑑〕二穀蕎麥久品類一日本

蕎麥、蕎麥四方有之、東北最多而佳、西南少而不佳、夏土用後下種、八九月收之、早收者號新蕎麥、信州及野之上州、有三四月下種、六七月收之者、以為珍、野之下州佐野、日光、足利等處、武總常之地、壟多出之而佳、箇不及信州之產、其性最忍霜雪、故信州以北諸州之產、亦不為佳、

〔和漢三才圖會〕百三穀類　蕎麥略〇中

按、略〇中處々有之、信州之產為上、遠州三州靈州及上野下野亞之良、

蕎麥種類

〔續江戶砂子〕一江府名產并近在勝地

鉢大寺蕎麥　江戶より七里、中野の先、當所の蕎麥は潔白にして、すぐれてかろく、好味也、此所は凡ばこ土にて、蕎麥に應せり、總じてそばは土のかろき地よろし、練馬、中野、西ケ原の土地などよしまかし、穀目すくなきゆへ、實買の勝手にならず、よつて上品ながら多く作らず、信濃蕎麥は土地のまヽまりたる所ゆへに、穀目多し、江府蕎麥切家業のものは、おほく信濃を用ゆと也、

〔奧羽觀蹟聞老志〕三土産　蕎麥　二迫文字村東山鬼首篠谷湯原等、山谷之間、尤為上品、

〔古今著聞集〕十八飲食　道命阿闍梨修行しありきけるに、やまうどの物をくはせたりけるを、これはなにものぞと問ければ、かしこにひたはへて侍る、そ。ま。む。ぎ。なんこれなりといふを聞て、よみ侍ける、

ひたはへてとりだにすへぬそまむぎにまらつきぬべきこゝちこそすれ

〔後水尾院當時年中行事〕下一まゐらざる物は、略〇中蕎麥、そばなにおなじ三角といへば、常にみかどと申けれは、いむとかやいひし、

鹽

〔新撰字鏡〕草鹽　昔甘反、鹵。草。鬥。鹼。　鹽實　同弁

〔本草和名 草七〕藍實、木藍子、大葉 菘藍、爲淀 蓼藍、不堪爲淀 和名阿爲乃美、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕藍 藍澱附 唐韻云、藍 魯甘反 染草也、澱 音殿、和名阿井之流 藍澱也、本草云、木藍堪作澱也、木藍 和名都波岐阿井 蓼藍 和名多天阿井 見本草、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕本草綱目澱亦作淀、俗作靛、南人掘地作坑、以藍浸水一宿、入石灰攪至千下、澄去水、則青黑色、亦可乾收用染青碧、○中略 按證類本草引陶云此卽今染縹碧所用者、唐本注云、藍實有三種、圓徑二寸許、厚三四分、出嶺南、太常名此草爲木藍子、如陶所引、乃是菘藍、其汁抨爲澱者、按經所用乃是蓼藍實也、其苗似蓼而味不辛者、二種藍今並堪染、菘藍爲澱、惟堪染青、其蓼藍不堪爲澱、惟作碧色爾、此所引卽是、而爲澱惟堪染青、作堪爲澱者、源君所隱栝、本草和名亦云、木藍子葉圓大、菘藍爲淀、蓼藍不堪爲淀、各本菘藍誤木藍、木藍已載上文注中、不應復載明矣、今依證類本草、本草和名改、李時珍曰、蓼藍葉如蓼、五六月開花、成穗細小淺紅色、子亦如蓼、菘藍葉如白菘、花子並如蓼藍、木藍長莖如決明、高者三四尺、分枝布葉、葉如槐葉、七月開淡紅花、結角長寸許、纍々如小豆角、其子亦如馬蹄決明子而微小、迥與諸藍不同、而作澱則一也、按蓼藍今之阿爲是也、菘藍卽敎荒本草大藍、享保中所舶來、江南大青是也、木藍未詳、蘇敬未見其草、故云圓徑二寸許、厚三四分、出嶺南、蓋就爲澱者而言耳、本草和名云葉圓者、誤讀蘇注也、何得有藍葉圓徑二寸許、厚三四分者耶、時珍所言亦未詳其物、

〔東雅 十五 草卉〕藍アヰ○中略 アヰはアヲの轉語也、アヲとは青也、その根の青色を染むべきをいふなり、ツハキアヰとは、其葉の光れるをいふなり、○中略 註 タデアヰとは、其葉の蓼に似たるにて、万葉集に、辛藍カラアヰまた韓藍とよませしものこれなるべし、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕藍 音覽 ○中略

本綱蓼藍、人家蔬圃作畦種、至三四月生苗、高三二尺許、葉似大蓼、花紅白色、實亦若蓼子而黑色、五六

月采實、但其葉可染碧、不堪作澱、

菘藍葉如白菘、　馬藍葉如苦蕒、（卽郭璞所謂大葉冬藍、俗中所謂板藍者也、）此二藍花子並如蓼藍、　吳藍長莖如蒿而花白、　木藍長莖如決明、高者三四尺、分枝布葉、葉如槐葉、七月開淡紅花、結角長寸許、纍纍如小豆角、其子亦如馬蹄決明子、而微小、迥與諸藍不同、而作澱則一也、其性味不遠、其藍子則專用蓼藍、

藍實（[illegible]略）　解諸毒、殺蠱蚑（音其、小兒鬼、）利五臟、調六腑、通關節、益心力、明耳目、療毒腫、

葉汁（苦甘略）　殺百藥毒、及蜂蜘蛛蠆、砒霜石等毒、藍汁一盞、（入雄黃麝香二物少許、）以點毒蟲咬處、仍服其汁、神妙、（[illegible]）　試以一蜘蛛投入件汁中、隨化爲水、（略）○（中略）

按藍京洛外之產爲上、攝州東成郡之產最勝、阿波淡路之產次之、藍葉大者稱高麗藍、中者稱京藍、小者稱廣島藍、三月下種、四月植苗、喜旱而好水、有蟲傷蝕其葉、須濃煙草莖汁防之、凡種七十日許未作穗、時晴日乘露拔採、四五日曬乾去根、然用葉莖、置漬池水、一日滿水、堆之下布筵二層、上亦蓋筵二層、密蓋之、至六七日、再三攪之、經二十日取出、候熱氣稍緩、以蓄篩去莖節、再乾收取、俗名採藍、（毛髮同前）

又采經留者曰藍丸、如餅、俗名玉藍、（大和阿波）

京洛之藍莖葉不著根實、故不能亦用之、染色淺青美、凡欲收藍實者、刈時殘莖四五寸許、則嫩芽再生出穗、

〔重修本草綱目啓蒙　十二隰草〕藍　アヰ　一名染青草（江南通志）　青秩（農圃六書）　菘藍一名茶藍（天工開物）　蓼藍一名小藍（農圃六書）　蓼葳（物理小識）　葒（正字通）　藍實一名青黛實（滇南本草）

凡ソ單ニ藍ト稱スル者ハ總名ナリ、大抵蓼。藍。菘。藍。ノ二種ニ分ツ、其蓼藍ハ和名抄ニタデアヰト訓ズ、今ハアヰト呼ブ、是ニ水陸ノ二種アリ、俱ニ春種ヲ下ス、葉青蓼葉ヨリ濶大也、紫蓼（トウタデ）ノ葉ニ似テ深綠色、苗高サ一二尺、枝多シテ葉互生ス、夏枝梢ゴトニ穗ヲ成シ花ヲ開ク、蓼花ニ同ジ、花實タ

子ヲ結ビ紅ヲ加フ城州東寺邊水田ニ栽ル者ハ水アヰト呼ブ、染家ノ用ニ入、上品トス、又阿州ニテハ皆陸地ニ栽ユ、苗ヲ罨シ莖ヲ去リ塊ヲナシ、四方ニ貨ス、コレヲ阿州ノ玉アヰト呼ブ、染家ニハ下品トス、又享保年中ニ、唐山ヨリ藍ノ種二品渡レリ、一ハ江南ノ大青ト稱シ、一ハ浙江ノ大青ト稱ス、其江南大青ハ即集解ニ說トコロノ菘藍ニシテ、救荒本草ノ大藍ナリ、苗ノ形油菜(アブラナ)ニ似テ葉厚ク白色ヲ帶ブ、三月ニ枝梢ゴトニ四瓣ノ黃花ヲ開ク、油菜ニ比スレバ最小ク三分許、花後小長扁莢ヲ結ブ、內ニ一子アリ、夏月熟シテ根枯ル、八月種下ス、其浙江ノ大青ハ即蓼藍ナリ、元來大青ト云フハ藍葉ノ一名ナリ、醫學正傳ニ曰、藍葉ハ即大青葉、又本經逢原ニ曰、藍實ハ乃大青之子ト、此等ノ說ニ從フベシ、十五卷大青小青ノ二條ヲ別ニ出ス、ソノ說ク所ノ草ハ和產詳ナラズ、其主治附方ヲ詳ニスルニ、皆藍葉ノ効ナリ、前ノ大青ノ條ヲ合考ベシ、又時珍ノ說ニ、菘藍馬藍ヲ二物ト爲ハ非ナリ、蘇頌說ニ從ヒ一物ト爲ベシ、吳藍木藍ハ詳ナラズ、

增、阿州ノアキ玉ハ最上品ニシテ他州ニ送リ、染家ノ用トス、正月陸地ニ種ヲ下シ、三月ニ至テ漸ク六七寸ナル時、壇圃ニ移シ栽ユ、六月土用ニ刈テソノ葉ヲ取リ、後水ヲ澆テ罨スコト數十日、搗テ塊トス、紺色ヲ染ムルニ上品トス、城州東寺邊ノ水アヰハ、淺葱色ヲ染ムルニ上品トス、俗ニ京アサギト稱スル是ナリ、

〔延喜式(十五內藏)〕營藍陸田料

陸田五町、總單功九百九十二人、別米二升、鹽二勺、海藻二兩、功食、(雇役充時)犂卅口、(三年一請)

藍種始蒔日祭神料、五色絹各二尺、雜魚腊二斗、鹽四升、海藻六斤、白米二斗、酒二斗、鰒六斤、堅魚六斤、

〔農業全書(六三草)〕藍

藍は是も三草の一つにて、世を助る物なり、衣服其外絹布を染てあやをなし、取分是を以て染れば、其物の性をつよくし、久しきに堪て損じ敗るゝ事なし、然るゆへに古今廣く作る事なり、先た

ねを收る事、二番をからすして、みのらせて取べし、水田に作るは、三番にても取てよし、乾しもみ取て、俵かかまぎなどに入をくべし、苗地の事、蕪菁大根の跡、又は稲田もよし、よく耕しこなし、糞を多くうちをき、節分より三十日三十五日して種子を下し、其上に濃糞を多くうち、又灰を以て覆ふもよし、又はたねを灰と沙とに合せて蒔も、むらなく能生る物なり、此時は別に種子おほひは入ず、さて生て後廿日ばかりして、濃糞を右のごとくうつべし、其後心葉出ては、四分糞（溷糞に水をな大分合せたるなり）にしてうつべし、さて六十日して、水田なれば畦作りし、其幅三尺五寸もあらば、一かぶに二もと三もと取て、横筋一通りに入、科ばかりうゆべし、がんぎの間は一尺許なるべし、科數は畠も大かた同事なり、一筋に六かぶ七かぶうゆるもあるべし高田にうゆる時は、男一鍬を以て筋をきりて通れば、女は跡より苗を待て壼をうゆるごとくうゆるを、男又廻りて土をおほふなり、高田のかはきたる地ならば、畝ばせとて、水を溝よりすくいかくる箱あり、箱の一方をはなち、一方には長き手のある物を以て、水をそゝぐ事、一日に二三度も、地のしめるほどすくいかくるなり、うへて三日の間、雨氣なくば頻りに水をうつべし、猶又ひでりつよくば、用水あらば溝よりしかくべし、瓜田に水をしかくる事は、溝半分に過べからずといへども、是は溝に一盃たゝゆる程にすべし、うへて十五日して、稀糞をがんぎ一筋に五合ほど入べし、初は少うめたる糞よし、其後は濃程がよし、三度にても四度にても、多く入るほど色よし、鯑もよくきく物なり、さて虫ををひはらふ事、藍を作る第一の辛勞太儀是に極る事なり、竹の小枝を十本餘も箒にゆひ、是を以て葉に當らざる樣に、さら〳〵とをひはらふべし、又蚕虫の時は、箕をわきにうけをきて、虫をはらひ入て捨べし五十八日或六十日に當れば、凡半夏生の比なり、此時天氣をよく考て刈收むべし、刈と其まゝ、麥などを刈干ごとく攤げ干し、其日晝過より取あつめ、二尺五寸縄ほとにたばね家に入、明る日根の本を葉の付ぎはより切すて、葉の方をすさわらを切ごとく、いかにも細かにき

ざみ、箕にて、ひても又あをちても、葉と茎とを篩分て茎は捨べし、さて葉をばいかほどもつよき日に合せ、よく干あげ、筵だてにしても、俵に入をきても、商人にうるには升にてはかり、一石を銀十匁、是凡中分の直段なり、又二番を取事、たとへば高田なれば、其跡に稲を作りたるが利分勝るか、又二番を取たるに損あるか、藍と米との直段を考へて、利の多きを作るべし、高田は大方稲の利つよき事のみ多し、下田は二番を取たるも、稲を作りたるも、かはる事なき物なり、二番も一番の升数はさのみをとらぬほどある物なれども直段賤し、是までが城州鳥羽にて藍を作る法なり、又うゆる法、たね色々ある中に、唐藍とて葉丸ながく厚く、茎うすあかく、色よきあり、同じく葉の丸きもあり、此二色染付よし、又蓼藍とて、葉細ながく、たでによく似たるあり、是は土地のきらひもさのみせず、さかへ安き物なれども、染付よからず、前の二色の内を作るべし、苗地は田にても畠にても、肥良の性すぐれてよき地を、旱に水の便りまで吟味し、耕す事三四遍も、其上は力の及ぶ程、いかほどもよくこなし、三月上旬先たねを水に浸し、芽を出しをき、さて畦作りし種子を蒔、其上に熟糞を土と合せ、種子おほひをし、三葉の時水を澆ぎ、中をかきあざり芸り、畦中きれいにしてをくべし、けがらはしき事をきらふ物なり、苗ふとり四月の末五月初、雨を得て移しうゆる事右に同じ、虫を殺す事は、たばこの茎を煎じ出し、其汁をしべ箒にてひたとうちひたせば、虫死る物なり、毎日かくのごとくして、虫悉く死し盡るを以てやむべし、又苦参の根をたゝきくだき、水に出じうちたるも虫よく死る物なり、刈取事も右に同じ、但すさのごとく切て、水に漬取上、にはに筵などを敷、其上に厚さ四五寸許に攤げ、むらなき様にして、わらごもにてもおほひ、ねさせ置、四五日の後よくねて、白くかびの少見ゆる時、取出し日に干し、俵か筵だてに入て、俵ながら分量を定めをきてうるべし、又よく干し上て、臼にて細かにつきてふるひ取、あらきを又つき、茎を去て藍玉に作り干堅め、斤目にてうる法もあり、又藍を作るべき田には、稲の跡にからしを栽

べし、葉を爲ば跡少遅くあきて、二番藍の利少なし、鳥羽の邊にても、藍地は何れも紫靑をうゆるなり、

〔齊民要術 五〕種藍

（爾雅曰、葴馬藍、注曰、今大葉冬藍也、廣志曰、有木藍、今世有蓼藍也、）藍地欲得良、三遍細耕、三月中浸子、令芽生、乃畦種之、治畦下水、一同葵法、藍三葉澆之、（晨夜再澆之、）薅治令淨、五月中新雨後、卽接濕耬拔栽、（夏小正曰、五月啓灌藍蓼、）三莖作一科、相去八寸、（栽時宜幷功急手、不得令地燥也、）白背卽急鋤、（栽時既濕、白背不急鋤則堅確也、）五遍爲良、七月中作坑、令受百許束、作麥稈泥泥之、令深五寸、以苫蔽四壁、刈藍倒豎於坑中、下水、以木石鎭壓令沒、熱時一宿、冷時再宿、漉去荄、內汁於甕中、率十石甕、著石灰一斗五升、急手抨（抨普彭反）之、一食頃止、澄淸瀉去水、別作小坑、貯藍澱著坑中、候如强粥、還出甕中盛之、藍澱成矣、種藍十畝、敵穀田一頃、能自染靑者、其利又倍矣、

崔寔曰、榆莢落時可種藍、五月可刈藍、六月可種冬藍、（冬藍、木藍也、八月用染也、）

〔延喜式 五 齋宮〕造備雜物　藍四圍、紅花大廿一斤二兩、

〔延喜式 十三 圖書〕凡年料染造紙花二百六十八冩、（中略）所須（中略）藍二圍、（紙一百張染料、）

〔延喜式 十四 縫殿〕雜染用度

深綠綾一疋、（綾紬絲綿綾東絁赤絁同、）藍十圍、（中略）帛一疋、（貲布赤絁同、）藍十圍、（中略）絲一絇、藍三圍、（下略）

〔延喜式 十五 內藏〕諸司服料

小許春服二疋、（中略）用度生藍八十六圍大半、直

○按ズルニ、藍染ノ事ハ產業部染織篇ニ載セタリ、

〔延喜式 二十四 主計〕凡諸國輸庸、（壹岐對馬兩島不輸、）（中略）一丁（中略）乾藍三斗三升三合三勺、

〔續修東大寺正倉院文書 四十二〕藍園藍逕進文

藍園進上　藍貳拾貳圍

天平勝寶二年六月廿四日　倉垣三倉

〔慈元抄上〕問曰、和歌の道孝道に似たらば、歌故に難を遁れたる人有や、答曰、○中略或時西行道を行とて、物染る藍と云草、殖たる中をすぐ、路にして通るとて、一本引切てもてり、藍主見付て、僻法師の振舞かな、藍を踏そこなふのみならず、折とるべしやとて搦捕て、手に持たりける藍を押へて食せたり、食ながら讀る、

西行は鵜といふ鳥ににたる哉縄にかゝりて鮎をくらへば、と讀りければ、面白し扨は西行にておはしけるよとて、免しけるとなん、

大青

〔雍州府志六土産〕藍　九條邊専種之、凡染家之所用、夏爽共畜九條之藍、其染色青而麗也、

〔新撰字鏡草〕大青波○止○草○

〔倭名類聚抄二十草〕大青　本草云、大青、和名波止久佐、一云久波久佐、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶云、長尺許紫莖、圖經、春生青紫莖似石竹苗葉、花紅紫色、似馬蓼、亦似芫花、根黄、時珍曰、高二三尺、莖圓葉三四寸、面青背淡、對節而生、八月開小花、紅色成簇、結青實、大如椒顆、九月色赤、又曰、其莖葉皆深青故名、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕大青　ハトクサ延喜式　クルクサ和名鈔

大青小青ノ二條、集解ニ説トコロノ草ハ、皆和產詳ナラズ、先師充ル所ノ説亦穩ナラズ、蓋シ古ヨリ方書ニ用ユル所ノ大青小青ハ皆藍ノ葉ニシテ別ニ草アルニ非ズ、故ニ集解ノ説ハ今皆取ラズ、醫學正傳ニ、藍葉即大青葉ト云、本經逢原ニモ藍實大青小青ヲ一條トシ、大青小青ヲ藍實ノ葉トス、宜ク此説ニ從フベシ、然レドモ其大小青ノ形狀ヲ說ニハ誤リアリ從フベカラズ、大抵大小ヲ分テ言ハ、藍ニ二種アリテ葉大ナル者ヲ大青ト云即菘藍ナリ一名大藍、葉小ナル者ヲ小青ト云、即蓼藍ナリ、一名小藍ニシテ青ハ藍ノ字ノ書カヘト見ルベシ、又書ニヨリテ蓼藍ノコトヲ、大

羊蹄

青ト言ルコトモアリ、本經逢原ニ本經所用藍實乃大青之子、是御所謂蓼藍也ト云、今漢種浙江大青ト云者即蓼藍ナリ、江南大青ト云者即菘藍ナリ、菘藍蓼藍ノ形狀ハ十六卷藍ノ條下ニ詳ニス、又鴨跖草ニモ大青小青ノ二名アリ、遠志花ニモ大青ノ名アリ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、〇中略 大青廿斤、 伊賀國卅三種、〇中略 大青廿七斤、 近江國七十三種、〇中略 大青二斤十二兩、

〔新撰字鏡 草〕羊蹄 志〇乃〇禰〇

〔本草和名 草十一〕羊蹄、一名東方宿、(楊玄操音) 一名連蟲陸、一名鬼目、一名蓄、(楊玄操音丑六反) 一名禿菜、一名蓯蕵、(仁諝音) (出陶景注) 一名蓄葍、(出雜要訣) 一名姜根、(出崔禹) 和名之乃禰、

〔倭名類聚抄 十七 菜〕羊蹄菜 唐韻云、蓄(丑六反、字亦作蓫、和名之布久佐、一云之乃禰、)羊蹄菜也

〔康賴本草 草〕羊蹄 味苦寒、无毒、和シノ子、莖節間紫赤、花青白、成穗子似牛蒡實、

〔醫心方 一〕羊蹄 和名之乃禰

〔類聚名義抄 八 佛〕羊蹄菜 シ シノネ 蓫(音軸、シフクサ、一云シ、) 遂(或) 蓄(音種、菜生水中、)

〔八雲御抄 三上 草〕羊蹄 いちしのはな 万みちしばのといへり

〔藻鹽草 八 草〕羊蹄

いちしの花(いみはしはと云り、これ八雲御抄也、又ある抄には、いちごをいちしの花と云り、いちしの花のいちしろくなどよめり、)

〔和爾雅 七 草木〕羊蹄(禿菜、敗毒菜、牛舌菜、東方宿、鬼目、子名金蕎麥、)

〔日本釋名 下 草〕羊蹄 順和名に曰、しぶくさ、又曰し、今案其味しぶし、故にしぶくさと云、又しと云は、しぶくさを略せり、俗にもしのねと云草の事也、其根大黃に似たり、高葉にも此くさをしといへり、

〔倭訓栞前編十一し〕○中略　日本紀に羊蹄をしとよめり、又中菥蓂あり、菥も蹄に同じ、倭名抄にも羊蹄菜和名しと見え、新撰字鏡には、のしねと見えたり、今俗ぎしぎしともすいたふともいへり、すべて大黄おほし、知母やましの類、しとよぶ草は皆蹄の類也、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕羊蹄　シ○古歌　イ○チシ○同上　シ○ノネ○和方書　シ○ノネ○ダイ○コン○同上　シ○ブ○クサ○和名鈔、同州、　イ○チ○シ○ノ○ハ○ナ○同上　シ○ノ○ハ○南部　シ○ノ○ベ○津軽　ギ○シ○ギ○シ○京　ギ○シ○ギ○シ○ダ○イ○ワ○ウ○　ノ○ダ○イ○ワ○ウ○　ウ○シ○ノ○ヒ○タ○ヒ○　ウ○シ○ノ○シ○タ○　シ○イ○備前　ギ○ジ○ギ○ジ○讃州　シ○ロ○ギ○シ○ギ○シ○河州　ダ○イ○ワ○ウ○同上　シ○ノ○ハ○ダ○イ○ワ○ウ○仙台　タ○イ○グ○サ○三輪　カ○イ○ル○ノ○キ○ツ○ケ○泉州　イ○ヌ○ス○イ○バ○伯州　シ○ン○ザ○イ○雲州　ダ○イ○ワ○ウ○シ○ン○ザ○イ○　ワ○ダ○イ○ワ○ウ○共ニ同上　イ○ヌ○シ○ン○ザ○イ○備後　ス○イ○ト○ウ○丹後　ス○リ○ゴ○ン○ボ○ウ○土州　ス○リ○コ○ン○ボ○濃州　ス○イ○ゴ○ン○ボ○　ス○イ○ジ○共同上○中略

水邊ニ多ク生ズ、葉ハ狹ク長ク一尺餘、コレヲ斷レバ涎アリ、一根ニ叢生ス、春ノ末薹ヲ起ス、高サ二三尺、小葉互生ス、五月梢頭及葉間ニ穗ヲ出シ、節ゴトニ十數花層ヲナス、ソノ花三瓣三蕚、淡綠色、大サ一分バカリ、中ニ淡黃色ノ蘂アリ、後實ヲ結ブ、宗奭モ花與子亦相似ト云フ、コノ實ヲ仙臺ニテノミノフネト云、後黃枯スレバ、內ニ三稜ノ小子アリ、茶褐色、形蕎麥實ノ如シ、是金蕎麥ナリ、根ハ黃色ニシテ大黃ノ如シ、一種山澗ニ生ズル者ハ、葉濶ク短クシテ大ナリ、土大黃ト云、城州貴船ニテ、カラスノアブラト云、薹ノ高サ六七尺、花實ハ同

〔長生療養方二諸藥功能〕羊蹄　味苦寒無毒、主癰瘍疥癬陰熱、

〔宜禁本草乾集中草〕羊蹄　苦寒、主頭禿疥癬、殺蟲治癬、痒、不宜多食、葉治小兒疳蟲、殺魚毒、可作菜食、酸模葉酸美、小兒折食其莖、殺皮膚小蟲、葉似羊蹄、治腸風痔瀉血、羊蹄根葉爛蒸一椀菜食立瘥、葉可潔擦鍮石器、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

赤地利

日別一斗、中略、羊蹄四把、准二升、四五八九十月、

〔儀式〕二 踐祚大嘗祭儀上

神祇官差卜部三人、中官差遣紀伊淡路阿波等國、監作由加物、中略 使當國凡直氏一人耆木綿鬘執、

賢木引道、阿波國、中略 乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、已上忌部所作、

〔延喜式〕七 踐祚大嘗祭 阿波國所獻、中略 乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、已上忌部所作、

〔和名類聚抄〕十 草木 赤地利 赤地利、五毒草、山蕎麥同、

〔和漢三才圖會〕九十六 草 赤地利　赤薜荔　五毒　五毒草　蛇茵　山蕎麥　以之爲加減、又云牛桑、中略

按赤地利作蔓、紫赤葉青似蕎麥葉搯長、則貫莖小圓葉如輪、夏開小白花、結一子於小葉中、熟碧色、莖〻

葉背筋有細刺、其根如桔梗青苞之狀、病瘡加之腫毒、與此臭耳、倭方用赤地利蔓葉爲折傷金瘡要藥、此與三拜蓬草同功、

接骨如膠、故名石膠、如彼乃益也、仁

〔重修本草綱目啓蒙〕十五 蔓草 赤地利　フ〇ル〇ソ〇バ〇　ホ〇ウ〇ノ〇ミ〇 肥前平戸

肥前平戸ニコレアリ、蔓生地ニ延ク、葉互生ス、苦蕎麥葉ニ似タリ、夏月葉間ニ花ヲ開キ實ヲ結ブ、其根フトクシテ後藪ノ如シ、古ヨリイシミガハト訓ズルハ非ナリ、イシミガハハ一名アシカキ、丹波 ウシノヒタヒ、越後 マムシノアゴ、備州 カヘルノツラカキ、筑前 カツパグサ、南部 カツパブル、仙臺 猫子地ニアリテ春自ラ生ズ、葉形三角ニシテ互生ス、其莖葉中ヨリ出刺アリ、籬墻繁延シ刺多シ、夏月枝ノ梢ゴトニ攅簇シテ花ヲ開ク、紅白色、苦蕎麥ノ花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、大サ一分餘、其色綠碧紅紫白黑相雜ル、俗ニトンボノカシラト云、又庚申ノナヽイロト呼ブ、秋後苗根共ニ枯ル、又蕎麥葉ニ似タル者アリ、其柳ノ葉ニ似タル者ハ即雀甕(ウナギヅル)ナリ、

雀甕

〔重修本草綱目啓蒙〕十二 隰草 青黛

雀甕　ウ〇ナ〇ギ〇ヅ〇ル〇　ヤ〇ナ〇ギ〇サ〇ウ〇　ア〇シ〇カ〇キ〇 丹波

水引草

即柳葉ノ扛板歸ナリ、原野溝側ニ多シ、蔓生ニシテ莖ニ刺アリ、葉ハ柳葉ニ似テ、葉ノ本ニ一刻アリ、五月枝頂ゴトニ花アリ、白色ニシテ微紅、苦蕎麥花ノ形色ノ如シ、鰻鱺魚ヲ捕フルニ、此莖葉ヲ持チソユレバ捕易シ、莖ニ刺多キ故ナリ、

増、俗ニイ。シ。ミ。カ。ハト呼ブ者ハ、萬病回春ニ載スル所ノ扛板歸ナリ、山足或ハ竹林ノ邊ニ生ズ、宿子地ニ落テ春月苗ヲ生ズ、葉ノ形苦蕎麥ニ似テ、三角ニシテ淡綠色ナリ、莖長クシテ七八尺ニモ及ブ、然レドモ物ニ纏ハズ、莖ノ色紫褐色ニシテ倒刺多シ、秋ニ至テ葉間毎ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、蕎麥ノ花ニ似タリ、花謝シテ後小子ヲ結ブ、秋深テ苗根共ニ枯ル、和方ニ用テ打撲傷損ノ藥トス、又雀翹ニ一種マ。ヽ。コ。ノ。シ。リ。ヌ。グ。ヒ。ト呼ブ者アリ、葉ノ形チ雀翹ニ似テ花苦蕎麥ニ似タリ、莖葉共ニ刺ナクシテ、雀翹ノ鰻鱺魚ヲ捕フベキニ異ナリ、

〔大和本草九雜草〕海根　野ニ多シ、倭俗水引ト名ヅク、其葉ノ形如此、犬蓼ニ似タリ、其穗ニ赤キ實多シ、本草滙草下ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕海根　詳ナラズ

ミヅヒキサウニ充ル古說ハ穩ナラズ、其水引草ハ一名ハイトリグサ、勢州汝南圃史ニ載スル所ノ金。線。草。一名重陽柳ナリ、山野多ク生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ發ス、葉互生ス、形土牛膝ノ葉ニ似テ長大ナリ、面背トモニ短毛アリ、苗高サ一尺許、秋ニ至テ莖頭及葉間ニ一尺餘ノ細紅莖ヲ抽デ、極小ノ深紅花稀ニ綴リ、ミヅヒキノ狀ノ如シ、又白花モアリ、ギ。ン。ミ。ヅ。ヒ。キ。花戸ト云、紅白雜ルヲゴ。シ。ヨ。ミ。ヅ。ヒ。キ。同上ト云、一種葉ノ中間黑斑相對シテ、壘記草ノ如ク、八ノ字ノ形ニ似タルモノアリ、八。幡。水。引。ト云、又一種長葉ノモノアリ、又チ。ヤ。ボ。ミ。ヅ。ヒ。キ。アリ、矮莖短穗地ニツキテ生ズ、

〔剪花翁傳四七月開花〕水引草　承塵　花赤白二種、開花七月下旬也、方半陰、地半濕、土塵土、又ボコ土に砂交、肥淡小便、分株下種ともに春彼岸よし、分林は成長はやく、下種はおそし、白色なるは至て

清雅なり、莖も青綠にして賞すべし、赤色二種あり、莖の赤きは花色殊に赤く、葉目狹に付て勢ひよく延る也、莖の黑みて鈍るものは葉の裏白く數少くして劣れり、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕酸蓼草 タ°デ°モ°ド°キ° ヤ°ナ°ギ°タ°デ°(勢州、和州ノ名、同上青) サ°ク°ラ°タ°デ° ヤ°ウ°キ°ヒ°タ°デ°

溝瀆水中ニ生ズ、苗ノ形青蓼ノ如ク節赤シ、葉ハ青蓼ヨリ細長ク、味微酸ニシテ辛味ナシ、秋ニ至リ花ヲ開ク、穗ノ長サ三四寸、花大サ三分許、五瓣ニシテ梅花ノ形ニ似タリ、淡紅色愛スベシ、又白色ノモノアリ、花小ナリ、共ニ實熟シテ苗枯ル、根ハ枯レズ、

虎杖

〔新撰字鏡 草〕虎杖根 伊°太°止°利°

〔本草和名 十一 草〕虎杖根 一名蒤(出爾雅) 一名武杖(出陶景注) 一名酢菜(出大清經、已上二名出雜要訣) 一名苦杖(出拾遺) 和名以多止利、

〔倭名類聚抄 二十 草〕虎杖 本草疏云、虎杖一名武杖、(和名伊太止利)

〔宜禁本草 乾 中 木〕虎杖根 微温、通月水、破留血癥結、煮汁作酒、主折傷、破月閉、擣酒浸常服、孕人忌之、治淋下、產後惡血、

〔和漢三才圖會 九十四 濕草〕虎杖 苦杖 大蟲杖 斑杖 酸杖 (和名伊太止利 ○中略)

按虎杖根出於金剛山者良、小兒折其莖、剝去皮、噉之、味酸、故名酸杖、大抵高者不過三四尺、然杜甫之虎杖高丈餘而如木、(圖經亦云大者高丈餘)蜀本草言木高丈餘、而宗奭疑以爲非、蓋隨土產有不同、豈惟虎杖耶、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕虎杖 イ°タ°ド°リ° タ°チ°ピ°(古名) サ°ヒ°タ°ブ°マ°(古歌) フ°タ°パ°ノ°モ°ミ°ヂ°(同上) サ°ジ°ナ°(備後) エ°ツ°タ°ス°イ°く°(江州) サ°ド°(豐後) ダ°ン°ジ°(播州) ス°カ°ン°ポ°ウ°(同上) ダ°イ°ヲ°ン°(同上 原村) サ°ジ°ツ°メ°(勢州) カ°ハ°タ°ケ°(肥前) ヤ°マ°タ°ケ°(筑前) サ°ス°ド°リ°(南部 秋田) 一名主(履丹 緒論) 酸桶笋(救荒本草) 紺著(綱目拾遺、本草ノ名、) 枯杖(嶋本草) 階備草(…) 甘除根(村方家)

深山ニ生ズルモノ最長大ニシテ莖ノ圍三四寸、高サ丈餘ニ至ル、中空クシテ節アリ竹ノ如シ、老タルモノハ杖ト爲ベシ、然ドモ折レヤスシ、蝦夷ニハ圍六七寸、高サ一丈五六尺ナルモノアリト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ發スル時、形土當歸芽ノ如シ、綠色微紅ニシテ紅紫斑アリ、二三寸ノトキ小兒採テ生食ス、味酸シ、煮食ヘバ酸味ナシ、漸ク長ズル時ハ堅硬食ベカラズ、葉互生ス、形圓長ニシテ一尖アリ、長サ六七寸、小者三四寸、又三尖ニナルモノアリ、變形ノモノ多シ、夏葉間ニ花ヲ開ク、穗ヲナシテ攢簇ス、紅白二種アリ、花後實ヲ結ブ、白花ノモノハ、花實トモニ唐種ノ何首烏ニ似タリ、實三角ニシテ薄キヒレアリ、山草薢莢ノ如シ、大サ三四分、コレヲ望メバ花ノ如シ、紅花ノ者ハ實モ赤シ、ベニイタドリト呼ブ、

〔延喜式三十九內膳〕漬年料雜菜

虎杖三斗〈料鹽一升二合〇中略〉　右漬春菜料

〔食物和歌本草一〕虎杖〈イタドリ〉

虎杖は徵溼の物ぞ毒はなし月水下し血塊によし　虎杖は產後の古血下りかねはがみのはるに食すべき也　虎杖はよく血を破る物なれば姙女にきらふべき也　虎杖の葉をより食し暑氣を去又は腸風下血にもよし

〔日本書紀十二反正〕去來穗別天皇〈履中〇〉二年立爲皇太子、天皇〈反正〇〉初生于淡路宮、生而齒如一骨、容姿美麗、於是有井、曰瑞井、則汲之洗太子、時多遲比〈〇比原脫、據一本補、下同〉花落有于井中、因爲太子名也、多遲比花者今虎杖花也、故稱謂多遲比瑞齒別天皇、

〔枕草子八〕見るにことなることなき物の、もじにかきて、こと〲しきもの、

いたどりはましてとらのつゑとかきたるとか、つゑなくともありぬべきかはつきを、

〔伊豆七島調書〕八丈島

蛇銜草

一此島稼には、男は(中略)虎杖種の實を取渡世仕候、

〔武江產物志藥草〕本所邊　虎杖(同上ノ中ナリ)

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕蛇銜草

本綱、蛇銜草生平澤、其葉似虎杖、節小、節赤、高一二尺、種之辟蛇、凡蛇虺毒蟲等螫、取根葉搗傅咬處、當下黃水、

按、蛇銜草生池陂、虎杖之一類二種也、

〔重修本草綱目啓蒙十二濕草〕蛇銜草　イヌイタドリ　イヌナドリ(豐前)

陳藏器ノ說ハイヌイタドリナリ、近山路旁ニ多シ、苗高サ二三尺、卽虎杖ノ小ナル者ナリ、奧州南部ニテ、コノ草蛇ヲ避ルコトヲ云傳フ、諸ニ符合ス、時珍ノ說ハ詳ナラズ、

萹蓄

〔本草和名十一草〕萹蓄(仁諝音、上編反、下勅六反、楊注)一名萹竹、一名萹蔓、一名蓄石、一名蓄辨、一名萹蔓(已上四名出蘇敬注)一名蓄辨(出雜要決)和名多知末知久佐、一名宇之久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕萹蓄　本草云、萹蓄(和名宇之久佐)

〔箋注倭名類聚抄十草木〕陶注萹蓄云、布地生、花節間白、葉細綠、人亦呼爲萹竹、蜀本圖經云、葉如竹、莖有節、細如釵股、生下濕地、爾雅曰、竹萹蓄、郭璞引詩衞風云、綠竹猗猗、郭云、似小藜、赤莖節、好生道旁、圖經、春中布地生道旁、苗似瞿麥、赤葉、節間花出、甚細微、青黃色、根如萹根、(中略)本草和名云、和名多知末知久佐、一云宇之久佐、按本草和名、牛扁萹蓄並訓太知末知久佐、輔仁不能定、故兩存之也、而萹蓄條云一訓宇之久佐、蓋太知末知久佐、一名宇之久佐也、宇之久佐卽牛草之義、牛扁有療牛之功、宜得是名、則二訓當皆是牛扁和名、而宇之久佐之一訓、偶附見萹蓄條、故源君以宇之久佐爲萹蓄和名、以太知末知久佐歸之牛扁、然萹蓄無療牛、則其說恐誤、

〔多識編二濕草〕萹蓄、仁波也那岐、異名道生草、

〔重修本草綱目啓蒙　十二隰草〕萹蓄　ウ。シ。ク。サ。和名　マ。キ。ク。サ。　ニ。ハ。ク。サ。加州共同上　ニ。ハ。ヤ。ナ。ギ。　ミ。チ。ヤ。ナ。ギ。奥州　ミ。チ。シ。バ。同上　ホ。ウ。キ。バ。モ。ド。キ。備中　一名鐵線草山草類纂萹蓄-名ニ鐵線草註、今俗呼ニ鐵線草、萹同名耳

百節郷藥本草　百節草村家方　猪牙草本草原始

路傍ニ極テ多シ、苗高サ六七寸或一尺許リ、葉ハ地膚（ホウキヾ）葉ニ似テ短厚ニシテ尖ラズ深緑色、莖ニ節アリ、節ゴトニ互生ス、夏月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、大サ一分許、白色ニシテ微紅、形蓼花ノ如シテ穗ヲナサズ、又海濱ニ生ズルモノハ、苗葉共ニ大ナリ、ハ。マ。ホ。ウ。キ。ヾ。ト云、共ニ春ヨリ生ジ、秋深テ枯ル、

〔廣益地錦抄　六〕萹（へん）蓄（ちく）　宿根より春生、葉柳のごとく、花は見るにたらず、俗に庭柳（ニワヤナギ）といふ、田野道邊に多く有、民俗痢疾を煩ふ時、此葉を湯びき、味噌汁に煮て寒晒の粉をねり、團子として煮て食、甚妙なり、

牛面草

〔物類稱呼　三生植〕牛面艸たそば　加州にてか。へ。る。草。といふ、江戸にて牛。の。ひ。た。い。といふ、

〔大和本草　九雜草〕牛面草　和俗ノ名ナリ、又溝。ソ。バ。ト云、近道水邊ニ生ズ、或牛ノ額ト云、蕎麥葉ニ似テ長シ、又赤地利（イシミカハ）ニ似テ刺ナシ、葉ノ末尖中セバシ、莖葉ハ共ニ柔ニシテ色青シ、葉ヲ生ニテスリテ能血ヲ止ム、性亦赤地利ニ似タリ、

〔廣益地錦抄　四〕牛面草（うしのひたい）　田野溝（レン）ほりの邊に多くあり、葉形少長ク、中ほどくびれ、眼目（ガンモク）のかたちなる紋黑（モン）くありて、兩角ある樣成葉形にて、さながら牛面に似たりとて、俗にうしのひたいといふ、花はしろく小細花、へりにくれないの色あり、つまべにともいふべし、葉をもみて血どめとす、よく止ル、しめり地に多き草なり、

何首烏

〔多識編　二蔓草〕何首烏、和名字。波。加。豆。豆。會、又云多。加。士。宇。、又云比。禮。於。古。志。、異名夜合、本綱

〔重修本草綱目啓蒙　十四蔓草〕何首烏　通名　一名夜交藤本草蒙筌　交莖何首烏錄

瀉種ヲ傳ク多ク殖ユ、甚繁殖ス、春宿根ヨリ嫩芽ヲ生ジ葉互生ス、形圓尖ニシテ丁香茄兒(ハリナスビ)葉ノ如シ、七八月蔓ノ梢ニ細小白花長穗ヲナスコト一尺許、虎杖(イタドリ)ノ花實ニ同ジ、子ハ三角ニシテ蓼子ニ似テ小シ、其根長ク蔓延スルコト栝樓(カラスウリ)ノ如シ、數塊ヲ連ヌ、小ナル者ハ番薯ノ如シ、大ナル者ハ甜瓜ノ如ク越瓜ノ如シ、藥舗ニ貨ル者鋼鮮ヲ良トス、和ニ栽ユル者モ瀉種ナル故異物ナリ、俗ニカシユウイモト呼ブ者ハ、荻部ノ土芋ナリ、何首烏ニ代用ユル者ハ誤ナリ、

〔本草和名 八草〕紫參一名牡蒙、一名衆戎、一名童腸、一名馬行、一名山羊蹄、出疏(出ニ疏)和名知○々○乃○波○久○佐○、

〔倭名類聚抄 二十草〕紫參 本草云、紫參(和名知々乃波久佐)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕香本注、紫參葉似羊蹄、紫花青穗、皮紫黑、肉紅白、肉淺皮深、圖經云、苗長一二尺、根淡紫色、如地黃狀、莖青而細、葉亦青似槐葉、亦有似羊蹄者、五月開花白色、似葱花、亦有紅紫而似水荭者、蘇云、紫參葉似羊蹄、紫花青穗、皮紫黑、肉紅白、肉淺皮深、吳氏云、根黃赤有文、皮黑中紫、五月華紫赤、實黑大如豆、圖經、苗長一二尺、根淡紫色、如地黃狀、莖青而細、葉亦青似槐葉、亦有似羊蹄者、五月開花白色、似葱花、亦有紅紫而似水荭者、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕紫參 チ○ヽ○ノ○ハ○グ○サ○(和名鈔) ハ○ル○ト○ラ○ノ○オ○ イ○ロ○ハ○サ○ウ○(尾州) 一名青參(本草蒙筌)

諸州深山陰處溪側ニ多ク生ズ、二三四月根頭ニ先花穗ヲ出ス、人家ニ移シ栽ル者ハ二月ニ開ク、ソノ長サ一二寸、花ハ碎小白色ニシテ粉紅ヲ帶ブ、蓼花ノ狀ニ似タリ、尋テ數葉ヲ出ス、形拳參(イブキトラノオ)葉ニ似テ短ク濶シ、面ハ深綠色背ハ微白色、ソノ根地黃ノ如ク長クシテ數段アリ、地上ニ延ク、年ゴトニ一段ヲ增シ、段ゴトニ一寸餘、細條ニテ相連リ連珠ノ如シ、年久シキモノ尺許ニ至ル、黑褐色ニシテ外ニ褐色ノ薄皮アリテ包ム、又細葉ノ者圓葉ノ者小葉ノ者アリ、舶來ハ紫參混雜ス、宜シク撰ビ用フベシ、

拳參

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
近江國七十三種、中略紫參十一斤、若狹國廿四種、中略紫參一斤二兩、
〔多識編二山草〕拳參、今案惠比久佐、
〔重修本草綱目啓蒙八山草〕拳參　ヤナギサウ　エビグサ　イブキトラノオ　ヤマダイワウ
江州伊吹山ニ多シ、種樹家ニモ亦栽ユ、葉ハ羊蹄ノ葉ニ似テ狹小ニシテ末尖リ、厚クシテ深綠色
莖赤シ、一科ニ叢生ス、夏月臺ヲ起スコト一二尺、葉互生ス、莖梢ニ穗ヲ成ス、長サ一二寸、六書ノ小
花多ク簇リテ荭草穗ニ似テ粉紅色、後三稜ノ實ヲ結ブ、蓼實ニ似テ大ナリ、根ハ小指ノ大サノ如
クシテ扁ク、一頭曲リテ海蝦ノ形ニ似タリ、黑褐色、
〔草木育種後編下藥品〕拳參本草　和蘭にてナテル、ウヲルトルといふ、蘭家にて根を收、澁の藥とす
赤土野土ともによし、畦を作り栽べし、魚屋水糞水を澆ぎてよし、春月實を蒔てもよし、

大黃

〔本草和名十草〕大黃一名黃良、一名火參、一名膚如、已上二名出釋藥性、和名於保之、
〔倭名類聚抄二十草〕大黃　本草云、大黃一名黃良、和名於保之
〔箋注倭名類聚抄十草〕御覽引吳普本草云、二月生黃赤、葉四四相當、黃莖高三尺許、三月花黃、五月實
黑、唐本注云、葉子莖並似羊蹄、但麁長而厚、其根細者亦似宿羊蹄、大者乃如碗、長二尺、蜀本云、葉似
蓖麻、根如大芋、傍生細根、如牛蒡、小者亦似羊蹄、蜀本圖經云、高六七尺、莖脆、圖經曰、正月內生青葉、
大者如扇、四月開黃花、亦有青紅似蕎麥花者、莖青紫色、形如竹、江淮出者曰土大黃、二月開花結細
實、又鼎州出一種羊蹄大黃、初生苗葉如羊蹄、累年長大、卽葉似商陸而狹尖、四月內於押條上出穗、
五七莖相合、花葉同色、結實如蕎麥而輕小、五月熟、卽黃色亦呼爲金蕎麥、
〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕大黃　オホシ延喜式、シハ羊蹄ノ古名ナリ、形似テ大ナル故ニオホシト云、　破門和方書　一名無聲虎
輟耕錄　錦大黃醫學正傳　莊大黃幼科發揮　錦莊黃幼幼集成　北大黃常山發明

舶來二品アリ、古渡ハ藥舖ニテソギ大黃ト呼ブ、斜ニ薄ク切片ニシ、乾シタルモノ也、今ハ渡ラズ、陳藏器謂ユル牛舌片是ナリ、今渡ルモノハ藥舖ニテワナギ大黃ト呼ブ、縦ニ薄ク切片ニシ穴ヲ穿チ、縄ヲ以テツナギ乾タルモノナリ、錦紋穿眼ト云是ナリ、今漢種ヲ傳テ城州長池、和州ニ多クウユ、藥肆ニコレヲ眞ノ大黃ト呼ブ、切口ニ紫ノ筋アリ、即錦紋大黃ナリ、形色ハ舶來ニ異ナラザレドモ、本邦ノ土地ニ應ゼザル故カ、舶來ノ者ニ及バズ、一說ニ年ヲ經レバ唐ニ同ト云、ソノ葉ハ白綿葉ニ似テ濶大、鋸齒ナク光アリ、長サ二尺許、濶サモ亦同ジ、上ニ一尖アリ、コノ葉根上ニ叢生ス、夏月中心ニ圓莖ヲ抽、長サ六七尺、其葉互生ス、上ノ葉ハ漸ヲ以テ小ナリ、莖頂及梢葉ノ間ゴトニ小花ヲ開キ穗ヲナス、其穗長シテ枝アリ、綠花、花實トモ羊蹄ニ異ナラズ、冬ニ至テ苗枯ル子ヲ下シテ生ジ難シ、根ヲ切テ分チ栽レバ皆活ス、蟲ソノ葉ヲ食ヘバ其痕紫色ニ變ズ、(中略)

集解、陳藏器曰、土番大黃ト云ハ土大黃ナリ、山中溪澗ニ多クアリ、京師貴布禰方言、カラスノアブラ、高サ五尺許、葉ハ牛蒡葉ニ似タリ、長クシテ末尖ラズ、花實トモニ羊蹄ニ同ジ、根亦相似テ黃色、飲條義リ生ズ、

〔農業全書十藥種之類〕大黃

大黃是も醫家に時々用ゆる藥種なり、うゆる法、一科をいくつにもわりて、地深にてよく肥たる畠を數遍耕しこなし置たるに、二月畦作り、菜園の如くし、間を一尺二三寸も廣くうゆべし、糞養度も多きにまかす、耘り中うちさい〳〵して、多になりて掘取べし、肥地に養し手入をよくすれば、一年立にも取用ゆれども、二年をきたるは性も强し、土氣を淨く洗ひ、葛か串につらぬき、干置て用ゆべし、是山城の長池などにて作る、唐の大黃たねなり、葉丸く厚くして、つはの葉によく似て、莖少あかく、甚ふとくさかゆる物なり、前々より有來る倭大黃とは、根のかたち少似て、隔別なる物なり、長池の土は、黑土の細沙雜る深き肥地なり、

酸模

〔草木六部耕種法〈三〉〈當根〉〕大黃川弓白朮等ノ作法

大黃ハ氣候第七番ノ溫暖地ニ應合スル草ナリ、此物元來圓珠根ニテ、植地ノ調理ハ、蔓菁ヲ作ル法ニ同ジ、然レドモ植タル年ニハ掘採コト無ク、三年モ其餘モ肥(フト)ラスル者ナルヲ以テ、或ハ撲簇根ノ如ク擴(ハリ)張(タメ)コト有リ又此物ハ第七番以下頗霜零ル微冷氣候行ル丶ト雖ドモ、第十番以上ノ國土ハ此ヲ作ルベシ、十番以下ノ寒地ニ作リタルハ、假令其根大ニ肥太スル者モ、毒氣弱シテ下利ノ効ナク、藥用ニ勝ザル者ナリ、且又大黃ハ此ヲ掘採テ乾揚ニ秘事アリテ、此ヲ掘採タル根ヲ、直ニ烈火ニ投ジテ此ヲ煨ル、其煨適宜カラザレバ、第七番以上ナル氣候溫暖ノ地ニ作リタル者ト雖ドモ瀉利ノ性効アルコト無ク、此ヲ煨適宜火度ハ紙筆ノ述ベキ所ニ非ズ、數々自煨テ能ク會得スベシ、此ヲ作ル法ハ、眞土ヲ蔓菁ヲ作ル畑ノ如ク耕シ、此ニ木ヲ燒タル灰ト朧土〈朧土製法ハ培養秘錄ニ詳ナリ、上ノ總論ニモ其略法ヲ出セリ〉ヲ各半ニ調合シタルヲ、一段ニ十荷ヅ丶、耕(ウチ)鋤(マゼ)タルハ殊ニ宜シ、春分頃一步二畦ニ作リテ上ヲ平シ、一尺五六寸隔ニ種子一箇ヅ丶、五目ニ植エ、芽出葉ノ生ジタル後ハ、時々盛養水ヲ澆ベシ、葉莖甚大ニ繁衍スル者ナリ、此ニ根ヲ肥太スルノ法ヲ施シ行ヒ、三年目ニ掘採ベシ、今九州ニテ作ル者ニ往々上品有リ、種子ハ舊根ノ大枝、或ハ舊根ヲ適宜〈拇指ノ大ヨリ／シタ長スベシ〉少裁(タチ)割(ワリ)テ、檞櫟等堅木ノ灰ヲ割目ニ被(マブ)シテ、三四日置テ植ベシ、種根ハ漢種ニ非ザレバ用フベカラズ、我家法ヲ用テ漢種ノ大黃ヲ作ルトキハ、三年ニ一段三百斤餘ヲ得ベシ、金一兩十五斤ニ賣トモ二十一金ト爲ル、然レバ年々七金ノ產業ナリ、

〔延喜式〈三十七〉〈典藥〉〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、〈○中略〉蜀椒大黃各五斤、武藏國廿八種、〈○中略〉大黃二斤、〈○下略〉

〔多識編〈二〉〈木草〉〕酸模、須之、今案俗云須。伊。太。宇。久。左。

〔和爾雅〈七〉〈草木〉〕酸(スイバ)模(スイダウ)〈山羊蹄、蓚、當藥、並同、〉

〔大和本草九 雜草〕酸模　葉モ花モ羊蹄ニ似タ小ナリ、味酸シ、村民葉ヲスリクダキ醬ニ代ヘ、魚膾ニ和シテ食ス、西土ノ人ハスイパト云、畿内ニハスイダウト云、山ニモ水ニモ生ズ、多モ葉不枯、

〔和漢三才圖會九十七 木草〕酸模　山羊蹄　蓚　山大黃　蓚薰　酸母　當藥　和名須之、俗云須加牟保、

本綱、酸模生山岡上、平地亦有、根葉花形並同羊蹄、但葉小味酸爲異、人亦采食其莖、其根赤黃色、氣味酸寒、能治疥癬、

按酸模葉似菠薐而莖赤、味酸、細赤花作穗、根如上說、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 草〕酸模　スイバ　スイジ讃州　スイジダナ　スガナ備前　スカナ同上　スカシ三越備後　スイコ高岡同上　スガンポウ泉州　スカンポ江戸　スゴポウ勢州　スイゴンポ　スイスイゴンポ　スガンポ共ニ同上　スイパス大和　スイパラ丹後　スツポダナ紀州　スシンザイ雲州　シンザイ備後　スイタパ雲州　アカジ播州　アカギシギシ筑前　スシ備多國　スイトウダナ同上　スイゴキ木曾　スイコキ上野　スツカホウ常州　スイペライスダイワウ雲州　一名杜鵑頭實連綱目記方

水邊及山足ニ多シ、形狀甚ダ羊蹄ニ似テ小ク、葉ノ味酸シ、多ニ至レバ葉小ニナリ、紫色或ハ紅色ニ染ク皺ツペシ、春暖ニシテ綠葉ヲ出ス、漸ク薹ヲ抽テ花ヲ開キ、實ヲ結ブコト皆羊蹄ニ同ジ、只其色紅或紫ナルヲ異トス、根ハ羊蹄ヨリ細クシテ多ク簇ル、

〔草木育種後編 下 藥品〕酸模 すかんぽ　本草　俗にすかんぼう、和蘭にてシユーリングといふ、處々近野に生ず、莖に赤みあり、嚙む時は酸味あり、莖葉根を掘り、清涼の藥材とす、羊蹄根俗に草大黃といふ、甚似て此は莖に青色、根に黃みあり、酸味なし、自ら採りて用ふべし、肆上のものは眞僞不分明なり、予〇同部書任嘗て是を疑ふ、故に所々にて買ひ試むるに、肆上のもの皆羊蹄と酸模と甚混雜せり、畦に

栽て用ふべし、羮汁を少し撓ぐ時生長し易し、

〔新撰字鏡草〕藜（落奚反、草藋同、〇〇〇加奈、）

〔倭名類聚抄十七野菜〕藜　野王按云、藜（音黎、和名阿加佐、）蓬蒿之類也、

〔類聚名義抄八艸〕灰條アカサ　藜（音梨、）アカサ、　藜灰アカサノハヒ

〔伊呂波字類抄安植物附植物具〕藜アカサ　雑藜也

〔下學集下草木〕藜アカザ

〔本朝食鑑三柔滑〕藜（訓二阿加佐一、）

集解、處處原野庭圃多有、三四月生ㇾ苗、葉尖有ㇾ刻、面青背白有ㇾ灰、莖有二紫紅線稜一、俱心紅、莖老大可ㇾ爲ㇾ杖、其頭如ㇾ塊、嫩時作二蔬食一、八九月開二細白花一、結ㇾ實簇簇如ㇾ毬、中有二細子一、野人蒸食之爾、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕藜　アカザ（和名鈔）　アカアカザ　アカ（藝州、綿花無）　オホアカザ（新校正）　江戸

アカザ（南部中國）○

野生ナシ、春月種ヲ下ス又去年ノ子地ニアリテ自ラ生ズ、苗葉花實皆灰藋ニ同ジ、只嫩心紅色鮮美ナリ、長ズレバ綠色ニ變ズ、肥地ニ栽ユレバ、甚長大ニシテ杖トナスベシ、然レドモ葉間ニ枝ヲ生ズレバ、形ユガミテ宜シカラズ、故ニ務テ嫩枝ヲ摘ミ去ルベシ、

〔農業全書四菜〕藜

本草に嫩時食ふべし、老てはその莖を杖となすべしと云り、茹とし、あへ物ひたし物によし、種すして多き物なり、唐にてはあかざの羹、貧なる者の專食とする事なり、日本にても肥土に生たるは、大きにして又輕きゆへ、老人の杖によきものなり、是下品の菜なるが、詩にも文にも作れり、

〔食物本草和歌六〕藜

あかざこそ味かろき物脾胃の氣に積熱有て食のならぬに　あかざよく疵いへかねて腫氣

りうづき臓瘀破るによし　あかざよく諸病に用ゆ血の熱をよくさます也肉を生ずる　あかざこそ歯腫物や金瘡に常に用れ血の道に吉　あかざをば黒焼にして手負産後めまいを治するゐる濕にてのめ　あかざこそ七度燒て童便でのめ血の道の萬病を治す

〔散木弃歌集九雑〕俊頼恥運雑歌百首　沙彌能貪上

いかでかは此よのやみもてらさましひかりあかざのつえなかりせば

〔本朝食鑑三菜〕莙薘

莙薘〔[illegible]〕

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕莙薘　菾菜　甜菜〔[illegible]〕　俗云唐苣

按莙薘菜葉如萵苣、又似白苣而不皺、無白汁、莖長、故俗名唐苣、無苦汁柔脆、不時下種生、四時有之、故名不断草、秋收種、連古株抽莖分枝、開細白色、結子、

〔農業全書四菜〕莙薘〔上方にてはたうぢさといふなり〕

莙薘又の名は唐菜共云、唯作り種子を蒔事、大根と同じ、二月蒔て四月苗のふとるにまかせて、うつしうゆるもよし、菜の絶間にあるゆへ、料理色々に用ゆべし、乾しても用る物なり、又八月蒔て、十月苗ふとるを畦作りし、五六寸に一本づゝ植、糞水を頻にそゝげば、甚さかゆる物也、四季絶ずあるゆへに、不断草と名付るなるべし、又本草には、莖を灰にやき、あくにたれて、衣を洗へば、其白き事玉の如しと記せり、

〔成形圖說二十三菜〕布遍久佐〔和名〕

不断艸〔葉を摘れば常に萌出る、故に此名あり、〕○中略

此苗は高三尺許、莖の狀萵苣に似て細稜あり、夏盛にして多枯る、春社日に種を下し、或は露實よ

菠薐

りも生るものあり、葉の色青白くて白蒿のごとに短く小し、夏花さき實をむすぶ、茱萸抹の如にて輕虛土黃色なせり、內に細子あり、根は白し、○中略一種幹をなして葉出るもの東國に多し、但土臭て食品に宜しからず、此灰汁もて衣服の積垢を洗ふべし、能脫るなり、

〔多識編三菜〕菠薐、今案加良奈、

〔書言字考節用集六生植〕菠薐草赤根菜、波斯草並同、　菠薐　赤根菜同上

〔和爾雅七菜蔬〕菠薐菠菜、赤根菜並同、

〔農政全書二十八樹藝〕菠菜、菠薐、一名赤根、又名波斯草、劉禹錫云、菠薐本西國中種、自頗陵國將其子來、今呼其名一語訛耳、

集解、波稜正二月下種、三四月爲蔬、其莖柔脆中空、其葉柔厚脆滑、綠膩柔厚、大概如蘿蔔葉菁葉而細小、直出一尖、旁出兩尖、如箭鏃形、其莖近根處赤色、根亦數寸、大如桔梗而色赤、四月起薹尺許、有雌雄、菁薹、開碎紅花、簇簇不斷、雌者結實有刺、狀如蒺藜子、種時須研開以浸脹、則過月朔必生、此類尚多矣、

〔本朝食鑑三菜部〕菠薐此俗訓波宇連草、此音之訛耶、

〔南浦文集下〕芥子菠薐菜今不生、大根亦是僅遺名、一籠土筆過分候、寫盡飢腸一夜情、　謝人惠土筆

〔日次紀事正月〕凡菠薐菜、過月朔乃生、今月初四五日之間種者、與二十七八日之間種者、皆過來月初一乃生、驗之實然、蓋是菠薐園菜而其種不拘時、倭俗所謂鳳凰草是也、

〔農業全書四菜〕菠薐草

はうれん草は、蒔て月朔を過ざれば、生ぬ物といひならはせり、然るゆへに、月の廿日以後蒔ば、來月初早く生るなり、今試むるに、月朔に種て、月中に生ふるなり、蒔ときたねを土ともみ合せ、畦作りし、がんぎを少深くして蒔べし、八月早く蒔て、乾馬糞をおほひ、雪霜をふせぐべし、九十月さいさい水をそゝぎてうるほすべし、六月に地をよくこしらへ、こゑをうちてからし置、七月に蒔たる跡によし、○中略冬春葉をかき取、春の暮に成ては、莖葉老てこはき時切とり、熱湯に漬、やがてとりあげさらし乾し、菜園の皆々枯たる時用ゆべし、

〔毛吹草 三〕肥前　鼠連草(ネヅミアヘ)ノ　薩摩　鼠連草(ネヅミアヘ)

〔倭訓栞 中編二十四 末〕まつな　松菜の義、葉似たり、海濱に生ず、葉杉の如く食ふべし、牡蠣菜なりといへり、

〔和漢三才圖會 百二 柔滑菜〕松菜(まつな)　俗稱 正字未詳

按松菜近年大明僧齎來者有之、二月下種、苗高五七寸、非蔓而延地、葉似雌松而柔、亦似杉菜、三四五月淪和醋、或入羹中食、味淡甘脆美、秋開黄花、五瓣、極小結子、如蓬冠草子、黑色、

本草綱目蔬菜部、有邪蒿者、云三四月生苗、葉似青蒿而細軟、色淺不臭、紋脅邪也、根葉皆可茹、煮熟和醋茹、氣味辛溫、作羹亦良者、此是松菜矣、

〔日本國風 五〕松菜

或書曰延寶年中大明の僧松菜を持來、此菜高さ五七寸ばかり、蔓なくして地をはふ雌女松の如し、又杉菜にも似たり、二三月の比淪て醋に和し、或は羹に入て食す、其味甘しと云て、珍奇の菜也とす、しかるに此菜古より吾伊勢國海濱におほく生じ、海邊の沙土にあらず、水古より羹にいれて食す、希物にあらず、總て艸木陰陽の氣雨露の惠を得て、彼方にも生じ、此方にも生じて同物有、しかるを不知、此本、外國より來りて珍奇を玩賞するは、人常に親を不貴、心を珍異に馳るの所致なるべし、

〔本朝世事談綺 生二 植〕松菜

延寶のころ、大明の僧齎來して希なりしが、頃年所々に見ゆ、三月五月の間、淪て酢に和し、あるひは羹の中に入れてこれを食す、甚味淡甘して美なり、本綱に有邪蒿者、云三四月生苗、下略 是松菜の事也、

〔新撰字鏡 草〕地膚 爾。波。久。佐。　地膚子 阿。加。久。佐。

〔本草和名 七草〕地膚、一名地葵、一名地麦、一名地脈草、一名延衣草、已上二名出蘇敬注、仁諝音作漨字、叙連反、一名地華、一名杜菌、已上二名出釋藥性、一名星精、出大清經、一名地威葵、出雜要訣、一名蚍蝦酒、出雜疑、和名爾波久佐、一名末岐久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕地膚　本草云、地膚一名地葵、和名爾波久佐、一云末木久佐、

〔康頼本草 草〕地膚子　味苦寒、无毒、和ニワクサ、又末支久佐、八月十月採、實陰乾、

〔醫心方 一〕地膚子 和名爾波久佐、又末岐久佐、

〔類聚名義抄 八艸〕地葵 ニハクサ、一云マキクサ、

〔藻鹽草 八草〕葵

庭草 これはつちあふひなり、ちしばり草の事也、又にはの草とも、たゞには草共いふと、ふるきものにいへり、

〔易林本節用集 波草木〕苕草(ハヽキクサ)

〔和爾雅 七草木〕地膚(ハヽキヾ) 地葵、地麥、益明、落帚、獨帚、王蔧、鴨舌草、涎衣草、王蔧並同、

〔書言字考節用集 六生植〕地膚(ハヽキヾ) 白地草、涎衣草、地麥並同、　掃帚草 知　地膚(ニハクサ) 掃帚艸也

〔本朝食鑑 三柔滑〕帚木 訓波字岐木

集解、庭園野徑處處多有、或田圃之界多種之、生苗葉、如竹葉而細小、深青柔厚、似有微毛、可作蔬茹、一科數十枚、攅簇團團直上、可比蒿之茂、莖赤或青亦有、性最柔弱、故將老時乾枯、可爲帚、野人呼稱草帚、作帚則勝於藜、作杖則劣於藜、夏秋開黄白花、結實最繁矣、一種有産奥之津輕者、木大異常、實如豆、炒以爲果也、

〔大和本草 五柔滑〕地膚(ニハクサ)　葉ハ菜トシ食ス、味可也、熱湯ニ少煮テホシテモヨシ、莖ハ全科ヲ用テ帚トス、○中略一種枝シゲキヲ、西州ニテ南蠻帚ト云、幹ナクシテ根本ヨリ枝多ク叢生ス、シゲリテウルハシ、但帚ヨハクシテ久ニ不堪、常ノ帚ニヲトレリ、食スルニヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕地膚　ハヽキヾ 今ホーキギト呼ブ　ハキヾ 南部ニテ箒チヘキト云、故ニ此ノ名アリ、　ホーキボウ

藝州　ホ。ー。キ。ヾ。同上中略○

春月種ヲ下シ苗高サ四五尺ニ過グ、葉細長ク互生ス、深綠色ニシテ毛アリ、枝葉繁密ナリ、葉ヲ取テ食用ニ供ス、夏月葉間ニ小白花ヲ開キ實ヲ結ブ、子ヲ收テ藥用トス、老幹ヲ束テ箒トス、一種イ。ザ。リ。ホ。ー。キ。ヾ。ト呼者ハ、枝上ヨリ枝繁ク生ズ、コレヲ南蠻ホーキヾ阿蘭陀ホーキヾ、江戸ホーキギ、南京ホーキヾトモ名ク、此葉食用ニ良トス、其莖幹ハ柔ニシテ箒トナスニ堪ヘズ、又一種大ホ。ー。キ。ヾ。アリ、高サ一丈許ニ至ル、形狀ハ異ナラズ、

(農業全書四)地膚はうきゝ

はゝき草、葉を食にもし、あへ物あつ物樣々料理に用ゆ、園に畔作りしうゆるに及ず、屋敷の内、庭の端々よく肥たる所、又は菜園の道ばた、かきぎはなど、物の妨ならぬ所を見合せうゆべし、大小二色あり、南蠻帚とて、枝こまくしげきあり、又南々よりもり來る、枝のあらく木のごとく大く、甚さかゆるあり、二色ともにうゆべし、葉枝細くしげきは、しなやかにしてよけれども、莖よはくして、箒籠などをはくにはあしゝ、然るゆへに大きをもうへて、共に用ゆべし、切取時分、少々見合せあり、わかく青き内はよはし、おひ過ればはしかくて、おれやすし、秋實りて葉あかくなりたら、早く切べし、凡七月末より八月中頃切て、しばし外にさらして、後取入をき、帚に用ゆべし、子は地膚子とて、藥にも用ゆるものなり、子をとりたねにするは、九月の半霜のふるまでもをくべし、凡かよふの物、其出來の遲速によるものなり、時を定めがたし、

(微妙公御夜話)微妙公(前田利常)○江戸より御歸國之刻、越中白石村之内御通之時分、百姓居屋敷之内に作置候物を、御覽被遊候て、俄御機嫌惡敷成候て、郡方歲立不申事、郡奉行改作奉行共台點せぬ故とて御わめき、御供の内に氣が付たる者有之か尋よと御意候得共、誰も見とがめ申者無之候、人々被尋候故、山本瀬兵衞申候は、白石村中にて、百姓居屋敷に、はうき木を畠に作り置申候、此事

大根名稱

にて候哉、ほうき木は屋腰溝緣抔に植申物に候、何方にてもそだち申物に候、白石にて見申候は、大豆小豆其外何を植ても能所に作置候を私は如何と見申候、此外心付申事無之由申上候、夫を御聞被成候て、瀬兵衞と召候て、成程それよ〱、小松へ參り著候て、伊藤内膳抔へ申聞候得と、御意候故、小松にて内膳殿へ委細に申入候、如此成事をも早御心付被遊候と、亡父瀬兵衞咄申候、

〔長生療養方二諸藥功能〕地膚子　味苦寒無毒、利小便、散惡瘡、搗絞汁、主赤白利、和名爾波久佐、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

武藏國廿八種（〇中略）地膚子一斗五升、下總國卌六種（〇中略）地膚一升、

〔本草和名十八菜〕萊菔（仁諝音來、又作蘆、又音服、）一名葍、一名葖、（音雙、已上三名出兼名苑、）和名於保禰、

〔倭名類聚抄十七菜羹類〕葍　爾雅集注云、葍（音福、和名於保禰、俗用大根二字、）根正白而可食之、兼名苑云、萊菔（上音來、）本草云、蘆菔、（音羅）孟詵食經云、蘆菔、（上音羅、今案萊菔、蘆菔、皆葍之通稱也、）

〔類聚名義抄八艸〕葍（福音、オホネ）　蘆菔（二音、羅伏、オホネ、）　蘆茯（同）　萊菔（オホネ）　蘿蔔（同）

〔段注說文解字一下艸部〕蘆、蘆菔也、一曰薺根、（此字義別說、謂薺根謂之蘆也、）从艸盧聲、（落乎切、五部、）菔、蘆菔、似蕪菁、實如小尗者、（今之蘿蔔也、釋艸、葖蘆萉、郭云、萉宜爲菔、蘆菔蕪菁屬、紫花大根、一名葖、俗呼雹葖、按實根駭人、故呼突、萉直加艸耳、蕪菁見菁篆、）从艸服聲、（蒲北切、一部、）〓、葍也、从艸富聲、（方布切、古音在一部、布字依宋刻、）葍、𦰡也、（見釋艸、郭云、大葉白華、根如指、正白可啖、按邶風箋云、葑菲二菜、蔓菁與葍之類也、皆上下可食、此根可啖之證也、郭又云、葍華有赤者爲藑、藑葍一種耳、亦猶苕、苕華黃白異名、陸璣云、葍有兩種、一種莖葉細而香、一種莖赤有臭氣、按毛公云、葍惡菜、殆因有臭氣與、）从艸畐聲、（方六切、古音在一部、）

〔易林本節用集大草木〕大根（ダイコン、又蘆菔ロフ）　〔同草木〕蘿菔（ラフク）（大根）　〔同於草木〕大根（オホネ）　蘆菔（同）

〔和爾雅七蔬菜〕萊菔（ダイコン、ヲホネ）（言大根也、蘆菔、蘆萉、蘿蔔同、溫菘、紫花菘、土酥並同、）蔓菁蘿蔔（セイグヰダイコン）（本草綱目云、形小而長者、名蔓菁蘿蔔、）楊花蘆菔（サングヮフダイコン）（江陰縣志云、蘆菔一種、暮春時有之、形細長、味微甘、名曰楊花蘆菔、）水蘿蔔（コヲホネ）（出于農政全書）

〔東雅十三穀蔬〕葍（ヲホ子）　倭名鈔に、葍はヲホ子、俗用大根字、萊菔、蘆菔、蘿菔、皆葍之通稱也、温菘はコホ子といふと註せり、仁德天皇の御歌に、ヲホ子といふ事の見えしを、オホ子は大根也と、日本紀釋

にも釋しぬれば、オホネとは其根の大きなるをいひし也、李東璧本草には、爾雅註を引て、紫花菘、俗呼温菘、似蕪菁、大根一名葖蘆菔、今謂之蘿蔔、是也、菘とは菜名、萊菔とは根名也と云ひけり、此說の如きは、葖といひ菘といふ、もと是一物にして、たゞ其根と葉とを呼ぶ所同じからぬなり、倭名鈔の如きは、温菘、萊菔、別に分載せて、温菘を呼びてコホネといひしは、これもまた其根の噉ふべきをもて、此名ありと見えたり、さらば今俗に細根大根などいふもの、類にして、是又我國の方言にぞあるべき、コホネの義に不詳、言々オホネと並ひし事は、古より聞えて、爾雅註にも又大根といふ事見えたれば、其根の大きなるを云ひしとは見えたれど、温菘をばコホネといひ、また萊菔を呼びて、カヘホネといふも、しあれば、その根ふとき者を呼びてオホネといひしにや、さらばオホネと云ふ、其オホネといひしは、大の義なるべし、たゞその詳なる事を知らず、

〔物類稱呼 三〕萊菔だいこん　はだの大根、相州波多野名產也、江戶にてはだなと云是也、これ畔種也京にてながね大根と云、大坂天滿にてはそね大根といふ、又宮の前の大根と云、河州守口にて、是なしつて漬とす、西國にて小大根と云、はだの大根は、小大根よりはすこし大也、又畿內にてなかぬき大こんといふを、江戶にておろぬき大こんと云、

〔倭訓栞 中編三 於〕おほね略○中　和名鈔に蘿菔をよめり、大根の義、大根は爾雅の注にみゆ、今音をよべり、萊菔蘆菔も同じ、出羽にておはかたといひ紅毛語ろうとらていすといふ、土おほねも同じ、尾州の宮しげ、關東のねりま、共に地名なり、波多野は相州也、自然生の物を賞す、江戶にははだなといふ、京になかねとし、大坂にはそねとす、膽吹より出る鼠大根は葶菘、野大根は天巧菜也、伊吹山高島郡にあり、唐大根は爾實菘、ほし大根は仙人骨也といへり、

〔日本書紀 十一 仁德〕三十年十一月庚申、天皇浮江幸山背、略○中　明日乘輿詣于筒城宮、喚皇后、皇后不參見、時天皇歌曰、菟藝泥赴、揶摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和珥、略○下

〔雪玉和歌集 春〕加賀御草　大根 正月一日、大內にて餅のうへにおく大根なり、

さき草の中にもはやきかゞみぐさやがて御調にそなへつる哉(年貞記)

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一大こん　からもの

〔倭訓栞〕(前編十二須)すゞしろ○中略　七種の菜にいふものは蘿蔔也といへり、されはすゞは凉しき義、しろは白の義成べし、一說に本草に菘其花如䓊也といへば、あざみなるべしといへり、されば䓊の義によれる也、又薩摩にていふは、常は河高菜といふ、田がらしなり、

〔古今要覽稿(菜蔬)〕すゞしろ　おほね　蘿蔔
すゞしろ一名おほね、一名つちおほね、一名かゞみくさ、一名こころぶと、一名だいこんは、漢名を蘆菔、一名蘿蔔、一名來服、一名萊菔、一名蘿葍、一名蘿白、一名蘿瓟、一名蘿蕈、一名蘿卜子、一名羌精、一名唐菁、一名蘆葩一名菈遝、一名菈遝子、一名葖、一名葖草、一名葖子、一名雹葖、一名菔子、一名紫花菘、一名温菘、一名楚菘、一名秦菘、一名玉本、一名土酥、一名地酥、一名大菜根、一名篤魯馬と云、此種は民間日用のものにて、四時ともにこれあり、春生するものを俗に三月大根、一名つばくろ大根一名ほそね大根といひ、漢名を楊花蘿蔔、一名破地錐といひ、夏生するものを夏大根、漢名を夏蘿蔔、一名夏松蘿蔔、一名夏生といふ、近郊練馬清水村のもの、その名四方に知られたり、また秋生するものを秋大根、漢名をまた蘿蔔と(此蘿蔔は都北方の土名なり)いひ、冬生するものを冬大根、漢名をまた酥と(此土酥もまた北方の土名なり)いふ、いはゆるすゞしろ以下の諸名、おほくは冬生するおほねの名なり、冬生するは夏秋に生ずるよりも、その味殊に勝れたるによりてなり、○中略

釋名

すゞしろ、(河海抄、拾芥抄、公事根源、年中行事、)按に延喜式に、蔓根須々保利六石、菁根須々保利一名とみえ、また新撰字鏡に、菹䔮同側魚反、須々保利とみえたり、これによれば、皇朝にてすゝほりを作るに、蔓根菁根

の二種を用ゆるは、古よりのならはしも、河海抄以來このおほねをさしてすゞしろといひしは、誤す、すゞしろの中略にて、そのおほねを以て、蔓根菁根の代とせしによりて、此名は出來しなり、然るを春の七種考に、須々代あるひは鈴白に作る、すゞは涼しき義、しろは白の義なりといひ、又すゞなにかはるといふ義なりともいへるは、その說いかゞあらん、

〔本朝食鑑三菜部〕大根和字四

釋名、萊菔、蘆菔、温菘、上同、中略、大根、今野俗從用、大根之號、又用鑿根、俗有異、

集解、此亦日用利益之菜、而民間常稱之、四時俱用者也、故天下通無不有、然隨土地之應異、不廣、不可無肥瘠好惡、若深山遠島之瘠全無處亦有、大抵六月土用後下種、秋采苗采小根、俗號摘大根、冬十月十一月採根用、狀圓長肥白、或短圓豐肥、有細鬚、多餘處號浸漬、此本邦香物之品也、三四月抽薹開小花紫碧色、結角、其子如大麻子大、圓長不等、黃赤色、其葉大者如蕪菁而硬粗、細者如小芥、略柔滑可作菹、皆有細柔毛、八九月復下種者、三月采根、號三月大根、至夏甚辛、春二月下種者、三四月采根之細小者、復號挺大根、茵亦好、此亦至夏末、獨根則辛辣可用、一種有根巴紅紫者、形味相同、一種有鼠大根者、短圓豐肥、其尾細而長、故名、其味極美、生甚辣、熟甚甘而可爲珍、此尾張之產、濃勢參遠亦擧移種而不相及、凡洛邊及海西山北不佳、江東諸州略爲佳、江都近郊最美者多、就中根利間、板橋、浦和之產爲勝、相州波多野之產者、素以自然生者爲佳、其根細而實、又有種其自然生者、培養之、其根肥不佳、故宜細根、不宜肥大、采細根作醃糟、其波多野大根、京師稱中拔大根、言畑畦畝中之未長根而抽之、故名、此亦作醃糟而佳、近時擧世嗜蕎麥麪、而用蘿汁之極辣、故家家爭稱甚辣者、大根老肥堅實者甚辣、幼柔浮弱者不辣、瘦實者亦甚辣、又采生者置火邊、而暴風處則乾堅、此亦甚辣、又采好者暴風處、經一兩日、而用亦同、夏時少辣、冬時多辣、近頃江都市中賣信州景山大根、及夏大根之種、俱甚辣、以爲蕎麪之用、食言不減尾之鼠大根之辛、然未試之、

〈大和本草五菜蔬〉蘿蔔　又萊菔トモ温菘トモ云、和名於保根(オホネ)、今國俗大根ト云、南北壌沙無不宜、民用ニ最有利益、群菜ノ第一トスベシ、四時常ニアリ、夏生ハ秋冬ノ者ニ比スルニ、形同ケレドモ味ヲトル、○中略凡大根ニ種類多シ、大大根アリ、是一時種蒔之力ト土地ノ肥饒ニヨレリ、又種子モ別ニアリ、水蘿蔔、群芳譜云、形白而細長、根葉但淡脆、無辛辣氣、可生食、亦有大如臂長七八寸者、則土地之異也、攝州天滿ノ邑ノ邊、宮ノ前大根ト稱スルアリ、形小ニシテ長シ、河州守口ニ是ヲ以糟漬トス、大坂ニモ亦然ス、冬月ニ根長シ、或乾シテ遠ニ寄ス、○中略江陰縣志載楊花蘿蔔曰、暮春時有之、形細長味甘脆、今案ニコレ三月大根ト稱スルモノナルベシ、モチ大根アリ、是モ三月大根ノ類也、葉高カラズ、地ニ付テ生ズ、根大ニシテ味カラシ、三月大根モチ大根此二品ハ、冬大根盡テ三月ニ味ヨシ、モチ大根ハ其根土上ニ不出、是常ノ蘿蔔ニカハレリ、故ニホリイリ菜ト云、伊吹大根ハ、江州伊吹山ニ自生ス、根短シテ肥大、其末鼠ノ尾ノ如ク、小ニシテ長シ、味甚辛シ、煮熟スレバ甘シ、葉ハ大根ト同ジ、チズミ大根トモ云、尾州ニ種ル尤ヨシ、他邦ニモ種子ヲ傳ヘテウフ、尾州ノ產ニ不及、尾張大根、長鼠大根ト不同、紫大根アリ、莖モ根モ紫色也、又葉ニ刻缺多ク、味佳キ一種アリ、又葉似菊根小ニ、冬ヨリ夏ニ至テ葉ヲ食スルアリ、味ヨシ、暹羅大根、其種自暹羅來ル、京都ニテ近年隱元菜ト云、葉大ニ根紅ニ、内ニ赤白ノ暈紋アリ、ウズノマヒルニ似タリトテ、ウヅ大根トモ云、葉ノ心モ紅シ、味甘シ、冬菜フ、コレヲ蕪菁ト云ハ非ナリ、夏大根、生ニテ食ヘバ脫血ス、產前食ヘバ小產ス、

〈本草和名十八菜〉温菘、黄菜、又作黄菜、又有辛○辛恐菘誤菜、根細而味辛、白菘、出崔禹葑蕵、一名香蕵、出七卷食經和名古之、

(頭註)按順抄引崔禹、温菘和名古保禰、又有辛菜、和名賀良之、根細而甚辛、又按醫心食性及長平和名、葑蕵和名己志、此條疑有脫文、

〈倭名類聚抄十七菜〉温菘　崔禹錫食經云、温菘音終、和名古保禰、味辛大温無毒者也、

〈箋注倭名類聚抄九菜〉按方言、蘴蕘、蕪菁也、其紫華者謂之蘆菔、注云、今江東名爲温菘、證類本草蕪菁

條引陶注云、蘆菔是今溫菘、其根可食、葉不中噉、蕪菁根乃細於溫菘、而葉似菘、好食、菜菔條引唐本注云、陶謂溫菘是也、又引爾雅云、葖蘆葩、釋曰、紫花菘也、俗呼溫菘、似蕪菁、大根、一名葖、俗呼雹葖、一名蘆菔、今謂之蘿蔔是也、則知溫菘卽蘆菔、本草和名載本草菜菔、訓於保禰、又別引崔禹出溫菘、不載和名、源君蘆菔依輔仁訓於保禰、溫菘別訓古保禰、分爲二物、恐非是、貝原氏曰、西國有古於保禰、小於波多野大根、生野圃、根不實出地上、其子落自生、不假人力、是救荒本草野蘿蔔也、救荒本草云生平陸、匍匐蔓菁若蘆菔、采之不難、煮且易熟、氣來雖之、勝菜肉、今本不載、按古於保禰、源君所謂古保禰蓋是也、郭璞注爾雅葍云、大葉白華、根如指、正白可啖者、可以充之、鄭玄詩箋所云、蔓菁與葍之類之葍是也、然爾雅葍當別是一種、本草所謂旋花卽是、郭璞因其名同、以蔓菁類之葍、注旋花之葍者誤、又救荒本草云、水蘿蔔、生田野下溼地中、苗初搨地生、葉似薺菜形而厚大、鋸齒尖、花葉又似水芥菜亦厚大、後分莖叉、梢間開淡黃花、結小角兒、根如白菜根而大、味甘辣、蓋是葍之今名也、

〔類聚名義抄　八〕葍〈音福、コホネ、〉

〔古今要覽稿　草類〕こほね　こおほね　葍　野蘿蔔

こほね一名こおほね、一名弘法大根は、漢名を葍、一名菖、一名蘿葍、一名野蘿葍といふ、此種は西國及び陸奥會津等の野圃のほとり、或は道傍にもおのれと生出るものにて、その莖葉すべて蘆菔に似て小さし、根もまた相似て、長さ僅に四五寸のものなりといへども、春時これを採て醃藏し食ふに、その味美なり、また家圃につくれるものもあるよし、大和本草に見えたれども、すべて江戸近き田舍には、たえて此種ある事をきかず、大和本草云、野蘿蔔、今按に西土の小大根なり、波多野大根の一類別種にて、波多野大根はこおほねより大なり、江戸に多く出づ、ともに野圃に生ず、人力を用ひず、種をちて自然に生ず、又圃にもつくる、二種共に脆美なり、味辛し、鹽に漬け又蒸て煮て熟し易し、救荒野譜に言ところの如し、根は地上に出ず、常の大根に異り、

大根栽培

春蔬の佳品なり、凡野蘿蔔、三月大根、もち大根は、蘿蔔の既に老て無味時に、盛に美なり、

〔大和本草附錄卷一〕薩摩大根　常ノ大根ヨリ大也、皮アツシ、根モ寒ニイタマズ甚カラシ、煮レバ味甘クヨシ、雪霜ニ當リテモ氣味カハラズ、葉ハ常ノ大根ノ如シ、但心ノ葉スグニ立ノボル、古葉ハ側ニ垂ル、是亦常ノ大根ニコトナリ、肥シテヨク作レバ甚大ナリ、地上ニ根出テモ寒ニイタマズ、葉莖ノ味モ常ノ大根ニマサレリ、

〔後水尾院當時年中行事下〕一　まゐらざる物は、略○中紫大こん、蘿蔔なり、

〔延喜式內膳三十九〕耕種園圃

營蘿菔一段、種子三斗、總單功十八人半、耕地三遍、把犂一人半、馭牛一人半、牛一頭半、料理平和一人、下子半人、六月採功十四人、

〔農業全書菜三〕蘿蔔

大根は四季ともに種る物にて、其名も亦各替れり、されども夏の終り秋の始に蒔を定法とす、是あまねく作る所なり、其種子色々多しといへども、尾張、山城、京、大坂にて作る、勝れたるたねを求てうゆべし、根ふとく本末なりあひて長く、皮うすく、水多く甘く、中實して脆く、莖付細く葉柔かなるをゑらびて作るべし、根短く末細にして皮厚く、莖付の所ふとく、葉もあらく苦きは、是よからぬたねなり、略○中種子ををさめ置事、霜月の初め大根多き中にて、なりよくふときをゑらび、毛をむしり、葉は其まゝをきて、一兩日も日に當て、少しなびたるを、畦作りし、がんぎをふかく切、肥地ならば、凡一尺に一本づゝうへをくべし、もし瘠地ならば、折々糞水をそゝぎ、春になりて葉莖もさかへたる時、畦の中に柴か枝竹を立て、廻りにも竹を立て繩をはり、雨風にたをれぬ樣にすべし、たをるれば子少し、うゆる時少日に當て痛る事は、花遲く付て餘寒にいたます、實り能ためなり、三月に至り九分の實りと見る時、刈て樹の枝につりをくか、又は軒の下につりて、さやのよ

大根耕用

く干たる時折てとるべし、又刈てたばね、池川などに五六日も漬をきて、取上干てもみて取もよし、かくのごとくすれば、まきて後虫付ざるものなり、又霜月抜ていけをき、正月うへてたねとするも實りよきものなり、うゆる地の事、大根は細軟沙の地に宜しとて和らかなる深き細沙地を第一好むものなり、河の邊、ごみ沙の地、又は黒土赤土の肥たる細沙まじり凡かやうの所大根の性よき物なり、同じく地ごしらへの事、五月いか程も深くうち、濃糞を多くうち干付をき、其後度度墾返しかきこなし、埋ごゑをもして、六月六日たねを下すべしと云り、然ども大かた梅雨の後糞を打、ほし付、能々地をこなして蒔べし、凡土用中に蒔を上時とし、七夕盆の前後を中時とし、八朔を下時とす、地により所によりて、各其よき時節ある事なれば、是必一偏には定めがたし、早過たるは根ふとく入事ありといへども、味よからず、山中野畠などの外、屋敷内などにうゆる事は、前に云ごとく、いく度も委しくこなし干をきて、凡八朔の前後大抵能時分なり、畦の廣さ四尺ばかりにして、筋をきり、油糟、鰯、濃糞などを多く用ひて蒔糞とし、灰糞に和してうゆるよし、牛馬の糞のよくかれ熟したるも、土和らぎて根よくふとる物なり、鼠土にて蒔たる肉よく、九耕麻、十耕麗菊とて、麻畠はいか程も耕しこなす物なれども是よりも大根畠は猶一入よく耕しこなし、こしらゆる物なり、麻地九遍耕せば麻に葉なし、大根畠を十遍も耕せば、鬚少もなしと云り、種子の分量の事、一段の畠に凡五六合を中分とすべし、但市町近くて、小なを間引うる所ならば、多くも蒔べし、さて二葉三葉の時より、段々次第に間引て、凡一歩の内に四五十本ある程を中分とすべし、是一段の畠に、一萬二三千ある積なり、但大きを望むものは、猶うすく間引べし、

〔宜禁本草 乾五〕萊菔根　辛甘溫無毒、散服及炮煮服、大下氣、消穀、去痰癖、肥健、生汁主消渇、試大有驗、療飼鮎及豆腐毒、嫩葉生食、大葉熟啖、消食和中、名蘿蔔、利關節、理顏色、練五臟惡氣、飲食過度、生嚼嚥之便消、飽食亦不發熱、主肺嗽吐血、溫中補不足、治勞瘦咳嗽、子水研服吐風痰、偏頭痛、生汁仰臥注鼻、

反地黄白髮、孫眞人曰、久服澀菜衞、髮早白、

〔延喜式 三十二大膳〕園韓神祭雜給料 春冬並同

蘿菔五十把

〔延喜式 三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別〇中略蘿菔 生菜料、以一把充四口、

〔延喜式 三十九内膳〕諸節供御料 中宮亦同、下准之、

正月三節

蘿蔔味醤漬瓜、糟漬瓜、〇中略

右從元日至于三日供之

供奉雜菜

日別一斗、〇中略蘿菔四把、准四升、正二十十一十二月、

〔西宮記 正月〕供御藥事

召儲宮内輔一人、侍醫、典藥、造酒、内膳官人、采女、藥女官、宮内省、典藥、藥生等參入、昇御藥高机并御釁盤、大盤等、内膳供御齒固、大根、苽、串刺、押鮎、燒鳥等、付進物所、

〔江家次第 正月〕供御藥 正月元二三 弘仁年中始之

内膳自右青瑣門供御齒固具、〇中略

采女傳取之、自第三間御几帳上付女藏人、女藏人傳陪膳、

大根一坏

〔年中恒例記〕十二月朔日

大根百把也、善法寺進上、但日不定、

〔殿中申次記〕従永正十三丙子至同十七庚辰違記録事

十二月八日

一大根　百把例年進上之　善法寺

〔鹿苑日記〕慶長三年十一月九日、三條町靜勝へ大根二百本遣之、塗師浄宗大根二束遣之、

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

正月

一鯛三日○御歳暮　大根○十一日中略　酒井左衛門尉

二月

一干。大。根。　永井大學

〔官中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事

十月寒中獻上此月ニ入ル

一御茶　御水菓子類　鮮御肴　御樽　宮重大根七月御在府之節計　尾張大納言

一大根　堀田相模守

一小見川大根　内田近江守

一辛味大根　阿部豐後守

一大根　松平右京大夫

〔庖丁聞書〕一ひでり鱠といふは、例大根の入たる鱠也、世に是を笹吹鱠といふ也、

一雪鱠は、下に魚をもり、上におろし大根を置出すを言也、

〔養生訓四飲食〕蘿蔔は菜中の上品也、つねに食ふべし、葉のこはきをさり、やはらかなる葉と根と、豆みそにて煮熟して食ふ、脾を補ひ痰を去り、氣をめぐらす、大根の生しく辛きを食すれば氣へる然

大根產地

れども食滯ある時は、少食して害なし、

〔徒然草上〕筑紫になにがしの押領使などいふやうなるものゝ有けるが、土おほねをよろづにいみじき藥とて、朝ごとにふたつづゝやきて喰ける事、年ひさしくなりぬ、或時館のうちに、人もなかりけるひまをはかりて、敵おそひきたりてかこみせめけるに、館の内に兵二人出きて、命をおしまず戰ひて、みな追返してけり、いと不思議におぼえて、日比こゝに物し給ふとも見ぬ人々の、かくたゝかひし給ふは、いかなる人ぞととひければ、年來たのみてあさな〳〵めしつる土おほねらにさぶらふといひてうせにけり、

〔下學集下飲食〕纎蘿蔔（センロフ）〇〇〇

〔易林本節用集食服〕纎蘿蔔（センロフ）

〔庭訓往來〕御齋之汁者、〇中略蘿蔔、山葵、寒汁等也、菜者纎蘿蔔、

〔倭訓栞前編十三世〕せろつぽん　庭訓往來にいふ纎蘿蔔を謬り呼るなり、大根をほそくせんに切たる也

〔甲子夜話二十二〕寛政庚戌ノ旅行ニ、美濃本庄驛ヲ過グ、其路傍ノ民家ニ賣物アリ、左ニ圖ス、〇圖略此物蘿蔔ニテ製ル、長五六尺、一筋ノ大サ、マガヒ糸ヲ合セタル程ナリ、一把毎ニ四五十筋、上ノ方ヲ束タルモ亦蘿蔔ノ皮ナリ、甚見事ナルモノニテ、其由ヲ問ニ、去年此邊ノ禪寺ニテ始メテツクル、未其栽法ヲ知ル人無シト答ヌ、

〔毛吹草三〕山城　蓮臺野大根　吉田大根　攝津　天滿宮前大根　三島江大根（蜂腰ヲ太シ、煮用之、）
尾張　大根　同干大根　相模　鼠大根（鼠ノ手ニ似タリト云）　秦野大根　近江　志賀山中大根
肥後　久保田野大根

〔和漢三才圖會九十九葷草〕蘿蔔（だいこん）〇中略和名於保根、今用大根二字、〇中略

尾州宮重之產、大者長三尺、周尺半、重可五七斤、肥後菊池、攝州吉野、勢州津、薩州加護島、肥前竹尾之產、皆長大也、武州江戶、攝州椋橋之產、味美也、他國大根、五本三本乃至十本爲一把、唯尾張肥前之產、每一本爲一束、

攝州天滿宮前、相州波多野、共出細長者、長二尺許、周可二一寸半、而本末均似、白細、漬糟糖、爲香物、宮前者謂故名多野卿、江州膽吹、相州鎌倉、共出鼠大根、形短而有尾、味甚辛、

〔食物知新　三〕日域諸國名產

萊菔　吉田大根、城州尾張大根、尾州伊吹大根、江州宮前大根、京師秦野大根、相州練馬大根、武州中野大根、同上蘿大根、肥前

〔攝津名所圖會　六上豐島郡〕名產椋橋蘿蔔、くらはし椋橋庄內上津村に多く作る、形勝れて大也、重本高く葉に甘味也、一根五斤餘に至るふ、朔日正しく事花などに作りて可なり、

〔浪花の風〕蘿蔔は太き物もあれども、丈け短く、漸一尺餘位にて、長きものはあらず、是土性砂交りにして堅きゆゑに、延難き故なり、中々江戶近在王子邊抔にて作るもの丶如き、見事にして味ひ美なるものは、絕て見ることなし、天王寺邊の蘿蔔、名物といへども、太きのみにて、其形狀甚に麤して、味ひも大に劣れり、

〔張州府志　十一春日井郡〕土產　蘿蔔　出宮重村、天下以尾張蘿蔔爲名產、就中宮重村爲第一、即落合村屬邑、

〔渡邊幸庵對話〕一尾張大根は宮重と云所より作り出す、此所昔御家來醫師服部水元四百石知行所故同所の名物小豆と大根と予方へ送り被申候、此小豆も度々獻上ある也、小豆はもの入交て、候に煮に、其儘煮ゆる也、

〔寛政四年武鑑〕尾張大納言宗睦卿　時獻上　十月御在府之節御時附　宮重大根

〔續江戶砂子　一〕江府名產　并近在近國

大根雜載

煉馬大根　ねりまは豐島郡也、江戸より三里程戌亥、此地の大根名產也、靑みすくなく、苦辛の味ひなし、大きなるは尺二三寸、周八九寸、周は宮也、味ひよろしく、尾州宮重に同じ、

下總國香取郡小見川大根　塚內田出羽守殿御知行也と云所の大根は、長三尺計、周り一尺七八寸程あり、味ひ尤よろし、一荷に十本は持かぬると也、獻上幷御役人方へも上りけるよし、所の人申き、

淸水夏大根　板橋のさき　江戸より二里半ほど

此所の種を以諸國に植る、他國にうへたる所の種にては生がたし、よつて毎とし此所の種を設けてうゆる也、

〔名物鹿の子中〕淸水夏大根種

しばしとて大根かんばん淸水かげ　松葉軒桑楊

春大根

花は根にとゞろき大根揚屋哉　如珪

〔國花萬葉記十四下〕當國名物出所

野大根　久保田と云所より出る

〔永正五年狂歌合〕七番　左

正月は牛房ばかりの尾をふりていなむとせしをくる、大根〇中略

左の大根くる、といふ事、此比世にもてあそび申狂歌に侍るべし、か、る事の濫觴は、家々の相傳、說々もおほく侍るべけれども、先當流の口傳の一說しるし申べし、何の御代にかありけむ、かた山ざとの風さふらひ、きはめていやしき姿なるありけるが、大根をのみこのみてけるを、京童のにくみ笑、大なる大根をいかほどもあたへて、神變奇特をくふ人かなとほめあげて、嘲哢するをもしらず、さては我こそ大根くひて、天下無雙の名人なれと、高慢してくふほどに、

口より血をながし、大あせ水になりてくつたりけるを、わらひ草にしてくはせけるより、人のさしてもなき事をほめあげ、かしづきなどするを、大こんくる・と申とうけ給及侍りしなり、

〔新撰字鏡 草〕蔓 亡□反、蕪也、蕪菁也、阿乎奈、　葑蕵 二作字、封反、去、菁也、蔓菁、阿乎奈、　聰明草 阿乎奈

〔本草和名 十八菜〕蕪菁 仁諝音無、陶景注云、北人名之、一名蔓菁、出蘇敬注、又有車根、仁諝音蔓菁一名葑、陳藏器一名蕵、音□名也一名大芥、出崔禹 一名辛芥、出兼名苑 一名幽芥、已上五名出七巻食經、一名兔延子、子也、出神仙服餌方、一名九英、出崔禹錫 和名阿乎奈、

〔倭名類聚抄 十七菜〕蔓菁　蘇敬本草注云、蕪菁、武青二音北人名之蔓菁、上音蠻、和名阿乎奈、揚雄方言、陳宋之間蔓菁曰葑、音封

蔓菁根　毛詩云、采葑采菲、菲音斐無以下體、箋云、下體根莖也　注云、根莖也、此二菜者蔓菁與葍之類也、

〔類聚名義抄 八艸〕蔓菁 アヲナ上音蠻　蔓菁根 カブラ　蕪菁 武青二音 アヲナ、　蕪菁子 ナタネ

〔易林本節用集 阿草木〕蕪菁 アヲナ　蔓草 同

〔和爾雅 七蔬〕蕪菁 アヲナ 蔓菁、九英菘、諸葛菜同、　薹 ウテナ　蕪根 カブラ　葑蕵 同上

〔東雅 十三穀蔬〕蔓菁アヲナ　倭名鈔に、蕪菁一に蔓菁並に讀てアヲナといひ、菘はタヽタチと云ふ、俗に葖立の字を用ゆ、蔓菁根はカブラ、毛詩の下體は、蔓菁與葍之根莖也、蔓菁を大芥とし、小者を辛芥といふ、辛芥はタカナ、辛菜はカラシ、俗に芥子の字を用ゆと註せり、アヲナとは、アヲは青也、ナとは我國の俗、凡菜蔬類を呼びし總名也、タヽタチは卽葖立也、カブラといふ義不詳、大己貴神の、其父神の大野の中に入れ給ひし鳴鏑を、探りて奉られしといふ事、舊事紀、古事記等にみえて、鳴鏑讀て又カブラといふなり、古語相傳しには、鳴鏑はもとメカブラをもて作り出しければ、また名づけてカブラといふかともいふなり、メカブラとは海藻の根をいふ也、さらば古語にカブラといひしもの、蕪菁根をのみいふにあらず、凡物の下體をいひし也、今俗は蕪菁根なのみ、カブラといひぬれど、古にはしかはあらず、蕪菁の根なも、蕪の根なも、又蕪菁の根の如きなも、カブリとは云ひけり、倭名鈔に和名を引て、蕪足を給と云ふと見えたり、人の頭顱をコムラといふも、蓋カブラといふが如し、カブラといい

ひ、コムラといふ に韓語なるなり、タカナとは、其莖の高きをいふ也、カラシとは其子の味辛きをいふ、すべて其類多くして、蔓菁は芥屬也と、李東壁が本草には見えたり、

〔倭訓栞中編一〕あをな　日本紀、倭名鈔に、蕪菁をよみ、古事記に菘菜をよめり、新撰字鏡に、蔓又葑も同じく訓せり、

〔倭訓栞前編十二〕す。ゞ。な。　七種の若菜に入り、拾芥鈔に菁をよめり、蕪菁をいふ、されば菘也といへり、又すゞは小をいへば、今いふよめななるべし、薩摩にていふは、常に其國に食ふ豆の芽なり、

〔本朝食鑑三菜辛〕蕪菁訓加布奈、或訓阿乎奈、

釋名、蔓菁、本朝式　莖立、同上　蕪、源順　葑、同上　下饒、同上　菜、近俗、本朝式訓蔓菁曰阿乎奈、和名亦同、莖立者訓久久多知、蔓菁至春二三月、莖肥大高立作臺、故名、今亦稱之、○中略

集解、蕪菁者、上下平素日用之菜、而不俟諸葛之種、此民間所每有、四時俱采之、狀類芥而莖粗、葉大而厚闊、根長而白、或肥大而短、其味甘辛苦、大抵七月下種、冬初生、仲冬采葉采根而用、采葉莖以懸簷下而陰乾、呼號懸菜、或稱乾菜、又作干菜、或采葉莖以麁麹收藏、此號莖漬、經年亦佳、江州之造、號近江漬而爲珍、經年生酸味者尙佳、洛之賀茂里人所造、呼號酸莖、以賞美之、春末夏初盛開黃花、四出如芥、結角亦如芥、其均圓似芥子而紫赤色、八九月下種者、冬苗稍長采莖葉、此號冬菜、至春莖高起而肥大作小臺、卽是莖立也、或多采葉莖、復貯其根、以馬屎中之稻草而厚覆拒霜雪、則至春二三月、生苗肥高、中立起臺、其味柔脆、此亦莖立也、洛之近郊畦間、貯水以滋養者號水入菜、莖葉甚柔脆味美也、以爲洛之野珍、江東亦移種倣之而滋養、雖其莖葉肥美、而其味不及、則土地不相應之故乎、惟總州葛西之產、不減水入菜之味爾、一種春初下種、二三月生苗、采出地一二寸漸苗二葉者、作蔬、此號貝割菜、言如蛤蜊殼之開分乎、采其生而二三寸者作蔬、此號鶯菜、此言當爲之飛囀時而生乎、貝割鶯菜之類、不惟二三月生、而蕪時俱然焉、三根以攝州江州之產爲勝、就中出自天王寺之境者、肥豊短圓而蟠屈、其味香美

甜脆、土人能藏精漬、及晒乾以貨于四方、江東之地亦處處佳者不少、民間荒饑所賴者也、蕪菁子壓油、民間采油代麻油、亦貨于四方、以多爲燈用、菘芥俱多油、俗稱菜種油也、

〔和漢三才圖會 九十九 葷草〕蕪菁 蔓菁 九英菘 諸葛菜 和名阿乎奈 根莖曰下體 根名加布良 中略

攝州天王寺安部野之產、根圓大甘美爲勝、奧州津輕之產大之、蓋有數種、居蘇蕉加布良 根入土淺而其大者徑四寸許、莖葉不多、然根中闊而大爲良、子持菜古毛知奈 莖葉多、結實亦多爲良、晚熟菜於久天奈 大抵四月初開花、此菜五月中開花、而花實少、然以耐久爲良、三種共八月下種、彼岸生苗爲葉、遇霜乃味愈美、其根煮食甚甘、生食不甘、略

〔延喜式 三十九 內膳司〕耕種園圃

營蔓菁一段、種子八合、總單功卅二人半、耕地五遍、把犂二人半、馭牛二人半、牛二頭半、料理平和一人、敷土百二十擔、擔別六斤 運功廿人、人別日六度、往返各一里 下子半人、七、八月、採功六人、

〔農業全書 三〕蕪菁

うゆる地の事、若は家の跡、かきかべの崩跡などの古き土を好む物なり、其故床の下などの舊土を用ひて蒔糞とする事よし、いか程も肥熟したる地を耕しこなし、塊少しもなき樣に委しくこしらゆる事大根に同じ、大根は久しく地を晒し置たるがよし、蕪菁は當時によくこなしてもくるしからず、灰糞を以て蒔べし、種子おほいかにもうすくすべし、蒔たる上を鍬にて少しをし付るか、足にてかるくふみたるもよし、つよくふむは大きにあしし、雨の後などしめりたる時は其まゝ置べし、たねと土と思ひ合すべきためなり、うるほひつよくは蒔べからず、生出ては中うちすべからず、中略 種子を收めをく事は、大根と同じ、是もうへ付はあし、又多くうへて油にするも苦しからず、下略

〔菜譜 上 圃蔬〕凡かぶらを作るに、糞を煮ばく〳〵そゝぐべし、

蔓菁利用

〔日本書紀 持統三十〕七年三月丙午、詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁(アヲナ)等草木、以助五穀、

〔宜禁本草 五乾菜〕蕪菁 苦溫無毒、菜中有益、可常食、四時皆有、利五臟、通中、益氣消食、諸葛亮所止令兵士種蔓菁、其纔出甲可生啖、一也、葉舒可煮食、二也、久居則隨以滋長、三也、棄不令惜、四也、廻則易尋而採、五也、冬有根可劚而食、六也、子壓油塗頭、能變蒜髮、研子入面脂、極去皺、擣子水和服、治熱黃結實不通、瀉一切惡物利尿、秋食莖、冬食根、多種以備飢歲、南人取北種種之、初年相類、二三歲變菘、治虛勞眼暗、三月採花陰乾末、井花水空心下二分、久服長生夜讀書、男陰腫如斗核痛、蕪菁根擣傅之、食心正在春時、夏後種之謂之雞毛菜、

〔延喜式 三十二 大膳〕園韓神祭雜給料(春冬並同)

蔓菁六斗

〔延喜式 三十九 內膳〕供奉雜菜

日別一斗、(中略)蔓菁四把、(准四升、自正月迄十二月、)

漬年料雜菜

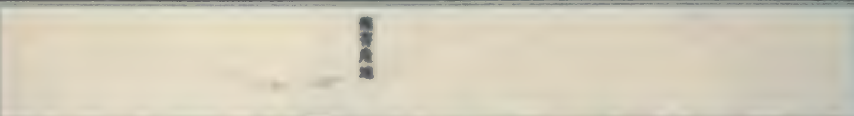
蔓菁黃菜五斗(料鹽三升、粟三升、) 右漬春菜料

蔓根須須保利六石、(料鹽六升、大豆一斗五升、)蔓菁葅(アヲナニラキ)十石(料鹽八升、楡五升、)蔓根(カブラ)擣(カチ)五斗、(料鹽三升、)菁根須須保利一石、(料鹽六升、米五升、)醬菁根三斗、(料鹽五升四合、滓醬二斗五升、)糟菁根五斗、(料鹽九升、汁糟一斗五升、)蔓菁切葅一石四斗、(料鹽二升四合、楡二升、○中略) 右漬秋菜料

〔江家次第 六四月〕二孟旬儀

下物下器(一盤、內竪四人各持下器、入自日華門、經版位南、著西階、采女迎取用入下物之器、筆空器入之、一枚炊交、一枚堅鹽、一枚菁茹物、一枚相加堅魚干鯛、)

〔江次第抄 五四月〕菁茹物 西宮曰、蔓菁等齒物云、蔓菁茹物、寬治江記云、青菜茹物、 今案菁菜也、茹一作茄、茹物クヒモノトヨムベキ歟、



〔執政所抄上正月〕十五日　粥御節供事

御菜二前略〇中一折敷　瓜、昆布、蓮根、蕪、

〔續修東大寺正倉院文書四十五紙背〕藍園　進上〇中略

蔓菁陸拾束丁秦部土麻呂

天平勝寶二年五月廿六日　倉垣三倉

〔朝野群載七攝關家〕御齋會加供解文

左大臣家

奉送　八省御齋會加供事〇中略

精進物〇中略　青菜　蕪〇中略

右奉送如件

大治二年正月日　案主肥後掾中原盛貞

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國卅二種、〇中略麥門冬、車前子、蕪菁子各三升、

〔庭訓往來〕被仰下之旨畏拜見仕候畢、〇中略東山蕪、西山心太、

〔毛吹草三〕山城　内野蕪菜　攝津　蕪　陸奥　大蕪

〔食物知新首〕日域諸國名產

蕪菁　天王寺蕪攝州　内野蕪城州　野大根、肥後　大蕪、奧州

〔雍州府志六土產〕蕪菁並蘿蔔根　凡洛外西山蕪菁、東山大根、是爲一雙珍味、蕪根扁大爲良、凡西山諸土而堅、故蕪根入土淺而扁大、風味又和柔、故西山產爲佳、然近世民家得種之法、下賀茂邊之所種、其形大而其味宜、東山吉田邊土地多砂而和柔也、故大根入土深而自然長大、其味爲佳、此外伏見淀南

薹立

御牧村之所出、亦長大而似尾張宮茂之產、然其味不佳、攝州森口來者、其形細而長精緻者爲佳、倭俗蘿蔔根爲大根、其名雖卑俚、其義相當者乎、

〈一話一言二十八〉京大坂江戶の名物を讀侍る狂歌

大坂　舟と橋　御城　草履に　酒　蕪菜　問屋　揚屋に　石や　植木屋

〈浪花の風〉蕪は天王寺邊、素より名物なれども、京都東山の蕪の如き大なるものはなし、其上味ひも美とするに足らず、

〈藝備國郡志上安藝土產〉菘カブラ　出佐東郡、蕪菁根其大如毬子、其甘似蜜、作羹食之、與江州兵主之菜根、膽吹之蘿蔔相比、又產高田郡吉田、佐東菘與吉田菘互競形味、共令悅人口也、

〈賀茂翁家集二長歌〉獻三河國高大新墾之蕪時歌一首幷短歌

名ぐはしき、み河のくにの、にひばりの、にひ御世すらを、そこにしも、ひらきたまひし、大君の、惠のひろに、大御名を、高すのはまの、にひばりに、つくるあをなは、ひさかたの、あめはさゆれど、あらがねの、つちはこほれど、いや生に、おひしみにけり、大君の、おなじみすゑの、吾君の、みけにつみ來て、冬ごもる、時にはあれど、御こゝろを、はるのみまけと、みさかえも、千代のわかなと、けふたてまつる、

反歌

天ぎらしみ雪降ども三河なるしかすがにこそなは榮えけれ

〈倭名類聚抄十六菜蔬〉薹　廣韻云、薹音臺、和名久々太知、俗用莖立二字、蔓菁苗也、

〈類聚名義抄八艸〉莖立クヽタチ　薹薹臺臺中今、下正、音クヽタチ、

〈伊呂波字類抄久植物附植物具〉莖立クヽタチ俗用

〈下學集下草木〉莖立クヽタチ

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一くヽたち　くヽ

〔易林本節用集〕久草木　莖立　蘴同

〔倭訓栞〕中編六久　くヽたち　萬葉集に、上つけの左野のくヽたちとよめり、薹心をいふ、莖立の義也、倭名鈔に蘴もよめり、拾遺集物名にも見え、夫木集に、薺のくきも立にけりともよめり、四季物語七種の一にも入れり、

〔萬葉集〕十四東歌　相聞

可美都氣野、左野乃九久多知、乎里波夜志、安禮波麻多牟惠、許登之許受登母、

右二十二首、〇二十首略　上野國歌、

〔拾遺和歌集〕七物名　くヽたち　すけみ

山たかみはなの色をもみるべきににくヽたちぬる春がすみ哉

〔延喜式〕三十九内膳　供奉雜菜

日別一斗、中略　莖立四把、自二月至四月、

〔西宮記〕正月　二日二宮大饗

王卿以下參本宮拜禮、中略　三獻飯汁、次舞樂、各二曲　莖立、包燒、蘇、甘栗、

〔江家次第〕二正月　大臣家大饗

四獻略〇中　次莖立、有精進

〔古今著聞集〕十八飲食　[illegible]信房弟子共、くヽたちを前にてゆでけるに、なべのはたよりくヽたちの葉の、

さがりたりけるを見て、其座に有ける人のいひける、

くヽたちのやいばにはたりて見ゆる哉、房主うち聞てつけける、

なまいてたれかつくりそめけん、めでたくこそつけられ侍れ、

〔年中恒例記〕正月十一日　蕓薹　薹立　例年水主備後守進上之、

二月廿四日　薹立、久我殿、日不定、

〔新撰字鏡〕(草)菘(息隆反、菜名、太加奈、)

〔本草和名〕(十八菜)菘(仁諝音嵩、蘇敬曰、不生北土、)牛肚菘、(葉大)紫菘、(葉薄)白菘、(似蔓菁、已上二名出蘇敬注、)一名多叢、一名鵝耳、一名牛耳、

一名百葉、(已上四名出兼名苑、)和名多加奈、

〔倭名類聚抄〕(十七菜)辛芥　方言云、趙魏之間、謂蕪菁為大芥、小者謂之辛芥、(音界、和名多加奈、)

〔箋注倭名類聚抄〕(九菜)原書卷三、作蕪菁趙魏之郊、謂之大芥、其小者謂之辛芥、本草和名引七卷食經、載大芥辛芥、在蔓菁條、則不載和名、而菘條云、和名太加奈、新撰字鏡菘同訓、源君不從之也、本草芥陶注云、似菘而有毛、味辣、好作葅、亦生食、蘇注云、葉大麤者葉堪食、葉小子細者葉不堪食、其子但堪為齏、爾雅翼所云葉大者、方言所言大芥、葉味辛子少辛味、今俗呼大葉芥、九州俗呼多加奈、讃岐俗呼止戈奈、亦多加奈之轉耳、其云葉小者、方言之辛芥、本草圖經之青芥、即陶氏所說者、今俗常用加良之也、而加良之下條舉食經辛菜為之、此宜標目作大芥、注五字在謂蕪菁為大芥之下、又按方言以大芥為蕪菁者、以類統言之耳、非若後人一々分剌也、

〔易林本節用集〕(草木)菘菜

〔多識編〕(三菜)菘古保禰、又云多賀那、今案字岐那、

〔和爾雅〕(七菜蔬)菘白菜(同)

〔物類稱呼〕(三生植)菘な　京にてみづな、又はたけなといふを、近江にてうきな、又ひやうすなと云、部にて京菜といふ、江戸にても水菜といふ有、(京都の水菜よりは、葉黒ずみて厚く廣し、京の水菜に及ばず、葛西菜、又小松川本所牛島邊の冬菜におゐては、京大坂にもなし、風味よく、さかしも一年の内絶ることなし、まことに名産也、)又關西にていふ間引菜と云を、江戸にてつまみなといふ、

西國にてをろのこ菜と云、(江戸田舍にて、國にても大根にても、おろのくと云と いへども、名付る時は、つまみ菜と云、しみ大根といふ、)

〔宜禁本草 乾五部〕菘菜 甘温無毒、爲常食、性和利人、子油傅頭長髮、塗劒不鏥、反甘草、北人種之、初一年半爲蕪菁、二年菘都絶、(菘子黒、蕪菁子紫赤、)大小相似、通利腸胃、除胸煩、解酒渴、消食、下氣止嗽、衍義曰、不若中虚人食之覺冷、

〔本朝食鑑 菜三〕菘(訓多加奈)

集解、菘葉圓厚微青、或葉闊薄面白、其葉皆淡青白色、略似蕪菁、狀最肥大、而厚味微辛如芥葉、菘子色灰黑、八月以後種之、二月開黄花、如芥花四瓣、三月結角亦如芥、今醃淹食、或搗爛合醋去滓和魚鱠、此號青醋、可以賞之、

〔農業全書 三菜〕菘(蕪菁に似て圓なり、京の書に何れも説に出せり、)うき菜と云、京都にてははたけ菜と云、田に蒔て溝に水をかけぬるを水菜と云、近江の兵主菜、田舍にて京菜と云、ほり入菜と訓ずるは誤なり、江戸菜は其根大根のごとく長し、其蒔やう、うへ樣共に蕪菁に同じ、其味蕪菁にまされり、菜の上品とす、其品類多しといへども、京都近江江戸にあるを尤よしとす、根大きなるあり、小きあり、藥中に甘草あるを服する人、菘を食すべからずと云、凡菘かぶらの類、庸醫しらずして、大根と同じく、地黄にいむと云あやまりなり、又菘の實の油をとりて刀劍にぬればさびず、

〔養生訓 飮食四〕菘は京都のはたけ菜、水菜、いなかの京菜なり、蕪の類なり、世俗あやまりてはいりなと訓ず、味よけれども性よからず、仲景曰、藥中に甘草ありて菘を食へば病除かず、根は九十月の比食へば味淡くして可也、うすく切てくらふべし、あつく切たるは氣をふさぐ、十一月以後胃虚の人くらへば滯塞す、

〔重修本草綱目啓蒙 菜辛十八〕菘 トウナ シロナ インゲンナ(略)〇中

形狀油菜ニ似テ、色淺ク葉最厚シテ筋白シ、醃藏ニ宜シ城州加茂ス。イ。ク。キ。ナモ菘ノ一種ニシテ、汝南圃史ノ梵菜ナリ、一種ヲ。ラ。ン。ダ。ナ葉長大ニシテ琵琶ノ形ノ如シ厚シテ白色ヲ帯ビ、甘藍(ハボタン)ノ形狀ニ似リ、年ヲ經ル者ハ高サ五六尺、葉皆枝梢ニ聚リテ、重葉牡丹花ノ形ノ如ク、冬月觀ニ堪タリ、其莖末粗ク本細シ、根ハ塊ナクシテ鬚アリ、故ニ苗大ナル者ハ倒レ易シ、春ハ叢葉中ヨリ莖ヲ抽デ、漸ク花形ナク成テ葉互生ス、油菜ニ後レテ花ヲ開ク、穗ノ形油菜ヨリ長大ナリ、花モ大ニシテ色淺ク、甘藍ノ如シ、花後莢ヲ結ブ、根枯レズ、枝ヲ採リ扦插シテ活シ易シ、是頌ノ說ノ牛肚菘ナリ、

〔長崎見聞錄 一〕唐。菜。　漢名菘

唐菜は長崎におふくあり、他國に移種るに、一年は生すといへども、次年變じて、其物にあらずとなん、京都にて作れる水菜を、他所にうつして出來ざるにひとしきなり、くきは漬て其味ひ美なるもの也、種を八月に下すべきなり、

高。菜。　漢名春不老

高菜是も長崎に多くありて、他所には逢ざる菜也、くき漬にして宜し、去かし唐菜には及ばざれども、唐菜のなき時分、春比より專らあり、或は油にていため、醬油にて煮食ふべし、

〔成形圖說 菜二十一〕安。袁。奈。古事記御菘菜なり、萬葉集には菁菘を訓り、凡菁菘の中、根の有無あり、様あるをば俗に蕪菁(カブラナ)と云、菘と蕪と本同類にして、葉の甘苦根の大小なる一間を隔つ故に、順鈔に蔓菁を安袁菜とす、誤れるとはいふべからず、○水(ミヅ)菜(ナ)(中略)他所にて是を京菜と呼ぶ、又近江菜、天王寺菜、下總菜等、皆同種にして小異あるのみぞ、○高(タカ)○菜(ナ)○冬(フユ)菜(ナ)○中略○白(シラ)○莖(クキ)○菜(ナ)本邦の産最勝れり、豐前にて平莖と稱べり、是圖經の白菘也、又沖縄に産するは葉極て廣く、烟草の大にて過ぐ、南人呼ていんしう菜といへり、○中略

凡春の初種を下し、三月に苗生て二葉なるを卵。割。菜と云、○中略又其二三寸延長をば鶯菜と云、鶯の來鳴頃に發生ればなり、凡は菜の細短なるを子(コ)菜(ナ)と稱べり、○中略京畿の水菜は、九條東寺の近郊

に產るを眞とせり、一本より數十莖を生じ、味淡美にして滓なし、春月を盛とす、關東にて小松菜といふは、取わけ下總國葛飾郡小松川に作る者名高し、莖嫩して微青く、味また美し、今本所龜井戸より隅田川邊に皆作れり、又本書の白莖菜は、莖扁大く、眞白し、味淡美にて雪霜を經し後は愈よろし、清人嘗て此ものを銀鷄菜と目けり、本草に二種ありといふは、此兩品の種なるべし、天王寺菜は、浪華わたりに名たゝるもの也、日野菜は、淡海日野の良產なり、莖柔にして根ふとく、紫色たり、畿內にて冬月その根をつらね用ひ、或は莖菜を陰乾にし收藏む、名て懸菜とも、乾菜ともいふ、又臙脂にそきぬるを紫蕪と云、京菜殊に美く、年を經しは愈よろし、近江にてつけるを近江蕪とす、風雅賞すべし、◯中略又關西に鶯入菜あり、北陸に三月菜と呼び、關東にて蕪菜といふ、實は同種なり、晩菘あり、葉の色深綠に光あり、味いとすぐれたり、◯中略紫菘は葉色紫なり、又牡丹菜或は和蘭菜と云あり、根は地上に抽て幹立し葉綠色にして厚く嫩く、白粉を施しが如し、和蘭地方の葉色皆ちかり、又一種和蘭菜あり、葉細尖り、薑に近く兩岐あり、之を折れば白汁出り、されど菘類に非ず、

〔延喜式 內膳 三十九〕漬年料雜菜

菘葅三石（一斗醬二升四升、稀一斗五升、）◯中略　右漬秋菜料

〔古事記 仁德 下〕於是天皇戀其黑日賣、欺大后曰、欲見淡道島而、幸行之時、◯中略乃自其島傳而、幸行吉備國、爾黑日賣令大坐其國之山方地而、獻大御飯、於是爲煮大御羹、採其地之菘菜時、天皇到坐其孃子之採菘處、歌曰、夜麻賀多邇、麻岐流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦、

〔古事記傳 三十五〕菘菜は、阿袁那と訓べし、卽御歌に見ゆ、◯中略今世に云菜なり、今も青菜と云なり、那と云は、凡て魚菜の總名なる故に、菘をば古は分て、阿袁那と云しなり、今は菘に限りて、那とはいふなり、

〔年中行事秘抄 正月〕上子日內藏司供若菜事◯中略

十二種若菜

若菜　薊　苣　芹　蕨　薺　葵　芝　蓬　水蓼　水雲　松（菘、河海、）

白河院仰云、松字如何、師遠申云、若松菘、上皇被仰云、相具松進上、此儀事也、（事談、和名、古保讓、）

〔河海抄〕（十三若菜）十二種若菜　若菜　薊　苣　芹　蕨　薺　葵　蓬　水蓼　水雲　芝（アヲミ）　菘

此中菘ハ樣々ノ說あり、白河院に松を奉りける人有ける例事也と仰あり、大外記師遠は小。大。根。のよし申ける說を用られ候由、舊記に見ゆ、

〔雍州府志〕（六土產）水。菜。　東寺九條邊專種之、元不用糞穢、而引入流水於畦間耳、故稱水。入。菜。或謂麻。倶。利。菜。倭俗每物擣畫謂麻倶留、農民採此菜自田地之本至田末、次第麻久利登留、凡此菜成熟後、不堪久用之故然、○中略勢多判官家傾在九條、每年載水菜於籠、插梅花於其上、獻禁裏院中、近年東寺僧亦破生竹插水菜、以藤蔓約束之、贈人家、

〔浪花の風〕また二日○正月は、未明より水。菜。を賣ありくこと、市中置し、是二日はすまし雜煮故なり、

〔續山の井〕（春上）鶯菜付水菜

花ならで籠にへたる水菜哉　越前府　玄甫

〔一話一言〕（二十八）京大坂江戶の名物を讀侍る狂歌

京　水　水菜　女　染物　みすや針　御寺　豆腐に　鰻（ウナギ）鱧　松茸

〔常憲院殿御實紀〕（八）天和三年十二月八日、此日南山の靈廟に京。菜。を進薦せらる、

〔毛吹草〕（三）山城　水菜　近江　兵。主。菜。

〔妙法寺記〕（下）永祿二（己未）　同年四月十五日、大氷降、夕顏茄子麻稗、殊ニ鶯。菜。悉打折、何モ無シ、大麥ハ半分コボシ候、

〔續山の井〕（春上）鶯菜

こながきにきつて〳〵や雪菜　　可全

ゆふ垣の竹にそだつや雪菜　　松譽

〔續江戸砂子〕〔一〕江府名產并近在近郊

○葛西菜○　かさいは淺草川より東の總名也、前は下總の内なり、近年武藏に屬す、江府より二里三里ひがし也、此所の菘いたつてやはらかに、天然と甘みあり、他國になき嘉品なり、成人菜を好んで、諸州の菘を食ふ、京東寺の水菜、大坂天王寺菜、江州日野菜など食くらぶるに、葛西菜にまさるはなしといへり、

〔視聽草四集八〕巨菜○

私當分御預所下總國相馬郡押付新田百姓長左衛門居宅より、村往還道を境貳拾間餘相隔候、同人持畑桧杉苗木植置候畑縁へ、自然に菜一本生候處、根の處にて大さ貳尺廻りも有之、丈凡六尺程にて、左右大枝五本何れも六七寸廻りも有之、莖の處にて枝開、貳間四方に相成、三月下旬花咲候處、花色幷輪大とも通例にて、當時實を結び候處、是又並の菜種に相替る儀無之、然る處生立方は通例に無之段を以、承傳、此節に相成、近村には勿論、遠方より見物に罷越候ものも有之、日々人集候儀と訴出申候、大勢集候儀は不宜候に付、追々見物に罷越候者有之候とも、決て場所え不立入樣申付、菜種實入候はゞ拔捨候樣可申付哉、依之食繪圖相添、此段奉伺候、以上、

村垣淡路守

御勘定奉行

戌五月

伊奈友之助

右之通、伊奈友之助相伺候に付伺之通申渡候、依之此段御屆申上候、以上、

戌五月

芥

〔甲子夜話一〕神祖武州川邊御放鷹ノ時、小庵ニ立寄セ給フ、住僧出テ迎ヘ奉ル、野僧ノ質朴ヤ御意ニ叶ケン、御話ノ御相手トナリテ、頗御喜色ナリ、稍アリテ僧申上ルハ、庵貧クシテモトヨリ名モナシ、寘ハ寺號山號ヲ賜リタシト言上シケレバ、神祖其邊ヲ見渡シ玉フニ、簷ニ干。菜。ヲ繩ニ貫テ、ソノ數十掛置タルヲ熟視シ玉ヒ、干菜山十連寺ト稱スベシトノ仰ニテ、寺領ノ御朱印ヲサヘ賜シトゾ、

〔三十二番職人歌合〕十六番　左持　なうう
春がすみにくゝたちぬる花のかげにうるや菜さうも心あらなむ

三十二番　左勝　なうり
さだめをく宿もなさうのあさ夕にかよふ内野の道のくるしさ

〔本草和名十八菜〕芥又有貲、楊玄操音責、出陶景注、白芥子、出蘇敬注、鼠芥、鼠食其花而皮毛皆頑落、故以名之、(鼠頑髮)雀芥、雀食其子而能飛翔、故以名之、已上二名出崔禹、和名加。良。之。

〔倭名類聚抄十七菜〕辛菜　崔禹錫食經云、又有辛菜、和名貲良之、俗用芥子、根細而甚辛、薫好通口鼻之氣、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕按說文芥、菜也、又本草菜部有芥、上文辛芥條詳引之、輔仁曰、和名加良之、本書飲食部鹽梅類、亦引本草載之、此云俗用者非是、○中略本草和名溫菘條云、又有䓑菜、根細而味辛、出崔禹、不載和名、此所引蓋是、而辛作䓑爲異、但䓑字諸書無見、按本草蕪菁條陶注云、又有䓑、根細而過辛、崔氏所云根細而甚辛者、蓋此、本草和名引作䓑䓑、字䓑字皆無見、輔仁載仁諝音勞、依仁諝所音則似可從牢作䓑、崔氏辛菜䓑菜亦蓋䓑菜之譌、然䓑亦未見所出、無知適從、又按本草拾遺載獐菜云、猪孝切、引字林云、獐辛菜南人食之、去冷氣、李時珍曰、今攷唐韻玉篇無獐字、止有獐字、云辛菜也、則獐乃獐之訛爾、食經辛菜豈非謂此耶、小野氏曰、獐菜今俗呼以奴加良之、本書飲食部、源君依輔仁訓芥爲加良之爲允、此訓辛菜爲加良之不穩、

〔倭名類聚抄 十七菜蔬〕芥　本草云、芥音介、和名加良之、味辛歸鼻者也、

〔類聚名義抄 八〕辛菜カラシ　芥　芥下正音介カラシ　辛芥トカナ　芥子

〔伊呂波字類抄 加植物〕芥カラシ、俗用之、　辛菜　俗已上同　有實 出陶景注　白芥子 出蘇敬注

蜀芥 蜀人食其花、胡戎亦用之、　蕃芥 名出胡地、又出蜀地、故以名之、已上二名カラシ見本草

〔下學集 下草木〕辛芥　白芥子 異名、又芥子、實如黄粟也、

〔易林本節用集 加草木〕芥子　〔同 比草木〕白芥子 異名、花白也、

〔和爾雅 七菜蔬〕芥 芥也　芥子 芥種　白芥 胡芥、蜀芥同、

〔倭訓栞 前編六加〕からし〇中略　芥子は辛きもの也、倭名鈔に、辛菜をよめり、しろからしは白芥也、江戸からしともいふ、

〔本朝食鑑 三菜〕芥 訓加良志

釋名、辛菜 源順曰、和名賀良之、俗用芥子、稱謂亦有辛菜、蓋辛而好者謂之芥、能辛通鼻之氣、辛大(平野)

集解、芥有數種、俱似菘有柔毛、葉深青者曰青芥、此所常用之芥也、有大葉皺紋色深綠者、李氏所謂大芥也、二芥辛辣俱可用、冬春夏三時有之、芥心作薹、高三月開花、黄色四出、結莢一二寸、子大如蘇子、而色赤紫、味甚辛辣、二芥葉莖又子俱作蔬食、又有葉如青芥、多缺剗如蘿蔔、又有葉紫如蘇者、又有低小而葉莖硬者、此三芥亦爲蔬食、不及前之二芥也、一種有白芥者、大抵似芥、而葉剗缺有丫、青白色、莖易起而中空、性脆、最畏狂風大雪、可謹護之、三月開黄花、香郁、結角如芥角、其子大如粱米、黄白色、此亦與芥同種、其下種采收亦同時、須人藥用也、本邦古者用芥子者少、和名惟言菜、今用菜者少、惟用芥子者多、而食魚膾茄蔬者、必以芥子而和者不少、言能解魚毒進食興、

〔和漢三才圖會 九十九草〕白芥子　胡芥　蜀芥

本綱、白芥子種來自胡戎而盛於蜀、今處處可種、八九月下種、冬生至春深、莖高二三尺、其葉花而有丫、

如花芥葉青白色、莖易起而中空、性脆最畏狂風大雪、三月開黃花、香郁結角、如芥角、其子大如粱米、黃白色、

有一種、莖大而中實者尤高、其子亦大、此菜雖是芥類、別種也、然入藥勝於芥子、

〔重修本草綱目啓蒙十八 葷辛〕芥 カラシ ○中略

葉油菜ニ似テ小ク、鋸齒細ク、皺紋多シ、花實油菜ヨリ小ナリ、品類多シ、時珍ノ說、青芥ハ常芥ナリ、大芥ハオホガラシ、一名オホバガラシ、トクワカナ、備州 タカナ、九州 葉長大ニシテ二尺許深綠色、上巳ノ艾餻多クコノ葉ヲ雜ヘテ色ヲ助ク、葉ヲ煮レバ臭氣アリテ葱ノ如シ、子ハ辛味少クシテ葉ハ辛シ、一名春不老、河間府志 八斤菜、群芳譜 芊芥菜、盛京通志 萬年青、圖書名多シ、同 馬芥ハ詳ナラズ、花芥ハイラナ、葉微紫色、周邊ニ細碎缺刻多シ、華亭縣志ニ紫花芥ト云飲食集ニ花葉芥ト云、一種大葉ニシテ周邊ノ缺刻、極テ深細ナル者ヲ、俗ニシユンプラント云、一名チリメンナ、紀州 八丈ナ、勢州 ソデナ、同上 是亦花芥ナリ、紫芥ハムラサキガラシ、一名アカガラシ、常芥ノ形ニシテ紫色ナル者ナリ、

白芥 シロガラシ 江戶ガラシ 一名白胡芥、圖書

形狀芥菜ニ同クシテ、只苗微白ヲ帶ブ、子色黃ナリ、藥ニハコレヲ用ユ、

〔延喜式五 齋宮〕月料小月、物別減廿分之一、

芥子、堅魚煎汁各三升、

〔延喜式二十四 主計〕凡中男一人輸作物、○中略 山薑、芥子各二升、

〔延喜式三十九 內膳〕供御月料

芥子、豉各四升五合、

〔農業全書三 菜〕芥

からし此たねも色々あり、先青紫白の三色あり、又高ながらしとて、莖甚高く、枝葉ことの外さか

へ、葉の廣き事芭蕉のごとし、うゆる法、八月苗地を度々打返し、能こやし薄く蒔、しげき所は間引き、中をかきあざり、糞水を時々そゝぎ、苗四五すばかりの時、肥地を畦作りし、横筋を切、其間一尺ばかりに一本づゝうへ、濃糞をかけ、灰糞其外水糞など、力の及びいか程もそゝぐべし、冬春葉をかき、清く洗ひ乾し、水氣なくなりて後こもに包み、四五日もむし、少々色付たる時取出し、鹽漬にし食すべし、春月農家膳に用ひて、食味を助くべし、くゝたちを折取て漬たるは猶宜し、されども子をおほくとらんとならば、くゝたちは折べからず、四五月よく實りたる時、刈干てもみ取べし、但すりがらしには、葉のひろきはよからず、常に料理に用るには、葉せばく其實紫と白きが實多して味もからし、鱠種には白きを用ゆ、又二月芥菜をうへて、葉をかき食し、五月諸菜皆かれたる時も、是はよくさかへて、菜の絶間を用るゆへ、人數多き家は、取分是と圭とをおほく作るべし、中にも芥菜は菜に用るのみならず、料理の餘りは子も油となすべし、是兩樣の利潤あり、作るべし、

〔宜禁本草乾集五菜〕芥菜　辛溫、似菘而有毛、名青芥、紫葉者名紫芥、多作鹽食之、粗大色如白粱米、辛美名白芥、香辣歸鼻、多食動氣、患心疼、忌兎肉生瘡、忌鯽魚水腫、凡芥醬醒酒、能破血發痼風、

辣芥子　辛溫無毒、歸鼻除腎邪氣、利九竅、明耳目、安中、葉（久食動氣、生食發丹石、）不可多食、反兎肉、惡蟻子、治風麗痲痺、醋研傅、能通利五臟、多食動風、左傳（鬪雞、季氏金其、郈氏芥其羽、）

〔和漢三才圖會葷草九十九〕芥菜○中略

按辛菜、今唐人謂芥辣、倭食素餠蕎麥必用之物、四月其角莢熟半枯時、刈之取子、晒乾碎末、篩去皮收之用時盛盞隔紙上注水、浸芥粉則甚辣、合醋未醬、和魚膾最良、或有用芥青葉合醋和魚膾（俗云阿乎乃太）亦可、往往有鯽膾亦用之者、而辣不善害、合食禁不可不知、

豉久煮、　用芥子粉研爛貼腳脛成瘡際有効、其痃微爛、又典籍云、芥末水調塗頂額止衄血、

白芥子○中略

白芥子辛温　能入肺能發散、故有利氣豁痰、温中開胃、散痛消腫、辟悪邪之功、痰在脇下及皮裏膜外、非白芥子不能達、凡腫毒初起、用白芥子末醋調塗之、

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文
貞觀三年歳次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、○中略
一僧供　導師一人供料○中略　芥子三升○中略　法用千僧供　一人料○中略　芥子一合

〔大草家料理書〕一鹽鮑をあへるは、けし豆腐を擂合て、貝の鹽を水にて出してあへる也、○中略　又青くあゆるは青辛しを火取てまずる也、
一のたあへ鱠は、○中略　ひとしほ青くするは、青辛たて擂交り吉也、

〔源氏物語五十三手習〕この人○浮舟は猶いとよはげなり、みちのほどもいかゞものし給はん、いと心ぐるしきこと、いひあへり、車ふたつして、おい人○僧都のり給へるには、つかうまつるあまふたり、つぎのには此人○浮舟をふせて、かたはらにいまひとりのりそひて、道すがら行もやらず車とめて、ゆ参りなどし給ひ、ひえさか本に、を野といふ所にぞすみ給ける、○中略　河にながしてよといひし一言よりほかに、物もさらにの給はねば、いとおぼつかなく思て、いつしか人にもなしてみんと思ふに、つく〴〵としておきあがるよもなく、いとあやしうのみものし給へば、つゐにいくまじき人にやとおもひながら、うちすてんもいとおしういみじ、事がたりもし出て、はじめよりいのらせしあざりにも、忍びやかにけしやくことせさせ給ふ、

〔倭訓栞中編七〕けしのか　源氏にみゆ、芥子の香也、護摩供をいふ、蜻蛉日記に、けしやきともいへり、魔怨などを降伏するには、白芥子など用うといへり、

○按ズルニ、芥子燒ノ事ハ、宗敎部修法篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔毛吹草 三〕越後 白茎 筑後 茎

〔本草和名 十八〕蕓薹、〈仁諝作芸字〉和名乎知、

〔倭名類聚抄 十七 野菜類〕蕓薹 本草云、蕓薹、〈芸臺二音、和名乎知、〉味辛、温無毒、七巻食經云、蕓薹宜煮噉之、

〔類聚名義抄 八 艸〕蕓薹 〈音雲臺、ヲチ、〉二音、 蕓薹 〈音云臺、ヲチ、〉

〔和爾雅 七 蔬菜〕蕓薹 〈油菜、寒菜、胡菜、臺菜、同、〉

〔東雅 十三 穀蔬〕蕓青 〈略○中〉 倭名鈔に蕓薹ヲチと註せしに、即今ナ̊タ̊ネ̊といひて、其子を搾して油となすもの、李東璧本草に、油菜といひし是也、ヲチといふ義は不詳、

〔重修本草綱目啓蒙 二十八 菜〕蕓薹 ア̊ブ̊ラ̊ナ̊ 〈略○中〉 秋分ニ蒔ヘ、春ニ至テ薹ヲ抽テ、二三月黄花ヲ開ク、四瓣未ダ花ヲ開カザル已前ニ、中心ヲ摘ミ食用トス、時珍多春採薹心爲茹ト云フ是ナリ、薹心ヲ菜汞〈[illegible]〉ト云、古名クヽダチ、一名クキダチ、〈和名鈔〉フダ、〈同上〉中心ヲ摘ムハ枝ヲ多ク出シ、花實多カラシメンガ爲ナリ、正字通ニ摘心爲菜茹、其旁心結子可搾油ト云、四月ニ至テ子熟ス、ナタネト呼ブ、搾テ油トナスヲ、ナタネノアブラト云フ、附方ニ菜子油ト云フ、一種京ニテハ̊タ̊ケ̊ナ̊ト呼ブモノアリ、和方書ニ眞菜ト云、ソノ形状アブラナト同シク色淺シ、又油ヲ採ルベシ、蕓薹ノ一種ナリ、

〔延喜式 三十二 大膳上〕園韓神祭雜給料〈春冬同〉

蕓薹二斗

〔延喜式 三十三 大膳下〕正月最勝王經齋會供養料、〈略○中〉僧別日菜料、〈略○中〉蕓薹二合、

〔薩藩舊記 後編十七〕島津氏文書

一貳千人

から島の内一城

薩摩侍従 〈略○中〉

一壹石五斗　なたね〇中略

文祿二年七月廿七日　御朱印〇豊臣秀吉

薩摩侍從どのへ

〔德川禁令考五十八菜種及水油〕享保十二未年五月

菜種買問屋之儀町觸

菜種之儀、今度中橋廣小路大和屋七郎左衞門ニ買問屋被仰付、在々より作出候菜種、不殘右七郎左衞門方江賣渡申筈候、町々ニ而菜種商賣仕候ものは勿論、向後七郎左衞門より外江一切賣渡申間敷候、此旨町中不殘可被相觸候、以上、

五月

〔有德院殿御實紀五十七〕寬保三年二月廿二日、令せられしは、諸國にてつくりし菜種は、大坂に漕運せしが、近年數すくなきをもて、水油のあたひたかく、諸民のなやみとなれり、國々數多く菜種をうへ、かしこにはこぶべし、江尾勢參濃豆相の七州は、舊により直に江戶に送るべし、また中國四國西國攝州兵庫西宮紀伊の國々は、江戶に積送る事をとゞめ、大坂に送るべしとなり、日記年錄

〔浪花の風〕菜種は一石に付、大槪油屋にて買入の直段、百匁より百十二三匁位なり、尤年の豐凶出來方にて高下あり、此一石の種にて、油に絞り二斗二升程になるよしなり、

〔農業全書三菜〕油菜

油菜一名は蕓薹、又胡菜と云、其始だつたんより來る、ゆへに胡菜と云となり、其葉甚かぶらな水なに同じ、能こやしても、その根大きにはならず、又其味もおとれり、されども田圃に蒔て榮へ安く、虫も食はず子多し、油を搾に利多きゆへ、農民多く作る、三月黄花をひらき、さながら廣き田野に、黄なる絹をしけるがごとし、其實り麥に先立て熟し、跡の地早くあきて、藍其外夏物を作るに便よし、總じて麥ばかり

多く作りぬれば刈取事一度につどひ、跡のこなしも一同に仕廻なりがたき考をなし、油菜を作るは一つの手立なり、右のゆへ所により、麥の三ヶ一は油菜を種る里もあり、是を作る法かぶらなに同じ、但秋より地をこしらへ養して、苗をまたて置、十月の比刈の田畠に移し種たるは、よくさかへて子多し、されども農人いとまなくして、苗種ならざるは力なし、蒔付にすべし、またかれども苗うへの利多き事を考へまるべし、かぶらな水なも、皆その子に油あり、されども油菜の葉へ安くして、子ゐはきにまかず、

〔新撰字鏡 草〕薺(徂禮反、疾○藶○苜○葵○豆○葵、又支紋○弁○) 蒿(子禮反、豆葵、山精、) 𦯬(?)葶藶(三字奈豆奈)

〔本草和名 十八〕薺(靡薺、菥蓂小薺、陶景注云、菥蓂大薺、) 胡薺(靡草実) 一名老薺(已上五名出二雜要訣一) 一名狗薺、一名草(音貴、已上出二兼名苑一、)和名奈都奈、

〔倭名類聚抄 十七菜蔬〕薺 崔禹錫食經云、薺(在禮反、上聲之重、和名奈都奈、)蒸煮噉之、

〔伊呂波字類抄 奈殖物〕薺ナツナ 蘼(同) 靡草 蒫(薺實也) 葶薺(小薺) 菥蓂(大薺、食二其葉一、故以名レ之、) 胡薺(靡草実) 大薺(薺細) 老薺(已上五名出二雜要訣一) 狗薺 草(音貴、已上七名ナツナ、見二本草一、)

〔易林本節用集 奈草木〕薺(ナヅナ)菜(ナヅナ)

〔和爾雅 七菜蔬〕薺(草○薺、同上) 菥蓂(オホナヅナ)(大薺、大蕺、馬辛、並同、)

〔日本釋名 下草〕葶藶(ナツナ) 夏無ナ也、此草秋生じ春さかへ、夏かる、故、秋冬春はありて夏はなき也、なつのつの字清濁通用す、和語に例おほし、

〔東雅 十三草卉〕薺ナヅナ 義詳ならず、葶藶をも亦アシナヅナといふなり、此草は一名狗薺といひて、平澤田野の間に生ずと見えたれば、アシとは莅草の類なるをいふに似たり、今俗にイヌナヅナといふは即狗薺也、

〔倭訓栞 前編 十九奈〕なづな 薺をよめり、撫菜の義、愛する意成べし、新撰字鏡に、甘なづなとよめり、

又薺をなづなとよめるは心得がたし、

〔古今要覽稿菜蔬〕なづな〇中略

正誤〇中略

按になでしこのなでは、いかにも愛する意なるべけれども、なづなのなづも、それと同じ意とせしは心得がたし、もしその讀を主張していはゞ、なづなは撫菜にて、齋宮の忌詞に、打を撫といへり、此菜を七日の粥料に用ゆるには、俎板の上に載て、打はやすものなれば、打菜といふべきを、なづなといひしは、かならず命名者の心せし名なるべしなどいはんに、たしかなるべきにや、

〔枕草子三〕草は

なづな、ならしばいとおかし、

〔曾根好忠集〕三月をはり

みそのふのなづなのくきも立にけり今朝の朝なに何をつまゝし

〔散木弃謌集一春〕人のもとへわかなにそへてつかはしける

君がため夜ごしにつめるなゝ草のなづなの花を見てしのびませ

〔本朝食鑑三菜部〕薺和名訓奈都那、今亦同、

集解、薺有大小、而一物也、但大者有毛爾、處處田野庭園俱多有之、冬至後生苗、其葉著地形如蒲公、而葉尖有深刻鋸齒向下、采之作蔬茹、二三月生莖五六寸、開細白花、整整如一、結莢如小萍、有三角、莢內細子如葶藶子、本邦正月七日會、七種菜粥、以薺爲一種、近世用薺菜餅子作粥、是未識何用也、

〔本朝食鑑三華和異同〕薺

今所用之薺者、李時珍所謂小薺也、或曰、近代以薺子爲葶藶子者訛焉、事詳于綱目、

〔農業全書四菜〕薺なづな

本草に多年の根苗を生ず、二三月に叢出て、四月に子を結ぶとあり、是は種ずして、田畠之内又道のほとりなどにも、そのづから多く生ず、羹とし、あへ物ひたし物に用ひてよし、東坡甚賞せし物也、種子を取蒔たるは殊更うるはしく、味もよし、

〔重修本草綱目啓蒙十九菜〕薺　ナヅナ。バチグサ。古歌　メナヅナ。奥州　シヤミセングサ。スモ
トリグサ。讃岐　ペンペングサ。江戸　ピンピングサ。雲州　ムシツリグサ。仙臺　カニトリグサ。
サ。中略

秋時子生ズ、其苗地ニ就テ叢生ス、葉ハ蒲公英ニ似テ、岐ゴトニ一角アリ、又多岐ナル者アリ、又岐ナクシテ水芥菜ノ葉ノ如キ者アリ、正二月薹ヲ抽テ花ヲ生ズ、暖地ニテハ十二月ニ花ヲ開ク、穗長ク花小ク、四瓣白色、後莢ヲ結ブ、三稜ノ撥ノ形ノ如シ、熟シテ根苗共ニ枯ル、河邊ノ沙地ニ生ジ、最瘠小ナル者ヲ沙薺ト云、

〔長生療養方一菜蔬功能〕薺　利肝氣、和中、益氣、人食之益氣、

〔宜禁本草乾五菜〕薺菜　甘温無毒、發痼疾、動氣、與麪同食背悶、利肝氣、和中、利五臟、根療目疼、取汁點目中、實明目、去目瞖、甘平、陳士良云、實呼菥蓂子、去風毒邪氣、明目去障瞖、久食視物鮮明、四月八日收實良、

〔延喜式內膳三十九〕供奉雜菜
日別一斗、○中略　薺四升、正二十一十二月

〔年中行事秘抄正月〕上子日内藏司供若菜事
内膳司同供之十二種若菜
若菜　薊　苣芹　蕨　薺。　葵　芝　蓬　水蓼　水雲　松　○菘、河蓴、中略
七種菜

葶藶

薺。　蘩蔞　芹　菁　御形　須々代　佛座

〔執政所抄正月上〕二日臨時客

御料次第略〇中　六獻薺。汁。　根笋　可用韮、近代否之歟、

七日

御干飯并七種御菜事

御飯　御炊上　御菜　薺、萱、菘、薺。芹、蘩蔞、索苣、薑蕃、味曾、鹽、糟、

〔世事百談〕薺を行燈につりて蟲除とす

物類相感志に、三月三日收薺菜花置燈檠上、則飛蛾蚊蟲不投といふことあるは、吾邦のならはしに、四月八日薺をとりて、行燈につり置きて蟲よけとするに似たり、

〔新撰字鏡草〕葶藶上地經反、下力亦反、波〇万〇太〇加〇奈、在二薺類一、　葶藶子波万太加奈

〔本草和名草十〕葶藶一名大室、一名大適楊玄操音釋　一名丁歷一名䔿仁諝音典　一名公薺葶也、出陶景注一名丁樂、一名狗薺出二陶景注一　和名波末多加奈、一名阿。之。奈。都。奈、一名波。末。世。利、

〔倭名類聚抄二十草木〕葶藶子　本草云、葶藶子、和名波末太加奈、一云阿之奈豆奈、又云波末世利、

〔醫心方一〕葶藶和名波末多加奈、又波万世利、又阿之奈都奈、

〔類聚名義抄八艸〕葶藶ハマタカナ歟　䔿葶音典、葶、葶藶類名、俗音誤、ハマタカナ、ハマ、

〔大和本草六草〕葶藶　ナヅナノ類也、薺ヨリ大ナリ、葉似薺、三四月細黄花ヲ開ク、甜苦二種アリ、甜ハ味ヨシ、薺ニマサレリ、可食、四月ニモ不老、柔軟ナリ、其實ハヒラクシテ圓シ、

〔古名錄四十野草〕阿之奈都奈

今案、古ハ遣唐使モアリテ、本朝藥ヲ採用コト不誤見エタリ、後世ニ至、謬ニアシナヅナヲ葶藶トシテ、味微辛ト啓蒙ニ強說ヲナス、アシナヅナハ辛味ナシ、卽甜葶藶也、延喜式ニ葶藶ヲハマガラ

シト傍訓シ、本草和名ニ波末多加良ト云者ハ今俗云ルク°デ°ラ°グ°サ°也、此草海濱ニ多ク生ズ、故ニ鯨草ノ名アリ、字鏡ニ波万太加良在海濱ト云此也、秋後ヨリ苗ヲ生ジ、春ニ至リテ葉蘩蔞ノ如ク ニシテ、岐細ニシテ青、蒿葉ノ如ク白ヲ帶ブ秋也、春高サ二三尺ニ至リ、莖圓ク葉互生シ、梢ニ小黄花ヲ開ク、薺花ニ似タリ、花後莢ヲ結ブ、油菜莢ニ似テ細ク小也、内ニ黄赤褐色ノ子アリ、アレナブナノ子ニ三倍ス、味苦辛ニシテ芥子ノ如シ、即葶藶此也、

〔拾遺和歌集十六雜春〕女のもとに、なづなの花につけてつかはしける、　藤原長能

雪をうすみかきねにつめるからなづななづさはまくのほしき君哉

〔拾遺抄註顯昭〕カラナヅナトハ、葶ノ異ヲ讀ナリ、信馬藥云、ニハニオフルカラナヅナハヨキナナリト云歌ヲオモヘリ、ナヅナハマクノホシキトハ、ナヅナハマホシト云ナリ、

〔古今要覽稿草木〕あしなづな略〇中

からなづな、拾遺和歌集、[illegible]集、[illegible]に、神農本經に、葶藶味辛といひ、新撰字鏡に薺をあまなづなとよめり、されば、からなづなとは、甘なづなの反對なれば、いかにも葶藶をさしていひしものなるべし。

〔醫經太素下〕葶藶子　大冷味苦辛

紙ニ包テ、アツ灰ニ埋テ用、能瀉肺、除實、止嗽、用爲良藥、何下水消浮腫、並利膀胱及小腸、

〔延喜式三十七典藥〕臘月御藥　犀角丸六劑、略〇中所須、略〇中葶藶子九兩、

中宮臘月御藥　四味理中丸、略〇中所須、略〇中葶藶子二兩、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、略〇中葶藶子蓼子蜀椒各三升、尾張國卅六種、略〇中葶藶子二升、駿河國十七種、略〇中葶藶子二升、甲斐國十二種、略〇中葶藶子五升、相模國卅二種、略〇中葶藶子五合、武藏國廿八種、略〇中決明子、牡荊子葶藶子各三斗、美濃國六十二種、略〇中葶藶子五升、

山葵名稱

〔本草和名　十八菜〕山葵　葉似葵、故名之、生深山、出崔禹、龍珠　實名也、出孟詵、和名和佐比、

〔倭名類聚抄　十六蘆菜〕山葵　養生秘要云、山葵　和名和佐比、漢語抄用山薑二字、今案所出未詳、　補益食也、

〔類聚名義抄　八艸〕山葵　ワサヒ　山薑　ワサヒ

〔伊呂波字類抄　和植物附殖物具〕山葵　ワサヒ　龍珠　同　山薑　同、俗用之、

〔下學集　下草木〕山葵　ワサヒ

〔易林本節用集　和草木〕山葵　ワサヒ

〔東雅　十三穀蔬〕薑　○中略　倭名鈔に、養生秘要を引て、山葵はワサビ、漢語抄に山薑の字を用ゆ、今按ずるに、所出未詳と見えたり、或人の説に、ワサビといふものは、薜茱一に辣米菜といふもの是也といふなり、ワサビといふ義詳ならず、漢語抄に山薑と見えしは、ヤマハジカミといふ事はありけん、薜茱の事は、亡友稲若水の說也、其說見えければ、こゝには注せず、

〔本朝食鑑　三菜辛〕山葵　訓和佐比、

釋名、山薑（中略）必大（平野）按、山葵似賀茂神山之葵、故名耶、山薑因根狀而名耶、

集解、山葵處處所在有之、家園多種之、四時俱采根、二月下種、或植舊根、三四月生苗葉、似冬葵及蕗而厚圓、色深青有細毛、六七月作穗二三寸、開細黃白花、結子極細、種子不如種根、冬月最宜采根、其根似良薑舊根、而根皮青黑多瘟、有短鬚、其肉綠碧而微粘有香、其味辛辣不減芥子、其所用者可隨所宜耳、

山葵利用

〔令義解　三賦役〕凡調、○中略　其調副物、○註略　正丁一人、○中略　山薑一升、

〔延喜式　二十四主計〕凡中男一人輸作物、○中略　山薑芥子各二升、

〔厨事類記〕汁實

今案、汁實盛于別坏、可居加之、但供寒汁之時、汁實　興利　○山薑　夏善　板目鹽都呂々　寒頃　橘葉等盛同盤、居加之、

山葵產地

〔四條流庖丁書〕一アシ味之事、鯉ハワサビズ、鯛ハ生姜ズ、鱸ナラバ蓼ズ、フカハミカラシノス、エイモミカラシノス、王餘魚ハヌタズ、

〔延喜式 三十九 內膳〕年料、

若狹國(中略)山薑一斗五升三度○中略　越前國(中略)山薑一斗五升三度○中略　丹後國(中略)山薑一斗五升三度○中略　但馬國(中略)山薑一斗五升三度○中略

因幡國(中略)山薑一斗五升三度○中略

右諸國所貢、並依前件、仍收倉儲、擬供御、

〔延喜式 二十四 主計〕凡諸國進納調庸(○中略)山薑二斗、以上

〔播磨風土記 宍禾郡〕波加村、占國之時、天日槍命先到此處、伊和大神後到、(中略)其山生檜、枌、檀、黑葛、山薑等、住狼熊、

〔毛吹草 三〕安藝　新城山葵

〔國花萬葉記 十 近江〕近江國郡名物出所之部

山葵　膽吹

〔增訂豆州志稿 七 土產〕山葵　增天城山中及其支脈ノ溪谷ニ產ス、狩野大見兩鄉最多シ、葉ハ葵ノ如ク、塊莖石菖等ノ根ニ似テ差大ナリ、根ヲ食料トス、味辛クシテ美ナリ、是本州屈指ノ產物ニシテ、年々各地ニ輸送スル者少カラズ、州產全國ニ冠絶スト云、從來天城山中ニ自生ノ者アリシヲ、明和中、湯ケ島村ノ人板垣勘四郎ナル者、始テ之ヲ試作シ、爾來大ニ繁殖スト云、(勘四郎駿州阿倍郡有東木村ニ於テ山葵ヲ栽ルヲ見、乃天城山中岩尾ト云處ニ之ヲ試作シ、好結果ヲ得タリト云、)

〔藝備國郡志 安藝 上 土產〕和佐比　其形似生姜、其味如白芥、磨加魚膾、又和鳥羹、中華之書未見其名、恐本草綱目所載山葵姜之類乎、磨入蕎麥麵亦可也、京師之所用多出山縣郡木坂村云云、

蔊菜

〔重修本草綱目啓蒙 十八 葷辛〕蔊菜　イヌガラシ　タガラシ大和　ノガラシ勢州　キツネノカラシ

同上　アゼダイコン　ハタダイコン仙臺　アゼガラシ大坂　ゴボウナ江州　一名水芥菜

甘藍

〔救荒本草〕山芥菜 同上

水邊ニ多ク生ズ、葉ハ芥ノ葉ニ似テ小シ互生ス、苗高サ一尺餘、小ナル者ハ數寸、春枝梢ゴトニ小穗ヲナシ花ヲ開ク、極メテ小クシテ四瓣、形薺花ノ如シ、黄色、後小莢ヲ結ブ、砕米薺（タガラシ）莢ノ如シ、莢苗皆辛味アリ、遲ク生ズル者ハ後テ花開ク、故ニ四時皆花アリ、

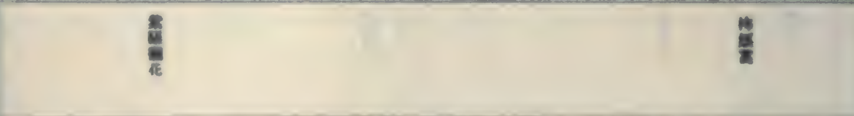
〔重修本草綱目啓蒙二十二菜部〕甘藍　草ボタン　諸葛ナ 京師、唐山ニテ諸葛菜ト云ヘ、蔓菁ノコトナリ、　ボタンナ 播州　トウナ 加州　ダンバイサウ

種樹家ニ多ク栽ユ、ソノ苗冬ヲ經テ枯レズ、葉ハ油菜（アブラナ）ヨリ濶大ニシテ厚ク、色緑ニシテ白ヲ帶ブ、圓莖、高サ一二尺、其頂ニ葉多ク重リ生ズ、冬春ノ交リ紫色ニ變ジ、葉皆相抱テ重葉紫、牡丹花ノ如シ、故ニハボタント云フ、春ノ末葉漸ク展開シ、緑色ニ變ズ、莖モ漸ク長ジ、三四月ニ至リ、上ニ長莖ヲ抽デ花ヲ開ク四出、淡黄色ニシテ油菜花ヨリ大ニシテ、開クコト遲シ、莢ハ油菜莢ヨリ微長シ、根ニ塊ナシ、莢熟シテ苗枯レズ、扦插シテ活シヤスシ、

〔剪花翁傳二一月開花〕葉牡丹　花葉の花の如く色黄也、開花二月下旬、方地土撰ばず、肥淡小便多より春に至て、三十日許に二三度澆ぐべし、其後に油粕を置ば、芽のよく上るなり、播（まき）春花の前に根に吹たる芽を缺て、即時に扦（さす）べし、春の土用より立秋へかけて扦（させ）ば、根をよく下す也、さて三歩さしの小便を度々澆げば、秋の末より多にかけて、大の葉牡丹となるなり、秋より多にかけて扦ば、活すれども、春に至て悉く花に成て、葉牡丹とならず、されど又四季ともに芽を撰び扦ば、皆大葉牡丹となる、此芽のえらびやうは、言筆をもて解得がたし、葉の形丸く厚し、葉莖共に色紫にして、少し青線を帶たり、表面に白粉うすくかゝれり、若葉は内に屈み張て、全體上品の牡丹花のごとく、大なるは經八寸餘あり、九月より葉の色紫になる也、四季ともに插花にして雅也、

砕米薺

〔重修本草綱目啓蒙十六雜草〕砕米薺　タガラシ　タネツケバナ 作州　カハタカナ 薩州　スヾナ 同上



救荒野譜ニ碎米薺ニ作ル、レンゲサウニ充ツル古說ハ穩ナラズ、レンゲサウハ芥子園畫傳ニ載スル所ノ紫雲英一名荷花紫草ナリ、

〔百品考上〕柿娘蒿　和名タデラダサ

救荒本草、柿娘蒿、生田野中、苗長二尺許、莖似黃蒿莖、其葉碎小、茸細如鍼、頗黃綠、嫩則可食、老則爲柴、苗葉味甜、有圖

一東國ニ自生アリ、多ヨリ子生ズ、嫩苗食フベシ、苗ノ高サ二三尺、葉ハ黃花蒿ニ似テ細ク毛茸アリ、淡綠色ニシテ黃ミヲ帶ブ、夏梢ニ穗ヲナシテ花アリ、芥ニ似テ至テ細シ、後ニ細長キ莢ヲ結ブ、南芥菜ノ莢ノ如シ、中ニ細黃子アリ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、古說ニ此草ヲ角蒿トス非ナリ、

又柿娘蒿ト角蒿同物トスル說アリ、此亦非ナリ、柿娘蒿ハタデラダサ、角蒿ハ和產未詳、

〔重修本草綱目啓蒙十　隰草〕角蒿　詳ナラズ　一名莪牙菜救荒本草　山茵蔯本經逢原

蘇恭ノ說ニヨリテ、ブヂナヂシコニ充ル古說ハ穩ナラズ、又今上州信州ノタデラダサニ充ル說アレドモ、角ノ長サ二寸許ト云テ似、王不留行ト云ニ合ハズ、○中略

増、タデラダサハ苗ノ高サ二三尺、葉ノ形青蒿ニ能ク似テ、缺刻深ク少シ濶シ、莖葉共ニ微シク毛アリ、季春葉間ゴトニ細枝ヲ生ジ、梢ニ細黃花ヲ開ク、花謝シテ後角ヲ結ブコト、蕓薹ノ角ニ似テ小ナリ、內ニ細子アリ、夏ニ至テ苗枯ル、凡ソ蒿ノ類ニテヤヲ結ブモノハ、和產アルコトナシ、故ニ先輩コレヲ充ツ、

〔大和本草九　雜草〕莨世伊登字　三月開紫花、花有四片、實ハ莢アリ、豇豆ニ似タリ、葉長シ、色白毛アルガ如シ、葉金盞草ニ似タリ、莖高一尺許、秋及春初實ヲマクベシ、又宿根ヨリ生ズ、紅夷ヨリ來ル、其性能ヲシラズ、蠻流ノ外醫、此實ヲ用テ油ヲ煎ジトル、

〔剪花翁傳一　正月開花〕紫羅欄花　花の色赤紫、古株の五年に及ぶものは、開花正月末に咲なり、方日

向、地一分濕、土回塞、肥淡小便、春早々より兩三度澆ぐべし、水升がたき時は、剪口を酢煮すべし、

〔剪花翁傳(二 三月開花)〕紫羅襴花　花赤紫、開花三月上旬、方地土肥は、既に正月の條に見えたり、下種秋彼岸に苗代に蒔べし、翌年五月に分株す、今年花いまだあらず、又翌三年目の三月に至て、花漸く初て咲也、四年目も亦三月に花あり、扨五年目大古株となりては、正月末花咲也、もし煖地などにては、若根もの、花、偶には三月咲こともあり、下種秋彼岸に後る、時は、春彼岸に苗代にして、すぐに其年の五月に移すべし、水升がたき時は、切口を酢煮すべし、

〔草木育種(下 美花)〕紫羅襴花(花鎭)　赤土或眞土の肥地へ、秋の彼岸に種をまき、灰人糞(井)尿など澆てよし、春植替べし、

白花菜

〔重修本草綱目啓蒙(十八 葷辛)〕白花菜　ヤウカクサウ(勢州)　フウレイサウ(越後)

海濱ニ生ズ、宿子地ニアリテ春苗ヲ生ズ、葉ハ五加葉ニ似テ鋸齒ナシ、互生ス、莖ハ圓ニシテ紫色ヲ帶ブ、夏ニ入ナ高サ一尺餘、肥タル者ハ二三尺ニ至リ、鳳仙莖ノ如シ、葉ト共ニ淡啓蒙ニ月枝梢ニ品字ノ小葉ヲ互生ス、葉ゴトニ一花ヲ生ズ、ソノ形本草原始ニ圖スルトコロニ異ナラズ、細莖緣蕚、四ツニ開キ上ニ白瓣アリ、四出或ハ五出ニシテ、蘿蔔ノ花ニ似テ至テ小シ、申ノ剋ニ開ク、花ノ中ニ一鬚長ク出、上ニ六七枝ヲ分ツ、皆紫色上ニ黃藥アリ、其中心又一鬚アリテ莢ヲ生ズ、長サ二寸餘、濶サ一二分內ニ細子多シ、熟シテ黑褐色光リナシ、大サ芥子ノ如シ、熟シテ苗根共ニ枯ル、

茅膏菜

〔重修本草綱目啓蒙(十九 柔滑)〕醍醐菜　詳ナラズ　附錄茅膏菜　ハイトリバナ　スナモチサウ(江州)　イシモチ(播州)

山中ノ池澤邊ニ生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ七八寸、葉互生ス、形半月ノ如ク、二三分ノ大サニシテ邊ニ毛アリ、葉上ニ涎アリテ黐膠ノ如シ、蠅蜻蜓及諸蟲粘著ス、故ニハイトリバナト云、此苗ヲ地上ニ倒置スレバ、沙石多ク粘著ス、故ニスナモチト云、四五月莖頭ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣

白色、大サ三分許、播州室津ノ產ハ大サ五分許、根ニ圓塊アリテ半夏根ノ如シ、秋ニ至テ苗枯ル、

〔新撰字鏡草〕景天（伊支久佐、又云、成火、又救火、又慎火、又壞火、〇〇〇壞火恐愼火誤）

〔本草和名草七〕景天一名戒火、一名火母、一名救火、一名據火、一名愼火（陶景注云、以辟火故以名之）一名火草（出蘇敬注）和名伊岐久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕景天　陶隱居本草注云、景天一名愼火（和名伊岐久佐）避火故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕是名今不傳、按伊岐久佐蓋活草、衍義曰、極易種、但折生枝置土中、頻澆漑旬日便下根、是所以有活草之名也、（中略）證類本草上品正文云、景天一名愼火、引陶云、今人皆盆盛、養之於屋上、云以避火、千金翼亦云、景天一名愼火、則知是六字本草本條文、本草和名云、景天一名愼火、陶景注云、以避火故以名之、蓋君直依之誤併正文爲陶注也、蜀本圖經曰、愼火草、葉似馬齒莧而大、作層而上、莖極脆弱、夏中開紅紫碎花、秋後枯死、亦有宿根者、時珍云、景天、二月生苗、脆莖微帶赤黃色、高一二尺、折之有汁、葉淡綠色、光澤柔厚、狀似長匙頭及胡豆葉而不尖、夏開小白花、結實如連翹而小、中有黑子如粟粒、

〔和爾雅草木七〕景天（ケイテン）（愼火草、戒火、救火、據火、愼火、）

〔物類稱呼生植三〕景天いきくさ　にちまんさう　京にてべんけいさうと云、筑紫にてちどめと云、江戸にていちやくさうと云、今按に景天其葉厚く薄白、花一所に集り咲て白く、口紅有てうるはしき小花ひらく、莖を伐て糸をもて釣て置に、よばみかはきて後、雷の鳴る時、必色を增す草なり、故につよきといふ意にて、辨慶草と名づくる歟、又一種細葉なる物有、是はきりんさう也、

〔大和本草七草〕景天　本草綱目石草類ニノセタリ、イハレンゲト訓ジタル本アリ、非ナリ、順和名ニイキクサト訓ズ、今世ノ俗ニベンケイ草ト云、筑紫ニテ血ドメト云、コレヲキリキズニツクレバ血ヲトムル故ニ名ヅク、本草ニモ療金瘡止血トイヘリ、煎湯ニテ小兒ノアセボヲ洗フベシ、ツ

キタダラカシテ、小兒ノ赤腫ニツクベシ、蒙筌ニ見エタリ、世俗ニ此草ヲカベニカケ、シボミカハキテ後、若雷聲ヲ發スレバ、タチマチ色ウルハシクシテ、生ナルガ如シト云、蒙筌ニカベニカケテ養ナクシテモカレズ、枝ヲヲリ土ニ挾メバ生ズト云リ、人家ノ庭中及假山盆中ナドニ植ユ、蟲好ンデ食ス、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕景天　イ。キ。タ。サ。和名鈔　ベ。ン。ケ。イ。サ。ウ。京　ハ。チ。マ。ン。サ。ウ。　チ。ド。メ。筑前　チ。ド。メ。グ。サ。丹波　フ。タ。レ。グ。サ。加州　フ。タ。ラ。ダ。サ。越中　ヲ。フ。タ。ラ。ダ。サ。同上、フ。タ。ロ。グ。サ。　南部　フ。キ。バ。信濃　ジ。フ。キ。サ。ウ。江戸　ゲ。ン。ジ。サ。ウ。　イ。チ。ヤ。タ。サ。ウ。共同上　チ。イ。チ。イ。グ。サ。　石州　イ。チ。ヤ。グ。サ。新撰正　ク。サ。ギ。リ。作州　テ。キ。リ。グ。サ。藝州　テ。ウ。キ。リ。グ。サ。備藝　フ。ク。レ。シ。　ポ。ウ。同上　ハ。ホ。ウ。ヅ。キ。和州　ト。リ。ノ。イ。キ。リ。グ。サ。皆備　ハ。マ。レ。ン。ゲ。若州　一名掛壁青本草蒙筌　火丹草本草蒙筌　龍鱗草農政全書　塘頭草先醒齋廣筆記　瓦花農政全書　天竹鎮江府志、南天ト同名　佛指甲救荒本草　獨脚蓮廣東通志　増、一名鎮火草、農政全書

江州伊吹山ニ自生多シ、人家ニ多ク栽テ瓶花ニ供ス、春舊根ヨリ苗ヲ發ス、一科數莖圓ナリ、葉ノ形匙ノ頭ノ如ニシテ厚ク白色ヲ帶ビ互生ス、或ハ二三對生ス、或ハ周邊ニ鋸齒アリ、變態多シ、秋ニ至テ高サ二三尺、梢間ニ枝叉ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣白色、大サ三分許、數百聚リテ傘ノ如シ、又淡紅色花綠色花ナル者アリ、倶ニ葉紫色ニ染テ美ハシ、秋後皆苗枯ル、唐山ノ人ハ盆ニ栽ヘ屋ニ上セテ防火ノ備トス、集解ニ蘇頌說ク所ノモノハ、ベンケイサウニ非ズ、ミ。セ。バ。ヤ。ト呼ブ草ナリ、一名オホウチサウ、江戸チナシグサ、勢州青白紅、花戸花戸ニ多ク栽ユ、葉ハ小ニシテ圓ナリ、白綠色ニシテ邊ニ紫色アリ、三葉相對ス、夏月莖頂ニ花ヲ開キ簇ヲナス、形景天花ニ同シテ淡紅色、是紅花ノ景天馬齒莧葉ノ景天ナリ、一種莖柔ニシテ下垂スル者ヲ、タ。マ。ノ。オトト呼ブ、同物ナリ、

増、○中略一種キ。リ。ン。サ。ウ。ト云アリ、春月舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ七八寸許、多ク枝ヲ生ジ葉互生ス、

景天葉ヨリ細長ク薄シテ、頭ニ鋸齒アリ、夏月梢ニ花ヲ開ク、佛甲草ノ花ノ如シ、插シテ能活ス、コレ救荒本草ノ費菜ナリ、一種紫背ノ景天アリ、形狀微ク小ニシテ、葉背深紫色ニシテ美ナリ、又一種木曾ノ產ニ、小葉ノ者アリ、高サ五六寸、葉ノ大サ五六分、濶サ三分許、キンギヨサウノ葉ニ能ク似タリ、

〔剪花翁傳 三五月開花〕辨慶艸　花の色黄也、形乙切艸に似て莢集て咲也、開花五月上旬より六月迄咲也、方日向、されど葉短かし、又半陰に植れば、高一尺ばかりになれど、葉和らかなり、地土えらばず、肥淡小便、多一二度、春芽出し前に四五度澆ぐべし、分株多よし、○中略

辨慶艸　花の色白く微紅を含めり、形ち至て少さく一房をなせり、開花五月より六月さかりて八月迄あり、方日向地乾、土えらばず、肥淡小便、株春彼岸堀出して、古株を去て新芽を分植べし、すこし日を厭て三分交りの小便をそゝぐべし、長七八寸にもなる頃、巣蟲生ずること至てはやし、よく心を配りて早朝に取捨べし、或は木灰汁、或は爆艸の葉汁などそゝぐもよし、且濕地には巣蟲も多く生じ、株も瘦て育ちがたし、さて花枝の萎みし物、屋上に在て炎天に當るに、瓦上にておのづから芽を生じ、白根をあらはせり、いとつよきもの也、されば辨慶艸の名うべなり、此葉は蚕豆の葉に同じく、もみて吹ばふくるゝものゆへに、兒女子の翫にせることあり、必弄しむることなかれ、若砂糖と合し害ば、失命となん恐るべし、

〔閑窻自語〕みせばやといふ草名語

故民部卿入道爲村卿かたられしは、今世にみせばやといへるくさ(景天の類)をうゑもてあそぶ、これはかの卿の父、大納言爲久卿の和歌の門弟に、吉野山の法師にてあなるが、奥山にて見侍りしくさとて、和歌をそへて贈りし、そのうたの句に、君にみせばやとの詞あり、これによりて見せばやとなづけおくよし、爲村卿の返事ありしを、たしかにみられけるとなむ、

以知草

〔和漢三才圖會石草九十八〕以知草　正字未詳、景天草和名謂以岐久佐、此亦景天之屬也、故誤曰以知草乎、

按以知草似景天草而極小者、又似爪蓮華、苗高三四寸、莖枝弱如蔓、繁茂、五月開小黃花、人家庭園栽易茂、

壁生草

〔和漢三才圖會石草九十八〕壁生草　萬年草　玉柏亦謂萬年草、但草字音異、訓別物、

按壁生草、即以知草之類、而葉略圓、色微濃、性好水而惡深濕、極易生、或細切莖插地則活、雖石壁上初以溫土栽之則久不死、五月開五瓣尖小黃花、似以知草花、

〔枕草子三〕草は

いつまで草はおふる所いとはかなくあはれ也、岸のひたいよりも、これはくづれやすげなり、まことのいしばいなとには、えおひずやあらんとおもふぞわろき、

〔枕草子春曙抄三〕八雲に壁に生云々、壁に生るは、岸に根をはなれたるよりはあやうしと也、

佛甲草　岩蓮花　仙人條

〔多識編二石草〕佛甲草、今案保登介乃豆米、

〔和爾雅七草木〕佛甲草　佛指草同

〔大和本草七雜草〕岩蓮花　倭俗ノ名也、其草ノ形狀葉メグリ連リテ、恰蓮花ノ開ケルガ如シ、異草也、或曰佛甲草是也ト、非ナリ、本草所言ト不合、實ヲマケバ能生ズ、

佛甲草　本草綱目石草類所載ヲ考ルニ、今京都及諸州ニ一夏草ト云物アリ是也、又無根草ト云、根鬚ナシ、葉ハ細長クシテ尖レリ、莖ヲ折リテ土ニ挾メバ能生ズ、莖葉似馬齒莧、其餘ハ皆本草ニ所言ノ如シ、庭間又ハ盆ニウフ、是ヲ岩蓮花ト訓ズルハ非也、

仙人條　此草火ニヤケザルユヘニ、國俗野火消ト名ヅク、葉ハ馬齒莧ニ似テ高一尺ニ不滿、無根鬚、挾メバ能生ズ、其莖自折而落能生ズ、實亦落而能生ズ、四五月黃花ヲ開ク、其莖如條枝ニ有三股、盆ニ栽テ可玩、酉陽雜俎十九卷曰、仙人條無根蒂、生石上、狀如同心蒂、三股色綠トイヘリ、佛甲草ニ

相似タ不同、此草土ニ不栽シテ數根ヲ合セ、空中陰處ニカケ置、數日ニ一度水ヲソヽゲバ、常ニ生ジテ不枯コト、風蘭ノ如シ、佛甲草モ亦同、佛甲草ハ葉小長ク末尖ル、仙人條ハ葉小ニシテ圓シ、花ハ同、又根殘ナク活ヤスキ事モ同、或コレヲイツマデ草ト云、久シク不枯故ニ名ヅク、然ドモイツマデ草ハツタニ似タリ、壁ニ生ズ、與此不同、

〔大和本草附錄一〕佛甲草　毒虫ノサシタルヲ治ス、ムカデ蜂ノサシタルニツク、又蟲ノハミタルニ付テヨシ、葉ヲスリテ付ル、鷄小蟲ヲノンデ腹大ニ腫ル、此草ヲシリテクラフ、タチマチ小蟲ヲ瀉下シテ腹ヘル、蟻ハタヽレテ出タリ、蟻ノ來ル處ニシゲクウフレバ、蟻ヲソレテ不來、他ノ毒虫モ避ケテ不來、蚊ノクヒテ腫タル處ニ、葉ヲモンデ付レバ忽痛止、此草庭中或盆中ニウフベシ、效多シ、

〔和漢三才圖會九十八石草〕佛甲草　佛指草　(俗云岩蓮華、山草部有佛指甲草、亦此類乎、〇中略)

按佛甲草淡綠色、而初生形色彷彿佛座蓮華、故曰岩蓮華、層層生葉而末窄、梢開小白花、狀如浮屠之塔、

爪蓮華(ツメレンゲ)　其葉細長似獸爪、又如胡葱挾者比比生也、狀與岩蓮華同、當年生者無花、翌八月著花、性最惡濕、

〔百品考上〕石蓮華　和名イ。ハ。レ。ン。ゲ。

宋學士全集、游荊塗山記云、有草生石上、高一尺、其花可玩、不假土力、取懸檐間、呼爲石蓮華、

山中石上ニ自生ス、今人家假山ニ多栽ウ、葉ノ長サ二寸許、末濶ク頭圓シ、淡綠色ニシテ白緣ヲ塗ルガ如シ、疊疊相重テ千葉蓮花ノ如シ、夏葉心ヨリ莖ヲ抽コト一尺許、五瓣ノ白花穗ヲナス、大サ三分許、佛甲草(マンネングサ)ノ花ニ似タリ、後莢ヲ生ズ、又佛甲草ニ同ジ、熟シテ苗根共ニ枯ル、子落テ生ジ易シ、多ヲ經テ枯レズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕佛甲草　總名マンネングサ　ツルレンゲ　イツマデグサ　ステグサ丹波　イハマキ同上　ノピキヤシ雄、泉州、大和本草、　子ナシグサ雄、勢州、大和本草、　ハマヽツ雄、紀州、播州、陸奥州、　イミリグサ雄、豐前、豐後、

雄名イチゲサウ大和本草　チンジンノステグサ藝州　ステグサ紀州　シナダナ豐州　ツミキリグサ筑前　チリナリ南部　タカノツメ勢州鎌山　ホツトケグサ同上山田　ホトケグサ同上内宮　子ナシカヅラ相州　江日コンゴウ筑州　ミズタサ同州　センチンサウ讃州　ヒガンサウ泉州　マムシグサ伯州　イハノボリ同上　ナゲダサ越後　マツガ子江州彦根　カラクサ同上守山

雌名イチクサ三國　オマンチンサウ同上　コマノツメ勢州　イチリタナ津輕　フエクサ秋田　コマメグサ防州　路旁陰處林下水側ニ多ク生ズ、雄ナル者ハ苗高サ六七寸叢生ス、葉細クシテ厚ク末尖リ、長サ八九分、黄緑色三葉ゴトニ相對ス、莖ヲ切リ捨テ枯レズ、自ラ根ヲ生ズ、四五月梢ニ花ヲ開ク、五瓣黄色、大サ三分許、多ク枝ニ聚テ美ハシ、苗ハ冬ヲ經テ枯レズ、

雌ナル者ハ苗高サ二三寸、葉雄ナル者ヨリ狭小、長サ三分許、厚クシテ尖ラズ、葉密ニ攅リ生ズ、冬ヲ經テ枯レズ、冬春ニ至リ葉紅紫色ニ染テ美ハシ、四五月花ヲ開ク、形色雄ナル者ニ同ジ、一種圓葉ナル者アリ、葉大サ一二分、花ノ形色モ同ジ、幽谷石上ニ生ズ、一種方葉ナル者ハミヅウルシト呼ブ、一名ヤマブタイ、イハガ子サウ、葉大サ三四分甚厚シ、夏花ヲ開ク、形色ツルレンゲニ同ジ、

〔増補地錦抄八〕岩蓮花　植分春秋岩の間々に土を少入て植る、肥には白水を節々かける、

〔廣益地錦抄七〕佛甲草　葉冬は地に付てれんげのごとく、三月比より段々のびたちて、枯木岩にとり付多くしげり、五六寸ほど有、尺にたらぬ小草なり、四五月ごろ花さく、黄色小りんあいらしく、ながめ有、秋のすゑよりかれて地に敷て、いはれんげのごとく、又しほらしくきくめい石、あるひは木石等にとり付て生る、一名佛指甲共云、又の名一夏草とも云、またつるれんげ共云、

虎耳草

岩蓮花(イハレンゲ)　岩にとり付て生るれんげのかたちにてちいさく、一つに子多くわかれ生ズ、きくめい石木石等にうへてながめとなれり、佛甲草とは各別のものなり、又一種有て蓮花大きく色うす白し、唐蓮花といふ、岩蓮花とは是又別のもの、

〔多識編 二石草〕虎耳草、今案登良乃美美、

〔和爾雅 七草木〕虎耳草(ユキノシタ)(石荷葉同)

〔大和本草 七雜草〕虎耳草　本艸石草ニ載ス、雪。ノ。下。ト云、又キ。ジ。ン。サ。ウ。ト云、其花白シテ二片アリ、他花ニ異ナリ、梢ニ先一花開テ後下枝ノ衆花サク、是亦他花ニカハレリ、多クサキタルハ愛スベシ、甚畏フオソル、暑ニアヒナカハケバ枯ヤスシ、日ヲ掩ヒ水アソ、グベシ、根下ノ蔓ヨリ根ヲ生ズルハ活ヤスシ、舊根ヲウフレバ枯ル、秋ウフベシ、春ウフレバ枯ヤスシ、陰地ニウヘタルハ活ヤスシ、石ノ側ニモウフベシ、キジン草ヲ瓩葵ナリト云說アリ誤レリ、

〔和漢三才圖會 九十八石草〕虎耳草　石荷葉　俗云雪下草　略○中

按虎耳草叢布地生、其花白帶淡紅、微似秋海棠之態、結子、採其葉黑燒和油、傅小兒頭瘡爲良、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕虎耳草　ユ。キ。ノ。シ。タ。　キ。ジ。ン。サ。ウ。京　イ。ド。バ。ス。泉州　キ。ン。ギ。ン。ナ。ウ。石州　イ。ハ。カ。ブ。ラ。上野　イ。ハ。ブ。キ。越前　一名金絲荷葉閩書南産志　葉下紅百病全方　金絲荷群芳譜花　猪草南寧府志　硼殻草花鏡　金線草　金絲草共同上　虎鬚草峨江縣志　獅子耳汀州府志　耳草建寧縣治

母喋　虎喋草　獅子喋共同上

山谷陰濕石上ニ生ズ、又市中ニモ多ク栽ユ、甚繁茂シ易シ、葉ハ圓扁ニシテ蠒殻ノ如シ、周邊ニ淺鮭アリ、質厚ク面深緑ニシテ紫色ヲ間ヘ、紋脈白色ニシテ紫毛アリ、背ハ毛ナクシテ淡紫色、一根ニ數葉布生ス、夏月莖ヲ抽ルコト長サ一尺許、紫毛多シ、花多ク穗ヲナス、其形白色ノ二長瓣下垂シ、二ツノ短小瓣上ニ並ビテ品字ヲナス、粉紅色ニシテ紅點アリ、一種粉紅花ノ者アリ、甚稀ナリ、

升麻

共ニ根上ニ細紅線ヲ出シ、四邊ニ引クコト甚長シ、處處ニ小葉ヲ生ジ、後鬚根ヲ出シ、分レテ數窠トナル、一種春ノユキノシタハ、葉綠色ニシテ紫ナラズ、春中花ヲ開ク、形小ニシテ白色、後實ヲ生ズ、又一種イハブキハ北國ニ產ス、面背共ニ綠色ニシテ毛ナシ、葉大ニシテ橐吾(ツハブキ)ノ如シ、花小ク穗長大ニシテ枝アリ、一種ユキモヨウハ葉綠色ニシテ深岐アリ、秋花ヲ開ク小ニシテ數多シ、又長葉ナル者アリ、一種ヤツデユキノシタハ、葉綠色ニシテ刻缺アリ、ツタモミヂノ葉ニ似テ厚ク柔ナリ、秋ニ至テ花ヲ開ク、瓣痔テ大ノ字ノ如シ、故ニ花戶ニ名ケテ大文字草ト呼ブ、一種瓣直ニ垂レテ斜ナラズシテ、大ノ字ニ似ザルヲ人形草ト呼ブ、共ニ花後實ヲ生ズ、一種ヤマユキノシタアリ、一名ナガユキノシタ、雌ユキノシタ、チヤルメルサウ、幽谷溪澗ニ多シ、葉長薄尖リ、細齒有テ杏葉ノ如シ、大サ二三寸、色綠ニシテ紫色ヲ帶ブ、一根ニ叢生ス、莖葉ニ紫毛アリ、春莖ヲ抽ヅ高サ一尺許花ハ多ク穗ヲナス、瓣ナクシテ短紅絲圓布ス、下ニ五瓣ノ萼アリ、ソノ萼略喇叭(チヤルメル)ニ類ス、故ニチヤルメルサウト呼ブ、

增、ヤツデユキノシタト、大文字草ハ別種ナリ、混同スルハ誤ナリ、大文字草ノ葉ハ細長ニシテ、末ニ缺刻アリ、ヤツデユキノシタノ葉ノモミヂノ如クナルニ異ナリ、一種チヤルメルサウノ形ニ似テ、甚毛刺アルモノアリ、クサイワパリト呼ブ、

〔新撰字鏡草〕升麻(鳥足草、又云周麻、)

〔本草和名草六〕升麻、一名周麻、雞骨升麻、(靑綠色者)落新婦、(不用)和名止利乃阿之久佐、一名宇多加久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕升麻　本草云、升麻、(和名止利乃阿之久佐、一云宇太加久佐、)

〔箋注倭名類聚抄草十〕本草圖經、春生苗、高三尺以來、葉似麻葉並靑色、四月五月著花、似粟穗白色、六月以後結實黑色、根紫如蒿根多鬚、李時珍曰、其葉似麻、其性上升、故名、按張揖廣雅及吳普本草並云、升麻一名周升麻、則或指周地、如今人呼川升麻之義、今別錄作周麻、非省文、卽脫誤也、

〔大和本草〕六 升麻 若水云、葉強クシテ宮根空木(ウツギ)ニ似タリ、又苧葉ニ似テ葉大ナリ、葉皆向上、一根叢生ス、又有別ニ能似者勿誤混、本草曰、生苗高三尺以來、四五月著花似粟穗、六月以後結實黒色、中華ヨリ來ル、外黒ク内靑色ナルヲ用ユベシ、時珍云、今人惟取裏白外黒而緊實者、本邦ノ俗醫、升麻ト稱シテ用物二種アリ、一種ハ鳥ノ足ト云、其葉芹ニ似タリ、一種ハタデ升麻ト云、葉モ莖モ犬タデニ似タリ、二種共ニ升麻ニアラズ、必不可用、今案本草無忌火之說、入門曰、發散生用補中酒炒止咳汗者蜜炒、國俗以爲忌火者何也、

〔重修本草綱目啓蒙〕八山草 升麻 トリノアシグサ〔武藏〕 ウタカグサ〔和名鈔〕 アハボ〔阿州〕 ミブフデ〔肥後〕 サラシナ イワダラ〔越後〕 イワンタイラ〔佐州〕 モクダ〔同上〕 一名既濟公〔輟耕錄〕 燧脚〔村家方〕

升麻ノ花ハ粟ノ穗ノ如クニシテ白色、筆頭ノ形ニ似タリ、故ニアハボトモ、ミヅフデトモ名ク、春宿根ヨリ新葉ヲ叢生ス、凡ソ三枝九葉ヲ一葉トス、又九枝二十七葉ニモナル、ソノ一葉ヲ離セバ地錦ノ葉ノ形ノ如シ、厚クシテ光澤アリ、莖ハ細ク硬ク光アリテ粟ノ稈ノ如シ、夏月長莖ヲ抽テ秋ノ末ニ至リテ花ヲ開キ、長キ穗ヲ成ス、肥タルモノハ穗ニ數枝ヲ分ツ、花大サ三分許、六瓣、初ハ白色微紅、開ケバ白クシテ内ニ白蕋多アリテ絲ノ如シ、滿開スレバ瓣ハ見ヘズシテ蕋ノミ見ユ、瓣モマタ早ク脫シテ絲ノミ殘レリ、市ニ鬻グ根ハ、唐升麻ヲ上品トス、根大ニシテ外黒ク内白、是鬼臉升麻ナリ、朝鮮ヲ中品トシ、和ノ升麻ヲ次トス、和ノ升麻ノ中ニ數品アリ、根色黒キヲ上品トス、日光升麻ハ根大ニシテ色黒シ、唐ヨリハ色淺キ故燒黒クシタルモノアリ、日光升麻ノ葉ハ狹窄ニシテ、苗高サ五六尺ニ至リ、枝ヲ分ツテ花ヲ開ク、藥肆ニテ和ノ升麻ノ内ノ上品トシ、唐ニ次グトス、又野カラマツサウノ根ヲ燒、黒クシテ僞ルモノアリ、故ニ日光ノ土人ハ、野カラマツサウヲ升麻ト呼ブ、又諸州ノ深山、及江州伊吹山ノ產ハ、根細ク外黒内靑ク堅實ニシテ味極テ苦シ、コレヲ藥舖ニテ眞ノ升麻ト云、是雞骨升麻ナリ、唐山ニテハコレヲ佳品トス、又此外大葉升麻、三葉

梅鉢草

升麻アリ、ミナアハボノ一種ナリ、古ハ升麻ヲトリノアシグサト訓ズ、今ニテハ別ニ一種ノ草ヲトリアシ升麻ト云フ、此草向陽ノ山ニ多シ、加條葉ニ似タルモノ九枝二十七葉ホドツクモノ一葉ナリ、夏臺ヲ抽テ花ヲ開ク、眞ノ升麻ヨリ早シ、穗ハ長大ニシテ枝多ク花數甚ダ多シ、花ハ尤細小ニシテ一分ニ盈タズ、色白シ、又淡紅色桃紅色ノ者アリ、此ヲアハユキサウト云、此ニ小葉ノ者アリ、葉ノ枝數アハユキサウヨリ又多シ、其餘形狀同ジ、コレヲナツユキサウト云、花ハ白色亦淡紅色ノ者アリ、又アハモリサウ、一名アハモリ升麻ト云アリ、能州ニテヨメヲドシト云フ、苗ナツユキサウヨリ短小ナリ、葉細長タシテ當歸葉ノゴトク厚シ、花ハナツユキサウヨリ早ク開ク、トリアシ升麻ハ根皮赤黃色又赤色ナリ、故ニアカ升麻ト云、古ハ藥肆ニコレヲ賣ル、ボウデ、クヽリデト云アリ、又皮ヲ削リタルヲ、ケヅリ升麻ト云ヘリ、卽集解ニ謂ユル小升麻一名落新婦ニシテ、升麻ノ下品ナリ、ソノアハモリ升麻ハ又其下品也、又古ハ金線草ノ根ヲ升麻ニ僞リ賣ル故ニ、タデ升麻ミブヒキ升麻ノ名アリ、細葉升麻ノ嫩葉ヲ日光ニテハ菜トシ食フ、故ニサラシ菜ト呼ブ、花戸ニテヤサイ升麻ト名ク、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、略○中 槀本、升麻各八斤、　攝津國卅四種、略○中 茯苓、升麻各三斤、略○下

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　升麻　王子 アスカ山下

〔佐渡志 物產五〕升麻　方言イヌノヌ　山中ニアリ

〔大和本草 花草七〕梅バチ　小草ニテ花白シ好花ナリ、盆ニウヘテ雅玩トスベシ、花ノカタチ衣服ノ紋ニツクルムメバチノゴトシ、叡山如意ガ嶽ニアリ、攝州有馬湯山ニ多シ、俗アヤマリテコレヲ落花生ト云、落花生ハ別物ナリ、

〔和漢三才圖會 濕草九十四末〕梅鉢草　俗稱 本名未詳　今以梅花爲衣服之文、呼曰梅鉢、故名、

花梅鉢草高四五寸、葉略團厚小、面青色帶赤、三月開白花、單葉似梅花、重鳳樣草、夏雪草、梅鉢草、一輪草之花、皆似梅、(一輪草葉似鳳樣草葉、三月開花、單白花似梅、)

〔大和本草花草七〕額草（ガクサウ） 大小二種アリ、大小共ニ莖葉ハ紫陽花ニ似タリ、花色モ似タリ、只花ノ形額ニ似テ方ナリ、横竪長短アリ、小額草（コガクサウ）モ大額草ニ相似テ甚小ナリ、其花亦額ニ似タリ、葉甘シ、葉ヲ蒸テホシ爲細末甘茶トス、又臺草ニモ甘茶アリ、大額小額共ニ四五月ニ花開ク、額草トハ近俗之所稱也、

古事類苑

植物部十八

草七

〔本草和名 十七〕蓬虆 仁諝音力水反 一名覆盆、一名陵藟、一名陰藟、本條 一名馬瘻、一名陸荊、一名茸 仁諝音而 一名馬莓 已上三名出釋文 一名大莓 出小品方 一名木莓、一名山莓 已上二名出稽疑 和名以。知。古。

覆葐 陶景注曰、覆盆蓬虆實名也、一名珠蘽莓子、懸鉤子、江東十月有也、名曰懸鉤子、已上三名出崔禹 和名加。宇。布。利。以。知。古。

〔本草和名 草十一〕蛇莓汁 仁諝音羌 和名倍。美。以。知。古。

〔倭名類聚抄 十七〕覆盆子 爾雅注云、葐蒛 缺盆二音 覆盆也、本草云、覆盆子、和名以知古、今案覆宜作䨱、芳福反、見唐韻、

〔箋注倭名類聚抄 九〕郭注又云、實似莓而小、亦可食、本草、蓬虆一名覆盆、陶注云、李云、即是人所食莓耳、陶注又云、今莓子乃似覆盆之形、而以津汁爲味、其核甚微細、本草圖經云、苗短不過尺、莖葉皆有刺、花白子赤黃、如半彈丸大、而有蒂承、如柿蒂狀、小兒多食其實、本草衍義云、覆盆子、長條、四五月紅熟、其味酸甘、外如荔枝櫻桃許大、軟紅可愛、李時珍曰、此類凡五種、一種藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌、狀類小葵葉、面青背白、厚而有毛、六七月開小白花、就蒂結實、三四十顆成簇、生則青黃、熟則紫黯、微有黑毛、狀如熟椹而扁、冬月苗葉不凋者、俗名割田藨、即本草所謂蓬虆也、一種蔓小於蓬虆、亦有鉤刺、一枝五葉、葉小而面背皆青、光薄而無毛、開白花、四五月實成、子亦小於蓬虆、而稀疎、生則青黃、熟則烏赤、冬月苗凋者、俗名插田藨、即本草所謂覆盆子、爾雅所謂茥缺盆也、此二者俱可入藥、一種蔓小於蓬虆、一枝三葉、葉面青、背淡白而微有毛、開小白花、四月實熟、其色紅如櫻桃者、

俗名莓田藨、即爾雅所謂藨者也、故郭璞注云、藨即莓也、子似覆盆而大、赤色、酢甜可食、此種不入藥用、一種生者、樹高四五尺、葉似櫻桃葉而狹長、四月開小白花、結實與覆盆子一樣、但色紅爲異、俗亦名藨、即爾雅所謂山莓、陳藏器本草所謂懸鉤子者也、一種就地生苗、長數寸、開黃花、結實、如覆盆而鮮紅、不可食者、本草所謂蛇莓也、小野氏曰、今俗呼草莓蔌莓和世莓者、可充本草蓬虆、紹興本草圖可證、今俗呼夏莓、德利莓者、可充爾雅缺盆本草覆盆子、時珍所謂插田藨也、今俗呼苗代莓、三葉莓者、可充爾雅藨、時珍所謂薅田藨也、今俗呼木莓者、可充爾雅葥、本草拾遺懸鉤子、今俗呼冬莓者、即寒莓、時珍所謂割田藨也、○中略 按依陶注、覆盆以似覆盆之形得名、俗從草作蕧葐、又以蕧字繁縟故省西作蕧也、與旋蕧字不同、源君欲以俗字改正字、非是、下總本注末有或用莓子二字六字、按本草和名云、蓬虆和名以知古、覆瓫和名加宇布利以知古、蓋以本草本經載蓬虆、別錄載覆瓫、別二物也、然本草云、蓬虆一名覆瓫、陶注云、蓬虆是根名、覆瓫是實名、蘇注云、覆瓫蓬虆、一物異名、故源君不分爲二物也、加宇布利以知古、謂覆盆形也、王念孫曰、人所食莓、即莓子耳、蜀本草引切韻云、莓子、覆盆也、郭注爾雅、蒛葐覆盆也、廣雅云、缺盆莓也、李云、蓬虆是莓、然則莓也、莓子也、蒛葐也、覆盆也、蓬虆也、名異而實同也、陶弘景集名醫之說、而時或不得其解、乃云蓬虆是根、覆盆是實、其說與本草經蓬虆一名覆盆者顯然不合、蜀本草、開寶本草、則又小變其說、以蓬虆爲覆盆之藤蔓、至食性本草、本草拾遺、本草衍義諸家、乃竟以蓬虆覆盆爲二草說之、愈詳而失之逾遠矣、

〔下學集 草木下〕覆盆子(イチゴ)

〔書言字考節用集 六生植〕覆盆子(イチゴ)(一名 同 草 同)缺盆(同 爾雅)莓(同)

〔和爾雅 六果蓏〕莓(イチゴ)(莓子、藨子並總名也)覆盆子(クサイチゴ、タハンスイチゴ)(蒛葐、寒莓並同、爾雅謂之蕢、)蓬虆(トキシラズイチゴ、フユイチゴ)(割田藨同)薅田藨(アシリ)(上同)懸鉤子(キイチゴ)(樹莓、木莓、山莓並同、)蛇莓(ヘビイチゴ、クチナハイチゴ)(蛇藨、地莓並同、)

〔東雅 十四果蓏〕覆盆子イチゴ　倭名鈔に爾雅本草唐韻等を引て、覆盆子はイチゴ、今按覆宜作蕧と註せり、諸家本草に據るに、蓬虆は覆盆子といふものにて、日本紀に蓬虆此にイチムコといふと註

せりき、万葉集の歌に、イチシといひし即此也、イチゴは即イチムゴなり、其義は不詳、(中略)或人の説にイチゴといふは、イは發語の詞、チとは血也、ゴは子也、其子の紫なる事血の如くなるをいふなり、いかにやあるべき、草木の名イチといふ者の如き、莔麻をイチヒといひ、櫟子をイチヒといひ、覆盆子をもイチゴといふ、莔麻櫟子の如き、血色に似たるの義とも見えず、

(倭訓栞中編二)いちご　莓類をいふ、日本紀にいちひごとよめり、多いちご也、寒いちごとも、時しらずともいふ、蓬苺とも見ゆ、倭名鈔に覆盆子を訓せり、蔓いちご也、一種蔓小きに實大なるを草いちごともいふ、一種蔓衍して莖に倒刺あるを黒いちごともいふ、黄いちごは懸鉤子也、鷹いちごも色黄也、又蒲田黒はわせいちご、又おらんだいちごあり、木いちごは樹苺、へびいちごは蛇苺也、又とつくりいちごあり、或生薬王也といへり、

(證類本草五果部)覆盆子　甘、酸、樹上生者名樹苺、乾之名覆盆子、多刺、平、無毒、能縮小便、令髮不白、五月於日中採之、日西乾、主男子腎精虚竭、女子食之有子、強陰痿能令堅長、益氣輕身、安五藏、益顔色、小兒食之功効同、失採則枝生蛆、收時五六分熟時便採日暴、治肺虚寒、益腎藏、服之覆其溺器、故取名、

(本朝食鑑四菓)莓　訓伊知古

集解、莓一種藤蔓不長、莖有鉤刺、一枝五葉、狀類小麥葉、面青背青光滑、開白花、四五月實成蓄子稀疏、生則青黄、熟則烏赤、冬月苗凋、俗名津留苺、一種蔓小於津留苺、一枝三葉、面青背淡白、而有微毛、開小白花、四月實熟紅如櫻桃、而大於津留苺、味亦純甘、俗名草苺、一種樹高四五尺、葉似草苺葉狹長、四月開小白花、結實與前之二苺一樣、但色紅爲異、俗名木苺、其味減於前之二苺、然其樹插之易生長、能成叢、故子亦太多、近時專用木苺、家家栽之、以誇其夥也、前之二苺、鄙園雖蓄、土灌水、辛苦栽焙而後結子亦少、於是近時用之者稀矣、一種藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌、面背青白、厚而有毛、六七月開小白花、簇攢結實三四十顆成簇、生則青黄、熟則紫黯、微有黒毛、形如熟椹而扁、冬月苗葉不凋、俗

名黑苺。。山中田間希有之、以連其節、人不貴之曰有毒、一種就地生、蔓長數寸、開黄花、結實如草苺、而鮮紅不可食、俗名蛇苺、而甚有毒矣、近代食苺者必合砂糖而食亦佳、

氣味、甘平無毒、主治煖肺益腎、壯陽滋陰、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕蓬虆。。 覆盆　陵虆　陰虆　寒苺　割田藨　俗云豆留。以。知。古。

本綱、此類 蓬虆、覆盆子、藨、樹苺、蛇苺、 凡有五種、時珍曾親采、以爾雅所列者校之、始得其的、諸家異説多、皆未可信也、

蓬虆者、藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌狀、類小葵、葉面青背白、厚而有毛、六七月開小白花、就蒂結實三四十顆成簇、生則青黄、熟則紫黯、微有黑毛、狀如熟椹而扁、冬月亦苗葉不凋、

子 甘酸　安五臟、益精氣、強志倍力、久服輕身不老、

覆盆子。。　茥 音圭　西國草　缺盆　畢楞伽　大麥苺　插田藨　烏藨子　和名以。知。古。

本綱、覆盆子蔓小於蓬虆、亦有鈎刺、一枝五葉、葉小而面背皆青、光薄而無毛、開白花、四五月實成子、亦小於蓬虆而稀疏、生則青黄、熟則烏赤、冬月苗葉凋、

氣味 甘平　安和五臟、温中補虚、益氣力、強陰健陽、女子食之有子、

蓬虆覆盆子二物功用大抵相近、雖是二物、其實一類而二種也、一早熟、一晩熟、兼用無妨、

藨。 音標　一名藕。田。藨。

藕田藨、其蔓小於蓬虆、一枝三葉、葉面青背淡白而微有毛、開小白花、四月實熟、其色紅如櫻桃、似覆盆而太赤、味酸甜可食、不藥入用、 覆盆子、熟者烏赤色、藕田藨、熟者紅色、

樹。苺。　懸鈎子　木苺　沿鈎子　莔 音盲　山苺　俗云木。以。知。古。

本綱、樹苺、樹生高四五尺、其莖白色有倒刺、其葉有細齒、青色無毛、背後淡青、頗似櫻桃葉而狹長、又似地棠花葉、四月開小白花、結實色紅、與覆盆子一樣、但色紅爲異、

氣味 酸平　止渴、除痰、醒酒、去酒毒、

按、木莓、似覆盆葉而硬、深青色、葉無刺、〔時珍所言者、蛇莓之莖葉也、〕

蛇。莓。　蛇藨　地莓　蠶莓　俗云久。知。奈。波。以。知。古。

本綱、蛇莓田野道旁有之、就地引細蔓、節節生根、每枝三葉、葉有齒刻、四五月開小黃花、五出、結實鮮紅、狀似覆盆、而面與蔕則不同、其根甚細、其實不堪啖、

蠶莓根汁〔飲一升、當吐〕大治傷寒大熱胸膈大熱不止、通月經、又療小兒口噤、以汁灌之、傅湯火傷、痛卽止、〔俗傳食之殺人、亦不然、止發冷涎耳、〕

按、蛇莓、諸州處處多出之、俗傳用蛇莓、蠶莓、蛇藨、治麻疹、或與黴多同用、治溫疥癬疥也、未知其據、蓋有毒草多服豈得宜乎、今人治便毒腫痛、以蛇莓丸如大豆、三粒空心服、多試皆有効、

〔重修本草綱目啓蒙十四下〕蓬。虆。　タ。ア。イ。チ。ゴ。　ヤ。ブ。イ。チ。ゴ。　ワ。セ。イ。チ。ゴ。　ニ。ナ。ヘ。イ。チ。ゴ。　タ。ハ。ン。ス。イ。チ。ゴ。〔筑前〕　ホ。ソ。イ。チ。ゴ。〔肥前〕　ワ。パ。イ。チ。ゴ。〔讃州〕　ナ。ベ。イ。チ。ゴ。〔雲州〕

路傍ニ多ク生ズ、葉茶藨葉ニ似ク、深綠色ニシテ皺アリ、莖ト共ニ毛多シテ刺アリ、三月枝ノ梢ニ花ヲ開ク、白色五出大サ一寸許、肥タル者ハ七八出ニ變ズルモアリ、偶繁二重花、後實ヲ結ブ、四月ニ熟ス、形蛇莓ノ如シ、莓中ノ尤早ク熟スル者ナリ、故ワ。セ。イ。チ。ゴ。ト云フ、實ノ形ノ似タルヲ以テタハンスイチゴト呼ブ、集解陳士良ノ說ニ、葉似野薔薇有刺ト云、紹興本草ノ圖モ、タナイチゴノ形ナリ、時珍ノ蓬虆ヲ寒莓トナシ、割田藨ノ名ヲ釋名ニ入ハ誤ナリ、

釋名、覆。盆。ハトックリイチゴト同名、寒。莓。ハフユイチゴトキシラズ、〔見前〕

陰地ニ多シ、蔓草ナリ、葉互生ス、形圓ク尖リ細齒アリテ厚シ、又多葵ノ葉ニ似タルモアリ、深綠色ニシテ冬モ凋マズ、夏ノ末花ヲ開ク、一莖ニ多クアツマリテ葉間ニアリ、白色五瓣、花後實ヲ結ブ、冬ニ至テ熟シ紅色ナリ、

集解、蓋。莓。子。ハ蛇莓ノ一名ナリ、插。田。藨。ハ卽覆盆子、時珍ノ說是ナリ、割。田。藨。ハナハシロイチゴ、ア

シクダシ〔筑前〕ミツバイチゴ、ホウラタイチゴ、ハタライチゴ、〔丹後〕ハクランシイチゴ、〔豐前〕ウシイチゴ、〔讃州〕

原野ニ多ク生ズ、蔓ト木ト相兼ヌル者ナリ、三葉ヅヽ一處ニ集リ生ズ、形圓ニシテ鋸齒アリ、背白シ、四月枝頂ニ枝ヲ分チ、多ク花ヲ開ク、色赤シ、大サ四分許、五月實熟ス、色赤シ、一毬五六子、他苺ヨリ粒大ニシテ毬小シ、一種深山幽谷ニ高サ六七尺ニ直立シ生ズルアリ、莖ニ紫赤色ノ毛及刺アリテ、玫瑰枝ノ如シ、葉ノ形大ニシテ背殊ニ白ク、花モ大ニシテ白シ、雞鉤子ハ時珍ノ説是ナリ、蛇苺ハタヂナハイチゴ。

增、〔中略〕蘭山翁深山幽谷ニ高サ六七尺、莖ニ紫赤色ノ毛刺アリテ、玫瑰ノ枝ノ如シト云モノハ、ソノ葉楓ノ葉ニ似タル故ニ、カデノハイチゴト云フ、一種タハノハイチゴト云アリ、葉ノ形桑葉ニ似テ、莖葉共ニ毛刺アリ、秋ニ至レバソノ毛刺紫色ニ變ズ、冬ニ至テ葉落ツ、又蓮ノ葉イチゴト云アリ、ソノ嫩葉中ニアリテ蕁ノ莖ノ如シ、又スナイチゴ、ヤナギイチゴ等アリ、

覆盆子。トックリイチゴ　ナツイチゴ　一名叢生藥王〔事物異名、藥譜及雅俗稽言、叢ヲ藂ニ作ル、同字ナリ、〕　義物錫〔廣物〕

〔異名〕秋膠〔同上〕　末廉德達〔鄕藥本草〕　末廉德達只〔村家方〕　增、一名覆盆子、〔外臺秘要〕

今漢種アリ、即浙江ノ覆盆子ナリ、蔓生甚繁茂ス、莖ニ刺多シ、高サ六七尺ニ過グ、葉互生ス、形蘿田熟葉ヨリ狹ク、五葉或七葉ツキテ、茶蘼葉ノ如クニシテ短シ、莖ト共ニ白色ヲ帶ブ、夏月舊莖ノ新枝ノ端ニ花ヲ開ク、一朶數十蕚、枝ヲ分コト野薔薇ノ如シ、花ハ五出白色、野薔薇ヨリ小ナリ、後實ヲ結ブ、形寒苺ノ如シ、熟シテ紅紫色ナリ、トックリイチゴハ伊勢及越前ニ產ス、形狀漢種ニ同シテ白カラズ、實形トックリニ似リ、故ニ名ク、又一種タマイチゴアリ、一名御所イチゴ、フクロイチゴ、形狀甚ダ蓬蘽ニ似テ、紫黑毛及ビ刺多シ、高サ四五尺、枝梢ニ花アリ、五瓣白色漢種ト同ジ、實形末尖リ大サ二三分、熟スレバ一夜ノ中ニ俄ニ長ジテ五六分ニナリ、色黃ニシテ中空シ、故ニフク

ロイチゴトモ云、コレ亦覆盆子ノ一種ナリ、舶來ノ覆盆子ハ實ノ長サ三分濶サ二分餘、末尖リ、スギナリエシテ盆ヲ覆シタルガ如シ、故ニ覆盆ト名ク、色緑ニシテ紅ナラズ黒ナラズ、是半熟ノ時採ル故ナリ、寇宗奭收時五六分熟便可采ト云フ、

懸鉤子。　キイチゴ(木本ナリ、又實ノ色黄ナリ、コノニクヲ以テ名ク、)　カナイチゴ(泉州)　ツルキイチゴ(木本ナレドモ、枝蔓ノ如キ故名ク、)　ナガリイチゴ(播州)　ホドロイチゴ(備後)　一名懸鉤草(拾子)

山中多ク生ズ、高サ三五尺叢生ス、莖ニ刺多シテ衣服ニカヽル、故ニ懸鉤ト名ク、葉互生ス、形細長クシテ本ニ兩尖アリ、周圍ニ鋸齒アリテ、午時花ノ葉ニ類ス、又五七岐ニシテ、カイデノ葉ニ似タルモアリ、共ニ葉ニ刺多シ、葉ノ形變ジテ異ナルモノ數十品アリ、皆種ハ別ナリ、或ハ土地ニ因テ然リ、一根ニシテ形變ズルニ非ズ、四月葉間ニ花ヲ開、白色五瓣、梅花ヨリ微小シ、後實ヲ結ブ、大サ五分許、五月ニ熟ス、色黄食フベシ、一種實小ク熟シテ赤色ナルアリ、葉ハ三尖ニシテ山字ノ形ニ類シ背白シ、コレヲ五月イチゴト云フ(播州)　一名ニガイチゴ(同上)　ヲホカハイチゴ(備後)　コガテイチゴ(丹波中略)○

蛇苺。　クチナハイチゴ　ヘビイチゴ　ミツバイチゴ(勢州田丸ト同名ナリ)　カラスノヤマモ、　一名雞冠果(救荒本草)　野楊梅(同上)　蛇蓐子草(集驗方)　蛇達只(本草綱目)

原野ニ甚ダ多シ、人家ニモ自生ス、秋新苗ヲ生ジ、長蔓ヲ延キ多モ枯レズ、葉ハ互生ス、三葉一蒂ニ簇リ、形長クシテ鋸齒アラシ、正二月葉間ニ花ヲ開ク、一莖一花、五瓣黄色、大サ四五分、委陵菜(カハラサイコ)花ニ似テ大ナリ、緑蕚二重、後實ヲ結ブ、蓬纍ノ如シ、大サ六七分、熟シテ赤シ、コノ苗蛇含ト相似タリ、蛇含ハオヘビイチゴナリ、五葉七葉ニシテ花オクレテ三四月ニ開ク、形蛇苺ヨリ小ナリ、然レドモ蛇含ニ三葉ノ者アリ、蛇苺ニ一種五葉ナル者アリテ混ジ易シ、五葉ノ者ハ救荒本草ノ雞兒頭苗ナリ、

苺、一種モミヂイチゴト云者アリ、葉ノ形楓樹ノ葉ノ如シ、又一種フクベイチゴト云モノアリ、實ノ形フクベニ似タリ、又近世阿蘭陀種ノ蛇苺ト呼ブ者アリ、春舊根ヨリ數莖ヲ叢生ス、高サ一尺許、常ノ蛇苺ノ葉ニ似テ厚ク大ニシテ莖勁シ、面深綠色ニシテ、背ニ白毛多シ、花ハ白色ニシテ實ハ淡黄色、大サ楊梅ヨリ大ニシテ味ヨシ、

〔剪花翁傳二一月開花〕唐覆盆子　花一重、白色、開花二月末より三月まであり、方二分陰、地三分濕、土撰ばず、肥大便、寒中入べし、下種春彼岸、分株春彼岸に出て筍のごとし、是を鋏分植べし、移十月也、葉は葡萄のごとし、此月より紅葉して散ざるものを、春まで插花にもちふ、正月中旬より彼岸にかけて、若芽生ずるを用ふるなり、

〔剪花翁傳三二月開花〕山覆盆子　花一重、色白、形ち棣棠に似て、葉は五加子に似たり、芒刺あり、開花三月中旬、方地土えらばず、肥大便、寒中入べし、下種分株春彼岸よし、移十月中よし、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

日別〇中略　覆盆子二升、五月〇中略中宮准此、

覆盆子園二段

右依件令殖、若不滿數、遷替之時拘其解由、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子

山城國(中略)覆盆子一擔〇中略　河內國(中略)覆盆子一擔〇中略　攝津國(中略)覆盆四擔〇中略

右依前件、其數隨時增減、隨到檢收、附內膳司、

〔枕草子三〕あてなるもの

いみじううつくしきちごの、いちごくひたる、

〔殿中申次記〕六月二日

一覆盆子　一莓 同年　中澤掃部助

〔武江產物志 園草〕道灌山ノ產　懸鉤子 いちご　蒔田薦　早稻田邊　覆盆子 關口、本所二ツ目、　鼠山ノ產
蓬蘽 根レイチゴ バイシ 同

〔續江戶砂子 一〕江府名產 并近在近國

地覆盆子　牛込の先關口の邊より出る

近在は青梅、和田、植木下村、島中、駒木野、神護寺、金剛寺、河崎稻荷新田などより出る、

〔藝備國郡志 上 安藝 土產〕覆盆子 出佐西郡能見島、土人取之賣酒店、酒家漬此於酒中、以爲覆盆酒、其味大甜、

〔日本書紀 十四 雄略〕九年七月壬辰朔、河內國言、飛鳥戶郡人田邊史伯孫、○中略 月夜還、於蓬蔂丘譽田陵下、 蓬蔂此云伊致寐姑、

〔本朝無題詩 二 雜物〕賦覆盆子　法性寺入道殿下 ○藤原忠通

夏來偏愛覆盆子、佗事又無樂不窮、味似金丹勞减美、色分靑草只呈紅、眞珠万顆周墻下、寒火一鑪孤壺中、酌酒言詩歌舞處、端宜珍物自然充、

〔古今著聞集 五 和歌〕同大將○源賴朝 もる山にて狩せられけるに、いちごのさかりになりたるをみて、ともに北條四郎時政が候けるが、連歌をなんしける、

もる山のいちごさかしくなりにけり、大將とりもあへず、

むばらがいかにうれしかるらん

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、○中略 時以後菓子者、○中略 覆盆子、

〔本草和名 十草〕蛇全 楊玄操音泉、陶景注云、是蛇含、蘇敬注云、全是含字誤也、宜改爲含、含銜義同、一名蛇銜、一名朝生、出釋藥性 一名女靑、出釋藥 一名兜鈴蛇銜、出雜要訣 和名都木女、

蛇含

雉莚

〔本草和名 十一草〕女青一名雀瓢、蘇敬注云、子似蘿摩、故以名之、蛇銜根也、蘇敬曰、一名雀由祇、出釋薬性、和名加波禰久佐

〔倭名類聚抄 二十草〕女青　本草云、女青一名雀瓢、和名加波禰久佐　蘇敬注云、子似瓢形、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注云、葉似蘿摩、兩葉相對、根似白薇、生平澤、莖葉並臭、又引別錄云、葉嫩時似蘿摩、圓端、大莖、實黑、莖葉汁黃白、亦與前說相似、○中略證類本草引子似瓢形、大如棗許、故名雀瓢、本草和名引與此全同、源君蓋依補仁、然欠大如棗許字、則雀字義不斷、節略失當、

〔多識編 二草部〕蛇含、宇豆末米久左、一云、幾良牟左宇、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕蛇含　ウツマメクサ延喜式　オヘビイチゴ　オトコヘビイチゴ　キラ　ンサウ金瘡小草ニモコノ名アリ、故ニ黃花ノキランサウト名テ別ツ、　五葉草勢州、漢名ノ五葉草ハ五爪龍ナリ、　キヂムシロ大和本草　一名蛇銜草集驗方　蛇繼草ノ蛇銜條　増、一名紫背草附方

路傍ニ多シ、葉ハ蛇苺葉ニ似テ五葉トナリ、五加葉ノ形ノ如シテ長ク、深綠色叢生ス、又七葉八九葉トナルモアリ、春末數莖ヲ抽ヅルコト一尺餘、葉互生ス、三葉ニシテ蛇苺葉ノ形ノ如シ、莖ニ枝又ヲ別チ黃花ヲ生ズ、蛇苺ヨリ小シテ委陵菜カハラサイゴノ花ニ似タリ、○中略

女青　蛇含ノ根、

女青ニ藤本草本ノ二種アリ、本條ハ草本ノ女青ニシテ、卽蛇含ノ根ナリ、藤本ノ女青ハヘクソカヅラナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

信濃國十七種、○中略女青六斤、

〔大和本草 九雜草〕雉莚　五葉アリ、葉ノ側刻缺アリ、四月ニ單黃花ヲ開ク、毛茛ノ花ニ似タリ、其莖如蔓シテ短シ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　雞腿兒きじむしろ

〔新撰字鏡〕地楡〈衣比久々佐〉

〔本草和名九〕地楡 一名玉豉、〈陶景注云、子黒如豉、故以名之、〉一名玉札文、一名玉豉文、一名金玉之香華、一名豉母、〈出雜要訣〉呼地楡者英華之精也、〈出大清經〉和名阿也女多牟、一名衣比須禰、

〔倭名類聚抄二十〕地楡 陶隱居本草注云、地楡一名玉豉、〈和名阿夜女太牟、一云衣比須禰、〉子黒似豉、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十〕證類本草中品引、作葉似楡而長、初生布地、而花子紫黒色如豉、故名玉豉、一莖直上、此節引、○中略 圖經、宿根三月内生苗、初生布地、莖直高三四尺、對分出葉、葉似楡少狹細長、作鋸齒状、青色、七月開花、如椹子紫黒色、根外黒裏紅、似柳根、時珍曰、其葉似楡而長、初生布地、故名、

〔多識編二山草〕地楡、今案乃古岐利久佐、

〔東雅十五草卉〕決明をエビスグサといひ、地楡をエビスネといひ、○中略 始て出でし地方をもて呼ぶに似たり、

〔宜禁本草中〕地楡 微寒、治熱痢血痢瘡痍、止汗消渇、葉作飲代茶甚解熱、

〔大和本草六〕地楡 ワレモカウ也、京大坂ノ植木屋ニアリ、ノコギリ草ヲ地楡トスルハアヤマリ也、別ニワレモカウト云物アリ、ヒ類ナリ、花如穗似荻花、

〔物類品隲三草〕地楡 和名ワレモカウ、處處ニ多シ、花紫色ナリ、一種白花ノモノアリ、葉細小花長コト寸餘ニシテ細シ、以上二種皆下品ニシテ不ㇾ堪ㇾ用、漢種上品、享保中種子ヲ傳テ、今官園ニ多シ、葉大抵和産ト同シテ、又別ニ小椅葉アリ、和産ハ椅葉ナシ、根ノ状沙參防風ノゴトク、直根ニシテ軟ナリ、年ヲ經タルモノ勞根生ズトイヘドモ、皆下ニ向フ、和産根横ニ出テ紫黒色ニシテ、堅剛ナルニ異ナリ、譬ヘバ朝鮮參ト和ノ竹節參ノゴトシ、功用優劣辨ヲ待ズシテ明ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕地楡 アヤメタム〈和名鈔〉 エビスネ〈同上〉 シヒモノマタラ〈古歌〉 ノヅチ〈同上〉 ワレモカウ タンゴイタバキ〈江州〉 ダンゴバナ〈伊勢〉 ノコギリサウ ノカヘリ

草下毛

石州キウリグサ 日州ポウブパナ 大和ノコギリグサ 近江テンピサウ 紀州花色赤キ故名ク、和方書ニ天皮草ト云ハ竹ノ青皮ナリ、　一名無名印(根新緒)　玉札(群芳譜)　豚槍係(石類原)　菰菜(郷藥本草)　壻、一名掃除(博雅)

ワレモカウニ同名多シ、蘼草、蒼朮、カルカヤニ似タル草、皆ワレモカウノ名アリ、

諸州皆アリ、山野向陽ノ地ニ生ズ、一窠數十葉叢生ス、形紫藤葉ニ似テ大ニシテ鋸齒アリ、楡葉ノ如シ、夏月叢葉中ヨリ數莖ヲ出ス、高サ四五尺葉互生ス、葉間ゴトニ枝叉ヲ分ツコト長シ、ソノ端ニ細花簇マリ毬ヲナス、長サ六七分潤サ三四分、形筆頭菜ノ如シ、又重層シテ生ズルモノアリ、赤紫色ノモノ多シ、又紅色ナルモノ粉紅色ナルモノ白色ナルモノアリ、白色ナルモ粉紅色ナルモノモ穗長ク、葉モ細長ク、苗高サ六七尺ニ過グ、白花ハ筑前ニ多シ、粉紅花ハ江州湖邊ニ多アリ、此外數品アリ、此根ヲ採リ日乾シ擣キ碎キ艾絨ノ如クシ、甆器ニ灸シテ孔ヲ穿ツベシ、舶來ノ者ハ直根ナリ、和産多クハ横生シテ硬シ、下品ナリ、國ニヨリ直根ナルモアリ、粉紅花白花ノ者ハ直根ナリ、享保年中ニ渡リシ唐種ハ、根柔直ニシテ防風根ノ如シ、上品ナリ、

〔草木育種後編 下 藥品〕地楡(われもかう)(草木) 和蘭にてピンピチといふ、山の赤土に植てよし、糞を澆ぎて勢にし花に白と紅と種々あり、和蘭にて根を豚舍纖維の弛弱に用ふ、種類多し、

〔剪花翁傳 四 八月開花〕仙蓼(われもかう) 花煤竹茶色開花八月中旬より十月上旬まであり、方日(ひあたり)、濕地二分濕、土肥えらばず、分株春彼岸よし、形ちはりの木のごとく、高さ三尺にもおよぶなり、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、(中略)地楡、黃耆各十斤、　大和國卅八種、(中略)地楡十六斤、(下略)

〔武江產物志 藥草〕志村邊ノ產　白花地楡　鳳山ノ產　地楡(道灌ニモ)

〔倭訓栞 前編 十一〕まもつけ(中略)草下つ毛あり、𧃴麻也といへり、花に紅白あり、

〔大和本草 七 草花〕草下毛(しもつけ) 木ニモ下ッ毛アリ、花ハ相似タリ、初夏發細紅花、一朶群開如敗醬、

〔和漢三才圖會　九十二末山草〕繡線菊　俗云之毛豆介

按繡線菊高一二尺、葉似薔薇葉而小、五月開碎花、狀似胡蘿蔔而淡赤色可愛、又有白花者、

一種樹有繡線菊、其樹葉似粉團花而枝頂上開花、狀似繡線菊、故俗呼曰木繡線菊、未知其本名、

〔枕草子　三〕草の花は

しもつけのはな

〔和泉式部續集　下〕二十日、とはきはどよりとみゆるふみを、もてきたれば、さもやとおもひてとはすれば、あらぬ所のなりけり、

しもつけの花とみることそかひなけれ人のとふべきみかはと思へば

〔散木弃謌集　十雜上〕しもつけ

恨みても何にかはせん花みると今朝しもつけぬ心せばさは

〔本草和名　十草〕牙子、一名狼牙、一名狼子、一名犬牙、陶景注云、狼牙似獸之牙齒、一名虎牙、一名支蘭、一名天牙、一名雅牙、一名代、一名羨、一名附子、注月令、七名出雜要訣、已上　和名宇末都奈岐、

〔倭名類聚抄　二十草〕狼牙　陶隱居本草注云、狼牙一名犬牙、和名古末豆奈木　根牙似獸牙齒、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄　十草〕千金翼方證類本草中品有牙子、云一名狼牙、一名犬牙、則二名並本條之文、源君引併爲陶注、非是、○中略　蜀本圖經曰、苗似蛇莓而高大、深綠色、圖經曰、根黑、

〔書言字考節用集　六生植〕狼牙草　ウマツナギ、本草、苗似蛇莓、根黑若獸牙、　金剛草　上同　犬牙草　又云文選

〔大和本草　九雜草〕狼牙草　ウマツナギ　葉如蘿蔔有岐、ヨコ廣シ叢生ス、就グサナトヲ假ニ赤ク腫ル、ニ、此草ヲスリテ付レバ忽愈ユ、其生ナルシボリ汁ヲノミ、或センジテノム、或云、外ニ此草ヲツケ、内ニハ紫花ノキランソ草ヲモミテ、其汁ヲ吞ベシ、又金瘡ノ血ヲ止ム、モミテ付ベシ、小兒ノ赤草ナドニ用、必效アリ、別ニ又大根菜ト云草アリ、

水楊梅

翻白草

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕狼牙

和名鈔ニコマツナギト訓ズ、大葉ノダイコンサウヲ狼牙ニ充ル古説アリテ、今藥肆ニモダイコンサウヲ狼牙ト稱シ賣レドモ穩ナラズ、其大葉ノダイコンサウハ、隰草類ノ水楊梅ナリ、又小葉ノダイコンサウアリ、救荒本草ノ水蘿蔔ノ類ナリ、狼牙ハ野州日光及足尾山中ニ生ズ、圓莖高サ一二尺、葉互生ス、三葉一蒂ニシテ、蛇含(オヘビイチゴ)葉ノ形ニ似テ毛アリ、六月枝梢ニ花ヲ開ク、五瓣黄色、形蛇(ヘビ)苺(イチゴ)花ニ似テ小ナリ、ソノ根曲リ尖リテ、獸牙ノ形ニ似タリ、嫩根ハ色白ク舊根ハ色黒シ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

常陸國廿五種、略○中狼牙一斤九兩、近江國七十三種、略○中狼牙十四斤、略○下

〔大和本草九雜草〕水楊梅　狼牙草ニ似テ葉小、ニ黄花如〻穗、路傍多生高一尺餘、其實似〻楊梅〻、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕水楊梅　○ダ○イ○コ○ン○サ○ウ○　○ダ○イ○コ○ン○ナ○大和本草　○ノ○ダ○イ○コ○ン○備後　○八○丈○草○

江州　○コ○マ○ツ○ナ○ギ○江州　大坂

別ニ小葉ノダイコンサウアリ、故ニ此草ヲ大葉ノダイコンサウト呼テ分ツ、山野道傍ニ極テ多シ、春ハ地ニ塌シテ叢生ス、葉ノ形蘿蔔(ダイコン)葉ニ類シテ厚ク深緑色、柔毛アリテ澀刺ナシ、夏月莖ヲ抽コト二三尺、枝葉互生ス、枝頂ゴトニ一花ヲ開ク、五出、形梅花ノ如ニシテ深黄色、下ニ重蒂アリ、花謝シテ綠毬ヲ結ブ、大サ三四分許、楊梅ノ形チニ似リ、根ハ年ヲ經テ枯レズ、形ハ杜衡ノ如ク淺黑色ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕翻白草　○ツ○チ○ナ○新校正　○ツ○チ○グ○リ○　○ブ○ク○レ○ウ○サ○ウ○大坂　○ウ○ラ○カ○ゼ○グ○サ○

○ミ○ツ○バ○ザ○イ○コ○　○カ○ワ○ラ○ザ○イ○コ○同名アリ

此ニ三葉七葉ノ二種アリ、此書ニ說ク所ノ翻白草ハ三葉ノ者ナリ、葉ハ蛇含(キランサウノ)葉ニ似テ、背ニ白毛多シ、一根數葉多凋マズ、春ニ至リ莖ヲ生ジ、地ニ布キ梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣黄色、委陵菜(カハラサイコノ)花

ニ異ナラズ、又七葉ノ者ハ救荒本草ニ說ク所ノ、雞腿兒一名翻白草ナリ、葉ハ紫蘇葉ニ似テ鋸齒アリ、葉背ニ白毛多シ、花ハ三葉ノ者ト同ジ、根ハ皆小指ノ大サノ如クニシテ兩頭尖リ、一窠ニ數枚アリ、赤皮白肉生食スベシ、小兒採リ食フ、又葉背白カラザル者亦二品アリ、七葉ノ者ヲ大葉ノカハラザイコト云、是雞腿兒ノ一種ナリ、三葉ノ者ヲミツバザイコト云フ、一名ムマノミツバ(京北山)是翻白草ノ一種ナリ、花ハ二品トモニ形色同シテ大ナリ、又委陵菜ニモ翻白菜ノ名アリ、救荒本草ニ出ヅ、

〔重修本草綱目啓蒙〕八(山草)柴胡〇中略

又河原柴胡ト呼ブモノアリ、胡蘿蔔葉ニ似テ背ニ白毛アリ、故ニウラジロトモ云、中夏ニ至リ、五出ノ黃花ヲ開ク、根ハ皮赭黑色嫩時ニ粗皮ヲ去リテ乾シ貨ル、庸醫誤用テ解邪ノ材トス、コレ菜類ニシテ柴胡ノ類ニ非ズ、卽救荒本草ノ委陵菜一名翻白菜ニシテ、本草原始ノ翻白草一名雞腿根ナリ、又一種河原柴胡アリ、此ニ三葉ナル者ト、七葉ナル者トアリ、總ジテブクレウサウト呼ブ、三葉ナル者ハ倭名ミツパザイコ、卽菜部ノ翻白草、一名湖雞腿、一名雞腿根是ナリ、コノ七葉ナル者ヲ救荒本草ニ、雞腿兒、一名翻白草ト云フ、三葉七葉ノ二品皆葉背ニ白毛アリ、故ニ翻白草ノ名アリ、今又大葉ノ河原柴胡ト呼モノアリ、葉七葉ノ方ニ同ジクシテ背ニ白毛ナシ、是雞腿兒ノ類ナリ、又三葉ノ者ト形同クシテ、背ニ白毛ナキモノアリ、赤ミツバザイコト呼、是翻白草ノ類也、又白頭翁ニシヤグマザイコノ名アリ、又徐長卿ニスヾザイコノ名アリ、

〔本草和名〕十八(菜)莧實(仁諝音胡辨反)一名馬莧、一名莫實、一名莧菜、白莧、細莧、赤(同)一名糠莧、赤莧一名黃(逢佳反)馬莧一名馬齒莧(本條)一名鵜莧(出ニ雜名苑)一名蘇雞(出ニ大清經)和名比由、

〔倭名類聚抄〕十七(菜)莧　本草云、莧(音現、去聲、和名比由、)味甘寒無毒者也、

〔類聚名義抄〕八(艸)莧(ヒユ　莧之去聲)　赤莧アカヒユ　馬莧ウマヒユ

〔下學集草木下〕莧（ヒユ）侯澗反、莧與鼈不可合食、莧菜養鼈甲、以土覆之、一夜變爲鼈也、

〔和爾雅七菜蔬〕莧（ヒユ）　馬齒莧（スベリヒユ）馬莧、五行草並同、　白莧（シロヒユ）大者曰白莧、又云人莧、　野莧（クロヒユ）小者爲野莧、又云猪莧、　黄莧（アカヒユ）爾雅云、赤莧曰黄、

〔東雅十三穀蔬〕莧ヒユ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、莧味甘寒也など見えし事もあれば、或は其性の寒なるによりて、此名有けんもしるべからず、ヒユとは、冷なるといふが如也、莧染色具に、本草註を引て赤莧あり、莖葉純紫不堪食之と註せしは、これをもて染料となしける也、また陶隱居本草を引て、馬莧一つに馬齒莧、漢語抄にウマヒユと註せしは、即今俗にスベリヒユといふ是也、

〔物類稱呼三生植〕莧ひゆ　東國にてひやうと云、奥津輕にてひやうあかざといふ、加賀にてはびやうと云、馬齒莧、相模にていぬひやうと云、加賀にてすんべらびやうと云を、江戸にてすべりびやうと云、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひゆ中略○　和名抄に莧をよめり、性冷の義にや、東國にひやう、津輕にひやうあぎ、加賀にはひやうといふ、赤莧をあかひゆとよめり、染色部に入たり、馬齒莧をうまひゆとよめり、相模にいぬひやうといふ、今いふすべりひゆ也、加賀にすんべりひやうといふ、白莧は唐ひゆ也、五色莧は花ひゆ也、又まひゆといふは、常のひゆにや、

〔本朝食鑑三柔滑菜〕莧訓比由、本朝式亦同、
集解、田野家園處處多有之、其下種培養者長大也、其野生者細小也、狀類在藍雞冠而長大者四五尺、大抵三月撒種、苗葉似藍而小圓有皺文、莖葉倶可作蔬茹、六月勁梗不堪食、開細花成穗、或著莖結子、其穗中細子扁而光黑、與雞冠子相同、九月收之、不收則至冬不凋、又有紅莧、初嫩則赤、長而紅、老而紫、莖葉同色、可食可愛、霜後不變亦佳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕莧菜　和名比由中略○
按莧似藍而微圓有皺、六月開細花成穗、子扁光黑似雞冠子、人採莖葉爲蔬、野生者葉小、又有莖葉敷

地者、

赤莧、莖葉赤紫色、高者三四尺、略似雁來紅、而葉大、五色莧亦似十樣錦、而共種庭園愛之、

〔重修本草綱目啓蒙 十九隰草〕莧　ヒユ和名鈔　ヒヤウ俗名　ヒヨ武州、江州、　ヒイ雲州、備前、　カラヒイ備前　ヒイナ阿州　ヒヤウアカザ津輕　ハビヤウ加州　ヒヤウナ紀州　マヒユ　トウビユ　トウノヒユ肥州〇中略

莧ハ總名ナリ、數種アリ、食用ノ者ハ人莧白莧ナリ、故ニ單ニ莧ト云ハコレヲ指ス、人莧白莧同物ニシテ、大小ニヨリ名ヲ異ニス、即今俗ニヒヤウト呼ブモノナリ、春種ヲ下ス、苗雞冠ニ似テ紅ナラズ、葉モ亦相似テ圓ニシテ尖リ互生ス、秋ニ至リ高サ四五尺、葉間ゴトニ穗ヲナシ花ヲ開ク、極テ細小ナリ、後小黑子ヲ結ブ、光リアリテ雞冠子ノ如シ、霜シテ苗根共ニ枯ル、

〔成形圖說 農二十三〕比由〇和名鈔中略

本艸に六。種ありといへども、要は四種ぞあなる所謂白莧。赤莧。斑莧、野莧なり、家莧は葉莖大にして方五六寸に至ものあり、白莧をよろしとす、斑なるは白莧の變色にて形は殊に大なり、〇中略今試るに、莧の類六月以後は食ふに堪へず、老なる時は長甚高く、細花を開き穗をなす、穗中に細子あり、形扁くして光黑し、〇中略野莧は、田野に自生す、是を細莧と云、其莖紫色にして柔に葉細し、其味却て家莧に勝れり、

〔本朝食鑑 三菜之〕汰。莧。〈俗訓比由、古訓二字異比由〉

釋名〈即馬齒莧也、聊類馬莧、布地面生、莖葉細微、俗呼爲馬齒莧、必大(平野)按、從俗稱汰莧、是指利之義耶、汰字俗用爲賤者〉

集解、田野家園多生、柔莖帶赤、布地細細對生、葉細微似馬齒、狀柔滑有光、采苗作蔬、六七月開細花、結小尖實、實中細子如葶藶子狀、此亦三月下種、然野生者甚多矣、

〔重修本草綱目啓蒙 十九隰草〕馬。齒。莧。　ウマビユ和名鈔　スベリヒユ　イハヒブル伯州　スベリヒヤ

鷄冠

ウ佐渡　ヌメリヒユ防州　イヌヒヤウ相州　ズンベラピヤウ加州中略○此草春ハナシ、夏ノ初子生ズ、莖ハ圓ニシテ赤ク、地ニ布テ直立セズ、葉兩對ス、形稍ニシテ厚ク、長サ五七分光リアリ、故ニ保昇ノ說ニ、此草ヨリ水銀ヲ取ルコトヲ云リ、

〔農業全書四菜〕莧

莧種々數多し、二月に種子を下し、三月の末うゆべし、其色青きあり、赤き、紫、又まだらなるあり、料理には、青きを用ゆべし、味もよし、是葉菜の絕聞に盛長し、めづらしき物なり、七月以後は食する に宜しからず、種る事は、四五月園の廻りにうへ、又は茄子のわきにうへて、同じくこゑを少用ゆれば、よくさかへしげりて、味もよく和らかなり、赤き莧は霜にあひて、色濃愛すべし、但此時は食味には用ひず、又瓜と莧と鼈と、同じく食すれば、甚病を生ず、おなじ時分に多き物なれば、同食を愼むべし、馬齒莧とてあり、是莧の類にあらず、葉馬の齒のごとく、其性又莧に似たれば、馬齒莧と書り、和名すべりひゆと云意は、其性なめらかにして莧に似たるゆへなり、其葉をすりて、腫物瘡瘡にぬりてよく治す、葅てあへ物さしみなどに用ゆべし、脾胃よはき人には、よろしからず、

〔宜禁本草五乾〕莧菜　甘寒無毒、人莧葉小、白莧葉大、赤莧莖葉俱赤、赤莧能療赤下、而不堪食、殺虫毒、孟詵云、莧補氣除熱、人白二莧、實主青盲白翳、明目除邪、利大小便、去寒熱、殺蚘虫、霜後採、益精去肝風客熱、葉多食動氣煩悶、冷中損腹、與鼈同食生鼈瘕、赤莧根莖精處食之甚美、性微寒、故主血痢、

〔延喜式三十九內膳〕供養雜莧

日別一斗、○中略莧四升、五六七八月

〔多識編二草部〕鷄冠、今案登里佐久左、俗稱計士介、

〔書言字考節用集六生植〕鷄冠草ケイカウ俗云鷄頭花　鷄頭花ケイトウゲ本名鷄冠

〔大和本草七花草〕雞冠花ケイトウゲ　花紅白黃三色アリ品多シ、鮮紅ニシテ大ニ重ナル者上品ナリ、錦雞頭ト

雁來紅

云、南京ノ種尤ヨシ、好種ヲマキタキ鍾ロク醜クナルアリ、シゲクタウヘテ花初テ開ク時、アレキヲハ早ク拔去テ、好花ヲ養フベシ、三四月子ヨリ苗ヲ生ズ、六月ヨリ花サキ霜後ニ萎ム、凡五箇月ノ間シボマズ、百日紅山茶花海紅ナド、花久シクアリトイヘドモ、花落テカハル〴〵サキツヾク事久シキ也、一花ノ如此久シキニ壊ル事、雞冠花ニシクハナシ、其葉嫩キ時可食、性アシカラズ、草花譜曰、有紫白圓帶者、名二色雞冠、實ヲマキタク遲ク生ズルハ花ヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙十四草〕雞冠　ケイトウ　一名洗手花群芳譜　杜若藥圃同春　一孕雲閒情偶寄　紫冠識氏

韓國　波羅香秘傳花鏡

俗ニケイトウト呼ブ、雞頭ノ意ナルベシ、然ドモ此花ハ雞ノ冠ニ似タリ、雞頭ニハ似ズ、唐山ニハオニバスノ實ヲ雞頭ト云、雞冠數種アリ、一種莖短ク、僅ニ三五寸ニシテ、大ナル花ヲ開ク、高麗ゲイトウ、又南京ゲイトウ、チヤボゲイトウト云、漢名壽星雞冠、群芳譜　廣東雞冠、同上　一種花ノ形圓ニシテ末尖ルヲヤリゲイトウ、又スギナリゲイトウト云、漢名掃帚雞冠、花史左編　一種花ノ形扁大ナルヲトサカゲイトウ、又ヒラゲイトウト云、漢名扇面雞冠、群芳譜　此外ニモ種類甚多シ、一種掃帚雞冠ノ形ニシテ、莖ノ末及傍ニ細枝ヲ出シ、其梢各小扇面ノ如ナル者出テ、多ク下垂スルヲミダレゲイトウ、又ヤウラクゲイトウト云、漢名瓔珞雞冠、群芳譜　一種紅黃二色間リ開クモノヲ、サキワケゲイトウト云、漢名二色雞冠、花史左編　二喬雞冠、同上　唐山ニハ五色相間ルモノアリ、五色雲閒情偶寄ト云、

〔農業全書四〕雞頭花

肥地に宜し、手入よくこやしぬれば、莖葉大きになり、茹てあへ物ひたし物とし味よし、花さまざま見事なるあり、其味も莧には增れり、其性も能ものなり、

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、中略　秋花者、中略　雞頭花、

〔多識編二草〕雁來紅、毛美知久左、枕草子云加留久左、

青葙

〔書言字考節用集 六生植〕雁來紅（ガンライコウ）一名、老少年、時珍云、其葉九月鮮紅、望之如花（カマツカノハナ）、故名、又一種、六月葉紅者、名二十様錦一云々　雁來紅（キミアゲハ）

〔和爾雅 七草木〕雁來紅（ガンライコウ）同老少年　十様錦（シフヤウキン）葉早紅而黄綠一者、爲二十様錦一、葉雁來而紅而綠一者爲二雁來紅一、

〔藻鹽草 八草〕雁來草
かまつかの花 又はかきつか花ともいふ也、此花さく比雁來と云々、

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕青葙〇中略
雁來紅　ハゲイトウ、ガンライサウ、佐州ハゲイトウニ數種アリ、雁來紅ハハゲイトウノ内ニテ、脚葉ノ色紫ニシテ秋ニ至テ頂ニ深紅色ノ葉ヲ出スヲ云、一名春不老、薰雅還少年、八陵生秋紅、三才圖繪秋色、偶閒情寄還童草、同上映日紅、汝南圃史百日紅、事物紺珠後庭花、救荒本草一種脚葉綠色ニシテ、秋ニ至テ頂ニ黃色ノ葉出ルヲ雁來黃ト云、花戸ニテ黃ガンライト云フ、十様錦ハニシキサウ、モミヂサウト呼ブ、此モハゲイトウノ内ニテ、秋ニ至テ紅綠黃紫ノ四色雜ル者ヲ云、一名錦西風、花鏡秘傳錦布衲、群芳譜玉樹後庭花、汝南圃史十錦、空明子草城譜

〔剪花翁傳 四七月開花〕葉雞頭　雁來紅　にしき草　黃色葉あり、猩々葉あり、十分の色は七月下旬より用ふ、方日向、地中乾、土塵交、肥淡小便、下種春彼岸よし、

〔枕草子 三〕草の花は
わざととりたてゝ、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげ也、名ぞうたてげなる、かりのくるはなともじにはかきたる、

〔本草和名 十草〕青葙 楊玄操音私羊反 子名草決明、一名草蒿、一名萋蒿、一名崑崙草、出蘇敬注一名卑高、一名葙蘂子、已上出釋藥性一名青蒿、出疏文和名宇末佐久、一名阿末佐久、

〔倭名類聚抄 二十草〕青葙　本草云、青葙、私羊反、和名宇末佐久、一云阿萬佐久、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注、青葙子云、似麥欄花、其子甚細、蘇云、此草苗高尺許、葉細軟、花紫白色、實作

桃朱術

角子黒而扁光、似莧實而大、生下濕地、蜀本圖經、葉細軟長、亦爲夏、圖經云、二月内生青苗、長三四尺、葉濶似柳細軟、莖似蒿青紅色、六月七月内生花、上紅下白、子黒光而扁、有似莨菪、根似蒿根而白、直下獨莖生根、時珍曰、青葙生田野間、嫩苗似莧可食、苗葉花實、與雞冠花一樣無別、但雞冠花穗或有大而扁或團者、此則梢間出花穗、尖長四五寸、狀如兎尾、水紅色、亦有黄白色者、子在穗中、與雞冠子及莧子一樣難辨、蕭炳言其結角誤矣、

〔和爾雅七草木〕青葙子（ノゲイトウ）（雞冠莧、草蒿、萋蒿、崑崙草、野雞冠、並同、其子名草決明、）

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕青葙　アマサク（和名鈔）　ノゲイトウ　イヌゲイトウ（雲州）　キツネピ（越州）　ノビヤキヤン（同上）　イヌノオ（讃州）　一名靈冠菜（救荒本草）　還瞳子（醫學正傳）　青囊子（品字箋）　白臺月阿比（本草[illegible]）　臺月阿囉（村家方）

ノゲイトウノ名アレドモ、常ノ雞冠花（ケイトウ）ノ野生シタルニ非ズ、別ニ一種アリ、春後苗ヲ生ズ、一根一莖直上ス、高サ一二尺或ハ五七尺、圓葉互生ス、雞冠花葉ニ似テ淡綠色、又瘠地ノ者ハ狹小ニシテ、番椒（トウガラシ）葉ニ似タルモアリ、夏ノ末枝梢ゴトニ穗ヲ出ス、形圓細長サ三五寸、小花密布シテ長筆頭ノ形ノ如ク、大ナル指ノ如シ、色白クシテ尖ニ淡紅色アリ、故ニキツネピノ方言アリ、一種穗末淡黄色ナルモノアリ、黄花ノ青葙ナリ、花後實ヲ結ブ、圓扁ニシテ極テ小ク、雞冠花子ニ似タリ、黒ク光リ漆ノ如シ、是藥用ノ青葙子ナリ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、

〔多識編二隰草〕桃朱術、今案鮭奈留能計伊土介、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕桃朱術（たうしゆじゆつ）　陶朱術（略）○中

按桃朱術、初生似青葙、而葉似野蜀葵（みつば）、其花黄或白或紫、似百合花而小、子作角、中子白、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕青葙（略）○中

附錄、桃朱術、　蕭炳說トコロノ陶朱術ハ、黄花ノ青葙ナリ、陳藏器說トコロノ桃朱術ハ紫菫ナリ、

牛膝

和名ヰノコヅチ、コマノヒザ、ムクナキケマン、

〔新撰字鏡 草〕牛膝 爲乃久豆知、又爲乃伊比、又云百倍草、

〔本草和名 六草〕牛膝 陶景注云、莖節似牛膝、故以名之、 一名百倍、一名其稜、一名解倉、一名牛莖、一名[illegible]、一名餘容、一名白木、已上六名出釋藥性、一名牛唇、出小品方、一名蘆蘗、出雜要訣、和名爲乃久都知、一名都奈岐久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕牛膝 陶隱居本草注云、牛膝 和名爲乃久豆知 節似牛膝、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕御覽引吳普本草云、牛膝生河內或臨邛、葉如夏藍、莖本赤、陶注有雌雄、雄者莖紫色而節大、圖經、春生苗、莖高二三尺、靑紫色、有節如鶴膝、又如牛膝狀、葉尖圓如匙、兩々相對於節上、生花作穗、秋結實甚細、時珍曰、牛膝處々有之、謂之土牛膝、不堪服食、惟北土及川中人家栽蒔者爲良、秋間收子、至春種之、其苗方莖暴節、葉皆對生、頗似莧葉而長且尖艄、秋月開花作穗、結子狀如鼠負虫、有澁毛、皆貼莖倒生、

〔書言字考節用集 六生植〕牛膝(ヰノコヅチ) 對節菜(同) 山莧菜、牛莖、並同、見本草、 牛膝(コマノヒヂ) 對節菜(同)

〔古今要覽稿 草木〕ゐのくつち こまのひざ 牛膝

ゐのくつち、延喜式、新撰字鏡、本草和名、和名抄、名義抄、詳ならず、蓋しくとこと音通なるべし、ゐのこつち、本草類編、和漢三才圖會、岡村尚謙曰、古今醫統に牛膝一名鼓槌草、其莖有節如鼓槌、ゐのは全く猪のにして、恐らくは犬山椒犬蓼の犬の如く、ゐは其狀相似たるものをさしていひしにや、さらば鼓槌の名、和漢暗合の通稱なり、然るを本草啓蒙に讃州にてはゑのこつち、又ゑのころつちといふよし、かゝればゑのこは全く狗字なれば、即狗槌の義也、さはいへゑのこは、蓋し土人のゐのこを誤りていひ傳へしものなるか、又はゑはゐの音通なるもしるべからず、ゐのいひ、新撰字鏡 つなぎぐさ、本草和名 いなきくさ、醫心方、以上名義詳ならず、 こまのひざ、本草類編 駒はなを馬の如し、おもふに皇朝にては、古より牛膝を午膝とよみ來りしより出來し名なるべし、されば千金方藥注にも、こまのひざは牛字を午とあやまりたるなりとみへたり、ふし

たか、の千金方、延喜式、とせしは、全く誤りなり、此子やぶじらみ、本草啓蒙、伊勢方言、小野蘭山曰、此子熟するにしたがひ、側に垂れて、人の衣服に著く、故に名づく、おにこひつ、俗同じ、鬼は鬼あざみの鬼、牛膝に對していふ、姫こひつ、同上、鬼の姫に對す、百合の姫に同じ、柳葉牛膝、本草啓蒙、るにより名づく、牛膝、本草綱目引、百倍、同上、本草綱目云、百倍言其功如牛之多力也、牛莖、本草綱目、れに據れば、山莧菜、本草綱目、對節菜、同上、本草綱目云、其葉似莧、其節對生、故俗有山莧對節之稱、土牛膝、土地に生ぜし下品のものをいふ、

〔宜禁本草〕乾〔中〕牛膝　苦酸平、主寒濕痿痺四肢拘攣痛、逐血氣、墮胎、塡精髓、療男子陰消老人失溺、能治陰痿、塡精、葉切一斤、米三合、加豉煮粥、空腹食之、治氣濕痺腰膝痛、口舌瘡爛、牛膝酒浸含漱之、治尿結莖中痛欲死、根葉幷酒煮飲之、立愈、搗罨竹木刺、出、能引諸藥下行、春夏用葉、秋冬用根、

〔重修本草綱目啓蒙〕十一(草)牛膝　フ。シ。ダ。カ。延喜式　イ。ノ。コ。ヅ。チ。同上、古今要覽　イ。ノ。ク。ヅ。チ。和名鈔　エ。ノ。コ。ヅ。チ。讃州　コ。ノ。コ。ロ。ヅ。チ。同上　ト。リ。ツ。キ。ム。シ。　ナ。ツ。ボ。ウ。ゲ。サ。尾州　コ。マ。ノ。ヒ。ザ。古名　マ。ノ。ヒ。ザ。ダ。サ。木戸　ヌ。ス。ビ。ト。ダ。サ。備前　イ。ト。ロ。ベ。同上　ヤ。マ。ヌ。ス。ビ。ト。勢州　モ。ノ。ダ。ル。ヒ。

又云　一名通天杖　通天杖本草　杰ト同　劈波雲俗醫方　鰐斯歷救荒本草　鼓槌草同上　接骨草同上　鼓槌風根　苦杖根　土牛夕　牛膝橡邑　本草　牛無邑方　牛膝

川牛膝ハ川芎ノ例ニシテ、蜀ノ川州ニテ作リタル牛膝ヲ云、即上品ナリ、山野自然生ノモノハ土牛膝ト云、イノコヅチ也、原野ニ甚多シ、宿根ヨリ春苗ヲ生ズ、方莖ニシテ節高シ、故ニフシダカノ名アリ、枝葉節ニ對シテ生ズ、葉ノ形チ柿葉ニ似テ小ク尖リ、短毛アリ、初出ノ葉ハ紫色、大ニナレバ綠色トナル、又稀ニ柳葉ノモノアリ、濶サ一寸、長サ七寸許リ末尖ル、共ニ季夏ニ至テ枝ノ末ゴトニ細長穗ヲ出シ、多ク花ヲ開ク、其花ハ長サ一分餘ノ細キモノナリ、五瓣ニシテ綠色直生ス、後チ其中ニ子ヲ生ズ、熟スルニシタガヒ漸ク側ニ垂レ、人ノ衣服ニ著テ害ヲナス、故ニ此ノ子ニモ

千日紅

ヤブタラミ(野州)ノ名アリ、ソノ川牛膝ハ集解ニ謂ユル夏藍(タデアイ)葉ノ牛膝ナリ、是ヲモ柳葉牛膝ト云フ、山麓及ビ林下陰地ニ生ズ、葉ハ柳葉ノ土牛膝ト同クシテ、毛ナク光リアリ、莖色赤ク、或ハ紫、其節尤高シ、陶弘景ノ說ニ、莖紫節大者爲雄ト是ナリ、土牛膝モ節高ケレドモ、コレニ比スレバヒキシ、故ニ弘景ノ說ニ、青細者爲雌トイヘリ、花實ハ柿葉ノモノニ異ナルコトナシ、藥店ニ和產二種アリ、野生ノモノヲ採リ、數年肥地ニテ培養シタル根ヲ、眞ノ牛膝トイ、、山野ノモノヲ堀リ採タル根ヲ牛膝ト云、是皆土牛膝ニシテ下品ナリ、舶來牛膝ニ比スレバ、根短クシテ潤ナク、中心大ニシテ、味初苦ク後チ甘シ、舶來ノ牛膝ハ長サ二三尺、肥軟ニシテ潤多ク黃白色ナリ、根ヲ切レバ中ニ小白心アリ、其味初甘ク後苦シ上品トス、今夏藍葉ノ牛膝ノ根ヲ曝シ乾ス、漢渡ノモノニ異ナラズ、然レドモ野生故ニ根短シ、肥地ニ培養セバ、漢渡ノ如ク長タナルベシ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略牛膝苦參各卅五斤、　大和國卅八種、○中略茵草、牛膝各七斤、○下略

〔佐渡志五物產〕牛膝　方言チイソク　コノ國ニアルモノハ、山野自生ニテ土牛膝ナリ、

〔大和本草七民草〕千日紅　花鏡曰、本高二三尺、莖淡紫色、枝葉婆娑、夏開深紫色花千瓣、細碎圓整如毬、生於枝杪、至冬葉雖萎而花不蔫、婦女採簪於鬢、最能耐久、略用淡礬水浸過、晒乾藏於盒內、來歲猶然、鮮麗子生瓣內、最細而黑、春間下種、即生喜肥、今案千日紅、近年中華ヨリ來ル、其花千葉ニテアツク、形楊梅ニ似タリ、コキ紫色ニテウルハシ、冬ニ至テシボマズ好花也、魚汁馬糞ヲ肥トスベシ、或曰長寒、早ク霜雪ヲフセグベシ、子甚細微、

〔和漢三才圖會九十四濕草末〕千日紅(せんにちこう)

按千日紅、高二三尺、莖似秋海棠而淡紫色、葉似雞頭草而大、面有毛茸、八九月生花、深紫色、千葉圓而形似楊梅形、其盛久可百日矣、有樹名百日紅者、以勝之稱千日紅、不實唯收花、二月揉碎之蒔種生、或

商陸

插枝亦活、凡如葡花無實者、近年無商花、

〔草木育種 下 花〕千日紅 せんにちこう 鎭花 天和貞享年中に本邦へ初て渡と云、今甚多し、眞土赤土ともによし、二三月種を蒔、秋花あり、紅白二種あり、魚洗汁人尿等澆てよし、

〔本草和名 十 草〕商陸 一名葛根、仁諝音刀亭反 一名夜呼、筆名葛華、出陶景注 一名商棘、一名蕩根、一名常蓼、一名馬尾、已上四名出釋藥性 一名章陸草、一名當陸、一名覓陸、一名長根、一名神陸、一名白華、一名逐耶、一名天草、一名逵陸之精、已上九名出大清經 云、此神草也、 地精、赤葛實也、出大清經 和名以乎須岐

〔倭名類聚抄 二十 草〕商陸 本草云、商陸、和名伊乎須木

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕易覓陸、爾雅蓫薚馬尾、廣雅常蓼、馬尾、蔏陸也、蜀本圖經云、葉大如牛舌而厚脆、有赤花者根赤、白花者根白、圖經云、春生苗、高三四尺、葉青如牛舌而長、莖青赤至柔脆、夏秋開紅紫花、作朶、根如蘆菔而長、

〔書言字考節用集 六 生植〕商陸 ヤマゴボウ 本名 逐蕩 夜呼 草 出廣雅 時記、三月三日杜鵑初鳴、田子啼止、俄而鳴夜呼

〔宜禁本草 乾 中 草〕商陸 辛酸平、方家不甚乾用、白入藥、赤有毒、治水腫、生根切和鯉煮作湯、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕商陸 イ〇ホ〇ス〇キ〇 延喜式 イ〇ワ〇フ〇キ〇 和名鈔 ヤ〇マ〇ゴ〇ボ〇ウ〇 ト〇ウ〇ゴ〇ボ〇ウ〇 南部 イ〇ヌ〇ゴ〇ボ〇ウ〇 上州 ジ〇ヤ〇コ〇ス〇ギ〇 丹州 一名牛舌頭 救荒野譜 杜大黃 同上 文章柳 采取月令 蕩 神農本經 逐里君 郭璞本草 樟柳 附方 鹿腸 唐本草 章陸 附方 葛根 本經 章柳 正字通 者里苺 村家方 中庸 幼幼新書 增、一名當陸 品字箋 當逐 同上 章 同上

山中及ビ竹林中ニ多シ、好デ陰地ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖直立ス、高三四尺、烟草葉ニ似テ小ク末尖ラズ、毛茸ナク光リアリテ互生ス、夏枝梢ゴトニ穗ヲナス、長サ三四寸、珍珠菜 トラノヲ 穗ノ如シ、花大サ三四分、五瓣白色、中ニ綠實アリ、數多ク圓ニ並ブ、漸ク大ニシテ綠色ニ變ジ、又黑色ニ變ズ、花瓣モ亦赤色ニ變ジ、下ニ托シテ蕚ノ如シ、實落テ生ジ易シ、其根皮淡黃褐色、形萊菔 ダイコン ノ如シ、或

ハ人形ノ如キモノアリ、年久キ者ハ甚大ニシテ、徑リ一二尺ニ至ル、一種赤花ナル者ヲ赤昌ト云フ、毒アリト集解數ノ說ニ見ヘタリ、

〔草木育種 下 藥品〕商陸 草木 何れの地にてもよく生ず、肥に及ばず、實を蒔てもよく生ず根大くして數年枯ず、葉を採手にて摘切、菜となすべし、鐵にふるれば苦くなる也、此根水腫を治す、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種 (中略) 商陸八兩　伊豆國十八種 (中略) 商陸白石脂各五斤 (下略)

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木 (中略) 商陸、

〔佐渡志 五 物產〕商陸　方言ヤマゴボウ　山野圃畦皆アリ、本草集解ニ赤花ナルモノ毒アリトイヘリ、此國ニアルハ白花ノミナリ、

狼毒

〔本草和名 十一 草〕狼毒、一名續毒、和名也末佐久、(○佐久、恐倒置)

〔倭名類聚抄 二十 草〕狼毒　本草云、狼毒、(和名夜末久佐)

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕陶注云、與防葵同根類、但置水中、沈者便是狼毒、浮者則是防葵、蘇注云、此物與防葵都不同類、生處又別、開寶本草云、狼毒葉似商陸及大黃、莖葉上有毛、根皮黃肉白、蜀本圖經云、根似玄參、圖經云、四月開花、八月結實、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕狼毒　ヤマクサ (和名鈔)　一名續毒 (本經)　吾獨毒只 (採取月令)

和產未ダ詳ナラズ、古ハ渡アリ、今ハ渡ラズ、藥肆ニ持傳ルモノアリ、形商陸ノ如ク、皮黃白色密ニ橫紋アリテ、本手ノ羌活ノ如シ、疙瘩多シ、肉ハ白色、然レドモ古物ニシテ蛀多シ、

〔出雲風土記 島根郡〕凡山野所在草木 (中略) 狼毒、

紫茉莉

〔大和本草 七 花草〕白粉花。　葉ハ雞冠花ニ似テ枝節多ク繁茂ス、花ハ丁子ノ形ノ如ク少長シ、深紅色一又黃花アリ、朝開夕ニ萎ム、實黑ク大サ胡椒ノ如シ、內ニ白粉アリ、根ハ黑クシテ大根ノ如ク大ナ

瞿麥
石竹

リ、黄泥ヲ好ム、肥レバ花シゲシ、宿根ヨリ生ズ、又正二月種子ヲウヘテ其年花ヲ開ク、宿根ヨリ生ジタルハ、六七月ヨリ花開ケ、九月ノ末ニ終ル、盛久シ、中華ノ書ニテ未見之、外國ヨリ來レル物ナルベシ、其性及功能シレズ、

〔和漢三才圖會九十四本草〕白粉草　正字未詳、　於。之。呂。以。乃。木。

按白粉草、春生苗冬枯、高二三尺叢生、葉淡青柔、似白鷄頭葉微小圓、其花朝以後萎、至夕陽開、深紅色五出單葉蕚長一寸餘、亦紅花中出紅蕊、細如絲、蕚本結子灰黑色、皺如胡椒而中滿白粉、採之塗婦人面、光澤優於鉛粉、俗呼曰白粉草、其葉採汁傅折傷及疥瘡小瘡皆良、重剝皮取用白粉、敵況膏佳、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕火炭母草　詳ナラズ

ワシロヒバナニ充ル古說ハ穩ナラズ、ワシロヒバナハ蓮生八牋ニ載スル所ノ紫。茉。莉。ナリ、一名臙脂豉、閩書狀元紅、花鏡秘傳春分子ヲ下ス、園庭高サ二尺許、枝四旁ニ繁布シ、高ク聳ヘズ、節高ク紅ニシテ秋海棠ノ莖ノ如シ、其枝葉兩兩相對ス、葉圓ニシテ尖リ、莧葉ノ如シ、淡綠色、秋ニ至テ枝ノ梢ゴトニ花ヲ簇生ス、夕ニ開キ朝ニ萎ム、形牽牛花ニ似テ小ク、五尖アリ、內ニ長キ蘂ヲ吐ス、其花深紅色ナリ、又白色紫色黃色アリ、黃ニシテ深紅間ル者ヲ花戸ニテ、キンゲンシヤウト呼ブ、花謝シテ圓實ヲ結ブ、大サ三分許リ黑色硬クシテ皺アリ、打破スレバ殼皆厚シ、其內ニ白キ粉アリ、故ニワシロヒバナト呼ブ、根ノ形直長ニシテ萊菔(ダイコン)ノ如シ、子熟スレバ苗根共ニ枯ル、然レドモ九州ニテハ舊根枯ズ、春ニ至テ更ニ苗ヲ生ズト、大和本草ニ云リ、

〔新撰字鏡草〕瞿麥　奈。氐。之。古。

〔本草和名八草〕瞿麥　仁諝音衢、陶景注云、子頗似麥、故以名之、一名巨句麥、楊玄操音九靈反　一名大菊、一名大蘭、根名紫葳、華名茈、已上二名出蘇敬注、和名奈天之古

〔倭名類聚抄二十草〕瞿麥　本草云、瞿麥一名大蘭、和名奈天之古、一云止古奈豆、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按説文菊字注云、大菊蘧麥、爾雅亦云、大菊、蘧麥、本草瞿麥、卽蘧麥之假借、本草大蘭、當是大菊之譌重複也、又按陶弘景云、一莖生細葉、花紅紫赤可愛、子頗似麥、故名瞿麥、圖經云、苗高一尺以來、葉尖小青色、根紫黑色、形如細蔓菁、花紅紫赤色、亦似映山紅、二月至五月開、七月結實、作穗子、頗似麥、故以名之、李時珍曰、石竹葉似地膚葉而尖小、又似初生小竹葉而細窄、其莖纖細有節、高尺餘、梢間開花、田野生者、花大如錢、紅紫花、人家栽者、花稍小而嫵媚、有細白、粉紅、紫赤、斑爛數色、俗呼洛陽花、結實如燕麥、內有小黑子、

〔東雅 十五草卉〕瞿麥ナデシコ　倭名鈔に本草を引て、瞿麥一名大蘭、ナデシコ、一にトコナツといふと註せり、万葉集には石竹讀てナデシコといひけり、瞿麥また石竹の名あるが故なり、今の如きは、田野に生ずるものを、ナデシコといひて瞿麥の字を用ひ、人家栽るものをば、石竹の字を用ひて、其字の音をもて呼ぶなり、古にも石竹をば又ヤマトナデシコなど云ひけり、ナデシコといふ義詳ならず、トコナツとは其花の開く事、春より秋に至て、常に夏の如くなるをいふなり、藻塩草にトコナツ、万葉集に四時美とかけり、夏秋は歌によむ、春冬はいまだよまずと見えたり、されど霜さゆる朝のはらの冬枯にひとはなさけるやまとなでしこ、といふ歌の如きは、冬によみしと見えたり、

〔壒嚢鈔 三〕一石竹。ト云フハ何レノ異名ゾ
石竹ニ二ノ説アリ、一ニハヤマスゲト云フ、一ニハ瞿麥ト云フ、多説ノ中ニナデシコト云フハ、ナヲヨロシキ説歟、万葉ノ家持ガ詠云、
石竹(ナデシコ)ノ其花ニモカアサナ〳〵手ニトリモチテコヒヌ日ナケン、又同集介云、
ミワタセバムカヒノ野ベノ石竹(ナデシコ)ノヲチナクヲシモアメナフリコソ、此等ノ歌ハ石竹ト書テ、ナデシコトヨメル事明也、樂府ニハ石竹金錢ナンゾクタ〳〵シキト云ヘリ、ヤマスゲモ花ハサケドモ、サシモモテナスベキ物ニシモ非ズ、是モ撫子ナルベシ、金錢ト云フハ、カラナデシコトテ、丹ノ色シタル花ノ、ナデシコニ似テ大ナルモノニヤ、

〔古今要覽稿草木〕なでしこ　とこなつ　瞿麥　石竹

なでしこ、一名やまとなでしこ、一名とこなつ、一名ひぐらしぐさ、一名かたみぐさ、一名なつかしぐさ、一名かはらなでしこ、一名いしのたけ、一名のなでしこ、一名ちやせんばなは、漢名を大菊、一名大蘭、一名蘧麥、一名瞿麥、一名巨句麥、一名句麥、一名麥句薑、一名石竹、一名石菊、一名錦竹、一名繡竹、一名南天竺草、一名天南竹といふ、此草は、古よりいづれの國の山野にも、そのれとよく生出るものなれども、その名の僅に口物にあらはれしは、元明天皇の御時に、出雲國に生いづるよし、その國の風土記にみえたるをはじめとし、(出雲風土記仁多郡條)聖武天皇の御時には、雲島のいはほにおふるなでしこと(萬葉集)いひ、野邊みれば瞿麥の花咲にけりど(同上)いひ、また見渡せば向ひの野邊の石竹、或は瞿麥はわがしめし野の花(同上)など歌によみて、皆人それ〴〵の思ひを述、延喜の御時には、いはゆる出雲、及び伊賀近江、また上總、下總などよりも、此子を採て藥用に奉りし也、(延喜式典藥寮)そのをのれと生出る中に、野邊のものは、その花淡紅色にて、山生のものは稀に紅色のものあり、(本草綱目啓蒙)今は野邊のものといへども、また白色のものあり、これは弘景の說に、一種微大、邊有叉椏といいへるものにて、近ごろはこれにも數種あり、(大和本草)また近世薩摩種といふものあり、その花尤大にして、單葉千葉、及び紅白淺深、間色の數品ありて、みるに堪たり、此たねをまくときは、花色よく變じ、野生のものはしからずとも(本草綱目啓蒙)いへり、これ即野邊に生出るなでしこの一種にして、又からなでしこあり、これ清少納言のからのはさら也と(枕草紙)いへるものにて、今は字音のまゝにこれを石竹とのみいひて、なでしことはいはず、清少納言は深養父の孫元輔の女にして、圓融院の御時の人なれば、それより以前に渡りこしものなれば、歌にいしたけ、またいしの竹とよめるは、此からなでしこの事なるべしとおもひしが、春日野に石の竹にも花咲と(夫木和歌集)いひ、あづまのおくにおふる石竹(後葉集續草引歌)ともよみしによれば、舊よりよみ來りしなでしこと同じ事にて、清

少納言のいはゆるからのをさしていひしにはあらず、然といへども、和泉式部の歌にみるに、猶此世の物と覺えぬにと千載和歌集よみしは、全くからなでしこの事にて、からより渡りこし後は、山野にをのれと生出るものをさして、大和なでしこといへるは、寛平の御時に、きさいの宮の歌合を始とし、古今和歌集それよりつき〳〵の撰集家などにその名をよみし歌殊に多し、扨やまとなでしこは、小野の日あたりよき所に生出て、葉は少さきささの葉に似て、それよりは極めて細く、莖は麥稈に似て、節ありて青くまたほそし、その高さ二三尺に至れば、梢ごとにひとへなる五瓣の花を開き、大さは錢程ありて、後に房をむすび、そのうちに少さき黑子あまたあり、またからなでしこは、これにくらぶれば、その莖やゝ大く、葉もまた相似て少しく大いなり、花を開く事、淺深紅紫、また白花のものあり、此種は時珍の說に洛陽花といへるものにて、その花瓣の鋸齒ありて、缺刻はなきもの也、また紹興本草に圖する所の絳州瞿麥といへるも、これと全く一物なり、また阿蘭陀石竹、南京瞿麥、朝鮮なでしこ、やまと石竹の數種あり、いはゆる阿蘭陀石竹、朝鮮瞿麥の二種は、後光明天皇の寬文年中に渡りこしものなれども、重訂本草啓蒙今あるものは阿蘭陀石竹の一種のみにて、その餘は皆詳ならず、また弘景の說に、一種葉廣相似而有毛、花晚而甚赤と、集注本草いへるは、これ卽今の仙翁花にて、寺島良安の說に、藤瞿麥フヂナデシコ葉厚形似$_{二}$麥門冬$_{一}$、其花數朶、形似$_{二}$桔梗$_{一}$、而白帶$_{レ}$紫と和漢三才圖會いへば、共に今ある草なれども、眞の瞿麥にはあらず、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕瞿麥○中略

、按瞿麥卽石竹也、今以爲$_{二}$二種$_{一}$、其葩周圍有$_{二}$刻齒$_{一}$而有$_{二}$切叉$_{一}$、似$_{二}$剪紅紗$_{一}$者爲$_{二}$瞿麥$_{一}$、無$_{二}$切叉$_{一}$者爲$_{二}$石竹$_{一}$、並

出$_{二}$於豫州$_{一}$者良、丹波紀伊次$_{レ}$之、

倭。瞿。麥。　莖葉細弱、花有$_{二}$紅紫白赤斑爛$_{一}$、單葉千葉數種、

南。京。瞿。麥。　株太莖細、而葉大$_{二}$於倭$_{一}$、其花單瓣紅、

瞿麥。　莖太高尺餘、葉厚形似貼首、面深青色、抱節兩兩對生、其花數朶小形似桔梗、而白帶紫、莖長淺青、

倭石竹。　莖葉細柔、其花有數品、從春至秋皆開、於子種而異品者爲珍賞、

阿蘭陀石竹。　株莖大、葉硬强、花亦大有數品、〈名二阿蘭陀撫子一也〉

〔重修本草綱目啓蒙〕〈十一隰草〉瞿麥　トコナツ〈同上古名〉　ナデシコ〈古今集〉　カハラナデシコ　ヤマトナデシコ　チヤセンバナ〈奥州〉　一名トマリグサ　ナツカシグサ　チヽコグサ　ヒクレグサ　歌麗獻〈綱目〉　句麥〈品彙〉　地面〈品字〉　石竹一名錦竹〈閩書南產志〉　繡竹〈秘傳花鏡〉

此草山野ニ極テ多シ、葉細長シテ深綠色、兩々相對ス、夏秋ノ間花ヲ生ズ、野生ノモノハ皆淡紅色ナリ、山生ノモノニハ稀ニ紅花ノモノアリ、其ニ花後小圓長角ヲ結ブ、內ニ小扁黑子アリ、熟スレバ角頂自開キ、風ニ隨テ子落ツ、此子ヲ收テ藥用ニ入ル、一種薩摩種ト呼ブ者ハ、花尤大ニシテ、單葉千葉紅白紫深淺同色數品アリ、觀ルニ堪タリ、此種ヲ下シテ花色ヨク變ズ、野生ノ者ハ然ラズ、時珍洛陽花ト云フ者ハ、即雒州種ノ瞿麥ナリ、故ニ通雅ニ時珍ノ說ヲ駁シテ、至曰石竹、即洛陽花、即弃也、瞿麥則是野生者、洛陽花此必以洛陽盛爲稱歟、蓋北人以爲美人花、爲繁粟也ト云リ、又俗ニ石竹ト呼者アリ、即廣名ノ石竹ナリ、和名カラナデシコ、此モ亦トコナツト云フ、野生ナシ、家園ニ多ク種テ花ヲ賞ス、色ニ數品アリテ甚觀ルニ堪タリ、花瓣ミナ鋸口ナリ、瞿麥ノ瓣ノ繊細ニ分レタ、絲ノ如ナルニ異ナリ、千葉ノ者ヲ十姉妹〈河間府志〉ト云フ、同名多シ、ボサツイバラ及鵲鴿、又一種ノ鳥ニ十姉妹ノ名アリ、古ヨリ瞿麥一名石竹トス、故ニ方書ニ石竹子ト云者皆瞿麥子ナリ、後世ハ分テ二種トス、今本邦ニモ二品アリ、然レドモ古方ノ石竹子ハ瞿麥ヲ用ユベシ、〈中略〉〇堺、一種白山ノ產ニ、フツメナデシコト云モノアリ、高サ八九寸、形容尋常ノ者ニ同ク、其花白色千瓣ニシテ數瓣相重疊シ、毬狀ヲナス、甚ダ美ナリ、又一種矮生ノ者アリ、江戶ナデシコト呼ブ、高サ

六七寸、形狀尋常ノ者ニ同クシテ、花ニ白色又淡紅色ニシテ赤心、白花ニシテ紅斑黑心等ノ品アリ、

〔草木育種 下 美花〕瞿麥(なでしこ)本草〇中略　七月種を蒔べし、黑ぼくに眞土等分に合せ、人糞を澆、夏の內曝置、此土をまぜ蒔植てよし、植替は二八月よし、三四月蘆を添て結立、𦸂出たる時、枝の𦸂を摘去ば、花大く咲もの也、又石竹は眞土に魚洗汁を澆てよし、又富士なでしこ、かわらなでしこは、眞土に砂をませてよし、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥
伊賀國廿三種、〇中略　連翹、瞿麥各六斤、　上總國廿種、〇中略　瞿麥、貝子各三斤、　下總國卅六種、〇中略　瞿麥六斤、　近江國七十三種、〇中略　瞿麥一斤二兩、〇下略

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山野所在草木、〇中略　瞿麥、

〔萬葉集 八 夏雜歌〕大伴家持石竹花歌一首
吾屋前之瞿麥乃花、盛有、手折而一目、令見兒毛我母、

〔萬葉集 十八〕詠庭中牛麥花一首
比登母等能、奈泥之故宇惠之、曾能許己呂、多禮爾見世牟等、於母比曾米家牟、

右先國師從僧清見、可入京師、因設飲饌饗宴、于時主人大伴宿禰家持、作此歌詞、送酒清見也

〔田氏家集 下〕五言、禁中瞿麥花詩、三十韻、并序
瞿麥一名巨句麥、子頗似麥、因名瞿麥、花紅紫赤、又有濃淡、春末初發、夏中最盛、秋冬不凋、續々開拆、寞文圖纈、異彩同葩、四時翫好、蘼蕪可愛、今年初種禁籬、物得地而增美、雖有數十名花、傍若無色香耳、但古今人嘲詠知小、蓋此花生大山川谷、不在好家名處、不亦然者、何得右薔薇、左牡丹、前蘭菊、後萱草乎、花亦有時、人亦有時、人臣奉勅而賦之、前修之末、能去焉、詩曰、

一瞿麥花非一、移栽供玉泉、苗苔曾結蔕、蕭艾敢同行、諸種應相妬、須芸自得常、敷芬新禁掖、變化舊疎荒、春採尖莖發、烟含細葉鮮、晴霑初寸截、晩露擬分鮮、脆軟紅蘇蒂、軟埀嬌紫房、半陰榮風暑、斜景射虹梁、坐對艶顏客、行隨笑臉娘、雨滋深留草、天深淺鮮芳、乍訝鶯投地、那知鶴聖場、採鍵風斷絕、文綺露團章、露口琪玗竹、通明琉璃床、透簾侍斷候、依砌助華堂、貴發施屏畫、塵除出鏡粧、當時贋蝶子、毎日引蜂玉、月宇當焼波、星壇圖煉芒、彤庭看取近、清畫厭來長、宴歩承仙履、宸居襲御香、繡衣驚奉使、錦服念歸郷、接影臨階合、連輝實幔張、實經推府記、性遂遠憂忘、獨館春三秀、偏憐過九陽、似嬈任冒暑、欲惜未殘霜、縦使迷流火、還將逐迅商、重榮象繪畫、異色度炎涼、不関洲蘋白、寧占籬菊黃、薔薇嫌有刺、芍藥愧無光、比喩心難罷、吟題手又疲、乾坤圖照甚、臨笑眞爭偏、

〔古今和歌集夏三〕となりよりとこ夏の花をこひにをこせたりければ、おしみてこのうたをよみてつかはしける、　　みつね

ちりをだにすへじとぞ思さきしよりいもとわがぬるとこ夏の花

〔古今和歌集秋四〕寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　素性法師

われのみや哀と思はむ蟋なくゆふかげのやまとなでしこ

〔大鏡五太政大臣伊尹〕花山院は風流者にさへこそおはしましけれ、略中なでしこのたねをついひぢのうへにまかせ給へりければ、おもひもかけず、四方にいろ〳〵に、からにしきをひきかけたるやうにさきたりし、略下

〔今昔物語二十四〕一條院失給後上東門院讀和歌語第四十一

今昔、一條院失サセ給テ後、後一條院ノ幼ク御座ケル時ニ、瞿麥ノ花ノ有ケルヲ、何心モマシマサズ取ラセ給タリケルヲ、母后上東門院見給テ、此ナム讀給ヒケル、

ミルマヽニツユゾコボルヽオクレニシコヽロモシラヌナデシコノハナ、ト此レヲ聞ク人皆

王不留行

泣ケリ、

〔枕草子三〕草の花は

なでしこ、からのはさら也、やまとのもいとめでたし、

〔枕草子八〕うつくしきもの

なでしこのはな

〔源氏物語二十常夏六〕御まへにみだりがはしき前栽などもうゑさせ給はず、なでしこのいろをとゝのへたる、からのやまとの、ませいとなつかしくゆひなして、さきみだれたるゆふばへ、いといみじうみゆ、

〔和泉式部集五〕おなじところなる人の、ことかたにおきて、からなでしこを、やまとならぬなむあるとて、おこせたるに、

かひなきはおなじかきほにおふれどもよそふるからのなでしこの花

〔更科日記〕もろこしがはら〇相模とかいふ所も、すなどのいみじうしろきを二三日ゆく、夏はやまとなでしこのこくうすく、にしきをひけるやうになん咲たる、これは秋の末なれば見えぬといふに、なを所々は打こぼれつゝ、あはれげに咲わたれり、もろこしがはらに、やまとなでしこも、咲けんこそなど、人々おかしがる、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　瞿麥キノカシラニモアリ

〔武江產物志遊觀〕石竹　木所植木屋

〔新撰字鏡草〕王不留行加○佐○久○佐○

〔本草和名草七〕王不留行　一名王不流行、出釋藥性、和名須○々○久○佐○、一名加佐久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕王不留行　釋藥性云、王不留行、今案一本留作流、和名加佐久佐、

〔箋注倭名類聚抄 二十〕本草和名云、王不留行、一名王不流行、出釋藥性、按千金翼方、證類本草、並作王不留行、是王不留行本草所載、王不流行之名出釋藥性也、此恐源君誤引、○中略 陶注本草王不留行云、葉似酸漿、子似菘子、蜀本圖經云、葉似菘藍等、花紅白色、子殻似酸漿、實圓黑似菘子、如黍粟、圖經云、苗葉俱青、高七八寸以來、根黃色如薺根、葉尖如小匙頭、亦有似槐葉者、四月開花黃紫色、隨莖而生、如菘子狀、又似猪藍花、河北生、葉圓花紅、與此小別、時珍曰、苗高者一二尺、三四月開小花、如鐸鈴狀、紅白色、結實如燈籠草子、殻有五稜、殻內包一實、大如豆、實內細子、大如菘子、生白熟黑、正圓如細珠可愛、陶氏言葉似酸漿、蘇氏言花如菘子狀者、皆欠詳審、以子爲花葉狀也、又曰、此物性走而不住、雖有王命不能留其行、故名、按是草皇國不產、今則漢種繁殖、俗呼漢名、

〔下學集 下草木〕王不留行(ワウフルギヤウ) 日本俗云川骨也、本名剪金花、因爲主君好此事、被因賜宋朝作、人言此花曰王不留行也、

〔書言字考節用集 六生植〕王不留草(ワウフルリウサウ) 韻會云、花、剪金花、鼓子花、鄉語云、花盤草也、 花盤草(ヤハギク) 本綱俗呼王不留行云、實事評本草、 如鐸鈴狀、紅白色者云々、

〔藻鹽草 八草〕和名少々 王不留行すゝくさ

〔古名錄 十九草〕須々久佐 本草和名 漢名王不留行 本草 今名グ。ウ。ク。ワ。ン。サ。ウ。

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕王不留行 スヾグサ 証類 道。灌。草。古へ道灌山ニ漢種ヲ栽シコトアリ、故ニ此名アリ、 一名木藍子 備州府志 麥藍子 同上 王留 綱目 長鼓草 鄉藥本草 抜見 百聞 剪金子 保壽元世

今漢種ヲ傳テ栽ユ、秋分ニ子ヲ下ス、ソノ葉細長ニシテ瞿麥葉ノ如シ、淡綠色對生ス、春ニ至リ葉形漸長大ナリ、濶サ四五分、長サ一寸餘ニ至リ、脚葉ニ異ナリ、苗高サ二尺餘、三四月枝上ゴトニ花ヲ開ク、五瓣、形フヂナデシコノ花ノ如ニシテ色モ同ジ、花下ニ房アリ、外皮五稜ヲナス、花衰テ房漸ク大也、內ニ數子アリ、正圓ニシテ鳳仙花子ノ如ニシテ小也、熟シテ黑色、五月苗根共ニ枯ル、藥店ニ賣トコロ、古渡ノ者眞物ナリ、其內ニ形相似テ扁長微綠斑アル子ヲ雜ユ、コレ大巢菜子(カラスエンドウノ)ナリ、

剪紅羅

或ハ他子ヲ雜ユルモアリ、皆宜ク擇ビ去ルベシ、又藥舖ニ漢種ヲ栽タル子ヲ需ニモ、又大巢菜子ヲ雜ユト云フ、近年舶來スル者ヲ下セバ、小巢菜ノ一種生ズ、僞物ナリ、其形正圓ニシテ、甚豌物ニ似タリ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、〇中略王不留行十二斤、　大和國卅八種、〇中略王不留行二斤、〇下略

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山野所在草木、〇中略王不留行、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　王不留行〇今ヘナシ文政

〔下學集 下草木〕仙翁花嵯峨仙翁寺始出此花、故云仙翁花也、

〔大和本草 七花草〕〇〇〇剪秋羅　花史ニ出タリ、曰日カゲヲ好ミ糞ヲ長ル、河水ヲソヽクベシ、樹下ニ宜シ、今世人賞玩シテ品類多ク出ヅ、花紅ナリ、又白色アリ、褐色アリ、本草剪春羅ノ集解ニ、剪紗花トイヘル、剪秋羅ナリ、剪春羅ト一類ニテ別ナリ、ガンピヨリ花マサレリ、毎年土ヲ改テ肥土ニウフベシ、不然レバ不榮キエヤスシ、初秋花ナク尤可賞、二種共ニ子ヲマクベシ、又梅雨ノ時枝ヲ切テサスベシ能活ク、センヲウハ嵯峨ノ仙翁寺ヨリ出タルユヘ名ヅクト云、仙翁寺今ハナシ、花史曰、結子收藏來春下種、

フシ〇〇剪春羅剪秋羅ノ別種ナリ、葉剪秋羅ニ似タリ、葉ハ缺刻ナシ、毎節ヨリ小枝出テ花ナク、剪春羅ニマサレリ、赤フシ白フシアリ、葉ハ同ジ、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕剪紅羅　剪春羅　剪秋羅　剪紅紗花　俗云仙翁花、今云世牟〇中略
按剪紅羅總名而有數種、皆夏月開花、稍遲者至秋耳、冬乃枯死、宿根春生苗、故未見春冬開花者、蓋譜說不是也、相傳嵯峨仙翁寺始出之、仍名仙翁花、今止曰剪略
五鳳集云、吾邦有一種奇花、毎歲以六七月著紅、謂之仙翁花、世傳自嵯峨仙翁寺所出也、大唐詩文之

中、論花甚夥、未聞有此名、

蓋此仙翁花乃剪紅羅花也、疑僧寄然取得種於中國者矣、仙翁寺舊地在大覺寺西、今爲村名、(今愛宕郡一村)(明東溟詩有小書鐵仙翁寺)當時所貢獻者記于左、

剪紅羅(今云仙翁)　葉形似梅葉而無鋸齒、裏有微白毛、對生、六七月開花、正紅色、大如錢、有剗齒、周廻如剪成、今時又有白花者、

剪秋羅(俗云松本仙翁)　莖葉與常剪羅相似、而五六月開花、深紅色、其周廻如剪成之處不繊、今時有數色、純紅、白、及裏朱、鶴紅、櫻色等、變於子種、

剪紅紗(俗云小仙翁)　葉細長、而五六月開花、淡紅色、形如石竹花、其剗齒亦深而美、今又有白花者、

〔重修本草綱目啓蒙(十一隰草)〕剪春羅　マツモト　一名春羅(秘傳花鏡)　碎剪羅(同上)　剪金羅(群芳譜)　箭竹(汝南圃史)　剪絹羅(同上)　漢宮春(八閩通志)　剪羅(花史左編)　剪秋羅一名漢宮秋(群芳譜)　剪秋紗(名花譜)　剪金紅(閩書南産志)　秋羅(花史左編)　剪絨花(藥譜閩書)

マツモトセンノウゲ、略シテマツモトト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖高サ一二尺叢生ス、葉ハ千日紅葉ニ似テ兩對ス、四月ノ始莖頂ニ花ヲ開ク、五瓣、石竹花ニ似テ大ニシテ、深紅色又淺紅白色黄色間色等ノ二十餘品アリ、一種花後レテ開ク者ヲ剪夏羅ト云フ、和名ガンピ、苗形剪春羅ニ異ナラズ、五月ノ末花ヲ開ク、石竹花ニ似テ大ナリ、紅黄色又紅白間色等ノ數品アリ、又一種俗ニフシト呼ブ者アリ、フシハ黒フシノ略稱ナリト云フ、又節間ニモ花ヲ生ズル故ニ名クトモ云、一名逆坂サウ、此草モ亦形狀相似テ節黒ク、葉背モ亦紅紫色ナリ、花ハ色赤シ、又シロフシ、サクラフシ、ヌケフシ、ムラサキフシ等ノ品アリ、又一種秋ニ入テ花ヲ開ク者ヲ剪秋羅ト云フ、俗名センヲウケ、古歌ニハ紅梅グサ、ソリノハナト云、御集解ニ附ユル剪紅紗花ナリ、花色紅又白色間色金黄色等ノ數品アリ、唐山ニハ剪冬羅モアリト、遵生八牋ニ載ス、和産詳ナラズ、

蘩蔞

増、一種ヲグラセンノウト云アリ、草質尋常ノモノヨリ小ニシテ、葉細長ク花亦小ナリ、數色アリ愛スベシ、

〔地錦抄附録二〕小倉仙翁花

花形よく小輪花のまはり切りさきて、なでしこの花のごとく、花數多く咲、くれなゐと白色の二品あり、葉ほそ長くして、柳葉のごとく、六月末比開く、此種子延寳年中に渡り、其後中絶したるを、又近年見出して植る、

〔剪花翁傳三四月開花〕松本仙翁花　花白淡赤み黒紅等也、開花四月中旬、育方瞿麥に同じ、形瞿麥より大きく和らか也、分株多巣に入頃より、春芽出しまでにすべし、

〔剪花翁傳三五月開花〕仙翁花　剪秋羅　略してセンともいへり、花赤、開花五月中旬より八月まで咲、方日向、地三分濕り、土芥埃土、肥油粕よし、分株正月芽出しまへよし、

〔殿中申次記〕七月六日

一仙翁花一荷　右京大夫殿　一同　一荷　眞木島次郎

七日

一仙翁花一筒　蔭涼軒　一同　三筒　三條殿　一同　一筒　藤兵衛佐殿　一同

同　細川右馬頭　一同　同　八幡林坊

〔後深心院關白記〕永和四年八月三日癸卯、二條宰相來、有續歌興、披講之時分、日野大納言來、詠物名各一首、せにをうくゑ、宰相書題、庭前有此花、今日賞之、近來出來花也、尤有興、

〔新撰字鏡草〕蘩　五勞反、紫繞組草、波久邊耳、　蔞　波久邊耳

〔本草和名十八菜〕蘩蔞　仁諝音上煩、下縷朱反、一名鷄腸、本條一名䕷蔞、一名茇、音拔、已上二名出兼名苑、一名百滋草、出蘇敬注、和名波久倍良、

〔倭名類聚抄十七野菜〕蘩蔞　本草云、蘩蔞(煩婁二音、和名八久倍良、)味酸平無毒者也、陶隱居曰、卽是雞腸草也、

〔易林本節用集波草木〕蘩蔞(ハコベ)　蘩蔞

〔書言字考節用集六生植〕鷄腸草(ハコベ、俗用蘩蔞字、醫)　蘩(同)　蘩縷(同本草)　敍(同)

〔東雅十三穀蔬〕蘩蔞ハクヘラ　義詳ならず、今俗にハコベといふもの是也、ハクヘラとは、蘩蔞の音の轉せしに似たり、(これらの如き、韓地方言の轉に似たり、)

〔倭訓栞中編十九波〕はくべら　倭名抄に蘩蔞をよめり、新撰字鏡に敍をよめり、一名也、葉をくばりまくの義にや、今はこべといへり、丹波にひんずり、賀州にてあさしらげといふとぞ、水はこべは雞腸草といへり、又筑紫にて牛はこべと呼もの有、

〔本朝食鑑三柔滑〕蘩蔞(和名八久倍良、訓波古倍、)

集解、平原曠野及庭園下濕地自生極多、正月生苗、其葉如指頭、細莖引蔓、斷之中空、有一縷如絲、作蔬甘脆、三月以後漸老、開細瓣白花、結小實、大如稗粒、中有細子、如葶藶子、野人多食之、此亦古來作人日七種菜之一物、其餘藥醫多用之、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕繁縷　ハクベラ(和名鈔)　ハコベラ(古名)　ミキクサ(古歌)　ハコベ　ハベラ(勢州)　アサシラゲ(加州、羽州秋田、)　ヒズリ(豐州、石州、)　ヘヅリ(防州)　ヒヅル(雲州)　ヒンズリ(丹波)　マヒヅル(備前)　ヘンヅル(若州)　ムシヅリ(中國、播州、)

庭際路旁ニ甚多シ、四時常ニアリ、春夏尤盛ナリ、方莖地ニシキテ蔓ノ如シ、内空シテ一ツノ細縷アリテ堅シ、葉ハ兩對ス、形圓ニシテ尖リ、長サ一寸餘、瘠地ノ者ハ至テ小ク、肥土ノ者ハ長サ二寸ナルモアリ、ウシハコベト云、皆正二月花ヲ開ク、暖地ニテハ冬モ花アリ、又夏秋ニモ旋花ヲ開ク、莖頭ニ多ク簇リ生ズ、大サ三分許、ソノ瓣狹細ニシテ白色、十瓣ナレドモ五瓣ノ如ク見ユ、中ニ十蘂アリ、後小房ヲ結ブ、内ニ小黑子アリ、落テ生ジ易シ、一種オホヤマハコベアリ、一名ツルハコベ、

トウジンカヅラ、紀州ナンバンハコベ肥前ツルセン、大阪花戸エンメイサウ、播州花戸姫路コンパルサウ、攝津池田花戸山中ニ生ズ、春舊根ヨリ出、藤蔓甚長シ、葉形細長ニシテ、女萎菜葉ノ如シ、兩對ス、夏ニ至リ枝梢ゴトニ花ヲ開ク、五瓣大サ錢ノ如シ、瓣ノ端細ク剪レテ石竹花ノ瓣ノ如シ、故ニツルセント云、淡黃色、花後圓實ヲ結ブ、大サ南天燭ノ子ノ如シ、熟シテ色黑シ、内ニ小黑子アリ、一種ヤ。マ。ハ。コ。ベ。アリ、葉圓尖ニシテ大サ四五分許、莖ノ長サ四五寸許、頂ニ一花ヲ開ク、大サ四分許、白色ナリ、一種ユ。キ。ノ。シ。タ。アリ、一名コナスビ、路旁ニ多ク生ズ、葉大サ四五分許、形圓ニシテ厚ク兩對ス、一根ニ數莖出、長サ四五寸蔓ニ非ズ、夏葉間ゴトニ花ヲ生ズ、五瓣ニシテ黃色、形酢漿草花ニ似タリ、後小實ヲ結ブ、圓ニシテ蔕アリ、形茄子ノ如シ、黃花繁縷是ナリ、深山ニ生ズル者ハ藤本ニシテ長ク、莖ニ稜アリ、花葉モ大ナリ、肆中ニ生ズル者ハ、小ニシテ莖ニ稜ナシ、

〔百姓傳記十二〕ハコベヲ作ル事

ハコベノ種兩種アリ、大葉ナルト小葉ナル違ヒアリ、冬春ニ葉多キ者ナリ、夏秋ニ葉少ナク、日陰ニナラデハコタヘズ、土地ニ嫌ヒナク生ル者ナリ、然ドモ濕ケ地ニヨク育ツ、地ヲクレ蒔置ニ不及、軒下垣ギハニ種ヲフリ置、冬春葉ヲツミ喰フ也、

〔宜禁本草乾五菜〕鷄腸菜　酸平微寒白花鷄腸、黃花繁縷、無毒、主毒腫、止小便利、其莖作蔓斷之有絲縷、細而中空似鷄腸、因名之、治產後血塊、炒熟和童便服、惡血盡出、治惡瘡有神效、食療不用、長食恐血盡、主遺尿、赤可生食、煮菜食之、益人、去脂膏、治小兒赤白痢、取汁和蜜服之甚良、心鏡曰、主小便利、玆中者作羹粥食之、

〔年中行事秘抄正月〕上子日內藏司供若菜事

內膳司同供之〇中略

七種菜〇中略　繁蔞

〔料理物語〕はこべじる　はこべをきり、もみあらひ、三月大こんなどくはへ入、是もみそにてまた

て候、

〔倭訓栞 中編二十五〕みゝなぐさ　七種菜にいへり、卷耳なり、俗にみゝなしとも、猫のみゝともいふなり、

〔古今要覽稿 草木〕みゝなぐさ　ねづみのみゝ　卷耳

みゝなぐさ一名みゝなし、一名ねづみのみゝ、一名ねこのみゝ、一名ほとけのみゝは、漢名を卷耳、一名苓耳、一名苓、一名葹、一名爵耳菜といふ、此草はいづれの國にても、河邊の堤、あるはこだかき山ぎしの、日あたりよき所に、多のうちより地にしきて、むらがり生出て、その大なるものといへども、わづかに一尺には過ざるなり、莖ははこべらに似て、うす紫の色を帶び、それにつく葉は、ふたつづゝ相並びて、かはらけ菜に似て、少し狹くして長し、その色はこきみどりにて、莖にも葉にもうす白き毛あり、叢生の頭に至りて、そのくきのすゑに、いさゝかなる枝をわかちて、いと小さき五ひらの白き花さきて、後に一分ばかりのあをき實を結び、そのなかにこまかなる子あり、扨此みゝなぐさは、もとより古の七くさのうちの、一くさにあらざるよしは、清少納言の見もしらぬ草を、子供のもて來るをといはれしにて明らけし、然るを塩嚢抄に載し、あしな耳なしまたすずなみゝなしとよみし二首の歌につきて、世の人彼是のうたがひをもおこしぬる事なれども、此歌は清少納言よりはるかに後の人の、かの草子にきくもまじれりと、けうせし歌などあるによりて、たゞたはむれに此草をも、七種のうちによみ入しものなれば、それにかゝはりて、古の七くさをあげつらふは、片腹いたきひが事なり、

〔枕草子 七〕七日のわかなを、人の六日にもてさはぎとりちらしなどするに、見もしらぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれをばいふといへど、とみにもいはず、いざなどこれかれ見あはせて、みゝな草となんいふといふものゝあれば、むべなりけり、きかぬがほなるはなど笑ふに、又お

蓮

かしげなる菊の生たるをもてきたれば、つめどなをみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり、といはまほしけれど、聞いるべくもあらず、

〔本草和名十七〕藕實。(楊玄操音吾有反)一名水芝丹、一名蓮、(本條)一名水曰、一名靈芝、一名澤芝、一名美蕖、一名菡萏、(已上五名出雜名苑)一名水華、(出古今注)一名加、實一名蓮實、一名蓮華一名扶容、葉名荷、小根名芊、大根名藕、初根名交臭、(已上出大清經)一名石蓮、(黒者出崔禹拾遺)和名波加知須乃美、

〔倭名類聚抄二十〕芙蕖。　爾雅云、荷芙蕖、(芙音符、蕖音渠、)郭璞注云、芙蓉(音容)江東呼爲荷也、

〔箋注倭名類聚抄十〕原書芙蓉上有別名二字、呼爲荷也作呼荷二字、

〔倭名類聚抄二十〕藕。　爾雅云、其本蔤、(音密、和名波知須乃波比)郭璞注云、莖下白蒻(音弱)在泥中者也、

〔玉勝間四〕蓮葉のはひといふ物

和名抄に、蔤爾雅云、其本蔤、郭璞注云、莖下白蒻在泥中者也、和名波知須乃波比、このはじめの蔤字を、今のすり本に藕と書るは誤也、今は古本によりて引り、藕は古本には別にあげて、波知須乃藕とある、延喜内膳式に、荷葉稚葉七十五枚、波斐四把半云々、はひは葉につきたる物ならぬに、歌にはちす葉のはひとよめるは、いかゞなるやうなれども、葉ならでたゞ蓮をもはちす葉と歌には多くよめれば、はちすのはひといふこゝろなり、

〔倭名類聚抄二十〕茄。　爾雅云、其莖茄、(音加、和名波知須乃久木、)

〔箋注倭名類聚抄十〕念孫云、廣雅釋木、柯莖也、樹莖名柯、因而草莖亦以爲名、爾雅荷芙蕖、其莖茄、茄猶柯耳、

〔倭名類聚抄二十〕蕸。　爾雅云、其葉蕸、(胡歌反)郭璞注云、蕸亦荷字也、

〔箋注倭名類聚抄十〕原書無是注、此恐誤引、按說文云、荷芙蕖葉、不載蕸字、廣韻乃云、蕸蓮葉、按荷本

遂葉後借爲蓮荷字、遂爲借義所奪、故別諧聲作蕸、非古字也、爾雅釋文云、其葉蕸、衆家並無此句、唯郭有、然就郭本中、或復脫此一句、亦並闕讀、段玉裁曰、無者是也、高注淮南云、荷夫渠也、其莖曰茄、其本曰蔤、其根曰藕、其華曰夫容、其秀曰菡萏、其實蓮、蓮之藏者菂、菂之中心曰薏、大致與爾雅同、亦無其葉蕸三字、蓋大葉駭人故謂之荷、大葉扶搖而起、渠央寬大、故曰夫渠、爾雅假葉名其通體、故分別莖華實根各名、而冠以荷夫渠三字、則不必更言其葉也、荷夫渠之華爲菡萏、菡萏之葉爲荷夫渠、省文互見之法也、或疑闕葉而補之、亦必當曰其葉荷、不當復蕸、無庸贅造蕸字、

〔倭名類聚抄 二十〕菡。萏。　爾雅云、其。華。菡。萏。上胡感反、下徒感反、俱上聲之重、　兼名苑注云、蓮花已開曰芙蕖、未舒曰菡萏也、

〔箋注倭名類聚抄 十〕按說文云、菡蔄、扶渠華、未發爲菡蔄、已發爲夫容、菡蔄卑其篇、見玉篇、段玉裁曰、扶渠說文各本作芙蓉、誤、今從玄應所引、爾雅說此草、以夫渠建首、總直扶渠爲華葉實根之總名、故云菡蔄扶渠花、蓮扶渠實、茄扶渠莖、荷扶渠葉、蔤扶渠本、藕扶渠根、段說是也、已開之蓮花可謂之夫容、不得謂之扶渠、然御覽引毛詩義疏云、芙渠華未發爲菡萏、已發爲扶渠、既誤芙蓉爲扶蕖、兼名苑云、巳開曰芙蕖者、蓋本之也、王念孫曰、菡蔄之言巳嘾也、說文云、巳嘾也、艸木之華、未發函然、象形、讀若含嘾、含深也、芙蓉之言、敷蒲也、郭璞爾雅注云、敷蒲花之貌、說文云、𤯰華葉布、讀若傅、聲義與芙同矣、又云、㽕、艸木花函々然也、聲義與蓉同矣、但菡蔄芙蓉、散文亦通、爾雅云、荷芙蕖、其花、菡萏、陳風澤陂篇有蒲菡萏、傳云、菡萏荷華也、則卽以菡萏爲芙蓉也、又按、爾雅毛傳皆云、其華菡萏者、蓋統言之、不論其未發已發也、楚辭有芙蓉、無菡萏、亦無是不、與說文析言同、

〔倭名類聚抄 二十〕蓮。　爾雅云、其。子。蓮。音連　其。中。的。○的下一本有音滴之的、又音的八字、爲注、郭璞云、蓮謂房也、的謂蓮中子也、

〔箋注倭名類聚抄 十〕原書作其實蓮、然本書識類引亦作子、蓋源君所見本不同也、原書菂作的、按爾

雅釋文云、的或作菂、同、源君所見蓋陸氏所謂或本也、那波本作的、係依今本校改、那波本無音滴釣之釣又音的八字、那波氏改菂作的、故刪去是注也、廣本蓮中子上有謂字、恐非、

〔幽遠隨筆下〕蓮をはちすといふこと、ゆへなきにあらず、はすの實のぬけ出たるあと、蜂といふ虫の窠によく似たるゆへはちすといふ也、俊頼口傳

〔倭訓栞中編十九波〕はちす　蓮をいふ、荷も同じ、蜂窠の義也、西土の書にも菂在房如蜂子在窠と見えたり、古事記の歌にはなばちすとも見ゆ、花と實と一時に相具するもの也、歌にうき葉、たちは、なびき葉などよめり、まきはといふは捲荷也、蓮葉宴は光仁紀にみゆ、十二時蓮は天竺蓮也、群芳譜にいふ千葉蓮なるべし、近江の國田中の里佐々木の末葉今に是を所持せり、一莖數花にて其蘤ちらず、莖に糸なし、此十二時蓮は梁武帝の佛式に出たり、又天竺蓮と稱する別種あり、太平清話に、清水池在儋州城東、其中四季荷花不絕、臘月花盛と見ゆ、東國にむくげをはちすといふ、齊東昏侯好奢侈、以黃金鑿成蓮花列之於地、令妃潘玉奴行其上曰、歩々生蓮花、

〔古今要覽稿草木〕はちす　はす　蓮

はちすは古名にして、はすは通稱なり、古事記をはじめ、日本書紀、續日本紀、三代實錄、延喜式、萬葉集、菅家文草の詩にも見え、本草和名、和名本草、共に藕實をはちすのみといひ、和名類聚抄菓蓏類に、蓮子ははちすのみと出し、亦蓮類を出して芙蕖、爾雅にいふ荷は芙蕖、郭璞注云、芙蓉江東呼て荷となす、藕ははちすのね、その本は、蔤ははちすのはひ注にいふ、莖下の白蒻泥中にあるものなり、茄ははすのくき、其葉は蕸注にいふ、蕸また荷の字なり、其華は菡萏、兼名苑にいふ蓮花、すでに開くを芙蕖といふ、またのびざるを菡萏といふ、其子は蓮、其中は的、注に蓮は房をいふなり、的は蓮中の子なり、以上爾雅、兼名苑、亦多識篇にも詳なり、神農本經上品の藥なり、本草綱目水草類にも載す、はちすは和名鈔に爾雅を引ていふごとく、莖葉花實根共に各名を異にすれども、實の名なる蓮を通稱と

して、本草にも、蓮藕となし、日本紀、續日本紀、三代實錄、萬葉集、菅家文草にも蓮葉また蓮荷をはちすと訓じ、西土にても周茂叔が愛蓮說、惠遠が白蓮社詩にも採蓮曲といひ、觀經阿彌陀經にも池中蓮華、大如車輪と見えたり、詩の鄭風には隰有荷華、また陳風に有蒲與荷、また有蒲菡萏といへり、凡てはちすは立夏より漸く浮葉を生ず、初めて出る小なる浮葉をせにばといふ、漢名を荷錢といへり、詩にも荷葉、初浮水上錢、蓮葉出水大如錢などいへり、夫より大なる浮葉を生ずるをみづはといひ、是を漢名藕荷といふ、夫より立葉を出す、是を漢名芰荷といへり、たちは生ずれば苔を出して、早きは小暑より開きて大暑を盛とす、故に張秋穀も消夏三友の一となせり、此三友は蓮花、素心蘭、梔子花なり、蓮花は小暑より開きて、大暑立秋處暑迄は盛にして、おくるゝは白露に至れり、浮葉立葉も追々に生ずる故、七月魂祭の比にもみのりたる實あり、又未だ開かざる苔も多し、暑にて盛の久しきはまらるゝなり、又是よりおくるゝものも多し、又歌には葉を詠せし事多く花をよめるは稀なり、萬葉集にもはちす葉にたまれる水の玉に似たる、また古今集にも、何かは露を玉とあざむくなどよみ、西土にても、顧仲方が百詠に露珠といひて、蓮葉に露のたまりし圖有て、詩もあり、又若葉を延喜式に稚葉といへり、今もきざみ飯に煮雜へて、はすめしと呼て食す、荷飯に盛りて香氣有て美味なり、延喜式大膳にも、盂蘭盆供養料の供に荷葉あり、又萬葉集の歌の傳記にも、傳設酒食饗宴府官人等、於是饌食盛之、皆用荷葉と見えて、上古饌食をもるに用ゆ、中元には蓮葉に飯を包みて、上下共にさし鯖を添て祝ふ、今の人おほく七月靈祭の佛事の供物に備ふ類のみにして、人事には用ふることまれなり、又生葉を乾し藥用となす、又蓮の葉莖をつらね採て、葉の正中より莖に孔を明けて酒をつぎて、其莖の元より吸ふを藥なりとて、人のなす事なり、是は雜俎集に、魏の鄭公慤、夏月三伏の際に賓僚を率て、使君林において暑を避るに、大ひなる蓮葉を取て酒を盛り、簪を以葉を刺て柄と通はしめて、莖を屈輪囷て象の鼻の如くして、是

を傳へて各其酒を吸はしむ、これを碧筩杯と名づく、東坡が詩に、碧筩時作象鼻彎、白酒猶帶荷心苦といへり、蓮の葉は秋分よりおとろへ初めて、寒露に至れば多く枯る、蓮は寒を嫌ふ故に、芽を出すも夏の季に至らざれば生せず、枯るゝも諸草よりはやし、枯葉を、白樂天は詩に衰荷といひ、貢濟は敗荷と作れる詩あり、花は紅色を本色となして多く紅花なれども、其中に差別ありて、深紅あり、淡紅あり、大輪あり、小輪あり、瓣白くして上の紅なるあり、白色にして紅條の通りたるあり、また赤褐色にして黄を帶べるあり、これらはまゝ常の紅蓮のうちに生せり、また白蓮は香殊に紅に勝れり、その苔は綠色常なれども、黄を帶べるもあり、また蓮の實七月比、いまだ熟せざるを生にて食ふ、柔く熟せしも食す、これは藥用となして、蓮肉といひて脾胃を補ひ、心を淸くし、中を補ひ、志を强くし、虛を補ひ損を益す、みな實の功なり、其最もちふべき實を首とし、蓮稱と稱せるなるべし、蓮といふは實の總名にて、くはしくいへば蓮房といひて、實をつゝむものなり、實は蓮肉といひ、菂といふ、菂の內の靑芽を薏といふ、この靑芽菂のうちにさかしまに成てあり、故に實の下を切て泥中に入置ば、五六日の中に芽を出し、葉を生じて、其まゝ置ても三年にして花を開く、地錦抄にも指南次第にて春植たる實生に秋花咲といへば、手入をなさば早く花を生ずべし、されば多く實を植て生じなば極めてかはりたる花を生ずべし、佐藤成裕曰、蓮子は四五十年を經たるも、上下を磨して泥中に植置ば生せざるはなしといへり、蓮子熟して黑くなりたるを石蓮子といふ、諸書に見えたり、用藥須知に蓮肉はすの實なり、一名石蓮肉といふ、熟するに至て硬きをいふなり、別物にあらず、近來一種漢より渡る、石蓮肉あり、眞にあらず、石蓮樹實なり、鬱爽の中より出づ、何培元本草必讀云、治痢疾禁口者、石菖蒲石蓮肉、非此石蓮肉無功ことを賛す、其他淸心蓮子飮等には、誤てもちふべからずといへり、又はすの根は、九月末十月に至らざれば生せず、五月より九月まで蕃藕のみにして葉花を生ずるも、蕃より生ず、蕃藕ともに和名はちすのは

ひといふ、證類本草、救荒本草等の圖に、藕より花葉を出せしは誤なり、此はひの延る事、夏より九月まで縦横にはひて、二三間にも及ぶあり、このはひに節ありて葉花を生じ、末秋に至りてはひの止りに藕を生ず、故に藕を堀るは多より初む、今七月比新蓮根とて出す、此小なるは作りばすとて花葉を去り、其精氣を泥中のはひに持せて、小根を生ずる也、和剤調薬にはちすのはひ、和名鈔に蔤を訓せり、はひは蔓の義なるべし云々、延喜式に荷葉七十枚、波斐四把半と見ゆ、藕牙也と注す、後撰集に蓮葉のはひにぞ人はおもふらん世にはこひぢの中に生つゝ、はひを古は食用とせし也、今にても酒肴に酢に漬て食ふ人あり、香有て美味なりと、藕も大いなるは五六尺に至る又それより小藕を生ずる枝の如し、藕は泥中より堀出せし時は、潔白にして美なり、宿を越ば色つきて小點をあらはす、藕の孔は十孔なり、尤大いなるは十孔の間にまた小孔を生じて數極りなけれども、十孔を性とす、清商も食用として藕を持來る、其藕大にして一握に過る、長さも五六尺に過、生にて食ふに味梨のごとしと、本邦にても越後にては酒肴なぞに生藕を食、味可なりといへり、風土によりて然るべし、又清人蓮肉を多く持渡り、自藥に用ひ食用ともなせり、亦藕粉も持渡れり、是蓮根を舂水飛して製せし物を、甚稱美せるよし、されども其色潔白ならず、蕨の粉の如き色にして美ならず、故にこの方の葛粉におとれり、大和本草に生藕をつきくだき汁を取、水飛し陰乾し、餅團子とすといへり、亦花も蕊も用ゆれども、花はゆひき熟し水に浸し置ても澀みあり、是こはければ食用とはなし難しと、亦その房も食する事、致富全書、多服食方に、蓮房取嫩者、去皮子幷蒂、入灰煮、又以清水煮去灰味、同蕉脯法焙石壓令扁作片食之といへば蓮房も用ゆべし、亦はちすの絲を用ひて、物を作りし事は、西土には見えざれども、中將姫の蓮の絲にて織し曼荼羅といへるは、大和國當麻寺の什物にて、人皆知所なり、亦成形圖說にも、寛政の比蓮布を製せるよし見えたり、

〔提醒紀談五〕蓮花。。

蓮華を蕖華とも云、去かれども蕖の字に蓮華の義、字書に無きところなり、淨家の說に、善導の觀無量壽經義に云、此華相傳へて蕖花と云、これは蓮華を指て云なり、相傳、古人ありて、天竺國に到て、無熱池の蓮を得て歸りて、これを蕖の池に栽たり、故に蓮をやがて蕖と云なり、猶いはゞ蕖池に龜を出すによつて、龜をも蕖といへるが如し、（龍集氏）按ずるに、論語集解の何晏注云、蕖は國君の守龜蕖地に出づ、因て以て名とすと見えたり、

〔本朝食鑑三水菜〕蓮。根。

釋名（蓮根者藕也、和名爾雅曰、荷芙蕖、其本蔤、其莖茄、其葉蕸、亦荷子也、其華菡萏、緊名苑云、蓮花已開曰芙蕖、未舒曰菡萏也、其子蓮、其中的、的謂蓮中子也、李時珍、釋名詳論名義、）

集解、處々泥池及沼澤湖多有之、以蓮子種者生遲、以藕芽種者最易發、其芽成白蒻、卽蔤也、長者丈餘、五六月嫩時沒水取之則得此、謂藕絲菜、華人賞之而作蔬茄、本邦自古號波惠而賞之、歌人亦詠之、節生二莖、一爲藕荷、其葉貼水、其下旁行生藕也、一爲芰荷、其葉出水、其旁莖生花也、其葉淸明後生、六七月開花、花有紅白粉紅三色、花心有黃鬚、蘂長寸餘、鬚內卽蓮也、又有千葉紅者、近頃有白蓮花葩之端淡紅一二寸者、呼謂口紅、或有碧色者、今在駿陽、土人所謂卽是佛之靑蓮座也、予〇（平野必大）未見之、若一池中以紅白而雜種、則其少者枯盡、故雖隔之、然池廣過四五十步而方相阻、種之則俱盛美、近代種子芽者鮮矣、惟采新根而穿泥種之、則旁行易蔓、旣蔓茂而復采根、根皮灰黃或白、其節黑有鬚、刮去根皮、則純白、有孔有絲、其根大者如肱臂、長六七尺、煮蒸而熟則淡黑、或熱湯中入嚴醋少許、煮之二三沸而取出、則白而不變黑亦奇也、凡野生及紅花者、蓮多藕劣、種蒔及白花者蓮少藕佳也、世俗所謂蓮者佛之所愛、故欲枯衰時、池中浸僧衲則不死、大抵蓮素喜藍汁、今僧衲染藍故然焉、今有養小蓮于盤中而賞花者、先將好土合砂煉水暴日、細末入于木盤中、貯水用蓮實、以鑢或砂磨核頭令薄而後種之、則其年必發花、遲者經年開花、又種酒壺空樽尤可也、當時家々爭弄之、

様、氣味、甘平無毒、（以鹽水食之則不損口、同油炒米麵果食則無滓）主治、除煩悶熱渇、開胃消食、解酒毒及蟹毒、散産後留血、此主心脾血分之疾、四時可食、令人心懽、

蓮。實。（即蓮肉也）氣味、甘平渋無毒、李時珍曰、嫩菂性平、石蓮性温、主治發明、附方詳于綱目、花褪連房成菂、菂在房、如蜂子在窠之狀、六七月采嫩者、生食脆美、至秋房枯、子黒、其堅如石、謂之石蓮子、研去黒殻、謂之蓮肉也、

〔採藥録 玉〕蓮。肉。　ハスノミ

秋子ノ熟シタルヲ採リ、日乾ヌベシ、時過レバ自然ニ脱シテ不易得、藥肆ニ鬻グハ、皮ヲ去リ仁許爲、皮ヲ去リ久ク貯ヘ、時ヲ過レバ、氣味大ニ劣レリ、其儘貯ヘ置キ用時皮ヲ去リ、仁新シテ其功力尤勝レリ、

〔草木性譜 天〕蓮

池沼に生す、其藕泥中を横行す、其性大率閏に遇ば、十三節毎に十二節を生す、是一歳の月數に順り、初萌藕の一節毎に兩芽を生す、其一ハ晩春先づ錢荷を發し、一ハ藕芽を生す、其藕芽の末に亦兩芽を生す、其一ハ藕荷にして水面に浮き、一ハ嫩藕を生す、其嫩藕の末に亦兩芽を生す、其一ハ芰荷、一ハ藕、此の如く二三葉水を出れば節より小藕を生じ、藕荷芰荷を發す、亦藕末に三芽を生す、其一は芰荷、一ハ菡萏、一ハ藕を生す、後節より小藕を生ずること始の如く、一節毎に此のごとし、其節に鬚根を生す、其藕細く泥の淺を横行し、秋に至り花葉盡れば即太くして泥の深に入る、食用にする者是なり、其葉陽に隨ふ、其藕茄中葉脈皆孔あり絲あり、其花十六七瓣、薄紅色縦文あり、陽に隨て旦に開き暮に至り相合し、明旦復開き、二日にして即謝す、蓮蕊嫩黄色甚だ清潔、芬香旦に發し午時に收る、蓮房初黄色後綠色、熟すれば黒色、形蜂房に似たり、蓮實甚だ堅硬、秋に至り熟すれば自づから飛ぶ、其殻頭の傍に必一點あり、其子生ハ初苞なく、先づ二葉生す、即苦薏實

中上に附て側にこれ有り、苞生じ亦二葉生じ、心中より嫩藕を生じ横行す、是藕の初なり、凡蓮に數種あり、皆變種なり、薄紅色の者と同種すれバ、變種ハ必枯る、秘傳花鏡云、或曰、春分前種一日、花在葉上、春分後種一日、葉在花上、春分日種則花葉兩平と、尤自生の者ハ其花葉上に秀づ、格物叢話云、荷花有重臺者、有雙々者、世人指以爲瑞、蓮ハ群花品中に於て第一品、清淨潔白なる者これに如ず、故に不潔の水を灌バ卽枯る、又糞氣を惡む、周茂叔愛蓮說云、蓮花之君子者也と賞せずんばあるべからず、

〔古今要覽稿草木〕毎葉蓮

毎葉蓮、普通の紅蓮にしたがふ所は、立葉生ずれば必花を生ずる故に名く、葩も常の蓮の葩より、丸く尖らずして、色も常の紅蓮に勝れり、葉も若葉のうちは紅を帶び、莖も葉莖花莖ともに下の方紅を帶べり、此毎葉蓮の名は諸書ともに見えざれども、故桑名少將定信朝臣の蓮譜圖中に、毎葉蓮の圖あれども、花やせて葩も細ければ、盆植の漸く開きしを寫されしなるべし、此毎葉蓮いづれの種にや、詳ならざれども、今まゝあり、

〔榕軒小錄〕千葉蓮之事

此冊書寫の折節、井上毅齋氏の朝來り語る、江州益須郡田中村と云ふあり、其土豪田中氏園中に池あり、珍しき蓮をうゑ傳ふ、其樣子を尋ぬるに、大白蓮にてわたり四五寸も有り、一莖の上に九の花房あり、みちあうて咲く、小なるは或は七或は三あり、中元の比より咲き初め、八月上旬まで咲く、其花落つることなく、來年まで枯れ殘る、萬葉蓮と云ふとなん、或云、此花とくとは咲き切らずと也、卽群芳譜を見るに、千葉蓮と標し、分注云、花山有池、產千葉蓮花、服之羽化、今人家亦有之、然頭重易萎、多難開完となり、詳ならねど大樣此なるべし、

〔古今要覽稿草木〕つまべに　くちべに　へりとり　錦邊蓮

つまべに、錦邊蓮、其花白くして邊紅なり、此蓮紅蓮白蓮の中に植れば、皆つまべにとなるといへり、今は多くあれども、是唐蓮なるべし、地錦抄に、唐蓮花、白きは大りん、くちべには小ぶりといへり、ある人の池中に、つまべに多く繁茂して、夥しく成りし故、蓮堀に命じてはらせんといひしが、此つま紅は、葉の存せしうちはゆるし給へといひて、堀らざりし故、いかにと問ふに、此つま紅の葉の刺は、常の蓮より尖り強くして、肌を破るにたへ難し、先年この蓮を堀りて難儀せしといへりとぞ、つまべには處々にあり、秘傳花鏡所載の錦邊蓮にして、白色每瓣邊上有二一線紅暈或黄暈といへる種にして、錦邊蓮なれども、張木威は緋邊蓮といひて、七言律あり、又或黄暈といへるは未だ見ざれども、菊地容齋曰、京の清水觀音境内に、辨財天の小池中に黄邊の白蓮あり、日に映し見れば、銀の花瓣に金の覆輪を懸たるごとしといへり、

〔佐渡志 五物產〕蓮類　和名ハチス

天竺蓮トイフモノハ、花形大ニシテ白色、瓣邊一分バカリ深紅色、コレヲ秘傳花鏡ニ錦邊蓮ト云、又尋常ノ花ヨリ小サクシテ、臺上ニ二三四五花簇リヒラキ、千瓣ニシテ内ニ房ナキモノ、和州當麻寺ヨリ出ヅ、秘傳花鏡ニ、品字蓮ハ一臺三花ヒラクト、ツノ二花ヒラクモノヲ、集解ニ合歡並頭ト云、〇中略 金蓮ハ詳ナラズ、荇菜ニモ金蓮ノ名アリ、

〔古今要覽稿 草木〕蜀紅蓮　白蓮

蜀紅蓮を斑蓮といふは、白色に紫色の斑文あり、是も處々にありて斑蓮といひ、蜀紅蓮と呼べり、又故桑名少將定信朝臣の蜀紅蓮と呼べるは、此花戸にいふ種と異なりて、常の紅蓮のごとくにして鮮紅なり、蜀紅と呼て可なり、彼白花紫斑の種は斑蓮といひて可なり、此斑文のある種も一ならず、天竺斑蓮と呼は、殊に紅斑にして、尤美なるは是に及びなし、又不忍白蓮といへるも、深白にして邊に紫の斑あり、又錦邊蓮、前にいふ一線に紅邊の通りたる種にあらず、邊に紅暈あれども、一

線に通らずして隔ありて、斑點の形をなせば、錦邊とはいひ難し、斑蓮の類なるべし、

〔見陽漫錄〕十二時蓮

江州野州郡田中村名主田中源兵衞が家に十二蓮あり、慈覺入唐の時に持ち渡り植うと云ひ傳ふ、近頃乾たる十二時蓮を觀るに、一房に五六花ありて、白蓮と見ゆ、實は無しと云ふ、世には色々珍らしきものあるものなり、十二時の義は知るべからず、

〔古今要覽稿草木〕芍藥蓮　湘妃蓮

芍藥蓮二種ありて、外葩は大にして中の花瓣小にして、芍藥のごとし、白芍藥と呼ぶは白し、又瓣の先紅暈にして、紅條の鮮なるあり、今の人多く植て愛玩なせども、是も諸書に載せず、又湘妃蓮と呼ぶも、白の芍藥蓮のごとくにして、外の葩黃を帶べり、此湘妃蓮といへるも諸書に見えず、今花戶にまゝあり、是等本唐蓮の種なるべし、大和本草に近年世上に唐蓮多く植ゑ、品多しといへる、遺種なるべし、

〔古今要覽稿草木〕雙頭蓮〇中略

雙頭蓮、一名合歡蓮、一名嘉蓮、一名同心蓮とも、時珍は雙頭蓮、一名催生草、主婦人難產、左手把之卽生といへり、秘傳花鏡に、並頭蓮、紅白俱有、一幹兩花といひ、又顧仲方百詠にも、並蒂黃荷花と云て、圖を載せ詩もあり、雙頭並蒂ともに同じ、古は一莖二花、一莖二萼を奇といひて稱せしなり、又詩に詠せしは、梁の朱超が詠同心芙蓉といふ、五言古詩あり、又劉商が詠雙開蓮花といふ、七言絕句あり、又韋莊が合歡蓮花の七言絕句あり、雙頭蓮何處にも蓮の多く生ずる中には、極めて雙頭も生ずべけれども、遙にみては見えざるべし、偶目前に見る故、奇としてめづれども、みえずしてしらざる者あるべし、近比田安家庭池に、雙頭蓮二三花生せしと聞り、昨年も武藏國足立郡草加在百姓の田中に多く蓮を植しに、雙頭の蓮三本生せしとある人いひし故、共に行て見るに、一本は

散り、一本は蕾なり、卽是を圖して、飯田安家庭池にてしたしく見し人に見せしに、かくのごとしといへり、疑ふ所は顧仲方百詠に出せし、並蔕荷花の圖は、其莖叉をなして左右にわかれたり、又成形圖說に出す所の圖も、叉を成してわかれたり、見る所の雙頭は常の蓮莖にして唯二花並ぶのみ、されば成形圖說に所載顧仲方百詠に出す所は、是ならずして、今圖せしを以是となさん、尤日本紀にも一莖二花と見え、又一莖二萼といひ、續日本紀にも一莖二花とみえ、秘傳花鏡にも、一幹兩花といひて、叉を成すとは見えず、西土には一蔕三花のものあり、是を品字蓮と名く、一蔕四面の物を四面蓮といへり、皆一莖より生ず、一種年々雙頭に開くは、大坂の豪商鴻池善右衞門にあり、甚秘藏して外へ出さず、淡紅色なりと水戸藩家臣佐藤成裕いへり、

〔日本書紀二十三舒明〕七年七月、是月瑞蓮生於劔池、一莖二花、

〔日本書紀二十四皇極〕三年六月戊申、於劔池蓮中、有一莖二萼者、豐浦大臣妄推曰、是蘇我臣將來之瑞也、卽以金墨書而獻大法興寺丈六佛、

〔續日本紀六元明〕和銅六年十一月乙丑、大倭國獻嘉蓮、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年六月戊戌、楊梅宮南池生蓮、一莖二花、

〔三代實錄十八淸和〕貞觀十二年七月九日己未、從四位下行伊勢守多治眞人貞峯、獻蓮一莖二花、

〔嬉遊笑覽十二草木〕享和元年、深川猿江の泉養寺の池に、並頭蓮開て見物群集したり、予も見たりしに紅花と覺ゆ、我衣に寬保二年戌七月、難波の瑞龍寺池中に一莖二花の蓮さく、後に信州大水出づ、深川猿江の蓮開きし翌夜大水あり、異なることなりといへり、

〔延喜式三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、中略○ 荷葉半節、中略○ 七月廿五日節料、中略○ 蓮子、參議已上五房、五位已上二房、

〔延喜式内膳三十九〕荷葉

稚葉七十五枚、波斐四把半、(起五月中旬、盡六月中旬、)壯葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、(起六月下旬、盡七月下旬、)

黄葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、(起八月上旬、盡九月下旬、)

右河内國所進、各隨月限隔一日供之、

〔古事記下雄略〕天皇既忘先所命之事、問其赤猪子曰、汝者誰老女、何由以參來、爾赤猪子答白、其年其月、被天皇之命、仰待大命、至于今日、經八十歳、今容姿既耆、更無所恃、然顯白己志、以參出耳、於是天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、心裏欲婚、憚其極老、不得成婚而賜御歌、○中略爾赤猪子之泣涙、悉濕其所服之丹摺袖、答其大御歌而歌曰、○中略久佐迦延能、伊理延能波知須、波那婆知須微能佐加理毘登、登母志岐呂加母、

〔萬葉集十三相聞〕御佩乎、劔池之、蓮葉爾、渟有水之、往方無、我爲時爾、應相登、相有君乎、莫寢等、母寸巨勢友、吾情、淸隅之池之、池底、吾者不忍、正相左右二、

〔萬葉集十六有由縁并雜歌〕詠荷葉歌

蓮葉者、如是許曾有物、意吾麻呂之、家在物者、宇毛乃葉爾有之、

獻新田部親王歌一首

勝間田之、池者我知、蓮無、然言君之、鬚無如之、

右或有人聞之曰、新田部親王出遊于堵裏、御見勝間田之池、感緒御心之中、還自彼池、不忍憐愛、於時語婦人曰、今日遊所見勝間田池、水影濤濤、蓮花灼灼、可憐斷腸、不可得言、爾乃婦人作此戲歌、專輙吟詠也、

久堅之、雨毛落奴可、蓮荷爾、渟在水乃、玉爾似將有見、

右歌一首、傳云、有右兵衛、(姓氏未詳、)多能歌作之藝也、于時府家備設酒食、饗宴府官人等、於是饌食盛之、

曾用荷葉、誘人酒器、陶錦駱驛、乃詩兵衞云、開其荷葉而作、此歌者、登時應聲作斯歌也、

〔菅家文草四〕丙午之歲、(仁和二)四月七日、予初莅境、巡視州府、府之少北有一蓮池、池之近東有一長老、長老曰、是蓮也、元慶以往有葉無花、仁和以來花葉俱發、迨至夏末已過花時、長老之言誠而有驗、爾時予向彼蓮、作是唱言、採摘池中百千萬莖、分捨部內二十八寺、聞者隨喜、見者發心、加之香油東西供養、乃謂自我爲故、願貽後人、至于去年亦復如是、意之所約、不爲不崩、今茲自春不雨、入夏無雲、池底塵生、遂使根氣死、天與人失、心與事違、非佛力不至、蓋人心之不信、聊敘文章、便以嗟嘆云爾、

門外小池池內蓮、開來誰種又誰穿、椎膺葉屢纔承蓋、情擬通不得揖、提飭一時風景改、下車三度月光圓、及至灼灼新花發、綠信嗤嗤故老傳、心誤緋幡依岸降、眼疑紅燭出泥燃、西方色相開爲寶、南郡榮華見可憐、尋繹凡夫機利鈍、泥成業處善因緣、同僚屢草稱稽首、部境奔波供佛前、部計道場唯四七、擬施世界滿三千、人曾採摘分知去、我獨思惟合掌眠、未昔離心於幾歟、如今事竊不應捐、先嘶海內長無事、次願城中大有年、從自初來言已立、欲令後到證相沿、豈圖此歲無膏雨、何罪當州且旱天、星落春山雲宿潤、火燒夏日地生煙、毒龍貪惜神通水、邪鬼呵留智慧泉、祇史挾馳煩悶社、禪僧啼讀經筵、悲哀鄭白源流竭、夢想黃龔化宜近、見塵泉芳等死、遥知土燥稼苗焦、善根遂斷呼甘樹、眞實誰窮穀福田、莫笑芳修偏少力、應怒政理獨多愆、魂迷案牘賊馬、手搖揚新煙、少鮮信館鼯鼠、吃唱吏途厭步更遠遠、到肌到骨身爲償、此偶事非薄命篇、

〔古今和歌集三夏〕蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

〔新撰六帖六〕はちす　家良

すましかね心の水はにごるともむねのはちすはひらけざらめや　爲家

世にこゆるねがひはむねの蓮にてたのむよりこそ又むかふらめ

〔時慶卿記〕慶長九年七月十一日、昭高院殿新殿ニテ連歌初而御興行也、〇中略申下剋ニ濟、酒數盃、又外ノ池ノ蓮ノ邊ニテ進酒、蓮葉飯アリ、陽明ハ早御立也、廣橋ト予則御跡ニ立歩行ニテ歸京候、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年七月十五日ながはしより、あしたの物に、御はすのく御、御てうしひさげらる、女院の御所よりはすのく御參る、

〔武江產物志蓮類〕蓮　不忍池六月中より　赤阪溜池　池の妙恩寺下谷　向島白鳥の池　增上寺赤羽橋内

睡蓮

〔大和本草八水草〕睡蓮ヒツジグサ　ヒツジグサハ京都ノ方言ナリ、此花ヒツジノ時ヨリツボム、荇菜ノ葉ニ似タリ、酉陽雜俎及本草綱目萍蓬草ノ下ニ、唐ノ段公路北戸錄ヲ引ケリ、夏秋花サク、花白クシテ數重ナリ、蓮ニ似小ナリ、其葉如荇、其花夜ハツボミテ水中ニカクル、晝ハ又水面ニウカブ故ニ睡蓮ト云、北戸錄ニ所云ト相同、他花ニコトナル物也、蓴菜荇菜ノ類ナリ、畿内江州西土處々ニ多シ、他州ニモ多シ、

〔剪花翁傳四八月開花〕睡蓮　ひつじ艸、花一重色白く葉黄なり、開花八月中旬、形鐵泉花風車などに似たり、水中に生ず、葉莖ともに蓴菜じゆんさいにも又似たり、

〔武江產物志藥草〕井ノ頭邊ノ產　睡蓮ひつじぐさ井ノ頭邊、木下川ニモ、

蓴

〔新撰字鏡草〕蓴蘋苊三同、正補各反、且蘋荷也、浦穗也、借視倫反、平、奴○奈○波、　蘋蒉同○府○鐉○反、大萍、字○支○奴○奈○波、　蓰奈○女○奴○奈○波○

〔本草和名菜十八〕蓴仁諝音純、顧立音義、蓴莖同、絲蓴三四月至七八月、通名絲蓴、環蓴霜降以後至二月、名環蓴、巳上二種出蘇敬注、和名奴奈波、

〔倭名類聚抄菜蔬十七〕蓴　野王案云、蓴視倫反、和名沼奈波、水菜也、蘇敬本草注云、自三四月至七八月、通名絲蓴、味甜體軟、霜降以後至二月、名環蓴、味苦體澀、

〔醫心方一〕蓴和名奴奈波

〔類聚名義抄 八草〕蓴 下正、音純、水葵、ヌナハ、

〔八雲御抄 三上〕蓴 うきぬなは　ねぬ　一説こもくろめをも云り

〔下學集 下草木〕蓴 菜名、音純、中華俗ニ謂之純菜、四時秋風起、思蓴之美、

〔日本釋名 下草〕蓴 ぬは沼也、なは、繩也、沼の内にありて、くき長して繩の如し、

〔東雅 十三穀蔬〕蓴ヌナハ　倭名鈔に、玉篇爾雅本草注等を引て、蓴にはヌナハと註せり、莖長く繩を延べし如くにして、其滑なるをいふなり、

〔倭訓栞 前編二十一〕ぬなは　新撰字鏡に、蓴をよめり、沼繩の義也、俗に蓴菜の音をもて呼べり、根ぬなはともよびくれば、そといひかけたり、又所によりて銅拍子(ドヒヤウシ)とよべるは、其葉の形の似たるをもてよべる也、池に浮て生ふるものなれば、歌に多くうきぬなはとよめり、

〔本朝食鑑 三水菜〕蓴 和名訓奴奈波、今亦同、或如字知字呼之、

集解、處處湖澤有之、而不多、惟江州瀨田湖多有、而肥美味亦佳、葉如荇菜而差圓、形似馬蹄、毎浮于水上、其莖紫色、大如箸、柔滑、三四月嫩葉生、未舒時、煮之則莖上著涎粘、如煮葛粉、其味稍佳、夏月開黄花、結實青紫色、大如小棗子、中有細子、子墜于水中而自生也、凡蓴作羹可食耳、

〔重修本草綱目啓蒙 十六水草〕蓴　○ヌナハ〈[illegible]〉○ウキヌナハ〈古歌、春〉○ネヌナハ〈同上、秋〉○ジユンサイ〈中[illegible]〉

池澤中ニ生ズ、葉ノ形橢ニシテ深緑色、厚シテ光リアリ、莖ハ葉ノ中央ヨリ出、葉ハ水面ニ浮ビ、根ハ水底ニアリ、故ニ莖長クシテ臺ノ如シ、莖及葉背ニ涎アリテ氷ノ如シ、嫩葉ハ卷テ荷ノ卷葉ノ如シ、春夏採テ食用トス、半夏生ノ候ヲ過ル時ハ、堅クシテ食フニ堪ヘズ、六月ニ花ヲ開ク、紫色ナリ、

〔長生療養方 一菜果功能〕蓴　主消渴熱痺、多食動痔、

芡

〔延喜式 三十 大膳 三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略 根蓴一把、淡菜料

〔古事記 中 應神〕天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏、賜其太子、○仁德 中略、御歌曰、美豆多麻流、余佐美能伊氣能、韋具比宇知、比斯賀良能、佐斯祁流斯良邇、奴那波久理、波閇祁久斯良邇、和賀許々呂志叙、伊夜袁許邇斯弖、伊麻叙久夜斯岐、

〔古今和歌集 十九 雜體〕題しらず　たゞみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたゝじくるないとひそ

〔曾根好忠集〕四月中

河上のあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなき

〔拾遺和歌集 十六 雜春〕題しらず　またがふ

年ごとに春はくれども池水におふるぬなははたえずぞ有ける

〔新撰字鏡 草〕芡 疾險反、雞頭、水不々支、　芡 巨險反、鷄頭、水不々支、　菱 水不々支

〔倭名類聚抄 十七 菓蓏〕芡　爾雅注云、芡 音儉、和名三豆不々木、一名雞頭草、其實似烏頭、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 九 菓蓏〕按是草生水中、葉似款冬、故名水款冬、今俗呼於爾波須、蜀本圖經云、葉大如荷、皺而有刺、是所以得鬼荷之名也、

〔饅頭屋本節用集 美 草木〕水入中

〔書言字考節用集 六 生植〕芡實 鷄頭、雁頭、雞頭、蓮同、時珍云、三月生葉貼水、大于荷葉、五六月開紫花、花開向日結、

〔大和本草 八 水草〕芡實 葉ハ蓮ニ似テ大ニシテ、葉水上ニウカビ、皺アリ、ハリアリ、實ハ莖上ニアリ、苞ノ形鷄頭ノ如シ、故ニ鷄頭實ト云、苞アリテツヽメリ、其內ニ實數十顆アリマルシ、實ノ內白クシテ、抹スレバ米粉ノ如ク、味モ亦甘美ナリ、藥トシ食トス、毒ナク性ヨシ、凶飢ヲ助ク、池塘ニ多ク

ウフベシ、竄ノ内ニアナアリ、絲アリ、ワカキ時皮ヲ去テ食フベシ、根ハ煮テ食フ、芋ノ如シ、

〔延喜式内膳三十九〕漬年料雜菜

荚一石五斗(料鹽一斗五升、米七升五合、○中略) 右漬秋菜料

〔本草和名十八〕骨蓬(似腐骨、故以名之、)一名苂根(出崔禹) 和名加波保禰

〔倭名類聚抄水菜十七〕骨蓬 崔禹錫食經云、骨蓬(和名加波保禰)味鹹、大冷無毒、根如腐骨、花黄色、莖頭著葉者也、

〔箋注倭名類聚抄九〕本草拾遺云、萍蓬草、生南方池澤、大如荇、花黄、未開前如算袋、根如藕、飢年當穀也、崔氏骨蓬卽是、李時珍曰、萍蓬草卽今水粟也、三月出水、莖大如指、葉似荇葉而大、徑四五寸、初生如荷葉、六七月開黄花、結實狀如角黍、長二寸許、內有細子一包、如罌粟、其根大如栗、亦如雞頭子根、儉年人亦食之、作藕香味如栗子、

〔類聚名義抄八〕荊根(カハホネ) 蓬(カハホネ) 骨蓬(カハホネ)

〔運歩色葉集加〕骨蓬

〔饅頭屋本節用集加草木〕河骨

〔書言字考節用集六生植〕萍蓬草(本草、葉圓四五寸、如小荷、黄花結實、如小角黍者、)骨蓬(同) 若松(同) 川骨(同)

〔東雅十三草卉〕骨蓬カハホネ○中略 カハホネといふ義不詳、(根如腐骨といふ註に依れば、その木中にありて根腐骨の如くなれば、此名あるが如し、されば此物倭名鈔にも、水菜の類に見えて、古の時には、水菜となして喚ふ所の物にてあり、けり、富なカハホネといひ、なコウホネと云ひしによらば、此物なかくいひして、別に其義ありしも知るべからず、但此物の如きは、骨蓬の字の骨を呼びて、カハホネと云ひしと見えたり。)

〔倭訓栞後編四加〕かははね 骨蓬をいふ、倭名抄に見ゆ、川骨の義也、かふほねともいへり、根如腐骨と食經に見えたり、蝦夷の地川骨蓬など一丈あまりに及ぶものあり、陸かふほねあり、花相似たり、唯水に生せず、一種萍蓬草と稱するものあり、姫かははねと稱するは矮生のもの也、一種黄瓣紅蘂のものあり、心紅といふ、又赤花あり、べにかふほねといふ、飛入あり、薄色あり、立金花も花葉

ともにかふほねに似たり、立泉花とちいふ、又丸葉あり、

〔本朝食鑑 水三菜〕萍蓬草 俗訓加保保禰

釋名、骨蓬 源順和名訓加波保禰、近俗稱河骨、是據釋字與、

集解、三四月出水、莖大如指、葉似荇葉而大、初生如荷葉、長則徑四五寸、色深青、六七月開黄花、四出結實如角黍、長二寸許、內有細子、一包如罌粟、其根有如栗者、有如荷莖者、今時以如荷莖者入藥用、源順載崔禹錫食經謂、根如腐骨、花黄色、莖頭著葉、此能形容之者也、

〔大和本草 八水草〕萍蓬草(カハホネ)　葉ハ芋ニ似テ厚ク光アリ、莖ツヨク水上ニタチノボル、葉モ花モ水面ニウカバズ、根大ナリ、夏月黄花ヲ開キ、秋ノ末マデアリ、一莖開一花、堪賞、本草陳藏器李時珍ガ說可考、倭流ノ外醫及女醫コノンデ用之、性ヨク血ヲ收ム、

〔重修本草綱目啓蒙 十六水草〕萍蓬草　カハホネ　骨蓬 和名鈔　骨髓 和方書　カ〇ハ〇 同上　カ〇ハ〇ト〇 仙臺　タ〇イ〇コ〇ノ〇ブ〇チ〇

池中ニ生ズ、根ハ水底ニアリ、葉ハ芋葉ニ似テ、狹長ニシテ厚ク、面ハ深綠色ニシテ背ハ淺シ、一根ニ叢生ス、水淺キ時ハ葉水上ニ見ル、深キ時ハ水中ニアリテ、體薄クシテ色モ淺シ、夏ヨリ秋ニ至テ、粗莖ヲ抽テ水ヲ出テ一花ヲ開ク、五瓣黄色光リアリ、梅花ノ形ノ如ニシテ、大サ一寸許、瓣皆上ニ向フ、中ニ黄蘂アリ、其未ダ開カザル者ハ、形圓ニシテ鼓槌ノ如シ、故ニタイコノブチト呼ブ、一種ベ〇ニ〇カ〇ハ〇ホ〇ネ〇ハ、花赤黄色、一種黄瓣紅蘂ナルヲ、シ〇ン〇ク〇レ〇ナ〇ヰ〇ノ〇カ〇ハ〇ホ〇ネ〇ト呼ブ、共ニ根ハ粗ク長ク、節多クシテ深綠色ナリ、和方ニ多ク用ユ、一種ヒ〇メ〇カ〇ハ〇ホ〇ネ〇ハ、花葉皆小ナリ、一種オ〇カ〇カ〇ハ〇ホ〇ネ〇ハ陸生ナリ、形狀ハリウキンクハニ似テ、莖垂レズ、花瓣ニ尖リアリ、

〔長生療養方 一菓菜功能〕骨蓬　治黄疸、消渴、喉痺、

〔執政所抄 上正月〕十五日

落葵

新御節供事○中略

御菜二前　一折敷　海松、青苔、牛房、河骨、

〔多識編三〕落葵、布○布○岐○今案豆○留○牟○良○佐○岐○

〔書言字考節用集六生植〕落葵ツルムラサキ　天葵、藤葵、繁露、燕脂菜同　紫繁露草同

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕落葵　ツ○ル○ム○ラ○サ○キ○　一名紫草食物本草名アリ　染絳子本經逢原　藤菜蒼氏食物本草　繁葵遵生八牋　浮藤菜漳州府志　蘇菜同上　紫果書圖志　架菜子小物理識　染菓子丹鉛總錄　胡臙脂食物

[illegible]

山野自生ナシ、春種ヲ下ス、生出コト遅シ、蔓草ナリ、葉ハ圓尖ニシテ莧葉ノ如ニシテ厚ク光リアリ、淡緑色互生ス、藤蔓長シテ草木ニ纏フ、夏ノ末葉間ゴトニ穗ヲ出シ、圓小顆ヲ綴ル、白色白シテ頭ニ五瓣アリ、粉紅色瓣ノ大ニナリテ實トナル、緑色ニシテ圓扁、大サ三分許、堅ニヒダ多シ、後紫色ニ變ジ、熟シテ黒色トナル、此汁ニテ物ヲ染レバ深紫色ニシテ美ナレドモ、久シカラズシテ色變ズ、實中ニ圓核アリ、大サ一分餘蓄硬シ、霜後苗根共ニ枯ル、

〔廣益地錦抄七〕落葵(らくき)　春種を蒔、蔓ながく垣にからみてしげる、秋實をむすぶ、ゆくゆくして黒むらさき、色紙そむる色見事なり、つるむらさきといふ、葉は菜としてよし、つる菜ニ似たり、

五味子

〔本草和名七〕五味、蘇敬注云、皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、故名五味具、一名會及、一名玄及、本一名莖著、出兼名苑、和名佐○禰○加○都○良○

〔倭名類聚抄二十〕五味　蘇敬本草注云、五味和名佐禰加豆良、皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、故名五味也、

〔和爾雅七草木〕玄及(サネカヅラ)　會及同、其實名五味子、莖藷同、

〔書言字考節用集六生植〕五味子(サネカヅラ)　莖藷同　玄及同　荻名葛万葉

〔物類稱呼三生植〕五味　さねかづら　大坂にてび○じ○ん○さ○う○といふ、東國にてび○な○ん○か○づ○ら○と云、出雲

にてところ、かづらと云、伊勢白子にてくつばと云、土佐にてふのりかづらといふ、又さねかづらの實、則藥物の五味子也、相州底倉邊にて五九の伊と云、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕五味子　荎藸　玄及　會及　和名佐禰加豆良 ○中略

按五味子、朝鮮之產最良、中華次之、倭亦次之、日本處處多有之、而紀州田邊之產良、藝州廣島、及日向丹波之產次之、其梗（乾者形色似甘草）浸水取粘汁、塗髮甚佳、俗呼名美軟石、（名義未詳）

〔物類品隲 三 草〕五味子　二種アリ

北五味子　朝鮮種、享保中種ヲ傳テ、今官園ニ植、葉杏葉ニ似テ蔓延ス、實南五味子ト大體相似タリ、駿河產朝鮮種ト異ナルコトナシ、享保中台命アリテ藥ヲ採シムル時、始テ此物アルコトヲ知、至今每歲是ヲ官ニ獻ズ、

南五味子　和名サネカヅラ、處處ニ多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕五味子　一名嗽神（輟耕錄）　紅內消（醫學正傳、何首烏ニモコノ名アリ、）　荎藸（爾雅）　六亭剤（事親、輟耕錄ニ亭ヲ停ニ作ル、）　紅內藤（證治準繩）

南北ノ異アリ、朝鮮ノ產ヲ遼五味子トシ、又北五味子ト呼ブ、朝鮮ハ唐山ノ北ニ當ル故ナリ、享保年中朝鮮ヨリ種ヲ渡ス、今人間ニ多ク栽ユ、葉杏葉（アンヅ）ニ似タリ、又木天蓼（マタヽビ）葉ニ似テ鋸齒粗ク皮アリ、春舊藤ヨリ芽ヲ出シ、四五葉一所ニ攅リ生ズ、其苞內葉下ニ花ヲ出ス、嫩藤長ズレバ葉互生ス、三四月花ヲ開ク、白色ニシテ微綠ヲ帶ブ、形荷（ス）花ニ似テ至テ小ク、小錢ノ大サニシテ八九瓣、質厚クシテカヽユ、中ニ小紅毬アリ、瓣落レバ其毬漸ク大ニシテ長ク、下垂スルコト一二寸、圓實多クツヅル、生ハ青ク熟ハ赤ク、大サ南燭（ナンテン）子ノ如シ、秋後葉落チ藤枯レズ、黃赤色ニシテ微黑ヲ帶ブ、此實久ヲ經レバ色黑ク五味備ルコト、此書ニ云所ノ如シ、此ノ種駿州ニ自生アリ、一種マツフサト云アリ、一名ヤハラブル、ウシブドウ、マツブドウ、モチカヅラ（泉州）ヤハラカヅラ（同上）ワタカヅラ、（野州）

泉州、紀州、播州、土州山中ニ多シ、葉ハ橢形ニシテ尖ル、南五味子葉ヨリ至テ短ク、粗キ鋸齒アリ、光澤多シ、春新葉ヲ生ジ、冬枯ルコトハ北五味子ニ同ジク、花モ亦同ジ、實モ亦穗ヲナシテ生ジ、熟シテ黑色ナリ、故ニウレシブトウド云フ、久ク貯テ潤アリ、此草蔓ヲキレバ松ノ氣アリ、故ニマツブサト云フ、年久キモノ藤フトク皮厚シテ柔ナリ、故ニワタカブラト云フ、コレモ亦和產ノ北五味子ナリ、南。五。味。子。ハテオカブラ、一名ビンツケカブラ、筑前トロヽカブラ、石見ビナンセキ、伊州ビジンソウ、大和ビナンカブラ、雲州クツイ、勢州フノリ、土州フノリカブラ、日州オホスケカブラ、筑前ビランジタキ、江州山野共ニ多シ、市中ニモ種テ籬トス、藤蔓甚繁茂ス、葉冬ヲ經テ枯レズ、形長ク厚ク莽草葉ノ如ニシテ、光潤ニシテ粗キ鋸齒アリ、冬春ハ葉背紫色、夏ノ末葉間ニ花ヲ開ク、形チ北種ニ同ジ、其蔕長サ一寸餘、端ニ數十實圍繞ヲナシテ下垂ス、大サ一寸許、北種ノ穗ヲナスニ異ナリ、コノ穗ヲ江州ニテ、サ。ル。ノ。コ。シ。カ。ケ。ト呼ブ、實ハ蘡薁紅ノ大サアリ、熟シテ赤色、乾シテ仍ヲ赤クシテ潤ナシ、苦味多シテ五味備ハラズ、和ノ五味子ト名ケ賣モノコレナリ、藥舖ニ販者數品アリ、朝鮮五味子ハ形大シテ久ヲ經ル者モ潤アリ、色黑クシテ白キカビノ如者アリ、五味全備ル、尤上品ナリ、本草彙言曰、生青熟紫、八月收採、曬乾則紫黑、今吳越建南等處亦有、名南五味子、曬乾色仍紅、乾枯少滋不若遼北者、蓋黑色黑肥大且滋潤也、如入滋補藥必用北產者乃良ト、漢渡五味子ハ實小ニシテ潤ナシ、サネカブラト同ジ、即南五味子ナリ、滋補ノ藥トナスニ宜シカラズ、然レドモ朝鮮ヨリハ年久ク渡ラズ、僅ニ對州ヨリ少ブ、來ルコトアリ、色微黑赤也、本草原始ニ、鮮紅色久シテ黑色ト云ニ合ズ、今朝鮮ト名ケ賣ル者數品アリ、多ハ尾州ヨリ出ルヲ朝鮮五味子ト云、是名古屋五味子ナリ、粒大ニ黑色潤アル者ハ朝鮮ニ異ナラズ、宜用ユベシ、又マツフサノ實ヲ賣ル者アリ、通用シテ可ナリ、其粒小ナル者ハ南五味子ヲ煮テ色ヲ黑クシ、味ヲツケ乾タル者アリ用ユルニ堪ヘズ、

增、南五味子ニ葉甚ダ薄クシテ、小白斑アリテ霜ノカヽリタル如クナル者アリ、冬ニ至テ紅葉シテ美ナリ、故ニ花戸ニテニシキカヅラト呼ブ、又一種尋常ノ者ニシテ、葉ニ白斑アル者アリ、又南五味子ノ莖ヲ切テ水ニ浸ス時ハ粘汁出ヅ、コレヲ以テ束髮ノ用ニ供スレバ膩垢ノ患ナク、且ツ髮ヲ長ス、

〔草木育種下藥品〕五味子本草　武藏、下野、甲斐等の山中にあり、〇中略　南五味子(びなんかづら)はさねかづらと云、下品にして藥に入らず、山の陰地に植べし、蔓太なれば肥に及ばず、初は酒粕人糞等を用べし、蔓をたわめて土をかけ置ば根を生ず、是を切て分植べし、

〔宜禁本草乾草中〕五味子　酸溫、皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、此五味具也、　紅熟時蒸爛、研取汁去實、熬成稀膏、量酸甘入蜜再上火待蜜熟、後冷器中貯作湯、肺虛寒人可化作湯時々服、作果可以寄遠、

〔延喜式三十七典藥〕遣諸蕃使

唐使〇中略　草藥五十九種、〇中略　五味子〇中略　僕奈各四斤、　新羅使〇中略　草藥廿四種、〇中略　僕奈、五味子各五升、

諸國進年料雜藥

美濃國六十二種、〇中略　五味子三斗三升、　安藝國卅二種、〇中略　五味子三升、

〔古事記中仁德〕爾大雀命〇仁德　聞其兄備兵、〇中略　既知王子〇宇遲能和紀郎子之坐所而、更爲其兄王渡河之時、具飾船檝者、舂佐那〇此二字以音　葛之根、取其汁滑而、塗其船中簀椅、設蹈應仆、〇下略

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、〇中略　五味子、

〔萬葉集二相聞〕内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

玉匣(タマクシゲ)、將見圓山乃(ミムロノヤマノ)、狹名葛(サナカヅラ)、佐不寐者(サネズハ)遂爾有勝麻之目(ツヒニアリカツマシモ)、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

核葛、後相、夢耳、受日度、年經乍、

〔大和物語上〕本院（時平）の北方の、まだ帥の大納言（藤原國經）のめにていますかりけるをりに、平中がよみて聞えける、

春ののに繁にはへるさねかづら我きみざねとたのむいかにぞ、といへりける、かくいひ／＼てあひちぎることありけり（下略）

〔後撰和歌集十一戀三〕女のもとにつかはしける　三條右大臣

なにしおはゞあふさか山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

〔北條五代記五〕關東昔侍形儀異樣なる事

諸侍の形儀異樣に振ひし、上下のひだのためやう、衣紋かりきやうに至迄も、小田原やうとて、皆人まなべり（中略）髪をばびなんせきにて、びんを高くつけあげ給へり、

〔採藥使記中相州〕重康曰、相州鎌倉ノ鶴場ノ山中ヨリ五味子ヲ出スナリ、方言五。九。ノ伊。ト云フ、御獻上ス、

古事類苑

植物部十九

草八

牡丹名稱

〔本草和名 九草〕牡丹　一名鹿韭、一名鼠姑、一名百兩金、出蘇敬注一名白朮、出雜要訣和名布加美久佐、一名也末多知波奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕牡丹　本草云、牡丹一名鹿韭、和名布加美久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬云、牡丹苗似羊桃、夏生白花、秋實圓綠、冬實赤色、凌冬不凋、根似芍藥、肉白皮丹、出漢劍南、土人謂之牡丹、亦名百兩金、京下謂之吳牡丹者、是眞也、詳蘇敬所說、本草牡丹、卽皇國西俗所呼藪立花、東俗所呼藪柑子也、輔仁謂布賀美久佐、一名也末多知波奈、是草生林叢中、故名布賀美久佐、又是草葉凌冬不凋、其實四時常赤、有似橘橙、故名山橘、古藥方中牡丹皮、宜用之、今人以木芍藥根皮爲古方中牡丹皮者誤、唐以來別有賞花之牡丹、卽木芍藥也、蘇敬曰、今俗用者異於此、別有臊氣也、言唐俗藥方牡丹、誤用木芍藥也、蘇頌本草圖經曰、牡丹花有黃紫紅白數色、此花一名木芍藥、近世人多貴重云云、圖經引崔豹古今注云、芍藥有二種、有草芍藥木芍藥、木者花大而色深、俗呼爲牡丹、非也、此牡丹亦入皇國、卽以漢名呼保宇多无、源君以本草牡丹誤爲賞花之牡丹、故列之女郞花瞿麥之下、金錢花萱草之上、可知也、末多知波奈是百兩金、非賞花牡丹、刪之、然未知布加美久佐亦爲所謂吳牡丹、存之而不刪、皆誤、後世歌人或咏牡丹爲布賀美久佐者、皆襲源君之誤也、又按唐李綽尙書故實云、世言牡丹花近有、蓋以國朝文士集中無牡丹歌詩、張公嘗言、楊子華有

奎牡丹處、極分明、子華北齊人、則知牡丹花亦已久矣、唐李濬松窻雜錄云、大和開成中有程修已者、以善畫得進謁云云、會春暮內殿賞牡丹花、上頗好詩、因問修已曰、今京邑傳唱牡丹花詩、誰爲首、修已對曰、臣嘗聞、公卿間多吟賞中書舍人李封正詩曰、天香夜染衣、國色朝酣酒、上聞之嗟賞移時、樂史楊太眞外傳云、先開元中、禁中重木芍藥、卽今牡丹也、注云、開元天寶花木記云、禁中呼木芍藥爲牡丹也、廣群芳譜引海記云、隋帝闢地二百里爲西苑、詔天下進花卉、易州進二十箱牡丹、圖經曰、百兩金、葉似荔枝初生、背面俱青、結花實後、背紫面青、苗高二三尺、有幹如木、凌冬不凋、初秋開花青碧色、結實如豆大、生青熟赤、根入藥、採無時、用之搥去心、嶺南道中出者、根赤色如蔓青、莖細青色、四月開碎黃花、似星宿花、

〔書言字考節用集 六生植〕牡丹ハツカグサ　廿日草 倭俗和所用　牡丹ボタン 百兩金、富貴花、一捻紅、鹿韭並同、或云一名鼠姑、未詳、宜考、本草又詩格註、以其花富貴、故謂之花王、

牡丹フカミグサ

〔倭訓栞 中編二十二 不〕ふかみぐさ　和名抄に牡丹をよめり、周茂叔の說に、牡丹花之富貴者也といへり、かみノ反きなれば、富貴草の義なるべし、一說に牡丹の名によりてふかにくさといふ成べし、みとにと橫音通せり、牡丹は赤き花を主とすといへり、肖柏の發句に、春さかぬ花やこゝろのふかみ草といへるより、牡丹花と呼なせりとぞ、牡丹は和歌には春の季とすれど、連歌には夏の景物とす、春の末より夏かけて咲ものなり、

〔野史 二百六十一 歌人〕肖柏、字夢庵、號牡丹花、太政大臣源具通之後也、〇國史實錄 中略 大永七年四月沒于和泉南部、年八十五、實錄、讀奇人譚、嘗詠牡丹歌曰、波留差可奴、波奈乃許々路也、布伽美久佐ハルサカヌ、ハナノコヽロヤ、フカミクサ、而後聯俳家皆以牡丹附首夏、蓋自肖柏始、〇下略

〔藻鹽草 草入〕牡丹

ふかみぐさ 異名也〇中略　廿日草 このはなのさく日數廿日をかぎりてさく也、仍謂廿日草とや、藻玉に有、　名とりぐさ 〇略　註　照發草 異名これもと

なりぐさ(同)夜白いろぐさ(同、たゞしこれはまめか。)山たち花(是一説也、いしのうへなどにある物にはあらず。ぼたんと云り、)

〔藏玉和歌集 夏〕不加見草　牡丹(此花さく日數廿日也、俗廿日草とも號す、)

万 名ばかりは咲ても草のふかみ草花の比とはいかでみてまし○中略

名取草　牡丹

閑竹歌 折人のこゝろなしとやなとり草花みる時はとがもすくなし

むかしある女此花を愛して、おほくうへおきて、晝は終日ながめくらし、夜は終夜風に可損事を歎きけるによりて、男妬心ありとて離別しけり、程なきよし聞ひらきて、もとのごとくすみけるとなん、仍名取草と號、

〔梅花無盡藏 六〕尾州中島府中總社大明神化緣疏井序(中島郡名○中略)

支那之一百五紅者、(一百五日開、牡丹名也、)則數島(ヤマト)之二十日草(也、本邦曰牡丹二十日草、)域二而其揆一乎、

〔大和本草 七 花草〕牡丹　中華ニテ花王ト稱シ、花ノ富貴ナル者トス、中華ニ洛陽ノ牡丹ヲ名産トス、日本ニ上代ハイマダ牡丹ナカリシニヤ、萬葉古今集等ニハ詠ゼズ、詞花集ニ新院(崇徳院)位ニヲハシマシヽトキ、牡丹ヲヨマセ給ヒケルニヨミハベリケル、關白太政大臣(藤忠通)咲シヨリチリハツルマデ見シ程ニ花ノモトニテハツカヘニケリ、假名フカミ草、又ハツカ草ト云、此花凡二十日アリト云、古ハ左ホド賞翫モナカリシニヤ、歌人ノ詠多カラズ、中華ニモ神農本草ニ牡丹ヲノセタリ、上代ヨリアレドモ只藥ニ用ユ、其花ヲ賞スル事、唐ヨリ以前ハマレナリ、鶴林玉露曰、牡丹自唐以前未有聞、至武后時、樵夫採山乃得之トイヘリ、中華ニモ唐以前牡丹ノ好花ハナカリシニヤ、文士ノ詠作ナシ、日本ニテ古代賞翫ナキコトムベナリ、古代ニ牡丹アリトモ、今ノ艶麗ナル花ハ未可有、牡丹、芍藥、躑躅、山茶、百合等、人ノ好ミ盛ナルニヨッテ好花イデキテ、變態百出スルハ近年ノ事也、今又多牡丹アリ、八月ヨリ叢出テ十月ヨリ花サク、臘寒ノ時モ花アリ、凡如此ナルハ、人

功ヲ以天地造化ノ力ヲヌスンデ成之、良ニ可惜也、近年本邦ニ牡丹ヲ賞スル事甚盛ナリ、歐陽永叔ガ牡丹ノ譜ニ、牡丹ノ名九十餘種ヲ載タリ、今日本所在其品甚多シ、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕牡丹 花王 鼠姑 鹿韭 百兩金 木芍藥 和名布加美久佐 ○中略

按、牡丹根皮、山城大和多出之、而家種者不入藥用、凡牡丹芍藥花貴重也、和漢時代同、本朝聖武帝時盛賞之、今亦奈良多出名花、諸國富家一株價以數百金移栽之、歲歲出珍花、故近於千品、其名不枚擧焉、千葉而厚徑六七寸、純紅如柘榴花色、而形儀全備、蘂子小而不綻者爲極上、純白者亦以此可推知、夏月採川坭、洒乾古圖土細砂以上三品等和、八九月出紅芽後可移栽、培之不可用糞潙、冬月用油渣、少入根傍、或澆鮮魚洗汁、亦佳、四月開花、花落甍破結子、七八莢、八月莢裂中子黑色、十粒許如豆大、候將落時、採直蒔之、如經久者難生春載粒出生、如豆初生、五六年後初可見花、總珍花出於子種、而有紫花而白殺者、或本純白末紅者、或黑牡丹、多牡丹等之異品、然所貴重者、止純白純紅之二耳、紫者爲最下、正黃者未曾見之、謝肇成之言當焉、鷗氏所謂姚黃牛家黃者其如何色耶、

凡二十年以來人能接得之、而名花流布處處、藝頭旣謂秋冬移接、則太唐自昔接之矣、

〔廣益地錦抄 四〕牡丹 唐の牡丹は日本の獅子ぼたんなり、紅白の二品あり、紅といふはむらさき紅にて、花のまわりしらけてうす色なり、白といふはつやもなくうるみて、はなのうらに黑豆のごとく成ルつけ有、唐繪に書しハみな此二種なり、今は實生よりかわりて、紅白品々多シ、藥種には花ひとへにて紫白成ルを用といふ、

〔農業全書 十 藥種之類〕牡丹

牡丹は是を花王と云、しかるに花を見るのみならず、根をとり藥種とし、尤良藥にて多く用ゆる物なり、是も山城にて多く作る、花一重にして白く、又は紅紫なると、兩樣を藥種に用るなり、子をうゆる法、秋實よく熟し黑くなりたる時取置て、肥地を肯もよく養し、なる程細かにこなし、蒸し

牡丹栽培

をき、二月蒔べし、手かたく皮厚く、其まゝうへては生じかぬるゆへ、中までは痛まざる程少かみて、皮にちとわれめをつけてうゆべし、又は秋實を取て、深くよく肥たる地に、其まゝ蒔置て、糞土を以ておほひ、葉の中馬糞を多くおほひ置たるは、當がたを付ずしても春になりて生出る物なり、南向の所に蒔べし、移しうゆる事は、一二年にもかぎらず、苗四五寸ばかりの時、九十月の比よし、うゆる地の事、圖をよき二尺餘にして、一尺五寸程深くはり、埋糞に牛馬糞枯草など多く入れ人糞の類は入ずして、肥土を以てふさぎ、圖とくの圖、三尺餘に一株づゝうへ置て、毎年馬屋糞、其外糞を多くをきて、四五年の後株を掘取べし、淨く洗ひ、手にてをしはり、曲らざる樣にして、干をくべし、賣て厚利の物なり、尤毎年は根をとらずして、二三年に一度づゝ掘取といへども、手入により根苗はびこり、其上斤目多物なるゆへ、過分の利を得べし、是久しくして、利を見る物なるゆへ、廻り遠き事の樣なれども、沙漁の肥たる暖なる所にて、いつとなく年々に苗をうへ立置ば、却て他の作り物より手間も入ず、無生作にて利潤は多し、殊多く作りたらば、若、聞に聞れたる名花も出來べし、然れば一へんの利實のみにあらず、面白くやさしき作り物なり、

〔花壇綱目下〕牡丹植養の事

一牡丹植の法は、九月中旬より十月中旬の比まで、分植て可然なり、掘て植時、根の高卑其節を見分、土を間々へ能入て、根のいごかぬやうに土をかけ植る、土高く盛あげて、其うへに植て根先のさがるやうに植べし、土はしらけたる赤土に、砂を十分一くわへ、下肥を多く切まぜ、百日計置て糞氣くさりませて、土の肥たる時こまかにくだきふるい用なり、霜月初よりくわだんに馬のふみたるわら、馬糞どもあつく置べし、根廻はり置は惡し、正月の末二月中比雪きへて、右のわらをとるべし、砂計に油糟壹升程まぜて、壇にちらし、塵埃のなきやうに掃て置なり、花の時は蘆簾にて日覆をして可然也、花の後にはとるべし、夏は茶がらを根廻に置て、晩景に白水あるひは清水

をも濯ほどそゝぎてよし、牡丹のめにどろ付たる所あらば、白水にてあらふべし、木に白虫付時是を不洗ば木枯る也、實の蒔やうは、六月土用過七月初に實を取則蒔なり、茶がら壹升に土をまぜ一粒づゝ並て、其うへに茶がら五分ほどかけて、蛤貝かぶせて置なり、二月中旬の比、右の貝をとるべし、

〔草木育種 下編〕牡丹（本草） 和名はつかぐさ（詞花集）ふかみぐさ（延喜式）なとりぐさ（万葉集）といふ、山城にて多作、又大坂にて接（つぎ）江戸へ送、其類多し、秘傳花鏡に百三十一種を載、總て赤土に合肥を切まぜ植てよし、又砂を少し入たるもよし、接法ハ常の牡丹の砧（だい）へはす接にしてよし、群芳譜に牡丹八月接べし、又枝を扦（さし）て活といふ、（中略）肥ハ人糞を多土へ切まぜ、百日ほどぬかし置て用べし、又猪屎（ぶたのふん）を用、又狗糞を用て妙なりと花鏡に見ゆ、然ども群芳譜に、牡丹尤忌犬糞と云り、種樹書曰、牡丹花上穴如針孔、乃蟲所藏處、花工謂之氣食、以大針點硫黄末針之蟲乃死、或百部草塞之、貝原花譜曰、牡丹冬至前後、鐘乳粉と硫黄とを末し、根を掘開て周圍に置べし、來春花盛なり、牡丹道知邊に小科（ひこばへ）を白子と名く、分植べしと云、

〔草木錦葉集 緒〕牡丹實蒔并植作方

牡丹の事ハ上方より下る品を植置たる事ハあれど、實蒔其外作りたる事一切なし、予が父（〇水野某）父牡丹の實蒔して作りたるを、見聞し事どもを左に記す、

牡丹實蒔は七月末頃、實黒く成たるを採、すぐに實少しなれバ土器に入、多くあらバ土ほうろくへ乾きたる土を誠に少し厚く、一分程入、其土の上へ實を程よく並べ、古板にても蓋をして（きかりにしま）（たるの也）水地にてなき場所を一尺五六寸掘て、右の土器を埋置、寒明て四十日程過掘出し、花壇にても畑にても土を少し高くして植る、其節土器の中にて根出あるゆへ、日の當らざる様にすべし、當所ハ寒氣強きゆへ、初より地へ蒔てハ根計出て芽出ざるゆへ、冽て枯る也、暖氣なる土地にて

は、初より本高にして然るべし、
生て後水肥度々懸、四月末頃より下肥二三度懸てよし、其年九月初頃分て植る、節一本立にして根元の芽をかきて植べし、分木等植るも皆同様なり、
植替並き時節は秋彼岸より三十日過たる時植替時節也、夫より十一月迄よし、又は二月頃もよし、
植替の節根に腐りあらバ、竹べらにてこそげ、日に干て植る、又白きかびあらバ水へ漬、しゆろだわしにて洗ひ、日にほして植べし、腐りたる根ハ多くあるとも残らず取捨、能あらひ植るに、少し根あれバ気遣ふ事なし、
九十月頃、木の皮を竹べらにてこそげ見改むべし、上皮の下に白く貝がら虫付あらば、こそげ落し、跡を柔らかなる藁にてこすり、生姜のしぼり汁を付て置べし、
植土ハ、畑の並土一升、赤土一升、砂三合、真土の場所にてハ砂計少し入て吉、下肥を懸置て用ゆる花だん植肥ハ、寒中右三品の合せたる土を少し窪くして、其中へ人ふんをたび／＼入（埋るにてハなし）埋置腐りたるを其土にもみ合せ置、根の元近所を見計ひ掘、其土と取替る、秋冬の中かくのごとくす、其節根を改白くかびたるごとく見ゆる木は掘出し、根を前文の如く洗ひて植る、左に記すごとく、秋冬のうち肥にても吉、作方委くハ十一巻目にあり、爰には荒増を記す、摂州豊島郡池田の在に山方谷郷とて十三ケ村有て、諸木の苗木牡丹を接挿して諸国へ出す、株牡丹ハ丹波国、又ハ摂州の中高平にて挿、池田の郷へ送る、

牡丹接挿方

当所にてハ株拂底ゆへ、接挿心の儘に出来ず、若株木あらバ接も吉、秋彼岸十日程後接時節也、穂の削様ハ少しはすに削て吉、細き株ハ穂も株もはすに削合す、是をいも接といふ、油紙にて包、二

枚張位の風鳶の糸程なるしゆろ縄にて、接口をざつと結び置、花だんに植、穂共に土を懸、末つば
鉢を懸置、二月中頃見廻りて、夜中鉢を取、晝ハ又懸、霜降様子なれバ夜中も懸置、雨降らバ雨に當、
一度に鉢を取らず、段し取にすべし、芽出たる後下肥二三度懸べし、上方にてハ瓦にて焼たる末
鍔程の鉢、[illegible]に巾一寸計窓のごとく切抜たる鉢をかける、當所ハ寒氣强きゆへ末鍔鉢よし、正月
末頃より右の窓明たる鉢を覆ふても吉、植替ハ九月初より二月迄吉、全くハ九月よし、
〔牡丹道しるべ乾〕廿六一瘦木にてもあれ、假に長せしめんとて、糞などつよくする事よろしからず、雨
の水取置て、日を經て少小便をませて、寒に入て根先とおもふ所にかくるよし、總じて有つか
ぬ木に糞を嫌ふ、鰹なども少ハよろし、
廿七一寒を凌ぐに、馬糞を根にをく人あり、寒國の雪ふかき所にてハ、さもあるべきも、陽國にてはす
まじき事也、寒中に曡の表を切合て、根もとをよく覆たるよし、やはらかなる藁を敷てもよし、
寒强く土いてあぐる所ならバ、わらのうへにひらみなる石など置てよし、木に霜覆する事よ
ろしからず、木健ならず、さくはなもよはし、寒暑ともに少ハあつるよし、極寒極暑にハ蘆簾を
かけてよし、寒國にて大雪など凌ぐハ、格別の事なれバ覆すべし、大雪に覆落て牡丹折る事あ
る事也、心得あるべし、
廿八一木を洗ふ事、葉落て後、雨降に根のうごかぬやうに、椰の箆にて苔を落すべし、洗ふて後椿の實
をくだき、布につゝみて油の出る程にしてぬぐふてよし、常の油にてもよし、木立うつくしく
なりて、花なけれ共、一入挑と成物也、但さい〱につよくあらふハ、痛にも成べければ、心をつ
くべし、あらはざる木は無奇麗にて悪し、
廿九一覆ハ、油引たる障子ハ移りよく、はなも一入ひかりありて、能見ゆれども、日氣油氣をとをしお
かして、花痛事なれバ、いかゞと覺ゆ、何の覆にても、高く仕たるハよし、はなにちかきハ悪し、遠

牡丹鑑賞

く覆たるハ花のたもち久しき物也、心を付べし、

一花壇の引墓へ、或ハ紫或ハ黒く、あるひハ青きよし、赤白の二色ハあしかるべし、

〔剪花翁傳〕三月開花前編二牡丹　春ハ四月なれど、剪花者ハ好て蕾揃を剪を以て春牡丹と稱す、花の色赤、淡紅、中紅、濃紅、底紅、紫白朱諸色斑入等、花名數十種枚擧すべからず、開花三月末八十八夜頃也、方日向、西北の塞がりし所いとよし、春彼岸より專ら風透をよくすべし、地花壇三分濕、土圃錢、肥寒中大便、移春彼岸、又立冬前後よし、接春彼岸切接にすべし、春芽出し前油粕を入べし、又十日ばかり經て一度、又同じく一度、都合二十日に兩度許入べし、花の時に雨覆ひすべし、夏月炎天に日覆もて日覆ひすべし、花辰の剋より開きて直花亂れ、花共に約やかに正しく、未の剋より屯收て蕊を掩ひ包む、翌日亦開くこと昨日のごとし、是のごとくなること、四五日におよぶを上花とす、下花なるは開し形ち約かに正しからず、花外裏に反て、蕊も蕊を掩ひ包ますして凋む也、さて花壇の花の明日咲べきを、今日開かんことを需バ、兩三日巳前より葉筵などをもて四方を圍ひ、油障子を覆ひ、天日を隔て受べし、乃今朝開花すべし、又今日開くべき蕾を明日迄保たせんにハ、若蕾而巳を昨夕方に剪て、逆水をかけ水器に入、雨風の當らぬ冷陰の所におくべし、冷齋あらバ尤よし、夜に入て水器と共に紙袋を覆ひ、戶外の庭に置く、雨も亦厭ふべし、戶外ハ夜分冷氣强し、斯して明日まで開かず、略○中略因に云、千兩牡丹是春牡丹の一種也、開花も育方も上に同じ、花の色初開は極紅にして、中頃ハ白く、後は淡紅になる也、毎一輪に是のごとく色變れり、此樹ハ池田北の口より三町許北、木の部村、牡丹屋嘉十郎の庭中に在、是一家の珍花にて、剪花者の扱へるものにあらざれど、名稱たるをもて出せり、

〔地錦抄〕〔一〕牡丹凡例

牡丹は總體を九品に分て見るべし、九品と云は、一位、二形、三色、四重、五實、六葉、七莚、八葉、九木也、

一ニ位といふに四等の分有り、一位未見、二位三位ヲよしとする、四位ははふれたるとぞ、

二ツニ形といふに五様あり、富貴、艶麗、厳格、亂雑、枯槁なり、富貴艶麗をよしとす、

三ニ色に二種有り、咲出あかみたる様なるは珠玉咲也、あをみたる様なるは碧玉咲也、珠玉咲は花ニ光りありてよし、碧玉咲は花につやなし、又是にたがへるもあるべし、酔あり、ゑみ有、ゑひゑみ有ルは上花の外なるべし、

四ニ重は、五ツ葩より十五葩にいたりて一重とす、廿葩より四十葩までを八重とす、四十五葩より百葩迄を千重とす、百葩の外万重とす、八重千重をよしとすとぞ、

五ニ實に形容大小高下赤白有り、白ニ黄白有り、銀白青白有、赤に薄赤、木瓜色、濃赤、薄紫、こい紫、黒色有り、形ニ瓶子有、實の首五ツにわれ、七ツにわる丶あり、白は銀白、紅はこいあか、小瓶子をよしとす、芥子實鈴實共いふ、

六ニ蘂はすべて黄なり、淡濃多少長短あり、黄にして少をよしとす、

七ニ葩は厚圓薄缺有り、捏縮有、ひらめくつぼむあり、厚圓にしてつぼむをよしとす、

八ニ葉に大小長短頻縮弱垂圓尖あり、其色紫碧淡濃あり、細長にしてつよきをよしとす、黛たる色をよしとする、

九ツ木に強直なるあり、巻曲なるあり、のびやかにほそすぐ成有、すなをにのびやかなるをよしとす、

〔牡丹道ゑるべ乾〕第一 一牡丹と題に書ては、紅牡丹の事に成べきか、丹の字あかしと讀ば、赤きは花の本體也、白く咲により白牡丹、紫に咲により紫牡丹とは云めり、又紅牡丹と云も、紫白にえらばんがためしにあれば、重言といふべきにもあらじ、本草、時珍曰、牡丹以色丹者為上、雖結子而根上生苗、故謂之牡丹とあれば、元來紅なるべし、群花品の中に、又以牡丹第一とすれば、世に花王

とも稱するなり、

第二
一花好人へよくはなを見知べし、されど年を追ふて國々より名花あまた出れバ、中々見覺がたし、見知たるはなにても、年によりて出來不出來あれば、かたく爭ふべきにあらず、或ハ白に染出る事肥過る故也、紅に黒み出、またハ薄色の樣になる事も賤く肥過る故也、むざと養しする事惡しと覺ゆ、本草に、秋冬移接以壤土、至春盛開、其狀百變、故其根性殊失本眞、とあれば、色替り花形替事尤也、又春雨繁き年は、紅色必薄しと知べし、
上花ハ色重實樣形重葉葩よくして、葩のもとに染なきを上品とす也、
色ハ紅白ともに艶く麗しく光り有をよしとす、咲出る時ハよきとても、早くさむるハはめず、散まで色を失はざるを第一とす、むかしの魏家の紫牡丹ハ、ならびなき名花なりと聞ゆ、今ハ紫とだに聞バ見る人なし、姚家の黄牡丹のたぐひ今ありたりとも麗しく興有べしと思ん哉、叟に薄黄牡丹と名付ル有、色ハ木槿の花に似たり、かさね薄し、或ハ白に紫の飛入ハ有物也、昔唐の明皇の時、牡丹を獻ずる者有、貴妃其時おもてをとゝのふるに、口脂手に有を以て葉上に印す、然しむるに來歲花開て紅の迹有、それにより一捻紅と名付給ふ、今筑陽に此名を呼あり、其類といふべし、彼韓湘子が瑠璃盆中に、碧玉の花の牡丹に似たるを咲せけるハ、仙術なれバ、さも有ぬべし、又宋の單父と云し人ハ、種藝の術を得て、牡丹を千種に變せしめしかバ、上皇勅して驪山に牡丹万株を植しむるに、花開て其色その〱異なりしかバ、是より呼て花神と稱し、又花師と名づけ給しとなり、今叟に紅白定めがたき花あり、爪紅粉、柿牡丹、はじもみぢ、法花、臘月、行事官など、其外も有、いづれも替すといへども色替りと云、花壇の彩に間種る也、總て花に青黄赤白の四色有て、黒色ハなし、いかんとなれバ、黒ハ北方の色水にして陰也、母の道なればバ、母は内にゝありて養ふ事をつかさどりて、外に色をあらはす事なき故成べし、世に黒牡丹と

いへども、牡丹のはなにてハなし、牛の異名也、昔唐土の劉訓と云し人、繋₂水牛在₁前、指曰、此劉訓が黒牡丹也と、それよりして牛の異名なりとす、

第三
一重に四品あり、一重、八重、千重、万重也、此内八重千重を上とすべし、一重ハたらず、万重ハおほし、又盛上て弓蘂咲矢倉咲といふハ、蘂の中より細き蘂出る、皆下品也、凡蘂五蘂より十五六に及蘂を一重とし、廿蘂より廿四五蘂に及ぶを八重とし、それより次第におほく、百蘂近きまでを千重とし、百蘂以上あらバ万重と知べし、重おほきはなハ、木によつて綻る時、内へ雨入て蘂くさる事有、雨入ざる様にすべし、自然雨入たらバ、よく其雫を落べし、吹拂てもよし、

第四
一實ハ紅にハ赤き實よし、白にハ志ろきよし、いづれも小瓶子なりを上とす、白牡丹に青き實有、是も赤く黒くうるみたるよりハよし、紫陽より出し花に、袖の内といへる白ハ實異黒也、されども花色花形よきによりて上品と、すたとへバ松の蘂北斗紅ハ實裂る也、裂るハ實の第一症なれども、花の色能によつて上品とせり、九品相揃ふ事なきにより、一ツ二ツの難ハゆるす、餘ハ是になぞらへて知べし、實ハ小く破れざるをよしとす、大にして破るを嫌ふ、（略○下）

〔閑窻自語〕本朝愛₂牡丹₁事

わが國にぼたんを愛せしこと、保元以前よりはじまれるなり、（略○中）靈元院法皇ことにめでおはしましけるよし、たしかに志るせり、

〔玄同放言　二〕山牡丹（附山橘出）

本邦にても、近世牡丹を鍾愛すること盛になりしかば、種々の異名さへ負はして、吟味せざるものなかりき、されば寳永の比に至りて、この花を弄ぶこと、異朝唐宋の時に讓らず、當時春桃散人といふもの、牡丹論談一卷を著はしたり、こは寳永八年二月上旬の事なり、撰者の自序に云、春の

日の夕ぐれにさへなりぬればと讀みたる人は、その花のふかみ草をしらぬ類なるべし、まことに紅白相まじへて咲き出づるさま、近來の人擧りて興とせざることなしといへり、かくてその書に志せる牡丹四十三種なり、花譜に注釋あり、詳にして且盡くせり、卷尾に丹花四十三色也、獨遊軒無會と寫して花押あり、花合の會主なる歟、當時の流行想像るべし、寬永の巨菊、元祿の百椿、ちかくは寬政の橘、昨今の赤牛花と異なることあらじかし、おもふに歐陽氏牡丹譜に載するもの九十餘種、こは錢思公が書屛錄しつるものにこそあなれ、花品敍には、永叔が親(め)を經る所、人の稱するものを取りて、纔に二十餘種を出だせりか、ゝれば我寬永の四十餘種、寔に寡きにあらず、寬永を異盛にして、この花漸々に衰へたり、されば余〇[illegible]が總角のころまでは、駒込のあなた、西が原てふ處に、茶器を鬻く牝丹屋とかいふもの、別莊に、多く牡丹を植ゑしかば、俗に牡丹屋敷と呼び做したり、そが家號を牡丹屋といひつるも、牡丹を愛るによりてなるべし、これもはや夢と覺めけん、今は彼處に、さるもののありとしも聞えず、海内の名產輻湊して、よろづに乏しからぬ大江戶なれども、今にして牡丹の生花を見んことは、三千歲に一たび花さくといふ優(う)鉢(ば)羅(ら)花(げ)よりもかたくなりぬ、

〔甲子夜話九十八〕林蜂洲折簡往來ノ次デニ、北澤ノ牡丹屋敷ハ、君知ルヤ否ト、予〇松浦清知ラザルヲ以テ答フ、又云フ、ソノ花品數種版刻セシ者アリ、君見ルヤ否ト、予未ダ見ザルヲ以テ對フ、又我齋ニ此編九十五卷ニ題目掌果ト云ル、武州玉川邊ノ村里ヲ記ス者ヲ載セシ中ニ、甲州道新宿ノ奧ヲ高井戶ト云フ近所ニ、北澤鈴木左內庭中牡丹多シト記セシガ、正シク是ナルベシト思ヒシニ、尋テ林子ヨリ彼ノ版刻ノ摺本ヲ贈ル、展觀レバ花王ノ富貴恰モ盡セリ、但摺紙幅大ニシテ縮寫シ難キヲ以テ、分贈シテソノ次第ヲ綴ル、

林又曰、名花ノ品七百種ヲ論ルハ珍娃ニ止ム、眞ニ泰平ノ餘化ト云ベシ、實ニ斯花始リ自來未曾

有ナルベシ、○中略

林又云コトアリ、曰年少ノ時、王子村飛鳥山ノ手前ニ、西ケ原ト云所アリ、ソノ處ノ豪農斯花ヲ多ク植テ、牡丹屋敷ト稱シ、春毎ノ見物群到セリ、王侯貴人ハ其宅ヲ借切ニシテ終日ノ宴席トシ、各家ノ紋幕ヲ張テ、雜人ノ入ルヲ許サヾル日モ有リキ、然ルヲ何ツノ間ニカ廢シテ、今ハ其處ヲ知ル人サヘ無シ、彼モ一時ナリ、此モ一時ナリトヤ云ベキ、流居士曰、カヽル好事サヘモ盛衰互ニアル、況ンヤ朱家權門ノ榮枯老目ノ歷ル所ナリ、

〔玉蘂〕承安二年四月廿日戊午、此日法性寺所被植置之牡丹、掘進院、○後白河依有御尋也、以隨身重武令付定能朝臣、

〔攝津名所圖會七莵原郡〕熊内牡丹（くまうちのぼたん）　熊内村醫生の家にあり、初は高丈餘の牡丹ありし由、今枯てなし、舊記に載て名世に高ければ、こゝに記す、

〔玄同放言二〕山○牡○丹○山欄附出

山牡丹ハ苑圃中に植うるものとおなじからず、我邦にはこれなしといふものあり、玄かれども烟霞綺談卷四云、遠州秋葉山の麓、いぬゐ川の上なる京丸といふ小村の片邊り、嶮岨なる山の半腹に大木二本あり、その一本は遠くより見る所凡四圍許、又一本は二圍もあらんかし、初夏に花開を見れば、その色白く徑尺許りに見ゆる也、これ牡丹なりといへり、ちかき比その村なる人に問けるに、これまぎれもなき牡丹也といへりと玄るせり、鈴木素行神農本經解故卷八云、本邦牡丹無山生者、惟遠江州山中有之云、未詳といひしは、彼京丸なる山牡丹を仄に傳へ聞きたるなるべし、按ずるに謝肇淛云、五雜組物部二余在嘉興吳江所見牡丹適有丈餘者、開花至三五百朶、北方未嘗有也、かゝれば唐山にも牡丹に巨大なるもの罕にはありと見えたり、我遠江なる山牡丹も、そら言にはあらぬなるべし、

〔採藥使記 下甲州〕重康曰、甲州御城中ニテ牡丹ヲ見シニ、甚ダ大ク木ノ高サ一丈五尺バカリモアリ、花ハ未ダ見ズトイヘドモ、色紅ニテ年ニヨリ百二三十輪モ花ヲ開クト云フ、誠ニ土地ニ應ジタル故カ、願クハ此根ヲ採リ藥用ニセバ、其功甚効アランコトヲ、

先生按ズルニ、牡丹ノ大木トナルコト所々ニアルコトナリ、攝州兎原郡熊内村ト云フ所ニ、高サ一丈餘ノ牡丹アリト、輿地通志ニモ載タリ、又中華ニモコレアルニヤ、湧幢小品ニイハク、青城山ニ牡丹アリ、樹ノ高サ十丈、六十年ニ一度寫花開ク、永樂年中花咲シ時、蜀獻王使ヲ以テ見セシム、剪テ花ヲ取リテ歸リシト、廣群芳譜ニモ引ケリ、

〔武江産物志 藥園〕牡丹　西ヶ原牡丹屋(日暮立夏)三　深川八幡(別當圍中)　上北澤村(左内圍中)　龜戸社内(先年大社牡丹あり、天明の洪水に枯る)

〔續江戸砂子 五〕名樹の部
緋の衣ぼたん　上野御本坊

〔牡丹道しるべ 乾〕十二 一花の盛ハ大かた立春より九十日なり、下品のはなハ十日も早く咲出る也、一國の内にても、少の遲速あるなり、洛中都外二日の違有、南都ハ五日遲し、勢尾の兩國八十八夜の比大槪たがはず、駿府ハ六七日はやし、賀州越前五七日遲し、攝州播陽ハ氣候同して京にハ二日もはやし、筑陽ハ五日はやし、

〔牡丹道しるべ 坤〕廿二 一牡丹の苗牙を矢と名付る事、人每にいへども、いかなる故といふ事をしらず、或人云、生發の氣をさして矢といふにやと、しからバ矢といふ名ハ余のもろ〳〵の苗牙に通ずべしと、おもふに牡丹の子の親木のもとより眞すぐに生出たる、其形恰もよく矢頭(じんとう)に似たるゆへに名付る成べし、げに似たる物を能ぞ思ひ出たるとおかし、それ皆人の物に名付る事、其形をもつてする、此類おほし、尤實ばへのハ矢といはず、

芍藥

一地中にありて出はなれざる牙を白子といへり、少にても根あれば切はなし、植てよくつく物也、牙かくるゝほどに、細成砂をかけて、底なき曲物をきせ、寒中に霜雪を凌ぎ、曲物の中いてあがらぬやうにして置也、春快葉をする物也、他に遣す時、白子などありて、殘置時のためなり、

〔本草和名 八草〕芍藥(市若反)　一名白木、一名餘容、一名犂食、(楊玄操音力奚反)　一名解食、(楊玄操音胡買反)　一名鋋、(仁諝音蟬)　一名甘木、(出雜要訣)　一名里攣夷、(出雜要性)　和名衣比須久須利、一名奴美久須利、

〔倭名類聚抄 二十 草〕芍藥　唐韻云、芍藥(芍音灼反、新抄本草云、和名衣比須久須里、又奴美久須里、)藥草可和食也、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕廣韻引廣雅、藥草作香草、本草、芍藥生中岳川谷及丘陵、陶注云、今出白山蔣山茅山最好、白而長大、餘處亦有、而多赤、圖經云、芍藥春生紅芽作叢、莖上三枝五葉、似牡丹而狹長、高一二尺、夏開花、有紅白紫數種、子似牡丹子而小、根亦有赤白二色、鄭風溱洧毛傳、勺藥香草也、太平御覽引詩義疏云、今藥草勺藥無香氣、非是也、未審今何草、司馬相如賦云、勺藥之和、揚雄賦曰、甘甜之和、勺藥之羹、然則勺藥又入食也、王引之曰、西山經云、繡山、其草多芍藥、中山經句檷之山、條谷之山、洞庭之山、並云、其草多芍藥、則芍藥山草名、名醫別錄云、芍藥生中岳川谷及丘陵、陶注云、出白山蔣山茅山最好、白而長大、餘處多赤、與山經合、則古之芍藥、即醫家之藥草芍藥也、今人畦種之、離騷所謂畦留夷者矣、其根莖及葉無香氣、而花則香、故毛詩謂之香草、猶蘭爲香草、亦是花香莖葉不香也、至司馬相如子虛賦、勺藥之和、揚雄蜀都賦、甘甜之和、勺藥之羹、皆是調和之名、陸氏引以證勺藥之草、誤也、伏儼注子虛賦云、勺藥以蘭桂調食、文穎云、勺藥五味之和也、韋昭云、勺藥、和齊鹹酸美味也、勺丁削反、藥旅酌反、晉灼云、南都賦曰、歸雁鳴鵽、香稻鮮魚、以爲芍藥、酸甜滋味、百種千名、文說是也、李善云、枚乘七發云、勺藥之醬、然則和調之言、於義爲得、今案勺丁削反、藥旅酌反、勺藥之言、適歷也、適亦調也、說文厤字從厤云、厤調也、與歷同、又云秝希疏、適歷也、讀若歷、周官遂師注云、磨者適歷、執綍者名也、疏云、分布希疏得所、名爲適歷也、然則均調謂之適歷、聲轉則爲勺藥、蜀都賦云、有伊之

徒調夫五味、甘甜之和、勺藥之羹、七命云、味重九沸、和兼勺藥、論衡譴告篇云、釀酒於罌、烹肉於鼎、皆欲其氣味調得也、時或鹹苦酸淡不應口者、由人勺藥失其和也、嵇康聲無哀樂論云、大羹不和、不極勺藥之和、皆其證矣、服虔注子虛賦列或說云、以勺藥調食、亦未嘗審信也、而顏師古乃云、勺藥草名、其根主和五藏、又辟毒氣、故合之於蘭桂五味、以助諸食、因呼五味之和爲勺藥、及考古人飲食、未聞有用勺藥者、既已無可爲證矣、乃云今人食馬肝馬腸、合勺藥而煮之、是古之遺法、據其說、則今人非食馬肝馬腸、且不用芍藥、何以知古人用勺藥助食乎、然且歷誣諸家、妄爲音訓、斯爲惑矣、焦循曰、上林賦云、宜笑的皪、李善引郭璞曰、鮮明貌也、又明月珠子、的皪江靡、李善引應劭云、其光耀照於江邊、也、張衡思玄賦、離朱脣而微笑兮、顏的皪以遺光、注云、明貌、左思蜀都賦云、暉麗灼爍、劉淵林注云、豔色也、魏都賦云、丹藕凌波而的皪、注云、光明也、勺藥之華、鮮豔外著、其稱勺藥、猶灼爍也、

〔下學集下草木〕芍藥（異名將離草、又云可離草、李群玉句云、芍藥[illegible]、[illegible]書謂、與下[illegible]一對句也、○[illegible]）

〔塵袋三草〕一　芙蓉芍藥ト云芍藥ハ何物ゾ

芍藥ニ二アリ、芍藥ト木芍藥トナリ、此ノ邊ニツ子ニ牡丹ト云フモノハ芍藥也、木芍藥ト云ハ木牡丹トテ、イロ深紅ニテ一エナルガ、黃ナル色ノアルモノ、事歟、白芍藥ト云フハシロキハナノサクナルベシ、ウルハシキ牡丹ハ此ノ土ニイマダワタラズ、宋人コトニ秘藏スルウヘニ、大ニシタモタリニタキ故歟、牡丹ハ草ニ非ズ、木ノ如シナイツモクキノカレウスル事ナシ、フルキ枝ヨリメグミイブル也、其レニ花葉ヲ生ズ、芍藥ノ如クトシゴトニワチヨリワカバヘ出ル事ハナシ、芍ノ一字ヲバチヤクトヨムヤウアリ、調美ノ調ニ芍藥醬ト云ヘリ、是ハ芍藥ヲシホニツクルニハ非ズ、芍藥ノ根ニハ五味ヲ具足スト云フ事、醫書ノ中ニ見エタリ、此ノユヘニ氣味ヲト、ノヘタル心ヲイハントテハ、芍藥ノ和ト云ヒナラハセリ、芍藥ノ醬ト云フモ、醬ノ氣味ヲヨクト、ノフル心ヲ表スルナルベシ、調味ノ方ニハチヤクトヨム、又芍ノ字ヲ（丁歷反）テキトヨム事アリカクヨミ

ツレバ非芍藥、蓮子ノ名ナリ、シテウトヨムヤウアリ、カクヨミツレバホセノ名也、木ニオウル蔦也、

〔大和本草 七花草〕芍藥　其花牡丹ノ次ナリ、故ニ花相ト云、詩經鄭風溱洧篇ニ芍藥ヲノセタリ、故ニ王元之芍藥詩譜云、百花之中其名最古シト云ヘリ、藥ニハ赤白芍藥共ニ、山中ニ自然ニ生ジテ單ノ紅白花ナクヲ用ユベシ、世俗園中ニウヘテ、花ヲ賞スルヲバ用ユベカラズ、中華ヨリ來ルハ其形カハレリ、花園ニウフルハ、中世中華ヨリ來レルナルベシ、今世ハ千葉、單葉、紅白、其品甚多シ、奧州河沼郡千笑原ニ、寛永年中越後ノ城四郎長茂、千根ノ芍藥ヲウフ、是ニヨツテ千笑原ト云、今ニ滿原皆芍藥ナリト云、是亦自然生ニアラズ、昔ウヘシナリ、王觀芍藥譜曰、今芍藥有三十四品、日本ニ今所在ハ其數彌多シテカゾヘガタシ、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕芍藥(シヤクヤク)　將離　〇中略　(和名衣比須藥、一云洒美久須里、)

本綱、有白者、(名金芍藥)赤者、(名木芍藥)千葉者、(名小牡丹)十月生紅芽、至春乃長、夏初開花五葉、似牡丹而狹長、高一二尺、有紅白紫數種、其品凡三十餘種、有千葉單葉樓子之異、入藥宜用單葉根、結子似牡丹子而小、其根之白赤隨花之色也、洛陽牡丹揚州芍藥甲天下、

氣味、(酸而苦氣薄味厚)　陰也、降也、爲手足太陰行經藥、入肝脾血分、白補而赤瀉、白收而赤散、其用凡六、安脾經、一、治腹痛、二、收胃氣、三、止瀉痢、四、和血脈、五、固腠理、六、

同白朮用(補脾)、同川芎(瀉肝)、同人參(補氣)、同當歸(補血)、以酒炒(補陰)、同甘草(止腹痛)、同黃連(止瀉痢)、同防風(發痘疹)、同薑棗(溫經散濕)、產後不可用、但酒炒不妨、(惡石斛芒硝、反藜蘆)

按芍藥花容綽約、(綽約者美好貌)故倭俗亦名貌好草、(加保與久佐)蓋唐芍藥多內外赤色而白者鮮矣、出於本朝信濃者最佳、伊勢丹波之產次之、凡人家所栽者花美好也、而入藥以山中者爲佳、或用豆知阿介比根僞之、形狀相似矣宜辨之、

近時名花之芍藥頗多出、凡五百有餘種不遑悉記、惟愛花者則紅白最鮮明、其花形如蓋、而中簇如嘴、其嘴皆黃金色者爲上品、凡牡丹芍藥連花欲插瓶、早晚剪不宜、至巳時或申時可伐用、不萎損、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕芍藥　エビスダナ（古名）　エビスグスリ（和名鈔）　ヌミグスリ（同上）　カホヨグサ（歌書）　今ハ通名　根一名錦繡根（綱目）　解倉（事物紺珠）　養性（典籍便覽）　黑辛夷（同上）　黑牽夷（事物異名）　留夷（離騷）　辛夷（事物代醉編、コブシト同名異物）　花一名吐錦（尺牘雙魚）　儒客（典籍便覽）　掬香瓊（同上）　玉盤盂（事物異名、典籍便覽）　冠芳（事物紺珠）　近客（事物紺珠、本草彙言）　艶友（同上）　何離（三才圖會、南史）　可離（古今注、典籍便覽）　殿春客（事物異名）　婪尾春（典籍便覽、[illegible]）　大枰花（本草綱目）　花相（牡丹ヲ花王ト云、芍藥ヲ花相ト云フ、[illegible]）　牡丹近侍（事物紺珠）　晉盤面（同上）　增一名解倉（千金方）　沒骨華（王氏畫苑）

唐山ニテハ揚州ノ芍藥洛陽ノ牡丹ト稱シテ天下ノ名物ナリ、ソノ品名揚州芍藥譜ニ三十一種ヲ載ス、群芳譜ニ三十九種ヲノス、秘傳花鏡ニ八十八種ヲノス、年ヲ逐テ幻變スルコト知ベシ、和產モ亦然リ、ソノ品類ハ花壇綱目、花壇大全等ニ詳ナリ、藥ニ入ルヽハ、花圃ノ根ヲ以テ養力ヲ假ラズシテ栽ルモノ、生乾ニシテ用ユベシ、藥舖ニテコレヲ眞ノ生乾ト呼ブ、城州長池ヨリ出ス、タダ粗皮ヲ去テ乾タルモノナリ、又唐樣ト稱スルハ、漢渡ニ擬シテ沸湯ニ浸シ過シ、乾スユヘニ性味薄シテ生乾ニ及バズ、根ノ赤白ハ花ノ色ニ隨ト、時珍ノ說ニ云ヘリ、然レドモ舶來ノ赤芍藥ハ皆粗皮ヲ去ラズシテ乾タルモノナリ、白芍藥ハ皆皮ヲ去リ蒸乾スモノナリ、正字通曰、舊以花色分赤芍白芍、或言根曬乾爲赤芍、刮去根皮蒸乾爲白芍、白者益脾、赤者行血滯、今コノ說ニ從フ、又和ニテ芍藥ノ陳腐ニシテ賣レガタキモノヲ水ニ漬シ、赤色ニ變ゼシメタルヲ赤芍藥ト稱シテ、貨ルモノアリ、僞物ナリ、

又宇陀芍藥信濃芍藥ト云アリ、和ニテ古來上品ト云傳フレドモ、是ハ草芍藥山芍藥ニシテ、山ノ自然生ナリ、眞ノ芍藥ニアラズ、葉ノ形ハ同シテ、花ニ紅白ノ二種アリ、皆單葉ニシテ形チ小ク觀

ルニタラズ、ソノ實ハ殻赤色ニシテ黒子アリテ、美ナルコト花ニマサレリ、深山ニ多シ、俗ニタナボタント云、信州ニテヤマシヤクジヤウト云、備後ニテノシヤクヤクト云、和州宇陀ニテ此根ヲ栽ヘ培養シタルヲ、宇陀芍藥ト云、粗皮ヲ去リ曝乾シタルモノナリ、外白色切レバ内ニ黒キ輪アリ、味酸シ、又信州ニテ培養シテ出スヲ、信濃芍藥ト云フ、又丹波伊勢ヨリ山生ヲ取、直ニ乾シタルヲ出ス、コレヲ田舍芍藥ト云、最下品ナリ、

〔廣益地錦抄 四〕芍藥　しやくやくは花相といふて、ぼたんに次り、はなに數百の品有て、二階三かいあり、金銀のもやうあるゆへ、金しで、銀しで、金手まり、砂金、金盞など、みな金銀の名あり、藥種の芍藥は各別の物なり、葉形草立も少似てちがひあり、花ハひとへ小りん、川芎の花のごとくにて天をむきてひらく、ながめにたらず、秋實をむすぶ、其實われて三方四方へわかれ、内は皆朱にぬるがごとくに赤く、花よりまさりて見るにたれり、紅白の二種有り、紅の根は赤芍、白は白芍なり、

〔剪花翁傳 三 四月開花〕芍藥花　花白、淡紅、濃紅、紅白斑入等品數多し、開花四月中旬、方日向、地中濕、土回塵、肥大便、寒中芽出るまへ、淡小便そゝぐべし、分株、移、秋彼岸よし、上品なるを俗にまがきといふ、葉大總にして亂れず、莖直く連りて、英皿のごとく、辰の刻より開き、未の刻に能收て葉を掩ひ包む、翌日も開くこと昨日のごとし、是のごとくなる事、四五日におよぶ也、下品なるものを、俗に呼て頭子といふ、乃ち開きしまゝにて次第にしぼむ也、

〔農業全書 十 藥種之類〕芍藥　芍藥は牡丹に相つぎ、和漢古今ともに、世人花を賞するものなり、殊さら近來都鄙其花を弄ぶ事さかんにして、年を逐て其花しな〳〵多くなれる事いふばかりなし、藥種には花の一重なるを用ゆ、白を白芍藥と云、赤を赤芍藥といふ、醫家に白芍藥を多く用ひ、赤は只十にして二三も用ゆ

るとなり、白を多く種べし、是も山に自然と生たるが性よけれども、又里に種るをも用ゆべし、種る地は、よく肥たる砂地に、ちと土のまじりたるよし、真土も肥たる地の、ねばりけなきはよし、地ごしらへは、粉糞、熟したる馬糞、或やき糞などにても、其地味により見合、是をまじへ、其上に熟糞をかけ、よく乾し、度々うちかへし、こなしならし置て種べし、種かゆる事あらば、八月末九月始、其年の節によりて考へうゆべし、子を種る法、地を右のごとくこしらへ、畦の間一尺ばかり、其上に深さ三寸程に筋をほり、能糞土を敷、子を蒔る事、一寸餘に一粒づゝ、付合ぬ様にちどりあしに種べし、又肥土にて七八分程に、種子をおほひすべし、生て後夏は日おほひをし、冬は雪霜のふせぎをし、二年めの九月の比、又別に能地をしたゝめ置て、畦の間を二尺ばかりにして移し種べし、四五年に至ては、其根大になり、薬種と成べし、十月の初掘取、よく洗ひ日に干、かたくなりたるを收置、薬屋に賣べし、但中以下の地には種べからず、山下の里猪鹿多く、穀物は作り難き所に肥地あらば尤多く作るべし、

〔草木六部耕種法四[illegible]〕芍薬牡丹ヲ作ル法

芍薬　山中自然生ハ、性味強クシテ上品ナルコトハ論ズルニ及バズ、然レドモ入用ノ甚多キ薬物ニテ、勿論自然生ニテ用ノ足ベキニ非ザルヲ以テ、種子ヲ蒔キ苗ヲ爲立テ、此ヲ作ラザルコトヲ得ズ、凡芍薬苗ヲ爲立ル法ハ、先塡土或壚土ノ日當リ能キ場處ヲ撰ビ、新墾故畑ニ拘ハラズ、牛馬ノ力ヲ用テ細耕シ、此ニ馬糞ヲ入ルコト、一畝十荷ノ割合ニシテ能ク耙交置、然シテ後ニ芍薬ノ實ノ能ク熟シ、黑色ニ成タルヲ採リ、直ニ此ヲ右苗代ニ蒔テ、其上ニ小便灰一升、細土二升ヲ混合シテ厚三四分程覆土スベシ、容易ニハ芽ノ出ザル者ナリ、時々壅養水ヲ灑ベシ、且寒中ハ馬糞ヲ厚ク其上ニ掛ケ置クヲ良トス、翌年モ能ク他草ヲ耘リ、秋ニ至テ先其植地モ、塡土カ壚土ノ日當リ能キ場處ヲ、新墾故畑ヲ論ゼズ、牛馬ヲ用テ幾遍モ犂返シ、且厩肥ノ能ク腐レタルヲ澤山ニ

入レテ、二尺許深ニ軟膨(ボヤカシ)置、右苗代ニ爲立タル芍藥ノ苗ヲ、二尺隔ニ一坪九本ヅヽ、植付ベシ、既活著タラバ能ク他草ヲ耘リ、時々壅養水ヲ灑ギ、五年許モ右ノ如ク養ヒ置クトキハ、根能ク蔓リ肥テ、一株數十本ノ懸根垂下ル者ナリ、五年目ノ冬十月初ニハ悉掘リ採リテ、其掘跡ニ麁肥ヲ澤山ニ入レ、能ク軟膨置テ、他物ヲ作ルトモ、又芍藥ヲ植ルトモ、其宜ニ任スベシ、芍藥ハ第十番ノ氣候ニ應合スル草ナレドモ、五六番ヨリ第十五番以下ノ寒國ニモ、能ク善術スル者ニテ、入用極テ多キ藥物ナリ、宜ク多ク作ルベシ、芍藥ハ他ノ作物トハ其趣異ニシテ、五年ノ間ハ植タル儘ニシテ掘リ採ルコトノ無キヲ以テ、甚事簡ニシテ人手ノ掛ラザル者ナリ、故ニ土地廣ク百姓少キ國ニ於テハ、別シテ利潤多シ、能ク培養ヲ厚クシテ、此物ヲ作ルトキハ、五年間ニハ一坪ノ地ヨリ十斤以上ノ根ヲ出ス、一坪十斤アルトキハ、一段三千斤ナリ、此ヲ金一兩八十斤ニ賣ト雖ドモ、其價金三十七兩二歩ヲ得ベシ、此ヲ五年ニ割ルトキハ一年七兩二歩ニ當ル、人手ノ掛ラザル作物ニテ一段年々七兩二歩ノ金ヲ得ルコトナレバ、利潤モ亦大ナリ、國土ヲ領スル者ハ、察セズンバアルベカラザル所ナリ、

〔廣益國產考一〕國產となるべき物を左にあぐ

芍藥　是も薄地に作りて益を得るもの也、大和吉野郡宇多郡より作り出せり、隨分作りて農家に利を得るもの也、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〇中略芍藥四兩、　相模國卅二種、〇中略芍藥黃耆前胡各一斤、　武藏國廿八種、〇中略芍藥三斤、〇下略

〔毛吹草三〕信濃　芍藥　若狹　芍藥　但馬　芍藥

〔出雲風土記島根郡〕凡諸山野所在草木、〇中略芍藥、

〔實隆公記〕永正六年四月廿七日戊子、自室町殿芍藥數莖被下、公條卿(御使相伴)祝著之由申入了、

〔時慶卿記〕慶長十四年三月廿五日、御所ノ芍藥牡丹見廻申、芍藥ノ甘汁ヲ懸御目候、女御殿芍藥見廻候、折節御座候ヲ御盃ヲ給、又常御座之所ノ花壇モ申付候、　十五年九月廿日、芍藥駿府へ可進上用意候出來候へ、則入置、

〔伊達文書〕追而申候、(〇中略)御去年殿下候刻、御數寄屋にて見申候芍藥申請度存候、京都には一切無御座候、被分候御次而も候はゞ大望に候、返々左近身上之儀、猶々上總さまへよきやうに奉賴候、以上、

二月十(〇慶長十六年)六日　勸修寺中納言　光豐(花押)

大崎少將殿

〔本朝無題詩四〕問三月盡日御事

鳥散花飄眺望殆、闌長晝盡恨相同、(〇中略)芳壇移榻傾斜酒、醉對數莖芍藥叢、　藤原敦基

〔靈峯文集雜著百十六〕論芍藥

時維四月芍藥開敷、當階逞豔、有客戲詰曰、何爲殿春哉、欲爲姚王僭稱品藻耶花以用之歟、不然空負花中宰相名乎、余代之對曰、夫人各有所長短、花亦宜然、請試論之、(〇中略)於是論芍藥曰、曾聞禹貢揚州厥草惟夭、謂芍藥也、雖未知其實定論、而出溱洧士女之謔、則其名既久矣、及入上林而相如賦其和味、至謝省中作五言以賞其花、杜少陵王右丞共詠之、白香山柳儀曹等亦題焉、然廣實遊揚州者不吟之、則當時猶未精甚歟、逮宋朝有四相之賞、有萬花之會、常父之序、貫父之譜、蘇黄之詩、王觀之論、廣行於世、其名嗣姚魏、逮有宰相之號、然則花之隱顯有時者、猶人之有出處也、汝王亦然、謝康樂以前知其名者鮮矣、及唐而盛、及宋而彌繁、其稱王稱后可謂富貴也、然或嫌其豪奢、或叛其國色、若至褒斜採之爲新、則花之榮辱、亦猶人之有行藏也、汝既爲花相、則宜取其所長、莫攻其所短也、唯其清如梅、如蓮、其芳

如蘭如菊則可也、何爲求其瑕疵、略○下

草牡丹

〔大和本草七花草〕草牡丹　葉ハ牡丹ニ似タリ、單白花ヲ開ク、實牡丹ニ似タリ、自宿根生ズ、又實ヲマキテ生ズ、是亦牡丹芍藥ノ類ナリ、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕山芹菜　俗云草牡丹

救荒本草云、山芹菜生山野間、苗高一尺餘、葉似野蜀葵、稍大而有五叉、又似地牡丹葉亦大、葉中攛生莖叉、梢結刺毬、如鼠粘子刺毬而小、開花黲白色、葉味甘、

按草牡丹高一尺、葉略似牡丹、四月開白花、似芍藥而單葉稍小、

福壽草

〔大和本草七花草〕福壽草　フ。ク。ジ。ュ。草トモ、元。日。草。トモ云、春初ヨリ黃花ヲ開ク、盆ニウヘテ賞ス、花ハ朝開キ夕ハナフル、又明朝ヒラク、葉ハ胡蘿蔔ニ似テ花ハ草山吹ノ如シ、寒ヲヲソル、夏ハ陰地ヲ忌ミ蠶ヲ長ル、又白花アリ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕元。日。草。　福壽草

按福壽草洛東山溪陰處有之、冬枯春生於宿根、肥莖高二三寸、葉似胡蘿蔔及石長生葉而小、歲旦初開黃花、似半開菊花、人以爲珍、植盆稱元日草、春夏長尺餘、生枝條花綻開不堪見、

五雜俎云、有歲蘭、其花同蘭而葉稍異、其開必以歲首、故名歲蘭、此亦元日草一類二種乎、

〔草木育種下美花〕献歲菊(ふくじゅさう)　又雪蓮見西域聞ともいふ、蝦夷にてはシユクトといふ、山に多生す、一尺餘りて花大なり、又淺黃福壽草あり、莖綠色して花淡黃なり、又重瓣ふくじゆさうあり、形狀八重菊のごとし、是は花開こと遲し、山の野土に植べし、盆栽は花少し、花の時は霜除を捨てよし、夏の內米泔水を根廻へ灌、少し油糟を用もよし、

女萎

〔倭名類聚抄二十草〕女葳蕤　拾遺本草云、女葳蕤、一名黃芝、葳音威、蕤音汝誰反、和名惠美久佐、一云安麻奈、

○按ズルニ、女葳蕤ハ女萎葳蕤トアルベキヲ、萎ノ字ヲ脫セシナリ、而シテ女萎葳蕤ハ一物異

鐵線花
風車草

名ナリト云ヒ、二物ナリトノ説アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五草〕女萎　ボタンヅル　ワタブル　シンデンカブラ丹州　ワクノテ備前　ナベカラマリ同上　スクモカブラ伯州　チヤカブラ石州　ドンドロ勢州　一名蔓地楚啓蒙

山野ニ多ク生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ、纖蔓甚長シ、葉對生ス、形大蓼葉ニ似テ小ク、皆三尖ニシテ牡丹葉ノ狀アリ、秋ノ初枝ノ梢ニ數十花簇生ス、白色四瓣、形大蓼花ニ似テ小ク、實モ亦相似テ小シ、秋後苗枯ル、是即救荒本草ニ載スル所ノ山蓼ナリ、一種草本ノ者ハ深山ニ生ズ、葉大ニシテ秋芎藭ノ葉ノ如シ、夏秋ノ間花ヲ開キ穗ヲ成ス、白色又淺紫碧花ナルモノアリ、皆四出ニシテ下垂ス、俗ニフリガネサウト呼ブ、救荒野譜ヲ白頭翁トスト云者是ナリ、今花戸ニテ漢種ノ白頭翁ト呼ブ者ト相同ジ、女萎ニ同名アリ、根ヲ用ユル者ハ萎蕤ナリ、苗ヲ用ユル者ハ本條ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

備中國卅二種、〇中略女萎四斤、　阿波國卅三種、〇中略連翹女萎各二斤、　讃岐國卅七種、〇中略連翹女萎各五斤、

〔出雲風土記 秋鹿郡〕凡諸山野所在草木、〇中略女萎、

〔書言字考節用集 六生植〕鐵線花（てつせんくわ）

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕鐵線花（てつせんくわ）　本名未詳

按鐵線花二月苗生、於宿根、一莖三葉、微似芎藭葉、而小、莖細靱甚勁、故俗曰鐵線、無蔓、其葉乃倚架繁衍、四月開花、蕚下有六葉抱莖亦一異也、其花白色六瓣、平開而瓣圓、紫色最艷美、其瓣綻則似絲、天蠶絲爲綸、其本有子採之、八月種之、

千葉鐵線　外六瓣白色如常、而内瓣亦白色千葉短細隨開、瓣青色、外瓣既綻落則内瓣開、

風車草（かざぐるま）　本名未詳（小兒所翫之風車、似此花形、故名）

按風車草者、鐵線草之類、而葉不同、花亦鐵線六瓣、是乃八瓣也、葉大於鐵線、而無叉、一枝三葉、四五月開花、單葉蒼碧色、又有白花者、有千葉者、花綻蘂亂、形與鐵線之總同、凡鐵線出葉於稟枝、風車出葉於舊枝、

〔重修本草綱目啓蒙二十五　蔓草〕威靈仙　一名能消（證類本草）　壽祖（輟耕錄）

集解ニ說クトコロ、草本藤本ノ二種アリ、藤本ノ者ハ時珍說クトコロノ鐵腳威靈仙ナリ、和名テツセン。卽漢名鐵線蓮ナリ、秘傳花鏡ニ鐵線蓮一名番蓮、或云、卽威靈仙ト云リ、廣東新語ニ西洋蓮西洋菊ノ名アリ、花戶ニ多ク栽ユ、人家ニモ栽テ花ヲ賞ス、和州ニハ自生アリ、春時芽ヲ舊藤ヨリ發ス、一根數條赤色竹木上ニ纏延スルコト甚長シ、節ゴトニ葉叢相對シ生ズ、葉ハ山蔘（ボタンヅル）ノ葉ニ似テ小シ、夏ニ至リ花ヲ生ズ、一莖一花大サ二寸餘、六出或ハ八出、形玉蘂花（トケイサウ）ノ如ク碧色、中心ニ細小紫瓣簇生シテ菊花ノ如シ、又白瓣紫心ノ者アリ、皆外瓣先ヅ落チ、內瓣後ニ凋ム、其根數十條一窠ヲナシ、長サ一尺餘、淺黑黃赤色、又一種カザグルマト呼ブ者アリ、葉大ニシテ楕ナリ、三葉一朶ヲナシ、大蔘葉（センニンサウ）ニ似タリ、花ハ鐵線蓮ヨリ大ニシテ紫心ナシ、碧色、白色、千瓣、單瓣ノ數種アリ、亦鐵線蓮ノ一種ナリ、多ク人家ニ栽テ花ヲ賞ス、

〔草木育種下　美花〕鐵線蓮（てつせん）（鐵花）　山の野土にうへ、酒粕人糞を入てよし、枝を伏て土を懸置、根を生じて分植べし、棚を三尺ぐらいに低搆てよし、又花白して千葉（やへ）なるものを、ゆきおこしといふ、又かざぐるまは碧色にして花大なり、

〔剪花翁傳三　四月開花〕鐵線花　花一重、色水淺黃、開花四月中旬より六月中旬迄あり、方半陰、地二分濕、土えらばず、肥油粕芽出しまへに入べし、又花前にも入べし、蔓を生ずるを地に入て根を取、秋彼岸に移すべし、葉はハタナ蔓のごとし、

仙人草

〔剪花翁傳〈三 四月開花〉〕風車　花白微淡赤に青みを含み、葩本に陰入也、開花四月上旬、方半陰、地一分黒土えらばず、肥淡小便春彼岸前芽出しの時、一兩度そゝぐべし、分株春芽出しまへよし、形テシンに似たり、

〔廣益地錦抄〈五〉〕仙人草　蔓草にてかづらは多もかれず、夏白花おほくさきてながめたへず、はなくわんかう甚よく遠くくんずる、遠近によらず、かきねにからませ尤うへべし、外科におふく用る、此葉をあやまりて口中に入レば歯うごく、甚敷は歯おつる、いたむ歯をぬきたきには、此葉をくわゆれば早くぬける、

〔草木育種後編〈下 蔓品〉〕大蓼〈威靈〉　俗に仙人艸といふ、和蘭にてラツプ、スターンデ、グレマチユスといふ、葉及花を藥用とす、園中の雜木籬笆に糾纒しめてよし、又是が莖葉大毒なり、口中に入る、事なかれ、

唐松草

〔和漢三才圖會〈九十二末 山草〉〕唐松草〈からまつさう〉　俗稱〈正字未詳〉

按唐松草生山中、春生苗、苗凋更生、莖葉似人參而細小、面青綠背淡、三椏五葉、四月莖端開白花、無葩鬚、而匠人如剪成松葉、俗稱唐松也、花落蕋殘、其蕋青黄色亦似花、開者結実、有種如麥顆而青色、

一種有小。唐。松。、莖葉稍小而莖帶紫色、其花有白有紫、今人家移種甚可愛、

一種有雪。黒。草。、高四五寸、葉花並似唐松草而白、〈又有淡紅及紫〉

白頭公

〔本草和名〈十一 草〉〕白頭公〈陶景注云、近根處有白茸、似人白頭、故以爲名、〉一名野丈人、一名胡主使者、一名奈何草、一名羌胡使者、〈出釋藥性〉和名於岐奈久佐。一名奈加久佐、

〔倭名類聚抄〈二十 草〉〕白頭公　陶隱居本草注云、白頭公、〈和名於木奈久佐、一云奈加久佐、〉近根處有白茸、似人白頭、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄〈十 草〉〕蘇注云、其葉似芍藥而大、抽一莖、莖頭一花、紫色似木菫花、實大者如雞子、白毛

寸餘、皆披下似纛頭、正似白頭老翁、故名焉、今言近根有白茸、陶似不識、蜀本圖經云、有細毛不滑澤、花蘂黄、開寶本草云、今驗此草叢生、狀如白薇而柔細稍長、葉生莖頭、如杏葉、上有細白毛、近根者有白茸、圖經陶注、則未述其莖葉、唐注又云、葉似芍藥、實大如雞子、白毛寸餘、此皆誤矣、

〔物類稱呼三生植〕白頭翁ちごばな　一名おやぐさ　京都にてうないこ、又せがいさう、〈書界の諺に、大魔の天狗の首俳書界物と有、髪に似たりと也、〉大坂にてひめばな、江戸にておきなぐさ、〈是和名なり、〉畿内にてちごばな、美濃にてかくさう、加賀にてけし〳〵　まないた、甲斐にてけいせいさう、木曾にてかぶろ、越中にておにごろ、又てんぐのもとゞり、仙臺にてちゝんこ、下野にてちゝこ、又かはらちご、筑前にてねこぐさ、せがいさう、飛驒にてものぐるひ、又かつしき、四國にて尉(じやう)どのと云、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕白頭翁

ナカグサ和名鈔　ヲキナグサ同上　ゼガイサウ筑前、信州　シヤグマザイコ　シヤグマグサ石見　チヽカウ　チゴバナ加賀、越前　チンコバナ信州　チヽンコ備後　チチコ野州　カハラチゴ同上　チンゴ但州　チゴノマヒ越中　ヲチゴバナ木戸　カハラバナ備後　カハラザイコ越實全書　ガクモチ濃州　カブラ同上　ガタサウ同上　ツワブキ参河　子コグサ筑前　子コバナ筑後　ゲジ〳〵　マナイタ加州　ダンゼウドノ泉州　ダンゼウ同州　ゼウドノ四國　カブロ木曾　カブロテウ伊州　ヒメバナ大坂　ヲニゴロ越中　テングノモトヾリ同上　ウナイコ花家　ウ子コ讃州　ヲナイコ肥後　ウバガシラ松前　ヲバガシラ津輕　ヤマブシバナ石見　シヤンゴバナ越州龍野　ホウコグサ同上越路　コラコラ同上栗村　木　コマノヒザ仙臺　ケイセンタハ備前美作　ケイセイサウ甲州信中　ヌスビトバナ肥前　ヌスドバナ大和　ハグマ泉州　キツ子コン〳〵備後　ラカンサウ　モノグルヒ飛州　カツシキ同上　ガンボウシ上野　ジイガヒゲ讃州

一名野丈具奉名物　老翁鬚奇蕎方性　注之花藥譜

本草

山野向陽ノ地ニ多シ、春宿根ヨリ數葉叢生ス、形青藁ノ防風葉ニ似テ光滑ナラズ、莖葉トモニ白毛多シ、三四月一尺許ノ莖ヲ出ス、ソノ巓ニ細小葉莖ヲ抱キ並ビ生ジ、上ニ數枝ヲ分ツ、枝頂ゴトニ一花倒埀シテ鈴鐸ノ如シ、長サ八九分、濶サ六分許、後開テ日ニ向テ仰グ、六瓣ニシテ紫赤色外ニ白毛多シ、中ニ一簇ノ紫蕊アリ、黃蕊コレヲ圍ム、花萎テ瓣蕊倶ニ脱ス、中ノ紫絲漸ク長大二寸許、圍ニ簇リテ四ニ埀ル、ソノ絲甚ダ細ク、淡紫色ニ變ズ、後又白色ニ變ジ、風ニ隨テ飄リ飛去ル、絲根ニ小子アリ、落ル處ニ苗ヲ生ズ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種〇中略 白頭公一斤、・安房國十八種〇中略 白頭公三斤、〇下略

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山野所在草木、白頭公、

〔散木奇歌集 九 雜〕ものへまいりける道に、草のふみつけられて有けるをみてよめる、

道のべによみまだかるゝ翁草かる人もなき歎きをぞする、

〔梅花無盡藏 七二 雪韻句〕白頭翁草〈本草云、白頭翁、又號二胡王使者一、又號二奈何草一、〉

此草深衣司馬公、無端編入芳方中、白頭不改有餘習、元豁老成滿一叢、〈新鷹本草敍云、草而不用者白頭翁、石而不用者大腸玄精、〉

秋自一莖先時加、無媒極路照君家、白頭倘有負時色、合伴元嘉以後花、

〔武江產物志 野草〕鼠山ノ產　白頭翁〈翁用村ニ〉

〔佐渡志 五 物產〕白頭翁　方言セカイソウ　山野ノ間ニ稀ニアリ

〔大和本草 九 雜草〕猫草　國俗又曰白頭翁、本草山草上載白頭翁、相似而不同、山野ニアリ、葉ハ艾ニ似タリ、莖葉堅硬ナリ、花ハ紫ニシテ其形ツルベノ如ク、鈴ヲ倒セタルガ如シ、內紫也、外ニ白毛アリ、花三月ニ開ク、其葉ヲ食ヘバエグシ、南星ヲ食タルガ如シ、毒草ナルベシ、花散テ其アト蒲公英ノ毬ノ形ノ如シ、

獐耳細辛

〔本草綱目啓蒙圖譜九山草〕獐耳細辛略○圖　スハマサウ　莖ヲ抽テ一花開ク、六瓣或七八瓣、品類多ク、花色各異ナリ、根ハ杜衡ニ似テ紫褐色、單葉ノ菊花ノ如シ、

〔草木育種下美花〕獐耳細辛（さんかくさう本草）　又すはまさうとも、ゆきわりさうともいふ、加賀國白山に多あり、白花のもの多し、又淡紅あり、又薄紫もあり、深碧色深紅色のものは稀なり、夏は日陰にて冬は日陽よき、山の黒ぼく野土等の地に植べし、花は正月に開く、其頭霜除をしてよし、夏中少づゝ米泔水を灌べし、人糞は惡し、

黃連

〔本草和名七草〕黃連、一名王連、（本條）一名石髓、一名金龍子、（已上出雜要訣）和名加久末久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕黃連　本草云、黃連一名王連、（和名加久末久佐）

〔箋注倭名類聚抄十草〕蜀本圖經云、苗似茶、花黃、叢生、一莖生三葉、高尺許、冬不凋、江左者節高如連珠、蜀都者節下不連珠、圖經云、苗高一尺已來、葉似甘菊、四月開花黃色、六月結實似芹子、色亦黃、生江左者根若連珠、其苗經冬不凋、葉如小雉尾草、正月開花作細穗、淡白微黃色、

〔大和本草六草〕黃連　常州ノ山產尤佳也、賀州ノ產多シ、是亦ヨシ、奥會津又奧州ニモ多シ、葉ハヒカゲノカブラニ似タリ、日本ノ黃連性ヨシ、故ニ中夏朝鮮ニモ日本ヨリ多クワタル、中夏ノ書ニモ倭黃連ヲ良トス、

〔重修本草綱目啓蒙入山草〕黃連　ヤマクサ（延喜式）　カクマクサ（和名鈔）　今ハ通名　一名滿膽芝（輟耕錄）　宣連（方書、宣城黃連ナリ、）　川連（同上、川產ノ黃連ナリ、）　株連（同上、上品ノ黃連ナリ、）　淨黃連（遵生八牋）　增、一名脚連（證治準繩）　宣黃連（附方）

加州ニ產スルモノハ、形肥大ニシテ根頭三五枝ニモ分レテ、鷹爪雞爪ノ形ノ如シ、卽鷹爪黃連雞爪黃連ト名クルモノナリ、今藥舖ニ加賀黃連ト稱スルモノ、多クハ越中ノ產ヲモ總ジテ云フ、昔年ハ舶來ナシ、明和年中ニ渡ル者最上品ニシテ、加州ノ產ヨリ肥大ナリ、又古來本邦ヨリモ唐山

ヘ渡セシコト、大和本草ニ云ヘリ、本經逢原ニ產川中者、中空色正黃、截開分瓣者爲上、雲南水連次之、日本與楚爲下ト云ヘリ、藥舖ニテハ加賀ヲ上トス、仙臺ノ產ハ加賀ニ次グ、毛ナクシテ短ク、五分許アリ、藥舖ニテツブ〳〵デト云フ、皮色黃ナルコト加賀ニ同ジ、越前ヨリ出ル者ハ二分許、連珠ノ形ニシテ鬚ナシ、又越後美濃ヨリモ出ス、又江州日野ヨリ出ルモノハ、形細クシテ毛ナク、長サ四五分許アリ、又丹波ヨリ出ル者ハ、最肥大ナルコト加賀ト同シテ多毛ナリ、雞爪モアリ、羽州ノ庄內ヨリ出ルヲ夏樸ト云、形細クシテ、長サ二三寸、連珠ニナラズ、佐渡ヨリ出ルハ、外皮黑ヲ帶ビ、內ハ黃色、長サ四五分ヨリ一寸許、播州ノ笠形山ヨリ出ルモノハ、肥大ニシテ丹波ノ如シ、此外和州紀州ヨリモ出ス、越中ヨリ出ルニハ數種アリ、ブ。ル。黃。連。モアリ、凡ソ黃連ハ形ノ肥瘠ニ拘ラズ質實シテ黃色ノ深キモノヲ佳ナリトス、形肥大ナリト雖ドモ質虛シ、或ハ青色或ハ黑色ヲ帶ルモノハ、ミナ下品ニシテ用ルニタヘズ、加州及ビ奥州ノ南部津輕ノ黃連ハ菊葉也、卽蘇頌ノ說ニ、葉似甘菊ト云フモノ是ナリ、凡ソ黃連ノ葉ハ厚クシテ硬ク光アリ、冬枯レズ、正二月先ヅ花莖ヲ出ス、高サ三五寸、其末ニ數花互生ス、大サ三四分、外ニ五ノ長瓣アリ、內ニ十ノ短瓣アリ、色白シ、又黃色ヲ帶ルモノアリ、紫色ヲ帶ルモノアリ、花ノ中心ニ小青莢アリ、周リニ黃蕊ヲ布ク、花終リテ新葉ヲ生ジ、舊葉枯ル、花後ニ米粒ノ大サナル莢ヲ結ブ、凡ソ一花ノ後十許ノ小莢圍ニ並ビテ車輪ノ如ク、ソノ大サ錢ノ如シ、莢ノ中ニ黃色ノ小子アリ、熟スレバ自ラ落チ、明春嫩苗ヲ生ズ、又別ニ一種大。葉。黃。連。アリ、コノ葉ハ菊。黃。連。ヨリ小ク、岐多クシテ芹葉ニ似テ大ナリ、丹波及城州愛宕山ノ溪間ニ生ズルモノ皆コノ種ナリ、又長。葉。黃。連。アリ、大葉黃連ニ似テ長シ、若州ニ產ス、又芹。葉。黃。連。アリ、形モ大サモ芹葉ノ如シ、和州畝日山ニ生ズ、又畑。葉。黃。連。アリ、芹葉黃連ヨリ細カナリ、江州伊吹山、比良山、城州大原ノ寂光院、及ビ鞍馬山ニアリ、是蘇頌ノ說ニ葉如小雉尾草ト云者ナリ、小雉尾草ハタチシノブナリ、以上ノ黃連ノ花實ノ形皆同ジ、又一種五。加。葉。ノ。黃。連。アリ、城州天

台山ノ横川、又鞍馬山、及大原ノ醫王谷等ニ多シ、葉ハ五加ノ葉ノ如ク、五葉一蒂ナリ、大サ錢ノ如シ、故ニ錢黄連トモ、圓葉黄連トモ云、花戸ニテ梅花黄連ト云フ、此根ハ細キ鬚ニシテ處處ニ小根連珠ス、大サ一分許、故ニ又ツル黄連ト云、苗ハ苔ノ如ク地ニ布テ生ズ、ソノ形他ノ黄連ニ異ナリ、山中ニテハ四月ニ花ヲ開ク、市中ニテハ正二月ニ葉ニ先ツテ一莖ヲ抽ヅ、長サ二三寸、ソノ端ニ一花ヲ開ク、五出ニシテ梅花ノ形ノ如ク、大サ三四分、内ハ白色、外ニハ紫色ノ細條アリ、蘂ハ黄色ナリ、花後ニ小莢數多ク圓ニ連ル、内子ハ罌粟(ケシ)米(ツブ)ヨリ大ナリ、凡テ黄連ノ實皆同ジ、唯葉異ナルノミ、葉大者根亦大ニ、葉小者根亦小也、又三。ツ。葉。黄。連。ト云アリ、形ハ錢黄連ニ同クシテ三葉ナリ、花實根倶ニ異ナラズ、一名クマデ黄連、野州カタバミ黄連、同上加州、奥州、野州、甲州ニ產ス、

〔廣益地錦抄四〕黄連　葉こまかにて花はしろく、初春諸花にさきだちてひらく、正月中の比、雪中にもつぼみを出し、珍敷時節なれば、鉢植にしてながめあり、春末に實有、實のかたちもながめ有、

〔草木育種下藥品〕黄連(わうれん)　加賀菊葉の黄連上品なり、又薩摩の大葉は菊葉に似て甚大なり、是亦上品なり、藥に入てよし、又芹葉の物に數種あり、蝦夷の芹葉は至て細く奇品なり、又五加(うこぎ)葉あり、此類に三葉のものあり奇品(めづらし)きなり、此等は根小にして藥に用るに堪ず、總て植る法は、大抵人參を植ると同じ、土地は黑ぼく野土等によし、日陰の地に宜し、若日陽なれば竹か蘆の簀を架、日覆してよし、雨は簀の間よりかゝりてもよし、濕地を嫌、肥に及ばず、折々米泔水を澆べし、八月分植、隨分間を近く植るがよし、

〔令義解三賦役〕凡(略)○中　其調副物、(略)○中　正丁一人、(略)○中　黄連二斤、

〔令集解十三賦役〕穴云、此連、黄草者染草料也、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一黄連和名加久末久佐　加賀、安藝、常陸、陸奥諸州ヨリ出ル者名アリ、本州四方ノ山皆アリ、獨得レ名コト曉シ、就レ中白峯諸山及八ガ岳ニ產スル者、色深黄ニシテ光潤アリ、味殊ニ温和

ナリ、亦一種駒岳ヨリ出ル者、長大ニシテ甚美ナリ、相傳、此山ハ自古登ル者ナシ、若犯テ上ル者アレバ、輙有山鬼祟ト云、其實ハ嶮嶇高嶮懸ニシテ良材希ナル故、仙人モ無主山ナレバ、自ラ此怪説ヲ起セシナリ、近頃偶攀ル者アリ、始テ此物アル事ヲ知レリトナン、唐山ノ書ニモ、倭黄連ハ上ナリト見タリ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

近江國七十三種 中略 黄連二斤十四兩、 信濃國十七種 黄連十斤、○下略

〔採藥使記 下野州 中〕黙任曰、下州日光山シテ根ガ嶽ノ麓ニ、光善院モドシト云フ所ニ、菊葉ノ黄連ヲ出ス、高サ七八寸、其葉大ナルコト菊葉如シ、根モ又性甚ダ好シ、

〔佐渡志 物產 五〕黄連 山中ニ多シ、根ノ長四五分ヨリ一寸バカリ、外皮黒色ヲ帶ビ、内ハ深黄ナリ、効能他邦ノ產ニ勝ルトイヘドモ、形ハ美ハシカラズ、

〔本草和名 八 草〕秦艽 仁諝音交 一名秦膠、出蘇敬注 一名秦瓜 出雜要訣 釋藥性云、字或作糾、或作糺、正作艽 和名都加利久佐、一名波加利久佐、

〔倭名類聚抄 二十 草〕秦艽 本草云、秦艽 音交、和名都加利久佐、一云波加利久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕圖注云、根皆作羅文、相交、中多衘土、圖經云、根土黄色而相交糾、長一尺已來、麤細不等、枝幹高五六寸、葉婆娑、連莖梗、俱青色、如萵苣葉、六月中開花、紫色、似葛花、當月結實、蘇注云、本作札、或作糾、作膠、正作艽也、按札卽糾字、秦艽本以其根羅文交糾得糾名、俗从草作芃、玉篇、芃秦艽、藥名是也、或从木作朻、凡从丩字、俗變作ㄐ、又省作乚、如糾作糺、作乣、斛作斛、作虬是也、故芃變作艽、糾變作札也、與艽野字之从八九字、節札字之从甲乙字不同也、本草和名引蘇注、作利、从禾固誤、然可以證札之卽糾字也、

〔物類品隲 三 草〕秦艽 葉ノ形頗鳥頭葉ニ類シ、花亦鳥頭花ニ似タリ、根黄白色ニシテ羅文アリ、朝鮮產上品、享保中種ヲ傳フ、花黄白色又紫花ノモノアリ、日光產上品、黄白花ノモノアリ、紫花ノモノ

兎葵

アリ、信濃產上品、花紫色ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙山草入〕秦艽　ハカリグサ和名鈔　ツカリグサ同上　一名產家大器譜録耕　綱草村家力

漢渡アリ、根肥大ニシテ黄白色、左チヂ右チヂアリ、又枝分レテチヂレ、其末合テ一本トナリテチヂレタルモアリ、本根内ハ空シクシテ、外ノミ網ノ如クナリテ、末ハチヂレタルモアリ、コレヲ羅紋交糾ト云、享保年中朝鮮ノ秦艽ノ苗來ル、ソノ後種ヲ傳テ今多クアリ、葉ハ毛茛ムマノアシガタノ葉ニ似テ毛ナシ、一根ニ叢生ス、方莖直立シテ葉互生シ、淡黄花ヲ開ク、形烏頭花ニ似テ小シ、根黄黒色ニシテ形チヂレタリ、此草ハ城州ノ北山、及野州信州甲州ニ多シ、花淡紫色ナリ、又黄白花モアリ種樹家ニテ伶。人。草。ト云、此根ハ漢渡ノ乾シタル秦艽根ニヨク似テ黒褐色ナリ、皮ヲ去レバ色白ク、内空虚ニシテ羅紋交糾ス、味苦ク蕃シ、享保年中、漢渡秦艽ノ中ニ偶其葉雜リ來ルアリ、ソノ形蘘荷ノ葉ニ似テ毛茛葉ノ形ニ非ズ、舶來ノ蘆頭ヲ見ルニ、藜蘆葉ノモノト見ユ、綱目藜蘆ノ條下ニ、韓保昇曰、葉似鬱金秦艽蘘荷ト、コレニ據テ觀レバ、朝鮮種ノモノハ眞ノ秦艽ニ非ズ、牛扁ノ集解ニ、根似秦艽トアレバ、牛扁根羅紋交糾ナルコト知ルベシ、或說ニ朝鮮種及ビ伶人草共ニ牛。扁。ナリト云、此說從フベシ、牛扁ヲゲンノセウコニアツル古說ハ穩ナラズ、ゲンノセウコハ牻牛兒救荒本草ノ一種也、

〔本草和名九草〕菟葵一名蕎、仁諝音虚桃反和名以。倍。爾。禮。

〔倭名類聚抄十七野菜〕兎葵　本草云、兎葵和名以倍仁禮味甘寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕爾雅、莃菟葵、郭注云、頗似葵而小、葉狀如藜有毛、汋啖之滑、鄭樵通志云、菟葵天葵也、狀如葵菜、葉大如錢而厚、面青背微紫、生於崖石、本草衍義云、菟葵綠葉如黄蜀葵、花似拗霜甚雅、形如至小者、初開單葉蜀葵有檀心色、如牡丹姚黄蘂、則蜀葵也、蘇敬曰、苗如石龍芮、葉光澤、花白

似梅、堅紫色、煮汁極滑、堪啖、兎葵亦見草類、

〔倭名類聚抄 二十草〕兎葵　本草云、兎葵、〈和名以倍仁礼〉

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蜀本圖經云、苗似黄芘、春末生、高二三尺、花黄、角生子黄細、五月熟、圖經初春生、苗葉、高六七寸、有似黄精、根白、枝莖俱青、三月開花、微黄、結角子扁小如黍粒、微長黄色、

〔類聚名義抄 八草〕兎葵　イヘニレ

〔東雅 十三穀蔬〕兎葵イヘニレ　イへとは家也、なを芋をイヘツイモといふが如し、ニレとは滑かなるをいふなり、その煮啖ふが極めて滑なればなり、楡をニレともヤニレなどもいひ、莧花をハマニレといふも、皆これ其滑かなるをいふなり、即今俗にトロヽといひて、紙を作る料となし、其涎滑を取る、黄葵といふものも又此類なり、

〔庖厨備用倭名本草 五野菜〕兎葵〈○中略〉　元升〈○向井〉曰、吾人モ古ニハ兎葵ヲ食シクルニヤ、倭名抄菜ノ部ニ入タリ、今人ハ食スルモノナシ、其名ヲダニシル人ナシ、田夫ニトヘバ答テ云ク、下澤ノ田間ニフキニ似タチイサキモナアリ、葉ノウラニ毛アリ、色アヒモフキノ如シ、秋白花ヲ開キテ梅ノ如シ、其名ヲシレラズ、食スルモノモナク候ト云、イエニレハ是ナランカ、又按ズルニ雪ノシタト云アリ、又キシンサウトモ云、其ノ葉フキノ形ニ似テ面アヲタウラ紫ニ、莖モ亦ムラサキニシテ、莖葉トモニ毛アリ、大キナルハ高サ四五寸、

〔大和本草 七花草〕一花草〈ソウ〉　葉ハツタニ似テ莖ノ長二寸バカリ、冬小寒ニ始テ葉ヲ生ジ、立春ノ朝花開ヒラク、一莖ニ一花ヒラク、花形白梅ニ似タリ、夏ハ枯ル、他地ニウフレバ花ノ時チガフ、

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕兎葵　イヘニレ〈和名抄〉

集解ニ説トコロ一ナラズ、大抵三種ニ別ツ、恭ノ説トコロノ者ハ、和名セツブンサウ、一名一花草、〈筑前〉山足戒ハ原野ニ生ズ、小寒ノ候、舊根ヨリ一莖ヲ抽ヅルコト一寸許リ、其梢ニ一葉アリ、白頭翁〈オキナグサ〉

緒手卷

花下ノ葉ニ似テ至テ小ク、毛ナクシテ深緑色ナリ、葉中ニ一花ヲ包ム、立春ニ至テ開ク、故ニ節分草ト云、人家ニ移シ栽ルモノハ、半月後レテ開ク、形梅花ノ如ク、大テモ同ジ、ソノ瓣尖リ、或ハ鋸齒アリ、色白クシテ中ニ白蘂多クアリ、花謝シテ葉ヲ生ズ、鳥頭葉ニ似テ至テ小ク、岐多クシテ深緑色、大サ一寸餘一根ニ三葉ニ過ズ、夏ニ至テ枯ル、花後小扁莢ヲ結ブコト二三箇、長サ二三分内ニ二三子アリ、鳳仙花子ノ如ク褐色、熟スレバ莢自ラ裂テ子落チ、次年ノ春生出ス、其根形圓ニシテ半夏根ノ如シ、禹錫ノ說トコロノ者ハ和產詳ナラズ、宗奭說トコロノ者ハ、卽チ救荒本草ノ野西瓜苗是ナリ、和名ギンセンクハ、又播州ニテロトウサウト呼ブ、種樹家ニテ朝露草ト云、春分子ヲ下シ、長ジテ苗高サ二三尺、枝葉互生ス、葉ハ初出ノ西瓜葉ニ似テ大サ三寸許、夏月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、錢葵花ノ如クニシテ、淡黃色ニシテ瓣根深紫色、草綿花ノ小ナルニ似タリ、朝ニ開キ午前ニ萎ム、花後實ヲ結ブ、木槿花實ノ如ニシテ小シ、內ニ細子アリ、熟スレバ苗根共ニ枯ル、時珍說トコロノ紫背天葵ハ、和名イチヤクサウ、是ニ圓葉長葉ノ二種アリ、是ハ圓葉ノ者ナリ、城州天台山ニ生ズ、一根數葉地ニ就テ生ズ、形チ圓ニシテ硬ク、大サ錢ノ如シ、紋脈龜甲紋ノ如シ、面ハ淺綠色ニシテ光アリ、背ハ淺紫色、其莖紫赤色ニシテ長シ、夏月中心ニ高サ三四寸ノ莖ヲ抽ヅ、其半已上數花連リ垂ル、六瓣白色、大サ二分許、後圓實ヲ結ブ、南天燭子ヨリ小クシテ下垂ス、生ハ青ク、熟スレバ黑シ、其長葉ノ者ハ苗葉大ナリ、是鹿蹄草ナリ、

〔倭訓栞前編五〕をだまき〇中略 一種の草花に名けしは、實の形によれり、紫と白との品あり、又放下僧といふ草あり、よく似たり、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕絲繰草(いとくりさう)　緒手卷(ヲダマキ)　共此俗稱、本名未詳、

按絲繰草高二三尺、葉似胡蘿蔔葉、二三月開花、白色帶黃、形似籰故名之、

一種有八重絲繰草、其花不單、無周圍角籰也、

〔閑窓自語〕瑠璃をだまき草事

松前よりちかき海中に、小島といふ所あり、その所にをだまき草(烏頭。附子。)といふくさの、るりの色にさけるあり、そのたねを安永中に、たかの入道中將隆□朝臣のもとへ、松前守護のものゝふよりおくりしをうゑて、近ごろ世に多くなれり、故主殿權助佐伯職朝臣の第に、關山といひて博識のものあり、このくる世にしれぬうちに、見せける人のありしが、いづかたよりきたれるやらん、めづらしき草なりといふ、たづぬる人しらずといへりければ、づら〳〵なは見て、この色は海邊に生ずるなるべし、花の色を見るに、東國のものならんといへり、その道をえし人の見るところ、いさゝかたがはざりけりと、見せし人大に感せしなり、

〔本草和名 十草〕烏頭(陶景注云、似烏鳥之頭、故以名之、) 一名奚毒、一名即子、一名烏喙、(蘇敬注云、烏頭兩岐者名烏喙、) 一名莨、一名千秋、一名毒公、一名果負、一名緩帝、一名頼、一名鹿采、一名耿子、(已上八名出釋藥性) 一名閻前、(出雜要決)

烏喙(陶景注云、似烏鳥口、故以名之、) 射罔(陶景注云、以八月取汁日煎爲射罔、獵者以傅箭射禽獸、中人亦死、)

天雄(烏喙三寸以上爲天雄、) 一名白幕、一名莨、(仁諝音艮) 一名董草、(已上二名出雷公) 一名烏登、(出大清經) 一名莨、(出釋藥性)

附子(陶景注云、天雄烏頭附子、三建、)

側子(蘇敬曰、此上五種爲一莖、陶景云、冥也、三月採爲天雄、八月採爲附子、邊角大者爲側子、九十月採爲烏頭、如烏口者爲烏喙、上可有爲烏二字)疑中有白附子、非此類) 已上五種和名於。宇、

〔倭名類聚抄 二十草〕烏頭附子 本草注云、似烏頭、謂之烏頭、似口者謂之烏喙、三寸以上謂之天雄、八月採者爲附子、其邊角大者謂之側子、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草下品引陶隱居云、有時菫初生、有腦形似烏鳥之頭、故謂之烏頭、有兩岐共蔕、狀如牛角、名烏喙、喙即烏之口也、○中略 蘇云、烏喙即烏頭異名也、此物同苗、或有三岐者、然兩岐者少、縱天雄附子有兩岐者、仍依本名、如烏頭兩岐即名烏喙、天雄附子若有兩岐者、復云何名之、

〇中略按千金翼方、證類本草烏喙條云、長三寸已上爲天雄、則知此所引本條之文、非陶注也、本草和名云、天雄烏喙三寸以上爲天雄、不著出典、故源君誤併爲陶注也、按陶注云、天雄似附子、細而長、便是長者乃至三四寸許、〇中略所引文、〇八月以下文證類本草載陶蘇及諸注皆無有、按本草和名引疏曰、八月採爲附子、邊角大者爲側子、則知此所引疏文也、按陶云、附子以八月採、又側子注云、此卽附子邊角之大者、脫取之、是本草疏所本、蘇云、側子只是烏頭下共附子天雄同生小者、側子與附子皆非正生、謂從烏頭傍出也、以小者爲側子、大者爲附子、今稱附子角爲側子、理必不然、蜀本圖經云、今據附子邊果有角如大棗核及檳榔已來者形狀亦自是一顆仍不小、是則烏頭傍出附子、附子傍出側子、明矣、又云、苗高二尺許、葉似石龍芮及艾、其花紫赤、其實紫黑、圖經曰、苗高三四尺以來、莖作四稜、葉如艾、花紫碧色作穗、實小紫黑色如桑椹、〇中略吳普本草云、烏頭正月始生、葉厚、莖方中空、葉四々相當、與蒿相似、十月採、形如烏頭、有兩歧相合如烏之喙者、名云烏喙、又云、側子八月採是附子角之大者、是陶氏所本、皆以形狀爲別者也、御覽引博物志云、物有同種而異用者、烏頭天雄附子一物、春夏秋冬採之各異、名醫別錄云、冬月採爲附子、春採爲烏頭、此皆以時候爲別者也、廣雅云、一歲爲萴子、二歲爲烏喙、三歲爲附子、四歲爲烏頭、五歲爲天雄、此以年歲爲別者也、本草圖經云、烏頭、烏喙、天雄、附子、側子五品、都是一種所產、冬至前布種、至次年八月後方成、本只種附子一物、至成熟後有此四物、收時仍一歲、今一年種之便有此五物、豈今人種蒔之法、用力倍至、故爾繁盛也、王念孫曰、諸名對文則異、散文則有通者、

〔下學集草木下〕附子ブシ藥種　烏頭ウヅ

〔多識編二草部〕附子、於字、今俗云布須伊毛、異名其母名川烏頭、和名今案於宇乃波波、　天雄、今案於宇乃須須利己、異名白幕、本經　側子、今案於宇乃古、異名萴子、　漏藍子、今案於宇乃末留故、　烏喙、今案於宇乃布多末多古、金鴉、綱目　草烏頭、今案伊布須、蝦夷搗莖煎汁傅箭射禽獸、　白附子、今案志呂於

字、

〔書言字考節用集 六生植〕草烏頭（トリカブト） 鴛鴦菊 同 草烏頭（トリカブト）根有大毒、多生山間、蝦夷汁塗箭射禽獸、鴛鴦菊 同 又云 土烏頭（ウヅ）附子母也

附子（ブシ）本草、母名烏頭、子名附子、烏頭如芋魁、附子如芋子、 草烏頭（サウウヅ）

〔倭訓栞 中編 十六〕とりかぶと 略○中 草にいふは其花の似たるより名とす、僧鞋菊名の如し、かぶと菊ともいへり、草烏頭也、花に紫白あり、花葉は蔓生の兩種なるべし、

〔和漢三才圖會 九十五毒草〕草烏頭（くさうづ） 略○中

按草烏頭 俗呼名止利加布止、葉似菊葉而厚、八九月開花、淺紫色、形似伶人所著鳥冠、故名之、又有白花者、其根乃草烏頭也、用與烏頭畧齊、外科用之、和州金剛山之產良、若州江州次之、今人家種之賞花、

〔物類品隲 三草〕附子 其母ハ川烏頭ナリ、略○中 蝦夷產、享保中、阿部將翁享台命、至蝦夷、是ヲ得タリト云、己卯主品中予 ○中略 實具之、

烏頭 即草烏頭ナリ、和名トリカブト、又カブトギクト云、所在ニ多シ、花深碧色又白花ノモノ淡紫花ノモノアリ、一種蔓生ノモノアリ、和名ハナヅルト云、箱根產葉小ニシテ花叉多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕附子 イ。フ。ス。和名 ワ。ウ。古歌 ト。リ。カ。プ。ト。 カ。プ。ト。ギ。ク。 カ。プ。ト。バ。ナ。 ブ。ス。佐州 ブ。ス。シ。ド。ケ。南部 一名回陽 本草 正坐丹砂 綱目 九頂公 本草 花一名雙鸞菊 花鏡 鶴哥菊 同上 僧鞋菊 南 西番蓮 同上 川烏一名昌明童子 綱目

附子ハ漢渡多クアリ、皆鹽ニ漬シ製スル者故ニ、水ニ浸シ鹽ヲ去リ用ユベシ、切テ内白色ナルヲ撰ビ用ユ、色黑キ者多シ、腐タルナリ、用ユルニ堪ヘズ、略○中 トリカブトハ人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス、苗高サ四五尺、葉互生ス、形莬葵ノ脚葉ニ似テ厚ク、深緑色光リアリ、秋ニ至テ莖梢ニ花アリ、穗ヲナス、形伶人ノ鳥冠ニ似タリ、深碧色又淡紫色白色アリ、白花ノ者ハ莖弱クシテ藤蔓ノ如シ、種樹家ニテハナカブラ又ハナブルト云フ、唐種ハ種樹家ニアリ、葉岐淺ク花淡紫色ナリ、奥州南部

松前及蝦夷ノ產、根肥大ニナリ易シ、コレヲ栽テ附子ヲトルベシ、附子ハ子ノ名、烏頭ハ母ノ名ナリ、嘗春附子ヲ栽テ四邊ニ子ヲ生ズレバ、子ハ漸ク形大ニナリ、母ハ反テ形小ナリ、烏ノ頭ノ形トナル、コレ川。烏。頭。ナリ、ソノ附子ノ旁ニ附テ生ズルヲ側子ト云フ、形小ク長クシテ兩頭尖リ、椎子ノ形ノ如シ、漏籃子ハ最小キ者ヲ云フ、奥州或ハ蝦夷ノ種ヲ栽テ其子根ヲトリ、鹽ニ浸シ灰ニ埋ミ乾セバ、舶來ノ如クニナル、近年奥州白河ヨリ出ル者ハ、舶來ヨリ大ナルモノアリ、鹽製、醋製、童便製、皆其毒ヲ薄クスル爲ナリ、然レドモ醋製ノ者ハ形甚ダ瘠小ナリ、山中自生ノ者ハ草。烏。頭。ナリ、附子ヲ採タル烏頭ハ川烏頭ナリ、

集解、黑附子方書ニコノ名多ク出、卽附子ナリ、白附子ニ別タンタメニ黑ノ字ヲ添ルナリ、形大ナルヲ大附子、或ハ八角附子ト云フ、至テ大ナルモノニハ疙瘩アリ、故ニ八角附子ト云フ、

增、一種蝦夷種ノ烏頭アリ、高サ僅ニ一尺許、葉長クシテ大ナリ、又漢種ト稱スル者ハ高サ一二尺ニシテ、花ノ形尋常ノ者ニ同クシテ淡紫色ナリ、葉ノ形瘠細ニシテ長ク、缺刻粗ク葉中ノ脈理能ク通リテ、氣脈ノ聯絡セザルヲ異ナリトス、然ルニ集解時珍ノ說ニ、附子之色以花白者爲上、鐵色者次之、青綠者爲下ト云トキハ、上品ニハアラザルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草下〕側子

附子ノ側ニ附テ生ズ、烏頭ニハ附カズ、形小クシテ長ク、兩頭尖リテ椎子ノ狀ノ如シ、烏附側雄ノ圖、本草原始、本草必讀、本草彙言ニ詳ナリ、

漏籃子

コレ附子ノ至テ小ナルモノナリ、用ヲナサズ、○中略

烏頭　ヤマトリカブト　一名小昌明(標群綠)　波串(採取月令)　異負(證類本草)　增、一名茂菫草(輿地便覽)

烏頭ニ二種アリ、川烏頭ト草烏頭トナリ、其川烏頭ハ卽附子ノ母ナリ、已ニ附子ノ條下ニ詳ナリ、

此條ハ即草烏頭ニシテ、トリカブトノ山中自然生ナリ、故ニ其毒川烏頭ヨリ甚シ、深山ニ多シ、苗ハトリカブトニ同シテ痩小、葉ハ土地ニ因テ小異アリ、花色モ亦然リ、京師ニテハ藥肆ニ金剛山ト稱スル者ヲ良トス、即河州金剛山ノ自生ナリ、凡テ烏頭ハ根ノ先ノトコロ曲リテ尖リ、烏ノ首ノ如シ、又其先二ツニ分レタルヲ烏喙ト云、○中略

白附子　一名草鳥頭羽玄(別錄)　新羅白肉(綱目)　白波串(鄉藥本草)

和産詳ナラズ、藥肆ニ渡アリ異物ナリ、其形一顆粗ク一顆細ク、附子ノ形ノ如シ、コレ嫩根ナリ、舊根ハ節アリテ節蟲ノ如シ、ヒメウブニ充ツル古説ハ穩ナラズ、ヒメウブハ一名トンボナウツラチグサ、此草夏ハナシ、秋舊根ヨリ葉ヲ生ズ、冬ヲ經テ夏ノ初ニ枯ル、葉大サ一寸許、草烏頭ニ似テ小ク薄ク、又漏斗菜葉ノニモ似タリ、冬ヨリ春ノ初マデハ、葉背紫色ニシテ美シ、春莖ヲ抽コト一尺許葉互生ス、梢葉ノ間ニ細キ枝ヲ分チ、枝ゴトニ白花アリテ側垂ス、大サ一分餘、六瓣狹細ナリ、一花ゴトニ四莢攅生ス、濶サ一分、長サ二分許、熟スレバ一方ヨリ縱ニ裂ケテ細子出ヅ、三月ニ子熟シテ苗葉枯ル、根ハ數年枯レズ、形雷丸ノ如、長サ五分、或ハ一寸許、外皮黒ク肉白シ、

〔草木育種後編(下品)〕附子(本草)　和名於宇(本草和名)いふす(和名抄)　漢名僧鞋菊(汝南圃史)　享保七年、將翁先生台命にて蝦夷にいたり、採り得て官園及吹上の御畦に栽ゆ、白花のものは奥州鍵とりといふ地にて採り、官園に上る、此白花のものを春月栽て、油かすを根に少し入て、秋月掘り出し、製してよし、野土赤土少陰ある處もよし、灌園先生園中に叢生にして碧花を開き、竹木にまとふものあり、

〔剪花翁傳(四 九月開花)〕烏頭(とりかぶと)　花中紺色又白あり、至て上品とす、開花九月上旬なり、方三分陰、地二分濕、土回塵、肥淡小便、寒中三度、又花前に二度澆ぐべし、株寒中に分べし、

〔草木六部耕種法(三 種樹)〕莪蒁等諸藥物ヲ作法

烏頭モ野土ニ應合スルコトハ、鬱金莪朮等ト同ジケレドモ、其性ノ相反スルコト氷炭ノ如ク、氣

候第二十番以下ノ寒地ニ繁榮スル者ナリ、自然ニ陰地ニ生ジタル者ハ、性氣極テ强クシテ、其芽ヲ食トキハ卽死ス、故ニ奧羽兩國ニテ此ヲ谷不越(タニコサズ)ト名ク、卽此ヲ食シタル谷ヲ出コト能ハズシテ死スルノ謂ニテ、俗ニ鳥兜(トリカブト)ト呼ブ草是ナリ、卽蝦夷國附子(ブス)ト名ル者ナリ、其花深紫ニシテ鳥兜ノ如シ、又漢種川烏頭アリ、其葉手ヲ開キタル形ニ似テ根長ク、三四寸ニ及ビ、疣瘩アルコト蝦蟇脊ノ如シ、又一種花形菊ニ似テ淡紫ト白色ナルト有リ、俗ニ兜菊ト呼ブ根圓長ク末尖レリ、俗ニ兜菊ト呼ブ者ハ、此種類中ノ上品ナリ、宜多ク作リ附子ヲ製スベシ、此ヲ植ル法ハ野腐壚(ノブチ)ヲ畑ニ塗キ、細耕(コマカニウチ)テ木葉枯草塵芥等ヲ耕錯(キリマゼ)テ、前年秋ヨリ能ク腐朽置テ、春分頃ニ至リ、一歩三條ニ畦ヲ作リ、種子根ヲ八九寸間ニ、五目ニ一箇ヅヽ植ベシ、芽出莖長ニ從ヒ、漸々鐵ヲ以テ行壚(サク)ヲ耙加(キリカケ)テ、根ヲ肥太スルノ法ヲ行フトキハ、夏秋ヲ經ルノ間ニ、大ニ能ク肥滿(フト)ル者ナリ、其年十月末ニ、掘採モ一歩一斤ノ根ヲ得ベシ、二年目ニ掘採ルトキ、其根一箇秤量一兩餘ノ大ニ至ル、且其蘆頭際ニ數箇兒根ヲ生ズ、雪降ザル前ニ悉ク掘採テ、親根ヲバ豐藏ニシテ附子ヲ製シ、兒根ハ土中ニ埋置、明春又其故畑ヲ耕シ分植ベシ、山北林陰等日映ノ乏キ野土ハ、殊ニ能ク毒氣ノ强キ上品ヲ生ズ、抑此物ハ暖地ニモ生長スレドモ、暖國ニ作リタルハ、根細ク毒弱クシテ藥用ニ勝ザル者ナリ、此物ヲ法ノ如ク作ルトキハ、隔年ニ一歩二斤餘ノ大附子ヲ生ズ、然レバ一段六百斤ニテ金一兩五十斤ニ當ト雖ドモ、年々一段六金ヅヽノ産業ナリ、山國陰冷ニシテ作物ノ出來ザル地ニ植テ、骨ヲモ折ズ、年々一段六金宛ノ産業ハ、其利潤亦薄カラズ、土地ヲ領スル者宜ク熟察スベシ、

〔律疏賊盜〕凡以毒藥藥人及賣者絞、卽賣買而未用者近流、(毒藥謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類、堪以殺人者、)○下略

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種、○中略附子一斗八升、　武藏國廿八種、○中略烏頭一斛二斗、附子八斗、　上總國廿種○中略附子八斗、　下總國卅六種、○中略附子大五升、　常陸國廿五種、○中略附子一斛、　近江國七十三種、

〇中略天雄、烏頭、牡荊子、各六升、〇下略

〔親俊日記〕天文七年七月六日丁丑、瑞竹軒守見舞、附子四兩預ヶ置之、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州ノ鍵トリト云フ所ヨリ白花ノ附子ヲ出ス、又碧色ノ花モ有リ、其根大キナルモノ三四寸、徑一二寸計アリ、獻上ス、

〔袖中抄二十〕とくきのやちしまのえぞ

あさましやちしまのえぞのつくるなるとくきのやこそひまはもるなれ

顯昭云、とくきのやとは、おくのえびすは、鳥の羽のくきに、附子と云毒をぬりて、よろひのあきまをはかりているといへり、附子矢といふはこれ也、

〔鷺流狂言記二十三〕附子

主〇中略あれはぶすといふて、人の身に大毒の物、〇中略能う番をせい、〇中略レヤ砂糖でおりやる、〇中略二郎實と是は砂糖でおりやる、頼だ人にだまされておりやる、〇下略

〔新撰字鏡草〕石龍芮 不加豆禰、又云牟乃比太比、又地椹、又彭根、又天豆、

〔本草和名八〕石龍芮 仁諝音如銳反 一名魯果能、一名地椹、陶景注云、實如桑椹、故以名之、一名石熊、一名彭根、一名天豆、一名書藥子、出釋藥性一名水菫、出蘇敬注一名王孫莪、一名水莪、一名水茛、已上出陶景注一名水菫苔、出釋藥性一名水建、出雜要方和名之々乃比多比久佐、一名布加都美、

〔倭名類聚抄二十草〕石龍芮 本草云、石龍芮、音如銳反、和名布加豆三、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注、東山石上所生、其葉芮々短小、其子狀如葶藶、黃色而味小辛、蘇云、今用者、俗名水堇、苗似附子、實如桑椹、故名地椹、生下濕地、五月熟、葉子皆辛、山南者粒大如葵子、關中河北者細如葶藶、陶以細者爲眞、未爲通論、圖經今惟出兗州、一叢數莖、莖青紫色、每莖三葉、其葉芮々短小、多刻缺、子如葶藶而色黃、蘇恭云々、此乃水堇、非石龍芮也、今兗州所生者、正與本經陶說相合、爲

牛扁

得其眞矣、陳藏器云、水菫如蘇所注、定是石龍芮、更非別草、爾雅芨菫草、郭注云、烏頭苗也、蘇又注天雄云、石龍芮葉似菫草、故名水菫、如此則依蘇所注是水菫、附子是菫草、水菫々草、二物同名也、

〔書言字考節用集 六生植〕毛茛（タガラシ）一名[illegible]

〔大和本草 八水草〕石龍芮　京都ノ方言ニタガラシトモ、又タゼリトモ云、筑紫ニテウシゼリ、ウバセリト云、三葉芹ニハアラズ、葉ニヒカリアリテ花不好、人是ヲ食ス、無毒、味三葉芹ニヲトル、食スル者モ亦マレナリ、本草毒草ニノセタリ、一種葉莖實共ニ石龍芮ニ似テ小ナルアリ、可為別種、西土ノ俗名ヒキノカサト云、

〔重修本草綱目啓蒙 十三下毒草〕石龍芮　タガラシ 碎米薺同名　タゼリ 攝州、江戸、　タヽナベ 讃州、　キチヽ 遠州　タヽラビ 下總　ゲジヽ 尾州　タンガラ　タヽロベ 備前　一名龍芮 通雅　油灼灼 救荒野譜　蝴蝶菜 通雅　芮子 證類本草

秋冬ヨリ溝瀆中及水田中ニ生ズ、水深キ所ニハ無シ、葉ハ毛茛（ムマノアシガタ）ノ葉ニ似テ毛無ク光アリ、黄緑色ニシテ厚シ、初ハ叢生ス、二三月莖ヲ抽ヅ、高サ一二尺、中空シ、葉互生ス、葉間ニ枝ヲ生ジ、枝ノ末ゴトニ、五瓣ノ黄花ヲ開ク、亦毛茛花ニ似テ小ク光リアリ、後實ヲ結ブ、形チ楊梅（ヤマモヽ）ノ如ニシテ小ク長シ、深緑色、熟シテ地ニ落テ卽苗ヲ生ズ、再生ノモノハ苗小ナリ、此草毛茛ト混ジ易シ、水中ニ生ジ葉ニ毛ナク光リアルモノハ石龍芮ナリ、毛茛ハコレニ反ス、

〔本草和名 十一草〕牛扁 仁諝音甫典反、蘇敬注云、治牛病、故名牛扁、　一名扁特、一名扁毒、已上二名出蘇敬注　和名太知末知久佐

〔倭名類聚抄 二十草〕牛扁　蘇敬本草注云、牛扁 甫典反、和名太知末知久佐、治牛病、故名牛扁也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草下品引云、此藥葉似三菫石龍芮等、根如秦艽而細、生平澤下濕地、田野人名為牛扁、療牛蝨甚効、與此頗異、本草和名引與此全同、蜀本圖經云、葉似石龍芮附子等、圖經、六月有花、八月結實、本草云、牛扁殺牛蝨小蟲、又療牛病、

立金花

〔大和本草九 雑草〕牛扁　レ。ン。ゲ。草。ト云、山野近道處處ニ多ク繁生ス、蔬類草ニタチマチ草ト訓ズ、又俗ニゲ。ン。ノ。セ。ウ。コ。トモ云、葉ハ毛莨及キツン草ニ似テ、花ノ形ハ如梅花、六七月ニ紅紫花ヲ開ク、葉莖花トモニ陰干ニシテ爲末、湯ニテ服ス、能痢ヲ治ス、赤痢ニ尤可也、又爲煎湯、或細末シテ丸ス、皆驗アリ、本草ニハ此功能ヲノセズ、本草毒草類ニノセタリ、然共曰無毒、一度栽レバ繁盛難除、

〔重修本草綱目啓蒙十三 毒草〕牛扁　俗。人。草。 腊葉

山中ニ陰地ニ生ズ、葉一根ニ叢生ス、形草烏頭葉ニ似テ色淺シ、岐多ク白點アリ、夏方莖ヲ抽デ葉互生ス、秋ニ至テ高サ二三尺、花ハ穗ヲナシテ生ズ、形烏頭花ニ似テ小ク、淡紫色又黄白色ノモノアリ、花後小莢ヲ結ブ、又烏頭ニ似タリ、コノ草享保年中朝鮮ヨリ秦艽ト名ケ渡ス、故ニ今花家ニ誤テ唐種ノ秦艽ト呼ブ、其花黄白色ナリ、然レドモ秦艽ノ葉ハ形長シテ萱葉ノ如シ、漢渡秦艽中ニ雜リ來ルモノ間アリ又藜蘆ノ條下ニ、峙保昇曰、藜蘆似鬱金秦艽蘘荷等ト云リ、コレニ據ル時ハ、秦艽葉ハ烏頭葉ニ似ザルコト明ナリ、俗人草ノ根ハ頭ハ内空シタクシテ、羅紋アリテ綱ノ如シ、其下ニ枝アリテチヂレ末ニテハ或數枝相合テ一條トナリ、或ハ左或ハ右ニ糾其形甚秦艽根ニ似タリ、故ニ蘇恭ノ說ニ、牛扁根如秦艽而細ト云、俗人草根ハ皮黑肉ハ白シ、乾ケバ微黑赤ヲ帶ブ、味苦香、秦艽根ハ黄白色味苦シ、古ヨリ牛扁ヲゲンノシヤウコニ充ツルハ非ナリ、

〔和漢三才圖會九十七 水草〕立金花　俗稱 未詳 本字　又有金立花

按立金花生池澤中、葉似虎耳草葉而無白斑、深青色、背色淺微帶紫理、四五月抽莖、頂開六瓣黄花、結實有細子、又其莖葉花皆同而横勒者名金立花、

〔草木育種後編下 圖解并種類の論〕ゑ。ん。こ。う。草　花の莖立を流泉花と云、これを流金花といふなり、春芽出の時植かへざれば花なし、溝泥を乾かして栽べし、根に多く干鰯をさしてよし、芽先より根を生ずるを、鉢の中へ曲て竹をさしてよし、

淫羊藿

〔本草和名 八草〕淫羊藿（陶景注云、羊食此藿、一日百遍、故以名之、）一名剛前、一名先靈脾草、（出蘇敬注）一名可怜筋草、一名百年亡杖草、（已上二名出陶居方）和名宇无岐奈、一名也末止利久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕仙靈毗草　陶隱居本草注云、淫羊藿、（和名宇無木奈、一云夜末止里久佐、）羊食此藿、一日百遍、故以名之、一名剛前、蘇敬曰、俗名仙靈毗草是、（漢語抄云、仙靈毗草、末眞多介里久佐、）

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草中品引云、服此使人好爲陰陽、西川北部有淫羊、一日百遍合、蓋食藿所致、故名淫羊藿、本草和名引與此同、按百遍下合字不可刪節、恐本草和名傳寫誤脫、源君承之也、（中略）○按是四字（剛前）○一名本條文、千金翼方證類本草並載之、源君引併爲陶注誤、（中略）○證類本草引作仙靈脾草、本草和名作先靈裨草、時珍曰、仙靈脾剛前、皆言其功力也、然則剛前、剛強前陰之義、仙靈裨、言若有仙靈裨益之者、則作仙作裨正字、作先作脾毗假借也、（中略）○本草云、主陰萎、證類引食醫心鏡云、益丈夫興陽、理腰膝冷、蘇又云、此草葉形似小豆而圓薄、莖細亦堅、圖經、葉青似杏、葉上有刺、莖如粟稈、根紫色有鬚、四月開花白色、又有紫色碎小獨頭子、湖湘出者、葉如小豆、枝莖緊細、經冬不凋、根似黃連、關中俗呼三枝九葉草、苗高一二尺、時珍曰、一根數莖、莖粗如線、莖三椏、一椏三葉、葉長二三寸、如杏葉及豆藿、面光背淡、甚薄而細齒有微刺、

〔書言字考節用集 六生植〕淫羊藿（ヤマトリグサ、イカリグサ）（放枝牌、棄枝牌並同、順和名、羊食此草、一日百遍、故名、）

〔和爾雅 七草木〕淫羊藿（イカリグサ）（放杖草、棄杖草、仙靈脾並同、）

〔和漢三才圖會 九十二山草〕淫羊藿（いんやうくわく）　仙靈脾　放杖草　棄杖草　千兩金　乾雞筋　黃連祖　三枝九葉草　剛前（中略）○

按、淫羊藿（和名宇無木奈、一云夜末止里久佐、）出丹波船井郡山中、形狀和漢無異、但唐者莖中虛、倭者中實、

〔物類品隲 三草〕淫羊藿　和名イカリサウ、江戸方言クモキリ、紫花ノモノ所在多シ、又白花ノモノアリ、チドリサウト云、又淡紫色ノモノ、靑紫色ノモノアリ、葉又大小ノ別アリ、一種黃花ノモノアリ、

甚稀ナリ、叡山產葉厚強ニシテ光澤アリ、冬ニ至テ枯ズ、蘇頌曰、湖湘出者葉如小豆、枝莖緊細、經冬不凋ト云モノ是ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕淫羊藿 イカリサウ クモキリサウ江戸 カリガネサウ加州 カナビキサウ雲州 タンドリバナ城州叡山 大サンシクヤウサウ 一名黃德祖綱目發明 褒蒼師草俗稱

續 仙靈皮全書俗稱

深山背陰ノ地ニ生ズ、春分後舊根ヨリ莖ヲ抽テ出ス、長サ尺許、柔軟ニシテ直ナラズ、上ニ數花ヲ建ツ、皆側垂ス、ソノ花四瓣、瓣內ニ細長キ距瓣ニ旁テ四ニ出ス、ソノ端上ニ曲リテ、花ノ中ハフトク高ク、鐵錨兒ノ形ニ似タリ、大サ八九分淡紫色、又深紫色藍紫色、淡黃色、白色ナル者アリ、京師ニハ淡紫色ナル者多ク、白色ナル者少シ、勢州紀州江州ニハ白色ノ者多シ、白花ノ者ハチドリサウ同名アリト呼ブ、俱ニ花漸ク開クトキハ其根下ヨリ新葉尋テ出ヅ、凡ソ一根數葉、ソノ莖細ク硬ク、光澤アリテ粟稈ノ如シ、莖ゴトニ三枝、枝ゴトニ三葉、故ニ三枝九葉草ノ名アリ、ソノ葉初出ノ時色淡紫ヲ帶ブ、長ズレバ淺綠色又紫斑ナルモノアリ、ソノ形ハ長橢ニシテ硬ク、端ニ一尖アリ、後ニ兩尖アリ、周圍ニ細刺アリ、冬ヲ經テ凋マズ、紅紫色ニ變ズ、花戶ニ唐種ノ淫羊藿ト呼ブモノアリ、葉和產ヨリ長大ニシテ厚シ、六葉ノ端ニ四出ノ小花數多ク穗ヲナシテ直生ス、穗ニ枝アリテ莟藍花形ニ似タリ、初ハ紫色、開ク時ハ色淺シ、イカリサウノ花形ト大ニ異ナリ、花ハ集解ニ碎小獨頭子ト云ノ文ニ符シ、葉ハ舶來ノ者ニ異ナラザル時ハ、此品眞物タルベシ、此草江州ニ自生アリ、市中ニ販ク者舶來ノ葉ミナ陳久、和產ノ葉ミナ新シ、イカリサウノ花ハ異ナレドモ、必シモ別品ナラザル時ハ、通ジ用ユルモ可ナルベシ、

〔本草和名十一草〕鬼臼 一名爵犀、一名馬目毒公、一名九臼、一名天臼、一名解毒、一名雀頭、一名雀草、已上二名出陶景注 一名雀辛、出雜要訣 和名奴波乃美、

〔多識編二草〕鬼臼、奴波乃美、異名害母草、綱目

〔重修本草綱目啓蒙十三草〕鬼臼　カサグサ　ツリガネサウ　ツリガネガサ　一名獨揺三雅

馬目正字通　玉芝群芳譜　一把金醫學六書

漢渡ナシ、此草一根一莖ニシテ大カザグルマノ如ク、莖頭ニ七八葉輪次ス、大カザグルマヨリ莖長シ、葉下ニ小莖ヲ出シ、一花ヲ開キ下垂ス、鈴鐸ノ形ノ如ク、貝母花ニ似タリ、外ハ紫色、内ハ細金點アリテ、撒金(サンスナゴ)ノ如シ、此花葉下ニ隱テ見ヘズ、故ニ羞天花ノ名アリ、今此草絶テナシ、一種ヤグルマサウト呼アリ、一名ハウチハサウ、カサグサ、種樹家ニ多ク栽ユ、深山ニ生ズ、東國ノ山中最多シ、宿根ヨリ春苗ヲ生ズ、一莖直上ス、高サ二尺許、葉互生ス、其葉五葉一蔕、葉ゴトニ末濶ク、三尖ニシテ本ハ窄ク、箭ノ羽ノ如シ、細キスヂ多アリテ皺ノ如シ、周邊ニ鋸齒アリ、夏月莖頭ニ細白花ヲ開キ穗ヲナス、コレヲ古ヨリ鬼臼ニ充ツレドモ、ソノ花葉上ニ高ク出ルトキハ、羞天花ノ名ニ應ゼズ、藥肆ニモ此根ヲ以テ鬼臼ニ充テ賣ル、其根莖一寸許、長サ六七寸、コレヲ六分許ニ横ニ切テ乾ストキハ、兩頭邊ハ高ク、内ハ凹ニシテ、魚脊骨ノ形ノ如ク褐色ナリ、眞物ハ全根臼ノ形ヲナス、正字通ニ、獨脚蓮ハ鬼臼ト別ナルコトヲ云リ、其說ヤグルマニ近シ、今藥肆ニテ唐ノ鬼臼ト云者ハ眞ニアラズ、

瑣、ヤグルマサウハ、集解時珍ノ說ニ鬼燈檠ト云者ニシテ、即蘇州府志ニ、鬼燈檠一莖挺立、對發五六幹、如燈檠、毒草也、能治腫毒ト云モノナルコト、百品考ニ見ヘタリ、又近世花戸ニ山荷葉ト稱スル草アリ、北國加越ノ深山ニ產ス、初春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一根五六莖、高サ七八寸ニシテ、莖頂ニ葉ヲ生ズルコト荷葉ノ如シ、葉微シク横ニ長ク、前後微シク凹ミ、葉面ニ微皺アリ、文脈モ荷葉ニ似タリ、肥タルモノハ莖ニ枝ヲ分ツ、夏莖ノ半ヨリ別ニ莖ヲ生ジ、其端ニ小葉ヲ生ジテ、其上ニ白色ノ細花六七ヲ簇リ開ク、甚小ニシテ辨見ヘ難ク、卒ニ見レバ金線草(ミヅヒキサウ)ノ花ヲ一ツ放シタルガ如シ、

季夏莖葉共ニ枯ル、根ハ白ヲナシテ實精根ノ如シ、此レモ莖上ニ花咲テ、并天ノ名ニ合ワズ、然レドモ其一種ナルベシ、

通草

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥 太宰府十二種、○中略 通草四升、

〔新撰字鏡 草〕通草 于冨、又於女冨、

〔本草和名 草八〕通草 陶景注云、莖有細孔、兩頭皆通、一名附支、一名丁翁、一名萱藤莖 仁諝音萬、出陶景注、一名畜葍 仁諝音方服反、一名烏覆、一名萱藤、已上三名出蘇敬注、一名附通子 出雜要訣、一名拏子、一名猴葍 已上出拾遺、一名丁父 出雜要訣、和名阿介比加都良、

〔倭名類聚抄 二十草〕通草　和名本草云通草、陶弘景注云、莖有細孔、兩頭相通、和名阿介比加都良

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按證類本草通草條注引陶隱居云、綿樹藤生、汁白、莖有細孔、兩頭皆通、含一頭吹之、則氣出彼頭者良、或云、即葍藤莖、此所引節是文、則宜引本草注而引和名本草載之、非是、蘇云、此物大者徑三寸、每節有二三枝、枝頭有五葉、其子長三四寸、核黑穰白、食之甘美、南人謂為燕覆、或名烏覆、今言葍藤、聲相近爾、圖經、生作藤蔓、大如指、其莖幹大者徑三寸、葉類石葦、又似芍藥、三葉相對、夏秋開紫花、亦有白花者、結實如小木瓜、今人謂之木通、而俗間所謂通草、乃通脫木也、○中略 按果蓏類載葍子、即通草實也、與曾云通草葉青、蔓延樹生、汁白、

〔倭名類聚抄 十七果蓏〕葍子　本草注云、葍藤 上音　一名烏覆 音伏、和名阿介比、　崔禹錫食經云、附通子、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕按證類本草草部中品通草條引唐本注云、南人謂為燕覆、或名烏覆、今言葍藤、葍覆聲相近爾、本草和名云、通草一名燕覆、一名烏覆、一名萱藤、已上三名出蘇敬注、此引本草載葍藤烏覆二名、蓋源君從本草和名引之、又按依蘇云、葍覆聲近、則葍藤似當作葍藤、本草和名作萱藤、亦恐誤、陶注云、通草綿樹藤生、汁白、莖有細孔、兩頭皆通、含一頭吹之、則氣出彼頭者良、蘇注云、此

物大者徑三寸、毎節有二三枝、枝頭有五葉、其子長三四寸、核黑穰白、食之甘美、陳藏器曰、子如箅袋、穰黃子黑、食之當去其皮、蘇云、色白、乃猴𧂭也、本草圖經云、生作藤蔓、大如指、其莖榦大者徑三寸、葉頗類石韋、又似芍藥、三葉相對、夏秋開紫花、又有白花者、結實如小木瓜、

〔和爾雅七草木〕通草アケビ〇木通、萬年藤〇同、子名燕覆、

〔東雅十四果蓏〕葍子アケヒ　倭名抄に本草註崔禹錫食經倭名本草等を引て、葍藤一名烏覆、又附通子はアケビといひ、通草はナケビカヅラといふと見えたり、これ則木通附支、其實を燕覆と名づくるもの也、アケとは赤色、ヒとは實也、實小さく木瓜の如くにして白く、熟しぬれば其內の赤きをいふなり、

〔古今要覽稿草木〕あけびかづら　通草

あけび、和名抄あけびかづら、本草和名、和名抄、あけびは朱實の義なりと、國史草木昆蟲攷にいへども、この實あかく色づくものにあらず、あけびはあけつびの省呼なり、歌にやまひめとよむも同意なるべし、山女の字を用、又ある人の曰、加賀の國にあけび村と云處あり、一には赤日村と書、一には山女村と書り、山女の字を以てあけびと讀事、いかなる義にや詳ならざりしに、或人越前の國へ行時、山中の茶店にやすらひ、菓子樣の物を乞しに、外には何もなし、山をんなのみといへり、夫にても出すべしといへば、あけびの實を出せりと、これにて山女の字を用る事も解せしとぞ、

〔宜禁本草乾集中草〕木通　甘辛平微寒、通利九竅關節血脈、不忘、治痳、治脾疸常眠心煩、出音聲、散諸結不消墨瘡、利尿痳乳結、下乳、子甘利二便、去煩熱、心止渴下氣、去皮

〔大和本草六〕木通　蔓草也、蔓長ク大ニシテ堅シ、蔓卽木通也、葉莖ヲ通草ト云、無毒、筱馬ノ木芽漬ハ通草也、葉ハ五葉ニ分ル、三月紫花開花容三分、秋開子結ブ、此草山野林中ニ多ク生ズ、和名アケビ赤實ナリ、又トキハナルアリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕通草　アケビ和名鈔　アケビカヅラ同上　アケビヅル　タヽバ江州
タトバ[illegible]　ギウスイサウ雲州　タンボボ同上　アッペ若州　ゴサイボヅル同上　ハダ
アカヅラ[illegible]野　ハンダフカヅラ　アクビ共ニ同上　テンタナコンホウ甲州　フドリバナ若州以下
花名、女郎花同上　テロテロピ江州　一名出様環璐輟耕錄　烏覆葛別錄　燕覆本草蒙筌、實名、
山野共ニ多シ、葉形長橢ナリ、五葉ゴトニ一處ニ攢生ス、其五葉ノ大サ四五寸、又大小アリ、舊蔓ハ葉大ニ、嫩蔓ハ葉小ナリ、皆互生ス、四月嫩葉ノ間ニ細枝ヲ生ジ、少叉ヲ分チ花ヲ開ク、大サ四五分、淡紫碧色ト白色トノ二品アリ、皆下垂ス、花ハ三瓣、梢ニ大花ナル者雜リ生ズ、亦三瓣ニシテ深紫碧色、後實ヲ生ズ、瓜ノ形ニ似タリ、徑リ一寸、長サ二寸餘、霜後ニコレヲ肉袋子ト云フ、久蔓ナラザレバ實ヲ結バズ、其皮厚ク肉白ク、核深黑ニシテ光リアリ、此蔓ヲ採リ藥用トス、木通ト云、切レバ車輻解アリテ菊花ノ如ク、針眼通レリ、一頭ヨリ吹バ其氣一頭ニ透ル、和産ヲ眞トス、舶來ハ多ク葡萄ノ根ヲ雜入ス、本草新編ニ卽葡萄根也ト云フ形ハ異ナレドモ、其効ハ粗同ジ、然レドモ和産多ク且新ナリ、故ニ和ヲ用ユベシ、本經逢原ニ木通ハ蘡薁(エビヅル)ノ根ナリト云ハ非ナリ、物理小識曰、淮木通、能行氣、色似沈香、有車輻紋、川木通色白、止通小便、僞者蒲葡萄藤也、本草彙言曰、色黃白者良、黑褐色者爲雨濕所浸、以致形色黧黑、用之力少不及、
又一種三葉ノ木通アリ、大豆葉ノ如シ、又一種三葉ニシテ粗キ鋸齒アル者アリ、
又別ニ一種五葉ノ木通ニ似テ大ニシテ、冬ヲ凌ギ凋マザル者アリ、コレヲトキハアケビト云フ、
卽ムベニシテ救荒本草ノ野木瓜ナリ、

〔古今要覽稿 草木〕あけびかづら　通草
あけびかづらの實より、油を搾り用る事は、信濃の國、出羽の國には、此あぶらにて物をゆびき食す、燈油はさらなり、その油淸潔にして上品なり、しかれども多く食すれば、瀉すものなりといへ

郁子

り、この藤蔓は通草なれども、其實は多く食しても瀉下する事なくして、油には大便閉に用ひて佳なるべしと（佐竹壹岐守臣冠木楠菴）の說なり、あけびかづらは處々に自生多きものなれども、年を經し蔓にあらざれば、實のらぬものなり、花は年をへざるつるにも開く、花信は清明の比よりひらく、その色淡紫紅にして三瓣の小花、さがりあつまり開く、その小花と同じ形狀にして、大さ寸許のものあり、この大輪の花は小花のかたより濃紫なり、この種は實を結ぶ花なれども、年を經し蔓にあらざればみのらず、又淡碧白のものあり、その形狀種類は、本草綱目啓蒙に詳なれども、出羽の圖には、實も大にして、四五寸許のものあり、その色も紫色にして美なるあり、この紫色に染なして美なるものは、味美なりといへり、凡通草に三葉五葉の別あり、五葉のもの、實は、熟して皮われ、白瓤あらはるゝものといへども、其皮褐色少は紫色を帶れども美色ならず、いまだ三葉のあけびの實を結びしを見ざれば、三葉のものにやと問ふに、通し事にて葉の三葉五葉のことは、わきまへずといへり、核は黑澤にして升目のごとし、破れば內に白肉あり、卽油を取ものなり、（○中略）和名抄（蓏類）郁子の次に葡子、（和名分比）又同書（葛類）通草（和名阿介比加都良）と訓じて、實と蔓とを別條となしたれば、古は專ら食用とせしものなり、

〔延喜式（典藥三十七）〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、（中略）龍膽、通草各五斤、　大和國卅八種、（中略）枳實、通草、大戟各十斤、

〔武江產物志（藥草）〕道灌山ノ產　木通（あけびかづら）

〔倭名類聚抄（木類十七）〕郁子　本草云、郁子一名棣、（都計反、和名牟○閉○、今案郁宜作櫻、於六反、見唐韻、）

〔箋注倭名類聚抄（九果蓏）〕按廣韻、郁文也、亦郁郅縣、在北地、又姓、又云、栯栯李、俗作櫻、二字其義不同、故源君謂郁子之郁宜作櫻、然郁櫻字古所無、說文不載、故本草借右扶風郁夷縣之郁字爲之也、間居賦亦云、梅杏郁棣、其訓文也之郁字亦假借、說文𢒠有文章也、是爲正字、（○中略）千金翼方、證類本草木

郁下品、作郁李人、本草和名作郁核、皆不作郁子、此或郁李之誤、一名棣、千金翼方、證類本草、本草和名同、〇中略 本草和名云、和名宇倍、按爾雅、常棣棣、毛詩常棣傳同、說文、棣白棣也、郭注爾雅云、今山中有棣樹、子如櫻桃、可食、齊民要術引詩義疏云、其實似櫻桃薁、麥時熟、食美、北方呼之相思也、又引爾雅七月篇義疏云、鬱高五六尺、實大如李、正赤色、食之甜、邢昺爾雅疏、引陸疏云、許愼曰、白棣樹也、如李而小、如櫻桃、正白、今官園種之、一名薁李、[illegible] 又有赤棣樹、亦似白棣、葉如刺楡葉而微圓、子正赤如郁李而小、五月始熟、閒居賦、梅杏郁棣之屬、李善注云、郁今之郁李、棣實似櫻桃也、張揖上林賦注曰、薁山李也、郁與薁音義同、郭璞上林賦注云、棣實似櫻桃、郝懿行曰、郁棣棲霞山中尤多、白棣殊少、人但呼爲山櫻桃、小於櫻桃而多毛、味酢不美、又論語疏引舍人曰、唐棣一名移、又引陸機云、唐棣卽奧李也、一名雀李、亦曰車下李、所在山中皆有、其華或白或赤、六月中成實、如李子可食、(本草經引) 陸氏以常棣形狀說唐棣誤、唐棣正作棠棣、其字與常棣近而混也、本草云、郁李一名爵李、一名車下李、一名棣、陶注云、子熟赤色、亦可噉之、蜀本云、甚甘香、有小澀味也、蜀本圖經云、樹高五六尺、葉花及樹並似大李、惟子小若櫻桃、甘酸、本草衍義云、郁李仁其實如御李子、至紅熟堪噉、微澀、李時珍曰、其花粉紅色、實如小李、是郁可以充今俗呼庭梅者、按救荒本草云、野木瓜、出新鄭縣山野中、蔓延而生、妥附草木上、葉似黑豆葉微小光澤、四五葉攢生一處、結瓜如肥皂大、味甜、採嫩瓜、換水煮食、樹熟者亦可摘食、是可以充无倍、

〔伊呂波字類抄〕(无植物附植物具)郁子(ムヘ)(亦作𣘺、亦作郁子、)

〔本草一家言〕三 猫子　本出于賈思勰齊民要術、一名侯驪、一名藤詔子、一名野木瓜、一名波斯茴萄、此等名數見于諸書、而綱目釋名遺而悉不收載、今併而爲一、和名牟邊、(ムヘ)

按、延喜式有郁子之供、其稱郁子者是物也、江州王乃濱村年々臘月獻之於朝廷、今京南上醍醐山中多生之、自非經年者則不結實、其藤葉實俱似木通而稍大、俗名常盤阿氣比、於是乃知、是卽木通

之一種也、

〔倭訓栞前編三十一牟〕むべ〇中略　和名抄に郁子むべと訓ず、延喜式諸國貢進の菓子に近江國郁子と見えたり、今も蒲生郡白部村より霜月に貢せり、変わらにて小さき殿を作り、其内に赤く熟したるを釣さげたり、むべは御贄をおほむへとよめるの略也、今俗とき〇は〇あ〇け〇び〇といひ、花肆には朝〇鮮〇あ〇け〇び〇ともいふ、本草にいふ藺子、齊民要術にいふ藤留子なりといへり、南部に木〇ま〇ん〇ち〇う〇といふ、又詩經の萸をむべとよめり、萸と郁と同音なるをもて、郁子と書りといへり、土人此葉を煎じ瘡腫を洗ふ、よく平愈すといふ、

〔古今要覽稿草木〕むべ（うべ　郁子　眞實漢野木瓜　ときはあけび、名）むべは近江國蒲生郡奧島の產物にて、毎年十一月朔日、京都へ貢する也、蔓一すぢに二つも三つもなりたるを、藁にて包たる足高き折に入て奉る、（其形狀圖（圖略）のごとし）此事いづれの御時よりはじまるといふことさだかならず、

奧島供御人等が傳ふる所は、聖德太子の御時よりといひ、或說には天武天皇御時よりといふ、共に信じがたし、されはこそ後水尾院年中行事には、いつより奉りそめけるにかと遊ばされしなり、又延喜式に近江より郁子を貢することを載られたれど、これは今のむべの事にや、眞の郁李のことにや、さだかならず、供御人等が傳へし文安の綸旨に見へたる所は、今のむべのことにて有べければ、其文に例にまかせてと見え、たるに據ときは、その先より奉けるものなるべし、

さて文字には郁子とも萸實とも書たれ共、ともに正しき名とはおもはれず、蘭山翁の說に、救荒本草にみえたる野木瓜といへるもの、今のむべなりといへり、其圖說を按ずるに、此說脩據すべきなり、

若水は、蔔子をもて、ムベにあて、白石先生は実は野薔薇なりといはれし、弘賢按ずるに、蔔子はアケビなり、アケビとムベとは自ら別種なれば、如何有べき、さて我邦にて漢字を用る所は、中古以来、かならず其正名ならねども、假借せる事ありたとへば、棣棠をもて、春のヤマブキにかり用るがごとし、これ古人棣棠をヤマブキといへば、たま〳〵其名の同じきをもて、假用ひたる也、是をもて漢名の當否を論ずべきにはあらず、実は郁李の一名にて、共にムベといひ、野木瓜をもムベといひけるより、假借せることと有しなり、又漢名にも古今の差別ありて、一概に論じがたきことあり、猶下にことはるべきなり、○中略

菓實獻上候由緒申傳之覺

一聖德太子之御時、奥島庄之内へ御成行幸、それより此所を王之濱と申傳候由、其時奥島之内男子八人有之、夫婦長命堅固にて罷在候旨に御座候、其時太子被仰候は、汝等はめでたき者共なり、何故一家不殘長壽堅固に在之哉と御尋被成候へば、夫婦之者共申上候は、私屋敷内箇様之菓實每年生り申候を、家内給べ申候故、無病延命に罷在候かと申上候得ば、其菓實萬と御附被遊、自今後供御に差上候樣にと被仰付候而、其供御料として、奥島山を被下置候之故、隣郷へ山をおろし、山年貢を以、供御に仕候由申傳之事、

一其後其供御中絶仕候處、文安二年之比、御詮議被遊、夫より改獻上仕候、御綸旨幷御除書等頂戴仕、于今所持仕罷在候事、

一信長公御全盛之比、人等山を御取上被成候而、供御料米壹石五斗に御定被成候由申傳候事、

一郁子蔓御座候者、宮地又は人等之持林之内に御座候、尤御除地に而者無御座候事、

一例年供御料米壹石五斗者、御地頭より御代々被下置、八人之者配分仕候事、

一郁子供御料如此仕、折三合每年差上候内、一合御取次生島殿へ納り申候、右之御祝儀、例年不同

に御座候、一つ生りは島目百文、二つ生り三生り御座候へば、壹つ百文宛御增、御祝儀出申候、外に疊表拾枚は、毎年御取次生島殿へ遣申候事、

一往古より人等八人之末孫共、相續仕、例年霜月朔日に調貢仕、生島殿より請取切手相渡り申候御事、

文二月　　郁子供御人等中

〔郁子請幷圖〕郁子請

毎年十一月朔日、近江國高島郡奥之島村王濱ヨリ郁子ヲ獻ズ、

延喜式ノ下三十一、宮內省、諸國例貢御贄、近江郁子、同三十三、大膳式ノ下、諸國貢進菓子、近江國郁子二輿籠、○中略

毎年十一月朔日、近江國高島郡王濱ヨリ郁子ヲ獻ズ、文安二年郁子之宣旨、

近江國蒲生郡奥之島菓供御人等中、任先例止非分之課役、可專調貢之由被聞食畢、可令下知給之旨、天氣所候也、仍言上如件、俊秀誠恐謹言、

文安二年十一月十一日　　左中辨俊秀

尹大納言殿

右宿紙禮紙、有禮紙之上、

尹殿　　左中辨俊秀

近江國蒲生郡奥島莊之內、菓供御人等、被停非分之課役、綸旨如此、早存其旨可專調貢之由、中山大納言殿仰所候也、仍執達如件、

十一月廿一日　　中務少輔重忠印

右一紙口ノ裏、

奥島供御人等中

元祿年中ノ請取如左　折紙片表ニ認

奥島御郁之事

一折　貳合

一籠　壹合

一疊表　拾帖

右請取所如件

元祿十四年巳霜月朔日　生島左兵衛尉

奥之島下司殿

中務少輔重忠

慶長七年近江國檢地帳　近江國蒲生郡奥之島村五百拾三石六斗七升

王濱村高拾三石　近江國繪圖ニ王濱在蒲生郡丸山東〇中略

閤子　ムベ

一本ニ如梨實而味酸シ、西土ニテ蜜砂糖ニ漬テ食ス、蔓草之部如藤蔓アリ、郁子ノ字ヲ古來ムベニ用タルハ誤也、郁子ハ木實而小キ物也、ニハザクラノ類也、郁李仁ハ藥種ニ用ル也、

閤子、本草綱目三十三附錄諸果、閤時珍曰、賈思勰齊民要術云、閤生交趾合浦、緣樹木、正二月花、四五月熟、如梨、赤如雞冠、核如魚鱗、生食味淡、按、四五月熟事不審、ムベヲ賈スルハ十一月ナリ、今木連木通ノ二種アリ、木通ハ林間ニ生ジ、木連ヨリ葉小ク、紫花ヲ開キ、實モ異也、大和本草ニ藤菰云ハ木連ナリ、廣益地錦抄此弁夫婦果ナレドニ、家集故形狀無也、ニモ木連木通ノ二種ヲ出ス、木連ノ實ヲ俗ニムベト云、一枝五葉四葉出ルニ、四時不凋、和名ムベカヅラト云、

木蓮子

木蓮(和名ムベカツラノ生葉肥タルハ、是ヨリ少シ大ダモ出ル、)今花木ニ木蓮花ト云アリ、是ハ大和本草ニ園史、蓮生八牋、花史、酉陽雜俎續編等ヲ引テ云、玉蘭花ナリ、是ト不同、

○按ズルニ、薁ハ、康熙字典(申集上艸部)ニ唐韻於六切、音郁、蘡薁也トアリ、

〔本草和名 十七菓〕木蓮子(出崔禹)和名以。多。比。

〔倭名類聚抄 十七菓〕木蓮子　崔禹錫食經云、木蓮子(和名以太比)本草云、折傷木、

〔箋注倭名類聚抄 九菓蓏〕按本草拾遺云、薜荔、夤緣樹木、三五十年漸大、枝葉繁茂、葉圓長二三寸、厚如石韋、生子似蓮房、中有細子、一年一熟、一名木蓮、打破有白汁、停久如漆、本草圖經、絡石條云、薜荔與此極相類、但莖葉麤大如藤狀、木蓮更大如絡石、其實若蓮房、李時珍曰、木蓮延樹木垣墻而生、四時不凋、厚葉堅強、大于絡石、不花而實、實大如盃、微似蓮蓬而稍長、正如無花果之生者、六七月實內空而紅、八月後滿腹細子、大如稗子、一子一鬚、其味微濇、其殼輕虛、烏鳥童兒皆食之、充以太比、爲允(中略)○千金翼方、證類本草木部中品載之、蘇敬曰、折傷木、藤生、繞樹上、葉似茵草葉而光厚、按本草和名果部載崔氏木蓮子、訓以多比、木部載本草折傷木、亦訓以多比、蓋輔仁不能辨定、存疑於二物也、源君以其所訓同、合爲一者誤、新撰字鏡、折傷木伊太比、一云木蓮子、其誤亦同、

〔伊呂波字類抄 伊植物〕木蓮子(イタヒ菓子類)　折傷木(同)

〔日本後紀 十三平城〕大同元年五月己卯、是日停諸國雜贄腹赤魚木。蓮。子。等、以息民肩也、

〔日本書紀 十八安閑〕元年三月戊子、立三妃、立許勢男人大臣女紗手媛、紗手媛弟香香有媛、物部木蓮子(イタビ)、(木蓮子此云伊陀寐)

〔採藥使記 上奧州〕照任曰、奧州南部ノ田奈部ト云フ所ヨリ木饅頭ヲ出ス、光生按ズルニ、是レ本草ニ載スル木蓮ノ實ナリ、都子(ヘヘ)トモ、ユベトモ、其實秋熟シテ味甘シ、小兒

防己

好ミ食フ、江州高島郡奥ノ島権兵衛ト云フ者、毎年十一月一日、禁中ヘ獻ズ、褒美ニテ賞タル小キ殿ヲ作リ、其内ニ件ノムベヲ釣リ下ケ供ズ、文武天皇ノ比ヨリ、今ニ絶ヘズト云フ、土人此葉ヲ採リ、煎ジテ瘧瘻ヲ洗フ、能ク崩レズシテ平癒スト云フ、

〔本草和名〕九 防己 一名解離、一名石解、木防己一名解挺、一名解名、一名解燕、一名方己、已上六名出釋藥性、和名阿乎加都良、

〔倭名類聚抄〕二十 防己 本草云、防己一名解離、和名阿乎加豆良、

〔箋注倭名類聚抄〕十 本草云、文作車輻理解者良、蘇云、防己本出漢中者、作車輻解、黄實而香、圖經、莖梗甚嫩、苗葉小類牽牛、折其莖、一頭吹之、氣從中貫、如木通類、陳藏器云作藤著木生、

〔日本釋名〕下 藟 つゞくかづらなり、くとかづとを略す、長くつゞくかづらなり、

〔倭訓栞〕中編一 あをかづら 倭名抄に防己を訓せり、青葛の義延喜式に防己をあをつゞらと點せり、萬葉集にあをつゞらこにあとり入てといへり、今つゞらふぢといふ是也、つたのはかづらといふは防己の一種、はすのはかづらといふは漢防己也、かふもりかづらは木防己也といへり、

〔和漢三才圖會〕九十六 防己 解離 石解 和名阿乎加豆良 ○中略

按防己有漢木二品、而今自中華所渡者皆長六七寸、切大者徑寸許、黄色帶赤、破之文作車輻解、而甚香、所謂漢防己也、而別木防己者不來、倭之產長七八寸切、大小如木通莖而青白色、皮皺不香、所謂木防己是也、二物共苗莖而非根也明焉、今藥肆以唐爲漢防己、以倭唯稱防己、藝州廣島爲上、丹波之產短細爲下、蓋本草必讀所圖之瓜防己者未詳、

〔重修本草綱目啓蒙〕十五 防己

アヲカヅラ和名鈔、藝州 アヲツヾラ ツヾラ ツヾラカヅラ ツヾラフヂ

チンチン チンチンカヅラ作州 ピンピンカヅラ播州 メツブシカヅラ ヤブカラシ雲州、五爪龍ト同名、

ヤ。マ。カ。シ。豐州　ハ。ク。サ。カ。プ。ラ。　ム。マ。ノ。メ。肥前實名　一名載君行本草彙言、根名、

山野ニ甚多ク、藤蔓至テ長シ、葉互生ス、形女青(ヘクソカヅラ)ノ葉ニ似テ厚ク短毛アリ、其形狀一ナラズ、圓尖ナル者、稍尖ナル者、三尖ナル者、兩岐深シテ牽牛葉ノ如キ者、長葉ノ者、苦蕎麥(ニガソバ)葉ノ如キ者、凡數十種アリ、三四月新葉ノ間ニ小花簇リ生ジ、菝葜(サルトリイバラ)花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、大サ三分許、秋ニ至リ熟スレバ、黑色ニシテ濃青粉アリ、內ニ一子アリ、藥舖ニ藤蔓ヲ採リ賣ル、其草幅解細ナリ、根モ亦同ジ、是木防己ナリ、一種オ。ホ。ツ。ヾ。ラ。フ。ヂ。ト呼アリ、一名フタノハカヅラ、フソナ、加州メクラブドウ、津輕深山中ニ多シ、葉互生シ、形圓ニシテ尖リ、七ツノ細岐アリテ、ツタモミヂノ葉ニ似テ至テ厚ク、深綠色、毛茸ナシ、大サ三四寸、形亦一ナラズ、圓ニシテ岐アラザル者、或ハ長葉ナル者、或ハ三五尖ナル者アリ、皆一藤中ニテ數樣ニ變ズ、其根フトクシテ處處ニ塊アリ、草幅解アラシ、是漢防己ナリ、木防己漢防己ノ分別ノ說一ナラズ、苗ヲ以テ分ツ說アリ、陳藏器ハ根苗ヲ以テ分チ、漢木二防己ハ卽是根苗爲名ト云フ、本草蒙筌本草匯本經逢原、並ニ漢防己ハ是根、木防己ハ是苗ト云、此說ニ從フテ優レリトス、其苗ヲ用ユルニハ、ツヾラフヂヲ上トス、根ヲ用ユルニハ、オホツヾラフヂヲ上トス、本草彙言、本草原始ニ圖スルトコロノ條防己是ナリ、舶來ノ防己根ハ、塊ヲナシテ小瓜ノ如シ、濶サ一寸餘、長サ二三寸、白色、コレヲ切レバ、其肌密ニシテ幅解明カナラズ、本草彙言、本草原始ニ圖スルトコロノ瓜防己ナリ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、〇中略夜干、防己各十斤、　伊豆國十八種、〇中略木防己、赤石脂各十斤、　安房國十八種、〇中略木防己一斤、　上總國廿種、〇中略椅杞、木防己各十斤、

〔枕草子三〕草は

あをつゞら

〔武江産物志 草〕道灌山ノ産　木防己(つゞらふぢ)　野火留平林寺　防己(おほつゞらふぢ)

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕千金藤　詳ナラズ○中略
増、集解一種似荷葉只大如錢許、亦呼爲千金藤、又名古藤、主痢及小兒大腹ト云ハ、ハ○ス○ノ○ハ○カ○ブ○ラ○、和州ガタマタ、チヤワチヤワカブラ、紀州イヌフイラ、同上熊野畿圃ノ産ナリ、四國紀州泉州等ニ自生多シ、四時枯レズ、蔓長ク繁延シ、葉莖ニ互生ス、形蓖麻(ヒマ)葉ニ似テ大ニシテ圓ク薄レ、ソノ蒂葉中ニ在テ荷葉ノ如シ、夏月葉間ニ細莖ヲ垂レ、小白花ヲ簇生シ、實ヲ結ブ、大サ紫金牛子(ヤブカウジ)ノ如ク、熟シテ赤シ、根ハ防己ノ如ク巨シ、コレヲ防己ノ一種トスル説ハ穏ナラズ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕防己 略○中
又一種ハ○ス○ノ○ハ○カ○ブ○ラ○ト呼ブ者アリ、一名イヌフヤラ、熊野ベウブル、ヤキモチカブラ、讃州ガタマタ讃州、又同名アリ、暖地ニ自生アリ、紀州ニ多シ、葉ノ形圓尖ニシテ薄ク、紋脈荷葉ノ如シ、其蒂モ葉中ニアリテ荷莖ノ如シ、初夏舊根ヨリ苗ヲ生ジ、藤蔓長ク引キ葉互生ス、夏月葉間ニ小花簇生シ、黑子ヲ結ブ防己ノ如シ、是又防己ノ一種下品ナリ、今花戸ニ一種唐種漢防己ト呼ブ者アリ、葉形オホツヅラフヂニ似テ薄ク色淺シ、蒂モ微シク葉中ニヨル、根ハ細ク色黄ニシテ、内ニ白暈アリテ車輻紋ヲナサズ、此草ハ濃州深山ニモアリ、濃州ニテコウモリブタト呼ブ、越前ニテ、コツラフヂト云フ、

〔採藥使記 上 奥州〕照任曰、奥州南部ヨリ千金藤ヲ見出ス、又甲州ニモ稀ニアリ、
先生按ズルニ、或曰、本艸ニ藏器ガ曰、一種葉荷葉ニ似テ大サ錢ノ如シト云ル物モ、亦呼テ千金藤ト名ブク、此種和邦畿内所々ニアル處ノイチヤク草ナルベシ、又藏器ガ曰、江西ノ林間ニ草アリ、葉ヲ生ジテ頭ニ實子アリテ、鶴膝ニ似テ葉ハ柳ノ如クナル物モ、亦千金藤ト名ヅクト云

へリ、此種ハ和邦ニ未ダ見ヘズ、

〔多識編三穀〕罌子粟、今案介志。。異名御米、同實象穀

〔書言字考節用集六生植〕罌粟ケシ本草　米囊上同　御米上同

〔大和本草五藥類〕罌粟　花單葉千葉紅白アリ、種品多シ、八九月ニ種ヲ下ス、單葉ノ白花ニ實多シ、千葉ナルハ實少シ、千葉ナルヲ麗春花ト云、紅白紫淡濃品多シ、游點齋ガ花譜ニ、此花ノ美ナル事ヲ詳ニイヘリ、群花ニヲトラズ愛スベシ、凡ケシノ苗ワカキ時、爲蔬ナ食フ、味ヨシ、苗生ジテ後他土ニウツシウヘテハ不榮、實猶青キ時枝早ク枯ル、他草ニ異レリ、又實ヲ多ク貯ヘ置テ、炒テ飣品ニ加ヘテ美味ヲ助ク、日用ノ嘉蔬ナリ、肥土ヲヨクコヤシテ和ニシ、種子ヲ釜下ノ灰ニマゼテマクベシ、蟻不食、救荒本草曰、隔年種則佳、又曰、取米作粥、或與麪作餅皆可食、

〔農業全書四菜〕罌粟

けしは花の白き一重なるが實多くかうばし、料理には是を用る物なり、又花紅紫色々あり、是を米囊花と云て、詩にも作れり、花殊見事にて、菜園にうへて尤愛すべき物なり、されども千葉の色あるは實少なく、子の色も雜色にて料理によからず、蒔時分の事、秋の半いか程も地を細かにこなし、中分に肥し、畦を平らかによくならし、八月半比蒔べし、地を少たゝき付て、薄く蒔たるがよし、たねを灰と沙に合せ、筋うへにても、ちらし蒔にても、各心にまかすべし、種子おほひはするに及ばず、わらはゝきにて、さら〳〵とたねのかたまらざる樣にはきそゝくべし、生て後芸り間引、中を度々かきあさり、ふとるにしたがひて、段々正月までまびきて菜に用ゆべし、又云若むら生せば蒔つぐべし、小きをへらにてほりて移しうゆるも生付物なり、人糞など多く用ひて、餘り肥過れば、葉に虫付て實らざる事もあり、冬中よき程に見合せ、糞し培ひ、春雨の中たをれぬ程にすべし、肥たる沙地におほく作りて、利あるものなり、但花の咲ころ、葉に虫の付事おほきゆへ、よく心を付、もしむしの付べきならば、いたまぬやうに

實を切るべし、むしおほく出來ては實をくひからし、後には實をしくひつくし、其むしなきも其ほとりのうへものに害をなす事はなはだおほし、ゆだんなく實をきりてとるべし、

〔草木育種下〕罌子粟(けし)[本草] 八月種を下し、灰人糞を雜して度々澆べし、又び玄んそうも、罌子粟に似て小きもの也、肥も同じ、花鏡云、錦被花、未種前須糞地極肥、後以釜底烟煤拌撒、用細泥蓋之可免蟻食、

〔食物和歌本草五〕罌子粟(けし)

けしの實は邪熱を退て風氣やり反胃(ほんい)胸中の痰をながせり　けしの實を粥となしつゝ、竹瀝(ちくれき)をませつゝ、瀉痢や消渇を治す

〔佐渡志五物産〕罌粟子　方言ケシノミ　羽茂郡ニ多シ、花ヲ實レテ佛前ニ供ス、美人草ノ名アリ、チリヤスキヲ以テ、佛ニ供スルナルベシ、諸ニ阿片トテ、脂ヲトリ製スルモノアリ、

〔書言字考節用集六生植〕美人草(ヒナゲシ)[一名錦被花、本名麗春花、本朝俗所呼花罌粟也、]

〔大和本草七花草〕虞美人草　名花譜云、花四瓣色艷、類罌粟而小ナリ、國史云、吳俗呼爲虞美人草、蓋罌粟之別種也、今國俗ニ美人草ト稱ス、ケシニ似テ小ナリ、紅紫白ノ三種アリ、千葉アリ、單葉アリ、重葉アリ、紅夷ヨリ來ル種アリ、八月ニ子ヲマク、早ク生ズルハ單葉也、千葉八重ハ單葉ヨリヲソク生ズ、他花モ亦如此、肥テ軟ナル沙土ヨシ、ウヘテ上ニ灰ヲオホヒ、冬月糞ヲ催ベシ、春月ハ糞ヲイム、虫生ゼバ去ベシ、春ハ魚汁ヲソヽグベシ、四五月ニ花ヲヒラク、花甚艷ナリ、好花トス、苗生ジテノチ他土ニウツシテモヨシ、不移ニハシカズ、冬月早ク糞水小便ヲソヽグベシ、此物根小ニ莖多長大ニシテ、風ニ倒ヤスシ、毎根厚ク培カヒ、小竹ヲ立テ助ケ結ブベシ、

〔剪花翁傳三四月開花〕美人艸　麗春花(ひなげし)、花一重あり、八重あり、色緋紅に淡紫、開花四月中旬、方日向、地一分濕、土えらばず、肥濃小便、芽出し後一度そゝぐべし、花前に四五度そゝぐべし、下種秋彼岸苗代にすべし、分株十月上旬にすべし、

華鬘草

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕華鬘草　俗稱
按華鬘草高尺餘、葉似石龍芮而小、三月莖端開花、淡紅色作房、其花柑路長、似鈎華鬘狀故名、
〔剪花翁傳三四月開花〕華鬘　花二種赤、黃、豌豆の花に似たり、開花四月中旬、方半陰、地二分濕、土圖塵、肥淡小便、移春彼岸、花二箇向ひならぶ、よて俗に掛鯛といふ也、

シシヤキ草

〔大和本草九雜草〕シシヤキ草　和黃芩ト云、武藏國ニテハナナヤケト云、處處山野或河原ニアリ、伊豆ノ三島ト箱根ノ間路傍ニ多シ、葉ハ菊ニ似テアツク大ナリ、根ハ黃芩ニ似タリ、葉ノウラナド霜ノフリタルヤウニ白キ處アリ、或曰、茵蔯ナルカ、又博落廻ナラント云、一種イヌマヲニ似タル草ヲミシレヤキト云、同名異物ナリ、

延胡索

〔多識編二山草〕延胡索、世無布、異名玄胡索、
〔書言字考節用集六生植〕延胡索本名玄胡索　延胡索本草、苗葉如竹葉、
〔重修本草綱目啓蒙八山草〕延胡索　ツプチ江州　ゲモ南部　一名滴金卵藥譜、輟耕錄、　元胡索品字箋
玄壺索百一選方　玄胡万病回春　延胡同上　武胡索外科大成
享保中漢種渡ル、大葉小葉ノ二品アリ、大葉ヲ牡丹葉ト云、一葉三枝、枝ゴトニ三葉、葉ノ末五ニ分レ、至テ小ナレドモ牡丹葉ノ狀アリ、十二月或ハ初春苗ヲ生ズ、大葉ハ苗高サ五寸許、小葉ハ短小ナリ、葉ハ皆和產ヨリ厚シ、正二月花ヲ開ク、形紫菫花ニ似タリ、初ハ紫色、後ハ漸ク青色ヲ帶ブ、花後小扁莢ヲ結ビ、四月ニ苗枯ル、和產ニ大葉中葉小葉ノ三種アリ、大葉ハ濃州ニアリ、葉ハ荷包牡丹ノ葉ニ似テ小ナリ、中葉ハ紀州勢州田野道傍ニ多シ、勢州粥見ニテ此花ヲ次郎坊ト云、紫花地丁ノ花ヲ太郎坊ト云、小兒ノ戲ニ、兩草ノ花距ヲ互ニ勾引シテ勝負ヲ決ス、花ハ漢種ト同ジ、三月ニ開ク、小葉ハ山ノ幽谷ニアリ、葉至テ小シ、苗高サ僅ニ二三寸、莖細シテ絲ノ如シ、花ハ漢種ヨリ微シ小シ、深山ニテハ四月ニモ花アリ、地冷ナル故ナリ、和產ハ根大ナルモアレドモ、多ハ色白ク

半夏ノ如シ、熊野ニ產スルハ微シ黃色ヲ帶ブ、藥肆ニテ售ル、漢渡ノモノ上品ナリ、根圓ク或正圓ナラズ、外皮黃褐色、內ハ色黃ナリ、唐山ニテ小キ半夏ヲ煮テ、色ヲツケ僞ルコト、錦囊秘錄ニ見エタリ、

增漢渡ニ鬱金汁ヲ以テ零餘子ヲ煮タル者アリト云、意ヲ注グベシ、又近年和州宇陀ニテ唐種ヲ作リ出ス、然レドモ色白シ下品ナリ、

〔草木育種下編〕延胡索　漢種のものは牡丹葉と云、其葉牡丹に似て小なり、根圓零餘子のごとくにして黃色なり、又尾張國より來るものに三葉のものあり、形狀ハ牡丹葉に似て葉中に紫斑あり、花は皆地錦苗に似て大なり、二種ともに藥用に上品なり、又同國より來るものに竹葉のものあり、葉至て細く竹葉に似て甚小なり、武藏國道灌山に生ずるものは竹葉に似て、葉稍潤く、根小く淡白し下品也、山の野土黑ぼくに植べし、秋冬の中、灰人糞少入、土を肥置、植替てよし、兎好て此の根を堀食ものなり、よく圍置し、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　延胡索ニモアル

古事類苑

植物部二十

草九

大豆名稱

〔本草和名 十九米穀〕生大豆一名[illegible][illegible]豆一名虎〈虎下疑脱豆〉出疏文〇中略〉大豆一名菽、一名戎菽、一名荏菽、一名頭豆、已上四名出疏文、 和名於保末女、

○按ズルニ、千祿字書ニ、尗菽〈上通下正〉トアリ、菽ノ以テ菽ニ作ルベキヲ知ルベシ、

〔倭名類聚抄 十七豆〕大豆〈陶注〉 本草云、大豆〈陶隱〉一名菽〈音叔、和名於保末米、〉

〔箋注倭名類聚抄 九麻穀〕原書中品有生大豆、不載一名、按本草和名云、大豆一名菽、出疏文、蓋源君從彼引之、誤爲本草正文也、又按詩采菽箋云、菽、大豆也、廣雅、大豆菽也、本草疏蓋依之、說文菽作尗、云豆也、象尗豆生形、段玉裁曰、尗豆古今語、按說文、豆古食肉器也、从口象形、以爲尗豆者假借也、藝文類聚引楊泉物理論云、菽者衆豆之總名、管子地員篇五穀之狀蔞々然、不忍水旱、其種大菽細菽、呂氏春秋審時篇、大菽則圓、小菽則摶以芳、是大小豆皆稱菽、但小豆別名爲苔、而大豆仍名爲菽、故菽之稱專在大豆矣、陶注粳米引董仲舒云、菽是大豆、大豆有兩種、李時珍曰、夏至前後下種、苗高三四尺、葉團有尖、秋開小白花成叢、結莢長寸餘、經霜乃枯、下總本有和名二字、本草和名云、和名於保末女、新井氏曰、末米圓實之轉、

〔醫心方 三十〕大豆〈中略〉和名末女

〔類聚名義抄 五豆〕大豆 マメ、一名恋升、 〔同 八艸〕菽〈音叔、マメ、〉

〔伊呂波字類抄末植物 植物具〕大豆(マメ)　荅

〔下學集草木下〕大豆(マメ)

〔和爾雅穀米六〕大豆(ダイヅ)未詳、俗作荳、　黃豆(マメ)又豆作荳、

〔日本釋名穀米下〕大豆(マメ)　まハまるき也、めハ實也、みとめと通ず、丸き實なり、

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ　舊事紀に、保食神の臍尻に豆を生せしと見え、古事記には、大宜津比賣神の鼻に小豆を生じて、尻に大豆を生せしと見えたり、マメとは萬葉集鈔に、マとは圓也といふ詞也と見えたり、メとは實也、ミといひメといふは轉語也、其實の圓なるを言ひしなり、

〔倭訓栞前編二十九末〕まめ○中略　豆は丸實の義なるべし、菽も同じ、今世祝賀の物とするは忠誠の義をとれり、通鑑集覽に、豆者眞實の物ともみえたり、○中略　和名抄に烏豆をくろまめ、鵝豆をそびまめ、珂乎豆をいちごまめ、藊豆をあぢまめ、豌豆をのらまめとよめり、そびは翡翠也、つばくらまめともいふ、又鵲豆あり、鵲の羽色したり、栗豆あり、紫褐色也、蔽籬豆あり、四邊白く中黑し、又八升豆あり、天竺豆あり、藤豆あり、蔦豆あり、ともに藜豆の類也といへり、近來鷄頭豆あり、龍豆ともいふ、中の形狀にて名く、豆は常の白豆也、夏豆は梅豆也、豆腐によし、痰きり豆は穭豆なり、狐豆ともいふ、たぬき豆は貍豆也、唐人豆といふは落花生也、

〔新撰字鏡草〕菽巨之反、平、菽、假借、又豆莖也、豆加須、

〔倭名類聚抄十七豆〕大豆菽附○中略　野王按云、萁音其、亦作藄、和名末米加良、豆莖也、

〔類聚名義抄五豆〕萁或萁、其音、マメカラ、

〔下學集草木下〕萁魏曹子建七步詩云、煑豆燃豆萁、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急、云云、

〔倭訓栞中編二十四〕まめがら　新撰字鏡に萁をよめり、豆莖の義也、節分の夜豆を煑に萁を燒、いわしを挾むに萁を用ゐ、信濃には雪國ゆへひゝらぎをもて、いわしまめがらをさすは、燒ば音し

て、鬼の作る、故に爆竹の如し、

〔類聚名義抄　八〕萁。音其、マメノヘ、

〔易林本節用集　草木〕萁（マメノハ）

〔書言字考節用集　六生植〕萁（マメノハ）説文豆莖

〔倭訓栞　中編二十四〕まめのは　萁なり、今干たるをかひ葉と稱す、馬を飼をもてなり、

〔和漢三才圖會　百三菽豆〕大豆　尗（音叔）作　菽〇中略

本綱、菽類之總稱、皆曰豆、曰尗（尗象豆莢附莖下垂之形、菽象子在莢中之形）、大豆有黑白黄褐青斑數色、黑者可入藥及作豉、黄者可作腐榨油造醬、餘但可作腐及炒食而已、皆以夏至前後下種、苗高三四尺、葉團有尖、秋開小白花、成叢結莢長寸餘、經霜乃枯、夏至種豆不用深耕、豆花惜見日、見日則黄爛而根焦矣、得時之豆、長莖短足、其莢二七爲族、多枝數節、大菽則圓、小菽則團、先時者必長蔓浮葉、疎節小莢不實、後時者必短莖疎節、本虚不實、〇中略

按大豆大抵夏至十日以前下種、諺曰、夏至之鳥鳴（言秋生鳥鳴如二鳥聲一也）七月開花、九月結莢、十月收之、謂之秋大豆、扁而大也、立夏穉芽出頃下種、立秋收穫、謂之夏大豆、圓小也、黒豆可以入藥、或炒食、或和醬油煮、名鹿子豆、羽州上山之産、扁大、黄白二色、爲味噌醬油、爲豆腐、爲馬飼、或炒食、用最多、豫州之産爲上、畿内次之、豐前備前大豆次之、關東北國又次之、有數品不悉記、

大豆沿革

〔日本書紀　一神代〕一書曰、〇中略天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、〇中略陰生麥及大豆小豆、天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆、爲陸田種子、

〔古事記　上〕速須佐之男命、〇中略殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、〇中略於尻生大豆、〇下略

大豆種類

〔本草和名　十九米穀〕生大豆一名槐種豆、一名虎（虎下恐脱豆字、出説文）白大豆（味相似）青斑豆（色斑々状如栗而小）雄豆（色黒）珂禾豆（状貝

（似玉可愛、）（玉篇）卵斑豆、（似雀卵、而有斑文、）烏豆、（如烏玉、黒之最者、）鵲豆、（黒白色、）營豆、（生於荒野、已上八種出崔寔、）

〔大和本草　四穀〕大豆　凡五穀ノ内、稲ニツギテ大豆最民用ノ利多シ、コヽヲ以農ノ多ク種ル事稲ニツゲリ、農夫土地ノ宜ニ随テツクタル、其品多シテ窮盡シガタシ、黄大豆秋熟ス、豆ノ類ニシテ第一民用ニ利アリ、近江州ノ産最佳シ、夏豆ハ六月下旬ミノル、早ク熟シテ民食利用ヲ助ク、故ニ農夫多ク種ル事、秋豆ニツゲリ、黒大豆大小アリ、性味最ヨシ、味噌ニシテ味ヨシ、豆淋酒ノ方、本草大豆ノ附方ニアリ、中風及産後ニ用ベシ、性ヨシ、栗豆、常ノ大豆ヨリ大ニシテマルク、色紫褐ナリ、味栗ノ如クニシテヨシ、醤油ニテ煮テ果トシ、村人味噌トシテ食ス、味美シ、ウヅラ豆、黒大豆ヨリ少大ニシテ圓シ、マハリハ黒クシテ、兩方ニウヅラノ文アリ、山原ニモ所々間ヒロクウフレバ、豆甚多ミノル、ヤブ豆トモ野豆トモ云、春ウフ、鞍カケ豆、兩端白シテ中間黒シ、馬ノクラヲカケル形ニ似タリ、葉マルシ、黒大豆ヨリ大ナリ、以上三豆、漢名未詳、此外豆品猶多シ、

〔和漢三才圖會　百四　菽豆〕大豆（中略）○黒大豆　生（甘平、）煮（甘寒、）炒（極熱、）作豉（極冷、）屬水入腎、治水消脹、下氣、補風熱、活血解毒、入鹽煮、常時食之補腎、（黒豆五倍龍膽、）服蓖麻子者忌炒豆、（犯之脹滿致死、）服厚朴者亦忌之、（動氣也、）古方稱黒豆解百藥毒、毎試之大不然、又加甘草、其驗乃奇、如此之事不可不知、（今人食之涼、忌食之冷、）

黄大豆（生温、炒熱、）　大豆有黒青黄白斑數色、惟黒者入藥、而黄白豆炒食、作豆腐、造醤笮油、盛爲時用、其葉似黒大豆葉而大、結角比黒豆角稍肥大、其莢葉嫩時可食、（中略）○

鵲豆（和名曾比末女）赤褐色、可炒食、今謂之檜皮豆、（漢比太）

青豆（阿乎末米）青色炒磨粉、糁餅餻、色味共美、

鞍掛豆（久良加介末女）　白色有黒斑、而狀如馬鞍、故俗名之、

奴僕豆（也都古末女）　白豆黒文、形如人頭額角尖黒髮之形、蓋此夏大豆之異品者、惟堪炒食、（小豆亦有如此者、）

鵲豆字彙 黒色有白文、如鵲羽、炒食、

虎彪豆字彙 不 白色有黒文、如虎文、大豆可煮食、

〔成形圖說 五十八巻〕麻米古事記○中略

凡大豆に二種あり、其子白黄青黒紫褐等十數色あり、一種を夏大豆と云、春植て秋熟るなり、色白し、一種を秋大豆と云、夏種て秋熟るなり、豆ハ本保食神の陰に生といふ、必陰地を喜めり、豆花日を見に宜しからざるをも知るべし、圃ハ赤土によし、うゝる地は淺く耕を習とす、汗莱の草を土ながら打反しつゝ蒔入なり、○中略梅豆は二月蒔て、四五月ハ既實成れり、故に嫩うちハ莢ともに食料に充べし、熟るものハ子を用うべし、秋豆は農民稲をうゑ上りて、其後このものをうゝるなり、成實最多し、八成豆ハ房生にして色ハ青白なり、五月雨あがり畑にうゑて、八月に熟く、下種豆は六月に蒔時、雨あるは野稲の中に併蒔入なり、故に下種と呼べり、十月十一月の頃收むべし、又何れの畠ともいはず蒔てよく生ぬ、又虎彪豆、鵲豆、奴僕、鼻黒などいふは、皆秋豆にして、各其斑色に因て名る所、この他數十種あり、暴て識別す、○中略

黒豆和名鈔 穀黒豆黒豆の中にて最大きく、馬の飼料にしたるなり、 馬食豆黒豆の圓くて大なる者、馬好て之を食ふ、故に名とす、○中略 黒豆ハ粒細し、一種大なるを碁石黒といふ、煮豆につかふ、○中略

青豆 青滑豆俗言青ちこち、又大青地豆、地ハ襟と黒ふ、米地黒地などの地へ、地と圓く實な云、○中略 大豆にして緑色もの、釜の夢に用う也、此もの五月雨の出に蒔べし、大青地子ハ粒太し、 粉子豆或云黄乃粉豆なり 奈良茶豆此もの茶粥に入ても味宜し、故に名く、

褐豆綱目、色の褐なるによれり、 味噌醤油に造てよろし、其成實甚夥し、農人作て益あり、 小石豆 雪下豆

零烏豆本草綱目 粒の大サ大豆より小圓色白し、但成實多きが故、農人喜て作れり、豆腐になしてハ煮がたく、又乳すくなし、

黄大豆

〔庖厨備用倭名本草（二豆）〕黄大豆　倭名抄ニ黄大豆ナシ、右ノ大豆ヲマメトシ、黒大豆ヲ烏豆トカケリ、是又本草ノ一名ナリ、多識篇今案ニ、マメ、元升（〇井向）曰、只大豆トカキタルハ、黒大豆ヲ主トシテ云コト、本草ノ例ナリ、多識篇ハ本草ニシタガフ、只大豆トカキタルヲマメト云ハ、是レ日用ノ豆ナル故ニ、日本ノ國例也、倭名抄ハ國例ニシタガヘリ、二書トモニ誤ニ非ズ、然ルニマメトハ總名也、豆字ヲ用フ、クロマメ、シロマメ、アカマメ、ノラマメ、ソラマメナドノ類ナリ、考ニ本草、大豆ニ黒靑黄斑ノ數色アリ、黒豆ハ藥ニ入ル、其黄白豆ハ炒リテ食シ、腐ニ作リ、醬ヲ作リ、油ヲトリ、盛ニ時ノ用ヲナス、元升曰、此ノ大豆ハ味噌醬油ヲ作ル大豆也、黄豆ノ苗高サ一二尺、葉ハ黒大豆ノ葉ニ似テ大也、角ヲムスンデ、黒豆角ニタクラブレバ、ヤヽ肥大也、其葉ワカキトキ食スベシ云云、

〔重修本草綱目啓蒙（十七菽豆）〕黄大豆　マ〇メ〇　ダ〇イ〇ヅ〇　シ〇ロ〇マ〇メ〇　ミ〇ソ〇マ〇メ〇（〇中略）

俗ニシロマメト呼ベドモ、色ハシロカラズ、黄色ヲ帶ブ、故ニ唐山ニテハ黄豆ト云、漢名ニ白豆ト云ハ、シロアヅキナリ、黄豆ニハ夏秋ノ二收アリ、早ク熟スル者ヲナ〇ツ〇マ〇メ〇ト云、粒小ニシテ下品ナリ、故ニ豆腐ヲ製スルニ用ユ、因テトウフマメトモ云、漢名梅豆、（月令通考）一名半夏黄、（揚州府志）春豆、（泉州府志）五月黄、（天工開物）六月爆、（同上）又秋ニ至テ熟スル者ヲ、ア〇キ〇マ〇メ〇ト云、粒大ニシテ上品ナリ、味噌ヲ製スルニ用ユ、故ニミソマメト呼ブ、漢名報秋豆、（農治要訣）一名九月豆、（漳州府志）雁來枯、（揚州府志）炒社黄、（同上）冬黄、（天工開物）

〔延喜式（二十三民部）〕交易雜物

近江國（中略）大豆六十石、（中略）醬大豆廿石、（中略）隔二三年一進、醬大豆十石、大豆十四石、（〇中略）丹波國（中略）大豆廿石、（中略）隔二三年一進、醬大豆五石、（〇中略）右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式（三十三大膳）〕正月最勝王經齋會供養料、（〇中略）僧別日菓菜料、（〇中略）大角豆、白大豆各一合、

仁王經齋會供養料

借一口別重菜料、○中略白大豆五勺、料物

〔梵舜日記〕慶長四年十月廿八日、味噌大豆代銀子十ノ目、壽等方持遣了、

〔秋齋日抄七〕民間歲節

立春前一日謂之節分、至夕家家燃燈如除夜、炒黃豆供神佛祖先、向歲德方位、撒豆以迎福、又背歲德方位、撒豆以逐鬼、謂之儺豆、老幼男女喫豆如歲數、加以一謂之年豆、(トシノマメ)

〔秋齋日抄六〕民間歲節

二月十五日、寺院懸臥佛圖像、爲涅槃會、○中略俗以黃黑諸豆、條穀子糗炒之、以供佛薦祖先、

〔倭名類聚抄十七豆〕烏豆 崔禹錫食經云、烏豆一名雉豆、(和名久呂末女)圓而黑色者也、

〔箋注倭名類聚抄九穀〕按本草和名云、白大豆云々、青斑豆云々、雉豆黑色、珂禾豆云々、卵斑豆云々、烏豆如烏玉、而員員然、鼬豆云々、璧豆云々、已上八種出崔禹、據云八種、則雉豆烏豆各自一種、本草圖經云、大豆黑白二種、入藥用黑者、緊小者爲雄、用之尤佳、則知烏豆雄豆俱是黑豆、然有大小之別、源君以雄豆爲烏豆一名誤、圓而黑、亦疑似併混烏豆之員員然與雄豆之黑色、廣本黑下有色字、李時珍曰、大豆有黑白黃褐青斑數色、黑者名烏豆、可入藥及充食作豉、

〔類聚名義抄五豆〕烏豆クロマメ 雄豆同

〔運步色葉集〕(畠)䵈(クロマメ)

〔本朝食鑑穀一〕黑大豆

集解、黑大豆小似白大豆、其大者亦與白大豆同、其種類名品稍多、本邦用者不少、而作果肴藥酒、近造納豆、賣帶人貨之、治痢比白大豆則爲佳、必大(野○平)按、黑大豆今醫不用、味噌醬油而性平可人、爲腎之穀、能活血解毒、利水下氣、事詳于綱目、或有至小而圓、比尋常黑小豆則稍大者、或四邊白而中全黑者、京俗此謂較驢豆也、

〔重修本草綱目啓蒙十七菽豆〕大豆本草彙言ニ大豆ニ作ル　生マメ　クロマメ　カキマメ讃州、同名アリ、　一名五藏穀
　發明　大黑豆聞方　烏金子醫餘
和名ニ大豆ト呼ブハ、ミソマメノコトニシテ、黃大豆ナリ、藥方ニ大豆ト呼ハ、皆黑大豆ニシテ、クロマメノコトナリ、コレニ雌雄アリ、食用ニスル粒ノ長大ナルハ雌ナリ、藥用ハ雄ヲ良トス、蘇頌圖經宗奭衍義、緊小者爲雄豆ト云是ナリ、大豆ニ數品アリ、宗奭ノ説ニ、有綠褐黑三種ト云、時珍ノ説ニ有黑白黃褐青斑數色、黑者名烏豆、可入藥及充食作豉ト云、烏豆ニ數種アリ、ゴイシマメ、一名ユキノシタ、ハチブマメ、水戸形大ニシテ扁ク、棋石ノ如シ、本草彙言ニ謂ユル零烏豆ナリ、一名馬料、同上一種五葉豆、一名ガンクヒ、サツジマメ、讃州常ノマメハ皆三葉ナリ、此ハ五葉ニシテ五加葉ノ如シ、豆ニ一ツノ凹アリ、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料
僧一口別菓菜料、○中略黑大豆一合五勺、索餅料一合、好物料五勺、

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事
二月
一黑豆　松平右京大夫

青大豆

〔和爾雅六米穀〕青豆アヲマメ アヲヽ
〔食物知新一穀〕黑大豆
青豆作二青豆一雅

〔重修本草綱目啓蒙十七菽豆〕大豆
時珍ノ説ニ有黑白黃褐青斑數色、○中略青ハ青大豆ナリ、揚州府志ニ大青ト云、宗奭ノ説ニ綠ト云ト同ジ、綠大豆ナリ、綠豆ニ非ズ、俗名アヲマメ、一名アヲハダ、勢州アヲニブ、播州アヲヅル、大ニシ

ナ色青キ豆ニ、淺深ノ品アリ、深キモノハ靑〇皮〇豆〇〈授時通考〉ト云、淺クシテ銀杏ノ色ノ如キモノヲカグマメ〈駿州〉ト云、漢名白〇果〇靑〇〈江陰縣志〉、又裏マデ靑キモノアリ、コンリンザイ〈同州〉ト云、一名コリンザイ、アヲヤギ〈仙臺〉ズイアヲ〈江州〉、肉〇裏〇靑〇〈大倉州志〉ト云、又骨裏靑、透骨靑ノ名、授時通考ニ出、

〔延喜式〕〈三十三大膳〉七寺盂蘭盆供養料〈東寺、西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、〉寺別餠菜料〈〇中略〉靑大豆卅把、靑大豆三束、〈〇靑大豆實肉、鹽、煎、〉

同節〈〇九月九日〉文人料 靑大豆二把

〔東大寺要錄〕〈五〉年中節會支度〈寬平年中日記〉、

一七月用 七日節供〈〇中略〉 靑豆〈代二合〉

〔雍州府志〕〈六土產〉靑豆 西京田畸種之、秋時去其莢、村婦盛皿盆、戴頭上、賣京師、自季夏至仲秋、晚出西京、味爽賣來京師、故民間味爽謂靑豆時、

〔倭名類聚抄〕〈十七豆〉鵲豆 崔禹錫食經云、鵲豆〈和名曾〇比〇末〇女〇〉紫赤色者也、

〔箋注倭名類聚抄〕〈九稻穀〉按曾比末米、蓋以其色似鴗羽名之也、〈〇中略〉按齊民要術云、藊豆、豍豆、大豆類、按藊豆是、

〔類聚名義抄〕〈五豆〉鵲豆〈ツヒマメ〉

〔伊呂波字類抄〕〈所植物附喫物具〉鵲豆〈紫色也、ツヒマメ、〉

〔本朝食鑑〕〈一穀〉黑大豆

鵲豆〈源順曰、紫赤色、和名曾比末女、今稱都〇波〇久〇豆〇末〇女〇、近代以二藊豆黑者一爲二鵲豆一、一名鵲豆、〉

〔成形圖說〕〈十八五穀〉曾比麻米〈和名抄〉

佐々利豆〈藏玉集、秋ならわ風にや散むさゝりぐさ花の下枝もなびく五月異名、或ひとの此ものにも注したれど、結く鐵て枝の考に備ふ也、〉畠豇、實取豇、粒豇、霜豇、奴〈ヤッコ〉豇、〈サヽゲ〉豇、鵲豇〈和名抄引二食經一鵲豆、紫赤色名也、〉燕豆〈齊民要術、眞高麗豆、黑高麗豆、藊豆、豍豆、大豆類也、〉赤豆〈通雅〉大赤豆〈土人呼二赤豆一〉紫豆、大紫豆〈以上授時通考〉〈〇中略〉

略

曾比豆は、和名鈔大豆條鳥豆の次に出せり、曾比とは燕の羽色にや因りぬらん、〔按にいにしへ黏土を曾保といふも、紫赤の色なり、又鵐を曾比と云は別義なるべし、〕畠豇とは、蔓豇に對へし名なり、赤實取とも、粒とも云ハ、蔓豇の莢を併食に異なればいへり、此もの早晩二品あり、その狀は小豆に似て、其實梢に著て、莢上に向ふこと、獨大小豆に異へり、故に䒳の義にていふと見えたり、されど狹々解などの意にや、〔佐々利辨の名亦おもひ合す〕べし、〇早豇は四月廿日より晦日まで、晴夜に蒔る也、月夜に種おろせば實ならずといへり、〔中略〕畿中沙場ともえらばず皆うゝるなり、草とり肥養にも及ず、七月頃收て、其下に蕎麥を種るべし、晩豇豆一ハ霜豇と名く、〇〔中略〕この二種ともに實房の成著より漸々摘採なり、幹ハ特生にして、苗の高四五寸許、莢に双生と數生とあり、作れる地は去年の粟蔵の跡よろし、畠の肥過たるは、其葉にのみ勢至てあし、只磽瘠閑散、又ハ大小麥の中に併種べし、是良田をつひやさずして培養の艱なく、又飯粥にまじへ、餛飩の餡ともなす、其用またく赤小豆とおなじ、亦濟生の良穀なり、奴豇ハ、但黑白の斑文あるを稱へり、

珂孚豆

〔倭名類聚抄十七豆〕珂孚豆　崔禹錫食經云、珂孚豆〔和名、古末女、井知〕狀圓圍似玉而可愛、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕本草和名引孚作禾、下總本孚作愛、按依云如玉而可愛、作愛似勝、下總本如作似、廣本同、與本草和名合、則作似似是、然伊呂波字類抄亦作如、今姑依舊、本草和名無故以名之之四字、

〔類聚名義抄五豆〕珂孚豆〔キトコマメ〕

〔伊呂波字類抄〔己植物附植物具〕〕珂孚豆〔キトコマメ　狀圓如玉可愛也〕

穭豆

〔多識編三穀〕穭豆、或云古久仁加志、

〔庖厨備用倭名本草二穀豆〕穭豆　倭名抄ニ穭豆ナシ、多識篇或云コクニカシ、考本草、田野ニ生ズ、小

ニシテ黒シ、粒コマカナリ、露後ニ熟ス、醬ヲ作ルベシ、元升曰、(升○向井)此說ヲミレバ、此豆小ニシテ黒シト云、今俗ニ黒豆ヲ生呑シテ、痰ヲ治シ精氣ヲマスト云ハ、粒コマカニシテ圓キ黒豆ナリ、此穭豆ヨク似タルモノナリ、

〔大和本草 四穀〕大豆(中略) 穭豆タ。ン。キ。リ。豆ト云、野豆也、三葉アリ、ホドノ葉ニ似テ蔓生ス、野ニ多シ、其子ハ黒大豆ノ如クニシテ小ナリ、光ナシ、本草ニノセタリ、救荒本艸ニ載ス、勞豆生平野中、莖蔓延附草木上、葉似黒豆葉而窄小微尖、開淡粉紫花、結小角、其豆似黒豆形極小、味甘、是穭豆ト同物ナル歟、

〔和漢三才圖會 百四穀〕穭豆 山黒豆 (俗云藪切豆○中略)
農政全書云、山黒豆生山野中、苗似家黒豆、每三葉攢生一處、居中大葉如菉豆葉、傍兩葉似黒豆葉微圓、開小粉紅花、結角、比家黒豆角極瘦小、其豆亦極細小、味微苦、

按穭豆、出於金剛山者良、相傳能節痰、故名痰切豆、然本草不載、然功用未知可否也、甚小不利、爲食用、故穭之者希、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀〕穭豆 タ。ン。キ。リ。マ。メ。 ノ。ミ。マ。メ。 ク。ハ。レ。マ。メ。 一名小黒豆(群芳譜) 細黒豆(本草原始) 料豆(同上) 馬料豆(本草必讀)

黒豆ノ類ノ一種小粒ナル者ナリ、雄豆ヨリモ小ナリ、苗モ小クシテ末ハ藤蔓トナル、タンキリマメニ圓名アリ、柔滑類ノ鹿藿ニモコノ名アリ、

〔庖厨備用倭名本草 二穀〕毛豆 和名抄、多識篇ニ、毛豆ナシ、考本草黄大豆ノ類也、夏初ニ食ス、莢ニ實スクナシ、秋深クホコロビテ實多シ、煮テ果子ニ用テヨシ、油鹽椒酒ニテ煮テ蔵ニシテヨシ、此豆莢殼ノ上ニ毛アル故ニ毛豆ト云、元升曰、(升○向井)和名ハケマメト云ベシ、

毛豆、味甘、性平、小毒アリ、鬼氣ヲ殺シ、痛ヲヤメ、水ヲフビ、胃熱ヲ除キ、痰血ヲ下シ、藥毒ヲ解ス、多食

スベカラズ、

〔延喜式 内膳 三十九〕耕種園圃

營大豆一段、種子八升、總單功十三人、耕地一遍、把犁一人、牛一頭、料理平和一人、畦上作二人、殖功二人、三月芸一遍二人、採功二人、打功二人、

〔農業全書 二 五穀〕大豆

大豆色々あり、黄白黒青の四色あり、此外つぶの大小、形のまるき平き、其外さま〴〵多、又つる大豆あり、又かき色なるもあり、此内黄白の二色を、夏秋の名をつけて專作る事なり、赤土は大豆に宜しとて、豆の類はあか土に取分よき物なり、種る時分の事、三月上旬を上時とし、四月上旬を下時とす、秋大豆は五月中旬より六月上旬まで種べし、但其年の節に隨て、五日十日は斟酌あるべし、種て肥地の深きをば好まず、でき過て實りよからず、又地のこなしの餘りくはしきもよからず、先大かた夏大豆は麥の中にうへ、秋は麥跡にうゆるをよしとす、麥の中に筋をふかくかき、一段に凡種子五升まくを中分とす、是も肥瘠により、やせ地は少あつく蒔べし、又瘠地に大豆をうゆるには、灰を用てうゆべし、豆にはならびなきこゑなり、いかにもむらなく蒔て、土を覆ふ事は深くすべし、豆は極熱の時分、底土のしめり氣に根先とゞきて、其うるほひにより實る物にて、地淺き沙地は、旱のつよき年は必痛み枯る故、蒔付る時其心得して少深く蒔べし、さて中うち芸る事二度、但麻は地を芸り、豆は花を芸るとて、麻は草のいまだ目に見えざる内に早芸り、豆は花を見ても、猶芸りてくるしからざるものなり、又豆は初め終り地のこしらへより、中うち芸るに至るまで、手入の餘り委しく念比なるは、却てよからぬ物なり、豆のにた蒔とて、他のうへ物にかはりて、大豆ばかりはぬれ土に蒔たるがよく生長し、蒔て其まゝよく生るものなり、又大豆を毎年同じ地にうゆべからず、いや地を嫌ふものなり、蒔時分其所のよき時節に蒔合せざれば、實りよからぬ物なり、時分よく蒔たる豆

は、尤よくさかへ、枝も多く付て、足もとよりさや多くつき、節の間もしげく、よく實るものなり、又早過たるはつるとなりて、さや小さく實少し、又時にをくれたるは莖短く、本にさやならず、又大豆は槐に生ずとて、ゑんじゆの木のさかゆる年が豆のよき物と、農書に記せり、凡蒔て百廿日にて刈收る物なり、又夏大豆を蒔時分の事、杏の花ざかり、桑の赤き時、又四月雨の後、大小豆を蒔べし、ともによし、秋大豆を夏至（五月の中なる）の後廿日ばかりの比蒔べしとも云り、たねにより所により、早晩段々ある事なれば、一概には定めがたし、第一は其所のためし、心おぼえして、いか様ちと早きをよしとす、中うちする事、大豆生出て、甲を戴て出る時、深くうつべからず、長じて後中うちせば、根に土をうちおほふべし、旱の時根の下に日のとをらぬためなり、同じく刈時分の事、大豆は蝋に熟すとて、末のさやは少々青く、下は大かた黒くなりたる時、晴天を見てぬきとり、たばねさかさまに立て、根をからせば、さや早く枯る物なり、よく干たるを見て打て收むべし、但おほく作るものは、そばや胡麻を干ごとく、やねをふく様に下地を作り、日のよく當るやうにふき置て、よく干たる時打てとるべし、積置て久しく日數をふれば、損ずる物なり、もし又日和のあしきに取込てつみ置ば、くさる物なり、此時はこき落して擴げをくべし、又豆は花の咲時、旱をにくむ物にて、花黄色になりて根こがるゝ物なるゆへ、根の土のかはかぬ様に、兼て心得してうゆべし、又大豆を區うへする法は、畦作りし穴を深さ廣さ各六寸ばかりにほり、糞と土とかきまぜをき、うゆる時、其穴の中に水多く入れ、水盡て後、能程に糞土を入れ、豆を三粒其中にうゑ、又右のこゑ土を上におほひ、手にてをし付、土と思ひ合せ置べし、但此區と區との間、各一尺餘りにすべし、かくのごとくすれば榮へふとる事、常の三倍もあるものなり、土地のすくなき所にてする法なり、總じて此まちうへは、手間入て多く作る事成がたければ、がんぎを深く切糞し手入をよくし、薄くむらなく作れるは、區うへとさのみ替る事なし、又杖のさきにて、五七寸に一つ二つづゝあなをつ

き、一二粒づゝうへ、灰にておほひ置たるも、取み多し、二月蒔て四月はや實るあり、是を梅豆と云なり、煮て菓子によく、料理にめづらしき物なり、都の近く、又は城下など、凡て人多き大邑に遠からぬ所にてはよく作り、靑豆にてうるべし、又大豆を芸る時、雨露のあるおりには、必手を觸べからず、葉に虫の付ものなり、

〔齊民要術　二〕大豆

春大豆、次植穀之後、二月中旬爲上時、(一畝用子八升)三月上旬爲中時、(用子一斗)四月上旬爲下時、(用子一斗二升)歲宜晚者、五六月亦得、然稍晚稍加種子、地不求熟、(秋鋒之地、卽稿種、地過熟者、苗茂而實少)收刈欲晚、(此不零落、刈早損實)必須耬下、(種欲深、故豆性強、苗深則及澤)鋒耩各一、鋤不過再、葉落盡然後刈、(葉不盡則難治)刈訖則速耕、(大豆性炒、秋不耕則無澤)種茭者用麥底、一畝用子三升、先漫散訖、犂細淺酹(良輟反)而勞之、(旱則盡堅、葉落稀則苗莖不高、深則土厚不生)若澤多者、先深耕訖、逆垡擲豆、然後勞之、(澤少則否、爲其浥鬱不生)九月中候近地葉有黃落者速刈之、(葉少不黃必浥鬱、刈不速、逢風則葉落盡、遇雨則爛不成)

雜陰陽書曰、大豆生於槐、九十日秀、秀後七十日熟、豆生於申、壯於子、長於壬、老於丑、死於寅、惡於甲乙、忌於卯午丙丁、

孝經援神契曰、赤土宜菽也、

氾勝之書曰、大豆保、歲易爲宜、古之所以備凶年也、謹計家口數、種大豆、率人五畝、此田之本也、三月楡莢時有雨、高田可種大豆、土和無塊、畝五升、土不和則益之、種大豆、夏至後二十日尚可種、戴甲而生、不用深耕、大豆須均而稀、豆花憎見日、見日則黃爛而根焦也、穫豆之法、莢黑而莖蒼、輒收無疑、其實將落反失之、故曰、豆熟於場、於場穫豆、卽靑莢在上、黑莢在下、氾勝之區種大豆法、坎方深各六寸、相去二尺、一畝得千六百八十坎、其坎成、取美糞一升、合坎中土、攪和以內坎中、臨種沃之、坎三升水、坎內豆三粒、覆上、上勿厚、以掌抑之、令種與土相親、一畝用種一升、用糞十六石八斗、豆生五六葉鋤之、旱者漑之、坎三升水、丁夫一人可治五畝、至秋收、一畝中十六石、種之上土、纔令蔽豆耳、

崔寔曰、正月可種䝰豆、二月可種大豆、又曰、二月昏參夕、杏花盛、桑椹赤、可種大豆、謂之上時、四月時雨降、可種大小豆、美田欲稀、薄田欲稠、

〔康頼本草 米穀〕生大豆 味甘平、除癰腫、和一ノ、九月採之用之、於保末女、

〔宜禁本草 五穀〕黑大豆 甘平、煮汁解烏頭丹石諸藥毒、久服身重、炒爲屑、甘主胃熱、去腫除痺、消穀止脹、炒熟合猪肉不可食、 白大豆不入藥用、炒黑煙未斷、及熱投酒中、主風痺癱緩、口噤、產後諸風、食罷生、去心煩熱風恍惚、明目鎮心、久服好顏色、變白不老、烏髮、醋煮大豆黑者、去豆煎令稠、傅髮、煮食寒、下熱氣腫、壓丹石煩熱、消渴脹水腫、汁解諸藥毒、消腫、和甘草煮湯、去一切熱毒氣、卒失音、生豆一升、青竹箅子四拾九枚、長四寸闊一分、和水煮熟、日夜二服瘥、

〔本朝食鑑 穀一〕大豆 訓於保末米、

釋名、菽、本作尗、古音叔、廣韻曰、菽音叔、和名未米、亦作莢、和名未加夏、今大(平野)按、李時珍曰、角曰莢、葉曰藿、莖曰萁、又曰、大豆菽也、小豆荅也、今本邦以黃白大豆、作用者多、以黑大豆、作用者少、故今以黃白大豆爲大豆、以黑大豆次之、

集解、大豆有黃白、青、赤、黑、褐、斑數色、今本邦以黃白大豆造味噌醬油、作旦夕之用、有夏大豆秋大豆、而黑白俱同、夏大豆者三月末下種、七月采實、秋大豆者五月初下種、八九月采實、其苗高四五尺、葉團有尖、大似黑豆、秋開小白花、成叢結莢、長寸餘、莢角肥大似黑豆、其嫩時作蔬食、味甘美、經霜乃枯、田家種于稻田畦間、亦有本邦自古用大豆者不減稻麥、不獨人食、爲馬食亦多、故田圃之外庭園別墅、亦爲䟽養種之、采實後莖葉令馬食之、或多種采莖葉以貨之、俗曰刈豆、江東最多、不如京師、濃、尾、江南、江西之

美

〔本朝食鑑 穀二 和 異 同〕大豆

大豆有黑、白、黃、褐、青、斑數色、惟言黑豆名烏豆、可入藥及充食作豉、而專用之爲勝、其黃白豆炒食作腐造醬笮油、盛爲時用而已、本邦常造味噌醬油、專爲日用、故以黃白爲勝、黑者入藥作豉作蔬、然比黃白

則其用十之一二、惟言白不言黃、而黃白混作白豆也、

〔本草和名 十九穀〕大豆黃卷、仁諝音、〇〇〇崔禹錫食經云、以大豆爲蘗、牙生便乾之名也、和名末女乃毛也之、

〔醫心方 一〕大豆黃卷 和名末女乃毛也之

〔藥經太素 下〕大豆黃卷 平味甘

黑大豆ヲ長、一寸生タル時干ト云、能炒テ用、

〔宜禁本草 乾五穀〕大豆黃卷 甘平、以大豆爲芽長五分、便乾之菸用、主濕痺筋攣膝痛、胃氣結積、去黑肝、潤澤皮毛、益氣、

〔和漢三才圖會 百四穀菽〕豆蘗 黃卷 萬末乃毛夜之

本綱、黑大豆爲蘗、芽生五寸長、便乾之菸過服食、 氣味甘平 治濕痺筋攣膝痛、益氣宜腎、治周痺、在血脈之中、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀菽〕大豆黃卷 クロマメノモヤシ 一名卷蘗本草彙言 黃卷皮同上 大豆卷千金方 豆牙原始本草

黃豆ノモヤシハ、黃蘗山ニテ卷煎(ケンチエン)ト云、油アゲニシテ料理ニ用ユ、薩州ニテモ常ニ用ユ、麥芽ノ如ニ製スレバ、腐リテ生ジ難シ、豆ヲ地ニ下シテ、芽ヲ採ヲ佳ナリトス、又薦ノ上ニ豆ヲ撒シ、上ニ二薦ヲ覆ヒ、流水中ニ置ケバ生ジヤスシト云、食用ハ皆黃大豆ノ芽ナリ、藥用ハ黑大豆ノ芽ナリ、

〔庖丁聞書〕一向の菜は五種の削物、〇中略具足餠の時は、大根の香の物、田作、甲の大豆を用ゆ、一甲の大豆とは萌したる豆也、

〔延喜式 三十二大膳〕鎭魂 皇后宮、東宮亦同、

大直神一座 座別〇中略大豆一合八勺七撮、(中略)已上七種神四座、菓餠料、

〔延喜式 三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料〇中略 仕增別日菓菜料、〇中略大豆二合五勺、餠料一合、菜料一合五勺、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓子料、○中略生大豆二合、（諸齋料）

九月九日節料　生大豆（五位已上二升）

〔古事談 三僧行〕藤原大僧正ハ、近江國淺井郡人也、叡山戒壇ヲ依不合期、人夫エツカレザリケル比、淺井郡司ハ、相親之上、師檀ニテ修佛事之間、此僧正ヲ奉請、僧膳キコエムトテ、前ニテ大豆ヲイリテ酢ヲ掛ケルヲ、僧正ナニシニ酢ヲバ懸候ト被問ケレバ、郡司云、溫時懸酢ツレバ、酢ムツカリトテ、ニガミテヨクハサマレ候也、不然バスベリテハサマレヌ也云々、

〔大草家料理書〕一のたあへ物は、酒のかすを能摺て、大豆の粉を入て、花鰹を摺てませて、魚に鮓を掛てあへる也、

〔爲房卿記〕康和三年七月七日早旦、向日飲大豆七枚小豆七枚、是例事也、避病之秘術、

〔牧民金鑑 十一〕享保十八丑年月御書付

　時疫流行の節、此藥を用ひて其煩をのがるべし、

一時疫は、大豆大つぶなるを能いりて壹合、甘草壹匁、水に而せんじ出し、時々呑てよし、右書經に出ル、○下略

〔延喜式 圖書 十三〕凡年料裝潢用度、○中略大豆五斗、（糊料）

〔延喜式 陰陽 十六〕凡造曆用度者、○中略糊料大豆三升三合、

〔朝野群載 陰陽道 十五〕陰陽寮解　申請寫來年料曆用物事

合曆百七十九卷、○中略

大豆五升、（續料）○中略

右寫來万壽三年曆料、用度雜用料、依例陰陽寮所請如件

萬壽二年七月四日　左少史小野朝臣奉政奉

〔延喜式〕三十七 典藥 凡供御乳、○中略 乳牛七頭、秣料米大豆各日一斗二升、犢別二升

〔農家備要〕三 大豆は稻田に用ひて最上の糞とす、間には其儘用ふるものあれども、此を能く煮熟して、一二夜を過ぎて用ふる時は、速に化爛して、別して效能あるべし、

大豆產地

〔延喜式〕三十七 典藥 諸國進年料雜藥

河內國三種、○中略 黑大豆大五斗、

〔毛吹草〕三 河內　大豉　伊豫　豆腐豉　豐後　豆腐豉

〔雍州府志〕六 土產 黑大豆　所々出、近江產爲勝、黑大豆之中、一種至小者、俗謂呑豆、毎朝生呑之、則治痰、糶賣、悉在京師米店、蒸豆惠串豆都串豆、悉在大宮三條南、

〔濃陽群談〕十六 名物土產 阿部野大豆小豆　同郡○東生 阿部野村ノ田圃ニ作リ、味勝テ宜、世ニ能以求之、諸方ニ種ヲ設ク、

〔浪花の風〕總じて豆類は都てよろし、乍去平豆江戶にて雁喰豆と唱ふるものは絕てなし、

〔百姓傳記〕十一 大豆ヲ蒔事

常陸國ノ河邊大豆上々ナリ、坂東ガ總テ大豆能國ナリ、河邊大豆種ヲ諸國へ持來リ植ルニ、一年モ二年モ其性ニ出來テ、味ヒヨク取實アリ、皆夏豆ナリ、

大豆雜載

〔令義解〕三 賦役 凡一位以下、○注略 及百姓雜色人等、○注略 皆取戶粟以爲義倉、○中略 大豆二斗、小豆一斗、各當粟一斗、

〔朝野群載〕二十七 諸國公文 主計寮解　申返抄事

備前國應德二年雜米使正六位上行

年料白米仟佰漆拾伍斛

大炊寮納〇中略

生大豆肆拾肆斛柒斗〇中略　曾大豆二拾伍斛〇中略　左馬寮秣大豆捌拾斛〇中略

寛徳三年十二月廿九日　正六位上行權少屬縣宿禰〇署名以下略

〔朝野群載 三〕對馬國貢銀記

對馬島者〇中略　全無田畝、只耕白田、減直諸租税、乖此島、以大豆為正税、

〔牧令類纂 租稅八十八〕貞享四丁卯年十一月

定〇中略

一關東方在大豆納之儀、米壹升ニ貳升代、永壹貫文に五石代之積、高百石に大豆は貳升掛り、在は壹斗掛り之積、向後高役ニ可相納、私領之上り地不同之所は、可為右同斷、在大豆共ニ大分御入用有之年者、可有増減、但各別之子細有之歟、在大豆難納所は、前方御勘定所江可伺之、但伊豆甲斐陸奥出羽上方筋者、可為有來通事、

〔拾遺和歌集 物名七〕そやしまめ　高岳相如

いさりせしあまのをしへしいづくそやしまめぐるとてありといひしは

〔古今著聞集 管絃歌舞六〕樂所預小監物源頼能は、上古に恥ざる數奇の者也、玉手信近に順て横笛を習けり、信近は南京にあり、頼能其道の遠きをいとはず、或は隔日にむかひ、或は二三日をへだててゆく、信近ある時にはをしへ、或時は敎ずして、遠路をむなしく歸るおりも有けり、〇中略ある時は又豆を苅所にいたりて、又是をかり苅をはりて後、鎌の柄をもて笛にして敎けり、

〔七十一番歌合 中〕卅五番　右　まめ賣

こひすればやせちのまめのさるなかせ涙の川は我ぞましける

〔時慶卿記〕慶長十年二月廿五日、晩ニ雷鳴、入夜ハ光帶タヽシ、初雷ナレバ節分大豆ヲ用、

小豆名稱

〔本草和名 十九米穀〕小豆一名荅、豍豆、豌豆、江豆、野豆、和名阿加阿都岐、

〔倭名類聚抄 十七豆類〕小豆　本草云、赤小豆、和名阿加安豆木　崔禹錫食經云、緊小豆、紫小豆、黄小豆、緑小豆、

〔箋注倭名類聚抄 九穀類〕本草和名赤小豆條云、鹿小豆、小珂豆、青小豆、黑小豆、紫小豆、白小豆、黄小豆、緑豆、已上八種出崔禹、此所引節是文、而青白二種似不可省、其緑小豆彼引作緑豆、恐誤脫、說文、荅小尗也、本草稷米條陶注引董仲舒云、小豆一名荅、有三四種、李時珍曰、赤小豆以緊小而赤黯色者入藥、其稍大而鮮紅淡紅色者、並不治病、俱于夏至後下種、苗科高尺許、枝葉似豇豆、葉微圓峭而小、至秋開花、似豇豆花而小、淡銀褐色、有腐氣、結莢長二三寸、比綠豆莢稍大、皮色微白帶紅、三青二黄時即收之、

〔伊呂波字類抄 安植物附雜物具〕小豆アヅキ　赤小豆アカアヅキ　豍豆　豌豆　江豆　野豆　豎
已上五名出說文、アカアヅキ、

〔運步色葉集 阿〕紅豆アヅキ、

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一あづき　あかとも　あか〳〵共

〔朱氏談綺 下米穀〕赤豆アヅキ　紅豆 色深紅ニシテ、小豆ヨリ大ナリ、日本ニ云唐アヅキ、唐山ニテモ食品不ㇾ失、

〔段注說文解字 一下艸〕荅小尗也、注有ニ麻荅、廣雅云、小豆荅也、假ニ借爲ニ麤荅一、从ㇾ艸合聲、都合切、七部、

〔日本釋名 下米穀〕赤小豆アヅキ　あは赤也、つきはとけ也、他の穀よりやはらかにして、煮てはやくとけやすし、又つきはもちなどにつくるなり、

〔東雅 十三穀蔬〕豆マメ　中略○　小豆をアヅキといふは、アは小也、ツキはツムギといふが如し、○中略　其莢の小しきにして、角あるをいふ也、

〔成形圖說 十八五穀部〕阿豆伎 古事記、小豆也、

赤小豆、〇和名抄中略大納言、〇略胡頽小豆、一の名は黒頽小豆、豆にて大者也、是字佐奈伎て、新撰字鏡、訓み詳ならず、若小豆とあり、〇中略

阿豆伎とは赤解也、色赤而支之能腐熟する故なりと、書紀注にいへり、今按に、草にして某の佐と呼者衆し、其幹の樹植するを従て解に似たり、小豆、豆角、忘蘭の葉の如きしかり、和名抄に、此等の種には佐といふに、樹木の字堪つ、抄とは此の字堪し、使には、破の字ありのごとき、さらば小豆も赤粒木などの義にや、

【本草和名十九】腐婢。〇小豆華也、和名阿豆岐乃波奈、

【倭名類聚抄十七】小豆〇中略　蘇敬本草注云、腐婢和名阿豆木乃波奈小豆花名也、

【伊呂波字類抄植物】腐婢花小豆　小豆華也アツキノハナ

【宜禁本草乾五】腐婢　辛平、治陰不起、主消渇病頭痛、明目散氣滿不能食、治小兒丹毒熱腫、主寒熱、

【和漢三才圖會百三】腐婢　小豆花　和名阿豆木乃波奈

〇〇〇腐婢有三物、一葛花也、一此小豆花也、一海邊小樹也、木狀如梔子、葉氣似腐臭、名同物異也、此所謂腐婢乃赤小豆花也、

氣味辛平　飲酒不醉、小豆花葉陰乾百日、與葛花等分、末、服方寸匕、

【本朝食鑑一穀】赤小豆　釋名阿豆木

集解、赤小豆亦有早晩、四五月下種、七八月收之者早也、六月下種、九十月收之者晩也、有形緊小而赤者、有淡紅紫黑白青者、有稍大深紅者、此俗稱大納言、味亦最美也、赤小豆生苗高尺許、枝葉似大角豆、葉微圓鋭而小、至秋開花、亦似大角豆花而小、黄白有光似褐色、其臭有腐氣、一名腐婢、和名阿豆岐乃波奈、結莢長二三寸、比綠豆莢稍大、皮色初青後有微白帶紅、或青黄或黑而收之、凡赤豆煮則赤紅鍵作紫黑色、今本邦所用者、同與飯同煮、與粥同煮、與糯飯同煮、或煮熟搗爛、調糯葛粉、黑白砂糖、釜蒸等物造餅、此號羊羹、〇中略或煮熟搗爛合黑砂糖、和白鹽少許、又合白糖亦有、供作饅頭餡、又作糯餅之餡、

作葛餅之餡、或煮熟抹餅、此皆所毎用也、近世用赤豆粉、浸水滌衣服及婦人面脂、能除油垢、呼稱志也保牟、又外有同名、而木患子殼、此亦能除垢者也、

〔和漢三才圖會　百四穀菽豆〕赤小豆　荅〈音〉　赤豆　紅豆　葉名藿　花名腐婢　和名阿豆木〈○中略〉

按赤小豆有早晩、大抵土用中撒種、九月收之、其粒大而深紅色者、俗稱大納言、阿州石川郡之產爲勝、此爲粥及飯所宜也、如陳久者煮之難熟、試之以息吹採之、色鮮紅者乃新也、爲末盛袋、婦人洗面、能去脂垢甚佳、凡赤小豆不易煮、加茶煎汁同煮則早熟、〈鼠被咬人、永忌食赤小豆〉凡被瘋犬、煮赤小豆令食之、則易愈、或云治狗諸病、

小豆初見

〔日本書紀　一神代〕一書曰、〈○中略〉天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、〈○中略〉陰生麥及大豆小豆、〈○〉天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、

〔古事記　上〕速須佐之男命、〈○中略〉殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、〈○中略〉於鼻生小豆、〈○下略〉

小豆種類

〔本草和名　十九米穀〕赤小豆、葉名藿、〈出蘇敬注〉鹿小豆、〈色赤〉小珂豆、〈似赤小豆而小〉靑小豆、甘　黑小豆、紫小豆、白小豆、黃小豆、緑豆、〈已上八種、出崔禹〉

〔王氏農書　二十八穀譜集〕小豆

廣雅曰、小豆荅也、本草經曰、張騫往外國、得胡豆、今世有小豆、有菉豆、赤豆、白豆、江豆、營豆、皆小豆類也、

〔重修本草綱目啓蒙　十七菽豆〕赤小豆　アカアヅキ〈和名鈔〉　小角草〈和書〉　サヽリグサ〈歌書〉　アヅキ

一名紅小豆〈本草原始〉　小朩〈通雅〉　赤菽〈上仝〉

アヅキニモ夏秋ノ二種アリ、早ク熟スルヲナツアヅキト云、粒小ナリ、漢名麻熟、〈授時通考〉秋ニ至テ熟スルヲ秋アヅキト云、粒大也、漢名秋赤豆、〈群芳譜〉夏秋二品共ニ數種アリ、藥ニハホコリカヅキト呼

ブモノヲ用ユ、一名尾張アブキ、大納言アブキ、粒小ニシテ微黒ヲ帶、時珍赤黯色ト云ル者ナリ、コレヲ豬肝赤(綱目)ト云、本草彙言ニハ、以緊小而赤、黯有黒斑者入藥最良ト云、コレハウ。ブ。ヲ。ア。ブ。キ。ナリ、稍大而鮮紅、及紫紅色者、名赤大豆、僅可供食用、幷不療病ト云リ、又粒小ニシテ淡紅色ナルヲキ。ダ。ア。ブ。キ。(江州)ト云、食用ニ良ナリ、饅頭ノ餡ニ用ユルハ、泉州日根アブキヲ良トス、粒大ニシテ色赤ク兩頭平ナリ、一種粒長小ニシテ白目ノ長キヲ、カ。ニ。ノ。メ。ト云、一名ツルアブキ、ヘイハクアブキ(勢州)蔓長ク延キ、黄花穗ヲナシテ美クシ、瓶花トナスベシ、莢モ多ク垂レ狹長ナリ、漢名猫眼(綱目發明)ト云、又夏アブキノ形ニシテ、淺青ニシテ光リ、小黒斑アルヲ、ネ。コ。ノ。メ。(江州)ト云、又小ニシテ深黒色ナルヲ、ノ。ロ。ア。ブ。キ。ト云、一名シヽタワズ、味良ナラズ、

〔成形圖說(五穀)十八〕阿豆伎〇(中略)小豆に赤春小豆、秋小豆、早晩の二種あること、大豆に異ならず、且小豆の同類なるも亦多なり、(中略)〇(略)又夏小豆あり、麥の跡に蒔てハ後れぬ、早麥の隴の中に蒔て、麥かりとりて卽土を壅べし、或ハ菜蔬叢青或ハ甘藷の下にう〻べし、植て六十日にして莢吐、又六十日にして子熟、而莢の黒くなるを、隨に時々摘採べし、しかせざれバ莢に皺して地に委去ぬ、

〇八。成。小。豆。　〇短。小。豆。

此ものの粒至て細く、色微緑なり、彼岸比播てやがて竹籬に引べし、地に施てハ實よからず、子を結ぶ最衆し、熟なバ速く摘収れ、

〇蟹。乃。目。　〇馬。韓。小。豆。あり、(其子淡紫色、或淡黄色、形細長し、〇中略)

〇紫。小。豆。

此もの瘠土樹陰を擇ず、色に隨て能滋ふ、下品といへども其蔵やすきが爲に、今人多く作れり、されど皮厚く煮がたし、洗粉に做べし、又一種蔓に延ものあり、籬岡にも作るべし、又此ものハ霜降

白豆

の節といへども、莢子の脱散ことなし、莖根共に拔き、一時に實を收(トリ)をさむるなり、

〔多識編 三穀〕白豆、今案志呂阿豆岐、俗云由岐乃志多、

〔和爾雅 六穀米〕白豆(シロアヅキ ユキノシタ)(飯豆同)

〔庖厨備用倭名本草 二穀豆〕白豆(ハクトウ シロササゲ) 倭名抄白豆ナシ、多識篇今案ニシロアヅキ、俗ニ云ユキノシタ、元升(升○向井)曰、俗ニシロサヽゲト云アリ、是ナルベシ、倭名抄ニサヽゲヲ大角豆トカケリ、又白角豆ト云アリ、此シロサヽゲヲ云カ、考本草、一名飯豆、其苗嫩キヲ菜トナシテ食スベシ、生ニテ食スルモヨシ、豆ノ色白シ、又土黃色モアリ、大サ綠豆ノ如クニテ長シ、醬ヲ作リ腐ヲ作リテ尤ヨシ、粥ニシ飯ニシテ食シテヨシ、四五月ニ種ヲ下ス、苗葉皆赤豆ノ如クニテ、略尖リタリ、食スベシ、此說ヲミレバ、白サヽゲウタガヒナシ、

〔大和本草 四穀〕赤小豆(中略○) 白豆アリ、白アヅキナリ、苗葉莢皆赤小豆ニ似タリ、サヽゲト訓ズルハアヤマレリ、二種アリ、一種ハ蔓ニノボル、蔓長シ、一種ハ蔓短シ、赤小豆ノ如シ、民俗豎ノ目ト云、

〔和漢三才圖會 百四穀菽豆〕飯豆 白豆(俗云白小豆)

本綱、飯豆卽小豆之白者也、亦有土黃色者、豆大如綠豆而長、四五月種之、苗葉似赤小豆而略大、可食、莢亦似小豆、其豆(甘平) 補五藏、調中、助十二經脈、腎病宜食之、

一種蔓豆、其葉如大豆、可作飯、作豆腐、亦其類也、

按白小豆和米煮之、早熟不如赤小豆難熟、而味不劣、故名飯豆乎、然爲粥及糕色不佳、故人不好之、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀菽豆〕白豆 シロアヅキ シヤボンマメ 一名白小豆(天工開物) 白豆麪(千金方 麪ノ名)

白豆屑(同上)

白色ナルアヅキナリ、今澡豆(アラヒコ)ニ用ユ、故ニシヤボンマメト云、油ヲ落ス者ヲ皆シヤボント云、又饅頭ノシロ餡トス、

增、白豆ヲシロアヅキニ充ツルハ穩ナラズ、時珍ノ說ニ、小豆ト云ハ、小粒ノ豆ヲ指ス、赤小豆ノコトニ非ズ、俗俗赤小豆ヲ單ニ小豆ト稱スレドモ、唐山ニテハ小豆トハ言ハズ、且ツ頴ノ說ニ、作醬作腐ト云ヘドモ、白アヅキハ豆腐ニ作ルベキ者ニ非ズ、本條ハ尋常ノ大豆ノ白色ナル者ヲ云、ゴゼンマメノ類ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀菽豆〕赤小豆

增、一種シロアヅキト呼モノアリ、形狀常ノ赤豆ノ如クニシテ白色ナリ、上品ノ餡ニ用ユ、コレヲ漢名白赤豆ト云、崇明縣志十一卷云、赤豆外有白色者、俗呼白赤豆ト是ナリ、

〔成形圖說十八五穀〕阿豆伎略○中

白小豆、鹽乃豆、烏臍小豆の臍の目と同じく、物異なり、石綠豆、ヒヤゲンムキ、石綠の番名、サホースの轉音なり、臍を黑く出せるを以、豆臍を目て呼べる耳、○中略此ものも亦二種あり、當葉赤小豆に似て稍大也、農人鼠の目と呼べり、一種ハ莢長くして色に綠ふ、能く油氣を除く、皆四五月に蒔べし、凡白小豆ハ米に和煮て早熟る也、

〔多識編三穀〕綠豆、今案布牟登宇、也倍那利、

〔和爾雅六穀〕綠豆ブンドウ ヤヘナリ 茶豆

〔朱氏談綺下穀〕綠豆ヤヘナリ 茶豆 同、

〔農政全書二十六樹藝〕菉豆菉豆、本作綠、以其色名也、粒大而色鮮者、爲官綠、皮薄粉多、粒細而色深者、爲油綠、皮厚粉少、早種者呼爲摘綠、晚種者呼爲拔綠、以水浸濕、生白芽、爲菜中佳品、

〔日本釋名下穀〕綠豆ヤヘナリ　まハ丸き也、さは小也、めは豆也、丸く小なる豆也、又やゑなりとも云、やゑハ彌重也、なりハみのる也、一年に二度みのるもの也、故にやゑなりと云、

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ略○中　綠小豆といふは卽綠豆、俗にブンドウとも、ヤヘナリともいふもの是也、或說に、アンドウとは綠豆也、其粉の餌となす宜しきをいふ、ヤヘナリとは八重生なり、其早く熟るものゝ、歳に再び熟むべきをいふと云ひけり、

〔物類稱呼三生植〕綠豆ぶんどう　東國にてやへなりとよび、又とうろく共よぶ、畿內にてぶんどうといふ、遠江にてとうごと云、備前にてさなりといふ、伊勢にてかつもりといふ、尾張にて云ぶんどうあづき、又十六寸などいふは別種也、

〔庖厨備用倭名本草二穀〕綠豆　倭名抄ニ綠豆ナシ、赤小豆條下ニ、綠小豆トイヘルハ、此綠豆ナルベシ、多識篇今案ニフントウ、元升升〇向井曰、關東ニテハヤヘナリト云、京師ニテフントウト云、西國ニテハフタナリト云、考本草、三四月ニ種ヲ下シ、苗ノ高サ一尺バカリ、其ノ葉小ニシテ毛アリ、秋ニ至テハ小花ヲ開ク、莢ハ赤豆莢ノ如シ、粒アラク色アザヤカナルヲ官綠トス、皮ウスクシテ粉多シ、粒小ニシテ色フカキヲ油綠トス、其用甚ヒロシ、粥ヲナシ、飯ヲナシ、酒ヲナシ、炒食ヲナシ、麪食シ、磨シテ餅ヲトリテ、水ニタテスマシテ、粉ヲ取テ餌ヲナシ、饅ヲナシ、素餅ヲ作ルベシ、食中ノ佳品也、又モヤシヲナシテ、菜中清潔ノ味也、又牛馬ニ與ヘテヨシ、眞ニ濟世ノ良穀也、

〔大和本草四穀〕綠豆　倭名ブンドウ、ヤエナリ、夏ヨリ秋マデシキリニヲヒ〱實ナル、又早クウヘテ早ク實ノリタルヲマケバ、其秋又實ノル、一年ノ內二度ミノル、故ニヤエナリト云、他豆ニ異ナリ、能小便ヲ通ジ熱毒ヲ消シ、一切ノ毒ヲケス、殊ニ酒毒燒酒ノ毒、附子ノ毒ヲケス、粉ヲ水飛シテ爲餻、水綠トス、水綠ハ時珍食物本艸註曰、菉粉トス、涼無毒、涼血解諸毒ト云ヘリ、宋ノ陳達叟ガ蔬食譜、碾破綠珠、撒成銀縷ト云シハ、水綠ナルベシ、又水ニヒタシテ白芽ヲ生ジタルヲ煮テ、豆油及醋ニ和シ蔬トナシテ食ス、食物本艸註云、脾胃虛寒之人不宜久食、綠豆ハ榧子ノ殼ニ反ス、害人ト本艸ニイヘリ、倭俗ニ云、綠豆ト蕨粉ト同食スレバ、腹ハリテ死ス、種樹書曰、種菉豆地宜瘠、

〔本朝食鑑穀一〕綠豆訓如字、或稱也惠奈利、京俗稱文豆、

集解、三四月下種、苗高尺許、葉小而有毛、至秋開小花、莢如赤豆、粒亦如赤豆小而色綠、或有薄皮粉多者、或有厚皮粉少者、色亦有淺深、作餅作餌、其用處亦與赤豆略同、又以水浸濕生白芽、采之作蔬食亦

有近代未患痘瘡之家、收蓄作常食、以預防毒氣、故擧世皆然焉、

〔和漢三才圖會　百四穀類〕綠豆　俗云文豆利、又云不牟止宇、○中略

按綠豆解毒、有利小便消水腫之功、性寒凉、多食則瀉下也、脾胃虛弱者最不宜食、赤小豆亦同、蓋此與本草有異矣、造蘖法、浸之注水、覆藁一二夜、生白芽長數寸、

〔重修本草綱目啓蒙　十七穀〕綠豆　ブンドウ　ヤヘナリ京師　トウロク同上　マサメ奥州　アヲアブキ河州　フタナリ備州　サナリ備前　バヽコロシ同上　バコロシ同上　ブドウ同上　トウゴ奥州　カワモリ勢州　アブキブンドウ豫州

苗ハ赤小豆ニ似テ小ク、莢モ亦相似テ小ク、粒モ亦小ナリ、正綠色ナル者ハ官綠也、一名明綠、事物異名綠色ニシテ褐ヲ帶ル者ハ油綠ナリ、一名灰綠、事物異名共ニ夏ヨリ秋マデ斷ヘズ實ノル、又早ク種ヲミノリタルヲ再ビ種ユレバ其秋又實ノリ、一年ニ二度實ノル故ヤヘナリト云、集解ニ早種者呼爲摘綠ト云ハ、フミブンドウナリ、遲種呼爲拔綠ト云ハ、ヒキブンドウナリ、此粉ヲ藥用トス、綠豆粉ト云、方書ニ眞粉ト云ハ、眞ノ綠豆粉ノ略ナリ、一名豆粉事物異名解毒、同上

〔成形圖說　十八五穀〕二成豆、大和風土記綠豆卽是

二番早成豆、八重成豆、眞小豆、本は綠末を書ける也、加通毛利、粉豆、本粉豆より轉れり字彙豆、粤に宛然綠の面に文ある故也綠豆、圓實木綿、時珍云、綠以色名也、舊本作菉者非矣、色綠小豆、和名鈔引食經植豆、綠に小綠豆中の大なる者也官綠、粒鮮にして色鮮なる者なり油綠、粒小にして色の光ある者也摘綠、一名摘角綠、早く種て綠に摘取る者也、拔綠、一名拔角綠、遲く種て一時に根莖をなべて拔取る者也、以上綱目及時珍通考、明綠、灰綠、以上群芳譜書名カテイアンボーン、

此もの一歲に再び蒔て實を收るゆゑ、二成といふ、八重成も夏秋頻に實成を以て名けたり、每日に成實を摘採ものぞ、若忘ぬれバ莢腐、子黴して用に中らず、○中略此もの卽小豆の青きにて、又種の早晩あり、子の巨細あり、色の淺深あり、各處の方名一からず、

小豆栽培

〔延喜式 三十九 内膳〕耕種園圃

營小豆一段、種子五升五合、總單功十三人半、耕地一遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理一人、畦上作二人、五月下子半人、芸二遍四人、採功二人、打功二人、

〔農業全書 五二穀〕赤小豆

赤小豆是又色々あり、赤白綠の三色、(尤形の大小色づき、所により品々おほし、)中にも小粒のほそき赤小豆を專種る事なり、小豆は李に生ずとて、すもゝのさかゆる年、小豆よく實るものなり、うへて六十日にして花咲、又六十日にして熟する物なり、種る地の事、大かた麥跡を用ゆべし、是も夏秋二色あり、夏小豆は麥跡は遲し、畑餘計あるものは、去年の粟跡を用ゆべし、又秋小豆は夏至の後十日過て、うゆるを上時とし、土用の入を中時とし、同じく半を下時とす、是を過ればをそし、麥跡にてもかきこなし、瘦地ならば少灰糞を用ゆべし、種子を凡一段に二升、或二升五合、横筋を切ても、又ちらし蒔にても、薄くむらなく、さかへ茂りて後、枝葉のつき合ざるを好む物なり、中うち芸り二遍ばかりして、葉こと〴〵く落て後ぬき取べし、小豆は三青四黄と云て、さやの三つはいまだ青く、四つ黄なる時、ぬき取といへども、小豆は霜にあふまで置ても落る事なし、本より末まで紕なくよく實る物なれば、勝手にまかせて取收むべし、又榿黑き時、雨の後小豆を種るとも云なり、又春蒔て夏熟し、さやの黑きばかりを、さゝげをもるごとく段々もりてとるあり、常の小豆に味はおとれり、是を夏小豆と云なり、又一種蟹の目小豆とて、其粒細ながく、蟹の目に似たり、是はつる長く、かきや竹などには、ゝせ、糞養によりてことの外さかへはびこり、實り多き物なり、味は秋には劣れり、又綠色の物あり、是又味ひよからず、蔓長くそらに榮へ、土地の費すくなく、實り多き事を好む者は、是を作るべし、又白豆あり、菉豆のごとくにして子長し、四五月種るのよし、本草に見えたり、(白豆をさゝげと云はあやまりなり)總じて小豆は八新の内の一種にて、出來代りて後は性あしく味もよからず、古き

は用ひがたし、

〔齊民要術二〕小豆

小豆、大率用麥底、然恐小晩、有地者常須兼留去歳穀下以擬之、夏至後十日種者爲上時、（一畝用子八升）初伏斷手爲中時、（一畝用子一斗）中伏斷手爲下時、（一畝用子一斗二升）中伏以後則晩矣、（諺曰、立秋葉如荷錢、猶得豆者、指謂宜晩之歳耳、不可爲常矣、）熟耕、耬下以爲良、澤多者耬耩漫擲而勞之、如種麻法、（未生白背勞之極佳、）漫擲犁次之、穊（上居反）種爲下、鋒而不耩、鋤不過再、葉落盡則刈之、（葉未盡者、難治而易濕也、）豆角三青兩黃、拔而倒豎籠叢之、生者均熟、不畏嚴霜、從本至末、全無秕減、乃勝刈者、牛力若少、得待春耕、亦得稀種、凡大小豆、生既布葉、皆得用鐵齒鋸楱、（鋸俱切）從橫杷而勞之、

雜陰陽書曰、小豆生於李、六十日秀、秀後六十日成、成後忌與大豆同、

氾勝之書曰、小豆不保歳、難得、椹黑時注雨種、畝一升、豆生布葉、鋤之、生五六葉、又鋤之、大豆小豆不可盡治也、古所以不盡治者、豆生布葉、豆有膏、盡治之則傷膏、傷則不成、而民盡治、故其收耗折也、故曰、豆不可盡治、養美田、畝可十石、以薄田尚可畝取五石、（諺曰、與他作豆田、斯言良美可惜也、）

龍魚河圖曰、歳暮夕四更中、取二七豆子二七麻子、家人頭髮少許、合麻豆著井中、呪勑井使其家竟年不遭傷寒、辟五方疫鬼、

〔農業全書二五穀〕菉豆（いなかにてはままめと云）

緑色なるゆへ菉豆と名付るとなり、農家是を多く作りて粥にし、飯にも合せ、餌（だんご）とし、炙（あぶりもの）とす、或すりて粉とし、餅となすべし、又酒に造るべし、其外餅のあれによし、味甘く、藥の毒をとり、性のよき物なり、種る地の事、肥過たるを好まず、糞をば用ゆべからず、四月に蒔て六月に收む、其たねを蒔て八月に收む、此ゆへに農人是を二なりともいふ、又菉豆をもやしにして味甚よし、

〔采譜下〕菉豆　農政全書曰、粒大而色鮮者爲官綠、皮薄粉多、粒細而色深者爲油綠、皮厚粉少、又曰、粥

とし飯とし餌とし炙とし、或磨て粉とし餻とし、其味甘而不熱、乃濟世之良穀也、又以水ひたしもえ出るを食す、味よし、月令廣義曰、麻をかりおはりて、其あとにうふべし、種樹書曰、菉豆は瘦地に宜し、四月に種て六月に收む、子再種て八月に收む、

時珍曰、三四月に下種、豆粥、豆飯、豆酒となすべし、肥地にあしゝ、一年に二度みのる、或曰、再うふるによろしからず、一たびうへて二度みのるものなり、二度子を取るべし、

〔王氏農書二十八穀譜集〕小豆

北方惟用菉豆最多、農家種之亦廣、人俱作豆粥豆飯、或作餌爲炙、或磨爲粉、或作餻材、其味甘而不熱、煩解藥毒、乃濟世之良穀也、南方亦間種之、

〔藥經太素下〕赤小豆　味甘鹹

能消熱毒、研塗癰腫、可排膿、又攻水腫、除消渴脚氣、連之有大効、

菉豆　寒味甘　野大豆類也

炒スコシテ用、除熱氣頭疼目暗、塔爲枕、霍亂將來止吐反、

〔宜禁本草乾五穀〕赤小豆　甘酸平、解小麥毒、久食令人枯燥、〔肥食瘦輕、人食體重〕下水排癰腫膿血、利小便、止泄、下脹滿、水腫從脚起入腹則殺人、多煮爛、取汁服之、〔又濃煎下〕忌魚鮓、令消渴、爲粉、併油衣粘、食葉明目、和鯉煮食、治脚氣大腹水腫、辟溫病、布囊盛置井中三日、出擧家男十枚、女二十枚服之、婦乳難、小豆莽草爲末、醋和傅之、下乳汁、煮汁飲之、

菉豆　甘寒、圓小綠者佳、主丹毒煩熱風疹、和五臟、行十二經、消腫下氣、壓丹毒煩熱、厚腸胃、作枕明目、治頭風頭痛、

白豆　甘平、葉利五臟、下氣、嫩者可作菜、補五臟、益中、助十二經脈、調中暖腸胃、可常食、腎病宜食、殺鬼氣、

小豆產地

〔延喜式大膳三十二〕鎭魂（宮內省、中宮、東宮）

大直神一座　座別（中略）小豆二合八勺、（中略）已上七種（神四座料、雜給料）

雜給料　參議已上人別（中略）小豆二合八勺（中略）五位已上并人、人別（中略）小豆一合五勺（中略）

六位已下二百六十人、人別（中略）小豆六勺、

〔延喜式大膳三十三〕正月最勝王經齋會供養料（中略）僧料日菓菜料（中略）小豆四合（餅料各二合）

仁王經齋會供養料　僧一口別菓菜料（中略）小豆一合六勺（醬料二勺、汁物料四勺、餅料并雜菓子料各三勺、）

〔延喜式主殿三十六〕新嘗祭供奉料（中宮准此）

小豆三升（澡豆料）

〔朝野群載文筆二十一〕典藥寮勘申疱瘡治方事（中略）

傷寒病豆病治方（中略）又小豆粉、和鷄子白、付之、

右依宣旨勘申

天平六　月　日　頭

〔時慶卿記〕慶長八年六月十三日、土用ニ入、赤小豆、大蒜ヲ飲、

〔官中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事

九月

一小豆　織田八百八

〔延喜式民部二十三〕交易雜物

播磨國（中略）小豆三石（中略）美作國（中略）小豆六石（中略）備前國（中略）小豆十九石七斗（中略）備中國（中略）小豆一石六斗（中略）隔三年進、但大豆七石、小豆十六石、備後國（中略）小豆一石七斗（中略）紀伊國（中略）小豆卅石（中略）阿波國（中略）小豆十六石（中略）右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

大角豆

〔朝野群載〕二十七諸國公文 主計寮解　申返抄事
　備前國康徳二年雜米使正六位上行
　年料白米仟佰漆拾伍斛
　大炊寮納○中略
　　小豆拾玖斛漆斗○中略
　　康徳三年十二月廿九日　正六位上行權少屬縣宿禰○以下署名略

〔延喜式〕三十七典藥 諸國進年料雜藥
山城國卅二種○中略 赤小豆四斗六升、

〔毛吹草〕三 近江　納小豆俗ニ是ヲ大納言ト云　美濃　赤豆俗ニ當國ノ赤豆ヲ大納言ト云　丹波　大納言小豆、
　豐後　赤豆

〔雍州府志〕六土産 赤小豆　是亦自近江來者爲良、其色淡黒而帶紫色者、外面不麗、民間謂都盧豪(ホコリタフキ)、其味爲佳、外面色偏赤者、其味不堪用、

〔浪花の風〕赤小豆は名物なれば、素より宜し、赤豆飯に焚、又は強飯に加へても、江戸のさゝぎより大粒にして、且色味ひもよろし、

〔本草和名〕十九米穀 白角豆、一名大角豆、色如牙豆、故以名之、出崔禹、 和名佐々介、

〔倭名類聚抄〕十七稻穀 大角豆　崔禹錫食經云、大角豆一名白角豆、和名佐々介 色如牙角、故以名之、其一殼含數十粒、離離結房、離離讀如佐奈流、見文選、

〔箋注倭名類聚抄〕九稻穀 和名依輔仁、繼體紀有荳角皇女、訓注荳角此云娑佐礙、按荳角疑角荳之誤倒、荳蓋俗豆字、今俗謂呼佐佐伎、○中略 本草和名云、白角豆一名大角豆、色如牙豆、故以名之、出崔禹、此所引即是、牙豆蓋誤、當以此作牙角爲是、按本草綱目有豇豆、云此豆紅色居多、故名豇豆、三四月

種之、一種蔓長丈餘、一種蔓短、其葉俱本大末尖、嫩時可茹、其花有紅白二色、莢有白紅紫赤斑駁數色、長者至二尺、嫩時充菜、老則收子、此豆可菜可果可穀、備用最多、乃豆中之上品、而本草失收何哉、又曰、豇豆開花結莢、必兩兩並垂、豆子微曲、如人腎形、是可以充佐佐介、雖雖見西京賦、蜀都賦、及西征賦、

〔醫心方 三十〕白角豆〈中略〉〈和名佐々介〉

〔類聚名義抄 三角〕豆角ササゲ　〔同 五豆〕大角豆ササゲ　白角豆同

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一さゝげ　おさゝ

〔日本釋名 下菜〕豇豆　竹垣にたかくはひのぼりて、其實は物をさし上たるがごとく、たかくなる故にさゝげと名づく、

〔東雅 十三穀蔬〕豆マメ〈略〉〇中　倭名鈔に本草を引て〈略〉〇中　大角豆一名は白角豆、サヽゲといふと註せしは、サヽは細小也、ゲといひ、キといふは轉語にして、並に角をいふ、角とは即莢をいふ也、日本紀には、豆角讀てサヽゲと云ひけり、〈今俗にはサヽゲといふ〉

〔日本書紀 十七繼體〕元年三月癸酉、納八妃、〈略〉〇中　息長眞手王女曰麻績娘子、生荳角皇女、〈荳角此云娑佐礙〉

〔物類稱呼 三生植〕紅豆さゝげ　九州及上州信州總州にてふらうと云、關西にて十八さゝげと云を、關東にて十六さゝぎといふ、叢に關東にて大角豆の短く生るものをみづらと呼、西國にてはふたなりといふ、

〔倭訓栞 中編九〕さゝげ　日本紀に角荳をよめり、倭名抄には大角豆とみゆ、九州及上州信州にふろうといふ、さしあげの義成べし、實のなるさま、竹垣などにさしあげたり、地さゝげあり、籬に及ばず、十八さゝげは、關東に十六さゝぎといふ、十八豇緑さゝげは裙帶豆也といへり、信濃さゝげ

は、莢大きし、信濃にては唐さゝげといふ、○中略隱元さゝげは家豆也、近江には八升まめ、西國に朝鮮さゝげ、伊勢駿河ににどなりといふ、

〔庖廚備用倭名本草二菽豆〕豇豆　倭名抄ニ豇豆ナシ、多識篇今案ニサヽゲ、考本草、三四月ニ種ヲ下ス、二種アリ、一種ハ蔓ノ長サ一丈餘、一種ハ蔓短シ、其葉二種トモニ、本大ニ末尖ル、嫩キ時食スベシ、其花ハ紅白二色アリ、其ノ莢ハ白紅紫赤斑駁ノ數色アリ、長キハ二尺ニ及ブ帶ノゴトシ、裙帶豆ト名ヅク、嫩トキハ莢トモニ蔬菜ニス、老ヲハ子ヲ取リ收ム、短キハ尺ニ及バズ、戳ト名ヅク、莢ハ食スベカラズ、其子更ニ香味也、飯ニ和シテ甚ヨシ、此豆ハ菜ニシ菓ニシ穀ニスベシ、其用最モ多シ、豆中ノ上品ナリト云云、元升井○向曰、此說ヲミレバ、サヽゲナルコト疑ナシ、倭名抄ニ大角豆ヲサヽゲトヨミテ、崔禹錫ガ食經ヲ引タリ、古今ノ名ノカハリアルニヤ、

〔本朝食鑑穀一〕大角豆

釋名源順曰、崔禹錫食經、大角豆一名白角豆、色如牙角、故以名之、和名散散介、(平野)按、角豆者豇豆也、通俗稱大角豆、

集解、大角豆處處田園種之、三四月下種、有蘺大角豆者、蔓長丈餘、有地大角豆者、蔓短似大豆之高、二尺許、嫩時作茹、上下愛之作和物、或交飯煮食、此稱角豆飯、大抵夏時至秋與茄子、爲蔬中之上品也、

二種俱其葉本大末尖、嫩時作茹食、味亦好、民間最食之、開花有紅白、莢有紅白紫赤綠斑駁雜色、長者至二尺許、

其子老則采子、晒乾煮食、味與赤小豆爲伍、其最佳者號十六角豆、莢長肥、兩端微紅色、而一莢有十六子、子亦肥大如大豆大、味亦甘美、世以賞之、民家多蒔之、一種有一年兩度收者、五六月采初結子者、半爲食用、半則晒乾、至八月種之、則九十月再用之、不惟爲珍、其味亦美、其莢亦柔軟而俱佳、

〔本朝食鑑華和異同二〕豇豆

一名蹲䠀、卽本邦之大角豆也、華亦有長蔓短蔓二種、花有紅白、莢有白紅紫赤斑駁數色、而可菜可果、乃嘗豆中之上品也、

〔大和本草穀四〕豇豆　二種アリ、蔓長キハ菜トシ、蔓短キハ穀トシ果トス、共ニ上品ナリ、蔓長キハ籬ニマトヒノボル、其莢長コト二尺ニ餘ルアリ、又短クシテ一所ニ房ヲナシテ多ク實ノルアリ、蔓長キハ春分ヨリウヘ、六月節マデ植ベシ、六月ニウヘタルハ、八月中旬ニミノリ、九月マデ有之、最珍トス、苗ノ初生スル時、蟲食ヒ絶ツ、筍皮及白及ノ葉、或ハ紙ニテ本ヲ帶ベシ、夏秋ノ菜ノ上品ナリ、毎年地ヲカヘテウフベシ、ツル短キハ實黒ク、大ナル者性味最ヨシ、煮テ飯ニ雜ヘ、或淺茶飯ニ加ヘ食ス、性味共ニ赤小豆ニマサレリ、又醬ニテ煮食ス、或沙糖ヲカケ果トシテ食ス、皆佳シ、本草ニ曰、補腎氣、毎日空心煮入少鹽食之、與諸疾無禁ト云ヘリ、又時珍云、此豆可菜可果可穀、備用最多、乃豆中之上品トイヘリ、長キハ其實下リ垂レ、短キハ上ニサヽゲ、サヽグルヲ以テサヽゲト名ヅケタリ、又環豇豆アリ、其蔓ノ端ニ莢アリ、二莢左右ニ相對シ、兩方ニマガリテ如環、葉モ味モ常ノ豇豆ニ同、是モ短豇豆、蔓ミジカシ、籬ニハフ類ニアラズ、臘月ニ豇豆ヲ蒸テ日ニ乾カシ、多ク貯ヘヲキ用レバ、早ク熟シ久キニ堪フ、隱元豆、豇豆ノ類ナリ、漢名未詳、近年異國ヨリ來ル、又梶原ナサゲト云、皆鄙俗ノ名ヅクル所ナリ、葉ハ赤小豆ニ似テ蔓生ス、莢ハ大豆ヨリ長ク、豇豆ヨリ短ク廣シ、五月ニ早クミノル、又穀レバ一年ニ二度ミノル、菜トシテ煮食スル事、豇豆ニ同ジ、子ノ色白ク、腎ヲスルガ如シ、京都ニテハ眉兒豆ヲ隱元豆ト云、與此別也、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀〕豇豆　サヽゲ（和名鈔）　大角豆（同上）　サヽ（和方書）

藤蔓ノ長ト短ト二種アリ、共ニ春月種ヲ下ス、時珍ノ説ニ、蔓長丈餘、又長者至二尺ト云ハ、十八サヽゲナリ、一名十六サヽゲ（佐渡）十六、（東國）ナガサヽゲ、（南部）ナハサヽゲ、フロウ、（四國）ナガフロウ、（讃州）カキプロ、（同上）モガリ、（遠州）ダラリ、（雲州）漢名裙帶豆、（食物本草）一名十八豇、（常熟縣志）十八粒、（高郵州志）十六粒豆、（丹徒縣志）是ハ莢長シテ一尺餘ニナリ豆多シ、肥タルハ十八粒アリ、故ニ十八サヽゲト云、一種皮紅紫色ニナルハ、救荒本草ノ紫豇豆ナリ、一種三尺サヽゲハ、莢廣ク長サ二三尺ニシテ柔軟ナリ、蹴

州ニテ三尺フロト云、時珍ノ說ニ莢短ト云ハ、ツ。プ。サ。ヽ。ゲ。ナリ、一名サヽゲ、(土州三州)ハタケサヽゲ、アヅキサヽゲ、ミトリサヽゲ、ミサヽゲ、(雲州)イラリコ、モリサヽゲ、(筑前)料理サヽゲ、ハコザキサヽゲ(俱ニ同上)サナリ、(備前)チフロウ、(讃州)漢名戳豇、(時珍食物本草)コレハ莢短クシテ畑中ニ栽ユ、莢短シテ上ニ向フテ生ズ、熟シテ豆ヲ採食フ、紅白黑斑ノ數品アリ、斑ナル者ヲヤ。ツ。コ。サ。ヽ。ゲ。ト云、一名ニンギヤウマサメ、(筑後)ゲンブクマメ、(備前)白豆ニシテ黑斑アル者アリ、赤斑アル者アリ、俱ニ漢名花豇豆、(授時通考)又一種ト。ウ。サ。ヽ。ゲ。ト呼ブアリ、一名インゲンマメ、江戶信濃マメ、(伊州)五月サヽゲ、(和州)甲州フロウ、(雲州)江戶サヽゲ、(播州)江戶フロウ(雲州)銀フロウ、フロウ、マゴマメ、ニドフロウ、(共ニ同上)ニドナリ、(野州)三度サヽゲ、(肥州)チヤウセンサヽゲ、(加州)ナタサヽゲ、(奥州)カマサヽゲ、(丹波)八升マメ、(江州)カヂハラサヽゲ、ギンサヽゲ、(筑前)仙臺サヽゲ、(下総)漢名菜豆、(盛京通志)コレハ苗葉扁豆ニ似テ、早ク莢ヲ結ブ、形扁クシテ長サ三四寸、未ダ熟セザル時、皮ヲ連テ煮食フ、熟スル者ハソノ豆鵲豆ヨリ小ニシテ光澤ナリ、白紅黑十數色アリ、其早ク熟スル者ヲ栽テ再三豆ヲ生ズベシ、故ニ二度フラウ、三度サヽゲノ名アリ、

〔新猿樂記〕三君夫出羽權介田中豐益、偏耕農爲レ業、更無二他計一、(○中略)園畠所レ蒔、麥、大豆、大。角。豆。小。角。豆。粟、黍、稗、蕎麥、胡麻、員盡登熟、

〔延喜式〕(二十三民部)交易雜物

山城國(中略)大角豆六石、(○中略)大和國(中略)大角豆四石、(○中略)右以二正稅一交易進、其運功食並用二正稅一、

〔延喜式〕(三十三大膳)正月最勝王經齋會供養料、(○中略)僧別日菓菜料、(○中略)大角豆、白大豆各一合、

七寺盂蘭盆供養料、(東寺、西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、)寺別餅菜料、(○中略)大角豆一升、

五月五日節料(○中略)大角豆(五位已上一合)

七月廿五日節料(○中略)生大豆大角豆(五位已上二把)

〔東大寺要録 五〕年中節會支度（寛平年中日記）
一七月用
七日節供（中略）、大角豆（代二斛）
〔朝野群載 二十八 諸國功過〕大炊寮
請被前山城守從五位下賀茂朝臣保道任中四箇年取濟納畢事
承德二年（中略）
大角豆六石
康和元二三幷三箇年（各色目同前）
右依官宣納畢如件、
康和五年二月日
正六位上行少屬笠宿禰
正六位上行少允惟宗朝臣
從五位上行頭兼曆博士丹波介賀茂
〔日次紀事 八月〕一日　角豆（仕丁獻角豆）
〔延喜式 三十九 內膳〕耕種園圃
營大角豆一段、種子八升、總單功十三人、耕地一遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理一人、畦上作二人、殖功二人、芸一遍二人、採功三人、
〔農業全書 二 五穀〕豇豆
凡て豇豆と云は、本は籬にはふ蔓さゝげを云と見えたり、畠に種る短きも、形味も皆よく似たれば、同じくさゝげと云なり、豇豆と名付るハ、紅色多き故なりとも云なり、莢かならず二つゞゝ雙び生ず、畑に作る短き豇豆、三月初灰ごゑを少用ひて種べし、肥地ならば糞ハ用ゆべからず、六月

實るを收め其まゝうゆれバ、又八月實る物なり、生長して後、つるのさきをつみ切べし、其まゝをけば蔓みだれ台て、多くみのらず、實をば朝露にもり取べし、日たけてとれば實おつるものなり、是腎の穀なりと云て、性もよく賞翫する物なり、白さゝげ取分よし、又一種霜さゝげとて、六月の末に種て、十月霜をおびて取あり、早き粟跡、又ハ早苗の跡にも蒔と見えたり、所によるべし、〇豇豆には白きあり、青きあり、赤きあり、長短かれこれ品々多し、三月の節より五月の中まで、其間十日十五日を隔て、漸々に種べし、まかれば七八月まで、段々に實る、但餘り早すぐれば、寒に痛み生せず、又生じても生長しがたし、沙地なれば、苗のやはらかなる内、きり虫切てそだちがたし、其根のまはりに、蒼の葉などを置、朝ごとに其葉に虫の食ひたる跡あるを見て、虫を殺すべし、此長豇豆種る地は、冬より溝をたて、それに能こゑ土を入、或はこゑをもうちからし置、右に云時節にうゆべし、間一尺ばかりをきて、三四粒づゝうゆべし、又其間も二寸あまりへだつべし、よく生長して後は二本か三本に定むべし、段々うすきこゑをそゝぐべし、蔓の長さ四尺ばかりの時、さきをとむべし、枝おほく出るを、悉く籬にまとはすべしまとはざれば實ならず、夏の菜の内第一の物なり、家々に欠ずつくるべし、稍手入多し、小民なべて作る物にて、人みなしれる所なれば、くはしくは記さず、（沙地におそく種れば、切虫きりてそだち難し、早く蒔べし、）

〔菜譜下〕豇豆　さゝげを角豆とかくは非也、農政全書、穀雨の後にうふ、（三月中）月令廣義曰、灰にて壅ふに宜し、豇豆はつる長して籬にはふさゝげ也、白あり、紅あり、へり赤きあり、いづれも味同じ、性よし、さや長きは一尺四五寸、二尺にいたる、又みじかくして一ふさに多くなるあり、いづれもさやともに煮て食す、性よし、夏菜の上品なり、民用を助る事、茄子に對す、三月の節より六月の中の初まで、間十日十五日程へだてゝ、漸々にうふべし、甚早ければ寒にいたみて不生、生じても苗長じがたし、又早くうふれば早く枯る、故に追々におそくうふれば、七八月九月の初まで實あり、五

豌豆

六月におそくうへたるは、八九月に實なる、平地よりひきくふかくしてうへ、漸々に糞土を置くべし、地高ければ、水を澆ぎ糞を數に、ながれてとゞまらず、後まで少くばめるが、糞水たまりてよし、灰糞水小便に宜し、苗の時甚好て食す、毎朝ほり去べし、或鮑草の葉を傍に置て、翌朝きりむしの有無を試て、有時は堀去べし、或云、豇豆をうふるに、區を作事方三四尺、あなをほり糞土をみて中を空くし、まはりに圍くうへまはし、蔓を生じて竹をまるく立べし、風にたをれず、蔓長せざる間は、きり虫食しやすし、虫多きには、紙或竹皮しらんの葉を、三寸ばかりに切て、それを以莖をまけば食せず、蔓長じて後末を早くつみ、されば實多し、

〔農業全書菜之類二十六〕豇豆（一名蜂醴、賀心豊生、紅色居多、莢李時珍曰、開花結莢、必兩兩並垂、有習尚之義、子多二、如蜂兒、所謂豆也、宜以此當之、）暖國後種、六月收子、收來便種再生、八月又收子、一年兩熟、

〔玉露叢〕一寛文五年正月ニ、將軍家ノ仰出レ、

一大角豆　右同斷（自〇六月）

〔毛吹草三〕河内　小角豆（廿五ササゲトモ云、四月ニ生ナガラサヤ共ニ、干豆ヲ、餘ハ實ヲ食フ、用ニハサヤ生ノ如ト云、）

〔雍州府志六土產〕角豆　白赤角豆實、日乾而用之、是謂實角豆、在三條南大宮、延喜式載山城國交易雜物、大角豆六石云云、

角豆并刀豆　處々有之、然角豆東河原之產爲佳、刀豆九條邊所種特爲良、

〔倭名類聚抄十七豆〕野豆　本草疏云、豌豆（豌音於丸反）一名野豆、（和名乃良末女）

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕本草和名云、小豆一名苔、類出、豌豆、江豆、野豆、不載出典、按伊呂波字類抄載本草和名云、頭豆、豌豆、江豆、野豆、營豆、以上五名出疏文、則知今本本草和名不載出典者、傳寫脫文蓋源君從本草和名引之、所見本未誤脫也、然頭豆以下皆以類並擧者、故不云一名、源君以野豆爲豌豆一名誤、按廣雅、豍豆豌豆蹓豆也、李時珍曰、豌豆種出西胡、八九月下種、苗生柔弱如蔓、有鬚葉似

蒺藜葉、兩兩相對生、嫩時可食、三四月開小花、如蛾形、淡紫色、結莢寸許、子圓如藥丸、亦似甘草子、王念孫曰、齊民要術引崔寔四民月令云、正月可種春麥豍豆、盡二月止、案今北方人種豌豆、在正月中、與四民月令相符、故北方農人爲之語云、豌豆大麥不出九也、南方人種之、則於八九月、此土地異宜、故遲速不齊也、豌豆枝莖柔弱布地而生、葉間有鬚連卷、然葉形頗圓、兩兩相値、初生時肥嫩可食、南方人多摘以爲蔬、味極美、三四月放小花、四瓣向內者二、向外者二、亦皆相對、花色淡紫可愛、四五月作莢、長寸餘、莢中子皆圓如珠子、煮食之香美、亦可以爲餳、大抵與麥備熟耳、齊民要術云、豍豆大豆類也、豌豆類也、則是分豍豆豌豆爲二、與廣雅異、下總本有和名二字、本草和名豌豆野豆並在赤小豆條、別無和名、今俗呼豌豆字音、按豌豆無野生、恐不得名乃良万女、乃良万女或是陳藏器所謂稽豆也、本草拾遺云、稽豆生田野、小而黑、堪作醬、李時珍曰、此即黑小豆也、小科細粒霜後乃熟、稽乃自生稻也、此豆原是野生、故名、

〔類聚名義抄 五豆〕豍 烏官反、ノラマメ、　豌 正　登 俗　野豆 ノラマメ

〔伊呂波字類抄 能植物〕豌　野豆　豌 又作登　豍 野生豆也　〔同 遠植物附植物具〕豌豆 エントウ

〔多識編 三穀〕豌豆、乃良麻米、異名胡豆、拾遺　戎菽、爾雅

〔和爾雅 六米穀〕豌豆 エンドウ ノラマメ 胡豆、戎菽、回鶻豆、畢豆、青小豆、青斑豆、麻累、云野豆、

〔物類稱呼 三生植〕豌豆ゑんどう　畿内にてのらまめと云、東國にてゑんどうと云、伊勢にてぶんどうと云、上總にてゑんづといふ、

〔庖廚備用倭名本草 二菽豆〕豌豆　倭名抄ニノラマメ、多識篇同ジ、元升（升〇向）曰、今俗ニエンドウト云、考本草、一名胡豆、又胡戎青斑麻累ナド云諸名アリ、八九月ニ種ヲ下ス、其苗柔弱ニシテ蔓ノ如シ、ヒゲアリ、葉ハ蒺藜葉ニ似テ、兩兩相對シ生ズ、嫩キ時ハ食スベシ、三四月ニ小花ヲ開ク、蛾ノ形ノ如シ、淡紫色ナリ、莢ノ長サ一寸バカリ、ミノ圓ナルコト藥丸ノ如シ、胡地ニ出ルモノハ大サ杏仁

ノ如シ、煮テモ炒テモヨシ、磨シテ粉麪ニシテ甚白ク細膩ナリ、百穀ノ中ニ最先登タリ、又野豌豆アリ、粒小ナリ、其苗モ食スベシ、翹搖ト名ヅク、菜部ニミエタリ、

〈和漢三才圖會百三穀〉豌豆　胡豆　戎菽　畢豆　回鶻豆　青小豆　麻累　青斑豆　和名乃良末女○中略

按豌豆花狀如蛾形、外白内有紫淡紫、面中心黑色、其子褐色大如麻仁、六月收取之、不堪煮食、惟炒以爲菓子、味脆美、今人炒用飴、煉作圓餠狀售之、最下品、

白豌豆　大如大豆之小者、正圓而色赤似豆面白色、此乃煮食亦佳、俗曰長崎豌豆、

〈重修本草綱目啓蒙十七穀豆〉豌豆　○ノラマメ和名　○エンドウ京師　○ブンドウ勢州　○ツルブンドウ同上　○エンブ上總　○カキマメ奥州　○シヽクハズ上州○中略

秋月種ヲ下シ、翌年ノ夏ニ至テ熟ス、蔓草ナリ、葉ハ紫藤葉ニ似テ、形圓ク白色ヲ帶ブ、葉頭ゴトニ細鬚アリ、春花ヲ開ク、扁豆花ニ似テ大ナリ、紫色瓶花ニ供スベシ、花後莢ヲ結ブ、其豆ハ黄豆ノ大サニシテ四角黑褐色、加州ノ者ハ至テ小ク、赤小豆ノ如シ、又白花ナルモノアリ、ソノ豆圓ニシテ色白シ、一種豐重ノ豌豆ハ、俗ニテルマメト呼ブ、苗ノ形狀同ジク紫花、豆大ニシテ四角色淺褐ニシテ塵アリ、集解ニ出、胡地者、大如杏仁、ト云者是ナリ、

〈春日正預祐範記〉慶長十年乙巳正月以來御神事次第

四月

一十一日、旬、日並朝夕、○中略　一莞豆御供進之、豆腐ノ所也、

〈宜禁本草乾五穀〉豌豆エンドウ　甘平、隔年種、初夏熟、能發寒病、調順榮衛、益中平氣、可作醬、

〈庖廚備用倭名本草二穀豆〉豌豆○中略　味甘性平毒ナシ、淡煮シテ食スレバ消渇ヲ治シ、吐逆ヲトヾメ、澁ヲトヾメ、痢瀉下利ニモヨシ、榮衛ヲ調ヘ、中ヲマシ、氣ヲ平カニシ、乳汁ヲ下ス、煮テ汁ヲ用テ、鬼毒心病ヲ治シ、乳石毒發ヲ解ス、又外科ノ用多シ、

蠶豆

〔農業全書 二五穀〕豌豆 ゑんどうは、二三月種るとあれども、是も八月まきて、寒中をへて花咲、春に至てはやくもろ〳〵の豆にさきだちて、實のるを賞翫とするなり、又おほくうへをき、春になり其苗をとり、田の糞に用ひて、すぐれてよくきくものなり、ことに苗代のこゑとして、無類のものなり、

〔農政全書 二十六樹藝〕豌豆〈農書作回回豆、唐史作畢豆、崔寔作豍豆、即青豌豆也、田野間禾中、往往有之、俗名小寒者是也、〉務本新書曰、豌豆、二三月種、諸豆之中豌豆最爲耐陳、又收多熟早、如近城郭、摘豆角賣、先可變物、舊時莊農往往獻送此豆、以爲嘗新、蓋一歲之中、貴其先也、又熟時少有人馬傷踐、以此校之、甚宜多種、
玄扈先生曰、豌豆與蠶豆各種、蠶豆之利倍于豌十一、其耐陳則一也、

〔大鏡 七太政大臣道長〕かばかり安穩泰平なる時にはあひなんやとおもふは、おきならがいやしきやどりも、おびひもをときて、かどをだにさゝで、やすらかにのいふしたれば、としもわかく、いのちものびたるぞかし、まづはきたのかたかも、かはらにつくりたる野。。。のまめ。。。さゝげ、うり、なすびといふもの、このなかごろは、さらに術なかりし物をや、

〔多識編 三穀〕蠶豆、曾。良。末。米。異名胡豆、

〔和爾雅 六穀〕蠶豆(ソラマメ)胡豆

〔朱氏談綺 下穀〕蠶豆 ソラマメ

〔日本釋名 下穀〕蠶豆 其實空(ソラ)に向ひてなる物也

〔物類稱呼 三生植〕蠶豆 そらまめ 東國にてそらまめといふ、西國にてたうまめ、出雲にてなつまめ、尾張にてのらまめ、〈同名有、別種なり、是は空豆の轉語にや、〉伊豆駿河にて、五月まめ、相模にてふゆまめ、下總にてゆきわりまめ、伊勢及遠江にてがんまめ、中國にててんぢくまめと云、〈空豆とは、其實の空に向て生る故になづくとかや、〉

〔庖厨備用倭名本草 二菽豆〕蠶豆 倭名抄ニ蠶豆ナシ、多識篇ニソラマメ、元升〇向井 曰、俗ニハナツマ

メト云、舊本草、豆ノ莢ノ形ハ老蠶ノゴトシ、故ニ蠶豆ト云、又蠶カヒスル時始テ熟ス、故ニ蠶豆ト名ブクトモ云、八月ニ種ヲ下シ、多苗ヲ生ズ、蔬ニスベシ、方莖中空ナリ、葉ノ形匙ノ頭ノ如ク、本圓ニシテ末トガリ、面綠ニシテ背白クヤワラカニシテアツシ、一枝ニ三葉アリ、二月ニ花ヲ開ク、蛾形ノゴトシ、紫白色ナリ、其角連綴シテ大豆ノ如シ、眠ル蠶ノ形ニ似タリ、

〔和漢三才圖會 百四 穀 菽豆〕蠶豆　胡豆　俗云曾良末女 ○中略

按蠶豆畿內多種之、和州之產爲良、八月下種、其葉似景天草(ベンケイサウ)嫩葉而硬不可食、三月開花、淡白色二瓣、中有黑點、乃是生莢之本也、瓣似蛾狀、性怖雷乎、花時有霹靂、則不多實、凡其莢向上、故呼曰空豆、每莢黑物副豐、四月取嫩莢豆煮食、五月熟收豆、可炒可煮可鹽、未熟可拌飯食、並得豐味良、但皮厚肉脆、多食則膨脹、此豆中秋下種、中夏收穫、經閏也僅兩月耳、不用多糞培、故既生後、傍多生芽、十月古株卽死、蠶皆成長而生花實、故以爲子孫繁昌草、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 穀 豆〕蠶豆 ○ソラマメ ○ヤマトマメ 和州 ○ナツマメ 雲州、備後、 ○四月マメ 土州、阿州、 ○五月マメ 豆州、越州、 ○アマメ 土州 ○トウマメ 讃州、阿州、 ○フユマメ 相州 ○ユキワリマメ 下總 ○高野マメ 雲州 ○トウノマメ 筑前 ○タンジクマメ 中國 ○ノラマメ 尾州 ○エンドウ 備州 ○ガンマメ 勢州、濃州、 ○中略

秋月種ヲ下シ、翌年ノ夏ニ至テ熟ス、苗高サ三四尺、莖ハ方ニシテ空シ、葉ハ景天(ベンケイサウノ)葉ニ似テ厚シ、四葉一簇、肥タル者ハ六葉トナル、春葉間ニ花ヲ開ク、大ニシテ白色黑點アリ、墨色ノ如シ、後莢ヲ結ブ、直立シテ生ズ、故ニソラマメト呼ブ、形圓ニシテ指ノ如シ、始ハ綠色、熟スルトキハ黑色、其豆豌豆ヨリ大ニ、刀豆(ナタマメ)ヨリ小サシ、未ダ熟セザル者、皮ヲ帶テ煮食ス、熟スル者ハ煮食シ炒食ス、或ハ仁ヲ採テ味噌ニ造ル、一種黑粒ノ者アリ、莢モ黑シ、一種咬𠺕吧(ジャガタラ)ノ產ハ豆小ニシテ、蠶豆ヲ二ツニワリタル大サナリ、葉形ハ同ジ、是救荒本草ニ說所ノ文ニ合ス、

增、一種オホソラ豆。一名オタフク豆ト云ハ、甚肥大ニシテ、濶サ六七分、長サ一寸許、卽西湖志ノ王墳豆ナリ、西湖志云、王墳豆、紫桃軒雜綴、南屏山邵皇親墳左側、有地產蠶豆、顆大而味鮮、杭人呼爲王墳豆、網註云、汪懋麟酒合詩、酒合爭傳段七孃王墳小豆摘新嘗、春殘花事都無了、別有幽芳出院牆、

〔農業全書二五穀〕蚕豆（大和に多く作るゆへ、大和豆とも云、西國にてはたう豆と云、）

そら豆さやの形、かいこに似たるゆへ蚕豆と名付、又は蚕の時分に熟するゆへ、かくは呼とも云なり、百穀に先立て熟し、青き時、莢ながら煮て菓子にもなり、又麥より先に出來るゆへ、飢饉の年取分助となる物なり、又麥と合せ飯にして宜し、又豆ハ多く、麥は少く粉にして、餅に作り、食するもよし、肥たる濕氣地に八月初うへて、臘月厚く培ひ置て、三月中旬にぬきとるべし、又云、蚕豆は大かたの地にハできかぬる物なり、こやしを用る事を忌と云ならはせり、されどもよく熟し、久しくかれたる灰こゑを用るはくるしからず、八月中分に蒔てよしと知べし、種子に二色あり、江戸豆とてふとくひらめなるは味よからず、小粒にして丸きを用ゆべし、味よく取實もおほし、（一說に、大なるが味よしと云、然れば大なるにも二色あるにや、心み考ふべし、）是もいや地を嫌ふ故、年にかへてうゆべし、損毛の年多くうへて飢を救ふべし、麥に先立て實るゆへなり、其利分も又麥に劣らず、畿内にて多く作る、一反に五六石も出來るものなり、取分大和國に多く作る、いりて皮をさり、茶に用ひ、粥にもした・め、又みそに造るなり、又是を菜園の邊、又は花園に花がらをそきながら、其中にうへて霜をふせがせ、三月花の苗生ずる時分、ぬきとるべしといへり、是は濕氣をにくむといひならはせども、水田の稻の跡におほく作ると見えたり、去かれば大かたの濕氣には、さのみいたまず、却てつよくかはきたる所にはよろしからず、是下品のものといへども、農家にかくべからずと云るしをけり、（凡畿内の、土地を大切にする所にて、多く作るを見れば、よく農の助となる物と見えたり、何の國にてもおほく作るべし、）

菜軒云、上方の國々にそら豆を多く蒔事は、其利麥とひとしき故なりと思へり、去かるに去年

より洛陽に寓居し、今丑の春、攝州有馬に往來し、路次にて農人の語を聞て、そら豆を多く作るゆへを志れり、たとへば麥を一町作る農夫ハ、其内二反或は三反餘もそら豆を種る事は、其利麥にまさるゆへにハあらず、凡麥作は種付るこやしより後、段々糞を入る事尤多し、又其地こしらへ、初の耕より度々中うち、草かじめ土おほふにいたるまで、萬に人でまの費ゆる事甚多し、されば其考へをよくする時は、たとへば一町の地を三反はあらして、其人でま其こやしを以て、殘る七反の麥を能作り立たるは、一町を皆作りて、段々の手入あしく、其糞し不足したるよりも、麥を取事却て多し、去ながら何國にても、農人のくせにて、貪りにおほく作りちらし、其手入糞し不足すれば、甚損なる事を聞ても、只半反も多く作るを悦ぶならひなれば、各其麥作の反數をへして、殘る田畠によく功を用ひて、能に利を得る術を勸る事なし、又そら豆は初地ごしらへを少金を入れて種へ糞をちと加たるもよし、其後四月初引取まで、中うちこやし草かじめなども用ひず、(もし草あらば、雨になり、一度をつとひきすつるまでにて、人力ついへず、)さて右七段の麥に、手入をよくして、糞をましぬれば、能こやしの不足なる、一町の麥よりも取實多し、其上そら豆中分に榮たらば、三段に六石有べし、少よく出來たらば、八九石あるべし、然ば麥は多く出來、其こゑ人でまを省き、其上又大分のそら豆を作出し、是を以て米の代とし、麥飯に加れば味よく、或はみそとし、又麥もちのあんに入れ、又所により、なら茶に用ひ、樣々食となりて、利を得る事多し、殊に麥に先立て熟し、農人の仕舞よく、又麥より早くいでくる故、凶年には飢を助くるに便あり、此樣々の德分あるゆへ、能作人は其考をなし、そら豆を多く種て、利を得ること少からずと也、されば諸國にても、此事をよく考へ、そら豆を多く作り、其餘力を取て、麥をよく作り立、兩樣の利を以て、麵米の助となすべし、そら豆は大坂に多し、種子を求むべし、

〔毛吹草三〕大和　空豆

藊豆

〔浪花の風〕そら豆は殊に多し、はじき豆と稱して、夏秋の間殊更に賞翫す、

〔新撰字鏡草〕藊（九巻反、扁豆也、天豆也、阿地万女、）

〔本草和名十九米穀〕藊豆（楊玄操音補典反）一名藤豆（以其黑而間白故也）和名阿知末女、

〔倭名類聚抄十七豆〕藊豆　辨色立成云、藊豆（藊音邊、又比顯反、和名阿知萬女）籬上豆也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕今俗呼藤豆、以其花似藤也、○中略　廣韻、稨、籬上豆也、或作藊、集韻作稨、稨稨藊、新修本草、本草和名作藊、千金翼方、證類本草作藊、與集韻合、古人禾ネ多通作、藊即藊字、此引辨色立成作藊、亦蓋俗字、按說文無稨稨等字、蓋是物莢扁濶、不與他菽同、故有是名、本草陶注云、人家種之於籬援、圖經云、藊豆蔓延而上、大葉細花、花有紫白二色、莢生花下、其實亦有黑白二種、李時珍曰、扁豆二月下種、蔓生延纏、葉大如盃、團而不尖、其花狀如小蛾、有翅尾形、其莢凡十餘樣、或長或團、或如龍爪虎爪、或如猪耳刀鎌、種種不同、皆纍纍成枝、白露後實更繁衍、嫩時可充蔬食茶料、老則收子煮食、子有黑白赤斑四色、按藊豆出本草、源君引辨色立成、載之非是、又依云籬上豆、則或正文脫唐韻云稨四字、其弁色立成云藊豆七字、本是夾行小字、及阿知万米四字共在注末者、誤爲正文也、

〔康賴本草米穀〕藊豆　味甘微溫、主和中、和比良末女、禹錫註有之阿知末女、

〔醫心方一〕藊豆（和名阿知末女）

〔類聚名義抄五豆〕藊豆（アヂマメ）〔同八艸〕藊豆（音邊、又比顯反、アヂマメ、）　藊豆（音扁）

〔多識編三穀〕藊豆、阿知末女、又云比良末米、

〔書言字考節用集六生植〕藊豆（ヘンヅ）（本字扁豆、時珍云、有黑白赤斑四色云々）　藊豆（アヂマメ）　沿籬豆（同、又云蛾眉豆）　藊豆（ヒラマメ）　蛾眉豆（同）

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ○中略　倭名鈔に、○中略　辨色立成を引て、藊豆は籬上豆也、アヂマメと云ふと註せしものは、今俗に呼びてカキマメといふ、カキマメとは即籬豆也、またヒラマメともいふも扁豆也、アヂマメといふ如きは、義不詳、（萬葉集の歌に、アヂと云ひしは鳥也、アヂマメといふは、ツヒマメといふが如く、鳥の名によりて名づけ云ひしも知るべから）

す、或人の說に、其味をほめてかくなづけしにやなどいへども、藏豆の類に、この物の味、殊に勝れしとも云ふべからず、

〔庖厨備用倭名本草〕二藏豆倭豆　倭名鈔ニアヂマメ、多識篇同ジ、又云ヒラマメ、元升曰、西國俗ニハ。シ。ヤ。ウ。マ。メ。ト云八升豆ト書リ、此豆穫ヲヨクサカフ、一粒ウフレバ豆八升ヲトル、故ニ此名ヲ云トイヘリ、又破墻豆トカケリ、此豆墻ノ本ニ植レバ、ヨクシゲリサカヘテ垣ニカヽリ、垣モタハミカタブクバカリニ盛フル故ニ、破墻豆ト名ヲ得タリト云、本草註ヲミレバ破墻豆ナルベシ、

〔大和本草〕九藏白藊豆　其類多シ、黑赤白斑色アリ、藥ニハ白ヲ用ユ、ワカキ時サヤトモニ食ス、實ハ糗トス、肥地ニハ植之不可用養、肥スグレバ實ノラズ、又シゲクウフベカラズ、葉繁茂ス、

眉兒豆　救荒本艸ニ出タリ、近年中華ヨリ來ル、春子ヲウフ、秋ノ末ニイタリ實多シ、花紫ナリ、蔓生ス、ワカキ時莢トモニ食ス、藊豆ノ類ナリ、藊豆ヨリ味ヨシ、京都ニテハ隱元豆ト云、筑紫ニテハ南京豆ト云、葉茲蔓シテ實多シ、シゲク植ベカラズ、且肥過レバ不實、

〔和漢三才圖會〕百四藏豆藊豆　沿籬豆　蛾眉豆　和名阿知萬女、俗云隱元豆、〇中略

按藊豆、本朝自古有而不甚用、承應中黃檗隱元禪師來朝、以後處處多種之、其葉大似紫豇豆葉、嫩葉煮食、六月開花、紫白相交、似藤花而短向上、其長四五寸、每蕚叢如蛾狀、其莢長二三寸、嫩時煮食、軟甘美、老則硬不堪食、收豆爲種、如栗色、或黑色、當耳處正白而大、如黑大豆臍、鹽炒煮不可食、

一種葉花同而莢、有微毛、硬而不可食、俗云加木末女是乃藊豆之種類也、人雖不種、自變成之、亦有、

白扁豆(はくへんづ)〇中略

按白扁豆、卽藊豆之白扁者也、花色亦白、出於日向者良、山州攝州者次之、皆勝於唐藥、

〔食物知新 一 穀〕藊豆 別錄中品

釋名平豆 和名 因形名、此種隱玄禪師持來於此邦、故名隱玄雙下、有白黑蛾眉之三種、

〔長崎夜話草 五〕長崎土物產

八升豆　隱元和尙持來て、種子を南京寺の內にうへおかれしより世に流布す、此故に隱元豆といへり、又南京豆ともいへり、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 豆〕藊豆　アヂマメ 和名鈔　トウマメ 土州　カキマメ 豫州　ヒラマメ　一名雪眉同氣 輟耕錄　白蛾眉豆 本草原始

鵲豆　インゲンマメ　カキマメ 雲州　ツバクラマメ 遠州　カンマメ 同上　ナンキンマメ 筑前　フヂマメ 江戶　八升マメ 勢州　サイマメ 上總　センゴクマメ 勢州白子　インゲンサヽゲ 佐州　トウマメ〇城州眞島 中略

鵲豆ハ春種ヲ下シ、藤蔓甚長シ、葉ハ葛ノ葉ニ似テ小サク毛ナシ、花ニ紫白ノ別アリ、後扁莢ヲ結ブ、未ダ熟セザルトキ、莢ヲ併テ煮食フ、熟スレバ豆圓扁、黑褐色、或ハ茶褐色ニシテ、旁ニ白眉アリ、白花ノ者ハ色潔白ニシテ小黑點アリ、藥用ノ白藊豆ハ、苗葉ノ形狀鵲豆ニ異ナラズ、只莢濶ク內ニ硬殼アリテ、未熟ノ者モ煮食フニ堪ヘズ、豆ハ白キ鵲豆ニ比スレバ、微黃ヲ帶テ、黃大豆ノ色ノ如ク黑點ナシ、

〔物類稱呼 三 生植〕眉兒豆 ゐんげんまめ　京にてゐんげんまめといふ、江戶にてふぢまめと云、西國にてなんきんまめと云、上總にてさいまめと云、伊勢白子にてせんごくまめといふ、

〔三養雜記 三〕藤豆　鈴鹿松塢

京師の人云、江戸にて隱元豆といふものを、かみがたにては藤豆といへり、そはその形狀の藤の實に似たれば、藤豆といふなりといへど、江戸にては藤花に似たる豆なれば、藤豆といへるにて、いづれもそのことわりあり、

〔浪花の風〕江戸にて隱元豆と唱ふるもの、大坂にては江戸豆といふ、至て少し、五六月比僅に見ることあり、浪花にて隱元豆といふものは、江戸にて藤豆といふものなり、是は格別多からず、

〔農業全書 五菜二〕稨豆

扁豆、又たう豆とも云、民俗には入升豆とも云、甚多く實り、一本に入升もなると云ならはせり、又天竺豆近來渡る、南京豆隱元さゝげなど云も、此類なり、扁豆に黑白の二種あり、白きは白扁豆とて、藥種に用る物なり、凡此類甚多し、其中に南京豆極めて味よし、秋の末冬の初、おほく實り、莢ともに、(但莢のふちの筋をとれば、實入て後もよし、)日用の食物に用ひて、益多き物なり、農家多く作るべし、此扁豆の類は、其根さへ肥地によくはびこりぬれば、其つるは民家の軒、屋の上にはひ、或籬には、ませ棚をかまへてまとはせ、又屋敷境の嶮き岩ばな、るかしき片岸の野山、枯たる立木などにもはひひろごり、都て農家無用の地に生長し、みのり多くよろしき物なり、此類の豆うゆる時分の事、三月の節たねを下し、少し土をかけ、灰を以ておほふべし、土をおほくかくべからず、芽立三四寸も出る時、分て植べし、尤糞付にするは猶以て宜し、

〔宜禁本草 乾五穀〕藊豆　味甘、性微溫、(白者溫、黑者冷、)(名鵲豆、一名蛾眉豆、)和中下氣、其莢蒸食甚美、主女子帶下、葉主霍亂吐下不止、傳蛇咬、治穀食痰、云、微寒、治嘔、久食頭不白、

〔萬葉集 二十〕美知乃倍乃、宇萬良能宇禮爾、波保麻米乃、可良麻流伎美乎、波可禮加由加牟、

右一首、天羽郡(上總○)上丁丈部鳥、

刀豆

〔萬葉集略解二十上〕ははまめは還豆也、上にもははつたとよめり、和名抄藊豆(阿知萬女)籬上豆也といふ也、

〔和爾雅(六穀)〕刀豆(ナタマメ)(挾劍豆、刀鞘豆、並同、)

〔書言字考節用集(六生植)〕刀豆(ナタマメ)(本草) 挾劍豆(同西陽雜俎)

〔朱氏談綺(下穀)〕刀豆(ナタマメ)

〔庖厨備用倭名本草(二穀豆)〕刀豆(タウヅ ナタマメ) 倭名抄ニ刀豆ナシ、多識篇ニナタマメ、元升(升〇向井)曰、西國民間ニ又タラワキト云、考本草、一名挾劍豆、莢ノ形ヲ以テ名ヅク、

〔本朝食鑑(一穀)〕刀豆(訓奈多末女、)

釋名(本邦讀刀字訓奈多、或以伐木刀如此豆形者稱奈多、故名此豆歟、古未聞名、)

集解、處々多種之、三月下種、蔓生可引一二丈、葉如大角豆葉、而稍長大、六七月開紫花、亦如豇豆花、結莢長者近尺、略似皂莢、扁面劍脊三稜、色深青、中有扁豆、嫩時連莢鹽漬糟藏、以作香物、其餘不耐用也、

〔大和本草(四穀)〕刀豆(ナタ) 本草約言曰、可入醬用之、其莢ワカク軟ナル時、皮トモニ煮テ食シ、又熱湯ニユビキテ鹽ニツケ、後日ニ味醬ニツケテ菹トス、其性味良、然レドモ實ノ既熟シタルハ、味好トイヘドモ、食スレバ甚氣ヲ塞ギ傷人、或食之シテ死スルコトナリ、不可食、燒タルハ最害人、一種花白キアリ、實ハ小ナリ、

〔和漢三才圖會(百四菽豆)〕刀豆 挾劍豆(俗云奈太末女〇中略)

按刀豆伐薪刀稱奈太、此豆莢形似之、故名、相傳曰、刀豆能治初發癰疔、以子燒末傳之、服亦可、又連莢煮食、有背腥氣、人不爲美、漬糠糟爲香物、

〔重修本草綱目啓蒙(十七菽豆)〕刀豆 ナタマメ タチハキ(四國九州) タテワキ(土州〇中略)

葉豇豆ヨリ大ニ、花モ亦大ニシテ紫色、莢ノ形長大ニシテ藥刀ノ如シ、未熟ノ者ハ莢ヲ連ネテ煮

食フ、汝南圃史ニ、凡豆俱食子、唯豇豆與刀豆連莢食、而刀豆味全在莢ト云、熟スレバ豆長サ八九分、淡紅色ニシテ光リアリ、一種白花ノ者ハ、豆モ亦白シ、シロナタマメト呼ブ、

〔農業全書 五菜二〕刀豆 なた豆是を刀豆と名付る事は、劒の形に似たる故なり、三月初うへ、灰にておほひ、古き籠ざれ、其外何にても此類のくさり物など覆をくべし、又種やう、冬より穴をほり、こゑ土を入置、春になりて一粒づゝ、目の方を下になしてうへ、少土をかけ、灰にておほひ、土おほくかけず、其上にふるきざうりの類、何にてもかるきものをおほひ置、五七日の後は去てよし、めだち出、根葉少生ずるを見て、糞水をそゝぎ、つる長くなるを待て竹を立、是にまとはせ、又蔓をゆひ、かきには、するもよし、風にうごかぬ様につよくすべし、うごけばおほく實ならず、是又肥地に糞を多く用ゆれば、過分に實なる物なり、但かきに種るには、其間を近くうゆべからず、

〔本朝食鑑 穀部一〕刀豆 八升豆〈此亦藜豆也、三月下種生蔓、其葉如紅豆葉、似鵲豆葉而尖、六七月開花、成簇、紫色、狀如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白毛、老則黑而有斑點、其子大如刀豆子、淡紫色有斑點、民間食之、味不佳、氣味甘微毒苦溫、有小毒、主治未詳、〉

〔農政全書 二十六樹藝〕藜豆〈古名貍豆、又名虎豆、其子有點、如虎貍之斑、故名、爾雅所謂攝虎櫐也、三月下種蔓生、江南多炒食之、〉

〔物類稱呼 生植三〕藜豆 ゐんげんさゝげ　近江にてはつしやうまめと云、關西にてふぢまめといふ、西國にててうせんさゝげと云、勢州白子にてなたまめといふ、〈同名有、混ずべからず、〉伊勢駿河にてにどなりと云、奧之南部にてさゝげと云、〈此所にていふ十六さゝげは別也、〉下總佐倉にてせんだいさゝげといふ、東上總にて二度十六といふ、

〔大和本草 四穀〕藜豆　又名貍豆　棠本草蔓如葛、子如皂莢子、作貍首文、莢有毛刺、六七月開花、成簇紫色、狀如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白茸毛、老則黑而露筋、國俗天竺豆藤豆ナド云

類猶多シ、皆黎豆ノ類ナリ、其實ニ貍首ノ文アルモ有之、何レモ莢ワカク柔ナル時煮食フベシ、實熟シタルハ氣ヲ塞グ、性不好、

〔和漢三才圖會 百四 菽豆〕黎豆　貍豆　虎豆 俗云入丈豆

本綱、黎豆三月下種生蔓、其葉如豇豆葉、但文理偏斜、六七月開花、成簇紫色、狀如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白茸毛、老則黑而露筋、宛如虎貍指爪之狀、其子大如刀豆子、淡紫色有斑點、如貍文、煮去黑汁、同猪鷄肉再煮、食味乃佳、

氣味 甘微苦溫 有小毒　溫中益氣 多食令人悶

按黎豆秋采其子、入鋼羹中煮食、有斑點而美、故賞之、蓋初得種於八丈島乎、未詳、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 菽豆〕黎豆　八升マメ　ハセウマメ 肥前　十里マメ　八里半　クヅマメ

ナンヂクマメ　フヂマメ　センゴクマメ 尾州　ナルコマメ 豫州　シヤクジヤウマメ 播州 ○中

略

葉刀豆ヨリ大ニシテ、花深紫色美シ、穗ヲ成テ生ズ、莢ハ蠶豆ノ莢ニ似テ、大ニシテ毛アリ、熟スル時ハ、黑色ニシテ筋見ル、豆ハ蠶豆ヨリ大ニ、刀豆ヨリ小シ、白色ニシテ灰斑、或ハ灰色ニシテ黑斑、數品アリ、

落花生

〔和爾雅 七 菜蔬〕落花生 ラククワセイ 出于本草約言

〔書言字考節用集 六 生植〕落花生 ラククワセウ 草名

〔大和本草 四 穀〕落花生　典籍便覽云、藤蔓莖葉似扁豆、開花落地、一花就地結一菓、大如桃、深秋取食、味甘美、人共貴之、今案ニ、本草約言、東垣食物本艸等、諸書ニ出タリ、本艸綱目不載之、豆ノ類ナリ、長崎ニ多ク種之、

〔遠碧軒記 下 生植〕落花生と云ものあなたより渡る、松の子の類なり、相傳この花の露が地へ落て、そ

葛名稱

の處へ此實なると云傳ふ、日本にて種てもはゆるなり、近來渡る、博愛心鑑に有りと云、

〔塵尻七十一〕落花生ハ藤蔓堅莢、一莢豆に似たり、其花落地、一果土中結、其味甘美常に異なり、人珍貴とす、東垣食物本草三に見ゆ、山慈と同類なるよしなれば、元より毒なく補虚の物にて侍ると覺へ侍る、是豆の類なり、

地錦抄に、其植やうなんど委しく記せり、蘇りても蒸してもよし、此頃唐土よりも多く來り、亦我國にても種まきて實をとる、

〔本朝世事談綺二生植〕落花生

元祿のすへにわたる、典籍便覽に云、藤の蔓藍扁豆に似て、花則地に落、一花地に就て一菓を結ぶ、大さ繭のごとし深秋取、味甘美也、人甚美貴す、

〔草木育種下〕落花生(典籍便覽)　香芋(同上)とも云、和名とうまめ、又長崎にてなんきんまめといふ、紀伊國にて多作、野土黒ぼくに砂まぢりの山畑にて、陽地へ植べし、冬中畑へ灰人糞をませ耕置、別に代を拵、落花生の莢を剝て、豆ばかり淺く植、葉を生じて畑へ移べし、相應の地なれば、畑へ直に蒔付てよし、植たる園へ稼穣を切ませ埋たるがよし、葉の間より根を下し、土中に入て莢を結ゆへ、土ハ柔なるがよし、十月根邊を遠ほりて採べし、水にてよく洗、二日程乾、紙袋に入て、風のあたる所へさげ置、炒て食し、又挽て粉にして、餅などにかけ食へバ香く味よし、脾胃を補効あり、

〔桃源遺事下〕西山公(德川光圀)むかしゟ禽獸草木の類までも日本になきものをば、唐土より御取寄被成、又日本の中にても其國に有て此國になきものをバ、其國ゟ此國へ御うつしなされ候、覺し召末に記す、　草之類(中略)○　落花生、

〔本草和名八草〕葛根一名葛穀(蘇敬注云、是鄙實耳、)一名鷄齊根、一名鹿藿、一名黄斤、一名葛脰、(蘇敬注云、根入土五六寸已上者也、脰頸也、仁諝音豆、)○黄葛根一名〓羅、(出三隱性、雜要訣、)一名〓、一名播亦(朱字、無數)已上出三思豆訣、和名久須乃禰、

〔倭名類聚抄二十葛〕葛　蘇敬本草注云、葛穀一名鹿豆、葛音割、和名久須加豆良乃美、葛實名也、葛脰音豆、和名久須加豆良乃禰、葛根入地五六寸名也、

〔箋注倭名類聚抄十葛〕證類本草草部中品葛根條引云、葛穀即是實爾、無鹿豆之名、本草和名亦不載是名、按本草葛根條、有一名鹿藿之名、而草部下品別有鹿藿、陶隱居云、方藥不復用、人亦罕識、葛根之苗、又一名鹿藿、唐本注云、此草所在有之、苗似豌豆、有蔓而長大、人取以爲菜、亦微有豆氣、名爲鹿豆也、是葛根苗之鹿藿、與下品之鹿藿同名異物、故陶於下品鹿藿條云、葛根苗又一名鹿藿、以示二物同名而其實不同也、輔仁誤解陶注、謂下品鹿藿即是葛根苗之一名、訓爲久須加都良乃波衣、源君襲其誤、以葛根苗之鹿藿、下品之鹿藿爲一物、故以下品鹿藿之一名鹿豆、爲葛根苗鹿藿之一名、然鹿豆不宜以名苗、故亦改爲葛穀之一名也、○中略本草和名云、葛根久須乃禰、圖經曰、春生苗、引藤蔓長一二丈、紫色、葉頗似楸葉而青、七月著花、似豌豆花、不結實、根形如手臂、紫黑色、今人多以作粉、食之甚益人、○中略證類本草引云、其根入土五六寸已上者名葛脰、本草和名引作根入土五六寸者也、下總本無葛根之葛字、似是、

〔下學集下草木〕葛クズ

〔和爾雅七草木〕葛クズ一名鹿藿　葛粉カツフンクズノコ　葛根カツコンクズノネ

〔南留別志三〕一葛、くず、かづら、かど、いふ、皆音なるべし、

〔段注說文解字一下〕葛、絺綌艸也、周南、葛之覃兮、爲絺爲綌、从艸曷聲、古達切、十五部、蔓、葛屬也、此專謂葛屬、則知滋蔓字、古祇作曼、正如延字多作莚、从艸曼聲、無販切、十四部、

〔東雅十五草卉〕葛クズカツラ　倭名鈔に蘇敬本草註を引て、葛穀一名鹿豆、クズカツラノミ、葛脰はクヅカツラノ子といふと註したり、クズの義不詳、凡そ蔓生の物をカツラと云ひ、ツヾラといふ如きも又不詳、カツラとは、古語に頭の上の飾にカといふ事あり、ツラとはツルといふ詞也、ツルとは即蔓也、万葉集抄に、ツヾラとはツヾタといふ詞也、ツヾラといふもツ

葛利用

ヽク義也と見えたり、さらばタルといふも、ツラといふも、ツヽラといふも、皆にツヽクといふの義なり、舊事、古事、日本紀等に伊弉諾神の黒鬘のエビカヅラと化りしといふ事見えたれば、葛をカヅラといふも、是等の縁にやありけむ、さらば其カといふはカミの略也、カミは頭髪也、また葛讀てカヅラと云ひしは古訓と見えたり、日本紀に神武天皇葛網を結びて土蜘蛛を殺し給ひしなどいふが如き、葛の字讀てカヅラといひしなり、亦讀てタズといふは細滑の義にて、其種を綱となして戦ふに依りて此名ありしと見えたり、

〔新撰字鏡 草〕蔦 加豆良

〔日本釋名 下草〕葛 かづらはながつる也、上略なり、るとらと通ず、

〔倭訓栞 前編 六加〕かづら 蔓をよむも義に同じ、たかつらの類也、葛も蔓の義なり、くずかづら、ふぢかづら同じ、

〔萬葉集 三雑歌〕登神岳山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

三諸乃、神名備山爾、〇中略 玉葛、絶事無、在管裳、不止將通、〇下略

〔冠辭考 五多〕たま葛 たゆることなく

万葉巻三に玉葛絶事無在管裳云云、こは蔓の長くはひひろごる物なれば、たえぬとも長きといへり、玉とは是も子ある物なればいふ、

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕玉蔓

按玉蔓其蔓引、地葉似忍多葉而厚、春開小花、色青綠可愛、

〔圓珠庵雜記〕もろかづらにふたつあり、新古今に、みればまづいとゞ涙ぞもろかづらいかにちぎりてかけはなれけむ、これは祭の日、桂にあふひをかけたるをいへり、後撰に、あしびきの山にあふてふもろかづらもろともにこそいらまほしけれ、六帖に、神つ代のいがきにはへるもろかづらこなたかなたにかけてこそ見れ、これらははひあへる葛をいへるなるべし、

(頭書)眞淵云、はひあへる故にもろかづらといふともきこえず、さる名のかづらひとつあるにや、

〔宜禁本草 乾玉〕葛粉 甘大寒 佩年以代粮

壓丹石、去煩熱、利大小便、止渴、治小兒壯熱嘔吐驚癇、解鴆毒、

〔本朝食鑑三 菜部〕葛（訓久須）

集解、葛有野生、有家種、其蔓延長、取收可作布袴、其葉有三尖、似斯手栢而長、面青背淡、至秋自枝端次第葉巳黃凋、故歌人賞之、詠其末枯葛葉（ウラカレノクズ）及葛葉色變、以諷人之變約也、其花成穗、纍纍相綴、黃白色或紅紫色、入藥用、其莢如小黃豆莢、亦有毛、其子綠色扁、扁如小梅核、生啖有腥氣、此卽葛穀也、其根外紫內白、長者二八尺、根頭入土五六寸以上、名葛脰而不用、入土五六寸以下卽葛根也、晒乾入藥用、秋末冬初采、生葛根搗爛、入水中揉出、取粉晒乾、其粉入沸湯中、久作餅狀、色如膠、或煉粉作餅、而蒸熟亦好、或作麪切、入沸湯、作凍子、又入水中、和蔓汁、合胡桃肉薑芥砂糖食、此曰葛切、或號水線、凡葛粉處處多出、就中以和州吉野之產、爲第一、色白如雪、紀泉河州次之、郡守貢獻之、民間以貨于四方、

葛粉、氣味甘平無毒、主治除熱、祛煩、開胃止渴、利便、解酒毒及諸毒、卽是足陽明經藥、象入脾經、餘詳于綱目、

〔和漢三才圖會九十六 蔓草〕葛（音割）　雞齊　鹿藿　黃斤（鹿食九草、此其一也、故名鹿藿、和名久須加豆良、○中略）

按葛蔓長者二三丈、其葉軟薄微似于楮葉、而面青背白、至風能飜、恰如反掌、婆娑而作聲、故稱歌人葛葉裏見、譬人俁、其蔓青黑色、有微毛、强韌不可截斷、本草綱目謂紫色者、乃枯舊色也、以堪縛器物、

葛根出於和州金剛山者良、丹波次之、葛粉吉野澡葛爲最上、西國亦多有之、春月取根搗爛、漬水一宿、以白堊爲上、其次灰白色者（名布人）野人充食、滓如絲瓜皮、以代薪、凡此物葉及蔓至根、其用居多、大爲民利用、

〔重修本草綱目啓蒙十四 蔓草〕葛　クズ　マクズ（古歌）　クゾ（南部）　カプ子（筑前）　イノコノツカ子（備後）

一名　走根梅（草譜）　鷄葛（鎮江府志）　葛藤根（集性方）　土瓜（鄭樵正音）　絺綌草（本草原始）

山野俱ニ多ク自生アリテ甚ダ繁延ス、唐山ニハ家園ニモ栽ユ、コレヲ家葛ト云フ、故ニ野生ノ者

ヲ野葛ト云、又毒草ニ野葛アリ、別物ナリ、混ズベカラズ、是ハ冶葛ト音相同ジ、ヤタウルシノコトナリ、鉤吻ノ釋名ノ註ニ詳ナリ、本邦ニハ葛ヲ家圃ニ栽ユルコトナシ、皆山野ノ者ヲ採ル、其葉互生ス、圓尖ナル三葉一蒂ニシテ、眉兒豆葉ニ似テ大ナリ、梢葉ハ毎葉三尖ニシテ小豆葉ノ形ノ如シ、蔓ト共ニ褐毛多シ、肥タル者ハ葉大サ尺ニ過グ、和州芳野山ノ產別シテ肥大ナリ、七月梢葉ノ間ニ花穗ヲ出ス、長サ三五寸下垂ス、花ハ豆ノ花ニ似テ紫赤色、上代ハ名花ナク、此花ヲモ賞セシニヤ、萬葉集秋七種ノ歌ニアリ、花後莢ヲ結ブ、扁豆ノ莢ニ似テ狹薄褐毛多シ、江州水口及高宮邊ニテ蔓ヲ採リ、水ニ漬シ皮ヲ去リ織テ器トナス、クヅゴウリト云、根ヲスリシボリ水飛シテ葛粉トス、城州ニテハ和州ノ芳野葛ヲ上品トス、甚潔白ナリ、然レドモ近年僞雜多シ、若州ノ熊川、及他州ノ產ハ色潔白ナラザレドモ僞雜ナシ、葛粉ヲ和方書ニ水粉ト云フ、唐山ニテ水粉ト云フハ、鉛粉ノ一名ニシテ京オシロヒナリ、

葛根藥舖ニ生乾トナラシト二品アリ、ナラシハ白色ニシテ粉ヲ帶ブ、生乾ハ黃褐色藥用ニ入ベシ、唐山ニテハ生葛ヲモ用ユ、故ニ乾葛ト云フテ分ツ、

〔製葛錄〕葛生育する土地の事

葛ハ寒國暖國のへだてなく、山野に限らず、何れの所にも生ずといへども、平らかなる野の堅實の地なるハ、根瘦て、粉を得る事少し、又樹木の茂れる中なるは、根肥たれども粉少し、何國にもあれ、黑土又ハ狐色にて輕き土の堅き墓地ハ、粉至て少く色も勝からず、又陰地ハ根細く粉も少し、陽地ハ根もよく粉も多しと知べし、只樹木の稀なる山の半腹、又ハ東南を請て日あたりよき谷間の岩石に纏て生たる根宜し、夫ハ小さきも粉多し、譬へバ木山平原の地たりとも、土性少しかろく石の多き土地にてハ、根よく粉多し、砂ばかりの地の土肉のなきハ生育せず、總て暖國より寒國の葛よろし、

遠州邊にてハ葛粉を製せず、五月のころ蔓をとり、蒸して苧となし、緊て布に織のみなり、則掛川の產物にて葛布を商ふ家多し、總て布に織にハ、何れの地に生じたるも高下なく、只績きて長きをよしとす、

堀る節

葛根を堀には、冬十月葉の黄みたる時より堀始め、春正二月頃、葉の出る迄を節として堀事也、山家の農家は、麥を蒔仕廻て後、春迄の稼とする也、

葛根を堀事

、爰に用する道具は○（竹のおふこ、つるのはし、鎌、金鐵茶臼、唐鍬、）を持山に入、蔓をよく見極めて堀るに習ひあり、然れども至て見分がたきもの也、雌葛雄葛績葛（なれば葛といふは、大和の土人付たる名なり、）と三通りあり、雌葛は實あれども、績葛には粉なし、兩手にて蔓を折みれば、女男は潤あり、是根太く葛粉あり、潤ひうすきは、根も瘦て粉少しと知べし、堀には根を鎌にて切か、ざるやうに、脇より土をかきのけて堀べし、又堀に心得あり、葛根の蔓付の所より太きは粉なし、細く自然に中太くあるは粉あり、又粉のなき根のつる續に、粉のある根有もの也、又根に少し鎌を入て見れば、粉のあるは白き乳汁のごときもの出る也、粉なきは出ず、深山谷間抔にて堀時は、かまひなけれども、若堀所の下は、往還か住家にてもある處にて堀に、其根のさし入たる上に、大きなる石などあるは、多く其石を堀起して外へこかし、根を堀取事あり、其石を心なくこかし落す時は、往來をふさぎ人家をそこなふ事あり、其折には石の入べき程の穴を堀りて、其穴の中へ石をこかし入べし、葛は農家の夫食、又ハ飢饉の時、專ら堀ものなれば、九州にては其處により、人の持山他村の野山たりとも、葛を堀にはとがむる者なし、又堀たる跡は其儘にて、少々畑中に石を堀いるれども、作物に害なければ咎る事なし、淳朴の風俗尊ぶべし、中國畿內邊にては、他領他村に入て堀事を禁ずるよし、其國處にて定法あるべ

し、〇中略

堀取たる跡にて、葛根の蔓付に、根貳三寸程づゝ付其跡へ殘し植置ば、又三年目には元の大きさの根に成長するものなり、此三年目のものを第一よろしきものとす（幾年立たる根にても、葛粉は同じ事也、根の太きは味下位なるものあり、大き成根正味多し、又伊豆の深山にては、五寸廻りぐらゐなる根あるよしきけり、是は上古より堀たる事なければ、定て人身位の根あるべし、）葛の蔓は無害（一名甘蔓、一名葛藟いゝし、又りうきうい　も、九州にてはたういいもと云處あり、）同様にて、根に近き方の蔓の節を二ふし込て切、少し濕氣の土に蔓の節をさし置ば、節より根を生じて追々下へさし入、三四年目には堀取やうに成ものなり、

又葛の實をとり蒔て、苗を拵へ植るも佳なり、先苗床をこしらへ、糞水を打乾かし置、鍬にて土を和らげ實を蒔、上より砂土をふりかけ置ば、追々芽を出し、一寸位に伸出たるを、よく見れば二葉あり、又一葉あり、一葉は雄、二葉は雌と見分るなり、最早一尺にも伸ては雌雄甚見分がたし雌の方實多し、

根を堀らざる所にても、草ある處の野山には蔓を植置、其葉を刈て牛馬の飼とするなり、好て喰ふ事大豆の葉に同じ、又肥しにもなり、山人は葉を木の葉に交てきざみ、干て煙草のかはりに呑事とぞ、蔓は刈て葛布に製し、心はさらして葛籠とす、誠に少しもすたれる事なく、可尊有益のもの也、

〔日本山海名產圖會　二〕葛　葛穀　一名鹿豆

蔓草なり、根を食、是を葛根といふ、粉とするを葛粉といふ、吉野より出すもの上品とす、今は紀州に六郎大夫といふを賞す、もつとも佳味なり、是全く他物を加わへざるゆへなるべし、〇中略蔓は水に浸し皮を去り綴連ねて器とし、是を葛籠といひて水口に製するもの是なり、葛籠は蔓をつらねたるの名なり、葛布は蔓を煮て苧のごとく裂紡績て織なり、詩經に絺綌と云は、絺は細糸、綌

は太き糸にて、古中華に織もの、今の越後縮のごときもありと見へたり、クズと云は細屑の儀にて、水粉につきての名にして、草の本名は葛なり、フヂは即藤なり、古製是をもつて藤とす、故に號、喪服を葛衣といふは葛布なればなり、

【製葛錄】葛製法

前日堀かへりたる根を、其夜か又ハ翌日に製すべし、幾日も置べからず、先土をよくこそげ落すべし、水にて洗へば正味減ずるとて、洗はざる所あり、又洗ふ所もあり、扨面の平かなる石を其家の庭にすゑ置、其上に、根をのせ、家内三人あらば三人打寄、槌をもて扣きひしぐ事懸にして、扣終りて桶の中にいれ、又水を入、手にてもめば、水は灰色となり、根は苧すさの如き筋と成也、是を絞りあげて、灰色に濁りたる水を篩國東にてはざるといふ、州にてはそうけといふ、九にて漉て、外の桶にいれ、篩に残りたる筋の切々と、皮の落たるは取捨、しばらく置ば桶の底に砂たまる也、上の濁り水を別の桶に入、砂ハとり除け、別の桶のふちに竹簀を置木綿袋をのせ、其中に濁り水をくみ込、口をしつかりとくゝり、豆腐を絞る如くして絞れば、濁り水は桶に落、精は袋に残るなり、

袋の中に残りたる細かなる精と、初め取除きたるすさの如き筋と日に干置、荒きすさの如くなるは、竈の下の焚付となし、細かなるは目のあらき水嚢にて通し、飯を焚に煮あがりたる時、少し宛入て焚あげ交れば、黒き色の飯と成也、尤壹合入れば米貳合にもありて、糧と成もの也、此精を九州にてはカンニイと云り、又は貯へ置て、飢饉の手當にもなし、或は麥の粉米の粉の團子の中に交てもよし、

扨右の濁り水を又袋に入て、別の桶に絞り込歟、目の細かなる水嚢にて漉し込て、少しも精なきやうにして、半日も置て見れば、上水澄居るなり、此澄たる水だけ桶をかたむけ水をすため、すたむとも、すたむるとも、はへるともいふなり、又水を入棒をもてまぜ、如此する事凡三四度にして、夫より一日も置て、又上

水を鍋にすたむれば、葛は白く下にをり溜りて、どろ〳〵位になりたるを、別の桶に靜にうつせば、下に黒き葛居り溜る也、是は別にのけ置、白き分に又水を入かきまぜ、一晝夜半も置ば、葛計り下に堅く付、上水澄てうきたるを、したみ取ば、上面に少し濁りたる垢付也、是は布巾にてふき取、庖丁をもて●此ごとく切目をいれ起しとれば、下面へ取殘しの黒葛付居るをけづり取除、白き分を麹蓋のやうなるものに入、干乾かすべし、此時若庖丁にて起すに、ゆるく水氣あらば、半日又は一日置ば、水は上に浮堅くなる也、急に干んと思ふ時は、釜の下の灰を庭に盛立程よく散し、少し中窪にして、其處へ桶なる葛をうつしあくれば、（此時取殘りの黒葛、底にあるをよくとりわくべし。）水氣は灰に吸込み、葛は堅く成也、是を取上れば、灰と葛とは少しも付ず、葛計きれいにとれる也、是を手にて細かに欠とりて、麹蓋のやうなるものに並べ干乾かすべし、此干揚たるが則灰葛粉なり、

扠除き置たる黒葛は、灰葛同樣に、灰にて乾かし、干揚て貯てよし、多くは其時々生にて蕨餅のごとくかためて、厚二分位に切て、蕎麪に付、又は醬油味噌抔付て、夕飯のかはりに食するなり、

一日の堀分にて変ものをすれば、三四人一度に食する程はあるもの也、又は豆の粉砂糖などまぶし喰すれば、白葛にて拵へたるより、香氣ありて美味也、併、少し土くさき氣味あり、

又大和吉野郡にての製法は、山より堀來る葛根を水にて洗ひ、にぎりこぶし位に切て、碓にて踏くだき、桶に入、水を入て手にてもみ、糟をすて濁水を袋に入絞り、又一へん袋にて漉し、能ませて二時も置ば、上水すみて葛は下へ着を、桶の横に此ごとく栓をつけ置、呑口をぬけば水は出て、下に着たる葛ばかり殘る也、夫を一日置ば、ます〳〵葛は堅く桶の底に着、上に又水の浮たるをしたみ靈し、葛を庖丁にて起し、下面に着し黒葛の分を削取、白き計を又桶に入、水をいれてかきまぜ、半日又は一日置ては、栓をぬき上水を捨、又水を入かきまぜて、元の如く都合三度すれば、葛の色白く上品に成也、然して三度目には一日半も置、水をよくすためきり、葛を庖丁にて起し、

手にて程よくわりて麴蓋に置て手乾かす也、

初め削げ除たる黒葛は、又水を入とかして暫置ば、桶の底に砂たまる也、是を又別の桶に入、砂をよく除きさりて一日置ば、底に葛はたまり、水は上に浮をよくしたみ盡し、堅く成たるを庖丁にて起し、白葛同様に干て、貯おく事もあり、多く其日々々食する事也、

葛の性に國所土地又は寒暖によりて、强きあり、弱きあり、大坂紀州邊にて晒葛とするには、强弱を調合して晒し、諸國に商ふ、又京大坂にては、麩をとりたる跡のジンといふものを、扇の地紙に引粉とす、色白き事晒葛に似たれば、水干して鹽氣をとり、晒葛と號し商ふ、尤見分がたし、白粉に交るものは、吉野葛にかぎれりと聞けり、是は性弱きがゆゑ也、弱ハのびよし、藥に用ふる葛根は寒中に掘たるうち、實入よくすべの宜きを、長さ壹尺五寸、厚八分又は壹寸位、堅わりにして日に干、和藥屋へ商ふ、又ハ葛根湯等にもちふるやうに、細かに刻て出す事もあり、

○中略

晒葛の仕法

右に記す所の灰葛を、酒造家に用ふる位の半切桶に三斗入、淸水を汲入、棒をもてかきまぜ、能くとかして水嚢にて漉し塵を去り、其儘に覆ひをして半日も置ば、葛は下に沈み著、水は上に浮なり、此水をかたむけ捨、又元の如く水を入かきまぜ、二日程も置て上水をすため、底なる葛の堅くなりたるを、前條にも云如く、泥漫をもて起し、下面に著たる黒き砂まじりのものをけづり取り、白きばかりを、又水にかきまぜ、木綿の袋にて漉て一日程置、上水をすたみ、又水を仕かへ、如此する事數篇にして、十四五日も過れば、葛存分に白く成る、其れを度として、能々水をすたみすて、泥漫をもて始の如くつき起し、手にて程よくわり、麴蓋に入、干乾かせば、晒葛と成る也、尤是ハ田舍にてのさらし法也、大坂紀州邊の晒屋にてさらすは、又格別道具も揃ひ、日數早くあがる術ある

べし、晒場ハ家の外に、屋根ばかりの小屋を建て晒べし、扨初め起したる葛の下面の方、壹分ばかりも土氣まじれば、是を削てとり置たる分は、又水を入攪交て暫見合、上の白水を別の半切に靜にすため取、底に殘りたる砂ハ捨べし、白水の分も水を仕替て、跡より仕込分に入込て用ふべし、

凡晒揚たる葛粉、壹斗にて四五合のわりには減するなり、

晒場には寒中を最上とす、然れども九月より翌三月迄は宜し、水暖になりては惡し、

〔延喜式（三十七典藥）〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、（○中略）葛根卅二斤、　伊勢國五十種、（○中略）葛根十斤、　安房國十八種、（○中略）葛花旋覆花各一斤、（○下略）

〔寛政四年武鑑〕水戸少將治保　時獻上（寒中）葛粉

松平越後守康致（○美作津山）　時獻上（十月）葛粉

細川興松立之（○肥後宇土）　時獻上（寒中）葛粉

〔日本書紀（三神武）〕己未年二月、高尾張邑有土蜘蛛、其爲人也、身短而手足長、與侏儒相類、皇軍結葛網而掩襲殺之、因改號其邑曰葛城、

〔播磨風土記（宍禾郡）〕御方里、（土上下）所以號御形者、葦原志許乎命與天日槍命、到於黑土志爾嵩、各以黑葛三條著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛一條、落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村、故曰三條、天日槍命之黑葛、皆落於但馬國、故占但馬伊都志地而居之、

〔出雲風土記（意宇郡）〕所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、（○中略）童女胸鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三身之綱打挂而、霜黑葛闇々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米支豆支乃御埼也、（○中略）

凡諸山野所在草木、（○中略）葛根、

〔日本靈異記中〕力女捔力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片縣郡少川市有一力女、爲人大也、名爲三野狐、○中略時尾張國愛智郡片輪里有一力女、爲人少也、是昔有元興寺道場法師之孫也、其聞三野狐凌弊於人物而取、念試之、蛤捕五十斛、載船泊彼市、亦儲備副納熊葛練鞭廿段、時狐來、彼蛤皆取令賣、然問之言、自何來女、蛤主不答、亦問不答、重四遍問、乃答之言、來方不知、狐念无禮打起、依即二手待促、熊葛鞭以一遍打、打鞭著肉、亦取一鞭一遍打、打鞭著肉、十段鞭隨打皆著肉、○下略

○按ズルニ、熊葛トハ葛ノ一種ナルベケレド、今其物ヲ詳ニセズ、

〔日本靈異記下〕將寫法花經建願人斷內暗穴賴願力得全命緣第十三

美作國英多郡部內有官取鐵之山、帝姬阿倍天皇御代、其國司召發役夫十人、令入鐵山、入穴堀取鐵、時山穴口忽然崩塞、驚役夫驚恐從穴競出、九人僅出、一人有後出、彼穴口塞合留、國司上下思之所壓而死、後惻慨之、○中略穴開通廣方二尺餘、高五丈許、于時卅餘人取葛入山、自穴邊往、穴底人見人影叫言、取我手云、山人側聞如蚊音、聞怪之、取葛繫石下底而試、底人取引、明知人也、結葛爲繩、編葛爲籠、以四葛繩籠、四角樸立穴門、漸下穴底、底人乘籠、以機牽上、持送親家、

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上郎女歌一首

夏葛之、不絕使乃、不通有者、言下有如、念鶴鴨、

〔萬葉集七旋頭歌〕劒後、鞘納野邇、葛引吾妹、眞袖以、著點等鴨、夏草苅母、○中略

右二十三首、○二十二首略柿本朝臣人麿之歌集出、

〔枕草子三〕草は

くずの風にふきかへされて、うらのいとしろく見ゆるおかし、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

此大納言〈○藤原成親〉ノ中納言ニテ御座シ時、尾張國守ニテ、嘉應元年冬ノ比、目代ニテ衞門尉政友ヲ當國ヘ下ナレケルガ、美濃國杭瀨河ニテ宿ヲ取、山門領平野庄ノ神人、葛〈クズ〉ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ、直ノ高下ヲ論ジテ、様々ニナブル程ニ、葛ニ墨ヲゾ附タリケル、斯ケレバ神人等憤起テ、山門ニ攀登テ致訴訟、

〔源平盛衰記 三十三〕頼朝征夷將軍宣附康定關東下向事
兵衞佐〈○源頼朝〉ハ布衣ニ葛袴ヲ著セリ、

○按ズルニ、葛ハ玉篇ニ草長闊貌トアリ、本書ニハクズト傍訓ス、而シテ長門本平家物語、參考本源平盛衰記ニ葛ノ字ヲ用キタリ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 葛〈[illegible]〉

〔佐渡志 五物產〕葛 和名クズ 家園ニ栽ル家葛ナリ、マタ山野ニ自生ノモノアリ、民家採リテ葛粉ヲ製シ、市中ニ賣ルナリ、吉野葛ニ亞グベシ、

〔倭名類聚抄 二十 葛〕藟〈子附〉 爾雅注云、藟〈力軌反、字亦作蘽、和名[illegible]知、〉藟也、似葛而大、蘇敬本草注云、藟其子狼跋子、

〔箋注倭名類聚抄 十 葛〕釋草、諸慮、山櫐、郭注云、今江東呼櫐爲藤、似葛而麁大、此所引蓋舊注、而郭依之也、按爾雅釋文云、櫐字或作藟、說文云、藟木也、又云、藟艸也、詩云、莫々葛藟、不載櫐字、廣韻云、櫐藤、爾雅云、諸慮、山櫐、藟上同、又云、藟葛藟、葉似艾、或作蘽、二字不同、然毛詩釋文云、藟本亦作櫐、則二字自古通用、○中略 證類本草木部下品黄環條引唐本注云、黄環其子名狼跋子、○中略 本草和名云、黄環和名布知加都良、狼跋子和名布知乃美、是因黄、因于葛藟、釋文引毛詩草木疏云、藟一名巨苽、似燕薁、連蔓而生、幽州人謂之椎藟、詩周南樛木篇、葛藟纍之、釋文引草木疏云、藟葉似艾、白色、其子赤可食、王念孫曰、藟之言櫐也、藤之言縢也、纏蔓林樹、故謂之藟、亦謂之藤、小雅南有嘉魚傳云、櫐蔓也、秦風小戎傳云、縢約也、約亦纏也、中山經云、卑山其上多櫐、郭注云、今虎豆貍豆之屬、櫐一名縢、是藟亦作櫐、

藤亦作䕒、故其義同矣、

〔東雅十五草卉〕藤フヂ〇中略 フヂとはフシといふ語の轉せしなり、凡そ藤生の節あるをいふなるべし、鞭をムチといふも、古には藤を鞭となせしと見えたり、藤鞭といふ即此也、藤をいひ鞭といふ、其詞を轉じて呼びしと見えたり、

〔塵袋三〕一藤ハ木歟草歟

草ヲ篇ニシタガヘタリ、カツラノ類ナレバ草ナルベシ、昔シ尾張國春部郡國造川瀨連ト云ケル物、田ヲ作リタリケルニ、一夜ノ間ニ藤オヒタリケリ、アヤシミヲソレテ、切棄ルコトモナカリケルニ、其藤大ニナリニケリ、其ノ故ニ此ノ田ヲバハキタト云ト云ヘルトカヤ、此事ヲ首清公卿ノ尾州記ニ云ヘルニハ、其藤漸大ニシテ如樹、遂號藤木田俗云波木田ト云ヘリ、藤ヲバハキト云フニコソ、如樹ト云ヘバ、ウチタヘテ、モトヨリ木ト云ベキニアラザルベキ、仁和寺ニモフヂノ木ト云フ所アリ、是モ同心歟、

〔宜禁本草乾中木〕紫藤 甘微溫、作煎如糖下水良、四月紫花可愛、花挼碎拭酒醋白腐壞、子角中仁熬香著酒中、令不敗酒、敗者用之亦正也、京人種飾庭池、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕紫藤 招豆藤和名布知、止用藤一字、訓爲布知、〇中略

按紫藤花朶二三尺、纏樹垂架最艷美、攝州野田藤得其名、蓋冬月酒精汁及米泔汁、灌根則茂盛、又有白藤、 蔓葉皆無異、唯花白耳、 凡插藤花於水最易萎、灌酒於其本莖則歷時不凋、

〔大和本草八蔓草〕紫藤 葉ワカキ時食フベシ、花ハ春ノ末ヨリ四月ニサキカヽル、花ノ長三尺ニミツルアリ、其實ヲ炒テ酒ニ入レバ酒敗レズ、敗酒ニ入レバ味正クナル由、本草ニイヘリ、又藤ノ枯ントスルニ酒ヲソヽゲバ活ス、花瓶ニ紫藤ヲサスニ、酒ヲ加レバ久シク萎マズ、酒毒ヲ解スルニ藤ノ花生ニテモ、カゲ干ニシテモ服ス、酒醋ノ衣服器物ニ付テカビタルニ、フヂノ花ヲ用テスレ

バフツル、酒ト互ニ相助ル事奇異ナリ、是亦本草ニ出タリ、一本ヨリ苗多ク生ズレバ長ジガタシ、一枝ヲノコシテ餘ハ切ベシ、

〔物類品隲三草〕紫藤　和名フヂ、山野ノモノ花短シ、ノフヂト云、攝津野田產上品、花至テ長シ、紫花白花二種アリ、漢種粉紫花ノモノアリ、希品ナリ、壬午主品中田村先生具之、一種深紫色重瓣ノモノアリ、至テ希品ナリ、府中侯園中ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕紫藤　フヂ　サノカタノハナ古歌　ムラサキグサ　マツミグサ　フタキグサ　マツナグサ共ニ同上　一名朱藤多識編花鏡　藤花菜救荒本草

人家ニ栽テ花ヲ賞スルフヂナリ、年久シキ者ハ藤甚大ニシテ木ノ如シ、處處ニコブアリ、フヂコブト云フ、和方書ニ藤瘤ト云フ、花ニ紫白ノ二色アリ、紫花ノ者ハ培養ニヨリテ穗ノ長キコト五六尺ニ至ル、白花ノ者ハ穗短ク、開クコト早シ、葉ハ紫花ノ者ヨリ大ニシテ厚シ、一種漢種ノ紫藤アリ色淺シ、又一種重瓣ニシテ深紫色ナル者アリ、凡山野自生ノ者ハ花穗短シ、コレヲノフヂト云フ、攝州野田ノ產ヲ上品トス、花穗長シ、コレヲ野田フヂト云、嫩葉蔬トナシ、飯トナシ食フ、花モ亦食フベシ、其實莢ヲナス、形刀豆ノ如クシテ小ク、內ニ圓扁ナル豆アリ、棋子ノ形ノ如シ、燒食ヘバ味栗ノ如シ、又一種ドロウフヂアリ、一名ナツフヂ、山野ニ自生多シ、葉至テ小ク色淺シ、六月花ヲ開ク形小ニシテ黄白色、穗長サ四五寸、後莢ヲ結ブ、長サ三四寸、

〔草木育種下花木〕紫藤　攝津國野田の藤は長さ四五尺に至る、常の野ふじとは別なり、又花大にして短ものあり、又白ふじあり、又土用ふじは葉も花も小し、三月頃きり接にしてよし、又根を掘採て砧とするもよし、人糞に酒粕をませ根廻へ入べし、夏中細長き蔓を多出すとき、その蔓を刈べし、

〔剪花翁傳二三月開花〕藤　花紫白、開花三月末より四にかけて咲、方日向、地濕土えらばず、肥大便塞

中、平日は入るに及ばず、株尋常の花は、春彼岸に蔓を地中に伏、根生じて後切放ち取るもよし、又同節に株を取分るもよし、名物の花は多分盆栽、或は棚に懸登せありて、取木になしがたし、故に勢ひよき株をもて、寄接になすべし、因にいふ、河州刈田村の庄官が母屋子宅、兩家共に庭中なるは房長きこと五六尺におよべり、近世の名實也、

〔禁秘御抄上〕草木

藤壺　庭藤ニ被レ結手水、上古幷ニ被レ結手歟、近來殊勝物也、

〔肥前風土記藤津郡〕昔者日本武尊巡幸之時、到於此津、日沒西山、御船泊之、明旦遊覽、繋船纜於大藤、因曰藤津郡、

〔古事記中應神〕故玆神之女名伊豆志袁登賣神坐也、故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣、皆不得婚、於是有二神、兄號秋山之下氷壯夫、弟名春山之霞壯夫、故其兄謂其弟、吾雖乞伊豆志袁登賣、不得婚、汝得此孃子乎、答曰易得也、○中略爾其弟如兄言、具白其母、卽其母取布遲葛而、布遲二字以音一宿之間、織縫衣褌及襪沓、亦作弓矢、令服其衣褌等、令取其弓矢、遣其孃子之家者、其衣服及弓矢、悉成藤花、

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略藤、

〔萬葉集三〕防人佑大伴四綱歌二首○中略

藤浪之花者盛爾成來、平城京乎、御念八君、

〔萬葉集十九〕十二日、○天平勝寶二年四月遊覽布勢水海、船泊於多祜灣、望見藤花、各述懷作歌四首、○三首略

藤奈美能影成海之底清美、之都久石乎毛珠等曾吾見流、

守大伴宿禰家持

〔伊勢物語下〕昔おとろへたる家に、藤の花うへたる人有けり、彌生のつごもりに、その日雨そぼふるに、人の許へ、折て奉らすとてよめる、

ぬれつゝぞしゐて折つるとしの内に春はいくかもあらじと思へば

昔左兵衛督なりける在原行平といふありけり、その人の家によきさけ有と聞て、うへに有ける左中弁ふぢはらのまさちかといふをなん、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける、なさけある人にて、かめに花をさせり、其花の中にあやしき藤の花ありけり、花のしなひ三尺六寸計なん有ける、それを題にてよむ、よみはてがたに、あるじのはらからなるあるじし給ふと聞てきたりければ、とらへてよませける、もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しゐて讀せければかくなん、

咲花のしたにかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも、などかくしもよむといひければ、おほきおとゞの榮花のさかりにみまそかりて、藤氏のことにさかゆるを思ひて、よめるとなんいひける、皆人そしらずなりにけり、

(古今和歌集二春下)しがよりかへりけるをうなどもの、花山にいりて藤の花のもとにたちよりてかへりけるに、よみておくりける、　僧正遍昭

よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも

家に藤の花さけりけるを、人のたちとまりてみけるをよめる、　みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすぎがてにのみ人のみるらん

(大和物語上)亭子院に、みやすむどころだち、あまたみそうじしてすみ給ふ事年比ありて、河原院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極のみやすむどころ(藤原褒子○宇多后)ひと所のみそうしをのみしてわたらせ給にけり、春のころ成けり、とまり給へるみさうしども、いとおもひのはかにさう〴〵しき事をおもほしけり、殿上人などかよひまいりて、藤の花のいとおもしろきを、これかれさぶりをだに御らんせでなどいひて見ありくに、ふみなん結びつけたりける、あけてみれ

ば、

世中の淺き瀨にのみ成ゆけば昨日のふちの花とこそみれ、とありければ、人々見て、限なくめであはれがりけれど、たがみさうしのまたまへるとも、えしらざりけり、おとこどものいひける、

藤花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなごり成べし、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年三月廿日、於飛香舍有藤花宴、

〔枕草子三〕木の花は

藤の花しなひながく、色よくさきたるいとめでたし、

あてなるもの

藤の花

〔枕草子五〕めでたきもの

いろあひよく花ぶさながくさきたる藤の、松にかゝりたる、

〔榮花物語三十二歌合〕三月つごもり方に、〇長元七年藤壺の藤の花、えもいはずおもしろく、へいにさきかゝりて、みかは水をやり水にほりわけてながさせ給へるに、さきかゝりたるいとおかし、この花の宴せさせ給、〇中略大夫權大夫などものすむじ、歌うたひなどあそび給、女房、

むらさきの雲たちまがふふぢのはないかにおらましいろもわかれず

夏にだにちぎりをかけぬ花ならばいかにかせまし春のくるゝを、女房殿上人などおほかれどとゞめつ、

〔本朝無題詩二植物〕賦紫藤　藤原在良

何物送春思更侵、紫藤花綻艷方深、青柏欲誤朝衣色、漢后可疑雲蓋陰、蘭圃秋風遙結契、竹林夜雨未知音、多年染道無成士、偏學空催射鵠心、

〔沙石集二上〕佛舍利感得人事

法華ニハ舍利弗モシンヲ以テ入レリト說キ、シン無キ者ヲバ一闡提ト名テ、佛ニナラヌ者トイヘリ、或在家人山寺ノ僧ヲシンジ、世間出世フカクタノミテ、病事モ有レバ藥マデモ問ケリ、此僧醫骨モナカリケレバ、ロブノ病ニ藤ノ花ヲ煎ジテ、メセトゾヲシヘケル、シンジテコレヲモチフルニ、ロブノ病イヘズトイフコトナシ、或時馬ヲウシナヒテ、イカヾ仕ルベキトイヘバ、例ノ藤ノ花ヲセンジテメセトイフ、心得ガタケレドモ、ヤウゾ有覽トシンジテ、アマリニ取盡シテ、近近ニハ無カリケレバ、山ノ麓ヲ尋ケルホドニ、谷ノホトリニテ、ウセタル馬ヲ見ツケテケリ、是モ信ノイタス所也、

〔建內記〕永享十一年二月廿八日、藤一本近年不慮感得植庭前、或人云、藤ハ初而不植之、不敬之時有其恐之故也云々、仍寄進梅花院鎭守也、彼五社之內春日御座之間也、住持返報懇歡候也、

〔鵞峯文集記九〕古藤記

肥後國士沼田延擧寓東武、依紹介請余曰、延擧庭砌有古藤樹、花白蔓大、其枝高而葉枯木、構架於其下三段、橫施可八九步、圖中分栽其根處處有之、皆以是爲本、○中略藤有兩種、或白或紫、彼其紫也間色不正、不免奪朱之論、此其白也如梅蘂之被氷雪、似櫻蕊之塗綠繪、并得梅櫻之美、而延擧萬延則花中之尤物可無比倫、延擧所請說不爲過乎、乃知一庭之中不可缺刁氏之塢也、

〔國花萬葉記六之三攝津〕大坂諸所名藤之棚

谷町玉木町觀音堂　同大藤棚　天王寺町　洞岩寺ノ藤　同大乘寺ノ藤　天滿天神ノ內ノ藤　同老松町ノ藤　同神明社ノ藤　木津唯專寺ノ藤　野田ノ藤

〔續江戶砂子五〕雜樹

龜戶の藤　天神のみたらし　佃の藤　住吉の社　山王の藤　上野　根岸の藤　圓光寺

增傳妙寺の藤、小日向清水谷　むかしは名におふ藤也、今は老木となりて英もみぢかくさして見所あらざれども、名木のむかし殘りて溫ぬる人多し、

增戻り藤、淺草熊谷稲荷社の傍に有、享保始のころ、境内辨天山の水石を疊の時、此藤を池の邊へはこび植るに、ほどなく枯たり、時に熊谷社の堂司見性坊夢みらく、我が藤をいかにしてか他へ植るのいはれなし、すみやかに元の地へかへすべしといふ事、兩度におよぶ、よつてその枯たるを以前の所へかへし植るに、幾ほどなく活て、枝葉さかへ、青葉を見せたり、此藤今に存す、〇中略

四時遊觀

藤　龜戸天神宮　樓門の前御手洗の池の上左右に棚あり、紫白のはなぶさ、池水に影をまづめて底さへ匂ふけしき也、〇中略

藤　佃島住吉社　神前に方六十餘丈棚、枝葉つらなり、一向にそらをとぢて、木の下闇の陰茶店多く酒肴を貯ふ、花は紫白根は二もとあり、攝州の住吉も藤の名所也、〇中略

藤　上野山王社　鳥居(常のとりゐと異也、さうがうの鳥居と云、)の前に棚有、わたり二十間に及ぶ、紫白英をたれてな丶めならず、〇中略

藤　根岸の里寶鏡山有　圓光寺と云曹洞の禪林也堂のうしろに辨天の宮あり、その池邊にそひて三十餘間の棚、紫白の色をあらそふ、

〔佐渡志五物産〕藤〇中略　稚葉ハ饑荒ノトキ、賤民食ニ変ヘテ糧トスルニ味美ナリトイフ、根ヲトリ水ニ浸シ、賤民ノ衣服ニ製ス、風俗ノ部ニイダストコロノ、十畝帷子ノ一種ニ供ス、加茂郡川崎村ノイダストコロヲ上品トス、

〔花月草紙五〕藤の花はちかうみればうつくしけれど、餘りにちかづくれば、かほりはまたよからず、はなやかにさくかとみれば、末まではひらき得ず、ことにおのれひとりさかりをみすること

小藤

谷藤　岩藤

萩

かたく、かならずこと木によりて、たけ高き勢ひみするが、そのよりそふ木の枝もはも、みえぬ計におほひぬれば、その木もつひにかれぬるにぞ、われひとりの心ばへみえて、木高く咲きみちぬとおもへば、嵐などにあふとき、もとよりかれし木なれば、うちたふれてけり、高うみえしはなもつひにくさむらにうづもれて、またみる人もなし、代々の小人の情態にもたとへつべしと、ひとのいひけり、

〔大和本草 七 花草〕小藤。　蔓草也、葉モ花モ藤ニ似テ小ナリ、花白シ、又紅モアリ、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕谷藤（たにふぢ）　俗稱、本字未詳、

按谷藤蔓草也、葉似二小梅葉一而闊、三月葉間開花、似二紫藤花一、

一種有岩藤。即此花也、詳二于毒草類一、

〔倭名類聚抄 二十 草〕鹿鳴草　爾雅集注云、萩一名蕭、（萩音秋、一音焦、蕭音宵、和名波木、今按、牧名用二萩字一、萩倉是也、鮮色立成、新撰萬葉集等用二芽字一、唐韻草）（音訓未詳、草名也、國史用二芳宜草三字一、楊氏漢語抄又用二鹿鳴草三字一、並本文未詳、）

〔撮壤集 中 草〕鹿鳴草（萩也、和名類聚、）

〔書言字考節用集 六 生植〕萩（ハギ）（万葉、用二芽字一、今按、萩者蕭之類也、本朝俗以二天竺花一爲萩、誤來久矣、）芳宜草（同、和名）

〔圓珠庵雜記〕はぎに二つあり、榛と萩となり、榛ははりの木といふを、俗にはんの木といふ、それをはぎといふは、針の木といふべきを、りもじ（眞淵云、りもじを略すといふは、書きたる所を見ていへり、はんはまりも有るべし、こはかなでもいふなれば、りの音を略せりと書くべきなり、總て後人ことばといふべき所を、もじと書ける多し誤なり、）を略せるなり、山のきし川みぞのあたりにおほき物なり、其皮をとりて物を染るを、はんの木染といふ、日本紀、日本後紀等に、蓁摺衣といへるも是なり、神樂歌にもさいばりに衣はすらんとよめり、今はよき人のきぬなど染むることは聞えず、山里には猶用ふるなり、萬葉第七に、寄木とて、此榛をよめり、然るに、萩にもまた萩が花すりとよめば、いよいよ人まどへり、遠里をのゝ眞榛もて、又白菅の眞野の榛原とよめるは萩にはあらぬ

を、ふるくより萩とのみおもへり、よく〱萬葉を見て、わきまふべし、

(頭書)眞淵云、萬葉にも史にも、榛とも芽子とも書けるに付けて、此人はこの說を常書きたれど、なづめる說なり、萬葉に寄木とて、歌は萩をよめるも有り、又榛と書きて、必萩なる歌あり、よくみざる故に偏論をなせり、いにしへの摺衣には、草木の花實など卽色あるものを以て、まだらに摺りたりとみゆ、榛の木の皮を以ては、直にすりがたかるべし、煮汁もてすらば、するべけれど、さ樣にするは、今少し後のわざなり、よく萬葉の歌をみるべし、字に泥むべからず、

宣長云、云ざままぎらはしきことあり、草のはぎと云へるは、萩のこと、木のはぎと云へるは、波理のことなり、是まぎらはし、其故は萩に草なると、木なると二種ありて、顯昭が榛と云へるは、木なる萩のことにて、榛をそれに當てたるは誤なれど、契沖なほこれを波岐と訓を木のはぎと云へるは、かの木なる萩の如くにも聞えて、まぎらはしきなり、榛と書けるは波理の木にして、萩には非ず、但波理をも波岐とも云ひしことはありしか知らず、もし波岐とも云ひしことあらば、契沖が云へるごとく、波理木の略なるべし、そはいかにまれ、萬葉に榛と書けるは波理なり、たとひ波岐とはよむとも、萩のことには非ず、又萬葉なる榛を波岐とは訓むべきに非ず、すべて萬葉によめる榛と芽子とは歌のさま異にして、よく分れたり、榛は衣に摺ることをのみよみて、花をよめり、然るを師の萬葉考別記に、榛をも花咲く芽子と一つなりと云はれたるは誤なり、一の卷に、引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢とあるも、色よくにほへる波理の木原に入り交りて、衣を摺れと云ふことなり、三の卷に、往左來左君社見良目とあるも、榛木を見むと云ふにはあらず、眞野之榛原のすべて地を見むと云へるなり、此上ある歌に猪名野者見せつ、角松原何時しか見せむとある類なり、榛を萩の花のことと思ひまがへそ、十四の卷に、伊可保呂乃、蘇比乃波里波良、和我吉奴爾、都伎與良之母與云々、一の卷に、狹野榛能、衣爾著成、此

など、衣に著ると云へる趣同じきを以ても、榛は波理と訓むべきことを知るべし、さて又榛の字をさきに雙べて、蓁とも書けるに、つくをなは蓁ならむかと疑ふ人もあるべけれども、蓁は榛と字の通ふを以て、通はし書けるのみなり、

〔倭訓栞前編二十四〕はぎ　日本紀には、榛字蓁字などを用て、はりともかはぎとも訓せり、蓁も榛に同じ、潘岳詩に、荊棘成榛といへば、はりは針の義なるべし、よて万葉集に針原とも書せり、はぎははりの木の略なるべし、かはぎといふは木萩の義、今きはぎといへり、万葉集に異榛といへる物にして、顯昭の大萩といへるも同じ、本たちの木はかれずて、としごとに古枝よりはか枝を生ず、よて古今集に、秋はぎの古枝にさけるとよみ又本あらのこはぎとよめり、是一種也、多は枯て春は生出て、長丶糸を垂るもの是又一種也、同種に夏萩あり、花の時をもて名く、白花あり、飛入あり、されば字類抄にいへる如く、木類あり、草類有て、ともにはぎなれば、万葉集に木類には榛をかり、草類には芽子と書せるにや、奥州の宮城野、信濃の山路などにはいと大なる木もありて、弓などにも作るといへり、稍に青き枝生て花さく、故に宮城野の本あらのこ萩ともよめり、本のあらはなる意也とぞ、又年毎に刈て若ばえ出たるが、たをやかに高く、一丈餘りも打みだれて花咲也ともいへり、宗祇旅日記に、本あらのさくらなどもよめれば、春刈のこしたる去年の古枝に咲たるをいふと聞置きたるに、宮城野のあたりに、もとあらといふ里ありて、色なども外には殊なる萩のありし、枝ざしなべての萩よりもそは〳〵しく、あばら也といへり、今宮城野と稱するは、四五月に花咲り、芳宜花の宴は、仁明紀に出たり、新撰万葉集には、芽とのみ書させ給へり、唐韻に芽は草名也といへるに據するか、漢語抄に鹿鳴草と書るは、詩小雅呦鹿篇の意を取也、萩をよむは和名抄より見えたり、新撰字鏡に萩をいらと訓じ、蒿蕭類と注せり、史貨殖傳千樹萩の注には、梓木也と見えたり、二合字の意にて、はぎと訓せしにや、菅清公尾州記に、はぎ田を藤木田と書せし

事、埃囊抄に見えたり、かゝれば古へより漢名さだかならず、花史左編に出し天竺花也ともいひ、或説に農政全書にのせし胡枝子なるべしともいへり、又隨軍茶を訓せり、伊勢鈴鹿郡あのだ村に一株に千枝ある萩あり、昔大内の御用たりきといふ、〇中略 南京はとぎ稱するは小也、日光はぎと稱する品もありて、花觀つべし、みだれ萩は大しだれ也、別に草萩と稱する一種あり、短草也、合明草也といへり、仙臺はぎと稱するは、紅芒決明也といへり、そとが濱ともいふ、

〔大和本草 七 花草〕天竺花 花史云、觀音菊、天竺花是也、五月開至七月、花頭細小、其色純紫、枝葉如嫩柳、其幹之長與人等、篤信曰、和名抄及漢語抄ニハ、鹿鳴草ヲハギト訓ジ、又萩ヲハギト訓ズ、萬葉集ニハ芽子ヲハギト訓ジ、又榛ノ字ヲモハギト訓ズ、和歌ニ多クハギノ花ヲヨメリ、中華ニハ不賞之、ハギニ數品アリ、其莖冬枯テ春新苗ヲ生ズルアリ、是ヲ小ハギト云、莖冬不枯シテ春莖ヨリ葉ヲ生ズルアリ、コレヲ木ハギト云、萬葉集ニ眞芽子ト云リ、宮城野ハギアり、其花最ヨシ、是ハ多カレテ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、又白ハギアリ、綠ハギアリ、綠ハギハ花紅ニ盛久シ、ハギノ莖枯タルハ、籬トシ薪トス、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕胡枝花 和名波木 隨軍茶 救荒 天竺花 花史 鹿鳴草 以下出和名抄 芽子花 芳宜草 萩 音秋 蕭 音宵 中略 〇
枝、胡枝花、叢生、枝長垂蔽地、狀似絲垂櫻、而一莖三葉、其葉似棗葉、又似南天燭、秧而不尖、柔軟、秋著小花、淡紫色、新撰万葉集菅丞相詩云 曉露鹿鳴花始發者是也、俗專用萩字、奥州宮城野、方二里許萩生茂、
万葉 秋宿の秋の芽子さく夕陰に今も見えしか妹が姿も
有山萩、有白花者、有白紫開分者、北國山中有大木、可爲柱者、四國山中有南天燭大木、倶畿内人不信、
山萩 又名鼠萩 葉大、圓、有大木、 雄萩 葉大、亞山萩花、淺紫 雌萩 宮城野 葉花小、共結實、褐色、大可豌豆、扁中有細子、

〔萩花集說〕はぎの和名、異稱頗る多し、波疑（萬葉集）、波義（同）、芽子（同）、芳宜（續日本後紀）、芽子花（和名鈔、漢語鈔）、初日草（同）、野守草（同）、古枝草（同）、秋知草（同）、紅染草（同）、月見草（藻鹽草）、水カケグサ（同）、鹿鳴草（古歌）等なり、又漢名ハ、天竺花（圖經本草）、胡枝子（救荒本草）、隨軍茶（同）、觀音[illegible]（[illegible]）、和血丹（植物名實圖考）といふ、古來萩の字を假用するハ、字形の會意にして、秋草の顯著なるものなれば、恰もつばきに椿の字を用ゆるが如し、諸[illegible]家の說には、萩ハカハラハヽコ又アラレギクにして、別物なり、而るに中山傳信錄にも萩の字を用ひ、又周煌琉球國志略に、萩は枝條纖弱如柳、小葉如槐、亦作品字、九月開花、葉間通滿紫艶如扁豆花形」とあるは實にはぎにして、沖繩ハ固より本邦の物名を大約通用し異ならざるなり、

一萩花の類少からず、常品及び若干種を左に掲げ、參觀に便す、

通常の品は、諸國山野自生多くして、山萩野萩と云ふ、又人家園庭にも亦多く栽ゆるものにして、春月宿根より萌芽し、又舊幹よりも新枝を出し、稍圓品字形をなし、秋月莖高さ六七尺、枝を分ち窈窕として、葉間花を著く、紅紫美にして最愛すべし、早く咲くを花戸にて夏萩と云、又一種白萩は淡雅亦賞すべし、紫白相交り咲は更紗萩なり、木萩ハ葉狹く小にして、其幹年々枯れずして枝葉を出し、小さき花咲くものにして、卽宮城野萩也、宮城野ハ、古來萩の名所にして、此萩小はぎとも云ふ、古歌に、小萩のすゑやちしはなるらん、と詠せしものなり、又仙臺の人の話に、宮城野と云ふは、今の仙臺市街より東、山榴岡の東南に渉り、漠然たる曠野なりしが、先年より追々開墾し田畝となりたり、又舊藩諸邸の庭際には、宮城野萩の植へ殘りたる者もありて、頗る大株となりて、舊幹より萌芽し、花を著くとぞ、又近世、仙臺本覚と呼ぶ所あり、この町内の某邸内には、頗る巨大のものもありと、是卽ち木萩にして、諸國山中に產し、常州筑波山、又信州にも多し、コメハギ（濃州）チヤウハギ（勢州）等の方言もあり、又大萩から萩とも云、舊幹より每歲枝上に花を著るれば、秋萩

の古枝に咲けると、古歌に亦詠じ、或山民は、弓などにも作るなり、宮城野産も同種なり、其幹頗る高く、花は稍小さく、幹の本ハ疎なれば、モトアラの小萩とも云ふとぞ、

今世上にて宮城野萩と呼ぶハ、紫色、薄紫又紫白、交り等共に眺めよく、枝も長く垂れ、窈窕として亦愛すべき者多し、花戸にては、就中その紫艶最美なるを撰て、眞の宮城野種なり抔と云囃し賣るもの也、其枝細くして糸の如くなるを、亂れ萩と呼ぶ、

〔剪花翁傳前編四八月開花〕萩　糸はぎ、花赤色、形小く、枝垂る也、白はぎあり、宮城野、花の色赤し、形ち少し、矢筈又めどはぎともいひ、又雀はぎともいふ、色白し、高さ四尺許にも及ぶ、開花八月上旬也、方地土撰ばず、肥大便寒中に入べし、移分株多より春彼岸迄よし、升水は灰汁にて煮るべし、又上酢にて煮れバ猶よし、又方本口を沸湯に扦入、此湯さむれば沸湯と仕替扦入、如是二三度も沸湯に替て後、冷水にとくと漬、よく水上たる時用ふべし、又方薄き筵を覆ひ、此上より沸湯を澆ぎかけ、しばらくして、冷水に漬おきて後扦べし、

〔玉勝間十三〕萩の大木の事

みちのくの宮城野わたりの萩は、高さ二丈あまりばかりなる多し、又同國の津輕の弘前の二里ばかりこなたに、大鰐といふところに、大日堂のある、前なる林の中に、一木の大木の、十餘丈ばかりの高さの、かこみ四圍ばかりなるあるを見れば、葉も花も全萩也、又さつまの國にも、萩の大なる木有といへりと、ある物にしるしたり、まことにや、

〔翁草三十九〕宮城野の萩は木萩にて、灌木のごとく、尋常の草萩とは異にして、弓などに作る樹也、また本あらこ萩といふは、梢に青き枝生出て、其枝に花咲ゆへ、本のあらはれざると云下略歟、宮城野の本あらこ萩露をもみ風を待ごと君をこそまて、

一山萩は北國の山中に有木也、花は白或は白紫咲分抔有、其大なる物は凡の柱に成べき程の木

也、又四國の山には南天の大木有、倶に畿內邊の人は異也とす、

〔武江產物志草類〕胡枝子花八月節より　柳眼寺柳島妙見寺ト云　清水寺淺草　正燈寺淺草　觀音奥山淺草　三囲稻荷

〔一話一言四十五〕萩寺

本所押上村龍眼寺を萩寺といふ、龍眼寺和尚萩を數奇て、數室をうゆ、予に詠せよといふ、

きゝしより見る目ぞまさる此寺の庭におりしく萩のにしきは　高辻大納言家長

此寺に碑をたて、芭蕉翁の發句をかけり、

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

近比萩寺にゆきてみしに、此碑なし、

〔萬葉集秋雜歌八〕山上憶良詠秋野花二首〇一首略

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

〔萬葉集挽歌十三〕九月之四具禮之秋者大殿之砌志美彌爾露負而靡芽子乎珠手次懸而所偲〇下略

〔臥雲日件錄〕寶德四年〇享德元年十一月十一日、南禪昌東主來、〇中略予又問曰、妙興開山有柱故事、昔年杜關東時、聞諸道途、故不敢干入東鎌、昌曰、州中貴于薪柴、妙興開山嘗於去寺可三里買大洲、人不知其故、州中飢饉、師勸里中兒童曰、持破草鞋捨于路傍者來則當與錢、諸兒各從命來者必如約、如此者殆乎一歲、破草鞋積如山、師於是命寺之力僕刈萩來切根可留、又命折柳枝來切之、亦如萩長、然后從諸僧到彼洲、凡緊乎一萩以一草鞋、播散洲中、柳枝亦然、其不知幾千百、人又不知爲其事、到明年萩與柳生洲中、鬱々葱々、爾來刈之爲薪也、洲廣可方五百里、〇五百里恐誤故一年受用殆乎三百貫之資云、寺用有餘、故州中養于薪者亦刈之、率三分一以供寺、于今如此云々、又曰、人傳開山乃高野大師再來、故雙桂贊有高山起定歸禪派熱社施田護法門之句、蓋熱田明神有施田之異、下句謂之也、予曰、栽萩

黄環

ワンジユ

擣之計、如石曼鄭種桃而用破草鞋、陶侃拾竹頭木屑之意乎、

〔本草和名木十四〕黄環、一名陵泉、一名大戟葛、子名狼(○狼下恐脱跋字)子(已上二名出蘇敬注)一名蜀黄環、一名黄還、一名生薑、一名根韭(已上四名出釋藥性)一名度谷、一名雞屎藤、一名土防己(已上出雜要)和名布知加都良、

〔本草和名草十一〕狼跋子(楊玄操音蒲葛反)一名度谷、一名就葛(已上二名出蘇敬注)和名布知乃美、

〔多識編草二〕黄環、布知可豆良、

〔重修本草綱目啓蒙草十四〕黄環(根名)　狼跋子(實名中略)○

増、黄環ハハマナタマメナリ、一名イソナタマメ、ハマタズカヅラ(雲州)ハマタナワキ、(阿州)タチワキ、(土州)南方暖國海濱ノ砂地ニ自生アリ、春舊莖ヨリ葉ヲ生ズ、葛ノ類ナリ、葉莖ニ互生ス、形葛ノ葉ニ似テ圓ク、厚シテ三葉一蒂ナリ、一葉ノ形柿葉ニ似テ、面背共ニ光澤アリテ、葛葉ノ褐毛多キニ異ナリ、六七月葉間ニ數花簇生ス、形チ刀豆(ナタマメ)花ニ似テ淡紫色、花後莢ヲ結ブコト、刀豆ノ莢ニ似テ長サ僅ニ二三寸、中ニ實アリ、各二粒或ハ三粒大サ六七分、淡褐色ニシテ扁シ、歳ヲ經ル者ハ根巨クシテ塊狀ヲナス、集解蘇恭ノ説ニ取葛根誤食之吐利不止、土漿解之、此眞黄環也ト雖ドモ、根ニ限ラズ實ヲ食フ者モ、必ズ吐利シテ止マズ、又弘景ノ説ニ、投水中魚無大小皆浮出而死ト云時ハ、苗根花實共ニ毒アルモノト見ユ、阿州海部郡土州海濱等ニテハ、小兒誤テコノ子ヲ炙リ食ヒ、毎毎ニ中ルコトアリ、

〔重修本草綱目啓蒙喬木二十四〕無患子(中略)○

釋名鬼見愁　古說ニワンジユニ充ツ、ワンジユハ暖地ノ產ナリ、九州紀州ニアリ、肥後ニテハカマカヅラト云、海濱ニ生ズ、葉ノ形防己(ツヅラフヂ)葉ニ似テ、末凹ナルコト半ニ過テ、ヤハズノ形ニ似タリ、互生ス、夏月花ヲ開キ後莢ヲ結ブ、刀豆(ナタマメ)角ニ似テ短ク、内ニ三四子アリ、大サ四五分ニシテ圓扁ナリ、厚サ三分許、色黒シテ光リアリ、至テ硬シ、用テ念珠トス、ワンジユノ數珠ト云、然レドモワンジユ

碎米薺

蛆草

虀蓋菜

ハ總珠ノ音ナレバ、コノ草ノ名トスルハ誤ナリ、

〔書言字考節用集 六生植〕碎米薺　蓮花菜

〔大和本草 九雜草〕碎米薺　京畿ノ小兒コレヲレンゲバナト云、筑紫ニテホウザウバナト云、三月花サク赤白色、高三四寸アリ、小兒取アツメテ其莖ヲタヽリ合セ玩弄トス、山野ナキ地ニハ此草ヲ園ニウヘテ、其葉莖ヲ馬ニ飼フ、其葉ワカキ時食ス、食物本草救荒野譜ニノセタリ、本草不載、又白花アリ、日久ケレバ色變ジテ赤シ、其花愛スベシ、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕碎米薺　俗云蓮華花

救荒本草云、碎米薺三月采葉可作齏、

按蘇不詳其形狀、而所圖似今云蓮華花也、蓋碎米薺之名義未解也、蓮華花春生苗、其葉似皂莢及槐之嫩葉、兩兩對生、枝莖布地如蔓、節上抽莖頂開花、自三月至四月末盛、其花淡紫色、本圖有白處形似蓮華、故名、結莢三稜黑色、長五六分、中有細子、自撒易生、其多處如敷錦於地、人以爲野遊之一興、有白花者、和州多有之、能治湯火傷、採葉傅汁、

一種有似碎米薺莖葉、而四月開正黃花者、其花生莖末、形如半邊蓮、五月結莢、長一寸許、似野豌豆、

〔大和本草 九雜草〕蛆草　此草ヲ醬ナドニ少加ユレバ蛆生ゼズ、漢名不知、其葉ハ莖ノ末ニ各三葉アリ、葉小ニシテ木葉ノ如シ、本ハ小木ノ如シ、葉味レブシ、本草蛆ノ集解、草烏頭ヲ切ヘギテ醬ニ投ズレバ蛆生ゼズトアリ、此草モ亦然リ、然レドモ毒草ナルベシ、性未詳、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕虀蓋菜　鷄頭草　俗云矢筈草、又別有矢筈草、見于後、

農政全書云、生田野中、苗初搨地生、葉似鏵鍬頭樣、而葉稍甚長、其後葉間攛葶開紫花、結三瓣蒴兒、中有子如芥子大、茶褐色、味甘、今人用根葉搗傅諸瘡良、

按矢筈草高尺許、葉厚青色、頗蕃婁葉、又似矢羽形、開小白花帶微紫、結子如芥子大、

矢筈草

按矢筈草出野堤、小草也、小葉似槐及奴柘(イヌツゲ)而長抱莖生、高二尺許、枝條希而如蓍萩(メドハギ)之甕、秋葉交結小花穗、微似帚草穗、其葉及晚景則如委如睡、朝乃如故也、

萓萓菜(出于前輯)眞矢筈草矣、此草名矢筈之謂未審、

土圞兒

〔倭訓栞〔前編二十八〕〕ほど(○中略)　土圞兒をもいへり、蔓の長きに間ありて、芋子の如き丸根多く連り附り、よて名くるなるべし、飛驒にてはふ。ど。といひ、遠江のあたりには岡ぐ。わ。ゐ。藤ぐ。わ。ゐ。などもいへり、(○中略)土芋をもよめり、

〔和漢三才圖會〔百二菜部〕〕土芋　土卵　土豆　黃獨(本草綱目)　土圞兒(救荒本草)　地栗子(同上)　俗云保止

本綱、土芋蔓生葉如豆、其根似芋而圓如卵、肉白皮黃、生食吐人、以灰汁煮食甘美、

根(甘芋寒有小毒)　解諸藥毒、生研水服、當吐出惡物、

按土芋北地有之、畿內種之者希、奧州津輕人、端午日角黍土芋相並食之、以爲嘉例、(黃獨別此一種、爲土芋異名者非也、)

〔成形圖說〔菜部二十二〕〕保度(土芋なり○中略)

此もの山林に生ず、亦人家に種るなり、蔓細く、葉山芋に似て五葉一處に出づ、根蔓長く連茄(ヒコヘト)て、卵の如き芋許多も著り、味甘美にして亦山芋に似たり、北地奧邊に糸(マヽ)し、灰汁を以て煮食ふ、但鐵器を忌ともいへり、

〔甲斐國志〔百二十三產物及製造〕〕一苦蔞　方言ホド、凶歲ニハ山中民採テ食之、何首烏ノ類ナリ、

蔓藤袴

〔大和本草〔八蔓草〕〕蔓藤袴　莖葉如豌豆、花長垂ル、事如藤花、色モ紫ニテ美ハシ、蔓長ク方ニシテ廉アリ、葉ノ付タル小枝ト花付タル小枝ト一處ニ相對シ、每節ニ生ズ、小枝ノ末ニ各鬚三條アリ、鬚ノ長二寸許、括蔞ノヒゲノ如クマガレリ、多ハ莖葉根枯、

決明

〔本草和名 七草〕決明(陶景注云、主明目、故以明之、)一名馬蹄決明(陶景注云、子形似馬蹄、故以名之、)一名草決明一名蔞蒿子(已上二名出陶景注)一名草用明(〇用薬)一名羊明(已上二名出釋藥性)和名衣比須久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕決明 陶隱居本草注云、決明(和名衣比須久佐)石決明是蚌蛤類、皆主明目、故並有決明之名、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草上品決明子條引陶隱居、不載所引文、引唐本注云、石決明是蚌蛤類、形似紫貝、附見別出、在魚獸條中、皆主明目、故並有決明之名、其文全同、此引爲陶注誤、按本草和名、誤引陶景注云、主明目故以名之、爾雅、薢茩英光、郭注云、英明也、葉銳黄赤、華實如山茱萸、陶云、葉如茳芏、子形似馬蹄、呼爲馬蹄決明、蜀本圖經曰、葉似苜蓿而闊大、夏花、秋生子作角、陳藏器曰、江芏是江蘺子、芏字(音吐)草也、似莞生海邊、可爲席、又與決明葉不類、本草決明注又無、好事者更詳之、圖經、人家園圃所蒔、夏初生苗、高三四尺許、根帶紫色、七月有花黄白色、其子作穗、如青菉豆而銳、又有一種馬蹄決明、葉如江豆子、

〔多識編 二草部〕決明、伊多知左左介、

〔宜禁本草 乾中草〕決明子 鹹平、主青盲赤白膜眼赤痛涙出、常可作菜食、除肝家熱、作枕勝黒豆、治頭風、明目、食療曰、(葉主明目、利五臟、食之甚良、子主肝家熱、風眼赤涙、)

〔大和本草 九草〕決明 本草時珍曰、決明有二種、一種馬蹄決明、コレハ仙臺ハギノ葉ニ似タリ、稀ニアリ、其葉如合歡、其莢長五六寸、其子如馬蹄、其子ノ形異常モノナリ、本草ニ詳ナリ、一種茳芒決明、葉槐葉ニ似タリ、山野ニ多シ、又其葉合歡木ニ似タリ、其實ハ豆ノゴトク莢アリ、本草ニ詳ナリ、其莢ノ皮ヲ去テ、火ウチノ付ダケニス、能火ヲ發ス、筑紫ノ方言ニ秋ボトクリト云、又草決明ハ青葙子也、別物也、

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕決明 エビスグサ(延喜式) 今通名 一名金豈兒(遵生八牋) 槐藤(秘傳花鏡) 槐豆

茳芒決明

農政全書 江南豆 百花譜 秋小豆 採取月令

享保年中ニ渡リシ漢種、今城州山城郷長池富野邊ニ多ク栽ヘ、子ヲ收テ藥舖ニ送ル、春分ニ種ヲ下シ、苗高サ二三尺、葉互生ス、初出ル葉ハ四葉排生シ、後ニ出ル葉ハ六葉排生シテ一大葉ヲナス、蠶豆(ソラマメ)ノ葉ノ如ニシテ薄小ナリ、其六葉ノ內末ノ二葉ハ長大ナリ、已下漸ヲ以テ小ナリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、五瓣ニシテ梅花ノ形ノ如ク、深黃色、大サ錢ノ如シ、花謝シテ角ヲ結ブ、長サ六七寸、小豆莢ノ如シ、內子ハ赤小豆ニ似テ一頭尖リ、斜ニソギタルガ如シ、黃褐色ニシテ光リアリテ堅シ、秋後苗根共ニ枯ル、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、〇中略 麥門冬、決明子各五升、　伊豆國十八種、〇中略 決明子二升、〇下略

〔百品考 上〕茳芒決明　一名望江南、一名江南豆、一名槐葉梅、一名蛇滅門草、　和名ハブサウ、

本草綱目、李時珍曰、一種茳芒決明、苗莖似馬蹄決明、但葉之本小末尖、正似槐葉、夜亦不合、秋開深黃花五出、結角大如小指、長二寸許、角中子成數列、狀如黃葵子而扁、其色褐味甘滑、〇中略

琉球種ヲ傳種ウ、苗ノ高サ三四尺、馬蹄決明ニ似テ莖巨ク、葉モ馬蹄決明ニ似テ葉數多ク、十二三ヨリ十四五ニ至ル、葉ノ形チ馬蹄決明ニ類シテ前後尖レリ、夜合セズ、七八月梢ニ聚リ花アリ、馬蹄決明ノ葉間每ニ花ヲ開ニ殊ナリ、五瓣黃色、梅花ノ狀ナリ、故ニ槐葉梅ノ名アリ、花後莢ヲ結ブ、小指ノ巨サニシテ長サ二寸許、中ニ扁子二行ニナラブコト、本草ニ說クトコロノ如シ、子ハ扁クシテ圓シ、馬蹄決明ヨリ小ナリ、黃褐色實熟シテ苗枯ル、寒地ニテハ實熟シガタシ、

〔草木育種 下 藥品〕望江南(ハブサウ) 救荒本草　又蛇滅門草と云、琉球より來る、薩摩、駿河、伊豆、安房等の暖地によし、寒國にては養がたし、四月種を蒔べし、形狀馬蹄決明に似たり、實を結事遲ゆへ、霜降れば實のらず、子を採には初より盆へ蒔、夏中度々魚洗汁人糞等を灌、十月比より唐むろへ入置ばよく實入

なり、其幹枯すして春に至て芽を生ず、

〔本草和名 六草〕甘草、一名蜜甘、一名美草、一名蜜草、一名蕗、(仁諝音路) 抱罕草、(仁諝上音浮、下音漢、抱罕羌地名也) 鯰魚腸者(不好) 常甘草、(之時可用、巳上三種出陶景注) 一名大苦、一名蘦、(音零、巳上二名出蘇敬注) 和名阿末岐。

〔倭名類聚抄 二十草〕甘草 本草云、甘草一名蜜草、(和名阿萬木)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕圖經云、春生青苗、高一二尺、葉如槐葉、七月開紫花、似柰、冬結實作角、子如畢豆、根長者三四尺、麤細不定、皮赤上有橫梁、梁下皆細根也、爾雅蘦大苦、說文同、邶風簡兮、隰有苓、傳苓大苦、借苓爲蘦也、正義引孫炎曰、本草云蘦今甘草是也、蔓延生、葉似荷青黃、其莖赤有節、節有枝相當、或云蘦似地黃、郭璞注同、王引之曰、大苦者大苄也、爾雅云苄地黃、苄苦古字通、公食大夫禮、羊苦、今文苦爲苄、是也、蘦似地黃、故一名大苦、沈括筆談云、郭璞注、乃黃藥也、其味極苦、故謂之大苦、非甘草也、甘草枝葉悉如槐、嘉祐本草圖經所謂、甘草葉似槐、與古相違、殊不足信、苦乃苄之假借、非以其味之苦也、據圖經、黃藥葉似蕎麥、而大苦葉乃似荷似地黃、形狀亦不同、不審括何以知爲黃藥、孫炎據本草、以蘦爲甘草、今本草無復蘦名、蓋傳者失之、名醫別錄、生河西川谷積沙山及上郡、又云、木甘草生木間、三月生、大葉如蛇牀、四四相值、然則木甘草亦是枝葉相當、孫炎謂甘草枝相當、得其實矣、

〔下學集 下草木〕甘草(カンザウ) (異名云、國老、言藥與藥相合、相競時、以甘草加之、則兩藥和合不成害、故一切藥中加甘草也、猶若國有相競成害時、有國老來而解理和睦之、則不成害也、故以之譬喩、詳見本草、)

〔和漢三才圖會 九十二本 山草〕甘草 蜜甘 蜜草 美草 蕗草 靈通 國老 (其大者名粉草、和名阿末木○中略)

按甘草出於南京陝西河東山西者爲上、皆稱之南京甘草、出於福州者細脆帶微苦味、又細而如稭(ムギワラ)者、俗謂之藁(ワラ)手、又大者名粉草、俗謂之粳手、

往昔日本有甘草、延喜式云、陸奥出羽常陸每年貢之、如今絕不出、雖希有而細硬不佳、

〔物類品隲 三草〕甘草○中略 稻生先生曰、今甲斐國地方山皆有之、貝原先生曰、近世甲斐國ヨリ多ク出

ヅ、奥州ニモアリ、直海氏曰、古ヨリ富士甘草トテ、富士山ヨリ出ヅト、按ズルニ今官園ニ所有ノモノ、本甲斐國ニ出ヅ、然ドモ山中多出ルコトヲ聞ズ、又其他處產スルモノ未見之、甲斐產苗ノ長二三尺、葉ハ紫藤葉ニ似テ、稍小ニシテ微毛アリ、根皮紫赤色、肉黃色ニシテ味甘シ、此物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衞、同郡下石森村與兵衞園中ニアリ、其始所出未詳、或云、甲斐深山中ヨリ出ヅ、或云、武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ、今尙存スト、何レカ是ナルコトヲ知ズ、享保中阿部將翁軒台命ヲ奉ジテ、甲斐國ニ至テ是ヲ得タリ、今東都及駿府官園ニアルモノ是ナリ、駿府ニテハ甚繁茂ス、東都ニテハ繁茂セズ、戶田先生非藥選曰、一種稱南京樣者、御園之種而人間殆希ト、今官園ニ此種ナシ、又甘草苗漢土ニ徵スコトヲ聞ズ、

〔草木育種下藥品〕甘草木草　和名抄にあまきと云、本甲斐國に甘草あり、今又二種あり、葉小く圓して、根横に延ざるもの上品にして、南京種に近し、一種は葉紫藤に似て小く、根細くして蔓の如、節々より芽を生ずるもの、是福州種なるべし、ともに三月頃芽出ざる時、堀て節を籠て三四寸ぐらいに切て、山の締たる赤土を深堀、右の根をはすに栽、よく根廻を踏かためてよし、土柔なれば腐ものなり、少しづゝ肥土をませて植べし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

常陸國卅五種、〇中略甘草廿五斤十三兩、　陸奥國六種、甘草十斤、　出羽國二種、甘草五斤、

〔採藥使記下甲州〕照任曰、甲州石部ト云フ所ヨリ甘草ヲ出ス、又ヲリト云フ所ニモアリ、二種アリ、卽チ獻上ス、

重康曰、甲州石森村ヨリ甘草ヲ出ス、又打栗ト云フ所ニモアリ、土人ノ曰、昔ヨリアリテ甲州ノ名物ナリト云ヘリ、

重康曰、甲州栗林村ト云フ所ニ、土甘草ト云フ物アリ、多ク楮木ノ林ノ中ニ生ズ、土人呼テクヌギ

ト云フ、其形チ石楠ニ似テ内黒ク其味甘シ、甚ダ珍物ナリ、小兒殊ニ好テ食フ、

〔新撰字鏡草〕黄耆（加波良久佐）

〔本草和名七草〕黄耆、一名戴糝、（仁諝音所感反）一名戴椹、一名獨椹、一名芰草、（楊玄操音作其寄反）一名蜀脂、一名百本、和名也波良久佐、一名加波良佐々介、

〔倭名類聚抄二十草〕黄耆 本草云、黄耆、（和名夜波良久佐）

〔箋注倭名類聚抄十草〕蘇注云、此物葉似羊齒、或如蒺藜、獨莖、或作叢生、蜀本圖經云、獨莖、枝扶疎、紫花、根如甘草、皮黄肉白、長二三尺許、圖經云、枝葉去地二三寸、七月中開黄紫花、其實作莢子長寸許、李時珍曰、葉似槐葉而微尖小、又似蒺藜葉而微濶大、青白色、花大如槐花、結小尖角、

〔藻鹽草八草〕和名少々 黄耆かにらさゝけ

〔物類品隲三草〕黄耆 本草綿黄耆、白水耆、赤水耆、木耆等ノ數種アリ、按ズルニ白水赤水ノ二種ハ所出ノ地名ヲ以テ名ク、綿黄耆ハ蘇頌曰、其皮折之如綿、謂之綿黄耆、陳承曰、出綿上者爲良、故名綿黄耆、非謂其柔韌如綿也、松岡先生綿大戟ノ例ヲ以テ頌ガ説ヲ優レリトス、今從之、木耆ハ堅剛ニシテ木ノゴトクナルヲ以テ名ク、本邦數種アリ、

綿黄耆 根柔ニシテ味甘キモノ上品ナリ、藥肆纖椎ヲ以テ木黄耆ヲ打テ綿ノ如クナルモノアリ、用ベカラズ、豐後産上品、莖葉苦參ノゴトク特生ス、五六月淡黄花ヲ開ク、狀槐花ノゴトシ、花謝シテ後短小角ヲ結ブ、根直ニ土ニ入コト二三尺、皮赤色ニシテ甘草ニ似タリ、肉白柔韌ニシテ綿ノゴトク味甘シ、丁丑主品中田村先生具之、下野日光山産上品、莖葉大抵豐後産ニ同ジ、豐後産ニ比スレバ、幹弱ク叢生シテ去地數寸、根柔ニシテ味甘シ、信濃戸隱山地藏谷産至テ上品ナリ、其形大抵日光産ニ同ジ、花淡黄色、又紫花ノモノアリ、實狀魁梧子ニ似テ、長寸許ニシテ扁ナリ、根柔ニ味甘シテ餘味アリ、大サ一虎口ノモノアリ、同國善光寺青山仲菴是ヲ得タリ、壬午客品中具之、

木黃耆　富士山產、蔓延スルコト魍䰠ノゴトク、花淡黃色又紫花ノモノアリ、根ハ橫ニ延ブ、雷斅曰、凡使勿用木耆草、眞相似、只是生時葉短幷根橫也ト云モノ是ナリ、根堅實ニシテ味苦澁葉ハ味甘シ、豐後產根甘シテ葉苦モノト相反ス、讃岐阿野郡川東山中產、富士山ノモノト同種ナリ、日光又一種ヲ產ス、特生スルコト豐後ノ產ニ似タリ、根堅シテ味苦澁ナリ、以上三種皆下品ニシテ不堪藥用、

〔重修本草綱目啓蒙山草七〕黃耆　ワウギ重名　一名百藥綿綱目　綿耆本草原始　甘板麻採取月令　黃嗜華陀內照圖　羊肉蒙筌

綿木ノ分アリ、○略中京師北山中ニ生ズルモノハ、葉ノ形槐葉ニ似テ、莖柔弱直上セズシテ地ニ偃シテ藤蔓ノ如シ、夏月葉間ニ花ヲ生ズ、淺黃色、他州ニハ淡紫色ナルモアリ、形豆花ノ如クニシテ小、數朶穗ヲナス、後角ヲ結ブ、小豆角ヨリ狹細中ニ一隔アリ、子ソノ內ニ滿ツ、形至テ小ク、淡褐色ナリ、秋後苗枯レ、春ニ至リ舊根ヨリ叢生ス、葉味甘ク根味微苦ニシテ硬シ、是木耆ナリ、豐後、下野、信濃ニ產スルモノハ、葉味苦根味甘シテ柔軟ナリト云、然ドモ未ダ肆中ニ出デズ、ソノ加州白山、和州金剛山、駿州富士山上ニ生ズルモノ、形狀皆同ジ、富士山麓ニ生ズル小葉紫碧花ノモノハ別種ナリ、黃耆ニ非ズ、廣島種近來傳ヘ、花戶ニ殖テ唐種ト云フ、春舊根ヨリ苗ヲ叢生ス、莖幹直上シ高サ三四尺、苦參ノ形ニ似タリ、圓カニシテ毛アリ、葉ハ槐葉ニ似テ微狹ク、又苦參葉ニ似テ毛アリ、淡綠色、夏月梢葉間ニ花ヲ開ク、黃白色、形小豆花ニ似タリ、後短莢ヲ結ブ、秋深テ苗枯ル、藥舖ニ販グ者漢渡ハ形纖長二尺許、箭簳ノ如シ、○略中朝鮮ヨリ來ルモノハ味微シ苦シ良ナラズ、和產ハ加州白山、越州立山、和州金剛山ヨリ出ス、根柔ニシテ味甘シ用ユベシ、富士黃耆ハ根硬シ、下品ナリ、今廣島種ヲ河州和州ニ栽ヘテ、大坂ノ藥舖ニ出ス、僞テ唐種ノ黃耆ト云、根柔軟ニシテ白肉、黃心舶來ノ者ニ異ナラズ、味甘厚上品ナリ、

百脈根

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、略〇中 地楡黃芩各十斤、　伊勢國五十種、略〇中 黃芩十一斤、略〇下

〔大和本草 九 草〕百脈根 ミ。ヤ。コ。ク。サ。、細草也、四月黃花ヲ開ク、花形豌豆花ニ似タリ、色ヨシ、葉小ニシテ三ニ分ル、仙臺ハギノ如ニシテ小也、京都大佛ノ前耳塚ノ邊ニ多シ、本草山草上ニ出タリ、實ハ莢アリテ兩々相生ス、

〔重修本草綱目啓蒙 七 山草〕百脈根　ミ。ヤ。コ。グ。サ。　ミ。ヤ。コ。バ。ナ。　コ。ガ。ネ。グ。サ。加州　コ。ガ。ネ。バ。ナ。　コ。ガ。ネ。メ。ヌ。キ。　キ。レ。ン。ゲ。　エ。ボ。シ。グ。サ。江戸　キ。ツ。ネ。ノ。エ。ン。ド。ウ。江州
原野極メテ多シ、一根叢生、莖長七八寸、皆地ニ就テ生ジ、荷花紫草(レンゲバナ)ノ狀ノ如シ、五葉ゴトニ一處ニ生ジ、迎春花(ワウバイ)葉ノ形ノ如ニシテ薄小ナリ、色ハ深綠、三四月莖端ニ七八花攢簇ス、形モ荷花紫草花ノ如クニシテ大ナリ、金黃色又褐色ヲ雜ユル者アリ、花後細莢ヲ結ブ、長サ寸許生ハ靑ク熟ハ褐色ナリ、

〔廣益地錦抄 六〕百脈根(ひやくみやくこん)　葉は萩のかたち、極てちいさくしげく付、えだ多く地にしく、花形さゝげの花のごとく、うこん色おほく付、四五月にさく、花も葉もあひらしくながめたへず、實はさゝげのごとくにして、一所に二ッ宛付、近邊所々芝の間道のかたはらに多ク生ル、目黑邊、淺茅、王子邊芝野の中、又は道のかたはらに多ク生、花ざかりの節は、行人あしをとゞむるほどながめあり、宿根ゟ生ル、又種を蒔てもよくしげる、草花の名烏帽子草共、みやこ草ともいふ、

苦參

〔新撰字鏡 草〕苦參 久。良。々。

〔本草和名 八 草〕苦參、一名水槐、一名苦蘵、仁諝音職 一名地槐、一名菟槐 一名驕槐、陶景注云、葉似槐、故有槐名、 一名白莖、一名虎麻、一名岑莖、一名祿白、一名陵郎、已上本條 一名祿光、一名熟公、一名阮、一名處麻、一名委提莖、一名顛槐、一名使、已上七名出雜要訣 和名久良々、一名末。比。利。久。佐。、

零陵香

〔倭名類聚抄草二十〕苦參　本草云、苦參一名苦蘵、〈音識、和名久良々、一云末比里久佐、〉

〔箋注倭名類聚抄草十〕本草又云、一名地槐、一名菟槐、一名驕槐、陶注、葉極似槐樹、故有槐名、花黄、子作莢、根味至苦、圖經云、其根黄色、長五七寸許、兩指麁細三五莖並生、苗高三二尺已來、葉碎青色、春生多潤、其花黄白、七月結實、如小豆子、時珍曰、七八月結角、如蘿蔔子、角内有子二三粒、如小豆而堅、又曰、苦以味名、參以功名、

〔藻鹽草八草〕和名少々　苦參〈くらら、又まとりくさ、〉

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕苦參　クラヽ〈延喜式〉　マトリグサ〈古歌〉　キツネノサヽゲ〈備前〉　苦辛〈和方〉　カナミツサヽゲ〈備後、紀州同名、〉　一名鎖眉根〈綱目拾遺〉　鹿白〈本草補遺〉　板麻〈救荒本草〉　土塊〈三才圖繪〉
山野ニ極テ多シ、宿根ヨリ春苗ヲ生ズ、高サ三四尺直立ス、葉ハ槐或ハ黄芪ノ葉ニ似タリ、切レバアワクサシ、夏月莖梢ニ淡黄色ノ花ヲ開ク、形赤小豆ノ花ノ如シ、又白花紫花紅花アリ、角ヲ結ブ、長サ二寸蘿蔔ノ莢ノ如シ、秋ニ至レバ苗枯ル、根黄白色、甚大ナル者アリ、味至テ苦シ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、〈中略〉牛膝、苦參各廿五斤、　伊賀國廿三種、〈中略〉獨活、苦參各廿斤、〈下略〉

〔武江產物志藥草〕尾久ノ原　苦參〈目黒邊ニモ〉

〔佐渡志五物產〕苦參　方言クラヽ　山野ニアリ、一種ムジナノ苦辛トイフモノ、野生アリ、民家ニ方言セムブリトイフ、

〔大和本草六藥類〕零陵香　カラヨリ來ル芳草也、昔日本ニ見知シニヤ、延喜式十五卷、遠江國交易所進零薐香三十把トアリ、イブカシ、今モ本邦ニアリヤ、獸醫ノ用ユルルウタト云草アリ、本艸ノ零陵香ノ形狀ニ似テ異ナリ、別物也、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕薰草零陵香　一名鈴鈴香〈八閩通志〉　陵陵香〈儒醫保元〉　零香草〈廣西通志〉　鈴子香〈同上〉

零零香 外科正宗　薫草 名物法言　丹陽草 鎮江府志　多褐羅 金光明経　芥香 事林廣記　陵香 同上

舶來ノ零陵香ニ豆葉様麥葉様ノ二品アリ、豆葉様ノ零陵香ハ、一名豆様ノ零陵香トモ呼ブ、コノモノ眞物ナレドモ久ク渡ラズ、苗ヲ一尺許ニ切リテ、束シテ葉ノ形チハ薄荷葉ノ如クシテ鋸齒ナク、香氣多シ、和產漢種共ニアリ、麥葉様ノ零陵香ハ古渡モアリ、明和七年ニ多ク渡リ、其後モ追追來ル、苗ヲ一尺許ニ切リ束タルモアリ、稍長クシテ根ヲ連ルモアリ、皆莖空ク光澤アリ、麥葉ノ狀ノ如シ、葉ハ小ニシテ互生ス、形ハ茴藿葉ニ似テ微ク長ク鋸齒アリ、莖頭ニ穗ヲ成ス、長サ一寸許、花ハ胡枝子ノ花ニ似テ小シ、枯物ナル故、色ハ見分ガタシ、香氣多シ、是救荒本草ニ載スル所ノ草零陵香ナリ、曰又名兜香、今人遇零陵香缺多、以此物代用ト、今植樹家ニテ唐種ノ黄香ト稱シテ售モノアリ、即草零陵香ノ一種ニシテ、黄香ニハアラズ、形狀麥葉様ニ同ジク香氣多シ、總州ニ自生アリ、此草子生ヨリ三年ニシテ、苗高サ五六尺ニ至リ、小黄花ヲ開ク、救荒本草ニ開淡粉紫花ト云ニ異ナリ、莖モ空虛ナラズ、故ニ草零陵香ノ一種トス、又山海經ノ薰草ヲジャカウサウニ充ルハ穩ナラズ、ジャカウサウハ、苗葉ヲ搣レバ、其氣麝香ノ如シ、葉ヲ採又乾セバ、香氣ナシ、漢名彙苑詳註ノ麝草ニ近シ、

増、天保十四年蠻種ノ草零陵香舶來ス、蠻名レノンクルト云、春種ヲ下シ、高サ二尺許、莖中空ニシテ葉互生ス、三葉一節ナリ、一葉ノ形胡枝子葉ニ似テ薄ク粉綠色、稍葉ハ至テ細シ、夏月葉間ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、破故紙ノ花ニ似テ小ク淡綠色、後三分許ノ白莢ヲ綴リ數粒攢生ス、子ハ白芥子ノ大ニシテ扁ク淡褐色、夏月苗ケバ多モ枯レズ、生ハ香氣ナク、乾ケバ香氣アリ、救荒本草ノ圖ニ能合ヘリ、一種モロコシグサハ、春舊根ヨリ生ズ、圓莖高サ一尺餘葉互生ス、番椒ノ葉ニ似テ濶ク微ク紫色ヲ帶ブ、香氣ナシ、六月葉間ニ莖ヲ生ジ、五瓣、三分餘ノ黄花ヲ開ク、子ハ麻仁ノ如シ、熟シテ白シ、

胡盧巴

〔延喜式内藏十五〕諸國年料供進
藝蔆香大廿四斤卅把淡路國、卌把、同國廿四斤、

〔多識編草二臘〕胡盧巴、和名幾波知須、今按南蠻大根、

〔物類品隲草三〕胡盧巴　葉苜蓿ニ似テ大花、白シテ微黄色ヲ帶ブ、實莢ヲ結ブ、禹錫蘇頌輩、蠻國蘿蔔子トスルモノハ誤ナリ、此物和產ナシ、蠻種享保中種子ヲ傳テ、官園ニ植、

〔重修本草綱目啓蒙草臘十〕胡盧巴　一名胥督都尉藥譜　胥督都護綠譜　胡巴萬病回春

世人禹錫ノ番蘿蔔子ト云語ニ據テ、南蠻大根ノ實ト訓ズルハ非ナリ、蘿蔔ノ類ニ非ズ、舶來ノモノ異物ナリ、享保年中唐種ヲ傳テ、今ハ多ク栽ユ、春秋下種ス、苗高サ一尺許、或ハ三四尺、葉ハ一蒂三葉ニシテ、苜蓿葉ニ似テ微窄シ互生ス、夏葉間ニ一花ヲ開ク、小ニシテ白色、未ダ開ザル時ハ微シク黃色ヲ帶ブ、形胡枝子ノ花ニ類ス、花後細莢ヲ結ブ、長サ二三寸、内ニ小扁子アリ、ソノ形色舶來ノ者ト同ジ、初微ク青シ、年ヲ經レバ淡黃褐色、大サ一分ニ過ズ、莢熟スレバ根枯ル、莖柔弱莢ヲ結ベバタヲレヤスシ、

〔草木育種後編下藥品〕胡盧巴(ころは)草本　和蘭にてへーチギリイキといふ、享保年間、漢種來る、春分に實を布きてよし、一枝三葉五瓣の黃花を開く、後莢を結ぶ、蒔く前に圖に糞汁を澆ぎおくべし、生長して米泔水肥水を澆ぎてよし、

狼牙

〔倭名類聚抄草二十〕狼牙　陶隱居本草注云、狼牙一名犬牙和名古末豆奈木〇末〇古〇奈〇豆〇　根牙似獸牙齒、故以名之、

〔撮壤集中草〕狼牙(コマツナギ)　駒繋同

〔饅頭屋本節用集草古木〕狼牙(コマツナギ)

〔書言字考節用集六生植〕狼牙草(コマツナギ)本草、苗似蛇莓、一、根黑若獸牙、一、金剛草同上　犬牙草同又云支蘭

〔和漢三才圖會草九十五　〕狼牙〇中略　和名古末豆奈木〇中略

按扭牙山野處處有之，高一二尺，莖枝葉花並似萩而小，七月開花作莢如小豆莢，中子黒色，其根甚強，故農人可歎，牛馬俗呼名駒繋，

〔本草和名 十八菜〕苜蓿，一名擬面芝，北人名之、懐馬、和名於保比乃美、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕苜蓿　蘇敬本草注云，苜蓿目宿二音、和名於保比、　莖葉根並寒者也、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕證類本草上品引作，莖葉平根寒，此所引恐誤，李時珍曰，二月生苗，一科數十莖，頗似灰藋，一枝三葉，葉似決明葉而小，如指頂，綠色碧艷，入夏及秋，開細黃花，結小莢圓扁旋轉，有刺數莢累累，老則黑色，内有米如穄米，今俗呼宇麻胡也之，又呼圖坐禮、

〔醫心方 一〕苜蓿和名於保比乃美

〔類聚名義抄 八草〕苜蓿目宿二音上オホ下同　オホヒノミ　オホ　宿正

〔倭訓栞 前編 二十六無〕むまごやし　苜蓿をいへり，げゝばなに似て花黃也，一說に百脈根也ともいふ，ひま連花ともいへり，

〔重修本草綱目啓蒙 十九菜〕苜蓿　オホヒ和名　カタバミ　ムマゴヤシ　マゴヤシ　サバ　コツ　トイゴヤシ播州　カラクサ　ミツバ　コンザブル肥前唐津村○中州一種

原野ニ多シ，秋間子生ズ，長ジテ一根ニ叢生ス，莖地ニ布ク蔓ノ如シ，長サ一二尺，葉互生ス，形隨軍茶ノ葉ニ似テ小ク，五六分ノ大サニシテ，邊ニ細鋸歯アリ，深綠色，三月葉間ニ三五小花穗ヲナス，黄色，隨軍茶花ニ似テ小シ，後莢ヲ結ブ，彎曲シテ柔刺アリ，夏月熟シテ苗根共ニ枯ル，一種葉間ニ細莖ヲ生ジ，數花毬ヲナス者アリ，

〔大和本草 九雑草〕沙苑蒺藜　本草綱目溼草下蒺藜集解曰，一種出同州沙苑牧馬處，子如羊内腎，ト云，其葉合歡木葉ニ似テ莖赤シ，夜ハネブル，又別ニヨク合歡葉ニ似タルモノアリ，沙苑蒺藜ハソレヨリハ合歡ニ似タルコト較劣レリ，又草決明モヨク合歡ノ葉ニ似タリ，沙苑蒺藜ハ草決明ヨリ

葉小也、

〔物類品隲 三草〕蒺藜 二種アリ（○中略）白蒺藜、一名沙苑蒺藜、和名クサネムノキ、葉合歡木葉ニ似テ夜ネムル、至秋結莢、形綠豆莢ノゴトク微刺アリ、熟スレバ莢ノ節節ヨリ折易シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕蒺藜（○中略）沙苑蒺藜ハ和產詳ナラズ、古來クサネムニ充ル說ハ穩ナラズ、クサネムハ華陀中藏經ニ載ル所ノ水茸角一名合萌ナリ、能州ニテキツネネム、越後ニテカウカグサト云、（合歡ヲカウカト云）水旁ニ多ク自生ス、夏秋ノ間多シ、葉ハ合歡木葉ニ似タリ、夜亦合ス、莖高サ二三尺、葉間ニ花ヲ開ク、黃色、後莢ヲ結ブ、長サ一寸餘、濶サ三分許、扁ニシテ疙瘩多シ、熟スレバ粒粒莢ト共ニ、折離テ數段トナル、秋ノ末苗根共ニ枯ル、

鬼皂莢

〔本草和名 二十本草外藥〕鬼皂莢（如皂莢高一二尺）和名久々佐、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕鬼莢 楊氏漢語抄云、鬼莢（久々散、違二音）一云鬱茂草、（辨色立成云、鬱萠草、今按本文未詳）

〔箋注倭名類聚抄 九菜蔬〕按鬼皂莢鬱茂草不詳、依皂莢之名與云高一二尺、疑是今俗呼草合歡者是也、

〔醫心方 一〕鬼皂莢（和名久々佐）

〔類聚名義抄 八〕鬼皂莢（クヽサ）

〔延喜式 三十九內膳〕漬年料雜菜（○中略）鬱萠草擣三斗（料鹽四升五合）右漬秋菜料

補骨脂

〔多識編 二芳草〕補骨脂、伊知比、異名破故紙、（開寶）婆固脂、（藥性論）

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕補骨脂 ヲランダピユ 一名天豆（綱目拾遺）補骨鴟（本草原始）破過紙（外科正宗）

榼藤子

故紙（風俗問答）　破胡子（本草啓蒙）　骨脂（同上）

今ハ通ジテ破故紙ト云、享保年中ニ唐種渡ル、又紅毛人持來リシ新ナル種ヲ下シテ生ズ、共ニ同物ナリ、今和州ニ多ク栽ユ、苗高サ三四尺、葉ハ胡麻葉ニ似テ短シ、又カツラノ葉ニ似テ、皺紋鋸齒アリ、夏秋ノ交リ葉間ニ一寸許ノ穗ヲ出シ花ヲ開ク、形胡枝子（ハギ）花ノ如ク淺紫色、後圓小實ヲ結ブ、大サ一分餘、熟シテ外皮黑ク、內ニ子アリ、形圓扁ニシテ莔麻子（イチビ）ニ似タリ、味微シク腥ク香氣ツヨシ、城州及和州ニ栽ルモノハ、實多ラカンコトヲ欲シ培養スル故氣味薄シ、瘠地ニ栽ユル者ヲ良トス、古者ハ莔麻子ヲ破故紙ト名テ貨ル、形能似タル故僞ルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕榼藤子（モダマ）　一名藤榼子（綱目）　猪腰子（同上、同名多シ、）

和產ナシ、此子古ハ紅毛ヨリ來ル、今ハ然ラズ、蠻國ヨリ四邊ノ國海濱ヘ漂流シ來ル、故ニ佐州、若州、紀州、但州、土州、薩州、筑前等ノ國、其他諸州ニアリ、皆海藻中ニ混ズ、故ニ拾ヒ得ル者アレバ誤認テ寶トス、因テモダマノ名アリ、或ハ蠻語ナリトモ云、其子形圓扁、大サ或ハ一寸、厚サ三分許、或ハ二寸、厚サ四分許、大小常ナラズ、栗殼色、或ハ赤ヲ帶、或ハ黑ヲ帶ブ、其肌ヘ或ハ糙澀、或ハ光滑、其一顆ヲ橫ニ切リ、內ノ肉ヲ去テ藥匱トシ藥ヲ入ル、ソノ皮甚厚硬、故ニ藥ヲ貯ベシ、コノ實全キ者ハ外ニ大莢アリ、濶サ三寸許、長サ二尺餘アリ、故ニ角如弓袋ト云、子中ノ肉色白シ、鮮ナル者ハ夏月地ニ下シテ生ジ易シ、其藤綠稜アリテ絲瓜（ヘチマ）藤ノ如シ、葉ハ木通葉ニ似テ左右各二ツ、四葉一蒂ニシテ末ニ二鬚アリテモノニ纏フ、年久クナレバ左右各四ニシテ八葉一蒂トナル、其一葉ヲ離セバ形長ク尖リテ、南天燭葉ノ如シ、光澤アリ、莖ト共ニ深綠色甚寒ヲ恐ル、

古事類苑

植物部二十一

草十

〔本草和名十草一〕酢漿草、一名酢母草、一名鳩酸草、已上二名出蘇敬注、和名加多波美、

〔倭名類聚抄二十草木〕酢漿　本草云、酢漿草、和名加太波美

〔箋注倭名類聚抄十草〕蘇注、葉如細萍、叢生、莖頭有三葉、蜀本圖經云、葉似水萍、兩葉並大、葉同枝端、花黃色實黑、生下濕地、圖經、葉如水萍、叢生、莖端有三葉、葉間生細黃花、時珍曰、苗高一二寸、叢生布地、極易繁衍、一枝三葉、一葉兩片、至晚自合帖、整々如一、四月開小黃花、結小角長一二分、內有細子、冬亦不凋、

〔下學集下草木〕鳩酸艸

〔物類稱呼三生植〕酢漿草かたばみ一名すいものぐさ　京にてとんぼぐさ、泉州堺にてすもゝ、筑紫にてこがねばな、出雲にてすいぐさ、相模にてはすぐさ、江戸にてすぐさ、奧津輕にてすかんこ、尾張にてすいもの草と云、

〔宜禁本草乾中草〕酢漿草　酸寒、主惡瘡瘑瘻傳之殺小虫、解熱渴、初生嫩時小兒多食之、揩鍮石器白如銀、

〔和漢三才圖會九十八石草〕酢漿草　三葉酸　三角酸　雀林草　酸母　雀兒酸　酸箕　赤孫施　鳩酸　小酸茅　醋母略〇中

按酢漿草〔和訓加太波美、俗云須伊毛乃久佐、〕處處多有之、繁衍如蔓、葉色紫或綠、小兒採之和鹽裹于箏吸汁、又按其葉琢眞鍮色黯者、則如新、然淡白失本色、〔但用絲實燬灰琢、則本色不變鮮明、〕

〔重修本草綱目啓蒙〔十六石草〕〕酢漿草　カタバミ　カタバミグサ　スイモグサ　スイモノグサ尾州　スイグサ雲州　スグサ江戸　スカンコ津輕　スカスカ南部　ハスグサ相州　コガネバナ筑前　コガネグサ肥前、讃州、　カンガミグサ防州　カヾミグサ石州　カマタサ播州　タマクサ同上　スヾメノハカマ備後　トンボグサ江州　トンボノキウリ加州　スモヽ泉州　三谷

六葉草俗名　一名醋啾啾〔附方〕　三葉酸漿草　酸草　醋草　雀兒草〔共同上〕　歲寒藥〔八閩通志〕　鴉鴿飯〔醫學六要〕　布谷飯　酸梅草〔共同上〕　鵓鴣飯〔證治大還〕　酸車草〔醫學入門〕　鳩漿草〔證治準繩〕　鹹酸草〔閩書〕　酸嗇草〔古今秘苑〕　蟠蜞青〔草花譜〕

庭間ニ多ク生ズ、小草ナリ、地ニ蔓延シ、葉互生ス、形三瓣、瓣ゴトニ一缺アリテカタバミノ紋ト呼ブ狀ニ同ジ、大サ三五分、肥地ニアル者ハ大サ一寸許、蔓モ赤長シ、二三月花ヲ開ク、黃色五瓣、大サ三分許、他時ニモ赤花アリ、野州中禪寺ニハ粉紅色ナルモノアリ、花後圓角ヲ結ブ長サ四五分、熟スレバ自ラ裂ケテ內子飛出ス、其子小ニシテ白色落テ苗ヲ生ズ、一種葉色紅紫ナル者ハ赤孫施ナリ、花中ニ紅色アリ、アカカタバミト云フ、一種エイザンカタバミト呼ブアリ、葉大ニシテ一寸餘、肥タルモノ二寸餘、葉末ニ尖リアリ、春花ヲ開ク、白花大サ七八分、又淡紅色ナル者アリ、花後新葉ヲ生ズ、根上一寸許鱗甲ヲナス淡紅色、コレ舊葉ノ莖ノ殘レルナリ、〇中略增、天保十四癸卯年舶大葉ノ酸漿草ヲ齎來ス、蠻名オギサトリスローザト呼ブ、七月舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ七八寸許、一根十餘葉叢生ス、三葉一莖ニシテ淡綠色、形エイザンカタバミノ葉ニ似テ、葉頭ニ微シク凹ミアリ、一葉ノ大サ徑二寸餘ニ及ブ、八月ニ至テ葉中莖ヲ抽ズルコト七八寸餘、莖頂ニ細枝七八條ヲ四方ニ分チ、一層ヲナシ、枝ノ末ゴトニ二寸餘ノ細莖ヲ生ジ、蕾ヲ綴ル

牻牛兒

コト各兩三許、一莖生ズレバ一花ヲ開ク、ソノ花必ズ横ニ向ヒ、淡紅色ニシテ大サ七八分、本ハ筒子ニシテ末五瓣、互ニ相重リテ盞子樣ヲナス、筒中ニ短キ黄蕊五條アリ、コノ花形色共ニサクラサウノ花ニ能ク似タリ、花謝シテ後層中ヨリ又枝ヲ生ジ、花ヲ開クコト始ノ如ク、肥タルモノハ三層ニ至ル、多ヲ經テ枯レズ、五月ニ至テ苗葉共ニ枯ル、

〔枕草子 三〕草は

かたばみ、あやのもんにても、こともものよりはおかし、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕牻牛兒〈ばうぎうじ〉　鬥牛兒

同〈○集解救荒〉云、牻牛兒生田野中、就地拖秧而生、莖蔓細弱、其莖紅紫色、葉似芫荽葉、而瘦細而稀疎、開五瓣小紫花、結青蓇葖兒、上有一嘴、其尖銳如細錐子狀、小兒取以爲鬥戲、其葉微苦、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 濕草〕牛扁

古ヨリ牛扁ヲゲンノシヤウコニ充ツルハ非ナリ、ゲンノシヤウコハ一名ホツケサウ、ホツケバナ、〈水口〉レンゲサウ、ミコシグサ、〈奥州〉サクラガハ、〈江戸〉フウレイ、〈江州〉フウギク、〈種樹家〉子コアシ、〈備前〉ベニバナ、〈城州岩倉〉多ノムメ、〈紀州〉チゴグサ、〈土州〉路旁ニ甚多シ、葉ノ形五岐ニシテ猫ノ足痕ノ如シ毛アリ、大サ一二寸、白緑紫斑ノ二種アリ、夏秋ノ間五瓣ノ紫花ヲ開ク、白花モアリ、又淺紫色モアリ、コノ根苗共ニ末ニシテ、一味用テ痢疾ヲ療スルニ効アリ、故ニゲンノシヤウコト云、是救荒本草ノ牻牛兒一名鬥牛兒ノ一種ナリ、〈○中略〉增、尋常ノゲンノシヤウコニ、一種紅白相雜ナシボリノ者アリ、至テ美ナリ、又花大ニシテ色ノ異ナルヲ、花戸ニテ風露草ト名ク、紅色ノモノヲベニフウロト云、斑駁ナルモノヲサラサフウロト云、瓣ニ縱道アルモノヲ郡内フウロト云、又加州白山ノ産ニ、大葉ニシテ白花ノモノアリ、江州伊吹山ノフウロサウハ、葉ノ形大ニシテ缺刻深ク、直立シテ延布セズ、花大ニシテ淡紅色ナリ、タチ

フウロ、又ミカエリフウロトモ云フ、又伊吹山ノ產ニ細葉ノモノアリ、ソノ花淡紫色ニシテ小ナリ、コノ草ヲ手ニ觸レバ、胡麻醬油ノ氣アリ、

〔佐渡志(五物產)〕現ノ證據　牛扁ノ一種ニシテ、救荒本草ニノスルトコロノ牻牛兒、又鬪牛兒トイフモノコレナリ、山野處々ニ生ズ、莖細ク莖ノ如クニシテ、白キ花ニ薄キ紅紫ノ點アリ、梅花ニ似テ小ナシ、六七月ノアイダ花サク、往年因幡伯耆ノ二州ニ痢病流行セシトキ、國守ヨリ令アリテ、庸醫ノ藥ヲ用ヒズ、コノ草一味ヲ味噌汁ニテ煎ジテ、飲シメラル、ヽニ、悉ク効アリトキク、

〔新撰字鏡(草)〕蒺藜子(波。麻。比。志。)

〔本草和名(七草)〕蒺藜子、一名旁通、一名屈人、一名止行、一名豺羽、一名升推、一名卽梨、一名茨、(楊玄操音在私反)一名地茂、(出兼名苑)一名地菅、(出神仙服餌方)一名地苗、(出雜要訣)一名地行、一名地葵、(已上出蘇敬注)和名波末比之、

〔倭名類聚抄(二十草)〕蒺藜　本草云、蒺藜、(疾梨二音、和名波末比之、)

〔箋注倭名類聚抄(十草)〕陶注云、多生道上、而葉布地、子有刺、狀如菱而小、長安最饒、人行多著木履、今軍家乃鑄鐵作之、以布敵路、亦呼蒺藜、易云、據于蒺藜、言其凶傷、詩云、牆有茨不可掃也、以刺梗穢也、爾雅、茨、蒺藜注、布地蔓生、細葉、子有三角、刺人、圖經云、又一種白蒺藜、今生同州沙苑牧馬草地、而近道亦有之、綠葉細蔓、綿布沙上、七月開花黃紫色、如豌豆花而小、九月結實作莢、

〔書言字考節用集(六生植)〕蒺藜(ハマビシ)　升推草(同、又云ヒデリクサ)　旱草(ヒデリクサ)(楠南、蒺藜一名、)

〔物類品隲(三草)〕蒺藜　二種アリ

刺。蒺。藜。　和名ハマビシ、海邊沙地ニ生ズ、葉翹搖ノゴトク蔓延ス、黃花ヲ開キ實ヲ結ブ、刺多シ、

〔重修本草綱目啓蒙(十二隰草)〕蒺藜　ハ。マ。ビ。シ。(古今通名)　シ。ロ。ヒ。シ。(古名)　ヒ。シ。(勢州)　一名棊尖(輟耕錄)　卽藜(救荒本草)　旱草(埤雅)　古多非居塞(月令採取)　推升(群芳譜、升推ノ誤、)　鹽居塞(村家方)　資(群芳譜)

水草ノ菱ヲヒシト云、蒺藜子ハ菱ニ似テ小ナリ、故ニ又ヒシト云、又鐵蒺藜ハ鐵ニテ菱ノ形ヲ製

芸香

ス、コレモヒシト云、其形ニヨルナリ、蒺藜ハ海濱沙地ニ多シ、山中ニハ生ゼズ、苗地ニ就テ四布シ直立セズ、葉ハ大巣菜(カラスノヱンドウ)葉ニ似ク狹ク厚ク、深緑色ニシテ毛アリ、互生ス、夏月葉間ニ五瓣ノ黄花ヲ開ク、形蛇含花ニ似ク大サ三分、花後子ヲ結ブ、大サ三分許、ソノ形或ハ三角或ハ四角、角ゴトニ皆刺アリテ人ヲ刺ス、五六子圓ニナラビ、一蔕ニ生ズ、生ハ緑色、熟スレバ白色、秋ニ至リテ苗根共ニ枯ル、今藥肆ニ賣ル所ノモノ皆異物ナリ、藥ニ入ニハ刺ヲ去ル、沙苑蒺藜ハ和產詳ナラズ、古來タナヤムニ充ル說ハ穩ナラズ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

出雲國五十三種 略○中 決明子、蒺藜子各二升、 播磨國五十三種 略○中 蒺藜子、蜀椒各三升、略○下

〔倭名類聚抄 草二十〕芸 禮記注云、芸 音云、和名久佐乃香 香草也、

〔古名錄 草入十八〕久佐乃香 類聚名義抄 漢名芸香 本草 今名ヘンルウダ

伊勢家集ニ、式部卿宮のせんざい合に、草のかういろかはりぬるまらつゆは心おきてもおもふべきかな、トミユルハ、全ク當歸(オホゼリ)ヲ云、當歸ハ秋ニ至黃ミ枯ル、芸香(ヘンルウダ)ハ四時不ㇾ枯、秋ニ至テ色變ルモノニ非ズ、然レドモ和歌物語ニ草の香トアルハ、皆大芹ニシテ當歸ヲ云ル者ナリ、

〔大和本草 雜草九〕ヘ。ン。ル。ウ。ダ。 近年紅夷ヨリ來ル、是紅夷ルウダナリ、紅夷人ハ是ヲ用テ食品ニ加ヘ、其香氣ヲ助ケ、他食ノ惡臭ヲ去コト、日本人山椒ノ葉ヲ用ルガ如シ、葉ハ細ニシテ莖ノ本木ノ如シ、三四月ニ黃花ヲ開ク、四出ニシテ一片ノ間、各一蕊ヲ出ス、花ノ心ニ實アリ、岩氣ノ實ニ似タリ、夏實ノル、其年子ヲマケバ來年花サキ實ナル、其莖葉根多不ㇾ枯、此草常ノルウダノ性ニ相似テ、性猶スグレタリ、ツチノルウダヨリ惡臭甚シ、故ニ草ハ別ニシテ不ㇾ相似ドモ、ルウダト稱ス、又鳥ノ病ヲ治ス、

〔草木育種後編 下品〕芸香(うんかう) 夢溪筆談 牛芸 群芳譜 和名くさのか 和名抄 俗にヘンルウダといふは、番名リユ

香薷草

ーダ羅甸の鈉說なり、又リウダ艸といふものは土荊芥(とけいがい)、清俗也、四時ともに葉あり、冬月暖處に養ふべし、四月の初芽をきり、玉を付て畦へ栽べし、度々糞汁肥水をそゝぎ、刈り乾かし藥用とすべし、實をとり清明の比にまくもよし、一種山中に松。風。艸。といふものあり、芸香の一種なり、

〔大和本草九雜草〕ルウダ　蠻語ナリ、是南蠻ルウダト云、其葉麻及羅勒ニ似タリ、左右ニ缺刻アリ、蠻醫コノンデ用レ之、腫物ニ葉ヲモミテヌルベシ、ヨク腫毒ヲ消ス、又汗斑ニツクレバ驗アリ、ヘビ是ヲオソル、故ヘビノサシタル所ニ付レバヨシ、凡諸毒虫ノサシタルニ付ベシ、功能多シ、國ニ栽べシ臭氣アリ、葉零陵香ニ似タリトイヘドモ別ノ物也、中華ヨリ來ル零陵香ハ別也、秋初花サキ秋季ミノル、春子ヲマク冬ハ枯ル、又宿根ヨリ生ズ、寬永ノ初、此種南蠻ヨリ來ル、中華ノ草ニ非ズ、今處々ニアリ、俗ニ番波三禮草ト云、此草ヲ服スレバ山嵐ノ瘴氣ニ感ゼズ、時疫ハヤル時、此艸ヲ門戸ニカクレバ其災ヲ免ル、熱病時疫又勞瘵ノ病人ヲ介保スル人コレヲオビ、又モミテ鼻孔ニヌレバ染ズ、山ニ入テ此草ヲ帶レバ毒蟲サヽズ、サシテモハレズ、コレヲ厠中ニ投ズレバ虫生ゼズ、コレヲ食スレバ五辛ノ葷臭ヲ除ク、瘡瘍出シキリニ痒ク、百方不レ效、此草ヲブダウ酒ニテセンジ、瘡頭ニヌル忽效アリ、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕香婆草　芸。草。香云　俗云留字太、蠻語也、能治二瘡疥一遠二惡虫一、俗呼二香婆草一耳、

按天正年中、蠻人此草將來、名二留字太一、春生レ苗、似二雞腸草及蒿類一、而有二刻齒一、甚臭香、至レ秋不レ花、生二穗實一、似二帶草莖穗一、能治二瘡疥、折傷惡腫及惡蟲被レ螫者一、擣レ葉傳レ之、置二床褥下一避二蚤蝨一、納二書篋中一蠹不レ生、字彙曰、芸香草也、可レ避二書蠹一、採置二席下一能去二蚤蝨一、爾雅翼曰、仲冬月芸始生、似二邪蒿一而香可レ食者、恐此草矣、沈括曰、芸類二豌豆一、作二小叢一生、其葉極芬香、秋後葉間微白如レ粉汚、今謂二之七里香一、但此說不レ當耳、可レ考、

白鮮

〔本草和名八草〕白鮮楊玄操音、私延反、一名羊鮮、一名白羶、陶景注云、氣息正似二羊羶一、和名比。都。之。久。佐。

〔倭名類聚抄二十草〕白鮮　陶隱居本草注云、白鮮一名羊羶、和名比豆之久佐、式連反、羊臭也、氣似二羊羶一、故以名レ之、

〔箋注倭名類聚抄草十〕證類本草中品白鮮條引云、俗呼爲白羊鮮、氣息正似羊羶、或名白羶、圖經大草略同、據證類則白鮮一名、羊羶似當作白鮮一名白羊鮮、一名白羶十一字、然本草和名云、白鮮一名羊鮮、一名白羶、無一名白羊鮮之白字、與此所引合、淑君引羊鮮之名、不引白羶之名也、證類本草白字或是衍文、蘇云、葉似茱萸、苗高尺餘、根皮白而心實、花紫白色、圖經曰、莖靑、葉稍白如槐、四月開花淡紫色、似小蜀葵、根似蔓菁、皮黃白、時珍曰、此草根白色、作羊羶氣、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕白鮮　ヒツジグサ和名鈔　一名檢花根村家　増一名白羊羶正字通

漢渡ノモノ眞物ナリ用ユベシ、古渡ハ心ナク皮ノミニシテ色白シ、新渡ハ心ヲ去ラズ、全根ナリ、形チ長大ニシテ色ニウルミアリ、和產ハ未詳ナラズ、今漢種白鮮ト呼者二品アリ、ソノ一ハ葉小ク椒葉ノ如レ、ソノ一ハ葉大ニシテ野薔薇葉ノ如シ、寛政午年ニ來ル、白鮮皮中ニ苗葉ヲ連ル者アリ、其葉今較ルトコロノ大葉ノ者ニ眞ナラズ、根味モ同ケレバ、此品異ナルベシ、古說ニ、ハナシノブ、一名タヲシノブ、ハルダワウカウト云草ヲ充レドモ穩ナラズ、其草ハ種樹家ニ多ク栽ユ、春宿根ヨリ生ズ、苗ノ高サ二三尺、葉ハ崖椒又皁莢ノ葉ニ似タリ、四五月莖端ニ五寸許ノ穗ヲナス、花ノ形桔梗ニ似テ五瓣、大サ三四分、色紫碧又白花モアリ、實ハ房ヲナス、南天燭子ヨリ小シ、熟シテ褐色、根ハ蓄細ク用ユルニ耐ヘズ、今一種大葉ノ者アリ、花モ大ナリ、俱ニ眞ニ非ズ、又コマツナギ、此ヲ以テ本條ニ充ルモ亦非ナリ、コマツナギハ救荒本草ノ馬棘ナリ、

增、文化年間以來、花戶ニ唐種ノ白鮮一名金雀兒椒ト呼ブ者アリ、木本ニシテ一株數條ヲ生ズ、大抵伏牛花ノ葉ニ似テ、高サ四五尺ニモ至ル、春月新葉莖ニ互生ス、四葉排生シテ一葉トナル、一葉ノ形水蠟樹葉ニ似テ、深綠色ニシテ微ク硬シ、又迎春花ノ葉ニモ似タリ、葉莖ノ本ニ兩刺アリ、四月葉間ニ花ヲ開ク、赤小豆花ニ似テ黃赤色ナリ、花謝シテ後小キ莢ヲ結ブ、根ハ長ク皮厚クシテ臭氣アリ、ソノ金雀兒椒ハ白鮮ノ一名ナレドモ、白鮮ノ類ニハ非ズ、コレ救荒本草ノ塲齒花ナリ、

〔草木育種後編下藥品〕白鮮(ひやくせん)草本　金雀兒根草本ともいふ、此草葉に虫を生す、頗る椒虫の如し、春芽出しの比、根を分て栽てよし、赤土よし、豆肥を澆ぎてよし、煖地に作るべし、盆栽冬煖窖に入れ養ふべし、

遠志

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
上總國廿種、略○中　白鮮六斤、　下總國卅六種、略○中　白鮮、大戟各五斤、

〔本草和名草六〕遠志、葉名小草、一名棘苑、一名要繞、仁諝音上於小反、楊玄操又作葽、　一名細草、一名張華、一名棘温、一名要翹、一名蕀苑、已上四名出釋藥性、一名略苑、出雜要訣、　唐

〔書言字考節用集六生植〕遠葸(ヲンロ)　遠志(コグサ)　葽繞(同)本草　遠葸(モノレリグサ)　葽繞(同)

〔大和本草六藥類〕遠志　小葉似黃楊木而小ナリ、處々有之、其葉小ナリ、小草ト稱スルモ宜ナリ、西土ノ俗ハ野茶ト云、花淡紫色ナリ、又海濱ニ小草アリ、莖小ニシテ高キ事一二尺、花ハ桔梗ニ似テ甚小ナリ、根亦小ナリ、根粗遠志ニ似タル故、俗アヤマリテ遠志トス、非也、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕遠志(をんじ)　苗名小草　葽繞　棘苑　細草
本綱、遠志生山谷、有大葉小葉二種、莖葉似大青而小者其花紅、是大葉也、狀似麻黃而三月開白花者、是小葉也、根形如蒿根而黃色、長者及一尺、去心取皮、一斤止得三兩、如不去心則令人煩悶、得茯苓龍骨良、畏珍珠藜蘆、

氣味苦温　入足小陰腎經、其功專於強志益精、治善忘、

蓋精與志皆腎經之所藏也、腎精不足則志氣衰、不能上通於心、故迷惑善忘也、能益智強志、故名遠志、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕遠志　ヒメハギ　コグサ　シバハギ　スヾメハギ江戸　花家　ノチヤ筑前

一名醒心杖綱目拾遺　葽詩經　苦葽爾雅　阿只草鄉藥本草　苶草品字箋ノ葉名　增棘莞爾雅　蕀苑博雅

[illegible]究事物異名 心天清異録

離心杖ノ名ハ、已ニ釋名時珍ノ說ニ見エタリ、山野陽地ニ多シ、苗高サ二三寸許、一根數莖、莖ゴトニ數枝ヲ分チ、葉互生ス、形圓小、黃楊(ツゲ)葉ニ似テ薄ク、深綠色、多ヲ經テ枯レズ、霜ヲ被ルモノハ紫色ナリ、三月葉間ニ深紫色ノ花ヲ簇生ス、胡枝子(ハギ)花ニ類シテ、中ニ蕋多シ、又淡紫色、白紫、閒色、白色ノ者アリ、花後實ヲ結ブ、形圓扁、大サ二三分、榆錢(ニレノミ)ノ形ニ似タリ、內ニ小扁子アリ、一種細葉ノ者アリ、佳品トス、又一種大葉ノ者アリ、高サ一尺許、葉モ亦大ニシテ、五六分許、花モ大ナリ、市中ニ販グモノ、始メニヒメトホメト呼ブモノアリ、根柔軟ニシテ滋潤、藥用良トス、是和產細葉ノ者ナルベシ、又オニトホメト呼ブモノアリ、根堅强ニシテ滋潤ナラズ、下品ナリ、是和產大葉ノ者ナルベシ、然ドモ和產ハ皆根狹細ニシテ、入用ニ堪ヘズ、又朝鮮トホメハ形大ニシテ硬シ、亦下品ナリ、

〔武江產物志 藥草〕鼠山ノ產 遠志 遠志村ニモアリ

〔新撰字鏡 草〕大戟 合艮朗、一云波夏草、

〔本草和名 十草〕大戟 一名邛鉅、仁諝音上巨、下渠、(楊玄操音上巨、下音渠、)一名臙脂、一名澤梧、一名撰、一名明吠、一名秦茯、一名醫、一名澤姑、已上七名出釋藥性、一名大郎、出崔禹方、和名波也比止久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕大戟 本草云、大戟、和名波夜比止久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蜀本圖經云、苗似甘遂高大、葉有白汁、花黃、根似細苦參、皮黃黑、肉黃白、爾雅云、蕎邛鉅、注云、今本草大戟也、圖經、春生紅芽、漸長作叢高一尺已來、葉似初生楊柳小團、三月四月開黃紫花、團圓似杏花、又似蕪荑、其根似細苦參、秋冬采根陰乾、

〔書言字考節用集 六生植〕大戟草(ハシリドコロ) 大戟(タイゲキ)

〔和漢三才圖會 九十五毒草〕大戟 功鉅 一下馬仙 和名波夜比止久佐 ○中略

按大戟和州金剛山之產良、名小大戟、丹波伊豫次之、其葉圓葉閒開細花、有白赤紫數品、結實、以字爲根、[illegible]之、

宜レ擇レ之

〔物類品隲 三草〕大戟　和名ノウルシ、伏見方言キツネノチヽ、江戸方言タカトウダイ、頌曰、春生紅芽、漸長、叢高一尺以來、葉似初生楊柳小團、三月四月開黄紫花、團圓似杏花、又似蕪荑、根似細苦參、ト云モノ是ナリ、處處山中ニ多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕大戟　ハヤヒトグサ〔延喜式〕　ハヤヒトダサ〔同上〕　タカトウダイ〔江戸〕

一名破軍殺〔輟耕録〕　勒馬宣〔古今醫統〕

品類多シ、古渡ニ綿大戟紫大戟アリ、綿大戟ハ根柔ニシテ採メバ綿ノ如シ、徑リ六七分、黄白色味甘辛、大ニ咽ヲ腫ラスコト、時珍ノ言トコロノ如シ、天明年中他ノ藥中ニ混ジ來ルコトアレドモ、今ハ甚稀ナリ、紫大戟ハ根黒赤色、コレモ採メバ綿ノ如シ、味微辛咽ヲ腫ラスニ至ラズ、綿大戟ヨリ緩ナリ、故ニ上品トス、杭州紫大戟爲上ト云フ是ナリ、享保以後渡ル者ハ、根形細キ甘草ノ如シ、外皮紫赤色、味澁クシテ蘞カラズ、僞品タルベシ、天明ノ比ヨリ絶テ渡ラズ、故ニ他ノ藥中ヨリ揀ビ出シテ賣ル者、皆細長ニシテ多クハ皮ノミ、紫赤色、裏面ハ淺褐色、味微澁ニシテ蘞カラズ、是眞ニ非ズ、藥店ニ唐ノ大戟ト云、或ハ雌大戟ト云フ、和ノ大戟ト稱シ賣ル者ニ、僞品アリ、野苧麻根ヲ以テ僞ルアリ、黄白色ニシテ堅ク折レ易ク、味蘞カラズ、コレヲ粉大戟ト云フ、又アカソノ根ヲ以テ僞ルモノアリ、皮淡赤色、内白ク蘞味ナシ、皆用ユルニ堪ヘズ、藥用ニハ唐種及土大戟ヲ用ユベシ、岩大戟モ佳ナレドモ皆藥店ニ出ズ、ノウルシヲ伏見ノ大戟ト稱シテ賣ル者アリ、コレハ草閭茹ニシテ、大戟ニ非ザレドモ、蘞味アリテ相遠カラザル者故、野苧麻根ノ僞ヲ用ユルニハマサルベシ、唐種ノ大戟ハ享保年中ニ渡ル、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、圓莖高サ四五尺、葉ハ草閭茹ヨリ狹細ナリ、色深緑微黒ニシテ中道白シ、葉ヲ斷テバ白汁ヲ出ス、夏ニ入テ莖梢及葉間ニ小枝ヲ抽デ、花ヲ開キ實ヲ結ブ、形狀草閭茹ニ同シテ小ナリ、只花下ノ葉黄色ニ變ゼズ、秋深テ苗枯ル、タカト

ウダイ東都ニハ林下道傍ニ多シ、形狀唐種ニ異ナラズ、微毛アルモアリ、俱ニ莖微短シ、城州長池邊山中ニモ亦アリ、是土大戟ナリ、江州鹿飛邊ニ小葉ノ大戟アリ、伊吹山ニモ多シ、方言チヽモドキ、形狀タカトウダイニ同シテ小ナリ、苗高サ七八寸、葉小ニシテ莞花葉ノ如シ、コレヲ鹿飛大戟ト云、人家ニ移シ栽レバ大ニナリテ、タカトウダイト同ジ、花實モ亦同ジ、又一種海邊ノ石間ニ生ズ、岩大戟ト云フ、淡州、土州、筑前、紀州、播州等ノ國ニ產ス、八月舊根ヨリ新芽ヲ叢生ス、其色紅紫觀ルベシ、葉ハノウルシヨリ小ニシテ狹長、白綠色ニシテ周邊紫色ナリ、寒キ時ハ葉背紫色、莖ハ紅紫色、後淡綠色ニ變ズ、高サ一二尺、春花實ヲ生ズ、ノウルシニ同ジ、秋ニ至テ苗枯ル、ツイデ新葉ヲ生ズ、根ノ形ノウルシニ同ジ、皮微紫色晒乾シテ折レ易シ、コレ紫大戟一名紅芽大戟ノ一種ナリ、藥ニハコレヲ用ユベシ、然レドモ未ダ藥家ニ出ズ、

〔延喜式　典藥三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種（中略）枳實通草大戟各十斤、　伊勢國五十種（中略）大戟五斤四兩（下略）

〔武江產物志　藥草〕道灌山ノ產　大戟（弁ノ圖ニモ）

〔新撰字鏡　草〕澤漆（大戟苗、生時謂衣草苗、）

〔本草和名　草十〕澤漆（陶景注云、摘葉有白汁、故名澤漆、）一名漆莖（大戟苗也）一名得文、一名生道、一名綿柳、一名柳苗、一名耶茸、一名貴葉、一名晶瀬、一名重葉、一名大戟、一名白澤、一名野桑、（已上十一名出釋藥性）和名波◦也◦比◦止◦久◦佐◦乃◦女◦、

〔和漢三才圖會　毒草九十五〕澤漆（中略）（俗云燈臺草）（中略）

按此草形狀似燈臺、俗呼名燈臺草、其莖汁能治疣黑子、且牛馬亦不食此草、乃有毒明矣、

〔物類品隲　草三〕澤漆　和名ト◦ウ◦ダ◦イ◦タ◦ナ◦、又ス◦ヾ◦フ◦リ◦バ◦ナ◦、備前方言ミコノスヾ、處處田野ニ多シ、陶氏大戟苗トシ、日華子大戟花トスルハ誤ナリ、東壁辨之明ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙　毒草十三〕澤漆　一名柳漆（綱目本草）　猫兒睛（救荒野譜）　猫眼（說叢）　猫兒眼草（石鐘乳氣味）

甘遂

李時珍ハ古ヨリ澤漆ハ大戟苗或ハ花ナリト云ノ說ヲ駁シテ別ノクサトス、コレ本經ニ無毒ノ文ニ符ス、ヨロシク從フベシ、大戟ノ苗ハ毒アリ、時珍ノ說ハスヾフリグサ佐渡、勢州、トウダイクサ京カヤツリグサ伯州ミコノスヾ備前ゼニツナギ越後トウミヤウサウ備後野ニ自生シ、八九月ニ實生ズ、春ニ至リ一尺許、瘠地ノ者ハ七八寸、一根一莖莖圓ニシテ、葉互生シ、密ニ著ク、馬齒莧スベリヒユノ葉ニ似テ薄ク細鋸齒アリ、葉ヲ摘メバ白汁出ヅ、三月莖頭ニ五葉對生シ、五枝ヲ分チ四瓣ノ小花ヲ開ク、綠色、一莖五枝ナル故、俗ニシテ錢ヲツナギツラヌクベシ、故ニ錢ツナギト名ク、夏ニ至リ根苗共ニ枯ル、一種小ナル者アリ、雌ノトウダイグサト云フ、水中又水邊ニモ生ズ、陸地ニハナシ、初出ノ葉ハ形チ圓ニシテ石胡荽サヤシナ葉ノ如シ、五ツノ鋸齒アリテ尖ラズ、深綠色、地ニシイテ生ズ、春ニ至テ高サ三四寸、莖葉淡綠色ニ變ジ、葉ノ形モ變ジテ、トウダイグサニ同シテ、梢ニ五枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣、綠色ニシテ黃蘂、花後短カキ莢ヲ結ブ、長サ一分、濶サ二分許リ、熟シテ自ラ中解スレバ、淺礫ノ形ノ如クシテ色黃ナリ、中ニ至テ細ナル褐色ノ子多ク盛ル、形色貓眼ニ似タリ、故ニネコノメト云フ、攝州住吉ニテミヅゲンゲト云フ、釋名中ノ貓兒眼睛草ヲ別テコノ草ニ充ツ、先師ノ說ナリ、又ネコノメノ一種、深山幽谷土石上ニ生ジ、四時トモニアリ、圓葉ニシテ厚ク大サ七分許、深綠色ニシテ紋脈多シ、四葉方布ス、故ニヨツ葉ユキノシタト云、三月花アリ、山中ニテハ四月ニ花ヲ開ク、ネコノメニ同ジ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

近江國七十三種 中略 ○ 澤漆十五斤五兩、

〔武江產物志 藥草〕隨地有之類　澤漆

〔本草和名 草十〕甘遂、一名主田、一名甘藁、楊玄操音古昭反 一名陵藁一名陵澤、一名重澤、楊玄操音逐龍反 一名草甘遂、出陶景注、一名畬休、一名重臺、已上二名出蘇注、一名畜、一名日澤、一名懸、○懸字無攷 一名鬼醜、一名丘重澤、一名髭蕾、

一名鹹、一名夾蓋、一名承露、〈已上九名出釋藥性〉和名爾。波。曾。、一名爾。比。曾。、

〈倭名類聚抄 二十草〉甘遂　本草云、甘遂、〈和名爾波曾、一云仁比曾、〉

〈箋注倭名類聚抄 十草〉蘇注、異甘遂、苗似澤漆、草甘遂苗一莖、莖端六七葉、如蓖麻鬼臼葉、圖經、莖短小而葉有汁、根皮赤肉白、作連珠、又似和皮甘草、

〈重修本草綱目啓蒙 十三毒草〉甘遂　通名　ナ。ツ。ト。ウ。ダ。イ。江戸　一名隨湯給事中〈綱目拾遺〉

早春宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、色紅初ハ横ニ偃シテ出ブ後ニ直立ス、圓莖ニシテ高サ六七寸或ハ一尺餘、葉大戟葉ニ似テ末尖ル、三月莖頭五葉上ニ五枝ヲ分チ、花ヲ開ク、黄紫色、大戟花ニ同ジ、枝ニツク葉ハ本廣ク末尖リ、牛面ノ形ノ如ニシテ鱗葉ニ異ナリ、一葉ゴトニ一花アリ、花後小實ヲ結ブ、大戟ニ似テ小ク疙瘩ナシ、夏ニ入テ莖ノ末枯レ、枝營節ヨリ折レ、落莖根別ニ枝ヲ出シ葉ヲ生ズ、又根上ヨリモ別ニ苗ヲ出ス、秋深テ枯ル、紀州熊野及東國ニ野生多シ、高サ二尺許、葉長大ニシテ二寸許、共ニ其根皮黒ク鬚多シ、城州鷹峯官園ノモノモ同ジ、舶來ノ者ハ根長サ寸ニ近ク、中フクレ兩頭細ク皮赤クシテ鬚ナシ、内白色、甞ダ蛀ヒ易シ、是赤皮甘遂ニシテ上品ナリ、

〈延喜式 三十七典藥〉諸國進年料雜藥

參河國廿一種、甘遂十斤、　武藏國廿八種、〈中略〉甘遂一斤、

〈本草和名 二十本草外藥〉續隨子、一名耐多花、一名百兩金、〈加本〉一名蜀隨子、一名拒多、一名千金子、〈已上出拾遺〉

〈下學集 下草木〉續隨子

〈多識編 二草〉續隨子、巳。波。都。、異名千金子、〈日〉千兩金、〈同〉

〈物類品隲 三草〉續隨子　和俗ポルトガルト云ハ非ナリ、ポルトガルハ木ナリ、絶テ別物ナリ、處處多有、然ドモ皆種ヲ傳テ植ルモノナリ、讃岐瀬島稀生ノモノアリ、

〈重修本草綱目啓蒙 十三毒草〉續隨子　通名　ホ。ル。ト。サ。ウ。　コ。ク。ド。サ。ウ。　チ。ヤ。ウ。セ。ン。ヤ。ナ。ギ。〈種樹家〉

一名反時生〔物理小識〕　牛枝蓮〔本草述〕　拒冬實〔壽世保元〕　白隨子〔青囊藥性賦〕

八月子生ズ、又四五月ニモ生ズ、初出ル葉ハ形細長クシテ、瞿麥ノ葉ニ似テ厚ク黑ミアリ、中ノスジ白色、葉背莖ト共ニ白シ、兩葉節ニ對シ、節ゴトニ互ニ四方ニ正ク對シテ十字ノ如シ、莖ハ太クシテ圓ナリ、葉ト共ニ切レバ白汁ヲ出ス、冬ニ至テタヾチニ聳ユルコト高サ一二尺、肥地ニ栽ユル者ハ四五尺ニスグ、春ニ入テ生ズル葉ハ、頓ニ濶クシテ脚葉ニ異ナリ、漸ク莖ヲ長ジ、梢ニ至テ五葉對生シ、其上ニ五方ニ小枝ヲ分チ出シ、上ニ兩葉對生ス、其葉形短クシテ本廣ク末尖ル、其兩葉漸ク開ケバ、其中ニ一花ヲ生ズ、四瓣黃紫色、形チ大戟甘遂花ニ似テ大ナリ、旁ニ又一莖ヲ斜ニ出ス、上ニ兩葉アリ、漸ク莖タチ葉開ク時ハ中ニ又一花アリ、此ノ如ク一節ヅヽ增シテ枝長クナリ、五方ニヒロガリ、實熟スル時ニハ、重クナリテ末皆下垂ス、初メ花ゴトニ中ニ小綠實ヲ出シ偃垂ス、花謝スル時ハ實漸ク大ニナリテ莖タツ、實大サ四五分許、形圓ニシテ三道アリ、熟シテ黑褐色內ニ三隔アリ、隔ゴトニ一子アリ、形莨麻子(トウゴマノ)ニ似テ小ク、褐色實熟シテ苗根共ニ枯ル、市中ニ賣ル者ハ和產ノミナリ、

〔古今要覽稿草木〕ほるとさう

ほるとさう、一名こくどさう、一名朝鮮やなぎは、漢名を續隨子、一名拒冬、一名拒冬實、一名耐冬花、一名百兩金、一名千金子、一名菩薩豆、一名蜀隨子、一名白隨子、一名聯步、一名反時生、一名牛枝蓮といふ、此種はいづれの國にても、山野に絕て自然生なきものなれば、そのもとは天平のむかし、太宰府より漢種を傳へしが、代々につたへつぎこしものにて、國產にてはあるべからず、所謂ほるとさう、またこくとそうの名ありといへども、これは近世の俗名にして、延喜の比には、たゞ續隨子の字音のみにて通用し、さらに和名なきにても、此種の國產にあらざるはあきらけし、然るを讃岐國瀨島といふ所に、此物の自然生あるよし、物類品隲にみえたれども、これは中むかしの比、何

人か漢種を得て、その地に播殖せしが、今にいたりても年ごとに生出るものなるべければ、これを以て國産の證とはなし難し、併續隨子はその苗葉花實すべて大戟に似て、たゞ長大なるを異なりとし、その功能に至りても、また大戟澤漆輩のに似て、專ら利水解毒の要藥なりといへども、大戟は根、澤漆は莖葉を用ひ、此物は子を用ゆるを異なりとす、又本草和名に續隨子藥用多端といひ、いはゆる百兩金、また千金子などの名によりても、古に此ものを貴みて用ひし事はしられたり、今はたゞ紫金錠の料のみに用ひて、解毒の功を知るといへども、利水の藥に至ては、絶て世の人用ゆる事をしらざるは、さらに古を考へざる也、

〔草木育種後編下毒品〕續隨子本草　秋分に畦へ種を布て、來春に至り生長し、實を結ぶ、一本にて三尺四方も蕃殖ものなり、根に多く糞水干鰯あぶらかすを入て、實を多くとり、油を搾りてよし、此油を搾るかすを、又此草の肥にして尤妙なり、

〔本草和名草十一〕閭茹、一名屈據、仁諝音九勿反、下音居、一名離婁、仁諝音力朱反、漆頭閭茹、出高麗、草閭茹、已上二名出陶景注、一名離樓、一名屈居、一名久居、一名大要、已上四名出釋藥性、一名散熱、一名散烝、已上二名出雜要訣、和名乃阿佐美、一名爾比万久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕閭茹　本草云閭茹、閭如二音、和名阿佐美、一云仁比久佐、

〔箋注倭名類聚抄十草〕太平御覽引吳普云、閭茹葉員黃、高四五尺、葉四四相當、四月華黃、五月實黑、根黃有汁、亦同黃、黑頭者良、本草陶注云、今第一出高麗、色黃、初斷時汁出、凝黑如漆、故云漆頭、次出近道、名草閭茹、色白、蘇敬似大戟、花黃、二月便生、蜀本圖經云、葉有汁、根如蘿蔔、皮黃肉白、圖經云、三月開淺紅花、亦淡黃色、不著子、

〔物類品隲三草〕閭茹　東璧曰、春初生苗、高二三尺、根長大如蘿蔔蔓菁狀、或有岐出者、皮黃赤肉白色、破之有黃漿汁、莖葉如大戟、而葉長微濶不甚尖、折之有白汁、抱莖有短葉、相對團而出、尖葉中出莖、莖中

分二三小枝、二三月開細紫花、結實如豆大、一顆三粒相合、生青熟黒中有白仁、如續隨子之狀、今人往往皆呼其根為狼毒、誤矣、狼毒葉似商陸大黄蕋無漿汁ト、此物大戟甘遂ニ似テ、茎葉肥大、根形商陸根ノゴトクニシテ黄赤色、斷之汁出藤黄色ノゴトシ、其餘皆東壁ガ説ノゴトシ、和産ナシ、漢種享保中種ヲ傳テ、今官園ニアリ、此物漢土ヨリ渡ス時狼毒ト稱ス、漢人誤來ルコト久シ、

草蕳茹　一名白蕳茹、東都方言ヤブソバ、陶弘景曰、次出近道、名草蕳茹、色白、蘇頌曰、又有一種草蕳茹、色白ト、此物所在濕地ニ生ズ、狀大戟甘遂ニ似テ大ナリ、春末黄花ヲ開ク、根蕳茹ニ似テ小ニシテ色白シ、

〔重修本草綱目啓蒙巻十三草〕蕳茹　ヲアザミ和名鈔　ニヒマグサ同上　一名吾獨毒只郷藥本草

蕳茹ニ草蕳茹、漆頭蕳茹ノ二種アリ、草蕳茹ハサハウルシ城州、ノウルシ同上伏見ハカノチヽ、狐ノチヽ、ナベワリ共ニ同上、チグサ江戸、チヂラウサウ信州、ナベナグリ越後、此草河邊湖澤傍ニ多ク地ニ滿テ生ズ、城州伏見、淀、宇治邊ニ最モ多シ、春早ク宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、淡紅色、長ズレバ圓茎、高サ二三尺ニ至ル、葉ハ金絲桃(ビヤウヤナギ)葉ニ似テ狹ク微毛アリ、數多ク互生ス、茎葉ヲ切レバ白汁出ヅ、茎梢ニ五葉對生ス、ソノ上ニ五枝ヲ分チ出ス、各二三寸此レニ附ク、葉ハ狀チ短ク尖リテ脚葉ノ形ト異ナリ、枝端ゴトニ四葉對生ス、三月ニ其上ニ小花開ク、四瓣淡紫黄色、花中ヨリ細茎ヲ出シ實ヲ結ブ、續隨子ニ似テチイサク、僅ニ一分餘、皮ニ疙瘩アリ、中ニ子三粒アリ、花下ノ四葉黄色ニ變ジ、遠ク望メバ花ノ如シ、四月ニ苗枯ル、根ハ年ヲ經テ枯レズ、形チ肥長ニシテ叢生ス、大ナルモノ徑一寸許リ、皮白色微黄ヲ帶ブ、此ヲ切レバ白汁出ヅ、漆。頭。蕳。茹。ハ和産ナシ、生根享保年中ニ唐山ヨリ來ル、ソノ時ハ狼毒ト名ケテ渡ス、唐山ニテ蕳茹ヲ誤リテ狼毒ト呼ブコト、集解時珍説ニ辨ゼリ、冬ノ末春ノ初、宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、其色紅紫觀ツベシ、二三月ニハ圓茎高サ一尺餘、葉互生シテ密ナリ、微シク毛アリ、茎葉ヲ切レバ白汁出ヅ、茎梢ニ一所ヨリ五枝ヲ對シ出シ、五方ニ分ル、ソノ葉及花實ノ形

狀ハ、昔ノウルシニ同ジ、四月ニ至テ紅葉シテ根枯ル、ノウルシノ枯レントスルトキニ、葉ノ色黃春ノ芽モ亦甚紅ナラザルニ異ナリ、其根ハ大ニシテ短キ蘿蔔ノ形ノ如シ、黃赤色微黑ヲ帶ブ、コレヲ切レバ黃汁ヲ出ス、ノウルシノ根ノ細クシテ白汁ヲ出スニ異ナリ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

信濃國十七種、略○中 蔄茹卅七斤、 美作國卅一種、略○中 茈茹蔄茹各一斤六兩、

〔本草和名 草 十一〕草麻 仁諝音蔽注云、其子如蜱、故名蓖麻、 一名㽵蜱、一名蜱麻、一名野蜱、一名仙人骨、一名故蜱、已上五名出雜要訣 和名加良加之波、

〔倭名類聚抄 草 二十〕草麻 本草云、草麻、上音蜱、和名加良加之波、一云、加良衣、

〔和爾雅 草木 七〕蓖麻 カラカシハ

〔朱氏談綺 下 草木〕蓖麻 ヒマシ

〔和漢三才圖會 毒草 九十五〕蓖麻 ひま 和名加良加之波、一云加良衣、

本綱蓖麻夏生苗葉、其莖有赤有白、中空、其葉似大麻葉而甚大、每葉凡五尖、夏秋間椏裏抽出花穗、累累黃色、高丈餘、每枝結實數十顆、上有刺攢簇、如蝟毛而軟、凡三四子合成一顆、枯時劈開、狀如巴豆、殼內有子、大如豆、殼有斑點、狀如牛蜱、再去斑殼、中有仁、嬌白如續隨子仁、有油可作印色及油紙、子無刺者良、子有刺者毒、

子 甘辛 有毒 外用屢奏奇効、但不可輕內服、搗膏點六畜舌根下、卽不能食、點肛內、卽下血死、其毒可知矣、凡服蓖麻者、一生不得食炒豆、犯之必脹死、 治口眼喎斜、搗膏左貼右、右貼左卽正、又催生下胞、取七粒去殼研膏塗脚心、若胎及衣下便速洗去、不爾則子腸出、如子腸出、卽以此膏塗頂、則自入也、

油 連殼搗取 乃外科要藥、蓖麻油能引邪氣入內、蓖麻油能拔病氣出外、故諸膏多用之、

按蓖麻和名唐栢 カラカシハ 言其葉似栢、其仙 今俗稱唐胡麻、出於和州者良、紀州藝州之產次之、近頃煉成、

用代蠟燭、又取油法、萞麻仁去殼、五升用水一斗煎之、沫出盡取一點入水、不散爲度、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕萞麻　カラヱ和名鈔　カラガシハ同上　トウゴマ今名　ウノゴマ

遠近子寶○仁和方書、中略

一年ダチノ草ナリ、春分種ヲ下ス、苗高サ一丈許、莖ハ直上シ、枝ナク圓ニシテ空虛、節アリテ竹ノ如シ、徑リ一寸餘、皮白色ニシテ粉アリ、又紫色ナルモノアリ、葉節ニ互生ス、大サ一尺餘、モミヂ或ハ八角金盤ノ葉ノ如シ、七ツ或ハ九ツニ深クキレ、岐ヲナシテ鋸齒アリ、附方ニ九尖萞麻ノ名アリ、葉モ白色ヲ帶ブ、秋ニ至テ莖梢或ハ葉間ニ花アリ、日ニ向テ開ク、黃白色碎屑アツマリテ、蒴葉ノ鈴ノ如シ、實ハ圓ニシテ七分、外ニ柔刺アリテ栗毬ノ如シ、時珍子無刺者良ト云、和產ナシ、熟スレバ中ニ三子アリ、形雲實ノ如ク、白黑斑アリ、此仁ヲ採リテ油ヲ搾リ、印色ニ合セ、及ビ紙ニヒクベシ、秋深テ苗根共ニ枯ル、

〔多識編 二石草〕地錦、今案仁志岐久左、異名雀兒臥單、綱目

〔和漢三才圖會 九十八石草〕地錦　醬瓣草　地朕　草血竭　承夜　血風草　地噤　血見愁　夜光

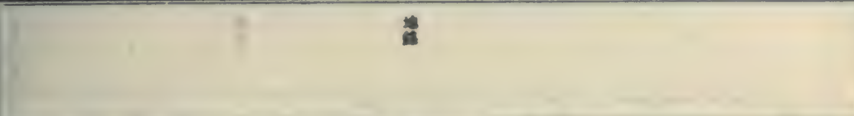
雀兒臥單　馬蝗草　猢猻頭草　俗云赤草

本綱、地錦田野寺院及階砌間有之小草也、就地而生、莖赤葉青紫色、夏中茂盛、六月開黃花、或云紅花也、結細實色黑、狀如蒺藜之朶、斷莖有汁、此草馬蝗雀兒喜聚之、故有其名、

葉辛又云苦　通流血脉、亦治氣、能散血、止血、利小便、故血淋血痢臟毒、及婦人血崩、皆服之有効、金瘡出血不止者塗之良、

按地錦原野敷地生、莖赤勁有白汁、葉似馬齒莧而薄小、六月開小赤花、結小角兒、中有細子、莖葉赤有地錦之名、與此不同、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕地錦　ニシキサウ　チヽグサ備後　アカクサ攝州住吉　トウアミサウ石見



一名鐵線草(救荒本草) 小蟲兒臥單(同上) 小蟲臥單(本草原始) 挨地錦(同上)

飯校正ニウブラグサト謂ズルハ是ニ非ズ、此モ小草ナリ、夏ヨリ子生ズ、莖ハ地ニ就テ布キ上立セズ、纖細ニシテ赤色毛アリ、長サ數寸、葉ハ兩對ス、形雀舌草(ハコベ)ニ似テ短ク、廣シテ尖ラズ、綠色ニシテ微紫ヲ帶ブ、背ニ毛アリ、六月五瓣ノ小赤花ヲ開ク、馬齒莧(スベリヒユ)花ノ如シ、實ヲ結ブ、形圓ニシテ三角、大サ黍ノ如シ、綠色、內子靑白色、秋後苗根共ニ枯ル、救荒本草ノ地錦苗ハ紫菫(ムラサキケマン)ナリ、木達ノ附錄ノ地錦ハツタナリ、釋名ニ載ル所ノ地朕、地噤、夜光、承夜ノ四名ハツタノ一名ナリ、コヽニ入ルヽハ誤ナリ、

〔本草和名十草〕鈎吻(楊玄操音上古豆反) 一名野葛、一名固活、(出釋藥性之) 一名除辛、一名毒根、一名毛茛、又有陰命、(已上四名) (出兼名苑) 一名巳人、一名毒草、(已上二名出釋藥性) 一名大陰之精、(出大清經) 一名黄葛、(陶景注、出雜要訣、) 一名胡蔓、(出拾遺) 草、

〔多識編二草〕鈎吻、今案、伊。奴。久。佐。

〔書言字考節用集六生植〕鈎吻(ノガヅラ)(一名大陰草、有大毒、) 冶葛(同) 鈎吻(ノガ) 斷腸草(同) 冶葛(ドク)(又作野葛)

〔重修本草綱目啓蒙十三下草〕鈎吻 一名香草(小品) 黄野葛(本經逢原) 皂葛(山谷便方) 苦吻(廣東新語) 苦藥 苦蔓公 大葉茶 妖草(共同上) 増、一名胸吻(泉州府志)

蔓生、黄精葉、芹葉等數種アリ、蔓。生。ノ。者。ハツタウルシ、一名ヤマウルシ、カキウルシ、(雲州、阿州、)山野ニ多シ、地錦(ツタ)ノ如ク木石ニトリ附テ生ジ、物ニ纏ハズ、三葉ゴトニ攅生シ、漆葉ニ似テ大ナリ、故ニツタウルシト名ク、又三葉ノ鈎吻トモ云フ、綵甍葉如柹ト云是ナリ、夏葉間ニ黄白色ノ花ヲ開ク、地錦ノ花ニ似タリ、實モ亦相似タリ、蔓ノ末ハ木石ニ著カズ、垂ルコト二三尺許、(中略)○増、蘭山翁野葛ノ三葉ゴトニ攅生シ、漆葉ニ似テ大ナリ、故ニツタウルシト名クト云ハ穩ナラズ、ツタウルシノ年ヲ經ザルモノハ三葉ナレドモ、深山ニ生ジテ數年ヲ經ルモノハ、物ニ纏ハズト雖ドモ、喬木ニ依テ直上シテ、其木ニ根ヲ下スコト、常春藤ノ如シ、ソノ葉左右各七八葉アリテ、全

眞辟葛

ク漆葉又ハゼウルシノ葉ノ如シ、其嫩葉ノ三葉ナル者ト大ニ異ナリ、秋ニ至テ紅葉スルコト亦漆葉ノ如シ、故ニツタウルシ、ヤマウルシ等ノ名アリ、

〔書言字考節用集六生植〕薜荔（木名、木蓮、本草、四時不凋、厚葉堅強、大于絡石、不花而實者、）　木饅頭（同）　眞辟葛（同、古語拾遺）

〔倭訓栞前編二十九〕まさきのかづら　古語拾遺に眞辟葛と書り、古事記に天之眞拆と見ゆ、されど眞榮の義なるべし、常葉に榮ゆる葛也、神事に專ら用るは、眞幸の義とも取れるなり、延喜式に眞前葛と見え、日本紀の歌にまさきづらとよみ、万葉集に多薯蕷葛、又多薯蕷都良とも書り、いや常しきにとも、尋てゆければともつゞけるは、常盤に長くはひ續くをいふなり、薜荔也といへれど、薜荔はいたび也、杜仲の葉に似て小に蔓生するもの一種ありて、蔓甚長く、皮中に木綿あり、是也といへり、仙覺はさねかづらと訓じたれど、古今六帖に、まさきかつらとて、右の萬葉の歌入たり、

〔冠辭考九麻〕まさきづら〇中略眞さきづらの事は、万葉にいや常しきにとよみ、多薯蕷とも書つれば、常に榮る葛なるは志るし、さてその常葉なる故に眞榮葛と云を、略きてまさきづらとはいふ也、かの眞さか木てふも眞榮樹の意なるを思ふべし、何となれば古へ神事にも公事にも、言あげするには、常盤に堅盤になど讃稱る物多し、そのをりは木をもかづらをも常葉なるをもてすめれば、そをほめたゝへて、眞榮樹といひ、眞榮葛とはいへる也、且神社によりて松杉樫などをさか木といひて、一種ならぬをおもふに、かづらも常葉なるをば、すべて眞榮づらといふべし、然ればいと古へはまさきかづらも、神社によりて用ゐなれしは、さまざま有べきが中に、一つによりていはゞ、その常葉なるさか木が中に、かの鏡幣をかけ髻華にさしなどせしは、慥なる據あり、是が如くまさきかづらといふ中に、襷とし鬘とせしは一種有つらんかし、そのよしは古今集に、み山にはあられふるらし、外山な

るまさきのかづら色づきにけりとよみしは、總て常葉なる草木も、冬の初めには、去年のふるはの色づき落る物なるが、ことに山の岩木などに纏へるとこはかづらの、葉は南天燭に似て黑み有が、冬の初に古葉のえもいはず紅づる侍り、是ぞ山ゆく時專ら目に付てみゆれば、右の如くはよみつらん、是を思ふに此かづらをまさきづらといひて、さて神事には用ゐつらめと覺ゆる也、

〔大和本草 八草〕正木ノカヅラ　其葉花實トモニマユミニ同ジ、只其カヅラ甚長シ、皮ノ中ニ絲アリマユミノ如シ、漢名シレズ、是杜仲ノ別種ナルベシ、マユミヲ正木ト云、蔓生ト木生トノカハリニテ一物ノゴトシ、和語ニ長キト云枕詞ニ、マサキノカツラト云、古今集序ニモカケリ、此カツラ甚ナガクノブル故ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕扶芳藤　マサキノカヅラ　ツルマサキ　ツタマサキ 和名　一名巴山虎 鎮江府志
葉花實共ニマサキニ異ナラズ、樹上ニ蔓延シ、四時青翠、コレ藤本ノマサキナリ、

〔古事記 上〕天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影而、爲鬘天之眞拆而、○下略

〔古語拾遺〕令天鈿女命 ○中略 以眞辟葛爲鬘、○中略 巧作俳優、相與歌舞、

〔日本書紀 十七 雄略〕七年九月、勾大兄皇子 安閑 ○中略 親聘春日皇女、○中略 口唱曰、○中略 伊裒我提嗚、倭例儞魔柯纏毎、倭我堤嗚麼、伊裒儞魔柯纏毎、麼左棄逗囉、多多企阿藏播梨、○下略

〔萬葉集 七雜歌〕芳野作
皇祖神之宮人、冬薯蕷葛、彌常敷爾、吾反將見、

〔古今和歌集 二十大歌所御歌〕とりもの、歌
み山には霰ふるらしと山なるまさきのかづら色付にけり

〔後撰和歌集 十五雜〕家に行平朝臣まうできたりけるに、月のおもしろかりける夜、さけなどたうべ

鳳仙花

て、まかりたゝんと出けるほどに、

てる月を正木のつなによりかけてあかず別るゝ人をつながん　河原左大臣

かへし　行平朝臣

かぎりなき思のつなのなくばこそ正木のかづらよりもなやまめ

〔十六夜日記〕十九日、〈建治三年十月、中略、〉すのまたとかやいふ川には、舟をならべて、まさきのつなにやあらん、かけとゞめたるうきはしあり、いとあやうけれどわたる、

〔饅頭屋本節用集〈草保木〉〕鳳仙花（ホウセンクワ）

〔多識編〈二草〉〕鳳仙、今案保爾奴岐、俗云保宇世牟久和、

〔書言字考節用集〈六生植〉〕鳳仙花（ホウセンクワ）〈金鳳花、菊婢、小桃紅、並同、〉　鳳仙花（ツマクレナヰ）　金鳳花（キンホウゲ）〈鳳仙花一名、又異種同名多、〉

〔尺素往来〕先為庭上之景、荘厳前栽仕候、〈中略〉秋花者、〈中略〉鳳仙花、

〔大和本草〈七花草〉〕鳳仙花（ツマクレナイ）　一名金鳳花、又名夾竹桃、其實急性子、其花數品アリ、女兒此花ト酢漿草ノ葉ヲモミ合セテ爪ヲ染ム、紅色トナル、六七月ニ花開ク、其實ハ骨鯁ヲ治、

〔重修本草綱目啓蒙〈十三下濕草〉〕鳳仙　ホウセンクハ〈通名〉　ツマグレナキ〈古名〉　ツマベニ　ツマ子　ホネヌキ〈肥前〉　ツマグロ〈筑前〉　ツマグレ〈同上〉　トビシヤゴ〈豫州〉　ミヤコワスレ〈藝州〉　カウセンクハ〈南部〉　一名染指草〈壽世保元〉　指甲花〈典籍便覽〉　鳳兒花〈汝南圃史〉　透骨草〈同上、同名多シ、本草原始ノハ詳ナラズ、救荒本草ノハ金鳳草、透骨子ハ淡竹葉ナリ、〉　指甲草〈廣東新語〉　指甲桃〈同上〉　滿堂紅〈寧波府志〉　夾指紅〈山東通志〉　增、一名鳳娘〈西湖遊覽志〉

春種ヲ下ス、宿子地ニアルモ亦自生ス、莖ハ圓大、葉ノ形桃葉ノ如ク密ニ互生ス、葉莖共ニ淡綠色、夏ニ至リ葉間ゴトニ花ヲ開ク、單葉ノ者ハ二瓣、二葉ノ者ハ多瓣ナリ、色ニ品多シ、紅アリ、紫アリ、紅花紫蕚アリ、淡紅アリ、水紅（サクライロ）アリ、雜色（トビイリ）アリ、白花ノモノ稀ナリ、唐山ニハ黃花ノ者モアリト云、和

ツリフネ草

直未ダ見ズ、飛入ノ者ヲ倒影花〔群芳譜〕又酒金〔秘傳花鏡註ニ白實紅點〕ト云フ、其實圓ニシテ微シク長ク末尖ル、果蒂ノモノハ桃實ノ形ニ似テ小ク、千瓣ノモノハ瘦セ狹シ、熟シテ物ニ觸レバ、綻ニ皮自ラ拆ケ、卷テ拳ノ如シ、ソノ勢ヒニ因テ中子飛出、故ニ急性子ノ名アリ、コノ子ヲ骨鯁ニ用ユ、唐山ニテハ此花ヲ以テ女兒ノ爪ヲ染ム、長崎及筑前ニテモ然リ、故ニツマクレナヰノ名アリ、

〔重修本草綱目啓蒙九 芳草〕赤車使者〔唐本〕○中

增、赤車使者ハツリフネサウナリ、集解蘇恭ノ說參攷スベシ、山中溪澗ノ傍ニ生ズ、高サ一二尺、多ク枝ヲ生ジテ橫ニ繁茂シ易シ、ソノ莖紫赤色、多ク水氣ヲ含ミ、透明潤徹ニシテ蜥蜴ノ色ノ如シ、莖ノ背ハ淡綠色ナリ、葉莖ニ互生ス、形香薷（ナギナタカウジユ）ノ葉ニ似テ大ナリ、又羅勒ノ葉ニ似テ長シ、大抵長サ二三寸、濶サ一寸五分許ニシテ、前後頭ニ尖ル、秋ニ至テ葉間ゴトニ細枝ヲ垂テ、其末ニ花ヲ開ク、橫ニ長キコト一寸五分許、恰モ船ヲ釣タル形ノ如シ、故ニツリフネサウト呼ブ、花後莢ヲ結ブ、實ヲ裹テ生ジ易シ、又キツリフネト云アリ、尋常ノモノヨリ纖嫩ニシテ、莖葉共ニ淡綠色ナリ、甚ダ水氣ヲ含ム、秋ニ至テ黃花ヲ開ク、花ノ形微シク異ナリ、クチナハジヤウゴハ赤車使者ノ一種ナリ、

清風藤

〔重修本草綱目啓蒙十五 蔓草〕清風藤　詳ナラズ　一名海風藤〔藥性纂要〕　增、一名青風藤〔綱目拾遺〕

增、此條、集解ノ文甚ダ短クシテ考フベカラズ、然レドモ釋名ニ青藤ノ名アル時ハ、廣東新語ノ青藤ト同物ナルベシ、百品考ニ云、青藤和名アヲカヅラ。。。。、廣東新語曰、有青藤、仔葉長三四寸、多芒刺、莖大如指、而堅靭、人日用之、比花地之用柳條、花名假素馨、煎湯以洗瘡疥甚良、肥後ニ自生アリ、蔓生山藤ノ如ク、舊莖ハ褐色、新條ハ色青シ、鉤刺多シ、葉ノ狀細長ニシテ深綠色光アリ、長サ三四寸、幅七八分、春未ダ葉ノ生ゼザル前ニ花アリ、五瓣ノ小黃花、素馨ノ花ニ似テ至テ小ナリ、大サ三分許、花後圓實ヲ結ブ、熟シテ深碧色、小葉麥門冬ノ實ノ如シ、冬月葉落ツ、莖ハ山藤ノ如ク、堅靭ニシテ用

ヲナスベキ者ナリ、

〔百品考上〕青藤　和名アヲカヅラ

廣東新語、有青藤仔、葉長三四寸、多芒刺、莖大如指而堅靭、人日用之、比北地之用柳條、花名假素馨、煎湯以洗瘡疥甚良、

肥後ニ自生アリ、蔓生山藤ノ如ク、舊莖ハ褐色、新條ハ色青シ、鉤刺多シ、葉ノ狀細長ニシテ深綠色光アリ、長三四寸、幅七八分、春イマダ葉ノ生ゼザル前ニ花アリ、五瓣ノ小黃花、素馨ノ花ニ似テ至テ小ナリ、大サ三分許、花後圓實ヲ結ブ、熟シテ深碧色、小葉麥門冬ノ實ノ如シ、冬月葉落ツ、蔓ハ山藤ノ如ク、堅靭ニシテ用ヲナスベキ者ナリ、

〔採藥使記相州中〕照任曰、相州猿島ヨリ清風藤ヲ出ス、其葉山茶ノ葉ニ似タリ、先生按ズルニ、本艸ニ清風藤ノ葉ノ形狀ヲ載セズ、輕卒ニハ藥用トスベカラズ、

〔伊呂波字類抄江植物附植物具〕蒲萄エビカヅラ　蒲萄　葡萄　龍漬　芝部　藍　ノ子

〔書言字考節用集六生植〕葡萄ブダウ一名草龍珠、事見二西陽雜俎一、蒲桃同　漢名

〔草木六部耕種法十九實部〕蒲桃モ名譽ノ果物ナリ、種類ニ黑、紫、白ノ三色アリ、白色ナル者ヲ上品トス、且其白色中、皮美ク透明ガ如クナル者有リ、此ヲ水晶蒲桃ト名ク、卽是ヲ最上種トス、宜ク此種ヲ作ベシ、此物ハ種子ヲ蒔モ、能生ズル者ナレドモ、早ク繁蔓テ實ヲ結シムルニハ、揷木ニスルヨリ良ハ無シ、地ヲ撰デ能揷タルハ、其年內ニ實ヲ結ブ者ナリ、且其蔓ノ繁リ延ルコト極テ、盛ニシテ、一年ノ中ニ四方數丈ノ間ニ蕃衍スル者ナリ、　此ヲ作ル地ハ、能ク肥タル北向ノ山畑ニ宜ク、或岩石ノ間ナル土地モ能ク繁榮スル者ナリ、或水田ヲ乾テ此ヲ揷木スルトキハ殊更ニ宜シ、此ヲ穿揷スル法ハ、去年出タル枝ノ無名指太ナル、利刀ヲ以テ、長三尺許ニ斷リ、正月下旬ヨリ二月中旬頃マデノ間ニ揷ベシ、先ノ細棒或竹杖等ヲ用テ、一尺程ヲ隔テ地ニ穴ヲ二ツ突ベシ、其深五六

寸ニテ宜シ、備其葡萄ノ枝ノ本末ヲ其穴ニ插込テ、其根邊ノ土ヲ輕ク蹈付置テ、乾過ザル許ニ泔水ヲ澆ギ、時々潤ストキハ、春暖ノ陽氣ヲ得テ直ニ芽ヲ出ス者ナリ、最初ノ間ハ其根邊ニ稱々ノ雜草生ズルト雖ドモ、耘ラズシテ捨置クベシ、土用過ニ至リ蔓ノ顯延タルニ及テ、他草ヲ悉耘リ根ヲ去ルコト一尺餘ヲ隔テ、土ヲ穿リ竪直ヲ埋ベシ、寒中ニ至テ其插タル枝ヲ能ク圍シテ、二本ノ內ノ强壯ナル一本ヲ遣シ、弱キ一方ヲバ利刀ニテ伐棄ベシ、且又寒中糞ヲ埋ルヲ要トス、翌年ノ二月マデニ棚ヲ構テ、其上ニ蔓延シムベシ、挿木ハ二年目ヨリ必實ヲ結者ナリ、　蒲桃ヲ多ク作ランコトヲ欲スルトキハ、棚亦數多構ズンバ叶ベカラズ、凡蒲桃棚ハ大抵長五間橫二間、高八九尺ニモシテ、大風ニ吹倒サレザルヤウ、丈夫ニ構ベキコト專一ナリ、蒲桃ハ幾本ニテモ適宜ニ穿插シテ蔓條シムベシ、棚一ケ所十坪ヅヽナルヲ以テ、一段ノ畑ニ二十二棚以上ハ構難シト知ベシ、備其一棚ノ葡萄能ク豐熟スルトキハ、三四駄ノ實アリ、然レドモ此ヲ二駄ヅヽト積テモ、二十二棚ニテハ四十四駄ノ實ナリ、甲州山梨郡勝沼岩崎二村ハ、葡萄名產ニテ、夥ク此ヲ作リ、年々八千駄許ヅヽ生ズト云フ、其中三千駄許ハ其ノ處ニテ鬻キ、二千駄許ハ、乾葡萄及葡萄膏、葡萄醃等ニ製シ、葡萄一駄ト云フハ、十六貫ニテ、一籠ノ量一貫七百目ナリ、籠ハ巾五六分ナル皮竹ノ篾ヲ五枚ニテ組ミ、橫ハ二枚ナリ、縁ハ底ノ共巾一寸、皮付竹ニシテ、橫巾九寸、長一尺三寸五分ニ製ス、此ニ葡萄ヲ入ルニハ、先小葡萄ノ宜カラザルヲ一房ヅヽ、籠ヲ中央ニシテ左右ニ分テ、又其中ニ籠丈ニ小葡萄一房ヲ切テ使ヘ、其上ニ宜キ實ノ糸立ノ如キ者ヲ敷キ、其上ニ二重ニ葡萄ヲ三貫ニ量ルコトナリ、且籠詰ノトキニ、レヤムツヒナツ切實ア、色鮮ナルヲ上ニ置キ、一籠ニ五十六七顆ヨリ六十顆ヲ限トシ、大ナルハ五十一二顆ナルモ有リ、其餘三千餘駄ハ江戶ニ輸テ賣リ拂フ、勝沼葡萄ヨリ江戶マデ一駄ノ賃金三步ヅヽナリ、宿ニスルトキハ金二步ニテモ滯ルコトナレドモ、新ノ如クスルトキハ中値モ値ナリ、且又實モ腐テ損多シト云フ、江戶問屋ハ神田ニ三軒、宮田屋、鵜田屋、岩城屋、四谷ニモ一軒アレドモ、此ニハ下品ナル葡萄ノミ輸ル由ナリ、大概直段一駄金二兩一步位ヨリ、金三兩一步位マデ、小判一兩七十匁、銀一割ノ口錢ニテ、端值ハ八掛六四ニテ割、仕切ハ十月十一月晦日拂ニ當テ、從來滯リナルコト無ク、時ニ內金ヲモ請取ト云フ、　勝沼岩崎二村ニテ葡萄ヲ作ルニハ、大抵一畝二本、一段二十本、一町二百本、炎熱ノ年ニハ一本ノ善術スル者ハ一駄餘リモ實ヲ生ズ、每年五月中頃ニハエノミト稱シテ、豐熟ノ姿顯ル者ナリ、甲州ノ葡萄棚九尺間ニ七八寸、間リノ

斯ノ如キ三俣、本八尺許ナルヲ二尺埋込テ、高六尺ニ棚ヲ造リ一間ニ渡シ、竹五本ヅヽ架ルヲ定法トス、毎年正月下旬ヨリ二月上旬迄ニ、竹ノ縄目ヲ結ビ直ス、芽出ノ時分ニ至リ俗ニブンテウト云フ小蝶、日夕ニツルミテ飛來テ枝ニ泊リ、朝日ノ出ル頃ニ皃ヲ枝ニ產ミ付テ飛去ル、其皃悉ク虫ト化テ葉モ芽モ喰ヒ盡スニ至ル、日出ザル前ニ棚下ヲ巡察シテ、見當リ次第ニ打殺ベシ、既ニ日光ニ遇フトキハ飛コト速ニシテ及ベキニ非ズ、万一此ヲ殺サヽルトキハ、枝ノ下裏ノ方ニ皃ヲ產ミ付ケ置クヲ以テ、小刀ニテ削去ベシ、此ヲ捨置クトキハ大ナル禍ナリ、又羽光テ三分許ナル小金虫(コガネムシ)ノ如キ蟲ヲ、木皮間ヨリ生ズ、此ヲモ速ニ取リ去ベシ、別ニダイギリト名クル蟲アリ、此ハ葡萄二年木三年木ノ枝中ヨリ生ズ、此虫生ジタル枝ヲ上ヨリ視レバ、少シ黒ク色附者ナリ、其處ヲ小刀ニテ削リ虫ヲ去ベシ、此ヲ早ク除ザレバ木ヲ喰廻ガ故ニ、其處ヨリ根本ハ害シト雖ドモ、其ヨリ末ハ皆悉ク枯者ナリ、　甲州ニテハ實生ノ葡萄ニハ實結ザル者ト心得テ、專ラ壓條(トリキ)ト挿木シテ其株ヲ多ス、然レドモ是ハ未ダ實生ニ實ヲ結シムルノ法ヲ知ラザルナリ、且其肥培ヲ用ルモ、大地ニ溜桶ヲ埋メ雨覆シテ下水ヲ湛ヘ、酒粕ト糠ヲ饒ニ調和シテ、寒中根邊ニ濃糞ヲ澆ギ、且每年薄キ、水糞ヲ用ルノミ、未ダ葡萄ヲ作ルノ善ヲ盡セル者ニ非ルナリ、又勝沼ニテ壓條ニシタル二年木ヲ、一根金二銖ヅヽニ鬻ク、右様ノ事ニテ、右二村每年万金以上ノ盛產ナルヲ觀レバ、葡萄ヲ作ル利潤ノ廣大ナルコトヲ察スベシ、若此ヲ海運自由ナル土地テニ作ラバ、其利愈大ナルベシ、近來葡萄ヲ作ル者ハ、甲州種ヲ稱スト雖ドモ、我家別ニ良法有テ、其實ノ小者ハ培養ヲ以テ大粒ニシ、其味ノ甚酸シテ且苦者ヲバ糞苴ニテ、此ヲ甘美ニスルヲ以テ、白蒲桃ノ種ナレバ、何レニテモ早ク插テ早ク蔓延シムルヲ利トス、但水晶種ナレバ殊ニ宜シ、　乾蒲桃ヲ製スルニハ、能ク大ナル實ノ未ダ熟過ザルヲ採テ、蒲桃二升ナラバ、先ヅ銅鍋ニ蜂蜜一升ヲ煎ジ、其沸タルニ臨ミ、蒲桃ヲ入レテ五六沸モ煮染メ、籠ニ揚テ蜜ヲバ垂シ、此ヲ曬乾ニスルトキハ、

多ヨナラズ、曾能ク干固モノニテ、其味極美ナリ、且能ク手入スルトキハ、土用ヲ越テ貯ルト雖ドモ、損スルコト無シ、近來漢土人此ヲ時々持來ルコト有リ、舶來ナルハ最上品ニシテ佳味ナリ、又甲州ニテモ干葡萄ヲ製ス、然レドモ其品大ニ舶來ノ者ニ劣レリ、其製法ノ麁ニシテ、蜜亦下品ナルガ故ナリ、嚴老（○佐藤信淵）先年土佐產ナル上蜜ヲ用テ製セシニ、甘味極テ美ナルコト、遙ニ舶來ノ上ニ出タル佳品ヲ得タリ、故ニ干葡萄ヲ上品ニ製セント欲セバ、宜ク極上ノ蜜ヲ用ベシ、

〔甲州葡萄栽培法上〕第一章　甲州地方葡萄樹繁殖來歷

夫レ葡萄ノ我國中ニ蔓延シタル所ノ初メヲ繹ヌルニ、未ダ悉ク其由來スル所ノ地方、及ビ其經歷スル所ノ年度ヲ詳ニスルコト能ハズト雖モ、（○中略）文治二年後鳥羽天皇ノ御宇ニ當リ、甲斐國八代郡祝村（今上岩崎村）ニ屬セル所ノ、大善山中ニ一場地アリ、里人之ヲ字シテ城の平ト稱フ、往古ヨリ此ニ石尊宮ノ祠ヲ安ク、每年三月二十七日ヲ以テ之ヲ祭ルヲ例トシ、遠近ノ里人相群賽セリ、就中雨宮勘解由（現今雨宮作左衞門ノ先祖ナリ）ト云ヘル者アリ、固ヨリ其村人タルヲ以テ、是歲モ亦此ニ來リ賽スルニ會セシガ、偶其路傍ニ一種自生ノ蔓生植物アルヲ發見シ、即チ衆ニ觀シ云ク、此植物ハ山中ニ於テ未ダ曾テ見ザルノ物ニシテ、又人ノ之レ有ルヲ語ルモノナカリシハ、亦眞ニ奇ナラズヤ、案ズルニ其莖蔓及ビ皮葉ノ形狀ハ、大ニ尋常ノ山葡萄ト異ナル所アルモ、又他ノ之ニ類似スルモノナシ、蓋シ其一種ノ變生シタルモノナランカ、若シ我思想ノ如クニシテ美果ヲ得ルコトアラバ、即チ是レ尊宮ノ賜ニシテ、永ク祭賽ニ供スルニ足ルモノト云フ可シ、故ニ今衆ト相識リ、之ヲ我ガ園中ニ移植シ、以テ其生長ヲ試ミントスト、然ルニ衆皆之ヲ疑ヒ、敢テ其可否ヲ云フ者ナシ、是ニ於テ同氏ハ愛物ノ情更ニ禁テ已マザレバ、遂ニ之ヲ城正寺ノ家園ニ移植シ、勤メテ之ヲ培養スルコト、恰モ慈母ノ孩嬰ヲ鞠育スルガ如ク、專ラ其結果ノ秋ニ至ルヲ待シトゾ、（是ヲ甲州ニ於テ葡萄ヲ栽培スルノ第一期トス、此緣由アルヲ以テ、今尙ホ土人等、城の平ノ葡萄始生

紫葛

地ヲ呼テ取苗代(ナヘシロ)ト云ヒ、城正寺ノ雨宮ヲ以テ栽培家ノ首祖トスルニ至ル、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕一葡萄和名エビ又作蒲桃 本州名産ナリ、岩崎村第一ニシテ、勝沼驛ノ産之ニ次グ、其它所植アレドモ遙ニ不相及ト云、二村ハ山續ノ畠上ニ架ヲ並ベ設ルコト、市中瓦屋ノ鱗次セルガ如シ、松平甲斐守時、九月ノ獻上物ナリ、今モ猶府中藩鎭ヨリ獻之、又上岩崎村ヨリモ毎年公儀ヘ納ム、八九月ノ間荷駄シテ四方ニ販グ、一駄ノ直金壹兩貳兩許ト云、日ニ曝シ乾ケルヲ干ブドウト云、樹ニテ自然ニ乾ケルヲ最上品トス、拌煉シテ膏トスルヲ蒲桃膏ト云、共ニ珍味ナリ、古童謠ニ、甲州みやげに何にもろふた、郡内しま絹ほしぶだう、芭蕉ノ發句ニ勝沼や馬士は蒲桃を喰ながらイニぶどうを一ツづゝ、蜀都賦ニ、蒲桃亂潰櫻栗罅發ト、本州ノ蜀ニ似タルコト物産ニ至ルマデ皆然リ、又蜀人釀以爲酒、富人藏酒至千斛、十年不敗ト云リ、徂徠詩アリ、甲陽美酒綠葡萄、行霜三更濕客袍、可識良宵天下少、芙蓉峯上一輪高、ト賦セシモ即是ナリ、培養ノ方、冬至ノ頃ニ古藤ヲ剪リ去ルニ法アリ、寒中ニ三度人糞土苴ヲ用フ、酒糟ヲ善トス、春彼岸ニ及ビ、以竹木造架、生芽蔓長スルニ隨ヒ、有用無用ノ條ヲ撰テ透シ去ベシ、季春ヨリ除蟲ニ始マリ、夏中ノ調理ニ至ル、多年練磨ノ功ニ依テ能之スト云、

〔木曾路名所圖會三〕信濃藪原(やごはら)

土産中略〇 葡萄　木曾の諸村みなこれを種る、此邑特に佳味なり、上供す、

〔紀伊續風土記物産五〕葡萄(ブダウ)本草 比加都良(ヒカヅラ)本草和名、於保衣比加都良、醫心方ニ衣美、 綠葡萄(アヲブダウ)本草 水晶葡萄(シロブダウ)本草 紫葡萄(クロブダウ)本草 馬乳葡萄(ナガブダウ)本草

右五種、各郡人家に皆栽う、今市中に售るもの高野領より多く出す、

〔本草和名十一草〕紫葛　和名衣比加都良。

〔倭名類聚抄二十葛〕紫葛　本草云、紫葛、和名衣比加豆良 文選蜀都賦云、蒲萄亂潰、蒲萄音陶、漢語抄云、蒲萄衣比加豆良乃美、

烏蘞苺

〔箋注倭名類聚抄十草〕按證類本草紫葛在草部、蒲萄在果部、又紫葛條引唐本注云、苗似蒲萄、是可證紫葛蒲萄非一物、故本草和名云、紫葛和名衣比加都良、蘡薁和名於保衣比加都良、與漢語抄以蒲萄訓衣比加豆良乃美、其說不同也、源君以本草和名紫葛、漢語抄蒲萄、其和名同、混爲一條、誤、按蒲萄本西域所產、漢無其字、故假借蒲陶字、見漢書西域傳、後人從艸作萄、與訓艸也之萄混、蘇注紫葛云、苗似蒲萄、根紫色、大者徑二三寸、苗長丈許、蜀本圖經曰、蔓生、葉似蘡薁、根皮肉俱紫色、圖經曰、春生多枯、郭上林賦注、蒲陶似燕薁、可作酒、

〔大和本草八草〕紫葛　本草蔓草門ニ出ブ、根紫色春生ジ多枯トイヘリ、和名ガ。ネ。ブ。ト云、是亦蒲萄ニ似タリ、本草ニ根皮搗爛慰癰腫ヲ治ス、搗末醋和封之ト云ヘリ、是押葉ナリ、和方一切無名腫毒ニ、ガネブノ根ノ末糯米粉ト等分、温湯ニ調和シ、患處ニ付ル、鐵毒ニハ勿用、忌鐵、或酒ニ和シテ付ル妙方也、苦澁アリ、又救荒本草蛇葡萄アリ、三才圖繪草木第十卷有蛇葡萄、是亦紫葛ナルベシ、蔓生葉似葡萄而小花、結子如豌豆トイヘリ、ガネブハ根ノ味シブシ、根ニ粉アリ、カラミニハ粉ナシ、カラミハ葉ノ岐フカタ、ガネブハ淺シ、或曰嫩葉老葉カハル故ニ淺深アリ、カラミハ多ク、ガネブハ少シ、カラミヨリモ蒲萄ニヨク似タルハガネブ也、

〔重修本草綱目啓蒙十五草〕紫葛　ガ。ネ。ブ。　カ。モ。エ。ビ。　エ。ビ。ブ。ル。和州

深山幽谷ニ生ズ、苗葉蛇葡萄(ノブダウ)ニ似タリ、或ハ三尖或ハ五尖皆鋸齒アリ、葉ゴトニ鬚アリテ物ニ纏フ、葉紫色ヲ帶ビ光リアリ、紋脈紫色、背モ亦紫色、花實ハ蛇葡萄ニ似タリ、實熟シテ紫色、嫩葉ト秋葉ト紅色ニシテ美ハシ、秋後葉落チ、蔓ハ枯レズ、根紫色ニシテ粉アリ味澁シ、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命見畏而、逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、卽遣豫母都志許賣(此六字以音)、令追、爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄、乃生蒲子(エビカヅラ)、〇蒲子、日本紀作蒲陶、

〔本草和名十一草〕烏蘞苺、一名白芒、一名徭、一名蘵(古皈反)、一名蕿(吐敢反、已上四名出兼名苑)、和名比。佐。古。都。良。、

白歛

（頭註）按白芒以下至菼盧根別名、誤出于此、

〔多識編二蔓草〕烏蘞苺、和名比左古豆留、今按豆。多。、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕烏蘞苺　ヒ。サ。ゴ。ヅ。ル。和名鈔　ピ。ン。ボ。ヅ。ル。　ピ。ン。ボ。ウ。カ。ヅ。ラ。　フ。タ。プ。ル。

五。葉。カ。ヅ。ラ。　カ。キ。ド。ヲ。シ。河州　ヤ。ブ。カ。ラ。シ。　一名珠子草名醫指掌　猪種草同上　祿母藤拾遺方

集驗　五龍草本草述　五葉藤附方　五葉草附猪方蕃　黒蘞正字通

隨地皆生ズ、春末宿根ヨリ苗ヲ生ズ、初出藤葉共ニ赤黒色、漸ク長ジテ淡緑色ニ變ズ、葉互生ス、葉ゴトニ鬚アリテ纏繞ス、其葉一枝五葉、人參葉ニ似テ鋸齒アリ、中ノ一葉尤長シ、夏ニ至リ藤蔓甚繁延ス、故ニヤ。ブ。カ。ラ。シ。ト云フ、六七月枝梢ゴトニ叉ヲ分チ花ヲ開ク、四瓣緑色、大サ一分餘、中心黄赤色四蘂アリ、後圓實ヲ結ブ、大サ南天燭子ノ如シ、生ハ緑色、熟スレバ黒色、秋深テ苗枯レ、根ハ枯レズ、長クシテ藤蔓ノ如ク褐色ナリ、寸斷スルモ春ニ至テ猶苗ヲ生ズ、此草和州南都越後高田越前鯖江土州高智等ノ地ニハ生ゼズト云フ、

〔本草和名十草〕白歛仁諝音廉儉反　一名菟核、一名白草、一名白根、一名昆侖、楊玄操音論　一名甘草、一名蚖蚵、一名良倫、已上三名出釋藥性　一名白臨、出葛氏方　一名菟荄、出雜要訣　和名也。末。加。々。美。、

〔倭名類聚抄二十草〕白歛　本草云、白歛、廉儉反、和名夜末賀々美、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注、作藤生、根如白芷、蘇注、此根似天門冬、一株下有十許根、皮赤黒肉白如芍藥、殊不似白芷、蜀本圖經云、蔓生、枝端有五葉、圖經云、二月生苗、多在林中作蔓、赤莖、葉如小桑、五月開花、七月結實、根如鷄卵、三五枚同窠、皮黒肉白、

〔多識編二蔓草〕白斂、和名可。可。美。久。左。、又云也末加加美、又云保。登、

〔物類品隲三草〕白歛　先輩ホトトスルハ誤ナリ、漢種享保中種ヲ傳テ官園ニアリ、葉五爪龍ニ似テ小ナリ、根ニ塊アリ、秋結實大如大豆、生青熟青碧色、

蔦

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕白斂　和漢通名　一名藟(正字通)　五爪鶴(鶉緑)　苑芙(正字通ニ䕷ヲ引)　加海吐(採取月令)　犬矢吐邑(村家方)

和産ナシ、漢種享保年中ニ渡リ、今傳栽ル者多シ、花戸ニモ亦多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、藤蔓甚長シ、其葉初生スル者ハ圓ニシテ尖リ、次ニ生ズル者ハ三尖トナル、並ニ鋸歯アリテ蛇葡萄(ノブダウ)葉ニ似リ、稍ノ葉ハ變ジテ五叉ヲナシ、叉ゴトニ細葉對生シ鋸歯アリ、莖ニ直葉アリテ甚脚葉ニ異ナリ、葉ノ柄皆赤ニシテ互生ス、其葉ニ對シテ一鬚ヲ生ジ物ニ纏繞ス、四五月鬚末ニ小花簇生ス、五出白色、後圓實ヲ結ブ、大サ豆ノ如シ、初ハ緑色也、碧色紫色ニ變ジ、秋ニ至リ熟シテ白色小黒點アリ、内ノ黒子透見ス、枯ルレバ黄褐色、秋深テ苗枯ル、根ハ雞卵ノ如ク兩頭尖ル、凡一窠ニ數枚攢生ス、皮赤黒色、内ハ白シ、肆中ニ鬻グ者舶來ヲ眞トス、和ハ小ナル蕃薯ヲ斜ニ薄ク切リ乾シテ僞ル、白色ニシテ粉アリ、皮厚ク微褐色ナリ、舶來眞物ハ縦ニ中解シ、皮薄ク淡黒褐色、内ハ白褐色ナリ、

〔延喜式五宮内〕所須藥種　白斂十兩二分

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、(中略)白歛二斤二兩、　尾張國卅六種、(中略)白歛十三斤、(下略)

〔日本書紀一神代〕一書曰、(中略)初大己貴神之平國也、(中略)頃時有一箇小男、以白歛皮爲舟、以鷦鷯羽爲衣、隨潮水以浮到、

〔出雲風土記秋鹿郡〕凡諸山野所在草木、(中略)白歛、

〔本草和名七草〕落石(蘇敬注云、苞絡石木而生、故以名耳、)一名石鯪(仁諝音陵)一名石磋(仁諝千何反)、一名略石、一名明石、一名領石、一名懸石、一名耐冬、一名石血、一名石龍藤(已上三名出蘇敬注)、一名鱗石、一名雲母、一名雲華、一名雲珠、一名雲英(已上五名出釋藥性)一名破血傳(出稽疑)　和名都多、

〔倭名類聚抄二十草〕絡石　本草云、絡石一名領石、(和名豆太)蘇敬曰、此草苞石木而生、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十〕證類本草引作以其苞絡石木而生、故名絡石、本草和名引作苞絡石木而生、故以名耳、此所引脱絡字、蘇敬又云、此物生陰濕處、冬夏常青、實黑而圓、其莖蔓延、繞樹石側、若在石間者、葉細厚而圓短、繞樹生者、葉大而薄、人家亦種之、俗名耐冬、山南人謂之石血、別錄謂之石龍藤、陳藏器曰、絡石生山之陰、與薜荔相似、更有木蓮石血地錦等十餘種藤、並是其類、若呼石血爲絡石、殊誤爾、石血葉尖一頭赤、絡石葉圓正青、蜀本圖經云、生木石間、凌冬不凋、葉似細橘、蔓延木石之陰、莖節著處、卽生根鬚、包絡石傍、花白子黑、陳藏器云、地錦葉如鴨掌、藤蔓著地、節處有根、亦緣樹木、冬月不死、一名地噤、蘇恭注曰、絡石々血、亦此類也、

〔下學集草木下〕蔦蘿二字義同、毛詩蔦與女蘿云云、

〔書言字考節用集六生植〕蔦　蘿同　絡石同　蘿蔦

〔日本釋名草下〕地錦　つたふ也、木の上をつたふもの也、

〔東雅草卉十五〕絡石ツタ　倭名鈔に本草を引て、絡石一名領石、ツタといふと註せり、萬葉集抄には、イハヅナと云ひしはツタ也と釋せり、イハヅナは石綱也、猶絡石といふが如し、ツタの義不詳、ツタとはヘ傳ツタフといふが如し、ツタフとは又ツタヘフと云ふが如し、蔓に蔓延の義と見えたり、

〔倭訓栞前編十六〕つた　倭名抄に絡石をよめり、されど絡石はていかかづら也、或は蔦字をよめれど、新撰字鏡にほとと訓じ、說文に寄生也といへば、やどり木也、和名抄豐前國築城郡に椈木あり、集韵に椈同蔦と見ゆ、地錦を訓ずべしといへり、海道記に蔦をよめり、つたかづらともいひて、蔓延するものなれば、傳ふの義也、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕木蓮

地錦　ツタ　マツナグサ古名　一名地朕嘉祐補註本草　承夜同上　夜光同上

山野ニ皆アリ、其蔓樹石土壁ニ著キ鬚根ヲ生ジ、物ニ纏繞セズ、春嫩葉ヲ舊藤ヨリ互生ス、形三尖

葵 錦葵 蜀葵 冬葵

ニシテ鋸齒アリテ滑澤ナリ、小ナル者ハ二三寸、大ナル者ハ一尺許、又三葉ニ分レテ隨軍茶葉ノ如クニモナル、又夏巳後ニ生ズル葉ハ圓尖ニシテ鋸齒アリ、大サ一寸ニ登タズ、夏葉間ニ花ヲ生ズ、淡黃色數十攢簇ス、五出ニシテ二分許、後圓實ヲ結ブ、熟シテ秋ニ至リテ其紅葉美ナリ、故ニ人家ニ栽テ、樹身或ハ屋壁ニ延布セシメテ之ヲ賞ス、

〔伊勢物語上〕昔男ありけり、其男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまのかたに、すむべき國もとめにとて行けり、〇略 中 うつの山にいたりて、わがいらんとする道は、いとくらうほそきに、つた。かへでは茂り、物心ぼそくすゞろなるめをみる事と思ふに、す行者あひたり、〇下略

〔玉葉和歌集五秋〕題しらす 前大僧正慈鎭

年をへて苔にうもる、古寺の軒に秋あるつたの色かな

〔新撰字鏡草〕葵芥（同平聲反、地名、調度也、又巨惟反平、阿保比。）蔨（古買反、舊葵加。夏。保。比。）

〔本草和名十八〕冬葵子（陶景注曰、秋種葵、覆養經冬至春作子、謂之冬葵子、）一名靑葵、（出雜要訣、）一名姑活、（出疏文、并冶葛也、）和名阿布比乃美、葵根（陶景注曰、冒霜主、）春葵子、（仁諝音、赤耿、數曰、牟、北人謂之[illegible]）蘆勒、（[illegible]）、一名西王母菜、（巳上三名出陶景注、）一名香菜、（出雜要訣、）一名冬死夏生、一名野葵、（巳上出雜要訣、）和名阿布比乃[illegible]

。。蕣葵、一名天葵、一名繁露、一名承露、（出陶景注、）一名終葵、一名遊藊（巳上出兼名苑、）和名加。良。阿。布。比。

。。蜀葵、一名戎葵、一名葥、（音翦、花紅紫色、葉如葵、巳上二名出兼名苑、）一名荆葵、一名芘芣（出古今注、）一名吳葵、（出神農食經、）一名石葵、（出七卷食經、）一名錦。葵。（出拾遺、）和名加。良。阿。布。比、

〔倭名類聚抄十七菜〕葵 本草云、葵（音逵、和名阿布比、）味甘寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕按葵有三種、本草葵根陶注云、以秋種葵、覆養經冬至春作子、謂之冬。葵。多入藥用、至滑利、春。葵。子亦滑、是常葵爾、唐本注云、此即常食者葵根也、左傳能衛其足者是也、本草圖經云、

冬葵苗葉作菜茹、更甘美、李時珍曰、葵菜古人種爲常食、今之種者頗鮮、有紫莖白莖二種、大葉小花、花紫黄色、其最小者名鴨脚葵、其實大如指頂、皮薄而扁、實内子輕虛、如楡莢仁、四五月種者可留子、六七月種者爲秋葵、八九月種者爲冬葵、經年採收、正月復種者爲春葵、然宿根至春亦生、是今俗呼寒阿布比、延喜大膳職内膳司等式所云葵、蓋是物也、又爾雅有蔚戎葵、郭注云、今蜀葵也、似葵華如木槿華、本草圖經云、戎蜀蓋其所自出、因以名之、花有五色、李時珍曰、蜀葵春初種子、冬月宿根亦自生、苗嫩時亦可茹食、葉似葵葉而大、亦似絲瓜葉、有歧叉、過小滿後、長莖高五六尺、花似木槿而大、有深紅淺紅紫黑白色單葉千葉之異、昔人謂其疎莖密葉翠萼艶花金粉檀心者、頗善狀之、其實内仁、如馬兜鈴及蕪荑仁、輕虛易種、是今俗呼於保阿布比、或呼波奈阿布比者也、爾雅又有荍蚍衃、郭注云、今荊葵也、似葵紫色、爾雅翼云、比戎葵葉俱小、花似五銖錢大、色粉紅、有紫文縷之、一名錦葵、本草圖經亦云、蜀葵小花者名錦葵、是今俗呼古阿布比、或呼世爾阿布比者、皆冬葵之屬也、又按古所謂阿布比、即加茂祭所用、今俗呼加茂阿布比者是也、其葉似葵葉、故古人誤以葵充阿布比、新撰字鏡所訓當是、至今俗亦訓葵字爲阿布比、謂加茂阿布比、非以阿布比爲葵藿之葵也、本草所載冬葵子葵根、即葵藿之葵、故本草注諸家皆云可食、明非加茂阿布比也、輔仁慣訓葵爲阿布比、誤謂葵藿之葵亦可爲阿布比、遂訓冬葵子爲阿布比乃美、訓葵根爲阿布比乃禰、其誤與訓澤蘭爲佐波阿良々伎全同、源君依之、訓菜類之葵爲阿布比、後人謂冬葵蜀葵錦葵爲阿布比別名、眞阿布比爲加茂阿布比者、皆襲輔仁之誤也、其加茂葵者、細辛之一種、本草圖所繪華州細辛近之、

〔類聚名義抄 艸八〕藿 音霍 アフヒ　蒲葵 種類一名猪葵、下音逵、アフヒ、

〔下學集 下 草木〕葵 アフイ 又云一丈紅、此草長日以葉衛其足也、左傳云、鮑莊之智不如葵、葵者猶能衛其足、此時鮑莊見遭刖足、故云爾也、

〔東雅 十三 穀蔬〕葵アフヒ　アフヒとは、日を仰ぐをいふなり、猶說文に、黄葵常傾葉向日といふが如し、古の時には、其苗葉を菜となして、常に食ひしと見えたり、其種又少からず、

〔藥經太素 下〕多葵子　冷味甘
剉煎テ用、消渴淋病小便道結シタルヲ治、乳不通ニ吉、癰瘡出キテ毒熱内ヲセメ、未膿時水ニテ五七枚呑バ、必穴出キ膿出。

〔宜禁本草 乾五〕多葵　爲百菜主、其心傷人秋種葵、覆養經冬、至春作子、謂之多葵子、葉尤冷利、不可多食、天行病後食之頓喪明、根甘寒、主惡瘡、療淋利小便、解蜀椒毒、子甘寒、主五藏六腑寒熱羸瘦五癃、利小便、療婦人乳難内閉、霜葵多食吐水、合鯉食害人、癰瘡毒熱内攻未出膿者、水呑葵子五枚、作竅膿出、

〔庖厨備用倭名本草 一三〕葵　倭名鈔ニアフヒ、園菜部ニ載タリ、多識篇ニコアフヒ、古人ハ種テ常ニ食ス、故ニ舊本草ニハ菜部ニ載タリ、今人ハ食スルモノナク、亦種ルモノナシ、郊野ニ自生ス、故ニ本草綱目ニハ、菜部ヨリ移シテ隰草部ニ入タリ、元升弁〇向曰、葵菜ヲアフヒト云、コアフヒト云ハ、穩當ナラズ、此ハ是フキナルベシ、アフヒハ本草ニ蜀葵ト云モノ也、其説分明ニシテ眼前ニアフヒヲミルガ如シ、然バ今云アフヒハ葵ニアラザルコト分明也、吾人古ニハフキヲアフヒト云ケルニヤ、倭名鈔園菜部ニ入テ食物トス、然ドモ露葵ヲ同部ニ入テ、和名ヲフヽキト云、葵菜ヲアフヒトイヘバ二種トセリ、本草ニハ葵菜ト露葵ト一種二名也、異物ニ非ズ、今經傳本草ノ諸説ヲ擧テ、左ニ辨之、本草釋名一名露葵、李時珍曰、按爾雅翼云、葵者揆也、葵葉傾日不使照其根、乃智以揆之也、古人採葵必待露解、故曰露葵、詩菜叢云、葵只君子、天子葵之、注云葵揆也、左傳云、鮑莊子之智不如葵、葵猶能衞其足、魏曹植表云、葵藿之傾葉、太陽雖不回光、然向之者誠也、元升曰、此諸説ハ皆葵葉ノ大ニシテ、數葉相並連テ、日光ニ其根ヲ照シメザルヲ云、是皆フキヲ指テ云ニ似タリ、フキトツワトハ幹身ナシ、其葉ハ數莖根下ヨリ生出シ、直上シテ莖頭ニ圓葉ヲ開ク、大ニシテ廣シ、數葉並綴テ上ニ覆ヒ、日影ヲモラサズ、故ニ其根ヲ日光ノ照スコトナシ、此外ノ諸葵ハ葉大ナリトイヘドモ、皆幹枝ニ生ズ、故ニ其根ヲ覆ハズシテ、日影ヨク其根ヲ照ス、是知ル葵菜ハフキヲ指テ云ベ

シ、左傳爾雅翼曾植表證スベキモノ也、〇下略

〔大和本草 六 蔬菜〕冬葵　冬ミノル、葉有小岐五ニワカル、花甚小不足觀者是也、古ハ菜トシテ食ス、內經ニ五菜ノ一トス、後世ノ人不食之、故時珍綱目ニ移入濕草、錢葵ノ花ハ是ヨリ美也、

〔大和本草 七 花草〕蜀葵(アフヒ)　五月ニ花サク、莖高數尺、花ハムクゲニ似テ、深紅淺紅紫黑白色單葉千葉アリ可玩賞、鮮紅最ヨシ、宿根ヨリ生ズ、又子ヲマキテ生ズルハ、二年ニシテ花サク、其クキヲ水ニ二日ヒタシ、皮ヲトリテナハトシ、又布トスベシ、枯タル莖ヲヤキテ灰トシ、火ヲオサメテ久シクキエズ、是酉陽雜俎ノ說ナリ、〇中略

錦葵(ゼニアフヒ)　本草綱目蜀葵集解ニノセタリ、又錢葵ト云、冬葵ニ似テ別ナリ、冬葵ハ葉ニ岐アリテ五ニワカル、錦葵ハ葉圓ニシテ岐ナシ、錦葵ハ其花紅紫白數色アリ、四五月ニ開ク、錢ノ大ノゴトシ、實ヲウヘテ翌年莖不高花サク、三年ヲフレバ莖高ク、枝多クシテアシヽ、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕葵　カンアフヒ　冬アフヒ　一名奇菜通雅　藤菜同上　滑菜授時通考　阿郁採取月令　向日葵本經逢原、ヒアルマチモ向日葵ト云、移傳花鏡ニ出ヅ、　葵菜蜀葵條下　增、一名冬蜀葵、救荒本草　女菜墨寶百同　甜菜同上

凡單ニ葵ト稱スルハ、皆此ノ冬葵ノコトナリ、古ハ食用トス、五菜ノ一也、故ニ古文ニ菜ノコトヲ葵ト書タル例モアリト、通雅ニ辨ズ、此草ハ京師ニ自然生ナシ、諸州江海濱ニ多ク生ズ、近年城州山城ノ鄉ニ多ク栽ヘ、子ヲ收テ四方ニ貨ス、是冬葵子也、一タビ種レバ永ク絕ヘズ、繁茂ス、葉ハ錢(ゼニ)葵(アフヒ)葉ニ似テ大サ三四寸圓ニシテ五凸ヲナシ、尖ラズ、細鋸齒アリ、青莖直立ス、高サ三五尺、又紫莖ナル者アリ、葉互生ス、春月葉間ニ花ヲ開ク、大サ三四分許リ、五瓣ニシテ多ク攢簇ス、色ハ白シテ微シク淡黃紫ヲ帶ブ、形錢葵花ノ如ニシテ至テ小ナリ、花後實ヲ結ブ、亦錢葵子ノ如ニシテ小シ、花ハ春ヨリ冬ニ至マデ開謝相續キ、寒中ニモ花アリ、冬葵ノ生葉ヲ採リ焙リテ末トナシ、食用ト

ナレ、乾苔ニ代ベシ、一種葉邊ビラツキタ平カナラザルモノアリ、最可ナリ、故ニ其草ヲオカノリト呼ブ、

蜀葵　ハ。ナ。ア。フ。ヒ。　ツ。ユ。ア。フ。ヒ。　タ。チ。ア。フ。ヒ。　オ。ホ。ア。フ。ヒ。　オ。ホ。ガ。ラ。ア。フ。ヒ。〈南部〉　一名一

丈紅〈群芳譜〉　衛足〈同上〉　丈紅〈[illegible]〉　衛足葵〈秘傳花鏡〉　葵花〈本草綱目〉　杖葵〈福州府志〉　蜀檣花〈盛京通志〉

凡ソ花ノ書、及詩文ニ葵花ト稱スルハ、皆此ノ蜀葵ヲ指ス、人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス、苗ハ舊根ヨリ叢生ス、葉ハ多葵葉ヨリ大ニシテ、徑リ七八寸、莖ノ高サ七八尺一丈ニ至ル、梅雨前葉間ゴトニ一花ヲ生ズ、木槿花ノ形ノ如ニシテ大ナリ、白色紅紫淺深ノ數品アリ、深紫色ニシテ黑ヲ帶ルヲ黑。葵。〈秘傳花鏡〉ト云、花ハ小ナリ、蜀葵ニ單葉アリ、千葉アリ、瓣ノ形ニ數品アリ、圓ナルヲ圓瓣〈群芳譜〉ト云、狹細ナルヲ細瓣〈同上〉ト云、瓣ノ鋸齒ノ如キヲ鋸口〈秘傳花鏡〉ト云、細ニ剪レテ瞿麥瓣ノ如キヲ、剪絨〈同上〉ト云、

集解、錦葵ハ、小。ア。フ。ヒ。、一名ゼ。ニ。ア。フ。ヒ。、唐山ニテモ錢葵ト云、秘傳花鏡ニ見タリ、葉ハ蜀葵葉ヨリ小ク、多葵葉ニ似リ、莖ハ短ク、同時ニ、葉間ゴトニ多ク花ヲ開ク、錢ノ大サニシテ單瓣淡紅色ニシテ、紫色ノ線文アリ、又白花ノ者深紅花ノ者アリ、本草彙言ニ曰、錦葵五月人家供于庭前、俗云肆巣、

〔農業全書十種之類〕多葵子

多葵子是も藥園に作りて賣べし、十一月たねを蒔、夏實り次第に刈收めて、又二番を立る物なり、是は小葵とて葉にまたありて、花紫なり、小さくして見るにたる物にあらず、葉丸く花大に愛らしきは、藥にはならず、

〔齊民要術三〕種葵

臨種時、必燥曝葵子、〈葵子雖經歲不浥、然濕種者疥而不肥也、〉地不厭良、故墟彌善、薄卽糞之、不宜妄種、春必畦種水澆、〈春多〉

（風旱、作畦不得、且畦者省地、而菜多、一畦供一口、）畦長兩步、廣一步、（大則水難均、又不用人足入、）深堀以熟糞對半和土覆其上、令厚一寸、鐵齒杷耬之、令熟、足蹋使堅平、下水令徹澤、水盡下葵子、又以熟糞和土覆其上、令厚一寸餘、葵生三葉然後澆之、（澆用晨夕、日中便止、）每一掐輒杷耬地令起、下水加糞、三掐更種、一歲之中凡得三輩、（凡畦種之物、治畦皆如種葵法、不復條列煩文、）早種者必秋耕、十月末地將凍、散子勞之、（一畝一升、五月末數子亦得、）人足踐踏之乃佳、（踐者菜肥、）地釋即生、鋤不厭數、五月初更種之、（春者既老、秋葉落未生、故種此相接、）六月一日種白莖秋葵、（白莖者宜乾、紫莖者乾即黑而澀、）秋葵堪食、仍留五月種者取子、（春葵子熟不均、故須留中輩、）於此時附地剪却春葵、令根上枯生者柔輭至好、仍供常食、美於秋菜、掐秋菜必留五六葉、（不掐則莖孤、留葉多則科大、）凡掐必待露解、（諺曰、觸露不掐葵、日中不剪韭、）八月半剪去、（留其歧、歧多者則去地一二寸、獨莖者亦可去地四五寸、）枯生肥嫩、比至收時、高與人膝等、莖葉皆美、科雖不高、菜實倍多、（其不剪早生者、雖高數尺、柯葉堅硬、全不中食、所可用者、唯有菜心、附葉黃澀至惡、煮亦不美、看雖似多、其實倍少、）收待霜降、（傷早黃爛、傷晚黑澀、）榜簇皆須陰中、（見日亦澀、）其碎者割訖、即地中尋手糺之、（待萎而糺者必爛、）

〔延喜式大學二十〕釋奠十一座

從祀九座（閔子騫、冉伯牛、仲弓、冉有、季路、宰我、子貢、子游、子夏、）座別（中略）豆二（葵菹、鹿醢、）

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別（中略）葵半把（生菜料）

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

攝津國卌四種（中略）葵子大五升、　近江國七十三種（中略）葵子四升、　美濃國六十二種（中略）秦椒、葵子各一斗五升、　阿波國卌三種（中略）葵子五升、

〔延喜式內膳三十九〕供奉雜菜　日別一斗（中略）葵四把（准二升、八九十月、）（中略）中宮准此、

耕種園圃

營葵一段、種子二升、總單功卌一人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、糞百卌二擔、運功廿二人、下子半人、（八月）芸一遍三人、

〔萬葉集 十六 有由緣幷雜歌〕作主未詳歌一首
成棗寸三二粟嗣延田葛乃後毛將相跡葵花咲、

〔枕草子 三〕草の花は
からあふひはとりわきて見えねど、日のかげにしたがひてかたぶくらんぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき、

〔千載和歌集 三 夏〕堀川院の御時百首の歌奉りける時、あふひをよめる、　藤原もととし
あふひ草照日は神のこゝろかは影さすかたに先なびくらむ

〔翰林胡蘆集 二〕庭下紅葵露未乾、午陰日影上欄干、仙桃祗有花端並、分與九重春色看、　葵花傾日 永正
八條五松泉之會

〔武江產物志 藥草〕品川邊ノ產　多葵スーガ[illegible]

〔佐渡志 五 物產〕葵　方言フユアフヒ　國中ニ栽ユ、食用ニアラズ、

〔多識編 二 草〕黃蜀葵、今案土呂呂遣紙者用之、書家曰、和字違、

〔大和本草 七 花草〕黃蜀葵(トロロアフヒ)　實ヲマキテ生ズ、葉ハ廣ク大ニシテ、切コミタル處、蜘蛛ノ足ヲヒロゲタル如シ、其花木槿花又棉花ニヨク似タリ、黃花ヲヒラク下品ナリ、其葉モ花モ甚子バル、其汁ヲ用テ紙ヲスク、トロヽト云、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕黃蜀葵　トロヽ　カミノキ　ヲヽスケ 筑前　カウヅ 丹波　カミトロロ　カボチヤアサガホ　フノリ 雲州　京ノフノリ 土州　京ブノリ 同上　子リ 能州　ヲヽレンアフヒ 肥前　トロヽアフヒ 勢州　トロノヽ 同上　ピナンサウ 雲州　一名秋葵 汝南圃史　一日花 郷藥本草　鍍金木槿 事物紺珠

春月實ヲ下ス、初生ノ葉ハ三尖ニシテ鋸齒アリテ葵葉ノ如シ、漸ク長ジテ出ル葉ハ、五尖ニシテ

〔集解〕…… 楸瓜葉ノ形ニ類ス、梢葉ハ刻缺漸ク深クナリテ、大麻葉ノ如シ、故ニ集解ニ開岐有五尖如人爪形ト云、莖ハ直ニシテ高サ二三尺、葉互生ス、秋ニ至テ葉間ゴトニ一花ヲ開ク、朝ニ開キ夕ニ萎ム、其花五瓣、淡黃色ニシテ瓣根深紫色、草綿花ニ似テ大サ二三寸、コヽニ六瓣ト云ハ非ナリ、花後角ヲ結ブ、桐實ノ形ノ如クニシテ五稜アリ、コヽニ六稜ト云ハ非ナリ、角ニ毛茸アリ、生ハ青ク熟シテ黑シ、自ラ綻テ五ニ分ル、內ニ五隔アリ、隔內ゴトニ小子多シ、形茼麻子ニ似テ、褐色ニシテ微黑ヲ帶ブ、猴頭ノ態アリ、因テ今俗ニサ。ル。ゴ。マ。ト云、子熟スル時苗根共ニ枯ル、其根葵根ノ如ク白色ナリ、此根ヲ採リ還魂紙天工開物ノ粘リニ用ユ、一種苗大ナル者アリ、其高サ六七尺、葉亦大ナリ、花大サ三四寸、此品ハ唯種テ花ヲ賞ス、花戸ニテオホカウブト云、ニチイサウ、チヨウセンアサガホ江州、トウアサガホ、サンカツサウ播州、秋葵、

〔草木六部耕種法二十四〕諸藥物小草根ヲ作ル法

黃蜀葵ハ植地ノ調理、此亦全牛夏ニ異ナルコト無シ、唯其根大ナルヲ以テ、先苗ヲ別畠ニ爲立テ移シ植ルヲ異トス、但一坪ニ十六本ヅヽ植ベシ、四月中旬ニ植テ、九月下旬掘採トキハ、一坪四貫匁ノ根ヲ得ベシ、卽一段千二百貫匁ナリ、金一兩百貫匁ニ賣モ、金十二兩ニテ頗利潤大ナリ、然レドモ此物ハ紙ヲ漉ザル土地ニ於テハ、無用ノ物ナリ、宜ク勸辨シテ作ベシ、此ノ物ノ實ヲ鹽胡麻ト名ク、一段ノ地ニ黃蜀葵ヲ作ラバ、其實五斗ト七八斗ハ採ベキヲ以テ、油ヲ搾ルモ頗出ル者ナリ、又別畠ニ苗ヲ爲立ルモ、黃麻ニ異ナルコト無キノミ、

〔霞峯文集賦一〕黃葵賦并序 中略○

偶閱楊萬里題張商弼葵堂詩、誰知半點向陽心之句、且曰、商弼堂不種葵、但取面勢向陽、而是最有稱余心、乃又自號葵軒、中略○ 慶安辛卯之秋、余舊痾既愈登營、過庭之暇、閑步後園見葵花盛開、其長數尺、蕚大色黃、余見之驚曰、余所不栽、從前無之、何爲有之哉、家僮曰、往日曾攜其種以植之、今年生長以至如此、余曰、善哉、夫葵多品類、所謂露葵、兎葵、龍葵、冬葵、蜀葵、黃蜀葵等也、考其時與形色、則黃蜀葵惟肖

皴、大凡物之得名皆有所由來、如蘇耽橘井、董奉杏園、徐老海棠巣、仲蔚蓬蒿宅、王儉蓮府、王祐槐堂、和靖梅屋、元之竹樓、佛印松軒、魏氏菊莊之類、皆有斯物、而後得斯名也、今余所名其不然、既有名而後得物、初余業做商舶、以設此名、然非不思此花、唯未遑敍之、其有所待乎、然則家値所爲偶合、余意、不亦可乎、於是新名不違、以益起向陽之志而已、○下略

〔多識編 三木〕木綿今按襄。和多。異名古貝、〔綱目〕班枝花、今案波。牟。仁。也。自南蠻來、古終、和名襄和多、日本民間所作是也、

〔書言字考節用集 六〕棉(キワタ) 木綿(同) 古終(同、多識編)

〔倭訓栞 前編七〕きわた 木綿の義、布花ともいへり、今世に行はるゝ物の俗稱也、西竺には太古より有しかども、宋の末に始て種を傳へ、朝鮮には元より種を得たり、我邦には天正永祿の頃より渡來し、万民日用の要物となれり、紅毛語にかとうんころいといふ、かとうんは綿也、ころいは草なりといへり、花を蠟といひ、實を桃といふ、似たるをもてなり、本草にも如桃といへり、凡そ木綿と稱するもの四品あり、上古我邦にゆふとよべる是一種、彼邦にて杜仲の一名にいふもの是一種、蠻名ばんやと稱するもの是一種、今の綿花布是一種也、近年一種の木わたあり、高さ七八尺に及、桃は常の如く、實はそ長して小也、又一種あり、其實丸くて小也、棉花と稱す、肥後に安永の初に、紺色の綿できたり、一年にして絶にき、

〔塵尻 三〕綿花をきわたといふは、唐にも木と草と二種あり、木綿はふとくして桐のごとく、葉は胡桃に似たりとかや、されども草綿には劣りけるよし、草をもすべて木綿といふ、梵語には都貝とも、迦波羅ともいふよし、翻釋名義抄に見えたり、通鑑梁紀史炤が釋文、及び大學衍義補、輟耕錄等に、木綿の事をいへり、

〔日本後紀 八逸文〕延暦十八年七月、是月有一人乘小船漂著參河國、以布覆背、有犢鼻不著袴、左肩著紺

布、形似二袈裟一、年可レ廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不レ通、不レ知二何國人一、大唐人等見レ之僉曰、崑崙人、後頗習二中國語一、自謂二天竺人一、常彈二一弦琴一、歌聲哀楚、閲二其資物一、有レ如二草實一者上、謂二之綿種一、依二其願一令レ住二川原寺一、卽賣二隨身物一、立二屋西郭外路邊一、令二窮人休息一焉、後遷二住近江國國分寺一、

〔類聚國史〕百九十九殊俗 延曆十九年四月庚辰、以二流來崑崙人所レ賚綿種一、賜二紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、及太宰府等諸國一殖レ之、

〔木綿通考〕吾皇朝にいにしへ棉有しを聞ず、唯萬葉集卷三に、しらぬ火の筑紫のわたは身につけていまだはきねどあたゝかにみゆ、とあるを物にみえたる始とす、これ舶來の物なるべし、續日本紀に、神護景雲三年三月、始勅二太宰府一、歲貢レ棉、とあるも、唐山より齎わたせる棉を貢りし也、其後類聚國史に、延曆十三年七月、有二蠻船一漂二流至參河一、其人以レ布覆レ背、〇中略とあるぞ、其種を傳へ來れる始なりける、然れども中頃の世に絕はてたりと覺しくて、夫木集に新撰六帖にも見ゆ衣笠內大臣の歌、衣笠內府は定家卿の門人にましまして、鎌倉實朝卿と同時にて同門なり、敷島のやまとにはあらぬから人のうゑてし綿の種は絕にき、ともよみ玉へり、卽延曆の世に植たりし種をさし玉へるなり、野語述說には、永祿天正の頃、始て棉種西域より渡り來て、今に百年餘になりぬ、祖母嘗て語られしは、わが十五六歲の時、美濃の岐阜にて木綿といふ物を始て著たりき、當時は人々綺綾の如くに珍重したりしを、それより在在所々に多く植て、一般にひろまりたりと也、されどもいまだ紡織の法を悉さで、今日の精緻には及ばずとみえたり、これ延曆より後ふたゝび棉種の傳來せるなり、但しこたびのは木綿には非ず、草綿にて、今の世に天下なべて物する綿すなはち是なり、

敏成〇吉田按ずるに、貝原好古の和事始、及續和漢名數、伊藤長胤の秉燭談などには、文祿の頃渡り來れるよしみえたれば、秉燭談には、南蠻人來貢すと有、永祿は文祿の誤にも有べし、又右の書どもに、此をも木綿の事としたるはわろし、卽今の世まで連綿して、歲々に繁り行める草綿なり、さるを木

綿としも呼ならへるは、はやくより其名人の口實になりて、草綿にもやがて移して、稱來れりし也、（名物のうへには常に此類おほし）五雜俎をみれば、綿花葉、有草木二種、緗䌊之木綿花、ともあれば、彼邦の語も同じきと見えたり、さて眞の木綿も稀にはありとぞ、されど一二歳も經ぬれば、悉く消失ぬといへり、安齋隨筆に、木綿は近年渡り來りて、所々に種る由傳へ聞けりと有り、諸國の人によく紡き、て尋ねしらまほしき事なり、

さて檜村氏か（市部右衛門尉長高といへり、天文永祿の頃の人なり、）室町殿日記には、天文九年の條に、中間衆木綿三十五匹買取といふ事みえたり（永祿年中の事を書たるに、木綿一段代二百文としあり、）この文によれば、天文の頃既に渡り來れりとも覺ゆ、これも猶草綿なるべし、それより泝て、玄惠法印（足利尊氏の頃の人）の庭訓往來十月の條に、木綿一宛配とも見えしは、何れを指るにか定がたけれど、かの衣笠內府の歌にあはせて考れば、此等も木綿とはおもはれず、か、れば草棉のこ、に傳はりしも、實は鎌倉の代などに、五山の緇徒の、宋元より隨來れるにもやあらむ、（兼々異國の傳へたる類とすべし）

書禹貢に、島夷卉服厥篚織貝と、蔡沈が注に、木綿の事なりといひ、大學衍義補にも、此說によりて、島夷時或以充貢、中國未有也、中國有之、其在宋元之世乎といへれど、虞夏の世の卉服を木綿とは定がたし、泉麻葛の類なるべければ、これも五雜俎によりて、梁武帝の木綿皂帳など物にみえたれば、南北朝に權輿して、宋元の頃より盛なりと知べし、

〔大和本草 六 民用草〕木棉　棉布ハ異國ヨリ近古ワタル、其種子ハ文祿年中ニ來ル、朝鮮ニハ洪武二十二年、大元ヨリ種來ル由、東國通鑑ニイヘリ、木棉ナキ時ハ、貧士賤民皆麻布ヲカサネテ寒ヲフセグ、近世木棉ノ種ワタリテ、南北トモニ土地ニ宜シク、四民寒苦ヲマヌカル、誠ニ萬世ノ利、群國ノ寶也、明王ハ金玉ヲイヤシミテ五穀ヲ寶トスト古人イヘリ、木棉モ五穀ニ同ジク寶トスベシ、金玉ニマサレリ、中華ニモ宋ノ末始テ種ヲ南蠻ヨリ傳ヘタリ、兵璵山李時珍諸說皆然リ、然ルニ

溫公通鑑ニ、梁武帝ノ木綿皂帳ノ事ヲイヘリ、史炤ガ釋文ニ、木綿江南多有之、其形狀ウヘ時ヲ詳ニ云ヘルコト、今ノ木棉ナリ、イブカシ、又本邦類聚國史ニ、桓武帝ノ御時、崑崙人木綿種ヲモチ來ルコトアリ、今ノ木棉ト同物ナリヤ、是亦イブカシ、斑枝花ハ木ナリ別物ナリ、是モ木棉ト云、本草ニノセタリ、是亦布トシ、絮トス、ツテノ木棉ハ絮トシテ久ケレバ堅シ、斑枝花ハ久ヲヘテモ堅クナラズ、バンヤハ蠻語ナリ、神書ニ木綿ト云ヘルハ紙ナリ、棉花ニアラズ、今祝人綿花ノ絲ヲ用テ木綿襷トスルハ、古制ニアラズ、木綿手繦、日本紀允恭帝紀ニアリ、本朝賦役令曰、木綿ハ紙木皮也、順和名ニ楮ヲ由布ト訓ズ、延喜式ニモ木綿ハ楮ニテ作ルヨシ見エタリ、木綿ハ無毒、子ノ油ハ微毒、燈ニトモセバ目ヲ損ズト、本草ニイヘリ、商家此油ヲ菜油ニマジユ、食品藥品トスベカラズ、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕草綿 古終（久佐和多、俗云木綿、眞綿曰眞綿、故稱之木綿、別有木綿、卽斑枝花、出本綱）

本綱、有草木二種、似木者名古貝、（出于[illegible]木類、卽斑枝花也）似草者名古終、此種出南番、宋末始入江南、今則徧及江北與中州矣、不蠶而綿、不麻而布、利被天下、其益大哉、四月下種、莖弱如蔓、高者四五尺、葉有三尖、如楓葉、入秋開花、黃色如葵花而小、亦有紅紫色者、結實大如桃、中有白綿、綿中有子、大如梧子、亦有紫綿者、八月采棣謂之綿花、並出中核、紡爲細縷、以爲帛甚軟白、

子油（辛熱微毒）治惡瘡疥癬、燃燈損目、〇中略

按相傳往昔蠶綿之外以穀皮爲衣服、謂之木綿、（訓由布）中古草綿始也、（本朝桓武帝朝、中華宋之末、）先於中華、凡可二百年矣、今閱唐綿灰白色、不如倭綿潔白者也、下種先漬水一宿可移灰、否則生出而蟻子害其苗、蓋有早晚、早者八十八夜以後於麥苗之際撒之、晚者四月苅麥攪株傍撒之、旣生待梅雨晴可拔去繁生者、稍長後摘去梢葉、至立秋前三日則止、其花向日、性惡北風、喜西風、最惡雨濕、從來南方之種也、俗呼曰日照草是也、如値濕雨則桃不開口而凋、謂之保呂綿、爲濕熱所蒸則不意葉凋落、此乃綿之病名阿天（急乘落葉之義）氐（諭之）

大抵枝葉花似黃蜀葵而花淺黃色、其實如桃、呼曰綿桃、四裂中吹出白綿、以攪車繰去中子、其子小者精綿多、稱殖生綿爲上、而品類甚多、有白花者、有本赤末白花、或日午前黃色、午後赤紫色者、名曰半夏、

多田綿　出於攝州、花黃而綿甚白、稍強最良、然不殖生、故今多不稱用、

蝦手綿　其葉深刻如蝦手樹葉、故名之、白花而桃大、其綿潔白、然桃數少、

神樂綿　其花有白有黃、枝亦攢生、狀似神巫所持鈴、故名、種之有大利、

佐利綿　出於河州、其枝葉帶赤色、其花本淡紅末黃色、或名赤枝者亦此類也、繰之能殖生、凡神樂佐利之二品爲最上、三十餘年以來行于世、蓋佐利者棄去之謂也、相傳有人變於子種、始得此種、有聟乞之而不與、怒棄去其種、故名、但恨不肥圃不能茂、

烟草綿　其葉靑色而枝梗際生小葉、形如烟草芽、故名之、桃小而不佳、

凡攝津及備後之產爲最上、播磨丹波備中並佳、河州紀州次之、泉州爲下、其他亦出處不枚擧、但北國不種、

凡至白者無如攝州者、精細者無如河州者、大顆者無如丹波者、

綿子綿核　一桃中子六七、或八九有之、小者綿佳、

其用甚多也、磨末搾燈油、謂白油、尤大明也、搾精爲田糞良、其磨殼燒火以代薪、其灰以琢銅鐵器、鐺垢能脫、其灰汁以洗晒布帛、汚穢去爲純白、造糕屋作賤果子、以綿子灰汁少許和餅糕、令果子脹大、然有小毒、

綿子油濁不堪燈用、攝州平野人如用石灰少許則澄、始考澄法、今盛用、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕木綿　パンヤ　一名攀桂花明一統志　琢樹帝京類書　刧貝通雅　板枝花類書
纂要、頓ヘ讀ノ略字、　瓊枝群芳譜　迦羅正字通

草綿キワタ　トウワタ　ワタ　一名棉（群芳譜）　家貝（通雅）　綿花（秘傳花鏡）　木綿草（說鈴叢書）　子花（東西洋考）　吉貝花（同上）　無縫綿（河間府志）

木綿草綿ノ別アリ、木綿ハパンヤ、草綿ハトウワタ、即今本邦ニ栽ユル所ノ者ナリ、時珍ノ說ニハ、草木通ジテ木綿トス、故ニ木綿有草木二種ト云、似木之木綿、似草之木綿ト云、其名紛ハシ、輿籍便覽、廣東新語等ニハ、草綿木綿ヲ分ツ、宜シク從フベシ、○中略草綿ハ今諸國ニ栽ユルワタナリ、○中略唐山ニテモ宋ノ初時、南蠻ヨリ始テ江南ニ來ルト云、其草高サ三四尺、枝葉互生、葉三五キレコミテ、ツタモミヂノ葉ノ如シ、秋ニ入テ葉間ニ花ヲ開ク、五出淺黃色、瓣心ゴトニ深紫色アリテ、黃蜀葵ノ花ノ如シ、後實ヲ結ブ、形桃實ノ如シ、俗ニモヽト呼ブ、唐山ニテモ、花桃（群芳譜）又花鈴子（松江府志）ト云、又內ニ綿ナキモノアリ、僵囊（松江府志）ト云、熟スル時雨フラザル時ハ、モヽ開キ綿ヲ吐ク、潔白ニシテ中ニ種子アリ、ワタザネト呼ブ、是ヲ白綿子（東醫寶鑑）綿種子（同上）ト云、又赤花ナル者アリ、晩種ナリ、尋常ノ者ハ早種ナリ、又近年蠻產ノ草綿ヲ傳ヘ栽ユ、苗長サ丈餘ニ及ブ、種子小ニシテ小豆ノ如ク褐色ナリ、尋常ノ者ハ子圓大ニシテ色黑シ、綿ト子ト粘シテ離レ難シ、故ニ赶車（ワタクリ）ニカケテ核ヲ去ル、蠻種ノ子ハ綿ト自ラ離テ、綿モ尋常ノ者ヨリ強ク、布ニ織テ益アリ、

〔農業全書六三草〕木綿（わた）

木綿は、古は唐にもなかりしを、近古宋朝の時分、南蠻より種子を取來りて後、もろこしにひろまり、本朝にも百年以前其たねを傳へ來りて、今普く廣まれり、南北東西いづれの地にても宜しからずと云事なし、其中に付て、河內、和泉、攝津、播磨、備後、凡土地肥饒なる所、是をうへて甚利潤あり、故に五穀をさしをきても、是を多く作る所あり、○中略先種子をゑらぶ事專一なり、其たね色々ある中に、白花のかぐら、黃花のかぐら、是すぐれたるたねなり、又紅葉わたとて、楓の葉のごとくなるあり、是又花黃白の二色あり、又赤わたの大ごくびと云もあり、又ちんこなどゝ云、何れもよき

たねなり、此等のたねは桃のつく事、葉の數とひとしく、枝また葉の出べき所より、蕾と云て、つばみ付て、樸子は小さく、くり粉珠に多し、かくのごとく種子によりて、實のり甚多少あれば、能たねをゑらびて求め作るべし、但其土地によりて、取分相應ある事なれば、其考をもよくすべし、又赤わたののらと云て、昔唐より來るたねあり、是はさかへやすくよくふとる物なれど、桃すくなくくりこ少し、但糸はつよき物なり、糸のつよきを好むものは、是をも作るべし、又山城の麻わたとて、あさの葉に似たるあり、是も又よきたねなり、雜種色々多しといへども、利分勝れたるは、此等に限れり、○（中略）うゆる時分は、八十八夜を五六日見かけて蒔を上時とし、八十八夜過て、やがて蒔を中時とし、それより段々勝手次第に、一日も早きにしかず、夏至の中五月の廿日前までは蒔てもくるしからず、晩うへも木はさかゆれども桃少し、秋の日よはくなりては、末のもゝふききらず、且大風又は秋雨つゞく事ありても、早きは大かたのがるゝ物なり、蒔てすき間なく蠹し、手入を用れば、七月中にはや木吹はする物なり、同く種る地の事、さのみ肥たる深き柔かなるを好まず、さかへ過れば又桃付ぬものなり、假令付ても落實し、とかく沙少雜りて、性よく強き中分の地に、よき糞を多く用ひ、手入を委しくしたるが、利分多き物なり、すべて何土にてもあれ、濕氣はよくもれて、旱に水を引便りある所は、山中など霧ふかき地を除ては、凡木綿の作られざる地は稀なる物なり、山城、大和の山内にて、よく出來るを以てしるべし、なを又海邊河ばたなどの、風のよく吹通りて、日當のよき所は、勝れて木綿によろしき物なり、又年々相つゞきて同所に作る事はいむ物なり、一兩年若は三年までは作るべし、田の地味をゑらび、木わたを作れば、一兩年は取實過分にありて虫も付ず、其外くせも付ぬ物なり、其後又稻を作れば、地氣新にして、必二年ばかりの取實はあるものなり、草も生ず、糞も多く入ずして、利潤多し、○（中略）同くたねの分量の事、一段の畠、凡二貫目一貫五百目にても、地の肥瘠と、きり虫の考へして、糞もなく肥たる地ならば、さのみ多く

は蒔べからず、たねを水にひたし、灰をふりもみ合せ、一粒づゝばら〳〵となりたるを、手籠に入れ、左の手にさげ、或わきにはさみ、先筋をかき置て、かたよりなくばらりとまき、種子おほひ四五分ばかりして、上をかるく踏付べし、たねを土と思ひ合すべきためなり、但ゑめりたる埴土をば蹴べからず、中より下の地ならば、下に灰糞をゑき、其外肌ごゑをも入べし、肥たるに肌ごゑは入るに及ばず、尤雨氣に蒔べからず、若又うゆべき時分に旱せば、水をそゝぎゑめして蒔もよし、○下略

〔農家業事後編　一〕草棉名目幷に土佐棉の事

草棉のことは、前編に如水翁○島見の說あれば、委しく記さず、先攝津、河內、大和邊にて作る所の種類、

かぐら　八寸黃花　備中ころり　麻わた　長九郞　太こくび　ちんこ　のら　山城麻棉

河內ぼたん　今七兵衞　早わせ　てつぽう　黃花　權九郞　猿の耳　赤わた　靑わた

其外國々によて數多し、右の內にも早中晚三段ありて、少々の勝劣はあれども、いづれもすぐれたる種子なり、

爰に又文政四五年の頃より、土佐といへる一種を、攝州にて專ら作りはじめてひろまりぬ、元來土佐の國より來れる種子なるゆゑ、土佐と名付しとみへたり、此綿はくり粉多く、通例の綿七十目ある分量には八拾目もあり、旱魃にいたまず、風にまけず、雨につよく、綿の色白し、性堅實成ゆゑ、糸にして强し、ゑかしながらねばり氣少しうすし、花は白くして小さく、桃とがりあつく大きし、木は小ぶりなれども、桃多く生ずるなり、木肌は色の靑がゝりたるに似たり、

〔寶曆集成絲綸錄　二十八〕寶曆九卯年八月

一綿實の儀も、近來專水油に絞出、菜種同樣の事に候上は、向後大坂綿實問屋相定候間、右問屋之

内江積登せ可申候、諸事榮稱同樣に相心得可申候、

右之趣此度改相觸候上は、大坂江積登せし榮稱綿實他所にて猥道買或は貯下買、且隱敎致間敷候、勿論大坂表問屋共榮稱實買込外の紛鋪儀、向後不爲致、尤是迄取扱候口錢の掛り物迄も、今般相改引下げ、大坂問屋々々にて、明細に懸札に記差置、無聊餘慶之懸り物無之樣取計、聊疑敷儀致間敷候、若用ひざる族於有之は、遂吟味曲事に可申付候、諸國一統急度可相守候、右之通、御料は御代官、私領は地頭より可觸知候也、

八月

〔農稼肥培論中〕綿實粕

此綿實は、畿内にて專ら絞り、關東にて聊絞る計にて、北國西國にて曾て絞る事なければ、肥しに用ふる事もなし、

〔廣益國產考五〕綿草綿

綿は用ひざる國なければ、何れの國にても作るべき物なれ共、東海道にては、尾張、三河、遠江、駿河は作れども、關東北國にて餘り作ることを聞ず、又九州の地は、能心がけて種々の產物を出せども、綿を作る事は疎にて、多く中國の綿を求め用ひ來れり、然れども豐後國日田郡の內隈町豆田町といへる所、其間十町も隔りぬる近邊兩所の四方計り、綿を作り出し、爲金凡千兩位は取入るよし、其外に家內にて著用の島木綿を織て用ふる所は、凡七八百兩は取入るべし、〇下略

〔甲子夜話四十六〕播州ニ褐色ノ草綿アリ、生織ノマヽニテ、染タル如シトイフ、又綠綿モアリ、是ハ明石ノ邊ニ種ヲ傳ルトゾ、カノ地其種ヲ愛惜シテ他ニ出サズト云、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一木綿　古綿ナリ、和名キワタ、畿內國和州產上品トス、凡暖地ニ宜シ、於東海諸國本州ノ產ハ、其色皎白ニシテ綿強シ、巨摩、山梨中郡多且美ナリ、奈胡庄最名產トス、四方ニ

茼麻

繦ニ直貴ク、和州產ニ權衡セリ、

〔大和本草 六民用草〕茼麻 又藚麻白麻トモ云、倭名コ。サ。イ。バ。ト云、葉桐ニ似テ花黃ナリ、實ハ農家ノ唐臼ノ牛ノ如シ、莖ノ高五六尺、本草綱目濕草上ニアリ、皮ヲトリテ麻トシ布ニヲル、又繩ニ用ユ、本幹ニ莖ハ硫黃ヲツケテ、トモシ火トストアリ、發燭(フクチツケ)ニ用ユベシト也、又黑染ニ用ユ、別ニ赤カシハト云木アリ、是モ黑染ニス、是又赤ゴザイバト云同名異物ナリ、葉ハ似タリ、又一種葉似香薷而大ニ、莖圓ク高二三尺、其皮可爲繩、葉柔ニテバリアリ、秋花ヲ開ク、是亦茼麻ノ類ナリ、

イ。チ。ビ。 葉ハ麻ニ似タリ、又午時紅ノ葉ニ似テ、實ハ木イチゴニ似タリ、故ニイチビト云、茼麻ト一類二物ナリ、是モ皮ヲトリテ苧ノゴトクニ用ユ、農人圖ニツクリテ利トス、蘘璽草ニ茼實(ケイ)ヲイチビト訓ズ、アヤマレリ、茼麻トイチビハ別也、又先輩補骨脂ヲイチビト訓ズ、甚アヤマレリ、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕茼麻 茼(音頃) 藚(同) 檾(同) 白麻 (俗用市尾字、稱以知比、○中略)

按茼麻西國有之、日向、薩摩多種之、四國亦少有之、九州之土產、其葉微似胡麻葉、大有鋸齒、然本草綱目似桐葉者未精乎、○中略 剝皮織布脆於麻易裂、打大繩爲碇綱、海舶必用之具以亞加賀苧、亦爲藺席之縦、甚勁強而難截斷、

〔重修本草綱目啓蒙 十濕草〕茼麻 イ。チ。ビ。 ゴ。サ。イ。バ。(讃州) カ。ナ。ビ。キ。(豐前) シ。ナ。ノ。オ。(伊賀) 一名

茼尤 (藥性要略大全)

春種ヲ下シテ秋後根枯ル、苗高サ六七尺、葉圓大シテ末尖リ、鋸齒アリ、桐ノ葉ノ形ノ如ク薄ク、軟ニシテ毛アリ、互生ス、夏月葉間ニ花ヲ開ク、五瓣黃色、大サ錢ノ如シ、朝ニ開キ暮ニ衰フ、花後實ヲ結ブ、牛磨ノ形ノ如シト時珍云リ、石ウスノ半分ノ如キ形ナリ、圓ニシテ高サ五分許、濶サ六七分、上廣ク下微狹クシテ小莖アリ、頂ハ凹ニシテ粗キ菊紋アリ、外ニハ殼ニ稜多シ、是扁莢多ク圍ミ並テ、此形チヲナスナリ、○中略 此草ノ皮ヲ剝ギ繩索トス、既ニ皮ヲハギタル稭ヲ、江戸ニテホクチ

ガラト云、白タシテ輕麻ナリ、奧州仙臺ニテモ、燒テ炭トナシ、ホクチト云、又一種イチビト呼草アリ、阿州ニテイチブト云、勢州ニテワナソト云、沿海ノ地ニ多ク栽ユ、苗高サ三五尺、葉細長ク濶サ寸餘、長サ三寸許、鋸齒アリテ末尖リ、葉ノ本ノ左右ニ一ノ細枝アリテ角ノ如シ、花實ハ苘麻ニ似テ小ク、子ハ苘麻ニ異ナリ、胡麻ニ似テ小ク扁ナラズ、大和本草ニ詳ナリ、是胡麻、集解ニ謂ユル黃麻子ニヨレリ、大麻ト同名ナリ、〇中略增、イチブハ阿州ノ名產ニシテ、沖ノ洲新田ヲ上品トス、コレヲ備前備中備後ニ送リテ、席ヲ織ル糸トス、又舟ノ綱ニモ製ス、乾燥ノ地ニ產スルモノハ、紫赤色ニシテ蔓延ズシテ短ク、皮堅クシテ下品トス、下濕ノ地ニ產スルモノハ、皮青白色ニシテ軟ニ、長ク延テ上品ナリ、苘麻ノ種類ニシテ、別ニ黃麻ト名ク、コレモ皮ヲ去リ炭ニシテ小匣ニ收メ貯ヘ、發火ニ代フ、雨ニサレテ古キヲ良トス、

〔東牖譚四〕苘麻ノ事

土佐儒官緒方宗哲談ズ、國ニイチビト云モノアリ、其狀如麻、ソノ皮舟ノ纜ニツクルベシ、イチビ綱ト云テ、海人尤コレヲ貴ブ、其種麻粹ノゴトク蒼白色ナリ、火ヲ炷スレバ火繩トスベシ、本草ニノスル苘麻ナリト、因テ本草ヲ考ニ、果シテソノ通リナリ、中庸絅衣ノ章ノ大全ヲ見レバ、又作檾ヲ、即コノ物ナリ、シカレバ麻ノ一種トミエタリ、後ニ人ノ話ヲ聞ケバ、土州ニカギラズ海南ノ諸州ニハ、イチビ繩ヲ用ユト、マタ蠶豆草ヲ撿スレバ苘麻トアリテ、イチビト訓ズ、昔ノ人モヨクワキマヘシレルニコソ、

〔百姓傳記十一〕イチビヲ作ル事

イチビヲ蒔ニ、土地ニ嫌ヒナク、地深キ處ニ蒔ベシ、麻ト異ナルモノナリ、冬春迄ニ蒔、夏ノ土用ノ內ニコギトリテ、葉ヲ取捨ヨク日ニ干テ、其後水ニツケテ取揚ゲ、筵菰ヲ敷キ、イチビヲ積重ネ、又上ニ筵菰ヲカブセネサセ、皮ヲハギテ見ヨ、カラニ取付カズシテ能ムケル、ネ加減マヘオタニテ

ハムケ穢ル、又ネカシ過テハ弱ナル、其ノ見分ケ肝要ナリ、ムキ取タルイチビヲ、竹ノワリコハシニテ上皮ヲコキステ、水ニテ洗ヒ日ニ干シ、麻ノ代リニ使フ、第一大船ノ錨綱、其外太布モ織、馬道具ニ用テ益多シ、

〔廣益國産考三〕苘麻作りやう

苘麻は何國にもあるものにて、作りやうを諸人知るといへども、此琉球表を織には專らいちびを經に用るによつて、作りやうを爰にしるす也、

四月早麥を刈取たる跡に、麥を蒔やうの地こしらへして、種子を芥の燒灰等にまぶして、麥を蒔やうにして蒔べし、尤壹畝に種子壹合宛に蒔て宜し、然して麁肥しか油糟を施置ば、追々芽を生じ貳三寸になる頃、間三寸ほどづゝに間引仕立、肥しを見合せ施てよし、六月土用すぎる頃は、花咲實登り、丈凡五六尺に伸る也、刈旬は、凡蒔付て九十日めより百日目に刈べし、根よりこぎて土を落し束に結、其上に葉の古きぬれ筵を、透間なくかぶせ、三四日蒸て根の所を爪にてむくり、末まで引はれば、むざうさに末まではげる也、是を竹にかけ干揚て圍ひ置用ふる也、皮の上出來は壹畝に八貫目、中出來は五貫目あるもの也、

夢花金錢

〔倭名類聚抄二十草〕金錢花　梁簡文帝有金錢花賦、金錢俗云百無歟

〔書言字考節用集六生植〕午時草(ゴジサウ)

〔大和本草七花草〕夜落金錢(ゴジクワ)〇中略　今案紅白二色アリ、紅ヲ金錢花ト云、一名午時紅、瓶史ニ見エタリ、倭俗午時花(ゴジクワ)ト云、又金盞花ヲモ和俗金錢花ト云、同名異物也、午時紅ハ葉ハキイチゴノ葉、又イチビノ葉ニヨク似テサキトガリ、本小ナル極アリ、初生スル時小葉四ニワカル、莖長キハ二尺ニイタル、花ハ七八月ニ開ク、大サ錢ノゴトシ、紅ニシテ内フクラナリ、葉二重アリ、每節枝生ジテ花開ク、午時ニ開キ其夜半ヲツ、故又子午花ト云、寒月ニハ夜花不落シテ晝マデアリ、牽牛花ノゴトシ、

金絲梅

弟切草

人家往々花圃ニウフ、青虫多シ去ルベシ、花落テ後久シクシボマズ、アツメテ見ルニ堪タリ、又花ヲ散スニ皆仰ク、一モ俯カズ、苗長ジテ時々魚汁ヲソソグベシ、此草金銀共ニ本草ニ不載、

銀。錢。花。　花鏡農圃六書等ニノセタリ、午時紅ノ花白キ也、莖葉少異レリ、京都北野ニアリ、北野ニテモ銀錢花ト云、金銀共ニ好花ナリ、何モ多ハ根枯ル、春實ヲマキテ生ズ、金錢花ハ多ク銀錢花ハマレ也、

〔草木育種後編下 [illegible]〕午時花 [illegible]　夜落金錢 [illegible] といふ、春分に子を下して生ず、初生牽牛子の初生に似て小也、夏に至り高さ一尺許り、五瓣の紅花を開く、又野西瓜苗(きんせんくわ)あり、花似て白色なり、是も春分子を下して生ず、二種ともに多く養水を灑ぎてよし、

〔大和本草 花七〕金絲梅(きんしばい)　閩史ニノセタリ、花色棣棠ニ似タル好花ナリ、葉ハ三片アリ、莖ノ高尺ニ不過、陸地ニ宜シ、日ノ影ヲ畏ル、正二月ニ舊根ヨリ苗ヲ生ジ、三月黄花ヲ開ク、其花ノ形如仰碗、其シベ如金絲、金絲繞ヨリ絲垂シ、六月葉莖枯レテ後ハ、來春マデ莖葉ナシ、

〔大和本草 諸品九〕ヲ。ト。ギ。リ。草。　葉ハ柳ノ如ニシテ短シ、花ハ黄色ニシテ小ナリ、秋開ク高二尺許、其葉ヲモミテ其汁ヲ金瘡ニヌリテ血ヲ止ム、又鷹ノ病ト犬ノ病ヲ治ス、其葉ヲモメバ黄色ノ汁イブ、唐ヨリワタル、繪ノ具臙脂(エンジ)ト云物アリ、俗ニ生臙脂(シヤウエンジ)ト云紫色ナリ、此草ノ生葉ヲシボリテ汁ヲ綿ニヒタセルナリト云、日本ニ近年漸此草ノ汁ナル事ヲシレリ、多クトラザレバ用ルホド無之、本草臙脂ノ集解ニ、種々草花ノ汁ニ綿ヲ染テベニトスル法アリ、又蘇木ノ煎汁ニ胡粉ヲヒタシ、綿ニヌリタルヲモ生エンジト云、ソレハ似セモノ也、眞ニアラズ、正眞ハヲトギリ草ノ汁ト云、生臙脂ヲ以テ血ヲトムルニ甚效アリ、ヲトギリ草ノ汁ナレバナリ、本草隰草下ニ蛇銜草アリ、ヲトギリ草ニ似タリ、其異同未詳、又或人コレヲ劉寄奴ナルベシト云、本草劉寄奴ノ集解、時珍ガ說、略ヲトギリ草ニ似タリ、又未詳、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕弟切草（おとぎりさう） 正字未詳

按弟切草初生似地膚子秧而兩兩對生、有枝椏而葉葉採之有汁、須臾變紫色、六七月開小黄花、單五瓣有細蘂、結莢有三稜、中有細子黑色、味甘香美 莖葉傳金瘡折傷及一切無名腫物有神効、

相傳花山院朝、有鷹飼名晴頼、精其業也入神、有鷹被傷採草傳之則愈、人乞問草名秘之不言、然有家弟密露洩之、晴頼大忿刃傷之、自此知鷹之良藥、名弟切草、

一種莖弱不起如蔓、而葉花子不異、葉略小、其味辣强、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕連翹

集解、小連翹ハヲトギリサウ、此草山野ニ多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、長ジテ高サ一二尺、葉ハ細長ク、柳葉ニ似テトガラズ、兩兩相對ス、夏月莖末ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク五瓣、大サ三四分、色黄ニシテ小紫點アリ、故ニ時珍花黄紫ト云、雲母ノ發明ニ紫連翹草ト云、此花瓣ヲトリ、兩紙ノ間ニ挾テ擊時ハ紫色ニ染ル、葉モ亦同ジ、葉ニモ小紫點アル故ナリ、又葉ヲ水ニテ煎ズレバ、ソノ汁色赤シ、一種小ナル者、葉長短數種アリ、又一種形極テ小ナルヲ、ヒメヲトギリト云、亦數品アリ、皆枝梢ニ一花ヲ開ク、葉ヨリ大ナリ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 小連翹（おとぎりさう） 赤村ニモ

菫菜

〔本草和名 十八 菜〕菫汁 仁諝音謹 一名菫葵 出蘇敬注 一名苴 乾者也、出七卷食經 和名須美禮、

〔倭名類聚抄 十七 野菜〕菫菜 本草云、菫菜俗謂之菫葵、菫音謹、和名須美禮、

〔箋注倭名類聚抄 九 菜〕按證類本草下品菫汁條、引唐本注云、此菜野生、非人所種、俗謂之菫菜、本草和名引作俗謂之菫葵、與此合、則知此所引蘇敬注文也、蘇敬又曰、葉似蕺、花紫色、按蘇所說、是須美禮之圓葉者、俗呼曰駒爪、又說文、菫艸也、根如薺、葉如細柳、蒸食之甘、爾雅、齧苦菫、郭注、今菫葵也、葉似柳、子如米、汋食之滑、救荒本草云、菫々菜、一名箭頭草、生田野中、苗初搨地生、葉似鈹箭頭樣、而葉蒂

莖長、其後葉間鑽莖開紫花、結三稜小莢兒、中有子、如芥子大、茶褐色、味甘、是其細葉者、本草綱目所云紫花地丁也、李時珍曰、紫花地丁、其葉似柳而微細、夏開紫花、結角、平地生者起莖、溝壑邊生者起蔓、是也、須美禮依輔仁、

〔下學集 草木 下〕菫菜(スミレ)

〔書言字考節用集 生植 六〕菫(スミレ) 苦菫、早芹、菫葵並同、本草、葉如細柳、花紫色、子如米、

〔八雲御抄 草 三上〕菫菜　つほ　又喚すみれ　野又あれたる所につむ也

〔東雅 穀蔬 十三〕菫菜スミレ　倭名鈔に本草を引て、菫菜はスミレ、俗謂之菫葵と註せり、其義不詳、爾雅に齧は苦菫也といふ、註に菫葵は、本草に冒味甘而此云苦菫、古人語倒、猶甘草謂之大苦也と見えたり、さらば此にもスといひしは酸也、醋を苦酒といふが如し、ミレといひしは、ニレの轉語にして、其性の滑る事の楡の如くなるを云ひしなるべし、内則に菫荁枌楡とも見え、淡齊會が賦にも、烈有椒桂、滑有菫楡と見えたり、

〔物類稱呼 生植 三〕菫すみれ　畿内及近江、加賀、能登、又東海道筋すべてすまふとりぐさと云、江戸にてすみれと云、上野にてすまふばな、仙臺にてかぎばなと云、大和の奈良小兒、治郎坊太郎坊と云、西國にてとの、馬と云、菫一名こまひき草といふ、漢名剪刀草、花紫白二色有、共に莖のかたはらに鉤の形あり、兩花まじへ相ひきて、小兒のたはふれとす、故にすまふとりぐさの名有、又東武にてすまふとり草と稱する別種有、江戸鄙(いなか)にてはぐさとよぶ、草の穗に出たるを云、漢名不知、尾州にてやつまたといふ是也、貞砂が足を空なるすまふとり草と聞えし附句も、むかしがたりとなりぬ、

〔年々隨筆 一〕すみれ二種あり、いづれもよろし、葉の細くてながきが殊によろし、ひろくて短きは色あさし、これをつぼすみれ也といふ人もあり、さる事にや、つぼすみれ、すみれもと一品にて、此

花のいたうひろごらざるよりいふにもあるべし、から國ふみには菜の部にいれたり、若葉をくふ事ならんかし、大かた花は折とこそいへ、つむとはいはざるを、此花にしもしかいふは、堇いとみじかくて、折とはいふべくもあらぬさまなれば也、しかるを此あたりのものしり人、なま〳〵に菜の類なる事をも聞しり、又つむといへるが、若菜などのやうにきこゆるなど、おもひあはせてのわざなるべし、此花をいと多くつみもて來てくへりしが、いたうわづらひてえもいはぬ事などしてくるしみけるとぞ、足八ツありとて、あらぬ蟹をくひし事、から人にもあり、物しり人の、中々なるひがごとする、今にはじめぬ事なりかし、

〔宜禁本草 乾五菜〕堇菜　苦寒、此菜野生非人所種、葉似柳、花紫色、子如米、汋食之滑、久食除心煩熱、身重懈惰多睡、擣傳熱腫、主寒熱瘰癧生瘡結核、下瘀血、

〔庖厨備用倭名本草 一寛延〕堇菜　倭名抄ニスミレ、多識篇野セリ、元升向井〇曰、今人皆駒引草ヲスミレト云、コマヒキ草ハ俗ニ云スマフトリ草也、然ニスミレハ、古人ツミトリテ春ノ菜茹ニス、春野ニ生ズ、古人ハ春日ニ野ニ出テスミレヲツム、其花紫ニシテ可愛、古歌ニ、打ムレテ菫ツミニト來ワレゾ野ヲナツカシミ一夜子ニケル、又ヨク荒野ニ生ズルナルベシ、古歌ニ、昔ミシイモガ垣子ハアレニケリツバナマジリノ菫ノミシテ、今云スマフトリ草ハ、食スル人ナシ、其花モ愛スベキ形色ニモアラズ、歌ニヨミナツカシムベキ花ニモ、菜ニモアラズ、古人ノ愛セシ菫ハスマフトリ草ニハアラザルベシ、又西國民間ニ云スミレハ、莖葉根トモニ水仙胡蒜ニ似タリ、三四月麥未熟以前ニ根ヲ堀取リ、蒸熟シテ食ス、春日民家ノ糧ニシ飢ヲ救フ、根ノ形ハ胡蒜ニ似テ白シ、蒸熟スレバ蜜色ノ如シ、其甘キコトハ糖蜜ノ如シ、農家ニ是ニ麥麨ヲカケテ食ス、其花色赤クシテマンジユシヤケノ如ジ、ヤヽ愛スベキ形色也、然レドモ其莖葉ヲ食モノナシ、是モ古人題詠ノスミレト云ガタシ、爾雅云、齧苦堇、註云、今堇葵也、葉似柳、子如米、汋食之滑、疏云、齧一名苦堇、可食之菜也、唐

本草註云、此菜野生非人所種、俗云菫菜葉似菫花紫色者、本草云、味甘、此云苦者、古人語倒猶甘草謂之大苦也、元升曰、此說ヲミタイロ〳〵明クシ、スマフトリ草ハ菫菜ニアラズ、又西國民間ニ食スルモ菫菜ニアラズ、菫菜ハ野菜類也、今ハスミレヲ知人ナシ、名不正シテ物不從ツキニ食物ノ用ヲナサズ、一物徒生ノ物トナル可惜也、能識人是ヲ正シテ、眞菫ヲ殺出スベシ、

〔本朝食鑑 菜三〕芹

菫菜 訓須美禮、今之訓乎分也、一名一夜草、或曰一葉草、倶歌人今古詠賞之、菫菜野生葉似柳葉而微小、二月生苗、高四五寸、綿地叢生、三四月開紫花、如香花而微小、四五月結子成莢、莢中有細子、子落自生、根似菫而滑、古人采食之、近人未食、但兒女摘花弄之、閒落之四野多有、或采子以種庭園、實花之紫箕迎年、江都人自移種栽及種子盆栽、一種係有兩相撲草、名此亦菫菜之屬、原野庭畔多生、實似事之節刀破損曾刀痕、三四月開小花、似小蟲飛狀、有紫白二色、倶著莖頭之筋而作鉤鈎、故採鬮花相幸剛鋼者壁、壁名爲鐵、不壁者爲具、作角力之狀、被鐵相携草兩端、見女之弄戯耳、

〔重修本草綱目啓蒙 十八 菜〕ハヘクセリ

陸生ノ芹ナリ、食用ノミツバゼリモ、コノ一種ナリ、恭說ノ菫菜ハ圓葉ノ紫花地丁ナリ、コマノツメト呼ブ、數品アリ、葉圓ニシテ尖リ、蕺菜(ドクダミ)葉ノ如ニシテ鋸齒アリ、又圓ニシテ尖ラザル者アリ、大小異形ナル者一ナラズ、花ニ深紫淡紫白色ノ別アリ、形ハ皆紫花地丁ニ同ジ、又蔓生ノ者アリ、此ニモ圓葉長葉ノ品アリ、花ハ皆淡紫色ナリ、馮鍇ノ說ハ、紫花地丁也、隰草類ニ本條アリ、時珍ノ說ニ、黃花ナル者ヲ卽毛芹也ト云ハ非ナリ、毛芹ハ毛茛(ムマノアシガタ)ナリ、大觀本草ニ、菫黃花害人ト云フヲ優レリトス、是レキケマンナリ、一名ウバコロシ、土州ヲベコロシ、同上ヘビニンジン江州モ、チトリ、江戸花戸ヒトコヘヨボリ、備州ワウキン、此草ハ路旁樹陰、或ハ垣砌ノ間ニ多ク生ズ、四時枯レズ、苗ハ紫菫(ムラサキケマン)ニ似テ白色ヲ帶ブ、コレヲ斷バ黃汁出、甚臭氣アリ、花モ紫菫ノ花ニ異ナラズシテ黃色ナリ、時ナラズシテ常ニ開ク、大毒アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕紫花地丁　スミレ 和名鈔　ヒトヨグサ 古歌　ヒトバグサ 同上　コマヒキクサ 筑後　京ノムマ 筑前　トノヽムマ 同上、溫泉草モ肥前ニテ、トノヽムマト云、同名ナリ、　トノムマ 薩州　スモ

トリグサ京　スモトリバナ同上　カギトリバナ備前　カギヒキバナ同上　キヽヤウグサ泉州　アゴカキバナ越後　カギバナ讃州　一名菫菫菜救荒本草　金芹菜物理小識　草角子山東通志

隨地皆アリ、葉長ク叢生ス、葉似柳ト集解ニモ云リ、陽地ニアレバ春早ク正月ヨリモ花開ク、深紫色又淺紫花白花ノモノアリ、葉形花色ト地ニ因テ各異ナリ、一種圓葉ノ者アリ、又數品アリ、草生藤生ノ異アリ、紐ジテコマノツメト云フ、古歌ニツボスミレト云フ、コレ菫菜ナリ、又一種黃花ノモノヲキスミレト云フ、卽菫菜ノ一種ナリ、加州白山、和州芳野等ニ產ス、葉形圓カニシテ尖リ、鋸齒アリテ光澤ナリ、花ハ黃色五瓣ノ中一瓣紫黑色ニシテ光アリ、又一種叡山スミレアリ、葉形アサモミヂノ葉ニ似テ大ナリ、花ハ淡紫色、卽雜草類ニ載スル所ノ胡菫草是ナリ、一種紫背ノスミレアリ、救荒本草ニ載ル所ノ匙頭菜也、以上二品皆幽谷ニ生ズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六雜草〕胡菫草　エゾスミレ　エイザンスミレ　サツマスミレ　カクレガサ　オホスミレ　サツマシメリ加州

深山幽谷ニ生ズ、葉ニ五岐深齒アリテ、アサモミヂノ葉ノ如シ、數葉一根ニ叢生ス、夏巳後葉ノ形變ジテ兩岐トナル、春時花ヲ開ク淡紫色、形狀紫花地丁ノ花ニ同シテ大ナリ、實ノ形モ相同ジ、ソノ莖兩枝ヲ對シ分ツヲ異ナリトス、

〔萬葉集八春雜歌〕山部宿禰赤人歌四首〇三首略

春野爾、須美禮採爾等、來師吾曾、野乎奈都可之美、一夜宿二來、

高田女王歌一首

山振之、咲有野邊乃、都保須美禮、此春之雨爾、盛奈里鷄利、

〔枕草子三〕草の花は

つぼすみれ、すみれおなじやうの物ぞかし、おいていけばおなじなどうし、

〔武江產物志藥草〕上野邊ノ產　菫々菜　尾久ノ原　紫花地丁玉川ニモ

〔百品考上〕西番蓮　和名トケイサウ

羣芳譜釋名百花詩鈔註、西番蓮出廣中、蓋架引蔓、葉尖長叢茂、六月開花、至十月止、下有分十大白瓣、中起藍有翠色花、如細絲刷狀者、蓋心五瓣、如西瓜小子大、瓣上白鎗邊、中滿黄色、瓣如綴、以手指撥之、似乎不平者、而旋轉活動、仍不突落、五瓣心中、另抽一黒紫莖、末分三枝、枝末如圓珠而光禿、又彎下、人見之俱不禁驚喜、眞花之功而奇者、肥土扦種、

蔓草ナリ、花戸ニ多ク栽ウ、葉ニ岐アリテ、槭葉ノ如シ、葉傍ニ細鬚アリテ物ヲ纏フ、夏月花ヲ開ク、鐵線蓮ニ似テ大ナリ、狀チ自鳴鐘ノ車ニ類セリ、故ニトケイサウト云、

〔地錦抄附錄一〕時計草　長崎にてぱろんといふ

草はかづらのごとくにてかづらにあらず、葉の間々よりほそきつる出て、竹木に取つきてのばる、枝多くしげり葉に切込ありて、もみぢ葉のごとく、花形てつせん風車に似て、輪の大きさてつせんのごとく、色白く櫻色にうるみあり、花の内に留り、こん色と白色と、紫色と、三段ほどに染たる糸しべ、ちやせんの如くに立ならびて、花十分に開く時、そのしべ花の内へまはり敷て、三段ほどの色かはり、虹の吹たるがごとく、見事に眞中よりしん立て、ゆりのしべのごとくなるもの、五本五方へわかれ、そのさきに三分ほどの物横に付く、上の方青茶色、下の方うこん色、その上に丸き玉あり青し、玉の上に黒紫色のしべ、三本三方へわかれ、そのさき丁子頭なり、朝四つ過に花開き、暮六つどきしぼむ、その次のつぼみ、又明日開く、花は一日なれ共、葉の間々ことに、つぼみ多くつくもの、さかり久し、五月上旬比より咲く、又秋のころもさく、秋咲は二三日も花しぼまず有り、花ひらく時の樣子、傀儡を操がごとく回るしべあり、實蘂も有り、上下へかへる蘂も有り、さまざまの品見物あり、花開きていさぎよく、水をそゝぐがごとくに露玉ありて、總體うつくしく、是を繪書ば畫工も筆をなやむべし、享保八年に、長崎より初て來る、枝を切てさしてよくつく、寒氣を

きらふ、九十月比、日向よき所に植てまはりと上をかこひ、寒氣をふせぐべし、暖なる日は晝の間時々日をあつべし、丈からざれば春に成りてかるゝものなり、三月中旬比、砂黒土にて鉢に植かへ、油かすか又は魚の洗汁などかけて、やしなふべし、

〔剪花翁傳〕三四月開花〕土圭艸　花八重、一重、形鐵線風車に似たり、色此二種より濃し、開花四月下旬より五月上旬迄あり、分株春彼岸よし、

秋海棠

〔書言字考節用集〕六生植〕秋海棠（シウカイダウ）（古詩云、斷腸草、見遺在八陵、）（腸々秋海棠、人）

〔大和本草〕七花草〕秋海棠　名花譜曰、一名斷腸花、嬌冶柔軟、眞如美人倦粧、性喜陰、見日卽瘁、九月收枝上黑子、撒於地上、明春發枝、老根過冬者花發更茂、寛永年中中華ヨリ初テ長崎ニ來ル、ソレヨリ以前ハ本邦ニナシ、花ノ色海棠ニ似タリ故ニ名ヅク、其葉左ニ顚ルアリ、右ニ顚ルアリ、他草ニ異ナリ、第一葉左ニ顚レバ、第二葉ハ右ニ顚ル、上下カハル〳〵左右ニ顚ル、六七月花ヲヒラク日ヲ畏ル、日ニアヘバ色變ズ、陰地ニウフベシ、日アテニウフレバ枯ル、北ノ屋カゲ垣根ニ宜シ、間ヒロクウフベシ、葉大ナル故ナリ、沙土ヲ好ム、黃硬土ニ宜カラズ、零餘子ニ似タル小子アリ、子ヲマキテ生ズルハ、二年ニシテ花サク、或曰、子ヲマキテ糞ヲソヽゲバ、當年花サク、宿根ヨリ生ズルハ年々サク、大風ニ破レヤスシ、七月初ヨリ小竹ヲ立テ助クベシ、花鏡曰、爲秋色中第一、又曰澆糞卽萎、

〔和漢三才圖會〕九十四末濕草〕秋海棠　斷腸草○中略

按秋海棠莖葉略似款冬（フキ）、而小軟有艶、梗帶赤色、抽莖開花、似蕙蘭玉簪（ギボウシ）花之蕾、而淡紅可愛、其子生枝葉間、形色似零餘子、而大如豌豆、種之易生、

仙人掌

〔書言字考節用集〕六生植〕覇王樹（ハワウジユ）（サボテン）（覇又作伯、産生八陵、如掌、色翠綠、上多米點子、叢生大上、稱爲奇樹、）

〔大和本草〕七圖草〕覇王樹　花史ニ出タリ、葉ナクシテ其形枇杷葉ノ如クニシテ厚ク、肌ハ胡瓜ノ如シ、枝ヲ生ジテ又枇杷葉ノ形ノ如シ、多子、其頂ヨリ生小葉コトアリ、高至二三尺、ヲリテ挾セバ

生ズ、樹ニアラズ、出于花史、曰殆天地間之奇樹也、マコトニ草中ノ異物ナリ、寒氣ヲ畏ル、寒月ニ早クオホフベシ、フホヒナケレバ枯ル、油ノケガレヲヨクトル、

〔草木性譜 下〕仙人掌 形状花候 附 龍骨木 性質功用

南國の產にして暑寒を畏る、多く暖室に藏め、水を灑べからず、寒中水を澆げば腐爛し活せず、枝を發し葉なく深綠色、尖刺有て只扁なる而已、大なる者は八九尺に及び、夏中新芽を頂に生ず、互扁なり、暖地に有る者は花を開く、忽然として扁上に發し、生處定らず、重瓣褐色、細縱文あり、黃蘂繁く、心中に白蘂有り、大さ茶梅花の如し、花後五稜の實を結ぶ、其一片を折て暫時日乾し、播插すれば卽活し、嫩芽を生ず、刺あり、一說にこれを庭際に置ば火患を避と云ふ、花鏡に亦其說あり、今獅子と云ふ者は其變種なり、又龍骨木を以て仙人掌の一種とするは非なり、別種なり、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 石草〕仙人掌草　サンボタイ　サボテン　サンボテ 讃州　イロヘロ　サチ
ラシヤボク　トウナツ　トウナス 勢州　ニヨロリ 豫州　一名覇王樹 八種畫譜　仙人掌 秘傳花鏡

花家ニ多シ、寒國ニテハ多腐リ易シ、形手掌ノ如ニシテ長シ、大小等シカラズ、綠色、又黃瓜ヲ壓シ扁メタルガ如シ、體ニ疣刺多シ、縱橫ニ一二層ヲナシ、或ハ數層、或ハ旁ニ數枝分ツ者アリ、至テ大ナル者ハ丈餘ニ及ブ、夏花ヲ開ク、生處定マラズ、或ハ頂ニアリ、或ハ旁ニアリ、大サ二三寸許、重瓣赤黃色、千葉黃薔花ノ如ク、或ハ小蓮花ノ如シ、暖地ニテハ花後實ヲ結ブ、長サ二三寸、五稜ニシテ兩頭狹シ、蕃スル者ハ地ニ下シテ生ジ易シ、コノ物夏中ハ甚ダ生活シ易シ、幾段ニ切リ栽ユルモ皆生ズ、

増、〇一種キリンカクト呼モノアリ、卽懷火ノ圓キモノナリ、ソノ形胡瓜ノ如ク直立シテ幹狀ヲナシ、深綠色ニシテ縱ニ五稜アリ、稜上ゴトニ小瘤ヲ起シ葉ヲ生ズ、五葉互生シテ圓ク莖ヲ圍ミ、層ヲナスコト數十葉、卒ニ見レバ對生互生ノ別ナキニ似タリ、葉蔕ノ本ニ細刺二條アリ、葉ノ

使君子

形楡(ユブリハ)ノ葉ニ似テ、本狹ク末濶シ、鋸齒ナク、毛刺ナク、厚シテ深綠色ナリ、葉中ノ縱脈背ニ起發シテ劍脊ノ如シ、長ズルニ隨テ落葉シテ、莖ニハ葉痕ト刺ヲ存ス、甚寒氣ヲ畏ル、冬月土窖ニ育スレバ落葉セズ、扦插シテ能活ス、

〔草木育種 下 菓蓏實觀べきもの〕仙人掌(さぼてん)(滇南雜記)　又覇王樹ともいふ、本暖國より來る、駿河安房等には大樹ありて、花を開實を結、花は老虎黃(かろいろ)にして形黃薔薇のごとし、實は母指の大にして中に仁あり、蒔てよく生ず、又枝を折て折口へ灰を付、少し日に乾て植れば、よく活(つく)ものなり、夏中人糞汁を澆べし、近頃白斑あるものあり、又石下さぼてんと云あり、扁して枝少く、其形狀扇をひらくがごとし、或云さぼてんの汁、目に入る時は盲といふ、

〔多識編 二 蔓草〕使君子、今案可羅久知那志、異名留求子、

〔書言字考節用集 六 生植〕使君子(カラクチナシ)(蔓草也、一名留求子、)使君子(シクンシ)(本草、其蔓如葛繞樹而上、葉如五加葉、)

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕使君子　留求子

本綱使君子原出嶺南交趾、今閩蜀皆栽種之、亦易生、其藤如葛繞樹而上、葉青如五加葉、五月一簇一二十、葩紅色輕盈如海棠、其實長寸許五瓣、合成有稜類梔子、嫩時半黃、老則紫黑、其中仁長如榧子、色味如栗、久則油黑不可用、此藥療小兒疾、故名留求子、

氣味甘溫　治小兒百病、五疳、小便白濁、瀉痢、虛熱、健脾胃、凡殺蟲藥多是苦辛、惟使君子榧子甘而殺蟲亦異也、服之者忌飮熱茶、犯之即瀉、此物殺蟲小兒要藥也、俗醫乃謂殺蟲至盡、無以消食、鄙俚之言也、樹有蠹屋有蟻國有盜、禍耶福耶、修養者先去三尸、可類推也、

稜原始曰、使君子味甘、卽是用肉、然肉少難得、今醫家或兼用也、近來所渡者多無仁、故皆用殼、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕使君子　一名風稜御史(輟耕錄)　史君子(名花譜、群芳譜、本草彙言、)　史均子(醫學正傳)　使君花(花曆百詠、花名、)

和産ナシ、漢渡ノモノ僞ナシ、長サ一寸許、中濶ク兩頭尖リテ五稜アリ、栗殼色、肉ハ白色生色スベシ、陳久ノモノハ、色變ジカビアリテ食フベカラズ、新ナルモノハ、地ニ下シテ生ジ易シ、享保年中淸種ヲ傳テ、駿州ノ官園ニ栽ラル、今ハ花戸ニモ多シ、然レドモ甚寒氣ヲ畏ル、故ニ冬月土窖中ニ入レ、蓄養フテ本大ナル者ハ花ヲ開ク、實ヲ結ベドモ熟シ難シ、駿州尾州紀州等ノ暖地デハ、年年多ク花實ヲナス、葉濶サ一寸、長サ三寸許、其末微シ濶クシテ尖リアリ、大抵梔子葉ニ類シテ薄ク色モ淺ク對生ス、蔓ト共ニ微毛アリ、年ヲ經タル者ハ藤大ニシテ紫藤ノ如シ、三四月花ヲ開ク、一朶二三寸、花横叢ス、形チ紅紫葳(ノウゼン)花ノ如ク、五出下ハ細筒ヲナス、長サ一寸許ニシテ莖ナシ、花始ハ白色漸ク紅色ニ轉ジ、紫色ニ轉ク、後漸ク黄色ニ變ズ、一朶中數色相雜リ美觀ナリ、花中ニ短蘂アリ、後實ヲ結ブ、舶來ノモノニ異ナラズ、

〔新撰字鏡 草〕芰。(渠知反、去、菱也、比志。)。 蓤(亡伯反、水中菜也、比志、) 蔆(二作、青遙反、水菜、藕比志、) 蔿(比志)

〔倭名類聚抄 十七菓蓏部〕菱子。 說文云、蔆(音陵)秦謂之薢茩(解后二音)楚謂之芰(音妓、字亦作茤、和名比之、)

〔箋注倭名類聚抄 九菓蓏部〕原書艸部、菱作蔆、玉篇蔆亦作菱、原書茤作芰、說文又云、芰蔆也、茤杜林說芰从多、蜀本圖經云、生水中、葉浮水上、其花黄白色、實有二種、一四角、一兩角、本草圖經云、花落而實生、漸向水中乃熟、又有嫩皮而紫色者、謂之浮蔆、食尤美、李時珍曰、三月生蔓延引、葉浮水上、扁而有尖、光面如鏡、葉下之莖有股如蝦股、一莖一葉、兩々相差、如蝶翅狀、五六月開小白花、背日而生、晝合宵炕、隨月轉移、其實有數種、或三角四角、或兩角無角、野菱自生湖中、葉實俱小、其角硬直刺人、其色嫩青老黑、

〔下學集 下草木〕菱(ヒシ)(角草也)

〔書言字考節用集 六生植〕芰(ヒ)實(シ)(兩角者曰芰、四角者曰菱、本字蔆、一名沙角、) 水栗(同、風俗通)

〔東雅 十四果蓏〕菱子ヒシ　此物の名は、仁德天皇の御歌にも、すでに見えたれども、其義の如きは不詳、

古語には刀をばヒといひけり、此物の實核、角ある事の刀に似たれば、此名ありけるにや、さらばシと云ひしは詞助なり、魚をとる器に、ヒシといふもの、あるは、此物に因りて名づけ云ひしと見えたり、

〔倭訓栞前編二十五〕ひし　菱子を訓せり、蔾蒺もよめり、鰭蒔の義なるべし、ひし蔓ともいへり、菱に兩種あり、小なるを黑菱といふ、稜硬して人を刺す、大なるは稜脆し、參河國岩堀の菱は二稜也といへり、

〔宜禁本草乾五菓〕芰實　甘平冷、一名菱角、江淮乾以代粮、不能療病、多食生蟯虫、令人臟冷、損陽氣、痿莖、或腹脹、飮姜酒即消、主安中補五臟、與蜜合食生虫、

〔本朝食鑑三水菓〕菱和名比之、今亦同、

集解、湖澤處處多有之、菱子落于泥中最易生發、三月生蔓延引葉浮水上、扁而有尖、光面如鏡、葉下之莖有股如蝦股、一莖一葉、兩兩相差、如蝶翅狀、五六月開小白花、背日而生、晝合夜炕、隨月轉移、其實有數種、或三角兩角四角無角、嫩靑老黑、葉實倶小、其角硬直刺人、謂之烏菱、嫩時剝食甘美、老則蒸煮食之、一種種于陂塘、葉實倶大、角耎而脆、亦有兩角彎卷如弓者、其色有靑紅紫、此亦與烏菱同、煮熟作果、野人以爲救荒之具者也、近世取菱殼燒作紫灰、以入香爐能保火、故人以爲珍焉、

氣味、甘冷無毒、多食傷人主治、解暑及傷寒積熱、止消渴解酒毒、

〔重修本草綱目啓蒙二十二水菓〕芰實　ミズモグサ古歌　ヒシ　一名翻鷄事物異名　紫角　子陵上共同

胡速兒事物異名、蒙古ノ名、　菱角本經逢原　水菱本草蒙筌　蟾蜍股事物紺珠　未栗實郷藥本草　菱栗村家方　花一名水

客事物紺珠　穿萍名物法言

水澤中ニ多ク生ズ、根ハ水底ニアリテ、葉ハ水面ニ叢生ス、形扁シテ蛺蝶ノ翅ノ如ク、厚クシテ光リアリ、其莖フクレテ蝦蟆ノ股ノ如シ、夏花ヲ開キ實ヲ結ブ、形三角四角或兩角アリ、ソノ角皆尖

リテ人ヲ刺ス、初緑色秋ニ至リ熟スレバ黒色、煮テ白肉ヲ採リ食フ、コレヲユデビシト云フ、時珍ノ說ニ、野菱家菱ノ別アリ、形小ナル者ハ野菱ナリ、形大ナル者ハ家菱ナリ、〇中略塘、ヒシノ葉ハ七八葉攢生シテ水面ニ浮ブ、夏月四瓣ノ黃白花ヲ開ク、大サ五分許アリ、又實ノ小ナルヲ野菱トシ、大ナルヲ家菱トスル說ハ穩ナラズ、コノ根ヲ水田ニ栽テ培養シタルヲ家菱トシ、野生ノモノヲ野菱トス、野山蠶家山蠶ノ例ナルベシ、

〔百姓傳記十三〕ヒシヲ植ル事

一ヒシハ池川溝堀ニハナスベシ、種色々アリ、角ノ二ツアルヲ能モノト知レ、角ノ二ツ有內ニモ、皮ノトツト剛キモノアリ、夫ハ惡キゾ、皮ノ柔カナルニ實多シ、沼ニ生ジ安シ、石地砂地ノ池川ニハ生エ惡シ、蔓多ク出ルモノナリ、七月下旬八月ニハ、ハヤ實ノ入モノナリ、冬ニ至テ蔓モ腐リ水底ニ沈ム、ヒシハ殼以沈ムナリ、多ク實ナリ、貧ノ助ケトナル、三河國岩堀ト云村ニ池アリ、此池ニ名物ノヒシアリ、近村ノ土民寄合、冬春ノ內取テ喰フ、又ハ市町ヘモ出シ賣ナリ、水底ノヒシヲ取ニ、コクウト云テ、板ヲ以テハサミヲ拵ヘ、柄ヲ長ク付、船ニ乘リ泥ノ底ヲコクウニ挾ム、其ハサミノモトニ、荒キ布袋カ網ヲ付、ヒタモノコユスリ落ヲハサム故、泥ノ內ニ魚マデカヽル程ノコトナリ、

一何國イカナル村里ニモ、池川ニハ鬼ビシ多ク生ル、ミナ喰フモノナリ、然レドモ味ヒ能ラズ、ユデヽ後庖丁小刀ヲ以皮ヲムク、上皮堅キナリ、三河國岩堀近處ノ男女ハ、之ヲムクコト上手ナリ、生ノ儘モユデヽモ、日ニ能干シ、臼ニテカラハ皮ムケ實コナル、トヲシテ以テフルキ、擂鉢ニテ素皮ヲユリアゲ、實ヲ取食ニモ、粥ニモスル、田夫喰ヒテ力アリ、切疵ウチ身ニハ大毒ナリ、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子

丹波國（中略）菱子二〇中略　右依前件、文略數增減、隨到撿收附內膳司、

人參

〔延喜式 内膳三十九〕供御月料

搗橘子、菱子、各二斗二升五合、〇中略　右月料、小月減二卅分之一一、

〔日本書紀 應神十〕十三年、天皇知三大鷦鷯尊感二髮長媛一而欲一レ配、〇中略　大鷦鷯尊蒙二御歌一、便知レ得レ賜二髮長媛一而大悅之、報歌曰、〇中略　委遇比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭鷄區辭羅珥、〇下略

〔萬葉集 雜歌七〕羈旅作

君爲、浮沼池、菱採、我染袖、沾在哉、

　右四首、柿本朝臣人麻呂之歌集出、

〔枕草子 七〕おそろしきもの　ひし

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難レ申盡一候、〇中略　時以後菓子者、〇中略　菱、

〔尺素往來〕茶子者、〇中略　刺薢、菱、

〔看聞日記〕永享四年九月廿三日、上様御留守事、一獻 鯉一、菱一合、推二寄一、自二南御方一進レ之、〇中略　仙洞へ菱一合進レ之、

〔毛吹草 三〕河内　菱　三河　岩堀菱 此菱角二ツアリ、味勝レリ、　若狹　蕣蓴子

〔國花萬葉記 參河八〕參州國內中名物之部

岩堀菱 此ひし角二つあり

〔新撰字鏡 草〕人參 久万乃伊、有人云、加乃爾介久佐、

〔本草和名 草六〕人參　一名人銜、〇銜恐衍誤　一名鬼蓋、一名神草、一名人微、一名土精、一名血參、一名黃糸、〇糸恐參誤　一名玉精、已上三名出二釋藥性一　人參者藥精也、出二范注方一　一名人微 出二雜要訣一　和名加乃爾介久佐、一名爾己太、一名久末乃以、

〔倭名類聚抄 草二十〕人參　本草云、人參一名神草、和名加乃仁介久佐、一名久末乃伊、

〔箋注倭名類聚抄 十〕說文、人葠藥草、出上黨山谷、太平御覽引吳普云、人參三月生、葉小銳黑、莖有毛、根有頭足手面目如人、本草陶注云、人參生一莖直上、四五相對生、花紫色、高麗人作人參讚曰、三椏五葉、背陽向陰、欲來求我、椵樹相尋、椵樹葉似桐甚大、陰廣則多生陰地、圖經云、其根形狀如防風而潤實、春生苗、多於深山中背陰近椵漆下濕潤處、初生小者三四寸許、一椏五葉、四五年後生兩椏五葉、未有花莖、至十年後生三椏、年深者生四椏各五葉、中心生一莖、俗名百尺杵、三月四月有花、細小如粟、蘂如絲、紫白色、秋後結子、或七八枚、如大豆、生青熟紅、自落、根如人形者神、

〔下學集 下 草木〕人參（ニンジン）

〔塵添壒囊鈔 三〕一人參ヲカノニケクサト云フハ、鹿ノニゲテユク歟、鹿コトニ好ミクフ故ニ、カノニケクサトハ云フ、ニケトハニレト云フ事也、ニレカムト云ヒテ、ノドヨリモノヲフキイダシテカム也、鹿ノ齝（ニケ）草ト云フナリ、ニケト云フベキヲ人アヤマリテニレトハ云フナリ、牛ノニケヲバ齝トカク、羊ノニケヲバ齛ト書ク、物ニ隨テ字モカハルナルベシ、

〔大和本草 六 草〕人參　參字本蓡或省作薓、有如人形手足者故人參ト云、朝鮮ノ產ヲ爲上品、中夏ニモ用之、〇中略 唐人參ハ長崎ニ來ル者朝鮮ニ次ゲリ、ヒゲ人參ハ人參ノヒゲナリ、是又自異邦來ル、非本邦ノ產、堅實ナル故大人參ノ性淡キニハマサル、節人參ト云モノアリ、葉ハ芹ニ似タリ、根ニ節アリヒゲ多シ、山中陰濕ノ地ニ生ズ、其鬚ヲヒゲ人參ト云、節人參ハ其大ナル根ナリ、藥肆ニ其根及鬚ヲウル、味苦シテ氣ヲ泄ス、人參ノ氣味ニ似ズ、不可用、草醫是ヲ以人參ニ代ヘ用ユ甚非也、又近年世上ニセリ人參トテ、芹ニ似タル草ヲウフ、味モ芹ニ似タリ、ムカゴノ如クナル、其根味甘シ、未詳其性、本邦ノ醫人參ノ價貴キ故代ヘ用ル物多シト、トキ人參、ツル人參此二種ハ砂參ナリ、人參ニ代ヘ用テ驗無大補、然レドモ害ナシ、〇中略 延喜式日本諸州ノ土產ニ人參アリ、是亦砂參ヲ以テ人參トセシナルベシ、

〔和漢三才圖會 九十二本 山草〕和人參（わにんじん）○中略

按人參往昔本朝有之、而中古不用之、出於薩摩者名小人參、一名節人參、近年得唐人參種、多植圃、攝州平野庄多出之、二月下種、初生一莖三葉、及長數椏皆三葉、其葉厚潤有深刻、而無筋、略似銀杏葉、每八月中心抽一莖、高三四尺、開細白花、如蓋、似蘹香及胡蘿蔔花、秋後結子細小、亦似胡蘿蔔、霜後枯宿根亦能生也、九月採根、如胡蘿蔔、而淡白色、以甘草汁蒸乾則能類人參、但頭無横文、蘆頭不括縮耳、功能亦不及、故用者鮮、

和州吉野山中有自然生者、又有得異朝鮮參種植者、並其葉根與朝鮮不異、然甚希而未足賣買、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕人參

和人參　サツマニンジン　ロシノニンジン　トチニンジン　トチノキニンジン　トチバニンジン　ゴヤウニンジン　ウコギニンジン　テンシゴヤウサウ　ゴヤウサウ（城州貴船）　コニンジン（駿毛同名）　クマモトニンジン（肥後）　ヤマニンジン（日光）　ニツカウニンジン（下野）　シマバラニンジン（肥前）　シマニンジン（津輕）　ス、クシニンジン（南部）　カモジニンジン（會津、駿トモニ連子乾シメルナ）云、　延喜典藥寮式諸國貢藥目次中ニ、攝津、伊勢、陸奥、若狹、丹波、美作、太宰府、伊豫、越前、甲斐トアリ、貝原翁ノ說ニハ、沙參ナラント云ヘリ、此說近シ、和人參ノ出タルハ、稻松岡兩先生ヨリ以後ノ事也、人參ニ限ラズ、今詳ナラザル藥品、式ニ載ルモノ多シ、和人參ハ今諸國ニ產ス、皆深山幽谷雜木多キ陰地ニ生ズ、其初薩摩ヨリ出ヅ、故ニ總ジテ薩摩人參ト呼ブ、又俗ニ三椏五葉ト云、一莖直上シ、梢ニ三枝ヲ分チ、枝ゴトニ五葉ヲ生ジテ、五加葉ノ如ク皆鋸齒アリ、然レドモ三椏五葉ニ限ラズ、年久キモノハ六七椏八九葉ニ至ルモノアリ、又層椏ナル者アリ、並ニ椏中別ニ一莖ヲ出シ、其梢ニ細小花ヲ簇生ス、五攢ニシテ淡綠色、中ニ白蕊アリ、亦五加花ニ似タリ、又紫藥ナル者アリ、コレヲ紫花人參ト云、城州岩屋ニアリ、花後實ヲ結ブ、形圓カニシテ綠色、秋冬ニ至リテ紅熟ス、又一

種類ニ一黒子ヲ點シ、相思子(トウアヅキ)ノ如キ者アリ、又莖上數枝ヲ分ツモノアリ、實ヲ結ブコト至テ繁麗、觀ルニ堪タリ、ソノ實地ニ落チ、春ニ至リ苗ヲ生ズ、一莖三葉、次年ハ一莖五葉、三年ニハ二椏五葉、四年ニ至テ三椏五葉トナル、然レドモ肥地ニ種ルモノハ初年一莖三葉、次年二椏三五葉、三年ニ至リテ三椏五葉トナル、三椏ノ後ハ皆花實ヲ生ズ、其葉大ナルモノハ尺餘ニ及ブ、鋸齒ニ粗密アリ、色ニ淺深アリ、體ニ厚薄澤澁アリ、皆生ズルトコロノ地ニ因テ異ナリ、讃州山中ニ生ズル者ハ、葉細長ニシテ鋸齒最大ナリ、コレヲ細葉ノ人參ト云、俱ニ根ニ横圓直ノ分アリ、横根ノモノハ竹鞭ノ如クシテ鬚多シ、竹節人參トモ節人參トモ云、圓根ノ者ハ珠ノ如シ、タマニンジントモ、カブラトモ、カイルコ手トモ云、並ニ皆白色ニシテ臊氣アリ、味至テ苦シ、用テ蟲ヲ殺シ、積聚ヲ治ス、直根ノ者ハ形狀絲參ニ似テ鬚少ク、味微甘、又人形ノ者モアリ、京師ノ山中ニ生ズル者ハ、横圓ノ二品ノミ、紀州熊野、和州芳野ニ生ズル者ハ、三品雜リ生ズ、薩州、加州白山、信州松本、木曾、豆州等ニモ直根ヲ出ス、已上ノ和人參皆形狀遼參ニ同ケレドモ、其性最下品、補藥トナスベカラズ、秘傳花鏡ニ、土參ノ條ヲ載ス、唐山ニテモ此草ヲ栽ヘテ、紅實ヲ玩賞スト見ヘタリ、

竹節參ノ鬚ハ微ク甘味アリ、藥用ニ入ルベシ、薩摩、(ノベシテ乾シタルヲカヲロ手ト云)日光、(カ言カモロ、ニンロン)信濃ノ產ヲ上品トス、但馬丹波ノ產ハ苦味多クシテ下品ナリ、

朝鮮種ヲ栽ルヲ御種人參ト云フ、形狀ハ和人參ト同ジクシテ皆直根ナリ、其異ナル所ハ、實ノ形正圓ナラズシテ、早ク熟スルニ在リ、コレヲ劈ケバ、一實ノ内ニ二三子並ビアリ、故ニ其形扁シ、六月實紅熟スル時、下種スレバ生ジヤスシ、外皮乾燥スレバ生ジ難シ、

〔草木育種(下品)〕人參(本草)　朝鮮種人參なり、植る土地は山にて高き所よし、白めなる砂地に尤宜、人參耕作記、又物類品隲に黒ぼくに植ると云、この黒ぼくは今云黒ぼく土とは別の物歟、今云處の黒ぼくに植る時は根腐易し、赤土に白めなる砂を等分くらいにませたる土に植べし、人參に相

應する地は、下野國都賀郡日光山、信濃國など皆白めなる砂地にてよく出來るなり、植る所より南の方に並木ありて、南風の邪氣有を防、北風の陰氣を入べし、故に海邊にては長せず、植るには竹の簀をあみ、土中へ埋、鼴鼠を防べし、多作には鼴鼠を狩べし、(鼴は上卷に見へたり)實ばへの内は搭棚を低作、北を高、南を低、杉皮にて葺、椋櫚の如く拵、日よ大雨を除るなり、人參三四歳に至ば、葦簾或女竹を編て平にかけ置べし、雨満人參にかゝりても苦からず、却て勢氣を益ことあり、肥は荏の實を蒔芽を生じたる時壟(とをし)、又荏の莖を土へ切まぜたるもよし、又夏の内人糞を土へまぜ置、寒にいてさせたるを、根廻へ切まぜ置べし、植付たる所へ直に肥を用れば、蘆頭腐もの也、植替るには、右の肥土をまぜて植べし肥過分れば種々の蟲を生ずる也、人參は夏實のり、赤くなりたる時採て土にまぜ、土中に埋置、十月に至て植る時、右の荏を切まぜたる土を入、實を植べし、初より人糞を用るは惡し、二年めより少づゝ土へまぜ用べし、

〔渡邊幸庵對話〕一人參之事、人形共、トサム共云、是本人參也、總て人參の生ずる所十七ヶ所あり、其内人形人參の出生は、第一朝鮮、第二中華に在、朝鮮にてはトサムといふ處也、三十里四方岩石の山にて、草木不生、皆岩石の間に、自然にごみほこりの溜り申處に出生す、人形と申は人の首の様に上太り、夫より左右の手左右の足の如く枝付て、人の形の如く也、故に人參と號す也、麓の里をトサムといふ、第二中華の人參も岩石の中に生ず、其外は土に生る也、此土に生るは人形不備不具に候、枝の付やう全體にあらず、是も人參にして功大に劣れり、故にあなたにて人形トサムを用て、土に生る人參を第一日本へ渡す也、夫共に昔は人形も渡りし也、當時稀也といふ、同じ人參ながら、人形は大に違故に、トサム人形は自國にて用ひ、他國へは土に生るを渡す也、依之古は人參の煎粕を又煎じ、病氣も無之者呑て亂心せし者多し、是氣の德厚き故也、トサムにて彼岩石の中に生ずる所、少葉立延候得者、其葉を鶴喰候故に、出生少し青み見ゆると、斧にて岩石を打碎き

堀出すなり、

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山所在草木、○中略 人參、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十一年十二月戊辰、渤海使己珍蒙等拜朝、上其王啓幷方物、其詞曰、○中略 附大虫皮羆皮各七張、豹皮六張、人參三十斤、蜜三斛進上、至彼請檢領、

〔七十一番歌合 六十番 右〕　藥うり

御藥なにか御用候、に。ん。じ。ん。かんざう、けいしん候、ぢんも候、

〔武江產物志 藥草〕志村邊ノ產　志村人參 同新田ニモ　ムカゴ人參 同上　鼠山ノ產　ムカゴニンジン 下田

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕人參 ○中略 近時明和二年春、逸見西井出村與兵衞云者、一橋殿ヨリ御種人參種六十二粒賜ハリ、八岳中央ノ晶巖ヲ運ビ、庭中ニ築園植之、頗ル麗土佳品ヲ出セリ、獻上スルコト十餘年ニシテ、初所賜種子ヲ返納セシカバ、猶又百二十粒、永久ニ賜ヒシト云、

〔紀伊續風土記 物產 三〕人參 本草

享保年中、在田郡山保田莊山中に、朝鮮種を培養す、今は絶ゆ、人家には稀に栽る者あり、又直根圓根竹節根の三品は、牟婁日高在田三郡の諸深山、雜木多き陰地に自生あり、

○按ズルニ、人參ノ事ハ、猶ホ方技部藥方篇ニ載ス、參看スベシ、

〔多識編 二 蔓草〕常春藤、今案於。爾。末。左。岐。異名土鼓藤 拾遺

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕常春藤　カ。ベ。グ。サ。古名　イ。ツ。マ。デ。グ。サ。同上　キ。ヅ。タ。　フ。ユ。ヅ。タ。　カ。ン。ヅ。タ。勢州　一名長春藤 花鏡 錦帶

藤蔓長ク纏フ、葉互生、形圓扁ニシテ尖リアリ、或ハ三尖五七尖ナルモアリ、其五七尖ナル者ハモ。ミ。ヂ。カ。ヅ。ラ。ト呼ブ、皆多枯レズ、深綠色ニシテ厚シ、其葉邊紅白相雜ル者ヲニ。シ。キ。ヅ。タ。ト呼ブ、年

久シキ者ハ、其藤最大ニシテ木ノ如ク或ハ直立ス、故ニキブタト呼ブ、葉形變ジテ一尖ニシテ狹クナリ、初ノ葉トハ形甚異ナリ、夏月葉間ニ花ヲ生ズ、小ニシテ白シ、數十簇生ス、後圓子ヲ結ブ、大サ二分許、熟シテ黑色中ニ紫汁アリ、

〔武江產物志 藥草〕隨地有之類　常春藤

獨活名稱

〔本草和名 六草〕獨活（陶景注云、不爲風搖、故名獨搖、）一名羌活、一名羌靑、一名護羌使者、一名胡王使者、一名獨搖草、（陶景注云、此草得風不搖、無風自搖、）一名蔵齎、（出兼名苑）一名口花使者、（出雜要訣）和名宇。止。一名都。知。多。良。

〔倭名類聚抄 二十草〕獨活　本草云、獨活一名獨搖草、（和名宇止、一云豆知多良、）陶隱居注云、無風自搖、故以名之、

〔類聚名義抄 八僧〕獨搖草（ウド、一云ツチタラ、）

〔伊呂波字類抄 宇植物 附雜物具〕獨活（ツチタラ、ウド、トリノアシ、）

〔下學集 下飮食〕烏頭布（ウドノ）〔同 下草木〕羌活（キヤウクワツ）　獨活（ドクワツ ウド）又云獨搖草、此草無風時亦獨自搖、故云爾、末云羌活、頭云獨活也、

〔易林本節用集 宇草木〕獨活（ウド）

〔物類稱呼 三生植〕獨活うど　西國にてしかといふ、西國にては、土中に有を獨活（とつくわつ）といひ、二三寸地上に生じたるをうどといふ、尺以上になりたる物をしかと呼、阿部氏云、松前千砂野の濱より眞の獨活を出す、土人これをさいきと云、京嵐山にも有、しうど、又いぬうどといふ、

〔倭訓栞 中編三上〕うど　新撰字鏡、倭名鈔に、獨活をよめり、うどめは其芽也、西國に土中にあるを獨活と呼也、地上に生じたるをうどといひ、尺以上のものをしかと呼り、古へ醍醐の產を賞せり、されど庭訓に烏頭布と書たるをもて、黑き和布也ともいへり、玄ゝうどは羌活也、うどもどきともいふ、をはりうど枕草紙に見ゆ、今も名產とせり、

〔本朝食鑑 三柔滑〕獨活（訓二宇土、和名訓豆知多良、）

集解、獨活冬采、根藏甕中之土、或塗土藏于桶中、其根作塊、上尖下蹲而有脂、冬至春初、根之尖處有宗

苗、此俗稱兎字止、二三月生苗、似蘆筍、有節有短毛、上紫下碧黃白、漸長而苗綠黃、根白有紫小點、從其兎字止至長苗、可爲蔬茹、既生葉如青麻、高四五尺、或七八尺、至丈餘、此時不可食也、六月開花作叢、或黃或紫、結實時葉黃者、亦有此石上所生也、秋末下種、然今大抵皆采宿根而栽之、近時有春初生苗者、至自韓陽、韓地在江之南面、土地和暖、故先期而生、苗生實生花乎、

〔本朝食鑑三華和異同〕獨活往時

本邦以字土爲獨活、今比于舶上中華之獨活、則難爲是、此經年乾枯之故歟、羌活今本邦山中處處所生之獨子字土矣、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕獨活。　シヽウド　イヌウド　ウマウド〇城州貴船中略山中ニ多生ズ、苗大抵土當歸ウドニ似リ、葉モ亦相似テ異アリ、食用ニ中ラズ、莖葉ニ毛アリテ糙澀ス、夏以後薹ヲ起シ、葉互生ス、秋ニ至リ高サ六七尺、枝端ゴトニ小白花ヲ開ク、數百攢簇シテ傘蓋ノ如シ、後實ヲ結ブ、並ニ大葉ノ宵閒ニ異ナラズ、其根白色臭氣烈シテ微香アリ、曝乾セバ内淡白色ニシテ、外皮淺黑色、市人呼デ眞羌活トスル者ハ非ナリ、是獨活ノ一種下品ナル者ナリ、ソノ氣味最猛烈、病人厭ヒテ服スルコト能ハザル者多ケレドモ代用ユベシ、獨羌二活ノ說、古來紛紛タリ、頌ハ二物一類トシ、機ハ本非二物ト云、時珍ハ一類二種トス、士鐸モ兩種トス、今此ニ從フ、和名鈔ニ獨活ヲウド、訓ズ、ソノ後正保年中ヨリ、ウドノ宿根ヲ獨活トシ、或ハウドノ全根ヲ獨活トス、皆非ナリ、古渡ハ獨活羌活ヲ一器ニ混入ス、長崎ニテ擇分チ、本手、馬皮手、前胡手ノ三品トス、總テ羌活ト稱シテ四方ニ貨ス、ソノ本手ノ羌活ト稱スルモノハ、眞ノ羌活ナリ、其前胡手ト稱スルモノハ、輕虛ニシテ黃色味辛シ、是眞ノ獨活ナリト云傳レドモ、ソノ後久ク渡ラズ、〇中略

羌活。　ウドモドキ　ウドタラシ〇中略

古ヨリ土當歸ウドノ嫩根紫色ナル者ヲ羌活トス、今藥舖ニウド羌活ト呼ビ、シヽウドノ根ヲ眞ノ羌

獨活栽培

活ト呼ブ、皆用ルニタヘズ、舶來本手ノ羌活、一名竹ノ節手ノ羌活ト呼ブモノ眞物ナリ、根ニ節アリ、又横文多ク、紫黑色ニシテ香氣アリ、味辛シ、然レドモ久シク渡ラズ、近年他ノ藥品中ヨリ揀出スモノアレドモ少シ、新渡獨活中ニモ少ハ混入セリ、寬政末年ニ渡ル羌活ハ、眞ノ竹節手ナリ、中○略

土°當°歸°土、救荒本草ニ杜ニ作ル、　ウド　シカ筑前　ドゼン讃州中略○

此ニ其形狀ヲ闕ク、獨活ノ集解ニ根ノ形狀ヲ說キ、救荒本草ニ略苗ノ形狀ヲ載スルニ據リテ考レバ、ウドニ充ルヲ穩トスベシ、

增、ウドハ羌活ノ一種ナリ、土當歸ハハマウド、一名ハマアシタバトモ云、海濱ノ砂地ニ生ズ、春苗ヲ生ズ、葉ノ形大抵シヽウドニ似テ、深綠色ニシテ厚ク硬シ、面背共ニ光澤アリ、莖ニ數條アリテ紫色ヲ帶ブ、ソノ趣當歸ニ能ク似タリ、實生ヨリ三年ヲ經テ、夏月臺ヲ抽クコト六七尺、葉莖ニ互生シ、秋ニ至テ莖頂ニ枝ヲ分チ、小白花ヲ攢生シテ傘狀ヲナス、花謝シテ後實ヲ結ブコト、亦獨活ノ如シ、故ニ土獨活ノ名アリ、又鹹草ニモ似タリ、故ニハマアシタバト云、三年ノ後苗根共ニ枯ル、

〔農業全書四菜〕獨活

三四月芽立を生ず、貴賤あまねく賞味する物なり、里遠き山野に生ず、冬より土中なる芽を取て食品とす、されど時ならざるを食ふは、よからぬ事にや、山野の空地多き所にては、地をひらきよくこなし、其根を取、わけて多くうゆべし、其地味よき所にては、甚早く榮へ、殊に味よし、貴賤皆このみ用ゆるものなれば、都近き所、又諸國の國都など、大邑ある近方にて、山野の餘地あらば、多く作り立て、市中に出すべし、

〔草木育種下菜〕うど　山の荒地を三四尺も掘、內を平にして其低處へ植付、冬の始より塵芥の內にて、木の枝竹等を拾捨、細き芥ばかりを、段々厚く覆ひ置、芽出る時、右の芥を取除、根へさわらぬ樣

に芽を切取べし、尤早く芽を取たる跡へは、又畜のごとく芥を懸置ば、又芽を生るなり、

〔藥經太素上〕獨活 微溫味苦甘

白水ニ一日付テ、切テ干、又剉炒、傷寒、傷風、脚氣、中風、熱ノ目ヲ治、大瘡ニハ霜ニシテ以髮油付、風ニ破ラレ、百節ノ痛ヲ治、頸背ノチマリテ延ガタキニ吉、又痰ノ痛ヲ止、眼赤、頭疼、幷水氣用之、各有神功云、

羌活 微溫味苦甘

土氣ヲ能洗テ綿髮ヲ去、白水ニ付テ剉炒、脚氣、頭風、中風ヲ治ス、散肌表八風之邪、利周身百節之痛、排巨陽肉腐之疽、除新舊風溫之證、二八月ニ取之、只時ハ取ザル也、

〔宜禁本草乾草中〕獨活 苦甘平微溫、主金瘡痛、風寒所擊賊風、百節痛、齒疼、頰腫、多痒、血癩、頭旋、目赤痛、

〔延喜式三十七典藥〕元日御藥

白散一劑、度嶂散一劑、屠蘇一劑、千瘡萬病膏一劑、〇中略所須、〇中略獨活一兩、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卌八種、〇中略獨活廿五斤、攝津國卌四種、獨活、漏蘆各五斤、伊賀國廿三種、〇中略獨活、苦參、各廿斤、伊勢國五十種、〇中略獨活卅五斤、

〔年中恒例記〕二月廿四日

うど、〇〇沼田進上之、日不定、

〔官中秘策二年中行中〕年中諸大名獻上物之事

十月寒中獻上此月ニ入ル

一蕎麥芽、〇〇獨活、〇〇 本多伊勢守、

獨活產地

〔食物知新〕日城諸國名產

菜蔬　丹波有土、丹州越前山羌活、越前作、有土、武江

〔和漢三才圖會〕九十二末山草獨活うど○中略

備中平福之產佳、藝州廣島者次之、羽州最上獨活芽、有長二三尺者、太柔可食、

〔播磨風土記〕讃容郡室原山、屏風如室、故曰室原、生人參獨活、○下略、

芹

〔本草和名〕十八菜水斳、仁諝正作芹、音勤、一名水英、渣斳、仁諝音側加反、出陶景注、水英一名水勤、出釋藥性、一名楚葵、出爾雅、兼名苑、和名世利。

〔倭名類聚抄〕十七水菜芹　陸詞切韻云、芹音勤、和名世里、菜生水中也、本草云、水芹味甘平無毒、一名水英、

〔日本釋名〕下草芹　せまり也、其生ずる事、一所にしげくせまり合ものの也、

〔東雅〕十三穀蔬芹セリ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、水芹一名水英、セリといふ、セリをもて呼びし物も少からず、茈胡をノセリと云ひ、一にアマアカナといひ、當歸をヤマセリとも、オホセリとも、ウマセリとも云ひ、莘歷一にはハマセリといふ如き是也、

〔倭訓栞〕前編十三せり○中略　芹を訓ず、神代紀にそりと見えたり、此草一所にせり合て生ずるをもて名とせる也、川せりともいふ、水芹也、大せりは渣芹也、三葉芹は野蜀葵也といへり、歌人根せりと稱するは、根の實すべきをもて也、はたけせりふかせりは、新六帖に見ゆ、はたけせり又野せりといふは旱芹也、黃花のものを毛芹とす、

〔藻鹽草〕八草芹　ゐぐ、せりの異名也、又云、如菁とかきてゐことよめり、同事花すはうにさく草の水邊にある也、又云、人のくふ草也といへり、又俊頼仲實もとへ、なかみ河うきつにはゆるゐごのうれをつみしなへよくもそこのみためぞ、巡し、心ざしふかき谷のつみためていしみゆすりてあらふれせりか、又いしみは實論には、矢田とかく、斷矢田と云闕也、但當とよむべし、別の字と云々、からたみ釜管、しだみ蟲、あしか蕾體の物也と云々、此兩首の様も、ゐこは芹同か、

ね芹　ふか芹　野芹　根白草

〔本朝食鑑 三華和菜〕芹 訓世利

集解、芹有水旱及赤白二種、水芹生于水中而根多、旱芹生于平地而根少、赤芹味惡不用、白芹味美而常用、處處陂澤田川多有、或水田圃溢養之、而言四時俱有、二三月生苗、其相對如荷蘭、其莖有節稜而中空、其根細長而白肥者、如索麪而柔脆過尺、最可賞美之、其氣亦芬芳可愛之、五月開細白花、如蛇床花、秋冬至春初可食根、春後夏月至秋初可食莖葉、今世人言有毒者、蛩蛭留卵、蛇蜥蜴留涎糞、以染于莖葉、人不能知之而過遭毒、故食芹者必苦可洗淨爾、本邦自古爲七種菜之一、而正月七日作粥賞之、以禳一歲之邪氣、歌人亦詠之稱根芹者、以其根潔白芳美可愛也、必大平野○按、芹者菫也、菫菜亦芹屬、

〔大和本草 五菜蔬〕芹　國中ノ陸ニ生ジタルハ、水ニ生ズルニマサレリ、本草ニシルセリ、然レドモ泥中ニ生ジタ白根長キヲヨシトス 時珍 ○中一種柳芹ト云アリ、味ヨシ、葉ノ形モ常ノ芹ヨリウルハシ、紅毛芹アリ、根似羊躑躅根、其色亦異、山芹、山谷ニ生ズ、形水芹ニ似タリ、葉長ク厚ク堅シ、傍ニ小刻アリ、イラアリ、根長白シ、香味ハ常ノ芹ニ似タリ、大ナリ、

〔延喜式 三十九内膳〕耕種園圃

營芹一段、苗五石、總單功卌四人、耕地二遍、把犂一人、執牛一人、牛一頭、料理平和一人、養百廿擔、運單功廿人、殖功六人、二月 採苗功十人、刈功五人、

〔農業全書 三山野菜〕芹

せりをうゆるは、根を取て濕地に畦作りしうへ、常に水濕の絶ざるやうにすべし、地かはけばそだゝず、又濕ある圃に作りて、さかへ肥たるは、殊に甜く牙脆く、口中取分快し、澤などに生るは、葉の間に蟲ありて、見えかぬるゆへ、若蟲の子を食すれば毒なりと、本草に記せり、取分圃の濕地に筋うへにしたるは刈て食し、泥水をさい／＼そゝげば、跡よりやがて生ず、味も見かけも、野澤に

生るには甚勝れり、朝鮮には肥たる田に多く作りをき、鎌にて刈取、常に菜に用ゆると云、

〔宜禁本草乾五巻〕水靳　甘平無毒、置酒醬中香美、和醋食猶生最肥、食療寒令人肥健　主女子赤沃、止血養精、保血脈、益氣、令人肥健、嗜食殺藥毒、莖葉擣取汁、去小兒暴熱、治大人酒後熱毒鼻塞、利二腸、葉根寒、子辛温、養神益力、治煩渴、療崩中帶下、治五種黄病、生食煮食並得、三月八月勿食芹、恐病蛟龍瘕、

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、○中略芹四把、準四升、自正月迄六月、

漬年料雜菜

芹十石○料鹽八升中略　右漬春菜料

〔公事根源正月〕供若菜　上子日

若菜を十二種供事あり、其くさ〴〵は、若な、はこべら、葟、せり、蕨、なづな、あふひ、芡蓮、水蓼、水雲、松とみえたり、○中略尋常は若菜は七種の物也、薺、はこべら、芹、菁、御形、すゞしろ、佛の座などなり、

〔日本書紀二十七天智〕十年十二月乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉、殯于新宮、于時童謡曰、美曳之弩能、曳之弩能阿喩、阿喩擧曾播、施麻倍母曳岐、愛俱流之衞、奈疑能母騰、制利乃母騰、阿例播俱流之衞、

〔萬葉集二十〕天平元年班田之時、使葛城王從山背國贈陘○陘恐薩誤妙觀命婦等所歌一首、副芹子褁

安可禰佐須、比流波多多婢氐、奴婆多麻乃、欲流乃伊刀末仁、都賣流芹子許禮、

陘妙觀命婦報贈歌一首

麻須良乎等、於毛敝流母能乎、多知波吉氐、可爾波乃多爲爾、世理曾都美家流、

右二首、左大臣讀之云爾、左大臣是葛城王、後賜橘姓也

〔出雲風土記意宇郡〕津間抜池、周二里卌歩、有鳧鴨芹菜、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造物所作物帳斷簡年紀不詳、按成巻文書四十五巻所收天平六年造佛所作物帳中巻斷簡、恐與此同物也、

三葉芹

芹三千三百九十六束

〔曾根好忠集〕正月中

ね芹摘春の澤田におり立て衣のすそのぬれぬ日ぞなき

〔新撰六帖〕六せり　　知家

いたづらにある、そのふのはたけせり侘しげにても有世成けり

〔饅頭屋本節用集〕草木 英蓉葉（ミツバゼリ）

〔書言字考節用集〕六生植 蜀葵野（ミツバゼリ）

〔古名錄〕二十二水草 みつばせり 大草家料理書　漢名未詳

〔大和本草〕五菜蔬 野蜀葵（ミツバゼリ）　和名ミツバゼリ、救荒本草ニノセタリ、稻若水以爲三葉芹、春宿根ヨリ生ズ、莖ハ芹ノ如ニシテ大ナリ、香味モ亦似タリ、春月莖ヲトリ葉ヲ去、煮テ豆油ニ和シテ食フ、香味美シ、又生ニテ生魚ノ膾ニ加フ、無毒、脾胃無害益於人、佳蔬トス、又ツケモノトス、夏月莖モ葉モ食フベシ、嫩葉ハ飯ニ加ヘ食ス、

〔食物知新〕二菜 漬芹 弘景

釋名、三葉芹（ミツバゼリ）、和名　三葉攢生一處、氣微似芹菜、故名之、○中略辨疑、或曰、近時調釋家、以野蜀葵當于三葉芹、吾子不取何哉、予○神田玄泉曰、野蜀葵非可爲三葉芹者、可見救荒本草云、野蜀葵生荒野中、就地叢生、苗高五寸許、葉似葛勒子秧葉而厚大、又似地牡丹葉、味辣云々、蓋三葉芹不似葛勒子、味亦不辣、故不取之也、

〔農業全書〕五山野菜 野蜀葵（みつばぜり）

三葉芹うへ様、芹に同じ、水濕の邊り、樹下かきのもと、其外陰濕の肥たる所に、畦作りしてうへたるは猶よし、草かじめ手入を加ふれば、一入さかへ、料理に用ひやはらかにして、風味ある物也、餘

前胡

ひたし物、魚鳥の汁、煮物などに加へて、ことに能ものなり、子よくなりて生やすく、程なく多くなる物なり、

〔藥經太素下〕三。葉。芹。氣ヲ下ト痰ヲ滅ニハ、酒ニ浸シテ用、小兒夜啼ニハ、蜜ヲヌリテ炮シテ用、總ジテハ白水ニ浸シテ、節トケ、ミヲ去テ、剉焙用、傷寒ノ風熱ヲ治ス、下ㇾ氣消ㇾ痰安ㇾ胎止ㇾ嗽治ㇾ兒疳、又懷妊ヲ安ス、

〔大草家料理書〕一肥生鳥の事、作候て薄酒を懸て、ふくさみそをこくして、かへらかして入候也、但みつばせりを湯にをしても吉、

〔本草和名草入〕前胡、和名字。〇字、曾心方作ノ字、蓋是、多。奈。一名乃。世。利。

〔書言字考節用集生六植〕前胡(ウタナ)　前胡(ミツバグサ)

〔重修本草綱目啓蒙山八草〕前胡　コ。マ。ゼ。リ。ノ。ゼ。リ。タ。ニ。ゼ。リ。ミ。ツ。バ。ク。サ。(延喜式)　ウ。タ。ナ。ム。マ。ゼ。リ。ヤ。マ。ゼ。リ。ノ。ダ。ケ。(筑前)　今ハ通名　一名西天蔓(錦繡枕)　蜘香菜(本草郷藥)　全胡(炎火點書)　射香菜(村家方)

向陽ノ山野ニ多ク生ズ、初テ生ズルモノハ、只三葉ナル故ニ、ミツバグサト云、長ズルニ隨ヒ數岐ヲ分チ大ニナリ、大抵二活ノ葉ニ類シテ同ジカラズ、莖ヲ起スモノハ高サ七八尺葉互生ス、秋ニ至リ枝端ニ花ヲ開ク、胡蘿蔔ノ如ク傘ヲ成テ簇生ス、紫黑色又白色ナル者アリ、一種細。葉。ノ。前。胡。アリ、和州ニ多シ、葉細長ク岐多クシテ、當歸葉ノ如シ、花實ノ形狀ハ異ナラズ、市中ニ舶來ノ者稀ニアリ、和ハ和州ヨリ多ク出ス、又田。舍。前。胡。ト呼モノハ黑色ニシテ下品ナリ、又若州及ビ江州ノ朽木葛川ヨリ出スモノハ、堅實ニシテ蓋味アリ、甚下品ナリ、凡テ陳久ナルモノハ惡シ、

〔藥經太素下〕前胡　大冷味苦　西天蔓トモ云

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊賀國廿三種、前胡八斤、伊勢國五十種、前胡一斤四兩、○下略

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略前胡

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產 前胡 同白花平塚中里

〔佐渡志五物產〕前胡 方言イワウセリ 山中ニ多シ

〔本草和名六草〕茈胡、蘇敬注云、茈是古紫字也、一名地薰、一名山菜、一名茹草、葉一芸蒿、白蒻、陶景注云、茈胡也、仁諝音□ 茈薑、蒗茈、茈草、蘇敬注云、紫胡是也、一名山梨、出雜要訣、和名乃世利、一名波末阿加奈、

〔倭名類聚抄二十草〕茈胡 本草云、茈胡、和名乃世里、一云、阿末安加奈、蘇敬注云、茈古紫字也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注云、如前胡而強、引博物志云、芸蒿葉似邪蒿、春秋有白蒻、長四五寸、香美可食、圖經云、二月生苗甚香、莖青紫、葉似竹葉稍緊、亦有似斜蒿、亦有似麥門冬而短者、七月開黃花、生丹州結青子、與他處者不類、根赤色、似前胡而強、蘆頭有赤毛、如鼠尾、獨窠、李時珍曰、北地所產者、亦如前胡而軟、今人謂之北紫胡是也、南土所產者不似前地、正如蒿根強梗、其苗有如韭葉者竹葉者、○中略本草和名阿末作波末、類聚名義抄、伊呂波字類抄並同、則作阿末者恐傳寫之誤、非源君之舊也、○中略按證類本草引蘇注又云、上林賦云、茈薑及爾雅云、藐茈草、並作茈字、且此草根紫色、今太常用茈胡是也、又以木代糸相承呼爲茈胡、按說文云、紫帛青赤色、又云茈草也、徐鉉音並將此切、徐鍇曰、茈卽今染紫草也、漢書上林賦茈薑、顏師古注云、薑之息生者、連其株本、則紫色也、顏師古李善並茈音紫、爾雅藐茈草、郭璞注云、可以染紫、陸音子爾反、卽本草所載紫草也、故蘇氏云、茈古紫字、引上林賦爾雅及目驗、以證茈胡卽紫胡、又以唐時太常猶作茈胡爲是、則知證類本草載蘇注作茈古柴字誤也、醫心方治渴食方引廣利方、有紫胡、亦可以證、證類本草作柴字之誤、蘇氏又云、以木代糸、相承呼爲茈胡、言雖俗或作柴胡、然非柴薪字、其讀猶與茈胡同也、蓋茈胡以其根赤色、故得其名、廣雅茈薑茈草、音紫、茈胡音柴、誤分爲二音、李時珍遂言茈胡嫩則可茹、老則采而爲柴、以蘇說爲殊欠明、

謬妄可ㇾ笑、後人從ㇾ之非ㇾ是、

〔書言字考節用集 六生植〕柴胡 アマナタナ　柴胡 サイコ

〔藻鹽草 八草〕和名少々　茈胡 のゝせり、又のくさ、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕柴胡　アマアカナ 古名　ノゼリ 同上　今ハ通名　一名蘆頭豹子 輟耕錄

山芹方 村家

鎌倉柴胡眞ナリ、即集解ニ竹葉韮葉ト云モノ是ナリ、春未ダ薹立ザル時、地ニ叢生スル、葉ハ細長シ、コレヲ韮葉トシ、薹タチテ後ハ葉短シ、コレヲ竹葉トス、二物アルニ非ズト、炮炙全書ニ云ヘリ、然レドモ今國ニヨリテ濶葉ノ者一種アリ、是竹葉柴似ナリ、其尋常ノ者ハ韮葉柴胡ナリ、今ハ鎌倉ヨリ柴胡ヲ出ザレドモ、ソノ初鎌倉ヨリ出セシ故、舊ニ仍テ今モ鎌倉柴胡ト稱ス、今藥肆ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノ僞雜多シ、用ユルニ堪ヘズ、ミシマ柴胡ト呼ブモノ佳ナリ、柴胡ハ京師四邊ニ產セズ、勢州、紀州、中國、四國、九州、ソノ餘諸州ニ生ズ、葉ハ麥門ヤブラン冬葉ニ似テ短クウスク堅條多シ、又稍濶クシテ箬チマキザヽ竹葉ニ似タル者アリ、皆莖ニ紫條アリ、秋ニ至テ長サ二三尺葉互生ス、形漸ク短小ニナリ、葉間ゴトニ枝叉ヲ分チ小花ヲ開ク、攢簇スルコト、芹ノ花ノ如ク黃色ニシテ、茴香花ノ形ノ如シ、實モ茴香ニ似テ小シ此實ヲマキテ生ジ易シ、又城州白川山ニ大葉ナルモノ一種アリ、大柴胡ト呼、又ホタルサウ 同名 アリトモ云フ、葉最大ニシテ紫蕚ギボウシ葉ノ如ク、長サ一尺餘、濶サ二三寸、秋ニ至リ粗莖ヲ起シ、高サ六七尺、枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、花實亦相同シテ微大ナリ、是集解ニ謂ユル南柴胡ニシテ最下品ナリ、舶來ノ者ハ唐ノ筆防風ノ形ノ如ク、蘆頭ニ毛アリ、今ハ稀ナリ、和ハ單蘆ニシテ細長ク、澀味ナキモノヲ眞トス、今藥舖ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノハ、薩州肥後邊ヨリ出ス、數蘆連生シ澀味アルモノヲ雜ユ、是南柴胡根ニシテ下品ナリ、三島柴胡ト稱スルモノハ東國ヨリ出ス、此ニハ單蘆ナルモノ多シ、藥用ニ入ルベシ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、略〇中 柴胡、玄參各十二斤、　美濃國六十二種、略〇中 柴胡、略〇中 升麻各十斤、略〇下

〔武江產物志 藥草〕具山ノ產　委陵菜 二種　柴胡 同上

〔新撰字鏡 草〕當歸 山。當。利。

〔本草和名 草 八〕當歸、一名乾歸、一名馬尾歸、多肉少枝、一名草歸、氣味相類、已上二名出陶景注、蠶頭當歸、細葉者、馬尾當歸、大葉者、出釋藥性、一名山蘄、出兼名苑、一名山歸、出釋藥性、一名山蘄、出爾雅注、和名也末世利、一名宇末世利、一名加波佐久、

〔倭名類聚抄 草 二十〕當歸　本草云、當歸、和名夜末世里、一云、於保世利、又云宇馬世里、

〔箋注倭名類聚抄 草 十〕蘇注云、當歸苗有二種、於內、一種似大葉芎藭、一種似細葉芎藭、惟莖葉卑下於芎藭也、細葉者名蠶頭當歸、大葉者名馬尾當歸、圖經云、春生苗、綠葉有三瓣、七八月開花、似蒔蘿、淺紫色、根黑黃色、爾雅、薜山蘄、廣雅、山蘄當歸也、郭注、爾雅云、當歸今似蘄而麤大、釋文、蘄、古芹字、圖經又云、當歸芹類也、在平地者名芹、生山中而麤大者名當歸也、李時珍曰、當歸本非芹類、特以花葉似芹、故得芹名、陳承曰、當歸治妊婦產後惡血上衝、倉卒取效、氣血昏亂者、服之卽定、能使氣血各有所歸、恐當歸之名必因此出也、李時珍又曰、古人娶妻爲嗣續也、當歸調血爲女人要藥、有思夫之意、故有當歸之名、

〔下學集 草木 下〕當歸 藥種

〔書言字考節用集 生植 六〕當歸　當歸 白芹、文無、並同、山芹 同、本草

〔大和本草 藥類 六〕當歸　山州長池ノ邊ニ多クツクル、江州膽吹山ノ自然生ハ、根形小ナレドモ、乾シテ香氣甚シク油色ノ如シ、自然生ト園ニウフルト形味不同、自然生ハ形小シ、園ニウフレバ大也、凡藥ハ中華ノ產ヲ爲佳、然長池ノ當歸大和ノ地黃ハ唐ニマサレリト云、伊吹山ノ外ニモ高山處々ニアリ、園ニ栽ルニ風フキ通ゼザル所ニウフレバ、花開クコトマレナリ、當年生ズル地ヲカヘ、他

所ニウツシ、三年ニ至リトレバ、根大也、其年ニトレバ小ナリ、植處ノメグリニ他草生ゼバ拔去ベシ、生ナル時煮テ食スルニ味ヨシ、生ナルヲ其マヽカゲ干シタルハ、年ヲヘテモ潤アリ、味甘ク虫ハミヤスク、久シク保ガタキ故、藥店ニアルハ皆蒸煮テホシタル物也、故性ヨハシ、長池ヨリ來ル生ナルヲ乾シテ、熱湯ニ浸シテ又乾ベシ、如此スレバ虫クハズ、性ヨシ味最ヨシ、ヨク乾タルヲ口セバキ壺ニ入テ固ク封ジ、時々ホセバ虫ハマズ、身尾トモニ其マヽヲケバ虫ハミヤスシ、身ト尾ト別ニ悉ク引サクベシ、大ナルハ二ニ割ルベシ、剌ミ置テ日久ケレバカビ生ジ、氣味ヌケテアシシ、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕當歸　オホゼリ　カハゼリ　ヤマゼリ　ムマゼリ以上皆古名　今ハ通名
ヨメノワン越前　一名女二天輟耕錄　大芹事物異名　夷靈芝種杏仙方　地仙圖靈仙雜記　僧庵草鄉藥本草
增、一名僧掩草、村家方　一品妃香奩筆記、花ノ名、

當歸舶來ノモノ最上品ナリ、集解ニ謂トコロノ馬尾當歸是ナリ、蘆頭短クシテ細根長ク叢垂シ、馬尾ノ形ノ如クニシテ潤多ク、肉ハ紫赤色、味辛甘ニシテ香氣アリ、和產ハ大和及ビ山城ヨリ出ス、大和ヲ上品トス、潤多ク氣味モ舶來ノモノト同ジ、山城ヨリ出ルニ二品アリ、一品ハ湯ヲクヾラシ乾タルモノナリ、藥舖ニテコレヲ蒸ト稱ス、其實ハ蒸シ熟シタルニハ非ザルナリ、此物潤ナク氣味モ薄シ、藥ニ入ルヽニ良ナラズ、一品ハ根ヲ洗ヒタルマヽニテ乾タルモノナリ、藥舖ニテコレヲ生乾ト云フ、味甘シ、蒸ト稱スル方ヨリハ潤アリテ、藥用ニ良ナリ、然レドモ蛀ミ易クシテ貯ガタシ、故ニ藥舖ニ蒸當歸多シ、二州ニ栽ル處ノ草ハ、皆葉厚クシテ細長ク、牡蒿(オトコヨモギ)ノ葉ノ如クナルモノ、三枝九葉或二十餘葉ヲ一葉トス、深綠色、光澤アリテ香氣多シ、苗高サ二三尺葉互生ス、夏月枝頭ニ小白花多ク簇リ開テ、傘ノ狀ヲナス、胡蘿蔔ノ花ニ似タリ、一種伊吹當歸アリ、江州伊吹山ノ自然生ナリ、古ハコレヲ越後當歸又丹後當歸ト呼ブ、然レ共今ハ此國々ヨリ出サズ、奧州仙臺

ロヨリ出ルモノ同物ナリ、根ノ形チ岐少クシテ、羌活根ノゴトシ、馬尾ノ形チヲナサズ、潤ナク味と辛クシテ氣烈シ、藥用ニ良ナラズ、ソノ苗葉花實ハ二州ニ栽ルモノト同シテ、只莖ノ色青ヲ帶ブ、集解ニ謂トコロノ鑱頭當歸是ナリ、

〔農業全書 卷十 藥種之類〕當歸

當歸は種子を取置事、去年の苗をうへ付にして、當年花咲子をむすびて、秋よく熟したるを收め置べし、又は去年のかぶを移しうへて、たねを取もくるしからず、其畠肥地ならば、糞を用るに及ばず、瘠地ならば見合せ、過ざるほどをはかりて、糞を入べし、莖あかく實の所も色付たる時、取てもみ、粃を簸去りて袋に入れ、つり置べし、青く不熟なるに、少も交をくべからず、早くたう立て根に入ず、苗地は寒耕し、いか程も細かにこなし、さらし置、是又瘠地ならば寒中、糞をうちたるよし、畦作り、菜園に同じ、種子を下す時分は、正月中を定る時とするなり、若寒氣つよくば、二月早く蒔べし、をそきは宜しからず、生て後草あらば去べし、萵の手入、菜の苗の仕立にかはる事なし、移しうゆる地は、いかにも性よき細沙の交りて、少はねばり心もある牛蒡など作るやうの、つまりたる肥地よし、明る二月移しうゆる物なり、畦作り糞を蒔うねのごとくすべし、がんぎを一尺ばかり間をおきてきりならび五六寸に一本づゝうゆべし、先苗をほりおこし、うゆる所に、杖のさきにて深く穴をつき、一本づゝさし入れ、根さきの底につかへぬ程に、ふかくさすべし、さし入れて穴の廻りくつろぎあらば、是又杖のさきにてつきうづむべし、苗の大小をゑり分、一畦の中大小なくそろひたるをうゆべし、こやしを入る事、當歸は五月と八月と二ヶ月、取分よくふとりさかゆる物なるゆへ、此時にきゝわたる心得して、前方より時分をはかり、糞を多くかくべし、五月は梅雨の後よし、尤五月のみにかぎらず、さい〳〵こゑを用ゆる物なれど、此時殊によき糞を多く用ゆべし、糞は何にてもよし、人糞、ほどろ、鰯、油粕などは取分よし、中うち、草かじめ、さい〳〵すべ

し、されども土餘り和らか過れば、根の性うつくる物なり、山城の富野、寺田などいふ里、專ら當歸を作る所なり、其所の土は、細沙に土と河ごみの交りて、赤土も少々まじれる、牛蒡の出來る土の性と見えたり、凡土の性よはき所惡土の交りたる地などは出來あしく、藥性も宜しからず、大方の土地には作るべからず、是を掘取事は、十月に入て、すきか鍬にて根のきれそこねざる様に、かたはしより念を入れほるべし、悉く掘取て、淨く洗ひ乾しをき、莖の所を細繩にて四五寸廻りにたばねをき、釜に湯をにやし立、其中に莖の方を下になして入れ、湯煮をするなり、其ゆで加減、根の方をひねりて見るに、指を捻る様に、和らかに覺る時先あげて、さて又根さきの方を下にして少煮て、是も捻り心みて上るなり、殘らず湯煮し上て、日當の所に、竹にてならしを、二段と三段も横にゆひ、衣桁のごとくして、大きは二かぶ、小さくば四科、莖の中程をわらにてゆひ、竹にうちかけ干なり、又筵に干時は、頭の方を上になし、ならべて段々にをくべし、よせかくる心なくては、根先おるゝ物なり、さて干上て後、蘆頭に莖の方を五分ばかりかけてきり揃へ、箱に入れをくなり、久しく收めをくならば、箱の内に樟腦を段々ふりかけ、箱のすみ〳〵をば、紙にてはりをくべし、凡一段の畠に、大かたの直段にても、代銀四五百目は有と云なり、是は當歸を藥屋の仕立收る法なり、本法は湯煮したるは、性うすくなりてあしゝ、生ながら數日よく干すべし、壺に入をきて、梅雨の前四月に一度、梅雨の後一度、八九月に一度、凡年中に三度干べし、かやうにすれば藥性よく、幾年をきても虫喰損ずる事なし、是よくためし心見たる良法なり、其味藥屋にある物にくらぶれば、甚甘くして味よし、本草に當歸を湯にて煮事見えず、日にほして、あつき中につぼに入、口をはりてをくべし、時珍が說に見えたり、

〔草木育種下藥品〕當歸　二月種を蒔、人糞を少づゝ用、三年にして花あり、實を採置べし、土地ハ牛房など植る土にて赤土か野土に細なる砂まじりたる地に宜し、寒中人糞少用よく耕てさらし、二

蛇床

月植替てよし、五六寸間をおいて植、梅雨の後人糞を澆べし、十月十一月に根を掘採、米泔水に少ひたし、土氣を去、毎日日に乾、壺に入て貯べし、湯に入て干バ性味薄くなるなり、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥 大和國卅八種〈○中略〉澤寫、當歸、各四斤、伊賀國廿三種〈○中略〉當歸十一斤、〈○下略〉

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕當歸〈○中略〉按當歸出於山城久世郡者最佳、大和之產次之、以花葉似芹名山蘄、〈古蘄字芹字〉

〔廣益國產考 一〕國產となるべき物を左にあぐ

當歸　薄地につくりて利を得るもの也、大和の吉野郡、宇多郡に作りて、多くいだす也、

〔草木六部耕種法 四十四〕當歸白芷ヲ作ル法

當歸ハ古來大和國ニテ能ク作レリ、今ハ仙臺ヨリ此物ヲ出スコト頗多シ、當歸モ能ク作ルトキハ、一歩ニテ六斤宛ハ出來ル者ニテ、一歩六斤ナレバ一段千八百斤ナリ、此ヲ金一兩百二十斤ニ賣ト雖ドモ、一段十五金ノ產ナリ、

〔新撰字鏡 草〕蛇床〈比留牟志呂、又云蛇粟(原作蛇粟誤)、又蛇米、又虺床、又思益、又墻蘼、又蛇珠〉

〔本草和名 七草〕蛇床子、一名蛇粟、一名蛇米、一名虺床、〈楊玄操音許鬼反〉一名思益、一名繩毒、一名棗棘、一名墻蘼、一名蕶、〈仁諝音普、出疏注〉一名蛇珠、一名蛇蝬、一名蛇肝、一名石床、一名棘粟、一名馬床、〈已上六名出釋藥性〉和名比留无之呂、一名波末世利、

〔倭名類聚抄 二十草〕蛇床子　本草云、蛇床子、〈和名比流牟之呂〉

〔箋注倭名類聚抄 十草〕爾雅、肝虺牀、郭注云、蛇牀也、淮南說林訓云、蛇牀似麋蕪而不能芳、陶注、花葉正似蘼蕪、蜀本圖經云、似小葉芎藭、花白、子如黍粒、黃白色、生下濕地、圖經曰、三月生苗、高三二尺、葉青碎作叢、似蒿枝、每枝上有花頭百餘、結同一窠、似馬芹類、四五月開白花、又似繖狀、子黃褐色、如黍米、

至輕虛、時珍云、其花如碎米攢簇、其子兩片合成、似蒔蘿子而細、又有細稜、凡花實似蛇牀者、當歸芎藭水芹藁本胡蘿蔔也、又云、蛇虺喜臥于下食其子、故有蛇虺蛇粟諸名、

〔多識編 二 芳草〕蛇牀、比留牟之呂、今案俗稱也、布志羅美、異名蛇粟、本經 蛇米、同 虺牀、爾雅 馬牀、廣雅

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕蛇牀　墻蘼　蛇米　蛇粟　虺牀　馬牀　和名比流無之呂 ○中略

按蛇牀子處處山野有之、攝河最多、其苗花子皆如本草之說、蓋子大如蝨、俗呼名藪蝨、蓋春意藥方中多用之、以大有益陽事之功也、其他藥方用之者希、水草有蛭筵者、蛭在其葉之謂也、別是一種而與蛇牀不同、以蛇牀呼蛭筵之名義未詳、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕蛇牀　ハマニンジン　ハマゼリ　セタヲニンジン 雲州　キリシマニンジン 同上　一名建陽八座 輟耕錄　蛇都羅叱 鄕藥本草　蛇音置良只 採取月令　蛇道乙羅叱 村家方

和名鈔ニヒルムシロト訓ズルニ因テ、古ハ藥舖ニ誤リテ水草ノヒルムシロノ實ヲ、蛇床子ト稱シ貨レリト云フ、ヒルムシロハ救荒野譜ニ載ルトコロノ眼子菜ノ一種ナリ、其後ハ今ニ至ルマデ、皆ヤブジラミノ實ヲ用ヒ來レリ、恕菴先生モ、コレニ左袒セラレタリ、然レドモ古渡ノ蛇牀子ハ形小ニシテ毛刺ナク、竪ニ細稜アリ、集解ニ說クトコロノ如シ、形ミリンカニ似テ、微大ニシテ長ミアリ、是異物ニシテヤブジラミノ實ト、形甚ダ異ナリ、今諸州海邊ニ濱ニンジント呼モノ有リ、苗ノ形チ水芹ニ似テ數莖地ニツキテ藤蔓ノ如シ、葉モ亦水芹ニ似テ細ク滑澤ニシテ香氣アリ、秋月枝ノ梢ゴトニ細白花ヲ簇生ス、亦芹花ニ似リ、實ノ形及味古渡ノ蛇床子ニ異ナルコトナシ、唯微大ナルノミ、是眞ノ蛇床子ナリ、ヤブジラミハ一名ヤブニンジン、秋ノ後苗ヲ生ズ、冬春ハ色紫ナリ、形胡蘿蔔ノ葉ニ似テ小ク毛茸アリ、夏ニ至レバ綠色トナル、漸ク莖ヲ抽テ高サ二尺餘、葉互生ス、葉間ゴトニ、枝叉ヲ分チ、叉ゴトニ碎白花ヲ簇生ス、一種ツボミノ時、淡紫色ノモノアリ、開ケバ白シ、皆米粒ノ形ノ如キ實ヲ結ブ、毛刺アリテ衣服ニ著ヤスシ、胡蘿蔔ノ實ニヨク似タリ、

此ノヤブニンジンハ、爾雅ニ載ルトコロノ竊衣ニ能充レリ、又藥性纂要ニ說トコロノ鶴蝨草ノ形狀ニモ能合ス、此草ニ限ラズ、總テ衣服ニ著キヤスキ實ヲ、ヤブシラミト云、鬼鍼草及土牛膝ノ如キ是也、

〔延喜式〕典藥三十七諸國進年料雜藥 尾張國卅六種、略○中蛇床子一升、相模國卅二種、略○中蛇床子一升、略○下

〔毛吹草〕三河內 蛇床子

〔重修本草綱目啓蒙〕十三毒草鉤吻 略○中芹葉ノ者ハ、金匱要略ニ、鉤吻與芹菜相似、誤食之殺人ト云モノ、蔓生、黃精葉、芹葉等數種アリ、略○中芹葉ノ者ハ、金匱要略ニ、鉤吻與芹菜相似、誤食之殺人ト云モノコレナリ、俗ニオホゼリト呼ブ、池澤中ニ生ズ、土人モ毒アルコトヲ能知レリ、葉ハ白芷ノ葉ニ似テ毛アリ、莖中空虛高サ四五尺、五月ニ花アリ、胡蘿蔔ノ花ニ同ジ、江州ノ土人此草ヲ採リテ席下ニ畳キ、其上ニ偃テ臥シ、積氣ヲ治スト云、稻若水先生鉤吻考アリ、松岡先生鉤吻說アリ、堀元厚鉤吻考アリ、併考スベシ、略○中

〔草木育種後編〕下二芹葉鉤吻 金匱略 俗にどくせり、花戸にて鳳凰角延命竹など云、大毒あり、和蘭にていふ、シャウタなるべし、一種奧州より來るものは、葉斑紋ありてよく蘭說にあへり、大毒あり、口中に入るべからず、蘭園先生本草綱目の遠山根に充られたり、

〔武江產物志〕藥草上野邊ノ產 芹葉鉤吻下略

〔佐渡志〕五物產鉤吻 蔓生黃精葉芹葉ナド丶イフ、數種アリ、蔓生ノモノハツタウルシト名付テ、山野ニ多シ、木石ニトリツキテ生ズ、物ニ纏ハズ、故ニマタ三葉ノ鉤吻トモイフ、黃精葉ノ鉤吻ハ草木二種アリ、又世俗ニフタコナリトイフモノ、越後方言ニフタコロビカヘルツリトモイヒテ、山中ニ生ズ、灌木ニシテ高六七尺許リ、形狀圖ノ如シ、略○圖五六月ノ際葉間ゴトニ細枝ヲ出シ、ソノ

先ニ實二ツ宛附テ熟スレバ赤シ、小兒ノタメニ殊ニ畏ルベキモノナリ、マタ民間ニフロシキヅツミト唱ヘ、方言ニ鍋破ウツギトイフモノ、コレモ其毒酷烈畏ルベキモノナリ、斯ニ三種ノ圖ヲ出スヲ以テ、ヨク〳〵合セ觀テ、殊ニ畏レ避ベキコトナリ、稻若水ノ鉤吻圖說、松岡玄達ガ鉤吻考ニ、遂一記シタレドモ、此國ノ山民輙モスレバ、小兒ヲアヤマツコトアルヲ以テ、更ニ撮テ出ス、

胡荽

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕胡荽　崔禹錫食經云、胡荽(息遺反、和名古仁之)、味辛臭、一名香荽、魚鳥膾尤爲要、博物志云、張騫入西域、得之、故曰胡荽也、

〔類聚名義抄八艸〕葫荾コシ　荾(音綏、與上同)、　胡荾(和綏、コニシ)、

〔伊呂波字類抄古植物附植物具〕葫荽コシ

〔多識編三菜〕胡荽、古仁志、異名香荽、(拾遺)胡菜、(外臺)

〔東雅十三穀蔬〕胡荽コニシ　倭名鈔に、崔禹錫食經を引て、胡荽はコニシ、味辛臭、一名香荽、魚鳥膾尤爲要と註せり、コニシとは、其字の音を轉じて呼びしなるべし、今の如きは、是等の物を食に充る事は聞えず、

〔重修本草綱目啓蒙十八葷辛〕胡荽　コ〇ニ〇シ〇　コ〇エ〇ン〇ド〇ロ〇(蠻語コリアンデルノ轉ナリ)、〇中略
蠻種長崎ヨリ傳ヘ來リ、今處處ニ栽ユ、八月種ヲ下ス、初出ノ葉ハ形圓小ニシテ、鋸齒アリテ石胡荽葉ノ如シ、漸ク長ズレバ分テ三葉トナリ、漸ク花岐多クナル、春ニ至テ薹ヲ起ス、高サ一二尺、葉互生ス、梢葉ハ細クシテ絲ノ如ク、茵蔯蒿ノ梢葉ニ似タリ、四月莖上ニ花簇リ傘狀ヲナス、五瓣ニシテ碎小、瓣ゴトニ一缺アリ、花ウドノ花ニ似テ至テ小ナリ、淺紫色、後實ヲ結ブ、大サ一分許、正圓ナリ、熟スレバ分レテ兩片トナリ、根乃チ枯ル、

〔延喜式三十九內膳〕耕種園圃
營胡荽一段、種子二斗五升、總單功廿八人、耕地二遍、把犁一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上

作二人、養百卅二燒、運功廿二人、下子半人、三月、八月、

〔農業全書 四菜〕胡荽

南蠻の語に、こゑんとろと云、食物等の惡臭をよく去ものなり、猪肉鷄肉などの料理に加ゆれば、あしきかを消し甚宜し、其子は痘疹の出かぬるをよく發す、さまざま其用ゆる法あり、痘疹の時けがれにふれてわづらふに、此實を酒に煎じ、病人の邊りのかべ帳などに吹かくれば、能穢を去、又魚肉などの惡氣を殺す、不時に用ある物なり、必少作るべし、

〔延喜式 大膳 三十二〕園韓神祭雜給料 春冬同

胡荽五升

〔延喜式 内膳 三十九〕供奉雜菜

日別一斗、中略、○胡荽二合、正月一十二月、九十十二

〔本草和名 草九〕蘹香子、一名時蘿、出兼名苑、一名懷芸、一名香芸、已上出兼名苑、和名久禮乃於毛、

〔倭名類聚抄 草二十〕蘹香　兼名苑云、懷香一名懷芸、和名久禮乃於毛、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕按千金翼方、證類本草並作蘹香子、蓋本草作蘹香子、兼名苑作懷香、二書不同也、下總本懷香作蘹香、恐係據本草校改、非是、又按蘹字、說文、玉篇、廣韻並無、唯集韻有之、蓋俗字也、○中略　蘇敬云、葉似老胡荽極細、莖麁高五六尺、叢生、今注、一名茴香子、圖經云、三月生、五月高三四尺、七月生花、頭如傘蓋黃色、結實如麥而小、青色、

〔下學集 草木 下〕茴香ウイキヤウ

〔宜禁本草 乾中 草中〕茴香　辛平、主膀胱腎間冷氣、調中止痛、治癩疝陰疼、入藥炒、調脾胃進食、生莖葉汁、和酒服、治脅氣腫、諸瘻、

〔重修本草綱目啓蒙 草十八芳〕蘹香　クレノヲモ 和名抄　ウ。イ。キ。ヤ。ウ。　一名草蘹香 本經逢原　時蘿 南寧府志

加香草月令採取

春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、又舊莖ヨリモ出、葉互生ス、形至テ細ク、茴蘹蒿ノ梢葉ニ似テ長ク絲ノ如シ、故ニ時珍絲葉ト云フ、莖ト共ニ白色ヲ帶テ香氣アリ、苗高サ六七尺、莖圓ニシテ粗シ、一根叢生、夏ニ入テ枝上ゴトニ花ヲ開ク、數百聚リテ傘ノ如シ、花ハ碎小五瓣黃色、南柴胡ノ花ニ似タリ、後實ヲ結ブ、亦相似テ長サ二分許、細稜アリ、熟シテ苗枯ル、莖ノ本ハ枯レズ、年ヲ積テ愈繁茂ス、其子藥用ニ入ル、地ニ下シテ生ジ易シ、一種大茴香アリ、一名舶茴香、八角茴香、角茴香、蠻產ニシテ和產ナシ、其實大サ一寸餘、厚サ三分許、其形八瓣、瓣ゴトニ末尖リ、中ニ一核アリ、莽草實ニ似タリ、故ニ今多ク是ヲ以テ僞リ賣ル、宜ク撰ブベシ、莽草實ハ形同ケレドモ、臭氣アリテ毒多シ、蠻書ニ八角茴香ノ彩畫アリ、草本ニシテ葉モ莽草葉ト異ナリ、舶茴香ト褱香トハ、形狀大小同ジカラザレドモ効能同ジ、故ニ此條ニ混ジ入ル、大小茴香ノ分別三等アリ、褱香ヲ小茴香トシ、舶茴香ヲ大茴香トスルコト、附方中ニ見ヘタリ、又次ノ條蒔蘿ヲ小茴香ト云フニ對スレバ、此條ヲ大茴香トス、又時珍ノ說ニ、寧夏ヨリ出者ヲ大茴香トシ、他處小者ヲ小茴香・云、是本條ニ大小ノ分チアルヲ云フ、然レドモ角茴香ヲ大茴香トスルコト普通ナリ、本草滙ニ形如㆓麥粒㆒爲㆓小茴香㆒性溫宜㆑入㆓料食㆒形如㆓柏實㆒裂成㆓八瓣㆒者爲㆓大茴香㆒性熱損㆑目不㆑宜㆑入㆓食料㆒ト云フ、

增、桃洞遺筆ニ大茴香ノ圖ヲ載テ云、濟ノ張璐玉ガ本經逢原ニ、八角茴香卽櫁香トアルヲ以テ、本草香木類ニ載ル、櫁香ノ實トス、蘭山先生モ此說ヲ是トセラレアリシニ、先年予謙○梯先生ノ門ニ遊ビテ東都ニアリシ時、桂川氏蘭書ウエインマン中ニ載ル大茴香ノ圖ヲ以テ、先生ニ示ス、コレニテ璐玉ノ說モ誤リナルコトヲ識ル、予モ其席ニアリテ、見ルコトヲ得タリ、因テ今玆ニ摸寫シ出ス、蠻名アニイシト云トイヘリ、

〔廣益地錦抄 四〕茴香(ういきやう)　葉こまかに切レて網のごとく、青色、冬より葉しげりてながめあり、夏の比

花さく、うす黄色、花葉ともに香氣有り、花壇にうへてよし、時珍が云、深冬苗を生ズ、しげりをなす、五六月黄花をひらくと云、ちがひなし、宗奭が云、香胡荽に似たり、本草の註には大ク誤なりといへどもしからず、胡荽によく似たる物なり、葉形は似て、ういきやうハ極て青し、こゑんハ黒みあり、

〔農業全書十藥種之類〕茴香

ういきやうは、屋敷内など肥地をえらび作るべし、やせ地によからぬ物なり、畳苗にして、菜をうゆるごとく、間を二尺ばかりに廣くうゆべし、うへ付にするもよし、其年はいまだ子少し、尤見合せ糞を用ひてよし、

〔草木育種後編下藥品〕茴香本神　和蘭にてヘンクルといふ、二如亭群芳譜に曰、收子陰乾、宜向陽地、以糞土和土種之、又曰、十月糞土を以て根下を壅すべし、秋月種子を布き、糞水を澆ぎてよし、根と實を藥用とすべし、

〔剪花翁傳四八月開花〕茴香（ういきやう）　花黄色、形ち至て少く、男女郎花に似たり、開花八月下旬、方日向、地干、土山土、肥小便、下種春彼岸よし、株十月頃に分べし、よく育れば高さ六尺にもおよぶ、剪得てもはやく凋むなり、升水（みづあげ）の方ハ、葉にて枝葉をしぼりよせ、切口を少し切捨、冷水を逆水して水器に挿し、暫くして水上る也、

〔本草和名草七〕蘹香、一名胡蘺、一名香果、葉名蘹蘘、一名馬衘、陶景注云、狀似馬衘、故以名之、一名胡果、出雜要訣和名於。无。奈。加。都。良。久。佐、

蘹蘘音懐音襄一名蔽蘘、一名江蘺蘇本一名殷蘘、出雜要訣

〔倭名類聚抄二十草〕蘹香　唐韻云、蘹香懷二音、和名本草於無奈加豆良、香草也、根曰蘹、苗曰蘹葉、薇無二音、蘹或作蘹、

〔箋注倭名類聚抄十草〕下總本蘹作蘹、廣本同、按作蘹與證類本草、管子地員篇、淮南子氾論訓合、作蘹

與伊呂波字類抄、及爾雅、山海經、廣韻合、作藁作藭並通、然此引唐韻則作藭恐誤、又按藁音槀、在六指、徽音徽在八徽、其音不同、義亦無通、本草和名云、藁蕪一名薇蕪、則知薇蕪是藁蕪之一名、非同字、此云音徽、云又作薇、並誤、蜀本圖經云、苗似芹胡荽蛇牀輩、叢生花白、吳氏、葉香細青黑文、赤如藁本、冬夏叢生、五月華赤、七月實黑、莖端兩葉、陶注云、節大莖細、狀如馬銜、謂之馬銜芎藭、圖經、其苗四五月間生、其葉倍香、或蒔於園庭、芬馨滿徑、七八月開白花、根堅瘦、黃黑色、蘼蕪、陶云、葉似蛇牀而香、蘇云、此有二種、一種似芹葉、一種如蛇牀、香氣相似、時珍云、其莖葉靡弱而繁蕪、故以名之、

〔多識編二芳草〕芎藭、於。无。奈。久。左。、異名川芎綱目 山鞠窮、

〔書言字考節用集六生植〕芎藭(ヲンナグサ)一名川芎　蘼蕪一名江蘺、本草芎藭之苗也、　川芎(センキウ)本草、芎藭出蜀中者爲川芎、因地而名也、

〔本草辨疑二〕芎藭

和ニ三產アリ、丹後上品、山城大和次之、豐後肥後下ナリ、草ニ二種アリ、丹後根形如雀腦葉細シ、大和山城ハ大葉ナリ、今丹後ノ產希也、皆山城大和ヲ用ユ、豐後肥後ハ皺アリテ小ニシテ輕虛ナリ、藥力弱、

和名ウ。シ。ク。サ。ト云、牛ノ諸病ニ最上ナリ、故ニ名ヲ牛草ト云、牛ノ多キ國ニハ、必自ラ生ズル者ナリト、故ニ丹後ニ自ヲ生ズトナリ、是天ノ賦ハル所ナリ、

〔大和本草六〕川芎　時珍云、出蜀中者爲川芎、出江南者爲撫芎、皆因地而名也、川ハ蜀ナリ、川芎ノ葉ヲ名蘼蕪、本艸曰、川芎不可久服、多令人暴死、沈存中亦云然、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕川芎　芎藭　胡藭　香果　山鞠窮　闍莫迦金光明經　和名於無奈加豆良○中略

按芎藭葉似芹而山中獨生者根長、人家栽者根團略似薯蕷而小、未見別種者、劉氏鴻書云、日本有諸藥而無甘草芎藭云云、慶長元和之比、有唐川芎稍久不來、而價貴至凡一兩代銀十五六錢、故重之如人參、於是間用倭之川芎、因處處多移植用之、既知其功勝於中華者、形狀亦無異、但其微辛味甚爾、

和州赤羽根之產最佳、丹後山城次之、豐後肥後爲劣、藥肆以圓者稱川芎、以稍長者稱芎藭者、不識名義之甚者也、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕芎藭 ○オムナカブラ越後 ○ウシクサ丹後、牛ノ諸病ヲ治ス、故ニ名ク、 一名川元叁綱目

藭 几元叁㨿選 蛇休草根取月令 蛇避草同上 叢藭諸譜芳 壺藭山海經廣注 藥芹江南通志

俗ニ川芎ト云、卽和漢通名ナリ、蜀ノ川州ヨリ出ル者上品ナリ、故ニ川芎ト云、舶來ノモノ上品ニシテ僞物ナシ、和產ニ大葉小葉ノ二品アリ、藥ニハ小葉ノ者ヲ用ユ、大和ニ多ク栽ユ、葉ハ夏ノ芹葉ニ似テ枝多シ、莖葉トモニ淺綠色ニシテ香氣多シ、秋月花實アリ、形狀當歸ニ同ジ、苗高サ一二尺ニ至ル、此根雀腦ノ大サアリ形モ似タリ、故ニ釋名ノ下ニ雀腦芎ト云フ、大和ノ產ハ舶來ニ同ジク、氣烈シクシテ白色微黃ナリ、年ヲ經テ黃色トナル、年ヲ經タルヲ良トス、豐後及奧州仙臺ヨリ出ル者ハ下品ナリ、豐後ハ自然生ナリ、根ノ色黑赤ヲ帶ブ、又丹後ニモ自生アリ、大葉川芎ハ苗最大ニシテ、小葉ノ者ニ異ナリ、葉ハ白芷(ヨロイグサ)葉ノ如ニシテ狹長ナリ、一葉ノ長サ二尺餘、濶サ一尺餘、苗高サ五六尺許ニシテ莖フトシ、花實ハ白芷ト同ジ、根ハ大ニシテ小塊ヲ連珠ス、此形狀ヲ象ドリテ、釋名ノ下ニ馬銜芎藭ト云フ、藥ニ入ルヽニ堪ヘズ、藥舖ニ此ヲ川芎㯭ノ藁本ト稱シ貨ル、藁本ノ僞物ナリ、又藥舖ニ角川芎ト云モ有リ、小葉川芎ノ根ニ著タルフトキ鬚ヲ取タルナリ、

蘼蕪 增、一名王孫草本物國名 蘼蕪本經逢原

川芎ノ葉ナリ、小葉芎藭ノ葉ヲ用ユベシ、

〔廣益地錦抄六〕川芎(センキウ) 宿根より春生、葉切れこみ多く、莖たちのび、夏のする秋白花さく、時珍の胡荽(コスイ)に似たりといふがごとく、胡荽より葉あつく大キシ、草にふし有てふとし、葉の香氣甚ありて一叢うゆるに遠くかほる、不斷(ダン)風なき時もかはる事、藥種にきざみたるがごとし、植てながめ有、

〔農業全書十藥種之類〕川芎

藁本

川芎も良藥なり、古は本朝にはなかりしを、寛永の比長崎よりたねを傳へ來て、大和にて多く作る、其外諸所に作るは性よからず、先たねに取置事は、蘆頭と又は小節のある細き所を、ほり取時別にゑり分置、桶か箱に沙を入、いけ置て、すぐれて肥たる性よき土の、上畠を多よりさい〴〵耕し熟したるを、又二三月の比よくこなし、畦作りし、横筋を麥をうゆるごとく、八寸一尺ばかりも、間を置て切、ならびの間も、六七寸に一种(たね)づゝうへ、土をおほひ置、生て後芸り培ひなど、他の作り物に同じ、糞を用ゆる事、先初めは少づゝをくべし、花のつぼむを見てより、多く入べし、沙がちなる黑土、又は白きもよし、但中分より下の土には必作るべからず、吉野にて作る畠は、赤土に沙少少小石も交りたる、いかにも肥たる山畠なり、掘取事は、十月十一月の間よし、鬚をよくむしり、わきの細根も悉く去りて、淨く洗ひかはかしをくべし、釜に湯を立、一ゐは煮て、箸にてさして見るに、よくぬくる時、其まゝあぐべし、煮へ過ればあし、ゝ干上る事は、干過ると云事なし、是又四物湯の一色、其外諸方に多く用ゆる物なり、山下など性よき肥地ある所にては、多く作るべし、厚利の物なり、

〔廣益國產考　一〕國產となるべき物を左にあぐ

川芎　薄地を修理して作れば、よくできるものにして、香氣も格別よろし、豐後岡領にて多く作り出す也、

〔延喜式　三十七典藥〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、○中略　芎藭廿二斤、　遠江國十三種、○中略　芎藭三斤、○下略

〔本草和名　八草〕藁本　蘇敬注云、根上苗下似藁根、故以名之、　一名鬼卿、一名地新、一名薇莖、本條　一名微玉、出兼名苑、　和名加゜佐゜毛゜知゜、一名佐゜波゜曾゜良゜之゜、

〔倭名類聚抄　二十草〕藁本　蘇敬本草注云、藁本　和名佐゜々゜波゜曾゜夏゜之゜、一云曾゜夏゜之゜、　根上苗下似藁、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬又云、藁本莖葉根味與芎藭小別、圖經、葉似白芷、香又似芎藭、但芎藭似水芹而大、藁本葉細耳、五月有白花、七八月結子、根紫色、

〔多識編 二芳草〕藁本、字多米、又稱左波曾良之、異名鬼新、(本經)鬼卿、(同)藁茇、(綱目)微莖、(別錄)

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕藁本 微莖 鬼新 藁茇 鬼卿 (和名佐々波曾良之、一云曾良之、○中略)

按藁本往昔本朝有之、今乃無之、自唐來者有二種、赤藁手者多鬚者也、最爲良、川芎手者少鬚、形似川芎、不佳、(本草所謂江南之産、似芎藭者是乎、)

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕藁本 カサモチ(延喜式) サヽハソラシ(和名鈔) ソラシ(同上) 今ハ通名

一名地新草(村家方) 山園荽(救荒本草) 保生藁(輟耕錄) 土弓(青囊藥性賦) 增、一名山茝、(博雅) 蔚組(同上)

今漢種ヲ傳ヘ栽ユル者多シ、最繁衍シ易シ、葉ハヤマゼリノ葉ニ似テ小クシテ毛アリ、莖ハ紫色、舊根ヨリ叢生ス、根ハ久ヲ經テ枯レズ、莖高三四尺ニシテ葉互生ス、秋ニ至リテ小白花枝ノ末ゴトニ繖ヲナシテ簇生ス、實ハ芹實ノ如ニシテ圓長、熟スレバ黃褐色、地ニ下シテヨク生ズ、根ハ蒼ノ大サノ如ニシテ簇生ス、暴乾スレバ古渡ノ藁本ニ似テ細シ、今藥舖ニテ眞ノ藁本ト稱シ、或ハ當歸樣ノ藁本ト呼モノ此根ナリ、其ワサビデノ藁本ト呼モノハ野胡蘿蔔(ヤブニンジン)根ナリ、藁本ニアラズ、其川芎樣ノ藁本ト呼モノハ、大葉ノ川芎ノ根ナリ、誤リ用ユベカラズ、舶來古渡ハシャグマ樣ト稱シテ、根ニ數條アリテ馬尾ノ如ク紫色ナリ、最上品ナレドモ今甚稀ナリ、今渡ル者ハ根皆細シ、又享保年中ニ多ク渡タルハ、根黃黑ニシテ堅ク、大ニシテシャグマノ形ニナラズ、タマ〳〵種ノ中ニ葉ヲ連チタルモノアリ、コレヲ以テ諦視スルニ、勢州鈴鹿ノ山谷ニ此草多シ、形狀白芷ニ似テ小ク、葉尖リ又芹葉ニ似テ枝多シ、此ヲスヾカゼリト云藁本ニ非ズ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 枳實漏盧藁本各九斤、 大和國卅八種、○中略 藁本、升麻、各八斤、○下略

〔本草和名 八草〕白芷、一名芳香、一名白茝、(仁諝音昌改反)一名虈、(仁諝音許驕反)一名莞、(仁諝音丸)一名苻離、一名澤芬、葉名蒿麻、(仁諝音歷上)一名蘭茝、(出陶景注)一名葯、(烏角反、出兼名苑)一名白芝、(出雜要訣)和名加佐毛知、一名佐波宇止、一名與呂比久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕白芷　雜要決云、白芷一名白芝、(和名加佐毛知、一云與呂比久佐、)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按家語與善人居、如入芝蘭之室、芝即芷字、此所載白芷即是、芷香草、故與蘭並言、正作茝、内則佩帨茝蘭是也、後譌止聲作芷、又譌之聲作芝、遂與瑞草之芝混無別、○中略 按本草和名藁本訓佐波曾良之、白芷香已出藁香具、本草云、白芷一名芳香、一名白茝、一名虈、一名莞、一名苻蘺、說文茝繭也、楚謂之蘺、晉謂之虈、齊謂之茝、内則云、婦或賜之茝蘭、釋文芷本又作芷、漢禮樂志、茝蘭芳、注茝今白芷、按芷即茝省字、猶頤字隸或作頥也、後人以爲從止聲、遂音止、其白色故曰白芷、楚辭招魂云、菉蘋齊葉兮白芷生、圖經、根長尺餘、白色麁細不等、枝幹去地五寸以上、春生葉相對婆娑、紫色、闊三指許、花白微黄、入伏後結子、立秋後苗枯、

〔大和本草 六草〕白芷　蠹好ンデ食ス、アヲクワリテ屢日ニ曬ベシ、中華ノ產ヨシ、山城州ニモウフ、然レドモ中華ヨリ來ニハ不及、又一種白芷ニ似タル物アリ、節紫ナリ、香少ナシ、若水曰、白芷市人以石灰拌勻曬收、用時水洗淨ムベシ、當世ノ醫藿香正氣散ヲ用ルニ、無風邪頭疼症ニハ、必白芷ヲ去ル、去ザレバ食氣ヲ滯ラシメ、嘔吐ヲ生ズト云、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕白芷　白茝　澤芬　芳香　苻蘺　莞(音管)　虈(音囂)　葉名蒿麻、葯(音約)　(和名加佐毛知、一云與呂比艸、○中略)

按白芷本朝處處出者有二種、而一種苗高五六尺、莖葉似川芎而甚大、花實亦似川芎大房、但葉色淡於川芎、無香氣、一種苗高三四尺、莖有細白毛、葉似川芎而甚大、其色淡於川芎而甚有香氣、並其根形狀和漢無異、但經久則輕虛而如朽木、以不分明官令禁售之、單用唐白芷、其大輪切者俗呼名車切、最

良、斜殺者名穀白芷、大之、細長而似毀口者名毀手、爲下品、(毀口者、吹釧草器之名也、)

〔物類品隲三芳〕白芷　和名ロロヒグサ、又ウマゼリト云、和產所在ニアリ、漢種上品、享保中種子ヲ傳テ、今官園ニ多アリ、形狀和產ニ同シテ香氣ヨロシ、八月實ヲ蒔、翌年秋掘取ベシ、一年ニテハ根小ニシテ用ルニ堪ズ、春植テ二年ニ至レバ、花ヲ開テ根堅、季秋ニ至テ悉ク朽ナリ、故ニ八月ニ植テ翌年掘取ヲ佳トス、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕白芷　ロロヒグサ(延喜式)　サイキ(信州)　ムマゼリ(野州)　ヤマウド(作州)　カンラ(勢州)　今ハ通名　一名紳茸(王氏彙苑)　三國小玉(輟耕錄)　蘭槐(荀子)　澤芳(典籍便覽)　杜若(名物法言)　芳香(事物異名)　佛里竹根(輟耕本草)　佛里大根(村家方)　增、一名都梁香(本經逢原)

舶來ノ白芷二種アリ、一種車切ト稱スルハ、根ノ大ナルヲ輪切ニシタル者ニテ、是古渡ナリ、今ハナシ、又一種毀口樣ト稱スルハ、根細シテ烟管ノ毀口ノ如シ、是上品ナリ、今渡ルモノ皆此ノミ、漢種ハ享保年中ニ渡ルト云ヘリ、苗ハ和產ニ同シテ根ニ香氣多シ、和產ハ山城及ビ大和ニ多ク栽ユ、葉ハ大葉ノ川芎ニ似テ、一寸許ノ葉枝ヲ分テ多ク著キテ、二三尺ノ大サニナル、皆周邊ニ鋸齒アリ、大葉ノ川芎ヨリ濶クシテ、背ニ緊紋アリ、苗高サ七八尺葉互生ス、花ハ小ク白シテ胡蘿蔔ノ如ク繖ヲナス、又大葉川芎ノ花實ニモ似タリ、凡ソ秋日下種スレバ三年ニシテ花實アリ、根堅硬ニシテ用ルニタヘズ、冬ニ至リテ苗根枯腐ス、故ニ八月ニ種ヲ下シ、翌年ノ秋根ヲ采ルベシ、城州宮野ニテ作ルハ、肥地ニ種ヘ、根大ナル故香氣薄シ、和州宇陀ニテハ瘠地ニ種ヘ、養力ヲ借ラズ、故ニ香氣アリ、奥州南部ノ自然生最良ナリ、根細クシテ香氣多シ、舶來ノ白芷ニ石灰ノツキタルアリ、コレハ白芷蛀ミ易ク、並ニ色白カランコトヲ欲シテナリト時珍モ云ヘリ、

〔農業全書十藥種之類〕白芷

白芷は唐のを用ゆるがよけれども、山城にては倭を作りて、是も藥屋に賣て、利ありと云なり、肥

積雪草

地を細かにこなし、春たねを蒔て、明る正月苗ふとりけるを、いかにも肥和らかなる性よき地に、栞をうゆるごとく畦作りして、當歸を作る法のごとくうゆべし、九十月根を掘取て淨く洗ひ、干上て堅く成たる時收めをくべし、二年なれば根もふとく性も强し、一年の物はいまだ小さし、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、中略白芷十八斤、伊勢國五十種、中略白芷卅四斤、下略

〔出雲風土記 神門郡〕凡諸山野所在草木、中略白芷、

〔本草和名 九草〕積雪草陶景注云、此草當寒冷耳、一名地錢草葉如錢、故以名之、一名連錢草、已上二名出蘇敬注一名停雪、出釋藥一名水氷、出雜要訣和名都保久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕積雪草　本草注陶隱居曰、積雪草、和名豆保久佐寒冷故以名之、蘇敬曰、其葉如錢、故亦名連錢草、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬又曰、葉圓如錢大、莖細勁蔓延、酉陽雜俎、地錢、葉圓莖細有蔓、一曰積雪草、一曰連錢草、顧曰、俗間或云、圓葉似薄荷、好近水生、經冬不死、或名胡薄荷、夏五月放花、時珍云、蘇恭注薄荷云、一種蔓生、功用相似、蘇頌圖經云、胡薄荷與薄荷相類、但味少甘、生江浙間、彼人多以爲茶飮、俗呼爲新羅薄荷、天寶單行方所用連錢草是也、據二說則積雪草卽胡薄荷、乃薄荷之蔓生者爾、衍義、積雪草生陰濕地、形如水荇而小、面亦光潔微尖爲異、今人謂之連錢草、蓋取象也、小野氏曰、豆保久佐、今大和俗呼久都久佐、非蔓草、可以寇宗奭所說積雪草充之、蘇敬蘇頌所說是蔓草、可以今俗呼蔓薄荷、或呼加岐土保之、或呼加伊登利久佐者充之、

〔多識編 二芳草〕積雪草、豆保久左、象豆留波加、異名海蘇、

〔和爾雅 七草木〕積雪草ウツボグサ カキドヲシ チドメグサ地錢草、連錢草、海蘇、胡薄荷並同、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕壺草　正字未詳　豆保久佐

防風

按壺草生田家溝際、其圓一莖一葉、面無枝蔓及花實、高六七寸、葉大一寸、頗似蕗而小者也、今人用積雪草壺草、共入小兒方藥中、云能治腫毒、蓋以積雪草誤爲壺草之調、覺二物混用矣、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕積雪草

此條ニカキドヲシ、ツボクサノ兩說アリ、ソノ苗共ニ相似テ混雜シヤスシ、カキドヲシハ一名カキドウロシ、カキドウロ、(京師)ツルハツカ、カイチダハラ、(奧州)カイトリバナ、カイトリグサ、(共ニ同上)カイチンヅル、(加州)カイチグサ、(佐州)カントリグサ、(相州)ウグダサ、(藝州)綫葛、(和方書)蔓草ナリ、道旁ニ多ク生ズ、莖ハ方ニシテ葉ト共ニ毛茸アリテ香氣烈シ、葉ハ形圓ニシテ粗ナル鋸齒アリ、薄クシテ深綠色、長柄アリテ對生ス、冬ヲ經テ凋マズ、春ニ至レバ別ニ新苗ヲ生ジ、直立スルコト五七寸ニシテ草本ノ如シ、葉間ニ花ヲ開ク、益母草ノ花ノ形ニ似テ大ナリ、淡紫色ニシテ紫斑點アリ、又色淺キモアリ、又青ヲ帶ル者アリ、花終レバ莖地ニ偃シテ蔓草トナル、是兩蘇及李時珍說トコロノ積雪草一名連錢草、地錢、海蘇、胡薄荷、新羅薄荷ナリ、

ツボクサ(和名鈔)ハ一名タツタクサ、(大和)田野道旁塲側ニ多シ、葉ノ形圓カニシテ厚ク淺キ鋸齒アリ、嫩綠色ニシテ光滑ナリ、一根ニ叢生ス、蔓草ニ非ズ、根上葉間ニ花アリ、紫黃色、至テ碎小ナル花數十穗ヲナシテ、小ナル楊梅ノ如シ、石胡荽花ニ似リ、夏以後ハ根ヨリ細圓蔓出ルコト尺餘、節ゴトニ葉アリ、地ニ就テ根鬚ヲ下セバ、ツル自ラ朽テ數莖トナル、是寇宗奭說トコロノ積雪草一名連錢草ナリ、

〔本草和名 七草〕防風、一名銅芸、一名回草、一名百枝、一名屛風、一名蕳根、(仁諝音閒)一名百蜚、(仁諝音肥、楊玄操音非)一名茴草、一名商芸、(已上出釋名苑)一名同芸、一名百種、(已上出釋藥性)一名夏友、(出雜要訣)和名波。末。須。加。奈。、一名波。末。爾。加。奈。、

〔倭名類聚抄 二十草〕防風　兼名苑云、防風一名屛風、(和名波末須加奈、一云波末仁加奈、)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕本草和名云、防風一名銅芸、一名回草、一名百枝、一名屛風、一名蕳根、一名百蜚、

一名逹草、一名蔄芸、已上出衆名苑、按百韮以上七名、千金翼方、證類本草本條載之、又本草和名於藺根下百韮下、載仁楊二家音、則七名出本草、無疑、逹草蔄芸二名乃出衆名苑也、或衆名苑亦有屏風之名、以本草既有是名、輔仁不引及之歟、抑以本草和名百韮下失著出典、源君誤謂百韮以上諸名亦出衆名苑、亦未可知也、蘇注本草云、葉似牡蒿附子苗等、蜀本圖經云、白花、圖經云、根土黃色、與蜀葵根相類、莖葉俱青綠色、莖深而葉淡、似青蒿而短小、初時嫩紫、作菜茹、極爽口、五月開細白花、中心攢聚作大房、似蒔蘿花、實似胡荽而大、又有石防風、出河中府、根如蒿根而黃、葉青花白、五月開花、又宋毫間及江東出一種防風、其苗初春便生、嫩時紅紫色、彼人以作菜茹、味甚佳、恐別是一種耳、李時珍曰、防禦也、其功療風最要故名、屏風者防風隱語也、

〔藥鹽草八草〕和名少々　防風（波万多かな）

〔和爾雅七草木〕防風（バウフ）（回草、同芸並同、其苗曰珊瑚菜、）

〔物類稱呼三生植〕防風ぼうふう　畿内及藝州信州にて、山にんじんといふ、（是和名也）　按に今野菜となす物は、濱防風なり、江戸の市にあるもの、相州鎌倉よりをゝく是を出す、莖葉ふとくして、胡蘿蔔に似たる物、眞の防風なり

〔宜禁本草乾藥中草〕防風　甘辛温、主大風頭眩痛風赤眼、瀉肺實、（又頭者令發狂、又尾者發痼疾、）葉主中風熱汗出、嫩紫作茹爽口、子似胡荽調食用之、療風更優、誤服瀉上焦元氣、

〔本朝食鑑三柔滑〕防風（呼如字、和名波萬須加奈、一曰波萬仁加奈、）

釋名屏風（源順、必大按、水邊砂濱生者、稱濱防風、生于山中溪石間、而苗如筆頭者、稱筆防風、又號石防風也、源順和名所言者、俱濱防風也、）

集解、防風苗葉略類芹、而葉淺綠、一莖頭有二三葉、其莖初紫赤色相抱、類生薑之苗、稍長而葉圓厚深青有鋸齒、莖亦濃綠、根上白、根黃色、今作蔬者濱防風也、家園砂中栽者亦好、其山石間生者入藥用、不堪作蔬也、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕防風　ハマオホネ延喜式　ハマニガナ和名鈔　ハマスカナ同上　一名曲

方氏編輯　屏風菜村家方　山花菜府志鐵江　防丰參編

享保年中ニ渡ル所ノ唐種、和州ノ宇陀、城州八幡ニテ栽ヘ出ス、葉ノ形白頭翁葉ニ似テ大ニ厚ク、毛ナク光滑ナリ、色白ヲ帶タ防葵ノ葉ノ色ノ如シ、一根數十葉叢生ス、三年ノ者ハ薹ヲ起ス、高サ三尺許、枝又ヲ分コト甚繁シ、夏秋細叉ゴトニ花ヲ開ク、碎小白色芹ノ花ノ如シ、實ハ獨活ノ如シ、巳ニ實ヲ結ブモノハ根枯朽ス、故ニ根ヲ採ル、者ハ二年ヲ良トス、三年ナルモノハ根硬ク用ルニタヘズ、凡ソ諸藥草大抵此ノゴトシ、江戸ニテ栽ル者ハ根甚長ク、三四尺ニ過ギ、徑四五分ニシテ白色ナリ、京師ノ官園、及ビ和州ニテ栽ルモノハ、根長サ一尺五寸許ニシテ淡白色ナリ、是土地ニ因リテ然リ、根ヲ切バ内ニ黑キ圏アリ、此ヲ本草原始ニ金井玉欄ト云、ソノ内ニ菊花紋アリ、藥用上品トス、然ドモ京師ノ藥舗ヘハ宇陀ヨリ少シ出スノミナリ、諸州ニコノ種ヲ栽テ宜シカルベシ、今舶來ノ者ハ形小ク、蘆頭上ニ葉ノ莖ヲ一寸餘連子タリ、ソノ形禿筆頭ノ如シ、故ニフデ防風ト云フ、眞物ナレドモ皆陳久ニシテ蟲蛀多シ、

今藥舗ニテ眞ノ藥防風ト云アリ、一名伊吹防風、山人參、青葉防風、江州伊吹山ノ自然生ナリ、根細長ク六七寸ニシテ堅實ナリ、肥地ニ栽ルモノハ微ク潤ヒアリ、ソノ葉ハ胡蘿蔔葉ニ似テ、細小ニシテ毛ナシ、深緑色薹ヲ起スコト二尺許、多ク枝又ヲ分チ、小白花簇生スルコト芹花ノ如シ、子モ芹子ノ如シ、是卽邪蒿ノ一種、細葉ナルモノニシテ防風ノ類ニ非ズ、

又別ニ一種諸州ニ山人參ト呼ブ者アリ、葉略芹ノ葉ニ似タル故、芹葉ノ防風トモ云、京師白川山ニ多キ故、白川防風トモ云、葉硬クシテ光リアリ、初メハ數葉叢生ス、秋ニ至レバ莖高サ二三尺許リ、枝梢ニ花ヲ開ク、花實共ニ川芎ニ同ジ、根ハ長六七寸黄白色ニシテ硬シ、是集解ノ石防風ナリ、

本草原始ニ俗山防風ト云ヘリ、此根舶上遼志中ニ多ク混入スト云フ、

又藥舖ニ削リ防風、一名五島防風、木防風ト云アリ、是レ卽防葵ナリ、毒草類ニ本條アリ、亦防風ニ非ズ、人參類ニテハ牡丹人參、御免人參ト稱スルモノナリ、此根白シテ大ナリ、堅ニ割テ乾ス、故ニケヅリ防風ト云、

又別ニ濱防風アリ、春中菜店ニ嫩葉ヲ賣リ食品トス、故ニ八百屋防風トモ云、又伊勢防風トモ云、海濱ニ自生ス、根皮黃赤ニシテ疙瘩アリ、常州、羽州、奧州、肥前ノ五島ヨリ藥舖ニ出ス、是菜類ニシテ防風ニ非ズ、

〔農業全書 四菜〕防風

是は藥種の防風にてはなし、海濱の和らかなる白沙に生ず、其莖あかく、その葉も其香も防風に似たる物なり、莖を取てわりて膾の具に用ひ、或酢にひたして食ふ、甚其香よく味よし、實を取て沙地の畠に植て、少手入すれば、よくさかゆるものなり、大邑に近き所は、多く實を蒔て作り、市町に出すべし、

〔剪花翁傳 三四月開花〕防風　色白く、貌小細し、開花四月下旬より五月まで咲、方日向、地干、土砂雜、肥淡小便、下種移(うゑかへ)とも、秋彼岸より十月までよし、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、〇中略防風、夜干、防己、各十斤、　伊豆國十八種、〇中略防風十五斤、　相模國卅二種、〇中略防風三斤、　上野國十五種、〇中略防風六十斤、

〔毛吹草 三〕和泉　防風　伊勢　二見防風　石見　防風

〔享保集成絲綸錄 三十六〕貞享三寅年五月

覺〇中略　二月節ゟ〇中略

一ばうふう

防葵

右之品々致商賣候儀、先年月切ニ御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節ニ入候日より可致商賣之、〇中略右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

五月

〔本草和名六草〕房葵楊玄操注云、葉似葵、味似防風、故名防葵、一名梨蓋、一名房慈、一名爵離、一名農果、一名利茹、一名方蓋、本草、一名梁蓋、出兼名苑、一名房苑、一名農美、一名和利、出釋藥性、一名方慈、一名犂蓋、出雑要訣、和名也末奈須比。

〔倭名類聚抄二十草〕防葵　蘇敬本草云、防葵和名夜末奈須比、葉似葵、味似防風、故名防葵也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注云、本與狼毒同根、猶如三建、今其形亦相似、圖經云、其葉似葵、每莖三葉、一本十數莖、中發一幹、其端開花、如葱花景天輩、而色白、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕防葵　ヤマナスビ和名鈔　ボタンニンジン　ヒラノニンジン　御赦免ニンジン　御免ニンジン　五島ボウフウ　キボウフウ　ケヅリボウフウ　クヒボウフウ　ボタンボウフウ尾州　ナフマボウフウ江州

種子ヲ傳ヘテクユ、世上ニ誤テ朝鮮人參ト云、葉ハ牡丹ノ葉ニ似テチイサク、白色ヲ帶テ粉ヲカケタルガ如シ、子生ヨリ三年ニシテ花實ヲ生ズ、其葉初ハ數箇叢生ス、三年ノモノハ莖ヲ抽ブルコト三四尺、葉互生ス、葉間ニ枝ヲ生ジ、夏月枝梢ゴトニ小白花ヲ開キ、傘ヲナスコト、大葉芎藭ノ如シ、花後實ヲ生ズ、又大葉川芎ノ如シ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、故ニ二年ノ秋根ヲ取リ用ユ、古ハ御免ヲ蒙リ嫩根ヲ製シテ、和人參ニ充テ賣ルコトアリ、故ニ御メン人參等ノ名アリ、老根ハ大ニシテ白色、今ハ其根ヲ縱ニ割キ、削リ防風ト稱シ賣ル、コレ防風ノ僞物ナリ、肥前ノ五島ニテ多栽エ出ス、故ニ五島防風トモ云フ、

石胡荽

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕石胡荽　チトメグサ京　ウブラグサ　カヤミグサ播州　ヒルグサ江州

胡蘿蔔

經ノ血ドメトス、故ニ名ク、○ク○サ○マ○チ○ン○勢州、攝ニ靠スル故ニ名ク、○ヨ○ロ○ヒ○グ○サ○佐渡　○ヲ○ニ○ゴ○ケ○江部　○チ○ヤ○ウ○チ○ン○
○ゲ○サ○越後　一名土芫荽方銅鏡　嗇星草藥性集要　野園石胡荽本草彙言　碎米草呉氏食物本草　地光錢部武府志
人家庭際墻側盆中多ク生ズ、小草ナリ、地ニ就キ蔓ヲ引、葉圓カニ五岐ニシテ鋸齒アリ、大サ三四分、淡綠色ニシテ光リアリ、蔓ニ互生ス、葉ゴトニ鬚根ヲ下シ、地ニ入ルコト深ク拔去リ難シ、夏月葉間ニ一分許ノ小毬ヲ生ズ、楊梅ノ形ノ如ク綠色、即小花ノ聚ルナリ、後實ヲ生ズ、落テ自ラ生ズ、其野外路旁ニ生ズル者ハ、葉大サ一寸許ニシテ、ツボクサニ混ジ易シ、

〔多識編三菜〕胡蘿蔔、今案世○利○仁○牟○志○牟○、

〔和爾雅七菜蔬〕胡蘿蔔ニンジン　野胡蘿蔔ヤブニンジン

〔書言字考節用集六生植〕胡蘿蔔ニンジン、時珍云、元時始自胡地來、氣味微似蘿蔔、故名、

〔和漢三才圖會九十九草〕胡蘿蔔にんじん○中略

按胡蘿蔔、六月下種、秋食苗、冬食根、味甜而不辛、有赤黃二色、黃者生沙地、就中自遠州出深赤色者、攝州生玉造、亦出赤色者、唐人呼曰紅胡蘿、今四時種之、茹秧葉、凡根略似人參、故倭唯稱人參、終不改、

〔續昆陽漫錄〕胡蘿蔔

胡蘿蔔は形の人參に似たるを以て、我國の俗、人參と云ふと思ひしに、先年八住順庵の話に云く、明錢希言集曰、治疾當得眞人參、反得支羅服、當服麥門冬、反得丞橫麥、三代以下皆以支羅服丞橫麥、合藥、病日痁而遂死也、按潛夫論如此、支羅服疑今小朱蘿蔔也、吳越間有之、謂之丁香蘿蔔、其形如參、故誤用耳、丞橫麥疑即本艸穬麥是矣、陶弘景曰、根似穬麥、故謂之麥門冬、以訛傳訛、曷所底止、按するに、潛夫論に、治疾當得人參、反得支羅服、當得麥門冬、反得丞橫麥、已而不識眞、合而服之、病以侵劇、不自知爲人所欺也云云、三代以下皆以支羅服丞橫麥合藥、病日痁而遂死也に作る、とこれにて觀れば、小朱蘿蔔は胡蘿蔔にて、人參に代へしゆゑ、我國にて人參と云ふなるべし、胡蘿蔔味甘美にして、極めて補益の功あるべければ、人參に代たればとて、何ぞ病日に痁して遂に死するに至

らんや、名醫補潰の言に、世無難治之疾、有不善治之醫、藥無難代之品、有不善代之人、とあれば、潛夫論、治世不得眞賢の譬ひなれども、曲がれるを矯て直に過ぐと云ふべし、本草綱目に、元の時より胡蘿蔔西土に來るとあれども、潛夫論にてみれば、胡蘿蔔は、後漢の前より西土にありとみゆ、小朱蘿蔔、丁香蘿蔔の名を載せざるは、本草綱目一缺なるべし、

〔本朝食鑑 三菜 上〕人參菜

集解、即胡蘿蔔也、六月土用下種、生苗如蒿、莖有白毛辛苦臭亦如蒿、八九月采葉莖、煮而作茹、冬十一月臘月及春采根、長五六寸、大者盈握、色黃赤似鮮地黃羊蹄根、小者形似人參、截斷之、赤暈作圈、故俗稱人參、三四月開白花、攢簇如傘、狀似蛇牀花、子亦似蛇牀子、稍長有毛褐色、采根煮食則甘、或味噌漬糟漬食之、一種有野人參者、而形相似不堪用之、野人參與人參同、而其中有藁本、不可不細辨也、

〔重修本草綱目啓蒙 十八 菜〕胡蘿蔔　セリニンジン　ニンジン　ナニンジン　ニジ　ハタニンジン 備後 中略 ○根ニ赤黃白ノ三種アリ、京師及大坂ノ產ハ、色赤黃ニシテ紫ヲ帶ブ、和州泊瀨及遠州ノ產ハ、深紫赤色名品ナリ、味亦美ナリ、京下鴨邊ノ者ハ、色黃ナリ、木津村及江州ノ產ハ白色ヲ帶ブ、

〔農業全書 三菜〕胡蘿蔔

にんじん根の黃なるをゑらびて作るべし、白きは味も劣れり、たねを取事、春莖の立時、中にて細きはぬき去、ふとくして根の黃なるばかりを立をき、花の付時枝をも皆切のけて、本莖ばかりの子を取べし、闘じくうゆる地の事、大根に替事なし、いか程も細かにこなし、糞を多く打からし置、うるほひを得て、たねを砂と灰とに合せ、横筋を五六寸にきりて薄く蒔べし、糞水をそなる程多くそゝぎ、種子おほひを、指の厚さ程にして、早せば雖もさいく水をそゝぎ、草を取さり、二三寸にもなりたる時は間引立、間を熊手にてかきあざり、段々間引て、後は五六寸に一本宛ある程に薄

くすべし、薄き程根ふとし、よき程さかへたる時、上をしかとふみ付べし、かくせざれば土和らかにうきて、葉のみしげり、根却てふとからず、ひげもありて中うつけ、柔らかにして牙脆からず、種子を殘し置て、來三四月早く蒔て、手入を委しくしたるは、よくいでき根大きなり、にんじむは、土地のつよくかはきて、あらきを好まず、常に畦の中少うるほひ有事よし、いか程も薄く間引て、一本づゝのわきをほりて、油糟を入れば、大かたの大根ほどはふとる物なり、是菜中の賞翫にて、味性も上品の物なり、菜園にかくべからず、但にんじんは其種子を家におさめずとて、其地を前よりよくこしらへをき、子を取て家へ入ず、其まゝ蒔物なり、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕胡蘿蔔　長芋　是モ本州ニ乏ク、常ニ江戸ヨリ馱運セシニ、今ハ江戸ニンジント云種ヲ植テ、彼物ニ劣ラズ、所在ヨリ產出セリ、物皆時運ニ乘ジ令然カ、此等ハ種藝ノ功ニ依ル程ノ事ニモ非ジ、

古事類苑

植物部二十二

草十一

〔書言字考節用集 六生植〕明日葉アシタバ 在豆州八丈島

〔大和本草 五藥類〕鹹草　アシタト云草、八丈ガ島ノ民多クウヘテ、朝夕ノ糧ニ充ツ、彼島米穀ナキ故也、江戸諸州ニモアシタワウフ、葉ハ前胡防風ニ似タリ、各三葉分ル、莖微紅小者不紅、微有香氣、微辛、本草綱目三十二卷、藍麩子ノ附錄ニ、鹹草ヲ載タリ、曰、扶桑東有女國、產鹹草、葉似邪蒿而氣香、味鹹、彼人食之、今案是アシタナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二味〕鹹草　ハ。チ。ジ。ヤ。ウ。ナ。ウ。大和本草　ア。シ。タ。バ。　ト。ウ。ダ。イ。ニ。ン。ジ。ン。　イ。ヌ。サ。イ。キ。　カ。イ。ホ。ウ。ニ。ン。ジ。ン。

本八丈島ヨリ來ル、今市中ニ多ク傳ヘ栽ユ、俚俗彼ノ島ニハ瘟痰ナシト云、故ニ栽テ厭勝トスルナリ、葉ハ獨活ノ葉ニ似テ大ニ厚シテ、光アリテ色淺シ、莖葉ヲ切レバ黃汁出ヅ、凡ソ子生ヨリ三年ニ至テ、莖ヲ抽デ高サ三五尺、葉互生ス、五月枝梢ゴトニ花ヲ開ク、砕小ニシテ白色、數百傘ヲナシ、獨活花ノ如シ、實モ亦形同シテ大ナリ、熟スレバ根枯ル、子ヲ下シテ生ジ易シ、往年嫩根ヲ採リ、製シテ和人參ニ僞リシコトアリ、故ニ今ニトウダイニンジン等ノ名殘レリ、コノ草自ラ鹹味アリ、故ニ大和本草ノ說ニ從ツテ鹹草トス、然レドモ的當ニハアラズ、諸州海濱ニオニウドト呼ブ草アリ、形狀八丈草ニ異ナラズ、只黃汁出デズ、毒草ナリ、

〔八丈物產志一〕アシタ草ハ初冬ノ頃ヨリ種ヲ下シ、翌年ノ春ニ至リテ、其名ヲコバナト云、此時ヨリ根葉トモ食ス、三年ニ至リ、始テ白キ花開キ小キ實ヲ結ブ、夫ヨリ四年アシタヨリ九年アシタマデアリ、根ノ味ヒ甘ク苦シ、葉香氣アリ、丈ケ花ノ頃ハ四五尺ニ及ブ、根ノ廻リ五六寸有、クキモ食シテ香氣アリ、島人平常ノ食料ニ、此草ヲ麥ナドニ交ヘテ食フ、

〔採藥使記中豆州〕重康曰、八丈島ヨリアシタ艸ト云フ草ヲ生ズ、根葉トモニ食フ、是レヲ食ヘバ、痘瘡ヲカロクスルト云、一名八丈草、又海峯人參トモ云フ、

光生按ズルニ、八丈島ハ伊豆ノ下田ヨリ百里バカリ辰巳ノ方ニ當レリ、此島ニテアシタ艸ヲ專ヲ作ル、他所ニテ蘿蔔牛房ヲ作ルガ如ク、常ニ五穀ニ雜ヘ餌トス、根葉トモニ煮テサハシ、飯ニ入テ食フ、又菜類ニモ製ス、正月ヨリ九月頃マデヲ旬トス、其味胡蘿蔔ノ如ク、少シ鹽氣アリト云フ、此島ハ常ニ鹽風烈シキユヘ、アシタ草ニカギラズ他ノ菜モ、少ク鹽氣アリト云、葉ノ形チ前胡ニ似、マタ三葉芹ニモ似テ、三椏三葉ニシテ、面ハ染青ニシテ背ハ青白色ナリ、其葉光滑ニシテ葉ノヘリ細鋸齒アリ、莖ニ少シ赤キ所アリ、葉莖芹ノ香アリ、此草四時凋マズ、新葉舊葉相マジハル、嫩葉ヲ取リ食フ、味甘ク淡ク佳ナリ、此草日暮ニ子ヲ蒔ク時ハ晨ニ芽ヲ生ズ、故ニアシタ艸ト云フ、是レ暖國ノ產物ナル故カ、此草子種ヨリ三年ヲ經テ、細白花ヲ開ク、形狀芹ノ如シ、八丈島ノ土人ノ曰、此草此島ヘ來リ初テ食フ人ハ、殊ノ外氣ヲ上ニ頭痛ナドスル、五七日トモ食ヒ馴レテハ害ナシ、故ニ島人モ此國ノ人參ナリト云フ、貝原氏ハ文獻通考ニ載ル處ノ鹹草ヲ、アシタ草ナリトス、然レドモ文獻通考ニ、葉邪蒿ニ似タリトアルニ合ハズ、松岡氏ノ曰、鹹草ハ、救荒本草ニ出ス鹹蓬草ナルベシト、又或說ニアシタ草ハ本草滙草ニ出ル都管草ナルベシ、然レドモ本草蘇頌ガ說ニ詳ニ的當セズ、

〔伊豆七島調書〕神津島

鹿蹄

一此島田方無之、畑方少々有之、粟稗胡麻多葉粉等作リ申候、其外〈略〉○中あした草を取、夫を食の足飯に仕候、〈○三宅島、御藏島、青ヶ島事略同、〉

〔甲子夜話三十七〕アシタ草ハ、今日摘ヲオロセバ明日ニ生ズ、八丈島ニアリ、葉大根ノ如クニ作リ常食トス、是ヲ食スレバ疱瘡ヲ免カル、旬ハ芹ノ如ク、葉ハ前胡ニ似テ三葉ニ分ル、八丈島ハ世ニ所謂女護島ナリト、本綱附錄ニ云、扶桑之東有女國、產鹹草ト、

〔甲子夜話四十七〕去年八丈島ノコトヲ掌トル同心ニ憑リテ、其種〈○鹹草〉ヲ得、當春ノ彼岸ニ蒔キテ、明日ヤハユルト待タドモ、十日ヲ經テモ生ゼズ、人々モ不審シキル中、或日〈四月〉ノ頃永代橋ノ邊ヲ過シトキ、八丈ノ同心ニアルヲ見タレバ、彼草ノ云々ヲ問タルニ、コノ草八丈ニテハ如斯ナレドモ、他邦ニ移シテ蒔ケバ、曾テ生ゼズト答ヘキ、賞試ムベキナリ、

〔多識編二草〕鹿蹄草、今案加乃豆米久佐、

〔重修本草綱目啓蒙十一草〕鹿蹄草　イチヤクソウ　ノアフヒ若州　アタゴヤク加州　カバミソウ濃州　カマミグサ江州　ヤマナイシン河州　キツコウサウ江戸　スズラン同上　ベツコウサウ同上　マキヲモテ雲州

イチヤクサウ二種アリ、圓葉ノイチヤクサウハ、時珍ノ說ノ菟葵ニシテ紫背天葵ナリ、本條ハ長葉ノイチヤクサ、ナリ、山中陰地ニ生ズ、葉大サ二寸許、形圓ニシテ微ク長ク厚シ、深綠色、莖長サ四寸許、色多ハ赤シ、數葉地ニ就テ叢生ス、冬ヲ經テ凋マズ、葉背微紫色、夏月別ニ莖ヲ抽ツ、長サ七八寸、肥タル者ハ數莖、其梢ニマバラニ花アリ、六瓣白色、大サ三四分、開テ下ニ向フ、又紫花ナルモノアリ、共ニ花後圓實ヲ結ビ下垂ス、熟スレバ黑色、一種細葉ノイチヤクサウアリ、一根一莖上ニ三葉對生ス、葉形絡石(テイカカヅラ)葉ニ似テ細長シ、花實共ニ鹿蹄草ト同シテ小シ、コレヲキヌガササウト云、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　鹿蹄草(いちやくさう)〈大ミヤニモ〉

イハナシ

紫金牛
百兩金

〔倭訓栞後編伊二〕いはなし　方丈記に見へたり、小草也、夏月子を結ぶ、色赤く食ふべし、一名いはゝせ、山枇杷也といへり、山中岩ある所に生ず、備前に磐梨郡あり、北國にては砂いちごといふとぞ、梨品にも石梨あり、肉堅く食べからず、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕伊波奈之

按伊波奈之、江州三井寺山中有之、苗高二三寸、葉大如瓢樹葉而不尖、搨地生、二月開小白花、似虎耳草花、三月結子如青大豆而圓、數顆攢生如楊梅様、裹於葉交、外色青内紫黒色、小兒剝皮食、味微酸甘

〔方丈記〕小童あり、時々來て相訪ふ、もしつれ〳〵なる時は、是を友としてあそびありく、かれは十六歳、われは六十、其齢事の外なれど、心を慰る事はこれ同じ、或はつばなをぬき、岩なしをとる、又ぬかごをもり、芹をつむ、

〔書言字考節用集六生植〕平地木高五六寸、面有小紅實者、見遠生入臨

〔倭訓栞前編三十四〕やまたちばな　延喜式大嘗祭に山橘子と見えたり、俗に藪柑子といふ是也と、古今榮雅抄に見えて、山すげにそへて、卯槌髮そぎの時に用る物也、萬葉集に草なるを、清少納言は木とせり、新六帖に、ふりにける卯月のけふの髮そぎはやまたちばなのいろもかはらず、

〔玄同放言二〕山牡丹〇山橘附出〇中略

袖中抄に、山橘ハ牡丹也といへり、是よりして後、萬葉集に牡丹の歌ありといふものさへあるはこゝろえがたし、

萬葉集第四　春日王

足引之、山橘乃、色丹出而、語言繼而、相事毛將有、

同第十九　大伴家持

此雪之、消遺時爾、去來歸奈、山橘之、實光毛將見、

同第二十

氣能己里乃、由伎爾安倍氐流、安之比奇之、夜麻多和波奈乎、通刀爾通彌許奈、

けのこりは頃日也、雪にあへてるは、萬葉略解廿下に相照也といへり、つとにつみこなは、家裹に摘

來よ也、こゝにいふ山橘は藪柑子の事也、大和本草（卷十一 園木部）平地木の集解に、蓮生八瞼、畫譜、濟世全書、及古今集栞類が注を引きて、俗にいふ藪柑子也といへり、まかれども大醫博士輔仁（深江、日本紀略作二深根一、見二類聚國史紀略延暦十八年、度實九月十七日條下一、）本草和名（上卷）云、牡丹一名鹿韭、一名鼠姑、一名百兩金、（出二蘇敬注一）一名白朮、（出二釋性一）和名布加美久佐、一名也末多知波奈といへり、かゝれば深秘抄なる說を僻事としもいひがたし、かくはいへども同名異物和漢に多かり、（一名に論せし釋性に、牡丹の一名を白朮といふが如し、）彼一說に泥むもの、萬葉集なる山橘を牡丹也と思ふはたがへり、この他古今集（十三）新撰六帖（第六）夫木抄（二十八）等に見えたる山たちばなの歌も、皆平地木をよみたるなり、こは萬葉集をよくも見ざるもの、爲にいふのみ、牡丹はふかみくさといはんこそ正しき和名なるべけれ、今さま〴〵なる異名を負するはうるさし、○下略

〔大和本草（卷七 藥類）〕璟璘（ヤブカウジ）　國史及農圃六書ニノセタリ、葉ハ如橘及莽草、刻缺アリ、莖長シテ有節、夏白小花ヲヒラキ、實南天燭ヨリ小ニ、冬ニ至テ紅ナリ、陰地ヲコノム、盆ニウヘテ愛玩ス、根ヨリ叢生ス、二三月可分種、寒ト日ヲ畏ル、十月ヨリ屋下ニ置、二月ニ出スベシ、陰地ニ宜シ、日ヲ畏ル、本草綱目藥草中、有百兩金、恐與此同物歟、

〔大和本草（卷十一 園木）〕平地木（ヤブカウジ）　又號小青樹通仙木、蓮生八瞼畫譜ナド、中華ノ書ニノセタリ、和名ヤマタチバナ、古歌ニモヨメリ、小樹高數寸ニ不過、葉ハ枇杷葉ニ似テ小ニシテアツシ、世俗多ク庭ニウヘテ石ニ伴ハシム、古今集栞類注曰、山タチ花世俗ニヤブカウジト云、實アカシ、髮ソギノ時、山菅ニソフル草ナリ、今案筑紫ニテヤブカウジト云物ハ別ナリ、龔雲林ガ濟世全書曰、小青樹又號通仙木、通根莖葉而陰乾能焙、煎用治疝氣、是平地木ナリ、

茅藤集　京都ノ方言カラタチ花ト云、筑紫ニテヤブカンジト云モノ也、花史ニ出タリ、實ヲマクベシ、高サ一尺ニ不過、陰地ヲコノミ、兩年ニ長ジテミノル、實ハ冬赤シ、葉ハセバクシテ如竹、可玩

實、花梅雨開ク、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕山橘（やまたちばな やぶかうし）　藪柑子（俗）　正字未詳　夜不加字之

按山橘嚴壑石間有之、高不盈尺、葉似茶葉而色淺、莖紫色花實似仙蓼木、而只二三顆攢生深赤色、今俗小兒髮結初時、用此莖葉爲髮及銚子飾、以四時不凋爲嘉祝乎、

六帖　我戀をえのびかねては足曳の山橘の色に出ぬべし

平地木　小青樹　通仙木　俗云唐橘　又云之々久和須

草木花詩譜云、平地木高一尺餘、葉深綠子紅甚若、棠梨下綴且托根多在甌蘭之傍、巖壑幽處似更可佳、

按平地木深山陰處有之、大抵六七寸、高者至三四尺、葉似珊瑚樹葉而長五六寸、四五月開小白花、六七月結子、五六顆攢生正紅色、性怖日亦畏霜雪、鼠喜食之、人栽盆中、翌年秋復青色、後如舊若橙重歲也、然三月宜摘子、新花實繁美種子易生、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕紫金牛　ヤブカウジ　ヤブタチバナ　サルノメ　アカダマノキ（江戸）　チヤウジヤノタバシ（佐州）　ヤマタチバナ　クサタチバナ（加州）　ヤマウンジユ（肥前）　ハナタチバナ（筑前）　一名平地木（花鏡秘傳）　通仙木（群芳譜）　小青樹（同上）　千年矮（普濟方）

山中樹下ニ多ク生ズ、高サ三五寸許、四五葉互生ス、茶葉ニ似テ薄ク細鋸齒アリ、夏小白花ヲ開キ、赤實ヲ結ブ、一種蔓生ノモノハ深山ニ生ズ、葉小クシテザラツキアリ、實小クシテ赤シ、

增、一種イヌヤマカウジト云モノアリ、又カヤヤマカウジトモ云、蔓生ニシテ三尺許ニ及ブ、莖葉共ニ大ニシテ、花實ノ形相似タリ、コレ朝鮮ノ產ナリト云フ、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕百兩金　カラタチバナ　サヽツバタ（讚州）　キヤウタチバナ（同上）　ヤブカウジ（筑前）　ナヽカマド（筑後）　サヽリンダウ（石州）

葉ハ竹葉ニ似テ厚ク長シ、深緑色圓實ヲ結ンデ葉間ニ叢ル、一枝數顆、生ハ青ク熟シテ赤シ、庭際ニ多ク種ユ、又一種黄實ノモノ、白實ノモノアリ、又黄ニシテ光ル者アリ、キンミノタチバナト云、此外品類甚多シ、

増花戸ノ稱呼種種アリ、變葉ニタラヤウバ、ホウワウバ、スルガバ、スルガチリメン、チリメンバ、チヤボバ、ダリハ、タカノハ、カレハバ、アザミバ、ウスベ、ワシバ、サヽバ、オホハ、カツラチリメン等アリ、コレニ各白實黄實水晶實等アリ、葉ニ斑ノ入タルニツマジロ、シモフリ、ベタフ、ブリトリ、ホシフタラフ等ノ名アリ、又ナヽバケト云アリ、實ヲ蓄テ七種ニモ變ズルナリ、コレニモ八幡バケ、江戸ナヽバケ、蓋櫻ナヽバケ等ナリ、

（草木育種下篇或實觀べきもの）紫金牛　種類多し、凡ぼく野土等の竹林の下に植れバよく繁茂なり、鉢に植るには水拔をよくして、雨除の下陰地に置べし、米泔水又油糟など少し澆てよし、

（橘品類考）本草家の說に、千兩金和名カラタチバナと云、これ本艸綱目に云百兩金のたぐひなるがゆへなり、

貝原篤信云、茅藤果高サ尺に不過、實ハ紅なり、好事の者盆に植ゆ、京都の方言にカラタチバナと云、筑紫にてヤブコウジと云ものなりといへり、

平地木和名ヤマタチバナ、春花さき夏實のり、秋にいたりて熟す、不可喫、高サ數寸にすぎず、衆木の中にて最小なるものなり、又小青樹通仙木となづく、葉ハ枇杷に似て小にしてあつし、世俗おふく庭にうゆと、蓮生八鹿など、中華の書にみへたり、

右にいふ茅藤果、平地木の二品、世俗今通じてタチバナトなづけて、專ら鉢植となして賞玩す、俗に橘の字を書するは誤なり、橘は柑類の總名にして、密柑、柑子、金橘のたぐひすべての總名なり、

橘は日本紀に、垂仁天皇田道間守、垂仁帝ノ臣下也を、常世の國に遣して、非時の香果を求しむ、こ

れ今謂橘なりとあり、是かの密柑のたぐひなり、本草綱目に言所、これに同じ、茅藤果は本艸に見へず、

〔橘品類考〕橘白生業品類

近世さま／＼の化樹を生ず、人々これを以て賞玩することおびたゞし、なかんづく城州男山の麓に此道好事の人ありて、常たちばなの實を植て、七種の化樹となす、この種弘りて所々に化樹を生ず、これを八幡七化といふ、

凡からたちばなの種を植るには、隨分極上の橘をゑらびて植ふべし、常橘といへども、隨分勢力つよく、きづなき實をゑらびて植ゆべし、春のひがんすぎてこれを植、土かげん、

砂五分　但し極上のまいだまりをよしとす

土五分　但し清瘦の土を用ゆべし、こへけある土をきらふ、

凡て菓木のるいは、人氣を受てよく盛なりと、本草綱目に見へたれば、やしき廻り人家の土をよしとす、又人煙遠きところの清瘦の土をもよしとす、花史に陰地を好とあるこれなり、但し種を植て後、土のかわかざるよう心をつくべし、土かわく時は種いたむなり、

四季の内、夏冬は座敷に入て圍ひ、暑寒をいとふべし、しかれども草木は天地の氣を受て育するものなれば、折を見合して夜氣を受露をとりてよし、

大寒の節珍重して箱などに入ることあり、これもよけれども、多分至て暖氣になす時は、樹自然と春暖の氣を受て、新芽を吹出すことあり、時ならずして芽を吹出す時は、春過て芽をつくといふて、樹心をそれることあるものなり、よく／＼勘て暖氣すぎざるよう心得べし、

常橘の實を植て化樹を生せしむる法

常橘の實を植て化樹となすには、人家の廻りにて十ケ所の土をとり、又人煙遠きところの清瘦

硃砂根

の土を七所にて取、各等分となし、先に云ごとく砂に合して、橘の實をうゆべし、かならず化樹となりてはゆるなり、尤土は城州八幡の土を最上とす、八幡ばけの生し傳なり、
但し人家の廻りの土とは、あるひは門口千載など、家舗の廻りにて陰地の土を取べし、又人煙遠きところとは、里はなれ家屋舗なきところなり、是も陰地をゑらびて取べし、田畠など糞けある土を取べからず、大にきらふ、これ大に秘事なり、

〔草木六部耕種法十一〕百兩金ハ大抵鉢植ニノミスル者ナリ、假令ヒ花壇ニ作ルトモ、草能ク繁生スル野土山土ヲ採テ篩ニテ能透シ、此細末ニシタル土十荷ニ、干鰮粉五升、油糟粉五升ヲ能ク調合シテ植ベシ、最モ陰地ヲ良トス、其植タル上ニ日覆ヲ設テ、夜ハ此ヲ除テ露ヲ受シメ、小雨ノ當ルモ苦シカラズ、然レドモ濕過ルトキハ根ノ腐ル者ナリ、夏ノ間ハ刷毛カ筆ヲ以テ、隔日ニ水ニテ葉ノ表裏ヲ能ク洗フベシ、然セザレバ微細ナル蟲ヲ生ジテ、葉ノ落ル事多シ、凡ソ百兩金ノ實ヲ蒔ニハ、三月頃ニ採テ直ニ蒔キ、淺ク植テ實見ユルヲ良トス、既ニ生タルヲ實生モ故木モ、四月ニハ土ヲ替テ移シ植ベシ、如斯スルトキハ能肥リテ勢壯ニナル者ナリ、接木スルニモ四月頃ニ接ベシ、凡ソ百兩金ハ、實ニハ赤、淡赤、黃、白、紫等アリ、葉ニモ多羅葉、鳳凰、縮緬、繻子、笹葉、枯葉、鶴岡、斑紋、覆輪、間道、白星等アリ、下品ナルヲ切テ砧トナシ、珍奇ナルヲ接木スベシ、又別ニ木立百兩金ト云フ者アリ、高サ五六尺ニ及ビ枝多ク、其葉ハ血櫧ノ如クニシテ厚大ニ、花實モ硃砂根ニ似テ大ナリ、此亦栽翫スベキノ一物ナリ、

〔多識編二山草〕硃砂根綱目　今案阿。加。岐。、

〔重修本草綱目啓蒙十山草〕硃砂根　マ。ン。リ。ョ。

花家ニ多クアリ、高サ一尺以來、葉ハ百兩金ニ似テ短ク、邊ニ尖ラザル鋸齒アリ、葉ハ莖端ニ聚リ互生シテ傘ノ如シ、數百ノ圓實枝ヲ分テ葉下ニ倒垂ス、冬春紅熟シテ觀ニ堪タリ、又黃實白實、其

櫻草

餘數品アリ、一種播州及紀州ニ生ル者、高サ三四尺ニシテ實少シ、花戸ニテシキンジヤウト呼、紀州ニテヤマシキミト云フ、

增、一種ヒメマンリヨト云アリ、莖葉花實共ニ小ナリ、又實ノ直立シテ生ズル者アリ、タチマンリヨト云、實ノ大ナルヲオホミト云、小ナルヲコミト云フ、センリヨト云モノアリ、深山ニ自生ス、マンリヨヨリ葉薄クシテ狹シ、節ノ處ニ高キフクレアリ、花實モマンリヨニ似タリ、コレ汝南圃史ノ珊瑚ナリ、石ノ部ノ珊瑚ト同名ナリ、又ヒヨトリジヤウゴヲ雪裏珊瑚ト云、アヲキヲ桃葉珊瑚ト云フ、共ニ汝南圃史ニ見ヘタリ、

〔佐渡志 五物産〕硃砂根　方言マンリヨウ　此二種昔ハナカリシガ、今雜太郡新保村ノアタリニ多シ、本南國ノ產ニテ、甚雪霜ヲ恐ルトイヘリ、

〔書言字考節用集 六生植〕櫻草(サクラサウ)

〔大和本草 七花草〕櫻草　三月紫花ヲ開ク、櫻花ノ形ニ似タリ、又白色アリ、ウスキ紅黃色アリ、高キ事一尺餘ニスギズ、葉ハ蘿蔔ニ似テ小ナリ、花如錢大、畏寒暑、又九輪草アリ、七重草アリ、此類ナリ、好陰地、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕櫻草

按櫻草生山谷中、卽九輪草之一類異種也、葉形相似微小、邊無齒刻、不甚光澤、而葉心白、九輪草葉心紫三四月抽莖頂生花、似九輪草花而單、淡紫色、或白色、又如櫻花最艷美、故名櫻草、結莿兒青色、內結子、初青後茶褐色、人家移種之、

〔草木育種 下美花〕櫻草　種類甚多し、悉擧に暇あらず、大抵黑ぼく土五升、下谷邊の溝のあげつちを、驅し墾(こな)し、細に篩たるを五升、鳥のふんを入てませ合せ、此土へ二月初に根を分植てよし、一說に馬糞水を澆ば花多しと云、あまり肥過たるは葉大にして花の莖長く、且少して不揃なり、又ゆき

山高苣

わりさうあり、小ざくらと云、日光山にあり、葉小く花も頗小く淡紅し、又阿彌陀には黄色のさくらさうありといふ、

〔草木六部耕種法 十四 花〕櫻草モ作法同様ナリト雖ドモ、眞土ハ野土ヲ論ズルニ及バズ、少シク砂ノ交タルニ、馬屎千鰮油糟糠糟、及ヒ鼠尾ノ乾燥テ腐ニ醸タルヲ、耕交置テ植ベシ、此物ハ種類頗多ク、又雪割草ト云モ有リ、俗ニ小櫻ト呼ブ、日光山ニ多シ、葉モ花モ小クシテ淡紅ナリ、又ホクドギト稱スル有リ、莖葉頗大ニ紅白黄ノ三色アリ、出羽奥州ニ甚多シ、此ヲ作ルニハ野土ノ粘ラザルモノ一荷ニ、炙日泥ニ増補錦繍ニ詳ナリ一荷、鷄糞五升、鰮粉五升、以上四種共能耕交タルヲ花壇ノ如クニ置テ、二月初旬ニ其根ヲ分ケ植ウベシ、或ハ馬溺ヲ澆バ花多シト云フ説有リ、然レドモ肥養ノ過タルモ宜シカラザルコト有リ、

〔武江產物志 遊覽〕櫻草、紫雲英 戸田原　野新田　尾久の原 すみれ れんげ あり きう　染井植木屋 立春より 七十五日位

〔守貞漫稿 六 生業〕三都トモニ市店無之、唯江戸ノ陌上ヲ巡ル生業、

櫻草賣　サクラ草ハ季春ノ比賣之、瓦鉢ニ植ル、〇中略 植木屋ト同形ノ具ヲ以テ擔ヒ巡ル、

〔書言字考節用集 六 生植〕寶輪花 ほうりんくわ 又云 空輪草 くうりんさう 又云 寶鐸花

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕山高苣 やまくさ 俗云九輪草

救荒本草云、山高苣生山野間、苗葉苣地生、葉似高苣葉而小、葉脚花叉頗少、葉頭微尖、邊有細鋸齒、葉間攛葶開淡黄花、苗葉味微苦、

按山高苣此云九輪草乎、似高苣葉而扁、邊有細鋸齒、面葉脚窄、葉心莖淡紫、三四月抽葶開小花似櫻草花而略大、生於莖圍、八椏各一樣如車輪、至梢如此七層或九層、宛然似浮屠九輪、故名、有紅白紫三種、結子茶褐色、其葉心莖中有紫色弦糸、凡形狀乃九輪草也、唯山高苣花色黄也、九輪草花未有黄色者、以爲異、

〔剪花翁傳 二三月開花〕九輪草　花一重、色赤白二種、開花三月下旬より四月、方二分陰、地二分濕、土回鵝肥油粕淡小便折々澆ぐべし、種收まらず、分株移春芽出し前よし、花莖長六七寸節なし、花形ちさくら草の如く、房の形ちは莖頭の毎節に一段々々、數の英節を遶りて咲也、恰塔上の九輪に似たり、

〔甲子夜話 四十九〕蕉子話ス、日光山廿日御靈屋道傍ノ渠ノ水アセタル所ニ、九輪草夥シク生ジテ、花ヲ開キ美觀ナリシカバ、案内ノ僧ニ如何ニシテカクハ此草多キヤト問シカバ、コノ渠ノ上ニ九輪澤ト云フアリ、ソノ澤水流レテコノ渠ニ入ル、九輪澤邊ハ皆此草ナリ、自然ト其種流レ來テ實ニ生ルナリト答フ、是マデ何ユヱニ九輪ト云フヤ知ラザリシガ、是ニテ其名ヲ得ル所以ヲ解シタリ、

虎尾草

〔書言字考節用集 六生植〕虎尾草

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕虎尾草　俗稱本名未詳　農政全書有虎尾草、莖葉形狀似之、然不言開花、又山草有同名、各別也、

按虎尾草高二尺許、葉長三四寸、末牢尖深綠色、厚皺有鋸齒、六月莖端著花、極細白如穗、末牢似獸尾、故名、

番木鼈

〔多識編 二蔓草〕番木鼈、今案末知牟、異名馬錢子、綱目

一種有淺紫色者、俗呼曰瑠璃色、

〔書言字考節用集 六生植〕番木鼈 一名馬錢子、時珍云、蔓生開黃花、結實如括蔞者、

〔重修本草綱目啓蒙 十四蔓草〕番木鼈　マチン 馬錢ノ音轉ナリ　一名苦實 本草原始　馬前子 回春萬病　番鼈 本經逢原

番木別子 八蠻生成　苦實把豆兒 附方

和產ナシ、舶來多シ、咬𠺕吧ヨリ來ル、形木鼈子ヨリ小ク、圓扁ニシテ白色毛茸アリ、此實ヲ用テ狗ヲ毒ス、狗コノ毒ニ中ルニ、豆腐ヲ食シムレバ解ス、故ニ集解ニ、人ノ病ヲ治スルニハ、豆腐ヲ以テ

嗣シ過コトヲ云フ、

〔新撰字鏡 草〕龍膽 太〇豆〇乃〇伊〇久〇佐〇又云、山比古菜、

〔本草和名 六草〕龍膽 陶景注云、味甚苦、故以膽爲名、一名陵游、和名衣。也。美。久。佐。一名爾。加。奈。、

〔倭名類聚抄 二十草〕龍膽 陶隱居本草注云、龍膽 和名衣夜美久佐、一云爾加奈、味甚苦、故以膽爲名也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕播磨人呼、於古利於登之、煎服之、以微瀉、蓋衣夜美久佐之名之遺也、○中略 陶弘景又云、龍膽狀似牛膝、開寶本草引別本注云、葉似龍葵、味苦如膽、因以爲名、圖經云、宿根黃白色、下抽根十餘本、大類牛膝、直上生苗、高尺餘、四月生葉、似柳葉而細、莖如小竹枝、七月開花、如牽牛花、作鈴鐸形、靑碧色、冬後結子、苗便枯、

〔下學集 下草木〕龍膽リンダウ、

〔書言字考節用集 六生植〕龍膽リウタン 一名陵游 龍膽エヤミグサ 陵游草 同

〔倭訓栞 中編二十八利〕りんだう 徒然草にみゆ、龍膽なり、音をもて訓とするなり、元眞集などにりんだうとも見えたり、女房の裝束にもいへり、俗にさゝりんだうといふは、小きを指ていへり、山龍膽なり、蔓生の石龍膽なりといへり、藤りんだうあり、裏紅あり、武者りんだうあり、

〔藻鹽草 八草〕龍膽 物の名によめり、和名に多都の伊久佐、

えやみ草 おもひくさ たゞし一説になでしこをもいふともいへり、またまへに注するごとく、女郎花をもいへり、私云歌讀によるべき也、 下草の花を

みつればむらさきに 時平歌合によめり、是もりんだうの事也と云々、秋の野のをばなにまじりさく花の色にやこひんあふよしなみ、この花をまじり花さくといへる

も、りんだうの事也と云々、 くたに 古歌、りんだうの一名、

〔古今要覽稿 草木〕くたに ○中略

今按りうたんにくたにの和名あるごとくいふはひが言なり、すでに和名類聚抄にも、龍膽和名エヤミクサ、ニカナ、とあげて、くたにの和名は見えず、こはりうたんの字音よりして、後におしあてたる

謬說にて、あたらぬことなり、くたにのりうたんにあらざる證は、源氏もの語をとめの卷に、夏のかたの前栽に、さうびくたにをうゑられたること見えたり、これに仍て考ふるに、りうたんは本草綱目啓蒙等に見えたるごとく、暮秋より初冬へかけて、花さき實をむすぶものにて、夏のものにあらず、しかれども夏のかたのせんざいにも、春秋の花をませてうへられしよしあれば、いかゞとおもふ人もあるべけれど、さにはあらず、それはさうびくたにの外に、春秋の花はませてうへられたるにて、いかでか夏のかたのせむざいに、夏の花を置て、春秋の花を詮とはうへらるべき、

〔大和本草六藥類〕龍膽　倭名リンダウ、一名クタニト云、又思草ト云、秋碧色ノ好花ヲヒラク、山野ニアリ、葉ハ末ニ尖アリ、白花モアリ、又山龍膽アリ、雜草載ㇾ之、又サヽリンダウト云草アリ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕龍膽　陵游　和名衣夜美久佐、一云爾加奈、今云里牟止宇、○中略
按龍膽和漢共用ㇾ之、藝州廣島之產良、豐前中津次ㇾ之、葉似ㇾ笹而厚、六月開ㇾ花、紫如₂鈴鐸形₁向ㇾ上、花中有₂蕊子₁、又有₂正白花者₁、名₂笹龍膽₁、形狀小、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕龍膽　○リ○ン○ダ○ウ○龍膽ノ音轉ナリ　○ニ○ガ○ナ和名鈔　○エ○ヤ○ミ○グ○サ同上　○ク○ダ○ニ古歌
○オ○モ○ヒ○草同上　○ア○ゼ○桔○梗　○ヲ○コ○リ○オ○ト○シ播州　○サ○ヽ○リ○ン○ダ○ウ奥州、勢州、　一名斜枝大夫藥譜
斜枝大士輟耕錄　觀音草滇南本草、東醫寶鑑、
向陽ノ山野ニ多ク生ズ、葉ハ竹葉ノ如ニシテ短シ、故ニサヽリンダウト云、葉兩對シ三縱道アリテ桂葉ノ如シ、圓莖高サ一二尺、肥地ニ生ルハ三尺許、八九月莖梢或葉間ゴトニ、三五花ヲ開ク、花ノ本ハ牽牛花ノ如ク、筒形ヲナス、末ハ五瓣ニ分レテ桔梗ノ花ノ如シ、靑碧色愛スベシ、晝ハ開キ夕ニハ收ルコト數日、後小莢ヲ生ズ、冬ニ至テ苗枯ル、又細葉ノ者アリ、葉ノ濶サ一分長サ二三寸、紀州ノ熊野ニ產ス、救荒本草ニ圖スル所ニヨク合ス、花戶ニハ白花モアリ、又白花ニシテ瓣ノ外

淡紅ナルアリ、ウラベニト云、又フジリンダウアリ、淡紫色ナリ、又蔓生アリ、是ハ深山陰地ニ生ズ花微シ、早クシテ淡紫色、形チハ同ジクシテ微小、後花中ニ實ヲ出ス、桃葉珊瑚實ノ如シ、冬ニ至テ熟シテ赤シ、春ニ至テ尙存ス、コレヲツルリンダウト云フ、又春リンドウハ陽地ニ生ズ、高サ二三寸、四月莖梢ニ花ヲ開ク、一二莖或ハ四五莖叢生ス、形ハ龍膽ト同シテ小シ、日中ニ開キ暮ニ收ル、葉ハ圓小ニシテ尖ル、伊勢ニテハ水澤中ニ生ズ、方言サハギヽヤウト云、水泥ニ種ヘ、盆籠ノ中ニ入ルヽト云、集解ノ山龍膽ハハルリンダウナリ、本草彙言ニ石龍膽ニ作ル、嶺南ニテハ小ナルヲ石ト云、イトスヽキヲ石芒ト云例ノ如シ、

〔廣益地錦抄四〕龍膽　さゝりんだうの根をいふ、花紫なるを藥種に用、花ざかりは久しく、ながめあり、花壇に植べし、

〔草木育種下龍膽〕龍膽草本　山の崖などにあり、植る地は赤土又粘ある野土によし、米泔水を澆、外の肥は惡し、

〔剪花翁傳四九月開花〕笹龍膽　花濃青又白、形ち朝貌の莟のごとくにして中開也、白花を上品とす、開花九月上旬より十月迄あり、方二分陰、地三分濕、土回塵、肥干鰯、淡小便、分株移とも春芽出しの時よし、水はもし上がたき時ハ、切口を又切捨、わら盆の類にてよく包み、水にひたして後、水器に入をくべし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、〇中略龍膽、通草、各五斤、　大和國卅八種、〇中略龍膽三斤、〇下略

〔出雲風土記神門郡〕凡諸山野所在草木、〇中略龍膽、

〔伊勢集〕りうたん
風さむみなく雁がねの聲すなりうたむ衣をまづやかさまし

當藥

〔古今和歌集十物名〕りうたんの花　とものり
我やどの花ふみしだくとりうたん野はなければやこゝにしもくる

〔拾遺和歌集七物名〕りうたん　よみ人しらず
川かみにいまよりうたんあじろにはまづもみぢばやよらんとすらん

〔枕草子三〕草の花は
りんだうは枝ざしなどもむつかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにて、さし出たるいとをかし、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　龍膽タキノ川ヲチ合ニモ　目黑邊ノ產　コケリンダウコマバアスカ山ニモ
志村邊ノ產　武者リンダウ

〔佐渡志五物產〕龍膽　方言リンドウ　山中ニアリ、又蔓龍膽、春龍膽モ路傍ニ見ルコトアリ、

〔大和本草九雜草〕センフリ　トウヤクトモ云、白花サク又淡紫花アリ、白花ノ者尤苦シ、山ニ生ズ、小草也、高サ五六寸ニ不過、葉ハ龍膽ニ似テ小也、葉モ花モキハメテ苦シ、虫ヲコロス、倭俗是ヲ胡黃連ト云非也、胡黃連中華ヨリ來ル別物ナリ、或曰、倭方ニ胡黃連ト云ハ、センフリヲ可用ト云、是ヲ用テ糊トシ、表褙ヲシ、屛風ヲ張リ、紙ヲ續ケバ虫クハズ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕當藥　正字未詳、俗云世牟不利
按當藥播州三木郡多有之、苗高五六寸、一根數莖、其莖細而淡紫色、葉似地膚草而小、七月開花、形似桔梗花而小、色黃有無花者、根細長黃色、
氣味大苦寒　倭方丸散諸蟲積聚藥入用、或有代胡黃連用之者不可、今人用染兒衫衣黃色也、云能避蚤虱、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕龍膽

増、センブリハ本條ノ一種ナリ、獐牙菜ノ種類トスル說ハ穩ナラズ、又古ヨリ和ノ胡黃連トスルモ誤ナリ、此集解ノ山龍膽、本草衍言ノ石龍膽ニシテ、ハルリンダウハ石龍膽ノ一種ナリ、センブリハ龍膽ニ代用スルニ佳ナリ、

〔本草和名 九草〕鳧葵、一名著菜、與荇同一名接余、一名猪蓴、出雜注一名茆、音卯一名水葵、已上出兼名苑和名阿佐々、

〔倭名類聚抄 十七水菜〕荇　爾雅注云、荇菜、上音杏、字亦作莕、和名阿佐々、叢生水中、葉圓在莖端、長短隨水深淺者也、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕說文、莕莖餘、本草圖經引陸璣云、白莖、葉紫赤色、正圓徑寸餘、浮在水上、根在水底、大如釵股、上靑下白、後漢書馬融傳注、鳧葵、葉圓似蓴、生水中、今俗名水葵、唐本草云、鳧葵生水中、卽荇菜也、別本注云、葉似蓴莖澀、根極長、江南人多食、圖經云、花黃色、水中極繁盛、李時珍曰、莕與蓴一類二種也、並根連水底、葉浮水上、其葉似馬蹄而圓者蓴也、葉似蓴而微尖長者莕也、夏月俱開黃花、亦有白花者、結實大如棠梨、中有細子、

〔醫心方 一〕鳧葵　和名阿佐々

〔伊呂波字類抄 安植物〕荇 アサヽ、亦作莕　同

〔日本釋名 下草〕荇 アサヽ　水のあさき所に生じて、黃花さく草也、あさざき也、或云、あさゝはかうほね也、荇にあらず、荇は小草也、蓴に似たり、

〔東雅 十三穀蔬〕荇 アサヽ 略○中 アサヽの義不詳、或人の説に、アサヽとはアサヽなり、流水に生じて、花さくをいへりといふなり、如何があるべき、萬葉集抄に、蓋說といふものゝ如し、アサアサといふに似たり、水淺き所にあるの義なりけむも知るべからず、又此菜に鳧葵の名あるによりて、俗にカハアフヒといふ物をもていふ事あり、また是たまたま鳧葵の字のカハアフヒといふ名に相合ふのみ、カハアフヒといふものは、實にこれ一物なり、

〔倭訓栞 前編一〕あさゝ　荇菜をいふ、倭名抄に見ゆ、池などの淺き所に生草のうるはしき花の咲ものなり、よて俗に小蓮花といふ、篤信云、あさゝは葉も花も莕菜草に似たり、近江にちやんきん、甲斐にくりじやけ、加賀にいもなぎ、肥後にはかはいも、備前にすつぽんもく、江戸近邊にかて圓、

座、又せにもく、下野にくさあふひ、常陸にとはす、仙臺にたぶなぎといふ、

〔大和本草水草八〕荇　關雎ノ詩ニ詠ゼル荇菜是ナリ、又莕ト云、其葉ハ馬蹄ニ似タリ、又ヨク睡蓮ニ似タリ、葉ノ形蓴菜ノ如クニシテ、其端分ル事睡蓮ノ如シ、蓴菜ノ葉切レザルニ異ナリ、葉水面ニウカブ、單ノ黃花ヲ開ク、莖根長シ、花モ水面ニウカブ、江州唐崎ノ水中ニ多シ、荇菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナルベシ、アサヾハカハホネニ似タル水草ナリ、アサヾハ根アラハル、荇菜ハ根アラハレズ、蓴菜ニ似タリ、○中略

アサヾ　池沼ノ中ニ生ズ、葉モ花モ萍蓬草ニ似テ別ナリ、萍蓬草ハ莖ツヨクシテ、水上ニ立ノボリ、根地上ニアラハル、アサヾハ莖カウホネヨリ長ク、水中ニ横タハリテヨハク、葉ハ水面ニウカビ、水上ニ不上、花ノ形色ハカウホネニ似タリ、五六月水面ニ黃花ヲヒラク、新六帖光俊ノ歌ニ云、見レバ又アサザオフテフ澤水ノソコノ心ノ根ヲゾアラハス、是アサヾノ根ノアラハルヽヲイヘリ、荇菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナリ、荇菜ハ根アラハレズ、又古歌ニ水マサル沼ノアサヾノウキテノミアルハ有トモナキ我身哉、コレアサヾノ水ニウカベル事ヲイヘリ、カウホネノ葉ハ水上ニ立ノボリテ、水面ニウカバズ、荇菜ヲアサヾト訓ジ、萍蓬ヲアサヽト云ハ皆非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕莕菜　アサヾ○和名鈔中略
池澤中ニ生ズ、葉ハ水面ニ浮ビ、根ハ水底ニアリ、故ニ莖ノ長短ハ水ノ淺深ニ從フ、莖ハ細シ、葉楕ニシテ蓴菜ノ如ニシテ小ク、一方ニ缺アリ、面ハ緑色、背ハ紫色、周邊ニ雲頭齒アリ、夏月花ヲ水上ニ開ク、大サ錢ノ如シ、五瓣黃色ナリ、一種莖ニ葉互生シ、葉間ニ數十花簇生シ、黃色ナル者アリ、又一種葉大ニシテ、葉間ニ數十花簇生シ、瓣末白ク、本黃ナル者アリ、金銀蓮花ト云通名ナリ、

〔古今和歌六帖六〕あさゞ
見るからに思ひますだの池に生るあさゞのうきて世をばへよとや

睡菜

〔新撰六帖　六〕あさゞ　　家良

水まさるぬまのあさゞのうきてのみあるは有ともなき我身哉

〔重修本草綱目啓蒙　二十水草〕睡菜　ミ゜ブ゜ガ゜シ゜ハ゜　ミ゜ヅ゜ハ゜ン゜ゲ゜　ミ゜ツ゜ガ゜シ゜ハ゜　ミ゜ヅ゜ゴ゜ボ゜ウ゜　ミ゜ヅ゜タ゜ケ゜　ヌ゜マ゜ゴ゜ボ゜ウ゜　ト゜ウ゜オ゜モ゜ダ゜カ゜　ミ゜ツ゜パ゜ゼ゜リ゜（雲州）　カ゜デ゜ノ゜ハ゜（同上）　ミ゜ツ゜パ゜オ゜モ゜ダ゜カ゜（江戸）　キ゜ジ゜ン゜サ゜ウ゜

池澤中ニ生ズ、甚ダ繁茂シ易シ、春舊根ヨリ葉ヲ生ズ、一莖三葉、半夏葉ノ如ニシテ大ナリ、一窠ニ叢生、三月莖ヲ抽ルコト高サ二尺許、花ハ長ク穗ヲナシテ莖上ニアリ、五瓣或ハ六瓣、大サ五分許、未ダ開カザル時ハ、白色ニシテ末紅アリ、已ニ開ク時ハ内雪白色ニシテ長毛アリ、蘂モ白シ、根ハ綠色、横行シテ節多シ、形竹鞭ノ如ク大ニシテ、萍蓬草（カウホネ）ノ根ニ似タリ、

絡石

〔多識編　二蔓草〕絡石、豆多、今案天伊可賀豆゜゜゜゜（〇豆下恐脫賀字）異名耐多、（中略）

〔書言字考節用集　六生植〕絡石（つたかづら、本草、包絡石木而生故名）石龍藤（同上）

〔宜禁本草　乾中草〕絡石　苦溫微寒、生陰濕、多夏青實黑、（石上生者葉大而圓、在石上者葉細厚而圓、）主口乾舌焦癰腫喉舌腫、養腎堅筋骨、利關節、久服明目潤澤好顏色、煮汁服之、主一切風、變白宜老、（石血葉尖一頭赤、絡石葉圓正靑、）莖節著處生根、鬚六七月採莖葉、宮寺人家山石間種以爲飾、

〔和漢三才圖會　九十六蔓草〕絡石（ていかかつら）　石鯪　懸石　耐多　雲花　雲丹　雲英　石血　雲珠　石龍藤（〇中略）

按絡石（和名豆多）俗云定゜家゜葛゜、相傳黄門定家卿之古墳石生、因名之、葉似藪柑葉、而無刻齒、無花實、又蔓白汁無、

〔重修本草綱目啓蒙　十五蔓草〕絡石　テ゜イ゜カ゜カ゜ヅ゜ラ゜　ツ゜ル゜ク゜チ゜ナ゜シ゜（勢州）　シ゜ホ゜フ゜キ゜（雲州）　一名鬼繫

腰（附方）　鬼繫帶腰（外科精要）　鬼腰帶（三因方）　石薜荔（醫學叢函）

山野ニ皆アリ、樹石垣籬ヲ纏フ、ソノ藤舊キ者ハ粗大ナリ、葉ハ橘葉ニ似テ兩對ス、厚シテ深綠色、多モ凋マズ紅紫色ニ變ズ、莖葉ヲ斷バ白汁ヲ出ス、又細葉ナル者アリ、皆夏月葉間ニ細莖ヲ抽テ枝ヲ分テ花ヲ開ク、大サ錢ノ如シ、五瓣ニシテ微ク回旋ス、其色白シ、老スレバ黃ニ變ズ、瓣厚シテ香氣アリ、後小莢ヲ結ブ、筑後ニテパ。パ。ノ。カ。ン。ザ。シ。ト呼ブ、其莢圓長七八寸、形箸ノ如シ、一莖ニ二角下垂ス、又變ジテ五六角ナル者モアリ、熟スレバ紅紫色内ニ白絮アリ、蘿藦絨ノ如シ、後莢自ラ開キ絮飛ビ去ル、絮ゴトニ一子アリ、落テ生ジヤスシ、一種葉至テ小ナル者、冬ニ至テ紅或ハ紫ニ變ジ、土石間ニ繁延スル者ヲ、セ。キ。ダ。カ。ブ。ラ。ト呼ブ、卽石血ナリ、宜シク藏器ノ說ニ從フテ別物トナスベシ、

〔廣益地錦抄 七〕絡石　葉は蔦に似たり、鴨の掌のごとく、四季共に青葉にて冬もかれず、大木にからみて高く上る、後は大木の葉をかくすほどしげる、蔓より根を出して木にとり付、暴く實をむすぶ、

丁子草

〔大和本草 花草 七〕丁子草　花ハ丁子ノ形ニ似テ淺碧色ナリ、四月ニ開ク、葉ハ柳葉ニ似テ、中ノタテ筋微白シ、

〔和漢三才圖會 濕草 九十四 末〕丁子草　俗稱、本名未詳、

按丁子草高尺許、葉似桔梗而細長、又似山丹葉而細、三月葉間著花、層層其形如丁子而紫色、結莢大可豆而一帯二莢、向上如角、

〔武江產物志 藥草〕尾久ノ原　丁子草

蘿藦

〔本草和名 九草〕蘿摩子、一名丸蘭、一名雀瓢、一名苦丸、出把權一名地乳、出大清經和名加。々。美。、

〔倭名類聚抄 二十草〕芄。蘭。　本草云、蘿摩子、一名芄蘭、上音丸、和名加々美、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕唐本先附云、蘿摩子、陸機云、一名芄蘭、幽州謂之雀瓢、此所引卽是、蘇注云、按雀

瓢是女青別名、草蓋相似、以蓋似女青、故兼名雀瓢、（中略）爾雅蘿芄蘭、郭云蘿芄蔓生、斷之有白汁可啖、禹錫曰、如此注則似蘿芄一名蘭、或傳寫誤、芄衍字、焦循曰、田野間所謂麻雀棺者蔓生、葉長二寸、橢圓上銳、藤柔衍斷之白汁出、實狀如秋茄實而奕、霜後枯、破內盈絨、準之本草諸家之說、此爲芄蘭也、雀棺乃雀瓢之遺稱、而棺音同莞、爾雅名蘿、說文名莞也、

〔多識編 二草〕蘿摩、何波禮久左、今案可可伊毛、

〔和爾雅 七草木〕蘿摩（ガヾイモ）（白環藤、芄蘭、白環、斫合子、實名雀瓢、）

〔物類稱呼 三生植〕蘿摩　ちゝくさ　京にてちゞくさ、又らまさうといふ、江戸にてちゝぐさ、又らまさうともいふ、上總にてやいとばな、（花灸に似たり）つくしにてがぶなといふ、土佐にてがゞいもといふ、

〔東雅 十五草卉〕芄蘭カヾミ　倭名抄に本草を引て、蘿摩草一名芄蘭カヾミ、徐長卿はヒメカヾミ、白前はノカヾミ、白蘞はヤマカヾミと註したり、芄蘭白蘞共に蔓生す、芄蘭は籬落の間に蔓延して、白蘞は山谷の間に生じぬれば、山カヾミといふ、白前は洲渚沙磧の上に蔓生して、芄蘭に似たる所あれば、ノカヾミといひ、徐長卿は蔓生にはあらねど、其子の蘿摩子に似て小しきなれば、ヒメカガミといひしなり、少彥名神天羅摩船に乘り給ひしとも、白蘞皮をもて船とせられしとも見えて、並に讓てカヾミといひしは、卽是等の物なり、たゞ其のカヾミといふ義は不詳、（蓋事記には開說な併せしるまれしな古事記には天之羅摩船とあり、日本紀には白蘞皮を船とすと見えたり、蘿摩船とは其實ないひ、白蘞皮とは其細皮をいひしなるべし、共に其小しきなる事をいひしなり、蘿摩は今俗にチアサといふなり、蘿摩共に皆白乳の汁あるをいふなり、陰凡編は俗にフナハウといふ、其殻は知らず、カゞチといひ、カゞミといふもの、蘿に太古の時に開えしなり、カゞチは蘿きき事アふ、カゞチの如しと見えたれば、そのカゞといふは、赤く如して赤きの義とも知るゝなり、もし其例によらば、カゞミとは其實の赤くして赤きな蕊ひしくなれども、カゞミといふもの、實然るにしあらず、羅摩本草によるに、白蘞の一種赤蘞といふは、花實は功用皆同白蘞、但し真俱に赤しと見えたり、されば此物によりてカゞミの名あるべしとも思はれず、凡そ古語の一例なもて推すべからざるか、かる事ども多し、）

〔庖廚備用倭名本草 五野菜〕蘿摩（ガヾイモ）倭名抄ニ蘿摩ナシ、多識篇ニカバチクサ、今案シカイモ、考本草蘿

蘿藦ハ藤生也、是ヲ摘バ白汁アリ、人家ニ多ク種フ、葉アツクシテ大ナリ、生ニテ喫フベシ、蒸テモ煮テモ食スベシ、諺云去家千里勿食蘿藦枸杞、イフコヽロハ精氣ヲ補益シテ、陰道ヲ強ク盛ニナスコト、枸杞葉ト同ジケレバ也、三月ニ苗ヲ生ズ、籬垣ニ蔓延シテ極メテ繁リヤスシ、其ノ根ハ白クヤハラカニ、其ノ葉ハ厚ク長クシテ、後ヘ大ニ前尖、根ト莖葉ト斷バ皆白汁アリ、六七月長花ヲ開ク紫白色也、其ノ實ハ長サ二三寸、大サ馬兜鈴ノ如シ、一頭トガル、殼ハ青クヤハラカニシテ、其ノ中ニ白絨ト子トアリ、霜後ニ枯裂テ其ノ子ハ飛チル、子カロクウスクシテ兜鈴子ノ如シ、商人其ノ絨ヲトリテ、坐褥ヲ作リテ綿ニ代テ、甚輕煖也ト云、元升井〇肉曰、此註ヲミレバ蘿藦ハ肥前ノ山野人ノカプナト云フモノナリ、カプナハツルカヅラニテ、山野ノ樹ニカヽリ生ジテ、ハビコリサカヘ、其ノ實モ莖葉モ本草ノ註ニイヘルガ如シ、霜枯テ後、其ノ實サケテ、內ヨリ白ハンヤノ如キモノ出テ風ニ吹チル、異國ヨリ渡ル白ハンヤハ是ナランカ、吾人ハ是ヲトリテ綿ニ代ル事ヲシラズ、又莖葉ヲ食スル事ヲシラズ、故ニ人家ニ種ルモノナシ、今人家ミナ種ナバ、衣食ノ一助ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕蘿藦 カ○ヾ○ミ○タ○サ○ ガ○ヾ○イ○モ○ ガ○プ○ナ○筑前 ガ○ブ○ロ○同上 ド○ウ○ガ○メ○ ヅ○ル○ チ○ヽ○グ○サ○ チ○グ○サ○大和本草 チ○ト○メ○ チ○ガ○イ○モ○ ト○ン○ボ○ウ○ノ○チ○羽州津輕 ガ○ヾ○ラ○ビ○加州 ガ○ン○ガ○ラ○ヒ○越後 ハ○ト○カ○ミ○ タ○ト○ウ○ガ○ミ○下總 ゴ○ガ○ミ○ ヅ○ル○仙臺 ゴ○ガ○ミ○同上 ゴ○ウ○ガ○ミ○同上 ゴ○ガ○ラ○ヒ○羽州 コ○ウ○ガ○モ○遠州 ゴ○ウ○ガ○メ○駿州 カ○ト○リ○グ○サ○江戸 カ○ラ○ス○ノ○モ○チ○勢州 ム○ジ○ナ○ノ○チ○佐州 シ○コ○ヘ○イ○備前 イ○カ○シ○キ○泉州 ゴ○マ○ン○ザ○イ○南部 ゴ○マ○ザ○イ○同上 ゴ○マ○シ○ロ○同上 ゴ○マ○ジ○ヨ○津輕、莢名下皆同、 ゴ○マ○シ○ロ○カ○イ○南部 ハ○ン○ジ○ヤ○讃州 カ○ラ○ス○ナ○ベ○雲州 ス○ヾ○メ○ノ○マ○ク○ラ○越前

一名苦丸千金方 斫合草本草綱註 羊角菜救荒本草 羊嬭科 合鉢兒 婆婆鍼杙兒 細絲藤 過路黄共ニ同上 鳥朴鄉藥本草 綫包本草彙言、實名、

山野ニ最モ多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ジ、藤蔓繁延ス、葉形柄ニシテ尖リ、本ニ一缺アリ、深緑色、光澤ニシテ厚ク兩兩對生ス、小ナル者ハ長サ一寸餘、大ナル者ハ四五寸、莖葉ヲ斷ズレバ白汁出、夏月葉間ニ、穗ヲ生ズ、長サ一二寸、小長花ヲ開ク、五瓣ニシテ形鈴鐸ノ如シ、白色紫點、雌ナル者ハ莢ヲ葉間ニ生ズ、穗上ニ生ゼズ、長サ三四寸、徑リ一寸許、橢圓ニシテ末鋭ナリ、皮ニイボアリテ胡瓜ノ如シ、嫩ナル者ハ飯ヲ纒シ油煎シ食フベシ、葉モ亦同ジ、莢熟スレバ殻紫色ヲ帶ブ、竪ニ自ラ折テ舟ノ形ノ如シ、內ニ白絨アリ針ノ如シ、針根ゴトニ一子アリ、形圓扁ナリ、其針風ヲ見レバ便チ張リ開テ綿ノ如シ、白光絨ノ如シ、然レドモ碎ケ易クシテ絲トナスベカラズ、甚木綿(パンヤ)ニ似タリ、故ニ俗ニ和ノパンヤト云フ、此綿ヨク血ヲ止ム、秋深テ苗枯ル、其藤皮中ニ白絲アリ、甚强ク釣緡トナスベシ、○中略

増、蘿藦ノ生實ヲ麪ニ裹ミ油煠トシ、醬油ニテ煮食ヒ、又生葉ヲ煠キ茄ト爲シ食フ、共ニ味佳ナリ、又葉ヲ陰乾シテ、炭上ニ焚ケバ諸臭氣ヲ去ル、

〔廣益地錦抄五〕蘿藦　蔓草なり、冬は枯れて春宿根より生ズ、葉はそ長くあつく、兩對にして表にうす白く筋あり、根をほりて火にあぶり食す、甚甘し、葉切れば白く汁出る、赤腫にぬりて早くいたみを止ていゆ、葉莖を日に乾燒ば惡臭をけす也、花はみるにたらず、實はほそ長く三四寸計有、さきとがりてへちまのごとく、秋の末熟し、かれて二つにわれ、中より綿のごとく成物多く出、取て、敷物の綿としてやはらか也、しめり地に生、蘆原の中に多く生、

〔古事記上〕故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神、○下略

〔本草和名七草〕白兎藿、一名白葛、出雜要訣、一名白葛穀、一名兎藿、已上二名出釋藥性、唐、

〔百品考上〕白兎藿　一名白葛、一名牛皮消、和名イクマ

徐長卿

本草綱目、蘇恭曰、荊襄山谷今有之、蔓生、山南人謂之白葛、苗似蘿藦、葉圓厚、莖有白毛、與衆草異、用療毒有効、

救荒本草、牛皮消、生密縣野中、拖蔓而生、藤蔓長四五尺、葉似馬兜鈴葉寬大而薄、又似何首烏葉亦寬大、開白花、結小角兒、根類葛根而細小、皮黑肉白味苦、

蔓草ナリ、山野ニ自生ス、春宿根ヨリ苗ヲ出ス、蔓青シテ紫ヲ帶ブ、葉ハ兩對シテ形圓ク先尖レリ、蘿藦(ガガイモ)ニ似テ光ナク、白薇(フナバラ)ノ葉ノ如シ、六月葉間ニ細莖ヲ出スコト一二寸、小花聚リ開ク、五瓣淡黄色、徐長卿(スズサイコ)ノ花ニ似テ大ナリ、花後小莢ヲ結ブ、徐長卿ノ莢ニ似テ大ナリ、中ニ白絮アリ、莢自裂テ風ニ隨テ飛ブ、根ハ巨クシテ山藥ノ如シ、蝦夷產ハ根ノ狀チ和產ト稍異ナリ、藥店ニ多シ、解毒ノ効アリ、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕白兎藿 詳ナラズ

イケマニ充ル說ハ穩ナラズ、イケマハ救荒本草ノ牛皮消ナリ、

增、白兎藿ハ花戸ニテ鬼女蘭ト呼モノナリ、和州、播州、阿州、紀州等ノ深山ニ產ス、藤蔓最モ大ナリ、葉ノ形圓ニシテ厚ク末尖リ、深綠色ニ滑澤ナリ、大ナルモノハ六七寸ニ及ブ、花ハ蘿藦ニ似テ白色、實モ亦相似テ大ナリ、藤絲最強ク弓弦トナスベシ、京師ニ來ルモノハ高サ一尺許ニシテ蔓延セズ、即救荒本草ノ牛嬭菜ナリ、蘭山翁蘿藦(カガイモ)ノ一種トス、

〔草木育種後編下藥品〕牛皮消(いけま)救荒 松前にて生ずるもの名あり、處々山中に生ず、赤土に植て糞水を澆ぎてよし、又園中の木に纏はしめてもよし、是芄蘭(かゞいも)の類にて、根長大なるものなり、實は莢を結ぶ、內に絨あり、パンヤの代になすべし、

〔本草和名七草〕徐長卿楊玄操音眞卿反 一名鬼督郵本條 一名龍銜根、一名濟陽、已上出蘇敬注方 一名石下長卿、出釋藥性 和名比女加々美、

白薇

〔倭名類聚抄 草二十〕徐長卿　本草云、徐長卿、和名比女加加美

〔箋注倭名類聚抄 草十〕陶注云、今俗用徐長卿者、其根正如細辛、小短扁々爾、氣亦相似、唐本注云、葉似柳、兩葉相當、有光潤、所在川澤有之、根如細辛、微麁長、而有臊氣、蜀本圖經云、苗似小麥、兩葉相對、三月苗青、七月八月著子、似蘿藦子而小、九月苗黃、十月凋、時珍云、徐長卿人名也、常以此藥治邪病、人遂以名之、其說不知所據、恐是李氏臆度耳、

〔和爾雅 草木七〕徐長卿、一名石下長卿

〔重修本草綱目啓蒙 山草入〕徐長卿　フナワラ　ヤナギサイコ　リウヤウサイシン　スヾザイコ　コフナワラ　ハマヤナギ佐州　一名尖刀兒苗救荒本草　摩何草鄭樵本草

白薇モフナワラト云、故ニ此ヲ小フナワラト云テ別ツ、スヾザイコハ花ノツボミ鈴ニ似タル故ナリ、山野ノ陽地ニ多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、莖細クシテ堅ク、高サ一二尺、葉細長クシテ瞿麥ニ似タリ、綠色淺シ、兩葉相對ス、夏莖梢ニ枝ヲ分チ多ク花ヲ開ク、大サ三分許、五瓣ニシテ黃紫色ナリ、後角ヲ結ブ、長一寸餘圓長ニシテ尖リアリ、秋熟ス、蘿藦ノ角ニ似テ小シ、中ニ白絮アリ、絮ノ本ニ小クシテ扁タキ子アリ、根白クシテ細長ク、數多ク攢リ生ジ、細辛ノ如シ、乾セバ黃白色トナリ、牡丹皮ノ氣アリ、

又一種深山ニ大葉ノ徐長卿アリ、形狀尋常ノ者ニ同クシテ、高サ四五尺、葉ノ長サ五六寸許、花實モ大ナリ、南方暖國ニ產ス、

〔武江產物志 藥草〕鳳山ノ產　徐長卿アスカ山ニモ

〔佐渡志 物產五〕徐長卿　方言ハマヤナギ

〔新撰字鏡 草〕白薇衣嘉䓀、一云久留末、

〔本草和名 草入〕白薇、一名白幕、一名薇草、一名春草、一名骨美、一名白𦯶曹、出釋藥性一名白草、一名巖草、出雜要訣

和名美奈之古久佐、一名久呂女久佐、一名阿末奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕白薇　釋藥性云、白薇、和名美奈之古久佐、一云久呂久佐、一云阿末奈、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕本草和名云、白薇一名白幕、一名薇草、一名春草、一名骨美、一名白蜜曹、出釋藥性、按千金翼方、證類本草、骨美以上五名皆本草本條所載、則白蜜曹一名、出釋藥性也、而本草和名骨美下失著出典、源君誤謂諸名皆出釋藥性、非是、○中略 陶隱居云、根狀似牛膝而短小爾、圖經云、莖葉俱青、頗類柳葉、六七月開紅花、八月結實、根黃白色、

〔重修本草綱目啓蒙 入山草〕白微　フナワラ　ロクエンサウ　テツポウサウ　オホフナワラ　マルバノフナワラ　カキシホ阿州　一名知微老綱錄輯　竹葉細辛綱彙本草　百吉草同上

救荒本草ノ說ニ據リテ、ロクエンサウニ充ツ、山野向陽ノ地ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖高サ二三尺許、葉對生ス、柹葉ニ似テ小ク短シ、莖及葉ノ兩背共ニ白毛アリ、夏月梢葉ノ間ゴトニ花ヲ開ク、末ニテハ數花簇生シテ穗トナル、花ノ大サ四五分、五瓣ニシテ紫黑色、形徐長卿花ニ似テ大ナリ、花後角ヲ結ブ、長サ二寸許、內ニ白絮及ビ子アリ、又白花ノモノアリ、花葉ノ形狀同ジ、阿州ニテクサタチバナト云、淡州ニテシホカゼサウト云、共ニ根ハ細長ク數多ク簇生ス、又細葉ノ白微アリ、葉剪夏羅ニ似テ末尖ル、六七月ニ花ヲ開ク紫黑色、是ヲペンケイサウト云、又大葉ノ白微アリ、種樹家ニテツルガシハト云、柹葉ニ似テ長サ七八寸四葉對生ス、其上ハ細小葉兩對シテ蔓草トナル、其葉間ニ小紫花簇生ス、藥舖ニ白微ノ葉ヲ取リ、葉フナワラト名テ鬻ル、增淡州ニテシホカゼサウト云ハ、白前ノ混淆ナリ、一種黃花ノ者アリ、葉小ニシテ細葉ノ白微ニ同ジ、花モ小ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、○中略 白薇一斤四兩、　伊豆國十八種、○中略 白薇七斤、○下略

〔武江產物志 藥草〕品川邊ノ產　白薇　木原

〔本草和名 九草〕白前、一名石藍、一名嗽藥、已上二名出蘇敬注、和名乃加々牟、

〔倭名類聚抄 二十草〕白前　本草云、白前一名石藍、和名能加々美、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕千金翼方、證類本草中品有白前、不載一名、證類本草引唐本注云、俗名石藍、本草和名云、一名石藍、出蘇敬注、源君蓋依之而單引本草、非是、○中略 陶注云、似細辛而大、色白易折、蘇注云、葉似柳或似芫花、苗高尺許、生洲渚砂磧之上、根白、長於細辛、味甘、今用蔓生者、味苦非眞也、別本注云、根似牛膝白薇等、嘉謨曰、似牛膝粗長堅直易斷、白前也、似牛膝短小柔軟能彎者白薇也、

〔重修本草綱目啓蒙 山草入〕白前　スヾメノオコゲ、

白微ノ一種ナリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一科數莖高サ一尺餘、葉ハ形チ楕ニシテ忍冬葉ノ如ク對生ス、莖ト共ニ微毛アリ、四五月梢葉間ニ數花ヲ開ク、形白微ノ花ニ似テ小ク白色ナリ、根モ亦相似リ、一種黃花ナル者アリ、始ハ草本ナリ、後ハ蔓草トナル、一種始ヨリ蔓生ナル者アリ、又一種蔓生ニイヨカブラ、一名カラスノヒルブルト呼アリ、ツル長ク草木ヲ纏フ、葉兩對ス、形女靑葉ニ似テ長ク毛ナク臭氣ナシ、秋梢葉間ニ小キ枝又ヲ分チ花ヲ開ク、徐長卿ノ花ニ似テ小ク、紫黑色角モ亦相似タリ、又一種短葉ノ者アリ、又一種カモメブルト呼者アリ、池澤邊ニ多シ、イヨカヅラニ似テツル短シ、葉間ゴトニ只一花アリテ微シ大ナリ、是皆白前ノ類ナリ、又一種越州白前ハヤマホトヽギスナリ、古來白前ヲシラハギニ當ルハ穩ナラズ、シラハギハ一名ヤナギサウ、ヒメトラノオ、ヌマトラノオ、コヘマグサ、江州ヌマハギ、水邊ニ多アリ、春苗ヲ生ズ、高サ五六寸或ハ一二尺、千屈菜ノ葉ニ似テ大ク密ニ互生ス、圓莖フトクシテ赤シ、夏莖頭ニ二三寸ノ穗ヲ出シ、五瓣ノ白花ヲ攅生ス、珍珠菜ノ花ニ似テ小シ、後一分餘ノ圓實ヲ結ブ、秋ニ至テ紅色、是救荒本草ノ星宿菜ナリ、

增、一種紅花ノ者アリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、高二三尺、莖弱クシテ直立セズ、葉莖ニ兩兩相對ス、葉ノ形尋常ノモノヨリ微大ニシテ、長サ三寸、幅一尺五六分ニモ及ブ、深綠色ニシテ面背共ニ毛ナシ、三四月梢葉間ニ枝叉ヲ分チ、五瓣ニシテ淡紅色ノ花ヲ開ク、中ニ黃蕊アリ、花後實ヲ結バズ、根ハ白色ニシテ硬ク長シ、

〔古今要覽稿草木〕いよかづら。藍漆

いよかづら、一名からすのひるつるは、漢名を藍漆一名藍藤といふ、これ即唐本草にいはゆる白前の一種にして、その苗春宿根より生じて、蔓をなし、小樹をまとふ、葉の形頗る女靑に似て、稍長く兩々相對し、秋に至れば、その梢葉の間に小叉枝をわかちて、徐長卿に似たる五瓣の紫黑花を開き、後細長角を結ぶ、また徐長卿角の如し、其根は數條簇生し、狀細辛に似てやゝ粗にして且長し、扨藍漆は古より今に至て、其種何物たる事をしるものなかりしに、今以て藍藤となすものは、東醫寶鑑に、藍藤根處々有之、根如細辛、即今藍漆也、性溫味辛無毒、主上氣冷嗽、煮服之といへるは、本草拾遺に、藍藤生新羅國、根如細辛、味辛無毒、主冷氣咳嗽、煮汁服といへる、而說符節を合せたるが如くなるによりて也、されば藍漆藍藤は即一物なる事明かなりといへども、天平のむかし、出雲國意宇郡島根郡以下の五郡に產し、延喜の比に、伊勢尾張以下の二十八箇國より貢せし、その草木はいかなる物なるべきか、さらにわきまへざりしが、此比千金方藥注を讀みて、漸くに明白になりしなり、白前の一種いよかづらとなすものは、唐本草に白前葉似柳、或似芫花、苗高尺許、生洲渚沙磧之上、根長於細辛、味甘、俗以酒漬服、主上氣、不生近道、俗名石藍、又名嗽藥、今用蔓生者味苦非眞也、按に藍漆藍藤は既に味辛とみへたるに、こゝに蔓生のもの味苦といふ時は、其物の異なるやうにもおもはるれど、これは風土によりて、その味のたがひはある事にて、こゝには白前味甘とみえたれども、藥性論には白前味辛といへるたぐひ也、といへるによりて也、○中略

釋名

いよかづら(本草綱目啓蒙)按にかづらは卽葛蔓の義なれども、いよの義未だ詳ならず、からすのひるつる、(同上)按にひるの義いまだ詳ならず、藍漆、(出雲風土記、延喜式、東雅)按に藍漆は蓋しその葉青くして、光澤あるによりて、その名を得しなるべし、又唐本草に白前の一名を石藍といひしも、卽石藍漆の省呼にして、石は唐本草に、生沙磧上義なり、その磧は說文に、水階有石者とみへたるにて、その義は推はからる、藍蘭、(本草拾遺、東雅)名義字のごとし、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種(略)〇中 藍漆一斤、尾張國卌六種(略)〇中 藍漆五斤、近江國七十三種(略)〇中 白前一斤二兩、

〔本草和名 七 草〕旋花(仁諝音、似宣反、楊玄操音、似絹反、) 一名筋根花(陶景注云、根似筋、故以名之、) 一名金沸、一名美草、一名山薑、(出陶景注、)一名營旋、(蘇敬本草作營、出蘇敬注、) 一名鼓子花、(出拾遺、) 和名波也比止久佐、一名加末、

〔倭名類聚抄 二十 草〕旋花 本草云、旋花一名美草、(旋音似絹反、和名波也比止久佐、)

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕蘇云、此卽生平澤旋葍是也、其根似筋、故一名筋根、蜀本圖經云、旋葍花根也、蔓生葉似署預而多狹長、花紅白色、根無毛節、衍義云、旋花蔓生、今田野中甚多、最難鋤艾、治之亦生、世又謂之鼓子花、言其形肖也、四五月開花、亦有多葉者、其根寸截、置土中、頻灌溉方涉旬、苗已生、(略)〇中 岡村氏曰、說文舜艸也、楚謂之葍、秦謂之藑、蔓地連華、象形、从舛、舛亦聲、是卽本草旋花、則知本草借旋爲舜也、蘇敬謂之旋葍、蕭炳謂之葍旋、累呼二名也、又按爾雅注云、葍華有赤者爲藑、蓋赤花爲舜者、與赤玉爲瓊同、說文瓊下載琁字云、瓊或从旋省、蓋重文也、然則本草旋花卽舜花、舜瓊同音、義亦得通、故借瓊爲舜、又用瓊或字作琁花、以字形相近、譌爲旋也、是說亦通、

〔和爾雅 七 草木〕旋花(ヒルガホ、鼓子花、美草、續斷、筋根、天劍草、並同、)

〔倭訓栞 中編 二十一 比〕ひるがほ 鼓子花をいへり、野州越後仙臺の方言あめふり、越前にこうづる、

相州海邊にへびあさがほといふ、日中に咲もの也、又かつほう花といふ、近き御代の御製とぞ、ひるがほは源氏の内になかりけりはたの赤きは平家成べし、墨莊漫錄に、明宣德年、帝夢神語、雨打無聲鼓子花、帝口占、風吹不響鈴兒草、至今傳爲絕對、鈴兒草は沙參、俗につりがね草といへり、濱ひるがほは打碗花也といへり、大ひるがほは救急本草の藤長苗也といへり、讃岐の方言ちよく花といへり、白ひるがほあり、南京晝顏は小輪なり、

〔大和本草 八 蔓草 五〕鼓子花(ヒルガホ)　又旋花ト云、二種アリ、一種ハ葉ニ兩岐アリ、蔓長ク三四尺アリ、一種ハ葉圓ク蔓短シ、花ハ同、三才圖繪ニ、其根似筋、故一名筋、根蒸煮堪啖、甚甘美トイヘリ、花ハ牽牛花ニ似テ、淡紅色又白色アリ、晝シボマズ故ニ名ヅク、救荒本草葍子根モ亦與此同、曰採根蒸食之、或晒乾杵碎炊飯食亦好、或磨作麪作燒餅蒸食、根ヲ鹽ニ和シテ煮食フ、凶年ニハ貧民根ヲホリテ食シ飢ヲ助ク、葉モ亦可食、時珍云、一種千葉者色似粉紅牡丹、俗呼爲纏枝牡丹、此種本邦ニアル事ヲ不聞、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕旋花　鼓子花　旋葍　𦰢腸草　筋根　天劍草　美艸　續筋根　和名波比留久佐　○中略

按旋花盛于日午、而旦暮萎、故俗對以牽牛花稱朝顏、此名晝顏、比留加保

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕旋花　ハ○ヤ○ヒ○ト○グ○サ○和名　ヒ○ル○ガ○ホ○　ハ○タ○ケ○ア○サ○ガ○ホ○和州　ミ○ヽ○ダ○レ○グ○サ○江州　チ○ヨ○ク○パ○ナ○備前　カ○ツ○ホ○ウ○備後　ア○メ○フ○リ○バ○ナ○仙臺　一名掛金燈農圃六書　葍子根救荒本草　打碗花　兎兒苗　狗兒秧　燕葍根共ニ同上　牽枝牡丹盛京通志

原野ニ尤多シ、一タビ生ズル時ハ、細長キ白根地中ニ蔓延シテ治シ難ニ至ル、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ草木ニ纏繞ス、葉互生ス、形長シテ尖リ、本ニ小兩尖アリ、又短シテ本ニ四尖アル者アリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、辰後ニ開キ日夕ニ至テ萎ム、淡紅色ト白色トノ二品アリ、形牽牛花ニ似テ小シ、其蕚ハ短濶ノ兩葉コレヲ挾ム、牽牛花ノ蕚ノ細長ニシテ、五出ナルニ異ナリ、

牽牛子名稱

一種オホヒルガホ、葉長大花モ大ナリ、又淡紅色白色ノ二品アリ、讃州ニテチヨクパナト云フ、救荒本草ノ藤長苗一名旋菜ナリ、又一種海濱及江湖邊沙地ニ生ズルヲ、ハマヒルガホト云フ、一名カツポウパナ、アメフリバナ、ハマチバナ、ガウブル、雲州ヘピアサガホ、相州アフヒカヅラ、花戸葉形圓ニシテ厚ク、大サ一寸許、蔓ハ長カラズシテ、花ハ尋常ノ大サナリ、

〔武江產物志 藥草〕本所邊　藤長苗(カラヒルガホ)　隨地有之類　旋花(ヒルガホ)

〔本草和名 草十一〕牽牛子 陶景注、此出於田舍、凡人取之牽牛易藥、故以名之、和名阿佐加保、

〔倭名類聚抄 草二十〕牽牛子　陶隱居本草注云、牽牛子、和名阿佐加保此出於田舍、凡人取之牽牛易藥、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕陶注又云、作藤生、花狀如扁豆黃色、子如小房、實黑色、形如梂子核、蘇注云、此花似旋葍花作碧色、又不黃、不似扁豆、按旋葍花、即鼓子花、詳見旋花條、開寶本草云、此藥蔓生、花如鼓子花而稍大、作碧色、子有黃殼、作小房、實黑稍類蕎麥、蜀本圖經云、苗蔓生、花碧色、子如蕎麥、三稜黑色、圖經云、二月種子、三月生苗、作藤蔓遶籬牆、高者或三二丈、其葉青、有三尖角、七月生花、微紅帶碧色、似鼓子花而大、八月結實、外有白皮裹作毬、每毬內有子四五枚、如蕎麥大、有三稜、有黑白二種、

〔下學集 草木 下〕牽牛(アサガホ)　蕣(アサガホ)僧圓明稱也

〔書言字考節用集 生植 六〕牽牛花(アサガホ)草金鈴、陶耳草同、本草、花如鼓子花碧色、日出開、日西萎、　盆甑草(同)酉陽雜俎　朝顏(同)俗字　槿花(同)本朝俗、以槿花、日及、蕣等字、爲二

牽牛華、蕣異矣、宜合考木槿下、

〔塵袋 三〕一槿花ハアサガホノ花歟、別ノ物歟、

アサガホニ、アマタノ名アリ、明花ト名ケ、日及トナヅケ、王蕣トナヅケ、赤菫トナヅケ、又ハ胡菌ト云フ、又蕣ト云フ、但シアサガホトムクゲトハ、アシタニサキテ、夕ニオツル物也、是故ニ二ノモノノ名ミナマギレテ、カロヒモテリ、潘岳ガ胡菌ノ賦ト云フニハ、ムクゲヲ思ヒテ云ヘルニヤ、彼賦

曰、胡菌者世謂之木槿、或謂之日及、郭璞曰、似李樹其朝生夕殞可食、或呼曰日及ト云云、スモヽ、ナツメニニタリト云ールニテシリヌ、木ノスガタナリトハ、ヨノツチノアサガホノツルニハ非ズトキコユ、此邊ノムクゲハスモヽニニタリトモオボエズ、所ニシタガフニヤ、ヒサゴノ花ヲ夕顏ト云フニ對シテ、牽牛子ノツルヲバ朝顏ト云ナラハセリ、今ハ又ムクゲニ通用シテ、槿花トモ云フナルベシ、

〔松の落葉二〕あさがほ

あさがほとは、あしたにさくかは花を、なべていへるにて、ひとつの草の名にはあらず、そのよしつぎ〳〵にときあかすべし、まづ新撰字鏡に桔梗、加良久波又云阿佐加保とあるもその證なり、からくはといふが正しき名にて、あしたにさくうつくしき花なれば、あさがほともいへるなり、今の人牽牛子をのみあさがほとおもへるはたがへり、〇中略此草は野山におのづから生ることなきは、から國よりたねのわたり來て、ひろごれるにぞあらん、其わたり來つるは、今の京のはじめのころなるべし、さて朝がほといふこゝろを、くはしくいはんとす、いにしへかほ花といひしは、かほのすぐれてうつくしきはなの事なり、かほといふは、今の世にかほかたちといふ意なり、かほかたちのすぐれたる人を、中ごろには、かたち人といひき、それと同じこゝろなり、されば何にまれ、朝さきてかほのすぐれたる花をめでゝ、あさがほといひはやしたるにて、花の名にはあらず、〇中略牽牛子のわたり來ては、これもあしたにうつくしき花さけばしかいひ、槿花もさやうなれば、あさがほとはいへるなり、〇下略

牽牛子種類

〔大和本草六〕牽牛子　朝間花容美シク、見晛則萎故朝顏ト號ク、盆ニ植テ室下ニヲケバ不早萎、花ニ淡青深青紫色白色アリ、本草曰、有毒雄烈濃人元氣毒藥ナリ勿妄用、黑。牽。牛子。ハ花ノ深青ナルヲ可用、油ヲトリテ燈ニ點ス可也、〇中略小。牽。牛。花。アリ、蔓ノ本二葉ヨリ花早ク開ク、其色紺白碧紫

數種アリ、晝ニ至テ不萎、花ノ大サハ如常、好種ナリ可栽賞、

〔大和本草 七蔓草〕東蒲塞赤牛花 蔓草也、寛永年中長崎ニ來ル、東蒲塞又甘字智ト云、眞臘國ナリ、葉ハ草決明、又豌豆ニ似テ甚細也、七八月開細紅花、形似丁香可愛ス、好事ノ者盆ニウヘ籬ニ延シム、根ハ當年枯ル實ヲマクベシ、

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕牽牛子 黑丑 白丑 盆甑草 草金鈴 狗耳草 和名阿佐加保〇中略

按牽牛花寅卯辰三時盛、纔向日光則萎再不開、而餘蕾開花、乃一莖數十花、逐日開不經旬皆結實、其花有深碧淺碧純白淺紅色四種、而紅者希也、

一種有小牽牛花、高三四寸、末延蔓不倚架、二葉而開花、故名二葉牽牛花、亦小美也、蓋此生瘠地不能長者也、復種其子乃如之、

有朝顏晝顏夕顏之三品、朝顏牽牛花也晝顏旋花也夕顏瓠之花皆以其花盛時稱之、

〔物類品隲 三草〕牽牛子 和名アサガホ、黑白二種アリ、

黑丑 黑牽牛子ナリ、花色數十種アリ、黑白江南花和名シボリアサガホ、花鏡曰、近又有異種、一本上開二花者、俗因名之曰黑白江南花、重瓣ノモノアリ、奇品ナリ、不結實、其餘近世花色數十ニ及ブ、藥用ニハ碧花ノモノヲ用ベシ、

白丑 白牽牛子ナリ、是牽牛子ノ花實皆白キモノナリ、東璧天茄子ヲ白丑トスルハ非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十四蔓草〕牽牛子 アサガホ和名鈔 ケニゴシ古今集 一名假君子秘傳花鏡 三白草村家

カ

古アサガホト云ハ木槿ナリ、故ニ萬葉集秋七種歌ニアサガホト云フハ牽牛ニアラズ、牽牛ハ人家ニ多ク種ユ、花青碧色ノ者ヲ黑丑ト云、又黑牽牛トモ云フ、又白色ノモノヲ白丑ト云、又白牽牛トモ云ナリ、葉ノ形皆三尖ニシテ互生シ微毛アリ、品類尤多シ、花鼓子ノ形ヲナシテ五尖アル者ハ

尋常ノモノナリ、又五瓣筒マデ切レタルモノアリ、又花頭五尖ナルモノヲ桔梗ザキト云、葉モ亦五尖ナリ、其圓瓣ナル者ヲ梅ザキト云フ、尋常ノ花ノ形ニシテ、中ニ小瓣アルモノヲ孔雀ト云フ、紫アリ、淡紫アリ、紅アリ、淺紅アリ、間色ナルモノアリ、碧白相間ル者ヲ黒白江南花(秘傳花鏡)ト云、俗ニマツヤマアサガホト云、又藍色ニシテ紅點ナルモノアリ、又千葉ニシテ間色ナルモノアリ、瓣多シテ重シ、故ニ正開スル時ハ莖自ラ折テ實ヲ結ビ難シ、

集解、時珍曰、白者人多種之云云、此草ハハリアサガホナリ、一名ヲウジナスビ、トウナスビ、マンバラス、或ハモンパラストモ云フ、寛延ノ始薩州ノ商人此種ヲ携ヘ來ル、今ハ諸州ニ多ク栽ユ、春月種ヲ下スコト牽牛子ノ如クス、葉ハ何首烏葉ノ如ニシテ光アリ、藤ニ桑刺アリ人ヲ傷ラズ、花牽牛花ニ同クシテ小ク淡紫色、筒ニ近シテ色深シ、申ノ時開テ戌ノ時萎ム、故ニ今俗ユウガホト呼ブ、其蔕肥テ柔刺アリ、甚茄ノ蔕ニ似タリ、上ニ房ヲ結テ牛奶茄ノ形ノ如シ、熟スル時ハ白色微褐牽牛子殼ノ如シ、内ニ子アリ、子形亦同シテ微大白色、其嫩ナル者ハ食フベシ、コレ救荒本草ニ載スル所ノ丁香茄兒一名天茄兒ナリ、白牽牛ニ非ズ、時珍ノ說誤レリ、白牽牛ハ白花ノ牽牛ヲ以テ眞トスベシ、

一種ヒラザクアサガホト云者アリ、莖ノ形覇王樹ノ如ニシテ毛茸アリ、厚サ一分餘、濶サ三四寸ニ及ブ、花ノ形尋常ノモノニ同フシテ、色ニ數種アリ、葉ノ形三尖アリテ莖ニ互生ス、唯梢葉ハ女青葉ノ如ク長クシテ、左右ニ尖リナシ、又一種矮生ノ者アリ、高サ四五寸ニ過ギズ、莖硬クシテ蔓延セズ、コレヲ木アサガホ一名二葉アサガホト云フ、

〔草木六部耕種法十牽花〕牽牛ハ近來大ニ用ヒラル、ヲ以テ、種々ノ珍花多ク世ニ現レ、其品二百七十餘種アルニ至レリ、其中ニ於テ名ノ最高キモノハ、亂獅子(花切レテ瓣ノ數多ナル者ヲ云ナリ)孔雀(花筒ヨリ細長キ花瓣ノ、長ク延出タル者ヲ云フ、)重樓(花筒ヨリ長キ臺抽テ、其端ニ菊ノ如キ、花開クモノヲ云フ、)宇津河(葉小サクシテ、厚ク縮メル者ヲ云フ、)松島(葉ノ黄色ニテ、青キ斑ノ有ル者ヲ云フ、)

石下〈數多ノ蘂皆青ア、一箇ノ圓キ大蘂ト成テ、柱ノ如ク花ノ多ク開タル者ヲ云フナリ、〉縮緬〈花ノ細カニ縮ムルヲ云フ〉月暈〈花白クシテ、筒中紅ナルヲ云フ、〉濱千鳥〈其葉小クシテ、花モ小ク、花開ノ者ヲ云フ、〉柳葉〈葉細長クシテ、柳ノ葉ノ如キ者ナリ、〉鳳蕣〈其葉ノ絲瓜ノ葉ニ似タル者ヲ云フ〉等ナリ、牽牛ノ花ハ琉璃色ト白ハ古ヨリノ常色ナレドモ、今ハ淡紅、深紅、淡紫、深紫、淡藍、流黃等モ有テ、且又間道モ粽纈モ種々色ノ間錯タル者アリ、花ノ形狀モ大小長短アリ、瓣切タルアリ、切ズシテ縮タル有リ、八重モ有テ變異多出テ、其名目ヲ記スベカラズ、總テ其筒ノ轉ジタルヲ茶蓋ト名ク、

〔草木育種〈下〉〕牽牛〈本草〉 藥に入には黑白の二種を用、李氏本草綱目に丁香茄〈救荒本草〉を以て白牽牛とするは誤なるべし、白牽牛は常のあさがほの中にて、種の色白ものなり、近頃江戸大坂にて、多植るゆへ種類甚多、悉集に暇あらず、花の色は碧色は常品なり、紫淡黃紅、又淺青に紺の竪筋あるものあり、又白して筒の紅きあり、又花瓣切たるあり、又切ずして縮たるあり、又花切て瓣多ものを亂獅子と名く、又花の筒より細長き花瓣出るを孔雀と名く、又八重あり、筒を轉ずるものを茶蓋と云、又葉の形變ものあり、葉小く厚縮たるを宇津川と名く、又葉黃綠色にして綠斑あるものを松島と名く、又葉細長して柳の如きものあり、又絲瓜の葉に似たるものあり、又數多の莖皆寄著て繁屈くなり、枝なくして花多開ものあり、是は石下なり、その餘二百餘種あり、

〔嬉遊笑覽〈十二草木〉〕安永七八年、さくら草、形のめづらしきがはやり、權家の贈りものとす、數百種に及ぶ、これは下谷和泉橋通りに、谷七左衞門といふ大番與力あり、其人の老母、花を植作る事を好み、櫻草を多く植作れり、〈中略〉○其後朝がほを多く作り、さまざまの花出來しかば、この度は六枚折の小屛風を蘆簀にて作り、細き青竹處々節ある處にて、竹の花生のやうに口を切て、節毎に水を貯へ、朝がほの蔓の先葉一寸ちぎりたると、花一りんとを、花生の口ごとに插み、これを件の屛風にかけならべて、屛風はたゞまるゝやうに、綠を厚く作るなり、是も人に借して見せたり、この屛風はあまた有き、文化五六年の事なりし、一とせ谷氏大坂に在番したる頃は、彼地へ多く牽牛子を

送りたり、

〔桑韓使記 備下州〕照任曰、備中ノ松山ト云フ所ニ、此頃珍シキ牽牛花ヲ生ゼリ、花葉ノ形ハ古來ヨリ有リ來ルニ同ジクシテ、丈長カラズ、三四尺位ヲ限トス、花ノ色白ト紺ト咲分ケ、或ハ白地ニ紺ノ細カナル星入リ、又紺ニ白キ細キ筋入ルモアリ、其年ノ子ニテ又生ジ花咲ク、近比京師ニテ松山。アサガホト云フ、

〔玄同放言 二〕山牡丹

四にいふ、この兩三年來の刻本、牽牛品、及朝顏通を閲するに、異樣雜色、數十種を載せたり、しかれども黑牽牛はさらなり、黃花も亦稀なり、好むものゝ云、今年眞黃處々に出づ、これ未曾有の奇品なりといへり、按するに、元祿三年の印本、俳諧物見車の卷端に、朝顏に黃あり白きありといふ膽句を出だして、當時の俳諧師似船、晚山、言水等數人に、上の五文字をおかせたるに、似船は末の世や云々、常牧は僧いかに云々、我黑は時世かな云々、晚山は蝕の夜や云々、と五文字を冠らせたり、又如泉は、當分は五もじ置きかね申し候と辭し、言水は朝顏に黃なるは稀なりとのみいひて、五文字を置かず、方山は返答もせざりしよしを、その名の上に注したり、この事は北條團水が牘牛(コトヒウシ)に飽まで辨じたれども、こゝに要なければ贅せず、よりて思ふに、天和貞享のころ、牽牛花の流行せしことあるなるべし、もししからずば、黃花は今も稀なるに、當初あるべうもあらず、あらずば黃あり白ありといふべからず、

〔武江產物志 遊觀〕牽牛花(あさがほ) 下谷 本所　花形の變りは 孔雀 采咲 亂獅子 八重孔雀 梅咲 孀黃 桔梗咲 牡丹咲 ちやみ 龍膽咲 茶屋 吹切 咲 眉間尺 糸咲 卷絹 風折 薩摩紺 銀咲 絞り類 いぎりす　葉形の變りは 孔雀 鳥 龍 柳葉 の 龍の唐糸 龍田川 鳳凰葉 葵葉 柿葉 黃葉 宇津松川 いさは 圓葉 紅葉類 ば 南天葉 通玄仙 七福神 破柳 芙蓉は 春葉 山鳥 金剛獅子 石花 銀龍 木立 鳳葉

〔農業全書 十 藥種之類〕牽牛子

けんごし、黑白の二色あり、子の白きが、直段少高し、是又屋敷廻り餘地あらばうゆべし、かきには
はせ、蔓にもまとはせ、其外他の物のさのみ蔓長せざる所にうへ置て、竹を立はゝすべし、土地の
費へさのみなく、長くはひまとひ、子多くなる物なり、子を二月蒔置て、三月移しうゆるもよし、か
きのもとなどにうへ付にして、少糞灰などかけ置べし、秋の末子熟し、蔓も枯て後下に筵など敷、
垣をそしたをし打て取べし、又一々つみ取もよし、多少により所によるべし、藥屋に賣て利なき
物にあらず、又子を多く取、油をしめ取もよし、

〔草木六部耕種法十二〕凡牽牛ヲ作ルニハ、先其種子ヲ能ク撰ビ、苗代ヲ造テ苗ヲ爲立ベシ、苗代ハ赤土ニ黑土小便灰等ヲ能ク和交ヘ、二月上旬ヨリ春分頃マデニ種子ヲ下シ、其培養ノ法ハ、悉ク藍苗ヲ爲立ル如クシテ、八十八夜過テ此ヲ移シ植ベシ、植地ハ花壇ニテモ盆栽ニテモ、牡丹ヲ植ル心持ヲ少シ含テ植付置キ、時々糞養水ヲ薄クシテ灑ギ、盆栽ハ殊ニ此ヲ乾燥セシムルコト無カルベシ、

〔朝顏通下〕附錄土拵方

植木しめの隨分赤みあるあらき土に、砂三分を和して、立冬より春分にいたる迄、雨のあたらざる所に圍ひ置、其後乾し、ほど能通し用ゆ、或はマイゴミ赤川同じ、〇中略

糞入方

芽出葉生ひ蔓のびて、既に蕾あらはるゝ節糞を入、又半月を經て糞を入、十日廿日目と次第に糞を見合て入べし、尤大抵のものは直入よりは、糞水をかけるべし、極日當りを吉とす、又斑のにぶきものは糞を和へて能日に當べし、大暑後の日は晝までの日を好で、晝後の日をいむべし、〇中略

大輪仕樣

土五合入鉢によし糞土を入、たね四五りうを眞中へまき、程よきを殘して、其餘を去り、蕾あらは

る、節、壹升ほど入鉢に、こへ土に干鰯等をまじへ鉢の底にしき、その所へ其儘にうつし、外を右之屎土の砂がちなるを、やわらかに入、扨其鉢を土の中にうづむか、又は三升ばかり入鉢等にうづむべし、花三りん又四りんつけて、其餘の芽出次第にとり、前日夕方につぼみ臺より末にいたり、二寸六分あれば、翌日四寸經りの花ひらくとしるべし、葉小にして花大なるを好とす、○下略

〔剪花翁傳三五月開花〕蕣　花種々近世異花數百品枚擧べからず、よて育方略之、開花五月上旬より漸々咲て、七八月にもおよぶ也、升水の方切口を沸湯に入て後、水器に扦入おくべし、されどいまだ盡ず、酢煮して後冷水に扦置べし、慥に升水る也、又方龍骨を以よく煮るもよし、又午後より夕方までに花を開かせんには、前夜に、蕾の蔓を切、さて葱（ねぎ）の末を蕾をいる、許に切て、蕾に帽せ、よく詰置、重石を結て井中に深く扦入おき、翌日備用のとき帽を脱して插花にすべし、

〔武江年表七〕文化十二年乙亥、今年より肇り朝顔の異品を玩ぶ事行、文政の始迄、都下の貴賤、園へ栽へ、盆に移して鑑會を設く、

〔甲子夜話十四〕近クハ牽牛花ノ變甚フシテ、花色ノミナラズ、葉ノ形狀モ變ジテ、柿葉、柳葉、楓葉、葵葉ナド、唱へ、イカニモ其呼所ノ如キ葉ナリ、花ノ品類ヲ賞スルハ聞ヘタリ、葉形ノ變ゼル何オモシロカルベキヤ、人ノ好尙モカク迄ネヂケタルコトヨト、興醒ルバカリナリ、又一變シテ、花ノ大輪ヲ賞スルコト流行出シ、花ノ指渡シ數寸ニ及ブ、其種法ヲ聞クニ、肥土ヲ臘月ヨリ製シ、牀下ニ藏メ、春雨ニアテ、盆ニ上セ種ヲ下シ、又移植シテ培養シ、蔓ノ延ザルヤウニ先ヲ留メ、葉モ多クテハ精力洩ル迚摘去リ、花數モ幾ツケテ、只一花ノ輪ノ太キナルヲ互ニ戰ハス、其盆栽ノ形容、臺生トモ見ヘズ、譬ヘバ鳥ノ翎毛ヲムシリ取シガ如ク、誠ニ見苦シク見ルニ堪ザル計ナリ、菊牡丹ナドハ、盛モ久シケレバ、花ノ見所モ長クアリ、牽牛花ノ朝ニ開キ、晝ハ萎果ル物ナルヲ、頃刻ノ觀ニ供スル迚、半年餘ノ人力ヲ費スハ、餘リトイヘバ了簡モナキ、淺ハカナル娛樂ニテ、イカニモ

今ノ世ノ人心相應ノ玩物ヿト思ヘバ、長大息シテ其花モ見ラレヌヤウニ覺ユ、此巧思ト人力トヲ以テ、五穀ノ中何ナリト、新タニ作リ出サバ、後世民用ノ助トナル嘉穀ノ別種モ、生ズベキニヤ、

〔延喜式 典藥 三十七〕雜給料
四味理仲丸廿劑、○中略 牽牛子丸五劑所須、○中略 牽牛子三斤十三兩、

〔廣益地錦抄 四〕牽牛子　あさがほの實也、はなに白、紫、淺黄、紅、櫻色あり、藥種にはむらさき花さくを用ゆ、

〔四方の硯 月〕いつの時にか有けん、西國に經濟の志ある人、國の窮乏をなげき、國守に富國の術をすゝめて、堤に水蠟樹と唐牽牛子とを、多く植しめけるが、牽牛子は油に製すとなり、この國それよりして、大富強國となりぬといふ、管子の富に通せる人なるべし、

〔今昔物語 二十八〕越前守爲盛付六衞府官人語第五
今昔、藤原ノ爲盛ノ朝臣ト云フ人有ケリ、○中略 早ウ此ノ爲盛ノ朝臣ガ謀ケル樣ハ、此ク熱キ日平張ノ下ニ、三時四時炮セテ後ニ呼入レテ、喉乾タル時ニ、李、鹽辛キ魚共ヲ肴ニテ、空腹ニ吉タツヽシリ入サセテ、酸キ酒ノ濁タルニ、牽牛子ヲ濃ク摺入レテ呑セタルハ、其ノ奴原ハ不痢デハ有ナムヤト思テ、謀タリケル也ケリ、

〔福富草紙〕此女は七條のとね翁の妻にてさぶらふ、あやしのへひりの秀武、きなにはかされ、朝良の實をすきたれば、そののちかくひ候へば、むをみさせ給くすりを給べき也、ひでたけと申すやつのわざにてさぶらふ翁をすかして、朝良のみを十つぶいりすかせてさぶらへば、其後はらたれとけて、はざうのみづをいだすやうにつかまつれば、としおいたるものゝ、かくさぶらへば、なにをたのみ、さながらふべきぞ、うねべどの、たすけさせおはしませ、朝良のみは、ひとつだに腹とくる物なるを、さてすきてんには、よき事ありなんや、さりともこの藥をすきては、けしうはあら

じ、これをすかすべきなり、

〔萬葉集 秋雜歌 八〕山上臣憶良詠秋野花二首

秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、

芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝皃之花、

〔萬葉集 秋相聞 十〕寄花

展轉、戀者死友、灼然、色庭不出、朝容皃之花、

〔箋注倭名類聚抄 草 十〕岡村氏曰、萬葉集云、山上臣憶良詠秋野花二首、秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、其一 芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝皃之花、其二 是朝皃之野生可知也、而牽牛子漢種、無野生、或訓木槿爲阿佐加保、木槿亦漢種、無野生、則萬葉集所詠朝皃非牽牛花、又非木槿、也、竊按古之朝皃、蓋謂旋花也、旋花所在有之、是萬葉集所以詠阿佐加保於野花中也、萬葉集詠花歌云、朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮、亦詠旋花、雖其名曰朝皃、然日晩猶不衰也、今本載在秋歌中者、傳寫錯亂也、後牽牛子自漢土至、當時未有和名、故古今集物名謂之計爾呉之、而其花甚似旋花、故謂牽牛又爲阿佐加保、牽牛開花丞於旋花殆一時、其花大而美倍於旋花、遂以專朝皃之名、於是俗名旋花爲晝皃、以避牽牛花之阿佐加保、蓋以旋花至日晩猶不衰、不與牽牛花之迅日影則萎同也、按旋花本名舜、見說文、俗從艸作蕣、以別堯舜字、木槿一名蕣、亦見說文、或假舜爲蕣、毛詩顏如舜華、傳舜木槿也、是也、然則旋花之舜或可作蕣、木槿之蕣或可作舜、而木槿亦朝華暮落者、則謂木槿爲朝皃者、蓋因舜蕣通作與朝花暮落而誤也、是亦可以證旋花爲朝皃也、

〔古今和歌集 物名 十〕けにごし　　やたべの名實

うちつけにこしとや花の色をみんおく白露のそむるばかりを

〔備字例 附錄〕けにごし

けにごしは牽牛子なり、牽字は、韻鏡二十三轉先韻にて舌内聲なり、牛は、三十七轉尤韻の字にて、音ギユウ、呉音グウなり、然るにゴといふ音に用るは、萬葉集に鯉変を牛変と書るは、ウ韻を略きてグと呼なり、又普通に鏤樓をレユロウと唱ふる例と同じことにて、また其グを通音のゴに轉じたるなるべし、牛王、牛頭、牛膝等の類ひ准らへ知べし、太田氏云、尤虞通用ニテ、牛ノ呉音ギユナリ、其ギユノ切ゲトナレリ云々、又云、牛ノ呉音ゴハ、富ニホ、數ニコノ音響也といへり、

〔拾遺和歌集物名七〕あさがほ　よみ人しらず

我やどの花のはにのみぬるてふのいかなるあさかほかよりはくる

けにごし

わすれにし人のさらにも戀しきかむけにこしとはおもふ物かは

〔拾遺和歌集雜二十〕朝がほの花を、人の許につかはすとて、　藤原道信朝臣

あさがほを何はかなしとおもひけむ人をも花はさこそみるらめ

〔源氏物語四十九寄生〕つねよりもやがてまどろまず、あかし給へるあしたに、霧のまがきより、花の色色おもしろく見えわたる中に、あさがほのはかなげにてまじりたるを、猶ことにめとまるこゝちし給、あくるまさきてとか、つねなき世にもなずらふるが、こゝろぐるしきなめりかし、かうしもあけながら、いとかりそめにうちふしつゝ、あかし給へば、此花のひらくる程をも、たゞひとりのみぞみ給ける、人めして北の院にまいらんに、ことごとしからぬ車さし出させよとの給、〇中略朝がほをひきよせ給ふに、つゆいたうこぼる、

けさのまの色にやめでんをく露のきえぬにかゝる花とみるみる、はかなどひとりごちて、をりても給へり、

〔源氏物語湖月抄四十九寄生〕細流抄〇無槿は常なき花の色なれや明るまさきてうつろひにけり、

甘藷名稱

〔赤染衛門集〕あさがほのはなをとくみんとて、つま戸をあけたれば、露いみじうおきたるを、

朝がほのとくゆかしさにおきたれば われよりさきにつゆはゐにけり

〔梅花無盡藏 六雜文〕江戸城留別碧牽牛花詩序

余慕司馬公花庵之碧牽牛、就武陵寓處之東西籬、插數百莖、煽煖捧露、長享戊申仲秋、棄地而去、斯花如知、而曉碧蕭條映分袂、無端爲慰花、作留別之詩、蓋攀東坡留別牡丹之例也、巨福之聖緒文翰墨之志、九牛毛中塞轎之一角也、還來移几案於武之江城、雖云騷屑之時、與余往還無虛日、投片紙需一辭、不追製旅襃、刻可得舒嘯乎、漫寫牽牛之一蕚、索萬分之一、有今時之王摩詰則碧尤之體度、請畫爲圖、

〔駿臺雜話 二〕朝がほの花一時

此時松永某とて、鈴木氏が道學の友ありけり、其人朝がほの歌とてかたりしが、自からよめる歌にや、又は鈴木氏がよめるにや、とかく兩人の内にてあるべし、

あさがほの花一ときも千とせ經る松にかはらぬこゝろともがな、此歌も意味ふかきやうにおぼへ侍る、昔よりあさがほをよめる歌おほけれども、大かた朝がほのあだなる事をいひて、秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらするを趣向とする外は見へず、〇中略今松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし、各いかゞおもひ給へる、翁〇室鳩巢は朝に道を聞て夕に死するも可なりと、いへる意とこそ思ひ侍れ、〇下略

〔和爾雅 七蓏菜〕甘藷リウキウイモ朱薯、紅山藥並同、蕃薯アカイモ蕃藷リウキウイモ見于閩書蕃藷アカイモ

〔書言字考節用集 六生植〕琉球薯リウキウイモ本名蕃藷　蕃藷アカイモ

〔物類稱呼 三生植〕甘藷りうきういも　畿内にてりうきういもと云、東國にてさつまいもといふ、肥前にてからいもといふ、享保年中薩州より來る、味ひ美にして其性よろし、又長崎にてりうきういも、てうせんいもと稱する物有、是は別種にして蕃藷なり、

〔大和本草 五 菜蔬〕蕃藷 閩書曰、萬暦中、閩人得之外國、瘠土砂礫之地、皆可得種、蔓生如瓜蔞黄精山藥之屬、而潤澤可食、或煮或磨爲粉、其根如山藥、皮薄而朱、今案に、此物長崎ニ多シ、薬トシテ食ス、味甚甘シ、寒ヲヲソル故、他邦ノ寒土ニウフレバ消ユ、暖地ニウフベシ、甚繁茂ス、葉畔ニ白蘞トナウルハ蕃藷多シ、辨別スベシ、不可用、

甘藷 蕃藷ノ類ニテ別ナリ、俗ニツクチイモト訓ズ誤ナリ、ツクチイモハ佛掌薯也、甘藷ハ蔓草也、葉ハ蕃藷ト離栾ノ葉ニ似タリ、葉ノ形カクノ如シ、(略)○圖 根ハ瓜樓根ニ似タリ、根下ニモ短キ蔓アリ、根ノ餘ノヒゲナリ、又鷄卵ニ似テ大キナリ、鴨卵ノゴトク小ナルモアリ、大ナルハ重一斤アリ、長キアリ、圓キアリ、夏月蔓長ク生ズ、其蔓ノ節地ニツクバ根生ズ、故ニ蔓ヲ切テ植レバ根生ジテ活ス、貧民朝夕飯ニ充ツ、或蒸テホシ、細末シテ餻トシ糧トス、來年ニ至リ久ニ堪ヘ、民食ヲ助ケ、飢饉ヲ救フ、其利益大ナリ、是其功能ノ第一ナリ、

〔大和本草附錄 一 草〕蕃藷 閩海而南有呂宋國、國度海而西爲西洋、呂宋其國有朱藷、被野連山、而是不待種植、其初入吾國時、値吾國饑、得是而人足一歳、其種也不與五穀爭地、凡瘠鹵沙岡皆可以長、糞治之則加大、泉人鬻之斤不直一錢、二斤而可飽矣、(是與甘藷不同、長崎多、長崎ニテハアカイモト云、)

〔五雜俎 十一 物〕百穀之外有可以當穀者芋也、薯蕷也、而閩中有番薯、似山藥而肥白過之、種沙地中、易生、而極蕃衍、饑饉之歳、民多賴以全活、此物北方亦可種也、(按諸書草木狀、有甘藷、形似薯蕷、實大如甌、皮紫肉白、可蒸食之、想卽番薯、未可知)也、

〔茅窻漫錄 上〕甘藷
甘藷さつまいもと訓ずるは、最初薩摩へ來す故なり、琉球いもといふは、彼土に多く作る故なり、元來は蠻種にて、和漢ともになき者なりしが、今は和漢とも甚多し、白赤黄の品種ありて、赤き者は閩書に、蕃薯根如山藥、皮薄而朱とあり、貝原翁は赤きを赤芋とし、甘藷を常のさつま芋とし、而

種分別せられど、實は兩種一物なり、

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

三月

一甘藷　　　松平右近將監

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕甘藷　リウキウイモ　サツマイモ　シマイモ讃州　トウイモ肥前

カライモ　ハチリ共同上○中略

本薩州ヨリ來ル、今ハ東國ニモ多ク種ユ、土地ヲ撰バズ、砂礫ニモ繁殖ス、種ル法ハ農業全書ニ詳ナリ、蔓生葉ハ梓葉(アカメガシワ)ニ似テ鋸齒ナクシテ一尖、或ハ三尖アリ、質厚クシテ深綠色、新葉ハ紫色ヲ帶ブ、皆互生ス、花ハ鼓子花(ヒルガホ)ニ似テ大ナリ、色モ異ナラズ、其根皮色白ク、或ハ微紅、生ナル時ハ肉白シ、煮ル時ハ黃色トナル、是ヲリウキウイモト呼ブ、肥前ニテハ、シロイモト云フ、甘藷中ノ下品ナリ、上品ノ者ハ薩州ニアリ、方言ボケ、一名アカバチリ、肥前サツマバチリ同上此品甚寒氣ヲ畏ル、故ニ東國ニテ蒔ルコトアタハズ、其皮薄シテ紫赤色、煮ル時ハソノ肉色白クシテ黃ナラズ、味沙糖ノ如シ、又肥前ニモチバチリ、サクラバチリアリ、皆上品ナリ、唐山ニテ甘藷ノ至テ大ナルモノヲ、玉枕藷、群芳譜三家藷華夷花木考ト云フ、

增、○中略蘭山翁シロイモヲ甘藷中ノ下品トシ、アカバチリ、一名アカイモヲ上品トスルハ誤ナリ、シロイモハ緊實ニシテ味甜美、最上品ナリ、アカイモハ鬆疎ニシテ緊實ナラズ、味甚ダ淡シ、甘藷中ノ下品ナリ、但アカイモハ、收成多クシテ民用ニ益アルノミ、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

赤芋琉球芋　二種一類にて、赤芋はすぐれて甘味なり、赤芋は薄皮は紅色にて、內は甚白し、琉球芋は內外黃色、甘味うすし、田家多く種て糧として、凶年の飢を助け、脾胃を補ふ、利益尤多し、根本

甘藷傳來

長崎には薩摩より傳へて、今は九州に流布す、但寒地には榮へがたし、唐人は酒にも造り、又水飛し粉を取て餠にしたるは、上品の物なり、

〔浪花の風〕薩摩芋は殊に多し、靑みあるものと、赤みあるものとの二種にて、靑みあるものは、俗に水芋。と唱ふる種なり、水芋の方都て甘みは强し、

〔大和本草五藥類〕甘藷○中略　此種元祿ノ末、琉球ヨリ薩州ニ渡ル、煖土ニ宜シ、寒地ニ植レバ生ゼズ、番薯ノ如シ、經久味ヲトル事本草ニ云ガ如シ、

〔本朝世事談綺二生植〕甘藷　元祿の末、琉球より薩摩へわたる、煖土によろし、寒土に植れば生ず、本綱云、南方の海人多壽なるは、五穀を食せず、甘藷を食するゆゑなりとあり、此莖を切植に、根生て活す、土人朝夕飯に充、あるひは蒸て干粉にして糧とす、民食を助け飢を救ふ、其利大なり、肥前薩摩に多植る、東武へ來るは頃年保○事なり、

〔蘆塚談下〕薩摩芋の事、日本には寶永元申年より、琉球芋薩摩ゟ稱來る、長崎にて專ら種たるよしなり、靑木文藏名敦書、號昆陽當時百五十餘、靑木昆太郎祖父か曾祖父なるべし、蕃藷考と云ふ書を著し、享保二十年乙卯二月十五日上書す、書中に薩摩よりも蕃藷種藏の法を上書せし事を載たり、最初唐土より琉球へ渡り來り、琉球より薩摩へ渡りて、三十四五年程に相成よしに見へたり、同年三月、文藏に植立候樣被仰付、小石川養生所內へ圃をこしらへ造り、元文元辰年御止になり、同二巳年三月三日、養生所勤役の者へ芋割賦し、芋畑引拂被仰付、其後諸國へ流布して人每に食し、朝夕の助となれり、寶曆年間に至りては、上總下總銚子岩槻伊豆大島、其外諸所ゟ多く作りて江戶へ運送す、銚子を上とし、大島より出るを島芋といふて絕品なり、近歲に至り大なる國益といふべし、

〔成形圖說二十五穀〕唐芋からいも是專俗の通稱なり○中略

此もの吾邦に入りしは、既に慶元、〇慶長元和の頃ほひ、呂宋等の諸蕃より、吾藩、〇鹿兒島の唐港に〇坊津互市せし時、齎し來し由いひ傳へぬ、當初吾藩の僧文之が著せる南浦文集、呂宋國に贈る書牘の中に、彼國の商船贈信交易せしことゞも詳に載たり、當時の番舶吾邦に入貢せしは、多く川邊郡坊津に輻輳せしかば、歌にも唐の湊とはいひける、是もの唐芋ともいふは、我俗海外の地をさして、なべて加良と呼びしが故ぞかし、大和本草、和漢三才圖會等の書は、元祿中に撰しものなるに、甘藷は先年より薩摩長崎へ種ると記せる、是にて元祿よりもいと早く西偏にはうゑ始けるを見るべし、且吾沖繩島には、儀間親雲上が西土へ渡りし時、福建より持歸て種廣めしといふ、其後元祿十一年戊寅の歲、中山王より甘藷一籠を、藩の大夫種子島久基に贈りしかば、室老西村某に命じて、久基の采邑熊毛郡種子島石寺野といふ處に種そめしこと、其家乘に載たりき、〇註略又薩摩頴娃郡山川の鄉兒水に、利衞門といふ者、寶永二年乙酉のとし、沖繩よりもち來りて植たてしとて、今も山川の者語り繼つ、利衞門が事を德とせるあり、此等の說どもをおもふに、此もの始呂宋國より直に持渡りしほどに、唐芋と呼名せしとしらる、若琉球より始致ましかば、琉球芋とこそいふなるべけれ、しかるを筑紫中國にては、本藩の船どもの琉球より登りつ、又は浪華へ往來する時、此種子を琉球の芋なりとて傳へ弘めしより、琉球芋の名を負せたるならし、和漢三才圖會曰、甘藷は琉球國多有之、薩州及肥州長崎亦多種之と載て、本外國より舶傳せしことはいはざる也、按に甘藷は、明の李時珍の綱目を著すの時までは、いまだ唐山にもなかりき、故に異物志卉木狀を引て、出交廣、南方珠崖之不業耕者惟種、此等の說ありて、現に見たりとはいはず、本綱成て後十六年にして、明の萬曆廿二年甲午のとし、閩人陳經倫なるもの、其父振龍嘗て呂宋國に商ひせしに、朱藷の多きを見て、陰買して持歸り、及び其種法を傳へ置しを、時の巡撫金學曾といひし者に獻り、初て閩中に種廣めて、大に歲荒を救ひしかば、民其利を德として金薯と名け、蕃國より渡

れば、とて、蕃薯とも稱せしなり、是本邦にしては後陽成天皇の文祿三年に當れり、其後百六十年餘を經て、清國の乾隆廿年乙亥の頃、(乾隆廿年は寶曆五年なり)新方經綸五世の孫陳世元、其男雲相次て、郡縣膠青豫等の州に種しより、漸く東浙の地に轉へ致しける、其始末は金薯傳習錄に詳にせり、されば西土へ流傳せしは甚近し、

〔成形圖說 二十五穀〕薯(さつまいも是專ら俗の通用)芋なり○中略

此藷春暖新芽を發す、其莖紫色を帶び、漸く蔓をなし、節あり、其節地に着ば根鬚を生じ、地につかざれば葉を生ず、葉は蘡薁の葉に似たるあり、又三尖を成して牽牛子葉に似たるあり、南方の暖地にては、秋淡紅花を開く、夕顏の形と相同じ、其根塊を成し、子母鉤連して五六相簇つく、其塊皮紫赤色なるもの多し、赤白あり、深紅あり、淺紅あり、淡黃あり、濃黃あり、淡紅白の二色をなすあり、形ちは圓にして長し、本末皆銳りて末には少し細鬚あり、肉の質理脈潤ありて、其色は白と黃との二つなり、氣味は甘平無毒、生熟俱に食べし、○中略凡此ものは二月なかば、圓圃中日あたり宜しく、南向の暖地をえらみ深く耕し、故藁類をきりこみ、馬糞を覆ひ、地の溫に和ぐ樣にして、藷塊を緩に覆くうゝる也、又其半を出し、半に土をかけ置もあり、都面土を覆ふも宜し、さて上には腐りたる茅藁類を覆ひ置ば、三月に至り芽を叢生し、漸く蔓をなす、是を苗床といふ、蔓一二尺に及ころ、綿雨中もしくは雨後の曇りたる日をえらみ、芽を缺とり、別に耕し拵らへ置たる畑に、二尺ばかりづゝ、間を明け、橫相距こと七八寸間に種べし、是をかぎうゑといふ、(苗床一歩に藷塊四五斗をうゑ、一ばん苗にて二三畦に及すなり、)はじめてかぎとりたるを一ばん苗といふ、又跡に出芽したるを二ばん苗三ばん苗といふ、四月初より六月の初までは殖るなり、二三ばんの苗を種るときは、一ばん苗にて種置し蔓成長ぬるゆゑ、是をきりても種るなり、農業全書等に、旱せば水を灌ぐなどいへども、手廣く種れば民力及ばず、故に雨後に種置時は、何樣の烈日にも活ずといふことなし、如此種終りて、夏の

内は其蔓の節々地に著ぬ様に、時々草を除き蔓を左右へ移し轉すれば、根に力いり、塊を成こと大にして且多し、かくするを蔓反(ツルカヘシ)といふ、其まゝにして滋蔓(ハビコラ)しめ、節々地に著て鬚を生ずれば、根に塊少し、初種しより二三度も草を除き、蔓を移すまでにて、水を瀉ぎ養を用ること絶てなし、た富民初苗を種るとき、一株ごとに糞灰を少しづゝ根に置て種れば、塊を成こと繁くして大なりといふ、今北陸の農家は、甘藷の苗床をなさず、畑の耕しこしらへして、畦筋を通し、塊種一を二つ三つに引鈌て、蹲鴟(サトイモ)うゝるやうして、土を掩おくこと也といへり、されどかくしなんは、種塊多く費て、工夫(クフウ)も殊にかゝりぬれば、必蔓種にじくものなし、

〔草木育種下〕甘藷(さつまいも)草木　又琉球いもとも云、薩州より來り、諸國に多し、武藏、相模、上總、安房等の砂地にて作るもの味よし、皮に赤みあるもの上品なり、山土にて作るものは形大なれども味劣り、赤土にても砂まぢりたる所へは作るべし、○中略肥を用ず、

〔蕃薯考〕青木先生○敦書の植法は、十二月に其苗の地を耕し肥し置て、春の彼岸すぎにうゆるに、灰又ハ牛馬の糞を土にまぜ、深サ二尺ほどにして、薯種を二三寸に切てうへ、土を五寸ばかりかけ、薯蕷を植るごとく間廣くうゆるなり、

〔八丈島年代記〕一享保八年、公命御厚情の御仁惠を以、被差遣候品々左之通、○中略

一薩摩芋種　一蕃茄芒種

右之通被差遣候處、さつまいも蕃茄芒は作付不手馴爲哉、無間も此品ハ絶失申候、

一享保十二年、公命御仁惠を以、左之通被差遣ル、

一龍眼樹　身木二本　一薩摩芋種

右之通、貳品被差遣候、○中略

右薩摩芋種手入いたし作付、樫立村より仕覺、夫々村々江も相弘メ、當時一方の助ケニ相成、一

同ニ作付ス、

(十三朝紀聞 四中御門)享保十八年二月、西國大疫○中略 先是琉球始貢甘薯于薩摩藩、長崎亦獲之於外舶、各種之、是歳也、其民賴免死者多、至是上國亦識其良、來始傳種、

(見聞漫錄)番薯

敎書 民間に在りし時、番薯は甘藷とも云ふ 饑年第一の助ゆゑ、諸書を考へ集めて一卷となす、享保十九年敎書に命じて、養生所の塲地に作り試みしむ、敎書 元來近年關東島々困窮して、飢人在と聞くによりて思へば、罪人を島々へ流さるゝは、罪人の天年を終しめられん爲なるに、却りて飢うれば上の御惠みに違ひ、甚だ不便なることゆゑ番藷を考へ集めしなれば、關東島々へ渡し度と申上げければ、關東島々へ渡さる、敎書 身に餘り難有ことなり、其後島々にて作り習ひたるや否や、絶えて知らざりしに、寶暦六年、罪人神津島へ漂泊しけるに、島人番薯を與へて食はしむ、漂泊人この島にいかゞして番藷ありと問ければ、島人答へて云、享保年中上より番藷の種を渡し下されたれども、貯あしくして種くさりしに、其比薩州人島にありて番藷を作り、貯へ樣を悉しく敎へしにより、精を出だし作り習ひ、大さ大椀に入らざるほどに出來る、神津島は至りて小く、食物すくなく、飢人ありしが、番藷を作りてより、食物とぼしからずして、飢に及ぶことなく、人も次第に多くなるにより、上の御惠の難有あまり、小祠を立て、番藷を祀ると云、これ今年夏聞聞くところなり、誠に一人にても飢人を救ふは廣大のことにて、有德廟の御仁政深く仰ぎ奉るべきなり、さて八丈島にては、番藷を少し作り、其外の島々は作らざるにや、いまだ聞かず、作り習はせ度きことなり、これ寶暦九年聞ところなり

(有德院殿御實紀附錄十七)沙糖に次ては、甘藷をもつくらしめ玉はむとて、あつく沙汰し玉へり、これは享保十七年西國蝗災ありて、農民飢餓せし時、深見新兵衛有隣に、長崎の遺凶荒のさまど

も尋とはせられしに、新兵衛答申けるは、某が父新右衛門貞恒、長崎にすまゐけるが、かの地はもと米三千石ばかりいだす地にして、市中になりはひするものは五百戸にこえたれば、土地の米をば十日あまりにして食盡すべし、諸國運漕の米とだゆる時は、たちまち飢に及ぶべきことなりとて、甘藷を植て食料とする事を敎けれど、農民のならひ、手なれざるわざをいとひ、其頃はさのみ植もせざりしかど、享保六年彼地にいたりてみれば、はや次第に植まして、食用ともなせり、さればこたびの凶荒にも、おほくのたすけとなり侍るべし、これより先薩州にては、とくこれをつくり、農民日用の食となし侍れば、かしこに行かふ舟人等、かひもとめて江戸に來り、うりかふ事となりしに、いつしか瘕の毒ありといひ出せしものありて、人々これをきらひしかば、ふたゝびうる者もなくなりにたり、されど毒ありといふはひが事にて、かへりて補益多く、薩州にては味噌にもつくり、または水にてさらし、葛にもかへ用ひ、濱邊などの五穀を生せざる鹵地にもおほくつくり、よく繁茂するものなりとて、培法など書て奉れり、靑木文藏敦書も、甘藷考など書て進らす、そのころ長崎の鐵工平野良右衛門といへるもの、江戸に來りしが、彼培法に精しきよし、新兵衛より薦擧せしかば、文藏良右衛門して、吹上の御庭にてつくらしめ玉ひしに、これも年をへて繁植しければ、それより近國の代官におほせて、温暖の地をえらびうゑさせ玉ひしに、いくほどなく上總下總のあたり、これをつくるものおほくなりて、江戸にも常にもち來りて、これをひさぎのちは日用の食となりし事、ひとへに御仁慈の御心、天意にかなはせ玉ひしものなるべし、

〔先哲叢談 八〕靑木敦書、字厚甫、小字文藏、號昆陽、武藏人、仕大府、嘗嘆曰、凡有罪非死刑者、遠放之島嶼、要在使其終天年耳、然諸島少五穀、常以海産木實給食、是以往往不能免饑死、豈不亦痛哉、卽雖種藝之地、遇歳歉、則民不能無菜色、意者百穀之外可以當穀者、莫如

蕃藷也、乃陳官求種子于薩摩、試種之官圃苑中、則極蕃衍、於是以國字著蕃藷考一卷、而演其培植之法、官鏤版併種子行下諸島及諸州、未數年無處不種、至今上下便之、雖歲不登、民不遭饑者、實昆陽之惠及無窮矣、題其墓門之碑曰甘藷先生之墓、有以哉、

〔一話一言 四十〕甘藷

甘藷　享保年中、昆陽先生青木敦書、文藏上總國塚崎町千町田へはじめて命下りて植初しといふ甘藷、山口觀山臣之臣田安士、より贈れり、昆陽甘藷の事、書上にも有之、百姓の言葉に符合せりとぞ、文政二年己卯冬月廿九日にしるす、

〔田畯年中行事 上〕前編

下總國葛飾郡撿見川ハ、高五百石ニ足ラザル村ナリ、近來甘藷ヲ作ルコトヲ數ナヨリ、年々金三四千兩ノ物產ト爲レリ、其隣邑ナル馬加ヨリモ、每年三千兩餘ノ甘藷ヲ出ス、

〔茅窻漫錄 上〕甘藷

此物人に益ある事、時珍綱目に詳なり、授時通考には、十二勝を載せたり、異邦には固より食糧に充つるゆゑ、南方草木狀には、藷糧とも見え、博聞類纂に、種芋三十畝、可省米三十斛ともいへり、又酒にも釀すと見えて、類篋に徐玄扈の說を引きて、甘藷可充籩實、可以釀酒ともいへり、飼用によりては、酒にも作り、又葛粉餅の代ともなる、鈴木俊民が甘藷記あり、蕃藷百珍といへる書などには、百品の料理やうを載せたり、國中農民の制ある時に、家々に是を作り貯へおく時は、第一菜蔬の資となり、又米穀とおなじく荒年の助ともなるべし、琉球國には、其法制あると見えて、是を堀る時に、頭人[illegible]にて男女に下知をなす事、此邦の農監田地を巡り、撿見するがごとし、或一故家に、琉球國より[illegible]來る實圖あり、左のごとし、○略圖

彼地は、暖國ゆゑ海邊砂地に栽ゑて、莖を生する時、其莖に土をかけおけば、その所より根を生

菟絲子

じ、塊をなすなり、

〔新撰字鏡草〕菟絲子〈禰。奈。志。乃。草。〉

〔本草和名六草〕菟絲子、一名菟蘆、一名菟縷、一名蓎蒙、一名玉女、一名赤網、一名菟纍、〈本條〉一名菟丘沙、〈已上出二兼名苑一〉菟糸子者人精也、〈出二范注方一〉和名禰。奈。之。久。佐。、

〔和爾雅七草木〕菟絲子(ネナシカヅラ)〈菟縷、菟蘽、火燄草、金線草、並同、〉

〔物類稱呼三生植〕菟絲ね。な。し。か。づ。ら。　東國にてさうめんぐさと云、筑前にてうしのさうめんと云、

按に下野の國日光山さうめん谷の水中に此草を、し、東武には隅田川に有、

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕菟絲子　〈ネ。ナ。シ。カ。ヅ。ラ。ウ。シ。ノ。サ。ヴ。メ。ン。江州、ヲリアチサウニモコノ名アリ、ム。マ。グ。サ。ル。ノ。ハ。マ。イ。城州玉水サ。ウ。メ。ン。グ。サ。東國ナ。ツ。ユ。キ。佐州〉〈サ。同上、大豆圃中ニ此草生ズレバ全圃豆ヲ枯ラス故ニ名ク、〉

一名無根藤〈醫學正傳〉　藤蘿〈事物異名〉　黄絲草〈先醒齋筆記〉　金線藤〈楊州府志〉　迎陽子〈藥譜〉　狐絲〈酉陽雜俎〉　野狐

漿草〈附方〉　烏麻〈採取月令〉　老禿鷲〈事物異名〉

二三月舊子地ニアルモノヨリ、細絲ノ如キモノヲ生ズ、一頭ハ地ニ入テ根ノ如シ、其絲一寸餘ノヒテ、傍ノ草木ニトリツキ纏ヘバ其本枯レ、隨テ長ジ隨テ枯ル、其纏ヘル所ヨリ草木ノ津液ヲ吸フ、モシ始メ旁ニトリツクベキ草木ナケレバ枯ル、其藤漸ク蔓延ス、始メハ白ク後ハ黄白色又黄赤色トナル、大サ一分許多ク枝ヲ分チ、草木ノ頂ニ亂布シテ、索麪ヲ散スルガ如シ、夏ノ末花ヲ開キ穗ヲナスコト二三寸、白色ニシテ筒子樣ヲナシ梫木ノ花ノ如ニシテ小シ、後實ヲ結ブ、濶サ一分長サ一分餘、熟シテ褐色微黒、內ニ二子或ハ三四子アリ、コレ藥用ノ菟絲子ナリ、實熟シテ蔓黒色ニナリ枯ル、始終葉根ナシ、一種海濱ニ生ズルモノハ蔓細ク子小ナリ、今藥舖ニ賣ルモノ多クハコレナリ、

〔草木育種下藥品〕菟絲子(としし)〈本草〉　和名ねなしかづらといふ、日光足尾、江戸早稻田本所邊稀に在所あり、

雜木ありて下に草ある處に生ずる也、初草に蒔後には木の上まで紆、樸は枯てなし、秋實を採土に埋貯置、三四月頃取出し、灌木ありて下に草ある處へ蒔べし、肥を用ず、

留紅草

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、略○中 菟絲子二升、　伊勢國五十種、略○中 菟絲子五斤、略○下

〔武江產物志 藥草〕早稻田邊　菟絲子

〔和漢三才圖會 蔓草 九十六〕留紅草　俗稱 本名未詳

按留紅草細莖蔓、葉細密如杉葉、而表裏淺青色、莖端出蔓、八月枝叉抽短莖、開花形如丁子樣、而紅色、長六七分可愛、花謝結角中有細子、

〔剪花翁傳 三 六月開花〕縷紅艸　花の色極紅、莢至て少く、蔕五瓣にして形ち舞に似たり、長六七歩に過ず、開花六月上旬、方日向ならんには、地一分濕りよし、方一分陰ならんには、地乾きよし、土撰ばず、肥油粕芽出し後より入べし、下種春彼岸よし、芽を出すことの甚遲きもの也、最早はえざるかと待かね、疑ひて必堀穿ち見ることなかれ、下種して十四五日目に生ずるあり、尙或は五六日或は十日廿日ばかりも、段々後れて芽生ず、又はえざるものもまゝあり、一時に出揃ふものにあらず、都て種の形ち長きものは此のごとし、牛房人參の種なども亦同じ、葉の形ち眠艸の葉に似て、至て細く長一寸許なり、尤蔓物にして、竹の枝或は艸莖等を建副べし、是插花の料なり、

紫草

〔本草和名 八 草〕紫草、一名紫丹、一名紫芙、一名藐、仁諝音亡角反、出蘇敬注、一名野葵、一名紫給、一名茈莀、音戾、出兼名苑、一名紫芙、出雜要注、和名无良佐岐、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕紫草　本草云、紫草、和名無良散岐　兼名苑云、一名茈莀、紫戾二音　今按玉篇茈即古紫字也、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕陶云、是今染紫者、蘇敬云、苗似蘭香、莖赤節青、花紫白色、而實白、圖經云、二月有花、時珍曰、種紫草、三月逐壟下子、其根頭有白毛如茸、略○中　王念孫曰、說文、莀艸也、可以染留黃、

其染緑者謂之緑莀、染紫者謂之紫莀、廣雅釋器云、緑綟、紫綟綵也、續漢書輿服志注引徐廣云、綟草名也、以染似緑、又云似紫、則染草之莀、本有緑紫二色、莀與盭通、漢書百官公卿表、金璽盭綬、晉灼注云、盭草名、出琅邪平昌縣、似艾可染緑、因以爲綬名、此緑莀也、史記司馬相如傳、揜戾莎、徐廣注云、草可染紫、此紫莀也、莀通作茢、周官掌染草鄭注云、染草、茅蒐豕首紫茢之屬、疏云、紫茢即紫莀也、今本玉篇云、紫色也、又云、茈草可染、說文亦云、紫帛青赤色、茈茈艸也、二字不同、但茈不釋何草、按爾雅、藐茈草、郭注云、可以染紫、西山經注云、茈草中染紫也、是知紫是帛之青赤色者、轉爲青赤間色之總名、茈可以染紫之草、本作紫草者、轉注以紫爲茈也、故云茈即古紫字也、

〔和爾雅 草木七〕紫草（ムラサキ、紫丹、紫芺、茈莀、並同、爾雅謂之藐、）

〔和漢三才圖會 山草九十二末〕紫草　紫丹　紫芺　茈莀　地血　藐（音邈）　鴉銜草　和名無良佐木○中略

按紫草出於薩州者最佳、奧州（南部津輕）羽州（秋田）遠州（中泉）豫州（大洲）河州（山田）皆良、但家種者不入藥用、

蓋醫方藥曰、紫草可用根、若謂紫草茸則可用嫩苗葉、

染絹帛、用紫根煎汁染之、浸柃木灰汁、一方用蘇方木煎汁入緑礬少許染之、浸柃木灰汁成、名之贋紫、經年色變、

〔重修本草綱目啓蒙 山草七〕紫草　ムラサキ　ムラサキチ　チムラサキ江戸　一名紫果（增訂致富奇書）
　藐茅（事物紺珠）　紫茢（正字通）　芝草（本草彙箋）

諸州ニ多ク栽ユ、春分後種ヲ下ス、長ジテ苗高サ二尺許、葉ハ細長ニシテ旱蓮草（タカサブロウ）葉ノ形ノ如ク、互生ス、夏月枝梢葉間ゴトニ白花ヲ開ク、五出形梅花ニ似テ大サ三分許、内ニ蘂ナシ、外ニ蕚アリ、亦五出ニシテ細長シ、花謝シテ實ヲ結ブ、蕚ゴトニ一二實形圓尖ニシテ紅藍花實ニ似テ小シ、熟シテ白色或ハ淡褐ヲ帶テ光アリ、京師ノ山ニ自生ナシ、奧州、羽州、豫州、播州、江州、甲州、總州ニハアリ、ソノ根直ニシテ皮深紫色皮汁ヲ採テ布帛ヲ染ム、藥舖ニハ薩州、奧州南部、羽州最上ヨリ出ルヲ

上トシ、讃州、豫州ヨリ出ルヲ次トシ、和州、江州、河州ヲ次トス、上品ノ者ハ染家ニ送リ、下品ノ者ヲ紫根ト名ケテ醫家ニ賣ル、用ユルモノ宜シク擇ブベシ、

〔廣益國產考 三〕紫草（根を用ふるしのゆゑ紫根とよべり○中略）紫草を作る土地の事

温地の北うけ、あるひは山陰の陰地は忌べし、隨ぶん日あたりよき地に作るべし、砂眞土の水氣の滯ふらざる地宜し、黒ぼこと至つての赤土はあし、ねば土あし、流水場などの極砂土は宜しからず、綿、麥などの能くできる地ならば、生育せずといふ事なし、

蒔旬并地ごしらへ

蒔旬は五月の中より、四五日まへに蒔て宜し、都ての作物に時節のたがひて宜しきものはなけれども、別して此紫草は時節をはづし蒔ては、生育あしきものなれば、其時をはづすべからず、早過てもおそくても宜しからず、扨蒔べき畑は、先一面に塊をくだきて打ならし畦、畦幅一尺五寸づゝ、小鍬（又土地の鍬大ならば、少し小形の鍬にてきるべし、）にて筋を引、畑一反に種子貳升五合を升やうのものに入、左りへもち、右の手にてひねり蒔にすべし、此實を鷄どりよく好んで喰ふものなれば、蒔たる時其用心すべし、花咲實に成たるときは、猶更此防をすべし、蒔終て麥の通りに土を覆べし、尤生出て間引くものにあらざれば、餘り繁くしては宜しからず、隨分むらなきやう蒔べし、併しあまりしげきは間引すつべし、植肥しは糞の熟したるを敷て蒔て宜し、又は干鰯油粕の水にはだしたるにても宜し、何れも熟したるを用ふべし、もつとも麥まくより多く施て蒔べし、

肥し手入

生出十日もすぎて鍬を入、又引つゞきて二度も入べし、草多き地は三度もつゞきてけづるべし、

生出て壹寸位に伸たる時、干鰯にても、油粕にても、穴肥にすべし、穴肥といふは、生出たる紫草の根際壹寸貳三分脇に、間五寸ほどづゝ、但、穴つきと云研木（すりこぎ）の先のごとき棒をもて突明、其中に

干鰯の粉、又は油粕の粉を一トつかみを、二穴づゝに入て土をきせる也、又は干鰯を蒲簀に入、口を閉、其とぢ目の兩方へ長く繩を付、肥瓶の中に水を入て、其中に十日もつけ置ば、干鰯の體とろける也、其時付おきたる蒲簀の繩を兩手に持、かたみに引きてゆれば、干鰯の體とろけ水に出、骨ばかりかますの中に殘る也、蒲簀は引あげ、中の骨を出し、干てくだき、外の植ものゝ肥しにすべし、扨其出したる水を葉にかゝらぬ樣、根際に筋を引、其筋へ流しこみて施べし、麥などより肥しを多く施ざれば、根のはりあしゝ、又は糞の熟したるを施てもよし、　二番肥は貳寸五分にも成たる頃、見合せ施べし、　三番肥は土用前に施べし、尤一番に油粕、貳番に干鰯ならば、三ばんに糞を施べし、二番糞ならば三番を干鰯か油かすにすべし、　生出てより三十日もすれば、餘ほど伸るものなれば、末壹寸五歩ほど、又貳寸も鎌にてはらひ刈に切べし、左すれば根のはり宜しく收納多し、　若小出來のときは、右三度の肥しの間に、何肥にても施べし、肥氣ぬけては次第に黄色になり、枯る事あるもの也、依て肥しを拔目なくすること肝要也、餘の作りものとちがひ、出來あしき時は、皆無同樣のものなれば、手入肥しのさし引油斷なくすべし、

收納の事

收納は秋土用に入日よりこきあげて宜し、根を用ふるものなれば、先根際に鍬を入、土をくつろげて引ぬくべし、日照つゞきて土かたき時は、水を澤山かけ、よくしみこみたるとき、土をくつろげ引てもよし、鍬を用ひざる所にては、鍬をうちこみ土をくつろげても宜し、いづれ根の切ざるやうにして引べし、　扨引ぬきて土をふるひ落し、其まゝ筵に入、三四日干すべし、曇天ならば五七日も干すべし、隨分薄く干ざれば熱り來て、一夜のうちに腐ることあり、

製法の事

製しやうは、根と木との堺に兩方へ少し芽出ある所より折て、根と木とを分べし、爰に木といふは、莖の草なり、

此折とき根の方へ木の付ざるやうすべし、木付ときは直段格別引下らる丶也、扨根につきたる土砂を能ふるひ取て、水にてあらひたるやうにすべし、此根に色あるもの故、決て洗ふべからず、木と根を折分てより、又籠に入一兩日干て、塵をよく去りて俵に入べし、

極上出來　畑壹反ニ五拾貫目　中出來　同四拾貫目　直段ハ紅花など丶同じく、高下あるもの也、大體均し金壹兩ニ付目方五貫目かへ位なり、　扨此紫草に山根と號し、山に自然生のものあり、幾年も立たるは、煙管のらう竹位に、香ぐらゐの大籠あるもの也、是は直段も格別高直也、藥に用ふるは此自然生のもの也、

〔令義解三賦役〕凡(中略)其調副物(註略)正丁一人紫三兩、

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物

太宰府(中略)紫草(日向八百斤、大隅一千八百斤、)(中略)　右別貢雜物並依前件、

交易雜物

甲斐國(中略)紫草八百斤(中略)　相模國(中略)紫草三千七百斤(中略)　武藏國(中略)紫草三千二百斤(中略)　下總國(中略)紫草二千六百斤(中略)　常陸國(中略)紫草三千八百斤(中略)　信濃國(中略)紫草二千八百斤(中略)　上野國(中略)紫草二千三百斤(中略)　下野國(中略)紫草一千斤(中略)　出雲國(中略)紫草一百斤(中略)　石見國(中略)紫草一百斤(中略)　太宰府(中略)紫草五千六百斤(中略)

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔東大寺正倉院文書四十二〕豐後國正稅帳

球珠郡　天平八年定正稅稻穀壹萬漆仟貳伯貳拾斛陸斗捌升貳合貳勺(中略)

國司巡行部內、合壹拾肆度(中略)

壹度蒔營紫草園、(守一人、從三人、幷四人、二日、)單捌人、上貳人、(守)從陸人、(中略)

壹度隨府使、檢挍紫草園、(守一人、從三人、幷四人、一日、)單肆人、上壹人、(守)從參人、(中略)

壹度堀紫草根、〈守一人、從三人、井四人、二日、〉單捌人、上貳人、〈守從陸人、〉

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一聽運九箇使料米事〈○中略〉　紫草使料十斛〈○中略〉

大同四年正月廿六日

〔毛吹草三〕遠江　紫根　出羽　秋田紫根

〔武江產物志藥草〕堀ノ內大箕谷邊ノ產　紫草〈小金ニモ〉

馬鞭草

〔本草和名十一草〕馬鞭草、〈楊玄操音、必綿反、蘇敬注云、穗類鞭鞘、故以名之、〉一名𧄕草、〈出范注方〉一名襄草、一名貴襄、〈出雜要訣〉和名久末都都良、

〔倭名類聚抄二十草〕馬鞭草　蘇敬本草注云、馬鞭草〈和名久末都々良〉其穗類鞭鞘、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陳藏器云、若云似馬鞭鞘、亦未近之、其節生紫花、如馬鞭節、按陶注、莖似細辛、花紫色、葉微似蓬蒿也、蘇云、苗似狼牙及茺蔚、抽三四穗、紫花似車前、都不似蓬蒿也、蜀本圖經云、生濕地、花白色、圖經云、春生苗、莖圓高三二尺、時珍曰、馬鞭下地甚多、春月生苗、方莖、葉似益母、對生、夏秋開細紫花、作穗如車前穗、其子如蓬蒿子、而根白而小、陶言花似蓬蒿、韓言花色白、蘇云莖圓、皆誤矣、

〔古名錄十四野草〕久末都々良〈本草和名〉　漢名馬鞭草〈本草〉　今名ウシギク

〔宜禁本草乾藥中草〕馬鞭　辛涼、通月經、主癥癖血瘕久瘧破血、食魚鱠及生肉、住胷膈不化成瘕、擣汁飲之、〈生姜亦得、〉水治男子陰腫大核痛、擣馬鞭草塗之、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕馬鞭草　龍牙草　鳳頸草〈和名久末豆豆萬○中略〉

按馬鞭草處處有之、攝州之產良、陰囊腫痛者、用馬鞭草鼠尾草煎汁洗之佳、

龍牙草

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕馬鞭草〈○中略〉

釋名龍牙草ヲコノ釋名中ニ列シテ、馬鞭草トスルハ誤レリ、宜ク分ツベシ、閩書南產志ニモ其誤

ナルコトヲ云リ、龍牙草ハ即救荒本草ノ龍牙草一名瓜香草ナリ、和名キンミヅヒキ、又シヽヤキグサ、同名多レクソボコリ、上州トモ云、葉ハ紫蘇葉ノ如ニシテ鋸齒アリ、初ハ叢生シテ地ニ就ク、夏月莖ヲ抽コト二三尺許、其末一尺許ハ穗ニシテ五瓣ノ黃花ヲ開ク、大サ三分許、實綠色大サ椒（サンセウノ）ゴトシ、毛刺アリ、熟スレバ人衣ニ粘ス、

〔廣益地錦抄七〕龍牙草（りうげさう） 宿根より春生る、葉の色うるはしく、青色、葉おもてに小筋ありて、ながめにたれり、八九月花さく黃色なる穗をなし、段々にひらく、俗に鬼の矢柄（やがら）といふ、

蠅取草

〔大和本草九雜草〕蠅取草　葉ハ似薄荷微長シ、葉莖柔軟、葉ヲ飯ニヲシマゼテ、蠅ニ飼ヘバ死ス、毒草ナルベシ、或曰、是本草溼草上所載曲節草ナルベシ、

荏名稱

〔倭名類聚抄十七菜〕荏　野王案云、葉大而有毛、其實白者曰荏、而甚反、和名衣、野王案云、葉細而香、其實黑者曰蘇、新抄本草云、和名乃良衣、一云奴加衣、此二物並一類、其狀不同耳、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕新撰本草云、乃良江、一云奴加江、廣本新撰作新抄、下總本有和名二字、本草和名云、蘇、和名以奴衣、一名乃良江、與此引不同、按本草和名又云、假蘇和名乃乃衣、一名以奴衣、無名奴加衣者、此所引恐誤、○中略　下總本有和名二字、本草和名云、荏子、和名於保衣乃美、水蘇、和名知比佐岐衣、今俗呼衣古末、或白紫蘇、○中略　今本玉篇艸部云、蘇桂荏屬、又云、荏蘇屬、與此引不同、爾雅說文並云、蘇桂荏、本草陶注云、蘇葉下紫而氣甚香、又云荏狀如蘇、高大白色不甚香、李時珍曰、紫蘇白蘇皆以二三月下種、或宿子在地自生、其莖方、其葉團而有尖、四圍有鉅齒、肥地者面背皆紫、瘠地者面青背紫、其面背皆白者卽白蘇、乃荏也、紫蘇嫩時采葉、和蔬茹之、八九月開細紫花、成穗作房、如荊芥穗、九月半枯時收子、子細如芥子而白黃赤、王念孫曰、今人多種院落中、青紫二種、子皆生莖節間、古單呼紫者爲蘇、今則通稱耳、

〔伊呂波字類抄江植物附植物具〕荏エ

荏栽培

〔書言字考節用集 六生植〕白蘇草(エゴマ)　荏(エ)(本名亞麻)

〔段注說文解字 一艸下〕荏、桂荏(逗)蘇也、(是之謂轉注、凡轉注有各部互見者、有同部類見者、荏之別義爲荏染、)从艸任聲、(如甚切、七部、)

〔東雅 十三穀蔬〕倭名鈔穀類にしるせし所を見るに、荏讀てエといひ、蘇讀てヌカエといひ、香薷讀てイヌエといひ、稗讀てヒエといふと見えたり、巳上の三種并に荏により名を得し所と見えけり、荏をエといふ義不詳、韓地の方言の轉せしに似てけり、凡我國の俗、細にして小なるものを呼びて、ヌカといふは、糠の義也、似て非なるものを呼びてイヌといふ、蘇をヌカエといふは、荏の類にして、葉の細なるを云ひしなり、香薷を呼びて、イヌエといふは、荏に似て非なるをいひしなり、

〔倭訓栞 前編五〕え○(中略)　荏は倭名抄に見えたり、今え胡麻といふ、

〔本草和名 十八菓〕荏。子。、一名蘓(楊玄操音穌、面作蘇、)重油、(其子作油、日蘇名也、)和名於保衣乃美、

〔醫心方 一〕荏子(和名於保衣乃美)

〔農業全書 四菜〕白蘇(上方にては、ゑごまと云也、)

白蘇は子を取て油にする物なり、雨具などを調へ、さし笠にひくも皆此油なり、其外用多し、燈油にして光よき物なり、是も白黑の二種あり、二色共に宜し、肥たる細沙地取分よし、すべて何土にても深く耕しこなしをき、苗四五寸の時畦作りし、地の肥瘠を見合せ、がんぎを切、一本づゝ種る間七八寸、或肥たる地は一尺餘も隔、少深くうへ、糞は何にても有にまかせて多くも用ゆべし、厚く培ひ芸りなど、大かたにしをきても、少も草痛みもせず、よくさかゆるものなり、是なを牛馬のさはる物にあらず、畠の端道ばたなど、牛馬の喰ふ穀のふせぎとなるべき所にうゆべし、木かげ物かげ、屋敷廻りの、他の作り物の、かつてよからぬ所にも、大形には出來、殊に旱なが雨にも痛まず、秋大風時分はいまだ花咲ずしてつぼみ、葉の間にあるゆへ、風損も大かたはなし、小鳥は少々付といへども、他の鳥けだ物は、そこなはず、大抵の地にてよく作り合せぬれば、雜穀等の利分の

荏利用

及ぶ物にあらず、作るに造作なくして、極めて勝手よき物なり、土地餘計ある所にては、多く作るべし、刈收る事、時分の見合せ肝要なり、若刈時分過れば忽に零落す、葉悉く黄になりて、本なりの子はやこぼれんとする時、朝露に刈取、下に筵を敷、其上につみ置、又上よりも筵などをおほひ、むして四五日して、葉くさりたる時、ふるひあげ葉を落し、下にむしろをしき、照日に一日二日干てうち取べし、其後又干打事、二三遍にして悉くおち盡べし、唐人は此油にて餅をあげ、又和物のかうばしなどにもすると見えたり、凡五穀三草などの外の作り物には、利潤是に及ぶ物すくなし、土地多き所にては廣く作るべし、若おほく作りては、内に取込事なり難きゆへ、胡麻の如く外にふきをき、能干たるを見て、筵を敷て打て取べし、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕荏音在　白蘇俗云衣

本綱、荏形狀與紫蘇無異、但面背皆白者卽白蘇、乃荏也、其子可取油、

按荏關東多種之、用子搾油、爲燈油、又引傘挑燈雨衣等、不濕而能凌雨、又煉代漆、

造法　密陀僧大　滑石中　枯礬少　入油以文火煉用、以燈心寸許試之不倒爲度、採物白粉辰砂綠靑等和調、其色鮮明、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕荏　エ古名　エゴマ略語　シロジソ　ジウネン仙臺　ジウネアブラ南部

一名著通雅　白荏通正字

苗葉花實皆紫蘇ニ同クシテ香氣アリ、唯葉ノ色靑ク、花ノ色白シ、野圃ニ多ク栽ヘ、子ヲ收メ油ニ搾リ、雨衣雨傘ノ用ニ供シ、チヤンツ製ス、又子ヲ用テ小鳥ニ飼フ、原野ニ自生ノモノヲ野荏ト云、俗ニノエト呼ブ、子小ニシテ香氣殊ニ烈シク、小鳥モ食フコトアタハズ、

〔延喜式三十大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓。菜。料。略○中　荏子七勺、菓餅料

荏產地

〔延喜式三十九内膳〕供御月料
胡麻子、荏子、各一斗二合五勺、

〔延喜式四十三主膳〕月料
荏子四升九合五勺

〔七十一番歌合上〕廿二番　左　傘張
えのあぶらがたらぬげな

〔延喜式二十三民部〕交易雜物
山城國(中略)荏子四石(○中略)　尾張國(中略)荏子四石(○中略)　美濃國(中略)荏子十二石(○中略)　右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國天平六年正税帳
尾張國司解　申收納天平六年出擧(○以下)
合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合(○中略)
年料荏肆斛　直稻捌拾束(束別五升)

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
攝津國卌四種(○中略)荏子二升五合、相模國卌二種(○中略)荏子二斗、下總國卌六種(○中略)荏子二升、

〔地方凡例錄五〕荏大豆納之事
關東方荏大豆納高百石に大豆貳斗、荏壹斗掛る、尤荏大豆共、貳升に代米壹升、代永なれば、荏大豆五石に代、永壹貫文づゝ、被下之、

〔信府統記八〕毎年收納高ノ内(○信濃安曇郡)
一油荏八俵三斗　納四斗入　拾七ヶ村ヨリ定納

但籾一升ニ付油荏五合替

一油荏不納村　四〈大野田村　檜村　大野川村　島々村〉

紫蘇名稱

〔本草和名　十八〕蘇、野蘇、〈不香者、荏、〉一名桂荏、一名蘇、〈已上二名出蘇敬注〉和名以奴衣、一名乃良衣、

〔倭名類聚抄　十七〕荏　野王案云、葉大而有毛、其實白者曰荏、〈和名衣、〉野王案云、葉細而香、其實黒者曰蘇、〈新抄本草云、和名乃良衣、一云以奴加衣、〉此二物雖一類、其状不同耳、

〔名物摘古小識　一生植〕奴加衣　出鈔〈○倭名類聚鈔〉深〈○本草和名〉丹〈○續紀〉深又曰乃良衣、深丹又曰以奴衣、倶爲蘇、即紫蘇也、今俗稱此音、式〈○延喜式〉年料藥有蘇子、

〔類聚名義抄　八艸〕蘇〈蘇骨、イヌエ、一云ヌカエ、〉

〔易林本節用集　草木〕紫蘇

〔段注説文解字　一下艸〕蘇　桂荏也、〈桂荏、上蘇本有二蘇字一、此復舉字之未レ刪者、蘇桂荏、釋艸文、内則注曰、蘇荏之屬也、方言曰、蘇亦荏也、關之東西、或謂二之蘇一、或謂二之荏一、郭樸曰、蘇荏類、是則析言之則蘇荏二物、統言則不レ別也、桂荏今之紫蘇、蘇之言舒也、〉从艸穌聲、〈素孤切、五部、〉荏　桂荏、〈蘇也、是之謂轉注、凡轉注有二見者、有各部互見者、有同部互見者、荏之類、義爲二荏蘇一、〉从艸任聲、〈如甚切、七部、〉

紫蘇栽培

〔本朝食鑑　三菜〕紫蘇〈訓如字〉

集解、處處多有、或人家田圃栽之、二三月下種、又宿子在地自生亦有、其莖方、其葉團而尖、四圍有鋸齒、肥地者面背皆紫、瘠地者面青背紫、其面背倶青白者白蘇也、七八月開細紫花、成穗作房、如荊芥穗、九月半枯時收子、子細如芥子而色黄赤、或謂此亦可采油如荏油、紫蘇葉嫩時可爲羹、以去魚肉毒、可爲蔬茹、或醃藏味噌漬倶佳、與梅子同淹藏、則其汁香紅、故同漬者悉香紅可愛、最經年亦好、子亦醃之、乾之倶可愛賞、

〔大和本草　附錄一〕紫蘇　李中梓曰、雙面紫者佳、不敢用麻黄、以少代之、今ノ世チリメン紫蘇ト云モノロシ、ウラヲモテ鮮紫、味モ氣モヨロシ、ツネノ紫蘇ニマサレリ、其葉チヾム故ニチリメン紫蘇ト

名ヅク、其子朝鮮ヨリ來ル、故ニ朝鮮紫蘇トモ云、食品ニモ藥ニモ可用之、汗ヲ少シ發ス、故ニ輕症ニ麻黃ニ代用ユ、他ノ紫蘇ノ苗ト子トヲステヽ、是ヲ可種、秋實ノリタル時卽地ニ蒔ベシ易生、春マケバ生ジガタク消ヤスシ、

紫蘇栽培

〔農業全書四 菜〕紫蘇

しそは八九月たねを收め置て、正月熟地に苗床を作りて、灰沙に合せ、うすく蒔てこえを少かけ、土を少しおほひをくべし、あつくば間引て、莖短くふときを、三月畦作りし、肥地ならば、間を遠くうゆべし、

〔成形圖說二十五 菜〕奴加延〇三代實錄 中略 紫蘇〇名醫別錄 中略

此ものの性濕地を好む、春月種子を布べし、その佳なるものは葉に皺ありて鋸齒深く、表裏紫色なり、俗にこれを縐紗(チリメン)紫蘇といふ、梅儲(ウメツケ)及藥用に此をよしとす、よろしく花穗を發せざる內に、その葉を收めとるべし、あるひは地の乾瘠(ヤセ)たるによりて、表靑色に變ずるものあり、かゝるものはおのづから芳香も薄し、また一種表裏ともに靑色荏葉の如くにし、芳香よろしきものあり、東都の俗にあるひは靑紫蘇といふ、按に農圖六書に白蘇といへるもの是にや、中略〇註 今藥用のものは、山城、紀伊、相模よりいだす、また東都の官園にて養なふものあり、性味ことにまされり、しかれども民間に稀なり、その子は關東にては、武藏鷹澤よりいだす、あるひは荏子をもて僞り充るもあり、

紫蘇利用

〔藥經太素下〕紫蘇　溫味辛

裏面トモニ紫色成ヲ用、枝莖ヲ去、日ニ干モミ研テ用、下氣開胃治脹消痰利大腸、若寬喘欬子尤吉、又脚氣ヲ治ス、

〔宜禁本草乾五 菜〕紫蘇　辛溫、日用本草曰、純紫尤佳、類本草、葉下紫氣甚靑、忌與鯖鮓同食、腸中生癰成疝、子主上氣欬逆、腰脚濕風結氣、葉下氣除寒、治心腹脹滿、霍亂轉筋、開胃下食、通大小腸、子調中下氣、主嘔吐反胃、肥建人利

紫蘇產地

大小便、破癥結、消五膈、止嗽、潤心肺、消痰氣、治肺氣喘急、衍義云、子治肺氣喘急、多服令人泄滑、

〔延喜式 三十九 内膳〕漬年料雜菜

荏裹二石六斗、料鹽九升、醬七升、荏子六斗、醬糟四升、汁糟一斗二升、未醬四升、醬滓一石、○中略　右漬秋菜料

〔古名錄 十八 香草〕乃良衣

令集解曰、古記云、荏而枕反、方言、蘇亦荏也、關之東西或謂之蘇、或謂之荏、野王按、蘇細而香、其實色黑、荏大而有毛、其實色赤、一作紺二物雖是一類、其狀不同也、觀此則古ヘ衣ハ紫蘇荏通ジテ呼ルコト明也、其荏蘇ト云モノ、紫蘇ノ葉ヲ用、荏ノ葉ハ毛アリテ味不美、香亦アシクシテ食用トナスベカラズ、證類本草ニモ、蘇有數種、有水蘇、白蘇、魚蘇、山魚蘇、皆荏類ト云ヘリ、

〔農業全書 四〕紫蘇

四五月葉をつみて、梅漬其他鹽漬につけ、貯ひやしる種々料理多し、生魚に加れば魚毒をころす、又藥に用ゆるには、梅雨のやみたる後、二三日過て、未極暑に至らざる時、朝とく葉をつみ日に干べし、暑にあへば、葉の色青くなる、青くならざる内に早くつむべし、或曰、六月極熱の中にかりて、半日日にほし、其後かげ干にし、ほし上て、俵に入をき、藥屋にうるべし、又葉よくさかへて是を取、多くかさねまき、わらにてゆひ、みそにつけたるハ香よき物也、是も八新の一つにて、古きは用ひず、明年の新しきが出來るまで用ゆる物なり、未實の房枯ざるを刈取て鹽漬にし、炙りてさかな茶うけなどによき物なり、紫蘇子を取には、霜よく實りて、已におちんとする時刈取、下に筵かき紙などを敷て干、小竹にて打て實を取べし、是又藥屋にうるべし、葉も實も氣を散し氣を下し、性よき物なり、子は少いりてあへ物に加へてよき物なり、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、○中略 蘇子一升、　尾張國卅六種、○中略 荏麻子、紫蘇子、各五升、

草石蠶

羅勒

〔毛吹草　三〕山城　紫蘇

〔書言字考節用集　六生植〕草石蠶（チヨロギ）甘露子、滴露子、並同、見本草、

〔本朝食鑑　三柔滑〕知也宇呂岐

集解、卽草石蠶、一名甘露子、古來未聞有、近世華舶移種、頃者家家栽之、二月生苗、長者近尺、方莖對節、狹葉有齒、並如荏葉、但葉皺有毛、四月開小花成穗、如紫蘇花穗、結子如荊芥子、其根連珠、狀如老蠶、或根之旁引一絲、著連珠者亦有、四五月采根煮食之、味微甘而淡、以爲蔬爲菓耳、

〔和漢三才圖會　百二柔滑菜〕草石蠶（ちやうろぎ）　甘露子　地蠶　土蛹　滴露　地瓜兒　知也宇呂木（○中略）

按草石蠶近年有之、撓莖埋地、則節々生根也、其根二三寸、正白色、促節、形狀略似柳蠹、用淡醬油煮食、

〔農業全書　五山野菜〕甘露子（かんろし）

甘露子、又草石蠶とも、地瓜兒とも云、今俗にてうろぎと云物なり、苗の時四五寸、長じて後は莖ながくつるのごとし、かどありて節ごとに葉向合て生じ、薄紫の小花をひらく、其節々より、土に根ざし、かいこのごとくなる白き根多く生ず、玉をつらぬきたるごとくつゞきて、白くすきとをりて、きれいなる物なり、味甘く煮て、茶うけ、くはしにもなり、あへ物、吸物其外に物などに入、料理色色あり、めづらしき物なり、殊に多く作りては、飢をも助るものなり、（多くひろがる物にて、根も多く出來るなり、畠の端にては多く作り、飢を助ると記せり、）種る地の事圃の少日かげの所を畦作りし、夏月に麥ぬかを多く覆て糞とす、一尺餘り間を置てうゆべし、芸り培ひ、畦りをも草なき様にきれいにし、又上より麥糠を覆ひをけば、かぎりなくさかへて、纔なる圃の端にうへても、其根たくさんにいでくる物なり、淨く洗ひ、かはかして、蜜に漬、醬に藏して、甚よき物なり、土地廣き所にては、多く作りて、飢を助くべし、陰地の肥たるによし、木かげなどにも種べし、やせ地かはきたる地によからず、

〔多識編　三菜〕羅勒、惠。阿。良。良。岐、異名香菜、（綱目）醫子草、

茺蔚

〔重修本草綱目啓蒙 草十八 隰草〕茺蔚 メハジキ 一名蘭香菜 本草彙言 益芳 正字通

野生ナシ、種ヲ傳ヘ種ユ、四月叢葉初テ出ル時、地ニ下シテ卸生ズ、苗長ジテ一尺餘ニ至ル、方莖枝葉皆兩對ス、葉ハ倚林葉ニ似テ淺綠色、香氣アリ、枝梢ゴトニ六七寸ノ穗ヲ出シ、葉上ゴトニ莖ヲ周リテ花ヲ生ズ、紫蘇ノ花ニ似テ白色、後萼ゴトニ四子アリ、熟シテ黑色、秋深ニ至テ苗根共ニ枯ル、其子至テ小ク車前ノ子ノ如シ、水ヲ見レバ卸外ニ白脂ヲ纏フテ、一分餘ノ大サニナル、故ニ目中ニ入テ痛マズ、能塵ヲ粘シテ出ス、故ニメハジキト云フ、

〔廣益地錦抄 六〕隰草 春種をまく、尺にたらぬ小草也、草立葉形枝ぶり蕊、とうがらしの草に似たり、五月はなさく、花形穗のごとく一年草にて多は枯る、二月種を蒔、二葉にはへ出ルより、蘭香自然にありて蘭のかはりなれば、草花に名を蘭香とも蘭草とも云、實は小細にして極て小粒也、眼目に物の入りたるに此實を入ル、目のごみを殘らずとりて、目の藥なりと云、俗に目蕃ともいふ、小草にてあひらしく、鉢にうへて愛すべし、庭に植て不斷蘭香せり、

〔新撰字鏡 草〕茺蔚 女波自支、又云益母、又益明、又太禮、又貞蔚、又天麻草、

〔本草和名 六 草〕茺蔚子、一名益母、一名益明、一名大札、一名貞蔚、已上本條 一名天麻草、一名苦麻、已上二名出蘇敬注 一名鬱臭草、田野人之、出兼名苑 一名虎麻、一名馬新蒿、一名馬矢蒿、已上三名出雜要訣 一名萑蓷、一名臭穢草、二名出爾雅 和名女波之岐、

〔醫心方〕拔人之胎股呼字、又拔虎麻、馬新蒿、並中品馬先蒿之別名、此乃錯出、

〔倭名類聚抄 二十 草〕茺蔚 本草云、茺蔚、充尉二音、和名女波之木、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕爾雅、萑蓷、郭注云、今茺蔚也、葉似荏方莖白華、華生節間、又廣雅、益母充蔚也、王風中谷有蓷、傳云、蓷鵻也、王念孫曰、蓷者充蔚之合聲、充蔚者臭穢之轉聲、韓詩云、蓷茺蔚也、陸機詩疏云、舊說及魏博士濟陽周元明皆云、菴藺是也、韓詩及三倉說悉云、益母、故曾子見益母而感、案本

草云、益母茺蔚也、故劉歆云、蓷臭穢、臭穢卽茺蔚也、李巡爾雅注、亦同、劉歆、案今益母草氣惡近臭、故有臭穢之稱、曹植藉田說云、葉蓬臭蔚棄之乎遠彊、臭蔚猶臭穢也、古音蔚如鬱、廣雅釋器云、鬱臭也、故茺蔚之草一名鬱臭、陳藏器本草拾遺云、茺蔚田野間人呼爲鬱臭草是也、此草高者三尺以來、其莖四方而葉三岐、五月作花、瓣銳而小、叢生莖節間、郭璞爾雅注、言華白、今則亦有紅者、陶注葉如荏方莖、子形細長三稜、別本注云、其子狀如菥蓂子而稍危大、稍有陳氣、日華子云、乃益母草子也、節節生花、如鷄冠、子黑色、

〔宜禁本草乾部中草〕茺蔚　辛微溫、明目益精除水氣、一名益母、五月九月採葉子、治一切產後血病、瘀疳痢、生葉煮粥食、初春煮作粥、可竹刀切煮、浴新生小兒、不生瘡疥、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕益母草(やくもさう)　茺蔚　益明　貞蔚　猪麻　蓷音推　野天麻　火枕　鬱臭草
苦低草　夏枯草〇中略

按益母草莖似胡麻、而葉似麻、俗云女波之木、其葉梗兩兩對生、而一層指東西、一層指南北、更爲十字、節節著小花、

〔重修本草綱目啓蒙十濕草〕茺蔚　メハジキ　ニガヨモギ　益母草(ヤクモサウ)通名　一名千層塔譬宗言　臭鬱草夏枯草正誤、　負擔附方　透骨草救荒本草　天芝麻　鬱臭苗共ニ同上　目非也叱鄉藥本草　野蘇子草訓蒙字會
反魂丹豐州府志　小胡麻本草必讀　黃通雅

自生ノモノ原野ニ多クアリ、秋中子落テ自ラ苗ヲ生ズ、初ハ地ニ就テ叢生ス、葉形圓ニシテ岐多ク、草烏頭葉ニ似テ薄軟ニシテ毛茸アリ、春以後ハ薹ヲ抽テ漸ク高ク五六尺ニ至ル、莖四稜ニシテ大麻(アサ)莖ノ如シ、葉對生ス、莖上ノ葉ハ漸ク長ク、梢ノ葉ハ艾葉ノ如クナリ、脚葉ノ形圓ナルニ異ナリ、夏秋ノ間葉間ゴトニ、節ニ多ク並ビテ花ヲ開ク、大サ三四分、淡紫色ニシテ微ク紅色ヲ帶ブ、形積雪草(カキドホシ)花ノ如シ、花後實ヲ結ブ、蕚ゴトニ四粒アリ、集解ニ如同蒿子(シンギク)ト云ニヨク合ヘリ、卽茺蔚

子ナリ、ソノ形小長ニシテ四稜アリ、唐山ヨリコレヲ巨勝子ト名テ渡ス、漢渡ノ僞物ナリ、巨勝子ハ烏麻(うごま)子ナリ、故巨勝子圖ニハ烏麻子ヲ用ベキコトナルニ、世上ノ賣藥巨勝子圖ニ多ク茺蔚子ヲ用ルハ、舶來ノ巨勝子僞ナルニヨリテ誤ルナリ、時珍モ藥肆往往以作巨勝子貨之ト云、本草必讀ニ、近世以茺蔚子爲小胡麻、遂冒稱巨勝以售、僞售不可勝言ト云、巨勝ハ茺蔚ニ非ルコト明ニ辨ゼリ、又胡麻集解ニ詳ナリ、然ルニ本草新編ニハ、巨勝子非胡麻ト云ハ大ナル誤ナリ、藥肆ニ賣ルモノ皆和産ナリ、苗ヲ益母草ト云ヒ、實ヲ茺蔚子ト云、苗ヲ賣ルニ多ク鐵刀ニテ剉テ乾カス、然レドモ此草ハ銅鐵共ニ忌ム、故ニ自製シテ用ユルニシクハナシ、

茺蔚

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種〈中略〉茺蔚子六升、

〔武江産物志 藥草〕行德邊　茺蔚〈品川ニモ〉

〔多識編 二草〕茺蔚、今案加通久須利、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕茺蔚　一名天麻草〈白花ノ茺蔚、綱目〉五母麻〈通雅、〉

兩説アリ、藏器ノ説ハキセワタト呼草ナリ、時珍ノ説ハ白花ノ益母草ナリ、藏器ノ説ヲ優トス、キセワタハ江州伊吹山ニ多シ、移シ種テ繁茂シ易シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、方莖高サ四五尺、脚葉ハ益母草ノ葉ニ類シテ厚クシテ毛アリ、梢葉ハ漸ク變ジテ續斷葉ニ似リ、皆節ニ對シテ生ズ、秋ニ至テ節ゴトニ花ヲ開ク、形續斷花ヨリ大ニシテ毛アリ、淡紫色又白色ノ者アリ、花後蕚內四子ヲ生ズ、茺蔚子ヨリ大ナリ、四稜ニシテ長シ、白花ノ益母草ハ、形狀常ノ益母草ト同ジ、唯白花ナルヲ異トス、

羅生門

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕羅生門(らしやうもん)　俗稱〈本名未詳〉

按羅生門蔓草也、葉似胡麻葉而短、三月葉間開小花、深靑〈俗云紺色〉

鼠尾草

〔本草和名（十一草）〕鼠尾草、一名勤（仁諝音巨逢反）一名陵翹、和名美。曾。波。岐。、

〔倭名類聚抄（二十草）〕鼠尾草　本草云、鼠尾草、（和名美曾波木）

〔箋注倭名類聚抄（十草）〕爾雅、勤鼠尾、釋、可以染皂草也、陶注田野甚多、人採作滋染皂、蜀本圖經云、所在下濕地有之、葉如蒿、莖端夏生四五穗、穗若車前、有赤白二種花、陳云、鼠尾草紫花、莖葉堪染皂、時珍曰、鼠尾以穗形命名也、

〔多識編（二草部）〕鼠尾草、美曾波岐、今案俗云美。豆。賀。介。久。左。、七月十五日用之祭鬼、

〔宜禁本草（乾草部中）〕鼠尾草　苦微寒、（白花主白下、赤花主赤下、）治寒熱下痢膿血不止、主諸痢、（煮汁服、亦末服粥飮下、）紫花莖葉堪染皂、

〔和漢三才圖會（九十四末濕草）〕鼠尾草　勤（音勤）　山陵翹　鳥草　水青　（和名美曾波木、俗云水掛草、○中略）

按鼠尾草多出自攝河州、于蘭盆靈祭用鼠尾草供水、因稱水掛草、（無別義、但穗花長以灌水有便耳、）俗傳鼠尾草莖葉浸醋、投陰地、不日蛞蝓化生、亦一異也、海帶浸雨水、則化蛭之類矣、

〔重修本草綱目啓蒙（十二隰草）〕鼠尾草　タ。ム。ラ。草。（種樹家ニテメムラサキト呼ブモノハ、玉ガウキノコトニシテコレト別ナリ、）メ。ク。ロ。グ。サ。（加州）　一名鼠菊（救荒本草）　陵翹（證類本草）　鼠尾子（類書纂要）

春夏秋ノ三品アリ、秋。ノ。タ。ム。ラ。サ。ウ。ハ山野ニ多ク生ズ、冬ヲ經テ枯レズ、脚葉ハ地ニ就テ叢生ス、霜雪ノ時ハ背紫色、暖ニ向ヘバ漸ク緑色ニ變ズ、葉ハ五葉（末三葉ニシテ本二葉對ス）ニシテ鋸齒アリ、又七葉（末三葉ニシテ本二兩對二節）ニモナル、又枝ヲ分テ小升麻（アカシヤウマ）ノ葉ニ似タルモアリ、春以後漸ク方莖ヲ抽コト七八寸、葉對生ス、梢葉ハ三葉或ハ一葉ニモナル、コノ草變葉多シ、八月長穗ヲ成シ花ヲ開ク、ヤマハツカノ花ニ似テ淡紫色、又白花ノモノアリ、皆六七層一節ニ連リ、層層尺餘ニ至ル、一種夏。ノ。タ。ム。ラ。サ。ウ。アリ、形狀同ジ、山ノ幽谷ニ生ズ、五六月ニ花アリ、形チ大ニシテ深紫色愛スベシ、又春。ノ。タ。ム。ラ。サ。ウ。アリ、苗葉花穗共ニ小ク、葉莖トモニ靑シ、春末花ヲ開ク、白色ニシテ至テ小シ、以上三種通

ジテ鼠尾草ナレドモ、秋ノ田村草極テ多ク、集解ノ說ニモヨク符ス、古來誤テミソハギヲ以テ鼠尾草トス、今藥肆モ亦然リ、故ニ和ノ方書ニ、鼠尾草トアルハミソハギヲ用ユベシ、唐山ノ書ニ鼠尾草トアルハ、秋ノタムラサウヲ用ユベシ、ミソハギハ救荒本草ノ千屈菜ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種〇中略 鼠尾草三斤、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 鼠尾草ミゾハギ

〔多識編 二芳草〕藿香、加波美土利、異名兜婁婆香、

〔大和本草 六芳草〕藿香 今藿香トテ世人植ル物アリ、本草所云ト粗相似タリ、只香氣不相類、其葉厚薄亦不同、日本ノ土地不宜ニヨッテ性不好カ、若ハ可為同類異品、中華ノ產ト云ドモ、無香氣ハ不可用、ウヅミ藿香アリ、青葉アリ、用時洗テ少日ニホスベシ、青葉為佳、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕藿香 兜婁婆香 楞嚴經 但羅香 金光明經 迦算香 四分律 鉢多摩羅跋香 法華經〇中略

按藿香多自廣東來、他處舟少有之、

青葉藿香アヲバ 近聞舶來有葉微青者、稱青葉藿香、其芬香甚用合香具、但採葉未黃者陰乾製之、

倭藿香 今有得異藿香種栽之者、春生苗、其高二三尺、節節生葉、似木芙蓉葉而小長、開紫花、似夏枯草花、其香有佳氣而烈、摘葉用鹽泥一宿乾、武州多種之、與唐藿香無異、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕藿香 一名孩去病 事物異名 珍璃藿去病 [illegible]

舶來ニ二品アリ、青葉ト呼モノ異物ナリ、和產ナシ、葉大ニシテ厚ク毛茸アリ、五ツ許剡缺アリテ邊ニ鋸齒アリ、兩對シテ生ジ香氣アリ、古ハ惟其葉ヲ用ヒ、枝梗ヲ用ヒズ、今人ハ枝梗ヲ併テコレヲ用ユ、眞僞多キニ因ル故耳ト時珍云リ、〇下略

〔廣益地錦抄 四〕藿香くわつかう はいまその葉に似て青く、南方へ對して付、葉の間より枝出て、夏の末ふち

夏枯草

色成小花さく、葉を手にてもごけバ香氣甚敷有り、

〔本草和名十一草〕夏枯草蘇敬注云、五月枯、故以名之、一名夕句、楊玄操音上古侯反、下音鉤、一名乃東、楊玄操音尺容反、諸本作東字、一名燕面、一名少可乃東、一名逆草、一名苦枯、一名春草、一名白微、一名華、一名戴逢、已上七名出釋藥性、一名冀英、一名夕可、已上二名出兼名苑、一名少句、一名夏格、一名乃連、已上三名出雜要決、和名宇留比、

〔倭名類聚抄二十草〕夏枯草　蘇敬本草注云、夏枯草、和名宇流木、五月枯、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕蘇注又云、此草生平澤、葉似旋復、首春卽生、四月穗出、其花紫白似丹參花、五月便枯、圖經云、冬至後生、三月四月開花作穗、結子亦作穗、衍義云、自秋便生、經冬不瘁、春開白花、中夏結子遂枯、李時珍曰、苗高一二尺許、其莖微方、葉對節生、似旋復葉而長大、有細齒、背白多故莖端作穗長一二寸、穗中開淡紫小花、一穗有細子四粒、按今俗呼十二單者、可以充之、一種有今俗呼靫草者、是亦夏枯草之類、或曰、本草圖所載滁州夏枯草卽是、

〔多識編二草〕夏枯草、宇流岐、又稱宇豆保久左、

〔大和本草六草〕夏枯草　若水云、葉似金沸草、裏有紫條、花微紅、似空穗草而長、ウツホ草ニハ非ズ、ウツボ草ハ用テ功ナシト云、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕夏枯草かこさう　うつほくさ　燕面　乃東　夕句　鐵色草　和名宇流木、今云宇豆保草、〇中略

按夏枯草出攝河州者最良、丹波次之、穗形似矢簡之靭、故俗曰宇豆保草、

〔重修本草綱目啓蒙十濕草〕夏枯草　ウルキ和名鈔　十二一重　一名血見愁古今醫統　猪屎草本草原始　云鶯壷採取月令　四牛鬪草藥性要略大全　鶯矢壷郷藥本草

山中陰地ニ生ズ、方莖紫色、高サ三五寸、葉ハ旋覆アグルマ花ノ葉ニ似テ粗鋸歯有、又金瘡キランソウ小草ノ葉ニ似テ兩對ス、莖葉ニ白毛多シ、三四月莖頭ニ穗ヲ成シ、小ナル花密ニ綴ルコト二三寸、花大サ三分許、五瓣ニシテ本ハ筒ナリ、金瘡小草花ニ似タリ、色白クシテ淡紫色ヲ帶ブ、又紫碧花白花ノ者アリ、花終

香薷

レバ蕚中ニ小子四粒アリ、熟シテ苗枯ル、乃夏至ノ候ナリ、故ニ夏枯草ト名ク、苗枯ルレバ直ニ根ヨリ新苗ヲ生ズ、春ノ苗ヨリ長大ナリ、冬寒ニ逢テ枯ル、冬至ヨリ新苗ヲ發シ花ヲ含ミ、春ニ至テ開ク、古ヨリウツボグサヲ以テ夏枯草ニ充ツ、今藥肆ニ賣ル所ノ夏枯草皆ウツボグサナリ、然レドモウツボグサハ、滁州夏枯草ニシテ異物ニ非ズ、稻先生ノ說ニモ、夏枯草ハウツボグサニ非ズ、用テ効ナシト、大和本草ニ載ス、ウツボグサハ一名スイ〳〵バナ、江州スイ〳〵、同上スイバナ、佐州スモトリ、泉州ウシボタト、長崎ヒグラシ、雲州シビトバナ、和州シビトノマクラ、同上狐ノマクラ、同上ウバチコ、奧州ウバノチ、同上トリゲグサ、ヤリバナ、マツカサグサ、豐州山野甚多シ、四時葉アリ、形チ薄荷葉ニ似テ微尖リ鋸齒淺シ、冬ハ地ニ就テ叢生ス、春巳後方莖ヲ抽デ、高サ二三寸葉兩對ス、五月ニ至テ六七寸、上ニ穗ヲ出シ、深紫色ノ花ヲ開クコト二寸許、鰹節ノ形ニ似タリ、又深紫色ニシテ青ヲ帶ルモノアリ、又淡紫色深紅色白色ノモノアリ、此草夏枯レズ、夏至以後始テ花アリ、夏枯草ノ名ニ稱ハズ、然レドモ効用ハ近シテ代用スル故ニ、滁州夏枯草ト云フ、

增、按ニ夏枯草夏至ノ候ニ枯レタ、舊草脫シテ直ニ新葉ヲ生ズ、ソノ直ニ新陳相代ルヲ以テ、十二一重ノ名アリ、

〔廣益地錦抄 五〕空穗草(うつぼぐさ)　田野に多生ズ、葉はそ長く多の中より出る、春五六寸に花を出ス、花形松かさのごとく、又空穗に似たるとて、うつぼさうといふ、花の色うす紫なり、此草夏は枯るゆへに夏枯草共云、本草に冬至の後葉を出す、三四月花をひらく、穗をなす、五月かるゝと有、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　滁州夏枯草(うつぼぐさ)　堀ノ內大宮谷邊ノ產　夏枯草 道灌山ニカモン

〔本草和名 十八〕香。薷。〈楊玄操音、而由反〉一名胡薷、〈本名胡薷、石勒諱胡、故改名二香薷一、出雜要訣〉一名茯薷、〈出范注方〉一名鼠趣、〈出拾遺〉和名以。奴。衣。一名以。奴。阿。良。良。岐。

〔倭名類聚抄 十七〕香薷　楊氏漢語抄云、香薷、〈香柔二音、和名以奴衣、〉一云、水蘇、〈今按所出未詳〉

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按千金翼方、證類本草菜部中品、水蘇香薷並載、廣韻亦云䓀、香䓀菜、蓋依唐韻也、本草唐韻非僻書、源君不引此等書、依漢語抄載、非是、又香薷水蘇不同、楊氏以水蘇為香薷別名恐誤、本草圖經云、香薷似白蘇而葉更細、本草衍義云、香薷生山野、葉如茵蔯、花茸紫、在一邊成穗、凡四五十房為一穗、如荊芥穗、別是一種香、李時珍曰、方莖尖葉有刻缺、頗似黃荊葉而小、九月開紫花成穗、有細子、本草、水蘇、蘇敬注云、此蘇生下澤水側、苗似旋復、兩兩相當、大香馥、蜀本圖經云、葉似白薇、兩葉相當、花生節間、紫白色、味辛而香、本草衍義云、水蘇氣味與紫蘇不同、辛而不和、然一如蘇、但面不紫、及周圍槎牙如鴈齒、香少、李時珍曰、水蘇三月生苗、方莖中虛、葉似蘇葉而微長、密齒面皺、色靑、對節生、氣甚辛烈、六七月開花成穗、如蘇穗、水紅色、穗中有細子、狀如荊芥子、可種易生、宿根亦自生、沃地靑苗高四五尺、按水蘇倭產未詳、

〔類聚名義抄 八艸〕䓀 香䓀、イヌエ、　香䓀 同

〔易林本節用集 伊草木〕犬荏（イヌエ）

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕香薷 香菜　香䓀　香菜　香茸　密蜂草 中略○

按香薷今有長刀（ナギナタ）香薷、葉香薷二種、有實如穗蔘者、謂之長刀、惟葉而已謂之葉香薷、是所謂大葉細葉如二種之差、皆用倭、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕香薷　イヌアラヽギ 延喜式　イヌエ 和名抄　ネズミアブラ 奥州 中略○

今ニテハ和漢通名、俗ニナギナタ香薷ト呼モノ異物ナリ、大小ノ二種アリ、共ニ俗ニナギナタカウジユト呼ブ、宿子地ニ在テ春自ラ生ジ、夏以後長ズ、方莖ニシテ枝葉對生シ、毛茸アリ、九月ニ至リ、高サ三四尺或ハ一尺許、枝梢ゴトニ花ヲ開キ實ヲ結ビ、熟シテ苗根トモニ枯ル、小香薷ハ葉ノ形小ク長シ、黃荊（ニンジンボクノ）葉ニ似リト時珍モ言ヘリ、黃荊ハ牡荊ナリ、牡荊ハ五葉一蒂ナルモノナリ、ソノ一葉離シタルニ能似タリ、爵牀（イヌカウジユノ）葉ヨリハ長ク、香氣甚シ、ソノ穗長サ一寸餘、濶サ三分許、ミナ一

ニ連リテ小花ヲ綴リ、數々反張ス、故ニナギナタ香薷ト云フ、ソノ色紫或藍色ヲ帶ブ、大香薷ハ葉圓大ニシテ荏葉ノ如シ、其穗濶長淡紫色、深山幽谷ニ生ズ、其香氣小香薷ヨリ劣レリ、藥ニハ小ヲ用ユ、藥舖ニ售ルモノ二品アリ、一ハ夏月葉ヲ採リ收ムルモノヲ葉香薷ト云、コレニハ假床葉ヲ混ゼリ、一ハ秋月穗ヲ採リ收ルモノヲ、ナギナタ香薷ト云、コレ眞ニシテ僞雜ナシ、是皆小香薷ナリ、大香薷ハ藥舖ニ出サズ、

〔農業全書十 藥種之類〕香薷

香薷是大小あり、小香薷とて葉細く、みどり少たはみて長刀のやうに見ゆる、俗になぎなたかうじゆと云、園に作る事、又干上るまで荊芥にかはる事なし、山野に自ら生ずるが勝れり、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 香薷夜干各十五斤、 大和國卅八種、○中略 香薷澤蘭各十五斤、 攝津國卅四種、○中略 香薷七斤、 近江國七十三種、○中略 芎藭香薷各十五斤、 播磨國五十三種、○中略 香薷烏賊骨各十五斤、 美作國卅一種、○中略 香薷商陸各五斤、

石香薷

〔多識編二 芳草〕石香薷、今案伊和伊努良、異名石蘇、

〔重修本草綱目啓蒙九 芳草〕石香薷 ヤマカウジユ イハカウジユ ヒメカウジユ 一名山茵蔯 中略

時珍ノ説ニ從ヒ、小香薷ノ山中崖石ノ上ニ生ジ、瘠テ小キ香薷ノ香氣烈シキヲ石香薷トスベシ、石トハ小キモノヲ指テ云、駿州富士山ノ麓ニ甚ダ多シ、

假床

〔本草和名九 草〕假床、一名溶赤眼老母草、出蘇敬注 一名雀荏草、出雜門方 一名天香菜、出稽疑 野俗名也、

〔多識編二 芳草〕假蘇、今案古加宇志由、異名赤眼老母草、唐本

〔重修本草綱目啓蒙九 芳草〕假床 イヌカウジユ

荊芥

此イヌカウジユハ原野ニ甚ダ多シ、高サ一二尺、其莖方ニシテ香薷ヨリスルドナリ、枝葉對生ス、香薷葉ニ似テ短クシテ毛少シ、葉ヲ採デ初嗅ゲバ微シク香氣アリ、再カゲバ臭氣ヲ覺ユ、八月枝梢ニ花ヲ開ク、紫蘇ノ穗ノゴトクシテ小ク、香薷ノ穗ニ異ナリ、長サ三四寸許、淡紫色、花ノ大サ一分ニ盈タズ、花後實ヲ結ブ、其蒂ノ形紫蘇ニ同ジ、子熟シテ苗根共ニ枯ル、又白花ナルモノアリ、此外ニイヌカウジユト呼モノ數多シ、

増、一種小葉ノモノアリ、泉州地方海ニ近キ溪澗流水ノ傍ニ生ズ、莖方ニシテ高サ五寸許、葉莖ニ對生シテ、全ク僧狀ノ形ニ似テ小ナリ、臭氣ナシ陸地ニ栽テ能ク生ズ、一種地黃葉ノイヌカウジユト云アリ、高サ二三尺、葉ニ皺多ク、地黃ノ葉ニ似タリ、秋ニ至テ穗ヲ生ズルコト三四寸、相似テ大ナリ、又桑ノ葉ニ似テ莖ニ互生シ、淡綠色ニシテ高サ一尺許ナルモノアリ、コレモイヌカウジユト云、又救荒本草ノ風輪菜モイヌカウジユト云、同名ナリ、又風輪菜ニ似テ小葉ニシテ直立セザルモノアリ、コレモイヌカウジユト云フ、

〔本草和名菜十八〕假。蘇。一名鼠蓂、楊玄操音莫結反、又音茗、音覓、音鈴、一名薑芥、一名荊芥、蘇敬注曰、薑者荊芥此也、是菜中荊芥是也、和名乃。々。衣。一名以。奴。衣。

〔下學集草木下〕荊芥ケイガイ

〔多識編芳草二〕假蘇、野乃惠、異名薑芥別錄荊芥、吳普鼠蓂、本經

〔大和本草卷六〕荊芥　本艸約言曰、性凉而輕、能凉血疎風、諸蒼風熱皆當用之、陳久者良、本艸ニ荊芥反魚蟹河豚一切無鱗魚、又黃鱨魚ヲ食テ後荊芥ヲ食ヘバ吐血シ或死、又曰、服荊芥忌食魚、時珍曰、荊芥乃日用之藥、其相反如此、荊芥ハ穗ヲ用テ良シ、久キガヨシ、魚ト同食スル事忌ム、荊芥ヲ服スル病家ニ教ユベシ、

〔重修本草綱目啓蒙芳草九〕假蘇　ノ。ヽ。エ。古名　ネ。ズ。ミ。グ。サ。南部方言、鼠ノ穴ニ此草ヲ挿メバ出テズ、故ニ名ヅク、　ネ。ズ。グ。サ。

同上　通名荊芥　一名靜風尾(綱目)　鄭芥(本草綱目)　京芥(本草衍義)　一捻金(附方)　再生丹　擧卿古

拜散(共ニ同上)

京師ニ自生ナシ、城州山城ノ鄕長池、和州紀州ニ栽蒔シ藥舖ニ出ス、其苗一年ニシテ枯ル、藥舖ニ售ルトコロノ新種ヲ下シテ生ジヤスシ、苗高サ二尺許、方莖ニシテ葉兩對ス、艾葉ニ似テ小サク、一寸餘ニシテ五枝アリ、莖葉トモニ黃綠色、香氣多シ、莖頭ニ穗ヲ成シ、細小花ヲ開ク、莖葉穗トモニ藥用ニ入ル、南部ニハ自生アリ、藥舖ニ舶來ナシ、此草魚品ニ反ス、

〔廣益地錦抄六〕荊芥(けいがい)　葉はそ長ク切りまはし、見事にあひらしく、草形ながめ有り、花ハ見るかいなし、秋實をむすぶ、取置て二月蒔べし、一年草にて根ハ多枯る、

〔農業全書十藥種之類〕荊芥

けいがいも多く用ゆる藥なり、菜をうゆるごとく、畦作りし、たねをちらしまきをき、苗にしてうゆる事薄荷と同じ、少間遠にうゆべし、六月土用に葉を取干べし、七月葉さかへたる時又取べし、其後七月花咲て刈取あみて干し、其まゝ藥屋にうるべし、少みのらんとする時刈取ものなり、

〔本草和名十八〕薄荷(仁諝音可)唐、

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕薄荷　養生秘要云、薄荷、(和名波加、○今按、薄字所出未詳、)

〔箋注倭名類聚抄四菜蔬〕按本草和名云、薄荷、仁諝音可、薄字諸書無見、恐誤、若是作蘗、希見之字、廣有音釋、而但音可、可證薄字之誤也、又按薄荷當是唐本草之舊、千金翼方、證類本草作薄荷、恐宋人所改、蓋以說文玉篇廣韻無荷字也、然千金方作茇葀、醫方類聚引食醫心鏡作菠葀、亦皆作葀、集韻云、葀菜名、或從呵作䓇、葀字見韻書、是爲始、又證類本草薄荷條引陳士良、有與茇葀胡茇葀、玉篇云、蕿草藥蘗閑、李時珍曰、甘泉賦作茇葀、字林作茇苦、千金方作蕃荷、蓋此草原胡種、無其字、假借薄阿薄可薄何字、或作菝閭蘗閭、後從艸爲蕑可何閭蘗、則作苛非、煩苛之苛、作荷非、夫渠之荷也、(中略)本草

蘇注云、薄荷莖葉似荏而尖長、根經冬不死、又有蔓生者、嘉祐本草引藥性論云、尤與荏作菹相宜、李時珍曰、方莖赤色、其葉對生、初時形長而頭圓、及長則尖、

〔多識編(二芳草)〕薄荷、於保阿良岐、俗稱也末波加、

〔庖厨備用倭名本草(五野菜)〕薄荷(ハッカ)(唐)〇中 元升(非)〇肉 曰、薄荷ハ其香龍腦ノ如シ、故ニ西國俗ニハ龍腦草ト云、風寒ニアタリ、目赤ク痛ミ、眵涙出ルニハ生薄荷葉ニテ目ヲサスリ、或ハ少シ肉ヲアラヘバ、目ノ中スヾシクナリテ、眼疾イエヤスシト云、多識篇ニ水蘇ノ和名ヲ、リウノウクサト云ハ未穩當也、今ノ人飲食ニ薄荷ヲ用フルコトナシ、古人ハ是ヲ用タルベシ、倭名抄飲食部薑蒜類ニ載タリ、食物本草ニモ載タレバ、今爰ニ是ヲ書セリ、吸口ニシテモヨシ、

〔宜禁本草(乾五菜)〕薄荷　辛苦温、下氣發汗、新病瘥人勿食、虛汗不止、能去憤氣發毒汗、破血止痢、通利關節、治傷寒頭痛中風失音、吐痰除賊風、療心腹脹滿宿食、(治小兒驚風)水入耳以汁點立効、衍義曰、薄荷世謂南薄荷、有一種龍腦薄荷故也、能引諸藥入榮衛、去風氣壅并傷寒頭痛、

〔大和本草(六藥)〕薄荷　二種アリ、國俗ニ龍薄荷ト云ヲ用ユベシ、是龍腦薄荷ナリ、氣味香ク辛シ鼻ニトホル、一種非薄荷ト云ハ香氣アシヽ不可用、龍薄荷家園ニウヘ、四五月雨後ニ早ク葉ヲツミトリ、半日日ニホシテ後カゲボシニスベシ、乾シテ後器ニ納メ或厚キ紙袋ニ包ヲクベシ、生葉ヲキザミ膾ニ加ヘ、又煎茶煖酒ニ和シテノム、本艸ニモ茶ニ代ヘテノムト云ヘリ、瘦弱ノ人久ク食ベカラズ、猫クラヘバ酔フ、猫ノ酒ナリト云、猫ノ咬タルニ汁ヲヌルベシ、相制スル也、蜂蛇ニサヽレタルニ葉ヲモンデ付ベシ、

〔重修本草綱目啓蒙(九芳草)〕薄荷　ハカ(和名鈔)　オホアラキ(古名)　メグサ　メハリグサ(西國)　ミヅタバコ(佐州)　メザメグサ(尾州)　一名冰喉尉(綱目拾遺)　炙蘇(壽世保元)　蔢荷(本草原始)　雞蘇(同上、救荒本草、本草彙箋)(本草彙言ニテハ花紫蘇ノ一名、綱目ニテハ水蘇ノ名ナリ、)　英生(郷藥本草)　蔢蕳(品字箋)　番荷(通雅)　菝蔄(同上)　蔢蔄(正字通)

原野ニ自生アリ、根ハ多モ枯レズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、莖方ニシテ葉對生ス、形圓カニシテ淺キ鋸齒アリ、面ハ深綠色、背ハ紫色ナリ、稍長ズレバ綠色ニ變ジ、形長クナル、揉レバ香氣多シ、秋ニ至テ高サ二三尺、葉間ゴトニ節ヲ圍ミテ、碎小花ヲ叢簇ス、色白シテ微紫ヲ帶ブ、藥舖ニ貨ルモノ和產ノミ、舶來ナシ、城州山城ノ郷、和州奈良、泉州堺ニ多ク栽出ス、一種小。葉。ノ。モ。ノアリ、ヒメメグサト呼ブ、一名コハッカ、微ク香氣アリ、是石薄荷ナリ、一種細。葉。ノ。モ。ノアリ、葉濶サ三分、長サ寸餘ニシテ鋸齒アリ、越中ニテハタサト呼ブ、

增、天保十年ノ頃、阿蘭陀種ノ薄荷舶來ス、形容尋常ノ者ニ似テ、肥大ニシテ葉ニ皺文多シ、ソノ氣甚猛烈ニシテ暴臭ヲ帶ブ、葉ニ柄ナクシテ直ニ莖ニ對生ス、尋常ノ薄荷ノ葉柄五六分ナルニ異ナリ、移シ栽テ繁茂シ易シ、故ニ今處處ニ多シ、

〔廣益地錦抄六〕薄荷　宿根より春生、又たねを蒔てよくはへ出、はやくふとげる、葉形は藿香に似て兩對に付、葉のまはりにあらくきざあり、葉の間々より枝多く出る、葉末に花さく、うす白く小細見るにたらず、葉莖に香氣有、少しつまみ切れば、香鼻をとほる、又野薄荷ハ葉はそながくして、へりに鋸のきざみもなく香氣あり、宿根より多ク生ル、本庄邊に生るは異土ゆへにや、香氣甚しく龍薄荷にまされり、兩種ともに花壇に植べし、眼目かゆくむつかしきに、葉をはりてよし、あきらかにしてすゞしむ、又たばこにきざみ入れて用、口中をすゞしむ、

〔農業全書十菜之類〕薄荷

薄荷是も藥に多く用ゆる物なり、作るべし、二種あり、一色はりうはくかとて、氣味のよきあり、是をうゆべし、又ひはくかと云あり、あし、作るべからず、肥地に一度うへをけば、年々自ら生る物なり、たねを取をき、苗にしてもうゆべし、畦作りしうゆる事、菜にかはる事なし、刈時分は小むぎかるころ、下葉色付を、日和を見て刈取、うすくあみて一日ほし、其後日かげにつりて、かげ干にし

て、藥屋にうるべし、是八新の一にて、古きをば用ひず、若二年にこゆるあらば、捨て賣べからず、

〔草木育種 下 藥品〕薄荷 木草 めぐさと云、野土の濕地に栽てよし、魚洗汁折々澆てよし、夏の內刈て一日日に干、それより陰乾にすべし、藥に用るには新き程よし、古きは氣味薄くなるなり、

〔草木六部耕種法 八 藥草〕薄荷ノ作法ハ、大抵藿香ニ同ジ、且此物ハ葉ニ油ノ多キヲ上品トス、油多ク葉ニ湊集ンコトヲ欲セバ、上ニ擧タル温養水五荷ト、人溺一荷、馬溺一荷トヲ調合シテ、時々根傍ニ澆ベシ、如此スルバ油多ク葉ニ集リテ、其香氣ノ烈々タルコト、常ノ薄荷ニ十倍ス、

積雪草

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕積雪草 略〇中 胡薄荷　地錢草　連錢草　海蘇 加岐止乎之 〇中略

按積雪草無枝朶、圓葉一一光潔引蔓可愛、俗名離通(カキトヲシ)也、本草必讀積雪草之圖有枝朶者非也、亦倭名抄以之訓豆保久佐者非也、

〇按ズルニ、ツボクサト、カキトホシトノ辨明ハ、積雪草(ツボクサ)條ニ在リ、參看スベシ、

麝香草

〔書言字考節用集 六 生植〕麝香草(ジヤカウサウ) 本草所謂羅勒(エフラ、ボ)是矣 香菜、蘭香並同、今按本朝俗謂之麝香草

〔大和本草 八 芳草〕麝草(ジヤカウクサ)　彙苑曰、色紅而甚芳香、今按ニ此草葉ハ薄荷ニ似テ少アカシ、手ニテ其莖葉ヲシゴケバ、其香麝香ノ如シ、ジヤカウグサヲ水蘇ト云ハ非也、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕麝香草　俗稱 本名未詳

按麝香草高尺餘、葉似馬蓼(イヌタデ)而厚潤、微有麝香氣、而甚於茴香葉之香、三月開花、單葉淺紅色而小、

水蘇

〔本草和名 十八 菜〕水蘇 一名雞蘇 出兼名 一名勞蒩 仁諝音貲都反 一名芥蒩 仁諝音義作葟、子居反、 一名茈蒩、一名華蓮、一名薺薴 仁諝上音齊、下乃丁反、又女耕反、 和名知比佐岐衣(チヒサキエ)、

〔多識編 二 芳草〕水蘇、今案加良惠(カラヱ)、俗稱利宇那宇久左(リウナウクサ)、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕水蘇 マヽヲガラ 古名 一名婁荷 本草蒙筌 薬 品字箋 勞祖 本草類 雞

和產詳ナラズ、古說ニヤマハツカトスルモノハ穩ナラズ、山ハツカハ一名エグサ、藝州 山野ニ多

延命草

シ、春舊根ヨリ叢生ス、ヒキヲコシニヨク似テ混ジヤスシ、莖方ニシテ兩對ス、葉ノ形紫蘇葉ニ似テ小ナリ、秋ニ至リ莖ノ高サ三五尺、紫花ヲ開ク、穗ノ長サ一尺餘、花ノ形鼠尾草(タムラサウ)花ニ似テ小ク、層ヲナシテ生ズ、葉ニ微シク香氣アリ、味苦シクセンブリノ如シ、

〔大和本草九雜草〕薺寧　ヒキヲコシト云草也、ヤ。マ。薄。荷。トモ云、其葉ノ形如此、略○圖　方莖茂生ス、其草如薄荷、又似益母、微有臭氣、本草芳草類ノ末ニノセタリ、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕延命草　俗云比木乎古之、引起之義、蓋起死之謂歟、

按延命草、和州河州及西國山麓有之、叢生高二三尺、方莖葉並似狗尙麻、六七月枝椏開小花、作細穗結子、其花實似紫蘇、而有香、其葉味甚苦、能治蟲積腹痛、相傳有行人於山中腹痛垂死者、時遇弘法大師登山、令此草吃之、卽立愈、後亦試之皆有驗、因名延命草、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕薺寧

和產詳ナラズ、ヒキヲコシニ充ル古說ハ穩ナラズ、ヒキヲコシハ一名エンメイサウ、トンボサウ大和ムラタチ、仙臺ヲロトレ、雲州ヲロントレ、同州ヲソド、土州山野ニ多シ、春宿根ヨリ叢生ス、ソノ苗甚ダヤマハツカニ似タリ、葉ハヤマハツカニ比ブレバ稍長クシテ尖リ、色淺クシテ白毛アリ、秋枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、ヤマハツカヨリ後レ、八九月ニ開ク、穗ハヤマハツカヨリ長大ニシテ枝多シ、花ハ形小クシテ色淺ク、牡荊花(ニンジンボク)ノ形色ニ似タリ、又紫花ナルモノアリ、皆ソノ莖葉甚苦シ、故ニ仙臺ニテ蟲オサヘノ藥ニ用ユ、藏器薺寧ハ味辛溫ト云ヒ、又可為生菜ト云フ、ヒキヲコシハ味苦ク且臭氣アリテ、生食スベキモノニ非ザレバ、薺寧ニアタリガタシ、

迷迭香

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕迷迭香　マ。ン。ル。サ。ウ。　マ。ン。子。ン。ロ。ウ。　一名迷迭香郡代醉編

紅毛ノ產ナリ、苗ハ小木ノ如シ、高サ一二尺、枝葉對生繁茂ス、葉細長シテ甚厚シ、濶サ一分餘、長サ一寸許、面深綠色ニシテ、背ハ白シ、香氣多クシテ[illegible]ノ氣ノ如ク、又排草香ノ如シ、花ハ葉間ニ生

ズ、蔓荊子花ニ似テ白クシテ淡紫碧ヲ帶ブ、秋ハ色淺ク冬春ハ色深ク盛ニ開ク、花後蕚中ニ一子アリ、形黍ノ如ニシテ、稜ナク、黒褐色ナリ、

古事類苑

植物部二十三

草十二

〔新撰字鏡 七草〕茄 求伽反、茄子、又荷莖也、

〔倭名類聚抄 十七菜蔬〕茄子 附鹼字 釋氏切韻云、茄子一名紫瓜子、茄音伽、和名奈須比、崔禹錫食經云、茄子味甘鹼、唐韻カ減反、鹹味也、鹼音初減反、酢味也、俗語云惠久之、溫有小毒、蒸煮及以水釀之食爲快菜、

〔伊呂波字類抄 奈植物附噉物具〕茄子ナスビ 紫瓜子 同 崑莪 落蘇ナスビ 出拾遺、已上二名見本草、

〔下學集 下草木〕茄子 又名落蘇、又名崑崙瓜、花時取葉布路、人踐之、則其實多生也、

〔和爾雅 七菜蔬〕茄 崑崙瓜、昆侖紫瓜、草鼈甲 銀茄シロナスビ 水茄ミヅナスビ 青茄アヲナスビ

〔東雅 十三穀蔬〕茄子ナスビ 義詳ならず、倭名鈔に註せし所に依らば、ナとは中也、スとは酸也、ビとは實也、其實の味澀りぬるをいふ也、倭名鈔茄子の下に、鹼字を附して、崔禹錫食經に、茄子味甘鹼といへり、唐韻に鹼は鹹味也と見ゆ、鹼は酢味也、俗にエグシといふと註せり、今俗にエグシといふ、されど古の時に是を酸澀の味となせしと見えたり、諸家の本草によるに、字のエグキ、茄子のシアキ、並に澀なもて云ひけり、酸味には同じから

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一なすび なす。

〔見た京物語〕茄子をなすびといふ

〔本朝食鑑 三菜〕茄 訓奈須比、

集解、茄者四方民間多栽之以貨之、二月下種、四五月移苗五六寸者、至高二三尺、葉大如掌、莖紫黑有刺、自夏至秋開紫花、五瓣相連、五稜如縷、黃蘂綠蔕、蔕包其茄、茄中有瓤、瓤中有子、子如脂麻、其茄有團、有長四五寸者、有大如斗者、色有青紫白及雜青紫黃斑、既老則變成黃、白如銀者其味不佳、故種之者少、

〔和漢三才圖會百一蓏菓〕茄子　落蘇　崑崙瓜　草鼈甲　和名奈須比

本綱、茄子種宜於九月黃熟時收取、乾至二月下種移栽、株高二三尺、葉大如掌、自夏至秋開紫花、五瓣相連、五稜如縷、黃蘂綠蔕、蔕包其茄、茄中有瓤、瓤中有子、子如脂麻、其茄有團、如栝樓者長四五寸者、有青茄、紫茄、白茄、白茄一名銀茄更勝青者、諸茄至老皆黃也、茄葉摘布路上、以灰圍之、則子必繁、謂之嫁茄、茄多食必腹痛下利、國人又下於暖處厚加糞壤、遂於小滿前後求貴價以售、既不以時、損人益多、茄類有數種、

渤。海。茄。白色而堅實、　番。茄。白而扁、甘脆不澀、生熟可食、　紫。茄。色紫、蔕長味甘、　水。茄。形長味甘、可以止渴、

江南一種藤。茄。作蔓生、皮薄似壺盧、

交。嶺。茄。樹。經多不凋、有二三年漸成大樹者、其實如瓜也、

大明一統志云、蘇門荅剌有大茄樹者、乃此類也、〇中略

按、茄子白者味不美、黑者次之、紫者最良、小而多結子者、俗呼曰錫。杖。茄。、皆二月下種、芒種前後移栽、有早晚、其早者六月取食、俗稱伊羅里、小而圓、其瓤稍硬、晚者七八月取之、大而帶長結子不多、味最美、故諺云、勿令食秋茄於子婦、又有長如瓜者、味不美、故人不種用、

〔重修本草綱目啓蒙二十蓏菓〕茄　ナスビ　ナス〇中略

數品アリ、色紫ニシテ形圓ナル者ハ尋常ノ茄ナリ、コレヲ荷。包。茄。廣東新語ト云、土地ニ隨ヒ皮ニ厚薄

茄子栽培

アリ、薄キ者ヲ良トス、臨桂縣誌ニ、徑五寸者名合包茄ト云、形圓ニシテ横ニ濶ヲ好トス、又横ニ濶シテ堅ニ又ヒダアル者ヲキンチヤクナスビ(南部)ト云、豫州松山ニハアフギナスビアリ、形扁ク縱ニヒダアリテ、本狹ク末廣ク一尺許アリ、又一蔕ニ七八實ナルモノアリ、又一莖ニ連珠シテ重リ生ズルモノアリ、又尾州勢州ニハ、白色ニシテ圓ナル者アリ、卽チ白茄一名銀茄ナリ、和名ニギンナスビト云ハ別ナリ、一名キンナスビ、タマゴナスビ、是ハ苗小ク實モ亦小シテ雞卵ノ如シ、初ハ白色、熟スレバ黃色、故ニ漢名黃茄(肇慶府志)ト云フ、此書ニ黃茄ト云ハ、タネナスビニシテ、常茄ノ黃熟スル也、附方ニ黃老茄子老黃茄ト云是ナリ、又形長キ者アリ、ナガナスビト云、卽水茄也、筑前及東國ニハ長サ尺ニ過ル者アリ、色白シテ長キ者モ筑前ニアリ、又綠色ナル者ハ水ナスビト云、奧州ノ產ナリ、群芳譜ニ、一種水茄、形稍長、亦有紫青白三色ト云、

增、酉陽雜俎云、有新羅種者、色稍白、形如雞卵、コレ卽和名ノタマゴナスビニシテ、肇慶府志ノ黃茄ナリ、格致鏡原引花木考云、大食國茄樹、高丈食(餘○食誤)經、三四年不凋、子大如西瓜、重十餘觔、以梯摘之、又南方草木狀ニ、茄樹ノコトヲ云ヘリ、阿州海部郡出羽島ニ、茄子年ヲ經テ枯レズ、三年ニ至レバ子ヲ結ブコト甚少ナシ、冬月掩ハザレバ苗枯ル、又秋ニ至テ大ニナラズシテ、芥蘭トナスベキモノヲ、俗ニヒトクチナスビト云、卽遵生八牋ノ牛𡚱茄ナリ、

〔延喜式(三十九/內膳)〕耕種園圃

營茄一段、種子二升、總單功卌一人、耕地二遍、把犂一人、取牛一人、牛一頭、畦料理平和三人、下子半人、(三月)採苗一人半、殖功十人、(四月)壅二遍、第一遍三人、(五月)第二遍三人、(六月)芸三遍十八人、(度別六人)

〔本朝食鑑(三/菜)〕茄

茄之樹葉莖生小黑蟲、如黑胡麻子、又生青蟲如芥子者、俗稱油蟲、黑蟲易除、油蟲不能取捨、故盡葉及芽易枯萎、欲避之、四五月移苗時、用竹針刺根莖之分處、入眞硫黃末而植之、則不生蟲、近時種茄四五

樹、自七八月至九十月、毎旦采茄子七八個作蔬、其法、前年九月、先掘好地、方三尺深三尺許、以爲窖、窖中充糞、至十一月十二月、其糞乾減半時、復取溝渠泥以充其半、至正月又減半時、取園圃之好土以充其半、經四五日、鋤耕其窖中之糞土、取出攤于地上、暴乾十日餘、而別復用好土揉合、以埋窖中、與地令平均、至春二月彼岸時、耕其糞土下種、其苗至五六寸許、殘留其中最長者五個、而要長後枝葉不相捐、若相捐易枯、其餘苗悉拔去、移栽于他圃矣、五個殘苗過尺時、於早晨日出已前、用好硫黄細末、入馬尾篩、飛于苗上、則不生油蟲黒蟲也、

〔農業全書〕三菜茄

なすびに紫白靑の三色あり、又丸きあり、長きあり、此内丸くして紫なるを作るべし、餘はおとれり、丸きは味甘く和らかにして肉實し、料理に用ひ能煮ても、みだりにとけくだくる事なし、かうの物其外にも專ら是を用ゆべし、又長き茄子にをそく老て大なるあり、是又よきたねなり、種子を收め置事、二番なりのうるはしきに札を付置、九月よく熟したるをわりて、子を水にて洗ひ、洗たるをゆり取、其まゝよくさらし乾し、さら〳〵とする程よく干たる時、收め置べし、又丸ながら庭の火たくあたりに埋み置て、春ほり出し、洗ひゆり取、灰に合せ蒔もよし、是早く萠るなり、又二つにわり、かづらなどにつらぬき、軒の下につりをきて、蒔時ぬる湯にひたし、しばし有て子を洗ひ取、灰沙に合せ蒔もよし、苗地の事、冬より度々うち、細かにこなしをきたるを、正月早くこゑをうちよく〳〵こやし、細かにこなし、塊少もなくして、畦作り横三尺あまりにして、正月雪きえて蒔べし、所により二月の中を以て、蒔たるもよし、又一說に、苗地をいかほどもよくこしらへ熟しをき、三月の初雨を得て蒔たるは、二月蒔たるにをとらず、却て早く生ずるものなり、或盛長の早きを望む者は、種子を灰と肥たる細土に交せ、ゆるりの邊り火氣近くをき、又あたゝかなる日は外の日にあて、家の內にて萠たるを、世間漸く暖かになりて後、よく才覺して苗地にうつすべし、

さて苗地のこしらへは、馬糞を埋みこゑをうち、冬より晒し置たるに、何にてもやき草を用意し置、寒氣も漸く退きたる比、土のこがるゝ程やき、細かにかきならし、むらなく蒔て、灰糞と肥土とを合せ、種子おほひ指の厚さにして、かるく踏付、古むしろ古ごもにてもおほひ置、晝の間はおほひをのけ、日にあて、消に小便を少し合せ、或水糞を合せて、わらのはゝきにて、日中に小雨のふりかゝる樣に、度々ふりかくれば、夕立のする心にて、苗ほどなくふとりさかへ、時ならずうへしほどなる物なり、尤豐かなる肥地やしき内などの肥熟したるに、移しうゆれば、四月に早くなる物なり、さてうつしうゆる事、早麥を間を廣く蒔て、中うちを細くしをきたるに、一本づゝうゆべき所に、穴の深さ五六寸ほどにほり、やき土を一盃入、其上より濃糞をかけをきて、さて苗のふとるにまかせて、うつしうゆべし、尤燒ごゑなくては、他の糞土にても入べし、麥の中なるゆへ、うるほひなくても、晝過よりうへて、消を少そゝぎをけば、痛む事なし、茄は移しうゆる事、少は遲くなるとも、苗よくふとり、草のせいつよくなりてうへたるは、早くあり付てさかへやすき物なり、いまだちいさくよはき苗を、いそぎて早くうへたるは、ありつきおそき物なり、すべて苗を取うゆるに、うるほひある時、ほりくいにて、根のきれぬ樣にほり取べし、うるほひなくば、水をそゝぎてほり取べし、手あらく引とれば、いたみてありつきおそし、又うゆる法、茄子をうゆる麥、畦は、麥を蒔時より、凡其間の總程をはかりて、たてのならびは一尺二三寸、横の間は一筋は二尺はかり、一筋は三尺餘にし、草を取糞をする時も、廣き筋を通り、せばきはとほらずして、培ふ事も廣きすぢばかりより、土をかい上れば、せばき筋の中は小溝と成て、うるほひをよくたもち、又は糞水をそゝぐにも、此みぞよりながし入れば、うるほひともなり、根の土廣く厚ければ、わき根よくはびこり、風雨の時たをれず、其上根に日風とをらず、旁以てよくさかへしげりて、實多くなる物なり、但一茄子一つ二つなるまでは、少土かひて、根に糞だまりを、くぼめ置、水糞と小便をたび〳〵かくべし、小便は五日に一度ほどかくべし、凡なすび二ツ三ツもとる時分、草だち大きになりて後、右にいふご

どく、ひろみぞのかたより、おほく土かふべし、小傾は秋までもかけたるがよし、茄子たばこなど、葉ひろくさかへ、上の重き物の類は、何れも木の動く事を嫌ふゆへ、培ふ事を厚くし、少は堅くすべし、又麥をまかず菜園などにうゆる事は、細雨の中か、晴たる晩方、苗の土ぎはの所を紙にて卷てうゆべし、日おほひは、ふきの葉、桐の葉、何にても少しおほひてよし、尤こもなどにておほふは、上もなく宜し、覆よければ早にうへてもいたまず、茄子は肥過てあしき事なきゆへ、夏中は云に及ばず秋に成ても、糞水を五七日もをきて、たび〳〵そゝぐべし、しかればます〳〵さかへ實多し、又云、苗を移しうゆる時、立根の先を少ばかりきりたるは、わき根に力入てよく有付物なり、又は立根の先長ければ、底のにが土に當りて、痛みかゝる事あり、いか樣長き立根あるをば、少ばかりづゝ切てうゆべし、糞しを用る事は、くろきしん葉少出て、よくあり付たるを見て、根のわきをかきくぼめ、鰯にても油糟にても入て、土をおほひ置、ふとるに隨て段々多く入べし、されども二色の糞の求めなりがたくば、わきを能程ほり、粉糞を入、其上に濃糞度々かくべし、又硫黄を粉にして、根のわきに少入れば、よくなりてふとく、味も常にまされり、凡一本に豆粒ほど置とあれども、薄茶一服程も入べし、甚驗あるよし、農書に記せり、茄子は小き時つよき雨にあへば、根の下の土をたゝき上て、葉をけがせば、痛む事あり、うゆる時大雨ならばうゆべからず、苗を植て後、根の廻りの土をきれいにをし付て置べし、切虫の用心ともなるべし、又茄子を區うへする事は、冬の中うゆべき畠の中に、はゞ二尺四方、ふかさ一尺四五寸に穴をほり、其中に牛馬糞、其外何にてもこやしに成べき物を半分も入、其上に土を一重かけ、其上より又濃糞を多く入、土をおほひ置て、さて雪のふりつみたるを、穴の所にかきあつめて、上をふみ付をき、春苗のふとるを待て、うゆる事前のごとし、一區に三四本うゆれば、草立の高き事五六尺もありて、枝葉殊にさかへ、其實り勝れて大きにて、甚多くなるなり、芋瓜などもかくのごとくしてうゆる法あり、土地のすくなき所にて、取分用てよき法なり、

〔宜禁本草乾五菜部〕茄子 甘寒、久冷人不可多食、損人動氣、發瘡及痼疾、熱者少食之、冷者即損胃氣、 根莖葉、煮湯洗凍脚瘡、茄蒂灰止腸風下血、食前米飲下、

〔大草家料理書〕一生青貴料理之事、中略 ○ すましみその時は、なすびを酒煎にしても吉也、

〔本朝食鑑三菜部〕茄

凡今賞茄子者、不調蔬食、而醃藏糟糠味噌漬呼稱香物、以經年之用、而上下賞之、故民家多需而貨之、

〔養生訓四飲食〕茄子本草等の書に性不好と云、生なるは毒あり、食ふべからず、煮たるも瘧痢傷寒などには誠に忌べし、他病には皮を去り、切て米泔に浸し、一夜か半日を歴て、やはらかに煮て食す、害なし、葛粉水に浸て切て線條とし、水にて煮、又豉汁に堅魚の末を加へ、再煮て食す、瀉を止、胃を補ふ、保養に益あり、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜部〕茄

本邦ノ俗瘧疾ヲ患フルモノ、必ズ茄ヲ食フコトヲ忌ム、甚キニ至テハ、茄圃ヲ過ルモ亦再發ストスト云、然ルニ唐山ニテハ乾茄子ヲ以テ瘧疾ヲ治ルコト、釋名ノ注ニ見ユ、又格致鏡原ニ、芝田錄ヲ引テ、茄子ノ瘧ヲ治スルコトヲ云ヘリ、蓋シ茄子熟スルニ至ルト雖モ、蒂落ズシテ仍枝上ニアリ、故ニ瘧ノ落ズト云フコトヲ忌テ、久シテ風ヲナシ、遂ニ醫家患者ヲシテ禁ゼシムルニ至ル、

〔雅筵棲象記〕茄子の性寒、本草に曽言ふ、人を損じ氣を動かし、瘡及痼疾を發し、人をして腹痛下痢せしむ、

余江濱曰く、此の二の物○茱茄子、毒ある事、本草に述ぶる如し、然れども吾日本これを喰ふをつねとす、其の毒に當る事なし、

〔延喜式三十三大膳下〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、中略 ○ 茄子六顆半、醤漬料二顆、糟漬料二顆、醤料一顆、搗蒸料一顆、中子料半顆、○中略 干茄子五勺、

〔延喜式　内膳三十九〕供奉雜菜
日別一斗、○中略茄子卅顆、准二升、六七八九月、

〔續々修東大寺正倉院文書　四十六帙六裏書〕藍園茄子送進文
藍園進上
　茄子伍斛
　　天平勝寶二年六月廿一日　　　　　　　　　　　賫人倉垣三倉

〔執政所抄　下七月〕七日
乞巧奠　供物○中略茄子作丸盛之

〔類聚雜要抄　一〕一供御御齒固従内膳司貢定、自弓場殿獻之、従元日至三日、
用途料　山城國○中略奈良御園茄子、蕪菁、

〔年中恒例記〕九月十三日
明日御祝參、於内儀也、茄きこしめさるゝ、御祝調進儀、八月十五日同、

茄子產地

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略得萬民追從、宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略山城茄子、

〔毛吹草　三〕山城　狛茄子外ニ早シ

〔雍州府志　六土產〕茄子　處々種之、或有紫茄黄茄白茄之異、然紫色者爲佳、其於形狀也、或有細長者、民間稱長茄、然風味不及圓大者、洛東河原之產爲殊絶、

〔浪花の風〕茄子は長茄子の方多し、尤常の茄子も有れども、風味は同様にして優劣なし、いづれも色合等、江戸よりはあしき方にて、漬物などにしても美ならず、

〔續江戸砂子　一〕江府名產井近在近國

茄子價値

千住茄子　足立郡也、江戸より二里東に當り、

寺島茄子　西葛西の内也、中の郷の先、江戸より一里餘、

形長きあり、丸きあり、横ひらくしてみぞあるあり、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造佛所作物帳斷簡年紀不詳、按成卷文書四十五卷、有天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、

買雜菜直錢廿一貫七百十六文〇中略

茄子十一斛直一貫三百五十六文二斛五斗六升、升別二文、八斛四升四斗、升別一文、

〔時慶卿記〕慶長八年五月廿七日、茄子初而賣買アリ、

〔德川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

覺〇中略

野菜もの之儀、節に入候日より賣出之事、

一なすび　　五月節より

〔日次紀事七月〕凡茄子自此月尾至九月首、其味特美、俗言秋茄子不欲使婦食之、凡婦姑間多相惡、故不欲使婦食味良者、此言元出自姑語、

〔安齋隨筆後編一〕一秋茄子　秋茄子嫁にくはせぬ歌、秋なすびわさ、のかすにつけませて嫁にはくれじたなにおくとも、夫木集にあり、予按に、生々編、茄子性寒利、多食必腹痛下利、女人能傷子宮也と、これに據る歌なるべし、俗に茄子味佳也、姑たる者嫁を憎みて食すまじきと云意也と解くは牽强すべし、ワサヽは早酒新酒也、

〔頭注〕秋なすび云々、夫木にありといへるは誤也、此歌春雨抄に出たり、

〔筆のすさび一〕一熊茄子をいむ事　熊は茄子をいむ、深山の人薪をこりにゆくに、かならず茄子を帶ぶことを見れば、熊必ずはしりさる、茄子野にあるときは、熊膽小なり、茄子なき時は大なり、

茄子を見せてとりたる態は、臆かならず小なりとぞ、(中略)高橋文交話

〔梅園日記　四〕夢茄子

一富士、二鷹、三茄子とて、これらを夢に見るを吉徵とす、その子細をしらず、笈埃隨筆に、或人いふ、この三事、夢の判にあらず、皆駿州の名產の次第をいふ事なり、富士はさらなり、二鷹は富士より出る鷹は、唐種にて良なり、こまかへりと云、三茄子は此國第一に早く出す所の名產なりとみえたり、しかるに唐土にては、茄子を夢に見る事を忌なり、宋の樓鑰が攻媿集七十二に、劉允叔夢茄子、而作含薪題其後して云、退之送窮而延上坐、子厚乞巧而甘抱拙、若允叔之含薪、則眞驅之、雖未能絕紫瓜之生、畏君之飼、自爾當不復敢入吾夢矣、然此種一名不落、彼夢滿甑三顆、不妨甲科釋褐者、殆以此、又似不必力驅之也、爲書其後、以壯昆季西上之氣、(含薪は周禮占夢に、舍萌于四方、以贈惡夢、注に、玄謂、舍讀爲釋、舍萌猶釋菜也、萌菜始生也、贈送也、釋文に、萌莫耕反とあり、)西湖遊覽志餘二十二、(委巷叢談)紹興二年、兩浙進士、類試於臨安、湖州談誼謁上天竺觀音、祈夢、夢人以二樣貯六茄爲餽、惡之、蓋杭人以茄爲落蘇、而應試者、以落蘇爲下第也、

〔甲子夜話　五〕樂翁ノ話ラレシハ、世ニ一富士二鷹三茄子ト謂コトアリ、此起リハ神君駿城ニ御坐アリシトキ、初茄子ノ價貴クシテ、數錢ヲ以テ買得ルユヱ、其價ノ高キヲ云ハン迚、マヅ一ニ高キハ富士山ナリ、ソノ次ハ足高山ナリ、其次ハ初茄子ナリト云シコトナリ、彼土俗ハ足高山ヲタカトノミ略語ニ云ユヱナルヲ、今ニテハ鷹ト訛リ、其末ハ三物ハ目出度モノヲヨセタルナド心得、畫ニカキ掛テ翫ブニ至ルハ、餘リナルコトナリ、

〔嬉遊笑覽　十上飲食〕初ものを賞すること、昔も今もかはる事なし、唯賞するものとさもなき物と有り、茄子は昔はめでたる物なり、犬子集、庄屋さへやく田樂を食かねてと云句に、(意斷)初茄子とて守護にとらるゝ、寛永發句帳に、(幸和)初なりや先是式のさゝげ物、(此句瓜茄子の句中にあり、其頃賭路を是式と云り、)永代藏(貞享五年)東寺邊りの里人、茄子の初生を目籠に入て賣來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つ

に三文に直段を定めと云り、これ其頃初茄子の價なり、五元集、さみだれや酒句でくさる初茄子、寛永ごろの吟なるべし、そのかみ駿河より五月出すを初茄子とす、今は年の寒暖に拘らず、三月に砂村より出るなり、初茄子の貴賤こゝのみにも非ず、東京夢華錄大内の條下に、其歳時果瓜蔬茹新上市、并茄瓠之類新出、每對可直三五十千、諸閤分爭以貴價取之、また秋茄子わさゝのかすにつけませてよめにはくれじ棚におくともといへる古諺あり、望一後度千句、のこれるもはや末なりの秋茄子にくまれにたる姿がしうとめ、大帶に、なれ〳〵なすび、せどのやのなすび、ならねばよめの名のたつに、落陽集に、切形や青梅水に茄子浮、〈元好〉靈籠茄子の浪に寄にけり、〈古友〉今まつもどきといふやうに切たるなるべし、松もどきとは、松茸に似せて切たるなり、又丸ながら竪にきりめを多く付る茶筅茄子と云ふ、所見なけれど、近頃の名には有べからず、又竪に二つにわりてきり目付たるは、蓮の花びらに似たり、これを蓮花茄子といへり、矢の根鍛冶後集、和尚への馳走精進物もれんげ茄子、雙紙輪伊勢講は料理にも蓮花茄子、といふ付句あり、

〔本朝無題詩七雜體詩六〕寄茄屋津有感　同人〈釋〇蓮禪〉

沙月清風秋艤々、自然遊子感吞胸、同津上下客舟集、分岸東南民戸重、〈夾岸有二庄、土民比屋云、〉土俗每朝先賣菜、〈賣瓜、賣茄〇〇、土人賣之故云、〉釣魚終夜競燒松、〈漁舟每夜燒松也、〉不圖再到於斯地、思舊闌干涙忽降、〈往年赴國之路泊、今又來故云、〉

〔翰林葫蘆集二〕紫茄含囊傍籬笆、再摘分來野老家、堪咲一僧參求命、夜行踏殺作蝦蟆、　題茄畫

〔鷺峯文集百五〕茄子〈爲擇之賦〉

誰家圃裏植僧茄子、雜葉之青其實之紫、既見於眼、宜味于齒、孟乎莊乎、須辨彼此、

〔大和本草九雜草〕唐ガキ　又珊瑚茄〇〇〇ト云俗名ナリ、葉ハ艾葉ニ似テ大ナリ、又南天燭西瓜ノ葉ニ似タリ、綠葉小片兩々相對シテ大小相挾メリ、實ハホウヅキヨリ大ニシテ帶ナシ、熟スレバ赤シ、其サネハ龍葵ノ如シ、稻若水曰、天茄子ナリ、老鴉眼睛茄ヲモ天茄子ト云、ソレニハ非ズ、

蕃椒名稱

〔書言字考節用集 生植 六〕白芥 蕃椒 同

〔物類稱呼 生植 三〕蕃椒たうがらし　京にてかうらいごせうと云、大閤秀吉公朝鮮を伐ち給ふ時、種を取來る、故に此名有、西國及奥の仙臺にてこせうといふ、東國にて眞の胡椒をのみこせうといふ、出羽にてとこぼしといふ、但奥羽のうちにてもなんばんと稱する所もあり、上總及參遠にてなんばんといふ、越前にてまづものこなしといふ、是は江戸にて番匠の隱語に、かけやといふもおなじ心なり、

〔倭訓栞 後編 多 十一〕たうがらし　番椒也、秀吉公朝鮮征伐の時種を得たり、よて高麗胡椒といふと、貝原氏説也、色に黃赤ありて百餘品に及べり、出羽にとこぼし、參遠總に南蠻、西國仙臺に胡椒といふ、東國に眞の胡椒をえのみこせうといふ、味甘き一種あり、

〔內安錄〕長崎にて蕃椒を胡椒と唱へ、トウガラシは、唐を枯しといふ同音なれば、必ず胡椒といふ、長崎の地役人共、唐船の爲に扶助せらる、なれば、唐國を尊み敬ふ事如此、

蕃椒種類

〔成形圖說 菜 二十五〕唐芥 卽番椒也、芥菜に倣て命ぜし名なり、里言にマヅモノコナシなども呼べり、 南蕃胡椒 或說に原その種を蕃國より漢國に傳ける故に 高麗 かくいへり、我東北國にてはたゞ南蕃とのみいひ、九州地方にては胡椒とのみいふ、胡椒は都蕃地よりいづる蔓艸の實にして味辛し、故に此物の辛よりその名を借用るなり、
胡椒 或曰、豐太閤朝鮮を征し時に、此種を携來しより、この名ありといへり、○中略
大なるは實の長さ五六寸にいたる、幹立は七八尺に近し、頃間花師養得て目て一丈紅といふ、小なるは鳩爪の如し、目て鷹爪といふ、圓大なるは王瓜の如く微尖あり、目て胡頹胡椒と云、圓小なるは南天燭子の如し、その實上に向ふをば天上守など呼べり、遵生八牋云、白花子儼如禿筆頭、又下に垂るものを垂胡椒とも、下胡椒とも稱ふ、一種短肥にして味辣からずて甘きものあり、是を甘唐辛子といひ、黃熟のを黃唐辛子といひ、金橘の如きのを金柑唐辛子など呼べり、其種族多く皇國に入て化生れるなり、蓋暖地に生ものは最辣し、本藩〇鹿兒島南邊に生ふるは愈太く愈辛し、其木冬を經て槁れず、又南島に及び沖繩に至りて、皆木本となりて、高さ四五尺に長ッ、宛然として一灌木に似

蕃椒傳來

たり、さらば椒屬にして、南方の水土に應ひ、その本邦西土に入ては、自艸本と變れるにぞ、亦奇むべし、

〔經濟要錄 四〕諸菜

番椒ニハ數種アリ、其丈ケ二丈餘ニ至ルアリ、十丈辣茄ト名ク、龍葵ノ子ノ如クナル有リ、金橘辣茄ト名ク、其實丸クシテ茄子ノ如クナル有リ、或ハ長クシテ筆ノ管ノ如クニ尺餘ニ及ブ者アリ、深紅色アリ、黄色アリ、下野ノ國日光、及ビ江戸内藤新宿名產ナリ、

〔對州編年略 下〕慶長十年、此比自朝鮮蕃椒渡、

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕番椒 番者南番之義也、俗云南蠻胡椒、今云唐芥、○中略

按番椒出於南蠻、慶長年中、此與煙草同時將來也、中華亦大明之末始有之、故本草綱目未載之、

〔鹽尻 九十二〕番椒我國是を食する事、百年に過ず、淡婆姑と相前後す、俱に蠻人より傳へ種して、今世に廣く食ふ、むかしはもろこしになかりしにや、本草等に見えず、近代明の黄氏が畫譜に是を載す、今我國見る所、實の大なる小なる圓にしてほうづきの如き、長くしてくこの實の如き、黄なるも紫なるも、種々ありて、愛觀すべき物也、

〔本朝世事談綺 二 生植〕番椒

秀吉朝鮮征伐の時、はじめて取來ると云、又慶長十年、たばことおなじく蠻國よりわたるともあり、南蠻胡椒と云、中華には番椒と云、番は南蠻の事也、

〔草木六部耕種法 十七 實〕抑蕃椒ノ最初ハ南亞墨利加洲ノ東海濱ナル伯西兒國ヨリ生ジタル物ニテ、天文十一年ニ波爾杜瓦爾人ノ持來ル所ナリ、○中略故ニ西洋人ハ此物ヲ「ブラシリペイプル」ト名ク、「ペイプル」ハ辛キ實ノ義ニテ、胡椒ヲ番人ハ「ペイプル」ト呼ブナリ、

〔成形圖說 二十五 菜〕唐芥○中略

此種の皇國に入しは、文祿の比ほひ、烟草と共に將來ると云、

蕃椒栽培

〔農業全書 四菜〕蕃椒

苗を種る事、又埴ごしらへの時分も、皆茄子と同じ、苗長じて後移しうゆべし、其實赤きあり、紫色なるあり、黄なるあり、天に向ふあり、地にむかふあり、大あり、小あり、長き短き、丸き角なるあり、其品さま〴〵おほし、手入よければ、一本にも多くなる物なり、盆にうへて雅玩をたすく、人家おほき大邑に近き所は、多くつくりて賣べし、其性つよきものなり、つかへたる食氣を消じ、氣の滯を散じ、脾胃をくつろげ、魚肉などのあしき氣をけす物なり、

蕃椒利用

〔大和本草 附錄一〕蕃椒　能ホシ、ヨクカハキタル時、俄ニ末シテ糊ニ和シ、紙或綿布ニヒロゲ、凡人身疼痛ノ處ニ貼ベシ、能愈ユ、腹痛ニハ腹ニ貼、頭痛ニハ頭ニ貼、手足痛ニハ其處ニツク、甚效アリ、時氣感冒ニハ、三四ノ椎ノ間ニ貼テ、被ヲアツクキテ汗ヲ出スベシ、又蕃椒青キ時トリ、糊ニスリタダキ鹽ヲ加ヘテヲサメ置、諸食ニ少加フ、蕃椒ヲ諸鳥好ンデ食フ、鷄ナド甚好ム、諸鳥ノ藥ナリト云、猫ノ藤天蓼(マタヽビ)ヲ好ンデ食フガ如シ、

〔一話一言 一〕蕃椒西瓜の毒を治す

西瓜に食傷したるには、蕃椒を一味きざみて煎じ用ゆれば、卽座に瀉して毒を解するよし、德廟(德川吉宗)の御時、朝鮮の聘使西瓜にあてられたる時、朝鮮の醫これを以て藥を解したるよし、淺草醫師荒川榮記の話也、(天明二年八月十八日の朝聞之、)

〔塵塚談 上〕蕃椒は齒牙を損ずるの毒ありと思はる、喰ふべからず、人每にすき好む者多し、是を嗜む事甚き者を見るに、壯歲にして齒も弱く、或は脫(ヌケ)る類の人多ければ、喰ふべきものにあらず、記して識者の是正を待也、後藤左一郞が蕃椒說あり、新奇にして僻說多し、

蕃椒產地

〔毛吹草 三〕山城　稻荷唐菘(タウガラシ)

蕃椒調製

〔雍州府志 土産 六〕唐芥子　所々有之、稻荷邊所種爲佳、唐芥子中華所謂番椒是也、

〔甲子夜話 五十四〕久能山ノ麓ニ、八年枯ズ毎歳花咲キ實ナル唐ガラシアリシニ、去年〇文政五年カ大風ニテ吹キ折リテ絶タリト、併シ六年ニナル者今ニ存セリト云、コレ駿圖ユヘナリ、右ハ駿河ニ限ル由、又蕃椒ハ久能ノ名物トテ、日光漬ノヤウ成ル塞キ漬ヲ、紫蘇ニ染テ大分造リ出ス、

〔日光山志 四〕日光讃處の名產

飮食類　漬蕃椒

〔風俗文選 五序〕番椒序　野坡

とうがらしの名を、南蠻がらしといへるは、かれが治世、南蠻にて久しかりしゆへにや、未詳、醴醤子、天晛き、空見、八なりなどいへるは、おのがかたちを好める人々の、翫びて付たるなるべし、皆やさしからぬ名目は、汝が生得のふつゝかなれば、天質自然の理、さら〳〵うらむべからず、かれが愛をうくるや、石臺にのせられて、竹椽の端のかたにあるは、上々の仕合なりともすれば擂鉢のわれ底ぬけ釣瓶に埴れて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしの日陰をたのめるなど、あやうく見え侍るを、朝晩のはかなきたぐひには、露も〳〵おもはず、大かたはかづら髭つり髭の奎雄にかしづかれて、貧乏樽の口をうつすみきかなとなり、不食無菜の時、不圖取出され、おほくは奴僕豆腐の比、紅葉の色を見するを、榮花の最上とせり、かくはいへど、ある人北野詣の歸るさに、道の邊の小童に、こがね一兩くれて、汝が青々とひとつみのりしを、所望せし事ありといへば、いやしめらるべきにもあらず、しかじ今は其人々も此世をさりつれば、いよ〳〵愛をも賴むべからず、からき目も見すべからずと、小序をしかいふ、

石臺を終に根こぎや番椒

馬鈴薯名稱

〔草木育種 下〕馬鈴薯 松岡恕菴 府志 せうろいも、又ゑぞいも、又おらんだいもとも云、蠻名カイトース、道利加

カヤアフルキト[同上]ともいふ、葉は菊に似て大なり、○[中略]植るには四月頃野土の肥地へ植、人糞を澆てよし、十月根を掘採、種にするには芋を貯如く、日向よき地を深く掘埋置、春の末ほり出して植べし、

〔農家備要 五〕馬鈴薯

莖の高さ凡一尺五六寸、狀ち如圖、○[圖略]莖葉共に毛茸あり、春三月の初め球根を分ち植置く時は、一根より二三莖を出し、六七月に至て、根に三四の球根を生ず、培養至て易きものなり、糞も水糞一兩度にてよし、地合は先砂地を好む、然れども何れの地にも能く生育するもの也、甘薯に比すれば、甘味少く、皮も至て薄く、風味格別勝れしものなり、甘味少きを以て、酸敗液を釀す事なく、餘分に喰ふてさまたげなし、今長崎其外諸國に培養し、酒を釀し味噌を作る所多し、又甘薯より永く貯ふ事出來るもの也、

〔二物考〕題言

同國[上野]○伊勢街ナル柳田鼎藏ト云フ者、一種ノ芋ヲ贈レリ、之ヲ見ルニ、其形草蘚ノ如ク、又土圞兒ノ如シ、土俗之ヲ咬吧芋ト稱ス、是レ卽チ和蘭ニ所謂アルド、アップルナリ、炮炙シテ之ヲ食フニ、其淡白ナルコト薯蕷ノ如ク、其甘キコト甘藷ノ如ク、更ニ滋味粘氣アリ、其性毒ナシ、以テ日用ノ食ニ充ツ可シ、和蘭地方單ニ之ヲ以テ食トスル處アリ、而シテ甘藷ノ寒ヲ恐ルヽガ如クナラズ、寒地熱國ニ關セズ、荒野瘠地ヲ厭ハズシテ、一根數十塊ヲ得ベシ、○[中略]

丙申[天保七年]○重陽之夜、高野讓識於東都麴街甲斐坂之大觀堂、

〔二物考〕馬鈴薯[和名ジヤガタライモ、甲州イモ、チヽブイモ、アツプラ、清大夫イモ、八升イモ、カツネンイモ、ジユミヨウイモ、テイゾウイモ、蘭名アールド、アツプル、]

此薯モ又其傳ル所ヲ詳ニセズ、甲信等ニハ古ク傳ハリテ播殖スト云フ、蓋シヂヤガタラ芋、又アツプラ[奧地ノ方言ナリ、按ズルニ此ハアールド、アップルノ略言ナリ、]ノ稱名ニ因テ之ヲ考ルニ、此ハ蘭人ノ齎來シテ種ヲ傳フ

ルナリ、蘭書ニ載スルニ、此薯ハ元來西印度ニ產セリ、而シテ、拂郞察(フランス)人及漢厄利亞(アンゲリア)人之ヲ得テ播殖シ、其後之ヲ和蘭地方ニ傳タリト云フ、又此薯、亞墨利加州ニ甚ダ多シ、西洋ヨリ此ニ遷ル者、常ニ之ヲ以テ糧ト爲スト云フ、然ラバ則此ハ其始ハ西印度及ビ亞墨利加ニ產スルナリ、而シテ西洋紀元千六百年ノ後(今茲丙申ノ歳(天保七年)ヲ距ルコト二百有餘年ナリ)和蘭始メテ之ヲ播殖シ、今ニ及ンデハ專ラ其糧食トナスト云フ、林娜斯(リンナウス)(上ニ詳ニス)ノ書ニ、此薯ノ三益ヲ擧グ、其一ハ、砂土石田穀類熟セザル地ニ、好ンデ蕃茂スルナリ、其二ハ、烈風暴雨久霖ニ逢フテ害ヲ受ケザルナリ、其三、蕃殖容易ニシテ、人力ヲ勞スルコトナシト云フ、其他寸地ニ耕シ、尺地ノ穫アリ、故ニ又八升芋ノ名アリ、誠ニ以テ荒年ノ善糧ト云フベシ、

馬鈴薯種類

〔經濟要錄四〕蔬菜

近來渡リタル馬鈴薯、俗ニジヤガタライモ、或ハオランダイモト云フ者アリ、葉ハ菊ノ如クニシテ大ニ、根ハ黃獨(カシウ)ニ似テ毛ナク、燒テモ煮テモ食フベク、葉モ菜ニ用ベシ、

〔二物考〕馬鈴薯　種類

馬鈴薯ニ三種アリ、一ハ白ク、一ハ赤ク、一ハ黃色ナリ、赤キ者ハ大塊トナル、然レドモ水氣多シ、故ニ滋味薄シ、黃色ノ者ハ稍蓋味アリ、故ニ白キ者ヲ上トス、和蘭地方殊ニ白色ノ者ヲ培養シテ食用ニ供スト云フ、然レドモ土地ノ性ニ從テ、赤色ノ者肥大セズシテ、白色ノ者却テ大塊ヲナシ、黃色ノ者ニ蓋味ナキコトアリ、故ニ一定シテ之ヲ言ヒ難シ、宜シク先ヅ其地ニ播殖スルノ後、其地ノ性ヲ詳ニシ、此ニ適合スル品ヲ撰ミテ培養スベキナリ、

馬鈴薯栽培

〔草木六部耕種法三十根〕馬鈴薯ハ〇中略白色ト微赤色ノ二種アリ、煮テモ燒テモ此ヲ食フベシ、白色ノ者ハ味勝レリ、此芋ハ土地ノ瘠薄タル畑ニモ能ク豐熟ス、

〔二物考〕馬鈴薯　培養

八十八夜頃ニ、此ヲ種ユベキ地ヲ耕シ、其土塊ヲ細碎シ、其後馬鈴薯ヲ取リ、毎處二三塊ヅヽ種エテ、其上ニ輕ク土ヲ覆ヒ、逐次ニ此ノ如クニシテ種ルナリ、其法常ニ甘藷ヲ種ル法ト同ジ、又此薯ハ地ヲ揀ムニ及バズ、田畔路傍砂石交錯スル地、其外他ノ穀類播殖ニ妨害トナラザル處ニ、培養ス可シ、又其性寒ニ堪ユルヲ以テ、山野ニ種ルモ佳ナリ、大抵播種ヨリ三十日計ヲ經レバ、嫩芽ヲ萌出シ、莖ヲ生ジ蔓生スルナリ、蔓二尺餘ニ至レバ、其端末ハ殘シテ、其中央ノ處ニ輕ク土ヲ覆フ可シ、此ヨリ新根ヲ出シ蔓ヲ生ズルナリ、凡ソ此ノ如クニシテ、莖葉次第ニ蕃茂スルニ至レバ、一根ヲ以テ數十塊ノ薯ヲ得ルナリ、但シ新根ノ薯ハ其數少ナク、其形小ニシテ又水氣多シ、舊根ノ纖根ニ附タ者ハ、連珠ノ如ク數十塊攅簇シテ、其形モ太ク、且ツ滋味多シ、故ニ之ヲ上トス、又之ヲ以テ明年ノ種子トナス可シ、和蘭地方ニ於テハ、一根ヲ以テ、百塊若クハ百四五十塊ノ薯ヲ得ルト云フ、然レドモ本邦ニ於テハ、大率一根ヲ以テ、四五十塊ヨリ六七十塊ニ至ルヲ極トス、

〔二物考〕馬鈴薯　食用

新生ノ者ハ直ゲニ煮熟シ、又ハ蒸熟シ用ユ、若シ蘞味アルトキハ、先ヅ灰汁ニ投入シテ其氣ヲ去リ、又乾固スル者ハ、温湯ニ浸シ、軟和スルニ至リ、其後煮蒸シテ、或ハ單味之ヲ食トシ、或ハ飯ニ和シテ之ヲ用ヒ、或ハ羹ニ調シ、菜蔬ニ代テ之ヲ用ユ、其他人ノ好ム所ニ從テ用法頗ル多シ、〇中略

製粉

薯粉ハ、葛粉蕨粉ト同ジ、此ヲ製スルノ法、此薯ヲ取リ、水ニ浸スコト凡ソ六時ニシテ取リ出シ、其皮ヲ去リ、又水ニ浸スコト一二時ニシテ、後切リテ薄片トナシ、臼ニ入レ搗爛シテ餅ノ如クナラシメ、水ヲ加エテ稀解シ、緻布ヲ以テ濾過シ、白汁ヲ取リ、又其滓ヲ臼ニ入レ、更ニ搗爛シ、又水ヲ加テ攪動シ、濾過シテ白汁ヲ絞リ取リ、幾次モ此ノ如クニシテ、白汁出デザルヲ度トシ、其汁ヲ沈定シ、薯粉悉ク器底ニ沈著スルヲ俟テ、徐々ニ其上清ヲ傾ケ出シ、又水ヲ加テ攪動シ、又沈定スルヲ

俟テ、其上淸ヲ傾ケ去リ、糟穴モ此ノ如クニナシテ、其上淸無色無味ニ至ルヲ度トシ、水氣ヲ去リ太陽ニ曝シ、或ハ微火ニ上セ乾カスナリ、用法葛粉蕨粉ノ如クニシテ、此ニ勝ルコト萬々ナリト云フ、

醸酒

馬鈴薯モ亦甘藷ノ如ク、製シテ酒トナス可シ、但シ燒酎トナシテハ用ヒ難シ、蒸餾シテ火酒トナス可シ、然ルトキハ其性猛烈其味芳辛ニシテ、上好ノ泡盛琉球酒ニ減ゼザルナリ、

〔新撰字鏡 草〕酸醬 加賀豆支、又保加豆支、

〔本草和名 草〕酸漿、一名酢漿、一名酢菜、出雜要訣 一名苦蔵子、出小品方 一名洛神珠、一名王母苦蔵珠、出崔禹 一名寒漿、已上出兼名苑 一名苦蔵、一名苦蔵子、一名王母珠、一名皮弁草、已上出古今注 一名酸芳草、出釋藥性 和名保々都岐、一名奴加都岐、

〔倭名類聚抄 二十 草〕酸漿 兼名苑云、酸漿一名洛神珠、和名保保豆木

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕按爾雅釋草葴寒漿、郭注云、今酸漿草、江東呼曰苦葴、古今注、苦葴、長安兒童謂爲洛神珠、兼名苑蓋本於此、陶云、子作房、房中有子、如梅李大、皆黄赤色、蜀本圖經云、根如菹芹、白色絕苦、圖經曰、苗似水茄而小、實作房如囊、囊中有子、蘇敬曰、燈籠草、枝榦高三四尺、有花紅色、狀如燈籠、內有子、紅色可愛、嘉祐本草云、苦耽生故墟垣塹間、高二三尺、子作角如撮口袋、中有子如珠、熟則赤色、關中人謂洛神珠、一名王母珠、一名皮弁草、衍義、苗如天茄子、開小白花、結青殼、熟則深紅、殼中子大如櫻亦紅色、櫻中腹有細子、如落蘇之子、此即苦耽也、今圖經又立苦耽條、顯然重複、本經無苦耽、時珍曰、楊慎卮言云、本草燈籠草苦耽酸漿皆一物也、修本草者、非一時一人、故重複耳、此說得之、酸漿以子之味名也、苦耽以苗之味名也、燈籠皮弁以角之形名也、王母洛神珠以子之形名也、又云、龍葵酸漿一類二種也、酸漿苦蘵一種二物也、但大者爲酸漿、小者爲苦蘵、以此爲別、其龍葵酸漿苗葉一

樣、但龍葵莖光無毛、五月入秋開小白花、五出黃藥、結子無殼、纍々數顆同枝、子有蒂生靑熟紫黑、其酸漿同時開小花、黃白色紫心白藥、其花如盃狀無瓣、但有五尖、結一鈴殼、凡五稜一枝、一顆下懸如燈籠之狀、殼中一子狀如龍葵子、生靑熟赤、以此分別、便自明白、

〔下學集 草木 下〕山夬蘯(ホウヅキ)(サンレコ) 又云鬼燈、其實赤如灯也、

〔東雅 草卉 十五〕酸漿ホヽヅキ　舊事紀に八岐大蛇の眼如赤酸漿と見え、日本紀もこれに依られて、赤酸漿はアカカヾチと註せられたり、古事記にも赤加賀智としるして、今の酸漿といふ者也と註し、又猿田彥神の眼の事をも、かくぞしるされたりける、太古の俗の常語とこそ見えたれ、倭名鈔には倭名苑を引て、酸漿一名洛神珠、ホヽツキと註せり、並に義詳ならず、萬葉集抄に、カとは赤き也と見えたり、カヽとは其赤くして赤きをいひ、チとは其汁の血の如くなるを云ひしなるべし、ホヽヅキとは或人の説に、ホヽといふ蟲のつきぬる者なればかく云ふなり、ホヽとは蛬(イチムシ)也といふなり、

〔古今要覽稿 草木〕くたに。。

くたに、古今物名、源氏物語、古今六帖、くたには苦蘵の轉音にて、酸醬のごとなり、たんのんをにといふことは、しをんをしをに、せんをせにといふに同じ、古今集の打聞に、木丹の略也といひしは信じがたし、か。が。ち。日本書紀神代卷通證云、重遠云赤燭血也、蓋其蘵三色也云々、この說いかゞ、按にかゝは赫の字の意にて、明らかなることをいへり、出雲風土記に、光加賀明也と云ことみえたり、酸醬はその色赤くかゞやくものなれば、かゞとはいふなるべし、ちはそへいふことば也、ほゝつき、和名抄篤信云、保々は虫の名好て食之、故に名づく云々の說非なり、谷川士淸云、保々都伎は火々著なり、この說よし從ふべし、火々は加賀と同じく、その色の熟するに從ひて、あかくかゞやくいろのそはる故に、火々著といふなり、ぬかつき、本草和名按にぬははつ語にて、かづきは加賀著の中略なり、○中略洛神珠嘉祐本草本草綱目釋名時珍云、以子之形名也、三母珠、嘉祐本草、名義同上、苦蘵、郭璞爾雅注本草綱目釋名時珍云、以苗之味名也、皮辨草、本草和名引古今注本草釋名時珍云、以角之形名也、○下略

〔本朝食鑑山四果〕酸醬子今訓二保宇豆木一和名保保豆木、

集解、酸醬者世常所用之保宇豆木也、田圃家園皆種之、草不過二三尺、葉如藥匙頭而薄、四五月開小花、黃白色、蕊心白黃、狀如中華之盃、無辨、但有五尖、結一鈴殻、凡五稜、一枝、一兩顆下懸、如燈籠之狀、夏青至秋變赤、殻中一顆如金橘、而深紅作珊瑚色、女兒愛翫、去瓤核、吹之嚼之而鳴、作草蛙之聲、或鹽漬藏封貯、多春之用、以爲庖廚之供、或貯夏土用之井水、漬連赤殻之酸漿子、則至冬春而外殻如紗羅、中間之紅子似白紗燈籠中之火、若過秋不替水則易敗也、近時洗衣之舊汚不脫者、用酸醬汁而洗之則脫去、脫後復醬汁色不消者、用木患子皮或赤豆粉而再洗之則悉脫盡矣、今農家與西瓜番椒同作貨殖者也、江都甚多、關西京師俱不多者、土地不宜乎、

子、氣味、甘酸寒無毒、主治、消渇、消酒毒、

發明、蘇頌曰、尤益小兒、必大野○平按、今時不然、予往見小兒誤食之發驚吐而斃、後又聞有若斯者、然亦有常嗜食之而竟不中毒者、此二者因其腸胃之強弱耶、因其時之幸不幸耶、然則曰無毒而可也、未至有益者耳、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕酸漿　カヾチ　アカヾチ　ヌカヅキ　ホウヅキ　ホウト云虫ツク故ニ名ヅクト、大和本草ニ見

一名姑娘菜救荒本草　燈籠兒同上　掛金燈本經逢原　錦囊行厨集　叱利阿里[illegible]本草

春月宿根ヨリ苗ヲ生ズ、形狀時珍ノ說ニ詳ナリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、一蕚ニシテ牽牛花ノ如ク、五尖アリテ五蕚ノ如クニ見ユ、故ニ如盃狀無瓣、但有五尖ト云リ、花後實ヲ結ビ下垂ス、熟スレバ外殻紅色ニシテ美ハシ、一種外殻矮扁ナルアリ、コレヲキンチヤクホウヅキト云、カポチヤホウヅキ、ヒラホウヅキ作州、タヽリヅキン江戸其餘數品アリ、凡酸漿實已熟スルモノヲ盆ニ栽ヘ、冬月紙袋ヲ覆テ寒ヲ防時ハ能久ニ堪ヘ、其殻筋脈ノミ殘リ、蟬翼ノ如クシテ、中ノ紅實ヲ透見シテ燈籠ノ如シ、

〔百姓傳記十三〕ホウヅキヲ作ル事

一ホウヅキノ種今三色見ヘタリ、地ホウヅキハ節間永ク、葉大キニ育チ、サヤ大キニトヲナリシテ、ホウヅキ小サク、秋ノ末ナラデハ熟セズ、悪キ種ナリ、サツマホウヅキト云テ、フシ合短カク、葉地ホウヅキヨリ小サク、サヤモツマリ、ホウヅキ大キニシテ、フシ毎ニナリ、ヂク際ヨリ赤クナリ、ホウヅキ大キナル種アリ、又南蠻ホウヅキ共云、チンチクリント云テ、木タデフシニシテ、葉小サク、ホウヅキノサヤ小サク、先ヲ内ヘ押込タルヤウニシテ、五月末ツ方ニ赤ラミ、大キナル種アリ、必フシ毎ニナル見事ナルモノナリ、土地ニ嫌ヒナク育ツ、然ドモ黒フク土輕土、日蔭木下ニハ忌ムベシ、フシ間延過、虫付テ葉枯花落テホウヅキナシ、濕ケ地ニ猶能ラズ、種ヲ二月蒔テ夏中ニ實ナリ、秋ニ色付、夫ハ六ツ箇敷キナリ、植付ノ根ヲ冬ヨリ正月ノ節ニ入マデ植直シテヨシ、其儘置テハ茂ク生ヘ出、木ニ病ヒ付、ホウヅキナラズ、植直スニ根ノフシヲ助ケ、フシ間ヨリ折テ間ヲ遠ク植ヨ、肥エ地ニ植テハ、木蔓コリ花付ズ、瘠地ニ好ミテ植ヨ、

〔草木育種下藥品〕酸漿草本　根分ハ二八月よし、濕地を好もの也、魚洗汁人糞を澆ぐべし、又瓔珞ほゝづきは、實の形長刀ほゝづきに似たり、

〔古事記上〕須佐之男命、〇中略　問汝哭由者何、答白、言我之女者自本在八稚女、是高志之八俣遠呂智、此三字以音每年來喫、今其可來時故泣、爾問其形如何、答白、彼目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、〇中略此謂赤加賀智者、今酸醬者也、

〔日本書紀神代二〕一書云、〇中略　先驅者還白、有一神、〇中略　眼如八咫鏡而赩然似赤酸醬也、

〔枕草子九〕おほきにてよき物

ほうづき

〔還魂紙料下〕江戸酸漿

龍葵

案內者（寛文二年印本中川喜雲著）京四の卷、七月七日東西本願寺の花、東西ともに對面所の簾に立らる、造物龍にさす、○中略 近年は江戸酸漿子とて、七月に色のあかきをもとめ出して、よき採色の物とすといふ事あり、寛文の初に近年といへば、此江戸はゝづきは萬治のころよりありし物歟、俳諧毛吹草（寛永十五年編）の季寄八月の條に、鬼灯（青はゝづきは夏なり）とあり、案內者にいふところを見れば、七月に色づく鬼灯は萬治前はなかりしなるべし、

江戸新道（延寶六年印本言水編）里の子やすゝに吹らん江戸鬼灯　必色　柳亭云、此句江戸廣小路には、上の五文字いかなる風とあり、○中略 いま丹波鬼灯の名をいひて、江戸鬼灯の名をいはず、今六月より色づきたる鬼灯あるは、是則江戸鬼灯歟、又いつか江戸鬼灯は絶て、丹波の國の種をもとめて、植けるもの歟、

江戸酸漿の條○追考

延寶四年梅盛が著しゝ類船集に、山茨菰、むかしよりありつらめど、近年江戸酸漿とて、美しく赤きあり、青はゝづきの時分に、はや珍らしければ、もてはやす事とぞ、丹波より來る青酸漿は吹散されぬべし、春になり、鎗にはさまれ云々、かゝれば前にもいふごとく、いま夏より色づくは、江戸鬼灯にて、丹波の種にはあらざるなるべし、

〔本草和名十八菜〕龍葵、一名苦菜、（出蘇敬注）和名古奈須比、一名久佐奈須比、

〔倭名類聚抄十七野菜〕龍葵　本草云、龍葵（和名古奈須比）味苦寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕蘇敬曰、龍葵即關河間謂之苦菜者、葉圓花白、子若牛李子、生青熟黒、但堪煮食、不任生噉、本草圖經云、葉圓似排風而無毛、子亦似排風子、李時珍曰、四月生苗、嫩時可食、柔滑、漸高二三尺、莖大如筯、似燈籠草而無毛、葉似茄葉而小、五月以後開小白花、五出黃蘂、結子正圓、大如五味子、上有小蒂、數顆同綴、其味酸、中有細子、亦如茄子之子、

〔東雅（十三穀蔬）〕茄子ナスビ（中略）○倭名抄に、（中略）○龍葵はコナスビといふと註せしは、本草に據るに、其葉如茄子、其實味酸、中有細子、亦如茄子なるによりて、此名ありし也、もとこれ茄子の類にはあらず、防葵を呼てヤマナスビといふが如きは未詳、（今俗に玫瑰をハマナスビといふなり、此物東國の地方にては、海濱に生じて、其實を結ぶこと茄子の如くなれば、方俗呼びて此名あるなり。）

〔古名錄（四十三蓏類）〕古奈須比（倭名類聚抄）　漢名牛嬭茄（中鑑錄）　今名コナスビ、ヒトクチナスビ

正誤按ニ、後人臆度ヲ以テ、龍葵古訓古奈須比ト云ニ據、イヌホウヅキトス、非也、古奈須比ハ今一口茄子ト云者此也、古ヘ龍葵ニ誤リ充、イヌホウヅキハ實黑色、南天子ノ大ニシテ、食用ニナルベキモノニ非ズ、

〔大和本草（九雜草）〕龍葵　コナスビ、一名イヌホウヅキ、又ヒタイホウヅキ、葉ハ茄ニ似テ子小ニシテマルシ、熟スレバ黑シ、茄子ニハ似ズ、且大小甚異、其實ヲ汗瘡ニ付レバ愈ユ、本草ニ此能アル事ヲ不載、又一種實ノ赤アリ、龍珠ト云、日本ニハ此種未見之、

〔草木育種後編（下藥品）〕龍葵（いぬほゝづき、木草）　山中にあり、原野の濕地に實熟するをとりすぐにまき、又春蒔て生じ易し、糞水を澆ぐ時は別て勢よし、又畦へ蒔てもよし、和蘭にて偏痺に用ふ、

〔重修本草綱目啓蒙（十一隰草）〕龍葵　○イ○ヌ○ホ○ウ○ヅ○キ　○イ○ヌ○ホ○ウ○ヅ○キ　○コ○ナ○ス○ビ　○ウ○シ○ホ○ウ○ヅ○キ（城州）　○ヒ○タ○ヒ○ホ○ウ○ヅ○キ（大和本草）　○イ○ノ○ホ○ウ○ヅ○キ（讃州）　○イ○ヌ○ゴ○セ○ウ（豐前）　一名狗尿珠（千金翼方）　天茄兒苗（救荒本草）　老鴉睛（正字通）　鴉睛（同上）　加个曾而（採取月令）

原野及人家ニ自生多シ、宿子地ニアリテ春苗ヲ發ス、高サ一二尺、或ハ三四尺ニ至ル、枝葉トモニ互生ス、枝ハ多ク横ニ廣ク繁布ス、葉ハ酸漿ノ葉ニ似テ、短毛多シテ臭氣アリ、夏月葉間ニ花開ク、數十蕚一莖ニ簇垂ス、五瓣ニシテ白色黃蘂、形番椒花ニ似タリ、花後圓實ヲ結ブ、大サ南燭子ノ如シ、生ハ青ク、熟スレバ紫色後黑色ニ變ズ、内ニ小扁子アリ、苦蘵子ニ似テ淡黃色ナリ、霜後根枯ル、

ソノ葉實根外家ノ要藥ナリ、

〔延喜式内膳三十九〕漬年料雜菜
龍葵味葅六斗、料鹽四斗八合、楡三升、〇中略 右漬春菜料〇中略 龍葵葅六斗、料鹽六升、楡二升四合、龍葵子漬三斗、料鹽九升〇中略
右漬秋菜料

〔續々修東大寺正倉院文書裏書四十六帙六〕藍園熟瓜等送進文
龍葵拾五把〇中略
天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔武江產物志草部〕道灌山ノ產　龍葵

龍珠

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕龍珠　ヤ。マ。ホ。ウ。ヅ。キ。　ハ。ダ。カ。ホ。ウ。ヅ。キ。
幽谷及山足陰地ニ生ズ、其形龍葵ト相似リ、唯葉龍葵ニ比スレバ狹シテ毛茸ナシ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、一蔓ニ簇ラズ、形チ苦蘵花ニ似テ淡黃色、其實蜀羊泉ニ似タリ、生ハ靑ク熟スレバ深紅色、已ニ實ヲ結ブ者ハ、秋深テ根枯ル、未實ヲ結バザル者ハ、春ニ至テ更ニ苗ヲ生ズ、

蜀羊泉

〔本草和名九〕蜀羊泉、陶居本草作二全字一名羊泉、一名羊飴、一名漆姑、出蘇敬注一名羊全、出雜要訣唐

〔多識編二草〕蜀羊泉、今案于。流。之。計。之。異名羊飴、綱目

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕蜀羊泉　ホ。ロ。シ。古名　ヒ。ヨ。ト。リ。ジ。ヤ。ウ。ゴ。　ツ。タ。サ。ン。ゴ。ジ。ユ。備前　ツ。ル。ナ。ン。ゴ。ジ。ユ。同上　ツ。ル。ナ。ン。ゴ。　チ。ヤ。ボ。ノ。ホ。ウ。ヅ。キ。氣州　ウ。ル。シ。ケ。シ。　鳥蔦和方　一名
靑杞救荒本草　雪下紅秘傳花鏡　珊瑚珠同上　雪裏珊瑚農圃六書　漆草附方　羊菓品字箋
原野ニ多シ、蔓草ナリ、春月舊蔓ヨリ苗ヲ生ジ、草木ニ纏繞ス、毛アリテ赤牛藤ノ如シ、葉ハ菊葉ニ似テ、薄ク柔ニシテ鋸齒ナシ、毛アリ互生ス、夏葉間ニ小枝ヲ生ジ、上ニ多ク小叉ヲ分チ、叉ゴトニ一花ヲ開ク、白色黃蘂大サ四分許、形番椒花ニ似テ、後圓實ヲ結ブ、南天燭子ヨリ大也、生ハ靑ク、秋

多熟シテ深紅色、白頭鳥好テ食フ、霜後苗枯ル、

〔新撰字鏡 草〕白英 保○呂○志○草、又豆○具○美○乃○伊○比○留○、

〔本草和名 六 草〕白英、〇真恐英誤、本草綱目引拾遺一名白幕、一名縠菜、一名白草苦菜、陶景注云、疑或是 一名鬼目草、出蘇敬注 一名排風草、一名鬼目、出拾遺 一名酸迷、出雑要訣 和名保呂之、一名都久美乃以比禰、

〔倭名類聚抄 二十 草〕白英 蘇敬本草注云、白英一名鬼目草、和名保○曾○之○、一云豆久美乃伊比禰、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕本草和名、保曾之作保呂之、與新撰字鏡合、此作曾恐誤、蘇又云、蔓生、葉似王瓜、小長而五椏、實圓如龍葵子、生熟紫黑、今按爾雅、苻、鬼目、注似葛葉有毛、子赤如耳璫珠、若云子熟黑誤矣、

〔和爾雅 七 草木〕白英（ヒヨドリジヤウゴ） 縠菜、白草並同、

〔和漢三才圖會 五十六 蔓草〕白英〇中略 按、白英葉似菊葉而柔大深叉、七月開小白花五瓣、抱子蘂外、有飛鳥之狀、其子赤、熟時鵯喜啄之、故俗曰鵯上戸、赤鵯鵯嗜之、故曰鵯鵯之飯稱子、然鵯鵯不如嗜螻蛄、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕白英 マ○ル○バ○ノ○ホ○ロ○シ○ マ○ル○バ○ノ○ヒ○ヨ○ド○リ○ジ○ヤ○ウ○ゴ○ ム○マ○ノ○ナ○ン○バ○ン○北國 イ○ヌ○ノ○ナ○ン○バ○ン○同上 ノ○ナ○ン○バ○ン○越後 ノ○ゴ○シ○ヤ○ウ○同上 ツ○ル○ト○ウ○ガ○ラ○シ○大和 ホロシト訓ズルハ非ナリ、ホロシハ蜀羊泉（ヒヨドリジヤウゴ）ナリ、此草ハ即蜀羊泉ノ刻缺ナキモノナリ、故ニマルバノホロシト云フ、山ノ幽谷又江邊ニモアリ、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ甚繁延ス、蔓葉共ニ毛ナシ、葉ハ圓長ニシテ尖リ互生ス、夏花ヲ開キ穗ヲナスコト、蜀羊泉ニ同シテ、邊ハ淡紫色、内ハ深紫色ニシテ黄心ナリ、其實亦蜀羊泉ニ似タリ、秋ニ至リ熟ジテ深紅色、ソノ形圓ナル者アリ、微長ナル者アリ、微長ナル者ハ番椒ノ形ニ似タリ、故ニナンバンノ名アリ、番椒ヲ東北國ニテナンバント呼ブ、秋深テ苗枯ル、

〔廣益地錦抄七〕白英(はくえい) 蔓草、多もかれずして有、春葉を出す、葉に白色あり、四五月に白小花を開く、實は葉の間々より下へさがりて、一所に十數ほどづゝ付ク、秋玄ゆくして色赤、竹にからませてながめ有、花壇にうへべし、俗ひよどりせうごといふ、

〔本草和名十草〕莨蓎(楊玄操音蕩、作二莨蓎一)一名行唐、一名横唐、一名狐陽根(出二雜要訣一)和名於保美留久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕莨蓎子 本草云、莨蓎子(和名於保美留久佐)

〔箋注倭名類聚抄十草〕千金翼方、證類本草不載、本草和名亦無有、按下條有莨菪子、和名與此同、則知蓎是菪字之誤、而復重者、宜從刪去也、

〔倭名類聚抄二十草〕莨菪子 本草云、莨菪(狼蕩二音、和名於保美留久佐)

〔箋注倭名類聚抄十草〕千金翼方、證類本草下品作莨菪子、本草和名作莨蓎、無子字、與此同、伊呂波字類抄莨蓎莨菪子並載、蓋其所見本、或有或無、故彙載二名也、按無子字、蓋其實非是、然源君所載草本名、似多從本草和名引之、則有子字者、恐是後人校增、非源君之舊、○中略 玄應音義引埤倉云、莨碭毒草也、廣雅、恣草、蒗碭也、玉篇廣韻並云、莨蓎藥也、史記倉公傳作莨蓎藥、

〔和漢三才圖會九十五毒草〕莨菪○中略 按莨菪海濱有之、其葉形略似野菊、而莖葉皆有白細毛、四五月開花、有白有赤、結實如罌子、俗稱之河原艾、非也、(河原艾者別有二一種一、今人不レ知二莨菪和名一、只以二莨菪一爲二河原艾一、謬之甚者也)

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕莨菪 オニシルグサ(延喜式) オホミルグサ(和名鈔) ワメキグサ ホメキグサ ヤマナス ナヽツ桔梗(江戸) ハシリドコロ(肥後) 一名猥薺(類書纂要) 虎茄(廣月令) 草牛黄 牙疼子(本草原始)

肆中ニ滿渡ナシ、深山幽谷ニ生ズ、宿根ヨリ早春ニ苗ヲ生ズ、紫黒色、長ズレバ淡緑色、圓莖高サ一尺餘、葉ハ互生ス、形ハ商陸ノ葉ニ似テ小ク狹シ、又長葉ナル者アリ、梢葉ノ間ニ花ヲ生ズ、本ハ筒

ニシテ末ハ五瓣、小キ桔梗花ノ如シ、色紫又黄花モアリ、共ニ蔕ハ沙参桔梗花ノ蔕ノ如シ、花謝シテ蔕漸ク大ニ成テ椶子ノ如ク、淡綠色、中ニ細子多シ、褐色ナリ、三月ニ實熟シテ苗枯ル、根ノ形山草薢ノ根ノ如シ、誤テ食ヘバ其味腹内ニアルアイダハ狂氣奔走ス、故ニハシリトコロノ名アリ、和俗誤テ烟草ヲ以テ莨菪トス、大ニ非ナリ、コレハ證類本草及ビ綱目莨菪ノ圖、實ノ形チ烟草ノ花ニ似タルヲ以テ誤ルナリ、

〔草木育種後編下藥品〕莨菪草木　醫心方おにほみぐさといふ、俗にハシリドコロ、ホメギグサ肥後などいふ、番名にてベルラドンナ蘭語といふ、處々深山に生ず、根の芽を一ッ付てかき、木口へ灰を付、赤土の陰地に栽てよし、山の蛭樹木の下によし、春早く根を分てよし、油かす干鰯等少し根に入てよし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊豆國十八種略〇中　莨菪子一斗、　相模國卅二種、略〇中　莨菪子二升、略〇下

〔北窻瑣談前篇四〕肥後の國の山中に、方言ドウタウといふ草あり、烟草の葉に似たり、甚毒草にて、是を喰へば發狂して、三日計はさめずといふ、ドウタウとは、莨菪の事なるにや、

〔本朝食鑑四味果〕煙草俗稱多波古　釋名、煙酒、俸喜稱之、言吸煙則面熱眼眩如醉酒也、

〔雍州府志六土產〕多波古　倭俗莨菪謂多波古、然其形狀氣味小異、本草洞詮所載煙草是也、

〔蕉錄下〕附考並餘考

答跛菰名通行于萬國、是以其所產爲名者、猶我俗稱其地產呼甘孛知亞、加奈乃兒、應帝亞、没厠齒未亞類也、雖然乎世人未知答跛菰之爲地名、其偶有知之者、亦未知答跛菰地屬何洲、其長廣幾何、今考嗹蘭萬國輿地略、其第一千零五十九葉曰、答跛鶴一名泥物哇兒鈹力、一名泥可止亞奈、者、北亞墨利加北海安止兒力斯諸島中跛兒路扁啲所屬之一小島也、其地東西十六里許、南北六里餘、乃西北水路之一要港、而此

烟草名稱

地多產答跋菰草云、(此地土宇開拓、及產物等說、別有譯文、故略、)又采覽異言曰、係南亞墨利加洲中、屬加蠟哥斯、(カラコス)海上諸島都十八、其中一島、始出烟草之所也、其地囑稍相近、有南北之異、當時傳譯之日、偶致此錯誤也乎、

〔藏石雜志〔一〕〕物の名

烟草、たばこは蠻呼なり、

〔和漢三才圖會〔九十九〕〕烟草(たんばこ) 相思草(本草綱註) 淡婆姑(蠻國雜記) 淡芭菰(漳州府志) 烟酒

〔烟草記〕異號(凡一百餘今略二過半)

烟 芬 切芬 烟草 薰草 烟兒 烟火 烟花 烟葉 烟酒
烟草火 返魂草 返魂草 金絲烟 金絲草 相思草 擔不歸 淡婆姑 淡把姑 淡芭菰
南蠻烟 南蠻草 南蠻草 南草 慶長草 貧報草 貧乏草 愛敬草 敬愛草 思案草
分別草 長命草 延命草 延壽草 慶喜草 常樂草 永樂草 常盤草 養氣草 長嗜草
長嗜烟 延嗜草 愛烟草 閑友草 太平草 丹波粉 多葉粉 多波古 太羽古 太婆古
打破魂 賓發粉 た 貫箬 醞藹 賓蕩 瀼蕩 醞藹 菸藹 蘊藹

○按ズルニ、本書此下ニ於テ、上文揭ル所ノ稱呼ニツキテ、一々釋義ヲ下シタレドモ、要スルニ固ヨリ俗傳ニ過ギザレバ、今姑ク稱呼ノミヲ摘錄シテ、此ニ異聞ヲ廣ム、

〔羅山文集〔五十六〕雜著〕佗波古希施囊

佗波古、希施囊、皆番語也、無譯矣、〇中略 或曰、此藥香舶載來而自長崎達於群國、其盛行如此、然出何國乎、曰此年諸醫不知之、頃聞醫者如見撿本草綱目而到貫箬、其狀貌主治及竹筒引煙之事、皆似之、蓋其流乎云爾、

〔一本堂藥選續編〕烟草

此物在古未洽人間、故無其名之可定、按本草貫箬爲尤近、後世盛行、呼爲烟草、(本草綱註)又名相思草(同上)烟

花、(花鏡)淡把姑、(同)擔不歸、(同)淡芭菰、(漳州府志)淡婆姑、(芝峯類說)南靈草、(同)淡肉果、(物理小識)蔫、(行厨集)芬、煙、(張介賓景岳全書)返魂草、(李時珍食物本草)細切如線、名金絲煙、(花鏡)返魂煙、(同上)煙酒、

〔大和本草〔六〕民用草〕煙花　タバコハ、蓬溪類說ニ、淡婆姑草ト云、漳州府志ニ、淡芭菰トカク、タバコ異國ノ方言ナリ、或曰、日本ニ初來リ、丹波ヨリ其粉ヲキザミ出ス、故ニ丹波粉ト云、此說妄語也、○中略今案本草洞筌ニ所載　煙草モ、亦淡婆姑ト同物ナリ、今南京ニハ烟ト云、漳州福州ニハ芬ト云、キザミタバコヲ切芬ト云、朝鮮ニハタバコヲ南草ト云、○中略今國俗スベテ蕒䓍ヲタバコト訓ズ、アヤマレリ、中華ニ蕒䓍ハ古ヨリアリ、延喜式ニ蕒䓍ヲノセタレバ、日本ニモ昔ヨリアル草ナルベシ、タバコハ日本ニモ中華ニモ古ハナシ、近代外國ヨリワタルト云、故ニ本草綱目ニハノセズ、○中略長崎ニテ、唐人ハミナ煙草ト云、蕒䓍トハイハズ、是ヲ以蕒䓍ニ非ル事ヲシルベシ、

〔秉燭譚〔四〕〕煙草ノコト

タバコハ南蠻ノ產ナリ、百年前ニ日本ニ來ル、ソノカミハ本草ノ蕒䓍ナリトイヘリ、此ハアヤマリナリ、ソノ後沈穆ガ本草洞詮ト云書新ニ渡リ、ソノ九卷ニ煙草ヲ出ス、曰煙草一名相思草、言人食之、則時時思想不能離也ト、ソノ說甚詳ナリ、コレヨリ世間ノ人、タバコハ煙草タルコトヲシル、四五十年前ニ朝鮮人ノ撰スル、芝峯類說ト云モノアリ、ソノ十九卷ニ曰、淡婆姑、草名、亦號南靈草、近歲始出倭國云々、或傳、南蠻國有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此草得瘥、故名ト、此書ハ朝鮮ニテ、何人ノ撰ト云事ヲ知ズ、相國寺白長老ノ從子ニ、松村昌庵ト云老人アリ、先子ノ舊キ門人ナリ、タバコノ一段ヲ寫シテ傳フ、全部ハ何ホドアルコトヲシラズ、對州ヨリ携ヘ來ルナルベシ、予〇(伊藤長胤)弱年ノ時ニ寫シヲケリ、コレヨリ淡婆姑ノ名世ニ弘リ、比日市店ヲ見レバ、招牌ニコノ字ヲ書ケリ、近年淸人陳淏子ガ花鏡一套東來シ、金絲烟、擔不歸等ノ名、サマざまノセヲケリ、擔不歸モタバコノ唐音トミエタリ、又行厨集ヲミレバ、蔫ノ字ヲ書リ、是モ日本ニテ、マキノ木ヲ槇トカキ、ム

ロノ木ヲ檀トカクト同キコトニテ、煙ノ音ヲカリテ草冠ニ従ヒ、菸ノ字ヲ用タルトミエタリ、コノ外近年ノ本草ノ末疏ニハ、種々詳ニ載ワケ[illegible]、又昔ヲ記ス、唐詩紀ノ内、李白ガ詩ニ、相思如煙草、繚乱無多春ト云リ、相思草ト名タルハ、コレヨリ出ルニヤ、偶然ニ符合セルニヤ、李ガ詩ハ本ヨリ煙ト草トノコトナリ、

〔煙草考〕蘐軒云、烟草初至于本邦、人不知其正名、只以番名称焉、鉅儒宿學、或以為莨菪、或以為不然、是非不一、儒醫相半、近世漢舶載来本草綱目、人贊之初[illegible]、烟草之名也、其後諸書續至、並知烟草非莨菪也、

〔長崎夜話草五〕長崎土産物

煙草〇中略　此草は、日本の東方にあびりかといふ國あり、此國に一人の美女あり、名を淡婆姑(たんばこ)といふ、國中の男子、此女を戀したふもの甚多かりし、死せし後まで世になつかしむ人多くて、ある時一人の男子、此墓に詣でしに、秋の日早く暮にければ、其儘にて通夜せしに、夜更て甚飢たり、仍そのあたりを探りみれば、草のかうばしきあり、一葉をとりて喰ふに、飢忽ちにやみ、身温かに冷風肌を犯す事なくして、精氣を防ぐ事、酒を飲るが如し、此故に禽霊草と號し、又は煙酒共いひ、あるひは相思草ともいへり、是より世界萬國に流布す、一度此煙を吸ぬる人は、是を忘れんとしても忘るゝ事あたはず、相思草の名最なるかな、

〔おほうみのはし〕延寶の帝元〇中略　煙草をよませ給ひける、

煙のかゝる霞にはあらねどけ。ぶ。り。草。なみゐる人のしほとこそなれ

〇按ズルニ、此歌近代世事談(一飲食)ニハ、後水尾天皇ノ御製トセリ、

〔雅筵醉狂集〕寄烟戀

ねられぬ夜むせぶ思ひにくらぶればき。ざ。み。た。ば。こ。のけぶりうす色

〔昆陽漫錄〕絲煙

前年或人西土のきざみ煙草一包を惠む、その包內の小票に云く、福建陳元禮、向在浦城西關馬頭開張、特選上々頂葉佳制生烟、發販四方、味甘絲明、色鮮觔足、向有異路低烟、冒稱浦城者多、但買者眞假難辨、今本號特設包內小票、凡賜顧者、請認富有圖記、庶不致冒稱、眞假辨矣、謹白と、何處にても後世はことみな便利なるを好むなり、且そのきざみ甚だほそきゆゑ、絲煙と云ふなり、

〔蜀山百首〕戀

うづみ火のしたにさはらでやはらかにいひよらん言の葉烟草もがな

〔嬉遊笑覽〕十上飲食一種嗅たばこと云もの有り、其器物紅毛の細工にて、犀角瑪瑙などに金銀を飾り、精巧に造れる物あり、其形圓扁にして、昔の藥入の如く、蓋は蝶つがひなり、

〔蔫錄下〕附考並餘考

玄澤氏曰、答跛菰之傳種乎歐羅巴洲也、距今不甚遠矣、○中略古老相傳、此物傳於我邦、在元龜天正際、顧是波爾杜瓦兒人所傳、何者按白石先生采覽異言、西番之來、自波爾杜瓦兒國始到于豐之神宮浦、實爲天文十年辛丑秋矣、十二年癸卯、又泊于多禰島、爾後來我西鄙、歲歲不絕、元龜元年庚午春、至肥前國、求以互市、置場於彼杵海口、今長崎港卽此、由是觀之、其初傳之、果波爾杜瓦兒國人、而在元龜天正之際者、可以知也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、世上の貴賤上下共にもてはやす多葉粉の義は、上古來は無之物にて、近來のはやり物に有之由、其元には、如何聞き被及候や、答曰、我等若年の比、或老人の物語り仕るは、多葉粉と申者は、古來は無之所に、天正年中の切支丹宗門と申事の世に廣り候時節より、多葉粉も初る也、然ば元來は無之所、南蠻國の土產の草抔にても有之や、○下略

〔大和本草　六民用草〕烟花○中略日本ニ初テ來ルコト、天。正。ノ。初。年。ナルベシ、或曰、慶。長。十。年。初テ來ル、

〔和漢三才圖會　九十九葷草〕煙草○中略

按煙草天。正。年。中。、南蠻商船始賣此種、○略註以植於長崎東土山、

〔奥州會津四家合考　十二附錄〕會津舊事土宜考　采聞於先輩、略記者之土宜、而不知其虚實、錄焉、以備後之博覽矣、

第百八代後陽成院　慶。長。四。年。己亥　此年、○中略賞翫始用焉、

〔武江年表　一〕慶。長。十。年。乙巳、南蠻よりタバコ蕃椒を渡す、長崎にて櫻馬場へ、はじめてタバコを栽る、一說天正中、蠻人持渡るともいふ、

〔地方凡例錄　二〕田畑名目之事附四木三草莨菪始之事

一莨菪は、三草○紅花、藍、麻、には非ざれ共、漢高卑共是を嗜、三草に續たる物也、元蠻國に生じたる由、本朝へ種草之渡たる始は、慶長十乙巳年、南蠻國より肥前國長崎へ種渡り、同所櫻之馬場へ作り始、其後海內に廣まり、今國々に名產有、併禁庭柳營には不用之、諸侯方に而も賓客招請には用ゐざる事なり、

〔北窻瑣談　後編二〕一後世などはだん〱諸國の通路ひらけ、產物器物等迄も多くなれり、或人の話に、煙草は慶長十年、南蠻國より種を渡せり、漢土へ渡れるも大抵同じ頃とぞ、始の程は火災のおそれありとて、官よりも禁せられしかど、其禁終に破れて、今にては飲食につぐものとなれり、漢土も始は禁せしに、其禁破れたりとぞ、味の美なるにもあらず、醉て面白きにもあらず、腹滿るにもあらず、何の事無きに、かくまで人の好めるはいかなる故とも知がたし、

〔慶長日記　三〕慶。長。十。二。丁未二月、此比たばこと云事はやる、是は南蠻ヨリ渡と云々、煙草葉を刻、火ヲ付煙をのむ、

〔嬉遊笑覧　十上飲食〕煙草は慶長十二年の頃はやりて、其種を長崎櫻の馬場に植しとかや、望一千句に、たばこやも對し御恩や思ふらん治れる世の末も長さき、或書に、其頃の日記に、此ごろ多葉粉と

〔昆陽漫錄〕絲煙

前年或人西土のきざみ煙草一包を惠む、その包内の小票に云く、福建陳元禮、向在浦城西關馬頭開張、特選上々項葉佳製生烟、發販四方、味甘絲明、色鮮觔足、向有異路低烟、冒稱浦城者多、但買者眞假難辨、今本號特設包内小票、凡賜顧者、請認富有圖記、庶不致冒稱、眞假辨矣、謹白と、何處にても後世はことみな便利なるを好むなり、且そのきざみ甚だほそきゆゑ、絲煙と云ふなり、

〔蜀山百首〕戀

うづみ火のしたにさはらでやはらかにいひよらん言の葉烟草もがな

〔嬉遊笑覽十上飲食〕一種嗅たばこと云もの有り、其器物紅毛の細工にて、犀角瑪瑙などに金銀を飾り、精巧に造れる物あり、其形圓扁にして、背の際き鼓木入の如く、蓋は蝶つがひなり、

〔蕉錄下〕附考並餘考

玄澤氏曰、答跋菰之傳種乎歐羅巴洲也、距今不甚遠矣、中略古老相傳、此物傳於我邦、在元龜天正際、蓋是波爾杜瓦兒人所傳、何者按白石先生采覽異言、西番之來、自波爾杜瓦兒國始到于豐之神宮浦、實爲天文十年辛丑秋矣、十二年癸卯、又泊于多禰島、爾後來我西鄙、歲歲不絕、元龜元年庚午春、至肥前國、求以互市、置場於彼杵海口、今長崎港卽此、由是觀之、其初傳之、果波爾杜瓦兒國人、而在元龜天正之際者、可以知也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、世上の貴賤上下共にもてはやす多葉粉の義は、上古來は無之物にて、近來のはやり物に有之由、其元には、如何聞き被及候や、答曰、我等若年の比、或老人の物語り仕るは、多葉粉と申者は、古來は無之所に、天正年中の切支丹宗門と申事の世に廣り候時節より、多葉粉も初る也、然ば元來は無之所、南蠻國の土產の草抔にても有之や、下略

〔大和本草 六民用草〕烟花 ○中略 日本ニ初テ來ルコト、天正ノ初年ナルベシ、或曰、慶長十年初テ來ル、

〔和漢三才圖會 九十九葷草〕煙草 ○中略

按煙草天正年中、南蠻商船、始貢此種、○略 註以植於長崎東土山、

〔奥州會津四家合考 十二附錄〕會津舊事土直考 采ニ於先輩ニ略記者之土 且、而不レ聞ニ其虚實ニ、載焉、以備ニ後之傳覽ニ矣、

第百八代後陽成院 慶長四年己亥 此年、○中略 莨菪始用焉、

〔武江年表 一〕慶長十年乙巳、南蠻よりタバコ蕃椒(たうがらし)を渡す、長崎にて櫻馬場へ、はじめてタバコを栽る、一說天正中、蠻人持渡るともいふ、

〔地方凡例錄 二〕田畑名目之事附四木三草莨菪始之事

一莨菪は、三草 ○紅花、藍、麻、 には非ざれ共、農家高卑共是を嗜、三草に續たる物也、元蠻國に生じたる由、本朝へ種草之渡たる始は、慶長十乙巳年、南蠻國ゟ肥前國長崎へ種渡り、同所櫻之馬場へ作り始、其後海内に廣まり、今國々に名產有、併禁庭柳營には不レ用之、諸侯方に而も賓客招請には用ゐざる事なり、

〔北窻瑣談 後篇 二〕一後世などはだん〳〵諸國の通路ひらけ、產物器物等迄も多くなれり、或人の話に、煙草は慶長十年、南蠻國より種を渡せり、漢土へ渡れるも大抵同じ頃とぞ、始の程は火災のおそれありとて、官よりも禁せられしかど、其禁終に破れて、今にては飲食につぐものとなれり、漢土も始は禁せしに、其禁破れたりとぞ、味の美なるにもあらず、酔て面白きにもあらず、腹滿るにもあらず、何の事無きに、かくまで人の好めるはいかなる故とも知がたし、

〔慶長日記 三〕慶長十二丁未二月、此比たばこと云事はやる、是は南蠻ヨリ渡と云々、煙草ヲ葉ヲ刻、火ヲ付煙をのむ、

〔嬉遊笑覽 十上飲食〕煙草は慶長十二年の頃はやりて、其種を長崎櫻の馬場に植しとかや、望一千句に、たばこやも對〻御恩や思ふらん治れる世の末も長さき、或書に、其頃の日記に、此ごろ多葉粉と

烟草禁制

いふことはやれり、是は南蠻より渡りたりといふ、廣き草の葉をきざみ、火をつけて烟をのむなり、

〔烟草考〕芝峯類說曰、淡婆姑、草名、亦號南靈草、近歲始出倭國、

震軒曰、謂烟草出倭國者誤也、蔣氏詳說、西洋人得其種於東洋、通震旦以傳日本琉球、此說甚明矣、

〔慶長日記〕五慶長十四己酉年卯月、一此比荊組、皮袴組とて、徒者京都に充滿ス、五月中搦取之、〇中略依此儀たばこ法度也、右の徒者も、たばこより組ニ成と云々、きせるを大にして、腰にさし下人にもたせ候、　七月、一たばこ法度之事、彌被禁、火事其外有費故也、〇泰平年表七月十四日

〔安齋叢書〕三烟草集說

腐濺集俳諧師立志著曰、〇中略

條々

一たばこ吸事被禁斷畢、然上は賣買者迄も見付輩は、雙方家財を可被下也、若又於路次見付候に付ては、たばこ并賣主を所に押置可言上、則付たる馬荷物以下、改出すものに可被下事、

附於何地もたばこ作べからざる事

右の趣御領內へ、急度可被相觸候、此旨被仰出者也、仍而執達如件、

慶長十七年八月六日

〔武家嚴制錄〕二十三一たばこ作并賣買御停止札

條々

一たばこ作者、町人は五十日、百姓は三十日、自分兵粮にて籠舍たるべき事、

一同賣買候もの同前之事

一同作候在所者、爲過料、百姓壹人に付て、鳥目百文づ丶可出之事、

一同作候所々代官、爲過怠、五貫文出すべき事、○中略

右條々堅所被仰出也、仍下知如件、

元和二年十月三日

安藤對馬守
土井大炊頭
酒井備後守
本多上野介
板倉伊賀守

〔光豐日記〕元和四年六月十七日甲戌、タバコ賣者共、伊州○板倉伊賀守ヨリ被改、數十人取搦、雜色ニ申付事行也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、何れの御代の義に有之や、多葉粉を作る義、諸國共に御法度被仰出、御城内にては、多葉粉を給る義、御制禁堅被仰出と申傳る丶は、其通りの義にて有之や、答曰、我等承り及候は、多葉粉御制禁の義は、台德院樣○德川秀忠御代の義に有之由、多葉粉作り申間敷旨、諸國へ被仰出を以て、向後御城内に於ては、多葉粉給る義、堅御法度被仰出る丶由、其砌之義にも有之候哉、御城にて御番衆の溜呑所へ各々寄り集り、多葉粉を呑被居る丶所へ、土井大炊頭殿御老中の節、ふと御越の義有之、何も驚天被致、手ん手に多葉粉道具を取りかくし候を、大炊頭殿見給ふに付、御番衆に、其御ふすまを立て被申候樣にと御申、則着座有りて、只今何れもの呑れし物を、我等へも振舞れ候樣にと御申され候へば、何れも迷惑被致、兎角の挨拶無く、赤面の體にて居られければ、達て所望に付、無是非袖の中より多葉粉入きせる抔取り出して差上られければ、大炊頭殿被取て、二三ふくも御

呑み、不存寄珍ら敷物を給べ、過分也とて座を立て又立かへり、今日の義は、手前も各も同前の事なり、重てより必御無用也、御上にて殊之外御嫌ひ被遊候事に候へば、此以後は無用にと御申有るに付、其段内々にて入申迄となり、其以後湯呑所の多葉粉、ひしと相止むとなり、

〔翁草五〕當代奇覽と題せるものにあらゆる雜談有り、十が一愛に拾ふ、

寛文の頃迄有し古老の云く、○中略大猷院殿○德川家光御代に、烟草は世の費也とて、堅く御停止に成、江戸町々烟草狩を仰付られ、日本橋の傍に矢來を結、江戸中のきせるを其中へ取捨る、夥敷事云計なし、如此堅御法度なりしが、其後間もなく破れぬと老翁の語き、

〔本朝世事談綺二器用〕烟管

元和元年六月二十八日、天下一統に多波古御停止ありける、そのころ白木屋といふ者、柳原の封彊を通るに、うかれたる乞食の、菰の下にしのびて、たばこを呑を見る、渠がおもふは、かくきびしき御停止に、儻につきたる者だに、これを捨得ざる事、かほどに世の人好むなれば、近ほどにゆるやかならん事を考へ、江戸京大坂の捨れるきせる、其外たばこの器の、當時用だゝざるを買求め庫に納む、はたして程なく此禁の弛けり、時に右の器物を賣て、大きに利を得て、富有と成りて今に榮ふ、

〔本朝世事談綺正誤器用一〕烟管

按るに程なく御制禁の弛けりといへるはひがことなり、ひと度御禁しのありしより、今に、御免はなきを、つき／＼ことゆるやかになりもて行しなり、そがゆへにきせるのみ、御用とて名のれる職はあらず、今兩國に村田屋といへる喜世留○留下恐脫二職字一も、御飾御用といへるとぞ、また白木屋の事、俗間に傳ふる所のもの、本文にかはれることなし、今現にかの家の印に、〆如此なるものをつくるは、きせるをもて、ふたつうちちがへたるかたちを、かたどりたるものといへ

り、

○按ズルニ烟草百首ニ、上文白木屋ノ事ヲ載セタ、此れ甚非なり、元和の頃は、下ざまにてきせるを用べき筈なし、羅山文集に合て考べしトアリ、

〔烟草記〕禁発

或書にいはく、日本元和寛永のころ、天下に令して、たばこをうゆることを禁せしむ、然れども止ことをえず、つゐに茶酒の上にたつ、

〔京城紀事十六〕小笠原右近大夫、捕賊僞將山田右衛門作、致之信綱、○松平伊豆守右衛門作、素爲良民、未嘗與賊通謀、住口津村、及事起、賊捕其妻子、爲質、不得已從賊、賊爲其用、欲伺釁于功贖其罪、○中略信綱携右衛門作還吉諸邸中、密撿散匠殘黨、時都下屢失火、毎多延燒、信綱邸、嚴禁喫烟、有違所本藩喫烟燎其席者、信綱處之斬、且曰、非焚其尸、未足懲人心、而邸中無由焚尸、則使右衛門作描其始末、揭之邸中稠人所、○中略右衛門作、更名古庵、以西洋畫聞世、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕慶安四年辛卯町觸に、烟草呑候處、家内ニ定め置候て、其場所より外にて、たばこ呑ざる樣可仕事、

〔德川禁令考四十四烟草作〕寛文七未年閏二月十九日

本田畑にたばこ作候事停止、野山は不苦候、

覺

於諸國在々所々、本田畑ニたばこ作候事、自今以後可被停止之、但野山を新規ニ切起シ作候儀ハ不苦候、右之趣、各御代官中江堅可被申付候、以上、

未
閏二月十九日

〔常憲院殿御實紀二十八〕元祿六年十月、此月令せられしは、東西内外の下馬所にて、煙草喫べから

ざるむね、前々令せられしに、このころ犯すものあり、東は保科肥後守正容が邸邊、西は牧野備後守成貞が表門邊まで、小人目付して見廻らしめ、煙草用ふるものあらば、其主の姓名をも糾さしむべしとなり、

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年十月二日、町奉行に命ありて、所屬の與力をして、晝夜ともに途上にて、煙草喫ながら往來する者あらば、見及ぶまゝにいましめしむべしとなり、

〔德川禁令考四十四煙草作禁〕元祿十五午年十二月

たばこ作之儀、當年迄作り來候半分可作事、

覺

前々よりたばこ粉本田畑に作間敷旨、度々相觸候得共、連々たばこ大分作出し候、來未年たばこ作候儀、當年迄作來候半分作之、殘半分之處ニハ、土地相應之穀類可作之候、若相背輩於有之ハ、可爲曲事者也、

午十二月

覺

相觸候書付之通、御料ハ奉行御代官、私領ハ地頭より申付候、當年迄たばこ作候、前々町未〇町未恐作來脫候高書付、其内半分たばこ作候樣申付、殘半分ハ穀類作候樣申付候段書記之、來年二月迄之内、御勘定所へ可被差出候、且又穀類可作之所々、種不足之所ハ、奉行御代官地頭より種之儀申付之、田畑荒ざる樣可被致候、以上、

午十二月

元祿十六未年十二月

申年多葉粉作候儀達

覺

一來〈申〉年多葉粉作候儀、當〈未〉年之通、去〈午〉年迄作候高之半分作之、殘半分之所にハ、土地相應之穀類可作之候、若相背輩於有之ハ、曲事たるべく由、御料ハ奉行御代官、私領ハ地頭より、急度可被申付候、

右之趣、此方より可申通由、御老中被仰候間如此候、去冬御觸書之通、無相違樣可申付候旨被仰出候、以上、

〈未〉十二月

永井伊賀守

松平伊豆守

丹羽遠江守

萩原近江守

〔享保集成絲綸錄二十一〕享保六丑年六月

一御祭禮〈○江戸山王、根津〉御供之者共〈○中略〉御曲輪之内ニ而、烟草一切給申間敷候、

〔和漢三才圖會九十九草〕煙草〈○中略〉

和漢煙草、凡同時始矣、初出海外、後傳種於漳州泉州、今處處有之、葉大於茱、開紫白細花、葉老曝乾、細切如絲、大明崇禎十一年令云、有私販煙酒賣通外夷者、不拘多寡梟斬、由此觀之、則大明季人最貴之、〈當本朝寬永年中〉矣、往古無煙草、而莫不足、多吸之亦不充一飢、憎費田圃減穀類、故呼曰貧報草(ヒンボウソウ)、元和寬永之比、天下令禁種之、然不得止、竟以立於茶酒之上、不嗜者百中僅二三人耳、雖有小毒、多嗜者亦無害矣、〈阿蘭陀朝鮮琉球人、亦皆嗜之、〉

〔閑際筆記中〕近世烟草ヲ嗜コト愈衆シ、之樹ル者モ亦多、最良田美地不限所以穀少ナリ、夫酒ハ天ノ美祿、羞蓄偕配、人ノ爲ニ歡ヲ合ス、如有可闕ハ、聖賢猶コレヲ廢トセズ、戒之ヲ制止ス、而ヲ況

ヤ煙草ニ於テヲ乎、君子如何ゾ是ヲ禁ズルコトノ晏乎、

〔春波樓筆記〕夫タバコの大害は、田畑を損ず、又火災の患、此の微火より發る、屢禁ありと雖も敗る、戻る事なき術あり、今よりして小兒に之を吸はしむべからず、若禁を背く者あらば、父子をして共に死罪にす、大約三十年四十年にして、漸々止むべし、

〔宇佐問答〕〇中略或云、天下の奢美故、諸士の用不足にて、年々に高ゆんになりぬれば、百姓も地の者計り作りては、年貢にまどふ故に、烟草を作りて商人へ賣、年貢の足しとす、御たばこに塞ぐ地計りも、日本國中を合せて、近江程なる大國、二三ヶ國は空しからん、それにかゝりて過る者は、皆々遊民也、烟草の道具に費ゆる竹木銅鐵やきもの、其外あげて數へがたし、煙草きざみになりて世を渡る者計りも、三萬餘人あるべしといへり、烟草を作らぬやうに、それに懸りたる者共もいたまぬ様に、五六年程に御止めなされたらば、此一色にても日本の國々廣くなり、諸人ゆる／＼と可仕候、此御仕置計りにても、奉公人は多くなり侍らん、其なされやうは長々しければ略しぬ、

〔我衣〕寶永ノ比、鶴ト云名高キ比丘尼アリ、〇中略宿ハ神田ニテ、同店ノ裏ヨリ出火アリケリ、〇中略御吟味有ケルニ、一人彼鶴ト申比丘尼、朝クハヘギセルシテ、廁へ行タル由申上ル、彼鶴ヲ召シテ、右クハヘギセル致セシト申者ト對決ニ及ブ、鶴申ヒラキ成ガタクシテ火附ノ科ニオチ、火罪ニナリタリ、〇中略前々ヨリ往還幷門外クハヘギセル御停止ニテアリケル、可愼々々、

〔見た京物語〕町々辻行燈或は張紙に

御法度

たばこの火出し不申候

くはへぎせる無用

とあり

乞食集りて、燧火打にてたばこのむ、呵る體なし、

〔新增犬筑波集〕

にが〳〵敷もたうとかりけり、

皆人のまいるやふきの塔供養

たばこ法度の春の山でら

當世ふきのたうをたばこの代にのむ故なり、述著偕房歎多花といふ詩もあり、

〔毛吹草三〕山城。　剣多葉粉　花山多葉粉　伊賀。　多葉古　丹波。　野々村多葉粉　肥前。

白多葉粉

〔本朝食鑑四味晃〕烟草〇中略今諸州多產、攝州服部之產、葉色赤黃赤黑、有奇香異味、爲當世第一、和州吉野畫村之產、亦葉色赤黑、有異香美味、而次之、此兩品俱賤美、其氣不烈不覵、多吸不損口舌、最少膠脂、泉州新田之產、亦有佳香、然氣弱者香多、氣烈者香少、亦次之、甲州之門前、小松、信州之和田、玄古、上野州高崎之產、葉色或赤黃、或黃黑、亦有異香、而不相劣、爲佳品、就中氣最烈者、丹之周山、甲之石火簷也、常之赤土、世人有偏賞者、然味宣氣濁、而不爲佳、肥之長崎者、雖烟草初起之地、其產葉色黃青、氣柔薄有臭、而不足用耳、

〔大和本草六民用草〕烟花〇中略　初山州花山ニ則ミツル、花山タバコト云、又吉野ニ植ツ、後ニ丹波ニウツフ、

〔和漢三才圖會九十九葷草〕烟草〇中略　備後備中、及關東多出之、今攝州服部之產爲第一、泉河新田次之、上州高崎、和州吉野、甲州小松、萩原、信州玄古、薩州國分、丹波大野、皆得其名者也、

〔烟草百首〕これ〇和漢三才圖會正德二年の印本にて、いまだ此頃は常州野州の產は著さるなり、本朝

食鑑に、水戸赤土の產を賞、然る時は天正の頃、タバコ島より渡て、大隅國噲唹郡國府へ植、又慶長頃、西洋の種を長崎へ栽しものか、其後丹波の笹山、攝州服部、和泉河內、及中國筋、信州埴科郡、甲州小松、上州山名館、奧州邊迄、諸國種せざるといふ事なし、野州。常州。は、近後年の產地なり、江戸にておほく吸へるところの、武州秩父の名葉出初しは、四十年以來、又信州生。坂。は、三十年にたらず、昔服部を第一の名產とすれども、あじはひ辛烈故、今は國。府。を極上品となす、芬都なるが故價も高しなり、和柔を好めるものは館を良とす、辛とも香氣を好者は舞留を上品とす、

〔烟草百首頭書〕烟草諸國名產

大隅噲唹郡

國府　砂走　車田　武元　龍王　伊勢ケ屋舖　砂ケ町

大隅の名產にて諸葉の最上とす、薰り高く風味佳、國分寺の境內に產する葉勝れて美味也、其故に國分の名あり、產する地聊なる故販賣するに足ず、皆噲唹郡の內より出る、薩摩の產といふは誤也、島國府と云は、薩摩の國の郡也、葉形も賤く下品とす、一體此國暖なる故、中春種蒔、夏土用明頃懸乾、初秋には江戸へ積出、故に葉に粘脂なく、火を點ずるにうつりよく消ざるを賞す、三四年圍置、古葉(ふるは)になる時は薰り勝れて美也、價高し、葉に力ありて、細刻するに碎けざる故髭(カモジ)たばこの名あり、

長崎は初て栽し土地なれども、至て下品なり、日向の葉形に似たり、

攝津島下郡

服部　塚脇　西河原

山城乙訓郡

石津

丹波桑田郡

山本

國府に續きたる名葉にて、奇香異味國分舞留美を競、然といへども此葉甚辛烈故、人是を好ず、近來舘和を設所似なり、上を留葉と云、通して中を舞葉と云、下を薄舞と云、上土地に產すれば、葉に力なくとも畫有、畠地へ產するを上品として俗に舞と云、田地へ產するを下品にして服部と云、下品なるは火を點ずるに忽滅、都て我國は何地にても田へ產る烟草は皆下品也、稻を耕すに障なし、舞留上中下の葉ともに五年七年の古葉を賞美す、殊に止葉は數年圍置しを上品とす、氣味辛といへども香氣發口中清涼にして水を啜がごとし、

葉〇補考るに、中葉未熟せずして枯萎する者味薄けれども芬郁也、これを舞と云、葉の異横畫に鑿みて見ゆ中葉下力なきを嬰婆と云、俗には、ゝアとも云、舞といふ名あるによりて、姥の老たる意なるべし、〇中略

烟草は味辛く氣溫にして毒ありと、諸書に見ゆれども、一體異國の烟草は、葉に力ありて辛烈故に毒多し、東洋の烟草は人命を助るほどの能あるが故に、又毒もあるべし、我邦のたばこは、能もなく毒もなし、明和安永の頃までは、辛を上品とせしが、近來作方肥を撰み、和柔に乾晒す、中にも館は葉に力ありて、和らかなる名葉なれば、日本の中にても、江戸の烟草は名產なり、都て關西の品はきつく、關東は和らかなり、豐國にても東洋は勝れて、西洋は劣といふ、唐土にても閩の產は上品とす、燕の產は中品、浙江石門は下品なりといふ、〇中略

〔烟草百首〕烟草至て好る人旅行の時用る、五町烟草の取合は、野州馬頭山の最上の油脂の深きに、秩父薄邊の脂つよき葉と等分に合せ剉、道中は度々つき替ことを厭へば、右の烟草に火を點る時はきゆることなく、きせるに息をいれざれども、五町が間滅ざるを奇とす、前にもいへるごと

く、秩父館大山田は、脂ふかしといへども、和らかき事餘葉のおよぶ所にあらず、是を五町烟草といふ、

又曰、館。大。山。田。脂ふかきは至て汐風を嫌ふ、もし汐風あたる時は、きつく脂臭くなるもの也、遠國へおくるにも心得ざるときは、東都の名產もほいなく、餘國の葉にも劣るべし、

一ヶ年の内に、諸國より江戸へ來る烟草の高、大槪を左に記す、最江戸近在へ贈荷物聊出る有、又諸國より香料の葉江戸へ入あり、これを差つぎて凡を見る、

國分舞留下り物十四萬八千斤餘　上州秩父館百六十萬斤餘　水戸下野大山田二百十六萬斤餘　甲州其外諸國三十萬斤餘　水戸下野奥州切粉百六十五萬斤餘　信州切粉百五十萬斤餘

都合七百三十五萬八千斤餘

大槪の積、人數百十餘萬人に割付て見る時は、一人に一ヶ年六斤六分八厘九毛餘、是を以て之を見る時は、百中喫ざる者、唯二三人といへるも宜なり、

常州水戸領赤土年員は、寬文の初より烟草を植けるに、元祿の末は盛し、其斤高左に記す、

常州　烟千百五十八町七反二畝五歩（畝二十五斤積）百七十三萬八千八十斤餘、

下野　烟三百十五町七反九畝二十八歩　四十七萬三千六百八十斤餘

合テ二百二十一萬千七百六十斤餘

右は元祿十五午年、常州野州兩國にて種する所也、其內近國及上方筋へも登すこととなり、この頃は切粉にては出ず、全葉のみなり、（常時より見る時は半にも足ず）然處作方盛にして、米穀の妨ならんと、元祿十七（〇七六誤）癸未年より、半減の作方仰付らる、

紀州勢州兩國にて　烟八百五十二町八反四畝　百二十七萬九千二百六十斤餘

攝州服部の地　烟二町九反二畝歩　四千三百八十斤餘

尾州　畑百五十三町八畝步　二萬三千七百斤餘
濃州　畑百二十三町八反步　一萬八千五百七十斤餘
江州　畑一町八反步　二千七百斤餘
肥前基肆養父兩郡の內　畑一町四反步　二千百斤餘
右聊の地所たりとも、年年より半減の作方なり、その後諸國新田開發し、烟草を種することおびたゞし、當時に至りては國々の業算るに遑あらす、

〔雍州府志六土產〕多波古○中略　多波古、山城州山。科。邨。山、攝津州服部、丹波新田、河內、和泉新田產爲宜、悉賣京師、

〔雅筵醉狂集雜〕たばこを
人の來てさしの首の葉きれ口によしや芳。野。の。だ。ば。こ。一ふく

〔新編相模國風土記稿三〕山川名所圖產附
國中山海原野ニ產スル物ハ、○中略煙草大住郡波多野庄村々ノ產ナ、波多野煙草ト稱シテ佳品ナリ、足柄上郡、入澤、萬龍、柳川、虫澤、境、境別所、杤窪、松田總領、同庶子等ノ、九村ニ產スルヲモ、波多野煙草ノ佳稱ヲ貫セリ、其內松田ニ所ノ產ハ、松田煙草トモ云フ、

〔善光寺道名所圖會一〕生阪眞御前生坂など、世に賞する其根元を尋るに、犀川の河上に、川並十三ケ村といふあり、其內の上生坂村にて製するを眞の上品といふ、慶長の頃、生阪稱名寺の禪僧、西國筋修行し侍りし砌、長崎にて煙草の種を得て持歸り、我菴室の庭に植て作りしより段々廣まり、異村にても多く作り出し、諸國へ運送して產物となりし也、今も其寺中に出來たるを上品とす、御前生阪といふは、上生阪村につくるをのみいふとぞ、

〔蕉錄上〕土宜
茂賀○大槻曰、近時煙草之盛也、我邦每州至無處不產、但其品類有好惡耳、○中略如吾奥中所出、亦極多

烟草栽培
烟草製方

矣、所謂登米郡猨河原、鱒淵、岩井郡東山之保呂波、舞草、膽澤郡衣川、宮城郡國分之三十人街、皆上人口者、而猨河之長崎村、衣水之常法院、三十人街之杉下、其尤也、氣味芬香、不讓隅州國府烟、近時輸奥烟中最麁惡者於都下、奸商僞呼猨河原、懸牌販賣、故都人士、以猨河原爲凡烟、何其冤也、余鄕之土產、以其素所知附記焉、

〔色香論　末〕此ごろ世間には、いかなることやはやるらん、かたり賜へといひければ、〇中略されば しよてらも多けれど、ほつけのおてら御門跡、上手のくすし、もろはくと、丹波たばこに肥後ぎせる、くはんせがしまひこんばるが、うたひは今のはやり物、

〔長崎夜話草　五〕長崎土產物

烟草　蠻人種子を持來りて、長崎櫻馬場といふ所に植てより、普ねく世にひろまれり、此故に今も櫻馬場のたばこは、色も香ほりも他所とは各別なるもの也、

〔賤のをだ卷〕其比は〇寬延年間女は、龍王、もきの類、男は館服部などを呑たり、今はうつりかはりて、もき玉て和かくなど呑む女は一人もなし、貴賤男女ともに國府たばこならでは、呑ぬやうに成たり、色は黃なり

〔後は昔物語〕彼砕也といふ隱居が云、近頃は薩摩國府といふたばこ、所々に見ゆ、火附のよきたばこなりといへり、其頃は和泉新田とて、白く黃色なるたばこを、女は多分のみたりと見ゆ、傾城もこれをのみたりと聞く、

〔南方海島志　下〕八丈島土產

烟草、頗ル佳也

〔本朝食鑑　四味果〕烟草

集解、煙草素自南蠻國來、移種子本邦、不過六七十年、此苗叢生類萵苣、莖高三四尺、葉似南星商陸而

長大、八九月開小花、紫頸簇簇、亦厚面淡赤色、略似石蒜紫菀之類、結子如桐實而有稜黄色、七八月采葉晒乾、青變作赤黄褐色、而厚爲上、深赤黒而厚者次之、淡赤黒者、淡赤黄者又其次也、薄黄淡青而薄者爲下品、農家場圃多種之、以貨于四方、得利者不爲小、種之若種去年之田、則苗短葉微而薄、色淺味惡、故年年易田、鋤新地而種則佳、略似種瓜法、

〔和漢三才圖會 九十九 草部〕煙草〇中略

按〇中略煙草二月下種、五月移栽、摘去新芽、除蟲也、毎日不可怠、高三四尺、葉似商陸而長大、七八月采葉、復蒸塗食之、一宿取出、毎一葉挾繩、如編成而晒乾、一夜露宿、復晒乾、則成黄赤色、簇簇收之、八九月莖頭出朶、莖開小白花帶赤色、略似紫菀花、結子、内有細子、黄褐色、有小蟲、而食其子、故能不避蟲、則難得其種、

〔烟草百首〕叢（隰草）考るに、高三四尺とあれども、館大山田の類、豐作の時は五六尺に延、葉三十四五枚もつくなり、其地所にあひしものなるべし、國府安房塞龍王は、六月末に葉をとり、館は八月、大山田沼田の類は、九月末に葉をかくなり、國府は葉を摘す、根本より刈、莖のまゝ乾し、黄赤の色つきし時葉をとる故、葉の莖形よく、駒の爪のごとし、

〔烟草百首 隰草〕烟草和漢ともに禁むること、一體此草膜田にあらざれば味惡、これを種するに、若去年の畠に植る時は、則苗短く葉微にして、枯葉多く色淺、味宜からず、年々畠を易肥を入、新地に種する時は、則葉の實入よく、力ありて薫よし、至て地所を荒す草故、五穀の妨をなす、殊に日用一切の糧にもならざれば、天下に令して、是を種することを禁ず、本朝は田地異國に勝れて、米穀は悉多、新地年々増、中にも常州水戸、武州秩父山は、田面少く畑地多、山々谷々新地を開きてこの草を種するに、地所にあひけるや、季夏のころは、莖長さ五六尺に延、葉三十枚餘を生ず、初冬に至て、東都へ出し販賣するに、五穀に利を倍し、其國潤へる故、自然と盛なりしも愛度（めでたき）御代の驗なるべ

烟草刻器

し、

〔本朝食鑑　四 味果〕煙草〇中略

煙草有宜新葉者、有宜去年葉者、或有二三七八年之陳葉、最宜者倶有藏之法、先用厚紙包封、重用油紙包之、或柿澀紙、及用稻草薦而緊縛之、而收于桐匱、或磁壺中、及舊酒槽中亦好、其剉之法、氣烈者極細、氣柔者粗麁、不可風乾、不可火乾、不可日乾、不可水濕、不可濁氣濕、不可酒濕、不可雨雪濕、惟自然半乾半濕爲佳、今市上販之者、脂于葉面、以其柔滑易細剉、然油臭薰咽、不可忍之、最爲毒人、若甚乾甚濕難速剉者、酒水各半合、以荃帚輕輕點之則易剉、此爲急促、而不可常用爾、

〔塵塚談　下〕多葉粉剉やうのかはれる事、我等二十歳頃迄は、五分切といふて、あらく剉を伊達にせしに、近歳は至て細く糸の如くに剉む也、四五年已來は、そのうへにこまかになり、こすりとかいふを賞翫す、剉むに押ゆる板をこまといふ、其こまの木口をすりてのみゐるやうに剉む事なり、

〔烟草百首〕上州館秩父館大山田の土葉、江戸にて用ざる烟草は、大坂へ登事夥し、彼地にては土砂を希、豐後葉を以卷、鉋にて切に、一日に壹人にて三四十斤切事也、細く猫の毛のごとく、手ざわり至て和らか、然れども油のしめりぬけざる故、快晴の日に干、能乾し、日を經て賣出す、甚油臭し、味も土葉なれば下品なり、唯和かにして火を點するによく、價賤しきを賞してこれを吸、關東の人、此油の匂ひを嫌ふ、鉋にて切工能せしもの故右に圖す、〇圖略

〔一話一言　十五〕烟草の事

世ハ末法ニ下リ、人ニ一ノ大病付ク、所以者何ハ、慶長元和ノ比ヨリ、烟草ト云妖草、異國ヨリ亘リ、人年々ニ賞翫シ用ルコト、日々ニ熾也、無德ニシテ失多トイヘドモ、風味ノ美ニ迷、此失ヲ顧ル人ナシ、聖人ノ世ニ此草出ナバ、五辛五戒ノ誡ヨリ堅カルベシ、第一座席ヲ穢シ、火難是ヨリ起トイヘドモ更不厭、好マザルモノヽ氣ヲ破リ、剝禮義ヲ不知、ケブリシタヽカニ吹カケ、呑ガラノ灰ヲ

吹出シ、菓子食物ニ入事ヲシラズ、ヒトヘニ己ガスケル心ニマカスルハ、ザリトハアサマシキ愚人ト云ツベシ、イカナル好物トテモ、二六晝夜用ルコトナシ、此草ニ於テハ、片時ノヒマナク是ヲ用ユ、人四五人モ寄合トキハ、キリフカキ山中ニ居スルガ如ク、飢タル者ノ食ヲムカヘ、渇シタル者ノ水ヲ求ムルニ不異、甚見苦敷アリサマ也、若キ女兒法師ナド、責テ用ヒヤウノ、タシナミ、心付ベキコト也、是ヨリ名香ハ名ノミ殘リテ、惡臭世間ニ滿々タリ、著心ヲ厭事ハ、三道一致ナレドモ、此草ニ於ハ、誰兒トハナケレドモ、此失ヲ不尤、禪律ノ師モ甚是ヲ著スル所ニ、隱元來朝、是ヲ忌バ、彼寺計ハ禁ズルト見ヘタリ、ヤサシクモ心付ラレケリ、只物ハ見馴キヽナレシコトハ、誤事モ人是ヲトガメズ、此ニ痰涇ノ病有人、痰壺ヲサゲテ人ノ交ヲセバ、誰カ是ニ近付者アラン、然ニ灰吹ト號、痰ヲ吐事一人ニ限ラズ、數多ノ痰ヲ吐タメ、座中ニ是ヲ置、其匂ヒ已ニ糞土ニコトナラズトイヘドモ、好所ノ迷ニ是ヲ知ザル也、或時ハ堂社佛閣ノ靈場、談義講釋ニモ、半時一時ヲ堪ヘズ、火ヲ覚、痰ヲ吐、又ハ前後ノ人ノ衣類ヲ燒穢スコト、歎テモ餘リアリ、カヽル人ノ參詣ハ、惡業ノ種ヲ蒔ナルベシ、是末法ノ出來病ナラズヤ、辛事ヲ蓼葉ニ習、臭事ヲカハヤニ忘ルヽトハ是ナルベシ、又人ノ喰穢シタル箸ハ、イタク是ヲ忌嫌トイヘドモ、キセルニ於テハ、イカナル癩病瘡毒ノ者ノ痰咽ノ付タルヲモ更ニ不厭、是ヲ用テ樂トナスコト、アサマシキ迷也、業深止メ難キモノハ、責テ大分ノ無作法ヲタシナムベシ、

一第一痰ヲ吐事

一談義講釋ノ時不可用事

一呑ガラノ灰ヲ吹出時可心付事

一食事ノ時、煙草出スベカラズ、尤呑ベカラズ事、

一風上ニテ人ノ面ニ煙ヲ可恐事

一キセル掃除、人前遠慮ノ事、

一上下トモニキセルクハヘ、コトワザ成ベカラザル事、

一天草飽マデ・チヂ入、永吞殊ニウヘラセ、度々痰ヲハキ、咄スベカラザル事、

此外惡事數多有トイヘドモ、右九（九戒入〇誤）ケ條ハ極タル罪業也、總テ威イカヽリ、纔ザマニ飽マデ吞風情、見苦コソアレ、願クハ我子孫相續セバ、此書ヲ傳テ堅ク守リ、カヽル惡草ヲ手ニダモトルベカラズ、悲哉、此草ハヤリ初シ時、其比ノ明君、末代ノ失ヲ考思召、御法度堅仰出サレ、或時ハタバコ作リタル者ヲ籠舍セシメ、或時ハタバコキセル、辻ニサラシ燒捨、商賣人禁玉フトイヘドモ、此草ニ一度フレ、味ニ著シタルモノハ、命ヲ捨ルコトヲ更ニ不厭、御成敗ニカナハズ、切支丹ヨリモ止ガタク、依之ソロ〳〵高人ノ中ニモ用玉フ方出來ル、故ニ今ハ是ヲ嫌者アレバ、却テ希有ノ思ヲナセリ、鼻有猿ノ笑ヲ得ガ如ノ世トゾナリケレ、中略

紀州笠寺ノ住僧、六十歲ニシテ煙草ノ惡ヲ知テ止ケリト、唐ノ蘧伯玉ハ、五十ニシテ四十九年ノ非ヲ知リ、今ノ住僧ハ、六十ニシテ、五十九年ノ非ヲ知トイヘリ、其國ノ大守、ヲリ〳〵彼寺へ御來臨トゾ、此守護モ煙草アナガチニ嫌玉ヘリ、彼御守殿ヘハ、常ニ戶ザシテ人ヲ入ザル處ニ、或人所望シテ拜見シケルヲリカラ、緣ノホトリニテカノ惡草ヲ吞ケル所ニ、三旬ヲ經テ、守護入セ玉ヒ、此所ニ太破己（タバコ）ノ息氣サカンナリトテ、忌玉ヒシト彼僧ノ語レリ、淸淨ノ鼻ヘハ、一入惡臭サツルベシ、下略

明曆酉歲、武州大火ノ節、予ガ知人本鄕ニアリ、淺草ヨリカケ付見舞ケレバ、亭主病人ニテ、疾家ヲ明退ケリ、亭主ノ伯父ガ家モ疾類火ニ逢、此處へ退來ル處ニ、ハヤ鄕マデ火移ケレバ、トク〳〵出ラレヨト申セドモ、イロリノハタヲ離ヤラズ、何ゾ尋ルテイニ見ヘシホドニ、イカヤウノ大切ノ物ヲ失ヒタルカト問ケレバ、イヤトヨタバコヲ一服吞タキトテ、キセルヲ尋ルトゾ答ケリ、モハ

ヤ戸ロマデ火ノ付ケレバ、早々出ラレコトムリニ引立出シケリ、路スガラモ是ヲホイナク、予ヲ恨、セメテ一服ノマセザラデト云ツブヤキケレ、其後世モ静ニ成、參會ノタビゴトニ、カノタバコノ意恨、今ニアリトゾ申ケリ、此者ノ嫁ハ、其〻產後七夜ニ當リ、女房ハ獸病ニテ嫁モロトモニ下人ニ手ヲヒカレテ、行方不知ナリケリ、風ノハゲシキコト云バカリナシ、日ノ光モ見ヘズ、百千ノ雷ノ一度ニ落カヽル樣ニテ、四方鳴ワタリシ也、カヽルワリカラ、天草ノ毀、サテ〳〵思ヘバ、著心安執ノ深草ゾヤ、其比ノ書記、多ク家々ニ有ベシ、故ニ詳ニ記サズ、

一歳淺草堀田殿ノ屋舖ニテ、鹽硝ヲハタタトテ、天草ノ火移リ、四五人打殺サレ、江府カクレ無、燈雷ノゴトシ、其時廣間ノ番人、朝請取ノ者遲參トテ、二人ノ内一人、屋舖ヨリ直ニ他出スルトテ、相番ヲ頼、代ヲ待ウケズ出ケリ、其以後ノ事也、番人科ニ行ハルヽ、次第ハ、請取遲參ノ者ハ閉門也、他出ノ者ハ追放、請合ノ者切腹シケリ、常々カヤウノ類ミタノマルヽコトハ多事ナレドモ、互ノ事トテ、弓斷スル也、吟味ノ上ニハ、カヤウゾト知ベキ爲ニ記置也、廣間番人ヘ、火ノ用心申付ベキ由仰渡ノ故也、近年大坂ニテモ鹽硝飛ケルモ、カヽルタバコノ故ナルベシ、カヽル惡事日々ナレドモ、天草ノアヤマチハ、人トガムル者更ニナシ、御父上野守（今○守闕）殿ハ、タバコ嫌玉ヒ、常ニ仰ラルルハ、無類ノ侍ヨシトイヘドモ、天草ヲ含ヲ見テハ、無類ノタハケトロソ見ナセト仰ラレシト也、又御祖父ハ、タバコ初ハスキタマヒケレドモ、其後上ニ御嫌トテ、宿ニテバカリ用玉フ處ニ、或時念比ノ衆來、咄居ラレシニ、タバコヲ用玉フヲ見、此人ノ云、貴公ニ於テハ、御用有マジキ事ト申サレケレバ、其時赤面シ玉ヒ、其タバコヲ呑サシ、烟ヲ吹出シ捨、夫ヨリ堅ク御止リアリケリ、其一服ハ、吸ハタシ玉フベキ事ナルニ、誤ヲ改バ、卽座ニカヤウナルヲ手本ニナシタキモノト沙汰セリ、誤ヲ人トガムレバ、明日ヨリアラタメン、來月ヨリトナヲタル人ハ、一生アラタメザルモノ也、歴歴道ヲ論ズル人モ、此草ノ迷ニ於ハ、法ヲ破リカクレ忍テ用ヒ玉フ、況ヤ凡下ノ者ヲヤ、一切物ヲ

際スル一念ノ起處ハ同事也、ハヅカシキ一念トゾ、是獨愼ノ人ニ非ンバ、是ヲ感得スベカラズ、凡飲食モ多中ニ、火煙ヲ以慰トスル事、末法惡世ノ印也、人ノ短氣短才ナルハ、皆火ノ情也、此一凶ヲ止ズンバ、往々彌火難烽ナラン、

以上、○中略或人ノ隨筆三卷中ヨリ抄出ス、此隨筆未詳作者名字、文中ヲ按ズルニ、元祿ノ比ノ人ニテ、明暦ノ火事ヲモ見シ人ト見ユ、

〔閑際筆記 中〕煙草此ヲ多波古ト云、林羅浮、以本草ニ載所ノ莨菪ト爲ナリ、未知然ヤ否ヤ、大清人吳與沈穆ガ著所ノ本草洞詮ニ、稱之煙草ト爲、其言ニ曰、煙草味辛氣温毒アリ、寒濕痹ヲ治ス、胸中ノ痞膈ヲ消シ、經絡ノ結滯ヲ開、然ニ臟腑經絡、皆氣ヲ胃ニ稟ク、煙胃中ニ入、頃刻ニシテ身ニ周、是以氣道頓ニ開通、體倶快、然ドモ火元氣ト共立ズ、人ノ元氣、豈此邪火終日薰灼スルニ堪ヤ、眞氣日ニ衰、陰血日ニ涸、暗ニ天年ヲ損ズレドモ、人不覺耳ト、稱謂洞詮ニ言所、略其能ヲ說ト雖、實ハ則人ヲシテ其毒ヲ知ラ俾ト欲而已、豈須臾ノ快ヲ爲テ、終身之患ヲ遺哉、且夫人初テ吸之、眩暓ザルコト鮮、煙管ノ中ニ油煤アルヲ食蟲誤テ甜之卽死、峻烈如此、咸常ニ見所ナリ、曷洞詮ニ言所ヲ埃テ、而後多毒ヲ知哉、或人曰、豆醬能煙草ノ毒ヲ解、故ニ吸者病ヲ不成ト、然ドモ豆醬ノ力、安其峻烈ノ氣ニ克コトヲ得、銖積寸累、遂爲大患必矣、

〔本朝食鑑 四味果〕煙草

近代瘍醫、煉生煙草葉作膏、和腫止痛、或合白占以吮膿、最得奇効、是蕃國之流也、煙草之黑脂塞竅不通、則味噌汁鹽湯能通之、本邦之人、常飲味噌汁鹽湯、故膠脂自不塞咽喉胃口也哉、○中略

葉氣味辛温有毒、實亦同、俗言食于蘭臉、未詳、若然則得味噌汁鹽湯冷水之類、自可解其毒耳、主治通胸膈、開胃口、拂鬱破悶、消憂解飽、固齒牙通二便、利九竅、開皮毛、能令一身之氣而上下之、運轉之、快利之、發散之、若有熱湯病者宜忌之、

發明、明順治年中吳與沈穆集本草洞詮、初載煙草曰、一名相思草、言人吸之、則時時思想不能離也、味

辛氣溫有毒、又論四功者詳矣、至於臟腑經絡皆稟氣於胃、煙入胃中、頃刻而周於身、不循常度、而有駛疾之勢、是以氣道頓開、通體俱快、然火與元氣、不兩立、一勝則一負、人之元氣、豈堪此邪火終日熏灼乎、勢必眞氣日衰、陰血日涸、暗損天年、人不覺耳、則能論煙草之害者亦詳矣、然煙草之煙氣、聚則熏灼有毒、散則發越無痕、今人人吸煙吐煙、漸至咽喉之間、不至胃口而出、若有遺毒、則時飲湯水啗汁、悉下降而去焉、故不受氣火勝負之害者可知矣、加旃吸煙草之人得壽者多、不吸煙草之人得夭者多、是以亦可知、若自初不嗜者、不消論是非矣、

附方、銃毒腫痛、用烟膠少許、以末點之、則止、剪刀誤傷、血出不止者、用乾煙草末、敷之、即之而愈、

〔大和本草六民用草〕烟花略○中猿ハ好ンデタバコヲ食ス、犬ハ苦キラフ、物性各異也、蛇ニタバコノヤニヲツクレバ、顏色カハリテ死ス、

〔見聞小說八集〕文政八年八月見聞會

京　角鹿比豆流

筑前御儒者井上佐市より、京都若槻幾齋翁へ之書狀與に、

怪談らしく思召さるべく候へ共、實事に付、爲御慰申上候、去る六月初、弊邑管内宗像郡初の浦と申す所の山岡に、煙草を作り置候處、何物かあらし候者有之候に付、百姓共申合、獼猴之所爲にて可有御座候間、逐拂可申とて、數十人一山に入候處、獼猴五十餘群居候に付、扨こそと能々見候處、中に長一丈二三尺、圍一尺五六寸の大蛇を取り圍み、方に闘居申候、猿ども口と手に、煙草の葉を持ち、蛇前猿にかゝり候へば、後猿蛇尾を曳、其闘果しなき摸樣に御座候故、所之獵師、鳥銃にて蛇を打殺し申候、猴は火音に驚き逃去申候、猴共蛇の煙草を嫌ひ候儀を能く存候事驚入申候、略○中其所は治下より八里計の處にて、うきたる儀にては無御座候、

七月念三

是は去年申七月の書狀なり

〔養生訓 四飲食〕飲茶 烟草附

烟草は性毒あり、烟をふくみて眩ひ倒るゝ事あり、習へば大なる害なく、少は益ありといへども損多し、病をなす事あり、又火災のうれひあり、習へばくせになり、むさぼりて後には止めがたし、事多くなり、いたづかはしく家僕を労す、初よりふくまざるにしかず、貧民は費多し、

〔和事始 四飲食〕烟草

慶長十年の比ほひ、始て日本に渡る、そのゝち諸人これを賞飲す中略今俗に飲食のうちにも、ことに酒、茶、烟草の三飲は、貴となく賤となく、智あるもおろかなるも、わきてこれを賞す、されば酒は毒ありといへども、少く飲時は、人に益ある事医書に見えたり、ことに聖人もこれをすて給はず、茶は渇を潤し、睡眠を去の能あり、たゞ烟草のみ、益なく害多き事これに過たるものなし、俗輩奴婢のこれを吮は責るにたらず、士君子たる人の蛮国の俗をしたひ、身に害あるものをこのみ賞する事は、甚ひが事成べし、元和元年六月廿八日、将軍家より天下に命を下して、烟草を吸事を禁じ給ひしは、理ある御おきてなりしが、今其禁い弛げるこそなげかしけれ、

〔和漢三才図会 九十九草草〕煙草中略

南蛮流外科青膏薬中、入煙草嫩葉汁、用能止痛排膿、止血殺虫、凡藍及諸草葉生虫者、以煙草茎汁灌之、猫犬蛇諸鳥皆悪煙気、獮猴見刻煙草則抓食、凡人酔煙草者、飲未醤汁解之、冷水亦可、

〔煙草考〕震軒云、烟草気味辛、性熱有毒、諸家之説皆同也中略其有毒、試以管中髹脂少許納蛇口、脂之所至、肉色随変、遂殭直死、田野人被蝮蛇噬、急採青葉絞汁塗患処、即愈、永無遺毒之患、或蔵書以紙包葉、或茎置于巻帙之間、笈笥之内、能辟蛀蠹、最勝芸草銀杏葉及樟脳等、諸虫恐其毒如此、亦嗜之者、朝夕起臥、釆管不能厭、雖未見甚有害也、其暗損天年亦不可知矣、其過服雖穀肉酒茶平和之物、亦能為害、其要只在節之耳、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物
煙草〇中略　能は煙を吸て鬱氣を開き、氣力を益し、山嵐瘴氣を避け、冷濕を散す、葉を香嚢に入て、毒虫を除く、脂は蛇毒を解し、虫齒を堅くす、金瘡に葉を付て血を止む、內障(そこひ)の眼、又は青盲に好といへども、いまだ其驗を見ず、又煙を吸て食を消すといふ、
毒は、多く煙を吸ぬれば口中損す、又上氣耳鳴に忌べし、眼病に可禁、但虛眼には忌ずといへども、多く吸ては、相火を助くる故に仇となるべし、常に多く吸ときは、呼息を暴くして、血脉運散なり、故に壽命を減ずるの恐あり、いはんや壯年血氣強盛なる人をや、痰喘の人可忌之、勞疾の病大に禁ずべし、胃火を生じ、心熱を壯にす、
煙草の毒を解するの方、麥門冬、紫蘇子、瓜蔞仁、枇杷葉、甘草、已上五味等料、如常煎じ、査を去て、砂糖一撮を入て服す、尤妙なり、
〔煙草記〕製法
書物の間に、たばこをはさみおけば、しみさりぬ、
〔安齋隨筆前編十一〕煙草　烟草は古代なき物也、慶長の頃、蠻國より渡り來ると云傳たり、是を不好人は、毒物也とて、其害を論ずる人もあり、酒を多く呑人は、酒毒にて終に內損の病になり、或は吐血、或は浮腫、或は黃疸等にて死する人あり、烟草を好て烟毒に中り內損し、病を發して死したる人を不見不聞、然れば毒物に非ず、良物にも非ず、烟を吸て試るに、讀書寫字に而、心倦み氣鬱したる時には氣を運し鬱を開くを覺ゆ、食後に煙を吸へば、口中爽になるを覺ゆ、此外には何の事もなし、尤無益の物也、
〔閑田次筆四〕烟草は唐山も此方も、なべて二百年來、もはら人の嗜むものにて、一たび吸ては忘れがたきゆゑに、相思草ともいへり、蠻國より出て世に弘まれるにて、本草備要などにも是を出し

て利害を論じ、害は多く益は尠きさまに書り、然も極老まで嗜む人さしたる害もなし、おのれも亦此たぐひなり、例せば茄子は食物本草の類、害多きよしに記せれども、本邦には中夏の比めづらしとてもてはやすより、晩秋に至り、或は糠に漬しては終年喰へども、一人も此害をおぼえたる人なし、脾胃に馴ては害なきものにや、唐山の人の獸肉を常に喰ひて其害をしらず、かへりて本邦の米の美味に過て、泥滯をおぼゆるといへるに同じ、

〔蕉錄下〕附考並餘考

蓋此物〈○煙草〉除惡氣、辟寒濕、通痰滯之類、僅僅三四功已、而其爲害者非淺鮮、如諸書所誌矣、夫石苑氏、嘗論四功、余試定八害、按人身元與天地一橐籥也、天氣降、地氣升、人在其中、呼吸吐納、亦是清淨之氣也、其養而豐、豈有它乎、而是邪火、日夜薰灼臟腑、而暗殘賊淸淨之氣焉、其害一也、人之有飲食也、唯後天之氣是養、於是五味各有司、而如煙者、五味亡所當、故多服、則其人頭痛目眩、卒然發病也、其害二也、酒曰禍泉狂藥、先王之大禮必將、茶曰偏味、廟堂以薦鬼神、今夫煙也、進不能備大禮、退不能携君父師前、只猥褻閭閻之物、而千金之價是競、其害三也、植煙草也、非腴地則不殖、通萬國計之費稼地者、其壤殆大於公侯之國焉、且民情趨利、於是用力於煙草、而公田稍生莠者不少、其害四也、煙草之初生也、培養灌漑、拂蠹蟲、障風露、其採也、懸乾修造、大妨農暇、其害五也、雖以天下之大乎、則錦繡金銀之費於煙具者許多、恐王侯之服器爲之不給、其害六也、都會接宇之地、火制甚嚴、而必亡賴之徒、慢煙灰而失火者往々有之、其害七也、老人小兒以煙管誤傷咽喉者、余嘗見十數人、是自煙草出後之患也、其害八也、八害中費腴地、妨農暇、賊人壽者、尤爲可惡、〈○中略〉余一日訪苅屋侯醫官推元玄長、談次及之、〈○中略〉主人又曰、予嘗歷見漢土朝鮮流求、及和蘭人所用之煙管、皆長管也、服之僅一二吸而止、嘗聞之古老、我古之製亦然也、距今三十年所有稱坂本製者、其管接續而長及二尺餘、則煙氣之薰咽喉者、亦應稍疏乎、未聞短管競美、日夜不絕口者也、由是觀之、今之盛不亦怪乎、此說實與余所論符、〈○中略〉余亦細考之、漢

土渡求及朝鮮等、所用之管皆長、而其製亦不開、如我邦屢改者、且也如和蘭人所用磁器而長管、其管頭通、內之孔細小、而似防煙氣者、又有製煙葉法、先湯煠、而去其辛辣燥暴之氣、曝乾之數日、而後切爲絲、故其味至淡薄也、服之亦至一二服而止、蓋彼方俗、凡百之制極精緻妙、有他邦之不可企及者、獨煙管不用巧、只磁器而不改者、義取之于不須服邪、又見瓜哇(ジヤワ)、暹而粗等煙管之圖、其長或及四五尺餘、夫他邦之管、用管長者、爲其煙氣不能直灼肺府、而有除燥氣之功乎、其如是、而始可謂無害已、嗚呼八害之論不行、則請別立一法、先長其管乎、而十日一換、以要管中不生煙脂已、○中略庶幾世之嗜之者、亦嘗以余之所懼者懼焉、天明壬寅之春、玄澤大槻茂質識、

〔北窻瑣談後編一〕備後福山の家中內藤何某といふ人、或時庭に出たりしに、烏蛇を見付たりしかば、杖もて強く打けるに、其まゝ走りて、草中へ入りければ、草の上より頻りに打て尋求けれども、つひに見失ひぬ、暫程へて、奴僕見當りて、草中に蛇死し居れりと告しかば、內藤出て、杖もてかきのけんとしける時、其蛇頭をあげ內藤に向ひ、烟草の煙のごときものを吹かけゝるが、其烟內藤が左の目に當りて、蛇はそのまゝ倒れ死しける、內藤が眼俄に痛てはれあがり、寒熱出て苦惱言んかたなし、既に命も失なふべく見えし程に、內藤煙草のやにの蛇に毒なることを思ひ出して、煙管のやにを眼中に入れしに、やう／＼に腫消し痛みやはらぎて、一日計に苦惱退き、眼赤きばかりなりしかば、日々やにを入れたるに、五六日にして全く癒たり、其翌年其時節、又眼痛出したるに、色々の眼科醫の治療を施しけれども癒ざりしかば、蛇毒の事を思ひ出し、又煙管のやにを入れしに忽ち愈たり、二三年も其時節には必目痛みければ、いつも其後はやにを入れて癒ぬ、此事村上齋綾物語なりき、又云、蛇を打し人は助右衞門と云人にて、毒に當りし人は、その庭に居合せし內藤なりとぞ、

〔茅窻漫錄下〕烟草

此物元來毒草にして人に益なし、性辛烈にして無病に津を生ず、津は一身の液なり、滋養せずして反て枯竭する時は損あるべし、畢竟は少々鬱を開く能あるのみ、(本草備要に、飽則易饑、饑則飽と載せたれども、烟草の饑渇を救ひし事を見ず、)

〔烟草百首 類書〕功能

佗波古は、○中略 霜露風雨の寒を禦ぎ、山嵐鬼邪の氣を避、小兒食て疳積を殺し、婦人食へばよく癥痞を消す、氣血を廻し、二便を通じ、惡瘡を治す、○中略 大飮飽食して腹脹滿時、二葉を採、熱灰を其中に包、暫ありて腹の上を按ときは、其脹即解す、○中略 烟草の水を絞て膏藥に入る時は、能痛を止、膿を吸、腐肉を蝕し肌を生ず、金瘡によし、皆人即時の血留にするを以、功能しるべし、

葉色青綠なるを鍋蒸にして、其露を採、硝子器に入置、金瘡惡瘡腫物一切にぬる時功有、又眼かすむ時は、眶にぬりて寢ときは、翌旦あきらかに見ゆ、きせるの脂にても妙なり、

水腫には、烟草の末を香爐に焚、烟を呑、其水氣能消す、又吐劑にも用、粉を煙らしこれを嗅ば嚏ことを止、

炙治を嫌ふ小兒には、きせるの脂をとり、炙點におす時は蟲の病を去、大人にも功能あり、

蛇蚖諸蟲此烟を嫌ふ、蛇の皮を剝、一葉を刺時は速に死、又これを薫しても宜し、きせるの脂口にいるゝ時は死、蚤虱蚊遣に用ゆるは、皆人の知る所なり、諸鳥犬猫、皆烟氣を惡、獨猿のみこれを好、

又金魚などの病つきたるに、烟蓋を集め、鱗をこくときは忽活、奇妙なり、

烟草の實を食へば、胎を墮といふ、味噌汁鹽湯冷水其毒を解す、

烟毒を解には、砂糖檳榔子よし、又多く服して酔て頭痛する時は味噌汁よし、なき時は生味噌嘗、

烟毒方

麥門冬　紫蘇子　瓜蔞仁　枇杷葉　甘草各等分　砂糖一匙

痔疾には、脂深き烟草の劑たるを丸め、肛門にはさみ居れば、忽痛を去、

烟草の黑脂、竅を塞通ざる時は、味噌汁煮湯奇妙也、和國の人は常に是を飲故脂の患なし、

烟脂衣類につきたるには、瓜子仁を碎て洗ば卽去、又味噌汁の熱にて洗ても忽散す、又昆布を嚼、汁をとりて揉あらうも又良といふ、

〔養生法〕煙草

煙草は其質を委しく論ずれば、害のみにして良とすべき所なし、されど今世界中追々盛に成て、貴賤に限らず、好嗜し馴たるもの、其害なきが如くなれど、馴ざるものは眼前に眼眩し、咳嗽を發し、口舌を荒し、又胃の氣を弱らする事著し、煙草に種々有、嗅ぎたばことて、粉末にして嗅ぐものの有、嚼み煙草とて、口に入て直ちに其葉を嚼るものあり、又煙管もて只其煙を吸ふもの有、則我國の刻煙草、西洋人の卷煙草など此類也、西洋人の煙草をふくを見るに、皆只煙りを口に入て是を吹出すのみ、我國人の習はしは、氣息に深く引て腹の中に入、これを吐くに鼻より出す、されば西洋人にくらぶれば、其害尤多しといへども、年來のならはしにて、卒に其毒にあたる事なし煙草は一二吹して、つれ〴〵を慰め勞れを忘るゝなど、其煙の口に入て一種の佳味を覺え、精神を鼓舞せしむるが故也吸ひ入ると吸ひ入ざるにはよらず、されど弱き葉は吸ひこまざれば功なきが如くなれば、強き葉を口中のみにて吹去る事とすべし、今假に禁ずれば、又これが爲に害あり、年若き人は、つとめて吞ならはざる中に禁ずべし、

豐城○木書補註者山內氏云、煙草はもとより害多く益なき事、皆人のしる所にして、既に昔制禁せられしとかきけど、今は大やけにして制するものなし、されど旅行する人、道にいこふ程煙草一ふくに遠足の勞を忘れ、或は閑居のつれ〴〵を慰め、深窓に書見する人など、是をもて鬱を發し、

烟草商

浩然の氣を養ふ、○中略其なす所によりては、害ありとのみもいひ難かるべし、今時の人さのみ好まざるも、煙管の一具不揃は、事闕たる如く思ふより、つひに呑習ひて側をはなたず、されば若年よりよくいましめて呑さゞらしむべし、

〔目ざまし草〕考證雜話

近頃ある人の話に、越後出雲崎天正十七八年の頃の撿地帳を見つるに、たばこや何某といへる名を載せたり、されば古き事なりといひき、

〔人倫訓蒙圖彙四〕若莨屋　丹波吉野高﨑新田、其外國々のたばこをかい、これをあきなふ刻師此所にてかふ、きざみは大津柴屋町よりはじめしとかや、駒臺やあり、庖丁は堺よりいづる、黑うち三文字石わりよし、代二匁なり、

〔我衣〕貞享年中迄、刻多葉粉、見世賣計リニテ、世利ウリナシ、葉烟草ヲ調ヘ、手前ニテ刻ムナリ、然レドモ若キ女中ナドノ類ハ、ヤニ深キヲキラヒ、刻ミタバコヤニテ、色合キナル和ラカナルヲ調ヘノミタリ、元祿年中ヨリ、刻烟草セリ賣出ル、箱圖ノ如シ、○圖略夫ヨリ寶永年中ニ至テ、世利箱、丁寧ニ致ス、

其後元文年中、神田鍋町ニ、叶ヤト云刻多バコヤ出ル、十餘人切子ヲカヽヘ、カツギ荷、六七荷出ス、江戸中ヲ賣弘メタリ、此時ヨリカツギ荷始ル、

寶曆年中ニ至テ、スベテ刻タバコヤ、ニナヒ箱ニナル、

〔塵塚談上〕ガチャ〳〵多葉粉賣の事、我等幼年頃は、○寶曆年間藥簞笥のやうなる箱に引出しを附けて、引出しの中に仕切りを入、二行に刻多葉粉を入、蕨拳の鐶を引出し毎に附、肩へかたかけにして賣步行けり、鐶がガチャ〳〵と鳴により、其音を聞て呼入かひけるなり、此箱にて商ふもの、五十ケ年以前ゟ絶たり、

〔賤のをだ巻〕前に記す地紙〇中略賣の歩行時分、きざみたばこやとて、是も小奇麗なる形をして、是は年ばいの者おやぢなどい歩行たりいくつも引出しを付たる、小簞笥様なる箱を脊負て、品々の刻たばこを入、商に歩行たり、是は不限〇中略冬夏四季ともに家々を廻り、出入取付など出來て重寶なりき、地紙やと同じく、今〇明和事はすたりて知る人もなし、

〔江戸町鑑〔天保十五年〕〕新材木町〔俗ニ多葉粉河岸ト唱候場所有之〕

〔煙草記〕歌仙

東風吹や赤。柿。色。の。長。暖。簾。

柚子をとみへき。ざ。む。七くさ

○按ズルニ、煙草記ハ、寶曆六年ノ出板ニ係ル、赤柿色ノ長暖簾ハ、煙草賣店頭ノ光景ナルベシ、

〔八水隨筆〕多葉粉のひろまりしは、色々の書に種々記して見えたり、予が父弱年の頃、大坂高麗橋にて、唐人の裝束したる商人、竹のきせるにて、一ふく一錢づゝにて、人にのませたるよし常にかたりぬ、

〔還魂紙料下〕煙草の一服一錢

此書〇八水隨筆の作者、姓名は詳ならざれど、江戸の士にて、享保元文中を經たる事、書中に見えたり、其父の弱年の比といふは、承應明曆のころにやあらん、

〔尾張名所圖會〔前編四愛智郡〕〕高倉結御子神社〇中略本地堂に毘沙門天を安置せしも、今は社人の家に納む、しかれども例年正月三日には、當社の神供所にて此像を開扉し、諸人に拜せしむ、〇中略此日神前にて、き。ざ。み。た。ば。こ。或は飴にて作りし小判を商ふ、

〔商人職人懷日記二〕信州に涌出る金のべ澤の金山最中の時分、賑はしきに目とまり、よろづ見めぐるに、〇中略葉たばこは賣て、きざみ

買なき故か、圍しき中に、手々に薬切にして、あたら莨菪を粉灰にするを、是はとおもひ寄、台口計殘りしを買て、うずば一丁、たばこ一斤求めて、竹のはかり、石のおもりして、小屋々々を賣りあるく、

〔梵舜日記〕寛永五年正月一日癸亥、長三郎タバコ持來也、安田九郎兵衛筆一對、

〔羅山文集五十六雜著〕佗波古希施宴

維佗波古以丁香沈香黄熟香、方今細馬輕轎綺綾佩玉之蕩俤郎、金雀銀鱗翠鈿珠袚之歌舞妓、朝遊于東阜、暮出于北野、必執此佗波古、以爲寄聲通意之媒、一吸一呑、必相酬酢、謂之何哉、聞國爲歌行而不知焉、穿穴隙之女、陋巷不撿之人、未足責之、於乎悲夫、

〔羅山文集五十九雜著〕莨菪文奉謝水戸羽林君

神農去久矣、吾邦五十易草木以前有一奇草、自船上來者、曝乾其葉、剪抹燒之、以竹筒引煙吸之、不知其爲主治也、有損而無益、但爲弊爲費而已、然年引一年、俗習不休、考諸本草、則莨菪歟、焉知神農中七十毒時有此草否、倉公所用莨菪、唐兵所餌毒飯蓋是乎、初試吸者多瞑眩、然及其盛行而無貴賤無男女吸之者衆、故擇小竹良者爲筒通解谷、其本末或用銅鍮筒連接之、遂乇手作金銀筒、其末曲鉤形如牽牛花樣、以盛抹葉、其本稍細、含之附炭火及燭火以牽煙、三韓呼之曰煙酒、以吞煙瞑眩如醉故也、嘗問之韓人、乃云、頃年此草來自南方、然則與吾邦之弊習不異、醫方只熏其子治蟲牙孔、未有用其葉、近歲往々栽植、以衆所嗜好也、花開逢風不易落、以白樂天所謂、不見莨菪花、狂風吹不落、并考之則豈知此物爲之歟、杜鵑花羊喫之躑躅而倒、故號躑躅花、其有毒明矣、於人亦宜然、其習慣漸久則毒變爲藥亦有之歟、故譚紫霄以莨菪之油配躑躅之酒、并論俗習嗜好之不爲害也、雖中華復有吸之者乎、其弊不易改焉、然有時獻閑寂適喉咽、亦不可言無之歟、石僧石慍好嘗醋、喙三尺面百摺、其所嗜如此、柳柳州有云、奇異之草、苦鹹酸辛、雖蜇吻裂鼻縮舌澀齒、而有篤好之者、援文王之菖蒲葅以證之、如孔子聞而

效之、縮頸而食、蒲葅三年然後勝之、蓋是呂覽所記、其有無不可知也、鄉黨篇所載可以見之、然世之所、傳、可以傳疑、若其嗜與不嗜、殆如大戶小戶之於酒乎、抽者性癖有時吸之、若而人欲停之未能、聊因循至今、唯暫代酒當茶而已歟、非若西域幻人吐火誑人、是誠可憎可誅也、乃者三品羽林源君、賜赤土甆。。。嵩䕶多束一筥、厚荷之至、謝而有餘、赤土者君封國內之腴地、此草良產之勝區也、嘗之則尋常煙火食之所不及也、可謂神農所試之吹咀耶、食公處斛之刀圭耶、若遣之文王孔子、則未知彼此孰取孰捨哉、今所言類類俳非無恐懼、然叢言出於思也、故捧滑稽之鄙詞、以期寵顧之莞爾、頓首再拜謹言、

（靈峯文集五十二）戲答惡煙酒文（本書叙設、澹泊子請靜子、被辨之亦然、）

淸靜子出、澹泊子顏色不平、侍童見而問曰、何爲不平哉、澹泊子曰、淸靜子偶來、怪余嗜烟酒、余爲說其所以嗜之、彼述其無益而有害、其言如流、其辨如燗、余不遑答之、然亦不能退烟酒、是以不平也、童曰、其言奈何、其辨奈何、澹泊子曰、彼唾嘗出於其口、既筆之於冊矣、名曰惡烟酒文、童曰、其文何在、曰在案上、指示之、童屢觀曰、余爲君解嘲、乃出門追之不及、於是呈一篇於淸靜子曰、大禹惡旨酒、桀紂以是亡國果其可惡乎、然周官有酒正、孔聖亦曰、酒無量、果不可惡乎、惡與不惡不在酒、唯是在人乎、烟酒亦然、不見彼俗客乎、其囊之纖、以羞綾包之、而他適出自懷中、以漆雕器盛之、而代酒茶爲待客之具、其管之美、以金銀爲小匣、以容其囊、以彩竹爲筒、以通其烟、其觜口亦以金銀飾之、或鞍上攜之、或市中提之、或花前吸之、或月前吹之、代鳥使以通蜂媒、如此者惡之而可也、若其方夜讀書、氣體倦勞、更闌燈暗、則一吸之間、破悶攪倦睡、而一管之烟、譬之皋夔伶倫乎、即之靜中同參乎、聊擬先儒之微醺乎、吸了而又吸、飲了而又飲者、抑其一盃一盃又一盃之彷彿乎、果是一椀重二三四、及五六至七椀之流亞乎、如此者何必惡之哉、方今流俗、比比無家不蓄之、無人不携之、且往歲屢見韓客嗜之、其筆談之間、乃知國俗所謂多波古、是烟酒也、其廣布如此、今子雖欲惡而絕之、亦可得乎、自烟酒行於我國以來、考諸方書、未詳是爲何草也、强以質諸當之、疑其有毒、然未聞飲烟酒以中毒者、果其無毒乎、況其尋常朝夕所食、魚也

鳥也草也葉也、本草稱有毒者非無之、然常食之而無妨、則何必惡萓芸乎、凡人所嗜不同、蔥韮之輩、誰不知之、然食而不餧、鰻而不厭、何必惡烟酒之臭乎、且適其口則以文王之嗜、不能不嗜菖葅、從其俗則以昌黎之賢、不嫌食蝦蟇、今人於烟酒、亦如此乎、若以至自蠻國、故甚惡之、則琵琶箏篥之聲、可掩耳乎、海棠海榴之花、不觸目乎、若其中華食物可嘉之、則牛羊豕何不供朝夕之膳乎、加之內則所記品物、以今見之、則難下箸者多多、然則食物何必論華夷哉、鶉是鼠所化也、鼠之不可食、孰與烟酒之不可飲乎、然鶉者人人食之、鼠者人人嫌之、所以者何、則化流俗也、近歲多嗜蕎麥麪者、盛器成堆、放飯流歠、張口瞪瞼、滿腹擁喉、更十餘椀、果然不厭、非消麪蟲、則不及此乎、蓋是田舍野人之食也、然侯伯之席、文雅之筵、往往以是爲頓點、流俗之化、無奈之何、烟酒之行、既五十餘年、蕎麪之行、殆三十年、共是雖無益於人、亦無害者必矣、蕎麪可以救饑、烟酒可以消食、小皿之草、一管之烟、不可爲毒、大器之堆、十椀之食、恐有脾胃之煩、取捨以爲如何、彼和汁之輩、使不嗜者在其傍、則殆成嘔吐、其害果孰與烟酒之臭哉、烟酒果可惡、則蕎麪亦可惡也、嗜與不嗜者、人之性也、二物何必惡之哉、强惡之者僻也、强好之者亦癖也、古人之癖、有賤於蕎麪者、又有譏於烟酒者、所謂錢癖痔痂癖之類是也、嗚呼我國本神國也、爲胡佛被掠既千年、可惡之甚無過於此、今不及其大而及烟酒之小、不亦僻乎、近歲顯達而好儒者非無之、然惡浮屠、而不能禁之、則予之力、雖惡烟酒、果其不能絕之、余是非愛烟酒、然爲子之惡之甚過、聊以解嘲而已、辛丑孟冬

〔昔々物語〕一むかしは懐中たばこと云事なし、よくともあしくとも、亭主のたばこ盆に有を呑なり、のみやうも、亭主座敷へ出る迄は呑ず、亭主物語して、たばこ參れと進むれば、客は先御亭主より參れと、歪茶の如く二三度は言、其時亭主鼻紙をへぎて、きせるのつ。ぱ。をはづし、きせるを拭ひ、是にてまゐれと差出す、客戴きて呑、たばこ能はほむる、一ふくも二ふくも吸、つばかけて我前に置、歸る時は鼻紙にて拭ひ、たばこ盆へ入る、尤ぬぐふ時、亭主其儘差置れと云、若亭主頭役か親か

たなればのめといはる丶とも給すとて不給、其比かくれなき奴といはる丶人も、六ほうでだて我意を盡す人も、慇懃の座敷又は殿方老人の前にて、たばこ呑人なし、

〔大和本草 六 民用草〕烟花〇中略初ハ竹筒ニ入テ火ヲ吸フ、後ニ眞鍮ノ煙筒ヲ用、請取ワタシノ禮アリ、今ハ其禮スタレリ、

〔壺瀛錄 四 續錄〕酒始乎儀狄、其來也遠矣、茶則始於晉、今遍五方、爲日用之物、今日人家、見客必設烟具、先於茶酒、此則百年前所无、傳諸番舊、寛永中自南蠻國來、其始以種植甚廣、致妨本業、官禁甚嚴而不止、至於今日、其用甚盛、毎爲應酬之需矣、

〔翁草 五〕當代奇寶と題せるものに、あらゆる雜談有り、十が一爰に拾ふ、一寛文の比迄有し古老の云く、多波粉の盛りしは近き事也、〇中略其時分世にこせ煙と云物はやりしに、多波粉呑む人は、此煩ひ無きと云ひはやらせて、世にはやり廣まりし也、

〔煙草考〕煙草所用于世、蓋百有餘年、至今則運貨字、無處不植焉、无人不嗜焉、燕饗會宴、野歩舟行、登山臨水、花下月前、對雨賞雪、闕旅寓店、群談獨居、商樓市廛、讀書吟詠、起居坐臥、无處不好矣、无時不宜矣、〇中略余〇内舟實所幼時、見世人服烟者、吸烟數口、不噴而呑焉、少時悉從鼻孔出、當時人皆然矣、其吸而不呑者、此謂伊達多波古、或花多波古、只風流者子徒爲容態吸之、實不吸也、今世人呑納者鮮矣、間老翁有之而巳、

〔おほうみのはし〕久世大納言通夏延享四年薨事ものへまうづとて湯あみ給ひけるに、此湯には穢れたることあるべし、火をあらためてこそ更におほせよとて、あみはてすしてあらためさせ給ひけり、後に火たきたるもの、あやまちて烟草をたびて侍ると申しけり、此大納言の常にか丶ることおはしければ、只人にはおはせすとぞ申しける、

〔ひとりね 上〕多葉粉ににほひを入て呑人多し、青樓の人などすべて有、伽羅など入てのむ事、一入

あしき事也、伽羅を入て呑し人に、健忘の症を煩ひ、死なざる人あらずと云事なし、さのみ是計は好色にもならぬことなれば、さりとてはいらぬ事也、

〔ひとりね上〕たばこのむに、輪をいくつとなく吹く人あり、壁に針を打て、それに輪をかける人あり、はじめ一つ吹出して、其内をまた吹様に、ちいさく輪を吹人有、或は又けむりを外へ出さず、ことごとく内へ呑て、ほのぼのとあかしの浦の朝霧にと、一首よみしまいて、けむりを出す人有、今のごとく引て鼻の元より出す人有、女郎様などの、鼻の穴より吹出し給はんはいまり燒の香爐の如く、見苦しなんどはおろかの事なり、けふもさめはてぬべし、〇中略余はきらひにて、たばこのむことならねども、人の香をいとふにしはあらぬに、人によりて手まへの嫌ひなれば、人の香もいとふ生れ有、やまひといへども心つくべし、心つくれば其儘なをるもの也、我まゝよりおこることなり、

〔閑田次筆四〕黄檗開祖隱元禪師は、煙草を惡み給ふこと甚し、其偈にいはく、一管狠烟呑復吐、恰如炎口鬼神身、當年鹿苑有此草、不說五辛說六辛、此偈語錄には洩たるよしなり、昔彼宗徒に聞しが、道亡せしを、又此比一和尙語られき、座禪看經の勤を空しくせるを惡み給ふならん、されば此物と飮酒は、彼僧衆凡て不喫ことなりしが、當時は不喫人は數ふる計也とぞ、

〔鶯錄下追詳增補〕吹煙戲曲說

烟草之盛行于世也久矣、其極、有吹烟爲戲曲者、元祿年間、有貓莊兵衞者、〇中略都下近有幇間吉藏者、兼爲此戲云、余未見之頃亦城西有一狎客、好善此戲、其技最奇、自號輪玉亭吹烟、俗稱稷源茂質〇大一夜、在一友人宅親視之、其人暗處設坐、煙盆煙具在其側、戲曲數番、先向諸客告其曲名、把管裝烟、點火仰噴之、則坐上起一推之雲、雲中忽爲輪、或闊或椭推類扣頻、大小綿連迸出、或爲連環、或爲連珠、或握扇貫其所噴之輪、或一或二三、或令輪在扇上、或吹人於一管中、管尾噴出數輪、或吹己懷中、則自其袖

而出成傀儡口中含噴出之、或所吸之烟、入兩鼻孔不他洩之類、曲曲怪異、千狀萬態、愈出愈奇、衆皆奇之、未知其所爲、彼又自謂、恐諸客疑余之纏烟中別有所設、乃請傍人之煙、一吸乍爲奇狀、如初、曲名數十、見畫膽記、都下人毎有讌宴爭召助其興云、嗟此技固出於偶得而入此妙境、何用心之至于此、可不謂一奇技乎、夫煙草之盛于天下也、終至如此、可謂奇亦甚矣、實升平之餘事也、

〔春波樓筆記〕余江漢曰く、タバコは天正の頃、異人持ち來る、長崎の櫻の馬場に之を種ゑ、遂に天下に流行す、此を今思ふに、長崎の者十人あれば、三四人之を吸ふ、京の者十人あれば、七八人之を吸ふ、江戸の者十人あれば、九人之を吸ふ、其吸ふ事甚夥し、東奧の人十人にして、十人吸はざる者なし、蝦夷國に至りては之を嗜む、

〔鶉衣前篇拾遺〕煙草說

夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提られず、秋の寐覺の淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草の友となるこそ、琴詩酒の三つにもまさるべけれ、埃のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝寢の目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍從が待宵ならむ、達摩は九年の壁にむかひて、炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を樂む、されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅兀さじと吸たる、少は心づかひすらんを、船頭の短きせるは、舳さきに蹲踞て、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ、やごとなき座敷に、緞子張の煙草盆を、あまた數に引わたしたるより、路次の待合に、吸口包たるはにくからぬ風流なれど、さすがに辭儀合に手間も取べし、只木がらしの松陰に獨立て、繼きせる取まはせば、茶屋の嚊のさし心得て、蛤がらに藁火もりてさし出したる、一鍋千金のたとへも此時をいふにや、または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、烟打のきせるに、がん首さしあはせて、一ふく吸付たる心こそ、漂母が飯の情より、うれしさはまさらめ、そも煙草の德も、むかしより人のかぞ

へ古して、今さらいふもくどければ、かの愛達にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隱逸なる者なり、烟草はさしづめ君子の番にあたりて、用る時は一座に雲を起し、志りぞく時は袖の內に隱る、こゝに神龍の働ありともいふべし、下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少からず、今や稀なるは、たばこぎらひにして、野にも吸、山にも吸へば、たばこ入の風流、日々にさかんに、きせるの物ずき、とし〴〵にあたらしくて、若輩の目を迷せども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこはさがぬを專とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ、さらば色みえでうつろふ花の人心にも、畢竟そのものゝ本情實儀をうしなはざれとなり。

〔めざまし草〕古今形勢

たばこといふもの、異國よりこゝへ傳來せしより二百年にあまりて、久しきならはしとなりぬれば、世の人貴賤ともに、其謂をも知らず、よるひるとなくけふらすることゝなりて、今はひとひもこのきみなくてはともいふべく、まことに酒にも茶にもまさるものになん、されば手と口とに離さず、志ばしもかたはらにおかねば事かくるがごとしげにも飽けばうゑしめ、飢ればあかしめ、醒ればゑはしめ、醉ばさますとぞ、世の人なべて此功德を知り、世界のかぎり所として此草を植ぬもなく、人として此葉を嗜ぬもなく、世に行れて、年曆百年にも及びしころほひより、詩にも賦し、歌にも詠じ、これを稱美して止ず、其くさ〴〵の德をいはんには、あつさをも忘れ、寒さをもしのぎ、夏の日永の眠がちなるをさまし、春の曉の覺めがたき夢をもやぶり、あるは秋冬の夜ながき、老が身のねぶりがたきには、從者女童など、たばこ吸ふ火はありやなしやと問ひて、わびしきを助くる心しらひを喜び、又何くれと物がなしきうきをもわすれ、あるはすまのうらさびしき、ひとり住の身の上には、よきしほがまのけぶり草とも知らるゝなり、或人の口ずさめるに、

昔し誰が寢覺の床のさびしさを忘るゝ草の種はまきけん、とあるもさることなり、又貞柳と

かいへるもの、狂歌とて、

雲と見る芳野たばこのうすけふりはなのあたりを立のぼるかな、と戯むれしもおかし、又親しき友どちよりつどひて、舊きをかたらひつゝにも、これなくては其しほなきにも似たり、たとひ山海の珍味をつくせる酒宴のむしろにも、時々これを吸ざれば、物たらぬ心地す、又野邊の遊び川せうえう、月の前花のもと、酒の後、茶のさきにも、この烟をかをらし、雨に對し、雪を賞し、閑窓のうちに、ひとりつくゑによりて物かうがふる折ふし又旅ゆく朝戸出に、たばこ吸ながらにあゆめる趣、又家のうちにありても、あやにくに事しげきころ、たゞひとひきすひたるは、いはんかたなくぞおぼゆる、憂につけ、樂しきにつけても、これを伴はざれば悶る氣もひらかず、嬉しき心ものびざるがごとし、近き世の人のはいかいのほくとて、

西行の秋はたばこもなき世かな、といひしもさることぞかし、すでに此物世にあまねくひろまり、人ごと家ごとに用ふることになりては、客人をもてなすにも、まつ前に是を進むるを常のならはしとすることになんなりける、いはんもかしこけれど、それのみかどの御製とて、

もくづたくあまならねどもけぶりぐさなみよる人のしほところなれ、とよませ給へりとか、

また妙法院の宮の御言葉とて、たばこに七の德ありとの給ひしものも見えたり、又もろこし人は、一名を相思草といひて、人ひとたびこれを吸ふときは、朝夕思ひこがれて止ときなしとなん、とにもかくにも、あやしきまで人のめづる草にこそありけれ、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕六玉川に、せきの小まんもうす色をのむ、といふ句有り、昔はたばこのむ女稀なりしとぞ、娘容儀草子に、昔は女のたばこ呑むこと、遊女の外は怪我にもなかりしことなるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なりと云り、

〔多識編二草〕曼陀羅花、今案也末奈須比、

〔大和本草(九雜草)〕曼陀羅花　本草毒草ニ載ス、蔓草ニハ非ズ、莖如茄、八月開白花、アサガホニ似タリ、花不足觀、

〔和漢三才圖會(九十五毒草)〕曼陀羅花　風茄兒　山茄子〇(中略)按近頃來於朝鮮、今人家多栽之、花似大牽牛花及博多百合花、故俗曰朝鮮牽牛花、其實似檳榔子而有細刺、又別有名曼陀花者、同名異種、

〔重修本草綱目啓蒙(十三毒草下)〕曼陀羅花　テウセンアサガホ　ヤマナスビ　ナンバンアサガホ　ハリナスビ(播州)　トウナスビ(同上)　外科コロシ(讃州)　外科ダワシ(石州、豫州、伯州)　天竺ナスビ(防州)　イガナスビ(同上)　ギバサウ(豊前)　チヤメラサウ(江戸)　キチガイナスビ(石見)　アキス(備後)　イガナス(長州)　キアサガホ(下總)　テウセンタバコ(遠州)　トウアサガホ　バラモンサウ

一名佛花(幼幼新書)　顚茄(香山縣志)　悶陀羅草(名山藏記)　天茄彌陀花(花暦百詠)　增、一名風茄、(本草逢原實ノ名)

伯耆、豊前、周防、及諸州ニハ野生アリ、京師近道ニハナシ、春種ヲ下ス、葉ノ形茄葉ニ似テ刺無ク、緑色ニシテ互生ス、莖高サ二三尺、枝ノ形狀モ亦茄ニ同ジ、夏秋ノ間梢葉ノ間ニ白花ヲ開ク、形牽牛花ノ如クニシテ、長大一瓣ニシテ端ニ五尖アリ、其本ハ筒ニシテ長サ三寸許、花後實ヲ結ブ、大サ一寸許、圓ニシテイボアリ、故ニハリナスビト呼ブ、內子圓扁、黑色ニシテ褐色ヲ帶ブ、秋深テ根苗共ニ枯ル、若誤テ此花及葉ヲ食ヘバ、狂亂ス、然レドモ其毒氣盡レバ自ラ愈ユ、

〔廣益地錦抄(五)〕曼陀羅花　春たねをうゆる、はへ出は茄子苗のごとくにて、段々枝出て葉も茄子のごとし、故に異名山茄といふ、秋花さく白大りん、花形あさがほのごとく、たくましく異形なれば、俗に唐人笛といふ、尤そのかたちなり、花壇に植て朝鮮あさがほといふ朝にひらき夕にしぼむ、時珍が曰、曼陀羅花人家に植、春苗生夏長、獨莖直上高四五尺、葉茄子の如く、八月白花開云、葉牽牛花の如く大シ、朝に開夕に合ストいへり、よくも見たり、此葉を湯にせんじ、寒濕脚氣を治、小兒

慢驚風の藥ニ用云、

〔草木育種後編下 一〕曼陀羅花〔草 木〕　花戸にて朝鮮朝顔といふ、和蘭にてドル、アップルといふ、春分に實を蒔てよし、度々糞水魚腥血水を澆ぎ、漸長じて花實あり、實をとり藥用とすべし、之を多服すれば昏睡するに至る、容易に口中に入る事なかれ、

〔浚明院殿御實紀附錄二〕弘福寺のほとりを過させ玉ふことのありしに、その邊の村長中田孟右衛門といへる翁、なにとかして御こゝろに應ずるばかりのこと設て、御覽に備むとて、夏菊の花と曼陀羅花とを寺内に植置て見せ奉りしかば、めで興じ玉ひ、曼陀羅花は實一つ摘てもちかへらせ玉ひしかば、輦邊の者どもいと有がたく忝き事に申傳へたり、何事もわざとこゝろを用ひ設たることとは、かりそめにはせさせ玉はずといへり、これよりして曼陀羅花は、江戸にもてはやすことゝなれりしとぞ、

〔採藥使記中 總州〕重康曰、此比總州ニテアル寺ニ一宿セシニ、十五六歳ノ沙彌、戯レニ曼陀羅花ノ實ヲ食ヒケルガ、卒ニ發熱シ、譫語シテ狂人ノ如クニテ有リシニ、色々藥ナド用ヒケレドモ、暫ク癒ヘズ、一夜煩ヒ翌朝漸下シテヨリ平愈セリ、誠ニ本艸ニ毒草ノ部ニ入タルモムベナリ、此所ニテハ木アサガホト云フ、江戸ニテ朝鮮アサガホ、又チャメラ草トモ云フ、

瓠名稱

古事類苑

植物部二十四

草十三

〔異本新撰字鏡 瓜十一〕瓠 胡古反、去、瓟 文交反、以瓠爲飮器也、

〔本草和名 菜十八〕苦瓠 仁諝音胡故反 瓠𤬪 赤瓠 瓠也、楊玄操音上下力俟反、 一名瓢 小者出兼名苑注、 甘瓠 味甘出崔禹、 一名赤陽麃温 出釋藥性要集、和名爾加比佐古、

〔倭名類聚抄 十六 木器〕杓 瓠附 唐韻云、○中略 瓠 音壺、和名奈利比佐古、瓠也、瓢 音與瓠同 匏也、匏 薄交反 可爲飮器者也、

〔箋注倭名類聚抄 四木器〕按瓠、古單言比佐古、其長項者、割之爲斟水器、所謂長項壺盧勺也、後以木勺代之、然其名仍舊呼比佐古、比佐古遂爲木勺之專名、故瓢云奈利比佐古以別之、奈利草木之結實之謂也、與訓蜀椒爲奈流波之加美同、

〔伊呂波字類抄 比植物附植物具〕苦瓠 仁諝音 瓠𤬪 赤瓠瓠也、楊玄操音上下力俟反、 瓢 小者出兼名苑注、 甘瓠 味甘出崔禹、 赤陽麃温 出釋藥性要集、已上五名、ニカヒサコ、見本草、 〔同 比植物附植物具〕瓠 ヒサゴ 瓟 蘊藪 匏瓜 瓢 八月斷也 王瓜 玄瓜 瓠也已上同 犀 ヒサゴノサネ 瓣 同 烏蘞莓 ヒサコツラ 白芷 莅 虹 蔙 已上ヒサコツラ、見本草、出錄名異、

〔下學集 下草木〕瓢簞 ヘウタン

〔易林本節用集 草木〕瓢簞 ヘウタン 瓢或作瓢簞

〔和爾雅 七菓蓏〕壺盧 ユウガホ フクベ 瓠瓜同、或名壺盧、非也、 匏瓜 アホフクベ 懸瓠 ナリヒサゴ ヒャウタン 苦瓠 ニガヒサゴ 苦壺盧、苦匏並同、 敗瓢 ヤブレフクベ 匏子 フクベ 蒲盧 ヒヤクナリ

〔五雜組 物十〕匏亦瓜之類也、與瓠一種而有甘苦之異、甘者為瓠、詩所謂幡幡瓠葉是也、苦者為匏、不可食、但可用以渡水而已、詩所謂匏有苦葉、濟有深涉是也、故夫子謂子路、吾豈匏瓜也哉焉能繫而不食、言但可繫而不可食也、注者乃以繫於一處而不能飲食解之則凡草木之類皆然、何必瓠瓜、此大可笑也、然匏瓠古亦通用、廣雅曰、匏瓠也、惠子謂莊子、魏王貽我五石之瓠、則亦匏也、河汾之賓、有曲沃之懸匏焉、則亦瓠也、今人以長而曲者為瓠、短項而大腹者為葫蘆、卽匏也、亦謂之壺、豳風八月斷壺、鶡冠子、中流失船、一壺千金是也、然則壺嫩而甘者亦可食、老而苦者、古人皆用以渡水、今人則用以盛水而已、與瓠形質既殊、其熟瓠先而匏後、而古人通用之者一種也、陸佃埤雅斷以為二種、因亦無害、乃釋匏而又釋壺與瓠為三、誤矣、

余於市場戲劇中見葫蘆、多有方者、又有突起成字為一首詩者、蓋生時板夾使然不足異也、最後於閩中見一葫蘆、甚長而拗其頸結之若繩狀、此物甚脆、而蔓係於樹、腹又甚大、不知何以能結之也、或云、以幾酒沃之、則軟而可結、山東亦嘗見之、但長頸者另一種耳、

〔倭訓栞 前編三十五〕ゆふがほ　壺盧也、夕顔の義、今俗ゆふごといひ、信濃にてよふがふともいへり、六百番歌合にも、夕露にひもとく花とよめり、枕草子に、夕がほは朝がほに似て、いひつゞけたるをかしかりぬべき姿にて、花のありさまこそいとくちをしけれと云り、一説にふるき源氏繪などに云るは、王瓜也といへども、その花夕かげには却てしぼめり、夕がほの雪といへるは花をいへり、

〔傍廂 後編〕瓢簞

瓢と簞とは別物にて一物にあらず、一簞の食、一瓢の飲といふは、竹にて組みたる器に、飯を入れたるを一簞の食といひ、ふくべに入れたる酒を、一瓢の飲といへるにて、瓢と簞とは似よりたるものにあらず、さるを瓢のみをへうたんといへるは、いみじき誤なり、

〔源氏物語四夕顔〕六條わたりの御忍びありきの比、うちよりまかで給なかやどりに、大貳のめのといたくわづらひて、あまに成にけるとぶらはんとて、五でうなるいへたづねておはしたり、○中略さきもをはせ給はず、誰とかしらんとうちとけ給て、すこしさしのぞき給へれば、かどはしとみのやうなるをしあげたるみいれの程なく、ものはかなきすまゐを哀にいづこかさしてとおもほしなせば、玉のうてなもおなじことなり、きりかけだつ物に、いとあをやかなるかづらの、こゝちよげにはひかゝれるに、しろき花ぞをのれひとりゑみのまゆひらけたる、をちかた人に物申とひとりごちたまふを、御隨身ついゐて、かのしろくさけるをなん、夕がほと申侍る、花の名はひとめきて、かうあやしきかきねになんさき侍けると申、げにいと小家がちに、むづかしげなるわたりの、このもかのもあやしう打よろぼひて、むね〳〵しからぬのきのつまなどに、はひまつはれるを、口おしの花のちぎりや、ひとふさおりてまいれとの給へば、このをしあけたる門に入ておる、さすがにされたるやり戸口に、きなるすゞしのひとへばかまながくきなしたるわらはの、おかしげなる出きて、うちまねく、しろき扇のいたうこがしたるを、これにをきてまいらせよ、枝もなさけなげなめる花をとて、とらせたれば、かどあけて惟光の朝臣のいできたるして、たてまつらす、○中略修法など又々はじむべきことなど、をきての給はせて、出給とて、これみつにしそくめして、ありつる扇御らんずれば、もてならしたるうつり香、いとしみふかうなつかしうて、おかしうすさびかきたり、

心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる夕がほの花

〔徒然草上〕六月の比、あやしき家に、夕顔のしろくみえて、かやり火ふすぶるもあはれなり、

〔六百番歌合夏〕十二番　夕顔　右勝　中宮權大夫

折てこそみるべかりけれ夕露にひもとく花の光ありとは

瓢種類

〔雍州府志土產六〕壺盧　或謂葫蘆、又稱瓠瓜、又謂匏瓜、倭俗謂瓢簞、又稱浮壺便、凡壺酒器也、盧飯器也、老硬者作盛藥佳器、或盛山椒粒、或用繩繫腰、盛酒茶、爲遊山之具、是稱約腹壺、以其腹有約束也、其大者盛飯、又一種長如越瓜、而首尾如一者爲瓠、又瓠之一頭有腹、長柄者爲懸瓠、又稱杓瓢、老硬者作杓、輕快堪用、倭俗謂柄杓瓢簞、又短柄大腹者、存短柄之心、伐其側之左右、盛炭於腹內、以手提攜短柄之所存、置爐邊、倭俗稱手浮壺便、又一切伐短柄盛炭者、是謂炭斗浮壺便、茶人專用之、是亦爲茶亭之一具、凡瓠瓢小者處々有之、其大而盛炭者、自近江國武佐來、又洛東田中村人、農業暇種之、到秋成實、其未熟時、好事茶人自行其棚頭、就蔓上之有所、而約其形狀之所稱心者、或以繩縛之、則其形隨所好、而成後伐之、陰乾而用之、其外皮微腐而有斑點者爲良、又大瓢去瓤核、緊塞其口、著胸膈之間、以緒縛肩、而浮水則不沈、有便游泳、故倭俗或稱浮壺便、

〔本朝食鑑三蔬菜〕乾瓠（俗作干瓢、干與乾通、瓢藏乾也、故可互用、）

釋名、夕顏（必大（平野）按、用乾瓢之花、本邦自古稱夕顏、瓠訓加保、歌人最賞之、其花午開暮盛、故曰夕顏、實及葉莖亦俱稱夕顏也、）

集解、處處多有、正二月下種、生苗引蔓、延緣于門牆屋及樹竹、其葉似冬瓜葉而稍圓、有柔毛、嫩時爲蔬可食、去青皮及瓤、細剉令長、日曬則白長、如裂紙及布、其味甘美、代乾鰹、爲僧家用、或煮熟食亦佳、此俗曰乾瓢、五六月開白花、狀閑雅有野姿、故歌人詠賞之、以其夕美、呼曰夕顏、結實青白色而長、老則曬乾、渡水憑河者著之、其瓠中之子、齒列而長、此詩所謂瓠犀也、又一頭狹腹長柄者懸瓠也、本邦作瓶作杓也、（中略）○

附錄、瓢（瓢及壺盧者總稱也、瓠子訓布久迭、瓠瓜亦同、蒲盧者俗訓百生瓢也、俱不食、俱暴乾可用器、此亦正二月下種、莖葉花實與瓠同、大者作酒瓢炭瓢、小者去犀入椒及丸散香藥之類、或作佩瓢、生時治形之不好、則乾後全好、近代爭誇奇賞、）

〔和漢三才圖會百蔬菜〕壺盧　瓠瓜（瓠同）　匏瓜　由不加保　俗云由不古　味甘、故對苦瓢名甘瓢、

本綱、壺盧象形（壺酒器、盧飯器也、）長瓠、懸瓠、匏瓜、蒲盧、名狀不一、其實一類、有遲早之殊、（中略）○

瓠。形長如越瓜、首尾如一者也、

懸。瓠。瓠之一頭有腹長柄者也、

匏。無柄、而圓大形扁者也、

壺。匏之有短柄而大腹者也、

蒲。盧。壺之細腰者也、蒲盧今之葫壺盧是也、〇中略

按壺盧俊岸中下種、立夏前後移種、苗五六月開正白花、日午凋暮盛、故俗稱夕顏、(朝顏部牽牛花、壺盧部旋花、)花、結實有早晚二種、早者多結實而不久、晚者久結實而不多、

苦。瓠。苦壺盧　苦匏　蒲盧(和名比佐古、又云不久倍、)　俗云瓢簞〇中略

按苦瓠(俗云瓢簞)與壺盧一類別種者明、葉花小似壺盧、瓢味苦不堪食、圓大者多作炭斗、有長而細腰者、可作酒樽、有長五七寸者、俗稱百生、有二三寸者、稱千生、佩腰翫弄物及椒類、久不失味、本草所謂蒲盧是也、細腰本末相均者、俗呼曰闇夜露珠、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 蓏菜〕壺盧　ス、ケバナ(古歌)　ス、ケノハナ　タソガレグサ(共ニ同上)　ユウガホ　ユウガウ(勢州)　ユウゴ(雲州、對州、)　ナリヒサゴ　シトミグサ(古名)〇中略

凡ソフクベ、ヒヤウタン類ハ、皆白花ニシテ、夕ニ開キ朝ニ萎ム、故ニ總ジテユウガホト呼ブ、品類多シ、分別ノ說一ナラズ、釋名ノ註ニ說ク所ヲ正トス、瓠。ハナガユウガホ、一名ナガフクベ、形長シテ首尾同ジ大サニシテ越瓜ノ形ノ如ヲ云フ、一名淨街樋(事物紺珠)甜瓠(千金方)扁蒲(許謙方)匾蒲(大倉州志)ウスタ片ニシテ乾タルヲ、カンピヤウト云、勢州ヨリ出ル者佳ナリ、備州ヨリモ出ス、加州ノ者ハ劣レリ、漢名瓠畜(劉熙釋名)葫蘆乾(物類相感志)又甚ダ長キ者ハ、五六尺ニ過グ、用テ花瓶トス、肥後ヨリ出ス、懸。瓠。ハヒサゴ、一名ツルタビ、シヤクユウガホ、シヤクビヤウタン、其形圓ニシテ大サ四五寸ニシテ、長サ尺餘ノ狹柄アリ、竪ニ二ツニ割タ時ハ、自然ノ杓トナル、一名長柄葫蘆(汝南圃史)瓢子(本草蒙筌)東與(名物法言)

瓢栽培

長頸葫蘆、授時通考 小柄葫蘆、苦瓠附方 長柄茶壺蘆、敗瓢附方 匏。ハフクベ、一名ヲホフクベ、スミトリフクベ、カンピヤウユウゴ、雲州 其形大ニシテ皿扁、茶人炭斗ニ製スル者ナリ、一名盒盤葫蘆、汝南圃史 其形至テ小ニシテ煙合トナスベキ者ヲ、肥後ピヤウタント呼ブ、考槃餘事ニ、小圓葫蘆ノ名アリ、壺ハクビアルフクベ、番南瓜(カボチャ)ノ形ノ如キヲ云、一名扁蒲、汝南圃史 蒲。蘆。ハヒヤウタン、其形二重ニナリタル者、今用テ酒ヲ入ル、器トス、コレヲ酒葫蘆水蜜許 ト云、油ヲ入ル、ヲ油葫蘆汝南圃史 ト云、又形小ナル者アリ、百。ナ。リ。ピ。ヤ。ウ。タ。ン。ト云、考槃餘事ニ二三寸葫蘆ト云、苦瓠ノ附方ニ小藥壺盧ト云、又至テ小ナル者ヲ千。ナ。リ。ピ。ヤ。ウ。タ。ン。ト云、考槃餘事ニ天生一寸小葫蘆ノ名アリ、

苦。瓠。　ニガヒサゴ　一名苦不老附方　秋壺盧同上　苦瓢本草綱目

甘瓠培養宜シカラザレバ變ジテ味苦クナルヲ云、又本經逢原ニハ、細頸葫蘆ト云、是ハ一說ナリ、ヒヤウタンハ味苦キ故ナリ、

〔三養雜記　四〕瓢の種類

瓢にくさぐの種類あり、その水に浮べること泡の如く、また瓠ふがごとくなれば、匏とも瓢ともいへり、和名フクベ略〇圖 その長こと越瓜の如く、首尾一のごとくにして、大なるものを瓠。と云、和名ユウガホ略〇圖 小にして細腰のものを蒲。盧。といへり、葫蘆といふは非なり、俗にいふヘウタン、略〇圖 同じかたちにて、至て小ものを藥。壺。盧。といふ、これを略〇圖 俗にセンナリといへり、匏に似て圓く大きく、短柄のあるものの壺。といふ、略〇圖 瓠の頭大からで、柄の長きものを懸。瓠。と云、略〇圖 本草に苦。匏。あり、國語に苦盧といふ、綱目に苦壺盧と名く、その味膽の如し、詩に苦葉といふものこれなり、和名ニガフタベといふ、略〇圖

〔農業全書　三〕瓠

種る法肥地を深く耕し區(さく)を作り、深さ廣さ各一尺ばかり、杵にて土をつきかため、うるほひの下

瓢利用

にもれざる樣にして、其中に肥たる土を入、蠶のふん或鷄家鴨の糞などを多く入をし付、水をかけ、土と思ひ合せ、たねを四粒宛入、灰糞を以ておほひ、生出て後も力次第、糞水を度々そゝぎ、つる長く成てはなり花を見て先を留べし、あやしき屋の上にはゝせ、或は棚をゆひて、其上にまとはするもよし、地にはゝする時は、瓜の下に、わらなどをしかせ、折々上を下に取返しをくべし、又手にてなでさすれば、ながくはならずして厚く成ものなり、三月うへて、八月收むべし、器物にするは、よく熟し堅くなりたるを取て、水濕なき地を四五尺も深くほり、わらかこもを、土肌にしき隔て、下には尙厚くしき、瓢を其中に頭の方を下にしてならべ、土を二尺ばかりおほひ、廿日ほどして取出せば、黄色に成たるを、口をきりあけ、さねを出し、それ〴〵の器物とすべし、○中略又大瓢を作る法、穴を深さ廣さ各三尺ばかりに掘、其中に糞と土とを等分にませ合せ、穴の中一盃に入ふみ付、底までしめりとをる程水を入、水のひいるを待て、たねを十粒ばかり、ばらりと蒔、土糞をおほひ、生じて長さ二尺餘の時、十筋のつるを一つに取合せて、土ぎは五六寸ばかりを布にて卷、其上を苧を以てまとひ、其上を泥を用ひて厚くぬりをけば、十日も過ずして、帶たる所付合て、つる一筋に成なり、其蔓の中にてうるはしく性の强きを、一筋殘して、餘は悉く切去べし、其後一つのつるを棚に引上れば、やがて花咲實を結ぶ、其内にて性のつよく、難なくふとるべきを一つ二つ殘し、餘は枝をも皆々つみ去べし、つるのさきをも長くはのばすべからず、但もとなりの一つ二つはつる付よはくて、ふとりて後あやうし、中なりのふとるべきを二つ殘し置べし、もし早せば、たび〳〵水をそゝぎ、つねにうるほひを持すべし、かくのごとくすれば、水の四五斗も入ふときが出來るものなり、十筋のみにかぎらず、二筋三筋にても、右のごとくゆひ合せ、糞を多く用れば、如形ふとし、又苗をうへをき、三月移しうゆる事多瓜に同じ、

〔宜禁本草乾五菜〕苦瓠　甘寒有毒、多食發痼疾脚氣、虛脹冷氣人忌之、瓠匏苦如膽者不可食、似越瓜長

尺餘、主大水面目四肢浮腫、食之令人吐利、壓熱服丹石人方可食、餘人不可輙食、匏甘冷圓而扁、日華子曰、除煩渴心熱、利小腸潤心肺、治石淋、孫眞人曰、甜瓠患腰脚腫氣及虚腫者、食之永不瘥、

〈農業全書 三菜〉瓠(ひさご)

瓠、夕がほとも云、丸き長き又短きもあり、又ひさくにするは、つる付の方いかにも細長く、末の所丸し、長き方を柄にして水を汲手水のひさくにして、おかしき物なり、唐の許由が木の枝にかけしが、風に鳴たるをむづかしといひし事、つれ〴〵草にも書たり、則此物なり、又丸く大なるは、水を泳ぐに用ゆべし、炭取にし、或器物とし、菜のたねなどを入置てよし、又腰のほど細きは、古より酒器に用ひ來れり、ひさごに苦きと甘きと二色あり、甘き物わかき時色々料理に用ひ、干瓢にして賞翫なる物なり、

〈下學集 下飲食〉干瓢(カンヘウ)　〈同 下草木〉腸瓢(カンヘウ)

〈易林本節用集 加食服〉干瓢(カンヘウ)

〈和爾雅 七菜蔬〉匏蓄(カンヘウ)　俗云乾瓢、按釋名云、瓠蓄、皮瓠以爲脯、蓄積以待冬月時用之也、

〈和漢三才圖會 百菜蔬〉壺盧

乾瓢　土用中取之、横切片、去皮及瓤、用白肉、薄剝連一二丈、如紙綿、掛架晒乾、如違而變色不佳、釋名云、皮瓠以爲脯、蓄積以待冬月時用之、故名瓠蓄、即此乾瓢也、信州尾州剝冬瓜作、亦似瓢脯、異干瓢、河州木本、攝州木津難波多出之、送于四方、可煮食、味甚甜美也、瓠長二尺許、最長者三四尺、味少苦、煮食則甘、匏團大、呼之名不久倍、堪爲腰舟、味甘、懸瓠、柄長以爲杓及花瓶、味甘、性悉、古書在甘瓢圖、味皆苦、

〈國花萬葉記 四河内〉同國(河内)〇名物出所

干瓢

〈官中秘策 十九年中行事〉年中諸大名獻上物之事

[illegible]

[illegible]

五月

一瓠。野。干。瓠。鯖腸、

〔延喜式民部二十三〕交易雜物

遠江國（中略）大瓠廿口〇中略　常陸國（中略）大瓠十口〇中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔毛吹草三〕攝津　今宮千生瓠簞

〔今昔物語十三〕陸奧國法花最勝二人持者語第四十

今昔、陸奧ノ國ニ二人ノ僧有ケリ、一人ハ最勝王經ヲ持ツ、名ヲ光勝ト云フ、〇此間恐有脫文本興福寺ノ僧也、此ノ國本ノ生國ナルニ依テ、各本寺ヲ去テ來リ住ス、此ノ二人ノ聖人、皆心直ク身清クシテ、各法花最勝ヲ持テ靈驗ヲ施ス、〇中略而ルニ光勝云ク、此ノ二ノ經〇最勝王經、法花經、何レカ勝レ給ヘル、勝負ヲ可知シ、若シ法花ノ驗勝レ給ヘラバ、我レ最勝ヲ棄テ、法花ニ隨ハム、若シ亦最勝ノ驗勝レ給ヘラバ、法蓮法花ヲ棄テ、最勝ヲ可持シト、如此ク云ヘドモ、法蓮更ニ此レヲ執スル心无シ、光勝亦云ク、然ラバ我等二人各一町ノ田ヲ作テ、年作ノ勝劣ニ依テ、二ノ經ノ驗ノ勝劣ヲ可知シト、鄕ノ人此ノ事ヲ聞テ、各一町ノ田ノ間程ナルヲ、二人ノ聖ニ預ケク、而ルニ光勝聖此ノ田ニ水ヲ入レテ、心ヲ至シテ最勝ニ申シテ云ク、經ノ威力ニ依テ、種ヲ不蒔ズ、苗ヲ不植ズシテ年作ヲ令增メ給ヘト祈請シテ、田ヲ作ルニ、一町ノ田ノ苗等タシテ茂リ生タル事無並シ、日ヲ經月ヲ重テ、稔ヒ豐ナル事勝レタリ、法蓮聖ノ田ハ作ル事モ无ク、心ノ如ク入ル、人モ无クシテ荒レテ草多カリ、然レバ馬牛心ニ任セテ、田ノ中ニ入テ食ミ遊ブ、國ノ內ノ上中下ノ人此レヲ見テ、最勝ノ聖ヲ貴ビ、法花ノ聖ヲ輕シム、而ル間七月ノ上旬ニ、法花ノ聖ノ田一町ガ中央ニ、瓠一本生タリ、此ノ瓠漸ク見レバ、枝八方ニ指テ、普ク一町ニ敷滿タリ、高キ莖有リテ隙無シ、二三日計ヲ經テ、花開テ實成レリ、一々ノ瓠ヲ見ルニ、大ナル事壺ノ如クシテ、隙无ク並ビ臥タリ、此レヲ見ルニ付テモ、人

松平加賀守

皆最勝ノ聖ヲ讃ム、法花ノ聖田ノ狐ヲ見テ、奇異ノ思ヒヲ成シテ、一狐ヲ取テ、破テ其ノ中ヲ見ルニ、精タル米滿テ有リ、粒大ニシテ、白キ事雪ノ如シ、聖人此レヲ見テ希有也ト思テ、斗ヲ以テ此レヲ量ルニ一ノ狐ノ中ニ、五斗ノ白米有リ、亦他ノ狐ヲ破テ見ルニ、毎狐ニ皆如此シ、爰ニ法蓮聖喜ビ悲テ、鄕ノ諸ノ人ニ告テ、此レヲ令見ム、其後先ヅ此ノ白米ヲ佛經ニ供養シ、諸ノ僧ヲ請ジテ令食ム、又一果ノ狐ヲ、光勝聖ノ房ニ送リ遣ル、光勝聖此レヲ見テ、妬ミノ心有ト云ヘドモ、法花ノ威力ヲ見テ悲ミ貴テ、法蓮聖ヲ輕メツル事ヲ悔テ返テ隨ヌ、卽チ行テ禮拜シテ懺悔シケリ、法蓮聖其ノ狐ノ米ヲ以テ、國ノ内ノ道俗男女ニ施シ與フ、人皆心ニ任セテ荷ヒ取ル、然レドモ狐尙十二月ニ至ルマデ更ニ不枯ズシテ、取ルニ隨テ多ク成ニケリ、此レヲ見聞ク人、法花經ノ威力ノ殊勝ナル事ヲ知テ、法蓮聖ヲ歸依シケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし、春つかた日うらゝかなりけるに、六十計の女のありけるが、虫うちとりてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石をとりてうちたれば、あたりてこしをうちおられにけり、羽をふためかしてまどふほどに、烏のかけりありきければ、あな心うからす取てんとて、此女いそぎてとりて、いきしかけなどして物くはす、○中略あからさまに物へいくとても、人に此すゞめみよ、物くはせよなどいひをきければ、子まごなど、あはれなんでう雀かはるゝとて、にくみわらへども、さばれいとおしければとて飼ほどに、飛ほどに成にけり、今はよも烏にとられじとて、外にいでゝ、手にすへて、飛やするみんとてさゝげたれば、ふら／＼ととびていぬ、女おほくの月比日比、くるればおさめ明ればものくはせならひて、あはれや飛ていぬるよ、又來やするとみんなど、つれ／＼に思ていひければ、人にわらはれけり、さて廿日ばかりありて、此女のゐたるかたに、すゞめのいたくなきければ、すゞめこそいたくなくなれ、ありしすゞめのくるにやあらんと思て、いでゝ見れば、此すゞめ也、あはれにわすれずきたるこそあはれなれとい

ふほどに、女のかほをうちみて、くちより露ばかりのものをおとしをくやうにして、とびていぬ、女なに、ゝかあらん、すゞめのおとしていぬる物はとて、よりてみれば、ひさごのたねをたゞひとつおとしてをきたり、もてきたる樣こそあらめとて、とりてもちたり、あないみじ、すゞめの物えて實にし給とて、子どもわらへば、さばれ植てみんとて、うへたれば、秋になるまゝに、いみじくおほくおいひろごりて、なべての杓にもにず、大におほく成たり、女悦けうじて、さと隣の人にもくはせ、とれども〳〵つきもせずおほかり、わらひし子孫もこれをあけくれ食てあり、一里くばりなどして、はてにはまことにすぐれて大なる七八は、ひさごにせんと思て、内につりつけておきたり、さて月比へて、いまはよく成ぬらんとて見れば、よくなりにけり、とりおろしてくちあけんとするに、すこしおもし、あやしけれどもきりあけてみれば、物ひとはた入たり、なに、ゝかあらんとて、うつしてみれば、白米の入たる也、思がけずあさましとおもひて、大なる物にみなをうつしたるに、おなじやうに入てあれば、たゞごとにはあらざりけり、すゞめのしたるにこそと、あさましくうれしければ、物にいれてかくしおきて、のこりの杓どもをみれば、おなじやうに入てあり、これをうつし〳〵つかへば、せんかたなく多かり、さてまことにたのもしき人にぞ成にける、となり里の人も見あざみ、いみじきことにうらやみけり、

〔異本新撰字鏡 草七〕苽菰(二形同、古胡反、彫胡、)〔同 瓜十一〕瓝瓜(二形作、古花反、平、菰苽也、食子草三百六十一、瓝、瓜瓞、長也、)

〔新撰字鏡 草〕瓝(字○和○)

〔倭名類聚抄 十七菓蓏部〕瓜(瓜類) 唐韻云、瓜(音寡、和名宇利乃佐瓜、)瓜瓠屬也、

〔伊呂波字類抄 宇植物附喰物具〕瓜(ウリ) 低(廣雅云、龍蹄、獸掌、羊骹、兔頭、桂髓、密筩、小青、大斑、皆瓜名也、) 苽 瓝(已上) 瓣(ウリノサネ、瓜實也、) 白瓜子(ウリノサネ、蘇敬注曰、白字誤、當作甘、) 水芝 苽子 水芝瓜(出蘇敬注) 甘瓜子(出崔禹) 兎延(白瓜辨也、出神仙服餌方、已上) 大名ウリノサネ見本草、 瓣(ウリノサネ)

〔下學集 下草木〕瓜ウリ（或作苽也）靑門セイモン 東門トウモン（共瓜異名也、秦東陵侯、種瓜長安城東、人謂之靑門瓜、東門瓜也、）

〔新撰類聚往來 上〕菓子菓子類、集山海之珍產度存候、尋出分有之、○中略 瓜 胡白瓜 諸冬瓜 熟唐瓜 細地 梵天 瓠 榎子瓜

〔易林本節用集 宇草木〕瓜ウリ（五色 靑門）瓣ウリザネ 〔同 古食服〕五色コシヨク（瓜名） 〔同 世草木〕靑門セイモン（瓜名）

〔干祿字書 平聲〕苽瓜（上俗下正）

〔日本靈異記 上〕无慈心而馬負重駄以現得惡報緣第廿一

昔河内國有瓠販之人、名曰石別也、過馬之力而負重荷、馬不往時、瞋恚捶駈、負荷務之、兩目出淚、賣瓠竟者、卽殺其馬、如是殺之爲多遍、

〔日本靈異記考證 上〕瓠（部苽字、苽瓜俗字、見干祿字書、按瓜與爪字體相近易混、故加艸以分之也、說文苽彫苽、弁此義、又按、本草和名作苽、新撰字鏡作苽、皆筆迹少異耳、醫心方亦作瓜瓜、）

〔枕草子 八〕うつくしきもの

ふりにかきたるちごのかほ

〔枕草子春曙抄 八〕ふりにかきたる　姫瓜の事なるべし

〔夫木和歌抄 九瓜〕六帖　衣笠内大臣（家良○藤原）

百敷やくらのつかさのふりうりに我おとらじとつどふうなひこ・

〔東雅 十四果蓏〕瓜ウリ　義不詳、ウリとは其熟ぬるをいひしに似たり、（榛の註を可併考）古事記にも、小碓命筑紫の熊曾が衣をとりて、劍をもて其胸より刺通し、熟瓜の如く振折而殺し給へりといふこと見えたり、（或說に、俗に瓜をフリとしるす事よからずといふなり、古語にウといひフといふは、相通じていひけり、されば古事記にもフリサクといふ枕詞に、ウリの如くとはしるしたりけり、）熟瓜をば、倭名鈔にはホソヂと云ひて、俗用熟瓜二字、或說に極て熟し蔕落つるの義なりと註し、また靑瓜アヲウリ、斑瓜マダラウリ、黄甌キウリと註せり、其キウリといふものは、胡瓜の事を

いふにあらず、此等皆甜瓜の類、漢人のいひし果瓜也、又白瓜はシロウリ、冬瓜はカモウリ、胡瓜はソバウリ、俗にキウリといふと註せし、白瓜は、陳藏器がいふ所の越瓜にて、白冬瓜子を白瓜子といふものにはあらず、冬瓜をカモウリといふは、カモとは𤼵也、皮の上白を生じて𤼵の如くなるを云ひしなり、胡瓜をソバウリといひしは、其稜あるを云ひて、又キウリとも云ひしは、其老て色黃なるに因れる也、漢にも亦一名を黃瓜とも云ひけり、此等は漢人の云ひし菜瓜也、また㑹名苑を引て、寒瓜はカブウリ、至冬熟也と註したり、永嘉記の寒瓜、李東璧本草に寒瓜と云ひし物ならむには、これもまた果瓜也、今に於ては我國に是等の種ありとも聞えず、されど永嘉記に據るに、其寒瓜といふも、八月熟すと見えたれば、卽今の晩瓜の如きをや云ひぬらん、亦別に此種もやありつらむ、カクウリといふは名をあはせて不詳、爾雅𤋮註を引て、瓞瓝はタチフウリ、小瓜名也と註せしは、毛詩疏に據るに、瓜實近本而小なるをいふなりとあり、さらばいづれの瓜にもあれ、其本に近きが小しきなるをば、タチフウリといふべし、別に其種ありとは見えず、タチフといふ義もまた不詳、(胡瓜をキウリといふ、或は其臭あるをいふ歟、漢に胡瓜といふが如き、此俗臭なればキといふ、五字集な併書ふべし、)

〔倭訓栞 前編四〕うり　瓜をよめり、口渇をうるほすより名とせる成べし、ふりと書は非なり、其名を專らにする者は甜瓜也、からうりとも、あまうりともいへり、

〔南留別志 五〕一瓜をふりとかく事は、壺盧をとり違へたるにや、壺盧の唐音うるなり、うとふとの聞をいふより、ふとかくなるべしるもりゆといふやうなれば、りといふなるべし、

瓜種類

〔和漢三才圖會 九十蓏果〕瓜類不同、其用有二、供果者、甜瓜、西瓜、供菜者、胡瓜、越瓜、凡實在木曰果、在地曰蓏、大曰瓜、小曰瓞、(和名多知布字豆)其子曰[illegible]、(音廉)其肉曰瓤、(音穰、俗云奈加古)其跗曰環、謂脱花處也、(俗云豆之、人頭之旋毛二)其蒂曰𤬪、(一名瓜丁)謂繫蔓處也、

熟瓜

〔本草和名 十八菜〕熟瓜、(陶景注曰、熟瓜有二數種、去瓤食之、)一名水芝、一名蜜筩、一名搏樓、一名厭須、(熟瓜惣名也、已上四名出雜要決、)和名

保曾知、

〔倭名類聚抄菓蓏十七〕熟瓜　廣雅云、虎掌、羊骹、小青、大斑、和名保曾知、俗用熟瓜二字、或説極熟蔕落之義也、皆熟瓜名也、

〔箋注倭名類聚抄九菓蓏〕按保曾知、甜瓜之熟者、甜瓜以美濃國眞桑村產爲佳、故今俗呼眞桑瓜、

〔伊呂波字類抄保植物附植物具〕熟瓜ホソチ

〔庭訓往來〕菓子者、柚柑、柑子、橘、熟瓜、澤茄子等、可随時景物也、

〔倭訓栞中編保二十三〕ほぞち　和名抄に熟瓜をよめり、極熟して蔕落るの義也といへり、枕草紙にほうちはうたうまいらせんと見、うはうの誤字なるべし、

〔安齋隨筆前編一〕ホゾチ　清愼公の集に云、女御すの子御簾子みかふしおろしたるまぎれにうせたれば、

ぬす人はほぞちを見ても雨ふればほしうりとてや取かくすらん

和名抄に、熟瓜和名保曾知、俗用熟瓜二字、或説極テ熟蔕落ノ義也とあり、ほぞちはほぞおちの略語にて、うりの至極うみたるは、おのづからほぞはなれ落るゆへほぞちと云也、是今俗にまくわうりといふもの也、まくわうりといふを、甜瓜の本名と心得は誤なり、美濃國本巢の郡眞桑といふ地所より作る甜瓜を、眞桑瓜といふ、味よきゆへ賞する也、他所にて作りたるを眞桑瓜といふは非也、甜瓜と書てカラウリとよむ、唯うりと計も云也、白瓜きうり其外さま〲の瓜と名付る物多き中に、唯甜瓜のみをうりといふ事は、花もさま〲多き中に、櫻のみ花といふが如し、又かな文字にて瓜を書くには、うりと書ずしてふりと書事、かなづかひの習也といふ説あり、甚あやまり也、ふの字を上に置て、うとよむ古例なし、和名抄に宇利と書れば、うりと書を本とすべし、定家假名遣ひなど〻云俗書は、日本紀、古事記、萬葉集、其外の古書のかなづかひと相違する事、俗説は取にたらず、

〔下學集 草木下〕甕簡（甘瓜異名也）

〔易林本節用集 草木加〕甜瓜

〔增補下學集 下三 草木〕甜瓜

〔物類稱呼 三 生植〕甜瓜まくはうり　西國にてあじうり、奥の仙臺にてでうり、佐渡にてちんめうと云、又江戸にて云きんまくはを、備前にてせんしかと云、奥の津輕又松前にてしまうり、南部にてはきんくはと云ふ、眞桑瓜は美濃國眞桑村の產を上品とす、故に名づくとぞ、又越前にてねづみ眞瓜といふ、味ひ甚美なり、吐方に用る所の瓜蒂是なり、其味ひ甚苦し、餘國の產は吐方に用ひて功なし、

〔和漢三才圖會 九十 蓏果〕甜瓜　甘瓜　果瓜　甜（音甛、同、甘也、）　阿末宇里　熟蔕落者（和名保曾知）　今云眞桑瓜

本綱、甜瓜味甜於諸瓜、故名、二三月下種、延蔓而生、葉大數寸、五六月花開黃色、六七月瓜熟、其類最繁、有團有長、有尖有扁、大或徑尺、小或一捻、其稜或有或無、其色或青或綠、或黃斑糝斑、或白路黃路、其瓤或白或紅、其子或黃或赤、或白或黑、凡瓜最畏麝香、觸之即至一蔕不收、（中略）

按甜瓜（中略）○一種有韓瓜（似甜瓜而大、皮不滑、味劣、）　一種有阿古陀瓜（形似南瓜、今人不好、）有釀味、誤瓜汁著刀劍則忽生鏽、

〔嬉遊笑覽 十上 飲食〕眞桑瓜は、濃州眞桑村の種を京師東寺邊に栽し故、夫を眞桑瓜といひしが、今は一般にしか呼なり、一種皮の白めなるあり、增補江戸鹿子、本所瓜味美ならず、本田瓜といふ、形甚大なり云々いへり、是ほんでん瓜なり、今これを銀まくはといふ、金まくはに對しての名なり、寛永發句帳に、後藤判とあるべき金まくは哉（貞德）懷子集、大和人こんと貢なり白まくは（好方）續山井、類ひなき佳味の梵天の眞瓜かな、（[illegible]）今も肉多く肥たるをホタタルと云是なり、おもふに本田瓜は、梵天瓜なるを、本田と書、ほんだと誤れるなり、醒睡笑、和州より出るほでんと云瓜は、延暦寺慈覺大

師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし、命久しかるまじと思ひ、叡山の北谷に草庵をむすび、三年つとめ行ひて、おわりをまたれければ、ある夜夢に、天人來りたり、これ靈藥なりとてあとふ、其形瓜に似たり、半片を食す、其味蜜の如し、人ありて告るやうこれ梵天王の妙藥なりと、夢さめて口中餘味あり、しかして後やせたるかたち更にすくやかに、くらきまなじります〳〵明らかなり、その半片を土にまきければ、全き瓜の生せしいまの梵天これなり、元亨釋書に見えたり、これ附會の說なり、釋書には有二一人曾曰、是忉利天妙藥也云々、瓜形夏健、曾時登明、於レ是以二石壘草筆一書二妙法事云々、この以下彼の中片の瓜の事なし、そのうへ忉利天と梵天とは異なり、ほでん瓜の名によりて、かゝることな云そへたるなり、瓜を六かは半にむくといふも久き事にや、五元集に、あたまから章魚になりける六皮半、

〔古事記中景行〕爾其熊曾建、白信然也、於二西方一除二吾二人一無二建強人一、然於二大倭國一益二吾二人一而建男者坐祁理、是以吾獻二御名一、自今以後應レ稱二倭建御子一、是事白訖、卽如二熟瓜一振折〇振折二字以音而殺、

〔古事記傳二十七〕熟苽ハ本叙知(ホゾチ)と訓、〇註略和名抄に熟瓜、和名保曾知、或說、極熟蔕落之義也とあり、蓋く熟て、おのづから蔕より絕て落たる由の名なり、(中略)さて熟瓜は、保曾知と云べきを、宇理をば省きて云は此例常に多し、

〔元亨釋書二十二〕釋善珠、姓安都氏、京兆人、或曰、太皇后藤宮子之棄子也、少魯鈍、而以レ此爲レ恥、學二唯識宗一、習二因明論一、奧室不レ通、勵レ志無レ撓、時寒暑、頭顱如二熟瓜一、鬢髮畫落、珠之勤業率類之、以レ故博該二三藏一、延曆十六年正月、侍二皇太子病一、事在二資治表一、其年四月化、歲七十五、

〔大槐秘抄〕村上の御日記に、蜜瓜のたねを鴻臚館のあづかりに給ひて、鴻臚にうへさせられたりとこそ候めれ、おほやけはよき瓜うへさせて、きこしめしけるにこそ候めれ、

〔玉造小町子壯衰書〕又集二神嶺之美果一、聚二靈澤之味菓一、東門五色之苽(ウリ)、西窓七斑之茄(ナスビ)、

〔雲州消息下末〕桂邊有二領地一、尋二邵平之跡一、令レ殖二五色之苽一、而隣子村男每レ夜掠レ之、令條所レ指准レ盜論歟、已乖二不レ納レ履之儀一、兼仰二里長一、可レ加二制止一、彼邊散所雜色多以居止、可レ被レ仰二案內一也、謹言、

六月日　　　　　　　　　　微位橘

謹上博士判官殿

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最後事

平家ノ方ヨリ懸キ法師ノ振舞哉、サノミ一人ニ多者討レタルコソ安カラヌトテ、シコロヲ傾テ、ナガヘヲ指出タル兵アリ、明春是ヲ見テ、面白シ、東門五色ノ熟瓜ゾヤトテ、甲ノ鉢ヲ打破テ、喉笛マデ打ナカント打タリケルニ、太刀モコラヘズシテ、目貫穴ノモトヨリ折ニケリ、太刀ハ折タレ共、甲モ頭モ打破レテ、眞逆ニ川中ヘゾ落ニケル、

〔山槐記〕治承四年八月十一日辛卯、巳剋出守部、午剋著西宮、暫休息、未剋出西宮、申終剋著福原宿所、依窮屈今日不參、參告參入之由於頭辨、自大理許被送五色瓜、

〔吾妻鏡十一〕建久二年八月一日丁丑、今日大庭平太景能、於新造御亭獻酒盃、其儀殊不極美、以五色瓜鱸魚等爲肴物、

〔古今著聞集十八飲食〕勝行法印人の許へまかりたりけるに、瓜を取出たりけるが、わろく成て水ぐみたりければよめる、

山しろのほぞちと人やおもふらん水くみたるはひさごなりけり

季經卿泰覺法印がもとへ、瓜をつかはして、此瓜くいて、これがかはりには、此般若かきてとて、料紙一兩卷をくりたりける返事に、

なめ見つる五の色のあぢはひもきはだの紙ににがくなりぬる

〔梵舜日記〕慶長二年六月十八日、幽齋女房衆爲見廻、マクハ瓜持參候也、

〔執政所抄下七月〕十六日

天台熟瓜合事

姫瓜

瓜

佐保殿卅五駄　宿院卅五駄　平田卅五駄　吉田廿駄

件事六月下旬式日、七月十五日可進上之由雖下知、寄事於負田牢籠幷權門寄人對捍、進三分二之間、依不滿百駄、山所等請取不申行之、因之行事出納徒於送文數日經廻、叡岳五包濱損不能會用之、偏滿本數可被糺行事歟、

〔朝野群載七攝籙家〕進天台瓜送文

關白前太政大臣家政所

奉送瓜百駄事

右天台熟瓜會分、奉送如件、

永久四年七月日　造東大寺長官兼左中辨藤原朝臣

〔德川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀節ニ入候日より賣出之事

覺 ○中略

一眞桑瓜　六月節ゟ

〔和漢三才圖會百菓〕姫瓜　俗稱

按姫瓜、葉花小、五六月生瓜、大二寸許、圓而淺青色、味苦不可食、熟則稍黄、雖微甘不堪食、唯小兒取之畫眼鼻口之狀、以爲翫耳、故俗名姫瓜、

〔雍州府志六土產〕姫瓜　出自九條田間、其大如梨、其色至白、故以姫稱之、女兒求斯瓜、少留莖傳白粉於其面、以墨畫鬢髮眉目口鼻、以水引結其莖、提携爲玩具、

〔倭訓栞中編二十一〕ひめうり　金露荷也といへり、稍大なるをかきうりといふ、野生によぶは王

越瓜

瓜の類也、雀瓜といふ、西國によめのごき、安房にきんぷんしきといふ、合子草なり、

〔續山の井 夏上〕姫瓜

姫瓜のまがきや深きまどのうち　すて

出羽山形

はそおちは轉ころびか小姫瓜　未覺

〔本草和名 菜十八〕越瓜（陶景注曰、作レ菹食レ之、出ニ孟詵食經一、）一名春白、一名女臂、一名羊角、一名羊髕、（已上四名出ニ兼名苑一、）一名女臂瓜、一名玉臂、（出ニ七卷食經一、）和名都乃宇利、

〔本草和名 菜十八〕白瓜子（蘇敬注曰、白字當レ作レ甘、）一名水芝、一名瓜子、一名水芝瓜、（出ニ蘇敬注一、）一名甘瓜子、（出ニ崔禹一、）一名兎瓞、（白瓜細也、出ニ神仙服餌方一、）和名宇利乃佐禰、

瓜蔕（陶景注曰、用ニ早青蔕一也、）和名爾加宇利乃保曾、

〔倭名類聚抄 十七〕白瓜　兼名苑云、女臂一名羊角、（和名之路宇利）白瓜名也、

〔伊呂波字類抄 志植物 附植物具〕白瓜（シロウリ）　女臂　羊角（同已上）

〔易林本節用集 志草木〕越瓜（シロウリ）

〔和爾雅 菜七蓏〕越瓜（シロウリ）（菜瓜、並同、長者名ニ羊角瓜一、）　醬瓜（アヲウリ）（或云頭花）

〔物類稱呼 三生植〕越瓜しろうり　京にてあさうりといふ、一種筑紫にてつけうりといふ有、江戸にてはなまるといふ、

菜瓜なうり　京にてあをうり、大坂にてなうり、大和にてはなんぼ、江戸にて、まるづけ、相模にてかたうりといふ、（東國にあをうりと稱する有、別種也、）

〔本朝食鑑 三菜〕白瓜（訓ニ古今如レ字、京俗稱ニ越瓜一、）

釋名、羊角、（源順曰、女臂、一名羊角、白瓜名也、必大（平野）按、李時珍曰、長者至ニ二尺許一、俗呼ニ羊角瓜、女臂、亦同ニ其瓜白一乎、源順和名曰、兼名苑曰、龍蹄一名青登、青献瓜也、唐韻曰、献直禁反、與レ鴆同、青皮瓜名也、有ニ與ニ白瓜一同種者一、併以ニ越瓜一、今每レ種ニ白瓜一中有ニ青皮者一、又別有ニ一種稱ニ醬瓜一者、花頭ニ枕頭花一也、）

集解、白瓜處處多有、二三月下種生苗、就地引蔓青葉黃花、如甜瓜花葉、夏秋結瓜、有青白二色、一種長者至二尺許、則羊角也、其子狀如麥粒、其瓜肉淡而微甘、瓤苦、去瓤而生食、或鹽漬晒乾可充果蔬、味醬糟鹽漬而藏、皆宜、此則香物也、一種皮色深青、如青甜瓜、有縱文不光滑、其肉如越瓜、俗呼稱漬瓜、此卽醬瓜乎、又有似漬瓜而甚少如桃李、俗呼稱小瓜、此二瓜最宜香物也、近時以醃藏越年、瓜色不變、如生時者、其法、豆腐滓一升、白鹽三合、採合數次令鹽滓相交不滯、陰晒一日、用白瓜劈作二片、以蛤殼去瓤令淨、如舟形、用紙拭去水濕、縱入鹽滓中、要使瓜不相捐、若橫入相捐、則腐熟不久、如此法、則至明年、瓜色不變、而如生也、乾瓜法、用生瓜細切作片入盤、抹鹽拌勻、待晴日炎盛時、晒乾一日、自辰至申、取收入壺甕而貯之、則香味脆美、久而不變、又法用生瓜二劈去瓤如舟、舟中盛鹽、放屋上而暴日、經數日待白乾而收藏、則經兩年、用時、洗淨細切、浸水去鹹、和好酒而食、或漬味醬而食、亦佳矣、

〔和漢三才圖會 百菜〕越瓜　菜瓜　稍瓜　羊角瓜　青瓜 和名阿乎宇利　白瓜 和名之呂宇利〇中略

按青瓜、一名龍蹄、又一名青登、白瓜、一名女青、又一名羊角、二種一物也、通名淺瓜、田舍呼曰白瓜、凡每枝結二瓜、但有早晩二種、早者俗云伊眞利結瓜多而白色、肉薄瓤多、味不美、晩者結瓜少而青色、肉厚瓤少、味亦美、

菜瓜　俗云奈宇利　本草曰、菜瓜者越瓜也

按菜瓜葉似越瓜而小、背有微毛、六七月結瓜、似甜瓜、皮厚深青色、有縱白紋、肉似越瓜而不宜煮食、藏糟及糖俗名之香之物、硬脆美、然不上品、

一種有似菜瓜而小如鵝卵者、名小瓜、漬糟食、

〔重修本草綱目啓蒙 二十菜蔬〕越瓜　アサウリ　一名生瓜 本經逢原

胡瓜ニ次テ出、形胡瓜ヨリ長大ニシテ刺ナシ、青白色、糟ニ藏シテ食用トス、又生食熟食亦可ナリ、和州ニハシロウリ、アサウリ二品アリ、竪ニ筋アルヲアサウリト云フ、豫州ニテハ通ジテシロウリト呼ブ、讃州ニハタロウリト呼ブアリ、皮色深ク肉ハ白シ、ナマスニ上品トス、故ニ又モミウリ

青瓜　斑瓜　寒瓜　瓞瓝

トモ云、是田舎瓜ナリ、本經逢原ニ、有青白二色、青者尤勝ト云、○中略

釋名、菜瓜同名アリ、一種ノ菜瓜ハ、カタウリ若州、加州、ナリ、一名カキウリ豫州松山、筑前、同名アリ、ナウリ和州、讃州、ハナボ、和州ハナンボ、ナウリソ、共同上ヤサイウリ若州、加州、アヲサギ伊州、勢州、マルブクウリ同上マルブケ、江戸センシカ、備前センシタハ、同上ツケウリ、濃州ツケモノウリ、防州形狀甜瓜ト同シテ大ナリ、用テ漬物トス、初ハ緑色、熟シテ黄色トナル、

〔德川禁令考四十九 魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀節に入候日より賣出之事

覺○中略

一白瓜。　五月節ゟ

〔倭名類聚抄十七 菓蓏〕青瓜　兼名苑云、龍蹄一名青登、和名阿乎宇利、青瓞瓜也、唐韻云瓞、音與、鳩同反、青皮瓜名也、

〔伊呂波字類抄安 植物雜植物具〕青瓜アヲウリ　龍蹄　青登　瓞已上同

〔東大寺要録五〕年中節會支度寛平年中日記

一七月用　七日節供○中略　青瓜二菓代五合

〔倭名類聚抄十七 菓蓏〕斑瓜　兼名苑云、虎蹯一名貍首、和名末太良宇利、黄斑文瓜也、

〔倭名類聚抄十七 菓蓏〕寒瓜　兼名苑注云、寒瓜和名加毛宇利、至冬熟也、

〔眞本新撰字鏡十一 瓜〕瓞徒結反、瓞也、小瓜、　瓝浦卓反、小瓜也、山瓝、

〔倭名類聚抄十七 菓蓏〕瓞瓜　爾雅集注曰、瓞瓝、瓞瓝二音、和名多知布字里、小瓜名也、

〔箋注倭名類聚抄九 菓蓏〕釋草、瓞瓝、郭注、俗呼瓝瓜、爲瓞、與此異、毛詩正義引舍人曰、瓞名瓝、小瓜也、此所引蓋是、則名字當在瓝字上、然標目題瓞瓝二字、則源君所見本錯亂、遂連讀瓞瓝二字、爲小瓜名也、按毛詩傳云、瓞瓝也、鄭箋云、瓜之本實、繼先歳之瓜必小、狀似瓝、故謂之瓞、正義引孫炎曰、瓞小瓜、

子如瓝、正義又云、瓞是瓝之別名、爾雅疏亦云、瓞一名瓝、皆可證、釋草瓞瓝以瓝釋瓞也、源君連引瓞瓝二字者誤、說文、瓞瓝也、又云、瓝小瓜也、徐音蒲角切、無瓝字、則知瓝俗瓝字、新井氏曰、據詩箋、瓞謂瓜之近本而小者、非一種小瓜之名、源君引爲瓜名、非是、

〔小大君集〕おなじ人、○(平兼盛)大監物なりし時、ないし所にみかきまうしに、おほどねりのひきいでにきたりて、ある人内侍のすけのしるやうありて、そこに有けるおりなりければ、まへにありけるたち。ふ。と。い。ふ。う。り。を、きなるしきしにつゝみて、おほどねりなりけるおきなにとらせたりければ、くらづかさにつきて、そこよりいふ、

山しろのとはにかよひてみてしがなうりつくりける人のかきねを

かへし

ことはにゆけばなりけりうりつくりそのことなきにたてりしや君

〔眞本新撰字鏡〕(十一 瓜)瓤。(蒲田反、平、黄。瓜。也、)

〔本草和名〕(十八 菜)胡瓜、(胡城多之、故以名之、出孟詵食經、)一名再熟瓜、(出崔禹、)一名勒瓜、(小而多汁)一名青瓜、(已上二名出兼名苑、)和名加。良。字。利。

〔倭名類聚抄〕(十七 菓蓏)黄瓤　陸機瓜賦云、黄瓤白𤬂、(音穰、𤬂音蒲田反、黄瓤和名木宇利、)陸詞切韻云、瓤黄瓜也、

胡瓜　孟詵食經云、胡瓜寒不可多食、動寒熱、發瘧病、(和名曾。波。宇。里。、俗云木。宇。利。、)

〔伊呂波字類抄〕(加 殖物附殖物具)胡瓜(胡地多之、故以名之、出孟詵食經、)　再熟瓜(出崔禹、)　勒瓜(小而多汁)　早青瓜(已上二名出兼名苑)

(已上四名カフリ、見本草、)　〔同〕(幾 殖物附殖物具)黄瓜(キウリ)　黄瓤(蒲田反、黄瓜名也、)　白𤬂　胡瓜(キウリ、已上同、)

〔新猿樂記〕七御許者、食飮愛酒女也、所好何物、○(中略)菓物者、無核温餠、勝粉團子、熟梅和、胡𤓰(キウリ)黄、

〔易林本節用集〕(幾 草木)胡瓜(キウリ)

〔和爾雅〕(七 菜蔬)胡瓜(キウリ)(ソバウリ)黄瓜(同)

〔大和本草附錄一〕胡瓜　白アリ、黄アリ、白ハ味黄ニマサリ久ニ堪フ、臭アシカラズ、黄ヲ不植シテ白ヲ可栽、

〔本朝食鑑三菜〕胡瓜（和名會波宇里、俗訓木字里、近代亦同、）集解、正二月下種、三月生苗引蔓、葉如冬瓜亦有毛、四五月開黄花結瓜、圍二三寸、長者至尺許、青皮上多瘡癗如疣子、至老則黄赤色、其子與越瓜同、大抵爲菹不佳、惟鹽糟漬藏作香物爲佳、京俗所謂祇園神社氏人、食胡瓜必得祟、此社頭及神輿、自古畫瓜紋故也、凡禁裏及神祇帷幕、畫瓜紋者不少、此胡瓜橫截作圖之形也、予（○平野必大）未詳之、

〔和漢三才圖會百菜〕胡瓜（キウリ）　黄瓜（唐音）　和名會波宇里、俗云黄瓜、
本綱、漢張騫使西域得種、故名胡瓜、隋朝避諱、改爲黄瓜、（○中略）一種五月種者霜時結瓜、白色而短、並生熟可食、兼蔬蓏之用、糟醬不及菜瓜、（○中略）
祇園神禁人胡瓜於社地、土生人忌食之、八幡之鳥肉、御靈之鮎（アユ）、春日之鹿、食則爲被祟、理不可推之類亦不少、蓋祇園社榱神輿以瓜（音寡）之紋爲飾、瓜以爲胡瓜切片形（ワギリ）而忌之乎、愚之甚者也、瓜紋乃木瓜（果木之名）之花形、而織田信長公幟文也、信長再興當社、用其紋爲後紀耳、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜〕胡瓜　ソバウリ（和名抄）　キウリ（同上○中略）
瓜ノ最早ク熟スル者ナリ、綠色ニシテ刺アリテ海參ノ肌ノ如シ、熟シテ黄色ナリ、故ニキウリト呼ブ、生食シ、或ハ鹽藏ス、和州ニハ熟シテ白色ナル者アリ、

〔東大寺要錄五〕年中節會支度（寛平年中日記）
一七月用　七日節供（○中略）　黄瓜一果（代五合）

〔桃源遺事下〕一西山公（○德川光圀）仰られ候は、黄瓜をば一名胡瓜といふ、又癩瓜といふ、此瓜甚毒多し、食して佛神へ參詣すべからず、又毒多して能少し、いづれにしても植べからず、不可食との仰也、

冬瓜

〔眞本新撰字鏡十一瓜〕瓠（其及反、冬瓜、）

〔本草和名十八菜〕白冬瓜、一名冬瓜人、一名地芝、（出蘇敬注）一名温食、一名秋泉、一名桂枝、（已上三名出雜名苑）和名加。毛。字。利。、

〔倭名類聚抄十七菜〕冬瓜　神農食經云、冬瓜味甘寒無毒、止渇除熱、（和名加毛字利）

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕冬瓜（カモウリ）　白冬瓜　冬瓜人　地芝（出蘇敬注）　温食　秋泉　桂枝（已上三名出雜名苑、已上六名カモウリ、見本草、）

〔下學集下草木〕瓹瓜（カモウリ、冬瓜也）

〔易林本節用集加草木〕冬瓜（カモウリ）

〔和爾雅七菜蔬〕冬瓜（カモウリ、トウグハ）（白瓜同、又云木芝、地芝、）

〔王氏農書二十九穀譜集〕冬瓜

冬瓜以其冬熟也、廣志謂之蔬拒、神仙本草曰、一名水芝、一名白瓜、嵩高平澤、今在處園圃皆蒔之、其實生苗蔓下大者如斗而更長、皮厚而有毛、初生正青綠、經霜則白如塗粉、其中肉及子亦白、故謂之白瓜、

〔日本釋名下草〕冬瓜（カモウリ）　かもハ氈也、順和名にかもと訓ず、毛むしろ也、冬瓜に毛あり、氈のごとし、故に名づく、

〔物類稱呼三生植〕冬瓜かもうり　とうぐは　畿内及中國北陸道、或は上總にてかもうりといふ、東國にてとうぐはといふ、東國にてとうぐはをとうがんとはねてよび、又大こんをば大ことといふこそをかしけれ、

〔本朝食鑑三菜〕冬瓜（訓加毛宇利、近俗亦同、）

集解、冬瓜園圃多種之、正月下種、三月生苗引蔓、葉大團而有尖、略似諸瓜而大者也、莖葉有刺毛、六七

月開黃花、此亦大於諸瓜、結實大者徑尺餘、長一二尺、嫩時綠色有毛、老則蒼色著粉、霜後尤白、其皮厚硬、其肉肥碧、其瓤白虛如絮、其核亦白、在碧白瓤中而成列、其肉可為蔬食、近代霜後采之、煮熟而殖、然不為上饌、民間野人之所用、或有冬種者、至明年而肥大也、世俗所謂治久痢、未詳之、

〔和漢三才圖會百蓏果〕冬瓜　白瓜　水芝　地芝　和名加毛宇利、或用字音呼、○中略

按冬瓜處處皆有、攝州西成郡多出之、藏著之以無瘢者、置棚上及煤行處、至翌夏亦不敗、如有瘢者不經旬而腐、

〔重修本草綱目啓蒙二十蓏菜〕冬瓜　カモウリ　トウガン防州　トンガ伊州 ○中略

外皮ニ白毛アリ、故ニカモウリト云、カモハ氈ノコトナリト、大和本草ニ云リ、京師ノ產ハ皆形圓ニシテ西瓜ノ如シ、他州ノ者ハ多クハ形長シ、伊州ニハ長サ三尺餘ナルアリ、方言江戸トウガント云、○中略凡ソ冬瓜ハ遲ク熟シテ霜ヲ經ル者ヲ良トス、故ニ冬瓜ト名ク、然ルニ今ハ早ク種、早ク採ルヲ尚ブ、故ニ六七月ニ多ク出ス、名實ニカナハズ、

增附方ニ、橘氏家藏方ヲ引テ、十種ノ水氣ヲ治スルニ、大冬瓜一枚蓋ヲ切キサナゴヲ去リ、蓋ヲ合シ、ソノ合シタル所ヲ封ジクヽリテ、日ニ乾シ、糯糠ニ大麓ノ內ニテ煨シ、火盡テ後取出シ、焙乾シテ末トシ、梧子ノ大サニ丸シ、每服七十丸、冬瓜子ノ煎汁ニテ日ニ三服ス、此方神効アリ、京師ノ一醫秘方トシテ、專ラ水病ヲ治ス、余○小野職博曾テ水腫在蓐トシテ愈ヘズ、已ニ喘滿氣急スル者ニ、冬瓜一味ヲ黑燒ニシテ服セシム、數十日ヲ經テ全癒ヲ得タリ、

〔長崎聞見錄一〕唐冬瓜

唐種の冬瓜は、唐人館内杯に、唐人自ら作りて食料とするなり、此を見るに到つて長大也、小口切にして差わたし壹尺四五寸ばかり、其長三尺四寸計、日本にて作る冬瓜には、綠色の上白粉あり、彼地の冬瓜は白粉なき也、

〔當世武野俗談〕冬瓜仁右衞門
本所吉田町に御小性組御番衆象松又四郎と申、御旗本衆の地を借りて、立派に普請をして住居し、大勢家來召仕、子分方多く有て、其土地は云ふに不ㇾ及、吉原境町すべて遊所にて、悉く人に用ひられ、名を得たる所の仁右衞門といふもの有、かれが異名を冬瓜と呼、其根元は、此者本所邊旗本屋敷の中間奉公して居たりしが、癱毒を煩ひ、中年より骨折奉公不ㇾ成して、本所三ッ目通輕き御家人衆の寄合辻番の番人に入けり、此もの辻番〻又〻出て、少〻癱毒本復して商をしけるに、西瓜のたち賣〻思ひ付て、冬瓜のたち賣一文づゝ、裏店住居かるき人〻の、一朝の汁の實と成程づつ賣ける、此たち賣大にはやり、わづか成事なれども、是に利を得て、少〻元手つきけり、茲を以て今とても、冬瓜仁右衞門と呼ばれて、其名高きこと甚し、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕卑うして便利なる物は、冬瓜のきり賣なり、武野俗談に、本所三つ目寄合、辻番のものに、仁右衞門といへる者、西瓜の裁賣より思ひ付て、冬瓜をたち賣にして、一錢づゝに裏屋の者に賣たり、大にはやりて冬瓜仁右衞門と異名をとりしとなむ、これ元文寬保ごろの事なり、又或人語りけるは淺草芜町に大和屋某といふ者、文魚とかいひて、人の知たる放蕩ものあり、その邊に冬瓜のきり賣來りければ、其荷へるを殘らず買ひていひけるやう、此邊にかゝる物もてくるは土地の耻なり、重ねて賣に來ば、其儘にはおかじとて歸したりとか、いと〳〵おこがまし、

瓜類塲

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃
營早瓜一段、種子四合五勺、總單功卌六人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、塲畦溝三人、糞七十五擔、運功十二人半、位三百六十座、踏位一人、下子半人、二月拂虫十二人、壅并芸三遍、第一遍五人、三月上第二遍四人、三月下第三遍三人、四月
營晩瓜一段、種子四合五勺、總單功卅五人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、塲

畦溝三人、位三百六十座、蹬位一人、下子牛人、壅一人、三度 芸三遍、第一遍十人、三月 第二遍八人、四月 第三遍七人。五月

〔農業全書三〕瓜之類（甜瓜、冬瓜、絲瓜、胡瓜、冬瓜・西瓜・南瓜・越瓜・壺瓜・）

瓜に大小あり、小き物甘く、大きなる物淡し、甜瓜甘瓜と云、唐瓜といふ。〇中略 種子を收め置く事は、さかりの熟瓜の味勝れたるを、あとさきを切さり中程の實ばかりを取て、段々灰にまぜ、多くあつめをきて後、ゆかきに入、清く洗ひ、粘り氣少もなく成たる時、浮きたるをきり、なる程よく干して、布の袋か箱に入おさめ置べし、若其まゝ、あとさきのたねも共にうゆるか、本なり、又は末なりのたねを用れば、必たねがはりする物なれば、中なりの味よく、形よきをもちゆべし、さきの方の子は瓜短し、本の方の子は、口ゆがみ曲りて細し、又種子を收る法、瓜を食して勝れて、甜きをゑらび、すりぬかにまぜて、日に干し晒して、扨てぬかと瓤を篩去て、おさめ置もよし、瓜を植る地の事、黒地赤土黄色の、少は沙交りて光色ありて、粘り氣すくなきがよし、さのみ肥たるを好ず、土性よく强く濕氣はなくして、旱に水を引に便りよきをゑらぶべし、土地肥和らかにして、ふくやかなるは、よくさかへふとるといへども、味よからず、瓜を作るべき地は、前年に小豆を作りたるよし、其次は黍跡もよし、多より耕し、雪霜にさらし、幾度もうちこなし置べし。〇中略 さて根のわきをたびたび打こなし、心葉出る時、四五寸わきに、手のはらほど少しながく穴をなし、但深さ二寸餘り、其中へ濃糞のよく熟したるを、一盃入干付置、其後やがて土をおほひ、又五七日も間を置て、右の所より五六寸も違のけて穴を廣くし、糞を入、土を覆ふこと前のごとくし、又其後も段々かくのごとくすべし、凡かやうに、四方に穴をなし、先四度入るを中分とするなり、又糞は二番までは桶糞を用ひ、其後は廻りを丸くほりまはし、油糟を入べし、かくのごとくする事、二三遍なれば、瓜の味勝れてよき物なり、惣じて糞を入るには、うへ物のわき根のさきと、こゑの氣と五六日も過て

後行合心得するものなり、急に根の上にかくれば、却て痛みくせ付物なり、さきを留る事は、三葉四葉の時しんをつみさるべし、長くのばすべからず、さて葉の間より出る枝を、四方八方へ手くばりするなり、其蔓又四五葉の付たる時、各さきを摘去るべし、此度出るつるになる瓜よし、もとの一番づるには、よき瓜はならぬ物なり、枝ごとに二つばかり瓜のなり花あるを見て、又さきを留るもよし、とかく初め終り糸のごときつるの出るを見て、其後梢をつみ去べし、凡枝ごとに葉をつくる事、四つ五つには過べからず、若し又なり花もなき細きよはきつる間に出るをば、土ぎはより切て捨べし、此つるにはたとひなり付ても、用に立べからず、其まゝ置ば是に精ぬけて、殘るつるまで妨る物なり、惣じて瓜は一區に一本づゝ立置くべしといへども、畦の廣さと、間の遠近によりて二本宛、或一まちは一本、一まちには二本をきたるもよし、大かたの畦にては、二本の上は必をくべからず、つるつよくしてうすきが、枝ごとによくなる物なり、じげくもつれあひぬれば、いか程こやし手入をしても、よき瓜ならぬ物なり、其上永雨旱には早く痛む物なれば、つるのしげからずすくやかにて、なり付たるは、瓜のなりよく疵なく、十分熟し落るなり、瓜の多くなる事を好みて、つる數多く生立をきたるは、必うるはしくなりのよき瓜はならぬ物なり〇中略又東寺鳥羽にて瓜を作る法、たねを取をく事右に同じ、うゆる時分の事、二月の中より十日ばかりを定る時とするといへども、其年の寒暖又は霜の考へをして、少のさしひきはあるべし、畦作り、横はゞ一間、溝一尺餘、横一間の内、兩方の端に少よせて、竪筋をかき、麥を蒔置、中のおきだるところを冬より深く打返しさらし、春に成てよくこなし、三尺づゝ間を置て、さし渡し五六寸に小まちを作り、手にて少たゝき付、わきの地よりは少高く成て、水たまりなきほどにして、其小區の中に、たねを十粒ばかりばらりと蒔、其上に片手一盃ほど沙土をおほひ、生そろひて、少づゝ間引、心葉二つ出るまで、段々間引て、心葉ふとく成てより、中にて性の強く大きくなるを一本をきて、殘

は皆ぬき捨べし。右は上方にて上手の作る法也、よのつれの手入にては、一くろに瓜二三本うゆべし。○中略

菜瓜

其作りやう、甘瓜に同じ。

越瓜

越瓜又白瓜とも云。○中略 地のこしらへ瓜作り甘瓜に同じ、二月上旬早くうへて、四月取精に漬、其外菜の絶間に出来て、取分賞翫なり、色白きゆへ、是を古来白瓜と云ならはせり、南向の暖かなる所をえらびて、一しほ早く作るべし。○中略

黄瓜

黄瓜又の名は胡瓜。○中略 うへ様大かた菜園の畦りなど、多より地をこしらへをき、種子を下す事、正月晦日、又は二月も三月も晦日にうへて、土を少おほひ、或灰糞をおほひたるは猶よし、但きうりは早きを専にする物なれば、なるほど早くうゆべし、又所によりて多く作る事は、甘瓜のごとく畦うへにし、こやしをよくすれば、過分になるものなり、さきをとめ手くばり、其外甘瓜にかはる事なし、たねにをく物は中なりよし、本なりは手少なし、うへておほくならず。

冬瓜

冬瓜うゆる法、灰に小便をうちしめし置て、是を泥とかきまぜ、地に厚くしき、はゞ二尺ばかりに筋を切、間四五寸ほどに、一粒づゝ蒔、たねの上にも又右の灰ごえを厚くおほひ、水をそゝぎ置て、其後又水糞をそそぐべし、乾く時は水をそゝぎたるよし、芽立灰をいたゞきて出るを見て、灰をもみくだき、根のわきに覆ふべし、其後も糞水をそゝぎ、三月中旬苗ふとく成て移しうゆべし、うゆる地の事、畦のはゞ五尺ばかりに作り、又其間を四五尺をきて穴を作り、肥土を入置、雨を見て一本づゝ、土をつけて、ほり取てうゆべし、灰糞を多く置、水ごゑは度々そゝぐべし、さてつるながく出るを、棚をか

瓜利用

き引上をくべし、又地には、ゝせたるもよし、是も柴などを立て手をとらすべし、凡黃瓜とかはる事なし、

〔宜禁本草乾五菜〕熟瓜　甘寒、水沈者不可食、雙蔕者殺人、多食下痢貧者多食、至深秋作痢爲難治、除瓢食不害人、若覺多卽入水漬卽消、止渴利尿、通三焦氣、多食陰下濕痒、生瘡、動宿冷、癥瘕人不可食、

瓜蔕（クワテイ）　苦寒有毒、吐痰用之、主面目四肢浮腫、下水殺虫、去鼻中息肉、療黃疸、早青者尤甚、去皮用蔕約半寸許暴乾

胡瓜（キウリ）　甘寒有毒、不可多食、動寒熱、多瘧病、發痰氣虛熱、發百病瘡疥、損陰血脈氣、發脚氣、天行後不可食、小兒切忌、滑中生疳虫、不與醋同食、葉苦平、主小兒閃癖、一歲服一葉、生挼汁服、

越瓜（シロウリ）　甘寒、小者可糟藏用、長青白色、不可多食、動氣、令人虛弱、不能行、不益小兒、爲灰傅口吻瘡陰瘡、利腸胃、去煩熱、解酒毒、止渴、瀉熱氣、利尿、心鏡云、越瓜鮓久食益腸胃、和飯作鮓並藏得、

〔延喜式五齋宮〕七月節九月亦同官人已下料、鮭廿隻、熟瓜一百顆、

〔延喜式三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、○中略注借別日菓菜料、○中略瓜糟漬瓜茬裹各一顆、味醤漬糟漬冬瓜、各以一顆充三口、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略瓜五顆、醤漬糟漬好物羹生等料各一顆、○中略菜、冬瓜漬菜醤漬糟漬料、各以一顆充十口、瓢長二尺、生菜料以一顆充廿日、瓢長一尺、

〔延喜式三十九內膳〕漬年料雜菜

瓜八石、料鹽四斗八升糟漬瓜九斗、料鹽一斗九升八合、汁糟一斗九升八合、滓醤二斗七升、醤二斗七升、醤漬瓜九斗、料鹽醤滓醤各一斗九升八合糟漬冬瓜一石、料鹽二斗二升、汁糟四斗六升、醤漬冬瓜四斗、料鹽八升八合、醤滓醤未醤各一斗六升八合、○中略　右漬秋菜料

〔北山抄二年中要抄〕七月

相撲召合事○中略

後日(略)○中給王卿饌、如昨、王卿移候南殿、此間撤張筵、近衞次將等、以酒熟瓜給王卿、

〔江家次第二十〕新任大臣大饗

七八獻主人勸盃、(略)○中王卿著穩座、(敷二客座西廂於第三間簀子敷一)肴物、(當月新味甘瓜等云云)

〔侍中群要十〕甘瓜氷魚給侍從所使

凡賜甘瓜氷魚侍從所、以侍臣爲大飲者爲使、遞來奏見參、(日奏也)

〔後水尾院當時年中行事七上月〕七日、夕方御祝に初獻(そろそろ)御汁を供す、土器に少し御汁をかけられて後、少しづゝ三口めす、(略)○中次に御盃參る、二獻(御まな)三獻(うかりら)を供す、女中御前のをしきに、半そろそろなわるゝ、案へい入てたゞ、三獻の唐瓜も御はんに入てもて出て、一つゞゝたぶ、

〔張州府志十九中島郡〕產物　嫩甜瓜、出今村、不用熟瓜、採其嫩瓜、糟醃、風味殊美也、四方貴物之、

〔倭訓栞中編四〕かりもり　瓜の末なりをいふ尾張に今もさいへり、(略)○中伊勢にてはかりもぎといへり、

〔延喜式三十七典藥〕遣諸蕃使

渤海使十七種(略)○中藥草八十種、(略)○中瓜蒂四升、

諸國進年料雜藥

伊豆國十八種、(略)○中瓜蒂五兩、相模國卅二種、(略)○中瓜蒂二兩、下總國卅六種、(略)○中瓜蒂三兩、

〔續江戶砂子一〕江府名產(幷近在近國)

暑に傷られて瘀血惡痢を病て痛むに、水を以甜瓜をひたし、數枚食はしめて愈し事、奇效良方に見えたり、

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、(略)○中生瓜卅顆、(准二三升一、自二五月一迄二八月一所レ進、)

五月五日、山科園進早瓜一捧、若不實者、獻花根、

〈年中行事秘抄五月〉内膳司供早瓜事

差内豎遣常住寺、件早瓜山城國御園所供也、而件御園、桓武天皇所建給也、又常住寺彼御願也、仍遣之歟、

〈類聚國史三十三帝王〉延暦十一年十月丁未、停相模國獻橘、伊豫國獻瓜、以路遠也、

〈殿中申次記〉從永正十三丙子至同十七庚辰歳記錄事、

六月二日

一初瓜　一籠（禁裏樣へ參）　佐々木中務少輔入道

此三ヶ所（覆盆子樣漬物瓜）式日不定

十八日

一江瓜　一籠　例年進上之　佐々木近江守

一阿古陀　五籠　例年進上之　八幡田中

一五色　二籠　例年進上之　通照心院

七月朔日

一瓜　十籠　佐々木近江守

九日

一江瓜　百籠　佐々木中務少輔入道〇中略

一江瓜　百籠　佐々木近江守

一瓜　三荷　例年進上之　赤松兵部少輔

〈年中恆例記〉五月四日

初瓜進上、右京大夫殿、同右馬頭、伊勢守、日不定、初度は禁裏樣へ參候也、次鹿苑院へ參、

干瓜幷香子梅ひぎなど、御所々々より參、月日不定、

十六日

瓜通照院進上之、月日不定、

六月廿四日

五月六月七月中、三籠瓜、次に三籠、次に十籠、次三十籠、次五十籠、次百籠、佐々木六角進上之

瓜日吉樹下進上之、日不定、　瓜水主備前守進上之、日不定、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年六月廿六日、しやうぐん(○徳川家康)よりうりのひげこ三つ參る、

〔寛政四年武鑑〕尾張大納言宗睦卿(○尾張名古屋)　時獻上(六七月內)上條瓜

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

六月(暑中之獻上ニ而月ニ入ル)

一熟瓜　青山下野守

一熟瓜(暑中)　三宅肥後守

一熟瓜　加納遠江守

〔執政所抄下七月〕七日

乞巧奠　供物(○中略)　瓜(以白瓜瓮鉢盛之、一盃、)

〔續々修東大寺正倉院文書四十六秩六高書〕藍園熟瓜等送進文

菜○苽○壹伯貳拾果

天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔類聚雜要抄一〕宇治平等院御幸御膳(元永元年九月廿四日、大殿(藤原忠實)被下御日記定、)

三寸五分様器(○中略)

瓜產地

生物五坏古布、白瓜、黑瓜、白根、薑、〇中略　御湯津ケ昆布、和布、干蕪、芹、中略

〔梵舜日記〕慶長二年六月廿一日、淨土寺百姓中へ樽廿五、盃綜廿五、白瓜十遣之、田地水爲禮也、

〔鹿苑日錄〕慶長八年五月十三日、自朝晴天、未明ニ赴尊勝院、以心西堂光賀、寺志州、同牛左衞門尉、玄仍、永旬、藏人、朝之會席、口汁糟糖ニ蔓草、白瓜、煎昆布、〇中略　俗客者本膳汁、同白瓜、同煎昆布ノ處ニ、シタ引二切、二ノ汁ニ筝ニ加鳥、

〔後水尾院當時年中行事〕上五月晦日、〇中略　御三間のたれたる簾上げ渡せば、御引直衣めさしまして御座につかしめ給ひぬ、〇中略　先御盃、次に初獻、白瓜なすびを供す、御盃參りて女中に通る、次に二獻南瓜を供じて巳後男をめさる、公卿はすのこの疊につく、殿上人は公卿の座の後に候す、次に藏人瓜をもて出す、各一體をたぶ、公卿は座ながら、殿上人は座末にて、一人宛召出してたぶ、

〔毛吹草〕三山城　九條眞桑　鳥羽瓜　大和　梵天瓜　攝津　木津瓜　和泉　紬松瓜

武藏　江戸葵瓜葵ノ御紋有ト云　美濃　眞桑瓜根本ト云

〔食物知新〕首日域諸國名產

果瓜　眞桑瓜濃州　木津瓜攝州　梵天瓜和州　葵瓜武州　鳴子瓜同上　天野瓜越後

〔和漢三才圖會〕九十甜瓜

按甜瓜出於濃州眞桑村者良、故總名稱眞桑、武州川越、尾州靑鷺、洛之東寺爲上、駿州府中、羽州七浦攝州氷野、泉州堺紬松皆得名、參州銀甜瓜、白色而有銀筋、加州田中、和州梵田白色也、

〔雍州府志〕六土產甜瓜　倭俗專賞之、所々有之、然東寺邊其味爲勝、世稱東寺眞桑、然其種每年用美濃國眞桑瓜之類核也、故元稱眞桑瓜、至今略瓜字直謂眞桑、上賀茂邊所產、稱賀茂田瓜、其形肥大、然其味劣、凡東寺邊爲腴田、依近京師、不淨之穢水流委溝澮、故乎、所作之瓜、土人自擇其良者、貼黑印於瓜皮面而賣之、是謂判瓜、倭俗印稱印判、其風味不及擇之、倭俗於瓜十箇謂一頭、近世西郊川勝寺村谷

川甜瓜風味爲勝、又和州南部梵天瓜、泉州界鱸松瓜亦在京師、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略得萬民追從、宅常貯集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略大和苽、

〔異制庭訓往來〕菓子者可爲荔枝龍眼生栗候也、夏者唐瓜、大和瓜、白瓜、杏、梅、李、桃、水茄子、芡菱也、

〔國花萬葉記三大和〕大和國中名物之出所

梵天瓜外白色内黃色

〔浪花の風〕眞桑瓜もあれども、大にして鐵まくはと呼ぶものにて、味ひよろしからず、江戸の眞桑に類せし黃色なるもの、偶には見ることあれども稀なり、鳴子瓜の如きものは、絕てあることなし、

〔張州府志二十四海東郡〕土產

上條瓜 出上條村、至今每年供御、爲尾州名物、里老傳曰、慶長十四年酉夏、東照神祖命令獻之、時寺西藤左衞門爲奉行、其吏竹腰又兵衞、高瀨又五郎指揮之、如濃州獻眞桑瓜例、以甜瓜十五顆爲一筐、以四筐爲一擔、凡十擔獻之駿府、其後每年以爲式、賜證文二十通、元和四年午夏、藤田民部爲奉行、其吏州崇十右衞門指揮之、先以甜瓜二擔獻之江戶、六月十五日大雨水沒田園、瓜悉潰敗、故以證文十八通返上、爾後不賜證文、從瓜有無驛遞獻之、每獻以瓜十顆充米一升、且復其租、寬永三年子夏原田右衞門再爲奉行、然以上條村爲副邑、不敢擾百姓困窮請吏、翌五年原田諭里人云、移租仍舊、以瓜充米、及雇役遞傳一切罷之、里人從之、其后獻瓜之事、或有或無、後年但以瓜進官府、驛遞獻之東都、但賜瓜價不復租稅、

〔國花萬葉記八駿河〕駿河國中名物出所之部

府中眞瓜

〔續江戶砂子一〕江府名產井近在近國

鳴。子。瓜。　甜瓜也　柏木村鳴子宿　瓜の名物也　江戸より三里程

府。中。瓜。　同　甲州道高井土の先、　名物　江戸より六里程

鳴子、牟禮、石原、谷保、(ヤホ)俗ニ發ト云國分、水神、府中是等を西山と稱す、此所々江府より西にあたる、山瓜と稱して上品なり、

又豆。州。香貫、(カヌキ)志下、(シトヲ)猪濱、蛇塚、横島、下。總。の柏井、御門、折立、道逸、中澤等より出るを東と云、西山より稱美うすし、その外目黒、千束、旗ヶ谷、喜多見、金、渡田、綱島、道澤、矢口、鶴見、八幡塚等よりも出る、これらを南といふ也、是も味ひ西山に劣れり、又江府へ一番に出る瓜は、駿州安西、井宮、河原也、

〔圖花萬葉記美濃十〕美。濃。國郡名物出所之部

眞。桑。瓜。(俗に眞桑瓜と云、眞桑村本也、)

〔安齋隨筆後編十五〕眞桑瓜　本名甜瓜、(カンクワ)眞桑瓜は美濃國の地名也、其地の瓜名產也、

〔貞丈雜記飮食六〕一夏食する瓜は、甜瓜(カンクハ)と云物也、黄色にてもえぎ色の細きたて筋あり、古代はほぞちと云し也、今江戸にてまくはうりと云也、美濃の國眞桑と云所より出る瓜名物也、他國他所にて作り出すを、おしなべて眞桑瓜と云は無理なれども、今江戸にてはすべてまくはうりといふ也、

〔玉勝間八〕眞桑瓜

御湯殿のうへの日記に、天正三年六月廿九日のぶながより、みのゝまくはと申す名所のうりとて、二こしん上とあり、眞桑村は本巣郡也、

〔秇苑日涉十二〕眞瓜

甜瓜俗謂二之眞瓜(マクワ)一、朝鮮郷名也、見二村家急救方一、美濃有二眞瓜村一、其地所レ產、香味異常、開レ香如レ有二負擔過一レ門者、清異錄曰、瓜最盛者、無レ踰二齊趙一、車擔列レ市、道路濃香、故彼人云、未レ至二舌交一、先以レ鼻選、眞瓜村所レ產、亦鼻

還之種耳、在昔三韓朝貢及歸化者、絡繹不絶、是以三韓鄕名、傳至于今者頗多、眞瓜寄祖(詳于味噌條)之類是也、

〔奥羽觀蹟聞老志 三 宮城郡土産〕熟瓜 以名取郡北口村所產爲佳品、有白瓜、謂之梵天(俗曰幣帛、梵天、取其潔清純白、)有靑碧而黃筋者、謂之筋好瓜、近年以他邦種植之、往時有名護屋種、爾後有淺碧瓜、近歲用伊具郡佐倉種、其色靑黑而有綠筋細點者、其味有破霜嚼氷之美、曰之鶯都、又有黃色靑筋而短小者、謂之狀鈴、尤好瓜也、

〔國花萬葉記 十三 出雲〕出雲國中名物出所

瓜(のき村と云所より出る)

〔毛吹草 三〕山城 八條淺瓜 靑瓜 狛越瓜

〔雍州府志 六 土產〕越瓜 越瓜諸處皆有、特山城狛邊多種之、賣京師、此外茄子角豆生薑等物亦多出自斯所、凡瓜茄子等早熟者、俗謂初物、皆出自斯邊、俗此邊專謂山城、此地向陽、故土地和暖、依之諸物早生早實、然至越瓜、風味不及賀茂河東吉田邊之所種、泉州府志、靑瓜質長而色白、或名白瓜、或稱菜瓜云云、依此則越瓜或稱靑瓜、又稱靑瓜、又一種有靑瓜、其形狀小而味又甘美也、

〔拾遺和歌集 九 雜〕三位國章、ちひさき瓜を扇にをきて、藤原かねのりにもたせて、大納言朝光が、兵衞佐に侍りける時、つかはしたりければ、

をとにきくこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心かな

返し

さだめなくなるなりうりのつら見てもたちやよりこむこまのすきもの

〔浪花の風〕瓜の類、白瓜といふもの大きなるもの多し、冬瓜の如く煮て食ひ、又は漬物とす、丸づけと唱ふるもの絶てなし、夫故雷り干といへるもの坏製することなし、予(久須美祐雋)は香のものを好

瓜雜載

む故に、丸づけに替て、白瓜にて雷り干を作るに、柔らかにして至極よろし、

〔續江戸砂子 一〕江府名産（并近在近國）

田畑瓜　越瓜也　田畑村、江府より二里計丑寅にあたる、　大サ尺餘、肉厚く中子すくなし、色青磁也、糟に藏して上品なり、

〔塵尻 三十七〕或曰、俗禮に瓜を貴人の前にて進むる時、其皮を去て先上のかたを横に薄く輪切にして、是を捨侍るは如何なるゆゑと問へども、さだかならずと、予（〇天野信景）曰、是禮の玉藻に見えはべる、曰瓜祭上環、食中、棄所操と、註に先神に進めて後食ふ、瓜は昔ことに重んじ侍る故、先一輪を進めて後、君にも奉る古法也、

〔南畝莠言 上〕世俗瓜を割に、上の方をきりて先くらふを、鬼をするといへり、禮記玉藻に、瓜祭上環、食中、棄所操とみえたり、鬼神をまつる事なれば、をにのものといひたるなるべし、又天子諸侯大夫庶人の、瓜をさく禮も、曲禮に見え侍る、

〔禮記註疏 三十 玉藻〕瓜祭上環、食中、棄所操、（註、上環頭忖也、）

〔貞丈雜記 七 膳部〕一瓜を參らするに、うりさしをそへて參らすること、條々聞書などに見えたり、うりさしとは、楊枝のごとく成物也、串を五寸二三分に丸くけづり、一方にかど有べし、めんを取るべしと、三議一統にみえたり、（瓜はウリと書べし、和名抄のかな也、俗にフリと書はあやまり也、）

〔公方樣正月御事始之記〕一うりをけづりて、人の給候時、そとたべてそばに置候事、くわんたいなる事にて候、そのうりあしく共、みなくふ事也、

〔延喜式 十七 内匠〕瓜刀子廿枚（刃長五寸、毎年五月一日、七月一日開度、盛楊筥一合進之、其筥用年料内、）料、堅鐵大六斤四兩、膠小十二兩、木賊小八兩、伊豫砥二顆、檜小半村（箱料）紙十張、（敷刀子筥料）和炭三斛、單功七十五人、（工七十人、夫五人、）

〔侍中群要 八〕諸使事

賜佐伯侍從所使殿上五位使高戸者六

〔續修東大寺正倉院文書二十六〕西市庄解　申進上雜物事

生瓜參佰陸拾果　　直壹佰捌拾文

大七十果別一文　中百五十果一文充二果、　小百卌果一文充四果、〇中略

右依今月十日符、買取進上如件、以解、

天平寶字二年八月十二日　　　　布勢足人

〔日本書紀推古二十二〕二十五年六月、出雲國言、於神戸郡有瓜、大如缶、

〔萬葉集五雜歌〕思子等歌一首并序〇序略

宇利波米婆、胡藤母意母保由、久利波米婆、麻斯提斯農波由、〇下略

〔小大君集〕ちいさきうりのきなるを、おなじ色のかみにつゝみて、あさみつの少將のがりやるを、きゝたがへて、よりひらにとらせたれば、

雲のたつうりふの里のをみなべしくちなし色はくひぞわづらふ

こゝろときめきして、いひたりしかひなければ、かへしもせで、とりかへして、はじめの人のがりやるとて、われかとないひそといひければ、

ありどころこまかにいづらしらうりのつらを尋ねて我ならさなん、

左近のきみにとのたまへりしかば、われとしられにけりとねたくて、

うりどころこゝにはあらじ山城のこまかにしらぬ人なたづねそ

〔今昔物語二十八〕以外術被盗食瓜語第四十

今昔、七月許ニ、大和ノ國ヨリ多ノ馬共ニ瓜ヲ負セ列テ、下衆共多ク京ヘ上ケルニ、宇治ノ北ニ不成ヌ柿ノ木ト云フ木アリ、其木ノ下ノ木影ニ、此ノ下衆共皆留リ居テ、瓜ノ籠共ヲモ皆馬ヨリ下シ

ナドシテ、息居テ冷ケル程ニ、私ニ此ノ下衆共ノ具シタリケル瓜共ノ有ケルヲ、少々取出テ切リ食ナドシケルニ、其邊ニ有ケル者ニヤ有ラム、年極ク老タル翁ノ、帷ニ中ヲ結ヒテ、平足駄ヲ履テ、杖ヲ突テ出來テ、此ノ瓜食フ下衆共ノ傍ニ居テ、力弱氣ニ扇打仕ヒテ、此ノ瓜食フヲマモラヒ居タリ、暫許護テ翁ノ云タ、其ノ瓜一ツ我レニ食ハセ給ヒ、喉乾テ術无シト、瓜ノ下衆共ノ云ク、此ノ瓜ハ皆己等ガ私物ニハ非ズ、糸惜サニ一ツヲモ可進ケレドモ、人ノ京ニ遣ス物ナレバ、否不食マジキ也ト、翁ノ云ク、情不座ザリケル主達カナ、年老タル者ヲバ哀レト云フコソ吉キコトナレ、然バレ何ニ得サセ給フ、然ラバ翁瓜ヲ作テ食ハムト云ヘバ、此ノ下衆共戯言ヲ云フナメリト、可咲ト思テ咲ヒ合タルニ、翁傍ニ木ノ端ノ有ルヲ取テ、居タル傍ノ地ヲ掘ツヽ、畠ノ様ニ成シツ、其ノ後ニ此ノ下衆共、何態ヲ此レハ爲ルゾト見レバ、此ノ食ヒ散シタル瓜ノ核共ヲ取リ集メテ、此ノ習シタル地ニ植ツ、其後チ程モ无ク、其ノ種瓜ニテ二葉ニテ生出タリ、此ノ下衆共此レヲ見テ、奇異ト思テ見ル程、其ノ二葉ノ瓜只生ヒニ生テ這絡ヌ、只繁リニ繁テ、花榮テ瓜成ヌ、其ノ瓜只大キニ成テ皆微妙キ瓜ニ熟シヌ、其ノ時ニ此ノ下衆共此レヲ見テ、此ハ神ナドニヤ有ラムト、恐テ思フ程ニ、翁此ノ瓜ヲ取テ食ヒテ、此ノ下衆共ニ云ク、主達ノ不食ザリツル瓜ハ、此ク瓜作リ出シテ食ト云テ、下衆共ニモ皆食ハス、瓜多カリケレバ、道行ク者共ヲモ呼ビツヽ食ハスレバ、喜テ食ヒケリ、食畢ツレバ、翁今ハ罷ナムト云テ立チ去ヌ、行方ヲ不知ラズ、其後下衆共馬ニ瓜ヲ負セテ行カムトテ見ルニ、籠ハ有テ其ノ内ノ瓜一ツモ无シ、其ノ時ニ下衆共手ヲ打テ、奇異ガルコト无限シ、早ウ翁ノ籠ノ瓜ヲ取リ出シケルヲ、我等ガ目ヲ暗マシテ不見セザリケル也ケリト知テ、嫉ガリケレドモ、翁行ケム方ヲ不知ズシテ、更ニ甲斐无クテ、皆大和ニ返テケリ、道行ケル者共此ヲ見テ、且ハ奇ミ且ハ咲ヒケリ、下衆共瓜ヲ不惜ズシテ、二ツ三ツニテモ翁ニ食セタラマシカバ、皆ハ不被取ザラマシ、惜ミケルヲ、翁モ憾テ此モシタルナメリ、亦變化ノ者ナドニテモヤ有ケム、其ノ

後ナ其ノ翁ヲ、遂ニ誰人ト不知デ止ニケリトナム語リ傳ヘタルト也、

〔今昔物語二十九〕幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一

今昔□ノ□ト云フ者有ケリ、夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、此レハ難有キ物ナレバ、夕サリ方返來テ、人許ヘ遣ラムト云テ、十菓計ヲ厨子ニ入レテ、納メ置テ出ヅトテ云ク、努々此ノ瓜不可取ズト云置テ出ヌル後ニ、七八歳許ナル男子ノ厨子ヲ開テ、瓜一菓ヲ取テ食テケリ、夕サリ方祖返テ、厨子ヲ開テ瓜ヲ見ルニ、一菓失ニケリ、然レバ又此ノ瓜一菓失ニケリ、此ハ誰ガ取タルゾト云ヘバ、家ノ者共、我モ不取ズ我モ不取ズト諍合タレバ、正シク此レハ此ノ家ノ人ノ爲態也、外ヨリ人來テ可取キニ非ズト云テ、半无タ責問フ時ニ、上ニ仕ヒケル女ノ云ク、壹見候ツレバ、阿字丸コソ御厨子ヲ開テ、瓜一ツヲ取リ出テ食ツレト、祖此レヲ聞テ、此モ彼モ不云テ、其ノ町ニ住ケル長シキ人々ヲ數呼集メケリ、家ノ内ノ上下ノ男女此レヲ見テ、此ハ何ノ故ニ此ハ呼給フニカ有ラムト思ヒ合タル程ニ、鄕ノ人共被呼テ皆來ヌ、其ノ時ニ父、其ノ瓜取タル兒ヲ永ク不孝シテ、此ノ人々ノ判ヲ取ル也ケリ、然レバ判スル人共、此ハ何ナルコトゾト問ヘバ、只然思フ樣ノ侍ル也ト云テ、皆判ヲ取ツ、家ノ内ノ者共ハ此ヲ見テ、此許ノ瓜一菓ニ依テ、子ヲ不孝シ可給キニ非ズ、糸物狂ハシキ事カナト云ヘドモ、外ノ人ハ何カハ可爲キ、母ハタ可云キニモ非ズ、極タ惜ミ云ケレドモ、父由无キ事ナ不云ソト云テ、耳ニモ不聞入レズシテ止ニケリ、〇下略

〔古今著聞集十八飲食〕あやしげなるけすおとこの、禪林寺僧正に、瓜を四奉りたりければ、

凡夫やつ四果のうりをぞえさせたりひじりのつらにならんと思ふか

人々あつまりて、瓜をくいける所にて、或人萬法はみな空なりと云法問を出したりけるを聞て、寂蓮法師よみ侍ける、

なにもみなくうになるべき物ならばいざこのうりにかは〇は原脱、今據一本補、ものこさじ、

〔空華日工集 一〕貞治五年、七夕、無外大照五六人來遊、勝句、句未央、聽賣瓜聲、乃命侍衣令買之、少頃出謂、瓜太半熟損、不能取之、勿吃、客去、侍衣曰、初取若以沾具、亦無賈可買瓜、是以謂之熟損、余咲曰、眞个薄福住山矣、

〔翰林葫蘆集 一〕聞昔内園春進瓜、華清風雨野人家、温湯一掬山河潰、萬里橋西二月花、　二月進瓜

〔太閤記 十五〕秀吉公異形の御出立にて御遊興之事

文祿三年六月廿八日之事なるに、瓜畑などひろく作りなしたる所におゐて、瓜屋旅籠屋を、いかにも麁相にいとなみ、瓜あき人のまねをなされつゝ、客をも慰め、又御心をも慰み給ひつゝ、長陣の勞を補ひ給ひしなり、御出立は柿帷をめされ、わらのこしみの黒き頭巾、菅笠を御肩に物し、味よしの瓜めされ候へ〳〵と有しは、勝商人に逢ふ所もなふて、つぎ〳〵しく有しなり、○中略

一丹波中納言秀勝は、漬物瓜をになふて、かりもりの瓜、瓜めせ〳〵とふつゝかに、のゝしり給ひしが、ぶてうほうに有しなり、げにも若きは何事も無功に有よなど思はれて、年はよるべき物なり、いやよるまじき物でも有と云人も多かりしなり、

南瓜名稱

〔和爾雅 七菜蔬〕南瓜(ボウブラ)

〔鹽尻 七十一〕南瓜は回紇の瓜也、同じ物に亦かぼちやといふあり、

〔物類稱呼 三生植〕南瓜ぼうふら　西國にてぼうふら、備前にてさつまゆふがほ、津國にてなんきん、東上總にてとうぐはん、大坂にてなんきんうり、又ぼうぶら、江戸にて先年はぼうふらといひ、今はかぼちやと云、

〔倭訓栞 後編五加〕かぼちや　東埔寨と譯す、もと暹邏の内今別國と成とも、南天竺の内也とも、眞臘國也ともいへり、かすたとも云とぞ、慶長の頃より通せしともいへり、瓜の類にいふは、此國より出たる種なるべし、よて群芳譜に番南瓜と見えたり、

〔大和本草八蔬〕アコダ瓜　京都ニ多シ、南瓜ニ似テ小ナリ、味不好、其蔓長ク、其葉蜀葵ニ似テ大ナリ、黃花ヲヒラク、南瓜ヲアコダト訓ズルハ誤レリ、

〔茶道筌蹄四〕茶入之部　國燒茶器

南瓜(アコダ)　山中宗有遺愛の櫻の木を以て、其子宗智天然に茶器の好を賴みしに、如心齋夢中にアコダ瓜の形を得て、此器を好む、細工成就せざる內に天然は卒す、故に天然の書付はなし、身は內黑外溜、蓋は木地なり、

〔甲子夜話六十九〕近村ノ氏神牛御前ノ祭禮ノトキ、市坊ノ戶外ニ掛連ネタル燈籠ニ、種々ノ狂畫奇句ヲ書クコト例歲ナリ、今年出行ノトキ見ルニ、畫ニ一僧(眞言宗ノ衣體ナリ)東埔塞(瓜名)ノ實ノ下ニアルヲ倚シ親ル體ノ上ニ、　コノカボチャ黃色ダノウ負ケルダラウ

〔和漢三才圖會百蓏菜〕南瓜　俗云保宇不良、形色似阿古陀瓜、阿古陀不煮食、蓏果之類也、

本綱、此種出南番、故名南瓜、今處處有之、三月下種、宜沙沃地、四月生苗、引蔓甚繁、一蔓可延十餘丈、節節有根、近地卽著、其莖中空、其葉狀如蜀葵、而大如荷葉、八九月開黃花、如西瓜花、結瓜正圓、大如西瓜、皮上有稜如甜瓜、一本可結數十顆、其色或綠或黃或紅、經霜收置暖處、可留至春、其子如冬瓜子、其肉厚色黃、不可生食、惟去皮瓤瀹食、其味如山藥、同猪肉煮食更良、亦可蜜煎、

陰瓜　出浙中、宜陰地、種之秋熟、色黃如金、皮膚稍厚、可藏至春、食之如新、疑此卽南瓜、

南瓜甘溫　補中益氣、然多食發脚氣黃疸、

南京瓜　東埔寨瓜　唐茄子　共俗稱

按南京瓜、本草南瓜下所謂陰瓜是也、乃南瓜之屬、而出於浙江、浙江隣于南京、故自南京得種於長崎、初種之、或名東埔寨瓜、亦本南蠻之種故耳、其瓜大小似南瓜、而瓣筋淺細、形末大本小、似備前瓶(トクリ)之狀、初綠色、熟淡甘帶微赤、似老茄子之形色、故俗又名唐茄子、秋採剝皮煮食、味甚甜、或和鱠、或用

南瓜傳來

番椒末醬炙食亦佳、

〔重修本草綱目啓蒙〕二十〕南瓜　ボウブラ　ボウブナ肥前　ボブラ加州　ナングハ仙臺〇中略　京師ニテハ誤テカボチヤト呼ブ瓜形圓扁ニシテ竪ユヒダアリ、初ハ深綠色、熟スレバ黃赤色、筑紫ニ產スル者ハ、形甚大ニシテ徑リ尺餘ニ至ル、一種形長クヽビアリテ、壺ノ形ノ如シテ深綠色、又熟シテ黃色ニナル者アリ、是ヲトウナスビト云、一名カボチヤ、カボチヤボウブラ、ナンキンボウブラ、日向ウリ、讃州是群芳譜ノ番南瓜ナリ、一種細腰、壺盧ノ形ノ如クナルヲ、クヽリボウブラト云、又一種アコダウリハ、紅小ニシテ六寸許、正圓ニシテヒダナク、皮色赤シ、集解ニ、或紅ノ字アレバ、紅南瓜ト名クベシ、汝南圃史ニ、南瓜紅皮如丹楓色ト云ハ、アコダウリナリ、北瓜青皮如碧苔色ト云ハ、ボウブラナリ、備前ニ金冬瓜ト呼者アリ、形長ク越瓜ノ如ニシテ、皮赤色ナリ、傳言フ、浮腫ヲ治スト、

增、〇中略　盛京通志云、南瓜種出南番、故名、其形圓而長、倭瓜類、南瓜深黃色而味較甘形扁、本草不分爲二、今因俗呼分之、コノ說ニ據ル時ハ、南瓜ト云モノ、トウナスビニシテ、番南瓜ハボウブラナリ、ソノ倭瓜ハ番南瓜ノ一名ナリ、コレ群芳譜ノ說ニ反ス、

京師ニテカボチヤト呼モノハ、春月種ヲ下シ、甚ダ蔓延ス、葉ノ形蜀葵ノ如ニシテ五尖アリ、處處ニ白斑點アリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、大サ三寸許、五瓣ニシテ黃色、瓣ニ皺多シ、中ニ淡黃色ノ蘂アリ、甚アダバナ多シ、

〔安齋隨筆前編十五〕南瓜　カボチヤと云、一名ボウフラと云、カボチヤは其出處の地名にてボウフラは其瓜の變名なるべし、東埔寨と云國の東南に占臘國あり、又異臘とも書く、一名東埔寨とも云、カンボチヤとよむ、採覽異言に見たり、此カボチヤ瓜、予〇伊勢貞丈が幼少より弱冠のころ、享保年中までは市にて賣らず、無が故也、稀に人の家園に種る者も有し、長崎などより、其種を傳來せし

にや、常見なれざる物なれば、毒物ならんかとて、食せざる人もありし、元文の頃より所々にて種へ弘めて、今は市に多く賣り、夏秋の菜物となれり、

〔本朝世事談綺 二 生植〕南瓜
元和年中に渡る、京都には延寶天和の頃より種をうゆる也、又南京南瓜あり、おなじころにわたるか、

〔長崎夜話草 五〕長崎土產物
南瓜 紅毛詞ぼうぶらといふ、此種唐土日本ともに、亞媽港呂宋等の南蠻國より傳へたり、長崎にも天正年中より普ねく農家に造り、唐人紅毛に賣て生計とす、しかれども本草綱目等にも、毒ありて人に益なきよし見へたれば、恐れて世に食する人すくなかりし、近世は諸國に流布して、人毎に食すといへ共、其害ある事をしらず、民家常に食して朝夕の助となれり、是を食して害ありしといふを尋るに、みな肉食の祟りにて、南瓜の祟りにはあらず、牛羊猪肉等を加へ煮て、甚だ過食し、又は熱酒を飲るに依て、食滯諸病を生せし時は、卽南瓜の毒なりといひて、肉食酒飲の毒なりし事を察せず、山家の民は、たゞ南瓜一味あるひは麥粉餅を合せ煮て喰ふといへ共、過食のとがめもなく、病氣を生せし事をしらず、本草綱目時代までは、いまだ南瓜の性詳かに知者すくなかりしにや、

〔嬉遊笑覽 十上 飲食〕かぼちやの小なるを唐茄子と名付、はやり出しは明和七八年の頃なり、唐なすさつま芋の類は、初ものとて賞する人もなし、此二種享保のころ迄は江戸にはなきものなり、元文のころより近國にて作り出す、○中略 江戸名物鑑、唐茄子、初夢や一ふじ二たか十なすび、薩摩芋、後の月みよ七またのくだり芋、これ專行はるゝの始なり、

〔武江年表 六〕明和八年辛卯六月、東埔寨瓜の小きを、唐茄子と號してはやり出す、

南瓜栽培

〔農業全書三菜〕南瓜

南瓜是南方よりたね來る故、かく云なるべし、甘瓜西瓜のごとく菓子になる物にはあらず、猪肉、鷄鴨のあつ物、其外魚鳥と合せて煮て食し、料理色々あり、唐人甚賞す、西國にては賞翫する物なり、農書に、陰地によしとあれども、日あて能所よし、うへ樣西瓜に替事なし、區を廣く深くし、糞付にも、又苗うへもよし、取分海邊沙風の當る、南向の肥地沙地に宜し、鷄家鴨の糞など多く用ひてなる程肥し、草屋の上にはゝせ、又高き岸などに引上、或は棚をかき、冬瓜夕がほのごとくするもよし、柴など折しきて、平地にはゝするもよし、根の廻り五三尺の間、いかにもよく肥して、つるのゆくさき〳〵は、芝原猶よし、土手などある所ならば、是又宜し、或屋敷の肥地に根を種へ、民の屋の上にはゝせ、又は前に云ごときの空地、屋敷の邊にあらばはゝすべし、蔓れてつる長くはふ物なれば、よき畠には作りがたし、但やせ地に糞すくなくては盛長せず、又是もさきを留る事なし、深き肥たる砂地に、糞にあかせて作りたるには、甚ふとき瓜、一本に二三十もなる物なり、いか程もふとく外堅くすね、色あかく成たる時取て、下に竹のす又は蘆す、ゝきなどの實をしき、日のあたらざるにはの内などにならべ置か、又かづらにて痛まぬやうにからげ、屋の内につり置もよし、

南瓜産地

〔毛吹草三〕肥前　ボブラ

西瓜名稱

〔和爾雅六菓蓏〕西瓜(スイクハ)　寒瓜同

〔書言字考節用集六生植〕西瓜(スイクハ)　一名寒瓜、大元皇帝征西域之後、此種入于中華、見五雜組、

〔五雜組十一物〕古人於瓜極重、大戴禮、夏小正、五月乃瓜、八月剝瓜、豳風、七月食瓜、小雅、中田有廬、疆場有瓜、是剝是菹、獻之皇祖、曾孫壽考、受天之祜、今人饌瓜爲菹、不可以享下賓、而況祭祖考乎、但古人之瓜亦多種類、非今之西瓜也、西瓜自宋洪皓始携歸中國、自此而外、有木瓜王瓜金瓜甜瓜、廣志所載、又有烏瓜魚瓜蜜筩瓜等十餘種、不知古人所云食瓜、的是何種、今人西瓜之外、無有薦賓客會食者、

濱陰貴人夢食燉煌瓜、甚美、燉煌西鄙地也、豈此時西瓜已有傳入中國者、但不得其種耶、今時諸瓜、其色澤香味、豈復有出西瓜之上者、始信邵平五色浪得名耳、

〔物類稱呼 三生植〕西瓜すいくわ　大阪にてさいうりといふ

〔空華集 一〕和西瓜詩

西瓜今見生東海、剖破猶含玉露濃、種性不同江北枳、塞人猶似憂門多、

〔和漢三才圖會 九十蓏果〕西瓜　寒瓜　俗云須以久波、唐音之訛也、

本綱、五代之先、瓜種已入浙東、但無西瓜、五代時胡嶠征回紇得此種、始入中國、名曰西瓜、北地多有之、今則南北皆有、而南方者味稍不及也、二月下種、以牛糞覆而種之、蔓生花葉皆如甜瓜、七八月實熟、有圍及徑尺者、長至二尺者、其稜或有或無、其色或青或綠、其瓤或白或紅、紅者味尤勝、其子或黃或紅或黑或白、白者味更劣、其味有甘有淡有酸、酸者爲下、以瓜劉破曝日中、少頃食卽冷如水也、得酒氣近糯米卽易爛、猫踏之卽易沙、食西子後食其子、卽不噫瓜氣、○中略

一種正圓而稍小、瓤正赤味甚甜、其皮白肉薄、近頃出之、俗呼曰朝鮮西瓜、然瓤沙而不如常西瓜之柔潤、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二蓏果〕西瓜　スイクハ（唐音ノ轉ナリ）　ナイウリ（大阪中略）○數種アリ、皮深綠色ニシテ瓤赤ク子黑キ者ハ、尋常ノ西瓜ナリ、其子未ダ熟セザル時ハ色白シ、熟スル時ハ黑シ、又黑白斑駁ナルアリ、瑠璃子ト云、奥州津輕ニハ、皮白ク瓤黃子赤キ者アリ、シロ西瓜ト呼ブ、本草原始ノ月明瓜ナリ、城州木津ニハ、皮黃ニシテ瓤赤キ者アリ、木津西瓜ト呼ブ、勢州ニハ皮瓤共ニ黃色ナルアリ、下品トス、北伊勢赤堀村ノ產ハ、皮瓤黃ニシテ子赤シ、上品トス、赤ボリト名ク、又九州ノ產ハ瓤子共ニ赤シ、又ナガスイカハ、濶サ五寸許、長サ一尺、皮淺綠色ニシテ越瓜ノ如シ、瓤赤シテ味佳ナリ、京師ノ菓店ニテ南京ト呼ブ、是西江志ノ雪瓜ナリ、時珍ノ說ニモ、長至二三尺ト云リ、雲州筑州ニテ南京ト呼ブ者ハ、尋常ノ形ニシテ、皮薄ク瓤ニ粉アリテ味沙糖

西瓜傳來

ノ如シト云、〇中略

増、桃洞遺筆ニ、近年讃州ヨリ一種ノ西瓜ヲ出ス、シロスイクハト云、常ノ西瓜ヨリ皮薄ク白色ニシテ、瓤子共ニ紅色ナリ、味至テ甘味ニシテ、常品ニ勝レリ、コレ群芳譜西瓜ノ附錄ニ、北瓜形如西瓜而小、皮色白甚薄、瓤甚紅、亦如西瓜而微小狹長、味甚甘美、與西瓜同時、想亦西瓜別種也ト云、即是ナリ、所謂月明瓜トハ別ナリツト云ヘリ、

〔農業全書 三〕西瓜

西瓜は昔は日本になし、寛永の末初て其種子來り、其後やうやく諸州にひろまる、

〔和漢三才圖會 九十菓蓏〕西瓜 〇中略

按西瓜慶安中、黃檗隱元入朝時、携西瓜扁豆等之種來、始種於長崎、然亦惡青臭氣、或瓤汁赤色、以爲似血肉、兒女特不食、今則處處多有之、貴賤老幼皆嗜之、而武陽之產最良、攝州鳴尾亦美、瓤赤黏黑者爲上、其瓤近皮處、白色而味淡、故不堪食、乃連皮藏糟爲香物、或煮食亦佳、凡熟者敲之音和、如中虛、未熟者、香硬如中實也、

〔鹽尻 四十五〕西瓜は寛永中に、肥前國に來る、寛文の頃、京田舍に種て人是を食といふ、但し我國僧義堂が空花集第一に和西瓜詩あり、其略、

　西瓜今見生東海、剖破含紅玉露濃

此僧は後小松院の御宇の人也、然れば當時有て中絕し、近世亦來るにや、凡そ應永末より文明の以後に至り、我國未曾有の大亂ゆゑ、稻麥粟粱の外、かゝる瓜の類も種る所なかりし故、絕て世に知らざりしが、今四海しづけく、唐土人の船も年々我に通商して、萬新なる物を見侍る、

〔鹽尻 七十一〕西瓜は東垣、盧の削瓜の文によりて、古より中國に有とす、然れども中世契丹より傳えしといふもの、實を得たる歟、

〔南畝莠言下〕香月牛山名啓益 寒懐食鏡西瓜の條に、啓益按、西瓜は寛永年中に、異邦より來れり、然れども義堂和尚の空華集に、和西瓜の詩あり、此時西瓜いまだあるべからず、しらず何物を以てこれを稱するや、或は此物古來ある所にして、其種亡びて近年亦異邦より來れるやといへり、

〔傍廂後篇〕西瓜

西瓜一名寒瓜といふ、西域より出でたる故に、西瓜といひ、冷なる故に、寒瓜といひ、水中に冷し食ふ故に、水瓜といふ、今は西字を水の音によめり、五雜組に、大元世祖皇帝、征西域之後、此種入于中華、代醉四十云、五代史、契丹破回紇、因得西瓜、如中國冬瓜、而味甘、丹鉛餘錄に、據此謂西瓜五代始入中國、故本草不載、水東日記に、西瓜、自大元大祖征西域始得云々と見えたり、

〔農業全書菜三〕西瓜

西瓜、水の多き物なるゆへ水瓜と云にはあらず、是もと西域より出たる物也、故に西瓜の號あり、うゆる法、甘瓜にかはる事なし、種子下す時分も、大かた同じ、少遲も苦しからず、又苗をうへ置て、移しうゆるもよし、畦も區も甘瓜より廣く、こやしもなる程多く用ゆべし、海藻ある所ならば、是を多く入たるがよし、區ごとに立をく數も、畦のひろきせばきにしたがひ、一本若は二本も置べし、多くはをくべからず、又子をば、一本に二つ三つまではをくべし、甚大なるを好まば、一つをきたるにはしかず、わきのつるも花も皆々つみ切べし、是は甘瓜のごとく、先を留る事はなし、無用のつるの出るをきりさるべし、其まゝ置ば瓜ふとからず、甘瓜の終りて後熟し、味よく、暑氣をさまし、酒毒を解し、渇きをやめ、多く食しても人にたゝらず、いさぎよき食物なり、たねに色々ありじやがたらと云、あり、肉赤く味勝れたり、是を專作るべし、海邊ちかき南向の肥たる沙地を好む物にて、山中など取分宜しからず、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕西瓜　本州ハ昔此物ナシ、享保三年、北山筋山宮村市郎右衞門云者、始獲種

子植之、藩主ニ獻ゼシヨリ、其名ヲ得タリキ、今ハ近村千塚村羽黒村邊ニテモ多ク植ウ、

西瓜産地

〔毛吹草三〕肥前 水瓜 薩摩 水瓜

〔食物知新昔〕日域諸國名產

果蓏 大西瓜、肥前 琉球西瓜、薩摩 西瓜、武州、有三黑稜赤核一也、

〔江戸砂子六〕本所

砂村新田 小名木川の南、此所西瓜の名物也、

〔續江戸砂子一〕江府名產并近在近國

山西瓜 世田ケ谷 大丸 北澤 此三ケ所より出ルを西ノ西瓜と云、上品也、

砂村 龜戸 、西袋 萱沼 馬加 金町 以上を東と云

大森 羽田 此邊より出るを、南の西瓜といふ也、

山西瓜、又東の內砂村西瓜は上品也、白肉うすく中濃紅ゐ、子黒色、舌あたりあらく、至つて甘美也、これをさつまと云、又子白きあり、甚味ひ劣れり、凡西瓜は、寛永年中に初てわたり、薩摩にうゆる、よつてさつまの種を上品とす、京江戸へ來るは延寶の比也、

〔攝津名所圖會七武庫郡〕名產鳴尾西瓜、鳴尾村より多く出る、上品とす、

西瓜雜載

つめつてはこゝろのしれぬ西瓜かな 加賀女 珈凉

西瓜くふ跡は安達が原なれや 其角

出女(でをんな)の口紅おしむ西瓜かな 支考

〔昔々物語〕一むかしは西瓜は、歷々其外小身共に喰ふ事なし、道辻番などにて切賣にするを、下々中間抔喰ふ計なり、町にて賣ても喰ふ人なし、女抔は勿論なり、寛文の比より小身調て喰ふ、夫ゟ段々大身小身大名もまいる樣に成、結構なる菓子に成ぬ、西瓜大立身なり、

〔浪花の風〕七夕には西瓜を賞玩す

〔嬉遊笑覧十上飲食〕西瓜を輪ちがひなどに切ることあり、諸艶大鑑嘉祥喰する處に、西瓜を香の圖に切らし云々あり、又番南瓜を木魚に作ることは、天明ごろよりといへり定ならず、西瓜の灯籠、俳諧三疋猿附錄、暮るとも盆の節季は月ありて、西瓜にとぼす橋の行燈、これはたち賣の赤き紙の行燈なるべし、西瓜の肉をほり取て、中に火を點す事は、近きことゝ見ゆ、火光奇くみゆるものなり、廣東新語に似たることあり、廣州時序の條、八月十五日之夕、兒童燃番塔燈、持柚火、踏歌於道、曰灑樂仔灑樂、兒無咋、燒塔累碎瓦爲之、象花塔者、其塔多、象光塔者其燈少、柚火者以紅柚皮彫鏤人物、花草中置一琉璃盞、朱光四射與素馨茉莉燈交映、素馨茉莉燈以香勝、紅柚燈以色勝、○中略類柑子、西瓜は卅年來のはやりものにして、今は和歌所へものしあげらるべかりしを、女房達のきらはせらるゝ方もあるにや、去來抄に、猪の鼻ぐすつかす西瓜かな、七部正秀云、猪なればこそ鼻はぐすつかしけん、去來云、させることとなし、此頃はいまだ上方に西瓜珍し、正秀も珍しと思より、猪の怪しみたるとは風聞出せり、予は西國生れにて、西瓜も瓜茄子の如し、曾て心ゆかず、總じて人の句を聞に、我知る場しらざる場違ひに有べしと有り、西國より漸々京に上りしなり、娘容儀に、奢り者のことを云て、奥樣の御用とて、西瓜の代三百六十五匁、新小判にて八百匹が請取て云々あり、大に行はれたる也、

〔國花萬葉記六之三攝津〕諸職人商人買物所付いろは分

す　西瓜　鳴尾新田、同今宮、同天滿、

〔國花萬葉記七下武藏〕江府名匠諸職商人

西瓜賣　四日市日本橋廣小路　芝新堀端　兩國橋廣小路　中橋廣小路　京橋南がし　四谷鹽町　糀町五丁目、此所毎日市有、

〔有德院殿御實紀附錄十四〕砂村の邊にて、小鷹にて、雲雀をからせたまふ事ありしに、折しも六月

苦瓜

の暑き日にて、供奉の人々これをくるしみ、のむどかはきけれど、あたりに結ぶべき清水もなし、此邊のはたは西瓜を一般につくる事なれば、こゝもかしこも累々としてあるをみれど、田圃のものを損ずる事は、常々かたく禁じ玉ふことなれば、指さすものもなかりしに、いづれもの疲たるさまを御覽じ、其地の代官伊奈半左衞門忠達をめされ、何事にやひそかに仰あり、半左衞門心を得しさまなりしが、やがて圃中に入て、なかにも大きなる西瓜一つをとり來り、手にてつきやぶり一口食ひ、あら心よや、これにて咽を潤したりといふに、あたりの人々これをみて、半左衞門代官の身にてさへ、かゝる擧動すれば、我々とても憚るべきにあらずと、いそぎはたの中に分入、思ひ〳〵にとりくひて、いづれも渴を忘れけり、これ田圃のものを、みだりにとるべしとは仰られ難きにより、わざと半左衞門に御心をさとし玉ひ、衆人の渴を救はせ玉ひしなるべし、さて其後西瓜の數をあらためしめて、其價を農民に賜ひしとなり、

〔和爾雅　七菜蔬〕苦瓜（フルレイシ）（錦茘枝同、又云癩葡萄、）

〔書言字考節用集　六生植〕錦茘枝（フルレイシ）

〔物類稱呼　三生植〕錦茘枝つるれいし　長崎にてにがごうりといふ、是は苦瓜（にがうり）の轉語なるべし、

〔大和本草　七圖草〕錦茘枝（フルレーシ）　一名苦瓜ト云、春子ヲマキ、長ジテ籬垣ニ延シム、本草蓏菜部ニノセタリ、本草ニ其實青キ時瓤ヲ去テ青キ皮ヲ煮テ、肉ト豆油ニ入テ煮食スト云、皮ノ味甚苦シ、故苦瓜ト云、其實ノ形茘枝ニ似タリ、熟シテ色黃ナリ、錦色ノ如シ、皮開破ル、其中ノ子紅ニシテ甘シ、小兒好ンデ食フ、本草ニ大如鷄卵ト云、今又一種長八九寸アルモノアリ、

〔和漢三才圖會　百蓏菜〕苦瓜　錦茘枝　癩葡萄　䨱加古宇里、一云蔓茘枝、

本綱、苦瓜原出南番、今閩廣皆有之、五月下子、生苗引蔓、莖葉卷鬚並如葡萄而小、七八月開小黃花、五瓣如椀形、結瓜長者四五寸、短者二三寸、青色皮上痱瘟、如癩及茘枝殼狀、熟則黃色自裂、內有紅瓤裹

絲瓜

子、瓤味甘可食、其子形扁如瓜子、亦有痱瘰、南人以青皮煮肉及鹽醬、充蔬、苦澀有青氣、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜〕苦瓜　ツルレイシ　レイシ　ニガウリ筑州　ゴウリ長崎　ニガゴウリ筑後　トウゴウリ島原中嶋○

春種ヲ下ス、蔓葉諸瓜ヨリ小ナリ、葉大サ三寸許、五七歧ニシテ鋸齒アリ、淺綠色、毎葉一鬚、葉間ニ花ヲ生ズ、大サ六七分、五瓣ニシテ黄色、蘂ハ細シテ絲ノ如シ、雄花(アダバナ)多シ、蔕下ニ小塊アル者ハ、花謝シテ瓜ヲ結ビ下垂ス、皮ニ疙瘩多シ、長サ三寸、徑リ二寸許、初ハ綠色、瓜ノ末ヨリ漸ク黄色ニ變ジ、自ラ裂テ紅肉ヲ見ス、是其熟スルナリ、其肉ハ六七分許ノ大ニシテ多ク重ル、味甚ダ甜シ、内ニ皆一核アリ、形木鼈子ニ似テ小ナリ、霜後苗根共ニ枯ル、一種長レイシハ、長サ一尺五六寸、九州ニ多シ、京圃ニ栽ユレバ六七寸ニ過ズ、

〔和爾雅七蔬菜〕絲瓜(ヘチマ)(布瓜、蠻瓜、天羅、綿瓜、魚鰦、)

〔書言字考節用集六生植〕絲瓜(ヘチマ)(一名魚鰦、文殊、長一曰二挨絲瓜、)　蠻瓜(同上、出本草、)

〔物類稱呼三生植〕絲瓜へちま　信濃にてとうりと云、薩州にてながうりと云、とうりは糸瓜(いとうり)の上略なるべし、或人の曰、へちまといふ名は、とうりより出たり、其故はとうりのとの字は、いろはのへの字とちの字の間なれば、へちの間といふ意にて、へちまとなづくるとぞ、

〔本朝食鑑三菜〕絲瓜(訓倍知麻)

集解、二月下種生苗引蔓、延樹竹或竹棚架、其葉大如蜀葵、而多丫尖、有細毛刺、其莖有稜、六七月開黄花、五出、微似胡瓜花、蘂瓣俱黄、其瓜圓六七寸許、長一二尺、甚則三四尺、深綠色、有皺點、瓜頭如鼈首、嫩時食之者儘有尤希、老則筋絡纏紐如織成、經霜乃枯、華人造器、本邦惟作垢摩(アカスリ)、浴湯中用之、而摩去肌膚之垢、則舊垢凝脂悉脫焉、

〔和漢三才圖會百菜〕絲瓜　天絲瓜　天羅蠻瓜　魚鰦布瓜　俗云閉知末

本綱、始自南方來、故名蠻瓜、唐宋以前無聞、今以爲常蔬、○中略

按絲瓜攝州住吉多作之、不爲食品、唯用老瓜皮、爲浴室之垢磨而已、

〔重修本草綱目啓蒙二十一菜〕絲瓜　ヘチマ　ナガウリ薩州　トウリ信州○中略

瓜小ナル時ハ漬物トナシ食フベシ、成熟スル者ハ、皮肉ノ筋絡堅シテ食フベカラズ、一種ナガヘチマアリ、瓜長サ三尺餘、筑後ニテハ長サ六尺ニ至ル、薩州ニテハ琉球ヘチマト云、未ダ熟セザル者ヲ食用シテ、苦味ナク柔軟ナリ、又生食スベシ、集解ニ甚則三四尺ト云者是ナリ、ヘチマノ水ハ、蔓ノ本地ヨリ一二尺ニ切リ、瓶中ニ插ミ入置バ、多ク水出、甚清白ナリ、俗ニ美人水ト云、附方ニ絲瓜汁ト云、赤水玄珠ニ、西來甘露飲ト云、秘方集驗ニ、痰火取而三碗、加瓜蔞仁、天花粉、羌活、紅花、童汁、煉膏服卽愈ト云、

〔農業全書三菜〕絲瓜

絲瓜わかき時は料理にして食す、同漬物にして極めてよき物なり、老て皮厚く堅くなりたるを干して、其後水に漬置ば、肉くさり上皮のきて、其筋あらき布のごとく成たるをもみ洗ひ乾し置、是にて器物をあらへば、たとひぬりたる物にても引めも付ず、物のあかを能とり、又湯手に用て甚よし、うへ樣雜瓜に同じ、かきにはゝせ、かやねにはゝせたるよし、此瓜は痘疹の藥なり、其外にも功多し、

〔雍州府志六土產〕絲瓜　倭俗所謂倍知麻是也、去肉并皮陰乾則其形狀如紗巾、如羅網、故有絲瓜之名、剃髮時以是浸湯、洗頭髮則柔軟而易剃、或亦洗鍋釜底亦可也、故中華村人、呼爲洗鍋羅瓜、或稱禪屣、所々有之、然稻荷社前町所有爲佳、

〔柳葊雜筆二〕寛文五年作者不知東海道路の記に、袋井に泊り、行水し侍るに、むさきへちまを出しければ、

心なくむさきへちまを出す戯たん袋井の宿のおかかは、と見ゆ、當時湯殿にて絲瓜を以て垢すりしと知る、農業全書に、其上皮をさり、其筋あらき布の如きをもみ洗ひ乾かし、是にて器物をあらへば、たとひ塗たるものにても引めも付ず物の垢をよくとり、又湯手に用て甚よしと云と、合考ふべし、南宋の僧斷崖の詩に、不成蔬菜不成瓜、沿牆傍壁也開花、只與諸人除垢穢、不知自己一團沖、とあるにて、西土にも垢除に用ふることとしるべし、又本草にも釜器を滌べし、故に村人洗鍋羅瓜と云とあり、

〔物類稱呼生植三〕絲瓜（へちま）○中略 諺にへちまのかはのだんぶくろといふ事有、是は此へちまにはあらず、へちくわんが馬の革一嚢といふ事也、へちくはんは茶人にて、茶器を革袋に入、馬につけて遊行せしとなり、侍の隱遁したるにて、粟田口に住めり、

〔毛吹草三〕山城 深草絲瓜

〔日次紀事十月〕深草民家賣絲瓜、

〔本草和名八草〕栝樓、一名地樓、一名果臝、（音倮、又力果反、）一名天苽、一名澤姑、實名黃苽、（已上本條）一名澤巨、一名苦萎、一名鳥服、一名椊朴、（已上四名出釋藥性、）一名毘萬、一名芄蘭、（出兼名苑、）一名苦樓、（出雜要訣、）和名加良須宇利、

〔倭名類聚抄草二十〕栝樓 兼名苑云、栝樓一名瓺瓿、（主姑二音、和名加良須宇里、）

〔康賴本草草部中〕栝樓 （味苦寒无毒、和加良須宇里乃、二月八月採根、曝乾三十日、）

〔伊呂波字類抄加植物〕瓺瓿（カラスウリ） 地樓 果臝（倮文） 瓝瓞 栝樓 天瓜 澤姑

實名黃瓜 澤巨 椊朴（已上二名、出釋藥性、已上七名、カラスウリ、見本草也、）

〔本草綱目十八上草部〕栝樓（本經中品）

時珍曰、臝與蓏同、許愼云、木上曰果、地下曰蓏、此物蔓生附木、故得象名、詩云、果臝之實、亦施于宇、是矣、栝樓卽果臝二字音轉也、亦作菰䔲、後人又轉爲瓜蔞、愈轉愈失其眞矣、古者瓜姑同音、故有澤姑

之名、齊人謂之天瓜、象形也、雷斅炮炙論、以圓者爲栝、長者爲樓、亦出牽强、但分雌雄可也、其根作粉、潔白如雪、故謂之天花粉、

〔東雅十四果蓏〕栝樓カラスウリ　倭名鈔に兼名苑註を引て、栝樓一名瓠瓤、カラスウリといふと註せり、毛詩爾雅本草等の註に依るに、栝樓は天瓜也、瓠瓤は爾雅の瓞姑、一名王瓜也、卽是二物也、兼名苑註、栝樓一名瓠瓤と云ひしは、二物をもて一物とするに似たり、瓠瓤を呼びて、カラスウリとするは、此物一名老鴉瓜といふに因れるなり、天瓜王瓜同じく是れ蔓生にして、其葉も又相似たれば、我國の俗共に呼でカラスウリと云ひしと見えたり、此物もと果蓏の類にあらざれども、名づけてウリといひぬれば、こゝに准ず、(老鴉瓜の名、始て本草圖經に見えて、李東璧が本草には、王瓜熟しぬれば色赤て、鴉喜食之、故に此名ありと見えたり、)

〔物類稱呼三生植〕栝蔞からす瓜　伊勢及紀伊熊野邊にてうりねと云、越前にてくそうりといふ、土佐にてぐどうじと云、(其根を同國にてこびと云、)肥前にてごうりといふ、(和産二三種有、其核玉づさの如くなるものは王瓜なり、)

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕栝。樓。　キカラスウリ(王瓜ニ混ズル故ニ、黃ノ字ヲ冠ス、)　クリウリ越前　ミヅカラスウリ同上　カルリ伯州　ゴウリ筑前、肥前、　ゴリ雲州　ウシゴウリ筑後　カラスコンピ豫州　ウシコペ豐後　ヤマウリカブラ泉州　ニガウリ城州貴船　ムペウリ同上　コピノコ土州、根名　烏塊

和方書實名○中略

春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、蔓甚長ク葉互生ス、形チ圓ニシテ五七尖アリ、胡瓜葉ニ似テ毛茸ナク光リアリ、王瓜葉ノ厚クシテ毛刺アルニ異ナリ、一葉ゴトニ鬚アリテ物ニ纏フ、五月葉間ニ白花ヲ開ク、本ハ筒子、末ハ圓ニ濶ク五出ニシテ、洛陽花(サツマナデシコ)ノ如シ、瓣末細ク分レテ亂絲ノ如シ、花後瓜ヲ結ブ、王瓜ヨリ大ニシテ微短、生ハ靑ク熟スレバ黃色、王瓜ノ形小ニシテ、熟シテ赤色ナルニ異ナリ、瓜ヲ用テ醬藏鹽藏シ食フベシ、瓜中ニ黃肉アリ、味甘シ、肉中ニ子アリ、卽栝樓子ナリ、○中略栝樓ノ根ハ、土中ニ長ク蔓延シ、葛根ノ如シ、或ハ連珠シテ瓜ノ如ク白色ナリ、採乾シテ用ユ、切レバ内ニ

花紋アリ、冬月夏ハ少シ根葛粉ヲ製スル如ク、水飛シ粉ヲ採ルヲ天花粉ト云フ、○中略

王瓜。カラスウリ　タマブサ　キツネノマクラ丹波　ゴウリ筑後　タマブサゴウリ筑前
ムスピゼウ同州　ダドウジ土州　ギヤウチゴフ讃州○中略
路旁林側籬邊ニ甚多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、蔓長シテ線稜アリ、葉互生ス、其ニ深緑色ニシテ黒色ヲ帶ブ、葉ノ形圓ニシテ尖リアリ、或ハ三尖或ハ五尖齊シカラズ、皆鋸齒アリ、體厚ク毛刺アリ、一葉ゴトニ鬚アリテ瓜ノ鬚ノ如シ、五月葉間ニ白花ヲ開ク、形栝樓花ニ異ナラズ、其瓜大サ倭鷄卵ノ如シ、栝樓ヨリハ小ニシテ長ク、秋冬熟シテ朱紅色ナリ、瓜蔞實ノ形大ニシテ、熟シテ黄色ナルニ異ナリ、

〔藥經太素下〕栝樓根　寒味苦　無毒　天瓜粉トモ云
土氣ヲ能洗ク、白水ニ付テ、臼ニ入テ擣碎ク、水ニスリ立テコシテイサセテ用、除熱生津幷治乳癰疸疥瘡補勞調脉實尤良、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
伊勢國五十種○中略　栝樓十九斤

〔廣益國産考四〕王瓜ひさごうり、たまづさ、○中略
關東などにて、此實をとり、つきつぶして土鍋に入、酒を加へ煮て貯へおき、婦人などの胼にぬれば忽ち治し、痛を忘るゝといふ、又此根より取たる粉に、龍腦を少し加へ匂ひをつけ、菊童と名づけ鬻ぐ家あり、夏は婦人もとめて白粉の代りに用ふるに、面皰そばかすを治し、その外顔のできものを治するといへり、もつとも若き婦人は白粉下にぬりて、其上におしろいをぬるに、きめをこまかにし艶を出すといへり、又老婦は此粉ばかりをぬりてふきとれば、顔のきめこまかになり、白粉を付たるやうにして、おしろいのごとく白き粉うくことなしとて專ら用ふ、是は江戸に

多く用ひて、いまだ京大坂にても専ら用ふることをきかず、又此瓜を日にほし貯へおき、婦人顔をあらふとき、糠の中にまじへあらへば、きめを細にし、顔にできもの生せずといへり、殊に藥種ともなれば、左に功能をあげ、根を掘て粉に製し、粕は荒年の備ともなれることをのぶる也、

根を掘事并に製法

根を掘旬は、九十月より多一ぱい、翌正月までに掘べし、夏なれば粉至て少し、掘には其蔓をたぐり、尖鍬にてそろ〳〵わきの土をほり、根に疵付ぬやう掘べし、さて掘て家に持かへり、水にてあらひ、平面の廣き石の上にのせ、槌か又は樫の棒もて、貳人向ひあひて打べし、至つて粉の澤山なるものゆゑ、白き汁顔衣類にかゝるものなれば、前に縫切やうのものをあて、叩くべし、能ひしぎて半切桶やうの物に入おき、夫より四斗樽やうの桶の口に簀をのせ、其中にひしぎたる根を入、壹人は檜杓をもて、水をかけ、壹人は兩手にてもむべし、さすれば粉は水にて下へもり、粕の筋は簀にのこる也、よくしぼり取又入て、右のごとくしぼり終りて、又別桶に木綿の袋をすけ、其中に右の水をくみ込み、袋をふれば、袋の中に細なる粕たまる也、悉く右のごとく仕終らば、右水は其まゝに置、日にほし貯ふべし、荒年の時は、是を細にきざみ、碓にてつき粉となし、麥きびの粉など合して、だんごとし食してよし、扨右こしたる水は上の方すみて、粉は底にをりたまる也、そのとき上水は桶をかたむけすたみすて、又水を入、竹の棒をもてまぜて、又一日も置て、元のごとく上水の澄たるをすたみて、又水を入かきまずること四五度すべし、さすれば溜りたる粉ますます白く、おしろいのごとくなるなり、終りには猶よく上水をすたみ、桶底なる粉を庖丁をもて起しとり、桃ぶたやうのものに入、日に乾べし、則王瓜の粉にして、江戸にて菊童といへる家にて鬻ぐ、おしろいしたと名付るものの是なり、

仙沼子

〔本草和名二十本草外藥〕仙沼子、生二仙人沼池一、故以名レ之、一名救疾子、帶二於身上一治レ病、故以名レ之、一名預。知。子。帶入二蠱毒家一藥自鳴、故以名レ之、神發子、

瓤之變容盒殻故以名之一名總持子此種矢一殻以名之和名之多都岐、

〔大和本草〕{瓜類}スヽメウリ　京都ニテヒメウリト云、甜瓜ノ類ノ姫瓜ニハ非ズ、野生ス、蔓葉王瓜括樓ニ似タリ、葉下ニ有鬚テヽメリ、括樓ノ如シ、八九月實ヲ結ブ、實ノ大サ如木槵子、小ニシテ丸シ、內ニ子アリ、瓣片多クカサナリミテリ、實ノ半上ノ皮ヲ去レバ、下ニ實付テ殘ル、食器ノ蓋ヲ去テ食ヲ盛ルガ如シ、西土ノ鄙俗、コメノゴキト云、氣味瓜ニ似タリ、是王瓜ノ類ナルベシ、根ハ括蔞王瓜ニ似ズ、漢名不詳、

〔重修本草綱目啓蒙〕{十四草部}合子草　ゴキブル　ヨメガサラ　カハホウ。ブキ{肥前}　ヒナノガウシ

{京師}コメノゴキ{同上}　コメノワン{勢州}　スヽウリ{肥後}　カラスノゴキ　カラスノコキ

ゾル{江州}　スヾメノウリ{京師}　キンプンシキ{勢州}

溝瀆ノ傍ニ多シ、蔓ヲ延クヒキ葉互生ス、王{ミヅ}瓜{ウリ}葉ニ似テ小ニシテ長シ、馬{スイ}瓝{ノ}兒{ウリ}葉ヨリ長シテ五尖アリ、深綠色葉ゴトニ鬚アリテモノニ纏フ、夏月葉間ニ花アリ、裹花ニ似テ白色、大サ四分許、後實ヲ結ブ、形裹ノ如シ、蔕長ク下垂ス、皮ニイボアリ、蘿{ガヾ}藦{イモ}實ノ皮如ク深綠色ナリ、實熟スル時ハ、皮ノ正中ヨリ橫ニ離レ自ラ落ツ、人觸ルモ亦然リ、其形椀ノ如シ、中ニ二核ヲ盛ル、形苦{ツルレイシ}瓜子ノ如ニシテ小ク瓜色ナリ、又一核三核ノ者稀ニアリ、皆地ニ落テ春ニ至リ自ラ苗ヲ生ジ、秋後苗カル、

預知子　一名盍壽仙{綱目拾遺}　聖子{本草衍義}

此集解ニ說クトコロノ者ハ未ダ詳ナラズ、正字通ニテハ、上ノ附錄ノ合子草ノコトニシテ、ゴキヅルナリ、正字通ニ、預知子一名仙沼子、賛事曰生池間、苗似牽牛、有逆刺、節有房殻、殻內二子、陰陽和合能除蠱毒、子狀似龜、經霜則黑色如栗子、滿升其間爆鳴似人兩爪相擊聲、所采者分爲二瓣有聲者何在、又分爲二有聲、則記之佩衣襟間、入蠱毒處自鳴爆、三子爲偏氣不足、不必采用、本草謂蔓生依木子似皂莢非、

〔古今要覽稿(草木)〕したつき(すゞめうり 仙沼子 合草)

したつきは、一名すゞめうり、一名すゞめのうり、一名ひめうり、一名よめのごき、一名よめがさら、一名ごきづる、一名からすのごき、一名ひなのかうし、一名かはほうづき、一名からすのごきづる、一名よめのわん、一名きんぶんしきといひ、漢名を仙沼子、一名合子草、一名盍合子、一名聖知子、一名聖先子、一名預知子、一名致疾子、一名神變子、一名總持子、一名豁毒仙、一名詔子といふ、此草はいづれの國にても、池沼及び溝渠のかたはらに多し、春苗を生じ蔓をなし、葉は一種の馬瓟兒葉に似て長く、又頗る旋華葉に似て三尖あり、葉ごとに細鬚ありて、物をまとふ事、又馬瓟兒の如し、夏に至れば、その葉の間に白花を開き後實を結ぶ、大さ棗の如し、其中に二子ありて、形龜子に似て至て小にして、又頗る縮砂の仁のごとし、その子嫩なる時は、外皮白くして中に粘汁あり、老る時はその汁凝りて仁となり、外皮黑色に變じ、曝乾すれば、又灰色或は淡褐色に變ず、その味少しく苦し、此子をとりて延喜の比には、漬物の料と(延喜式)せしを、又旋用多驗と(本草和名)いひ、又治二一切風一、補二五勞七傷一、其功不レ可二備述一(日本本草)いふ時は、たゞ食料に供せしのみにはあらず、それより降りて永曆承安の比に至りては、后宮御懷姙の時は、必ず此子二七粒を典藥頭より奉りて、御著帶の中へ入て、專ら催生の料に供せられしなり、(山槐記、玉葉、定長卿記)それを奉るに和氣氏より奉れるは、皮を除かざれども、丹波氏より奉れるは皮を去ると(醫師經長記)いへり、又その數を二七粒に定められしは、まさに盍合子催生云々、又治二一切病一、毎日取二仁二七粒一と(日本本草)みえたるによりてなり、また方言本草に、預知子難產に用ゆ、又產前に三十粒を帶に付るは、(按に、こゝに三十粒を帶に付るといへるは、日本本草に、患者取不レ過二三十粒一、永產といひしによれる也、)まさに產する時に用ゆべき爲也といひ、又萬安方の六物麝香丸の方中に仙沼子あり、小兒大人腹脹氣塊を治すといへり、かく功能多き一奇藥のいと得やすきものを、今にいたりては、絕てこれを用ゆる事をしるものなきは、くち惜き事也、扨圖經本草に、預知子蔓生、依二大木一實作レ房、初

青至熟深紅色、每房有子五七枚、如皂莢子、斑褐色といひしは、これと同名異物也、

〔山槐記〕治承二年六月廿八日辛卯、中宮(德子○高倉后、中略)御懷姙當五ケ月、仍有御著帶事、初度也、(中略)御著帶之後、典藥頭和氣定成朝臣(衣冠、男主殿頭定長朝臣參入)、持參仙沼子(二七枝、其數糖稍蓋也、納折櫃、不居於高杯、)自臺盤所方獻之、中將局取之、續付御帶左方、

〇按ズルニ、仙沼子ヲ著帶ノ時ニ用キル事ハ、禮式部誕生祝儀著帶條ニ載ス、

〔多識編二蔓草〕木鼈子、古可米久佐、異名木蟹、

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕木鼈子　一名木別子(盛京通志)　土木鼈　土鼈(共木經逢原、外科正宗ニ土木鼈ト云者是也、又雷實ヲ亦土鼈ト名ク、同名ナリ、)　正木鼈(本草原始)

和產ナシ、舶來ノ者ハ核ノ形錦荔枝(ツルレイシ)核ニ似テ大也、長サ八分許、濶サ六分許、厚サ一二分、肌粗ク灰白色、中ニ仁アリ、コレヲ破バ膜アリ、仁ヲトリ藥ニ入ル、又生食スベシ、次條ノ番木鼈ニ對シテ土木鼈ト云、土ハ本土ノ義、廣山ニ產スル故ナリ、

古事類苑

植物部二十五

草十四

忍冬

〔新撰字鏡 草〕忍冬 須。比。豆。真。

〔本草和名 七 草〕忍冬、陶景注云、凌冬不彫、故以名之、一名耐冬、一名延門、已上二名出雜要訣、一名獸中藤、出范注方、一名貴聖藤、和名須。比。加。都。良。

〔倭名類聚抄 二十 草〕忍冬 陶隱居本草注云、忍冬 和名須比可豆良 凌冬不凋、故以名之、

〔和爾雅 七 草木〕忍冬 スヒカツラ 金銀藤、鷺鷥草、蜜桶藤、左纏藤、同、花名金銀花、

〔宜禁本草 乾 中 草〕忍冬 甘温、十二月採、煮汁以釀酒、補虚療風、

陳藏器曰、小寒 本經曰溫也 長年益壽甚、常可採服、治癰疽、耗効久服旋見神功、

〔大和本草 六 雜〕忍冬 諸ノカツラ皆右ニマトフ、只忍多ノカツラ左ニマク、故ニ左纏藤ト云、花開ク時白シ、二三日ヲヘテ黃ニ變ズ、故金銀花ト云、四月ニ花ヲトリ陰乾ニス、莖葉ハ時ニ不拘トリテカゲ干ニス、莖葉花性同、一切ノ腫物諸瘡久不愈ニ煎ジ服ス、甚妙ナリ、腫物久シクシテ穴アキ濕トナリ、常ニ膿汁出、或不出シテ久不愈ニ、酒ニ浸シテ日ニホシ爲末服ス、或剉テ煎服ス、久用ユベシ必効アリ、腫瘡ナド久ク不愈ニ、日々煎服シテ効アリ、眞ニ妙藥ト云ベシ、屢驗アリ、試用テ得効タル人多シ、其外功能多シ、本草ニミエタリ、至賤藥至貴ノ功アリ、或茶ニカヘテ煎ジ服ス、久シク服スレバ益アリ、花モ茶ニ加ヘテ服ス香ヨシ、又生乾トモニ煮テ豆油(シヤウユ)ニ和シ食スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕忍冬 スヒカヅラ　スヒスヒカヅラ 播州　スヒバナカヅラ 雲州　一名木楊藤（東醫寶鑑）　甜藤（附方）　老公鬚（靑州府志）　金銀藤（同上）　過東藤（藥性要略大全）　左紋藤（藥性奇方）　鷺鷥草（群芳譜）　左紐（廣東新語）　金銀花草（救荒本草）　苅多偶草（品字箋）　環兒花（事物異名、花名）　蜜啜花（三因方、同上）　増、一名左轉藤（遵生八牋）

山野最多シ、樹ニ纏フテ繁延ス、葉兩對ス、形稍ニシテ尖リ毛アリ、春新葉ヲ生ズ、菊葉ニ似タル者アリ、圓葉ノ者アリ、皆一根ヨリ變生ス、別種ニ非ズ、四月葉間ニ花ヲ開ク、香氣アリ、一蒂二花一節四花同日ニ開ク、長サ一寸許、本ハ細筒ニシテ末ハ深ク分レテ二瓣トナル、上ノ一瓣ハ四ツニ淺ク分レ、下一瓣ハ狹シテ分レズ、內ニ五ツノ白蘂及心アリ、蕾ノ時ハ淡紫色、初テ開ク者ハ白色ニシテ微紫ヲ帶ブ、日ヲ經テ白ニ變ジ、淺黃ニ變ジ、深黃ニ變ジテ落ツ、故ニ一枝中黃白相映ズ、故ニ金銀花ト名ク、土州ニテスヒバナト呼ブ、藥用ノ金銀花コレナリ、又一種花開テ紅色ナルモノアリ、共ニ花後兩圓實一蒂ニ生ズ、一ハ大一ハ小、熟シテ色黑シ、一種肥後ノ產ハ葉大ニシテ厚シ、花モ亦大ナリ、一種金銀木、一名ヒヤウタンノ木ト呼モノアリ、木本ニシテ高サ五六尺、葉ハ忍冬葉ニ似テ小ク、花モ黃白雜リテ忍冬ノ如クナレドモ、蕣アリテ別物ナリ、ソノ實忍冬實ヨリ大ニシテ色赤ク、一蒂ニ大小並ビテ緝脲壺盧（ひやうたん）ノ如シ、故ニヒヤウタンノ木ト云フ、卽救荒本草ノ吉利子樹ナリ、

〔廣益地錦抄 五〕忍冬　俗にすいかづらといふ、花さき出にはしろく、二三日を過て黃色に成、故に金銀花と云、春かづらの出るをつみ切て、ひたし物にして食、葉をほして茶にせんじて用、甚益ありといへり、多葉あり、人手足をいたみしびれ、あるひはくぢきたるに、かづらを湯にせんじ、浴湯にすべし、又馬足いたむにせんじて洗、此草叢に多生ゆへ、おろそかにおもひ、人參は價高直成ゆへ大事にせり、人參にまさりたる功能あるをしらずと、唐人は笑ふといへり、

〔延喜式 內藏 十五〕大神祭 夏祭料 中略○ 忍冬花蠶 一合 絲 料、緑絲小四兩、安藝木綿大一斤、

〔武江產物志 藥草〕隅田川邊 忍冬 蓮華山ニモ

〔新撰字鏡 草〕蒴藋 上所角反、下直角反、曾久度久、

〔本草和名 草十一〕陸英 蘇敬注云、芹名水英、此名陸英、接骨樹名木英、此三英也、蒴藋也、蘇敬注云、陶人出蒴藋條、 一名決貧、一名陸莖、又云是獨行、出釋藥 和名曾久止久、

蒴藋 楊玄操音上朔、下音調、 一名菫草、一名芨、蘇敬注云、此芨之實出芨條、一名當節、出兼名苑 和名曾久止久、

〔倭名類聚抄 二十 草〕蒴藋 蘇敬本草注云、蒴藋 朔調二音、此間云曾久止久、 卽陸英也、

箋注倭名類聚抄 十 草〕衍義云、蒴藋花白、子初青如菉豆顆、每朶如盞面大、又平生有一二百子、十月方熟紅、蘇敬陸英條注云、此葉似芹及接骨花、亦一類、故芹名水英、此名陸英、接骨樹名木英、此三英也、花葉並相似、圖經、春抽莖、莖有節、節間生枝葉、

〔大和本草 九 雜草〕蒴藋 ソクヅ 一名陸英、又接骨草、重草、與接骨木葉同、只草ト木ト不同而已、故クサタヅト云、本草蒴藋ト陸英ト別物也ト云說アリ、故陸英ヲ別ニノセタリ、時珍ハ諸說ヲ引テ一物ナリトス、風ホロセ身痒キニ煎ジテ洗フ、又煎湯ニ酒少加ヘテ浴ス、本草ニ出ヅ、又和方ニモ功能多、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕蒴藋 ツ○チ○ヒ○ト○ガ○タ○醫寮式 ソ○ク○ド○ク○和名鈔 ク○サ○タ○ヅ○京 ソ○ク○ヅ○同上 ニ○ハ○タ○ヅ○備前 ソ○ク○ド○ウ○大和 ソ○ン○タ○ド○同上 ヲ○ラ○ン○ダ○ナ○ウ○九州 一名續骨草附方 白花草藥下編接骨 遷遷活鎭江府志

接骨木ノ一名ヲタヅト云フ、蒴藋葉能接骨木葉ニ似テ、本草ナルニ因テ、クサタヅト呼ブ、故ニ接骨木ヲモ木タヅト云フ、感山ニテモ接骨木ニ木蒴藋ノ名アリ、蒴藋ニ接骨草ノ名アリ、原野ニ多ク生ズ、春宿根ヨリ叢生ス、高サ六七尺、葉ハニハトコノ葉ニ似テ細鋸齒アリ兩對ス、斷ツ時ハ臭氣アリ、夏月莖梢ニ繖ヲナシ、五出ノ小白花ヲ開ク、花後圓實ヲ結ブ、接骨木ノ實ノ如シ、生ハ綠熟

女郎花

シテ紅ナリ、

〔廣益地錦抄 五〕陸英 略○中 骨間しびれいたみ、または落馬等にて手足を打くじきたるは此莖葉をせんじ、度々浴湯にすべし、又牛馬足をくぢきいたむに、せんじて酒を入れ、むらひて妙也、

〔延喜式 典藥 五〕所須藥種 蒴藋一斤一分

〔本草和名 草 八〕敗醬(陶景注云、氣似敗豆醬、故以名之、) 一名鹿腸、一名鹿首、一名馬草、一名澤敗、一名納綱、(出雜要性)和名於保都知、一名知女久佐、

〔倭名類聚抄 草 二十〕敗醬 陶隱居曰、敗醬(和名知女久佐)氣似敗豆醬、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 草 十〕本草和名云、和名於保都知、一云知女久佐、本書菜類茶訓於保都知、故此不取、是名也、按時珍曰、敗醬處々原野有之、俗名苦菜、野人食之、蓋此苦菜之名、唐時俗間既有之、此間人傳之、以於保都知為苦菜、然源君之時、本草諸書無苦菜之名、但爾雅以苦菜為茶別名、而茶亦可食、遂以茶為於保都知者誤也、陶又云、葉似豨薟、根形似柴胡、蘇云、多生崗嶺間、葉似水莨及薇銜、叢生、花黃、根紫作陳醬色、其葉殊不似豨薟、時珍云、春初生苗、深冬始凋、初時葉布地生、似菘菜葉而狹長、有鋸齒、綠色面深背淺、夏秋莖高者二三尺、而柔弱數寸一節、節間生葉、四散如繖、顚頂開白花、成簇如芹花蛇床子花狀、結小實成簇、其根白紫、頗似柴胡、按蘇敬所云黃花者、可以充乎美奈倍之、李時珍所云白花者、可以充乎登古倍之也、醫心方云、和名於保都知、又久知女久佐、又加末久佐、按知上久字恐衍、略○中 袖中抄謂於保登知似乎美奈倍之而白花、一名乎登古倍之、然則敗醬黃花者、謂之乎美奈倍之、白花者謂之於保登知也、未知輔仁以為白花敗醬否、

〔倭名類聚抄 草 二十〕女郎花 新撰萬葉集云、女郎花、倭歌云、女倍芝、(乎美那閉之、今案花如蒸粟也、所出未詳、)

〔箋注倭名類聚抄 草 十〕按女倍芝、既是假字、不可下復有訓注、有乎美那閉之五字非是、又花色如蒸粟、俗呼為女郎、是即源君詠女郎花詩、見本朝文粹、則今案以下亦恐後人所加、

〔下學集草木下〕女郎花（ヲミナヘシ）

〔塵袋三〕一女郎花ト云フハヲミナヘシト云フモノ歟他花歟
源順ガ俗呼爲女郎ト云ヘルハ、タレカノ說ナキ心歟、菊女郎花ト云コトハ大槪分明ナル歟、靈鬼志曰、何文濱人也、有一女子、容貌美、卒死葬、明日見其塚、盡成菊花、故名菊花女、亦名女郎花ト云ヘリ、順ガ花色如蒸粟ト云ヘル、ヲキノ女郎花ヲ云ヘルニヤ、又有ル說ニハ如蒸粟云ベキヲ、粟字ヲ誤ナ粟トハカクリ、蒸粟トハムセルクリニハ非ズ、蒸粟ト云フ木名ナリト江帥云ヘリ、魏文帝鍾大理與書云、赤擬雞冠、黃侔蒸粟ト云ヘリ、是ハ玉ノ色ヲ云ヘル也、王逸正部論云、赤如雞冠、黃如蒸粟、白如猪肪、黑如純漆ト云ヘリ、

〔東雅十五草卉〕女郎花ヲミナヘシ〇中略　萬葉集に見えし所は、女郎花のみにあらず、美妾、娘子部四、佳人部爲、美人部師等の字をも用ひたり、壒嚢抄に靈鬼志を引て、菊を女郎花といふ事は、本據ありといひけり、されど古今集の序にをみなへしの一時くねるさいふ事を、ふるく釋せしに、むかし小野頼風といふもの、、八幡に住みて、京なる女と互ひにゆきかよひしに、其女頼風を恨むる事ありて川に身を投て死しけり、死せし時にぬぎ置きし山吹かさねの衣の、土に朽ちて此花咲き出でたりけりといふ事あり、此事また靈鬼志に見えし何文が女の塚に、菊花を生せしといふに似たりし事なれば、女郎花の字借用ひて、ヲミナヘシといはむ、誠にしかるべし、粧樓記に木蘭を女郎花といひしは、只其艶なる事を記せしものと見えたり、又江讀に花色如蒸粟と云ひし事を、文選を引て、蒸粟に作るべしと云ひしも、又誠に然なり、されど此花の如きは、蒸粟にはよく似てけれ、濱にして如何に云ひしものにやあるらん、似たるものどもあれど、それとおにしき者はいまだ見ず、

〔霞玉和歌集秋〕思　女郎花

たれかおるさがの原の思ひ草吾なきならば花は咲らむ

女郎花を思草といふ事は、齋院せむざい草盡に見えたり、天智天皇草名異名には薄といへり、又しをんとも不分明、但女郎花を思草と云事は、俊賴栽合に定らるゝ條勿論なり、又櫻をも能因法師は詠せり、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕敗醬　オ。モ。ヒ。グ。サ。（萬葉集）コ。ノ。テ。ガ。シ。ハ。ヲ。ミ。ナ。ヘ。シ。（共ニ同上）女郎花（和名鈔、古今集、）ヲ。ミ。ナ。メ。シ。ヲ。ミ。ナ。エ。シ。（備前）チ。メ。グ。サ。（和名鈔）菊花女　一名苦齋菜（藥性奇方）壇、一名苦蘵菜（古今醫統）、若蘵菜（名醫類案）

種樹家ニ多ク黄花ノモノヲ栽ユ、卽女郎花ナリ、又山中ニ自生モアリ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、葉ハ玉簪ノ葉ニ似テ多ク叢生ス、圓莖高サ三四尺、節ニ對シテ葉ヲ生ズ、菊葉ニ似テ岐深シ、梢ニ至レバ、變ジテ艾ノ梢葉ノ如シ、夏ノ末花ヲ枝梢ニ簇生ス、未ダ開ザル者ハ細碎ニシテ、粟粒ノ如ク深黄色、已ニ開ク者ハ五出ニシテ色淺ク、臭氣アリ、採テ瓶花ニ供ス、是黄花ノ敗醬ニシテ、救荒本草ノ地花菜ナリ、時珍說クトコロノ者ハ、白花ノ者ヲ指ス、卽男郎花（ヲトコヘシ、和名鈔）ナリ、又南樓花（同上）ニ作ル、ヲメシ、オホトチ、ヲトコヲミナノ花（共ニ古名）トチナ（信州、土州、）ミルナ（勢州）山野ニ自生多シ、苗葉黄花ノモノヨリ肥大ナリ、脚葉ハ岐深クシテ、タマボウキノ葉ニ似タルモアリ、又岐ナクシテ細鋸齒アルモアリテ變葉多シ、皆短毛臭氣アリ、圓莖高サ四五尺、四月ヨリ秋ニ至マデ白花ヲ開ク、黄花ノ者ヨリ大ナリ、又一種春。ノ。ヲ。ミ。ナ。メ。シ。ト云アリ、一名カノコサウ、キヌマキ、サクラガハグサ、コレニ雌雄ノ二種アリ、雄ナル者ハ葉黄花ノ敗醬葉ニ似テ小ナリ、薄クシテ尖レリ、三月ニ花ヲ開ク、紅白相雜ル、故ニカノコサウト云、雌ナル者ハ小草ナリ、高サ一尺許、花葉トモニ小ナリ、深山幽谷溪側ニ多シ、俗ニ和ノ甘松ト云ハ誤リナリ、根甚細小ニシテ臭シ、全ク甘松ノ類ニ非ズ、又一種加州ノ白山ヨリ出ルモ。ミ。ヂ。バ。ノ。ヲ。ミ。ナ。メ。シ。アリ、一名白山ヲミナメシ、種樹家ニテ金鈴花ト云、圓葉ニ

シテ四岐及ビ鋸齒アリテ、カヘデノ葉ノ形ニ似タリ、對生ス、莖高サ一尺許、五月花ヲ開ク深黄色、白花ノ敗醬花ヨリ大ナリ、是蘭書說トコロノ敗醬コレナリ、凡敗醬ハ根ヨリ長キツルヲ四方ヘ引キ、小葉兩對ス、恐多葉ニ似タ敗醬アリ、只白山ヲミナメシハコノ蔓ナシ、

増、白花敗醬ハ、花ノ形黄花ノ者ヨリ大ニシテ花後ニ實アリ、百合實ニ似テ小ナリ、花後根モトヨリ蔓ノ如ク枝ヲ生ズ、長サ五六尺横行ス、其蔓ニ生ズル葉ハ圓長ク、小判ノ形ニシテ莖ニ對生ス、毎節鬚根ヲ生ジ、此ヨリ又苗葉ヲ生ジ、翌年ニ至テ大ニ繁茂シ、舊根枯ル、又子ヲ蒔テヨク生ズ、根ハ牛蒡根ノ如ク、苗根共ニ臭氣アリ、

一種ナ°ミ°ダ°レ°ヲ°ミ°ナ°ヘ°シ°、ナツキヲミナヘシトモ云モノアリ、春月地ニ布テ七八葉攅リ生ズ、初夏莖ヲ抽ス、高サ三四尺、葉莖ニ對ス、葉ノ形紫菀ノ小ナルガ如クニシテ刻アル者アリ刻ナキモノアリ、莖ニ生ズル葉ハ漸ク小ナリ、四月ノ末花始テ開キ、五月ニ盛ナリ、故ニナミダレヲミナヘシト云、黄色ニシテヲミナヘシノ花ト同ジ、根株蔓ヲ生ズルコト亦同ジ、

〔草木育種 下 敗醬花〕敗醬 草本　山の野に自生す、花の黄なるを女郎花と云、花の白きを男郎花といふ、植る地ハ黒ぼくよし、多ハ細なる芥、又ハ木の葉を覆べし、自然に腐て肥となるなり、

〔江家次第 八 七月〕相撲召合

官人以上位袍、番長以下青袍麗纐、○中略 右插、女郎花、

〔古今和歌集 四 秋〕題しらず　僧正遍昭

なにめで・おれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭がもとに、ならへまかりける時に、おとこ山にてをみなへしをみてよめる、　ふるのいまみち

女郎花うしと見つゝぞゆきすぐるおとこ山にしたてりと思へば

〔古今和歌集十物名〕をみなへし　　　　ともの り
白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にもいとをみなへし
〔本朝文粹一雜言詩〕詠女郎花　　　　源順
花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名試欲契偕老、恐惡衰翁首似霜、
〔十訓抄二〕野宮歌合判者は源順なりけり、女房をあまたかたせければ、男方より、
霜枯の翁草とは名のれ共女郎花には猶なびきけり、となんいひたりける、是は
花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名戲欲契偕老、恐惡衰翁首似霜と、順がかけるによりてよめるにや、
いと面白し、同韻なれども、やさしくおぼゆかし、
〔紫式部日記〕わた殿の戸ぐちのつぼねにみいだせば、ほのうちきりたる、あしたの露もまだおち
ぬに、殿〇藤原道長ありかせ給て、みずいじんめして、やり水はらはせ給ふ、はしのみなみなるをみな
へしのいみじうさかりなるを、一枝をらせ給ひて、木丁のかみよりさしのぞかせ給へり、
〔枕草子三〕草の花は
をみなへし
〔明月記〕寛喜元年六月十九日乙卯、今年草樹花實皆遲、黄梅猶纔殘、昨今初開蟬聲、但萩女郎之中有
纔開花、是只自然事歟、
〔武江產物志草〕道灌山ノ產　白花敗醬（をとこめし）　落合邊　敗醬（をみなめし）同上〇森ノ

ごま名稱

〔本草和名十九米穀〕胡麻、陶景注曰、本出大宛、故名胡麻、一名狗虱、一名方莖、一名鴻藏、楊玄操音松羊反、已上本條、一名莫如、一名三光
之道粲、一名古地之更生、一名流朱、一名九蘡、一名歯昌、一名合腴、已上七名出大清經、一名玄秋之沈靈、出大清經、
〔倭名類聚抄十七麻〕胡麻　陶隱居本草注云、胡麻音五馬、諸云字古末、本出大宛、故以名之、
〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按胡麻載在本草經、恐非本出大宛、蓋胡之言烏也、以其色黑有是名、本草圖

經云、胡麻皆園圃所種、稀復野生、苗梗如麻、而葉圓鋭光澤、嫩時可作蔬、王念孫曰、有黑白紅三種、高者四五尺以來、其莖皆方、紅白二種皆四稜、黑者獨六稜、夏秋間作黃華、九月收實、白者子多、作油甚香美、黑者不及、而入藥則良、

〔類聚名義抄 二肉〕胡麻 五麻、誤云ウコマ、 〔同 七广〕胡麻 俗音五マ、誤云ウコマ、 〔同 七子〕胡麻子 オコマ

〔本朝食鑑 穀部二 麻類〕胡麻

沈存中筆談曰、漢使張騫始自大宛得油麻種來、故名胡麻、此所以別大麻也、葉名青蘘、莖名麻藍、音皆亦作藍、巨勝詳于本條、李時珍曰、胡麻取油、以白者爲勝、服食以黑者爲良、此爲確論、今本邦亦然、又曰、麻枯餅乃笮去油麻滓也、亦名麻枡、音辛、荒歲人亦食之、可以養魚肥田、亦周禮草人、強堅用蕡之義、必大麥○平按、枯餅非餅、笮後油滓壓堅作餅形者也、今本邦細碎抹餅稱胡麻餅、其養魚肥田亦然、凡草木瘦瘠者、臘月樹根四邊土中埋麻胡、則至來年枝葉暢、花子繁矣、

〔成形圖說 二十五 穀〕伊曾仁 即胡麻也、重古名と云、未考得す、字呉麻 和名抄引本草注、音五馬、誤云字古末、按に胡を濁音に讀は、郡名書に、上野國多胡郡の胡音知、奥とある類なり、又胡麻呉音ウーマい、しからば字は胡の呉音にして、此國に元より有來る胡麻の外に、胡麻の種を指して字胡麻といひしを、後は胡麻に僅て呉麻とのみ呼びしとは見えたり、 炒荏 胡麻の實炒されば宜しからざるの實言也○中略 呉麻てふ名上世には聞えず、式令の頃は專用ひられて、本草にも供へき、新撰字鏡に、青蘘を胡麻葉と訓たれば、いと早く胡麻の名はありけらし、今尙山野自生のものありて實を成せり、後に外域より貢れるが、子も大きく巨勝などいひし類にて、且其功能等の說よろこびて、食料に用ひしにや、西土も如斯ぞありぬらし、素問經云、麻麥稷黍豆爲五穀、麻卽今油麻、中國有四稜六稜者、張騫從外國得八稜黑種、故又曰胡麻、是始より麻てふ者ありしを、胡地より獲しが色黑く子太かりしほどに、胡麻と名けしなり、天工開物云、胡麻卽脂麻、相傳西漢始自大宛來、古者以麻爲五穀之一、若專以大麻當之、義豈有當哉、窃意詩書五穀之麻、或其種已滅、或卽菽粟之中、別種而漸訛其名號、皆未

胡麻種類

可知也、しかるに大和本艸に、上世に五穀の一とせし麻は、アサノミ也、胡麻にあらずとは、胡麻は胡國より來るとあるに嫌へる歟、大麻の實も穀になして食ふべきにあらず、凡かの書中に、本邦從來所有の物を、動もすれば舶來の種となせるもあり、見む者なまどひそ、

〔庖厨備用倭名本草卷二〕胡麻　倭名抄ニゴマ、多識篇同ジ、考本草、一名巨勝、古ハ中國タヾ大麻アリ、其實ヲ蕡ト云、漢使張騫ハジメテ大宛國ヨリ油麻ノ種ヲ得來リテウヘタリ、故ニ胡麻ト名ヅク、昔胡地ニアリシ時ハ、甚ダ大ナリツルガ、中國ニ入シヨリ小クナル、或云、本ハ胡地ニ生ジテ、形體麻ニ類ス、故ニ胡麻ト名ヅク、八穀ノ中ニ最モ大ニスグレタリ、故ニ巨勝ト名ヅク、遲早二種アリ、黑白赤三色アリ、其莖皆方也、秋白花ヲ開ク、又紫艶ヲ帶タルモアリ、節ゴトニ角ヲムスブ、長サ一寸許、四稜六稜ノモノハ、房ホソクシテ子少シ、七稜八稜ノモノハ、大ニシテ子多シ、胡麻ハ夫婦シテ種ヲマケバ、卽チ生ジ茂盛ス云云、

胡麻、味甘、性平、毒ナシ、傷中虛羸ナルニヨシ、五內ヲ補ヒ、氣力ヲマシ、肌肉ヲ長ジ、髓腦ヲミタシム、久服スレバ身輕クナリテ老セズ、筋骨ヲ堅クシ、耳目ヲ明ラカニシ、飢渴ニタヘ、年ヲノブ、五臟ヲウルホシヤシナヒ、肺氣ヲ補ヒ、心驚ヲトヾメ、大小腸ヲ利ス、寒暑ニタヘ、風濕氣ヲヲビ、旋風頭風ニヨシ、傷寒溫瘧大吐ノ後、虛熱アリテ、オトロヘツカレタルニモヨシ、產ヲモヨホシ、胞ヲオトシ、產後ニオトロヘツカレタルニモヨシ、風病ヲ生ゼズ、風病アル人久食スレバ、行步タヾシクナリ、言語ヨクタナルベシ、

白油麻、味甘、性寒、毒ナシ、虛勞ヲ治シ、腸胃ヲウルホシ、風氣ヲメグラシ、血脈ヲ通ジ、頭上ノ風ヲサリ、肌肉ヲウルホシ、食後ニ生ニテ一合啖テ、終身トヾムルコトナカレ、又乳母是ヲ服スレバ、孩子永ク病ヲ生ゼズ、

元升〇向井曰、右白油麻ハ脂麻ト本草ニイヘリ、常ニ油ヲ取ゴマナルベシ、近年阿蘭陀外科ノ藥

品ニ用フル麻子ハ、常ノ大麻子ニアラズ、其カタチ瓜ノサネノ如クニテチイサク、胡麻ヨリ三四倍モ大ナリ、其色灰青色ニシテ滑也、是大宛國ノ麻子、倭漢ノ胡麻ナルベシ、

〔和漢三才圖會 穀部三〕胡麻　巨勝　方莖　狗蝨　油麻　脂麻 略○中

本綱黑胡麻 甘平 益氣力、長肌肉、塡髓腦、堅筋骨、明耳目、補肺氣、止心驚、利大小腸、久服不老、其中巨勝而肥者、卽巨勝子也、今市肆間僞者多、用眞胡麻烏色者、常九蒸九暴熬擣餌之、與茯苓相宜、

白者 用取油、 赤者 狀如老茄子、殼厚油少、但可食、不堪服食、

葉 甘寒 名靑蘘、候苗出采食、滑美不減於葵也、又以湯浸葉、良久涎出稠黃色、婦人用之梳髮、

花 甘 生禿髮眉毛不生者、以烏麻花陰乾爲末、以烏麻油漬之、日塗、又生肉丁者、擦之卽愈、略○中

按胡麻 黑白本 有三色、其夏至半夏生之交下種、六月開花、七月實熟、最有早晩二種、性惡霖雨、其形狀皆如上說、但白胡麻莖節節葉對生、如車輪、而葉花其色淺、以爲異耳、處處皆有之、而多出於九州、今自中華所渡巨勝子者、色不黑、疑是以茺蔚子僞者乎、惟倭黑胡麻大粒者佳也、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麻麥稻〕胡麻　ウゴマ 和名抄　ゴマ 略○中

上世五穀ノ一トセシ麻ハ、大麻ノミナリ、略○中 胡麻ハ原中國ノ產ニ非ズ、大宛ヨリ來ル、故ニ胡ノ字ヲ冠ユ、然ルニ天工開物ニハ强テ五穀ノ麻トスル者ハ誤レリ、胡麻ニ黑白黃ノ品アリ、藥用ノモノハ皆黑胡麻ナリ、粒ニ大小アリ、蠻州ノ者ハ大ナリ、黑胡麻ヲ巨勝子ト云フ、故ニ巨勝子圓ニハ此品ヲ用ユベシ、然レドモ舶來ノ巨勝子皆茺蔚子ナリ、故ニ賣藥家皆茺蔚子ヲ用テ、巨勝子圓ヲ製スルハ甚誤ナリ、略○中 白胡麻ハ食用トナシ搾テ油トス、略○中 胡麻ハ葉三尖ニシテ、蘭草葉ノ如シ、夏葉間ニ花ヲ生ズ、地黃花ノ如ニシテ白色微紫、後角ヲ結ブ、長サ八九分、黏シテ黑色、角ニ二稜四稜六稜八稜ノ分アリ、二稜四稜ナル者ハ白胡麻ナリ、コレヲ二方胡麻、四方胡麻ト呼ブ、六稜八稜ナル者ハ黑胡麻ナリ、六稜ノ者ヲ六方胡麻ト呼ブ、八稜ノ者ハタルマ胡麻ト呼ブ、其子微黃

胡麻栽培

色ナルヲアブラゴマト云フ、

〔農業全書二五穀〕胡麻

早晩の二種あり、白黒赤の三色あり、黒きが食するにハ藥なり、中にもすきとをりて白きが油多し、其さや六角なるもあり、是は實の色うすあめ色也、蒔時分の事、三四五月の雨の後、しめり氣のあるに蒔べし、白地は胡麻に宜しとて、細砂の肥たるによく出來る物なり、上半月胡麻をうゆべし、下半月は實少し、春蒔たるは虫付て生立にくし、よくそだては實多し、夏まくは長じ安し、されども實は少し、地のこしらへいか程もこまかにこなし置、うるほひよき時分を待て畦作りし、一反に凡種子を五六合の積りして沙と合せ、むらなき樣に蒔べし、蒔たる上をこまざらへにて、さらさらとかるくかき、或柴をたばね、一方に縄を付、蒔たる上を引ならしたるもよし、種子おほひ厚ければ生じかぬる物なり、中うち三度許し、見合よきころに間引べし、肥地は薄きが取實多し、尤蒔糞を多く用ゆべし、かる時分の事、本なりのさや一つ二つ口をひらかんとするを見て刈取、下に筵などをしき、上にもこもむしろにてもおほひ、二三日も蒸をき、其葉腐り落るをふるひすて、小束にたばね、多き時はやねのごとくふき、少きは所に木を二本立、風にたをれぬ樣に念を入、それに長き竹を横にゆひ渡し、此竹に兩方よりたばねたる胡麻を立かけ、口のひらくを見て打とり、又本のごとく兩方より立かけ干、二三日も間を置て又うつべし、此のごとく四五遍うちて悉く盡すべし、又胡麻を夫婦にて同じく蒔バ實多しと云り、是妄言に似たる事といへども、陰陽變化の理り、しゆべからず、芸り中うちたびたびして、畦の中いかにもきれいにすべし、相應の地ある所にては多く作るべし、厚利ある物なり、旱を好みて雨年によからず、他の作り物は少旱痛する所も、胡麻にはくるしからず、

〔百姓傳記十一〕胡麻ヲ蒔ク事

胡麻利用

糞ゴミニ不淨ヲ用ルカ、魚類ノ腐リタルヲ用ルカ、土肥エヲ用ベシ、馬屋肥エ、ゴミ芥、灰ノ類、用ヒベカラズ、油少ナク實消キモノナリ、土地ニ嫌ヒ多シ、石地砂地、燥フク惡シキナリ、土重キ粘アル土地ヲ好ムベシ、實入ヨレ厚クシタハサヤ少ナシ、薄クヌキタチ、枝フカキ、サヤ大形ニ付ナラバ、ウラヲ止メヨ、糞ニハヤク土ヲ寄セ置キ、肥シヲスベシ、○中略苗ヲ後土ヲ深クカブセベカラズ、生出ガタシ、

〔類聚三代格 八〕太政官符

應營陸田事

右撿案内、○中略今被右大臣宣偁、頻年旱災、水田不稔、黎民窮飢、無所取活、往年詔勅、已設條章、近代牧宰、曾無遵行、宜據已上一人專當其事、使民因天之時、就地之利、播殖黍稷稗麥大小豆及胡麻等之類、是則所以富國饒民、支給凶年者也、若懈怠無勤、隨狀科責、○中略

承和七年五月二日 ○又見日本後紀

〔宜禁本草 乾五〕胡麻　甘平、無毒、力、巨勝、胡麻、九蒸九暴、熬搗餌、充肌長生、蒸不熟令人髮落、入角巨勝、四角胡麻、烏者良、白者劣、補五內、益氣力、長肌肉、塡髓腦、明目、治肺氣、潤五臟、益男、初服利大小腸、久食即否、治勞氣、產後羸困、生嚼塗小兒頭瘡及浸淫惡瘡、大効、棄作湯沐潤毛髮、滑皮膚、益血色、湯火傷爛、生嚼厚封、

〔菜譜 下穀〕胡麻○中略　黑胡麻は服食とすべし、上品の藥なり、水に入、しいなのうかべるを去、日にほして後、酒にかきませて、一夜おきて、半日ほどむして、日にほし、よく干たる時、手にてもめば皮さる、やげんにて抹し、いりたる鹽少くはへませて壺に入、口をよくふさぐべし、飯にかけ湯に入、菜にかけて食す、味よく性よし、朝夕食すべし、身をうるほし、虛を補ひ氣をまし、肌肉を長じ、耳目を明らかにす、中風によし、

〔延喜式 三十二大膳〕新嘗祭

宴會雜給

親王以下三位已上幷四位參議　人別略〇中胡麻子二合

四位五位幷命婦　人別略〇中胡麻子一合

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料略〇中胡麻子一合五勺、菓餅料一合、好物料五勺、

〔延喜式典藥三十七〕造儲御藥料

胡麻二石練料

遣諸蕃使

唐使十一種略〇中草藥五十九種略〇中練胡麻一斗六升

渤海使十七種略〇中草藥八十種、練胡麻大五升

〔空穗物語藤原の君〕うごまはあぶらにしぼりてうるに、おほくのせに出て、そのかすみそしろへつかうによし、

〔鈴鹿家記〕應永元年十二月廿六日戊辰、今晩若州御袋ヨリ御モタセ、御內儀樣、御表侍從樣御內不殘食、石花ノ吸物、鯛濱燒ヒツシホリ、蒟蒻(コンニャク)牛房フト煮、

〔本朝食鑑穀一〕胡麻

發明、近世貪於滋陰壯陽者、專求巨勝而常服之、但是知益陰不知補陽、故早失命矣、加旃不知眞巨勝、仍覓黑胡麻之中、而言本邦無巨勝、遂覓華之巨勝、偶得華之巨勝、亦不知茺蔚子之亂、而妄蒸熬調服之、嗚呼可憐哉、若不知巨勝則服黑胡麻而可乎、予〇平野必大之家君、每調製于黑胡麻胡桃肉枸杞葉五加葉山椒白鹽等、細末入飯後白湯而服、以爲旦夕之課、終老强健無病、予亦迄今用之、以爲遺訓焉、

〔享保集成絲綸錄三十四〕享保十三申年十二月

一唐胡麻より油絞り出し、燈油幷蠟燭等に用候儀、今度淺草橋外新地喜兵衛、佐右衛門と申者、相願候ニ付、吟味之上申付候、依之關八州之內、御領私領共、右兩人之者ゟ、唐胡麻種請取植付可申候、田地芝地原地之所にて實、無構出來候之由、百姓勝手にも可相成候間、植付樣之儀者、右兩人之者へ承合作り可申候、

一唐胡麻出來之上、壹石ニ付銀貳拾目之積り、願人共方江何程にても買取候筈、又は油にて請取度ものは、種壹石に付油壹斗五合宛相渡候筈に候間、兩樣之內、相對次第可致候、尤江戶近邊は不及申、何之所にて實作り度と存候ものは、右願人方江參、種請取可申候、

一遠方に而江戶出し不勝手之所は、可致相對由候間、可得其意候、

右之通、今度關八州江相觸候間、右在々ゟ作り出し候唐胡麻之分は、願人の外之者、買取候儀、堅仕間敷、右之段、町中へ可觸知候也、

十二月

青蘘

〔新撰字鏡草〕青蘘胡麻苗

〔本草和名十九米穀〕青蘘楊玄操音松羊反　巨勝苗也、

〔醫心方一〕青蘘巨勝苗也、胡麻淳黑者、名巨勝、

〔康賴本草米穀〕青蘘　味甘寒、无毒、和コマノハ、卽胡麻葉也、其時分採之陰干、巨勝苗也、胡麻淳黑者名巨勝、

〔菜譜下〕胡麻〇中略　苗を青蘘と云、春秋子をまきて、苗を取てゆびき食之、性よし、味はよからず、

〔宜禁本草乾五穀〕青蘘　甘寒、巨勝苗也、主風寒濕痺、益氣、補腦髓、堅筋骨、久服聰明增壽、以湯浸之、良久涎出湯黃、沐潤毛髮、

胡麻產地

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

山城國（中略）胡麻子四石〇中略　尾張國（中略）胡麻子四石〇中略　參河國（中略）胡麻子三石〇中略　遠江國（中略）胡麻子二石〇中略　近江國（中略）胡麻子五石〇中略　美濃國（中略）胡麻子四石〇中略　丹波國（中略）胡麻子五石〇中略　播磨國（中略）胡麻子三石〇中略　備前國（中略）胡麻子三石〇中略　備後國（中略）胡麻子二石〇中略　紀伊國（中略）胡麻子五石〇中略　阿波國（中略）胡麻子四石〇中略　伊豫國（中略）胡麻子五石〇中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

（東大寺正倉院文書十五）尾張國天平六年正税帳

尾張國司解　申收納天平六年字〇以下蟲損

合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合〇中略

胡麻子肆斛　直稻壹伯貳拾束斗別三束

（東大寺正倉院文書四十二）豐後國天平九年正税帳

球珠郡

天平八年定正税稻穀壹萬漆仟貳伯貳拾斛陸斗捌升貳合貳勺〇中略

買胡麻子參斛肆斗肆升　直稻壹伯漆拾肆束束別二升　儲府料春、稻玖伯束

（朝野群載二十七諸國公文）主計寮解　申返抄事

備前國應德二年雜米使正六位上行

年料白米仟伯拾伍斛

大炊寮納〇中略　胡麻子參斛〇中略

應德三年十二月廿九日　正六位上行權少屬縣宿禰〇以下署名略

（延喜式三十七典藥）諸國進年料雜藥

攝津國卌四種〇中略　胡麻子各四升五合、伊勢國五十種〇中略　胡麻子二升、參河國廿一種〇中略　胡麻子三合、相模國卌二種〇中略　桃人胡麻子三斗、上野國十五種〇中略　胡麻、蜀椒各一斗、讃岐國

卌七種、〈○中略〉署預、麥門冬、胡麻、胡各一斗、伊豫國卅二種、〈○中略〉桃人、胡麻子各一斗、

〔毛吹草〕〈三〉丹後 胡麻 伊豫 胡麻 肥後 胡麻

〔本朝食鑑〕〈一穀〉胡麻

京師五畿多種之、以山城之產爲第一、薩隅州多種之、亦不相及、黑白倶常用、而爲滋腎烏髮之藥、或用搾油搾抹餅面食、此號胡麻餅、

〔新撰字鏡〕〈草〉玄參〈於○之○久○佐○〉

〔本草和名〕〈八草〉玄參、一名重臺、〈楊玄操音直龍反〉一名玄臺、一名鹿腸、一名正馬、一名咸、一名端、一名類草、〈出陶景注〉一名鬼藏、〈出釋藥性〉玄參者玄精也、〈出范汪方〉和名於之久佐、

〈〔頭注〕〉按陶注无類草名、今注有類名草、按藏器與氏當是咸字、

〔倭名類聚抄〕〈二十草〉玄參 本草云、玄參一名重臺、〈和名於之久佐〉

〔箋注倭名類聚抄〕〈十草〉陶注、莖似人參而長大、根甚黑亦微香、道家時用、亦以合香、蘇注、玄參根苗並臭、莖亦不似人參、陶云、道家亦以合香、未見其理也、今注詳、此藥莖方大、高四五尺、紫赤色而有細毛、葉如掌大而尖長、根生青白、乾即紫黑、新者潤膩、合香用之、俗呼爲鹿腸草、陶云似人參、唐本注言、根苗並臭、蓋未深識之、圖經、二月生苗、葉似脂麻、又如槐柳、細莖青紫色、七月開花青碧色、八月結實黑色、亦有白花、莖有節若竹者、高五六尺、葉如鋸齒、其根一根可生五七枚、陶云、道家時用合香、今人有傳其法云々、可以熏衣、御覽引吳普云、玄參二月生葉、如梅有毛、四々相値、似芍藥、黑莖、莖方、高四五尺、華赤生枝間、四月實黑、

〔東雅〕〈十五草卉〉玄參をオシクサといふも、古語拾遺に見えし天押草といふもの、如し、

〔古語拾遺〕御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、〈○中略〉依敎奉謝、御歲神答曰、實吾意也、宜以麻柄作桛桛之、乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之、

地黃

〔重修本草綱目啓蒙（七山草）〕玄參　ヲシクサ（延喜式）　コマグサ　ゴマノハグサ　一名玄武精（千金方）

野芝麻（譜群方）　鹿腸生（類纂要書）　黑玄參（證治準繩）　山麻（藥性奇方）　元參（本草新編）　能消草（藥鏡本草）　凌霄草（村家方）

數種アリ、武州道灌山目黑大宮八幡、及和州ニ產スルモノ眞物ナリ、世人訛傳テ唐種ノ玄參ト云、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、莖ニ四稜アリ、高サ四五尺、葉兩兩相對ス、形長クシテ尖リ、周邊ニ鋸齒アリテ、兎兒（トラノオ）尾葉ニ似テ淡綠色、深秋ニ至リ枝梢ゴトニ穗ヲ出シ、多ク花ヲ綴ル、長サ六七寸、肥タル者ハ一二尺ニ至ル、穗ニ枝ナク花色淡黃、大サ三分許、形チ小臼ノ如シ、後小尖莢ヲ結ブ、內ニ細黑子アリ、根ハ直クシテ肥大、長サ二三寸、數塊アツマリテ天門冬（クサスギカヅラ）根ノ如ク、色白シ、コレヲ切レバ便チ黑色ニ變ジテ漆ノ如ク、此根乾カシテ柔潤ナリ、上品トス、京師山中ニ產スルモノハ皆根堅硬、是レ山玄參ニシテ下品ナリ、葉形ハ異ナラズ、又濶短ニシテ尖者アリ、皆深綠色穗ニ枝多ク、花色紫黑又黃色ヲ帶ルモノアリ、俱ニ俗ヒナノウスツボト呼、略シテヒナノウストト云、花ノ形ニヨルナリ、江州ニテスキノサキト呼ブ、葉ノ形ニ因ルナリ、又ヒナノウスニ一種葉短ク鋸齒粗ナル者アリ、最下品ナリ、市中ニ濵淺多シ、武州和州ノ產モ用ルニ堪タリ、

〔草木育種後編（下藥品）〕玄參（こまくさ）（本草）　羅甸名にてスコロヒユラリヤといひ、和蘭にてスクローヘル、コロイドといふ、山の赤土或少し陰地にてもよし、畦に春芽出しの比分けて植べし、一年に花實あり、實生自然とあるを畦へ分ち植て、度々養水を澆ぎてよし、

〔延喜式（三十七典藥）〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種（中略）○玄參、（中略）○升麻各三斤、　伊賀國廿三種（中略）○玄參、升麻各八斤、（下略）○

〔武江產物志（藥草）〕道灌山ノ產　玄參（中畧）

〔本草和名（六草）〕乾地黃、一名地髓、一名芐、（音戶仁諝）一名芑、（音起仁諝）一名地脈、（本條）一名蜀黃、（出神仙服餌方）花名羊乳、（出雜要訣）

地黃者土精也、（出大淸經）

〔倭名類聚抄 二十 草〕地黄　本草云、地黄一名地髓、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕本草圖經云、二月生葉、布地便出、似車前葉、上有皺文而不光、高者及尺餘、低者三四寸、其花似油麻花而紅紫色、亦有黄花者、其實作房如連翹、子甚細而沙褐色、根如人手指、通黄色、粗細長短不常、衍義云、地黄葉如甘露子、花如脂麻花、但有細斑點、花莖有微細短白毛、李時珍曰、其苗初生塌地、葉如山白菜而毛澁、葉面深青色、又似小芥葉而頗厚、不叉丁、葉中攛莖、上有細毛、莖梢開小筒子花、紅黄色、結實如小麦粒、根長四五寸、細如手指、皮赤黄色、如羊蹄根及胡蘿蔔狀、曝乾乃黒、

〔多識編 二 草部〕地黄、左○乎○比○米○、別名芐(音戸)芑(音起)、地髓(本經)

〔宜禁本草 乾集 中 草〕地黄　甘苦寒、主男五勞七傷、女胞漏下血、塡骨髓、長肌肉、利耳目、心法曰、生大寒涼血、熟微溫補腎、葉可作羹、

〔大和本草 六 草〕地黄　生熟トモニ肥大ナルヲ可用、熟ハ生地黄ヲ吾家ニテ蒸スベシ、藥肆ヨリ來ヲ必不可用、好酒ニ砂仁ノ末ヲ入拌ク、地黄ヲ不剉シテ浸シ、柳甑ニカケ、陶釜ニテ度々蒸スベシ、鐵鍋ニテ不可蒸、今日蒸シ冷ヘテ後、明日又右ノ砂仁酒ニヒタシ蒸ベシ、一日ノ内ニテモヨク冷テ後蒸ベシ、蒸後竹刀ニテ剉ミ焙ル、生地黄ハ剉テ酒ニヒタシ、日ニ乾シテ炒ル、或生薑汁ニ浸シテ炒ル事アリ、和地黄ノ上品ハ大和ヨリ出ヅ、唐ヨリ來ルニマサレリ、大和ニ地黄村アリ多ク產ス、コレヲウフルニ下濕ノ地ヲイム、上ニアクタアルヲイム、又新糞ヲ忌ム、間遠クウヘテ、其間ニ久シキ糞水ヲソヽグベシ、甚繁昌ス、生ナルヲツキシボリ、汁ヲコレトリ、土ナベニテ煮テ膏トスルハ性最ヨシ、

〔物類品隲 三 草〕地黄　大和產上品、淡黄花ヲ開ク、一種紫花ノモノ、和名千里駒ト云、根堅シテ藥用ニ堪ズ、或云、是附錄ノ胡面莽ナラント未詳、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕地黄　サ○ホ○ヒ○メ○(延喜式)　今ハ通名　一名還元大品(輟耕錄)　陽精(本草)　芦

芐ト同（品字箋） 生地黄一名鮮地黄（本經逢原） 玉枝（種杏仙方） 熟地黄一名金筍（種杏仙方）

葉ハ芥葉ニ似テ厚ク、鋸歯粗ク浅緑色ニシテ皺ミ、兩面ニ毛アリ、初ハ地ニ就テ叢生ス、其宿根ノ者ハ春薹ヲ抽コト高サ六七寸、肥地ノ者ハ一尺許葉互生ス、四月莖梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、形チ筒子ニシテ末ハ五瓣ナリ、胡麻花ニ似テ大ニシテ、黄白色ニ淡紫色ヲ雜ユ、花ノ後實アレドモ、熟セズ、其莖枯テ旁ヨリ新葉ヲ生ズ、根ヲ采ル者ハ花ヲ開クコトヲ忌、故ニ宿根ヲ栽ズ、十月ニ根ヲ掘リ出シ、乾土中ニ貯ヘ置キ、五月ニ至リテ去年ノ節ヲ采リ、熟土ニ栽ユル時ハ即生長ス、蘆頭ト根トノツナギヲ節ト云、又五月ニ去年ノ新根ヲ數段ニ切テ栽ルモ可ナリ、

地黄ニ白矢赤矢ノ二品アリ、白矢ハ根細クシテ皮薄ク、肉厚シテ皮ノ皺紋緻密ナリ、藥用ニ上品トス、然レドモ此種養ガタク腐リ易シ、赤矢ハ根肥大ニシテ皮厚ク、皺紋密ナラズシテ疙瘩アリ、下品トス、然レドモ此種養易ク繁茂シ、冬月カコハザレドモ保チ易シ、故ニ今諸州共ニ此種ヲ栽ユ、是即筑前種ナリ、古ハ和州ニ白矢ノ種ヲ栽ユ、故ニ大和ノ地黄ヲ上品トス、其後大和ニハ赤矢ノ種ヲ栽ヘ、山城ノ郷ニハ白矢ノ種ヲ栽ユ、故ニ山城ヲ上品トス、今ニ至リテハ山城ニモ赤矢ヲ栽ユ、故ニ大和山城同品ニシテ優劣ナシ、是皆赤矢ハ養ヤスクシテ、其根肥大ナル故ニ利ニ走ルナリ、然レドモ其白矢ノ種ノ廢スルヲ惜スベシ、大和高市郡地黄村ニ多ク地黄ヲ作リ出スコトヲ、大和本草ニ載スレドモ、今ハ其ノ地ニ地黄ヲ栽ズ、其ノ隣村ノ越村ニテ多ク作ル、藥店ニ漢渡ノ地黄アレドモ皆陳久ニシテ佳ナラズ、和産ヲ良トス、其内大和山城皆根長大ナリ、優リトス、其蘆頭ノ下細クシテ疙瘩多キ者ヲ、地黄ノ節ト呼ブ、藥ニ入ズ、筑前ヨリ來ル地黄ハ、肥大ナレドモ甚短シ劣リトス、

乾地黄ハ冬掘リタル時、直ニ暴乾シ、肉黄色ナル者良ナリ、然レドモ久ヲ經レバ黒キニ變ズ、藥店ニ未ダ全ク乾カザル者ヲ貯ヘ置キ、クサリテ色黒キ者多シ、宜ク撰ブベシ、

〔延喜式典藥三十七〕凡山城國地二町在葛野郡十三條水谷下里、四至、東限峯山、南限堀越山谷口、西限峯、北限宇河合、永爲殖供御地黃地、

〔農業全書十藥種之類〕地黃

地黃是も四物湯六味丸等に入り、其外諸方に出たる良藥にて、醫家多く用ゆる物なり、土地にあひたる所にては多く作るべし、たねにする根を收め置事、冬月掘取たる中にて、甚大きも宜しからず、もとより小きはあし、、中ほどなるをゑらびて、壺にても桶にても、又わらのふごにても、細沙を入れ、地黃をいけ置、風ひかざる樣にすべし、尤かはきたるは痛むゆへ、肥たる沙を多く入て厚くおほひ、屋の内に置て、折々乾きて痛むや否やを見て、又もとのごとく收めをくべし、うゆる時分は三四月よし、寒中より耕しこなし、糞をもうち、さらし置たるよし、若冬よりこしらへ置たる地なくば、早麥の跡もくるしからず、畦作りし、六七寸間を置て橫筋を切、となりのかぶと、ぐのめになる樣に、ならびは四五寸あてにうへ、土をおほひ置て、生付とひとしく、何糞にはかぎらず多く入べし、其後がんぎの高き所を、左右へかきわけ、馬屋糞を入べし、なくばあくたにても多く入をくべし、此時は培ふに及ばず、初め苗の小さき時、二三度も根の廻りをかき、わきの土をもみくだき、一科つ、、糞に培ふべし、始終畦の中に草少もをくべからず、掘とる事は、十一二月の間、すきか鍬を以て、根に當らざる樣にほるべし、鐵を忌物にて、すきくはの當る事を甚きらへばなり、さて淨く洗ひ、筵などに攤げて、よく干あぐべし、干かねる物にて、春までも晴天には毎日出して、中まで黑く成たるを見て、收めをくべし、大和にて作る法の大抵是なり、肥たる性のよき黑土よし、大和地黃のすぐれて大きは、一斤の代銀二兩許に藥屋へうると云なり、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、〇中略干地黃六斗四升、　相模國卅二種、〇中略干地黃三升、〇下略

〔紀伊續風土記（物産三本草）〕地黄

花戸及醫家藥家等に栽う、又近年名草郡山東莊鹽谷村邊に多し、栽ゑて若山の藥舖中へ出す、

〔本朝世事談綺（一飲食）〕地黄煎

古へ堂上より醫家に命じて、地黄煎を製せしむ、其法、穀芽末粉に、地黄の汁を合せ、これを煉て用ゆ、脾胃を潤し、氣血を益すの良糕なり、今は地黄の汁を用ひずといへども、此名を以す、京稲荷前にて專製之、江戸にては下り飴と稱す、

〔三代實錄（四清和）〕貞觀二年十二月二十九日甲戌、從五位下行內藥正大神朝臣虎主卒、（中略）虎主性好戲謔、最爲滑稽、與人言談、必以對事、嘗出自禁中、向作地黄煎之處、途逢友人、問云、向何處去、虎主答云、奉天皇命、向地黄處、此類也、然也然處治多効、人皆要引、療病之工、廣泉沒後、虎主獨歩、太收聲價焉、

〔本草和名（八草）〕黄芩（仁諝音、渠金反）一名腐腸（其腹中皆爛、故以名之）一名空腸、一名內虛、一名黄久、一名經芩（楊玄操音、士替反）一名妬婦、一名子芩（員者）一名宿芩（破者）一名純尾芩（出蘇敬注）一名虹勝、一名經芩、一名綱眉、一名印頭（出釋藥性）一名靑結、一名北節（已上出[illegible]化方）和名比○々○良○岐○、一名波○比○之○波○、

〔倭名類聚抄（二十木）〕黄芩、本草云、黄芩（音琴、和名比々良木）楊氏漢語抄云、杠谷樹（杠音江、和名上同）一云巴戟天、

〔箋注倭名類聚抄（十木）〕按杠谷樹、黄芩、巴戟天三物皆有刺、故俱以比々良岐名之、䟽然其物各異、巴戟天已出草類、宜以黄芩移草類、此獨存杠谷樹、源君合三物爲一者誤、

〔重修本草綱目啓蒙（八山草）〕黄芩　ヤ○マ○ヒ○ヒ○ラ○ギ○（延喜式）　コ○ガ○ネ○ヤ○ナ○ギ○（種樹家）　今ハ通名　一名枯腸（事物異名）　裏腐草（採取月令）　裏朽斤草（同上）　裏朽草（村家方）　枯黄芩（遵生八牋）　片黄芩（醫學正傳）　枯芩（本草原始）　子芩一名葩荳（正字通）　條黄芩（遵生八牋）　實芩（藥性要略大全）

市中ニ販グトコロ三品アリ、唐朝鮮異ナリ、唐ヲ上品トス、輕シテ色黄黒味最苦シ、ソノ色クロミノ多キ者ヲシンチウデト云フ、是老根ナリ、釋名ニ老根嫩根ノ名ヲ別ツ、前ニ出ス八名ハ皆老根

ナリ、形大ニシテ内虚ス、後ニ列スル四名ハ皆嫩根ナリ、形細長ニシテ内實ス、コレヲ藥舗ニテ舶樣ト云、朝鮮ハ唐ヨリ黄色鮮カニシテ堅實苦味ウスシ、故ニ下品トス、朝鮮ノ中ニモ唐樣ト呼モノハ、形色混ジヤスシ、此亦苦味ウスシ、ソノ眞ノ黄芩ト呼ブ者ハ、即朝鮮ノ種ヲ栽ルモノナリ、和州宇陀ヨリ出ス、根色鮮ナレドモ、苦味ウスクシテ脂多シ、最下品ナリ、其苗高サ二三尺一根ニ叢生ス、葉ハ千屈菜ノ葉ニ似テ毛茸アリ、兩對ス、秋ニ至リ莖末ニ穗ヲナス、長サ四五寸、花ノ長サ一寸許、本ハ細筒ニシテ端ハ五瓣ニ分レ、コラセウモンノ花ノ如ニシテ紫色ナリ、又淡紫色、又青色ヲ帶ルモノ、又白色アリ、白色ノモノハ稀ナリ、花後蕚中ニ四ノ小黒子アリ、子熟シテ苗枯ル、子ヲ種テ生ジヤスシ、根ハ年ヲ經テ枯レズ、然レドモ久モノハ内腐テ枯レ易シ、又一種古ヨリ和ノ黄芩ト呼來ル草アリ、サヽヤキグサトモ、チヤンパギクトモ云、是博落廻ナリ、毒草類萆麻ノ附錄ニ出ス、ソノ根ノ形色微黄芩ニ似タリ、故ニ藥肆ニテ黄芩ニ雜ユ、コレヲナシコミト稱ス、此草ハ山中ニ多シ、根ハ肥大ニシテ蠹蛀シテ、内空ニナリタルモアリ、然レドモ此根ハ極テ乾スト雖モ猶軟ナリ、黄芩ノ堅脆ナルニ異ナリ、

〔草木育種後編 下品〕黄芩（わうごん）草本 和名やまひゝらぎ、和名鈔 俗にこがねやなぎといふ、花に白と碧とあり、享保年中、野翁先生（○阿部將翁）甲州より採り得官園に上る、又諸種も享保年間唐山より來る、予（○阿部喜任）會津山中にて自生のものを得たり、形狀皆同じ、根腐りて上品なり、春分の比、畦に種子を布て生ず、其年に花實あり、當時江戸近郊にても多く作る、是を眞の黄芩といふ、作り方惡しき故に、藥用に下品なり、山中赤土の地を選み、是に畦を作り、草綿子（わた）糠の類きり雜へ、是へ種子を布き、其後は糞水も少しも澆ぐ事なく、七八年過堀り出し見るべし、蘆頭腐りてよし、世間にて作るは斤兩の減ずる事を恐れ、糞汁多く用ひ、三年にして堀る故に功なし、又山中野地の分ちなく、ふり蒔にして數十年の後採り得は、自然生の如く彌上品なるべし、

馬先蒿

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥
尾張國卅六種、黄芩十四斤、遠江國十三種、黄芩十斤、〇下略

〔本草和名 草九〕馬先蒿、一名馬矢蒿、一名爛石草、出陶景注一名虎麻、一名馬新蒿、出蘇敬注和名波〇々〇古〇久〇佐〇、

〔倭名類聚抄 草二十〕馬先蒿　陶隱居本草注云、馬先蒿一名爛石草、和名比〇木〇與〇毛〇木〇

〔箋注倭名類聚抄 草十〕蘇云、此葉大如茺蔚、花紅白色、實八月九月熟、俗謂之虎麻、是也、一名馬新蒿、茺蔚苗短小、子夏中熟、而初生二種極相似也、毛詩小雅蓼莪正義引義疏云、蔚牡蒿也、三月始生、七月華、華似胡麻華而紫赤、八月爲角、角似小豆角、鋭而長、一名馬新蒿、馬新即馬先也、爾雅、蔚牡菣、釋曰、蔚即蒿之雄無子者、郭注、謂無子者、圖經曰、郭璞云、無子、陸機云、有子、二說小異、今當用有子者爲正、時珍曰、別錄牡蒿、馬先蒿、原是二條、陸機所謂有子者、乃馬先蒿、而復引無子之牡蒿釋之、誤矣、又云、蒿氣如馬矢、故名馬先、乃馬矢之誤也、馬新又馬先之訛也、按本草云、一名馬屎蒿、是李說所由生也、

〔多識編 隰草二〕馬先蒿、今案牟〇末〇乃〇比〇利〇久〇左〇、異名虎麻、

〔重修本草綱目啓蒙 隰草十〕馬先蒿　シ〇ホ〇ガ〇マ〇ギ〇ク〇　ノ〇コ〇ギ〇リ〇ナ〇ウ〇江州　一名虎麻茺蔚本草蒙筌
山中ニ多ク生ズ、向陽溪側ニ多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ジ、高サ二三尺、葉ノ形、楡(ニレノ)葉ニ似テ長ク、岐深シテ細鋸齒毛茸アリテ枝葉繁布ス、八月葉間ゴトニ花アリ、大サ六七分、豆ノ花ノ形ニシテ壓扁スルガ如シ、紅紫色花後ニ小扁莢ヲ結ブ、長サ二三分ニシテ尖レリ、内ニ細子アリ、又別ニ一種花相似テ小ク、葉ハ陰地厥(ハナワラビ)ノ葉ニ似テ、薄軟ニシテ毛茸アリテ、手バルモノアリ、小〇シ〇ホ〇ガ〇マ〇ギ〇ク〇ト云、

〔武江產物志 藥草〕井ノ頭邊ノ產　馬先蒿 廣尾ニモ

通泉草

〔重修本草綱目啓蒙 石草十六〕石長生〇中略
通泉草ハ　カ〇マ〇ツ〇カ〇ナ〇　ハ〇ゼ〇ナ〇泉州　ホ〇カ〇ケ〇サ〇ウ〇　ジ〇ロ〇タ〇ラ〇ウ〇バ〇ナ〇　カ〇ハ〇ラ〇ケ〇ナ〇共上同　サ〇

ギ゜ゴ゜ケ゜京　サ゜ギ゜ナ゜ウ゜同上　ア゜ゼ゜ナ゜　タ゜ハ゜ゼ゜防州　チ゜ド゜リ゜サ゜ウ゜筑前　ム゜ギ゜メ゜シ゜バ゜ナ゜江州
カ゜ミ゜ツ゜カ゜ウ゜同上　モ゜チ゜ハ゜ゼ゜越前　ト゜ノ゜ヽ゜ム゜マ゜肥前　ミ゜ヽ゜ヅ゜ク゜勢州　コ゜ジ゜タ゜

隨地皆アリ、葉ハ薺葉ニ似テ短小、春ニ至リ莖ノ高サ一二寸ニシテ花ヲ開ク、大サ三四分、淡紫色或ハ淡紫碧色、內ニ黄蘂アリ、外ニ青萼アリテコレヲウク、日ヲ逐テ花ヲ開キ、漸ク穗長クナル、白花ノ者ハ大サ五六分、勢州ニテザヾシバト呼ブ、倶ニ夏月根ヨリ蔓ヲ延キ葉對生シ、節ゴトニ根ヲ生ジ叢ヲナシ甚繁茂ス、一種夏月花ヲ開ク者ヲ、夏ノサギサウト呼ブ、一名ナツハゼ、花葉共ニ小ナリ、其秋ニ至テ花ヲ開ク者ヲ秋ハゼト云フ、更ニ小ナリ、一種黄花ノサギサウハ深山溪澗ニ生ズ、花下ニ長實アリ、一名ミブホウブキ、

鈴掛草

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕鈴掛草 俗稱 本字未詳

按鈴掛草引蔓、其葉似櫻而圓小、夏秋葉間著花、紫色而圓、略似千日紅之花、

威靈仙

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕威靈仙 ○中略

又一種草本ノ者ハ蘇頌ノ說クトコロノ威靈仙ナリ、和名クガイサウ或ハクカイサウトモ云フ、一名トラノオ 備前 ヤマウヽ 佐州 クルマナンシチ 江戸 此草人家ニ多ク栽ユ、春舊根ヨリ叢生ス、莖圓ニシテ高サ一二尺、葉ハ形長クシテ細鋸齒アリ、鳳仙葉ニ似テ厚ク深綠色、五葉ゴトニ節ニ對生シ層ヲナス、肥タル者ハ十二三層、小ナル者ハ八九層、故ニクカイサウト名ク、夏月莖梢ニ長穗ヲ出ス、六七寸許、小花密ニ綴リ、淡紫碧色、後小尖莢ヲ結ブ、根ハ短シテ黄褐微黒、一種江州伊吹山ニ產スル者ハ、莖短ク葉モ亦短シ、六七葉或ハ二三葉對生シ、或ハ互生シ、齊カラズ、又一種奥州南部津輕ヨリ出ル者ハ、莖葉ニ毛茸アリ、花穗扁ク或ハ穗ヲナサズ、花小ニシテ色淺シ、其根細長一尺許、淺黄褐微黒ヲ帶ブ、

列當

〔重修本草綱目啓蒙 七 山草〕列當 ハ゜マ゜ウ゜ツ゜ボ゜ 一名粟列 群芳譜 紫花地丁 本草原始、同名多シ、

夏月湖海邊沙地ニ多ク生ズ、又向陽山間ニモアリ、莖高サ五七寸、或ハ一尺許、淡紅色、ソノ半以下ニハ鱗甲アリ、半以上ハ花繁ク綴リテ長穗ヲナス、淺紫色形滁州夏枯草(ウツボグサ)穗ニ似タリ、根ニ黄色ノ小塊アリ、長サ半寸許、野州日光山陰地ニ生ズルモノハ高サ一尺許、莖肥大ニシテ花ハ天麻花(ニラカフヤカラ)ニ似タリ、コレヲヲカサダケ、一名キムラダケト云フ、駿州富士山ニ產スルモノハ稍瘠小ナリ、倶ニ根ハ大塊ヲナシ、尖ゴトニ苗ヲ發ス、世人以テ肉蓯蓉トスルモノハ穏ナラズ、ソノ莖中空シクシテ舶來ノ者ニ類セズ、又常州筑波和州多武峯山中ノ者ハ、苗瘠小ニシテ莖ニ鱗甲ナク、根ニ多鱗甲アリテ、嫩キ松卵ノ形ノ如クニシテ狹細ナリ、是皆列當ノ一種ナリ、

肉蓯蓉

〔物類品隲 三草〕肉蓯蓉　三四月ニ生ズ、狀稍天麻ニ類ス、莖太ク鱗甲アリ、長ジテ後花ヲ開、其形亦天麻ノ花ニ似タリ、日光產上品、方言ヲ。カ。サ。ダ。ケ。、又キ。ム。ラ。ダ。ケ。ト云、徑寸餘、長尺餘ノモノアリ、讃岐香川郡安原村產上品、以上二種壬午主品中予(平賀鳩溪)具之、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕肉蓯蓉　一名地精(石藥爾雅、同名多シ、)　金筍(本草彙言)　碧水龍(種杏仙方)　堉、一名肉蓯蓉、(藥性奇方)　胥天(清異錄)

和產ナシ、近年新渡甚ダ多シ、明和庚寅○(七年)ニモ多ク渡ル、皆甕中ニ鹽藏ス、長サ一尺許、徑一寸餘、或二三寸、積リテ內白色ナル者アリ、黄紅色ナル者アリ、新ナルモノハ紅ニシテ透徹ス、皆上品ナリ、ソノ黑色ナル者ハ下品ナリ、倶ニ外ニ松子(マツカサ)鱗甲ノ如キモノ多クツケリ、切開ケバ堅硬ニシテ肉ヲ切ルガ如クナルヲ眞物トス、水ニ浸ス時ハ鱗甲ノ狀見ルベシ、然レドモ久シク水中ニ置ケバ爛碎シヤスシ、又鱗甲ナキ者モアリ、良ナラズ、

〔日光山志 四〕金精峠(中略)○此峠の古名は樹(こむら)峠なり、(中略)○五音相通しけるよりして、いつしかきむら峠と轉訛せるなり、茲の山中に肉蓯蓉多く生ず、其くさむらの名をもきむら茸と呼り、

茜草

〔本草和名 七草〕茜根(七見反、陶景注云、今染絳草也、)　一名地血、一名茹藘、(仁諝音如閭二音)　一名茅蒐、(所流反、)　一名蒨、(仁諝音千練反、已上出陶景注、)

一名絳根、一名紅藍、一名染緋草、（已上三名出兼名苑）一名蒨（〇音倩、説文茜同）、一名蒐（出耆婆要訣）、和名阿加禰、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕茜　兼名苑注云、茜（草見反、和名阿加禰）可以染緋者也、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕爾雅、茹藘、茅蒐、郭注、今之蒨也、可以染絳、説文、茅蒐、茹藘、人血所生、可以染絳、又云、茜、茅蒐也、本草云、茜根可以染絳、陶云、此則今染絳茜草也、蜀本圖經云、染緋草、葉似棗葉、頭尖下濶、莖葉俱濇、四五葉對生節間、蔓延草木上、根紫赤色、李時珍曰、茜草十二月生苗、蔓延數尺、方莖中空有筋、外有細刺、數寸一節、毎節五葉、葉如烏藥葉而糙濇、面青背綠、七八月開花、結實如小椒大、中有細子、充阿加禰爲允、按皇國染緋亦用茜根、見延喜式、今俗以紅花染者、呼緋誤、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕茜草　倩（音）茜　風車草　茹藘　血見愁　地血　過山龍　茅蒐　染緋草　牛蔓　和名阿加禰〇中略

按茜赤根也、河州石川郡山田茜爲上、可以染絳、近世用蘇方木代茜、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕茜草　アカネ（根赤キ故ニ名ク）　アカネカヅラ（勢州）　ベニカヅラ（雲州）　一名地蘇木（古今註）　地紅（品字箋）　綪（同上）　鐵口刺（通雅）　蒨（同上）　蒨（正字通）　過山紅（類書纂要）　高邑豆蔻（郷藥本草）　古邑道松（村家方）　古邑豆蔻（月令廣義）　増、一名蘆茹（蒙筌中論）　夜紅燈（竹堂經驗方）　蛇遊草（外科大成）

山野ニ甚多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、藤蔓長延莖方ニシテ毛刺アリテ中空シ、葉ハ四四相對ス、形稍ニシテ蕺葉ニ似テ鋸齒ナシ、秋ノ初藤梢ニ花ヲ開キ大穗ヲナス、枝叉甚多シ、白花ヲ多ク綴ル、大サ一分許四瓣、後圓實ヲ結ブ、大サ二分許、生ハ綠色、熟スレバ黑色、秋深テ苗枯ル、其根細條多ク簇リ、黄赤色、掘テ藥用染用トス、一種草本ノ者ハ深山中ニ生ズ、圓莖高サ一尺餘刺ナシ、葉ノ形同シテ三四層ヲナス、四月莖梢ニ花ヲ生ズ、形色相同ジ、只穗長サ二三寸、根ノ形色モ亦異ナラズ、又一種、方莖ナルモノアリ、〇中略

増、一種特生ニシテ小葉ノモノアリ、高サ僅ニ五六寸、此レニハ莖ニ毛刺ナシ、ツクバネサウト呼

ブ、又一種ツクバチサウノ形ニシテ、莖葉共ニ毛刺アルモノアリ、ミヤマアカネト云、共ニ山中陰地ニ産ス、

〔農業全書三六草〕茜根（あかね）

あかねは山野にをのづから生るも多き物なれども、土地を吟味し糞（こや）し、手入して畠に作るにしかず、土の色黄白にして性よく和らかなるよし、又は青色にして沙交り、又赤土もよし、柔を作りて、其跡を四五遍も耕しこなし、熟糞を多く用ひて、冬より晒しをき、三月うゆる時、いかにも細にして、たねを蒔べし、蒔終りては、うすく土をおほひ、少たゝき付をくべし、畦の中草少もをくべからず、取わき草痛みする物なり、たねを取をく事は、圃に作りたるにても、又は山野に自らあるにても、九月よく熟し黒くなりて、已にこぼれ落んとする時、取て日に干、俵か籠などに入をくべし、又は山野に生たるを、九十月根を多く堀取て苗とし、畦作りし間遠にうへて糞（こえ）し、手入したるも、盛長みすやかなる物なり、肥地によき糞しを多く用ゆれば、根甚さかへ、染付もよく厚利の物なり、山中など其外五穀を作るにはさはり有て、肥良の地あらば必作るべし、

〔草木六部耕種法四需根〕茜草紫草ノ根ヲ作ル法

茜草山野ノ自然生ハ、其根煎汁色濃シテ上品ナリ、然レドモ多ク得ベカラザルヲ以テ、此ヲ作ルノ法有テ、自然生ニ劣ザル上品ヲ出ス、我家ノ作法ハ、黄土及壚土ニテモ、白黄赤三色ノ土ヲ撰テ、此ニ軟膨（ボツク）ノ法ヲ行ヒ、冬中ヨリ厚ク糞肥ヲ用ヒ置キ、春ニ至リ再能ク細耕シ、善種ヲ間疎ニ蒔散シ、少シ土ヲ覆ヒ押付置トキハ、日アラズシテ芽出者ナリ、因テ他草ヲ勤テ耘除ベシ、又秋末ニ山野ノ自然生ヲ掘リ来テ、種トシ植ルモ能ク肥ル者ナリ、且此物ハ七八番ノ煖氣ノ地ニ蕃生ス、故ニ寒國ノ産ハ紅色淡シ、殊ニ黒土暗青黎黏等ノ土ニ植タルモ、染色鮮明ナラズ、又此物ト紫根鬱金等染料ヲ作ルニハ、其根肥太スル法ノ外ニ、其染色ヲ濃厚ニスル培養法アリ、其事ハ鬱金ノ條

巴戟天

下ニ詳ニス、抑染料モ國家必用ノ品、此茜染精好ナルハ、紅緋ニ亞ク美艶ナリ、故ニ茜根ヲ上品ニ作トヤハ、其利潤紫根ニ異ナルコト無シ、

〔令義解三賦役〕凡(中略)其調副物、(註略)正丁一人、(中略)茜二斤、

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物、(中略)茜、熟麻、黍各二斤、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

茜大二千斤、(中略)右太宰府所進

〔延喜式十四縫殿〕雜染用度

深緋綾一疋、(綾絲絹綿東絁同)茜大卌斤、(中略)帛一疋、茜大廿五斤、(中略)葛布一端、茜大十斤、(下略)

○按ズルニ、茜ヲ染料ニ用キルコトハ、產業部染工篇ニ載ス、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卌四種、(中略)茜根一斤、安藝國卅二種、(中略)當歸、茜根、各十斤、長門國十三種、(中略)巴戟天、茜根各一斤、

〔武江產物志草〕道灌山ノ產 茜根

〔本草和名六草〕巴戟天、一名三蔓草、(出蘇敬注)天精、(出兼名苑)和名也末比々良岐、

〔倭名類聚抄二十草〕巴戟天 本草云、巴戟天、(和名也末比比良木、)

〔箋注倭名類聚抄十草〕蘇注云、草葉似茗、經冬不枯、根如連珠、宿根青色、嫩根白紫、陶注云、狀如牡丹而細、外赤內黑、

〔伊呂波字類抄也植物附植物具〕巴戟天ヤマヒヽラキ 〔同波植物附植物具〕巴戟天ハヤヒトクサ

〔物類品隲三草〕巴戟天 一名不凋草、和名ジユズネノキ、先輩カキノハ草トスルハ誤ナリ、恭曰、其苗俗名三蔓草、葉似茗、經冬不枯、根如連珠、宿根青色、嫩根白紫ト、此形狀カキノハクサニ非ズ、カキノ

ハクサハ冬ニ至レバ葉盡ク凋落、不凋草ト云ベカラズ、根モ又曲節ノミニシテ連珠ニアラズ、眞ノ巴戟天ハ樹下陰地ニ生ズ、草ニアラズ小木ナリ、形大葉ノ虎刺(アリドホシ)ノゴトク、枝葉兩々相對シテ出ヅ、葉出ヅル所ノ左右ニ小刺アリ、葉ノ形頗茶葉ニ類ス、經冬不凋、至秋赤實ヲ結ブ、大サ緑豆ノゴトシ、根赤黄色ニシテ、略牡丹根ニ似テ連珠ヲナス、心アルコト麥門冬ノゴトシ、根乾テ心落レバ小孔アリ、大明宗奭ガ所説ト符合ス、是眞物ナリ、或ハ綱目草部ニ出ルヲ以テ疑フ者アリ、然ドモ綱目木本ヲ以テ草部ニ入ルモノ多シ、牡丹莽草常山ノ類ヲ以テ知ルベシ、肥後産戊寅歳田村先生始テ得之、己卯主品中具ス、讃岐鵜足郡中通村八幡社地産、庚辛歳余(〇平賀源内)得之、壬午主品中ニ具ス、

蘇頌所説一種麥門冬葉巴戟天アリ、予未見之、松岡先生用藥須知後編、直海氏廣大和本草、モチズリヲ以テ麥門冬葉巴戟トシ、藥肆所稱ノ棒樣ノ巴戟、卽チ是ナラント云モノ大ナル誤ナリ、東國モチズリノ一種、大ナルモノアリトイヘドモ、其根巴戟ニ類セズ、且藥肆棒樣ト稱スルモノハ、漢渡ノ内ヲ探テ、連珠アルモノヲ珠數樣トシ、連珠ナキモノヲ棒樣トス、其本ハ一物ナリ、決シテモチズリ根ニアラズ、又己卯歳社友福山舜調、箱根ニ遊テ所得ノ草、モチズリニ似テ花不戻、根二三ノ連珠ヲナス、初謂是麥門冬葉巴戟天ナラント、然是亦眞ニアラズ、又讃岐山中一種ノ草アリ、葉大葉麥門冬ノゴトク、又頗ルキスゲ葉ニ類ス、根連珠アリテ黄赤色、此物稍近シ、然ドモ未決、

〔和漢三才圖會 九十二山草〕巴戟天(はげき)　不凋草　三蔓草　和名夜末比々良木〇中略

按巴戟天、往昔有出於本朝、今乃無之、皆用唐藥也、多連珠者佳、俗名數珠巴戟、其葉如茗也、如麥門冬也、其異大也、三才圖會之圖亦出二種、蓋謂山林人家之異未審、

〔草木育種後編 下藥品〕巴戟天(本草)　和名やまひゝらぎ(本草和名)俗に珠數根の木といふ、享保年間、家祖濃州ゟ官圖に上る、今豆州にあり、予(〇岡部任)房州清澄山にて採り得たり、葉長短二種あり、五月枝を

ヘクソカヅラ

扦して活す、赤土に植てよし、陰地によし、盆に栽たるは土藏に冬月入れべし、干鰯油かす等を根に入てよし、一種山蘿根といふものあり、是も葉長きと圓きとあり、二種ともに冬月は葉枯る、予は遠州秋葉の山にて採る、赤土の陰地に植べし、盆栽は赤土のごろたに栽てよし、わり胡麻豆肥の類鹽味なきものを撰み用ゆべし、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

美濃國六十二種〈略〉○中 巴戟天五斤〈略〉○中 周防國十九種〈略〉○中 巴戟天、茯苓、各一斤、〈略〉○中 長門國十三種〈略〉○中 巴戟天、百部根、各一斤、〈略〉○下

〔書言字考節用集 六 生植〕百部根

〔倭訓栞 中編 二十三 部〕へくそかづら　定家卿[illegible]の歌の注にみゆ、下學集に百部根を訓じ、又馬鞭下といへるは非也、女青也とぞ、女青の上品を鳥のひるづといふ、

〔大和本草 八 蔓草〕女青〈略〉○中　今按蔓草ノ女青ハ、俗名ヘクソカヅラト云、葉スコシ蘿藦ニ似テ臭シ、花ハ蘿藦ニ相似タリ、一處ニアレバ混ジテ辨ガタシ、其蔓甚繁茂ス、本草ニ蔓草ノ女青ハ別ニ名目ヲ不立、故ニ性能ヲ不載、只蘿藦ノ下ニノセタリ、本邦ノ方俗ニヘクソカヅラヲ百部ト云非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 蔓草〕女青〈略〉○中

女青ニ藤本草本ノ二種アリ、〈略〉○中 藤本ノ女青ハヘクソカヅラナリ、別ニ本條ハナシ、此集解ニ説タルノミナリ、クソカヅラ、〈萬葉〉細子草、〈和名抄〉カバチダサ、〈同上〉ヘクソカヅラ、オドリコサウ、〈雲州〉ヤイトバナ、〈江州〉オドリブル、〈阿州〉ドリバナ、〈土州〉ヘクサンボウカヅラ、〈同上〉タサバナ、〈加州〉ニガイモ、〈同上〉タウヘバナ、〈播州〉アマクサブル、〈同上〉ソウトメカヅラ、〈京都〉ソウトメバナ、〈同上〉陸處甚多ク、竹木ニ繞フ、葉ハ大抵蘿藦葉ニ似テ薄ク、兩對ス、微シク毛茸アリ、葉ヲ斷レバ臭氣甚シ、大葉小葉圓

八重葎

葉長葉種種アリ、夏葉間ニ花ヲ開ク、其形牽牛花ノ如ク極テ小ク三分許、白色ニシテ中心紫色、炙痂ノ脱タルアトノ色ノ如シ、故ニヤイトバナノ俗名アリ、花後圓實ヲ結ブ、大サ二分許、秋冬熟シテ黄褐色ニシテ光アリ、此實ヲ俗ニスヾメノタゴト呼ブ、

〔新撰字鏡草〕葎〈牟○久○良○〉

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕葎草〈○中略〉古ヨリ葎ノ字ヲムグラト訓ズルハ非ナリ、ムグラハ小葉ニシテ、廢地ニ多ク繁延ス、故ニヤ○エ○ム○グ○ラ○ト歌ニヨメリ、コレ救荒野譜ノ猪○殃○殃○ナリ、

〔枕草子三〕草は
やへむぐら

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕問答
念人將來跡知者、八○重○六○倉○、覆庭爾珠布益乎、（オモフヒト、コムトシリセバ、ヤヘムグラ、オホヘルニハニ、タマシカマシヲ）

〔伊勢物語上〕昔男ありけり、けさうしける女の許に、ひじきもと云物をやるとて、
思ひあらばむ○ぐ○ら○の○宿○にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

〔拾遺和歌集三秋〕河原院にて、あれたるやどに秋來といふ心を、人々よみ侍りけるに、
惠慶法師
や○へ○む○ぐ○ら○しげれるやどのさびしきに人こそみえね秋はきにけり

釣藤

〔本草和名十四木〕釣藤、〈楊玄操音丁叫反、〉一名吊藤、〈出陶景注〉一名鵜藤、〈出蘇敬方〉唐、

〔多識編二蔓草〕釣藤、今案布○知○都○利○波○利○、

〔物類品隲三草〕釣藤　和名カ○ラ○ス○ノ○カ○ギ○ヅ○ル○、依木蔓延ス、莖初方ニシテ後圓ナリ、枝相對シテ出ヅ、葉臘梅葉ニ似テ滑澤ニシテ兩兩相對、葉間有刺、形鈎ノゴトシ、是ヲ釣藤鈎ト云、小兒方中ニ用ウ、

桔梗

安藝遠江ニ產ス、讃岐金毘羅山ニ產スルモノ、幹ノ大サ徑尺ニ近シ、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕釣藤　カ○ギ○カ○ヅ○ラ○　カ○ラ○ス○ノ○カ○ギ○ヅ○ル○　フ○ヂ○ト○リ○パ○リ○三才圖繪　カ○ギ○ノ○ツ○ル○備州　タ○ヽ○カ○ヅ○ラ○豐前　フ○ヂ○ツ○リ○パ○リ○　サ○ン○チ○ン○カ○ヅ○ラ○　サ○チ○カ○ヅ○ラ○共同上、南五味子ト同名、サ○ル○ト○リ○グ○イ○防州　一名釣藤本經逢原　釣鉤藤正字通　天弔藤丹溪本草

今通名ナリ、花戸ニテチヤウトウカウト云ハ誤ナリ、城州、和州、藝州、長州、防州、讃州、紀州、遠州、其餘諸州山中ニアリ、藥舗ニ賣ル者ハ多ハ藝州ノ產也、年久キ者ハ藤蔓甚大ニシテ木ノ如クナル、其蔓嫩ナル時ハ方莖ノ如ク見ユ、年ヲ經ル者ハ圓ナリ、葉形長ク尖リ、鹽梅葉ニ似テ澀ラズ光リアリ、嫩葉ハ微紅色皆兩對ス、葉ノ微シ上ノ方ニ對シテ兩鉤ヲ生ズ、其次ノ節ニハ單鉤ヲ生ズ、又其次ニハ兩鉤ヲ生ズ、梢ニ至ルマデ皆此ノ如シ、其鉤皆下ニ曲リ綠色、秋ニ至リ灰色ニ變ジ自ラ落ツ、藥ニハ嫩鉤ヲ用ユベキコト、本草匯ニ見ユ、運紫色、去梗純用嫩鉤、其功十倍ト云リ、此蔓ノ末ニ五寸許ノ枝ヲ出シ、小又ヲ對生シ、小花簇リテ正圓毬ヲナス、黃褐色、大サ六七分、花謝シテ小毬殘ル形チ楊梅ノ如シ、

〔草木育種後編下〕鉤藤こうとう木草　房州清澄山に產す、盆に栽たるは土貭に入れべし、糞水を澆ぎ夏月莖を折して活す、又根より芽を生ずるを、根を切り置きて、芽長じ勢よき時分け栽べし、暖國にては無用の地に栽ゑ、莖をとり藥とすべし、

〔採藥使記紀州下〕重康曰、紀州熊野山中ニ釣藤アリ、其葉形チ櫻ノ葉ノ如クニシテ長ク廣シ、蔓生ス、刺アリテ鉤ノ形ノ如シ、

先生按ズルニ、此物所々ニアリ、豐州中津ニ出ルヲ上品トス、藝州廣島ノ產ハ次ナリ、但俗藤ツリパリト云フ、

〔新撰字鏡木〕桔梗上居頡反、下柯杏反、加○良○久○波○、又云阿○佐○加○保○、桔梗同佐○加○保○、又云岡○止○々○支○

〔本草和名 草十〕桔梗、〈仁諝音結上〉一名薺苨、〈乃禮反〉一名利如、一名房圖、一名白藥、一名便草、葉名隱忍、一名苻蘺、一名房莖、一名盧茹、〈已上三名出釋藥性〉和名阿利乃比布岐、一名乎加止々岐、

〔倭名類聚抄 草二十〕桔梗　本草云、桔梗、〈結鯁二音、和名阿里乃比布木、〉

〔箋注倭名類聚抄 草十〕説文云、桔梗、藥名、太平御覽引吳普本草云、桔梗葉如薺苨、莖如筆管、紫赤、二月生、蘇敬云、薺苨桔梗又有葉差互者、亦有葉三四對者、皆一莖直上、蘇頌曰、桔梗根如小指大、黄白色、春生苗、莖高尺餘、葉似杏葉而長橢、四葉相對而生、嫩時亦可煮食之、夏開花紫碧色、頗似牽牛子花、秋後結子、李時珍曰、此草之根結實而梗直、故名、王念孫曰、説文云、梗直木也、爾雅云、梗直也、桔梗之名、或取義於直與、〈中略〉○和名依輔仁、輔仁又云、一云乎加止止岐、按本書菜類載苻蘺、訓乎加度度岐、苻蘺卽桔梗一名、則分載爲二物誤、

〔倭名類聚抄 野菜十七〕苻蘺　釋藥性云、苻蘺、〈音尸、和名乎加土々木、〉

〔箋注倭名類聚抄 菜九〕太平御覽引吳氏本草亦云、桔梗一名苻蘺、新撰字鏡桔梗阿佐加保、又云岡止止支、則知乎加度々岐卽桔梗也、源君草類載桔梗、訓阿利乃比布岐、此載苻蘺、訓乎加度々岐、分爲二物、皆閑奧羽俗呼杏葉沙參爲登登岐、作茹食之、桔梗似沙參、在岡上、故名乎加登々岐、疑源君誤以乎加登々岐爲沙參、又誤以苻蘺爲沙參、故以苻蘺訓乎加止々岐、遂與桔梗爲別、收之菜類也、然桔梗亦可食、陶注本草云、桔梗葉名隱忍、二三月生、可煮食之、療蠱毒甚驗、李時珍曰、爾雅蒡隱忍、郭注似蘇有毛、江東人藏以爲葅、亦可淪食、葛洪肘後方、隱忍草苗似桔梗、人皆食之、擣汁飮治蠱毒、據此則隱忍非桔梗、乃薺苨苗也、薺苨苗甘可食、桔梗苗苦不可食、尤爲可證、神農本經無薺苨、止有桔梗、一名薺苨、至別錄始出薺苨、蓋薺苨桔梗一類、有甜苦二種、則其苗亦可呼爲隱忍也、又按蘺字諸字書無載、太平御覽引吳普作苻扈、

〔藻鹽草 草八〕桔梗

ありのひふき、これいまだくはしくみす　秋ちかふ野は成にけり、桔梗の花也、きちかふ也、一重草、異名也、七月のなかくしてよめる也、花也、このはなもうらにうたはや一重草ははうすやうの露はなけ共

〔物類稱呼 三 生植〕桔梗きゝやう　信州上田にて、くはんさうと云、

〔古今和歌集 十 物名〕きちかうの花

あきちかう野は成にけり白露のおける草葉も色かはりゆく　とものり

〔倭字例 冊 錄〕きちかう

きちかうは桔梗なり、桔は玉篇に居屑切にて、漢音ケツ、呉音ケチなるを、いかでキチとはするならむと思ふに、太田氏云、桔音結、呉音キチ、此ハ十七轄質韻ノ吉ニ轉ズルナリ、故ニ田陳音同ジク靈雨轉ニ出タリ、といへり、梗ハ漢音キエイ、呉音キヤウにて、キヤの切カなれば、やがてカウなり、今俗呼は、桔の韻を省き梗は本音のまゝに、キヽヤウと呼べり、

〔宜禁本草 乾 草 中〕桔梗　辛苦微温、治咽喉痛、温中消穀、主肺氣促嗽逆、排膿痰、肺癰唾腥吐膿、能開提氣血、治鼻塞、葉名隱忍、二三生煮食之、

〔大和本草 六 草二〕桔梗　春宿根ヨリ生苗、山野ニ多シ、秋碧花ヲ開ク、又白花アリ、八重アリ、藥ニハ單ノ碧花アル根ヲ、冬月及正二月ニ採ヲ良、小根ハ性薄シ大ヲ可用、花鏡曰、以雞糞壅則茂ル、實ヲマケバ早ク生長ス、二年ヲ開花根亦大ナリ、花ヲ賞スルニ、苗ヒキヽ時カレバ叢生シテ花多ク莖不高シテヨロシ、

〔重修本草綱目啓蒙 七 山草〕桔梗　アリノヒフキ 和名鈔　アリノヒアフギ　ヲカトヽキ 古歌　ヒトヱグサ 同上　キチカウ　佛吉草 和方書　クハンサウ 信州　セイチイ 江州　今ハ通名キヽヤウ

一 吉祥柞 輟耕錄　苦梗 字彙 韻書　都乙羅叱 郷藥本草　道乙阿叱 村家方

山中ニ自生多シ、向陽ノ地ニ生ズ、大抵沙參ノ形狀ニ似テ毛ナク白色ヲ帶ブ、コレヲ斷バ白汁ア

リ、圓莖高サ三五尺、葉ハ狹ニシテ細鋸齒アリ互生ス、或ハ二三葉相對ス、六月以後莖頂ニ花ヲ開ク、肥タルモノハ葉間ゴトニ開ク、單瓣藍紫色ヲ常トス、ソノ品一ナラズ、形ニ單重千葉圓扁ノ分アリ、色ニ深藍淺藍黃白間色ノ別アリ、重葉ナル者ニ紫二重白二重二重仙臺牡丹桔梗アリ、千葉ナル者ニ紫白アリ、扁ナル者ハ摺扇桔梗ト呼ブ、深藍淺藍ノ二品アリ、並ニ千葉ニシテ形壓シ、扁メタルガ如ク、莖亦扁シ、黃ナルモノハ淺黃色、又カキイロト呼ブアリ、單瓣重瓣ノ二品アリ、間色ナル者ハ白花紫點仙臺桔梗ト呼ブ、又南京桔梗アリ、又單葉ニシテ筒ヲナサヾルモノアリ、紋桔梗ト呼ブ、此數品皆花戶ノ重ズルトコロナリ、藥ニハ常品ヲ用テ良トス、

〔草木育種下藥品〕桔梗本草　花に碧色、白色ともに重瓣あり、又絞あり、春の彼岸に種を蒔なり、根分は二月十月よし、冬は人糞、夏は魚洗汁澆てよし、

〔剪花翁傳三六月開花〕桔梗　花一重、白色靑色二種、開花六月初より一番二番三番まで漸々剪て、後れ咲は十月にいたるなり、方日向、地二分濕、土えらばず、肥干鰯をつよく入て、淡小便も度々灌ぐべし、分株春芽出のときすべし、且平莖なるあり、俗にひらぢくとて專ら好めり、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略桔梗卅斤、　大和國卅八種○中略桔梗廿一斤、○下略

〔江家次第七八月〕相撲召合

官人以上位袍、番長以下靑袍懸緒、○中略左插桔梗華、

〔出雲風土記神門郡〕凡諸山野所在草木、○中略桔梗、

〔拾遺和歌集七物名〕きちかう　　よみ人しらず

あだ人のまがきちかうな花うへそにほひもあへず折つくしけり

〔枕草子三〕草の花は

ききやう

〔續後拾遺和歌集七物名〕きちかうをよめる　前中納言匡房

月草の色なる色ぞ珍らしききちかうてみればころもうつりぬ

〔散木弃謌集十雜〕ききやう

あやまたぬ花の都をそのれからうき京なりと思ひけるかな

〔毛吹草三〕丹波　桔梗

〔佐渡志五物產〕桔梗　數種アリ、花或ハ紫ニ或ハ白ク、單ナルアリ、複ナルアリ、北山ノ下ニ生ズルモノ紫ノヒトヱニシテ、藥トナスニ佳ナリト云、

〔本草和名七草〕沙參、一名知母、一名苦心、一名志取、一名虎鬚、一名白參、一名識美、一名久希、一名虎須、(出釋藥性)一名虎治須、(出雜要訣)唐、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕羊角菜　羊婆科　合鉢兒　細絲藤　過路黃　(今云〇〇人參、又云信人參、〇中略)

按羊乳即沙參之別名也、然陳氏所謂羊乳乃羊角菜、而倭沙參也、(以有臺島臺人參、又名沙人參)和州、河州、信州處々山中有之、蔓生、其蔓葉共似初生羅摩及草蘇葉、八九月葉間開小白花、亦有淡紫者、形如鈴鐸、根莖有白汁、但宿根黃皺有橫文理、如人參文、尋常用之換人參、最爲沙參、人用藥而有功、害以爲沙參之一類、故代唐沙參者無異、正代人參者不可也、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕沙參　ツリガネサウ(同名)　ツリガネニンジン　トヽギ　ニンジン(同名アリ)　ヤマダイコン(南部)　キヽヤウモドキ(但州)　シヤクシナ(江州)　ヤャナ(同上)　アマナ(同上)　シヤジンパ(筑前)　ヘピヂヤワン(上總)　シヤジヤシヤ(越中)　ピシヤピシヤ(城州山科)

〔本草〕烏羊婆奶(本草原始)　增一名志遼(千金翼方)　一名加德(藥譜)

薺苨

山野向陽ノ地ニ多ク生ズ、春宿根ヨリ初出ノ葉、形圓カニシテ鋸齒アリ、深綠色、欵冬葉ノ如クニシテ小ナリ、故ニ江州ニテシヤクシナト名ケ、俚民蔬ト爲シ食フ、春後漸ク薹ヲ起ス、ソノ葉桔梗葉ニ似テ大ニシテ周邊ニ鋸齒アリ、甚ダ脚葉ノ形ニ異ナリ、互生或ハ兩兩相對シ、或ハ三四五六葉對生ス、ソノ形圓アリ長アリ、又二三分ノ濶サ三四寸ノ長サナル者アリ、並ニ毛アルモノアリ、毛ナキ者アリ、皆コレヲ掐メバ白汁アリテ出ヅ、秋ニ至レバ莖高サ二三尺、ソノ梢ニ枝椏ヲ分チ筒子花ヲ開ク、形風鈴ノ如ニシテ小ク、長サ五分許、末ハ五瓣ニシテ内ニ白藥アリ、皆枝上ニ連リテ下垂ス、ソノ色藍紫色、或ハ淺ク、或ハ白色、或ハ間色、ソノ蕚桔梗花蕚ニ似タリ、花謝シテ蕚殘ル、内ニ細子アリ、霜後苗枯ル、根ハ年ヲ經テ漸ク長大ナリ、形皆直クシテ人參根ニ似タリ、淡黃白外ニ横文アリ、曝乾スレバ甚輕虛ナリ、

〔本草和名〕九草〕薺苨、楊玄操上音在禮反、下乃禮反、一名鹿膝忍、楊玄操名也、出小品方、和名佐岐久佐奈、一名美乃波、

〔倭名類聚抄〕二十草〕薺苨　本草云、薺苨、齊泥二音、和名佐木久佐奈一云美乃波、

〔箋注倭名類聚抄〕十草〕陶注薺苨云、根莖都似人參、而葉小異、根味甜、又桔梗條陶注云、薺苨葉甚相似、但薺苨葉下光明滑澤無毛爲異、葉生又不如人參相對爾、唐本桔梗注云、陶引薺苨亂人參、謬矣、且薺苨桔梗又有葉差互者、亦有葉三四對者、皆一莖直上、葉既相亂、惟以根有心爲別爾、衍義、陶所言其意止以根言之、唐本注却以苗難之、誤矣、時珍曰、薺苨苗似桔梗、根似沙參、本草圖經所謂杏參、救荒本草所謂杏葉沙參、皆此薺苨也、救荒云、杏葉沙參、一名白麪根、苗高一二尺、莖色靑白、葉似杏葉而小、微尖而背白、邊有叉牙、杪間開五瓣白盌子花、根形如野胡蘿蔔、頗肥、皮色灰黲、中間白色、味甜微寒、亦有開碧花者、時珍又云、薺苨多汁、有濟沱之狀、故以名之、濟沱濃露也、今按別本注云、根似桔梗、以無心爲異、爾雅、苨菧苨、郭云、薺苨也、

〔宜禁本草〕乾集中草〕薺苨　甘寒、解百藥毒、人家收爲果菜、蒸切作羹粥、利肺氣、和中明目止痛、又葅蕰得、

〔大和本草六(草)〕薺苨　與桔梗葉相似、而比桔梗則大、似杏葉、且與沙參相似、根長味甘、今人沙參ヲアヤマリテ薺苨トス、或薺苨ヲ以沙參トス、紛ヤスシ分別スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕薺苨　ツリガネサウ　一名賊參(事物紺珠)　土桔梗(本草原始)　季奴只(本草彙言)　増、一名菧苨(群芳譜)

二種アリ、集解說トコロノ者ハツパナナリ、東武ニ自生多シ、葉ハ稍尖ニシテ鋸齒アリ、杏葉ニ似テ長ク互生ス、苗高サ三四尺、六月莖梢ニ長ク連テ花ヲ開ク、形沙參花ニ似テ大ナリ、淡紫碧色下垂ス、秋深苗枯ル、春ニ至リ舊根ヨリ葉ヲ生ズ、形圓カニシテ沙參ノ脚葉ノ如シ、根ノ形ハ人參ニ似テ輕虛ナリ、

救荒本草ニ載スル杏葉沙參一名地參山蔓菁ハ、マルバノニンジンナリ、一名キヽヤウニンジン、タニギヽヤウ、加州花戶ニテ唐沙參ト呼ブ、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、葉ハツパナニ似テ短ク厚ク毛茸アリ、莖高サ七八尺、上ニ數枝ヲ分ツ、勁直ニシテ軟弱ナラズ、六七月枝上ニ花ヲ開ク、下垂セズ、形亦沙參花ニ似テ大ナリ、深藍紫色又白花ナル者アリ、根形人參ニ似テ重實ナリ、此トツパナト皆苗ヲ斷バ白汁出ヅ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、(中略)薺苨、茵草、小蘗各六斤、　大和國卅八種、(中略)薺苨、桑根、白皮各五斤、(下略)

澤桔梗

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕澤桔梗(サハキヽヤウ)　俗稱(本名未詳)

按澤桔梗高近二尺、葉似山丹草葉而短、三四月葉間開花、形似桔梗而小、紫色、頗似水葵花、而淺水中亦生、多生濕地、

〔剪花翁傳三六月開花〕澤桔梗　こなぎともいふ、花の色青に紫を帶たり、開花六月中旬より九月末迄咲出る也、方半陰、地二分濕土回廓、肥淡小便、春ひがんにそゝぐべし、移春彼岸よし、是山谷に多

半邊蓮

菊名稱

く生する也、花形は木蘭に似て葉は細長し、

〔倭訓栞前編六〕からくさ草の名にいふは半邊蓮也、駿州にてかたいかりといふ、鐵猫児に似て花の偏なるをもて也、賀州にて根せりともいふ、此草地に就て生じ、芹の氣味あるをもて也、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕半邊蓮　カ。ラ。ク。サ。　ハ。タ。ケ。ム。シ。ロ。　ナ、ン。セ。ウ。グ。サ。勢州　、キ。ク。ガ。ラ。ク。　サ。レ。ン。ゲ。プ。ル。　ア。ゼ。ム。シ。ロ。　ミ。ゾ。カ。ク。シ。　カ。タ。イ。カ。ら。播州　チ。シ。パ。リ。加州〈同名アリ〉　一名半枝蓮〈農圃六書〉

小草ナリ、園側溝邊ニ地ニ就キ蔓延シ、土モ見ヘザルニ至ル、故ニハタケムシロ、及ビミゾカクシノ名アリ、葉ハ雀舌草ノ葉ニ似テ、厚ク大ニシテ鋸齒アリ互生ス、淡緑色、夏月枝頂ゴトニ一花ヲ開ク、大サ三四分許、五瓣一方ニ偏生シテ菊花ノ半邊ノ如シ、故ニ半邊蓮ノ名アリ、其色淡紫或ハ純白ニシテ微香アリ、今揷花ノ邊花ハ此草ノ象ヲウツセリト云フ、一種江州ノ産葉長寸許ナルアリ、花モ亦大ナリ、

〔廣益地錦抄七〕半邊蓮　宿根より春生る、尺ばかりの小草にて、地にはびこる、葉五枚ヅヽ出て、切まはし見事に、車の半輪のごとく、花は五六月さく、うすむらさき、花形も又車の半輪のかたちなれば、車軸草といふ、段々枝多く出、花葉しげく付く、小草なり、鉢植にしてながめたへず、愛賞すべし、

〔武江産物志藥草〕上野邊ノ産　半邊蓮〈あぜむしろ、谷中〉

〔新撰字鏡草〕蘜菊〈二上字、左。支。奈。〉　菊花〈辛。興。毛。支。〉

〔本草和名六草〕菊花、一名節華、一名日精、一名女節、一名女華、一名女莖、一名更生、一名周盈、一名傳延年一名陰成、一名苦薏、〈味苦、藪澤、音億、〉白菊、〈花白、已上出二陶景注一、〉一名周成、〈宣也、〉一名神精、〈子也、〉一名神華、〈子也、〉一名神英、〈子也、〉一名長生、〈根名也、已上出二大清經一、〉五一名女臘、一名虜、〈已上出二兼名苑一、〉菊花者月精也、〈出二大清經一、〉一名日華、一名延年、〈華也、〉一名生嬰、

二也、一名扶公、〈事也、已上出神仙服餌方、〉菊花者天精也、〈出范注方、〉一名朱嬴、一名傅公、〈出雜要訣、〉和名加波良於波岐、

〔倭名類聚抄 草二十〕菊　四聲字苑云、菊〈舉竹反、本草注云、菊有白菊、紫菊、黃菊、和名加波良與毛木、一云可波良於波岐、俗云本音之重、〉日精草也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按千金翼方、證類本草草部上品、有菊花、無白菊紫菊黃菊之名、證類本草引陶注云、又有白菊、莖葉都相似、唯花白、而紫菊黃菊無載、唯初學記引本草經云、有筋菊、有白菊黃菊、與此所引略似、未知源君所見何等本也、〈中略〉○按本草和名訓加波良於波岐、不載加波良與毛岐之名、加波良與毛岐河上蓬艾之義、新撰字鏡菊花訓辛與牟支者急呼耳、於波岐今俗呼與女加波岐或與女奈、救荒本草雞兒腸是也、菊似雞兒腸在河上、故名可波良於波岐、與陳氏云苦菊莖似馬蘭生澤畔、似菊正合、馬蘭雞兒腸一類耳、依所謂當是苦薏、今俗呼野菊、或呼千本菊者、其所實花者蓋悉漢種、故倭歌詠之皆音讀、以非皇國自生之物也、白蒿亦訓加波良與毛岐、見下文、與此同名異物、〈中略〉○按說文云、菊大菊、蘧麥、爾雅同、郭璞注云、即瞿麥、說文又云、蘜日精也、以秋華、則知菊蘜不同、而秋華作菊者、蓋假借也、陶注本草云、菊有兩種、一種莖紫氣香而味甘、葉可作羹食者爲眞、一種青莖而大、作蒿艾氣、味苦不堪食者名苦薏、非眞、其葉正相似、唯以甘苦別之爾、陳藏器曰、苦薏味苦、花如菊、莖似馬蘭、生澤畔、似菊、菊甘而薏苦、日華子云、菊有兩種、花大氣香莖紫者爲甘菊、花小氣烈莖青小者名野菊、味苦、然雖如此、園蔬內種肥沃、後同一體、圖經云、初春布地生細苗、夏茂秋花冬實、然菊之種類頗多、

〔醫心方 一〕菊花〈和名加波良於波岐、又岐久、〉

〔類聚名義抄 八佛〕菊〈音鞠、カハラヨモ、キク、俗云本音之重、〉杭菊〈二處〉

〔伊呂波字類抄 加植物附植物具〕菊〈カハラヨモキ〉　白蒿〈同〉

〔同 幾植物附植物具〕菊〈キク、カラヨモキ、白菊黃菊、居六反、此乎、〉

日精草　延年　女華　贏〈已上キク、音登、菊花也、一名帝女花、〉

〔運步色葉集 天〕鄙縣山〈菊〉

〔同 草花名〕日精草〈菊名〉　菊花　太白　朽葉　少將　濡鷺　霜覆　細

川　酔楊妃　等持寺　已上菊名

〔八雲御抄三上〕菊　白　やへ　むら　そか　ひともと

凡菊は万葉に不詠歟、寛平菊合以後、殊名物とはなれり、寛平菊合右歌に、すへらぎの万代までにまさりぐさたまひしたねをうゑし菊也、まさりぐさといふ、似星とよむは黄菊なり　いはねのきく俊頼、基俊、雖之、凡無何之〇之一本作一任心、名所にはよむべからず、　菊名所　みなせ　おほさはの池　むらさきの　大ゐのどなせ　たみの、しま　さほ河　ふけ井　ふきあげ　あふさかの関　伊勢のあじろの濱　已上菊合名所被定所々也、抑そか菊は、一説承和菊、黄菊也、俊成はそかひなど云やう也、更非承和菊云々、兩説也、末〇末原作未、今據一本改、生難定之、仙菊なれば、酌下流ちとせをふる物也、うちはらふにもちよはへぬべしとよめるも、縱身は得上壽心なり、ちる事なし、旁祝物なり、業平は花こそちらめといへり、花こそかれめといへる心也、經霜うつろひしぼめる物也、

〔重修本草綱目啓蒙二十草〕菊　カラヨモギ　ヲトメグサ　アキシベノハナ　アキシクノハナ　クサノアルジ　チヨミグサ　ヨハヒグサ　アキナグサ　ノコリグサ　チギリグサ　モヽヨグサ　タテリグサ　タキモノグサ　ヲキナグサ　チヨグサ　マサリグサ　コガネグサ　ホシミグサ　カタミグサ　ナガツキグサ　アキノハナ　アキクサノハナ　アツカイグサ　イナテグサ　ヤマシグサ已上古歌ノ名　カワラヲハギ和名鈔　今通名　甘菊一名金英本草圖經　家菊劉蒙菊譜　重英種菊方　涼蒿菜救荒本草　石決群芳譜　冷香　朱贏　傳公共二同上　九華[illegible]　陰成生宛委餘編　長生草物理小識　笑靨金輟耕録　會華[illegible]　延年　貞芳共二同上　花一名隱逸花衢州府志　拒霜通雅、木芙蓉ト同名、　霜傑尺牘雙魚　東籬客花鳥爭奇　佳友事物異名　壽客　黄花　帝女花共同上　延壽客[illegible]覽　金翹同上　黄鈿蘇氏韻輯　黄華先生事物紺珠　金剛不壞主　配妃共同上　女郎花〇[illegible]下略

〔東雅十五草卉〕菊キク　倭名鈔に本草を引て、菊はカハラヨモギ、一にカハラオハギ、俗には本音の如

くに呼ぶと註せり、即今キクといふもの此也、其註せし所の如きは、古にはカハラヨモギとも、カハラオハギとも云ひしを、後の俗字の音によりて、キクといひし也、されど歌の言葉などには皆キクとのみ讀みたれば、古言の俗なる、後の代の雅言とはなれるなり、かゝる例少からず、〈中略〉古の時には、菊の字を讀でクヽといひけり、舊事記にクヽリヒメといふ神の名を、菊理媛としるされ、和名抄にクヽナといふ鳥の名の、[illegible]と見えし如き是也、されば和名抄には、當時の音によりて、キクといふ名をしるして、本音とは云ひしなり、カハラヨモギといひ、オハギといふが如きは、支那の類なるをいふなり、白蒿一にカハラヨモギといひぬれど、此物には異なり、

〔倭訓栞前編七〕きく〇中略 菊はもとくゝとよめり、菊理媛、菊池郡など是也、新撰字鏡、和名抄に、和名をも載たれど、歌には音をもてよめり、〇中略 菊花の弟と稱するは、梅を花の兄と稱するに對へていふ也、菊は万花に後るゝものゆゑに、わけて殘花をも賞するなり、殘菊の名は、東坡詩に本けり、重陽を過ての名なるよし、菅家文草に見えたり、殘菊宴は十月五日に行はる、村上帝の時に始まる、西宮記に見ゆ、〇中略 ひともとぎくは、新勅撰集物名に見えたり、續後撰に、一本菊奉るとも見えたれば別種にや、蝦夷には、春白花の菊ありといへり、菊花種類多しといへど、單瓣、重瓣、有心、無心、旋心、佛頭、蜂窠の七品をもて總る也といへり、近年一株にて、五色を備るあるに至る、〇中略 歌に山路の菊などいへるは、本草にいへる苦薏なるべし、群芳譜にも、菊與薏有兩種と見えたり、苦薏一名野菊にして、俗にのぎくと稱するは、馬蘭一名紫菊なり、嫩葉をよめなといへり、源氏に老をわするゝ菊といひ、齢を延ぶる事を歌によめるは、風俗通に見えたる南陽の甘谷の事によれり、仙書に延壽客といふよし、月令廣義に見えたり、菊の下水などもよめり、本草に據ば、南陽の菊黄白兩種あり、叢笭に、月令鋼子、菊曰黄花、取其得時之正、況當其候、田野山側登開、滿眼皆黄花也と見ゆ、我邦山野自生の者は、皆白花なるを異とす、

〔假名世説〕平維章〈姓は平、名は維章、字は子文、金吾と稱す、〉云、菊に和訓なきは、遠く此國へ渡りし故、和漢の詮議もなき事、實にさも有るべし、〇中略 足利將軍開國の比、東福寺の僧一圖師、陶元亮が詩をよまれしに、採菊

東籬下、悠然見南山、と詠せられしと、禪林の詩僧はほめらるれども、菊の一字をあきしべばなと和訓つけしは、もつてまはりたる、こむづかしき訓ならずや、梅をむめと訓じ、櫻をさくらと譯せしには、はるかにおとりたる事ならずや、

〔松の落葉　三〕菊

からくにの菊は、こゝのふぢばかまなり、そのよしあきらめいひてん、○中略秋の野におのづからあまた生出てさく菊のはなは、ならのみやこのころにもあるべく、そは万葉集八の巻の歌に、なくさとかぞへしなかのふぢばかまなりけり、そのなゝくさは、山上憶良詠秋野花歌に、秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、其一芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝皃之花、其二とよめるにぞありける、かきかぞふればといへば、大かた秋の野に咲たる花の、あるかぎりをいへるこゝろなるに、あまた咲てうつくしききくの花をもらすべしやは、朝皃は桔梗、藤袴は菊なれば、げに秋の野のはなのこりなし、ものしり人は、ふぢばかまを蘭なりともいへど、らには生いづる野まれにして、七くさのかずにいるべき花のさまならず、類聚國史卷三十一、帝王部にも、平城天皇大同二年九月のくだりに、乙巳、幸神泉苑、琴歌間奏、四位已上共插菊花、于時皇太弟頌歌云、美那比度乃、曾能可邇米豆留、布智波賀麻、岐美能於保母能、多乎利太流邪布、上和之曰、邇流比度能、己呂乃麻丹具、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、爾保比多理介利、と見えたり、插菊花とありて、御歌にふぢばかまとよみたまへば、菊はこゝのふぢばかまなることさだかなり、さきに延暦の帝はきくとよみたまひしかども、花はすぐれてめでたけれど、こゝのふぢばかまと同じものなれば、かくもよみたまへるなり、さて插菊花とある此菊は、蘭の字の誤を寫傳へしなるべしと、上田秋成はいひつれど、さにはあらじ、日本後紀に、同じ御代の此事をかゝれたるにも、插菊花とあり、二書ともに蘭の字を草の手にかきて、菊にあやまるべしやは、○下略

〔閑田次筆 三〕此種○中略奈良の御代までは、いまだ渡らざりしが、万葉集中には見えず、されば字音のまゝにてよびならへり、新撰字鏡にからよもぎといひ、又世に翁草などいふも異名なり、日本後紀に、桓武帝の御作歌、此ごろのしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたら其香を、と遊ばせしが見ゆれば、此御代のころはじめて來りしにて、こなたにては初より色香をめづることとおぼしき也、

〔大和本草 七花草〕菊　順和名ニカハラヨモギト訓ズ、但ソレハ野菊ナルベシ、古歌ニハキクトヨメリ、蘇我菊ト云ハ、八雲抄ニ黄菊ナリトイヘリ、上代ニハ未中夏ヨリワタラズ、故ニ萬葉集ノ歌ニハ菊ヲ詠ゼズ、其後ワタリシユヘ、古今集ニハスデニ詠ズ、○中略今案ニヒトエナル黄花ニ、スグレテ甘キ菊アリ、是藥ニ用ル眞菊ナルベシ、又冬菊ハ寒菊ト云、單ニシテ味甘シ、又重葉ノ小菊、黄色ニシテ味甘ク、秋多ク寒ニ久シクアリ、モロコシニハ菊ノ花一本ニ多キヲコノメルニヤ、范成大菊譜序曰、至秋則一幹所出數十百朶トイヘリ、唐繪ニカクル菊モ花多シ、日本ノ好事ノ者ハ、一莖只一花ヲツク、故ニ花大ナリ、菊ニ細子アルモノアリ、種之生ズ、白菊ハ大ナレドモ味甘カラズ、凡菊ノ葉春夏及秋ノ初マデ、ワカキ葉ハ久シクユビキテ食フベシ、脾胃虛瀉ノ人ニハ宜カラズ、菊ノ葉ヲ乾シテ茶トシ服ス、色モ香モ好ト、中華ノ行厨集ト云書ニアリ、花モ甘キハ生ニテモ乾テモ食フベシ、苦キハ不可食、胃氣ヲ損ズ、野菊ハ山野ニ多シ、性アシヽ、不可食

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕菊圖略　節華　女華　女節　日精　女莖　更生　金蘂　治薔　周盈　陰成　傅延年○中略

按仁德天皇七十三年、始渡異朝靑黃赤白黑菊種也、異朝者百種圖也、其黑色者未審、今亦有細菊、此乃近年所出之一種也、今有稱五菊者、鶴毛、玉牡丹、重白御愛、黄色醉楊妃、京大白、共白色帶微赤、是等唐種始於筑前博多栽之、今處處移種而甚繁育不茂盛、凡菊子極細或不見、故古者分根插枝爾、近年覺仲春蒔花子而生、出數多珍花、今得名者徑尺

許、八寸或ハ尺

〔重修本草綱目啓蒙十四草〕菊〇中略

花ヲ賞スル菊ニハ、春夏秋冬ノ分チアリ、皆花開ク時ヲ以テ名ク、其冬菊ハ即寒菊ナリ、漏盧ノ條ニ、單葉寒菊ノ名アリ、秋後花サク、葉ニ酒ヲ澆グハ、霜ヲ凌テ紅紫色ニ染テ美ナリ、唐山ニテ賞スル秋菊ハ、今ノ中菊ニシテ、本邦ニテ賞スル大菊ニハアラズ、范成大劉蒙史正志等ノ菊譜、及ビ花史左編群芳譜秘傳花鏡ニ詳ニ載ス、和書ニテハ菊經ニ詳ナリ、又人家盆玩ニマンギクト云アリ、一莖多枝ニシテ花甚繁密、傘ヲ開クガ如シ、是數次心ヲ摘去テ、多枝ナラシメテ花多キナリ、土州ニテ、アメガシタト云、讃州ニテカサギクト云、漢名滿天星群芳譜ト云、又千瓣黄色ニシテ、大サ三四分ナルヲ、コガネヌキト云、是集解頌ノ説ノ珠子菊ナリ、コレニモ紅白紫間色數種アリ、

野菊　アブラギク　センボンギク　イハヤギク　一名薏花幾卉子

山足路旁ニ多シ、原野ニハ稀ナリ、一科叢生ス、苗高サ三五尺、枝ヲ分ツコト最繁シ、故ニ千本ギクト呼ブ、葉ハ花岐多クシテ鋸齒密ナリ、莖葉淺緑色、斷レバソノ氣艾ノ如シ、秋晩花ヲ開クコト甚多シ、單瓣ニシテ大サ四五分、心大ニシテ瓣短ク、微シク香氣アリテ黄色ナリ、ソノ味苦シ、故ニ一名苦薏ト云、世ニ此草ヲカモメイリトスルハ穩ナラズ、撥書ノ圖ニ異ナリ、和名ニノギクト呼ブモノハ、救急本草ノ鷄兒腸ナリ、混淆スベカラズ、旋覆ヲグルマニモ野菊ノ名アリ、

〔鹽尻三十九〕菊花四時ながら見る、三月菊とてもてあそぶ黄色なるは、春の季より夏に至り開く、夏菊數品あり、冬は寒ぎくありて、寒中にも見るべし、されど秋菊のめで度には似侍らず、詩歌に詠せしも、秋の花いとなつかし、

〔閑窓自語四〕大小菊語

正德のはじめ、大ぎくといへるものを作り出て、家ごとにうへもてあそぶ、花の大きさ一尺にも

及ぶとぞ、これはかぶろぎくといへる菊ありて、そのたねよりまきいだせしとなん、又小。ぎ。く。といひて、同じ頃至てちいさき花あるをも、とり合て賞翫せしなり、其のち明和中に、中。山。菊。といへるものいできて、めづらかなる花びらなど有て、今に世にもてはやすにより、大菊小菊などはすたれたり、

〔一話一言〈八〉〕菊の名

三
菊の名
通
名
之
菊
異
名

壷加草に云、大源庵菊、其白者名大牡丹、花様如牡丹也、其黄者名眞盛、種自越前出也、〈蓋眞盛之誤〉また支考が菊合序に、寶永のはじめより、京洛に此花を玩びてとあれば、久しき事にはあらじ、序中に見へし菊の名は、

初霜　薄雪　金より　銀より　小金めぬき　濡鷺　香爐峯　釜山海　金鷺　銀鳳　御法
村雨　小手毬　李將軍　飛鳥川　きなこ鳥　白臥龍　月下門　宇治　ふしみ　山崎
有明　花麒麟　金翅鳥　紫金龍　朱雀門　婆羅門　阿蘭陀　衣通　三人鑑　大和笠

かばかりの事も、時々に違ひて、今の花は昔の名にはあらじ、

金目貫(こめぬき)といふ菊を、今省きて、きんめ。。。といふ、續山井、こがねきくは霜の劍の目貫かな、〈曾加〉後撰夷曲集、浮事院にて〈入宮御方〉葉までよく咲みだれたる作りやう、金目貫の菊一文字とあれば、前の發句も、金目貫の字をわけて作れる句とみゆ、こがねとばかりは、黄菊をすべていふやうなり、

菊栽培

〔草木育種〈下品〉〕菊〈草木〉　菊の類は實ばへにて、年々花形變故その數を知ず、花鏡云、如劉蒙泉菊譜、遂有一百六十三品、范至能、史正志、馬伯州、王藎臣、皆有譜、其名目至三百餘種云々、菊の實を蒔には、山の野土の肥たるか、又黒ぼくにもよし、濕地を嫌也、高き所にて相應の土に肥土を合、代(しろ)を拵、其内へ二月初に蒔、其上へ糵の至て細き糀(ぬか)を少し振かけ、雨覆をして置、生て後苗を取べし、植る地は多中、野土或黒ぼくの内にて、菊を植ざる肥地を掘、その上へ人糞を澆、よく切ませ寒にいてさせ

置、又人糞を入、右の如すること三度にして雨を除置、二月比曝〈とをし〉て日にさらし植る也、根分は九十月比、根もとより出たる芽を分とりて別に植て、蘆簾を低かけ霜を除置、春にいたり清明の頃に植、尤花壇へ瓶〈つちべ〉の大さに壘を掘、其中へ右の肥土へ鳥の屎と、烟草の莖を切まぜて、壘一ッに菊一本植べし、又六七月の間に一度糞汁を根廻へ入たるもよし、肥を多く澆ば葉枯るもの也、菊譜云、養花易、養葉難、又曰、糞水葉に着べからず、泥あれば洗べし、又曰、以韮汁澆根妙、又清明の頃分植るもよし、何も舊根をよく去べし、宿根より虫を生るゆへなり、菊經曰、死蟹釀水澆灌不生蚜虫、花鏡云、魚腥水去蛙、蚯蚓地蚕傷根、以石灰水灌之自死、蜒將河水連澆、以解灰毒、若黒蚰啃其皮、以麻裹筯頭、捋之則出、若象幹蟲（似蠶青蟲黄一色）食葉須早起以針尋其穴刺殺之、菊藥ニ入ものは、甘菊〈かんぎく〉、野菊等なり、花を賞するは、中菊大菊なり、其中菊の作様は、扇造、帚造、色々あり、根を曲ざるは、早く梢〈しん〉を切て枝をふかせ、五六月迄は切てよし、夫より一枝に花一ッ著、其外の枝莟は皆摘去べし、初より竹或は葦をそへ、琉球席のほつしにて結付てよし、是は帚作なり、又根を曲て作るには、莖を土へ伏て、竹の枝を以て挾、土へさし込て止るなり、是は扇作なり、又大菊などは四五月頃雨天のせつ、勢よき梢又幹を管に切て、肥土へ插、根を生じて人糞汁を澆ば、甚よく肥て花大に咲ものなり、夏菊は八月根を分植てよし、寒菊の類皆秋分るなり、又ふだん菊は夏より冬まで花咲ものなり、總て菊の手入は大概を志るすゆへ、必是た止ず、漢土の菊の類は菊譜に見へたり、又植様は種樹書に見ゆ、

〔草木六部耕種法十菊花〕菊ハ品類極テ多ク、其名目勝テ記載スベカラズ、何トナレバ菊ハ其種子ヲ蒔テ生ジタルハ、其花形色種々ニ變ズル者ナルガ故ナリ、凡ソ菊ハ培養ヲサヘ懸到ニスレバ、實ヲ蒔モ、幹ヤ枝ヲ插モ、葉ヲ插モ、皆能ク活者ナリ、故ニ珍花ヲ世ニ弘ズシテ秘藏スルニハ、其菊ヲ栽タル處ニ、人ノ近寄ヲ禁ズベシ、若夫葉ヲ盗採スルトキハ、直ニ插テ活モノナルヲ以テナリ、凡菊ヲ作ルニハ、高燥ノ地ヲ良トシ、濕地ニ宜カラズ、菊ノ實ヲ蒔ニハ、春分頃ニ山野土カ、黒鬆土カ

ヲ三荷ト、鹽土一荷ノ割ニ調合シテ代ヲ補理ヒ、種ニスル花ヲ小、便灰ト能ク採合テ蒔キ、其上ニ厩肥ノ蒸朽タ、細キ粉ト爲タルヲ、一二分篩掛テ、苫カ藁筵ノ類ヲ雨覆ト成シ、芽ノ生ジタル後ニ覆ヲ取除ベシ、菊ノ植地ハ、花ヲ食料カ藥料ニスル菊ヲ作ルニハ、甚ク培養ヲ心配スルニモ及バザル事ナレドモ、花ノ美麗ヲ賞覽スベキ大菊中菊ヲ植ルニハ、別段ニ精細ヲ盡シテ作ルニ非レバ、絶世ノ名花ヲ得ルコト能ズ、故ニ絶倫ノ珍花ヲ作リ出スニハ、高燥ナル土地ヲ撰ビ、先ヅ其地ノ深三尺許モ堀上テ、前年十月頃ニ理肥スベシ、乃チ古疊カ或ハ腐タル藁筵ヲ用テ宜シ、其上ニ野土カ黒鬆土ヲ置テ細ニ砕キ、寒中ニ人糞ヲ澆テ耕交ヘ、雨ノ濕ザルヤウニ能ク覆ヲナシ、都テ三度糞ヲ澆ク、寒ニ斷花サセ置キ、翌年春分後ニ至テ、又耙シテ大陽ニ晒シ、花壇ヲ造テ、三月上旬ヨリ植ベシ、又根ヲ分ンコトヲ欲セバ、九月十月ノ頃ニ、根傍ヨリ出タル芽ヲ分ケ採テ別畠ニ植エ、能ク霜覆ヲ爲シ置テ、三月此ヲ移シ植ルコト、實生ノ苗モ異ナルコト無シ、凡ソ菊ヲ植ルニハ、理肥セザル花壇ニテモ、深一尺二三寸、廣八九寸ナル穴ヲ穿リ、鹽土八斗、鷄屎二斗、烟草莖粉二斗、馬糞二斗、混合タルヲ置テ、其中ニ一本ヅヽ植テ、既ニ四五寸ニ長タル頃ヨリ、時々盛養水ヲ薄クシテ、根本ニ澆グトキハ、莖葉共ニ茂リ、花モ甚盛ナル者ナリ、凡ソ菊ハ花ヲ養フハ易ク、葉ヲ養フハ難シト云ヒテ、花葉共ニ盛ナルヲ古來珍重ス、養水ノ葉ヲ汚スコトモ、泥土ノ葉ヲ穢コト甚禁忌ナリ、時々清水ヲ以テ能ク洗フヲ法トス、○春分頃ニ菊花ヲ開シムルニハ、秋分ニ根ヲ分テ盆ニ栽エ、冬ヨリ早春マデノ間ハ、煖窖ノ中ニ養ヒ置トキハ、春分前ニ花ヲ開ク、夏菊モ秋分ニ分ケ植ベク、寒菊ハ九月初ニ分ツベシ、常盤菊ハ四時花アリ、此亦秋分ニ分ケ植ベシ、凡ソ菊ヲ移シ植ルニ、舊根ヲバ悉ク除キ棄ベシ、宿根ヲ交植ルトキハ、舊根ヨリ蟲ヲ生ジテ、繁榮スルコト能ハザルニ至ル、菊ヲ作ルニハ、蟲ヲ殺スモ亦一箇ノ勞ナリ、

〔菊譜〕菊譜序

我社中の花を論ずる事、甚至れり、花もまた奇巧を極て甚妙なり、目も至り花も妙々なるに隨て、花を論ずるの品位足らず、因て此秋は位を增し、菊重の陽數にとりて九段に極め、天眞神奇には異褒を加へ、絕倫亦褒の字を加ふ千百年の下にも、如斯花はあらじといへるに當りて、其妙品をおゝべしと、誠にかりの位を設け、花は天眞に極るといへるも、此事ならずや、

寶曆十一辛巳年九月　菊翁述

菊の位。。

一位　諸々の花にくらぶるに、自然に立上りすぐれたるもの、一體の揃たる是を位と云ふ、牡丹は花の富貴と云、喜久は隱君子と云ふのたぐひに似る樣にして、花の一體の上を云ふなり、

二品　玄妙は玄妙の品、天眞は天眞の品ある類ひ、おのづからけ高、見るを云、形手强し、透艷これ全く花の姿の上を云ふなり、

三輪　大輪なるかた最上なれども、中輪にても釣合能く、大輪に立ならびてもおとらぬを取るたぐひ也、あながちに輪の大輪にも限らぬを云、

四色　紅黃紫棒に限らず、くつきりとして勝れて能きを上とす、たとへば白もうつり白より雪白と云ふは格別なり、

五艷　色能くとも光りつやなければ、おのづから位品共に落るもの也、

六透　葩の間疊枚疊枚にわかれて見ゆるを云、かさね多く重ねてかためなるは、賤しきものなり、

七受　一輪の花形の釣合を持、うけ込かゝへるこゝろ也、花形の正しきを云、丸まりの能きといへるも、大かたは請によるなり、

〔古今和歌集五秋〕寬平御時きくの花をよませ給ふける　としゆきの朝臣

久かたの雲の上にてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

(伊勢物語上)むかしなまめある女有けり、男ちかう有けり、女歌よむ人なりければ心みんとて菊の花のうつろへるを折て、をとこのもとへやる、

くれなゐに匂ふはいづら白菊の枝もとををにふるかとも見ゆ、おとこしらずよみによみける、

紅に匂ふがうへの白菊はをりける人のそでかとも見ゆ

(大和物語上)おなじみかど、(宇多○亭子)斎院のみこの御もとに、菊につけて、

行てみぬ人の為にと思はずば誰かおらまし我宿の菊、さい院御かへし、

我宿に色折とむる君なくばよそにも菊のはなをみましや

(貞信公紀)延喜九年十月四日、内裏有菊花宴、　八日庚午、参宇治并極楽寺、有供菊事、

(菅家文草四)寄白菊四十韻

渡隔蒼波路、遙思白菊圃、東京錦合宅、西向雀霧門、小離斜當戸、疎籬正遶軒、無池蓮本欠、有畝竹迷繁、擬植孤叢美、先尋庶草蕃、苗從台嶺得、種在侍郎存、(予為吏部侍郎之日、天台明公寄此花種、)下手分移遍、中心愛護敦、早春新賦葉、初夏細牙根、特擅占依井、承湯免鑿盆、蓐期揚酷烈、鞏約引嬋媛、爽籟吹灰到、流年轉轂奔、乍看珠顆坼、爭賞素寛翻、蟬翅迷施粉、蜂鬚鬬著虆、地疑星殞宋、庭似雪封袁、紫襲衣塵鏡、香浮酒滿樽、仙家縁誨國、隱士厭桃源、笑殺陶元亮、貪責楚屈原、和光宜月露、同類是蘭蓀、色惜衰虛室、名從要盛毘、斬芋曾獻主、餘馥只貽孫、住老休妖桂、忘憂倍帶萱、芬芳應佩服、貞潔欲攀援、四序環無輟、千秋矢不諼、生涯雖豈測、徐命未平反、面目慙操少、風塵悶亂煩、業抛羊柱筆、官建隼旗幡、失道人皆議、安身我獨論、雙龜牧北闕、五馬屬南轅、(文選云、副子雙龜李氏注、謂二官也、余依遷逐、及爲刺史、解却二印、故云也、)鬱鬱江雲晃、濛濛澗雨温、行程過綠浦、逆旅臥青蘋、水國親賓絶、漁津商賈喧、一來被沛酒、三度變寒暄、想像霜華發、悲傷晩節昏、含情排客館、抱影

立荒村悵望將穿眼、追尋且送魂、意驚由過雁、腸斷豈聞猨、有處唯沙插、何人折柳樊、自開還自落、誰見也誰言、暮景愁雖散、涼風恨易呑、寄詩花盛否、珍重可知恩、

〔春記〕長暦二年十月十六日己卯、今日於中宮可有進菊之興、從先日被企事、其事師房卿、公成卿、經輔等發起云々、可入菊之器皆可用金銀風流云々、　十七日庚辰、左衞門佐經季自內退出來談云、昨夜依召參中宮、關白、東宮大夫、中宮大夫、東宮權大夫、權中納言、(信家)四條中納言、(依召參、但直衣云々、太無便事也、)二位中將、左兵衞督、新宰相中將、新宰相等也、皆著直衣祗候、(不拘節親之公卿、直衣候內之事、近代之作法也、)殿上人經輔、資通、經長、經季、師良、資綱、經成、經季等也、人々進一本菊等、其高或一丈餘云々、其入物各盡金銀風流、此中公成卿經輔菊、其入物太以美麗也、自餘人々不恠覺者、先有盃饌、(東片庇)事畢被參御前座、即有管絃事、次和歌事云々、晚更被講和歌、畢各々分散者、人々云、搶非違使別當盡金銀風流之事、先例無此事、可彈指事也云々、資通、經長不進菊、凡不盡進云々、後聞菊二本被奉內御方、其一本被奉女院云々、

〔後二條關白記〕寬治七年十一月三日、菊花植庭、爲養眼所翫也、藥草也、本草可引見、

〔續世繼〕(入ふし衆)鳥羽院くらゐの御ときに、大將殿(○源有仁)きくをほりにやりて、たてまつり給けるに、うすやうにかきたるふみのむすびつけてみえければ、みかど御らんじつけて、かれはなにぞ、とりてまいれと、くら人におほせられけるに、おほい殿は、ふと心えていろもかはりて、うつぶしめになりたまへりけるほどに、みかどひろげて御らんじければ、

こゝのへにうつろひぬとも菊の花もとのまがきを忘ざらなんとぞありける、きさい(○待賢門院)の御あねにおはすれば、とき〴〵まいりかよひ給につけつゝ、しのびてきこえ給ことなども、おはしけるなるべし、

〔本朝無題詩〕(二植物)賦菊花(勒)　藤原敦光

重九佳辰何物好、共携新菊思丁寧、爲隨時令初薰砌、漸吐日精半徧庭、玉蘂吹來唇自冷、金葩掬去手

先帝、秋離空訝梁園雪、晩岸忽疑灞水晨、遥映蘆花千片白、更嘲松樹一株青、鳳凰紫艶争仙佳、月照濃粧混瑞景、麗谷酌流猶却老、陶家益酒未知醒、蓬萊移座倫爲祝、萬歳榮華契此亭、

〔千載和歌集五秋〕法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍るとき、家の歌合に殘菊をよめる、　藤原基俊

けさ見ればさながら霜をいたゞきておきなさび行しら菊のはな

〔草露集〕五月菊 并序

昔人題五月菊詩、有爲緣陶令酔来伴屈原醒之句、余愛其雅而當矣、而此花開多在六七月、豈土氣候而爾邪、將非居移氣者歟、余常惧其名實不副而見花之晩也耳、今茲五月盛開、因輙申二句作八句詩、以遺舊惧云、

鼎輿南山不改青、忽看暑月蘸英靈、黄花豈因黄梅瀝、重午新開直九齡、慧酔譲知陶令酔、縦醒何似屈醒、爲陶右相爲屈左、二老風流在一庭、

〔笈埃隨筆八〕菊說八十ヶ條

中世今出川家の西京別莊に、數品の菊あり、故に菊亭と叡聞に達し、御車を此に枉給ひぬ、實季卿有難く感悅の餘り、悉く堀て禁園に奉らる、依て是より以來當家に菊を植ず、

〔年々隨筆二〕から國にては菊は黄なるをめづめり、詩どもにも黄菊黄花などぞきこゆる、皇國には霜まどにせると霜によそへしよりはじめて、しろきをむねといひならはしたり、まことに手をつくしたる、くさぐさの色よりも、白菊黄菊のいたく大ならず、又小くもあらぬを、わざとつくろひなどもせでさかせたる、此國の中など、そこらの松影に、匂ひみちたるこそをかしけれ、そがきくとは、黄菊のことなりといふ、さる事にや、何がしとかやきこえし連歌師の句に、黄菊白ぎくその外の名はなくもがな、さる事也、

〔鹽尻二十三〕一尾州海西郡田尻庄に茂井村といふ所に、八十餘りの老民あり、菊を愛して數千本植ゆ、今年寳永六己丑九月、一根に菊蓮兩種連理す、更に五味氏に告て、十月朔日公に獻ず、

〔鹽尻五十四〕菊重陽の節物、紅葉は季秋の觀にす、詩歌にも詠じ侍る、然るに近年九日に菊さかんなること希にして、紅葉も神無月ならでは色なし、氣候も古今同じからざるにや、〇中略さてもはかなくなりしもの、去年實種せし菊の生ひ立て、花も大きやかに、淺紫の色したるを、嬉しき事にして、是は名付てよといひし程に、淺紫の賞すべきは、天龍寺にこそと戲れしを、頓て自筆して名とせし、又單にして白く靑をかくるをば、如何といふべきやと見せける程に、單に藍すれるは小忌衣にこそあれといひし、是等の花など、こゝろなく今年も開きて、いみじき褒見るこそ、こしかたも思はれ、露けき袖も今一入にしほれて、あだなる記念なりける、

〔先哲叢談五〕安積覺、字小先、小字覺兵衞、號老圃、又號澹泊齋、〇中略澹泊甚愛菊、園中多栽之、嘗上百種于守山侯、侯亦賜佳品十餘種、寄田子愛書曰、亡師朱文恭、有乞菊於義公帖、載在遺文外集、覺百事不能學文恭、而唯此一事、稍存餘風、不亦可羞之甚哉、又賀鳩巢七十序曰、吾百事不能、而尚知養菊、培植三十年、頗能得其要領、乃以菊譬鳩巢以成一篇、鳩巢亦其黃花塢詩自註曰、主人有菊癖、凡諸家奇品莫不旁搜並收而栽培之、種藝尤精、品第極嚴、每至秋時、五色燦爛、以奪人目、而安積氏之菊聞於國中云、

〔甲子夜話四十一〕林子曰、コノ十月ノ事ナリシ水戸參議ドノヨリ、園菊ノ花ヲ庭製ノ花斗ニ插シテ、(後樂園中ニテ各種ノ樂燒ヲ作ラル)昔朱舜水ノ菊苗ヲ乞シ書付ヲ新刻セラレ、石摺ノ四石ヲ貼金シ、上包ノ表墨流シ、裏靑無地ノ鳥子紙二枚ニシテ、紫ノ打緒ヲ以テ結タルヲ副テ貼リケル、參議ドノヽ雅懷ニハ感率リヌ、中々普通ノ詩ヤ歌ヨリモ遙ニ意表ニ出タルコトナリシ、但ソノ菊花四品トモ皆朱氏ノ書付ニ見ユル、各種バカリヲ插レタリ、眞ニ面白キコトニゾアリキ、カノ新刻ノ文、

去年秋承殿樣所允菊種、今已及時、可輸監管理苑囿事行、求數莖、今將其名色開具、分栽之日、幸惟察明査覽爲感、

一金菊老黄　花大而圓　性品佳勝者爲金菊、　一粉紅鶴翎淡紅而花大者　一鵝黄剪翎淡黄花不齊大而色鮮者　一白剪絨花小如錢、花瓣細如絨線者、

二月二十四日　　朱之瑜　白

〔嬉遊笑覽草木十二〕白石が詢蒭に答る書、大菊はやり候由、當所亦同事に候、去々年歟、加賀の小瀬復庵の二十韻古風を隔度和し候詩有べく候、北地も同風と見え候、水戸安積よりも此程菊は作り覺え候など、自讃めされ候て、御申越候などあり、かゝれば當時國中ゆすりて、此菊を翫びしなり、○中略享保のころ、菊合の會はやりたり、雅筵醉狂集に、近世この花はやりて、新花を作り出し菊合の會をしける、其會おほくは丸山にて催すなり、我やどの東の籬菊とりてはるかにみやる露の丸山、艶道通鑑に、八重九重のきく合、もよりにまかせ好翫につれ、東山北野につどひて、輪をきそひ艶をあらそふ、鼻冗きて席に尻のつかぬは、今日の花軍の魁け人と見え、顔をかたぶけて線にたばこのむは、醉翁の一の筆と推せらる、かの靜姫が嘗咲に針咲つけて、寒まで忍び通ひ路、あけはのやのこれら、〔名なり〕云々、さくら牡丹つばき菊、色々の手入して、枝をため根をゆがめて、狂ひ咲をたのしむは、古人のかたわものをとのそしりに落入べし、わけて菊そろへの席をみるに、一本々々枝たをやかにもせず、能一ッ切生にしたるは、美女の獄門みる心地し侍るとあれば、近時の朝顔會などのごとし、東京夢華錄、九月重陽都下賞菊有數種云々、酒家皆以菊花縛成洞戸云々とあり、これは大菊にて作るなるべし、

〔菊花俗談〕元祿の初つかた、都下に菊作る人あり、其頃は花の名を賞して翫ぶ者なかりき、花の徑

りは曲尺にて寸より二三寸迄なり、寛永の頃より、名を賞して翫ぶ者ありし、正德の末つかた、高根、小倉山抔といふ菊あり、享保に至る迄、花形に丁子咲、毛咲、管咲の類ひあれども、餘に賞せず、近世菊花盛んなる趣意は、享保十乙巳年五月、紀州和歌山より、紀藩の臣落合氏菊苗を都下へ持來り、此種色々變じて珍花たり、此菊の生は、菊の中の別種なり、莖細く花葉抔も麗、近來の珍華也、此菊上月吉岡の兩氏へ贈り、夫より日向畠山奥津の三氏へ移り、僕(〇松籟軒南畝)この花を奇觀する事四年の間なり、同十四己酉春、此菊を奥津氏より得て、年々種を蒔、今三十四年に至る、其頃は秘華珍品と賞して、實生を仕立おくに、散らすべからずと盟をなし、各相應の花檀を搆へ愛翫す、世人是を知らず、時に澀谷山榮傳僧、此花手に入培養專にして、朶色々の實生出たり、此菊を世人賞すといへども、金王菊と名付、其頃は他仁へ苗送らず、因て尊秘計にて此菊を求んと欲て、紀州和歌山を初として、諸國を尋るといへども、此菊花得がたし、かくの如くの珍花なり、然るといへども正菊にあらず、異形の花也、況やヨレクルイ卷込咲を、むかし愛翫する事を聞かず、故に斯なるは造化の變にて、變じたる珍華なるべし、先づ吉野山、飛鳥山、金王櫻、筆捨松、大異殿、各秘花にて、其頃は世人の得難き菊なり、此外珍花數多出たり、此時より括り咲よれ咲を、世人珍花と稱して、菊花大氣に盛んなり、

〔菊花俗談〕寛延二己巳年九月、市ヶ谷八幡社内にて、或人會主として、一塚予(〇松籟軒南畝)府内の實生、凡二百餘種を取集め、都下にをゐて實生會の始め也、此中に紀州菊の實生は二三ヶ所より出る、此花を賞して、聊の文を綴りたり、是に同士の輩有て、寛延四辛未秋九月、實生會を催し、花の位を定む、紀州菊花形付と題號して、菊譜を綴れり、是より菊譜數品出たり、

〔嬉遊笑覽(十二草木)〕江戸巣鴨の花戸、年毎に菊を作る、花壇七八間ばかりにして家ごとに作る、中菊にてありしが、文化の初大作りとて、一本の菊にて鳥獸山水種々の物を作り、後には百姓商人まで

も作りて、文化十年の頃は、處々に是を學びて作れり、遊觀の人群集したりしが、其後漸く衰へて止たり、〔今はしとの花壇作りのみなり、根種々の作り物は、賣かゝる鴫別分なしとなり、〕

〔一話一言十六〕巣鴨菊

丁卯〔文化四年〕の九月、節遲くして菊の花いまだひらかず、十月六日、白山本念寺なる母の墓にまうでしかへるさ、巣鴨五軒町の菊見にゆく、去年みし垣根の山茶花いかゞならんと問ふに、花すでに咲てかつちるもあり、先樹家植左衞門が園にいりて、大菊をみる、〔花壇四間計也〕中菊もあり、花いまだ十分ならず、その隣に文次郎といへるあり、門に風流菊船作といへる標をたつ、入てみれば船の形につくりなせり、〔花色小輪也〕それより市左衞門が園に入てみれば、花又咲り、こゝには孔雀の羽をひろげたらんやうにつくれる二本あり、花いまだ遲し、小路を出て巣鴨の大路に出、左の方なる彌三郎が園に入りてみる、去年みし西施白の花壇にして、蟻石もてきざみたる如し、花の中は黄色にうるみたるやうにみゆ、これは大村家より出し種にて、もとは讃種也とぞ、紫の中輪に一トひら／＼づゝ、白き生の入たるを、霞のやどりと名づく、實生にして今年の新花なりと、彌三郎かたる、小菊のあざみ菊といへる二もとをふさ／＼と大きくつくりなせり、一は白、一は紫也、〔紫の方未〕〔間〕三間の花壇の中に、たゞ一もとにて左右に二間半あまりひろごりて、山のかたちにつくりなせる黄赤色の菊を、天眞冠と名づく、これは去年の十月に苗を分てつくりたれば、十二月の培養の力によりて、かくはなれりといふ、なべての菊は、四月に苗をわかちて、九月まで六ヶ月の培養也、ことしは十一月より根をわかつべきなどかたれり、存養の力のあつき事、これにてもみつべし、夫より東ざまに歩みて、佐太郎が園にいる、これは今までみし花にくらぶべくもあらず、園の中よりはじめの市左衞門が庭に出て、もとのみちをかへれば、六日の月の影雲間にもれて、さやかなるを見つゝ、金曾木の里のやどりにかへりぬ、

菊利用

〔文恭院殿御實紀附錄五〕或日松平樂翁定信の邸を、林大學頭衡とひし時、めづらかなる菊花三十種あまりを、いと清らかなる宮に入たるを出してしめされ、こは本城の內苑へ培養し玉へる實生の花とて、御側申次土岐豐前守朝旨もて、うち〳〵賜はりしなり、それのみならず、もし其うちに得まほしく思ふ花もあらば申出よ、苗をわかちて下したまはるべしとの御旨なり、いと有難き御惠ならずや、花はかぎり有て萎むべければ、盛意の厚きことを、永く感戴し奉らんと思ふなりと、物語ありしとぞ、

いづれの秋のことなりしや、菊苗を閣老に分ちたまはりしに、翌年花の頃になりて、去年たまはりし菊の花さかば、吾一覽に獻ぜよと仰事ありければ、諸老みな退きて花片をきり、名器にのせてたてまつりぬ、其花いづれも絢爛富麗にして、いふばかりなく美事なりしに、一人水野越前守忠邦がたてまつりし菊の、花容萎薾のさまにて、餘の花に比すれば、更に見所もなくぞ有ける、公〇[illegible]家實つら〳〵見給ふて、各たてまつりし富麗のものは、必ず園丁に任せ培養を盡して、この美をなせしことならん、越前の花のうるはしからざるは、極めて親培せしなるべしと宣ひて、これより忠邦を寵遇し玉ふ事、他に異なりしとぞ、

〔續近世叢語五規箴〕熊本侯愛菊、多植庭中、以架蔽風霜、一日謂竹原玄路曰、菊花殊美、可作和歌賞之、玄路卻吟曰、霜耳蔽、菊之著綿、脫棄面、蒼生草耳、著勢座登堯思、侯乃蹶然有感、由是不復栽菊、竹原玄路稱十郎、熊本藩人、監物公擢爲用人職、有能名、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕菊〇中略菊花種類多シ、大抵二品ニ分ツ、藥食ニ用ル菊ト、花ヲ愛スル菊トナリ、藥用ノ菊ハ甘菊ナリ、本草ニ說トコロハ此モノヲ指ス、甘菊ハ元來色ノ黃白ニ拘ラズ、味甘キ者ヲ用ユ、然レドモ今本邦ニ傳ヘ栽ル者ハ皆黃色ナリ、和名アマギク、又料理ギクトモ云、九月ニ花ヲ開ク、大サ寸許、或ハ寸餘、

野ハ常菊トチガヒ、細筒子ニシテ末五出、瓣多ク重テ心ナシ、瓣ヒラケ潤澤トナレバ、黄色淡クナリテ、中ニ小心アリ、此菊花葉共ニ苦味ナクシテ、食料ニ充ベシ、故ニリヤウリギクト云、此花藥用ニ良トス、今藥舖ノ菊花ハ、奥州仙臺ヨリ出ス、常ノ黄菊ニシテ味苦シ、又夏菊ヲ用ル人モアレドモ宜シカラズ、

〔延喜式 典藥 二十七〕諸國進年料雜藥

甲斐國十二種、黄菊花十兩、　近江國七十三種、○中略 黄菊花一斤二兩、　下野國十四種、○中略 黄菊花五兩、　若狹國廿四種、○中略 黄菊花二兩、　阿波國卅三種、柴胡、黄菊花、澤寫、橘皮各一斤、　讃岐國卅七種、○中略 黄菊花三兩、

〔類聚國史 七十五 曲宴〕延暦十六年十月癸亥、曲宴、酒酣、皇帝○桓武 歌曰、己乃己呂乃、志具禮乃阿米爾、菊乃波奈、知利曾之奴倍岐、阿多良蘇乃香乎、賜五位已上衾、

〔類聚國史 三十一 帝王〕大同二年九月乙巳、幸神泉苑、琴歌間奏、四位已上、共插菊花、于時皇太弟○淳和 頌歌云、美耶比度乃、曾能可邏米豆留、布智波賀麻、岐美能於保母能、多乎利太流祁布、上○平城 和之曰、袁理比度能、己巳呂乃麻丹麻、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、爾保比多理介利、

〔年山打聞 上〕菊の歌

萬葉集には、一首も見えず、それより後桓武天皇の御製を類聚國史七十五卷に載られて云、○歌略

今按するに、今も菊の花は、九月中頃もしくは末つかたより十月迄盛也、萬葉に淡路廢帝天平寶字年中迄の歌を載られたるに、一首も見えざるは、稱德光仁の御代、或は桓武のころなど、もろこしより菊のわたりたるにや、

〔拾遺和歌集 十七 雜秋〕題しらず　よみ人しらず

かのみゆる池べにたてるそがきくのしげみさえだの色のてこらさ

〔奥義抄三〕そがきくは黃菊なり、承和のみかどは、よろづの物きなる色をめでたまひて、菊もきなるを愛したまひける也、されば承和菊と黃なるをいふ也、或物には、一本菊をいふ也、さればこそしげみさえだとは、よみたれとはいへれど、一本きくならずとも、えだなかるべきやうなし、又黃菊の一本ぎくにてありけるを、みてもよめりけん、みぎのことばにつきて、一本菊といふべきにあらず、色のてこらさとは、いろのてりこきさまをよめり、しげみさえだとは、しやしたえと云也、

〔白石紳書八〕一己亥〇享保四年春三月に聞く、長崎伊豫守元仲の從者に高田勘四郎と云もの、京師彼やしきの庭際にうへ置し色々の菊ども、其苗をうつし栽る事をわすれて、初に植しまゝにて、三年の後に花の開きしを見しに、種々の花皆々黃色なる花と成たり、是をおもふに、是はもと黃なるものなるを、人の力にて種々のかわりも出來しにやといふ也、此者元來無學のものにて、菊は黃色を正色とするなど云事を知れるにもあらず、たゞ〳〵その見る所に據りて、いひし所也、尤以て奇妙と云べし、人力の天に勝つ所ありと見へしがと、その天なるものは得て加ふべからざる所有なり、人の心術愛につきて、心得有べき事なれば、其人の名をも詳にこゝにしるし置る也、さらば當時さま〳〵の奇花あるも、たとへば人に酒をすゝめて、其醉狂を見て戲とするが如し、返す返す不可然事也、

〔桂林漫錄下〕菊變艾

連歌師阪昌周、東都山伏井戸ニ僑居ノトキ、隣家ノ老父、菊ヲ好テ作リケルガ、長ヲ延サズシテ、花ヲ開カシメン事ヲ欲シ、年々切ツメ苅コミケル程ニ、二三年ノ後、變ジテ艾ト爲リヌ、唐艾ノ名宜ナリト、昌周ガ云ケル由、予〇桂川中良ガ幼ナルトキ、杉田老醫、先考國訓法眼ヘ語リケルヲ、思ヒ出ダ

セル儘爰ニ記ス、

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕菊(中略)

野菊 苦薏(中略)

按野菊、鷄兒腸草二物相似、而葉略狹小多尖、味甚苦、其花有單葉、有千葉、色黃者野菊也、(鷄兒腸草葉不甚尖、無切似、臭味不苦、其花白微帶紫色、)採藥人用、金剛山野菊花、充眞菊花者非也、當擇家種單葉黃菊花可藥入用、(誤矣、亦鷄兒腸草用者、宜擇取眞菊花、)

佛頭菊 俗云佛菊草

按佛頭菊直莖無枝、梢葉間有段對、淺綠色厚柔而不潤、文理如皺異、常數十葉叢聚抱莖生、狀似濱菊、九十月開白花單葉頗似菊、

濱菊 俗稱 本名未詳

按濱菊莖葉共似佛頭菊、而葉狹長有刻齒、深綠色甚潤澤、九十月開白花、似菊而大厚、(中略)

常磐菊 不斷菊 淵明草 共俗稱

按常磐菊、與於夏菊稍近年出於江戸、其莖葉似菊而甚瘦細、梢葉無切叉、略似茼蒿葉、五月開花、似野菊花而小、外單白內八重、帶微青黃色、逐純白、逐日生枝梗、至秋開花、故名常磐菊、

〔本草和名 九草〕艾葉、一名冰臺、一名醫草、(已上本經、)白艾、一名糊艾、(並出蘇敬注、已上二名出、)一名蓬、(音吐計反、出兼名苑、)和名與毛岐、

〔倭名類聚抄 二十草〕蓬 兼名苑云、蓬一名蘩、(艾也、蘩音煩、和名與毛木、見本草五臟反、)本草云、艾一名醫草、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕圖經曰、艾初春布地生苗、莖類蒿而葉背白、時珍曰、此草多生山原、二月宿根生苗成叢、其莖直生白色、高四五尺、其葉四布、狀如蒿、分爲五尖、椏上復有小尖、面青背白、有茸而柔厚、七八月葉間出穗、如車前穗、細花、結實纍々盈枝、中有細子、霜後始枯、圖經又云、以復道及四明者爲

佳、云此極灸百病尤勝、光與毛伎爲允、〇中略 按廣韻、蓽同篳、說文云、篳藩落也、禮記儒行篇、篳門圭窬、注、篳門、荊竹織門也、兼名苑以蓽爲蓬一名、不知何據、疑以有蓬戶蓽門之稱、兼名苑誤混蓬蓽爲一也、〇中略 按毛詩騶虞篇、彼茁者蓬、傳云、蓬草名也、說文云、蓬蒿也、並不言其形狀、本草諸書亦無載、埤雅載蓬引詩首如飛蓬及彼茁者蓬、云其葉散生、末大於本、故遇風輒拔而旋、說苑曰、秋蓬惡於根本、而美於枝葉、秋風一起、根且拔矣、莊子曰、蓬善轉旋、非直達者也、商子曰、飛蓬遇飄風而行、蓋蓬有利轉之象、故古者觀轉蓬而知爲車、又載艾引詩彼采艾兮云、草之可乂病者、一名灸草、則蓬艾二草不同、以蓬爲艾、亦不知何據、

〔下學集 下草木〕熟艾(ヤイサ 灸草)　艾蓬(二字義同)

〔八雲御抄 三上草〕蓬　よもぎがそまと云は、よもぎのそまのやうに生たるなり、さしも草と云、或非蓬似蓬草とも云り、

〔東雅 十五草卉〕蓬ヨモギ　倭名抄に兼名苑本草等を引て、蓬一名蓽ヨモギ、艾一名醫草と註せり、これも其名の相同じきに因りて併註したるなり、蓬と艾と一物にはあらず、蓬は詩の集傳に、其華柳絮の如くにして、聚而飛如亂髮といふもの即此也、其苗葉は瞿麥の如くにして、花形菊花のいまだ開かざるが如し、既に展き盡しぬれば、柳絮の如く飛ぶなり、艾は即今俗にモグサといふもの是也、ヨモギといふ義不詳、モグサとは燃草(モエグサ)也、萬葉集抄にはモとはモユルといふ詞なり、ヨモギをモグサといふが如しと即此也、

〔宜禁本草 乾集中草〕艾葉(生寒汁殺蚘、熟熱灸百病、)作煎止下血吐血衂血膿血痢水、丸散任用、主婦人漏血、利陰氣、使人有子、三月三日採、初生取作乾菜食之、實溫無毒、壯陽助水藏腰膝暖子宮、丹溪曰、(灸艾下行、服艾上行、多服致毒、)

〔本朝食鑑 三柔滑〕艾(訓與毛木、或曰毛久佐、)

釋名本草綱目、艾一名醫草、一名大(平野)艾、蕭蒿列一種非艾之名、

集解、艾處處山野多有、二月宿根生苗成叢、其莖直生白色、高四五尺、其葉四布、狀如蒿、分爲五尖、椏上復有小尖、面青背白有茸柔厚、七八月間出穗、如車前穗、細花結實、累累盈枝、中有小子、霜後始枯、其苗作蔬、合糯搗作餅、三月三日用艾餅、而賞翫、或合粳米粉搗作團子、作燒餅、其苗長至五月、采之、曬乾作艾灸、近世朱墨印食者、用其曬乾、以手揉採如絮、去黑粉、而水煮去黑汁、取出再曬乾、用蓖麻子油而抹調之、朱墨隨意而合用之、凡灸以陳艾爲宜、三年之艾最好、今以江州膽吹山之艾爲上、野州中禪山中標(シメ)茅原之艾次之、此俗稱自古歌人之所詠也、故世人采此二處之艾而收蓄、以爲灸治之用也、

氣味、生則微苦大辛溫、熟則微辛大苦溫、無毒、

主治、溫中逐冷、去一切風濕、止一切血、灸之透諸經、而治百種病邪、起沈痾、其餘詳于綱目、

附方、金傷流血(及諸血不止、用陳艾、手中揉爛軟、傳之合瘡口、則血止、[illegible]而立止、)心腹冷痛(用陳艾、手中揉合白鹽少許、水煮熱取出、包于手中及細絹、而熨之、水去熟、熨之最好、)

〔物類品隲三〕艾　和名ヨモギ、處處皆アリ、漢種上品享保中種ヲ傳フ、今官園ニ多シ、是即蘄艾ナリ、

淡路產上品、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕艾　サ。シ。モ。グ。サ。　ツ。ク。ロ。イ。グ。サ。　ヨ。モ。ギ。　ヨ。ゴ。ミ。　モ。チ。グ。サ。加州　フ。ツ。藝州　ブ。ツ。肥前　一名杜蓋屏風(綱目)　病草(事物異名)　牛莧(法書名物)　女蒿(物理小識、又隰草ノ部ニ女蒿ノ本條アリ、)又隰草ニモ女蒿ノ名アリ、皆同名ナリ、　增、一名醫德紙(輟耕錄)　草師婆(同上)

山野ニ自生多シ、葉ノ面深緑色ニシテ、背ニ白毛アリ、コレヲ乾シ採時ハ、葉ハ皆碎ケ粉トナリ落チ、背ノ白毛ノミ殘リテ綿ノ如シ、コレヲ熟艾ト云、和名モグサ、和方書ニ白葉ト名ク、一名艾綿(醫學正傳)、艾絨(天工開物)白艾(附方)白熟艾(同上)モグサニ製スルハ原野自生、短小ナルモノ佳ナリ、蘇頌モ以苗短者爲良ト云リ、ソノ海邊ニ生ズルモノ殊ニ瘠ナ香多シ、故ニ唐山ニテハ蘄州ニ生ズルモノヲ

上トス、新艾ト名ク、本邦ノ淡路モグサニ擬スベシ、新艾ハ今漢種アリ、江州伊吹山ノ艾、短小ニシテ香氣甚シ、故ニ其熟艾最上品トス、因テ今モ世人伊吹モグサヲ上品トスレドモ然ラズ、今ノ伊吹艾ハ一名ヌマヨモギ、卽陸璣ガ毛詩疏ニ說トコロノ、蔞艾ニシテ艾ニアラズ、苗ノ高サ一丈餘ニシテ、葉モ長大ニシテ尺ニ過ギ、葉背ノ白毛殊ニ多シ、故ニ又ウラジロト呼ブ、香氣少クシテ艾ト異ナリ、用ユベカラズ、

〔令義解五軍防〕凡兵士每ㇾ火、〇中略火鑽一具、熟艾一斤、

凡放ㇾ烟貯備者、須ㇾ收ㇾ艾葉生柴等、〈謂艾者蓬也、蓬草總名也、〉相和放ㇾ烟、〇下略

〔延喜式十五内藏〕凡典藥寮所ㇾ獻昌蒲并艾、奏進之後、寮允已下參入撤ㇾ之、

〔袋草子三〕曾禰好忠三百六十首歌云

なけやなけよもぎがそまのきり〴〵す過行あきはげにぞかなしき、長能云、狂惑ノヤツ也、蓬ガ杣ト云事ヤハアルト云々、

〔琴後集十記〕蓬が杣の記

あるじ澤〇見のいへらく、〇中略われ此やどりを蓬が杣となん名づくといふ、〇中略かの長能の朝臣のそしりをば、いかにことわるべきぞといふとぞ、おのれ〈春海〉〇村田こたへけらく、そはものになづみたるぬしかな、かの朝臣のうけひかざるは、耳なれぬ詞をいとふにこそ有けらし、されどかならずさることゝのみも、さだめがたきよしあり、そも〳〵歌の詞にいひふりて跡あることゝ、あらたにつくり出ていひそむることゝの二つあり、蓬が杣とはあらたにいひそめたる詞にて、古き跡によりたるにはあらず、そは蓬のおげう立るが、杣山の木のむれたるに似たればたとへていふなり、かの天つ星の數多きをあふぎて、星の林となづけ、みねの岩ほの並たてるをみて、岩垣といふらん、みなおなじたぐひなるべし、〇下略

〔枕草子三〕草は

よもぎいとおかし

〔後拾遺和歌集雜十一〕女にはじめてつかはしける　藤原實方朝臣

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを

〔新古今和歌集二十釋教〕なほたのめしめぢがはらのさしも草我世中にあらむかぎりは

この歌は、清水觀音御歌となむいひつたへたる、

〔平家物語五〕月見の事

德大寺の左大將じつていの卿は、ふるきみやこの月をこひつゝ、八月〇治承四年十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ、なに事もみなかはりはてゝ、まれにのこる家は、門前草ふかくして庭上露しげし、よもぎがそまあさぢが原、鳥のふし所とあれはてゝ、むしのこゑ〴〵うらみつゝ、くわう菊しらんの野邊とぞなりにける、

〔源平盛衰記二十六〕蓬壺燒失事

六日〇治承五年閏二月八條殿モ燒ヌ、此所ヲバ八條殿ノ蓬壺トゾ申ケル、蓬壺トハヨモギガツボト書ケリ、入道〇平清盛蓬ヲ愛シテ坪ノ内ヲ一シツラヒテ蓬ヲ植、朝夕是ヲ見給ヘ共、猶不飽足ゾオボシケル、サレバ不斜造リ瑩レタ、殊ニ執シ思ヒ給ケレバ、常ハ此蓬壺ニゾ御座ケル、

〔新勅撰和歌集十七雜〕題不知　平泰時

世中にあさは跡なく成にけり心のまゝのよもぎのみして

〔武江產物志藥草〕多摩川邊ノ產　艾向ケ岡

〔採藥使記下攝州〕照任曰、淡路島ニ一種ノ艾ヲ生ズ、此艾ヲ以テ陶器ニ灸スルニ、乍チ其穴ヲ穿ツ、其火氣ノ强ヨケレバナリ、是レ眞ノ蘄艾ナルベシ、

茵陳蒿

〔近江國輿地志九十九土産〕膽吹蓬艾
膽吹山の產する所の蓬なり、山の八分にあり、高さ三四尺及六七尺、甚大きにしてうるはし、土人每年五月五日これを採て干曬す、數遍臼にてこれを舂、乃蓬艾を製す、柏原驛にてこれを賣、自云此蓬艾一灸するときは、他の百灸よりも勝たり、栗太郡梅木村にもこれをうる、志賀郡大津の土人西川久識といふ者多これを賣、

〔新撰字鏡草〕荷陳蒿加°耳°字°波°文°

〔本草和名七草〕茵陳蒿、一名馬先、出釋藥性和名比°岐°與°毛°岐°、

〔倭名類聚抄二十草〕茵陳蒿　釋藥性云、茵陳蒿、和名比岐與毛木

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草和名云、茵陳蒿一名馬先、出釋藥性、千金翼方證類本草中品有茵陳蒿、是輔仁依本草載茵陳蒿、依釋藥性載馬先之名也、此蓋源君誤引、陶注本草云、似蓬蒿而葉緊細、莖冬不死、春又生、陳藏器云、茵蔯雖蒿類苗細、經冬不死、更因舊苗而生、故名茵蔯、後加蒿字也、蜀本圖經云、葉似青蒿而背白、圖經曰、春初生、苗高三五尺、無花實、今謂之山茵蔯、山茵蔯乃有數種、京下及北地用者、如艾蒿葉細而背白、其氣亦如艾、味苦、乾則色黑、以本草論之、但有茵蔯蒿而無山茵蔯、本草注云、茵蔯蒿葉似蓬蔯而緊細、今京下北地用爲山茵蔯者是也、時珍云、茵蔯昔人多蒔爲蔬、故入藥用山茵蔯、所以別家茵蔯也、今山茵蔯二月生苗、其莖如艾、其葉如淡色青蒿而背白、岐緊細而扁整、九月開細花黃色、結實大如艾子、花實並與菴䕡花實相似、亦有無花實者、

〔多識編二草〕茵蔯蒿、加°和°良°與°毛°岐°、

〔大和本草六藥〕茵陳　川原ニアリ、故カハラヨモギト云、冬春ノ嫩葉ハ表裏白シテ、艾ノウラノ色ノゴトシ葉大也、香アリ、老葉ハ表裏青ク如青蒿シテ色不白、香ウスシ、秋間葉細ニシテ如杉、老葉ト嫩葉トノカタチカハル、又時節ニヨリ地ノ肥瘠ニヨリテ葉ノ形カハル、青蒿ヨリ細葉ナルモア

リ、莖多、莖葉不凋、宿根不枯、與青蒿異、

〔重修本草綱目啓蒙十 隰草〕茵蔯蒿 カハラヨモギ 青蒿黄花蒿ニモコノ名アリ、混ズベカラズ、ネズミヨモギ コギ州 フナボウキ 備州 ハマヨモギ 加州 イヌヨモギ 和州、同名アリ、 一名聖蒿 正字通 菁蒿 同上 加外

左只 嘗稿本草 加外作只 村家 加火老只 採取月令 増、一名絲茵蔯 本經逢原

山野共ニ自生多シ、山ニアルヲ山茵蔯ト云、野ニアルヲ野茵蔯ト云、家ニ種テ藥用ニ供シ、食料ニ入ルヽヲ家茵蔯ト云、別種ニ非ズ、生ズル所ニ因テ名異ナリ、本邦ハ山野ノ二ツノミニシテ家茵蔯ハ稀ナリ、初ニ生ズル葉ト莖上ノ葉ト形色異ナリ、秋ヨリ春マデノ間ハ、地ニ就テ叢生ス、青蒿葉ニ似テ白毛多シ、故ニ此嫩ナル時ヲ白蒿ト名ク、頌ノ説ニ、階州一種白蒿一似青蒿、而背白ト云是ナリ、救荒本草ニ白蒿ト云モ、茵蔯蒿ノ嫩葉ヲ指ス、本條ノ白蒿ト同名異物ナリ、春以後漸ク莖ヲ抽デ、高サ二三尺ニ至ル、葉互生ス、形漸ク細クナリ、梢ニ至リテ愈甚クシテ絲ノ如シ、狀茴香葉ニ似タリ、深緑色ニシテ白毛ナシ、梢葉ノ枝八方ニ分ル、故ニ八角茵蔯ト云、夏秋ノ間、枝梢葉間ゴトニ花ヲ生ズ、甚密ニシテ後ニハ穗ノ如クナル、花ハ艾ノ花ニ似テ至テ小ク色白シ、秋深テ苗枯ル、實熟シ落テ自生ス、其莖ノ本ハ枯レズシテ更ニ嫩葉ヲ生ズ、又根ヨリモ新葉ヲ生ズ、皆白毛アリテ細ナラズ、茵蔯ハ莖根共ニ枯レズ、陳莖ニ因テ再ビ葉ヲ生ズ、故ニ茵蔯ノ名アリ、青蒿ノ莖根共ニ枯ルヽニ異ナリ、藥舗ニ賣ルハ多ク青蒿ヲ混ズ、又神麴ニ用ル青蒿ニモ茵蔯雜ル、二草ノ梢葉似タル故ナリ、宜ク分別スベシ、○中略

増、一種ハマインチン、海濱ノ砂地ニ生ズ、高サ六七尺、莖葉花實共ニ相似テ、大ニ長ズト雖ドモ、白毛少ラズ、下品ノモノナリ、藥用ニ入レズ、

〔武江産物志 藥草〕多摩川邊ノ産 茵蔯 カハラヨモギ 志村ニ、

〔新撰字鏡 草〕蔄 呂居反、平、蓬類也、富也、伊波牟支、又加良与毛支、

白蒿

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕菴閭　〈複閭〉　菴閭蒿　〈俗云比木與毛木〉

本綱、菴閭葉似菊葉而薄、多細丫、面背皆青、高者四五尺、其莖白色、如艾莖而粗、八九月開細花淡黃色、

結細實如艾實、中有細子、其老莖可以蓋覆菴閭、故名、極易繁衍、

子氣味〈苦微溫〉入足厥陰經血分、治瘀血及產後血氣痛、

按菴閭原野有之、用莖爲帚耐久、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕菴閭　イヌヨモギ　キクヨモギ江戸　フナヨモギ　一名眞珠蓬〈采藥本草〉

閭蒿〈藥性奇方〉　掩閭子〈遵生八牋〉

播州江州山中ニ自生多シ、移シ栽テ繁茂シ易シ、宿根ヨリ叢生ス、苗高サ二三尺、葉互生ス、形菊葉

ノ如シ、艾葉ニ似ズ、背ニ白毛ナシ、斷レバ艾葉ノ氣アリ、秋ニ至リ穗ヲナシ、黃花ヲ開ク、花實共ニ

艾ニ同ジ、即艾ノ屬ナリ、〈中略〉

增、一種近年漢種ノ菴閭ト稱スル者アリ、其葉深綠色ニシテ厚ク、牡蒿(オトコヨモギ)葉ノ如ク末ニ至テ漸ク濶

ク、葉頭圓クシテ鋸齒アリ、牡蒿ノ葉頭ヲ切リソロヘタルガ如キニ異ナリ、尋常ノ者ヨリ整正ニ

シテ上品ナリ、盆ニ栽テ愛スベシ、花實ハ牡蒿ニ同ジ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

飛驒國九種、〈中略〉　菴閭子四斤八兩、

〔新撰字鏡草〕紫蘩　〈一同、韓圖反、白蒿也、加耳與毛支、〉

〔本草和名草六〕白蒿、〈仁諝音中字波、出蘇敬注〉一名紫蘩蒿、一名彭勃、〈出神仙服餌方〉和名之呂與毛岐、一名加波良與毛岐、

〔倭名類聚抄草二十〕白蒿　本草云、白蒿一名紫蘩蒿、〈紫蘩二音、紫波、和名之路與毛木、一云加波耳與毛岐、今按蘩又有此和名、見上文、〉

〔箋注倭名類聚抄草十〕證類本草引唐本注云、爾雅蘩皤蒿、即白蒿也、本草和名云、一名紫蘩蒿、出蘇敬

注、按爾雅所謂蘩皤蒿者、以皤蒿二字釋蘩也、詩采蘩云、于以采蘩、毛傳云、蘩皤蒿也、是也、皤蒿猶白

蒿也、故詩七月云、采蘩祁々、毛傳云、蘩白蒿也、正義引孫炎亦云、白蒿也、郭注依之、蘇敬注云、卽白蒿也者引之也、然則本草和名、皤蒿上當有一名字、補仁誤以蘩皤蒿三字連文爲一名、蔵君謾之非是、又按說文云、蘩白蒿也、王念孫曰、蘩之言皤也、說文、皤老人白也、夏小正傳、蘩、游胡、游胡旁勃也、廣雅云、蘩母、旁勃也、卽是物、王念孫曰、蘩母、疊韻也、旁勃雙聲也、旁勃亦相近、(略)○中 時珍又云、爾雅、蘩皤蒿、又云、蘩由胡、皤蒿今陸生艾蒿、由胡今水生蔞蒿、詩云、呦々鹿鳴、食野之苹、苹卽陸生艾蒿、鹿食九種解毒之草、白蒿其一也、詩云、于以采蘩、于沼于沚、左傳云、蘋蘩薀藻之菜、可以薦于鬼神、羞于王公、並指水生白蒿而言、按以云野之苹、歸之陸生、以云于沼于沚、又蘋蘩薀藻皆水、而並舉歸之水生、不爲無理、但以爾雅皤蒿由胡分水陸、恐屬臆斷、

〔康賴本草上八〕和名少々 白蒿(からよもぎ、又しらよもぎ)

〔和爾雅七草木〕白蒿(皤蒿、由胡、蘩同、艾之類)

〔重修本草綱目啓蒙十四隰草〕白蒿 シロヨモギ シラヨモギ ハマヨモギ 一名白蓬(大倉州志) 白艾蒿 蘩(爾雅) 旁勃(埤雅) 遊胡(同上) 茵蔯蒿(略) 山茵蔯(同上) 遊湖(通雅)

佐渡河原田ノ海濱ニ產ス、奧州ニモアリ、備州ニ移シ栽ヘテ繁茂シヤスシ、苗及花實ハ常艾ノ形狀ニ同ジ、葉ハ艾葉(ヨモギ)ニ似テ厚ク、面背共ニ白毛多シ、艾葉ノ面青背白ニ異ナリ、其香氣モ亦同カラズ

〔百品考上〕白蒿 和名アサヾリ(略)○中

本草彙言周氏曰、白蒿香美可食、今人以白蒿誤指爲茵蔯、但苗葉相似、實非也、

蝦夷產ト云、今花戶ニモアリ、葉ハ茵蔯ノ脚葉ニ似テ、面背共ニ白毛多ク、四時共ニ潔白ニシテ始終變ゼズ、莖ノ高サ一二尺、七八月穗ヲナシテ花アリ、茵蔯ヨリ大ニシテ青蒿ノ花ノ如シ、蘂黃ニシテ蒂白シ、秋フケ莖半バ枯レ半ハ殘リ、舊莖ヨリ發芽スルコト茵蔯ニ同ジ、臭氣ナシ、古

青蒿

說ニ佐渡ノシロヨモギヲ以テ白蒿ニアツ、是ニアラズ、

〔多識編 二草部〕青蒿、加良與毛岐、異名草蒿、本經方潰、同

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕青蒿　草蒿　方潰　香蒿　𦬻蒿　菣 音牽　俗云臭艾、又云臭胡蘿蔔、〇中略

按青蒿處處河原多有之、六月六日採之調神麴、

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕青蒿　カハラニンジン　ノニンジン　カラヨモギ　ノラニンジン 丹波　ヤブニンジン　クサニンジン 大和　クサヨモギ

山中ニ生ゼズ、江河及ビ海邊ニ多シ、秋月子落テ自ラ苗ヲ發ス、初ハ地ニ就テ叢生ス、葉ハ胡蘿蔔ノ葉ニ似テ毛茸ナク、深緑色微臭アリ、冬枯レズ、春ニ至テ薹ヲ抽ズルコト、高サ三五尺ニ至ル、枝葉共ニ互生ス、葉ノ形漸ク細クナリ、梢ニ及デハ絲ノ如クシテ茵蔯ノ梢葉ニ似タリ、脚葉ノ形ト大ニ異ナリ、色ハ始終深緑ナリ、夏月枝末葉間ゴトニ花ヲ綴ル、繁密ニシテ穗ノ如シ、花ノ形ハ天名精(ヤブタバコ)ノ花ニ似テ小ク、黃蘂多クアツマリ、大サ一分餘、後蔕中ニ細子ヲ結ビ、苗根共ニ枯ル、青葉ハ此類ノ中最早ク枯ル、神麴ニ用ユル青蒿ハ此草ヲ用ユベシ、然レドモ世上ニ青蒿ト云ハ、多ハ次ノ條ノ黃花蒿ニシテ眞ニアラズ、青蒿ノ花ハクソニンジンヨリ大ニシテ黃蘂多ク出、黃花蒿トモ云ベキニ似タリ、故ニ誤テ青蒿ヲ黃花蒿トシ、黃花蒿ヲ青蒿トス、今藥舖モ誤ヲ同フス、宜ク辨別スベシ、花小ナル者ハ黃花蒿、花大ナルモノハ青蒿ナリ、宗奭ノ說ニ夢溪筆談ヲ引キ、一種黃色一種青色ト云時ハ、黃花蒿モ青蒿ノ中ナル故、通ジ用ルモ妨ナシト雖ドモ、青蒿ニハ必カハラ人參ヲ用ルヲ眞トス、

苦蒿

〔草木育種後編 下藥品〕苦蒿(にがよもぎ)　青蒿(のにんじん)の一種也、越州富山より來り、今予(喜任〇阿部)が圃中に多く培養す、秋月種を布き冬を凌ぎ、夏月に至り高さ三四尺花實あり、一度栽る時は、實自然と落て再び種るに及ばず、喜任按に、莖葉ともに苦き事、和蘭舶載來るアルセムに同じ、代用して効あり、山野ともに

多く栽て、莖葉花實ともに刈り採り用ゐべし、

黄花蒿

〔多識編二草〕黄花蒿、今案俗稱、五。行。久。左。異名臭蒿、

〔和爾雅七草木〕黄花蒿、一名臭蒿、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕黄花蒿　タ。ン。ニ。ン。ジ。ン。　カ。ハ。ラ。ヨ。モ。ギ。　パ。カ。ニ。ン。ジ。ン。津軽　ゴ。ギ。ヤ。ウ。雲州　カ。ラ。ヨ。モ。ギ。同上　山。ニ。ン。ジ。ン。仙臺　ゴ。ム。ケ。讃州　一名黄蒿序例又鼠麴草、地膚共ニ黄蒿ノ名アリ、又牟氏蒿　秋ニ葉細ノ状ニ至リ、梢レテ黄色ニナルヲ黄蒿ト云、是俗間名ナリ、
河邊沙地ニ多シ、又人家ニモ自生ス、青蒿ヨリハ葉細ニシテ、花又多クシテ細カク、色黄ヲ帶テ青蒿葉ノ深緑色ナルニ異ナリ、葉ノ色黄ヲ帶ビテ、花穗多キ故ニ黄花蒿ト云、花ノ色黄ナル故名ルニ非ズ、葉ノ形色始終變ゼズ、臭氣强シ、苗ノ高サ三五尺、花實ハ青蒿ヨリ後レ、細小ニシテ茵蔯蒿ニ似タリ、青蒿ノ花實ニ異ナリ、

牡蒿

〔多識編二草〕牡蒿、波。波。計。久。左。異名齊頭蒿、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕牡蒿　オ。ト。コ。ヨ。モ。ギ。　カ。ラ。ヨ。モ。ギ。江州　ト。ヨ。ギ。[illegible]トス、　ノ。ギ。ク。奥州
山野ニ多シ、葉ノ形チ細長ニシテ、末ノ方微シヒラキテ、深キ細鋸齒多シ、然レドモ葉頭尖リナクシテ、切リソロヘタルガ如シ、故ニ齊頭蒿ノ名アリ、春以後漸ク莖ヲ抽デ、高サ二三尺、葉寄ニ互生ス、深緑色、嫩葉ニハ白毛アリ、稍葉ニハナシ、夏月枝ノ末ゴトニハ小黄白花ヲ開キ、末ハ穗ノ如シ、形茵蔯蒿ノ花ニ似タリ、子モ亦相似タリ、秋ニ至リ萎シテ莖枯ル、直ニ根上ヨリ新葉ヲ叢生ス、此草莖直立ス、故ニ蓍ニ代用ユル人アリ、

〔武江產物志草〕道灌山ノ產　牡蒿

九牛草

〔多識編二草〕九牛草、於。加。與。毛。岐。

蓍

〔重修本草綱目啓蒙草十四隰〕九牛草　詳ナラズ
伊吹ヨモギニ充ル古説ハ穩ナラズ、伊吹ヨモギハヌマヨモギトモ呼ブ、即蔞蒿ナリ、既ニ艾ノ條ニ詳ニス、

增、本草新編曰、艾葉世人俱以蘄艾爲佳、殊不知野艾佳於蘄艾、蓋蘄艾乃九牛草也、似艾而非艾、氣香過於艾、而功用殊不若野艾、入脾腎肺三經、世人舍近而求遠、舍賤而求貴、爲可嘆耳、今按ニ九牛草ハハマヨモギナリ、海濱ノ砂地ニ產ス、苗高サ二三尺、葉ノ形常ノ艾ヨリ微シク小ニシテ、缺刻甚ダ深ク、面背共ニ白色ヲ帶テ毛茸アリ、夏ニ至レバソノ葉最モ細クナリテ三岐トナル、枝及ビ梢ノ葉ハ漸ク細クシテ岐ナシ、花實ノ形チ普通ノモノニ同ジ、集解蘇頌ノ說ニ能ク合ヘリ、

〔新撰字鏡草〕蓍（式脂反、信也、耆也、女止、）

〔本草和名六草〕蓍實（仁諝音尸、蘇敬注云、以其莖爲筮者、陶誤以楮實爲之、）一名杼實、一名豰實、一名褚實、一名著冥、一名著實、一名私實、（已上三名出釋藥性）和名女止久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕蓍　蘇敬本草注云、蓍（音尸、和名女止、）以其莖爲筮者也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕曲禮正義引劉向云、蓍之言耆、龜之言久、龜千歲而靈、蓍百年而神、以其長久、故能辨吉凶也、御覽引洪範五行傳云、龜之言久也、千歲而靈、此禽獸而知吉凶者也、蓍之爲言耆、百年一本生百莖、此草木之壽、知吉凶者也、聖人以問鬼神焉、白虎通義云、乾艸枯骨、衆多非一、獨以蓍龜何、此天地之間、壽考之物、故問之也、龜之言久也、蓍之爲言耆也、久長意也、論衡卜筮篇云、子路問孔子曰、猪肩羊膊可以得兆、雚葦藁芼可以得數、何必以蓍龜、孔子曰、不然、蓋取其名也、夫蓍之爲言蓍也、龜之爲言舊也、明狐疑之事、當問耆老也、圖經曰、其生如蒿、作叢高五六尺、一本一二十莖、至多者三五十莖、生便條直、所以異於衆蒿也、秋後有花、出於枝端、紅紫色、形如菊、按蓍今俗呼鋸草、或呼羽衣草、或呼鋸齒草者、可以充之、訓女止非是、女止今俗呼女止波伎、按救荒本草云、鐵掃帚、

〔多識編〕二草〕蓍、米土久左、今案米。登。岐。

〔古名録〕山草十六〕米止少節　漢名蓍本草　今名ハ。ゴ。ロ。モ。

〔重修本草綱目啓蒙〕十草〕蓍　アシクサ古名　メドクサ同上　メドギ　ノコギリサウ　ハゴロモ　ガンギサウ　モシホグサ　カラロモギ勢州　ヤマクサ江州　サシロモギ備前　コサンシチ　チドメグサ共ニ同上　ノコギリパ備前　一名[illegible]雪[illegible]代　[illegible]名物法言　靈草事類賦

種樹家ニ多ク栽ユ、宿根ヨリ數十莖叢生ス、高サ四五尺、葉ハ濶サ四五分許、長サ三四寸、細ク深クキレ、鋸齒多シテ繁密ニ互生ス、夏月莖端ニ小枝ヲ多ク分チ、數十百花攢簇シテ蓋ノ如シ、一花ノ大サ三四分、五六瓣ニシテ中ニ黄心アリ、瓣ハ淺紫色ナリ、又紅アリ、白アリ、白花ノ者ハ野生アリ、紅ナル者ハ北土ニ自生アリ、是眞ノ蓍ナリ、コノ草莖正直ニシテ枝ナク、年ヲ經レバ一根五十莖ニ過グ、凡筮占ヲナスモノハ此莖ヲ用ベシ、今ハメドハギヲ代用ス、メドハギハ救荒本草ノ鐵掃帚、拾遺記ノ合歡草一名神草ナリ、此草モ一科ニ叢生シテ莖直ナリ、葉ハ靈眼草葉ニ似テ細長ク互生ス、秋月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、形胡枝子花ノ如ニシテ色白シ、

〔草木育種後編〕下品〕蓍艸本　春月根の傍より生ずるを分け植てよし、花に紅と白とあり、插花に用ひ、蘭家にて筮藁を用ふ、糞水を澆てよし、

〔新編常陸國誌〕六十一土産〕蓍草

筑波村民家ノ東ニ原アリ、夫女原ト云、夫女石アルユヘニ名トセルナリ、詳ニ筑波山ノ下ニ出ス其東ニ岳アリ、龜之岳ト云、山ノ形龜甲ニ似タルヲ以テ名トセリ、コノ岳蓍ノ名產ナリ、一株百莖ノ下ニハ、必龜アリテ負ト云リ、龜岳ノ名亦合ヘリ、然レドモ一株百莖ハ甚マレニシテ得難シ、丹波ノ龜山トコノ山トハ、日本蓍ノ名產ニシテ、易家者流ノ信用スル所ナリ、土人每年七月七日ノ夜、是ヲ採テ夫女石ノ上ニ晒シ用ユ、蓋陰陽和合ノ理アルヲ以テナリ、

〔佐渡志五物產〕蓍　方言メトキ　雜太郡新保村ニアリ、同郡小倉村ニ生ズルモノ殊ニヨシ、

古事類苑

植物部二十六

草十五

〔新撰字鏡 本〕惡實 支太支須乃美

〔本草和名 九〕惡實、一名牛蒡、仁諝[illegible]傍[illegible]切一名鼠粘草、已上二名出蘇敬注和名岐多伊須、一名宇末布々岐、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕牛蒡 本草云、惡實一名牛蒡、蒡音傍、和名岐太岐須、一云宇末不々岐、今案俗作房者非也、

〔類聚名義抄 八〕牛蒡 キタキス、一云ウマフヽキ、

〔伊呂波字類抄 宇植物〕牛房 ウマフヽキ、本草云、惡實一名見古本、鼠粘草、已上二名出蘇敬注、已上三名ウマフヽキ、

〔伊呂波字類抄 古植物〕牛蒡 コヘウ、俗人等作房者非也、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一ごばう　ごん

〔本朝食鑑 三菜部〕牛房 訓古保宇

集解、牛房諸州俱有、春初下種、二三月生苗、野人剪苗作菜、然要采根不多、其葉似芋而長大深青、厚勁有皺、莖高起三四尺、有稜至根上紫色、四月開花成叢、淡紫色、結實作梂而小、萼上有細刺百千攢簇、一梂有子數十顆、其根大者如臂、如大薯蕷而盈握、長者如梃如竹筒、而二三尺、其根皮灰黑而厚、剝皮則碧白香脆、其不好者中有筋條而不脆美、近時多賞美之、

〔農業全書 四菜〕惡實

牛蒡は細軟沙の地に宜しとあり、山ごみの雑りたる細沙、いか程も深く底まで一色にして、土性よく重くしてつまりたるをよしとす、八幡などの土ごゝろ是なり、畠を掘うちにする事、深さ四五尺、糞をかくる事多きをよしとす、幾度もうち返し、底まで塊少もなくすべし、埋糞はわかき草木の枝葉、又青松葉を小枝ながら埋みたるは、牛蒡のにほひよく、風味ある物なり、さて上を數遍かきならしうね作りし、横筋にても又ちらし蒔にても、薄くむらなく蒔て、こゑをうち、土を覆ふ事、五分ばかり、凡たねを一段に一升の積りにて蒔を、中分とする也、但きりむし多き畠ならば、少は多く蒔べし、又種子おほひを灰にてし、其上に土をおほひ、上を鍬のひらにてたゝき付をくべし、さて二葉より心葉出るとひとしく、間引てむらなくし、若一つ穴より二本生たるをば早くぬき去り、一本宛にすべし、芸り細々中をかきあざり、草少もなくすべし、牛蒡は取分草に痛む物なり、さて糞は鰯のくさらかし、桶こゑもよし、其外水糞にても、始終たえ間なく用ゆべし、冬掘取までも、糞を用ゆれば、味よく和かにしてふとし、少き時は糞に痛むゆへ、葉に少もかゝらぬ様にわきよりかくべし、又云、牛蒡はうるほひを見て蒔べし、若雨なき時ならば、水をそゝぎてうゆべし、さてほり取事は、十二月までも置たるが、根よくふとるものなれど、寒氣つよき所か、又は踏の地、麥をまくか、急用あらば、霜月早く掘べし、又牛蒡を作る上田にて、利の多き所は、いふに及ばす、よく根入てをそく掘取べし、同じくいけ置事、莖葉を其まゝ置ながら、大小長短をゑり分、一尺廻り程にたばね、濕氣なき所に穴を深くほり、頭の方を上にして、穴の中に竪にならべ、葉は外に見ゆる様に入、土をおほひをくべし、穴に水入ば損ずる物なり、自分の料理に用ゆるは、たばねずして埋をき、用にまかせて、端よりぬき取べし、いけたる上よりも、肥たる土をおほひ置ば、穴の中にても、やしなひとなりて、肥て牙脆く味もよし、又種子にするをば、うへ付にし置て、春に成て糞をも少々かけ、虫付ば取去べし、朝露に灰をふるひかけたるも、虫のく物なり、七月かれて子の色黒く

成てかりとり、もみくだき粃を篩去て、箱か袋に入をきて、二月早く蒔べし、是先つねに定りたる蒔時分なれども、冬より地ごしらへし置て、正月早くまきたるに、夏早根に入ゆへ、菜の絶間に出來てめづらし、されども早過たるは、間に木牛蒡に成て、味も思はしからぬ事もあれば、二三月蒔て、虫のいまだ地に生せぬさきに、生長するを得するも、一つの手立なり、寒氣の和らかなる所は、冬より蒔もよし、總じて牛蒡はいつ蒔ても、少々根の入ぬ事はなきものなり、○中略 又牛蒡大根麻などは、いや地を嫌はず、却て舊地をよしとす、毎年同じ所にうゆべし、同じく種子を取をく事、八幡牛蒡のたね、其外よきたねを求て作るべし、よきたねは、內に筋もなく、牙もろくにはひあり、味甘く和らかなり、又去年の古たねよし、當年の實は蒔て、も生せず、たとひ生じても、こはくして料理にならず、たねにする物、多撰取て、大根のごとくうへをきたるもよし、其まゝうへ付置たるもくるしからず、

〔北方未來考〕牛房には尺廻りの物、山にあるよしなれば、○中略 是は土地合て大く成のみならず、寒國故、實を結ぶ事不相成、年々にもちこし候故、自ら根は太く相成事と思はるゝ也、

〔藥經太素 下〕惡實 平味甘 鼠粘子トモ云
補中明目、療風諸腫瘡、解毒、除消渴、手足筋攣、可末根、

〔宜禁本草 乾集五〕牛蒡根 辛甘平無毒、蒸暴食、嫩葉爲茹、主牙疼勞瘧、脚弱風毒、癰疽、咳嗽、傷肺、疝瘕、積血、治面目煩悶、四肢不健、通十二經脈、洗五藏惡氣、常作菜食之、莖葉煮汁、夏月浴去皮間習々如虫行、風洗了愼風少時、逐水久服、輕身耐老、 惡實一名大力子、未去萼謂之鼠粘、辛平、明目補中、除風傷、治疱疹將出已出、

〔庭訓往來〕菜者纖蘿蔔、煮染牛房、

〔執政所抄 上正月〕十五日

牛蒡産地

粥御節供事　御菜二前　一折敷　海松、青苔、牛房、河骨、

〔類聚雜要抄〕一字治平等院御幸御膳（元永元年九月廿四日、大殿藤原忠實被下御日記定、）

三寸五分様器

干物五坏（海松、青苔、牛房、川骨、蓮根）

〔年中恒例記〕正月十日

扣牛房一折　若王子進上之

〔梵舜日記〕文祿五年正月朔日、當院之被官各來、同在所衆萩原民部少輔、十疋、鈴鹿久左衛門、昆布一把、大工平次郎、瓶二ツ、并錫双牛房二把、○中略持參也、

〔鹿苑日錄〕慶長八年二月十六日、辰刻、柳芳同途シテ赴勝鬘院、相伴兵衛大夫、木工頭、會席、トロヽ、煎昆布、アライデ、鹽山升、引テ牛房、フツ煎、

〔官中秘策〕二十年中行事年中諸大名獻上物之事

十月（中略獻上此月ニ入ル）

一牛蒡　干鯛（中略）　大久保伊豆守　一牛蒡（中略）　阿部豐後守

一牛房　本城山城守　一牛房　水野日向守

一胡桃　牛房（中略）　土井大炊頭　一牛房　鳥井伊賀守

〔毛吹草〕三山城　牛蒡

〔食物知新〕甘山城諸國名產

菜蔬　岩附牛蒡、武州因幡牛蒡、下野上州牛蒡、上野

〔本朝食鑑〕三柔滑牛房

洛之鞍馬八幡村里、有肥大者、而爲勝、武之忍鄉岩槻亦爲江東之勝、而不減洛產、然諸州亦據土地之

宜、而佳者多矣、

〔雍州府志六土産〕牛蒡　八幡山東園村之産爲名産、專稱八幡牛蒡、園村去八幡半里許、元社家大臣氏之所住也、今京師北野并小山堀河所々産者亦爲宜、一説八幡園牛蒡非園村、而八幡社人家園之所種者也、

〔浪花の風〕牛房も太きものはあれども、江戸の如く長きものは絶てなし、土中へ生るもの、江戸の如く長きものはなし、土性堅牢なる故なり、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕牛蒡　府八幡ノ切差村宜シ、近時東条胡村ニ植ルハ三年牛蒡ト云、甚タツコトナク、長四五尺ニシテ軟美ナリ、

〔續江戸砂子一〕江府名産并近在近國

岩槻牛蒡　武藏の内、江戸より九里、長三尺を過て、周五六寸をふとしとす、煮ざればよく味ひ美也、此所の名産也、

大浦牛蒡　下總、江戸より廿里、越後弘智法印出生の地也、住侶の庵于今存ス、長三尺を過ず、周り一尺或は尺一二寸にして、大根よりも肥たり、切口八方へ壁れ、環入のごとし、すぐれてやはらかに甚好味也、輪に切て平皿に盛るに、器を過たり、無類の佳品なり、

〔經濟要錄四〕諸菜　下總ノ國土浦ノ牛蒡ハ、周圍一尺八九寸ニ至ル者アリ、

〔國花萬葉記十一下野〕當國州郡諸品名物之出所

稻葉牛房

〔奥羽觀蹟聞老志三宮城郡土産〕牛房　所出于宮城郡袋原、尤長大、

〔豐後國志四大分郡〕土産　牛房、高田鄉堂園村出、大者長四尺許、味最美、

〔新撰字鏡草〕蓎　又呂反、上、胡麻、又知佐、　蕳　知左

〔倭名類聚抄十七菜羹〕苣　孟詵食經云、白苣其呂反、上聲之讀、和名知散、漢語抄用萵苣二字、上烏禾反、今案萵字未詳、塞補筋力者也、

〔類聚名義抄八艸〕苣チ〇シ〇ヤ〇俗　萵俗苣字、チサ、

〔下學集下草木〕萵チシヤ

〔和爾雅七菜蔬〕萵苣チサ萵菜同、又名千金菜、

〔東雅十三穀蔬〕萵苣チサ　倭名鈔に、孟詵が食經を引て、白苣チサ、漢語鈔に、萵苣の字を用ゆ、今按するに、萵字未詳と注せり、墨客揮犀に、萵菜は咼國より來る、故に名づくと見えたり、萵苣數種あり、色白きものを白苣といひ、紫なるを紫苣といひ、味苦きを苦苣といふ、又別に水萵苣あり、苣即今チサといひ、水萵苣をばカハヂサといふ是也、又賣子木をも讀てカハヂサの木といふ、詳ならず、萬葉集の歌に、ヤマチサといふものは、此木をいふにや、仙覺抄には、山萵とは木也、田舍人はツサの木といふ也と見えたり、チサの義詳ならず、

〔本朝食鑑三柔滑〕苣訓知佐

集解、田圃家圃多栽之、二月彼岸下種、三四月生苗采葉、似蘿蔔葉而色綠帶白、然比千葉雉尾之類、則色尙白有皺文、莖肥中空而脆、折之有白汁、葉莖俱有白毛、莖頭細葉似花、每葉抱莖相重分、又下葉潤大柔滑、俱足爲蔬食、四五月開黃花、如初綻野菊、一花結子、一蕚如鶴蝨子、花罷則收斂、子上有白毛、茸茸隨風飄揚、落處即生、七八月復採葉亦可、八九十月再種亦生、然味不及春夏也、一種有稱千葉者、春初生苗有赤莖白莖二種、俱與苣同、俱莖高秀、葉葉相重繁茂、色綠帶碧、其味苦、折之有白汁、開花結子亦與苣同、即是禮月令所謂苦菜也、關東稀有、京師海西最多、可作蔬茹、一種有雉尾者、正二月下種、葉似苣而尖、如雉尾色稍青、折之有白汁粘手、三四月抽薹、似千葉而高三四尺、花子幷與苣同、東西俱有之、雖可作蔬有毒、妄不可食之、有紫色者、此亦有毒、不可不辨耳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕白苣　石苣、　生菜一種高野苣、近頃間有之、○中略

按、白苣葉色淺似高苣、而背微白、其花黃與高苣同、　紫苣、葉紫色、　千葉苣、莖高秀葉層々繁、色深綠光澤、　雉尾苣、葉狹長末垂下、　高野苣、無枝梗、著小紫花、

高苣　高菜　千金菜　和名知佐（略）○中

按、高苣八九月下種、臘月分種、初葉布地四散、長則起莖、葉似芥葉、而厚軟有皺、摘葉生和醋未醬食脆美、煮食亦柔佳、春月爲日用、必亞于菘菁者也、（略）○中　四月開花淡黃色、形似山漆花、將綻時、白色如毛、微、其子如馬芹子、而稍扁也、新產婦乳常成塊、服之有神効、其葉濶短者最久、狹長者葉出不久、凡紫苣雉尾苣千葉苣、間有微毒、補者希、而多用高苣、

〔宜禁本草乾五菜〕苦苣　苦平寒、折取莖中白汁、傅丁腫出根、滴癰上立潰、根主赤白痢、煮服、不可同血食、作痔、除面目及舌黃、強力、不睡、調十二經脈、利五臟、

白苣　苦寒平、可常食之、患冷氣人食卽冷、不至苦損、產後不可食、葉有白毛、如萵苣、補筋骨、利五臟、開胸膈壅氣、通經脈、止脾氣、令人齒白聰明、少睡、

〔延喜式大膳三十二〕園韓神祭雜給料春冬

高苣五斗

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、（略）○中　高苣半把、六葉、（生菜料六把、中）

〔延喜式內膳三十九〕供奉雜菜

日別一斗、（略）○中　高苣四把、（准二升、三四五月、）

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年八月甲戌、遣參議正躬王、送廢太子於淳和院、（略）○中　先是童謠曰、（略）○中　辛苣乃小苣之華、

〔玉葉集十一〕寬永十三年朝鮮人來朝記

同〇十二月十七日ノ朝ヨリ、朝鮮人江御扶持野菜并ニ酒肴等下ナル、六河内金兵衛率ル、

目錄是一日ノ下行也〇中略

一苣　二百籠

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營萵苣一段、種子三升、苗一千五百把、總單功卅九人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、糞百卅二擔、運功廿二人、下子半人、八月採苗功二人、殖功六人、九月芸一遍三人、

〔農業全書四菜〕萵苣

ちさ種々あり、葉の丸きあり、長きあり、長くとがりたるあり、綠色なるあり、うす黑きあり、紫もあり、中にて葉丸くひろく、たうをそく立、久しくさかへ、和らかにして味甘く、五六月まで、葉のさかんなるあり、是を求めてうゆべし、是は六月にたねを取をきて、八月早く蒔べし、肥地をこしらへ置、苗さかへたる時、畦作りし、よきほどにがんぎを切、六七寸に一本づゝうゆべし、糞水を根のわきよりそゝぎ、泔水小便を、二三日に一度づゝ、少あて朝そゝぎたるは、よくさかへやはらかにしていか程かぎとりても盡る事なし、苗ふとり次第、十月霜月正二月にかけうゆべし、されども年内うへて、細根よく出、あり付たるは、春になりてよくさかへはる物なり、春になりてうへたるは、葉しげからず、其さかへをとるものなり、是も四季ともにたねを蒔て苗を貪し、いつもやはらかにして、腹中をなめらかにし、色々料理に用ゆる物なり、又四月たうの立たるを折て、皮をさり水に漬、苦みをぬかし、醋に浸し、膾のつまにし、紫蘇漬などにし珍敷物なり、種子を取には、花咲實らむとする時、末を折かけて置べし、其まゝ沿たるは粃多し、蚊花を吸故に實り少し、梅雨の時分、外に有て、花房雨を受て黑く朽るが故也、何れにても枯ぬ程に折懸置べし、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕萵苣

一種オランダデナ、一名ハナデナ、キクデナ、葉ニ花岐多シ、生食羮食並ニ佳ナリ、一根ニ叢生ス、冬末春初最繁クシテ、千葉牡丹花ノ形ノ如シ、漸ク薹ヲ起スコト二三尺、葉叢生ス、葉間ニ枝ヲ抽コト長シ、夏ニ入テ葉間ゴトニ花ヲ開ク、形蒲公英花ニ似テ深藍色朝ニ開キ午前ニ色變ジテ萎ム、蕾ハ葉ゴトニ多クレドモ日ニ一花ノミ開ク、後實ヲ結ブ、形同蒿子ノ如シ、絮ヲナサズ、是モ亦萵苣ノ一種ナリ、

〔和爾雅 七菜蔬〕茼蒿(シユンギク)又名蓬蒿、

〔書言字考節用集 六生植〕茼蒿(シユンギク)

〔和漢三才圖會 九十九葷草〕茼蒿 蓬蒿 形氣同乎蓬蒿、故名、俗云高麗菊、又云春菊、開花似菊、故名之、〇中略

按茼蒿深冬葉食饒美、然夏菊未開時有之、故賞花不爲蔬、一刈後自生秧、六七月開花亦美也、

〔物類稱呼 三生植〕茼蒿 しゆんぎく 近江彦根にてろうまといふ、京大坂にてかうらいぎく、又きくなともいふ、關東にてしゆんぎくといふ、

〔重修本草綱目啓蒙 十八濕草〕茼蒿 シユンギク カウライギク京 ムジンサウ雲州 フダンギク紀州 キクナ デレコ ルスン共同上 フダンサウ肥後 ロウマ泉州 ロウマギク防州 ツマジロ加州 サツマギク濃州 リウキウギク豫州 オランダギク同州 ノピスマ伊州 シユンギク京師 シンギク諸國 〇中略

秋月種ヲ下ス、葉ハ初生茵蔯葉ノ如ニシテ毛ナシ、冬春ノ間コレヲ食フ、春ニ至リ薹ヲ起ス、高サ一二尺、葉互生、三月枝頂ニ花アリ、單瓣菊花ニ似テ、大サ一寸餘、瓣ゴトニ本黃末白ク内ニ黃心アリ、又全ク黃色ナル者アリ、又本白クシテ末紫ナル者アリ、ツマクレナヰト呼ブ、一種細葉ニシテ茵蔯蒿ノ梢葉ノ如ク、白花ヲ開ク者アリ、ギンカウライト云フ、一名シカギク、チヤウセンギク、カロギク、松前ギク、

蕗名稱

〔農業全書 四 菜〕蕗
倭俗かうらい菊と云、又春菊とも云、本草には八九月に種子をまき、冬春取食ふ、莖肥て味辛く甘し、四月に𦖊生じ黄花あり、花はひとへなり、菊に似たり、其性平にして毒なし、心氣を安くし、脾胃を養ひ、疾を消し、腸胃を利すとあり、農業通決には、二月にうふるとあり、是は春の食とせんためならん、苗の時ひたし物あへ物となして味よし、冬春たび〳〵につくり用ゆべし、花も又見るにたへたり、

〔新撰字鏡 草〕蕗（不々支、蕗同、）

〔本草和名 九 草〕款冬（楊玄操音作東字）一名橐吾、一名顆東、一名虎鬚、一名菟奚、一名氐冬、（楊玄操音丁禮反）一名於屈、（出釋藥性）一名耐冬、（出兼名苑）一名苦萃、一名款凍、（已上出廣雅）和名也末布々岐、一名於保波、

〔本草和名 十八 菜〕梠茎菜、一名蕗伏、又有金實草、（出崔禹）和名布々岐、

〔倭名類聚抄 十七 菜〕蕗　崔禹錫食經云、蕗（音路、和名布々木、）葉似葵而圓廣、其莖煮可噉之、

〔箋注倭名類聚抄 九 菜〕按蕗卽爾雅顆凍是也、郭注款冬也、紫赤華、生水中、藝文類聚引奥音本草云、款冬十二月花黄色、蓋謂其花未舒者紫赤、卽開則黄白也、本草款冬蘇注、葉似葵而大、叢生、花出根下、是可以充布々岐、

〔類聚名義抄 五 艸〕款冬（ヤマフ・キ、一云ヤマフキ、一云ヤマフキ、）〔同 九 欠〕款冬（ヤマフキ、一名虎鬚、山吹花、）款東（訓同）〔同 三 彡〕虎鬚（款冬一名）

〔伊呂波字類抄 不 植物附植物具〕蕗（フヽキ）　梠茎菜　蕗伏　金實草（已上三名同、見本草、）

〔下學集 下 草木〕款冬（クワントウ、フキ）（枳茎菜也、本草云、款冬十二月有花、其色黄或紫、其味苦也、三體詩云、僧房逢着款冬華、出寺吟行日已斜、十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家、按此詩十二月之事、至暮春雪時分也、然我朝朗詠集清愼公詩云、款冬誤綻暮春風、何故所詮日本之俗皆以山吹謂款冬、山吹卽酴醿也、其色黄而如綵酒也、清愼公之作而亦誤款冬、酴醿曰款冬也、其詩意云、此事名也、若是款冬何綻暮春風乎、皆款冬字而云爾耳、詩意雖工用上故事誤矣、可辨之、）

〔易林本節用集草木〕棆蔓菜　蕗

〔東雅十三穀蔬〕蕗フヽキ　倭名鈔に、崔禹錫食經に、蕗葉似葵而圓廣、其莖煮可噉之といふを引て、讀てフヽキといふ、卽今俗呼てフキといふは、語の急なるなり、又本草を引て、款冬一名虎鬚、ヤマブキと注したるは、卽今俗にヤマブキといふ者にして、たとへば大小薊の如き、小薊をアザミといひ、大薊をヤマアザミといふが如し、爾雅注を引て、奚一名は款凍草、ミブフヽキと注せしは、卽今俗にワニバスといふ物にして、今俗にミブブキといふ物にはあらず、又本草を引て、蘗實一名牛蒡、キタキス、一ニウマフヽキといふ、今按に蒡を嗙に作るものは非也と注せしもの、キタキスといふ義詳ならず、ウマフヽキといふは、其葉フヽキに似て大なるをいふ、馬莧をムマビユといふが如し、卽今俗にゴバウといふは、牛蒡の字の音をもていふなり、（音に牛の字をよぶに、午の字音のごとくするは、漢俗誤なり、）奚蘗實の如きは、其葉フヽキに似たるに因りて、フヽキの名ありといへども、實にはフヽキの類にあらず、今俗にミツブキ、ヤマブキ、イハブキなど名づけいふ、其フキといふは總名也、水と云ひ、山といひ、石といふが如きは、一物にして其種の別れしなり、凡其フキといふもの、皆莖の中に孔ありて、是を折るに絲あるもの、陶弘景が、其腹裏有絲といひし事の如し、フヽキと云ひし義不詳、また倭名鈔款冬の注に、一云ヤマブキ、萬葉集に山吹花と注るせしは、漢にして棣棠花といふもの、別にこれ一物なり、（蕗の字鈔に見えて書に用しして青草とす所綿には陌草な甘草の一名とす萬崔食經に見えし所は、上にしるせし所の如く、款冬は蕗類にして蕢は顆凍とす見え、し本な鈔醫がはに款冬食と蓋ひけり、にはホ草を引て、其實蘘薇、蘗蒡茂蘗蕢に款冬の一名とす、鑑本草注に蘆款蘇冬大蕗生花圖種下蕗也と注したり、鈔見な合せ見るに蕗本草に葉似蕢而大といひ、圓なる物とは見えず、弘景が說に蕗ひるが如し、其の食籬に百爾にも出づと見えたり、世と同じの款冬とといふ、奚な本草に、韓保昇が說に亦相似たる由見えたり、其山の谷より生ずるし、のなやまフヽキと云ひしれ事の如く見えけり、傳ふ所ありしにぞあるべき、名の如く、其の冬の百濟人の傳へし所のものなるべし、又倭名鈔云ひ、）

（物にかはりしが如し、ここに分ちし所にして、其の注するに、所名も詳ならざりければ、款冬とも、ヤマブキと同じ、さかなしく、こしいくはにもしるしを、其の鈔見ゆる同じければ、しかなる物をこそに合せ、せふしのほどに、蕗に蕗人なし、其の歌一物ともとしするあるなもし、數しけるとも見えたり、ふしの下に、萬葉集に山吹花と、款冬花とし、蕗とす、ヤマブキといふもの、倂、）

〔本朝食鑑 三 柔滑〕蕗(香路、訓布木)

釋名(和名布布木、本朝式内膳部訓布布木、今俗訓布木、花訓布木乃登宇、)

集解、源順曰、崔禹錫食經謂、蕗葉似葵而圓廣、莖煮可噉之、今時花莖葉俱可作蔬茹、冬十二月宿根開花、正二月最盛、初出地時如小蓮、其苔漸開青黃、外有紫萼、去土一二寸、亦如小蓮、花開而重重作臺、俗號蕗薹、葉莖相重貌耶、經六七日而碎死、候其花盛采之入藥、作蔬者未開亦佳、三四月生葉莖、俱似小荷、或如葵葉、其莖亦似小蓮、莖有竅有棘、形圓通直而肥實、無子、高者二三尺、一莖一葉、至根邊紫白色、處處林野田圃家園俱叢生、少則可愛賞、

〔本朝食鑑 三 華和異同〕蕗

蕗者款冬也、李時珍曰、後人訛為款冬、即款凍、至冬而花也、寇宗奭曰、百草中惟此不顧冰雪、最先春也、故世謂之鑽凍、必大(平野)按、二說俱言冬月開花、諸說皆同、今本邦至春而花者多、華亦然耶、唐張籍詩、僧房逢著款冬花、出寺吟行日已斜、十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家、本邦古來用蕗字者、據崔禹錫食經、蕗字書香路、香草也、楚辭七諫菎蕗雜于黀蒸也、

〔庖厨備用倭名本草 首 實錄〕款冬　倭名鈔ニヤマフヾキ、又云ヤマブキ、萬葉集ニ山吹花ト書タルヲ引タリ、多識篇ニフキ、元升(向井)曰、款冬ヲフキト云ハ穩當ナラズ、本草綱目集解ハ、フキヲ云ニ似テ、又ヤマブキヲ云ニ似タリ、故ニ和名ヲ或ハ山ブキト云、或ハフキト云、人ノ惑モ在此、余今案ズルニ、山ブキハ正名ナルベシ、今俗ニ云ツワ是也、フキトツワト莖葉根相似テ、二種トモニ冬月霜雪中ニ花蕚ヲ生ズ、故ニ園圃ニ種ルヲフキト云、倭名鈔園菜部ニ載テ、本名ヲフヽキト云、款冬ハフキニ似テ山谷ニ自生ス、故ニ倭名鈔野菜部ニ載テ山フキト云、本名ハ山フヾキト云、是倭名鈔ノ誤ナキ故也、余ガ款冬ヲツワト云ハ、其理在此故也、後世酴醿花ノ詠歌ヲ山ブキトヨメルハ、款冬ト酴醿ト同名異物也、然ニ酴醿ノ詠題ヲ款冬ト書ルハ誤レリ、款冬花ハ冬月霜雪中ヨリ出テ、

正二月ニ發也、酴醿花ハ暮春ニ發也、物既異時亦異、此朗詠集ノ誤ヨリ出タ、後世ノ哲人未改之故ナリ、林氏ガ論著ニ能辨ジタリ、古人ノヨミシ山ブキハ款冬也、酴醿花ヲヨメルニ非ズ、款冬ハ山谷岸岨澗畔ニモ生ズ、故ニ古歌ニ岸ノ山ブキトモヨメリ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕款冬花　フキノトウ　フキノヂイ河州　フキノシウトメ和州　バツカイ南部　バンカイ南部○中略

款冬ハ和名鈔ニフヽキト訓ズ、今ハフキト呼ブ、蕗ニハ花ヲ用ユ、故ニ款冬花ト云、即今冬春食用ノフキノトウヲ用ベシ○中略古ヨリ款冬ヲ名花ノヤマブキトスルハ、其誤リ朗詠集ヨリ出ヅ、ヤマブキハ棣棠花鏡郁李ナリ、款冬ハ元来フキノコトニシテ、山生ノモノヲ山ブキト云、ヤマブキト假名同キ故ニ混ズルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕款冬花○中略

尋常ノフキノ一種ニ紅ブキアリ、花ノ萼紫赤色開バ色淺シ、種樹家ニテコレヲ琉球ブキト云フ、此種モト駿河ノ身延山ヨリ出ブ、本經逢原ニ、花紫色有、白絲者良ト云時ハ、紅ブキヲ藥用ニ良トスベシ、又一種紫ブキアリ、葉面淡紫ヲ帶ブ、葉ト背ト深紫色ナリ、又朝鮮ブキ、一名ヤツガシラト云アリ、葉大ニシテ苦味少シ、花簇生スルコト數多キ故ニ入ツ頭ト名ク、

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營蕗一段、種子二石、總單功卅四人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、蕃百廿擔、運功廿人、殖功二人、九月、芸二遍、第一遍二人、三月、第二遍二人、六月、刈功四人、三年一殖、

〔農業全書四菜〕款冬

款冬は旱をおそるゝ物にて、終日よく日の當る所に植べからず、樹のかげの肥地、其他陰地の深く肥和らかなるにうへ、さいく泔をそゝぎ、或酒の精の汁をかくれば、よくさかへ和らかにふ

蕗利用

とくなる物なり、尤水こゑかれこれ多く用るにしかず、九月に打返し土を和らげ、改めうゆべし、又は熟地をかまへ畦作りし、冬春早く分てうへ、糞水をしきりにそゝぎ、泔糟の汁をかくれば、肥たる陰地なれば、甚ふとく長くなりて、市町近き所は是を賣て、利潤多き物なり、縦のせばき畠にても、他の菜のをよぶ事にあらず、又是に二色あり、莖のもと少赤く、筋おほく皮厚く、少かどたちて、葉あらく、又はみて見ゆるは、料理によからず、今一種、あかみく皮うすく、葉うすく、丸く、莖もかどかどしからぬあり、是内にすぢもすくなく、和らかにして味よし、ゑらびて作るべし、おほく作りては、春鍰ぶきの時、料理にめづらし、花は藥とし、みそとし、漬物とす、

〔宜禁本草乾五菜〕款冬花　辛甘温、十一月採、十二月正月旦取之、未舒者佳、主肺氣、心促急、熱乏、勞嗽、涕唾稠粘、肺痿、肺癰、吐膿、止痰嗽驚悸、洗肝明目、雖在氷雪之下、至時亦生芽、春時人採代蔬、入藥微見花者良、已芬芳則都無力、有人病嗽多日、款冬花三兩枚、於無風處、以筆管吸煙、滿口則嚥之、數日効、

〔食物和歌本草五〕款冬花

ふきのたう五臟をもまし煩を除き痰を消して目をも能する略○中ふきのたう心肺の熱涼し久服すればいのちながくす

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種、略○中款冬花九斤、　武藏國卅八種、略○中款冬花十兩、

〔延喜式三十九内膳〕漬年料雜菜

蕗二石五斗料鹽一斗、米六升、○中略　右漬春菜料

〔庭訓往來〕菜者、繊蘿蔔、略○中黒煮蕗、

〔續修東大寺正倉院文書四十三〕藍蘭紙背　進上

蕗拾圍略○中

天平勝寶二年五月廿六日　倉垣三倉

〔毛吹草三〕山城　竹田薊

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕款冬花（中略）奥州南部津輕羽州秋田ニハ、莖ノワタリ七寸、孔中ニ乾靑魚二ツヲ入ルベシ、葉ハ馬上ノ傘ニ代用ユベシト云傳フ、コレヲ南部ニテ十輪田（トワダ）ブキト云、

〔新撰字鏡草〕薊（吉詣反、阿佐美）

〔本草和名九〕大小薊根、一名虎薊（大薊也）一名猫薊（小薊也）馬薊（肥大高大）雞項薊（已上二名出雜要訣）一名生續斷（出崔禹錫食經）和名阿佐美、

〔倭名類聚抄十七菜〕薊　本草云、薊（音計、和名阿佐美）味甘温、令人肥健、陶隱居曰、大小薊葉並多刺、

〔倭名類聚抄十七草〕大薊　蘇敬本草注云、大薊（和名夜末阿佐美）生山谷間者也、

〔類聚名義抄八〕薊（音計、アザミ）　芥蘇葥蔛（五俗）　薊（正）

〔伊呂波字類抄安植物〕薊（アザミ）

〔下學集下草木〕薊菜（アザミ、薊或作葪字）

〔易林本節用集阿草木〕薊菜（アザミ）　薊（同）　葪（同）

〔干祿字書去聲〕薊薊（上通下正）

〔東雅十三草卉〕薊アザミ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、薊アザミ、陶隱居曰、大小薊葉並多刺と見えて、大薊はヤマアザミといふと註せり、今俗にオニアザミといふは大薊也、又本草を引て、苦芙はカマナ、一にカミオコシナと註せり、カマナとは、鉤芙といふ名あるに依れり、カミオコシナは不詳、今俗にナハアザミといふ是也、その薊に似て下濕の地に生ずるをいふなり、

〔重修本草綱目啓蒙十四隰草〕大薊小薊　ヤマアザミ（大薊）　野アザミ（小薊）（中略）

園栽培

凡ソ大薊小薊ハ、形ノ大小ヲ以テ分ツニ非ズ、山野ヲ以テ別ツベシ、小薊モ肥地ニテ培養スルモノハ、長大四五尺ニ至、大薊モ瘠墝ニ生ズル者ハ、短小尺ニ盈ズ、故ニ山生ノ者ヲ大薊トシ、野生ノ者ヲ小薊トスルノ說ヲ優トス、ソノ種各別ナリ、大和本草ニ、大薊ヲオニアザミ、ヲニノマユハキト訓ズルハ、飛廉ニ混ジテアシヽ、山アザミト訓ズベシ、大薊ハ山中ニ生ジ、殊ニ幽谷ニ多シ、葉形大抵小薊ニ同クシテ、刺多ク白斑紋アリ、故ニ虎薊ノ名アリ、苗高サ三四尺許、八九月花ヲ開ク、形小薊花ヨリ小ク、唯淡紫色ノミ、莖ニ多ク連リテ、小薊ノ一枝一花ニシテ大ナルニ異ナリ、小薊ハ原野ニ多ク生ズ、ノアザミト呼ブ、莖葉ニ刺多シ、淡紫花ノモノ多シ、深紫花ノモノハ少シ、今庭ニ栽テ花ヲ賞スル者ヲハナアザミト云、又マユハキト云、是モ小薊ナリ、種樹家ニハ數十品アリ、尋常ノ外ニ白花アリ、花白シテ形大ナルアリ、富士ノ雪ト云、櫻花ノ色ニ似タルアリ、サクラアザミト云、白色ニシテ邊紅ナルアリ、ツマクレナキト云、又ツマムラサキモアリ、黄褐色ナルアリ、カキ色ト云、其色淺キアリ、アケボノト云、紅色ノモノアリ、ベニフデト云、淡紫色ノモノアリ、ウスヾミト云、紫色ナルアリ、春日野ト云、深紫紅色ノモノアリ、クロベニト云、其餘異品多シ、

〔出雲風土記飯石郡〕凡諸山野所在草木、略〇中大薊、

〔延喜式內膳三十九〕耕種園圃

營薊一段、種子三石五斗、總單功卌四人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、糞百廿擔、運功廿人、殖功二人、芸二遍、第一遍三人、二月第二遍三人、七月苅功四人、擇功八人、三年一度還殖、

〔農業全書五山野菜〕小薊

あざみ色々あり、菜にし食するには、萵苣の葉に似て廣く刺なくやはらかにして、菜園に作る物あり、苗の時又はわかき時、葉をかぎ茹きて、あつ物あへ物ひたし物などに用ゆべし、精をやしなひ、久しき血をやぶり、新しき血をまし、其性よき物なり、作樣ちさに同じ、茶園の端々などに作る

薊利用

べし、

〔食物和歌本草 六〕大薊小薊

あざみには大小あれどおもの總は古血をやぶり生ず新血　薊菜寒にがからくして血の道や長血血崩下血にも吉　あざみ蔵万のかさの衂血筋骨をつぎ腰いたむ治す　あざみこそ労瘵に吉氣を散す虫にも飽過し食すな　あざみよく常に精汁のもれやすく尿血ありて多く痩に

〔延喜式 内膳 三十九〕供奉雜菜

日別一斗、〇中略 薊六把、准六升、自二月一日至九月卅日、

漬年料雜菜

薊二石四斗、料鹽七升二合、〇中略　右漬春菜料

〔年中行事秘抄〕上子日内膳司供若菜事

内膳司闕供之

十二種若菜〇中略

薊

〔春日正預祐範記〕慶長十年乙巳正月以來御神事次第

五月

一五日、御節供如例、〇中略

一前神主時盛、アザミヲ備進、不謂由及沙汰、

蒲公英

〔本草和名 草 十一〕蒲公草、一名耩耨草、上江項反、下奴豆反、和名布知奈、一名多奈、

〔倭名類聚抄 草 二十〕蒲公草　本草云、蒲公草、一名耩耨草、上江項反、下奴豆反、和名布知奈、一云太奈、

〔和爾雅 草蔬 七〕蒲公英タンポヽ、續醫説、金簪草、白鼓丁、蒲公丁、孛々丁、黄花地丁、

〔東雅十三穀蔬〕蒲公草フヂナ　倭名鈔に本草を引て、蒲公草一名耩耨草、フヂナ、一にタナといふと註せり、並に義不詳、今俗にタンホヽといふもの、蒲公草即是也、此菜田園隴畝ノ間に生じぬるものなれば、タナと云ひしにや、ツチナの義詳ならず、或人の説に、此菜一名を白鼓丁ともいへば、タンホヽの名あり、タンホヽとは、鼓聲をまなびいふなりといふ、如何にやあるべき、タンホヽは、此と彼とにして、呼ぶ所を合せ云ふに似たり、タンとはタナの轉訓也、ホヽとは此物一名また孛々丁といふなり、

〔倭訓栞中編二十二不〕ふぢな　和名抄に蒲公英を訓せり、藤菜の義なるべし、花の時をいふにや、たんほゝ也、

〔倭訓栞後編十一多〕たんぽゝ　蒲公英をいへり、たなほゝの義にや、たなは本名、ほゝは實のほゝけるをいふなるべし、一名白鼓丁ともいふ、よてつゞみ艸と呼り、又藤菜とも稱す、黄白二種あるなり、くだざきたんぽゝといふ、出羽にてくしなどいへり、

〔本朝食鑑三柔滑〕多牟保保草

釋名俗稱藤菜、或稱鼓草、倶名義不詳、

集解、野徑庭園多有、春初生苗、布地四散、葉略似蘿蔔而小、葉端三尖如鋒頭、而次第深刻、二三月之際、一葉發上三四寸、斷之有白汁、上開黄花、如野菊、後黄落成絮、莖葉花絮大抵似千葉苣、絮中有子、落處即生、或有淡紫色者、稍希、無花者亦有之、其嫩苗作蔬、患瘡毒之人嗜食之爾、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕蒲公英　○フヂナ和名鈔　○タナ同上、古名、　○タンポポ　○クチナ信州　○ムヂナ勢州
○グチナ奥州　○グチグチナ佐渡　○ゴヤジ同上　○ツヾミグサ越中 中略○
原野路旁ニ甚多シ、然レドモ紀州熊野ニハ自生ナシ、廣東新語ニモ、嶺南ニハ生ゼザルコトヲ云リ、葉ハ冬ヨリ叢ニ生ジ、地ニ就テ叢生ス、形苦葉（ノゲシ）ノ葉ニ似テ小ク、薺葉ニ似テ大ナリ、切レバ白汁ヲ出ス、春時煮食フ、二三月圓莖ヲ出ス、肥タル者ハ數十莖、瘠タル者ハ數莖、高サ五寸許、内空シ、頂ニ一花ヲ開ク、單葉菊花ノ如ク、黄色後白絮ヲナシ、風ニ隨テ飛ブ、根ハ冬ヲ經テ枯ズ、一種筒瓣（ツヽシベ）ノ

者アリ、千葉ニシテ實ヲ結バズ、又一種白花ナル者野生稀ナリ、葉長大、花モ亦大ナリ、莖ノ高サ一二尺ニ至ル、一種綠花ノ者ハ極メテ稀ナリ、花萼葉ニシテ綠色實ヲ結バズ、苗ノ形ハ尋常ノ者ニ同ジ、一種ムラサキタンポポト呼ブアリ、一名ヤリグサ、勢州センボンヤリ、加州山中陰地ニ生ズ、葉ハ細ク厚シテ尖リナク、背ニ白毛アリ、花小クシテ淺紫色、又內淺紫、外紫赤色、又白花ノモノアリ、花後絮ヲナシ、番形ノ如シ、莖ニ白毛アリ、是集解ニ謂ユル大丁草、一名燒金草ナリ、

〔農業全書菜四〕蒲公英、

たんぽゝは秋苗を生じ、四月に花さく、黄白の二種あり、花は菊に似て、あひらしき物なり、夏たねを取をき、正月蒔て苗にして、移しうゆるもよし、山野にをのづから生るを苗にするもよし、味少苦甘く、料理に用ゆる時、葉をとりて茹きひたし物、あへ物、汁などに料理してよし、是を食すれば、大用の秘結をよく治するなり、國の廻り菜園の端々、多少によらず、かならずうゆべし、食毒を解し、氣を散し、婦人の乳癰を治す、

〔宜禁本草乾五〕蒲公草　甘平無毒、主婦人乳癰、煮汁飯及封之立消、填生食、產後不自乳見、汁積結癰、據傳鑑上、日三四度爲之、一名地丁、解食毒、散滯氣、治疔腫、有奇功、

〔新撰字鏡草〕菴盧子　菩薩使苗嗔、又大藁、比文與毛支、

〔本草和名六草〕菴盧子　楊玄操音、上音閭、　和名比岐與毛岐、一名波々古、

〔倭名類聚抄二十草〕菴盧子　本草云、菴盧子上音淹、和名波々古、

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草和名云、菴盧子和名比岐與毛岐、一名波々古、馬先蒿和名波々古久佐、茵蔯蒿和名比岐與毛岐、蓋輔仁不能詳定、三草皆同訓、源君菴盧子訓波々古、馬先蒿茵蔯蒿並訓比岐與毛岐、蓋以釋藥性云茵蔯蒿一名馬先也、然波々古即比岐與毛岐之一名、則源君分訓波々古比岐與毛岐非是、又本草菴盧子、馬先蒿、茵蔯蒿各自爲條、則三草其實不同、以馬先蒿茵蔯蒿同爲、

比岐與毛岐亦非也、按嘉祐本草云、鼠麴草、雜米粉作糗食之甜美、生平岡熟地、高尺餘、葉有白毛、黃花、荊楚歲時記云、三月三日取鼠麴汁、蜜和爲粉、謂之龍舌粋、以壓時氣、江西人呼爲鼠耳草、李時珍曰、原野甚多、二月生苗、莖葉柔軟、葉長寸許、白茸如鼠耳之毛、開小黃花成穗、結細子、楚人呼爲米麴、北人呼爲茸母、故邵桂子甕天語云、北方寒食采茸母草和粉食、是可以充波々古、今俗謂呼保字古久佐、猶作糕和名波々骨、俗謂呼保字骨也、周防謂之毛知久佐、是草和粉爲餌、故有是名、讃岐謂之加字知波奈、與楚人呼米麴合、是草折葉則有白絲、曳之如杜仲、故又有比岐與毛岐之名、

〔古名錄十四野草〕波波古

按ニ、倭名抄ニ、菴䕡子和名波々古、馬先蒿和名比岐與毛木ト分ツレド、本草和名本草類編ニモ、菴蕳子和比支與毛支、又波波己ト云ヲ以テ、比木與毛支、波々古、一物タルコト明也、

〔康頼本草草〕菴蕳子　味苦、微寒温、无毒、和ヒキヨモキ亦ハワコ、又波々己、十月採實陰乾、

〔醫心方一〕菴䕡子（和名比岐與毛岐、一名波々古、）

〔類聚名義抄七子〕菴䕡子（ヒキヨモキ）　〔同八艸〕䕡子（ハヽコ）

〔易林本節用集波草木〕這孤（ハウコ）　菴䕡子（同）

〔和爾雅七菜蔬〕七種菜○中略　鼠麴草（ゴギヤウサウ）（本艸佛耳草、一名黃蒿、和名母子艸、）

〔和爾雅七草木〕鼠麴草（ハヽコクサ）（佛耳草、無心草、鼠耳草、黃蒿、並同、和名母子草、）

〔東雅十五草卉〕菴䕡子ハヽコ　倭名鈔に本草を引て、菴䕡子はハヽコと註せり、文德實錄に見えし、母子草といふものは、一名にして二物也、母子草は鼠麴草、また鼠耳子などともいひ、古の時には三月三日に餠となせしものなり、○中略　註また白蒿をも、今俗にカハラハヽコグサと云ふなり、ハヽコといふ義不詳、

〔倭訓栞中編二十波〕はゝこ　文德實錄に母子草と見えたり、鼠麴草なり、今はふことといふ是なり、和

名抄に亳盧子を訓すれど、別物なるべし、三月三日の雛遊には、ふこを祭り、此日鼠麴汁にて糕を造る事も、文德實錄に見え、龍舌粹といふも、荊楚歲時記に出たれば、此草をもは、こ草とよべる成べし、よて又もちよもぎともいふとぞ、今はもはら艾蒿を用う、近江にちゝぐさ、信濃にかはちちこ、尾張にとうこ、上總にかうじばな、宇都宮にねばりもちといふ、俗に河原はゝこと呼ものは白蒿なり、和名抄に白蒿一名蘩蒻蒿と見えたれば、此書をもてはゝこと呼にや、

〔重修本草綱目啓蒙 二十七草〕鼠麴草　ハヽコ草○母子草ト書ク、文德實錄ニ見エタリ、ハ和名ナリ、今ハホーコアヤト云リ、古　○モチヨモギ大和　本草 ○ジヤウラクヨモギ同上　○オギヤウ○御形ト書ス、古書ニハ[illegible]　○トウコ尾州　○トウゴ同上　○モチバナ豐後　○モチブツ尾州　○クカジブツ同上　○ゴギヤウブツ筑前　○ゴギ　○ヨブツ九州　○ゴギヤウヨモギ同上　○トノサマヨモギ紀州　○トノサマタバコ同上、花ヲ云、　○カハ　○チヽコ信州　○コウジバナ雲州　○フツミグサ[illegible]州　○チバヨモチ野州　○ヨチグサ中國　○

此草原野ニ多アリ、秋月苗ヲ生ズ、葉ハ馬齒莧(スベリヒユ)葉ニ似テ薄ク、長クシテ白毛アリ、三四月苗高サ六七寸、或ハ一尺ニ至ル、葉互生シ、梢ニ簇リテ黄花ヲ開ク、此花ヲ取リ煙草ニ代吸フ、又此花ヲ以テ艾花ニ僞リ、又菫菜花ニモ僞ル、古ハ上巳ニ此葉ヲ用テ餻トス、即龍舌粹ナリ、後其色ノ濃カランコトヲ欲シテ、艾葉ヲ以テ代ユ、朝鮮國ニ謂ユル艾糕ナリ、今ハ菠葉(ハウレン)芥葉ヲ加テ其色ヲタスク、益其眞ヲ失ス、

〔宜禁本草 乾五〕鼠麴草　甘平無毒、和米粉作糗食之甜美、白毛黄花、調中益氣、止泄除痰、壓時氣、去熱嗽、

〔延喜式 三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、○中略波々古五升、二月三月

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、　壬午、先是民間訛言云、今玆三月○三月二字原脱、今據一本補、三日不可造餻、以無母子也、識者聞而惡之、至于三月、宮車晏駕、是月亦有太后山陵之事、其無母子、遂

如訛言、此間田野有草、俗名母子草、二月始生、茎葉白脆、毎属三月三日、婦女採之、蒸擣以爲餻、傳爲歳事、今年此草非不繁、生民之訛言、天假其口、

〔閑珠庵雜記〕はゝこ草は、文德實錄に母子草とかけり、和名には庵蘆をぞよめれど、本草を見れば、それにはあらで、鼠麹草にてぞ有ける、もろこしにも、やよひの三日には、これをもちひにくはふるよし、そのふみにみえたり、葉の色のねずみに似て、花のかむたちのごとく黄なれば、たとへて名付たり、

〔曾根好忠集〕春の春三月はじめ

はゝこつむ彌生の月になりぬればひらけぬらしな我宿の桃

〔後拾遺和歌集二十雜六〕三條太政大臣〔○藤原賴忠〕のもとに侍ける人のむすめを、忍びてかたらひ侍けり、女のおやはらたちて、むすめをいとあさましくつみけるなどいひ侍けるに、三月三日かのきたのかた、三夜のもちいくへとて、いだしけるによめる、　藤原實方朝臣

みかの夜のもちいはくはじわづらはしきけばよどのにはゝこつむ也

〔和泉式部集三〕石藏より野老をこせたるてばこに、くさもちゐいれて奉るとて、

はなのさと心もしらず春の野にいろ／＼つめるはゝこもちゐぞ

〔散木弃謌集一春〕三月三日人のがりいひつかはしける

君がためやよひになればよづまさへあへのいちゃにははゝこつむ也

父子草

〔倭訓栞後編十三〕ちゝこぐさ　白蒿也、又河原はゝこともいふ、はゝこぐさに對して、父子草と呼なるべし、

〔躬恒集〕ちゝこぐさ

花の色はちゝこぐさにてみゆれどもひとつも枝に有べきはなし

〔酒食論〕飯室律師好飯申樣

もちゐ色々に、やよひをはじめのわか草は、ちゝこはゝこのくさもちゐ、手づくりからにいたゐ

けや、かはらぬ色の松もちゐ、千代とぞ君をいのりける、

〔古名録 野草十四〕ちゝこぐさ〈[illegible]〉 漢名天青地白〈[illegible]〉

按に酒飯論云、其後もちゐ色々に、やよひもはじめのわか草は、ちゝこはゝこのくさもちゐ、手つくりからにいたゐけやトミユ、然レバチヽコ草ヲモモチトナセシ也、チヽコ草ハハヽコ草ニ同シテ痩々リ、鼠麴草ノ類也、

〔本草和名 十八〕苦菜、一名荼草、〈[illegible]〉一名選、一名游冬、一名茶、一名苦蘵菰蘆〈[illegible]〉一名苦菜〈[illegible]〉苦蘵〈[illegible]〉南楂草〈[illegible]〉茗菜一名甜橘草〈出七巻食経〉和名爾加奈、一名都波比良久々佐、

〔倭名類聚抄 野菜十七〕荼 爾雅注云、荼〈音途、和名於○保○都○知○〉苦菜之可食也、

〔伊呂波字類抄 於 殖物〕〈附噉物具〉荼〈[illegible]〉之可食也、

〔和爾雅 七 菜〕苦菜〈[illegible]〉

〔重修本草綱目啓蒙 二十九 柔滑菜〕苦菜 ウ○レ○ア○ザ○ミ○ ノ○ゲ○シ○ キ○ツ○ネ○ノ○タ○バ○コ○ 和州 タ○ン○ポ○ポ○ 筑前

ム○マ○ゴ○ヤ○シ○ 讃州 コ○マ○シ○タ○ゲ○ 江州 コ○マ○ピ○ヤ○シ○ 信州 ゴ○ア○ク○ 豊州 ケ○シ○ナ○グ○サ○ 和漢三才図会

略

秋月子生ズ、葉ノ形萵苣ニ似テ刺ナク、白色ヲ帯テ罌粟葉ノ如シ、青莖アリ紫莖アリ、倶ニ中空クシテ五稜アリ、莖葉ヲ切レバ白汁ヲ出ス、春ニ至テ苗ノ高サ二三尺、葉互生ス、葉間ニ枝叉ヲ分チ、上ニ多ク花ヲ開ク、萵苣花ニ似テ黄色、老時ハ小長子多ク蕚中ニ聚リ、上ニ白絮アリテ蒲公英〈タンポヽ〉絮ノ如シ、子熟スレバ風ニ隨テ飛ブ、其苗根共ニ枯ル、

薺蒿

〔農業全書五山野菜〕苦菜

にがな一名は茶と云て、古より名ある菜なり、凡味も蒲公英に類せる物なり、悪瘡血痳、又は目を明らかにす、此外さま〴〵功能多し、菜園の端々に少々作るべし、作り様たんぽゝにかはる事なし、

〔宜禁本草乾五菜〕苦菜　苦寒、多食令人氣喘、弱人忌之、令人不眠、折之白汁出、常點瘊子自落、春夏秋開花、去中熱、安心神、主五臟邪氣、腸澼渴、熱中惡瘡、本經說、久服安心、益氣、聰察少臥、輕身耐老、耐飢寒、高氣、背瘡熱癤、取汁蓋之、開孔以歇熱毒、冷卽易之、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造佛所作物帳斷簡年紀不詳、按底卷文書四十五卷所收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、

買雜菜直錢卅一貫七百十六文〇中略

茶三千三百卅六把、直一貫一百十二文、文別三把

〔本草和名十草〕草蒿、一名青蒿、一名方潰、楊玄操音胡隊反　一名𦮃蒿、出本草拾遺　和名於〇波〇岐〇、

〔本草和名十八菜〕薺蒿菜、一名莪蒿、一名菓蒿、已上出七卷食經、一名菓蒿、一名薺頭茸、已上出崔禹、和名於波岐、

〔倭名類聚抄十七野菜〕薺蒿　七卷食經云、薺菜一名莪蒿、莪音鵝、和名於八木、崔禹錫食經云、狀似艾草而香、作羹食之、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕爾雅莪蘿注、今莪蒿也、亦曰䕡蒿也、說文、莪蘿蒿屬、廣雅、莪蒿䕡蒿也、毛詩菁々者莪、正義引陸璣曰、莪蒿也、一名蘿蒿、生澤田漸洳之處、葉似邪蒿而細、科生、三月中莖可生食、又可蒸、香美、味頗似蔞蒿、是也、證類本草角蒿條、引陳藏器云、䕡蒿辛溫無毒、煮食之、似小薊、生高岡、宿根先於百草、小野氏曰、是可以充岐都爾阿佐美薺蒿菜之名未聞、〇中略　按本草和名、薺蒿菜訓於波岐、草部下草蒿亦訓於波岐、於波岐萬葉集謂之宇波疑、一聲之轉、今俗呼與米賀波伎、又與米奈、按救荒本草云、雞兒腸生中牟田野中、苗高一二尺、莖黑紫色、葉似薄荷葉微小、邊有稀鋸齒、又似六月菊、

梢葉間開細瓣淡粉紫花黄心、葉味微辣、是可以充輿女祭、

〔醫心方一〕草蒿和名於波岐

〔類聚名義抄八〕蒿萩ヲハキ　莪蒿同　莪蒿ヲハキ　蒿呼毛反、ヲハキ、　薺蒿

〔倭訓栞前編三〕うはぎ　萬葉集に莵芽子と見えたり、仙覺鈔に、莵萩也といへり、内膳式には蒿をもよめり、今いふよめがはぎなりといへり、一説におはぎに同じ、よめがはぎは此大はぎに對する名にして莪蒿也、おはぎは薺蒿也といへり、

〔倭訓栞前編四〕おはぎ　和名抄に莪蒿をよめり、歌に若菜と同じく摘事をよめり、さればうはぎと同物なるべし、今も畿内によめなをおはぎといふ、近江にはげといふ、同書に菊を、かはらおはぎと訓せり、

〔倭訓栞後編十七〕よめな　嫁菜の義、鷄腸菜をいふ、よめがはぎともいへり、本草に野菊と見ゆ、のぎくともいへり、

よめがはぎ　住吉の遠里小野のよめがはぎあらくは吹そむこ山の風

〔大和本草五雜草〕鷄蒿（中略）ヨメガハギハ野圃家園ニ不用人力而叢生ス、有香氣、秋花ヲ開、似野菊、蔞蒿ハ白蒿、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕鷄蒿　○ヤ○ク○ネ○ア○ザ○ミ　○セ○ン○ボ○ン○ヤ○リ　○ヒ○メ○ア○ザ○ミ（中略）

夏後子落テ秋ニ至テ自ラ生ズ、初ハ地ニ就テ叢生シ、蒲公英ノ生ズルガ如シ、葉ノ形ハ千蒭葉ニ似テ、面深緑色、背ニ白毛多シ、質軟ニシテ剛ナレ、春ニ至リテ漸ク莖ヲ抽デ、高サ三五尺、瘠地ノ者ハ苗小ナリ、漸洳ノ地ニテハ肥大ナリ、枝葉共ニ互生ス、四月枝末ゴトニ淡紫色ノ花ヲ生ズ、形大薊花ノ如ニシテ小ナリ、又白花ノモノ稀ニアリ、倶ニ花後絮トナリ、飛ビ落ル處ニ生ジ、苗根共ニ枯ル、貝原翁ノ説ニヨメナヲ以テ鷄蒿ニ充ツルハ非ナリ、ヨメナハ救荒本草ノ鷄兒腸ナリ

薇衘
張良草
樊噲草
兎兒傘

〔長生療養方（一菜功能）〕薺蒿菜　食之明目

〔延喜式（三十九内膳）〕漬年料雜菜
薺蒿一石五斗（料鹽六升○中略）　右漬春菜料

〔萬葉集（二挽歌）〕讃岐狹岑島視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌（○中略）
反歌二首（○一首略）
妻毛有者、採而多宜麻之、佐美乃山、野上乃宇波疑、過去許良受也、

〔萬葉集（十春雜歌）〕詠煙
春日野爾、煙立所見、𡢳嬬等四、春野之菟芽子、採而煮良思文、

〔新撰六帖（六）〕をはぎ　家良
里人やをはぎつむらん三笠山春日の原のはるのうらゝに

いまはまた野べのをはぎの春ふかみ時すぎぬれやつむ人のなき　知家

〔出雲風土記（意宇郡）〕砥神島（○中略）高六十丈、（有椎松莽薺頭蒿都波師太等草木也）

〔出雲風土記（島根郡）〕附島、周二里一十八歩、高一丈、（有椿松薺頭蒿茅都波、其薺頭蒿者、正月元日生長六寸、）

〔本草和名（七草）〕薇衘、一名麋衘、一名承膏、一名承肥、一名无心、一名無顚、一名鹿衘草、（蘇敬注云、鹿有疾銜此草即差、）一名大呉風草、一名小呉風草、（已上三名出蘇敬注）唐、

〔大和本草（九雜草）〕張良草　和俗ノ名ナリ、葉大如掌、葉ノ内ニ有三椏、岐分似鳥頭葉、山中所々有之、其花黄ニシテツハノ花ニ似タリ、ツボミノ大如小梅子、樊噲草ハ大ニシテ高ク、張良草ハ小ニシテヒキシ、一類ナリ、相似タリ、又スゲガサト云草アリ、張良草ヨリ細也、又タカラカウト云草モ此類ナルベシ、既ニ前ニシルス、

笑𠹭草　是亦俗ノ名ヅクシ處ナリ、葉ハフキノハニ似テマタアリ、黄花サク、

〔和漢三才圖會　九十四末濕草〕薇銜　麋銜　鹿銜　承膏　承肌　呉風草　無顚　無心草○中略

按薇銜葉莖能似益母草、其黄花既散則白而如絮、其子小長而黑色有刺、其中子細小、

〔和漢三才圖會　九十四末濕草〕兎兒傘（ヤブレガサ）俗云敗管笠

救荒本草云、兎兒傘生荒野中、苗高二三尺許、毎科初生一莖、莖端生葉、一層有七八葉、毎葉分作四叉、排出如傘蓋狀、故以爲名、後於葉間攛生莖叉、上開淡紅白花、根似牛膝而疎短、採嫩葉煠熟換水、淘去苦味、油鹽調食、

按兎兒傘五月開黄花、似菊而如敗笠狀、

笑𠹭草　俗稱〈本名未詳〉

按笑𠹭草高一二尺、一莖一葉有七切叉、似兎兒傘（ヤブレガサ）葉而小、莖端開小白花、略似蔞姑花、〈故名之敗管笠、兎兒傘名〉

〈笑𠹭草者亦有、〉

〔重修本草綱目啓蒙　十濕草〕薇銜　一名麋銜〈品彙〉　獨搖〈同上、一名者數種、通雅ニ獨搖有八、一鬼箭、一鬼臼、一鬼督郵、一天麻、一薇銜、一白頭翁、一徐長卿、〉

〈又獨搖芝ト云フ和名國語、赤箭芝ハ天麻ノコトナリ、〉　增、一名沒心草〈附方〉　鹿胞草〈本經逢原〉

薇銜ハ總名ナリ、大呉風草小呉風草ノ二種ニ分ツ、大呉風草ハ俗ニ張良草ト稱スル者ナリ、此草本名嘲弄草ナルヲ誤テ張良草ト云、京師相國寺鳳瑞軒ノ僧秀周、入唐ノ時、此種ヲ取歸リ、竜後ニ種テ嘲弄ス、草ト錯簇ノ塞ニ生ズルニ因テ、錯簇草ト云ト、結毦錄見タリ、今ハ山中ニ自生多シ、葉形兎兒傘（ヤブレガサ）葉ニ似テ大ナリ、故ニ和州方言ニ此草ヲモヤブレガサト云、濃州ニテタイミンガサト云、春舊根ヨリ敷葉ヲ叢生ス、漸ク圓莖ヲ抽テ高四五尺、二三葉ヲ互生ス、夏月莖ノ梢ニ多ク枝ヲ分チ花ヲ開ク、橐吾（ツワブキ）花ノ形ニ似テ大サ二寸餘、瓣心共ニ黄色也、葉モ亦橐吾ニ似テ大ナリ、一種苗小ナル者アリ、笑𠹭草ト云、此ハ葉ニ斑ナシ、張良草ニハ黑斑アリ、又一種笑𠹭草ノ紫莖ナル者ア

リ、形狀ハ異ナラズ、大和本草ニハ大ナルヲ奨噲草トシ、小ナルヲ張良草トス、兩説ナリ、何レニテモ大小通ジテ大呉風草ナリ、小。呉。風。草。ハ救荒本草ニ載トコロノ兎兒傘ナリ、和名ヤ。ブ。レ。ガ。サ。救荒ノ圖ニ能合ヘリ、深山幽谷ニ多生ズ、嫩ナル者ハ一根一葉ニシテ、破レタル傘ヲ張レル形ノ如シ、年ヲ經ルコト久シキモノハ、別ニ莖ヲ抽ルコト二三尺、二三葉互生シ、秋ノ初莖端ニ長穂ヲナシ、マバラニ花ヲ綴ル、花形鬼督郵ノ花ニ似タリ、黄白色ニシテ微シク淡紫色ヲ帶ブ、熊谷道詮ノ薇衘考證ハ、圖モアリテ詳ニ辨ズ、草木辨疑ニ、大呉風草ヲ張良草トシ、小呉風草ヲ奨噲草トスルハ穩ナラズ、

〔武江産物志（藥草）〕駒込邊ノ産　薇衘（染井）

〔多識編（二　隰草）〕劉寄奴草、加。豆。於。久。佐。今案加。良。乃。美。加。登。久。左。異名金寄奴、（大明）烏藤菜、（綱目）

〔重修本草綱目啓蒙（十二　隰草）〕劉寄奴草　ハ。ン。ゴ。ン。サ。ウ。　マ。子。ア。サ。（奥州）　タ。ツ。ミ。ア。ガ。リ。（花戸）　一名

六月雪（藥性奇方）　六月雪（古今醫統）　鴨脚（南寧府志）　大葉蒿子（楊州府志）　九里光（遵生八牋）、

自然生ハ東國ニアリ、人家ニモ多ク栽ユ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、莖ノ高サ四五尺、葉ハ五枚アリテ、艾ノ梢葉ニ似テ厚大糙澀ニシテ、邊ニ細鋸齒アリ互生ス、七八月莖頭ニ多ク小枝ヲ分テ、單瓣ノ花ヲ開ク、紫菀花ノ形ニ似タリ、大サ五六分、黄色黄心、後白キ絮ヲ成ス、コレ時珍ノ説クトコロノ劉寄奴草ナリ、蘇頌ノ説ク所ノ劉寄奴草ハ、俗名キ。ン。ク。ハ、一名ア。キ。ノ。キ。リ。ン。サ。ウ。ナリ、山野ニ極テ多シ、苗ノ高サ一二尺、劉ハ雞兒腸葉ニ似テ、色深シ莖紫黒色、秋ノ末小黄花枝ニ滿テ長穂ヲナス、觀ニ堪タリ、又救荒本草ニ載トコロノ野生薑ハ、此金花ノ菊葉ナルモノヲ指ス、葉ニ岐多シテトキハギクノ葉ノ如シ、和産モアリ、皆時珍ノ説トコロト同カラズ、又漢種ノ劉寄奴アリ、葉ノ形金花葉ニ似タリ、花モ相似テ小ク色白シ、集解ニモ花色白シト云、金花ニ白花モアレドモ、漢種トハ少シ異ナリ、然レドモ金花モ金瘡ニ効アル故、亦一種ノ劉寄奴草ナリ、又ヲトギリ草金瘡ヲ療

旋覆花

スルノ効相似ルヲ以テ、古來劉寄奴ニ充ツルハ大ナル誤ナリ、ヲトギリ草ハ小連翹ナリ、

増、劉寄奴草、蘭山翁ノ說此ノ如シト雖ドモ、眞物ハ和產アルコトナシ、

〔草木育種後編 下藥品〕劉寄奴 本草 俗に秋のきりんさうといふ、和蘭にてキユルデン、ルーデといふ、葉を金創の藥に用る、花を插花に用ふ、江戸近野にも生ず、山土の地にうねを作り植べし、糞水を澆ぎてよし、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　劉寄奴草

〔新撰字鏡 草〕旋復花 加万比久佐、本云早人草、

〔本草和名 十草上〕旋復華 仁諝音上 [illegible] 一名金沸草、一名盛椹、一名戴甚、和名加末都保、一名加末保、

〔和爾雅 七草木〕旋覆花 金沸草、滴滴金、[illegible]、覆字亦作[illegible]

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕旋覆花　金沸草　夏菊　金錢花　盛椹　滴滴金　戴椹　俗云乎久留末○中略

按旋覆花葉似柳、花似菊、而黃色、大如錢、人家栽者花大、數花攢開、又有千葉者、以野生單瓣者可藥入用也、攝州之產最佳、江州者次之、

〔重修本草綱目啓蒙 十草〕旋覆花　ヲグルマ　ノグルマ　キツネノタバコ 讃岐　一名盛椹 本經

滴滴花 花史左編　滴滴金　金錢子 共ニ同上　謝崇金 [illegible]　滴露金 同上　野油花 附方　飛天蘂 [illegible]

野金錢 [illegible]　六月菊 [illegible]　艾菊 群芳譜　滴露菊　夏菊　金盞黃 同上　滴露 大倉州志

原野園圃甚多シ、最繁殖ス、一タビ種レバ、其年花ヲ生ゼザレドモ、翌年ハ甚多ク生ズ、故ニ滴滴金ノ名アリ、此草ノ露水滴下スル處ニ、苗ヲ生ズト云ノ意ナリ、然レドモサニハアラズ、舊根蔓ノ如ク延テ、ソノ末ニ皆苗ヲ生ズル故繁茂スルナリ、葉ハ細長クシテ、鱧腸葉ニ似テ微毛アリ、苗高サ二三尺、葉互生ス、夏月梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、單瓣ニシテ大サ錢ノ如シ、黃心形菊花ニ似テ

瓣甚細シ、又簡瓣ナルモノアリ、又千瓣ナル者アリ、又千葉ニシテ小ナルアリ、シナノギクト云、コレハ葉モ狹細ナリ、時珍ハ自生ノ者ハ單葉人家ニ種レバ千葉トナルト云非ナリ、單葉千葉別種ナリ、

〔延喜式　三十七典藥〕諸國進年料雜藥

安房國十八種、(略)中 葛花、旋覆花各一斤、　上總國廿種、(略)中 葛花、旋覆花各二斤、

〔武江產物志　藥草〕志村邊ノ產　旋覆(おぐるま)

向日葵

〔大和本草　七花草〕向日葵(ヒウガアフヒ)　一名西番葵、花史ニハ文菊ト云、向日葵モ漢名也、葉大ニ莖高シ、六月ニ花サク、頂上ニ只一花ノミ、日ニツキメグル、花ヨカラズ、最下品ナリ、只日ニツキテマハルヲ賞スルノミ、農圃六書花鏡ニモ見エタリ、國俗日向葵トモ、日マハリトモ云、

紅藍花

〔倭名類聚抄　十四染色具〕紅藍　辨色立成云、紅藍久禮乃阿井、吳藍同上、本朝式云、紅花俗用之、

〔箋注倭名類聚抄　六染色具〕按古今注云、燕支中國人謂之紅藍、紅藍又出習鑿齒與燕王書、見史記索隱、開寶本草云、紅藍花生梁漢及西域、一名黃藍、博物志云、黃藍張騫所得、圖經云、紅藍花冬而布子於熟地、至春生苗、夏乃有花、下作梂彙、多刺、花蘂出梂上、圃人承露採之、採已復出、至盡而罷、梂中結實、白顆如小豆大、其花暴乾、以染眞紅、及作燕脂、葉頗似藍、故有藍名、愚按紅藍葉不似藍葉、謂之紅藍者、藍之染草、人所普知、而紅藍染物與藍同、故謂之紅藍、猶謂茈草爲茈荽也、時珍曰、其葉如小薊葉、至五月開花、如大薊花而紅色、按久禮乃阿井、與藍之義、是物可染似藍、其種自吳國來、故名、猶薑訓吳椒也、急呼爲久禮奈爲、見萬葉、後依之今俗呼倍爾乃波奈、謂以堤花爲紅粉也、(略)中 按證類本草藍實條引日華子載吳藍、又載圖經江寧有一種吳藍、並非紅藍、辨色立成所載吳藍、蓋以漢字書和名者、如牽牛花作朝貌、萱草作莇安之類、非本草吳藍也、(略)中 按證類本草引圖經云、紅藍花即紅花也、爾雅翼云、燕支今中國謂之紅藍、或只謂之紅花、

〔多識編二草〕紅藍花、久禮乃波奈、又稱久禮乃阿比、今案久禮奈井、又稱倍仁乃波奈、又按呉藍久禮阿伊、是卽所謂紅字和訓也、

〔八雲御抄三上〕紅　すゑつむはなと云り　すゑつじゆへ

〔藻鹽草八草〕紅

末つむ花(すゑつむはなむじゆへ也)まふりて(ふりはへといふしきふりてと云也、ふり出てといふ也、紅はふり出てそめつけ物也、昔にはただふりて云也、ふり出て物なる物也)はす紅うす紅ゆふ紅紅のちり(紅のちりとは、紅をつかひたる所に、たまりたる物也)紅のすゑさく花、たかまきし紅、花から紅、ちしほの紅、くかくらのよくすめるがみのまさしくにれなぬ(ともせのゆみなすにつくと)すゑつみはやす紅、

〔東雅十五草卉〕紅藍クレノアキ　倭名鈔に辨色立成を引て、紅藍呉藍並にクレノアキといふ、本朝式には紅花の字を用ゆ、俗亦用之と註せり、クレとは卽呉也、アキは卽藍也、萬葉集に呉藍讀てクレナヰといふは、其語の轉せしなり、但し漢に呉藍と云ひしものは、藍の類にして、紅藍をいふにはあらず、此に呉藍といふは、其始呉國より來りしが故也、卽今俗にはベニノハナといふなり、

〔和漢三才圖會九十四本草〕紅花　紅藍花　黃藍　俗云久禮奈伊、呉藍之略言、〔中略〕按紅花俗傳云、中日下、種總茂盛、羽州最上及山形之產爲良、伊賀筑後次之、豫州今治及攝播二州之產又次之、最上紅餅大如錢、兩國紅餅圓徑三四寸許、〔下略〕

〔重修本草綱目啓蒙十三隰草〕紅藍花　クレノアキ(和名鈔)　クレナヰ　スヱツムハナ(源氏物語)　丹華(和方書)　ベニノハナ　クレナヰノハナ(雲州)　ハナ(仙臺)　紅花　一名紅蘭(事物紺珠)　紅花菜(救荒本草、又山丹花ヲ名)(開カザル者ヲ乾シ、食用ニスルヲモ紅花菜ト云、)

秋分ニ子ヲ下シ、便テ生ズ、葉ハ細長クシテ黃綠色、長サ二寸或四五寸、葉邊及中心ニ硬刺アリ、春ニ至テ莖ヲ抽デ、高サ三五尺ニ至ル、其莖ニモ刺アリ、葉ハ互生ス、梢葉ハ枸骨(ヒヒラギ)葉ノ如シ、夏月枝ノ末ゴトニ花ヲ生ズ、梂ヲナシテ蒼朮薊梂ノ如ク刺多シ、細蘂梂上ニ出テ薊(アザミ)花ノ形ニ似リ、紅黃色

ナリ、今朝瓣ヲツミ采レバ明朝復出、此ノ如クスルコト數日ニシテ盡ク、故ニ源氏物語ニ末摘花ト名ク、瓣ヲ摘ニハ必早晨ヲ以テス、故ニ集解ニ乘露采之ト云リ、花後實ヲ毬中ニ結ブ、熟シテ大サ赤小豆ノ如シ、一方尖リ色白クシテ光アリ、唐山ニテハコノ實ヲ搾リ、油ヲ取リ燈ニ點ズ、又杭州ニテ金ノ扇面ヲ僞ルニ、銀紙ニ此油ヲ刷キ、火ニテ炙リナスト、天工開物ニ見タリ、藥ニ入ル丶ニハ花瓣ヲ用ユ、即紅花ナリ、數種アリ、ゼニバナト云ハ、扁クツクネテ錢ノ形ニナシタルヲ云、集解ニ捏成薄餅ト云是ナリ、是ハ多ク染家ニ用ユ、奥州仙臺ヨリ出ルヲ上品トス、出羽ノ山形コレニ次グ、同州谷知、奥州ノ三春之ニ次グ、奥州ノ者ハソノ形小ニシテ薄シ、コレハ瓣ヲトリテ少ヅツ集メ、席ノ上ニナラベ、其上ニ席ヲ蓋ヒ、オモシヲカケ、錢形ニ造ルモノナリト云、肥後ヨリ出ルハ大サ二寸許、厚サ五分許、圓形ニシテ硬シ、コレハ竹筒中ニ入レ擣カタメ、出シテ切タル者ナリト云、又筑後ヨリ出ルハ薄シテ大サ三寸許、是ハ奥州ヨリ出ルモノト、其製同ジト云、又錢バナニ成サズシテ、瓣ヲ摘采タルマ丶ニテ出スモノアリ、コレヲツミナリト云、又ジバナトモ云、唐山ニテコレヲ散花ト云、伊勢美濃ヨリ出ルハ皆ツミナリ也、藥ニハ多ク此ツミナリヲ用ユ、藥肆ニテ陳舊ニシテ色ノ變ジタルヲ、藥紅花ト名ケ售ル、是甚惡シ、新ナルヲ撰ビ用ユベシ、若シ無トキハ錢バナヲ碎キテ、ホドキ花ト云ヲ用ユベシ、

〔農業全書三六草七〕紅花

うゆる地の事、土性極めてよく光色ありてうるはしきは、作れる花の色もよく染付よし、黄赤黒の土の尤肥良なるをゑらびて作るべし、高き田の性よきは猶宜し、夏より數遍耕しさらし、糞をうち熟しからし置たるに、霜月の初申の日蒔べし、又八月地をよくこなし畦作りし、筋を切、たねを酒に浸す事一宿、灰糞やき土にて、たねを合せ蒔べし、さのみ厚く蒔べからず、苗二三寸の時、中うち芸り、人糞ならば、いかにも久しく枯たるを以て、葉にかゝらざる様にわきよりかくべし、苗

ふとりさかへては、人糞は云に及ばず、新しくけがらはしき糞を用ゆれば、さきまがりて花房とならぬ物なり、鷄の糞又は精鰯にても、苗のちいさき時に多く用ひて、中うちさい／＼して芸り培ひ、うすからず厚からず、よき程に間引立て、四五月朝いまだ日の出ざるに、花よくひらきて、わきにたるゝを見てつむべし、ひらきてもいまだ色黄にして、わきにたれざるはつむべからず、摘取てはざつときざみ臼にてつき、清水に漬てやがて取上しぼり、何にてもきれいなる物にひろげ、草の葉をおほひ、日風も當らざる所に二三日もをき、少色付、白かびの出るを見て、餅に造り日に干べし、又出羽の最上にて花を作る法あり、異なる事なし、是はつみ取て清水に漬、やがて取上てしぼり、筵に擴げ物をおほひをきて、少ねたる時、餅には造らず、其まゝ亂れ花にして、干上げ箱に入をくなり、苗の時間引て、ゆがき菜にし、食するに其性よく、味もよし、市町近き所にては、園菜とし、少厚く作りて、段々間引取て賣ても、利なき物にあらず、又實を多く收め置て、燈油に用ひ、勝れて光もよく、油多き物なり、又紅花は苗より念を入、いか程心を盡しても、卒爾に糞を用ゆれば、忽ち先曲りくせ付物なれば、下地をなる程よくこしらへ、糞を多くうち、さらし置、蒔時鷄糞など、其外よく枯たる糞を灰に合せ、下にしきて蒔べし、後は草かじめ中うち培ひ間引立て置べし、土地に相應し、肥地に多く作りては、勝れて厚利を見る物なり、地心を能ゑらぶべし、又子を牛に飼たるもよし、

〔草木六部耕種法 二十〕草花ノ染料ト爲スベキ者ハ、紅花ノ用ヨリ大ナルハ無シ、○中略凡ソ一段ノ畠ニ種子六七升ブ、蒔テ、上ニ土ヲ覆フニ及バズ、但シ芽ノ出ザル間ハ、小鳥ヲモ逐ベク、時々盛糞水ヲ灑ニ宜シ、既ニ芽ヲ生ジテ後ハ、糞尿等不淨ナル肥養ヲ用ルコト勿レ、唯其他草ヲ除キ、干鰯ノ粉、或ハ火酒ヲ鰡タル粗糠交粕等ヲ、根傍五六寸隔テ置キ、土ト耙鎬ベシ、其苗頗ル長ジテハ適宜ニ間引テ、蔬菜ト爲スベシ、美味ナル者ナリ、四五月ニ至リ、黄色ナル花開テ朝露ヲ帶タルヲ

摘ベシ、紅花ヲ摘採ベキノ候ト云フハ、其花滿開シテ翻反リ、其中三片紅色ニナリタルヲ、時トシテ摘ミ採ルベシ、何トナレバ其花既ニ翻反ト雖ドモ、唯黃色ナルノミニテ、一片モ紅ナラザルヲ摘タルハ臙脂少シ、又過半紅色ニナル迄モ、摘ミ採ザルトキハ、亦臙脂ノ出ルコト大ニ減ズル者ナリ、所謂其花眞黃色ナルガ、翻反テ其中三片紅ニナリタル時ハ、臙脂ノ十分ニ、其花ニ充滿タル候ナリ、此候ヲ待ズシテ摘採モ、此候ヲ緩ニシテ摘採ザルモ、共ニ大ナル損失ナリ、翅ニ臙脂ノ減少スルノミナラズ、其色モ亦美艶ヲ失フコト多シ、故ニ三片紅ノ候ヲ待ヲ、紅花ヲ摘ミ採ル極意ノ秘訣トス、紅花ヲ多ク作ルトキハ、三片紅ノ花ヲ摘モ、一朝ヤ二朝ニ盡スベキニ非ルヲ以テ、其候ノ來次第ニ、幾朝モ掛リテ、花ノ有ン限リハ皆悉ク摘採ベシ、凡紅花ヲ作ルニハ、植地ノ善惡ヲ論ゼンヨリハ、唯其培養ヲ精粹ニスベシ、我家ノ法ヲ以テ作レバ、莖長六尺餘ニ及ビ、花モ極大ナリ、故ニ同ク一段ノ地ニ作ルト雖ドモ、花ヲ得ルコト多キガ故ニ、燕脂ノ出ルコト他ニ倍シ、其色モ亦極テ美艶ニシテ最上品ナリ、又我家法ニテ作リタル紅花ハ、餅ト作タルモ、攤乾ト爲シタルモ、成ハ馬糞ノ如クニシテ、其色醜キコト有リ、然レドモ燕脂ノ出ルコト多キニ至テハ、他ノ美ナル紅花ノ絶テ及ブベキニ非ルナリ、○中略凡ソ紅花ヲ多ク作ルハ、出羽國最上郡ヲ第一トス、最上紅花ハ餅ト成サズシテ、亂花ニ乾タルモノ多シ、此ハ漢土ノ農書ニ、攤而曝乾勝作餅、作餅者不得乾、令花浥鬱也ト云フ說ニ惑タルナリ、餅ニ作ルモ、必シモ浥鬱モノニ非ズ、其麻布ニ包テ餅ト作スノ間ニ、却テ黃汁ヲ除キ去ルノ功アリ、故ニ我家ニテ皆餅ニ製セシムルヲ法トス、又最初蹈採セシ時ヨリ、晒ス時ニ洗流タル黃汁ニハ、燕脂ノ氣ヲ含ムコト頗多シ、桃色木綿等ヲ染ルハ、皆此黃汁ニテ染ル者ナリ、誤テ此汁ヲ棄ルコト勿レ、

〔剪花翁傳三 五月開花〕紅花　末摘花　漢艸花　花の色濃黃にして光あり、開花五月、方日向、地二分濕り、土えらばず、肥淡大便、度々灌がざれば、金銹とて葉に星の如くなる黃みし點入也、風すかし

を専らにすべし、下種秋彼岸にまくべし、

〔令義解 三賦役〕凡〈〇中略〉正丁一人、紫三兩、紅三兩、

〔延喜式 二十四主計〕凡中男一人輸作物〈〇中略〉紅花二兩、

伊賀國〈〇中略〉中男作物紅花七斤八兩、

〔播磨風土記 揖保郡〕阿爲山、品太天皇〈〇中略〉之世、紅草生於此山、故號阿爲山、

〔萬葉集 十夏相聞〕寄花

外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友

〔古今和歌集 十一戀〕題しらず　よみ人しらず

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色に出なむ

〔新撰字鏡 草〕漏盧〈奈々美久佐〉

〔本草和名 七〕漏盧〈楊玄操音力魚反〉一名野蘭、一名鹿驪根、〈出陶景注、仁諝音知力反、蘇敬注云、是木藜蘆也、非漏盧〉一名莢蒿、〈出蘇敬注〉和名久呂久佐、一名阿利久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕漏盧　本草云、漏盧一名野蘭、〈和名久呂久佐、一云宮里久佐、〉

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注云、俗中取根、名鹿驪根、蘇注云、此藥俗名莢蒿、莖葉似白蒿、花黃、生莢長似細麻、如箸許、有四五瓣、七月八月後皆黑、異於衆草、蒿之類也、其鹿驪、山南謂之木藜蘆、有毒、非漏盧也、陳藏器曰、樹生如茱萸、樹高二三尺、別本注云、漏盧莖筋大、高四五尺、子房似油麻房而小、蜀本圖經云、葉似角蒿、下濕地最多、六月七月採莖、日乾之、黑於衆草、〈〇中略〉陶弘景所說鹿驪、一名木藜蘆、陳藏器所說者亦是耳、今俗呼波奈比利乃岐、蘇敬所說俗名莢蒿、開寶本草、蜀本圖經所云皆同、沈氏筆談云、今闕中所謂漏盧、莖如油麻、高六七尺、秋深根黑如漆、乃真漏盧也、亦謂此也、今俗呼與毛伎毛土岐、按陶所說漏盧、即木藜蘆、不得謂之爲久佐、則所謂久呂久佐、蓋謂蘇所說漏盧也、又圖經所

載、有單州者、有沂州者、有秦州者、有海州者、單州者、大倭本草所謂平江帶、沂州者今俗呼黃船菊、或呼秋牡丹、或呼秋明菊、秦州者卽救荒本草六月菊、今俗呼野春菊、或單呼春菊、海州者、卽白頭翁、又飛廉亦名漏蘆、見別錄、皆非此所載也、李時珍曰、屋之西北黑處謂之漏、凡物黑色謂之盧、此草秋後卽黑、異於秋草、故有漏盧之稱、小野氏曰、一名野蘭、蓋謂六月菊、然則秦州漏蘆也、

〔藻鹽草〕和名少々　漏蘆　ありくさ

〔重修本草綱目啓蒙十草〕漏盧　クログサ　アリグサ古名　一名北漏盧新生伐曲大鄉藥本草　純數

大村家　漏蘆蒿外臺秘要

集解ニ說トコロ品類多シ、先師七種ノ辨アリ、飯谷氏逸テ漏盧考證ヲ著ス、ソノ七種ハ恭ノ說ニ俗名莢蒿ト云ハ、卽釋名ニ鬼油麻ト云、時珍ノ說ニ異ノ漏盧ト云モノ也、和名ヒキヨモギ、一名ヨモギモドキ、淺山向陽ノ地ニ生ズ、苗高サ二三尺、葉ハ艾葉ニ似テ小ク薄ク、花岐多クシテ毛茸アリ、黃綠色ニシテ微紫ヲ帶ブ、背ニ白色ナシ、皆兩對シテ害ナリ、六七月梢ノ葉間ゴトニ花ヲ生ズ、鷹嫜(アフヒノハナ)ニ似タリ、大サ二三分、黃色花下ニ細房アリ、長サ五六分、形圓ニシテ堅ニ數稜アリテ、胡麻房(ゴマノフサ)ノ如ニシテ小シ、故ニ鬼油麻ノ說アリ、馬志ノ說ニ似油麻房ト云モノ之ヲ指ナリ、房內ニ小子多シ、罌粟ノ子ヨリ小ナリ、八月ニ至リ苗枯レ黑タナルコト、衆草ニ異ナリ、弘景藏器ノ說ハ、其ニ木藜蘆ナリ、毒草類ニ本條アリ、俗名ハナヒリノキ、北國ニテアタシヨギト云、小木ナリ、頌ノ說ニ單州者ト云云、單州漏盧ハ和名ヒゴタイ、大和本草ニハ平江帶ト書リ、唐山ヨリ此稱渡リシ時、此名ヲ書來リシト云リ、然レドモ唐山ノ書ニテ、未此名ヲ見ズ、花戶ニテハ肥後臺ト云、苗ハ春宿根ヨリ叢生ス、小薊(ノアザミ)葉ニ似テ大ニシテ厚ク刺ナシ、長サ二尺許、背ニ白毛アリ、夏已後莖ヲ抽コト高サ四五尺餘、小葉互生ス、初秋莖頂ニ花アリ、藍紫色ノ小花數多簇リテ毬ヲナス、形正圓ニシテ山芹菜(ナベナ)花毬ノ如ク、下ニ萼ナシ、大サ寸餘、世人多ク七夕ノ瓶花ニ用ユ、古ヨリ

タマボウキヲ以テ單州漏盧ニ充ツ、穩ナラズ、タマバウキハ山野ニ多シ、葉ハ敗醬葉ニ似テ長大ナリ、又紫藤葉ニ似テ花鮍アリ、一根ニ叢生ス、莖ヲ抽ブルコト高サ三五尺、葉互生ス、秋ニ至テ枝頭ゴトニ花ヲ開ク、小薊花ニ似テ紫色刺ハナシ、漢名詳ナラズ、沂州者花葉頗似牡丹云云、沂州漏盧ハ即牡丹葉漏盧ナリ、秘傳花鏡ニハ秋牡丹一名秋芍藥ト云、和名キブチギク、京カウライギク、攝州八朔牡丹、長州アキ牡丹、相州カハギク、紀州カバギク、泉州トウギク、大和本草紫衣ギク、三才圖繪ハマギク、常州レマギク、越後ムメウナウ、南部ナツマギク、濃州カブラギク、加賀小松カブロギク、野州山田シウメイギク、同上久井クハンノンギク、播州林田ランギク、同上立野カラギク、鎌倉タサボタン、江州

山中溪側ニ生ズ、人家ニモ栽ユ、蓊鬱茂ス、城州ニハ貴船山中ニ自生多シ、故キブチギクト云、春宿根ヨリ葉ヲ叢生ス、形三枝九葉ニシテ、大抵牡丹葉ニ類シ尖リテ毛茸アリ、夏月莖ヲ抽コト三四尺、八九月ニ至リ枝頭ゴトニ一花アリ、形菊花ノ如ク二三重ナリ、大サ一寸餘、初ハ紫紅色後ハ色淡シ、背ニ白毛アリ、花中ニ黄小心アリ、花後實ヲ結バズ、冬ニ至テ苗枯ル、春ニ至レバ根頭ノ末、皆苗ヲ發スルコト、金瓣草ノ如シ、

秦州ノ者花似單葉寒菊紫色云云、秦州漏盧ハ即釋名ノ野蘭ニシテ、即救荒本草ノ六月菊ナリ、和名ノシユンキクシユンキクト云、同書ト同名ナリ、雞兒腸ノ種類ニシテ深山ニ生ズ、人家ニモ多ク栽ユ、枝ヲ扦シテヨク活ス、葉ハ雞兒腸葉ヨリ潤クシテ深綠色、莖紫黑色、三月ニ花サク、單瓣ニシテ淡紫碧色、雞兒腸ノ花ニ異ナラズ、又白花モアリ、

海州ノ者花紫碧如單葉蓮花云云、海州漏盧ハ綠頭漏盧ニシテ即山草類ノ白頭翁ナリ、和名ゼガイサウ、

時珍ノ說ニ、莢蒾一名漏盧云云、莢蒾漏盧ハ即次ノ條ノ莢蒾ナリ、以上七種ノ漏盧ノ內、眞ノ漏盧單州漏盧ハ苗ノ枯レテ黑キヲ以テ名ク、秦州漏盧ハ莖幹ノ紫黑色ナルヲ以名ク、木藜蘆、沂州漏

盧、海州漏盧ハ根ノ黑キヲ以テ名ク、漏盧古ヨリ渡ナシ、　本邦市人舶來遠志ノ中ヨリ根形粗大ナル者ヲ擇出シ、漏盧ト名ケ售リ來レリ、直根ニシテ淡黃色、此者決シテ遠志ニ非ズ、明和六年己丑ノ頃ヨリ、舶來ノ漏盧ヲ京師ニ賣ル、卽遠志中ヨリ擇出者ニ異ナラズ、根ノ長サ五寸許、皆蘆頭ニ嫩アリ、偶枯葉ノツキタルアリテ、歸視スルニヒゴタイニ異ナラズ、故ニ單州漏盧ヲタマホウキトスル說ヲ改テヒゴタイトス、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 漏盧、薬本各九斤、　攝津國卌四種、獨活、漏盧各五斤、○下略

〔武江產物志藥草〕鼠山ノ產　漏盧(ヒゴタイ)

〔本草和名七草〕飛廉、一名飛輕、一名漏蘆、陶景注云、別有漏蘆、非此別名、一名天薺、一名伏猪、一名伏兎、一名飛雉、一名木禾、出本經、一名天買、出大清經、一名苦矢、(矢恐芙誤)已上出神仙服餌方、和名曾々木、一名布保々天久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕飛廉草　本草云、飛廉草、和名曾々木、一云、布保々天久佐、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注云、極似苦芺、惟葉下附莖、輕有皮起似箭羽、葉又多刻缺、花紫色、蘇云、此有兩種、一是陶說生平澤中者、其生山岡上者、葉頗相似而無疎缺、且多毛、莖亦無羽、根直下、更無傍枝、生則肉白皮黑、中有黑脈、日乾則黑如玄參、王念孫曰、本草飛廉一名飛輕、陶注亦云、飛廉莖輕、則飛廉之名、殆取義于輕、與陶注本草螢蠊云、形似䗪蟲而輕少能飛、亦其義也、

〔多識編二隰草〕飛廉曾曾岐、又稱之於天、異名木禾、別錄

〔和爾雅七草木〕飛廉ヲニノマユハキ　漏蘆、木天、天薺、飛雉並同、

〔大和本草九雜草〕飛廉　鬼ノマユハキト云、鬼アザミニ似テ、莖ノ四方ニ鬼箭ノ如クニ、矢ノ羽ノ如ナルヒレアリ、針モアリ、花モ鬼アザミニ似タリ、或說ニシホデト訓ズ、シホデハ蔓草ナリ、是ニアラズ、飛廉ノ和名ヲモシホデト云歟イブカシ、

苦芺

〔和漢三才圖會〈九十四本隰草〉〕飛廉　木禾　飛雉　飛輕　伏兎　伏猪　天薺　和名曾曾木、一云布保保天、久佐、○中略

按漏盧、飛廉、攝州田野間有之、而醫者用者共希也、唐漏盧頗似遠志、而不似細牛蒡、近年不來、

〔重修本草綱目啓蒙〈十隰草〉〕飛廉　ツハキ〈和名鈔〉　フキトウタ〈同上〉　オニノマユハキ　オニアザミ　ヤハズアザミ　ヒレアザミ　一名飛廉蒿〈同方〉

夏ノ末子生ズ、葉ハ小薊葉ニ似テ黃綠色刺多シ、秋多ハ地ニ就テ叢生ス、春ニ至リ漸ク薹ヲ抽テ三五尺ニ至ル、枝葉共ニ互生ス、薹ニ傍テ羽狀條起リテ、鬼箭羽ノ如ク更ニ刺多シ、陶氏ノ說ニ、葉下附莖輕有皮、起似箭羽ト云是ナリ、夏ニ至テ枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、小薊花ニ似テ小ナリ、見ニ足ラズ、花後白絮トナリ、風ニ隨テ飛ブ、絮ゴトニ一子アリ、落ル處即生ジ、苗根共ニ枯ル、白花ノ者ハ多アリ、紫花ノ者ハ少シ、

〔本草和名〈十一草〉〕苦芺〈楊玄操音烏老反〉　一名鉤芺〈仁諝〉　和名加未奈、一名加美於古之奈、

〔倭名類聚抄〈二十草〉〕苦芺　本草云、苦芺〈烏老反、和名加未奈、一云加美於古之奈、〉

〔箋注倭名類聚抄〈十草〉〕蜀本圖經云、子若猫薊、莖圓無刺、李時珍曰芺大如拇指、中空莖頭有臺似薊、初生可食、引證化補、别云、苦芺大者名苦藤、葉如地黃、味苦、初生有白毛、入夏抽莖有毛、開白花甚繁、結細實、其無花實者、名地膽草、汁苦如膽也、又曰、凡物稚曰芺、此物嫩時可食、故以名之、

〔和爾雅〈七草木〉〕苦芺〈カマナ、鉤芺、苦芺、根莖同、〉

〔和漢三才圖會〈九十四本隰草〉〕苦芺〈カマナ〉○中略

按苦芺原野濕地多有之、花淺紫似薊而瘦、葉亦色淡不繁、莖無刺、稱女阿左美、以薊名鬼阿左美、一種有菊薊者、莖葉似苦苣、而莖有白汁、至秋高三四尺、開黃花、似八重小菊而美、〈葉似苦苣及苦芺、花似菊、故名菊薊、〉

〔重修本草綱目啓蒙〈十隰草〉〕苦芺　カマナ　カミヲコシナ〈以上古名〉　ヒメアザミ　トチナ〈加州〉　ヘラ

葈耳

アザミ（奥州）

山野共ニアリ、好テ溪澗地澤ノ旁ニ生ズ、繁茂シヤスシ、葉宿根ヨリ叢生ス、ソノ形一ナラズ、小薊葉ニ似タルモアリ、又羊蹄（ギシギシ）葉ニ似テ短ク、淺鋸齒アルモアリ、皆葉邊及莖ニ刺アリ、葉ノ長サ三五寸、大ナル者ハ尺餘ニ至ル、八九月莖ノ高サ三五尺、枝ヲ分チ花ヲ開ク、淺紫色、大薊（ヤマアザミ）花ノ形チニ似テ旁ニ向テ開ク、其苗嫩ナル時食フベシ、故ニトチナノ方言アリ、

〔新撰字鏡 草〕枲耳實（奈毛美）

〔本草和名 草 入〕葈耳（仁諝上音以反）一名胡葈、一名地葵、一名葹（楊玄操音私）一名常思菜、一名羊負來、（陶景注云、昔中國无此、言從外國逐羊毛中來、）一名蒼耳、（出蘇敬注）一名金薥、（出兼名苑）一名菤耳、（居轄反）一名苓耳、（已上出爾雅）和名奈毛美、

〔倭名類聚抄 二十 草〕葈耳　陶隱居本草注云、葈耳一名羊負來、（葈音子、和名奈毛美、）昔中國無此草、從外國逐羊毛中而來、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕今俗呼乎奈毛美、呼著蒼為米奈毛美、○中略　按御覽引博物志云、洛中人有驅羊入蜀者、胡葈子著羊毛、蜀人取種之、因名羊負來、陶說本之、王念孫云、負來疊韻字、無煩曲說、草名取於牛馬羊豕雞狗者、不必皆有實事、況采采卷耳、周南所詠、又不得言中國無此草也、爾雅菤耳、苓耳、郭璞注云、廣雅云枲耳也、亦云胡枲、江東呼為常枲、或曰、苓耳形似鼠耳、叢生如盤、詩卷耳正義引陸機疏云、卷耳葉青白色似胡荽、白華細莖蔓生、可煮為茹、滑而少味、四月中生子、如婦人耳中璫、今或謂之璫草、幽州謂之爵耳、圖經云、詩人謂之菤耳、爾雅謂之蒼耳、廣雅謂之葈耳、皆以實得名也、時珍曰、其葉形如枲麻、故有枲耳名、禹錫引爾雅作菤耳蒼耳、陶注又云、此是常思菜、傖人皆食之、以葉覆麥作黃衣者、蘇敬孟詵謂之蒼耳、時珍曰、救急本草云、蒼耳葉青白、類粘糊菜葉、秋間結實、比桑椹短小而多刺、

〔多識編 二 隰草〕葈耳、和名那毛美、今按於那毛美、異名常思、（弘景）

豨薟

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕葈耳 ヲナモミ ムマノヽミ 越前 ナモミ 越州 一名野落蘇 醫學集要 胡寢子 大倉州志 瑞草 純陽 美橘歸 醫學入門 蔓刺 千金方 升古休伊 月令取 吐叱古个里 村家方 胡寢草 汲古寧府志 增一名耳中瑞 綱目 蒼耳 綱目 野茄 鎮江府志 虛寢母 大倉州志 野縑絲 附方

此草ヲ圖ニヨリテメナモミト云、其實大ナル故ナリ、然レドモ非ナリ、野生多アリ、春生ジ秋後根枯ル、葉ハ茄葉ニ似テ闊ナク紫色ナラズ、互生ス、莖高サ三五尺、瘠地ノモノハ短シ、夏月莖頭ニ白花ヲ開キ實ヲ結ブ、形棗核ノ如ク、蝟實ニ似テ小ク、兩頭尖リテ硬キ刺多シ、熟スレバ衣服ニ粘著ス、故ニ羊負來ノ名アリ、此實毛氈ニツキ來リタルヲ藥ニ用ルヲ、附方ニ氈中蒼耳ト云、秋末ニ至テ苗根共ニ枯ル、ソノ實地ニ落ルモノ、春ニ至テ自ラ生ズ、

〔多識編 二〕豨薟、今案米那毛美、異名火枚草、本草

〔大和本草 六〕豨薟 和名ヲナモミ、功能甚良シ、殊風痺ニ用コトヲ、本草綱目唐慎微ガ說ヲノセタリ、成訥及張詠豨薟丸ヲ天子ニ進ムル表アリ、其表ノ内ニ、誰知至賤之中、乃有殊常之效ノ文アリ、其藥至賤ニシテ、非常ノ效アル物甚多シ、黃精萎蕤甚多、薏苡、胡麻、蒼耳ノ類ナリ、李中梓ハ慎微ガ寥之太過ナル事ヲソシレリ、今俗ニ豨薟ト稱スル草一種アリ、與本草時珍之說不合宜詳之、蘇頌說似タリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕豨薟 メナモミ モチナモミ 古方書 秋ボコリ 石州 一名稀賢草 醫學集要 火杴 唐本 豨仙 本品字 白花菜 八閩生 綿英 本草新編

圖ニヨリテ此草ヲオナモミト云、武藏筑前モ然リ、故ニ大和本草ニモオナモミト訓ズ、並ニ方言ナレドモ混ジ易キ故、蒼耳ヲオナモミト訓ズベシ、豨薟ハ原野ニ極テ多シ、宿子地ニアリテ春苗ヲ生ズ、方莖ニシテ枝葉兩對ス、葉形團尖ニシテ鋸齒アリ、苧麻(マヲ)葉向日葵(ヒグルマ)葉ニ似テ、薄軟ニシテ毛茸アリ、莖ノ高サ三四尺、秋枝端ゴトニ花ヲ開ク、ソノ萼五ツニ分レ、細長ク厚クシテ毛アリ、毛粘

天名精

滑ニシテ手ニ著易シ、莖ヲ連テ花ヲ取リテ、地上ニ落シテ提レバ砂土粘著ス、故ニイシモチノ名アリ、此蕚上ニ小株アリ、株上ニ花ヲ開ク、瓣最小ニシテ黄色、天名精花ニ似テ小ナリ、花衰テ梂內ニ實ヲ結ブ、岡蒿子(シユンギクノ)ヨリ細ク、天名精子ヨリアラシ、黏シテ苗根共ニ枯ル、

〔徒然草 上〕めなもみといふ草あり、くちはみにさゝれたる人、かの草をもみてつければ、則いゆとなん、見しりてをくべし、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 豨薟(めなもみ)

〔本草和名 七草〕天名精、一名麥句姜、(蘇注云、味甘辛、故有姜名、)一名蝦蟇藍、(蘇敬注云、狀似藍、故以名之、)一名豕首、一名天門精、一名玉門精、一名彘顱、一名蟾蜍蘭、(蘇敬注云、香氣似蘭、故以名之、)一名覲、一名豨薟、一名豨首、(仁諝音虛豈反、已上二名出陶景注、)一名鹿活草、一名天蔓菁、一名地菘、(已上三名出蘇敬注、)一名天精、一名天蕪青、一名葵蘆、(已上三名出釋藥注、)一名蕸、一名蟾諸蘭、(已上二名出雜要訣、)和名波○末○多○加○奈○一名波○末○布○久○良○、

〔倭名類聚抄 二十草〕天名精　本草云、天名精一名麥句薑、(和名波末太加奈、一云波萬不久良、)蘇敬注云、味甘辛、故有薑稱矣、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕爾雅云、菺薽、豕首、本草又云、一名豕首、一名天門精、陶注云、此卽今人呼爲豨薟、亦名豨首、蘇注又云、鹿活草是也、別錄一名天蔓菁、南人名爲地菘、其豨薟苦而臭、名精乃辛而香、全不相類也、蜀本圖經云、地菘也、小品方名天蔓菁、一名天蔓菁、夏秋抽條、頗似薄荷、花紫白色、其葉似山南菘菜、陳藏器曰、天蔓菁地菘與蔓菁相似、故有此名、爾雅云、大菊蘧麥、郭注云、麥句薑、蘧麥、卽今之瞿麥、然終非麥句薑、爾雅注錯如此、據陳說作天蔓菁爲正、作名精、作門精、皆聲之訛也、開寶本草云、地菘生人家及路傍陰處、所在有之、高二三寸、葉似菘葉而小、李時珍曰、嫩苗綠色、似皺葉菘芥、微有狐氣、長則起苗、莖間小黄花、如小野菊花、結實如茼蒿子、亦相似、最粘人衣、狐氣尤甚、其根白色、如短牛膝、

〔藻鹽草 八草〕和名少々 天名精はろし

〔多識編 二草〕天名精、波臨太賀那、又稱伊奴乃志利、今案伊乃志利久左、異名天蔓菁、餘同

〔和爾雅 七草木〕天名精(天蔓菁、地菘、蝦蟆草、豕首、劉𢭏草、蟾蜍蘭、覲、實名鶴虱、根名杜牛膝、)

〔重修本草綱目啓蒙 十草〕天名精 イ○ヌ○ノ○シ○リ○古名 イ○ノ○シ○リ○グ○サ○同上 ハ○マ○フ○ク○ラ○和名鈔 ハ○マ○タ○カ○ナ○同上 ヤ○ブ○タ○バ○コ○古今 ホ○ウ○キ○ノ○タ○バ○コ○ イ○ノ○ジ○リ○勢州 ウ○ラ○ジ○ロ○佐渡 ハ○イ○グ○サ○播州 一名天蔓地菘注 [illegible]而地菘花[illegible]明 雲裏青[illegible] 劉枝草同上 長青草同上 過冬青宋開寶本草記 蝦蟆草正字通外科 狐[illegible]豚本草 皺皮草外科附錄心 觀音草本草 鹿活草酉陽雜俎 鶴蝨一名鶴蝨本草綱目

多ク野生アリ、人家ニモ生ズ、初ハ地ニ就テ叢生ス、烟草葉ニ似テ小ク、鋸齒皺毛臭氣アリ、長サ尺餘、夏秋ノ間ニハ莖高サ二三尺ニ至ル、葉互生ス、葉間ニ花ヲ開ク、野菊花(アブラギク)ノ心ノ如ニシテ黄色ナリ、萼ハ綠色、葉間ニ一花ノミ生ズルモアリ、又多ク攅簇スルモアリ、此實ヲ鶴蝨トシ、根ヲ土牛膝トスト云、然レドモ元ト本草ニハ天名精ト鶴蝨ト別條ナリシヲ、時珍綱目ヲ著ス時、沈存中ノ說ニヨリ、唐本草ノ鶴蝨ヲ併入テ一物トス、故ニ古鶴蝨ト云ハ、天名精ノ實ニ非ザルコトヲ、藥性纂要ニ辨ジ、ソノ形狀モ詳ニ說ケリ、ソノ鶴蝨ハ卽俗ニヤブジラミト呼ブ者ニシテ、此實ヲ今藥舖ニ蛇床子ト名ケテ貨ス、然レドモ殺蟲ノ功ナシ、葉ハ胡蘿蔔葉ニ似タリ、故ニノニンジント呼ブ、實ハ熟シテ人衣ニ著ク、故ニヤブジラミト云、寬政巳年舶來ノ鶴蝨モ、此ト同ジキ時ハ、藥性纂要ノ說ヲ是トスベシ、天名精ノ實ヲ鶴蝨トスルハ非ナリ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 天名精

〔新撰字鏡 草〕紫苑 加○乃○志○太○

〔本草和名 八草〕紫菀、一名紫蒨、此反見 一名靑菀 名靑菀、一名白菀、出陶景注 一名女菀、出蘇敬注 一名織女菀、出兼名苑

一名紫蒨〔出雲要訣〕和名乃○之○

〔倭名類聚抄二十草〕紫菀　本草云、紫菀一名紫蒨、（七見反、和名能之、俗云之○乎○邇○）

〔箋注倭名類聚抄十草〕按説文云、菀茈菀、出漢中房陵、又云、苑所以養禽獸也、二字不同、干祿字書亦云、菀苑、上藥名、下園苑、蓋晉唐人多園苑字作菀、故顏氏正之也、而未見紫菀字作苑者、千金翼方、證類本草亦作紫菀、則此作菀爲是、然本草和名、新撰字鏡皆作苑、蓋皇國古俗通用也、陶弘景云、生布地、花亦紫、本有白色毛、根甚柔細、日華子曰、形似重臺、根作節、紫色潤軟者佳、圖經云、三月內布地生苗葉、其葉三四相連、五月六月內開黃紫白花、結黑子、李時珍曰、其根色紫而柔宛、故名、○中略　按羊蹄訓之、見下文、紫菀葉似羊蹄、在曠野中、故名能之、

〔今古和歌集十物名〕しをに　よみ人しらず

ふりはへていざふるさとの花みんとこしをにほひぞうつろひにける

〔倭字例附録〕しをに

しをには紫菀なり、菀は遠と同音にて、漢音エン、呉音ヲン、合口音舌内韻なる故にヲニとなれり、倭名抄に、紫菀和名之乎邇、また若狹國郷名、遠敷を乎爾不とあり、

〔重修本草綱目啓蒙十一草〕紫菀　ヲ○ニ○ノ○シ○コ○グ○サ○（萬葉集）　ヒ○ツ○ジ○グ○サ○（古歌）　ノ○シ○（和名鈔）　シ○ヲ○ニ○（同上、古今集）　シ○ヲ○ン○（枕草子）

一名萬金茸（錦標供）　還魂草（群芳譜）　紫倩（同上）　貢駒草（江都新志）　追伊遏（村家方）

今別ニコジヲンアル故ニ、此ヲ大ジヲント云、菀ノ字一說ニ鬱ノ音トス、本草備要ニ菀音鬱、藥性纂要ニ菀古鬱字、本草彙言ニ菀ハ鬱也ト云リ、

紫菀ハ人家ニ栽テ花ヲ賞ス、一タビ栽レバ根旁引シテ甚繁殖ス、又野生モ稀レニアリ、葉ハ春舊根ヨリ叢生ス、木香葉ニ似テ小クシテ糙澀ナリ、邊ニ鋸齒アリ、深綠色、一根數莖、秋ニ至テ高サ七八尺、葉互生ス、莖ノ末ニ多ク枝ヲ分チ、單瓣ノ花ヲ開キ、數百傘狀ヲナス、形雞兒腸ノ花ノ如ク淡

女菀

紫色ニシテ微青ヲ帶ビ黄心アリ、此根ヲ採テ藥用トス、一窠ニ燈心ノ大サノ細根數多ク集リ、紫赤色ナリ、濃淡モアリ、藥店ニ賣ルモノニ根色白キアリ、僞ナリ、必ズ折レヤスシ、コレ狗舌草ノ根ナリ、軟ニシテ折レガタク、色紫ナルモノ眞物也、一種メグワント云アリ、苗葉花倶ニオホジワント同クシテ小ナリ、葉ノ長サ五寸、莖高サ三四尺、一種黄花ノ者アリ苗低小葉亦小ナリ、コレヲ黄ジワント云、ワウラントモ云フ、

〔剪花翁傳三六月開花〕早紫菀　花紅藤色也、形小車に似たり、開花六月中旬、方三分、陰地撰ばず、土回塵、肥淡小便、立秋より澆ぐべし、又寒中より春にかけて澆ぐべし、株は多より春芽出し前よし、種登らず、よて根に玉あり、丸く大きなるを撰み植て悉く花出るなり、小玉長玉などは花上りがたし、

〔剪花翁傳四七月開花〕和唐紫菀　花紅藤色、開花七月上旬也、房の形は毛毬のごとくなれど、英ゑまらず、中品とす、育方いづれも同じ、

和紫菀　花一重色紅藤、開花七月中旬也、花枝ともにゑまらず、中品とす、育方いづれもおなじ、

〔剪花翁傳四八月開花〕紺紫菀　花の色濃青し、開花八月中旬より九月迄咲也、花枝ともにゑまらず中品とす、育方同じ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種(略)中紫菀三斤、大和國卅八種(略)中紫菀六斤、(略)下

〔本草和名九草〕女菀、一名白菀、一名織女、一名茆(仁諝音卯)、一名白苑(出注方)、一名如茆(出雜要訣)、和名惠美乃顧、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕女菀　コジワン　トウシワン　ヒメシワン

京師ニハ野生ナシ、種ヲ傳テ栽ユ、東武ニハ自生アリ、葉ハ旋覆花ノ葉ニ似テ小シテ尖ラズ、長サ三寸許リ、濶サ六七分、初ハ地ニ就テ叢生ス、夏ニ至テ莖ヲ抽ルコト高サ二三尺、其葉互生ス、花ハ

莖頭ニアツマリテ菅花ノ如ニシテ小ナリ、白色黄蘂花罷テ苗枯ル、旁ニ根蔓ヒロガリテ、苗多ク生ルコト旋覆花ノ如シ、

〔廣益地錦抄六〕白苑　宿根より春生、葉はおをんよりみじかく、よこへ少ひろし、初生地に敷、莖出て五六尺迄にのび立、花はおをんのごとくにて白し、おをんと同時にひらくる草也、植てながめ有、又一種小おをんと云草あり、花形て小りん白し、草立葉共におをんのごとくにて小草なり、二尺ばかりのび立、花壇にうへておほらし、宿根より春生、

金盞草

〔多識編二隰草〕金盞草、今案比米加左加豆岐、俗稱金盞花、

〔大和本草花草七〕金盞花　キンセン花ナリ、花金紅色、八月ニ子ヲマキテ臘月ヨリ花ヒラキ、春尤盛ナリ、四時相ツヾグ、故又常春花ト云、本草及諸書ニ出タリ、春花最ヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕金盞草　キンセンクハ　トコナツバナ　フダンバナ　トキシラズ　ケイセイクハン加州　アリヤケ勢州　コガネグサ　一名常春花汝南圃史　長春菊花疏　回回菊三才圖繪　金盞兒野菜譜　髙苣花蘭生八箋、果部高苣ニモ金盞花ノ名アルコト、秘傳花鏡ニ見エタリ、

家ニ栽テ瓶花ニ供ス、葉細長ニシテ尖ラズ、鼠麴草ノ葉ニ似テ、大ニシテ白色ヲ帶ブ、初メ地ニ就テ叢生ス、取テ食料ニ供ス、春月莖ヲ抽ブ、高サ六七寸、枝頭ゴトニ花ヲ開キ、久シク相續グ、形單瓣ノ菊花ニ似テ小タ正開セズ、常ニ盞子樣ヲナス、紅黄色赤淡黄色ノ者アリ、花後實ヲ結ブ、其形屈曲シテ蟲ノ狀ニ似タリ、蘇頌變生一小蟲ト云ハ非ナルコト時珍辨ゼリ、本邦ニテ和名金錢花ト云ハ誤リナリ、唐山ニテ錢ト云ハ滿開シタル者ヲ云、金盞草ノ花ハ半開キニシテ盞ノ如シ、故ニ金盞花ノ名アリ、牛時花旋覆花ハ正ク開ク、故ニ金錢花ノ名アリ、

〔剪花翁傳二三月開花〕金仙花　又金盞花、色赤黄也、常の如くに秋の彼岸に下種すれば、開花三月中旬より四月中旬まであり、方日向、地一分濕、土えらばず、肥淡小便下種布肥して蒔べし、花までに

淡小便五六度洩ぐべし、五六月に爲ば、多より春にかけて咲也、又七月に爲ば、いづれ秋の彼岸爲と同時に咲也、故に時まらずの名あり、

〔本草和名 十一草〕狗舌草、唐、

〔和爾雅 七草木〕狗舌草

〔大和本草 九草〕鵝腸草 倭名ナリ、鷺骨ノシンドニ立タルヲ治ス、スリクダキテ汁ヲノムベシ、莖高キコト二尺許、葉モ花モ似金盞草、葉ニ白毛アリ、三月開黄花、近道澤中處々多シ、或曰、是本草二十七卷所載東風菜ナラント云、本草ニ似杏葉ト云ハ與此異リ、然ドモ似杏葉面長トアレバ是ナラン、或曰、是本草鵝腸草下ニ載タル狗舌草也ト、然ドモ葉ノ狀花ノ色與此不同、又一種與此相似テ枝多キ物アリ、ウタナニハ枝ナシ、別ツベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕狗舌草 フデサハギク江戸 ウグサ泉州 ウバナ サハヲグルマ大和本草 ナハジサ正誤 ウシノシタ ナハモタカウ サハギク サハグルマ江戸花戸 野シヲン カサブク チヤウト紀州

骨硬ニコノ自然汁ヲ飲メバ効アリト云、故ニ鵝腸ダナ、或ハウバナノ名アリ、池澤溝渠邊ニ生ズ、水草ナリ、葉ハ萵苣葉ニ似テ厚ク、深緑色ニシテ長キ白毛多シ、初ハ地ニ就テ叢生ス、春末圓莖ヲ抽ブ、高サ二三尺、中空ニシテ外ニ白毛多シ、小葉互生シ、莖頭ニ多ク枝ヲ分チ花ヲ開ク、黄瓣黄心、形チ旋覆ノ花ノ如ク、大サ錢ノ如シ、後白絮ヲ爲シテ飛ブ、其根形紫菀根ニ似テ白色、藥肆ニテ紫菀ニ僞ル、一種千葉ノ者ヲ九輪草江戸花戸スイバチ、シノビダルマ江戸園家ト云、又一種山中ニ生ズルアリ、苗小ニシテ白毛ナシ、花ハ單瓣ナリ、又一種木曾和田峠淺間山、及加州ニハ單瓣紅花ナルモノアリ、加州方言ヤマダイトウト云、

〔武江産物志 藥草〕井ノ頭邊ノ産 狗舌草 德川村

狼把草

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕狼把草　田ウコギ 城州　ヤハズ 江州　ギシギシ 豊州、羊蹄ニモギシギシノ名アリ　カラスヤ 仙臺ニテ食用トス　カハデナ 尾州、同名アリ、　タウコン 豫州　一名權 爾雅　烏階 同上　烏杷 爾雅注

狼杷 爾雅疏　秋杷草 陳藏器註

水旁下濕ノ地ニ多シ、三月子生ズ、初生ハ蓼秧ノ如シ、長ズレバ方莖ニシテ細長、葉五箇(本二ツ末三ツ)排生シテ一葉ヲナス、邊ニアラキ鋸齒アリ、節ニ對シテ生ズ、莖葉共ニ綠色淺シ、秋ニ至リ苗高サ二三尺、枝ノ梢ゴトニ黃花ヲ開ク、鬼鍼草(センダングサ)ノ花ニ似テ、心大ニシテ瓣更ニ小シ、花謝シテ數十刺毬ヲ成ス、鬼針草刺ヨリ短ク、濶クシテ端ニYヲ分チ、聚リテ栗毬ノ如シ、若シ人衣ニ觸レバ粘著シテ脫シガタシ、實熟シテ根枯ル、

タカラカウ

〔大和本草 九雜草〕タカラカウ　フキノ葉ニ似タリ、山澗溼地ニ生ズ、野人其葉ヲホシテ、タバコノ如ク烟ヲスヽフ、咳嗽ヲ治スト云、一種山フキト云草山ニアリ、タカラカウニ似タリ、秋花サク棣棠花ニハアラズ、又ツハニモアラズ、棣棠モツハモ山フキト云、同名異物ナリ、

鱧腸

〔本草和名 九草〕鱧腸(仁諝音禮) 一名蓮子草(出蘇敬注) 和名宇末岐多之、

〔倭名類聚抄 二十草〕鱧腸草　本草云、鱧腸草(鱧音禮、和名宇末木太之)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注鱧腸云、苗似旋復、一名蓮子草、所在坑渠閒有之、圖經云、此有二種、一種葉似柳而光澤、莖似馬齒莧、高一二尺許、花細而白、其實若小蓮房、蘇恭云、苗似旋復者是也、一種苗梗枯瘦、頗似蓮花而黃色、實亦作房而圓、南人謂之連翹者、二種摘其苗、皆有汁出、須臾而黑、時珍云、旱蓮有二種、一種苗似旋覆而花白細者、是鱧腸、一種花黃紫而結房如蓮房者、乃是小蓮翹也、又曰、鱧烏魚也、其腹亦烏、此草柔莖斷之有墨汁出、故俗呼墨菜、

〔多識編 二隰草〕鱧腸、宇末岐多之、今案多多良比、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕鱧腸　タコラビ　タカサブラフ　ウナギツカミ 若州　クナギコロシ

鬼針草

同上　書經三稜草和方三物圖考、水香賣ル　サブロタ江戸　タウクゲ阿州　タゴマ雲州　イタチ

ノヒトモトグサ佐州　ウナギグレ　イタチグサ　一名鱧腸蒸附類性　墨斗草正字　玄英本草

黒漆子日用本草　住血草備急大全　斷血草八閩志　草血竭植物名實圖考　旦方草醫林纂要　耐驚菜救荒本草

稻子地ニアリテ春末夏初自生ス、蘇頌二月ニ採ト云ハ誤ナリ、此草路傍溝瀆ノ側ニ多シ、水草ニ非ズ、苗高サ二三尺、葉旋覆花葉ニ似テ、小ニシテ厚ク澁毛アリ、枝葉共ニ對生ス、夏月枝頂ゴトニ花ヲ生ズ、瓣蕊白色、中心大ニシテ白色、花後實熟シテ苗根共ニ枯ル、生ノ時葉ヲ摘メバ便チ黒色ニ變ズ、故ニ墨ヲキリ、ツノマ、字ヲ書ケバ、其色淺黒也、故ニ鹿山ニテ墨斗草ト云、墨斗ハヤタテナリ、然レドモ一種僅ニ一二葉ニスギズ、衣服ニ爛草ノヤニノ著タルニ、鱧腸ノ生葉ヲモミテ揩フタレバ能脱ス、又一種大葉ノモノアリ、ヌマダイコント呼ブ、水草ナリ、溪溝流水中ニ生ズ、苗高サ四五尺、葉ノ形チ瀰大ニシテ鋸齒アリ、蓬蒿葉ニ似テ毛ナシ、兩兩相對ス、花實ノ形チタカサブロウニ異ナラズ、タヾ莖ニ墨汁ナシ、

〔採藥使記武州中〕重康曰、江都王子邊ニ旱蓮草ヲ多ク出ス、土人是ヲトリテ黒燒トシ、髪ノ兀ゲタルニ胡麻ノ油ニテ解キ付ル、ロク髪生ズト云フ、

先生按ズルニ、此草江東所々ニアリ、俗名タクラビ共、タカサブラウトモ、書經三稜草トモ、漢名又鱧腸草トモ云フ、

〔武江產物志野菜〕隨地有之　鱧腸

〔多識編二草部〕鬼針草今案於仁波利、

〔大和本草九草〕鬼鍼草　其實似針似鉄、能著人衣、其葉似棟葉、其花黄莖方也、初生ズル時蓼ノ如シ、本草濕草ニ載タリ、虎耳草ニハアラズ、

〔重修本草綱目啓蒙十二濕草〕鬼鍼草　センダングサ　キツネバリ備後　カラスバリ奥州　石クサ

越後 オニパリ キツネノヤ キツネノヤリ ハナミグサ ヌスビト播州、衣服ニ實ノ著ヲモノナ、總テヌスヒト、云、イト キツネノハリ同上 モノツキ長州 ヲニノヤ勢州 モノグルヒ豐前 シロベトモ云フ、プツカミ勢州 ヤブヌスビト ヌスビトノハリ上共同

原野ニ甚多シ、宿子地ニ在リテ春自ラ生ズ、方莖葉ハ楝葉センダンノニ似テ毛アリ、枝葉トモニ對生ス、九月ニ至リ、枝梢ゴトニ花ヲ開ク、五瓣淡黄色、大サ四五分、ソノ蒂綠色、形常十八カウゾリナノ花蒂ノ如シ、花終レバ蒂折キ、五分許ノ細刺多ク毬ヲナシテ、栗ノ毬ノ如シ、是其實ノ熟スルナリ、刺ノ末ゴトニ倒叉アリ、若シ衣服ニ觸レバ、粘著シテ拔去ガタシ、實熟シテ苗根倶ニ枯ル、又一種大葉ナルモノアリ、ハタウコギト云、又一種小葉ナルモノアリ、

增、天保年間、蠻種ノ鬼鍼草舶來ス、蠻名ドルレクンプルト云、春月種ヲ下シテ、苗ヲ生ズ、方莖ニシテ高サ二三尺、ソノ節紫色ヲ帶ブ、葉莖ニ對生ス、形尋常ノ鬼鍼草ニ似テ、悉ク三葉ニシテ毛茸ナシ、夏月葉間ニ枝ヲ分チ、苞ヲ結ビ花ヲ開ク、五瓣ニシテ白色、大サ四分許、中ニ黄蘂アリ、花後實ヲ結ブ、長サ四分許、末ニ岐アリ、コレモ衣服ニ著ク、又秋種ヲ下スモノハ、冬ヲ經テ春ニ至テ茂盛ス、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　鬼針カヒニ草

項王草

〔和漢三才圖會九十六 蔓草〕項王カウワウ草ソウ　俗稱本名未詳

按項王草葉似賞波丁子葉、開單黄花、結小莢、宿根不生、當年下種卽開花、自四月至十月有花、賞波丁子出於蔓草、

千里及

〔重修本草綱目啓蒙十五 蔓草〕千里及　詳ナラズ　一名千里急〇泉南雜志

增、ハマギグト呼モノアリ、暖國ノ海濱ニ生ズ、蔓長サ三四尺、節ゴトニ根ヲ生ジテ沙上ニ延布ス、葉互生ス、長サ一寸幅五六分ニシテ、菊葉ニ似テ厚ク、毛茸アリテ糙澀ス、邊ニ鋸齒アリテ菊葉ノ缺刻アルニ異ナリ、秋ニ至テ葉間ゴトニ小黄花ヲ開ク、實ハ結バズ、コレ卽千里及ナリ、琉球ニテ、

ヲルギク一名カラギクヅルト云、琉球產物志ニ見ヘタリ、琉球產物志ハ明和庚寅ノ歳、薩州重豪公ヨリ、琉球大島ノ產物千餘品ヲ、東武ノ侍醫坂上氏ニ賜リシヲ圖スルノ書ナリ、

〔新撰字鏡 草〕白朮(乎介良)

〔本草和名 六草〕朮、一名山薊、(仁諝音計)一名山薑、一名山連、白朮、赤朮、(陶景注云、朮有二種、)一名山精、(出抱朴子)一名山芥、一名蘇、(已上二名出釋藥性)一名地脈、(共出大清經)或種紫芝、(出神仙服餌方)和名乎介良、

〔倭名類聚抄 二十草〕朮 爾雅注云、朮(音術、和名乎介良)似薊生山中、故亦名山薊也、

〔箋注倭名類聚抄 二十草〕爾雅、朮山薊、郭注、今朮似薊而生山中、此所引蓋舊注、郭依之也、本草陶注云、朮乃有兩種、白朮葉大有毛而作椏、根甜而少膏、赤朮葉細無椏、根小苦而多膏、圖經云、春生苗青色無椏、莖作蒿幹狀青赤色、長三二尺以來、夏開花紫碧色、亦似刺薊花、或有黄白花者、入伏後結子、至秋而苗枯、根似薑而傍有細根、皮黑心黄白色、中有膏液紫色、又云、今白朮生高山崗上、葉葉相對、上有毛、方莖、莖端生花、淡紫碧紅數色、根作椏生、

〔八雲御抄 三上〕朮　うけらが花(むまし)　さきてひらけぬ物也　是おけらといふ藥也

〔藻鹽草 八草〕白朮
うけらが花(むましのにあるさきてひらけぬ物也、歌にもひらけぬよしをよめり、又色にいでめやともよめり、又いこよ濱、又あまが濱にしよめり、あれどもけら也、古今に三首とよめるし、朮三四首あるも、(下略))　うき草(ひの木を云と云説)

〔古今要覽稿 草木〕をけら　白朮

ヲケラの物に見へしは、出雲風土記を始とし、又ウケラともいふ(萬葉集○中略)赤白二種共に、山中におのれと生出しものよろしきよし、大同類聚方に見へたれど、今の本は後世者僞撰なるべければ、いまだたしかに證となしがたし、されども此もの美濃國に產せしは、さらにもいはず、出雲國意宇郡、島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、飯石郡等に產し、(出雲風土記)また山城、大和、尾張、三河、駿河、安房等、凡三十箇

國より貢せしに、延喜典藥寮式武藏國よりは奉らず、されど萬葉集にむさしの、うけらがはなとよみ、今も此國に至て多く、かつ色につなゆめといへる歌の意を按るに、卽今の白花のものとしらる、また稀に赤花のものもあり、アカヲケラといふ、〇中略續多識編たゞし日本書紀以下延喜式等、白朮をあげて、蒼朮をのせず、是によりて考ふれば、當時いまだ蒼朮の名を立られざりしにや、

〔大和本草草藥六〕白朮蒼朮〇中略　蒼朮ヲキザンデ燒ケバ、邪氣ト惡臭ヲ去リ、疫氣ヲ除ク、常ニタクベシ、爲細末、糊ニ和シ引ノベテ大線香トシ、陰乾シ貯ベシ、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕蒼朮　赤朮　仙朮　山薊　山精

本綱昔人止稱朮不分蒼白、自宋以來始分之、〇中略

按中華之二朮一類二種自明也、倭之二朮一物而宿根如老薑蒼色者爲蒼朮、嫩根白色者爲白朮、然藥肆皆誤以舊根稱白朮、以嫩根稱蒼朮、或蒼白相混不可不擇、其苗高一二尺、一朶三葉、葉末鋸齒而有毛、四五月開花靑色、秋結子大如小豆、蓋生山中者葉硬有微刺、栽人家者葉軟無刺、其葉及根形香氣、和漢相似而花色異、且白朮根形不似鼓槌、然唯似所謂雲頭朮者耳、出備後三原者良、伊豫今治次之、武州江戶、藝州廣島、奧州仙臺者又次之、

白朮　楊抱音孚　山薊　馬薊　山薑　山連　抱薊　吃力伽西域　和名乎介良〇中略

按唐白朮多如鼓槌者爲佳、近年有川白朮者卽是削朮而所切片者不佳、蓋古倭亦不分二朮、一稱乎介良、〇中略京師五條天神每除夜群集、祈除疫、社前有賣白朮者、皆求之去焉、本草言、歲旦服蒼朮之事與此合、

〔物類品隲草三〕白朮　和名ヲケラ、上古蒼白朮ヲ分タズ、後世分之、弘景曰、白朮葉大有毛而作椏、根甜而少膏、赤朮葉細無毛、根小苦而多膏ト、此說二朮ノ形狀ヲ說コト甚明ナリ、然ルニ東璧三五叉ノ物ヲ、蒼朮トスルハ大ナル誤ナリ、白朮處處山中ニ產スルモノ、葉五叉ノモノアリ、三叉ノモノアリ、三叉ノモノハア

リ、多ハ花白色又紅花ノモノアリ、皆下品ナリ、漢産上品、享保中種子ヲ傳フ、葉五椏ニシテ毛アリ、形蒼肥大、花紅色ニシテ大薊花ノゴトク、根佛掌薯ニ似タリ、此物實ヲ植テ能ク生ズ、又根ヲ切テ植レバ盡ク芽ヲ生ズ、一兩年ニシテ掘取ベシ、數年ヲ經タルモノ重サ數斤ニ至ル、

蒼朮　一名赤朮、是亦處處ニ産ス、葉ニ椏ナク、花白色又紅花ノモノアリ、皆下品ナリ、漢種上品、享保中種子ヲ傳フ、大抵和産ノモノニ似タリ、嫩葉ニハ綿ノゴトキモノアリ、花ハ白色ニシテ根ノ味香烈ナリ、此物實ヲ植テ生ジガタシ、根ヲ分ツコト、白朮ノゴトクニシテ長ジ易シ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕朮　白朮　ヲケラ延喜式　ウケラ　ウケラガハナ古歌　一名白大壽輟耕　仙　沙色條根村家方　增、一名天薊山草

蒼朮　ヲケラ　アキクサ　エヤミグサ　アカヲケラ　ヲレモカツ諸國中名多シ　一名茅君寶　馬薊綱目　天精醫學入門　○中略

和産ノ蒼朮、春初出ノ芽ニ白毛多クシテ綿ヲ被ルガ如シ、稍長ズレバ毛ヲ見ズ、苗高サ二三尺、一根數莖、莖ノ形硬ニシテ厚硬深緑色、邊ニ細刺アリ、三葉ニシテ胡枝子葉ノ如クナルモノアリ、五葉ニシテ月季花葉ノ如クナルモノアリ、皆丘生ス、ソノ三葉ノ者ハ、稍ニシテハ變ジテ一葉トナリ、ソノ五葉ノ者ハ、稍ニシテハ變ジテ三葉或ハ一葉トナル、秋月枝頂ニ花ヲ開ク、形薊花ニ似タリ、白色ノモノ多ク紅色ノモノ少シ、

和産ノ白朮ハ、蒼朮ヨリ苗長大ナリ、葉モ大ニシテ薄ク軟ニ、色モ淺シ、三葉或ハ一葉ナリ、花ハ白色、ソノ根肥大ニシテ拳ノ如シ、世ニ天目白朮又茶椀白朮ト云、此品藥舖ニ出デズ、市中ニ貨ルトコロノ和蒼朮和白朮ハ、皆徹シテ蒼朮ト爲シ用ベシ、舶來二朮倶ニアリ、白朮ノ中ニ如意手ト呼モノ、漢名雲頭朮、又狗頭朮鷄腿朮アリ、皆上品ナリ、此三名ミナ形ヲ以テ名ク、片白朮アリ、肥根ヲ截開テ曝乾シタルモノナリ、

〔草木育種後編下蘭品〕白朮本草　和名うけら、眞蘭　漢種延享四卯年四月、唐山より種子四合を獻せし、官より翁に賜はり是栽させ、後官圃に栽、今いふ種白朮これなり、春芽を生じ夏紅花あり、秋月根を掘り大なるを藥となし、小なるは種となし、又圃に栽べし、早春根を分け畦へ栽るもよし、養を用ひず、年久しくして掘るもの上品なり、一種天目白朮といふものあり、上品なり、家翁○阿部喜任父　武州川越より官圃に獻せしものなり、これも藥用によし、

蒼朮本草　享保年中漢種來りて、今官圃に栽ゆ、培養の法白朮とおなじ、

〔日本書紀二十九天武〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏優婆塞益田金鐘於美濃、令煎白朮、因以賜絁綿布、

十一月丙寅、法藏法師金鐘獻白朮煎、

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略白朮、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

古非思家波、素氐毛布良武乎、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾豆奈由米、

和我世故乎、安杼可母伊波武、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、登伎奈伎母能乎、

右九首、○中略七首武藏國歌、

相聞○略未國

安齊可我多、志保悲乃由多爾、於毛敝良婆、宇家良我波奈乃、伊呂爾氐米也母、

〔散木弃謌集十長歌〕百首歌中述懷をよめる

さすがにみよの、はじめより、雲の上には、かよへども、なにはの事も、久かたの、月のかつらし、をられねば、うけらがはなの、咲ながら、ひらけぬことの、いぶせさに、よもの山べに、あくがれて、このもかのもに、たちまじり、うつぶしそめの、あさ衣、○下略

〔年山紀聞四〕うけらが花

是は〇源俊頼長歌 萬葉にうけらが花とよめる歌どもを、ひらけぬと意得られけるなめり、此卷〇萬葉集四にうけらが花とよめる歌、みな色に出るをかりて、其如く色に出などよめり、本草の諸説もゑきながらひらけぬ意見えず、

〔うけらが花序〕此集の名は、さきつとしみやこのやむごとなきわたりより、うし〇千蔭のよみおかれたるうたをまゐらせよと有しに、えりてまゐらせられつる時、花數ならぬうけらさへ、つまるる數におひぬるよしを、よみ出られしより、みづからうけらがはなと、名をおほせられたる也けり〇下略

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 蒼朮 深谷ニモアリ

〔多識編 二 山草〕三七、今案美豆與豆波久佐、又云耶麻宇流志、異名山漆、綱目 金不換、

〔書言字考節用集 六 生植〕三七 サンシチ 俗云、人參三七、藥名、本名山漆、又名金不換、見本草下

〔和漢三才圖會 九十二 山草〕三七 さんしち 山漆 金不換

按三七血分之藥、人皆所識也、又養金魚飼者、死時、採山漆葉入汁於魚口、即活、故魚池傍必植之、無名痛瘡採葉敷之、

〔重修本草綱目啓蒙 七 山草〕三七 一名血見愁 醫學綱目

二種アリ、集解初ニ說トコロノモノハ廣州ノ產ニシテ、他ノ寒地ニハ無シ、故ニ其苗狀ヲ詳ニ著サズ、鄭物理小識ニ言フトコロ、廣西田州、三七、山羊血、妙藥ノ一也、和產未ダ詳ナラズ、此根昔年舶來アリ、今藥舖ニ持傳フルモノ稀ニアリ、舊陳久ニシテ蛀損多シ、ソノ形甚ダ節參ニ似タリ、長サ一二寸、粗アリ細アリ、氣味甘苦、時珍說トコロ如老乾地黃有節、味微甘而苦、頗似人參之味ト云フ文ニ符ス、ソノ中稀ニ直條ナルモノアリ、圓根ナルモノアリ、ソノ直根ナルモノハ、今渡ルトコロノ廣東人參ニ少シ異ナレドモ、止血ノ功同ジ、ソノ廣東人參ノ蘆頭ニ節アリテ、甚節參ニ似テ

細シ、藥舗ニ廣東ノ蘆頭ト云卽古渡三七ノ細キ者ト形狀異ナラズ、又古渡三七ノ中形粗ナルモノアリ、是卽竹節三七ナリ、唐山ニハ直根ニ附タル蘆頭ニ非ズシテ、別ニ一種竹節ナルモノモアリ、本經逢原ニ廣產形如人參者、是有節者非ト云、時珍ハ有節トノミ言テ直根ノコトヲ言ハズ、是竹節三七ナリ、

集解ノ末ニ、近傳一種草ト云以下ハ、今世上ニ傳ヘ栽ヘ、俗ニモ三七ト呼ブ草ナリ、雲州ニテハチドメト呼ビ、肥前ニテハヲランダグサト呼ブ、此草慶長年中ニ始メテ種ヲ移シ來ルト云、今ハ民家ニ甚多シ、形狀小薊(アザミ)ニ似テ刺ナシ、春初出ノ葉ハ深紫色ナリ、長ズレバ面綠色背紫色、秋ニ至リ莖高サ五六尺、梢間ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、形小薊花ニ似テ黃色亦刺ナシ、ソノ根年ヲ經テ枯レズ、最繁衍シヤスシ、血ヲ治スルノ効廣三七ニ同ジ、故ニ條ヲ同ジクスルナリ、

水前草

〔物類品隲三草〕見腫消　和名スイゼンサウ、蘇頌曰、生戎州、春生苗、葉莖紫、高一二尺、葉似桑而光、面靑紫赤色ト云モノ是ナリ、形頗三七ニ似タリ、葉背深紫色、冬ニ至テ小白花ヲ開ク、然ドモ寒ヲ畏ル故、花開得ズシテ凋ム、實ヲ結バズ、春夏ノ間莖ヲ折テ插バ能生ズ、蠻種己卯歲始テ東都ニ種ヲ傳フ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕見腫消　詳ナラズ

水前草ニ充ル說ハ穩ナラズ、水前草ハ一名ハルタマ、紀州本蠻國ヨリ來ル、葉ハ細長クシテ鋸齒アリ、南五味子(サネカヅラ)葉ニ似テ背紫色、此葉ヲ採リ熱湯中ニ入レバ、柔滑ニシテ水前寺苔ノ如シ、故ニ水前草ト名ク、

鬼督郵

〔本草和名七草〕鬼督郵、一名獨搖草、一名餘毒草、出雜注方、一名悶狗、出釋藥性、闘作闘字、又釋藥、和名乎止乎止之、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕鬼督郵　○ハグマ○カサナ俗名　○トチナ加州　○ユウダチガサ尾州　○ヲ○ニ○ノ○カ○ラ○カ○サ○

敦盛
熊谷

種類多シ、眞ノ鬼督郵ニ充ルモノハ車葉ノハグマ、種樹家ニテ圓葉ノハグマト呼モノ是ナリ、深山ノ幽谷ニアリ、一根一莖直上ス、長サ一尺許、葉ハ枇杷葉ノ形ニ似テ小ク、鋸齒ナク、背ニ毛ナシ、八九葉莖頂ニ對生シテ車輪ノ如シ、ソノ中心ヨリ又一莖ヲ出ス、長サ一尺許、秋ニ至テ穗ヲ成シ、白花ヲ開ク、形蒼朮ノ花ノ甚小ナルガ如シ、長サ七八分、濶サ一二分、末ハ開キテ細鬚ヲ布クコト三四分、花後絮ヲナス、飯帚ノ形ノ如シ、根細長ク一科ニ數多ク生ジ、色黑ク味苦シ、鬚樣ノ威靈仙ノ如シ、一種叡山ハグマアリ、亦深山ニ生ズ、是モカナナト云、一根一莖長三四寸、葉ハ草綿ノ葉ノ如クアラキ切込アリ、六七葉對生シ、中ヨリ莖ヲ出シ、花ヲ開クコト車葉ノ者ト同ジ、只微ク小ナリ、根モ亦同ジ、一種カシハ葉ノハグマアリ、一根一莖長サ一尺許、葉互生ス、形チ槲葉ニ似テ短シ、一種モミヂ葉ノハグマアリ、形チ叡山ハグマニ似テ、葉ハ草綿葉ヨリ缺フカクシテ、モミヂニ似リ、此一種ニモミヂサウト云アリ、葉ノ形同シテ互生ス、一種紫背ノハグマアリ、紀州熊野ニ多シ、又和州深山ニモアリ、葉ハ叡山ハグマノ葉ニ似テ長クシテ厚シ、其肌虎耳草ノ葉ノ如シ、面ハ緑色ニシテ白斑アリ、又紫莖ノモノアリ、背ハ紫色ナリ、其ニ花ハ上ニ同ジ、此等ミナ鬼督郵ノ類ナリ、

又大和本草ノ圖ニクマガヘサウヲ鬼督郵ニ當ル説ヲ載ス、集解保昇ノ説ニ如傘ト云、根横生無鬚ト云ノ文ニ據ルナリ、此説モ亦近シ、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　鬼督郵一種アスカ山、大宮谷ニモアリ、

〔大和本草花七草〕敦盛　葉ハエビネニ似テ廣シ、宿根ヨリ生ズ、花紫ニシテホロカケタルガ如シ、陰地ヲ好ミ日ヲ畏ル、植ヤスシ、

熊谷　葉ハフキノ葉ノ形ニシテ小也、エビネノ葉ノ如クシハアリ、葉ニ少光アリ、葉ノ高八九寸、梢ニ花一アリ、花ノ大鴨卵ヲ二ニワリタルヨリ猶大ニシテ、形ハハマグリヲ二ニヒラキタルガ

如シ、色白シ或黄ナリ、心ハハマグリノ肉ノ如クニシテ黄也、花ウルハシ、見ツベシ、深山ニアリ、或曰敦盛熊谷一物ナリ、花ノ紫ナルヲ爲敦盛、花淡白ヲ爲熊谷、共ニ枯ヤスシ、

〔大和本草諸品圖上〕敦盛、倭名也、或曰、是鬼督郵ナリト、未知是否、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕鬼督郵〈〇中略〉

増、クマガヘサウ、又ホテイサウトモ云、好テ樹陰或ハ竹林中ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一莖直上スルコト六七寸ニシテ、二葉ヲ雙生ス、形欵冬ノ葉ニ似テ堅ニ皺多シ、二葉ノ正中ヨリ別ニ莖ヲ生ジテ花ヲ開ク、大サ雞卵ノ如ク正中ニ蕋アリ、形母衣ニ似テ淡紫色、中ニ深紫色ノ點アリ、甚ダ異形ニシテ、比シ象ルベカラズ、根ノ形ハハグマニ同ジ、一種カウモリサウ、一名カニカワホリト云アリ、深山陰地ニ生ズ、高サ二三尺、葉莖頂別ニ莖ヲ分チ、一二寸ノ間ニ六七葉互生シテ車輪ノ如シ、葉ノ形横ニ濶ク、竪ニ短ク蝙蝠ノ羽ヲ張タルガ如シ、又蟹ノ甲ニモ似タリ、秋ニ至リ葉中ヨリ別ニ莖ヲ生ズルコト、一尺許ニシテ花ヲ開ク、形色共ニハグマニ同クシテ大ナリ、又一種サジクサト云アリ、至テ小草ナリ、山中陰地ニ生ズ、地ニ貼テ生ズ、葉ノ大サ五六分、匙ノ形ニ似タリ、秋ニ至リ葉中ヨリ莖ヲ抽テ、花ヲ開クコト、ハグマニ似テ小ナリ、

蘭草

〔本草和名七草〕蘭草、一名水香、一名煎澤草、一名蘭香、一名都梁香草、〈已上三名出陶景注〉一名蘭澤香草、〈出蘇敬注〉一名蕙薰、和名布知波加末、

〔段注説文解字一下艸〕蘭、香艸也、〈易曰、其臭如蘭、左傳曰、蘭有國香、說者謂似澤蘭也、〉从艸闌聲、〈落干切、十四部、〉

〔倭名類聚抄二十草〕蘭　兼名苑云、蘭一名蕙、〈蘭惠二音、和名本草云、布知波賀萬、新撰萬葉集別用藤袴二字、〉

〔箋注倭名類聚抄十草〕按蘭即都梁香、證類本草白字上品載之、蕙即零陵香、證類本草中品引今附載之、非一草可見、然通志略云、蘭即蕙、引諸書證蘭蕙一物、與所引兼名苑合、李時珍曰、鄭樵說亦是臆見、殊欠分明、但蘭草蕙草乃一類二種耳、又按本草和名云、蘭草一名蕙薰、不載出典、疑引兼名苑、傳

蘭、偶脫也、略、中鄭風溱洧箋、方秉蕳兮、毛傳蕳蘭也、正義引義疏云、蕳卽蘭、香草也、莖葉似澤蘭、廣而長節、藏衣著書中辟白魚、陸疏廣要云、蘭草生澤畔、葉光潤、陰小紫、別本注云、葉似馬蘭、故名蘭草、蜀本本草云、蘭草葉似澤蘭、尖長有岐、花紅白色而香、生下濕地、輔仁曰、布知波加摩、允當、

〔類聚名義抄八〕蘭 音闌 フヂバカマ アララギ

〔和爾雅七草木〕蘭草(フヂバカマ) 蘭、水香、都梁、燕尾香、孩兒菊、香草、省頭草、並同、

〔東雅十五草卉〕蘭フヂバカマ 略〇中 漢にして古時蘭といひしものは、即此にしてフヂバカマといふものなり、今俗に蘭の字の音をもて呼び、ランといふ者は、漢にして蘭花と云ひて、蘭草とは異なる物也、其說の如きは、李東璧本草に詳に見えたり、フヂバカマといふ義不詳、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其瓣の筩をなせしが、袴に似たる所あれば、藤袴とはいひしなるべし、(昔俗に裏の袴などあるが如し)

〔古今要覽稿草木〕ふぢばかま らに 蘭

ふぢばかま一名らには、漢名を蘭、一名蕑、一名蘭草、一名香蘭、一名王者香、一名國香、一名秋蘭、一名蘭澤、一名大澤蘭、一名䕡蘭、一名香水蘭、一名燕尾香、一名紫菊、一名孩兒菊、一名待女花といふ、此草古より諸國に野生多し、春宿根より苗を生じ叢をなし、夏を經て莖高さ三五尺に至り、秋をむかへて每枝傘狀をなし、細小なる淡紫花を攅簇す、此即劉熏がいはゆる孩兒菊花如紫茸、叢苗細碎(蘭譜)といへるものなり、又一種蘇敬注に、蘭澤八月花白(證類本草引圖經本草)といへるものも、稀に野生ありといへども、保昇のいはゆる花紅白色(證類本草引蜀本圖經)のものは、いまだこれある事をきかず、其葉は山蘭に似て、綠色にして末尖り、細鋸齒あり、又岐ありて燕尾の如きものも、一莖の內には多く相交りて、さらに山蘭様の物のみにあらず、此葉生なる時は香氣薄けれど、莖葉を連ねとりて、室中に掛をき、日をへて乾枯すれば、その香氣殊によし、さて皇朝にて蘭の物にみへたるは、忍坂大中姬

の一根（ヒトモト）蘭を採て、闘鷄國造に與へられしを始とし、（日本紀）これを歌によみて秋の七種の數に入しハ、山上憶良を始とし、（萬葉集）それを字音にてらにと唱へしハ紫式部を始とす、（源氏物語）凡西土にてハ宋以降ハ蘭花を尊みて、右の蘭とせしより、此蘭世に隱れて絶てしるものなかりしを、明に至り時珍の本草綱目を撰びし時、離騷辨證訂蘭說等によりて、さらに蘭花を以て別種とし、此蘭を以て古の蘭とせしハ信ずべし、されど我朝にてハさせる混同もなく、允恭天皇の比より今に至りて、蘭のふぢばかまなるハ、實に人心の正直仰ぐべく尊むべし、〇中略

釋名

ふぢばかま（日本紀、萬葉集、本草和名、）東雅云、ふぢばかまいふ義詳ならず、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其蘂の筒をなせしが、袴に似たる所あれバ、なを（俗に藁の蘂なるがごとし）藤袴とはいひしなるべし、　らに（源氏物語、らには蘭の呉音なり、）　蘭（易繫辭、禮記、家語、左傳、說文、開寶本草云、葉似二馬蘭一、故名二蘭草一、また諸儒の説上文にみへたり、）　蕳（詩經、陸璣疏云、鄭俗三月男女秉二蘭于水際一、以自祓除、董蘭以闌レ之、蘭以闌レ之、其義一也、）　蘭草（神農本經、名義蘭に同じ、）　香蘭（同上、此蘭芳香、故に名づく、）　王者香（同上）　國香（左傳、蘭品云、眞蘭假覽以二王者香一、國香一、爲二蘭之一名一、）　秋蘭（楚辭、文選云、蘭以レ秋芳、）　蘭澤（靈樞、本草引二唐本草一、本草拾遺云、蘭草五六月採陰乾、婦人和レ油澤レ頭、故云二蘭澤一、）　大澤蘭（本草綱目引二衍義一、此蘭澤蘭に似て其葉大なり、故に大澤蘭と名づく、）　幽蘭（離騷、思玄賦、幽蘭賦、楚辭九章云、蘭茝幽而獨芳、また曹子建七啓云、蕙以二幽若一、流二芳肆市一、注、若杜若也、若稱二幽若一、蘭曰二幽蘭一也、）　燕尾香（同上、馬志云、其葉有レ岐、俗呼二燕尾香一、）　紫菊（菊譜、正に馬蘭と同名、）　孩兒菊（同上、澤蘭また孩兒菊と名づく、時珍云、小兒喜佩之、故有二孩兒菊之名一也、又引二訂圖經一古之蘭草、即今之俗名二孩兒菊一名、）　侍女花（格致鏡原引二採蘭雜志一、昭代叢書引二淮南子一云、男子樹蘭美而不レ芳、採蘭雜志云、蘭名二侍女子一、閨中種二蘭香一、故名二侍女花一、）

〔大和本草　芳草入〕眞蘭　和名フヂバカマ、又アラヽギトモ云、古歌ニラニトモヨメリ、八雲抄ニモ蘭ヲフヂバカマラニト云ト書玉フ、葉ハ麻ニ似テ兩岐アリ香ヨシ、ホシテ彌カウバシ、是眞蘭也、野ニアリ、秋紫白花ヲ開ク、古歌ニフヂバカマヲ多クヨメリ、國信ノ歌ニ、秋ノ野ニムラ〳〵立ル蘭ムラサキ深ク誰カ染ケン、若葉ハユピキテ食スベシ、其芳香美味、凡菜ニスグレタリ、試ニ食シテ其香味ヲ知ベシ、嫩葉ヲ採テ佩レ之ト云ヘリ、其性亦好、詩經楚詞ナドニ詠ゼシ蘭是ナリ、上代ハ沈

香檀香龍腦ナド、諸香求ヌ中華、故ニ蘭ヲ甚賞ス、今ノ蘭ト云モノハ、葉ハ大葉ノ麥門ノ如ク、花ノ香ヨキ物也、上代ノ眞蘭ニハアラズ、熊蕃閑覽曰、今人所種如麥門冬者名幽蘭、非眞蘭也、方虚谷曰、因花香郁、故得蘭名也、古人モアヤマツテ、今ノ世俗ニ蘭ト云者ヲ眞蘭トイヘリ、本草綱目詳ニ辨之、眞蘭ノ葉ヲカベニカクレバ、邪氣ヲハラフト云、楚辭ニ所謂幽蘭モ即眞蘭ナレバ、幽蘭モ眞蘭ト一物也、熊蕃閑覽ニ如麥門冬者名幽蘭ト云ハ、世俗ノ誤ヲイヘルナルベシ、澤蘭モ同類異物ナリ、葉ハ蘭ニ似タ鮭ナシ、威ノ葉ノ如シ、水澤ニ多シ、葉ノマハリニ鋸齒アリ、延喜式三十二卷、園韓神祭春日祭雜給料蘭十把トアリ、本朝古モ此眞蘭ヲ用ヒシナルベシ、神僧圖月東海一漚集、筑前州神山移蘭記ニモ、神山ニ蘭多キ事ヲ記セリ、是亦眞蘭ヲ蘭トイヘルナルベシ、蘭草方藥ニ用ズレドモ性好シ、上品ノ芳草ナリ、園圃ニ必ウフベシ、繁茂シ易シ、澤蘭ハ方藥ニ多ク用ユ、香味蘭ニツトレリ、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕蘭草　フヂバカマ古歌　一名不老草本草必讀　醒頭草本草擇注　醒頭香物理小識　孩孫兒[illegible]　秋蘭[illegible]　省頭香[illegible]　肝香本草[illegible]　佩蘭葉[illegible]

野生多シ、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、圓莖ニシテ斑點ナシ、葉節ニ對シテ生ズ、形長クシテ左右ニ枝アリ、故ニ燕尾香ノ名アリ、周圍鋸齒深クシテ香氣多シ、乾セバ香烈シ、夏月簪ニ掛レバ、二旬餘モ香氣アリテ暑臭ヲ避ベシ、六七月ニ至リ莖高サ三四尺、或ハ六七尺、枝ノ末ゴトニ傘ノ如ク、細小花多ク攢リ開ク、淡紫色ナリ、故ニフヂバカマノ名アリ、和歌ニモ詠ズ、

〔延喜式三十二大膳〕園韓神祭雜給料春冬同　蘭十把

春日祭雜給料春秋同　蘭十把

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、〇中略　蘭二把、一升、自正月迄十二月、〇中略　中宮准此、〇中略

漬年料雜菜

蘭葅三斗（料鹽二升四合、楡一升二合、）○中略　右漬秋菜料

〔日本書紀　十三允恭〕二年二月己酉、立忍坂大中姫爲皇后、○中略初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪鷄國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、（汝此云那鼻苔也）且曰、壓乞戸母其蘭一莖焉、（壓乞此云異提、戸母此云覩自）皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、（蠛此云摩愚那岐）時皇后結之意裏、乘馬者辭无禮、卽謂之曰、首也、余不忘矣、是後皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪、以欲殺、爰乞蘭者顙搶地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日、不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓謂稻置、

〔續修東大寺正倉院文書　後集四十〕寫經司解　申錢用事

合所請錢貳仟文　畫

買物合十六種　○中略

蘭十把　直錢八文　○中略

以前、錢壹狀幷買物、顯注如前、以解、

天平十一年八月十一日　史生高屋連赤麻呂　○以下署名略

〔續々修東大寺正倉院文書　四十六帙六萬書〕蘭貳　青大角豆拾把

天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔古今和歌集　四秋〕これさだのみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとにのべをにほはす

ふぢばかまをよみて人につかはしける　つらゆき

やどりせし人の形見か藤ばかま忘られがたきかにほひつゝ

山蘭

〔源氏物語(三十藤袴)〕例よりもしめりたる御氣色、いとらうたげにをかし、かゝるついでにとや思ひよりけん、らにの花のいと面白きをも給へりけるを、みすのつまよりさし入て、是も御らんずべきゆへは有けりとて、とみにもゆるさでもたまへれば、うつたへに思ひもよらでとり給、御袖をひきうごかしたり、

おなじ野の露にやつるゝふぢばかまあはれはかけよかごとばかりも

〔拾遺和歌集(七物名)〕らに　よみ人しらず

秋の野に花てふ花を折つればわびしらにこそ虫もなきけれ

〔續拾遺和歌集(十八雜)〕除目の年の秋、鳥羽殿に美福門院おはしましける比、前栽に蘭のしをれて見えけるを折て、人につかはしける、　皇太后宮大夫俊成

なべて世の色とは見れど蘭わきて露けき宿にも有かな

〔重修本草綱目啓蒙(九芳草)〕蘭草(中略)

山蘭アリ、山野ニ生ズ、葉ハ長クシテ岐ナク、純葉ニ似テ鋸齒深シ、又三尖ニナリテ蘭草葉ノ如キモアリ、ミナ兩對シテ生ジ、莖ニ節アリ、葉ト倶ニ毛茸アリテ香氣少シ、此ヲヒヨドリバナト呼ブ、花ニ白色淡紫色ノ二品アリ、藥ニ蘭葉ヲ用ユルハ此蘭草ノ葉ニシテ、蘭花ノ葉ニ非ザルコト、正誤ニ詳ニ辨ズ、然ルニ綱目以後ノ書、本草必讀、本草原始、ソノ餘諸書ニ皆誤リテ蘭花ノ葉トスル說多シ(中略)

增、山蘭ニ一種葉ニ黄白色ノ斑點多キモノアリ、コノ莖葉ヲ煎ジテ、蝮蛇ノ咬タルヲ洗テ奇効アリ、野人ノ經驗ナリ、阿州山城谷ニテハミグサト云フ、

〔古今要覽稿(草木)〕ひよどりばな　山蘭

ひよどりはな一名やまどりぐさは、漢名を山蘭といふ、近邊山野處々これあり、その莖葉すべて

蘭草に似て、狹長にして、岐なく香なし、秋後花を開く、また蘭草に似て淡紫色、及び白色のもの有、○中略されど皇朝の產は其葉對生にて、西土のものは互生なるを異なりとす、

釋名

ひよどりばな（蘭品、本草啓蒙、此花鵯の來る頃に咲くをもて、俗に此名を命ぜしなり、）　やまどりさう（本草纂要）　山蘭（圖經本草、此草山中に生じて、其葉蘭草と同じ、故に山蘭と名づく、）

〔本草和名九草〕澤蘭（陶景注曰、生澤旁、故以名之、）一名虎蘭、一名龍棗、一名虎蒲、一名蘭澤香、（出蘇敬注）一名水香、（出兼名苑）一名龍求、一名蘭香、（出雜要訣）和名佐波阿良々岐、一名阿加末久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕澤蘭　陶隱居本草注云、澤蘭（和名佐波阿良々木、一云阿加末久佐、）生澤傍、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按蘭有二訓、一則布知波加麻、蘭草是也、一則阿良良岐、蘭蕳草是也、澤蘭生澤旁、葉似蘭草、則當訓佐波布知波加麻、訓佐波阿良良岐者誤、○中略吳普曰、澤蘭生下地水傍、葉如蘭、二月生、香赤節、四葉相値枝節間、蘇敬曰、澤蘭莖方、節紫色、葉似蘭草而不香、圖經云、根紫黑色、如粟根、二月生、苗高二三尺、莖幹青紫色、作四稜、葉生相對、如薄荷、微香、七月開花、帶紫白色、萼通紫色、亦似薄荷花、此與蘭草大抵相類、但蘭草生水傍、葉光潤、根小紫、五六月盛、而澤蘭生水澤中及下溼地、葉尖微有毛、不光潤、方莖紫節、七月八月初採、微辛此爲異耳、

〔多識編二芳草〕澤蘭、左和阿羅羅岐、今案俗稱志呂祠、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕澤蘭　サハアラヽギ（延喜式）　アカマグサ（和名鈔）　サハヒヨドリ　一名醒頭草（提要本草）　虎澤草（典籍便覽）　九畹薬（類纂錄）　小澤蘭（集解時珍說）　千里吉（福州府志）　孀醋（月令廣義）

山中溪澗或ハ池澤ノ傍ニ生ズ、蘭草及山蘭ニ似テ小ナリ、葉モ亦相似テ狹ク小シ、莖微ク方ニシテ毛アリ、苗高サ一二尺、秋ニ至テ花ヲ開ク、形亦相似テ小ク、淡紫色白色ノ二品アリ、古來澤蘭ヲシロチト訓ズルハ穩ナラズ、シロチハ、一名フシグロノコギリサウ、（能州）ムラタチ、（播州）アゼコシ、

雲州ヒトモトグサ、加賀湖邊及ビ水旁ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、方莖葉兩對ス、節紫黑色、葉細長ク、闊サ八分許、長サ三寸許ニシテ末尖レリ、周邊ニ粗キ鋸齒アリ、毛茸ナシ、切レバ香氣アリ、蘭草ノ香ト同カラズ、秋ニ至リ莖三四尺、葉ノ間ゴトニ五瓣ノ小白花ヲ攢簇ス、薄荷花ニ似タリ、根ハ白色方ニシテ長ク旁引ス、故ニシロネト名ケ、雲州ニテアゼコシト呼ブ、其行根ノ止ル所ニ苗ヲ生ズ、根鬚既ニ下レバ行根腐チテ別ノ窠トナル、ソノ巨ナル根ヲ取リ、糖霜ニ煎テ香ノ物トス、又煮テ食ヒ或ハ菹トナシ食フベシ、地筍ノ名ニ合ニ似タレドモ、此草根ノ色白シ、故ニシロネト名ク、蘇頌ノ說ニ、澤蘭ノ根紫黑色ト云ニ合ズ、且此草ハ莖葉ニ毛ナシ、葉尖微有毛不光潤ト云ニ合ザレバ、シロネノ澤蘭ニ非ザルコト知ベシ、シロネハ救荒本草ニ載スル所ノ地瓜兒ニ充ツベシ、又蘭草ニ大澤蘭ノ名アル時ハ、澤蘭モ蘭草ノ狀ノ草ナルコト知ベシ、唐山ニテモシロネヲ澤蘭ニ代用スル故、ソレニ倣テ和ニモシロネヲ用ヒ來ルナリ、又一種シロネノ小者アリ、俗ニナルダヒコト稱ス、山中ニ多ク生ジ、花葉形狀並ニシロネニ同ジ、唯小キヲ異トスル耳、

〔鳩巢文集後四十九〕澤蘭解

六義堂庭群草之中有一種花葉其形似紫菊、其葉稍潤而長、長三尺餘無枝、吾未知爲何花、友人來曰、澤蘭也、世俗所謂富知波加麻是也、余聞之開本草考其註解、則衆說雖不一、而大抵相似、若以朱文公之說觀之、則蓋夫屈原之所愛者乎、然唐本草曰、澤蘭紫色葉似蘭草而不香、陶隱居曰、其葉微香、今觀其花則無香、而觸風則似有遠香、所謂其葉微香乎、古來稱稱香者以蘭爲最、則若斯之微香、果夫屈原之所愛乎、未可知也、然原之所愛、則與衆人可異、其香之微也、庸人不知而原獨知之乎、文公之言豈誣乎哉、且圖經徐州梧州澤蘭、其花葉稍異、則況於異域乎、昔考先羅山〇林弱冠初謁東照大神君、神君問曰、蘭草多品屈原所愛爲何、侍坐者不知之、先考應聲答曰、澤蘭也、神君顧左右曰、年少能記臆焉、是顯其名於公門之始也、今幸種其花不亦幸乎、甲卯享秋

馬蘭

〔多識編二芳草〕馬蘭、今案於保阿羅良岐、異名紫菊、

〔大和本草八芳草〕馬蘭　本草芳草、又救荒本草ニ載タリ、如澤蘭而氣臭、一名紫菊、其花ヒトヘノ菊花ニ似テ紫ナリト、陳藏器イヘリ、其葉蘭ニ似テ大ナル故、馬蘭ト名ヅク、或是ヨメガハギナルベシト云ヘドモ不可然、ヨメガハギハ蘭葉ヨリ小也、馬蘭ハ水溼ノ地ニ生ズト云ヘリ、ヨメガハギハ高下ノ地共ニ生ズ、馬蘭ハ不香、本草ニイヘリ、ヨメガハギハ頗香シ、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕馬蘭　紫菊

按倭有馬蘭者、形狀稍異、高二三尺、莖一尺以上生一葉、似篠葉而大、長一二尺、有光澤叢生、根下有花小出於地上、如菊黃赤色、花葉皆不香、近年自琉球國多來、是萱黃也、見于前蓋本草所謂馬蘭未見之、稱紫菊則當菊之類、此云越前菊、雖稍似、而其越前菊亦名紫衣菊、詳見下編草、三椏三葉略似三七草葉而不澤、背有細紋微帶紫色、而與獲見蘭等之葉大異者也、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕馬蘭　コンキク　一名惡草通志　藍菊秘傳花鏡　竹節草附方　地白根同上　馬蘭菜同上　馬蘭菊烏蘞莓附方　烏韭名物法言

種樹家ニ多クアリ、雞見腸ノギクノ種類ナリ、春舊根ヨリ叢生ス、莖色紫黑、葉雞見腸ノ葉ニ似テ鋸齒深シ、苗高サ二三尺、秋ニ至テ花ヲ開ク、色深紫ニシテ靑ヲ帶ブ、故ニコンキクト云、又白花モアリ、救荒本草ニ馬蘭頭ト云ハ、春ノワカメヲ云フナリ、

木香

〔本草和名六草〕木香、一名蜜香、一名靑木香、出陶景注一名東桑童子、出丹口訣一名千秋、一名千年、一名長生、已上出兼名苑出播磨國、

〔多識編二芳草〕木香、左宇毛久左、又和禮毛加宇、異名蜜香、別錄靑木香、弘景五木香、圖經南木香、綱目

〔大和本草六草藥〕木香　葉ハ皺アリテ、鶴虱及牛蒡ニ似テセバク長シ、其形紫苑葉ノ如シ、莖ノ高サ數尺、黃花ヲ開ク、花ハ菊ニ似タリ、本草ニイヘル形狀ニ同、然レドモ日本ノ產ハ性不好不可用、又靑

木香トモ南木香トモ云、馬兜鈴ヲモ青木香ト云、本草ニ見エタリ、木香ノ狀如枯骨、白クシテ嚙之、黏齒者佳シ、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕木香 略〇中

本綱、木香南番諸國皆有、其根形如枯骨、黏牙者爲良、或馬兜鈴根爲青木香、又呼薔薇根爲木香、愈亂眞矣、〇中略

按木香、本草圖經、三才圖會、草本會編等所載、葉狀異說多、或云葉似羊蹄而長大、或云葉長八九寸、皺軟而有毛、或云葉如牛蒡但狹長、或云葉似絲瓜、未審、故隨本草必讀唯圖其根耳、南番諸國有之、又有出於中華雲南貴州者、多阿蘭陀市舶將來、今有軸木香、株木香二種、以軸爲良、又有倭木香、出於富士、不分明、故不用、

青木香

本綱、青木香乃木香也、然後人呼馬兜鈴根爲青木香、而呼木香爲南木香、略似木香、故用亂木香、宜辨正之、

按倭出青木香、又曰倭木香、然倭無馬兜鈴、故採似蘿藦而有香氣者、爲青木香、蓋此贋之贋者矣、

其草蔓生、皆似蘿藦、而葉有香氣、結子如蘿藦子、其根似自然生山薯、而味苦、出於畿內、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕木香　通名　一名大通綠（綱目釋名、大ノ字誤テ天ニ作ル、）東華童子（[illegible]）增、一名五香（典籍便覽）五木（同上）

舶來ニテ漢渡ト云モノ、實ハ阿蘭陀ノ產ニシテ上品ナリ、唐山ヨリ直ニ渡スモノモ、固ヨリ蠻產ヲ唐山ヘ渡シタルヲ、本邦ヘ持來ルナリ、唐山ノ產ヲ先年渡セシコトアリ、和產ト同ジクシテ土木香ナリ、和ノ木香ハオホグルマト呼ブ、旋覆花ヲヲグルマト云ニ對シテカクイヘリ、（小ナリ、大ナリ、草ニ似）故ニ名ク、種樹家ニテコレヲ大木香又日蓮客ト云フ、世上ニ多ク栽ユ、城州富野邊及ビ丹後綱野ニ多ク栽ヘテ出ス、和產中ニテハ丹後ノ者ヲ上品トス、城州ノ者ヲ下品トス、ソノ葉濶サ五寸許、長サ

二尺許、天名精(ヤブタバコ)葉ノ如ク柔ニシテ皺バミ短毛アリ、淡綠色、冬ハ葉枯レ、春舊根ヨリ叢生ス、夏中心ヨリ莖ヲ抽ルコト七尺許、葉互生ス、秋ニ至テ莖頭ニ花ヲ開ク、旋覆花ニ似テ大キク、莖ニ連リ生ジテ、タカヲカウノ穗ノゴトシ、一花ノ大サ一寸餘、黃瓣黃心ニシテ單葉菊花ノ如シ、此ノ根ヲ和ノ木香ト云、是集解ニ載ルトコロノ土木香也、根ノ形長クシテ牛蒡根ノ如シ、味辛シ、生ノ時香氣アレドモ、乾タトキハアヲタサシ、

〔草木育種後編下藥品〕木香木艸　俗におほぐるまといふ、和蘭にてアラント、ウヲルトルといふ、赤土の肥地に畦を作りて植べし、干鰯糞水を澆ぎてよし、花を插花にすべし、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

靑木香二百七十斤尾張國一百六十斤、相模國八十斤、美濃國卅斤、

〔倭名類聚抄二十草〕○蓍字附中略　文字集略云、蓍音耆、和名佐木久佐、日本紀私記云、福草、草枝枝相値、葉葉相當也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按說文云、蓍艸枝枝相値、葉葉相當、文字集略蓋本於此、爾雅云、遂薚、馬尾、郭璞引廣雅云、馬尾、蔏陸、郭璞又引本草云、別名薚、今關西亦呼為薚、江東為當陸、又玉篇云、蓫、遂薚、馬尾、蔏陸也、薚上同、則知說文蓍即爾雅遂薚、下文所載商陸即是、又佐岐久佐見夫木集曾禰好忠若菜歌、永範卿大嘗會屛風歌、同部氏曰、古事記云、山由理草之本名云佐韋也、山由理草百合也、佐韋佐岐一聲之轉、則佐岐久佐是百合之古名、萬葉集所謂三枝即是也、是草莖梢分三岐著花、故云三枝、○中略或曰、下條薺苨訓佐岐久佐奈、一云美乃波、其佐岐久佐之名與此合、美乃波之名、又與古今集序所載歌云、佐岐久佐乃美都波與都波合、及訓三枝字、則佐岐久佐之為薺苨可證、佐岐久佐譬未詳其究為薺苨、為百合、然為一草之名明矣、疑源君不辨蓍佐岐久佐倶為何物、以日本紀私記福草訓佐岐久佐、又孫氏瑞應圖云、王者有德則福草生、謂佐岐久佐是瑞草、故引在此也、然日本紀福草部、即姓氏錄三枝部、其作福草者、撰鈔者以訓同假借佳字耳、與瑞應圖福草無相涉、其實佐岐久佐

之名、宜在百合若齊苨條、蓋宜與商陸合也、或曰、文字集略以下則是一條、傳寫脫標目耳字也、今本併在草條下、非源君之舊也、然按似不當以其物不詳之佐岐久佐次于蘭菊之上、是說恐非、是、

〔類聚名義抄八〕葛音陽　サキクサ

〔倭訓栞前編十〕さいぐさ　日本紀に福草と書る本義成べし、さきくさともいへり、諸書に三枝をよめるは義訓せしなり、延喜式に、朱草の別名とし、瑞草也といへり、略○中　倭名鈔に齊苨さきくさ、一に云みのはと見えたり、みのは、はつはに同じ、呂氏春秋にも、三葉齊と見ゆ、略○中　萬葉集抄に檜は宮木などにも積み用ゐられて、さいはふ木なれば、さきくさといふよし見えたり、古今集の序に、殿づくりより語り傳へたる說なるべし、顯昭說に、三枝はからすあふぎ也、枝草末葉廣ければ、祝ひによすといへるも、いかゞと覺侍る、

〔新撰姓氏錄左京神別〕三枝部連
額田部湯坐連同祖、顯宗天皇御世、喚集諸氏人等、賜饗醸、于時三莖之草生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造、

〔日本書紀十五顯宗〕三年四月戊辰、置福草部、

〔延喜式二十一治部〕祥瑞　福草朱草別名也、生宗廟中、　右上瑞

〔萬葉集五雜歌〕戀男子名古日歌三首長一首短二首
夕星乃、由布弊爾奈禮婆、伊射禰余登、手乎多豆佐波里、父母毛、表者奈佐我利、三枝之中爾乎禰牟登、愛久、志我可多良倍婆、略○下

〔古今和歌集序〕歌のさまむつなり、略○中　むつにはいはひ、
このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつ葉にとのづくりせり、といへるなるべし、

〔令義解二神祇〕凡略○中　孟夏略○中　三枝祭謂、率川社祭也、以三枝花飾酒罇祭、故曰三枝也、

〔大倭神社註進狀〕養老令曰、孟夏三枝祭、(中略)和名佐井草、古事記山由理草之本名、云佐韋草也、或曰鳥羽、

〔冠辭考四佐〕さきくさの　なか　みつ

三枝の事は神祇令に、三枝祭、(義解云、謂率川社祭也、以三枝華飾酒樽祭、故曰三枝也、)また姓氏錄に、顯宗天皇御世云々、三莖之草、生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造云々、治部式に福草、(瑞草也、朱草別名也、生宗廟中、)和名鈔に葛(音褐、和名佐木久佐、日本紀、私記云福草、)草、枝々相値、葉々相當也と、日本紀の人の名にも福草と書て、さきくさと訓たり、これらを以て思ふに、福草なることは明らけし、されど右の式と和名鈔にいふは、他の國の意にて、かしこにもこゝにも常ある草にあらず、然れば年ごとの卒川(イサカハ)祭に用る三枝花(サキクサノハナ)は、さゆり花なるべしといへり、さゆりは一本の末に三つの枝ひとしくわかれて、莖の朱に、葉の相當れるてふにも近ければ、かの福草に擬て用るならんと覺ゆ、○中略其祭も四月にて由利の咲比なれば、かた〳〵かなふべし、これに依ばかの御庭に生けんも由利なりけんか、

〔萬葉集抄七〕さきくさと云事は、假名はおなじけれ共、ことにまたがひていひかへたる事あり、あるひは檜の木をさきくさといふは、諸の材木の中に、ことによき木なれば、宮木などにもえらびもちゐられて、さいはふ木なれば、檜木をさきくさと云、あるひは葛のなかに、とみかづらと云草をさきくさと云ともいへり、又草のおひ出て、みつ葉よつ葉なるを、さきくさと云、

〔塵袋三〕一サキクサヲバ清輔ガ奥義鈔ニ檜木ト釋セルハ實事歟、木ヲクサト云フ心如何、

檜木ト云フ事ハ本說イマダミズ、マサシクハ草ノ名ナリ、葛(チヤウ)(陟孝反)トカク、又ハ福草トモ、幸草トモ、三枝トモカケリ、エダモハモ、相ムカヒテ、イク枝ニワカルレドモ、三ヅヽ三マタニ枝サス物也、サヒハカク云フニヤ、又是ヲトピクサト云フ、アラタニオフルトピクサノハナト云フ是也、サキクサヲバ、トピクサト云フユヘニ、コノトノハムベモトミケリトモヨメル歟、奥義鈔ニハ、ヒノ木ニテ家ヲ作ル物ナレバ、ミツバ、ヨツバニトノヅクリセリトハ云ヘルヨシ釋セルハ、推量ノ分也、幸草ト

白蒿草

モ、麗草トモ、トミクサトモ云ヘバ、ヨキ名アル草ヲイハヒタヨメリ、三枝草ナレバ、ミツバヨツバト云ヘリ、四葉ハアマリ事也、コトバノカザリニヤ、言ノタヨリニ、繁榮ノ心ヲイハントナリ、サイクサノマツリヲモ三枝トカ、姓ノ中ニモサイクサベト云フ姓アリ、三枝部ナリ、万葉ノ歌ニハ、サイクサノナカニハ、ムチトウツクシタトヨメルモ三枝トゾカケル、一モ檜木トカキテ、サイクサトロム事ナレ、大輔歌ニ云、

オモヘドモ人ノ心ノアラタニハウラミニノミゾサキクサノハナ、トヨメリ、此ノ歌ハ、アラタニオフル、トミクサヲ、サハ〳〵トヨミキリタリ、是又マタク檜木ニアラズ、フル木歌仙ノ釋ハヤウコソハアラメ、タヤスク是ヲ改ムベキニアラネドモ、所存バカリヲバ、カタハシ是ヲ注ス、人ノ非可信用、

〔倭名類聚抄草二十〕白蒿草　辨色立成云、白蒿草、烏○太○布○里○久○佐○

古事類苑

植物部二十七

菌

菌ハ、タケ又ハキノコト云ヒ、古クハ、タナビラトモ云ヘリ、古來食料又ハ藥用ニ供シタル菌類ニハ、木耳、椎茸、平茸、石茸、松茸、初茸、シメヂ、松露等頗ル多シ、而シテ菌ニハ往々猛烈ナル毒ヲ有シ、食スベカラザルモノモ少ナカラズ、靈芝ハ堅硬ニシテ食料ニ充ツベカラズト雖モ、支那及ビ我邦ニテハ、之ヲ仙藥トシテ珍重シ、又祥瑞トシテ其發生ヲ賀シタリ、

〔新撰字鏡 草〕菌（[illegible]反、上、太介、）

〔本草和名 十八〕木菌、木䓴、（[illegible]）石耳、（出七卷食經、）和名岐乃多介、地菌、一名黄菌、（出七卷食經、）菌茸、（状如人著笠、）又有度瑣、禾茸、赤頸、車耳、假蛾茸、鼓茸、烏茸、（[illegible]不可食、已上出[illegible]）和名都知多介、

〔段注説文解字 一下〕菌、地蕈也、（[illegible]）从艸囷聲、（[illegible]十三部、）蕈、桑蕈也、（[illegible]）从艸覃聲、（[illegible]七部、）䓴、木耳也、（[illegible]）从艸耎聲、（[illegible]十四部、[illegible]）一曰萮茈、（[illegible]）

〔倭名類聚抄 十七〕菌茸 崔禹錫食經云、菌茸（[illegible]和名多介、）食之温有小毒、状如人著笠者也、

〔箋注倭名類聚抄 四菜蔬〕按菌茸之茸、卽俗耳字、木菌或曰木耳、木耳見說文萸字注、狀似人耳、故名之、後俗從艸作茸、以別耳目字、其字形與𦳝茸字無別、而其音不同、源君以而容音之誤、又按渠屬羣母、牙音單行、無輕重、此云重、未詳、○中略 按爾雅釋草、中馗菌、郭注云、今江東名爲土菌、是土菌出郭注、木菌石菌無載、則木菌石菌或出爾雅舊注、又菜蔬部引爾雅注云、菌形似蓋者也、源君夾注云、今案有數種、木菌土菌石菌、並見兼名苑、則疑此偶誤兼名苑爲爾雅注也、○中略 按多介與丈竹嶽同訓、爾直立也、今俗或呼岐乃古、

〔倭名類聚抄 十七菜蔬野菜附〕菌 爾雅注云、菌（音窘、具見菜羹類、○注文天文本倭名類聚抄曰、奇隕切、和名太介、今按菌有數種、木菌土菌石菌見兼名苑、）形似蓋者也、

〔類聚名義抄 八艸〕菌（音窘、菌草、タケ、クサヒラ、）　木菌キノタケ　椈菌ヒトヨタケ　木茸タケ

〔饅頭屋本節用集 久草木〕菌クサビラ　〔同 幾草木〕菌キノコ

〔倭訓栞 前編十四多〕たけ　日本紀倭名抄に菌をよむは、氣味の猛き義なるべし、新撰字鏡に蕈をみみたけとよめり、みゝは耳の義也、今佐渡に菌をみゝといへり、○中略 西土には、いはたけを石耳、まつたけを松耳と書たるを、此方にては茸字を用來れり、徒然草にも見ゆ、鹿茸などの義によれば茸とも書べきかといへり、

〔倭訓栞 中編五幾〕きのこ　菌類をいふ、木の子成べし、

〔物類稱呼 三生植〕菌茸たけきのこ　中國及九州にてなばといふ、北國又は美濃尾張にてこけと云、上野下野にてもたせと云、佐渡にてみゝといふ、

〔庖厨備用倭名本草 五芝栭〕香蕈　倭名抄ニ香蕈ナシ、多識篇今案ニタケ、又云クサビラ、元升○向井曰、西國俗ニ云、ナバ、又云キノコ、又云タケ、考本草、蕈ハ桐柳枳椇木ノ上ニ生ズ、紫色ナルヲ香蕈ト名ヅク、白色ナルヲ玉蕈ト名ヅク、皆濕氣薰蒸シテ生ズ、山僻ノ處ニ生ズルハ毒アリ、人ヲ殺ス、

靈芝

〔新撰姓氏錄左京神別〕湯母竹田連

火明命五世之孫、建刀米命之男、武田折命、景行天皇御世、擬湯殖、賜田、夜宿之間、菌生、其田、天皇聞食而、賜姓菌田連、後改爲湯母竹田連、

〔本草和名草六〕靑芝、一名龍芝、　赤芝、一名丹芝、一名朱草芝、一名九曲、〈已上二名出雜要訣、〉　黃芝、一名金芝、一名地節、〈出太清經、〉　白芝、一名玉芝、一名白符、〈出雜要訣、〉　黑芝、一名玄芝　紫芝、一名木芝、〈陶景注云、俗所用紫芝、是竹樹枝所生、狀如木檽、〉

〔多識編三芝栭〕芝和名今按比志利多計、

〔和爾雅七菌〕芝〈一名苬、又曰靈芝、有靑黃赤白黑紫六色、〉

〔古今要覽稿草木〕芝れいし

靈芝は王者の德草木に至れば生ず、〈神農經、瑞應圖、〉王者の德山に至れば生ず、〈白虎通、〉などいひて、種類數多あり、五色芝は仙藥にて、これを服すれば不老延年なりといふ、〈本草綱目、〉さればこそ瑞草なりといへり、日本紀にはこれを食して、命長きことを記され、延喜式には祥瑞の部に載られたり、弘景曰、服せざれば瑞草もいたづらに翫物のみ、今世間多く生ずるは、いづれも紫芝なり、或は樹根に生じ、或は石間に生ず、其樹は西土にては李樹に生じ、〈論衡、〉又椿樹に生ず、〈酉陽雜俎、〉今みる所おほくは松梅樅楢等に生ず、然いづれの樹にも生ずべきにや、方士は木を積て藥を傳れば、五色芝を生ずといひ、〈本草綱目、〉道家にて糯米飯をつきたゝらし、雄黃鹿頭血をつゝみかはかし、冬至日土中に埋をけば、をのづから靈芝を生ずといへり、今も樹のきり株に、米泔水を度々そゝげば靈芝を生ず、櫟の木椿木と〈酉陽雜俎、〉いへり、かく人作にて生ずるほどならば、瑞物ともいひがたきか、明の李時珍は、此類は腐朽の餘氣にて生ずれば、人の瘤のごとし、瑞草となして服すれば仙となるなどいふは、誠にあやまりなりといひて、酉陽雜俎の家の柱に芝を生ずるは凶事なりといふことさへ引り、さて

靈芝は虫はみやすし、虫をさくるには飯の湯氣によく蒸しよく乾かせば、損せずといへり、(譜畫)又はやく採ば、むしはますといへり、

釋名

カドイテダケ(丹波中略)○マゴシャクシ(奥州、以上紀藝、本草啓蒙、)　茵(爾雅、說文ニ茵字ナシ、恐ハ菌ノ誤歟、)　芝(同上)　芝艸(日本書紀、本草綱目引瑞應圖、)　科名草(格致鏡原引清異錄)　菌蠢(群芳譜)　不死草(事物異名)　三秀(同上)　穎莖(事物紺珠)　金堂　玉堂　絶精(共同上)　靈芝草(字彙、圖會)　靈芝(本草原始)　青芝(神農本經)　龍芝(青芝一名、弘景別錄、)　赤芝(本經)　丹芝(同上、赤芝一名、)　黃芝(本經)　金芝(同上、黃芝一名、)　白芝(本經)　玉芝(同上)　素芝(共ニ白芝一名)　黑芝(本經)　玄芝(同上、黑芝一名、)　紫芝(本經)　木芝(同上)　紫達(爾雅、通雅)　紫脱(同上)　紫靈芝(本草原始)　靈芝(郗傳、花鏡、共ニ紫芝一名、)　石芝　木芝(抱朴子、恐ハ紫芝ト同物、)　肉芝　菌芝　木威喜芝　飛節芝　木渠芝　黃蘗芝　建木芝　參成芝　樊桃芝　千歲芝　獨搖芝　牛角芝　龍仙芝　紫珠芝　白符芝(恐ハ白芝ト同物、)　朱草芝(恐ハ赤芝ト同物、)　九曲芝(赤芝一名、本草和名引兼名苑、)　五德芝　玉唱芝　七孔九光芝(一名大芝、螢)　石蜜芝　桂芝　石腦芝　鳳凰芝(採芝圖引)　燕胎芝　黑雲芝(同上)　五色龍芝　五方芝　天芝　地芝　人芝　山芝　土芝　金芝　地節(金芝一名、本草和名引太清經、恐ハ黃芝ト同物、)　火芝　雷芝　甘露芝　青雲芝　雲氣芝　白虎芝　車馬芝　太一芝(以上本草綱目引葛洪抱朴子)

〔本朝食鑑(菜三)〕松茸

芝(俗稱ニ靈芝、有ニ青赤黃白黑紫、狀似ニ枯物、味不ㇾ堪ㇾ食、僧家貴ㇾ之、但本邦之芝與ニ中華之芝一殊歟、近世自ニ華來者皆相似矣、本邦處處山中僅采ㇾ之爲ニ弄器、大抵似ニ松茸之乾枯朽腐者、而紫赤黑色有ㇾ之、其餘未ㇾ見ㇾ之也、)

〔和漢三才圖會(百一芝栭)〕靈芝(中略)

按靈芝有ニ數品、而石芝肉芝之類者、甚希有奇品也、大抵多有ㇾ之者、形似ニ松茸、而大堅實、其裏白滑、有ㇾ柄或無ㇾ柄、處處大木根株間有ㇾ之、俗呼曰ニ猿腰掛、所謂木渠芝之類是乎、凡椋榎柳皆生ㇾ菌、而其木如ㇾ生ㇾ芝則以後再不ㇾ生ㇾ菌也、本朝亦古者以爲ニ祥瑞ㇾ矣、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕芝　玉䓤日本紀　一名科名草群芳譜　菌蠢同上　不死草事物異名　三秀同上
顆宓事物紺珠　金堂同上　玉堂同上　瑞耕同上　霊芝草字彙　霊芝本草原始
五色芝ハ仙藥ニシテ尋常ノ品ニ非ズ、其說ク所尤怪シテ信ズベカラズ、紫芝ハカドイテダケ丹波
カドデダケ奥州　レイシ京　サイワヒダケ　吉祥ダケ、マンネンダケ勢州　ヤマノカミノシヤクシ紀州
ネコジヤクシ江戸　マゴジヤクシ奥州　一名霊芝綱目發明　紫霊芝本草原始　紫達通雅　紫靴同上　幽處ニコレ
アリ、或ハ樹下ニ生ジ、或ハ石間ニ生ズ、一定ナラズ、形桂耳ニ似テ堅紫赤色ニシテ光リアリ、蓋ハ
面黑褐色、背ハキレナクシテ淺褐微白、大小長短一ナラズ、蓋多ク並ビ重リテ雲ノ如ナルモアリ、
莖ニ枝アルモアリ、質堅硬ニシテ食フベカラズ、其初生スル時ハ、蓋ナク尖リテ筆頭ノ如シ、漸ク
長ジテ蓋ノ形ヲナス、赤褐色黄邊、久シクシテ黑褐色ニ變ズ、採貯テ蛀ミ易シ、蒸過ス時ハ、久ヲ經
テ蛀セズ、

〔日本山海名産圖會 二〕芝　俗に霊芝といふ、一名科名草、不死草、瑞草、和名又カトアノケ、サキクサ、○中略
形一本離れて生るあり、又叢り生するもあり、又一莖に重り生じて、マヒタケのごとき物あり、又
莖枝を生じて傘あるもあり、又かさなく莖のみ生じて、長三尺ばかりに枝を生じ、鹿の角のごと
きもあり、是鹿角芝といふ、奇品にして、先年伊勢の山中に出す、凡て芝の品類六百種計、尚奇品の
物、本草綱目に委し、丹波にては首途を祝ひて是を餝る、伊勢にて萬年たけといひて、正月の辛盤
に飾り、江戸にてはネコジヤクシといひ、仙臺にてはマゴジヤクシといひて、瘧疾を攘くなり、

〔延喜式 二十一治部〕祥瑞　芝草形似珊瑚、枝葉連結、或丹、或紫、或黑、或金色、或隨四時變色、一云、一年三華、食之令眉壽、○中略　右下瑞

〔日本書紀 二十四皇極〕三年三月、倭國言、頃者菟田郡人押坂直闕名、將一童子、欣遊雪上、登菟田山、便見紫菌、
挺雪而生、高六寸餘、滿四町許、乃使童子採取、還示隣家、總言不知、且疑毒物、於是押坂直與童子煮而
食之、大有氣味、明日往見、都不在焉、押坂直與童子、因喫菌羹、無病而壽、或人云、蓋俗不知芝草、而妄言

菌耶、
〔日本書紀 二十九 天武〕八年、是年紀伊國伊刀郡、貢芝草、其狀似菌、莖長一尺、其蓋二圍、
〔續日本紀 九 聖武〕神龜三年九月、庚寅、内裏生玉來、勅令朝野道俗等作玉來詩賦、
〔續日本紀考證 四〕伊藤〇長胤氏曰、事文類聚載宋宣和間、王黼明賜第、梁生芝草、車駕臨幸已久、梅雨潤之墜地、京師無名子有爲十七字詩曰、相公新賜第、梁上生芝草、爲甚脫玉來、膠少則知玉來靈芝一名、必出古典、前人所通知、故政史亦稱之耳、谷川氏曰、按萊音來、和名之波、芝亦訓之波、見萬葉集、蓋古通用則玉來玉芝也、伊藤氏引事文類聚宋宣和間十七字詩、以證玉來爲靈芝之一名、予〇村尾元融檢類聚、玉作下、異本或作玉亦誤謬爾、伴氏曰、玉來疑玉英、見治部式、來英因字體近似而譌也、諸說非是、
〔續日本後紀 四 仁明〕承和二年二月丙申、天皇御紫宸殿、右大臣從二位淸原眞人夏野獻芝草、一莖有兩枝者、一枝長一尺六寸、一枝長一尺、其色紫緋相雜、毎莖之末有菌、而產于大臣山莊雙岳之下、是日賜酒侍臣、以賀祥芝、賜祿有差、
〔文德實錄 三〕仁壽元年八月癸亥、駿河國獻瑞草、紫莖朱葉、或謂之芝、
〔鵞峯文集 九記〕瑞雲芝記
草中之瑞以芝爲最、故其生也、倭漢俱無不慶賀之、尙舍奉御源君忠房領丹州福地山城、時城下巨木根生靈芝、叢叢重累、或橫或斜、殆三十莖、其高可一尺、其圍可五尺、實是珍奇之物也、旣而君增封移肥之前州島原城、乃知靈芝之生、豫呈吉兆乎、所謂家將興必有禎祥者也、今玆之秋、君宿衞東武之間、盛於金盤、置于牀席、以供賓客之觀、人人皆愛玩焉、余亦毎應佳招、爲之屬目、君請其名之、於是細看之、則可形容者多端、或有如山者、或有如谷者、或有如洞者、或有如橋者、或有似圓扇者、或有似松蓋者、或有似張鳥翼者、或有似支如意者、取彼則舍此、執取執舍、不可以一偏名之、於是隔席望而總視之、則髣

湧雲沛然之勢、因名曰瑞雲芝、○下略

〔鵞峯文集十九〕靈芝說

靈芝者艸中之瑞也、何以謂之瑞、蓋太平之世政治、人和則天地相應、土氣亦和、土氣和則芝艸生、古曰、王者仁慈則芝艸生是也、食之則壽、是以神仙多服之、以擬不死之藥、以其非常、故稱靈芝、又稱神芝、若其修德不足則靈在山之仙不能見焉、凡中華本朝偶遇芝艸生、則無不賀之、寛文四年甲辰之冬、江城郭外三田妙嚴寺內靈芝生焉、人皆以爲奇珍、寺僧台宗之徒也、贈呈之於東叡山、而後奉獻幕府、有命使畫工狩野探幽圖之、嘗聞靈芝之生、或深山之中、或老松之下、而其堅久至千萬歲也、在尋常之地則稀見之、然今城外近處見此靈艸、抑天地之感乎、土氣之和乎、果是太平之瑞乎、庶幾仁慈遍施、德政彌行、而國家長久、與靈芝之壽相共無疆也、乙巳之夏

〔北窻遺草七〕靈芝頌并引

江戸之高田、有宍戸侯別業焉、其地爽塏可以近樂而遠囂也、一日風君某稱伴夫、忽睹靈芝三本生於圃、其大者徑尺、衆以爲嘉瑞、叙賀於是遣使余同之、余嘗於公也、辟一日之遇、誼不可辭、然不獨爲公賀、而亦爲風君賀也、而遂及國人者、乃作頌曰、

靈草之䕺、惟德作配、聖王攸擇、縣人所采、爾宅清敞、瑞氣云會、世子遊焉、紋鳳所睞、旣挺黝柯、用張紫蓋、謝氏階庭、秀足匹對、邦家之休、徹內被外、煌煌三秀、奕奕勿替、我作並頌、祝靈遠大、

〔樵隱文集一〕靈芝記

余○中略聞、國家能和、則靈芝必爲之生、蓋嘉瑞也、延享乙丑年○二五月晦日、淺草邸第生三木於庭樹之下、透管硏頭、含秀飛香、瑩寫玉葉、燁燁焉、煌煌焉、庶乎與琪花瑤草相並、可謂奇矣、夫道尙遠難、以窺測、其致感之果有由耶否耶、余懵未之知、鑑桂谷子杉村佐內方掌邸事、必有以自黙矣、適徵余記、遂書此以贈云、

木耳

〔本草一家言二〕芝　卽靈芝也、世以芝與靈芝爲二物者非矣、今人稱芝者門出蕈、又名幸蕈是也、其色五等、貴赤者以爲瑞祥、賤白者以爲凶兆、詳見于本草綱目本條、雖然以余(松岡玄達)觀之、其說殊粗而已、詳考瑞應圖所說靈芝者、非指一物而言也、蓋芝爲瑞中之總稱、故奇中異木莓苔玉石非常珍怪者、通呼靈芝、如水芝(芙蓉一名水芝)戊巳芝、土芝(黃精一名戊巳芝)之屬是也、譬猶丹藥之丹本辰砂之稱、而大小還二丹、道家煉服食以求長生久視、依此說而不拘其色、總爲藥物美號也、余曾有聞、山城醍醐山房有僧、年百有餘顏貌不衰、行步輕快、因問頤生之術、曰我不知食、相傳此山東領會天氣淸和朝暾初升時、日光所射之地、忽然而變、望之如紫霜、會遇此異者採而觀之、非霜非苔、一片入口、滿日淸冷、頓覺爽快、猶勝防風、七日香、我昔少時嘗一食之、再來絕無疾病、非有他服食保養之術也、如彼紫霜非常有之、經十年或二十年而一遇此異云、再余按此亦靈芝也、又有聞、近世洛陽東山禪院有老杉樹、一朝樹梢滴滴降露、其地常濕潤、僧異之以器安于其樹下、承其滴露、試采嘗之、味甘如餳、後不絕一年而杉樹枯槁、是古人所謂樹將枯精液降、而爲甘露、此名雀餳、此亦瑞物也、雖非芝類、爲延齡之靈藥、其功相似、而附錄于茲、山谷詩集十三、有甘露降大守居桃葉上詩、此不知其爲何物、然由此桃樹上亦生之、不獨杉木也、(主錄)

〔武江產物志草〕靈芝(さいわいたけ)

〔新撰字鏡木〕栭(人之反、平、茸也)

〔倭名類聚抄十七野菜〕菌(菓附中略)○四聲字苑云、蕈(音軟、和名木乃美々)、木耳卽木菌也、狀似人耳而黑色、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕今俗呼岐久良下、以其味似海月在木上得是名也、(中略)○本草云、五木耳名檽、陶注云、老桑樹生燥耳、有黃者赤白者、又多雨時亦生軟濕者、人採以作葅、按所謂多雨時所生軟濕者、卽今俗岐久良計是也、

〔下學集下草木〕木耳(キクラゲ)

〔和爾雅七菜蔬〕木耳(キクラゲ)(木檽、木㮓、木蕈、木菌、木蛾、樹雞並同)

〔宜禁本草 乾集五 果〕木耳　甘寒、有五耳、槐耳療痔、楮楡桑柳軟者堪食、餘木生者發病、疾發風不可多食、服丹石人發熱、和葱豉煮食即止、利腸胃熱壅氣、

〔本朝食鑑 三 菜〕木海月〈訓二木久良介一〉

集解、即木耳也、其色黑面食之、則當上有襞、海月亦然故名、狀一面黑一面青白或黄灰、有點紋而厚、素滑生于諸木、今所用者接骨木上所生也、生乾俱無氣味、但枯朽淡木無海鹺之味、而人嘗愛其淡味、此類稍多、然用者木海月爾、

氣味、淡平無毒、主治未詳、〈今時醫曰、治痔、又曰、黑色及同生者不可食、或闘生於之毒、汁解之、莫聞、〉

〔大和本草 九 菌〕木耳　別録曰、六月多雨ノ時采テ即暴乾ス、時珍云、木耳各木皆生ズ、其良毒亦必隨木性、頴權曰、古槐桑樹上者良、恭曰、煮漿粥安諸木上、以草覆之即生蕈、蔬菜トシテ食ス治痔、木耳雖木ニ生ズルハ木ニヨリテ性アレヽ、市ニウルハ不擇其木、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 芝栭〕木耳　キノミヽ〈和名鈔〉　キクラゲ　一名木耳蕈〈入門良方〉　菌耳〈名物法言〉　廣耳〈尺牘雙魚〉　蕃〈萬寶〉　蕈〈正字通〉　木蛾　木檽〈共二同上〉　黑木耳〈外臺秘要〉

木ニ生ズルクサビラ及ヒキクラゲノ總名ナリ、キクラゲハ山中諸朽樹上ニ生ズ、形人耳ノ如クシテ薄ク多ク重リ生ズ、淡紅褐色、採リ乾セバ黑色ニ變ズ、煮食ハ味淡脆ナリ、然レドモ木ニ因テ良毒アリ、宜シク其木ヲ擇ブベシ、桑槐楮楡柳ヲ五木耳トスルコト、恭ノ說ニ見ヘタリ、楮、接骨木、榕等ノ木耳最佳ナリ、楮ニ生ズル者ヲカウゾタケト云、九州ニテカウゾナバト云、榕ニ生ズルヲアカウナバト云フ、廣東新語ニ、木耳以桑槐楡柳榕樹上生者良、柘木次之ト云、

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕一木蕈　諸木ノ朽タルモノヨリ生ズ、桑榎等ヲ佳トス、有毒樹ニ生ジタルハ食ベカラズ、蘑菇蕈ノ類皆乾シテ貨物トス、雜蕈諸品乾シタルハ雜菌ト云下品ナリ、

〔武江產物志 蕈〕木耳

椎蕈

〔採藥使記 上 奥州〕昭任曰、蝦夷松前ノ内ヨリ一種ノ木耳ヲ出ス、其形チ桑木耳ノ如クニシテ甚ダ大ナリ、ソノ色白ク油ギリツヤヨシ、味ヒ甚ダ苦ク少シ甘シ、土人諸病ヲ治スト云フ、專ラ腹痛疝氣ニ用ヒテ妙ナリト云フ、此モノ山中谷中ニ大樹アリテ、其樹年ヲ經テ倒レ朽チ、其枯株ヨリ此木耳ヲ生ズ、其大樹ノ名ヲ峯バリト云フ、

先生按ズルニ、此木耳ヲエ°プ°リ°コ°ト云フ、又アカストウトモ云フ、多ク韃靼ノ地ニ生ズ、其所ヲカラフト、名ヅク、又北高麗トモ云、蝦夷ガ島ノ北界ナリ、此物多クハ沙濱ノ中ニ生ルト云フ、其形チ鎖陽ノ類ノ如シ、又茯苓ニ似テ濃ナラズ、蝦夷人ノ傳ニ曰フ、積聚疝氣一切ノ腹痛ニ用ユ、然レドモ虛弱ノ人ニハ斟酌スベシト云フ、或曰漢名朱崖芝ナルベシ、

〔和漢三才圖會 九十二本 山草〕惠布里古(えぶりこ) 阿加須止字、天狗面伝古、

按惠布里古生韃靼地、其名加良不止、一名北高麗、蝦夷島之北界也、生沙濱中、如鎖陽之類、爲大塊、外灰白內白色、似茯苓而不濃、如枯菌理、其味苦、蝦夷松前人傳曰、積聚疝氣一切腹痛等不用諸藥、止用此皆愈也、然虛弱人宜斟酌、

〔倭頭屋本節用集 志 草木〕椎蕈(しいたけ)

〔書言字考節用集 六 生植〕椎蕈(しいたけ)

〔本朝食鑑 三 菜耳〕椎蕈 訓志伊多計

集解、椎蕈生于椎子樹上及老木根上、或諸枯木之生氣不盡者、得雨露濕蒸而生、狀似標茅蕈(しめぢたけ)而頭圓莖短而肥、三四月生而甘脆、香美勝于標茅蕈、能祛葱蒜之臭氣也、葱蒜中入兩三箇、則臭氣不薰、或食蒜後食兩三蕈、則口臭消、而旁人不覺其氣、此古來所未言之者也、今曝乾以貨于四方、海西山北諸州多有、紀勢參遠駿甲等山中亦多有、其曝乾者經歲不敗、每收蓄以爲菜肴、若不時欲擬生者、漬沙糖水中一日取出、而煮則如生鮮、然其色香不美、味亦不佳、但甜味不盡而代鰹汁、故僧家最賞之、

氣味、甘微温無毒、多食令人壯内生蟲、之主治未詳、

〔大和本草九菜〕椎蕈 山中ノ樹ニ生ズ、松蕈椎蕈ノ二物蕈類ノ上品トスベシ、○中略俗説椎蕈ト酒ト同食スベカラス、酒ト相忌ム、シバ〳〵其證アリト云、

〔和漢三才圖會百一菌類〕椎蕈 之井太介

按椎蕈生於椎木、大者二寸許、大小叢生、外褐色裏白有襞、未張傘者曰粒(ツブ)、椎茸、晒乾者黒色裏黄、味甘香氣最美、經久亦不敗、僧家最賞之、今多造之、春秋二時如圃蕈茸法、椎茸能祛慈蕈之臭氣、日向之產爲上、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜之二〕香。蕈。 シヒタケ 一名香蕈(泉州府志) 香蕈蕈(八閩通志) 香菌(行厨集) 處蕈(同上)

雪蕈(廣東新語、冬取者名) 雪菌(同上) 增、一名乾香蕈(農政全書、乾ル者名)、 乾柯蕈(廣東新語、同上)、

柯樹ニ生ズル者ナリ、紀州ノ熊野名產ナリ、他國ニモ各名產アリ、熊野ニテ取ル者柯(シヒ)樹ニ拘ハラズ、栲(シヒ)櫧、ハビロガシ、ソウノキガシ、シデノ木等ニ生ズルヲ採ル、又右件ノ木ヲ伐リ置キ、ホドヨク朽タルヲ、秋雨ノ候濕ニテ腐ツ時ハ多ク生ズ、採タ事ニナシ遠火ニテ炙リ乾ス、是作リシキタケナリ、漢名家蕈(廣東新語)、餘木ニモ生ズレドモ、毒アル木ニ生ズルハ採ラズ、

〔朝倉亭御成記〕永祿十一年五月十七日、於越前谷、朝倉左衞門茂景亭へ御成事、

一於會所參ル進物幷獻立の次第、○中略 御菓子十一種、○中略 志ゐ竹、

〔三省錄四〕水藩ノ檜山氏が慶安五辰年四月十五日より同廿二日まで、○略 註 水府の御宮別當なる東叡山中吉祥院が、江戸より水戸江下りたりし時分の、賂料請取品直段書付、幷入用を志るしたるものを見せたるが、其直段の下直なる事おどろく計也、○中略

一椎茸 貳升 壹升ニ付代八拾文ヅヽ、

〔毛吹草三〕伊勢 椎茸 伊豆 椎茸 薩摩 椎茸 對馬 椎茸

杉茸

〔享保集成絲綸錄三十六〕貞享三寅年五月

覺

一生椎茸　　正月節ゟ四月迄〇中略

右之品々致商買候儀、先年月切に御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節に入候日より可致商買之、〇中略若右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕杉菌　スギタケ　增、一名杉蕈、(通雅)

深山杉樹ノ朽樹ニ多ク叢生スル小菌ナリ、形鬼蓋ノ如ク裏ニ切レアリ、黃色或ハ白色ナリ、

檜茸

〔物類稱呼三生植〕菌たけ〇きのこ中略　檜茸を、相州塔の澤にて定源坊と云、

榎茸

〔本朝食鑑三菜耳〕榎茸(訓三衣乃木多計)

集解、此茸生于榎樹及老根枯株、當世嗜好之家伐于老榎大樹、作五六尺之大、置于土窖中、覆之用溫稻草薦、而灑於米泔冷汁、日一兩次、至二三日而罷、經ニ多生茸、采食之則味鮮美、商家亦造之者若斯、故其多不劣初茸、而大小同根相結而生矣、狀似占地茸而柔弱、繖上淡紫黑而滑、莖亦淡紫黑而細、繖下及肉潔白、味亦淡甘而佳、〇中略

氣味、甘平無毒、主治未詳、(必大(平野)按、榎茸味淡、每食之、未聞中毒者、則平而無毒者相當矣、)

〔和漢三才圖會百一芝栭〕榎蕈　榎茸(俗)、　惠乃木太介〇中略

按榎蕈乃蕈菰之類也、叢生榎根上、繖一二寸、灰黑色、裏白有細刻、有微香、味美也、榎(見于喬木部)有白黑二種、所之木帶黑色者名黑榎、不蕈生、

〔武江產物志(蕈)〕エノキタケ

鼠茸

〔物類稱呼三生植〕菌茸たけ〇きのこ中略　鼠茸を、江東にてなめすゝきと云、筑紫にて水たゝきといふ、

〔本朝食鑑三菜耳〕榎茸〇中略

滑茸

栗茸

一種有鼠茸者、江東稱爲米須須岐、大抵與榎茸同、狀似榎茸而稍大、色灰白、味亦相似、此亦可愛、生于朽木老樹根上濕陰處也、柳樹栗樹倶生、茸似榎茸無毒、可食之、

〔大和本草九菜〕ナメスヽキ　莖ハ方一寸許アリ、莖ハ小ニシテ長シ、柔滑ニシテ味美シ、無毒、一本ヨリ叢多ク生ズ、褐色也、ウタハキレタリ、西土ニテ水タヽキト云、寒月生ズ、

〔和漢三才圖會百一芝栭〕榎茸

滑茸（ナメスヽキ）　是亦多生於榎樹、大者傘寸許、小者三四分、大小叢生、帶淺褐色、内有涎甚滑、其莖煤黑色、能洗淨滑氣、煮熟食、爲上品、（京大者滑色、黑々者僞色白、木者重之上品也、）

〔殿中申次記〕九月九日

一滑茸（ナメスヽキ）　一折　例年進上之

〔狗猧集五秋〕茸

ちゝとくへあなめづらしの鼠茸　無量壽院

猪足の膳にてくふや鼠茸　貞他

〔和漢三才圖會百一芝栭〕榎茸　重頼

椋茸（ムクタケ）　生椋木上、形狀無異於榎茸、○下略

〔和漢三才圖會百一芝栭〕羊肚菜

栗茸　生山原、高不過寸、徑四五分、圓帶正白色、如剝栗肉、故名、其柄太、蓋非出於栗之茸、人不食之、

〔百品考下〕粗蕈　和名クリタケ

李時珍食物本草、粗蕈、粗背但、產自北虜、馬市貿入中原、大如錢、色白、嫩頭有柄、味極肥鮮、和雞魚諸肉煮羹、無不和宜、鮮嫩帶膩氣、而他種終不能及、

案圖ニ產ス、多クハ栗ノ木ニ生ズ、故ニクリタケト云、松蕈ヨリ早ク八月頃出ヅ、京畿ニハ絕テ

ナシ、擲帶菰(ナブリタケ)ニ類シテ至テ大ナリ、一科ニ多ク叢生ス、高サ六七寸ヨリ尺ニ近シ、枝ヲ分テ叢生シ、末ノ處少シ扁シテ傘ノ狀ヲ成ス、大ナル科ハ二科ニテ一荷ヲナスモノアリト云、色白シテ黃ミヲ帶ブ、味甘美ナリ、香氣ナシ、越中加賀ナドニテ甚賞玩スルモノナリ、

柳耳

〔重修本草綱目啓蒙　二十芝栭〕木耳略○中

柳耳　ヤナギタケ　一名柳樹蕈醫方　柳磨菰集驗良方

〔大和本草　九菌〕柳耳　柳榎栗等皆生菌、無毒可食、好事ノ家ニ老樹ヲ切テ陰地ニフキ、シバ〳〵米泔ヲソヽギ、上ニ薦ヲオホフ、日ヲヘテ蕈ヲ生ズ、

〔食物和歌本草　六〕柳耳(ヤナギタケ)

柳耳氣をおぎなひて胃をおさむ痰をはくをも能治しにける

檜耳

〔重修本草綱目啓蒙　二十芝栭〕木耳

槐耳　エンジユダケ　一名槐檽千金方　槐耳赤雞同上

〔重修本草綱目啓蒙　二十芝栭〕木耳

檜耳　ニレダケ　一名檜肉趙溍養疴漫筆　檜蕈同上

コレハ檜木ニ生ズル菌ナリ、唐山ノ人尤賞ス、長崎ニ來ル、清商モ持來ル、此品蝦夷ニ多シ、

平茸

〔倭類屋本節用集　比草木〕平茸(ヒラタケ)

〔和爾雅　七菜蔬〕磨菰蕈(ヒラタケ)一名肉蕈

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、略○中　酢菜者略○中　平茸、

〔本朝食鑑　三菜耳〕平茸　訓比良多計

集解、處處山林多有、然生處無定、八九月雨濕後生于竹根及老樹根、狀如開人之十指、或如相依頬而併、或如斷又續、易摧易折、其色外黃、或有淡紫皮、或黃白、其肉潔白柔脆、味淡甘最佳、可為上饌、中華未

聞其名、雷棲山有大者、或數十圍、在廣州山中、云木菌山中多有之、昔木骨義仲入西京、獻此撲之事、官寄、賞、我朝之珍味、○中略　氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕平蕈　區貫 俗　比良太介

按平蕈生山林濕地、苔(コケ)檪(クヌギ)樹多出之、九十月盛、其形似松蕈而薄、傘薄區故名、大三四寸、亦有至大者、灰白色裏白有細縷、性柔脆、其柄多不正中、或偏生大小叢生可愛、多有蟲中空虛者、味淡甘不美、有小毒、間有數寄者、經日者最不可食、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕天花蕈　ヒラタケ

多春山中朽樹ニ生ズ、紀州ノ高野山殊ニ多シ、乾シテ遠ニ寄ス、初生小塊多ク聚リテ、鮫皮ノ如ク色白シ、漸ク長ズレバ微ク傘狀アリ、漸長ズレバ蓋ナク、銀杏葉ノ形ノ如ク、雞冠ノ花ニ類ス、多ク重疊シテ白色微黃、背ハ切レアリテ裏ト共ニ白色、生乾共ニ煮食フニ堪タリ、然レドモ其木ヲ選ブベシ、ブナノ木ニ生ズル者ハ毒アリ、人家ニテモ加條(カバ)朴(ホウ)樹ノ類ヲ用テ作ルベシ、

〔今昔物語 二十八〕信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

今昔、信濃ノ守藤原ノ陳忠ト云フ人有ケリ、任國ニ下テ國ヲ治テ、任畢ニケレバ上ケルニ、御坂ヲ越ル間ニ、多ノ馬共ニ荷ヲ懸ケ、人ノ乘タル馬員不知ズ、次ギテ行ケル程ニ、多ノ人ノ乘タル中ニ、守ノ乘タリケル馬シモ、懸橋ノ鉉ノ木ヲ、後足ヲ以テ踏折テ、守逆樣ニ馬ニ乘乍ラ落入ヌ、○中略遙ノ底ニ叫ブ音髴ニ聞ユ、守ノ殿ハ御マシケリナド云テ、待叫ビ爲ルニ、守叫テ物云フ音遙ニ遠ク聞ユレバ、其ノ物ハ宣フナルハ、穴鎌何事ヲ宣フゾ聞々ケト云ヘバ、旅籠ニ繩ヲ長ク付テ下セト宣フナド、然レバ守ハ生タ物ニ留リテ御スル也ケリト知テ、旅籠ニ多ノ人ノ差繩共ヲ取リ集メテ結テ結繼テ、ソレ〳〵ト下シツ、繩ノ尻モ无ク下シタル程ニ、繩留リテ不引ネバ、今ハ下着ニタルナメリト思テ有ルニ、底ニ今ハ引上ゲヨト云フ音聞ユレバ、其ハ引ケト有ナルハト云テ絡上

ルニ、極ク輕クテ上レバ、此ノ旅籠コソ輕ケレ、守ノ殿ノ乘リ給ヘラバ、重クコソ可有ケレバト云ヘバ、亦或ル者ハ木ノ枝ナドヲ取リスガリ給ヒタレバ、輕キニコソ有メレナド云テ、引ク程ニ、旅籠ヲ引上タルヲ見レバ、平茸ノ限リ一旅籠入タリ、然レバ心モ不得デ、互ニ顏共ヲ護テ、此ハ何ニト云フ程ニ、亦聞ケバ底音有テ、然テ亦下セト叫ブナリ、此レヲ聞テ然ハ亦下セト云テ、旅籠ヲ下シツ、亦引ケト云フ音有レバ、音ニ隨テ引クニ、此ノ度ハ極ク重シ、數ノ人懸リテ絡上タルヲ見レバ、守旅籠ニ乘テ被絡上タリ、守片手ニハ縄ヲ捕ヘ給ヘリ、今片手ニハ平茸ヲ三總許持テ上給ヘリ、引上ツレバ、懸橋ノ上ニ居エテ、郎等共喜合テ、抑モ此ハ何ゾノ平茸ニカ候ゾト問ヘバ、守答フル様、落入ツル時ニ、馬ハ疾ク底ニ落入ツルニ、我レハ送レテツメキ落行ツル程ニ、木ノ枝ノ滋ク指合タル上ニ、不意ニ落懸リツレバ、其ノ木ノ枝ヲ捕ヘテ下ツルニ、下ニ大キナル木ノ枝ノ障ツレバ、其レヲ踏ヘテ大キナル胯ノ枝ニ取付テ、其レヲ抱カヘテ留リタリツルニ、其ノ木ニ平茸ノ多ク生タリツレバ、難見棄クテ、先ヅ手ノ及ビツル限リ取テ、旅籠ニ入レテ上ツル也、未ダ殘リヤ有ツラム、云ハム方无ク多カリツル物カナ、極キ損ヲ取ツル物カナ、極キ損ヲ取ツル心地コソスレト云ヘバ、郎等共現ニ御損ニ候ナド云テ、其ノ時ニゾ集テ散ド咲ヒニケリ、略〇下

〔宇治拾遺物語 一〕これも今はむかし、丹波國篠村といふところに、年比平茸やるかたもなくおほかりけり、里村のものこれをとりて、人にもこゝろざし、またわれもくひなどして、としごろすぐるほどに、その里にとりてむねとあるゝの、ゆめに、かしらおつかみなる法師どもの、二三十人ばかりいできて、申べきこと、いひければ、いかなるひとぞととふに、この法師ばらはこのとし比も宮づかへよくして候つるが、このさとの緣つきて、いまはよそへまかり候なんづることの、かつはあはれに、もしまたことのよしを申さではとおもひて、このよし申なりといふと見て、うちおどろきて、こはなにごとぞと、妻や子やなどにかたるほどに、またこの里の人の夢にも、この

定に見えたりとて、あまた同様にかたれば、心もえでとしもくれぬ、さて次のとしの九十月にもなりぬるに、さき／＼いでくるほどなれば、山に入て茸をもとむるに、すべて蔬おほかたみえず、いかなる事にかと、里國の者思ひてすぐるほどに、故仲胤僧都とて、說法ならびなき人いましけり、この事をきゝて、こはいかに、不淨說法する法師、平茸にむまるといふことのある物をとの給ひてけり、されぱいかにも／＼平茸は、くはざらんにことかくまじき物とぞ、

〔古今著聞集十八飲食〕觀知僧都、九條の太政大臣〈○藤原信實〉のもとへ、ひら茸をおくるとて、そえ侍りける、

たいらかに平のきやうにすむ人はひらたけをこそくふべかりけれ、かへし相國、

平茸はよきむしやにこそにたりけれおそろしながらさすがみまほし

〔源平盛衰記三十三〕光隆卿向木曾許附木曾院參頑事

猫間中納言光隆卿宣フベキ事有テ、木曾ガ許ヘ座シテ、先雜色シテ角ト云入ラレタリ、〈○中略〉木曾モ其時意得テ舉入、見參シケリ、暫物語シ給ヒテ、木曾根井ヲ招テ、ヤ給ヘナンテマレ、雜中セト云、中納言、淺猿ト思ヒテ、只今不可有宣ケレ共、イカヾ食時ニ座シタルニ、物メサデハ有ベキ、食ベキ折ニ不食バ、類ナキ者ト成也、トク急ゲ急ゲト云、何モ生シキ物ヲバ無鹽ト云ワト心得テ、無鹽ノ平茸モアリツナ、歸給ハヌサキニ早メヨ／＼ト云ケレバ、中納言ハ斯由ナキ所ヘ來テ、駈ガマシヤ、今更歸ランモ流石也ト思テ、宣フベキ事モハカ／＼シク不被仰、興醒テ聖唾ヲ呑テ御座ケルニ、何鹿田舍合子ノ大ニ尻高ク、底深ニ生塗ナルガ、所々剝タルニ、毛立シタル飯ノ黑ク粗交ナリケルヲ堆盛上テ、御菜三種ニ平茸ノ汁一ツ折敷ニ居テ、根井持來テ、中納言ノ前ニサシ居タリ、大方トカク云計ナシ、木曾ガ前ニモ同ク備タリ、木曾ハ箸取食ケレ共、中納言ハ青與醒テメサズ、木曾是ヲ見テ、如何ニ猫殿ハ不饗ゾ、合子ヲ嫌給歟、アレハ義仲ガ隨分ノ精進合子、アダニモ人ニタバズ、無鹽ノ平茸ハ京都ニハキト無物也、猫殿只搔給ヘ／＼ト勸メタリ、

桑耳　獼猴眼　石耳

〔武江產物志〕天花蕈（ひらたけ）

〔本草和名十三〕桑菌、一名木麥、（出楊玄操音義）五木耳名檽、（蘇敬注曰、楮槐楡柳桑耳、此等謂之五木耳、）一名木檽、一名桑上寄生木精也、（出大清經）和名久波乃多介、

〔大和本草九〕桑耳　桑ノ木ニ生ズル蕈ナリ、本草二十八蕈木耳ノ下ニ載ス、一名桑上寄生ト云、桑ノヤドリ木ヲモ桑寄生トス、同名異物ナリ、桑耳ニ二種アリ、ヤハラナル蕈アリ、食フベシ、一種ハ堅シ、是ハ俗ニ猿ノ腰掛ト云、堅クシテ不可食、其功性ハ柔ナルモ硬キモ一也、本草時珍ガ說可考、舌藥トテ舌上口中白ク小瘡生ズ、桑耳ノ硬キヲコソゲ付レバ愈ユ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

美作國卌一種、（中略）桑茸二斤、

〔倭訓栞中編九〕さるのこしかけ　瘢花をいふ、酉陽雜俎に胡孫眼と見えたり、胡孫はさる也、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕木耳（中略）

桑耳　此條二品アリ、軟ニシテ食フベキモノハ桑耳ナリ、硬クシテ食フベカラザルモノハ桑黃ナリ、釋名ノ桑檽、桑蛾、桑臡ノ三名ハ桑耳ノ名ナリ、一名五鼎芝、（群芳譜）桑蕈、（本草彙言）俗名クハタケ、桑樹ニ生ズル菌ナリ、茶色ニシテ多月多シ、釋名ノ桑臣、桑上寄生ノ二名ハ桑黃ノ名ナリ、一名木麥、（事類賦註）桑黃菰、（本草附方）俗名メシマコブ、桑樹ニ生ズル獼猴眼（サルノコシカケ）ナリ、故ニ硬菰ト云、肥前平戶ノ海中雌島ニアリ、故ニメシマコブト云、桑樹諸木及ビ土石ニ生ズ、木ニ生ジ形圓ニシテ內黃色、光アルモノヲ平戶ニテ實コブト云、或ハ實コンブト云、桑上ノモノヲ上トス、土石上ニ生ジ、形扁クシテ內黃色ナルヲ、平戶ニテ花コブト云、或ハ花コンブト云、微赤黑ヲ帶ルモノヲ平戶ニテ、古コンブト云、今藥舖ニ貨ルモノハ丹後ノ產多シ、（中略）

〔下學集下草木〕石耳（イハタケ）

〔和爾雅 七菜蔬〕石耳 一名石菌

〔本朝食鑑 三菜〕石茸 訓伊和多計

集解、即石耳也、柔薄如紙、外滑面青白色、内澁而黒色、其黒色處附石、有微香、而味淡微甘、常生于峯頭巖石之上、山人采之、先造竹籃方二三尺者、著數十丈之麻縄藤縄、而後攀嶮巖峯、索茸、到巖石處、以縄端繫縛于巖邊、采茸、充于籃中、自乘其籃、索縄下千仭之黄、若傍觀之則眼眩魂銷不可熟視、然采之山人僻嗣不屑、亦覺無失命者、可謂奇、嗚呼危哉、甲信飛常奥及紀勢濃西諸山最多、曬乾以貨于四方、其生者亦味佳也、

〔和漢三才圖會 百二芝栭〕石耳 靈芝 伊波太介 略○中

氣味、甘平無毒、寒冷 日 主治、明目益精散血、

按石耳狀如木耳、無蔕柄、外滑面灰白色、裏澁而黒色、其黒處附石生、日乾者帶皺於外、宛似八幡黒革、用時以灰宜洗外滑、和醬食甘美、此物在峯頭巖石上、難甚得、山人僻嗣不屑而取之、處處高山皆有、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕石耳 イハタケ 一名石芝 閩史

山中巖石上ニ生ズ、形圓ニシテ薄ク皮ノ如シ、大サ二三寸、背ノ正中ニ短蔕アリテ石ニ附ク、層層相連リ生ジ石花ノ如シ、採リ乾シテ賣ル、水ニ浸シ煮食ヘバ味淡脆、面ハ黒色背ハ青白色ナリ、唐土ノ石耳、清商齎來スル者アリ、和産ニ異ナラズ、

〔雲萍雜志 二〕木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を取るには、籠といふものを造りて、綱をつけて、夫はそれに入りて、その妻樹々の枝より下げて、つりおろし、引き上げなどして、谷間の岩茸を取りぬるとぞ、下は幾丈とも限り知れざるところなるよし、見し人ものがたれり、もしあやまちて綱のきれて、落ちたらんには命なかるべし、

〔三省錄 四〕水藩の檜山氏が、慶安五辰年四月十五日より同廿二日まで、略○中 註水府の御宮別當なる東

松茸

叡山中吉祥院が、江戸お水戸江下りたりし時分の、賄料請取品直段書付并入用を志るしたるものを見せたるが、其直段の下直なる事おどろく計也、中略
一岩たけ　　三升　　代貳拾文ヅ、壹升ニ付

〔寛政四年武鑑〕松平隱岐守定國伊豫松山　　時獻上十二月岩茸一箱　　小笠原總次郎長禎播磨安志
時獻上暑中岩茸　　阿部豐後守正識武藏忍　　時獻上暑中岩茸　　戶田因幡守忠寛下野宇都宮
時獻上二月岩茸
內藤銀次郎頼以信濃高遠　　時獻上寒中岩茸

〔毛吹草三〕大和　　岩茸　　紀伊　　高野岩茸

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕一石茸イハタケ　金峯、白峯、逸見筋ノ山中峭岩絕壁ニ產生ス、梯ヲ繫ケ繩ニ縋リテ採之、不相及處ニテハ、以藤蔓造籠以身容之、繩ヲ岩頭ニ繫ケ、縋シテ下壁面採之、自古本州產物トス、官ニシテ賣リキ、松平甲斐守ノ時ハ四月ノ獻上ナリ、

〔武江產物志草〕石耳いはたけ秩父

〔藝備國郡志上安藝土產〕石耳　產于山縣郡山中所々也、倭俗好食菌蕈、其生於岩石之間名曰石耳、尤賞之、生用之、或采曝餽遺、

〔饅頭屋本節用集草木〕松茸マツダケ

〔和爾雅七菜蔬〕松蕈マツダケ陳仁玉菌譜曰、松蕈生松陰、凡物松出無不可愛者、治溲濁不禁、食之有效、　松耳マツダケ東醫寶鑑云、性平味甘無毒、味甚香美、有松氣、生山中古松樹下、假松氣而生、木耳中第一也、

〔新猿樂記〕七御許者食飲愛酒女也、所好何物、中略　面穢松茸、

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、中略　酢菜者中略　松茸、

〔尺素往來〕茶子者、中略　搗栗、干松茸、

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者、當坐ニ迷惑スベキ者哉、(中略)松蕈ハマツ、(中略)如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一まつだけ　まつ

〔本朝食鑑三菜耳〕松蕈(訓末豆多計)

釋名(蕈者菌也、蕈也、濕熱蒸氣生于地上者也、耳者檽也、蕈也、濕熱蒸氣生于木上者也、蕈俗謂久佐比良、)

集解、松蕈者本邦菌蕈之第一者也、亦松之陰處、繁茂樹多之山最多有之、八九月出地、時戴木葉而生、故不易識、五月生者俗號早松蕈、其味不似秋生者、蕈狀頗類紫芝、而柔滑、香美甘脆勝於諸蕈、大者傘尺、小者一二寸、其小者蕈小圓、如蓍彈丸而不引、蕈莖亦從細不肥大、其大者蕈如張蓋、蓋外紫内白、柔脆易碎、有細深斜、蕈圓肥皮紫、肉白硬脆易拆、崔禹錫謂如人著笠者、能形容之焉、洛之諸山最多、肥大香美、就中北山之產為勝、五畿及丹陰、江州、勢州、紀州、播州之產亦次之、海西諸州亦多有、江東諸州亦雖多有、而香美不及洛畿之產、根下有細成為叢、俗稱松蕈叢、採之栽培、則不生之地亦生之、八九月采鮮者淹藏、陰乾以貨于四方、其法用白鹽炒過、合於松蕈生處之沙土以漬之、覆以松葉、此俗謂松葉鹽、或生鹽漬及寒水漬、或豆醬滓和白鹽而漬亦佳矣、

氣味、甘温無毒、(或謂有毒、多食中毒、蓋日朽敗者必然、)主治久痢虛痢、痘瘡不出者、或產後脫血者亦佳、(必大(平野)按、凡中ニ毒者、以苦茗白礬、勻新水、併飲之有驗、)

附方、久痢虛脫(乾松蕈焙作末、細切二三枚與鹽湯、煮一錢、同鹽未留汁、服則立效、)

〔本朝食鑑華和異同〕松蕈(菜耳)
或曰、本邦松蕈者、李時珍所謂合蕈也、本邦初蕈者松蕈也、本邦平蕈者蘑菰蕈也、必大按、此三蕈必不

爲相似焉、合蕈者生于台山、寒極雪收、春氣欲動、土鬆芽活、此菌候也、於斯時而生者春蕈也、本邦之松茸者、秋中雨露浸釀山膏木腴、發爲菌花者也、或五月淫霖之時生者亦有、而未見於春時而生者、然則非合蕈者明矣、松蕈生松陰、采無時、此亦必不可爲初茸乎、松茸亦生松陰、加爾初茸松茸倶非四時之有、而秋夏生者不可言采無時、然則松蕈何可限于初茸哉、麿菰蕈者埋桑楮諸木於土中、澆以米泔待菰生采之、或聞其中空虛、今本邦之平茸者、山林樹竹根邊自生者也、此亦難決耳、

〔大和本草 九菌〕松蕈〇中略 今按松蕈九十月ニ生ズ、味最ヨシ、木茸ノ中第一也トイヘル事マコトニ然リ、山州ノ產尤ヨシ、甚多シ、牝松ニアラザレバ生ゼズト云、西國ニハ牡松多キ故、松蕈少ク茯苓多シ、京畿ニハ牝松多クシテ、松蕈多ク茯苓少シト云、松蕈採テ久シキハ毒アリ、新ヲエラビ食フベシ、味苦ハ毒アリ不可食、五六月ニ生ズルヲサマツタケト云味劣ル、松ダケノ莖ノ根、土ヲ帶タルヲキリテ乾シ貯ヘヲクベシ、產後兒枕痛(アトハラ)ニ一匁煎服ス甚驗アリ、又ヨク久痢ヲ止ム、或曰松蕈ヲ食シテ醉フ人アリ、先豆腐ヲ食シテ後松蕈ヲ食ヘバヨハズ、瀉痢久不止、痘瘡不出、產後血氣虛脫スルモノ、乾松蕈ヲ煮テ食シ、煎ジテノム甚有効、滋補ノ性アリ、

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕松蕈(まつたけ)

有松茸與米同藏於櫃、翌日煮食之、舉家皆死者、此乃相感之毒令然乎、後亦聞如之者不可不愼、然松茸漬泔水特爲佳、米與泔不遠、蓋以吃沙糖即飲酒甚苦、而先酒後糖則不苦、凡一切合食禁、及製藥可驗之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕香蕈〇中略

松蕈マツダケ、一名松耳、(東醫寶鑑)松花菌、(本經逢原)鵝蕈、(類書纂要)八九月ニ生ズ、〇中略 京師ハ丹波ヨリ出ス者、最早ケレドモ味劣レリ下品ナリ、蓋ノ色黑ヲ帶ブ、深草稻荷山ノ產ハ甚大ニシテ味優レリ、蓋厚ク白色ニシテ堅シ、上品ナリ、栗田ノ產モ亦同ジ、山科及上賀茂ノ產ハ、蓋厚ク堅クシテ黑色ヲ帶ブ、

蝦夷ノ產ハ薑蒲シ、此地ニ四品アリ、上品ヲ臥野蕈ト云、莖極テ粗大、地中ニ蟠屈シテ横斜ニ突出ス、色紫白香氣多ク、味尤ク美ナリ、次ヲウブリダケト云、松皮ノ鱗甲ノ如ク、蓋上處々突起シテ周邊白ク缺刻アリ、皮ニ蓮アリテ鵝羽ニ似タリ、次ヲトラフト云、白褐赤ノ横紋相雜ル、次ハ尋常ノ品ナリ、西賀茂ノ產ハ蝦夷ト同クシテ柔ナリ、松尾ノ產ハ色赤ヲ帶テ厚ク堅シ、

〔拾遺和歌集 物名七〕まつたけ　すけみ

あし曳の山した水にぬれにけりその火まつたけ衣あぶらん

いとへどもつらきかたみを見る時はまつたけからぬねこそなかるれ

〔類聚雜要抄 一〕一字治平等院御幸御膳 元永元年九月廿四日、大殿御下向日記定〇中略

御汁物二度 松茸汁

〔散木弃謌集 雜九〕田上にて物いひけるついでに、松だけの有けるを、そそくやくなどいひけるを聞てよめる、

はどもなく取いだせとや思ふべき松と竹とは久しき物を

〔師仲記〕建治二年九月六日丁酉、參大宮殿依召也、興福寺三綱參仕、爲申次也、但予〇師仲依服暇不參不及中次、予師顯等拜領松茸也、懷中退出、

〔殿中申次記〕八月

一松茸　一折　例年進上之　大光明寺〇中略

何も式日は不定

〔後深心院關白記〕貞治六年九月十日甲申、松茸進内裏、納小長櫃二合、自故殿御時、年々進之、又二合進武家、自去年進之、　七年〇應安元年九月六日甲辰、進松茸於内裏、如例年、又進武家、此兩三年進之也、

七日乙巳、松茸二合小品櫃進武衛守護之許、以媒介之仁傳遣之也、相副書狀也、

〔看聞日記〕應永廿三年九月廿日、月見岡松茸新御所椎野以下取之、予〈○後崇光〉依違例不参、

〔親俊日記〕天文七年五月十九日辛卯、細典厩より五松茸一折御進上、

〔老人雜話　上〕山城の內山里と云所を、梅松と云坊主に預けらる、新に松を植、程も無に松蕈生じたりとて獻上す、太閤〈○豐臣秀吉〉笑て曰、吾威光誠にさもあらんと云、其より數度獻す、實は他所より求て獻す、太閤左右の者に云、もはや松蕈獻ずることやめさせよ、生ひ過るとのたまふとぞ、

〔昨日は今日の物語　上〕一物ごとに心をつくる人の申されしは、當代御はつとなきとて、竹のこをねびきにして、たくさんにもてあつかふこと、をしき事じや、三年めには、見事の竹になるにと申されければ、みな〳〵聞て、これはおほせのごとくをしき事ぢやといはれける、又そばなる人の申されしは、總じて松だけなども、むざとたぶるはいらざる事ぢや、二三十年おいたらば、大木にならふものをと申された、

一吉田殿の山に松だけがはへ候へども、松だけの有よしよそへ聞え候へば、むつかしきとて、ふかくおんみつなさるゝ、さりながら長をかゆうさいへは、すこしつかはさるゝとて、これはわれらが山におえ候へども、世上へはおんみついたし候へども、其方へハぢんじ候、よそへ御かくし候へとて、つかはされければ、ゆうさいきやうかをあそばされ、

松だけのおゆるをかくすよし田殿わたくし物と人やいふらん

〔駿府政事錄〕慶長十六年九月廿五日、松茸一籠、紅柿二籠、自京板倉伊賀守勝重獻之、

〔日次紀事　九月〕仁和寺門主、大覺寺門主、三寶院門主所領之山中松蕈多生、故被獻禁裏院中、凡松蕈洛外處々有之、其中龍安寺山、嵯峨山所產爲美、凡有松蕈山之人採來贈親戚朋友、

〔寬政四年武鑑〕保科越前守正率〈○上總飯野〉　時獻上〈四月〉漬松茸　本多隱岐守康完〈○近江膳所〉　時獻上〈十一月〉鹽松茸　酒井雅樂頭忠道〈○播磨姬路〉　時獻上〈十一月〉鹽松茸　戶田采女正氏敎〈○美濃大垣〉

時獻上〈九月〉鹽松茸

牧野備中守貞喜〈○常陸笠間〉　時獻上〈八月九月中〉松茸　松平又七郎信賢〈○丹波龜山〉　時獻上〈三月〉漬松茸

一內藤銀次郎賴以〈○信濃高遠〉　時獻上〈八月九月ノ內〉信州松茸　石川日向守總博〈○伊勢龜山〉　時獻上〈三月〉

鹽松茸

高松茸

〔毛吹草〈三〉〕山城　龍安寺山松茸　大和　松茸　伊賀　松茸　丹波　松茸　紀伊　日

〔雍州府志〈六土產〉〕松蕈　所々山多採之、然洛西龍安寺山之所產特爲優、風味馨香非他產之所及也、凡松蕈洛陽四邊山之產、馨香有餘、是中土地氣之所使然者乎、他邦之產不然、於洛下是謂田舍松蕈、凡洛人山城之外稱田舍、又或謂伊奈加、五月黴雨節因溫蒸偶生松蕈、是謂早松、秋初黃繖蕈爲始、

〔花萬葉記〈一上山城〉〕雜菜之品　松茸　嵯峨　龍安寺山　醍醐　山科　北山

〔採藥使記〈下城州〉〕重康曰、京師ニ登ル時稻荷山ヨリ採來レルトテ、人ノ松茸ヲ調ジテ饗ナレケルガ、關東ニテ食ヒクルヨリ、格別氣味勝レタリ、兼テ當國ハ松茸ノ名物ト聞シカドモ、カホド迄ヨロシカルベキトハ思ハザリキ、殊ニ北山ノ茸ハ、年每ニ貢ニモ供スルヨシ申侍レバ、一入ノ雅興ナリシ、

〔攝陽群談〈十六名物土產〉〕止々呂美松蕈　同郡〈○豐島〉止々呂美村ノ山內ニアリ、甚香美ノ味他ニ勝タリ、市店ニ立テ求之、皆此名ヲ借ト云ヘドモ、香氣各別也、

〔甲斐國志〈百二十三產物及製造〉〕一松蕈　逸見筋、武河筋、山梨郡、都留郡ノ諸山暖クシテ雌松多キ處ニ生ズ、南方ノ山ニハ生ゼズ、甲府殿ノ頃ハ津金、小尾、柳澤諸村ノ山ニ運上金ヲ課シ、今モ白須村ノ松原ヨリハ之ヲ納ム、金峯、鹽山、惠林寺山ノ產ハ佳ナリ、

〔續江戶砂子〈一〉〕江府名產〈并近在近郊〉

水戶松茸　常州江戶ヨリ三十里、江府は松茸のよろしからぬ所也、甲州筋相州筋より出る、皆遠路にして、日を經れて肉乾けり、

〔守貞漫稿 六生業〕松茸賣

山椎茸ニ賣之、或ハ八百屋商人モ賣之、江戶ハ松茸甲州ヨリ出ルノミ、稀ナル故ニ此商人無之

〔本朝文鑑 七頌〕松茸頌　川豊美

世には花實のふたつありて、麥米はその實を稱し、梅櫻はその花を愛す、されど實をほめ花をほむるは、和漢に詩歌のふたつなれど、ふたつをひとつの風雅ならんには、人のつくりえぬもむべなるべし、爰に松茸といふ物は、草にあらねば木にもあらず、その花もなくその實もなきに、小萩がもとの露にはごくまれ、當朶の葉陰に雨をいとひて、深山のはてにおひ出れど、その名は和漢の草紙にのせられ、中宮のおまへにも出ぬるよし、すくせいかなる種をまきてや、秋風ふかばとちぎり來しけむ、しかは浮世の嵯峨を出つゝ、柳さくらの錦にも賣るなれ、その香は風のほのめきて、兵部卿宮の膳にそひ、その色は雪の白ければ、久米仙人の脛を思ふ、是より人のあこがれて、物いはざるに車をとゞめ、笑はざるに顏をかたむくよし、さは天の生質なるべし、さるから下臈の口にかなはず、すましの汁のすゝめる世に出て、みそ汁のにごれる世には居らず、予曰く、はじかみも、蕉松茸をもてなして、魯の哀公の饗應にも、しらげの飯に鱠はありとも、是を捨すしてとはいふなるべし、ある日は風調の千疊敷にかしこまり、ある時は魚町の八百屋に寢ころべば、今は西島の遊君ともあそび、東園の鼓童にもまじはりて、毀物の花柚に色めける、いはゞ實もあり花もありて、其名は風雅のひとつなるべし、

〔山陽詩鈔 五〕烹蕈

竹笋與松蕈、菜中誰爭席、狎霸春與秋、各自標風格、其味足孤行、不用借外物、如何墮俗庖、腥臊動相尾、

紫蕈小家碧、翡翠翻飛過、況此群蔬等、一一陳各技、故吾家有調度、百法從、摘落嫩蕈帶土香、紫玉不須擘、
鐵鐺活火煮、玉筋泣瓊液、滷豉助其滋、橘柚發精魄、爽氣浹齒間、腹貯西山碧、此訣秘不傳、昔受採芝客、

〔享保集成絲綸錄 三十六〕貞享三寅年五月

覺

一松だけ　八月節ゟ　〇中略

右之品々致商賣候儀、先年月切ニ御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節ニ入候日より可
致商賣之、〇中略若右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

五月

〔書言字考節用集 六生植〕初茸ハツタケ

〔物類稱呼 三生植〕菌　たけ〇きのこ中略　初茸を美濃、三河、尾張にてあをはちと云、北國にて松みゝと云、
奧の南部及近江邊にてあいずりと云、因幡にてあいたけと云、中國九州ともに松なばといふ、

〔本朝食鑑 三菜〕初茸波豆多計

集解、生於松樹陰處、攝、泉國、而松多處用初茸石實、細剉漬米泔汁而蒸之、則經年必生、狀似松蕈而小、
自初生張蓋、蓋內有細剉、內外及莖赤黃色亦綠、木葉而生、最難見之、四五月雨後生、比秋時則不多、八
九月雨後生者最多、味甘而香、其甘勝似松蕈、其香不及松蕈、但恐生于蛇蝮盤處者、其狀相似、而蓋內
無細剉、其色亦不鮮、誤食之則忽死、俗號蛇蕈、凡土菌之類、蓋下無剉者必有毒、可愼焉、
氣味、甘平無毒、多食發病、或中毒、主治未詳、

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕初茸ハツタケ

按初茸生淺山松樹陰處、狀似松蕈而小、自初生張傘、內有細剉、內外赤黃色、亦披木葉生、立秋初出之、
柔而味甘、其出也先於諸蕈、故稱初茸、性易敗、經日者繖內微生綠青色、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕香蕈〇中略
ハツタケハ雲南通志ノ青頭菌與蕈譜ノ青紫ナリ、一名アキダケ、備中備前、アキツル、勢州アキブリ、江州アヤブリ、同上マツナバ、勢州マツミ、北国松樹下草中ニ生ズ、黄赤色ニシテ微紫ヲ帯ブ、手ニ觸ルレバ藍色ニ變ズ、尾州ノ產ハ蓋ニ青斑アリ、方言アヲハチ、

〔續江戸砂子 一〕江府名產 并近在近國
小金初茸　下總國葛飾郡小金の邊所々より出ル、江戸より六里程、
相州藤澤戸塚邊より出る初茸は、下總よりはやし、然ども相州は微砂をふくみ、歯にさはりてよろしからず、下總は砂なし、風味尤佳也、

〔武江產物志 蕈〕青頭菌はつたけ 板ハシ

〔守貞漫稿 六生業〕初茸賣
是亦山椎及ビ菜蔬賣共ニ賣之、京坂ハツタケ無之、江戸ノミ賣之、京坂ノ松茸盛ニシテ、江戸初茸ハ小行也、

〔續猿蓑〕木實 附菌
はつ茸や鹽にも漬す一盛　沾圃

黄蕈

〔書言字考節用集 六生植〕黄蕈イクチ 本草、叢ニ生山中、黄色者、　黄縷蕈 同上

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕羊。肚。菜。　俗云爲久知〇中略
按羊肚菜今云鬼口蕈乎、八月中濕地多生、其繖表褐色縮曲摺、裏黄白色無細剗、滑面有孔如蜂巢、有毒不可食、

紅茸

〔和爾雅 七菜蔬〕紅菰ベニタケ 出于泉州府志

〔物類稱呼 三生植〕菌茸たけ〇きのこ 中略　紅茸を九州にてじ。こ。う。ば。うと云

〔本朝食鑑 三菌蕈〕紅蕈

紅蕈 俗訓如字、蕈内外純紅色、蓋内有細褶、不似松蕈初蕈之類、其味亦不佳、或亦有毒、俗説生于濕地、間有毒耳、

〔大和本草 九菌〕紅菰 色如胭脂、常熟縣志ニ出、又別ニ赤色ナル菌アリ、是本草芝栭類ノ葛花菜ナルカ、筑後山野ニ生ズ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕葛花菜

ベニタケアリ、蓋ノ色赤ク背ト莖トハ白色ナリ、漢名紅菰常熟縣志朱菰八閩通志胭脂菰同上紅蕈同上ベニタケニ二品アリ、春生ズル者ハ毒ナシ、ウ°グ°イ°ス°ダ°ケ°ト云、一名チシヤダケ、ジタウダケ和州ヒガレダケ同上サヽナバ雲州サヽダケ、アカダケ丹州秋生ズル者ハ毒アリ、食ヘバ吐血シテ死スルモノ多シト云、一種九月ニ生ジ、背淡黃色ナルモノアリ、ジ°モ°コ°シ°ト云、北國ニ多シ味脆美ニシテ毒ナシ、

〔武江產物志 菌〕胭脂菰 ベニタケ

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、中略○松茸平茸志°女°治°、

〔本朝食鑑 三菌蕈〕標茅蕈 訓志米地多計

釋名 標茅者茅之多生地名、野之下州黑髮山下有標茅原、此間其處也、此蕈生于茅草卑濕地、故名、或俗謂占地蕈、此據訓讀字耳、

集解、山中茅野卑濕地多生、狀似松茸而微小、有張蓋者、有不張蓋者、莖短小而圓肥、蓋上黃灰色或紫黑、蓋内有細褶而白、莖亦白、性柔弱易敗、味亦淡美、生乾及淹俱佳、洛之山中多有、就中賀茂之神山片岡及北山之生最好、其狀肥美味亦美、海西諸山亦所在有之、江東山中亦僅有、野之下州多生、送于江都市上以販之、

氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔大和本草 九菌〕シメヂ 松蕈ニ似テ小也、莖短シ、八九月山野ニ生ズ、味美好ナリ、畿内諸山ニ多シ、諸

鹿茸

州ニモ往々有之、一種似テ非ナル物アリ、煮テチバル者ハ有毒、エラブベシ、食之吐瀉ス、其毒ニ中リテ山中若藥ナクンバ、多ク冷水ヲ飲ベシ、能諸毒及菌毒ヲ解ス、本草所載蘑菌ヲシメヂト訓ズル説アリ、色白輕虚ト云ヘルハ似タリ、然ドモ蘆葦澤中鹹鹵地自然有此菌ト云ニ不合、然レバ蘑菌ニハ非ズ、シメヂハ山ニ生ズ、

〔大和本草附錄一〕黃ト地 西州ニテハ金蕈ト云、京畿ニテハ黃ト地ト云、京畿ニ稀也、シメヂノ黃ナル也、松蕈ノ未開ニ似テ小也、味好スコシ松氣アリ、松樹ノ下ニ生ズ、

〔和漢三才圖會百一芝栭〕濕地茸略○中

附濕地茸 形相似面縱外潤滑、有斯光、有毒不可食、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕香蕈略○中

玉蕈、シ。ロ。シ。メ。ジ。、シメジノ白色ナル者ナリ、蓋ノ鼠色ナルヲチ。ズ。ミ。シ。メ。ジ。ト云、美ニシテ上品ナリ、黃蕈キ。シ。メ。ジ。、一名キダケ、播州キンタケ、筑前シモダケ、雲州蓋小ニシテ莖フトシ、尤遲ク霜降テ生ズ、先莖ヲ出シ、フトクナリテ後蓋ヲ生ズ、常菌ニ異ナリ、蓋ハ黃色深ク莖ハ淺シ、紫蕈、ム。ラ。サ。キ。シ。メ。ジ。、一名紫富蕈備前山形ノ宮山ニ生ズ、シメジノ色深紫ナル者ナリ、ハツタケニ充ツルハ穩ナラズ、

〔類聚雜要抄一〕宇治平等院御幸御膳元永元年九月廿四日、大殿殿下御日記定、○中略

御汁物二度(中略)志女治鱠汁

〔國花萬葉記八近江〕遠州國内出る名物數品 ト治橫すか山より出る

〔武江產物志菌〕玉蕈四ツ谷 チヅミシメジ 紫蕈 黃蕈略○中 千本シメジ

〔本朝食鑑三菌耳〕鹿茸訓之○志○多○計○

釋名、茸俗稱加波多計、似皮革之染成也、生時赤黑色、如鹿之至春末背毛脚毛赤黑者、故名鹿茸、此非鹿角之茸、茸者菌也、

[illegible]

集解、鹿角生于原野溫土、如松茸初茸之生、喜木葉而生、上有小纖而高莖肥大、羅列相依、如椴茸平茸之並生、其色赤黃、外有毛、有鱗、晒乾變黑、如蓋圖霜紗之細裁、江東海西所在有之、近俗賞乾茸狀似肉從蓉、性亦類之、此未詳所以然、凡狀相似而性相似者有之、狀相似而性不似者有之、性相似而狀不似者亦尙有之、卽是事物之常理、何爲泥於一樣乎、陳藏器曰、上有毛、下無紋者、帶赤色者並有毒、此茸有毛而赤色、則似有毒者也、但本邦每食之而不中毒、復未聞治病者、然則曰氣味甘平無毒、而可乎否乎、

〔和漢三才圖會　百一芝栭〕革茸　革茸加波多介　豬茸井乃之之太介

按革茸山岡深叢叢生、狀似松茸、而纖外黑有粒皺、晒乾正黑而如染革、裏黃赤有如毛絲者、柄有鱗甲、山城北山鞍馬山中多出之、味微苦、用灰汁淪和爛食、味甘脆美、然易敗、故晒乾售之、最爲上品、

豬茸　似革茸而黑、纖脆弱、其裏有穴如蜂巢、洛之南山有之、豬好食之、故名之、有毒、人不可食、

〔徒然草　下〕鹿茸を鼻にあて丶かぐべからず、ちひさき虫ありて鼻より入て、腦をはむといへり、

〔毛吹草　三〕伯耆　大山黑皮茸

〔近江國輿地志　九十七土産〕黑河茸　園城寺山の所產殊に佳なり、

〔備後國郡志　上安那郡土産〕黑皮茸　高田郡山中、或佐西郡飯山、秋末出之、生用之、陰乾食之亦可也、

〔本朝食鑑　三菜〕平茸○中略

一種有扁比茸、形狀略似平茸而小、上有小蓋相依、其色黃白或灰白、味亦淡甘而佳、最無毒哉、

〔大和本草　九草〕雞タク　秋地上ニ生ズ、一莖ニ多クカサナリ生ズ、鼠茸ノ類ニシテ大ナリ、樹上ニハ生ゼズ、ヒラタケニ似タリ、無毒、

〔重修本草綱目啓蒙　二十一芝栭〕雞堫　一名雞堫滇黔　雞葼雲南通志○中略

雞堫ハマイタケト訓ズベシ、一名クモタケ、秋初深山中ニアリ、雜木ノ朽株ニ生ズ、大菌ナリ、莖ハ

短シテ甚ダフトク白色、莖ハ銀杏葉ノ形ノ如クシテ多ク重疊シ、濶サ一尺餘、色微黑ヲ帶ブ、生ニテ煮食ヘバ微臭アリ、鹽藏シテ煮食ヘバ味佳ナリ、

〔今昔物語二十八〕尼共入山食茸舞語第二十八

今昔、京ニ有ケル木伐人共、數北山ニ行タリケルニ、道ヲ踏違テ、何方ヘ可行シトモ不思エザリケレバ、四五人許山ノ中ニ居テ歎ケル程ニ、山奧ノ方ヨリ人數來ケレバ、怪ク何者ノ來ルニカ有ラムト思ケル程ニ、尼君共ノ四五人許、極ク舞ヒ乙デ出來タリケレバ、木伐人共此レヲ見テ、恐ヂ怖レテ、此ノ尼共ノ此ク舞ヒ乙デ來ルハ、定メテヨモ人ニハ非ジ、天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラムトナム思テ見居タルニ、此ノ舞フ尼共、此ノ木伐人共ヲ見付テ、只寄ニ寄來レバ、木伐人共極ク怖シトハ思ヒ乍ラ、尼共ノ寄來タルニ、此ハ何ナル尼君達ノ、此クハ舞ヒ乙デ、深キ山ノ奧ヨリハ出給タルゾト問ヒケレバ、尼共ノ云ク、己等ガ此ク舞ヒ乙デ來テハ、其達定メテ恐レ思ラム、但シ我等ハ其々ニ有ル尼共也、花ヲ摘テ佛ニ奉ラムト思テ、朋ナヒテ入タリツルガ、道ヲ踏ミ違ヘテ、可出キ様モ不思デ有ツル程ニ、茸ノ有ツルヲ見付テ、物ノ欲キマヽニ此レヲ取テ食タラム、醉ヤセムズラムトハ思ヒ乍ラ、餓テ死ナムヨリハ、去來此レ取テ食ムト思テ、其ヲ取テ燒テ食ツルニ、極ク甘カリツレバ、賢キ事也ト思テ食ツルヨリ、只此ク不心ズ被舞ル也、心ニモ糸怪シキ事カナトハ思ヘドモ、糸怪クナムト云ニ、木伐人共此レヲ聞テ奇異ク思フ事无限シ、然テ木□人共モ極ク物ノ欲カリケレバ、尼共食殘シテ、取テ多ク持ケル其ノ茸ヲ、死ナムヨリハ、去來此ノ茸乞テ食ムト思テ、乞テ食ケル後ヨリ、亦木伐人共モ不心ズ被舞ケリ、然レバ尼共モ木伐人共ニ互ニ舞ツブケテ咲ケル、然テ暫ク有ケレバ、醉ノ悟タルガ如クシテ、道モ不思デ各返ニケリ、其レヨリ後此ノ茸ヲバ、舞茸ト云フ也ケリ、此レヲ思フニ極テ怪キ事也、近來モ其ノ舞茸有レドモ、此レヲ食フ人、必ズ不舞ズ、此レ極テ不審キ事也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

金茸

〔甲斐國志 百二十三 産物及製造〕一 鯖茸 深山幽谷ニ生ジテ、甚大ナル物ハ一株ニテ五六觔ニ過グト云、此茸ハ始メ生ジテ不採、歷日ニ隨テ增加ス、故ニ能爲其大ナリ、味平ニシテ毒ナシ、上品トスベシ

〔庖廚備用倭名本草 五〕雞㙡(ケイシフ) 略○中 元升(升○向井)曰、筑前ニ金蕈(コガネタケ)ト云アリ、雨後ニ沙地ニ生ズ、脚高ク蓋ホソシ、其ノ色黄ナリ、故ニキンタケト名ヅク、根ニ沙ヲフクム、根ヲキリテ用フ、其ノ味輕美也、又雞㙡ノ類トモ云フベシ、

〔大和本草 九〕金蕈(コガネタケ) 松山松林赤土砂地、多葉ノ間ニ生ズ、其形松蕈ニ似テ小也、色黄ナリ故名ヅク、松氣ヲ帶タリ、脆軟ニシテ味ヨシ、毒ナシ、佳品トス、中華ノ書ニテ未見、京畿ニテモ亦未見之、

針茸

〔大和本草 九〕針タケ キズミタケヨリ小ニシテハリノ如シ、其先トガリ紫色ナリ、秋地ニ生ズ、

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕麞蕈 略○中 針蕈 ○按刺太分 中略

針蕈 似鼠蕈面無皺、長二寸許、灰白色叢生、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 芝栭〕雞㙡

獨栭 ハ。リ。タ。ケ。同名 シ。カ。ダ。ケ。ウ。シ。ノ。シ。タ。河州 ゴ。マ。タ。ケ。同上 傘ヲ張リ生ズ、白色ニシテ毛刺アリ、

アコフ

〔大和本草 附録 一〕薩摩ニアコフト云蕈アリ、松ダケノ未開ノ形ノ如シ、臭ナシ、味カロクシテ好シ、シメヂニ似タリ、夏月アリ、長四五寸、土俗ノ曰、性ヨシ毒ナシト云、

鼠茸

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕鼠蕈 肉蕈 ○俗云鼠蕈 中略

按鼠蕈今云鼠茸、平、朽木及老樹根上生之、九十月叢出、一根爲座、數十叢生、繖圓形似泡頭釘(ビヤウクギ)、長一二寸、莖細小柔軟、繖內外灰白色也、凡呼灰白色者爲鼠色、此物淺鼠色故稱鼠蕈、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 芝栭〕麞蕈 フ。ヂ。タ。ケ。 一名麞菇 事物紺珠 菰子 食物本草 增、一名地蕈 正字通 ツタリダケナリ、桑楮等ノ無毒ノ木ヲ土中ニ栽ヘ、米泔水ヲ澆テ生ゼシム、其形玉簪(ギボウシ)花ノ蕾ノ如

タ、筆頭ニ似タリ、

地蕈

〔大和本草九菌〕地皮　河間府志曰、狀如木耳、比木耳嫩而薄、出老樹下不耕之地云云、篤信按、陰溼ノ地或雨後地ヨリ生ズ、救急本草地踏菜一名地耳、狀如木耳、春夏生雨中、雨後采熟食、見日卽枯沒、是亦地皮ト同物ナルベシ、今按陰溼ヨリ生ズ、恐クハ毒アラン不可食、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕地耳　クロ○コ○　クロ○ハチ○　ジ○ヤ○ク○ビ○江州　ジ○ヤ○グ○イ○伊州　ウ○シ○ノ○カ○ハ○ダ○ケ○同上　一名地皮河間府志　紗羅請野菜博錄　地踏菜救荒野譜　皮滑蹋救荒本草　地屈聯說叢

丘陵小樹下ニ多ク生ズ、蓋至テ大ニ色黑シテ褐毛アリ、背ハ白色ニシテ蜂窠眼アリ、莖粗クシテ短ク地中ニ隱ル、味苦シ、水ニ浸シ、苦味ヲ去テ食フベシ、

土菌

〔多識編三菜〕土菌、和名豆○知○多○鷄○、異名杜蕈、菌譜地蕈、拾遺

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕土菌　ゴ○モ○ク○ダ○ケ○　一名土蕈本經逢原　獐頭蕈通雅　馗廚同上　菰生芝

〔正字通〕朝菌　菌子

梅雨中糞壤上陰處ニ生ズル、キツネノカラカサ類ノ總名ナリ、附錄ニ品類ヲ分ツ、

釋名、仙○人○帽○ハキヌガサダケ、一名ヘビキノコ、江戸クチナハノタマゴ、筑後ツユボウ、城州嵯峨コレハ路旁林側或ハ堤陰ニ生ズ、莖高サ四五寸、蓋ノ周邊ヨリ白網ヲ下シ、莖ヲ包ミ根ニ至ル、其根ヲ掘レバ甚ダ粘滑墨ムベシ、

附錄、鬼○蓋○キツネノカラカサ、クチナハノカサ、阿州糞土上ニ生ジ、形香蕈ノ如ニシテ小ク、蓋薄クシテ黑褐色背ニ切レアリ、莖ハ細クシテ内空シ、日照ストキハ枯レ腐ル、

地○苓○キツネノカラカサノ黃色ニシテ、莖微白色ナル者ナリ、アサダケト呼ブ、

鬼○筆○キツネノエカキフデ、形狹長ニシテ筆頭ノ如ク、長サ三五寸、赤色頂ニ小黑蓋アリ、夏月霖雨ノ時、墻側及ビ糞壤ニ生ズ、甚ダ臭氣アリ、ソノ根至テ粘滑ナリ、仙臺ニテキツネノラウチント云、

南部ニタホシタソト云、又黄色白色ナルモノアリ、皆毒物ナリ、

（武江産物志 草）見聳

葛花菜

（多識編 三）葛花菜、和名久須多計、異名葛乳、

（庖厨備用倭名本草 之五）葛花菜　倭名抄ニ葛花菜ナシ、多識篇ニクズタケ、考本草ニ、一名葛花乳、名山ニ皆アリ、葛ノ精華也ト云フ、秋霜空ニウカビテ芝草ノ如ク地上ニ生ズ、其色赤クシテモロシ、蕈ノ類ナリ、元升（按）○（向）曰、此説ヲミレバ、北國ニイヘル霜コシナルベシ、寛文七年十月初旬、余タマタマ北國金澤ニ客タリシ時、此レモコレヲ食ス、目ナレヌタケナレバ、其名ヲ問ニ答テ云、此タケハ霜コシト云、山野ニ霜ノ後ニ生ズル故ニ、カク名付ラレテ候ト、色味本草ノ説ト稍同ジ、其毒ナシトイヘルモシルシヲ得タリ、風味ナメスヽキノ如シ、

（重修本草綱目啓蒙 之二十四）葛花菜　クズダケ　一名葛蕈（新校正）

葛ニヨリテ生ズル菌ナリ、色赤シ、

（日本山海名産圖會 二）石蕈

葛花菜、葛の精花にして、紅菌も此種類なり、是に一種寄生するものぞ、鶯菌又さゝたけといひ、丹波にて赤蕈、南部にて仕丁たけ等の名あり、

蘆菌

（庖厨備用倭名本草 之五）蘆菌　倭名抄ニ蘆菌ナシ、多識篇或云シノジ、考本草ニ蘆ハ蘆葦ノタグヒ、此菌其ノ下ニ生ズ故ニ名ヅク、色白クシテ軽虚ニ表裏相似テ衆菌ト同ジカラズ、元升（按）○（向）曰、蘆菌ハ蘆葦蘆ノ下ニ生ズトイヘバ、澤中ニ生ズルナリ、シメジハ山ニ生ズ、松ダケノ生ズルガ如シ、然レバ蘆菌ハシメジトイヒガタシ、

（重修本草綱目啓蒙 之二十一）蘆菌　オギタケ　信州　ヨシダケ　筑後　一名白雞蘆（東醫寶鑑）

季秋好テ蘆荻叢中ニ生ズ、形小クシテ玉蕈ノ如ク、灰白色食フベシ、

竹蓐

〔日本山海名產圖會二〕石茸

葭菌は蘆荻の中にせうずる玉蕈なり、九月頃にあり、

〔武江產物志草〕葭菌

〔多識編三〕竹蓐、和名多○計○多○計○、今俗云奴○乃○比○豈○、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕竹蓐（スヾメノタマゴ、スヾメノマヽ筑前、スヾメノイヽ同上、ツバメノマヽ筑後、スヾメノモチ備前、タケノクサビラ和漢三才圖會）

皮竹蘆明竹等ノ根上二三尺ノ間ニ附キ生ズ、木耳ノ形ノ如ニシテ、小ク多ク重リ生ズ、黃色ナリ、乾ケバ黃白色トナル、又淡竹苦竹等切テ、土上ニアル者、或ハ籬ニ作ル者ニ、雨後銀杏（イチヤウ）葉ノ形ノ如キ白菌ヲ生ズ、甚ダ薄シテ小ク、五六分許アリ、コレヲタケナバト云、竹林中土上ニ生ズル者ハ、二三寸ノ大サナルモアリ、

松露

〔多識編三〕麥蕈、和名今按松露歟、日本三保、住吉、泉涌寺、往往有焉、

〔本朝食鑑三菜〕松露

集解、松露其皮黑帶微赤、肉白脆、處々在山中松樹陰處之土砂上、是松之津氣凝結而成者、故俗號松露、其味淡甘、生時有微香、多食無害、日乾以傳四方、用時浸過則略似生、然味淡香少、今時供上饌、不爲毒者宜矣、諸州多有之、就中前筑生（イキ）松原所生者爲珍、或曰猪苓也、生時內實、乾則輕虛、全似猪苓、凡猪苓者他木之餘氣所結楓木爲多、古人未言松氣之生、又曰、茯苓之未經年而幼稚者也、此爲還是、按茯苓者多年樵斫之松根之氣味抑鬱未絕、精英未淪、其精氣盛者發泄于外、結爲茯苓、然則松露亦號小茯苓而可乎、肉有赤白二種、白者味佳、　氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕香蕈

麥蕈、シヤウロ、中山ニテモ松露（勝備餘）ト云フ、一名麥丹蕈、（雷譜）地腎、（廣東新語）松乳、（淸俗）松菰、（同上）海邊松

下砂中ニ生ズ、故ニハマシヤウロト云、形圓ニシテ馬勃ノ如ニシテ縫アリ、春末ヨリ夏ニ至リ盛ニ生ズ、白色ニシテ柔軟ナルヲ上トス、米シヤウロト云、又チパリトモ云、即モチシヤウロナリ、久ク經テ黑クナラズ、粉トナリテ飛ブ、乾ス者ハ其肌甚害ナリ、一種外黑ク內黃ナル者ヲ麥シヤウロト云フ、一名香シヤウロ(駿州雲州)、久ヲ經レバ色黑ク堅クナル、黑色ニ變ジタル者ハ食フベカラズ、

(毛吹草三)攝津 松露　駿河 三穗松露　筑前 松露

(雍陽群談十六名物土產)同所(住吉)松露 同社(住吉)ノ松原ニアリ、土人拾之市店ニ送ル、味他ニ勝タリ、

(採藥使記中駿州)重康曰、駿州三穗ヨリ松露ヲ多ク出ス、他國ニ生ルヨリハ味殊ノ外好ク、香モ佳ナリ、故ニ此所ノ名物ナリト云フ、

(甲斐國志百二十三產物及製造)麥蕈 俗ニ松露ト云、砂地ノ松林ヨリ產ス、白須村ノ松原ニ生ズル者佳ナリ、

(武江產物志野菜)麥蕈 スナ村

(奧羽觀蹟聞老志三土產)松露 城外以東海濱松根必多、此物又所出于宮城郡松森地、尤爲佳、

土栗

(大和本草九菌)土栗 形狀欓實ニ似タリ、大サモ同ジ、又松露ノ如シテ少扁シ、形又栗ニ似タル故、俗ニ土栗ト云、山中赤黃土ノ濕地ニ二月ヨリ四月ニ至テ生ズ、多クハ岸ニ生ズ、夏月ハ生ゼズ、煮テ食ス、味淡ク無毒、皮少コハシ、如木耳、內ノ肉ハ如馬勃ヤハラカナリ、肉新ク白キハ可食、久シテ黑ニ變ズ不可食、頗松露ニ似タリ、後ニ皮サケ開キテ粉アリ、片片ヨワカル、能金瘡ノ血ヲ止ム、內ニ絲ノ如クナル丸キモノ殘ル、於本草及他書未見之、其性未詳、

馬勃

(和漢三才圖會九十七菌)馬勃 馬疕 馬㽲 灰菰 牛屎菰 俗云保宇倍以之(中略)

按馬勃、園中竹林荒野有之、大如鳥卵、圓有薄皮、灰白色、肉白、頗似麥蕈、煮食味淡甘、既老則甚大、形如死首面貌、其皮易裂、中煤黑色、虛軟如綿而粉出、傅金瘡止血有神効、

茯苓

〔重修本草綱目啓蒙 菌十六〕馬勃　オニフスベ古名　ヤブダマ　ヤブタマゴ　イシワタ　イシノワタ豊州　ムマノクソダケ　ムマノホコリダケ　ホコリダチ大和本草　ホコリダケ　ヂホコリ佐渡　ミヽツブレ　ミヽツプシ防州　ツンボダケ　キツ子ノハイブクロ若州　メツブシ　キツ子ノチヤブクロ和州　チトメ　キツ子ノヒキチヤ勢州　キツ子ピ南部　キツ子ノハイダハラ能州　カザブクロ奥州　ホウホウダケ備前　カハソノヘ江州　カゼノコ同上

一名馬屁勃附方　馬庀菌醫學蒙筌　馬包醫府験方　灰包同上　馬胞本草還　馬天乙茸採取月令村家方ニ、天ヲ夫ニ作ル、

五六月路旁ノ陰地、或ハ林中忽然トシテ土上ニ生ズ、根ナク紫褐色、初ハ小圓ニシテ馬矢ノ如シ、不日ニ大塊トナリ、毬ノ如ク西瓜ノ如シ、コレヲ擧レバ甚輕虛ナリ、コレヲ破レバ綿ノ如キ者多ク重レリ、コレヲ彈ズレバ粉多ク出ヅ、一種キ。ツ。子。ノ。チ。ヤ。ブ。ク。ロ。ト呼者アリ、一名ツチガキ、クチグリ、ヤマガキ同州、チヂガキ土州、ツチフグリノツバ大和、メツブシ江州、山ノ土上ニ生ズ、初ハ圓ニシテ硬ク、淡黑褐色、日ヲ經テ皮開キ、七八瓣ニ分レテ地ニ就キ、上ニ小圓袋アリテ柹ノ形ノ如シ、コレヲ破レバ内ニ細粉多シ、又馬勃ノ一種ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六 寓木〕茯苓　マツホド和名鈔　マツポヤ阿州　ホヤ同上　一名金翁本草還

雲苓同上　絳晨伏胎醫學類編　萬岑精種杏仙方　更生外臺秘要　雪殷事物異名　茯菟通志略

凡ソ茯苓ハ黑松ニ生ジ、松耳ハ赤松ニ生ズルモノナリ、赤松ニモ茯苓ヲ生ズレドモ少シ、即赤茯苓ナリ、京師ノ地ハ赤松多シ、故ニ松耳多シ、中國九州ニハ黑松多シ、故ニ茯苓多シ、凡ソ大松樹ヲ斫リタルカブヲ茯苓撥ト云コト蘇頌ノ説ニ出、コノ根ノ周邊ノ土中ニ根ヲ離レテ自ラ生ズ、又松根ヲ包テ生ズルモノアリ、茯。神。ト云、和產ニ茯神多シ、中ニ包ミタル根ヲ神木ト云フ、茯苓生ジテ六七年以後、十年ニ至ルマデニ掘リ取ルモノヲ上品トス、ソノ六年以内ハ嫩小ニシテ未ダ堅

カラズ、十年以外ハ甚大ニシテ皆良ナラズ、茯苓ノ有無ヲ試ル器ヲ鐵頭鎗ト云コト蘇頌ノ說ニ出、西國邊ニテ火筋ヨリ粗大ナル鐵長二尺餘ナルニ、丁形ノ柄アルモノヲ、長州ニテ茯苓ツグト呼ビ、肥前ニテ茯苓ツキト云フ、又長サ四尺許、濶サ一寸許ニ薄ク製スルモアリト云、コレヲ地ニ刺シ拔テ試ム、ソノ鐵器ヌケ難ク、或ハ拔テ茯苓ノ臭アリ、或ハ芋魁ヲ刺シタル如ク、粘汁アルヲ驗トシテ掘リ取ル、長州ハ松ノ多キ地ナル故、茯苓獨ニ限ラズ、凡ソ海邊沙地ノ活松下ニ多シ、然ドモ大木ニハ無ク、小木ニハ多シ、又唐山ニテハ人力ニテ栽ヘ成スモノアリ、本經逢原ニ、一種栽蒔而成者曰、蒔苓、出浙中、但白不堅、入藥少力ト云、本草彙言ニモ、浙江溫州處州等處山農ツクリ出ス法ヲ載タリ、凡ソ茯苓數品アリ、皆外ニ皺メル黑皮アリ、切テソノ色內外白キ者アリ、白茯苓ナリ、內外赤キ者アリ、赤茯苓ナリ、外白內赤キ者アリ、原白色ナル者腐テ赤キ者アリ、輕虛ナル者アリ、堅實ナル者アリ、根ノ大小ヲ問ハズ、堅實ナル者ヲ採ベシ、色白シト雖、輕虛ナレバ佳ナラズ、京師ノ藥舖ニハ、江戶、大和、廣島、長門、出雲、筑前、薩摩ヨリ來ル、薩摩ヲ上トス、內色白シ、長門ヲ次トス、大和ハ外白內赤シ、江戶ト云ハ常陸州笠間ヨリ出スヲ云、赤白皆堅實ニシテ、切リ口ニ光リアリ、堅實ナラザル者ハ下品ナリ、又全ク乾タルモノ、或ハ一二寸ノ大サ、寸餘ノ厚サニ切タル等ハ、必中ニ腐リアリテ良ナラズ、故ニ片苓ヲ用ユベシ、江戶ハ堅實ナラザルモノモアレドモ光リアリ、廣島ハ堅實ナリ、片苓ヲ煙火ニ映シテ、內ニクモリナキヲ擇ブベシ、少シ黑クタモリアルモノハ、コレヲ破レバ必中ニ腐リアリ、又片苓外ニ黴ヲ塗リタルアリ、又全ク淺黑色ナルアリ、破レバ內白シ、是苓ヲ粉ニシテ餅トナスモノニシテ佳ナラズ、防州ノ片苓ニ五分許ノ厚サニ切タルアリ、一夜水ニ浸シ製スルモノナリ、又薄クシテ褐腐乾ノ如クシタルアリ、三四日水ニ浸シ製スルモノナリ、小角製ノモノハ六七日モ水ニ浸シ製スト云、茯苓內外俱ニ赤キモノハ、眞ノ赤茯苓ナリ、稀ニアリ、今藥舖ノ片苓ニ、外白ク內赤キモノアリ、コレハ原白キモノ乾損ジテ腐リ赤クナリタ

ルナリ、用ルニ堪ヘズ、凡茯苓ハ皆必松根ニ生ズル者ナレドモ、蕨ノ根ヲ掘ル時出ル事アリ、ワラ。ビ。茯苓ト云、蕨根ヲ包ムモノモアリ、又葛根ヲ掘ル時出ルコトモアリ、皆ソノ地原樹松アリシ處ナルユヘ、地中ニノコリタルモノナレバ劣品ニ非ズ、又樹木ナキ河邊大水ニテ崩レテ、茯苓出ル事アリ、又他木根ヨリ出ル事アリ、皆ソノ地古ヘ松木アリシ處ナレバナリ、

增、廣雅曰、茯神茯苓也、太平御覽引、本草經、茯苓一名茯神、足、以的證、

〔大和本草草木十一〕茯苓　茯苓茯神皆老松ノ根下ニ生ズ、茯苓ハ松根ヲハナレテツヾカズ、茯神ハ松根ニ附結シテツヾケリ、故茯神ハ其内ニ根ツラヌケリ、松根ノ蔓ノ如ク長キニ、左右ニ連ナリ附テ多ク生ズ、譬ヘバホドノ蔓ノ長キニ、芋ノ子ノ如ナル丸根多ク連リ附クガ如シ、故ニ和訓ニ松ホド、云ナルベシ、本草ノ雷斅ガ說ヲ見レバ、其マヽキザミ用ユベカラズ、皮ヲ去キザミ、ウキクダキ細ニシ、水ニ入カキマゼ、ウカブヲフルヒニテコシテ、其フルヒノ内ニトマルハ、茯苓ノ赤筋ナリ、スツベシ、コレヲ其マヽ用レバ目ヲ損ズトイヘリ、今案ニ性ヨキハ赤筋ナシ、其マヽ用ベシ、今西州ヨリ出ルハ性ヨクシテ赤筋ナシ、其マヽキザミ用ベシ、赤筋アルハ最下品ナリ、白キヲナマビノトキニヲサメヲケバ、其色十分ニ白カラザレドモ、白茯苓トスベシ、生ナルヲ即時ニ土氣ヲ洗去、皮トモニ横ニ切テ薄片トシ乾スベシ、遲クワレバ赤色生ズ、白苓ノソンジテ色赤クナリタルヲ、藥肆ニ赤茯苓トス、用ユベカラズ、赤茯苓ハ初ヨリ赤シ、藥肆ニウル白茯苓ハ、皮ヲ去テカキ餅ノ如ニス、潔白ニシテ堅シ、但多クハ茯神ナリ、擇ブベシ、皮ナガラ切ヘギタルヲ用ユベシ、近年ハ茯苓ノアル松ヲ目キヽシテホルニ、必其下ニアリ、本草ニモ此事アリ、時珍ガ說可、考、見淮南子、千年之松下有茯苓ト云、典術言、松脂入地千歳爲茯苓、今案ワカ木ニモ茯苓アリ、ザレドモ老樹ノ根ニアルニハ性不及、

〔本草辨疑四木〕茯苓

讃山松下ニ多生ズ、今ハ松山ニアラザレドモ、草山ニモ多ク生ジテ、葛蕨ナドヲ堀時、自然ト堀出セリ、往昔松山ニシテ松氣相殘テ今ニ生ズル者カ俗ニ蕨茯苓ト云、茯苓ノ裹ニ蕨ノ根孕テアルナリ、

西國ヨリ圓ナガラ大坂ヘ出ヲ、藥家ニ求之タ輪ニ切テ乾ス、

內赤ク外白ト、內外共ニ白ト赤ト、堅實ト輕虛ト、大小ト種々アリ、堅實ニシテ大ナル、內外共ニ潔白ナリト云ヘドモ、輕虛ナルハ不可用、眞ノ赤茯苓甚ダ希ナリ、元ト白ヲ乾シ損ジテ赤クナスナリ、

外白內赤亦多シ、是ハ大坂ニテ乾ス時、能キ日ニ乾セバ片ツレテ所見惡キ故ニ、不熟ニシテ極ニ入、內ニテ自ラ乾ス、故ニ茯苓ノ內タミ處リテ赤ク、外ハ一タビ日ニ曝ス、故ニ白シ、藥力甚惡シ、不可不擇、亦是ノミニ非ズ、採藥ノ者或舒商外見ヲカザリテ、藥力ヲ損亡スル者甚多シ、唯外見ヲ不擇專ラ性力ヲ擇テ可用也、

〔本草一家言三〕茯苓　一名茯神、蓋茯苓以其狀而名、猶豬苓馬苓之例也、神以其功而名、道家者流自以松根穿過者爲伏神、分而爲二條、後世醫家襲用其說、不審講究之誤耳、若以茯神爲一物、則茯苓豈爲無神功者、無神功而配參朮草以有神四君六君之稱哉、況觀醫家之所用、拔去其穿過黃根而不用其根節、又別名茯苓黃節、此何支離破碎乎、殊無意義、予直斷以茯神合于茯苓、而後爲足以明茯苓之神功也、又按本草有分赤白以配氣血之說、曰白治氣赤治血、赤白宜通用、不必拘泥、又有蕨根化茯苓之說、世爲下品而不用、其辨詳于稻若水鑑愍炙同書中可併考、

〔採藥使記五〕茯苓　マツホド

薩州ノ邊多ク出ス、琉球人之ヲ中國ニ入ル、彼人甚ダ之ヲ貴賞セリ、其他處在最多シ、凡風烈キ處松樹ノ下ニ生ズ、然ドモ海邊南風烈キ處極テ多シ、風ソ爲ニ精氣ヲ上ニ發スルコト不能、精氣已

豬苓

根ノ下ニ伏シテ茯苓ヲ生ズ、苓ハ靈也、木根ノ貫キタルヲ茯神ト云、又色赤キ者ヲ赤茯苓ト云、各名ヲ分ツト雖ドモ、實ハ相同ジ、房州ノ邊ニテハ大松ヲ伐リ、三五年ヲ經テ其伐口少シ朽タルヲ見テ有無ヲ知ル、近年奥羽ニモ取出ス、風烈キ處或折枯、枝葉ノ大ニ衰ヘタルヲ見テ、其四方二三尺、或ハ一二間ヲ中ヲ鐵杖ニテ頻ニ刺シ試ミ、若シ茯苓アレバ鐵杖ニ附キ、又手ニ覺エアリ掘トリ、其大ナルハ斗ノ如シ、小ナルハ彈丸ノ如シ、能ク洗淨シ、粗皮ヲ去リ水ニ浸シ、一分四方ニ剉ミ、日乾スベシ、之ヲ角製ト云、又七八片トナシ淸水ニ浸シ、一宿ヲ經テ土氣ヲ出シ日乾スベシ、之ヲ片キト云、世俗云、風雨ナキ夜煤竹ニテ松下ヲ尋子、茯苓アレバ火滅ス、其處ヲ記シテ明日掘得ルト云ハ誤也、又蘇ノ根ヲ掘テ茯苓ヲ得ルト云、是レ往昔其處ニ松樹有テ、根櫱殘テ、生ズル者ナラン乎、松岡氏ノ考也、

〔常陸風土記 香島郡〕郡東二三里、高松濱、大海濱邊流著砂貝、積成高丘、松林自生、○中略自此以南、至輕野里若松濱之間、可卅餘里、此皆松山、產伏。苓。伏。神。、每年掘之、其若松浦卽常陸下總二國之堺、安是湖之所、有沙鐵、造劒大利、然爲香島之神山、不得輙入伐松穿鐵也、

〔本草和名 十三木〕猪苓 陶景注云、作猪矢、故以名之、 一名猳猪矢 仁諝音加 一名楓樹苓 出陶景注 一名豕橐 疏文云出莊子 和名加。之。波。岐。、一名久。岐。、一名也。末。加。之。波。、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六寓木〕猪苓 通名 ナ。ツ。マ。イ。タ。ケ。南部 ハ。ギ。ホ。ド。同上 一名道河椽 本物異名

朱苓 萬病回春　豨苓 古文後集　猪鈴 正字通　豨零。同上　茱苓 證類本草

舶來多シ、眞物ナリ、莖葉ナク惟根ノミ土中ニ生ジ、形猪屎ニ似タリ、故ニ名ク、體輕ク外皮黑色、又赤色ヲ帶ル者アリ、內ハ白色今和產多シ、丹州及諸州ヨリ出ス、皆山中或ハ河堤ノ地ヲ掘テ採リ出スト云、土上ニ出ル者ハ稀ナリ、故ニ何レノ木ヨリシテ生ズル事詳ナラズ、本邦ニ楓樹ナケレバ、楓樹苓ノ說ハ尤モ誤ナリ、根塊濶サ一二寸、長サ二三寸、凹凸多クシテ四瓣ノ花ヲ開ク、瓣尖リ

タ實ナシ、一根數花、仙臺ヨリ出ル者花多シ、舶來ノ者ニハナシ、

(和漢三才圖會 八十五 寓木)雷丸 ○中略

按猪苓(與楓木之餘氣所結)雷丸(與竹之餘氣所結)二物共未知、必其然乎、而猪苓自廣東南京福州舶、毎年將來、凡至一二千斤、雷丸自處處唐船及咬𠺕吧舶所將來、凡至五六百斤、價亦賤、然則中華外國共有之不珍物也、明焉、然日本朝鮮共竹不少、而雷丸無出、是亦與琥珀之辨同矣、

(採藥使記 上 奥州)顯任曰、奥州南部大曾生ノ土中ヨリ猪苓ヲ產ス、方言ニハヤギホドト云フ、土ノ上ニハ見ル事マレナリ、山中堀ノ所ヲ堀タ取ル、

先生按ズルニ、和邦ニ猪苓ト稱スル物ハ、ホコリ茸ノ類ナリ、其形尖リ長クシテ華產ノ圓ナルニ似ズ、

(農業全書 五 山野菜)菌栭

くさびら、きのこの類、是おほし、山林幽谷に立ながら枯、又はたをれたる朽木などに、自ら生ずる物なり、椎かしなどに生ずる物人に毒せず、此外の木に生るは、みだりに食ふべからず、又園に作るは楮の木、闊葉の肥たるを、濕地の風の吹すかさぬ所にうづみをき、常に米泔をそゝぎ、うるはひを絶すべからず、五七日過れば必菌生る物なり、又畠のうねの中に糞を多くふり、楮木を五七寸に切、うちくだき、菜をうゆるごとくにならべ置て、土をおほひ水をそゝぎ、ながくうるほひを絶さゞれば、先初は小き菌生じ、漸々に大きなるが生ずる物なり、もと楮木なれば毒にならず、又椎の木の中まではいまだくちず、皮はありて、大かたくちたるを、日かげの風の吹すかさぬ所に、横にねさせ置、むしろこもをおほひ、上より泔水を頻りにかけ、しめり氣を絶さずし置ば、椎蕈多く生ずる物なり、他の朽木にも蕈は生る物なれど、木の性によりて毒なり、五木と椎櫧は毒なし、桑槐楡柳楮五木是なり、此外榎木に生ずるは、常に用ゆべし、又楮の古かぶに成て、わか立出ぬあ

り、是を切て肥地に埋みをけば、菌多く生ず、泔水などかけをくべし、久しき楮畠に多きものなり、

〔日本山海名產圖會 二〕香蕈（しいたけ）一名香蕈（かうこ）香菌（かうきん）椎蕈（しいじん）日向の產を上品とす、多くは熊野邊にも出せり、○中略今和州吉野又伊勢山などに作出せるもの、日向には勝れり、其法は扶移（しで）の樹を多伐て、一所にあつめ、少し土に埋め、垣を結まはして風を厭、其まゝ晴雨に暴すこと凡一年計、程よく腐爛したるを候がひて、かの斧をもち撃て目を入置くのみにて、米泔を沃ぐこともなし、されども其始て生ふるはすくなく、大抵三年の後を十分の盛りとし、それより毎年に生ふるのすくなければ、又斧を入れつゝ、年を重ぬなり、春夏秋と出て多はなし、其內春の物を上品として、春香（はるこ）と稱す、夏は傘薄く味も劣れり、又別に雪香（ゆきこ）と云て、絕品の物は、緣も厚く形勢も全備へり、是は春香の內より撰出せるものにて、裏なども潔白なるを稱せり、

蕈狩

〔倭訓栞 前編十四〕たけ○中略　たけかりは、菌獵の義、

〔古今和歌集 五秋〕きた山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる、　そせい法し
紅葉は袖にこき入れてもていでなん秋はかぎりと見ん人のため

〔親俊日記〕天文二十一年十月五日、龍安寺へ御成、松茸狩、

〔百一錄〕寬文十三年○延寶元年九月廿五日、女院御幸于岩倉、茸狩御遊云々、

〔閑窻自語〕詠茸狩於和歌事
寬延二年九月月次和歌御會に、故殿○柳原光綱秋山といふ事をよみ給ひける、
あかず猶茸狩りくらしかへるさにこのみをひろふ秋の山ぶみ、櫻町院上皇于時仰せられけるは、內々の和歌には、この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ、それよりこのかたたけがりのことをおほやけわたくしのうたにも、人々よみ侍るなり、又この事をあんずるに、ふるき事にて、古

今集にも、北山に僧正遍昭とたけがりに、素性法師のまからいける事見えたり、(後西院天和三年八月、秋の山といへる事をよませ給ひける、またしこんけふはしみぢかれにたけがりくらす秋の山ぶみ、)

(俳諧炭俵集 秋)女中の茸狩を見て

茸狩や鼻の先なる歌かるた　　其角

(宜禁本草 乾集五菜)菌檽　甘寒、(地生名菌、木生名檽、)山東為蕈、生桐柳枳椇木、(紫色名香蕈、白色名肉蕈、)皆因湿気薫蒸而成、生山僻処者多毒殺人、夜中光者有毒、煮不熟者有毒、煮訖照人無影者有毒、欲爛無虫者有毒、(春夏有毒、秋冬無毒、有蛇虫過也、)有調気胃気、人尤忌、食楓蕈笑不休、中蛇蕈毒者以地漿解之、日用本草曰、主五臓風壅経脈動痔疾、令人昏々多睡腹微痛、

(俳諧糞袋 国部十冊)たけ 略○中 凡そ毒なき木に生ずる耳は皆食ふべし、

(庖厨備用倭名本草 菜部五)木耳 略○中 元升(弁)○中 曰、山人ノトリ来ルハ、其木シリガタシ、病人ニ尤イムベシ、凡ソ木耳毒ニ犯サレタルニハ、多瓜ノシルヲツキシボリテ、其汁ヲ用テ毒ヲ解ス、

(大和本草 附録一 菜類)椎耳　ブナノ木ニ生ズル者、形状ハ椎ケレドモ有毒、或殺人不可食、今世或生椎耳ヲ食シテ死者アリ、蓋不知其故者、蓋ブナノ木ニ生ズルヲ食スル歟可択、木耳ナド木ニヨリテ其性良毒アルガ如シ、

(本朝食鑑 菜部三)初茸 略○中

伊久知(状似初茸、裏内紫褐、黄白色不紅、或赤、生於年荒陰湿處、性有毒、人嫌人恐、可捨之、又五月梅雨中、湿地生白蕈、此亦有毒、山人嫌之、亦不足食之、)

(和漢三才図会 菌類一百二)初茸 略○中

蛇茸　似初茸而裏無皺者名蛇茸、有毒不可食、凡茸類裏無皺文者、皆有大毒、

(重修本草綱目啓蒙 菜二十)葛花菜 略○中

ベニタケニ二品アリ、春生ズル者ハ毒ナシ、略○中 秋生ズル者ハ毒アリ、食ヘバ吐血シテ死スルモ

ノ多シト云、

〔今昔物語二十八〕左大臣御讀經所僧酔茸死語第十七

今昔、御堂ノ左大臣ト申シテ、枇杷殿ニ住セ給ヒケル時ニ、御讀經勤ケル僧有ケリ、名ヲバ□□トナム云ケル、□□ノ僧也、枇杷殿ノ南ニ有ケル小屋ヲ房トシテ居タリケルニ、秋比童子ノ童ノ有テ、小一條ノ社ニ有ケル藤ノ木ニ、平茸多ク生タリケルヲ、師ニ取リ持來テ、此ル物ナム見付タルト云ケレバ、師糸吉キ物持來タリト喜テ、忽ニ汁物ニ爲サセテ、弟子ノ僧童子ト三人指合テ吉ク食テケリ、其ノ後暫アクテ、三人乍ラ俄ニ頭ヲ立テ病迷フ、物ヲ突キ難堪ク迷ヒ轉テ、師ト童子ノ童トハ死ヌ、弟子ノ僧ハ死許病テ落居テ不死ズ成ヌ、卽チ其ノ由ヲ左大臣殿聞セ給テ、哀ガリ歎カセ給フ事无限シ、貧カリツル僧ナレバ、何カヾスラムト押量ラセ給テ、葬ノ料ニ絹布米ナド多ク給ヒタリケレバ、外ニ有ル弟子童子ナド多ク來リ集テ、車ニ乘セテ葬テケリ、而ル間東大寺ニ有ル□□ト云フ僧、同ク御讀經ニ候ヒケルニ、其レモ殿ノ邊近キ所ニ杲僧ト同ジ房ニ宿シタリケルニ、其ノ同宿ノ僧ノ見ケレバ、□弟子ノ下法師ヲ呼テ、私語テ物ヘ遣ツ、要事有テ物ヘ遣ニコソハ有ラメト見ル程ニ、卽チ下法師返リ來ヌメリ、袖ニ物ヲ入レテ袖ヲ覆テ隱シテ持來タリ、置クヲ見レバ、平茸ヲ一袖ニ入レテ持來タル也ケリ、此ノ僧此ハ何ゾノ平茸ニカ有ラム、近來此ク奇異キ事有ル比、何ナル平茸ニカ有ラムト、怖シク見居タルニ、暫許有テ燒漬ニシテ持來ヌ、□□□飯ニモ不合セテ、只此ノ平茸ノ限ヲ皆食ツ、同宿ノ僧此レヲ見テ、此バ何ゾノ平茸ヲ俄ニ食ゾト問ヘバ、□□ガ云ク、此レハ□□ガ食テ死タル平茸ヲ取ニ遣ハシテ食也ト、同宿ノ僧此ハ何ニシ給フ事ゾ、物ニ狂ヒ給フカト云ヘバ、□□欲ク侍レバト答ヘテ、何ニトモ不思タラテ食ヲ、同宿ノ僧制シ可敢クモ非ヌ程ナレバ、此ク見置マヽニ怱テ殿ニ參テ、亦極キ事出詣來候ヒナムトス、然々ノ事ナム候フト申サスレバ、殿此レヲ聞セ給テ、奇異キ事カナナド仰セ給フ程ニ、□□御

讀經ノ時闕トテ急ス、殿何ニ思テ此ル平茸ヲバ食ケルゾト問ハセ給ヘバ、□□ガ申ク、□□ガ葬料ヲ給ハリタ駐ヲ不見給ハズ、成ヌルガウラヤマシク候也、□□モ死候ヒナムニ大路ニコソハ候棄候ハメ、然レバ□□モ茸ヲ食テ死ニ候ナバ、□□ガ樣ニ葬料給ハリ候ヌベカメリト思給ヘテ、食ヒ候ヒツル也、其レニ不死ズ成リ候ヒヌレバ、ト申シケレバ、殿物ニ狂フ僧カナト仰セ給ヒテナム咲ハセ給ヒケル、然レバ早ウ極キ毒茸ヲ食ヘドモ不酔ヌ事ニテ有ケルヲバ、人ヲ傳カナムトテ此ク云居ル也ケリ、其ノ比ハ此ノ事ヲナム世ニ語テ咲ヒケル、然レバ茸ヲ食テ醉テ死ニ死タル人モ有リ、亦此ク不死ヌ人モ有レバ、定メテ食フ樣ノ有ルニコソハ有ラメトナム語リ傳ヘタルトヤ。

金峯山別當食毒茸不醉語第十八

今昔、金峯山ノ別當ニテ有ケル老僧有ケリ、古ハ金峯山ノ別當ハ、彼ノ山ノ一﨟ヲナム用ケル、近ウ成テ然ハ无キ也ケリ、其レニ年來一﨟ナル老僧別當ニテ有ケルニ、次ノ﨟ナル僧有テ、此ノ別當早ウ死ネカシ、我レ別當ニ成ラムト熟ニ思ケレドモ、強ヨ強コトシテ死ニ氣モ无カリケレバ、此ノ二﨟ノ僧思ヒ侘テ思ヒ得ル樣、此ノ別當ガ年ハ八十ニ餘ヌレドモ、身スコヤカニ、七十ニ无タ強々トシテ有ニ、我レモ既ニ七十ニ成ヌ、若シ我レ別當ニモ不成デ、前ニ死ヌル事モゾ有ル、然レバ此ノ別當ヲ打殺サセムモ聞エ現ハナリヌベケレバ、只毒ヲ食セテ殺シテムト思フ心付テ、三寶ノ思食サム事モ怖シケレドモ、然リトテハ何カハセムト思テ、其ノ毒ヲ思ヒ廻スニ、人ノ必ズ死ヌル事ハ、茸ノ中ニ和。太。利。ト云フ茸コソ、人其レヲ食ヒツレバ醉テ必ズ死ヌル、此レヲ取テ艶ズ調美シテ平茸ゾト云テ、此ノ別當ニ食セテハ必ズ死ナムトス、然テ我レ別當ニ成ラムト謀テ、秋比也ケレバ、自ラ人モ不具ズシテ、山ニ行テ多ク和太利ヲ取リ持來ニケリ、生夕暮方ニ房ニ返テ、人ニモ不見セズシテ、皆鍋ニ切入ツ、煎物ニ艶ズ調美シテケリ、然テ夜明テ未ダ朝ニ別當ノ

許ニ人ヲ遣テ急ト御座セト云ハセタレバ、別當裸モ无ク杖ヲ突テ出來タリ、房主指向ヒ居テ云ク、昨日人ノ微妙キ平茸ヲ給ヒタリシヲ、煎物ニシテ食セムトテ申シ候ヒツル也、年老テハ此樣ノ美物ノ欲ク侍ル也ナド語ラヘバ、別當喜テ打ウナヅキテ居タルニ、飯ヲシテ此ノ和太利ノ煎物ヲ温メテ、汁物ニテ食セタレバ、別當糸吉ク食ツ、房主ハ例ノ平茸ヲ別ニ構ヘテゾ食ケル、既ニ食畢テ湯ナド飮ツレバ、房主今ハシ得ツト思テ、今ヤ物突迷ヒ頭ヲ痛カリ狂フト、心モトナク見居タルニ、總テ其ノ氣色モ无ケレバ、極ク怪シト思フ程ニ、別當齒モ无キ口ヲ少シ頬咲テ云ク、年來此ノ老法師ハ、未ダ此ク微妙ク被調美タル和太利ヲコソ不食候ナリヌレバト、打云テ居タレバ、房主然ハ知タリケル也ケリト思フニ、奇異ト云ヘバ愚也ヤ、耻クテ更ニ物モ否不云ズシテ、房主入ヌレバ、別當モ房ヘ返リニケリ、早ウ此ノ別當ハ、年來和太利ヲ役ト食ケレドモ、不醉ザリケル僧ニテ有ケルヲ、不知デ構タリケル事ノ、支度違テ止ニケリ、然レバ毒茸ヲ食ヘドモ、露不醉ヌ人ノ有ケル也ケリ、此ノ事ハ其ノ山ニ有ケル僧ノ語リケルヲ、聞傳ヘテ此ク語リ傳ヘタルトヤ、

比叡山横河僧醉茸誦經語第十九

今昔比叡ノ山ノ横川ニ住ケル僧有ケリ、秋比房ノ法師山ニ行テ木伐ケルニ、平茸ノ有ケルヲ取テ持來タリケリ、僧共此レヲ見テ、此ハ平茸ニハ非ズナド云フ人モ有ケレドモ、亦人有テ此レハ正シキ平茸也ト云ケレバ、汁物ニシテ栢ノ油ノ有ケルヲ入レテ、房主吉ク食テケリ、其ノ後暫許有テ頭ヲ立テ病ム、物ヲ突迷フ事无限シ、術无クテ法服ヲ取出テ、横川ノ中堂ニ誦經ニ行ヌ、而ニ□□ト云フ僧ヲ以テ、導師トシテ申シ上サス、導師祈リ持行テ畢ニ、敎化ニ云ク、一乘ノ峯ニハ住給ヘドモ六根五內ノ□□ノ位ヲ習ヒ不給ザリケレバ、古ノ所ニ耳ヲ用ル間、身ノ病ト成リ給フ也ケリ、鷲ノ山ニ坐シマシアハンヲリヲ、尋チツヽモ登リ給ヒナマシ、不知ヌ茸ト思スベラニ、獨リ迷ヒ給フ也ケリ、廻向大菩提ト云ケレバ、次第取ル僧共腹筋ヲ切テゾ咲ヒ喤ケル、僧ハ死許迷

ナ落居タリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔見聞小說　六〕なら茸　乞兒の實、羅城門の札

上州眞壁郡野瓜村にての事なりし、寛延四年辛未〔是年改元寶曆〕四月中、百姓ども寄り合ひて、なら茸といふきのこ、大さ三四寸ばかりなる、いと美事なるを取り來て、四五人より合ひ、吸物にこしらへ、酒を飲まんとせし折、同村なる不二澤幸伯といふ醫師來にければ、五人のもの申しけるは、さてさてよき處へ御出候ものかな、今日ならたけといふきのこを採り候故、吸物にして酒をたべ候なり、幸ひの折なれば、御酒ひとつきこしめされよといふに、此醫師もそはよき處へ參りあはししなどいふ程に、吸物椀をもて出でければ、蓋をとりて見るに、特に美なるなら茸を四つ割にして出だしたり、幸伯これを吸はんと思ひしに、はじめ席につく時、腰にさげたる印籠巾着を膝の脇にや居しきけん、鐶はつしと音しにけり、幸伯ひそかに驚きて、こは印籠をひしぎしならんと思ひつゝ、とりて見るにさせることもなし、こはいかにと疑ひまどひて、やがてその巾着の紐をときつゝ、内を見るに、いぬる年兄道伯がくれたりし、三ツ角の銀杏くだけたり、そのとき幸伯思ふやう、曩にわが兄の、この銀杏をくれしときにいへらく、その理あるにあらねども、三つ角なる銀杏は毒けしなりとて、むかしより人のいひ傳へたり、よしや醫師なればとて、かゝる事は俗にしたがひて、文盲見義に用ふるぞよき、其方にも一つ懷中せよとくれたるを、この巾着に入れおきしに、今摧けしは不審の事なり、且この吸物は、わが好物といふにもあらず、いかにせましと思ふ心の、とかく心にかゝりしかば、吸はぬにますことあらじものをと、やうやくに思ひとりて、もろ人にうちむかひ、われらけふは大切なる精進日に候へば、御酒ばかりたまはらんとて、盃をうけて少し飲みしが、遂に療用にかこつけて、酒宴なかばに辭し去りぬ、しばらくして彼吸物をくらひし百姓の家より、幸伯がり人を走らして、只今見まひ給はれかしとて、急病用の使、推しつゞ

きて來にければ、幸伯ふた、びゆきて、彼五人の中、亭主と外一人の卽死したれば、療治届かず、殘る三人は、その腹いづれも大鼓のごとくにはれたれども、命運や竭きざりけん、からくして順快しけり、そのゝち幸伯は、江戸へ出府せし折、かゝる事にや、不思議に命を助かりしとて、朋友某に物がたりしなり、○中略

文政八年乙酉六月朔　乾齋主人識

〔甲子夜話五十九〕伊澤辭安（福山侯ノ儒學ノ人、）ガ話ニ、抹茶ハヨク諸毒ヲ解ス、明礬モ亦同ジ、或トキ某ノ寺內ニ竹林アル處蛇多ク栖ム、其地ニ蕈生ジタルヲ三人シテ採食ヒケレバ、卽時ニ大腹痛シテ悶亂ス、ソノ中一人ハ恒ニ豪氣ナルモノユエ、彼ノ邸マデハ還リ吐血シナガラ、辭安ガ所ニ到リ治ヲ乞ッ、安コレヲ聞テ、抹茶ニ明礬ヲ合テ服セシメシカバ、吐血ハ止デ瀉血セシガ、遂ニ腹痛歇テ、尋デ平愈セリトゾ、奇効ノ物ナリ、

苔蕨

苔ハ、コケト云フ、樹木、岩石、若シクハ屋瓦等ノ陰濕ナル處ニ叢生スル微細ナル植物ノ總稱ナリ、

蕨ハ、ワラビト云ヒ、薇ハゼンマイト云フ、並ニ到ル處ノ山野ニ生ジ、其嫩芽ハ採リテ以テ食料ニ供ス、尙ホ此類ノ植物ニハ、忍草、石韋、石松、卷柏等甚ダ多シ、

名稱

〔倭名類聚抄二十〕苔　陸詞切韻云、苔（音臺、和名古介）水衣也、

〔東雅十五草木〕苔コケ　倭名抄に、陸詞切韻を引て、苔はコケ水衣也と註せり、此にコケといふもの、水衣をのみいふにもあらず、舊事紀に、八岐大蛇の事をしるされしに、其身生蘿と見えて、古事記に

見えし所も亦同じく、並に讀てコケといふ、〈鳳讀魚に鱗讀む事亦同じ、倭名抄にも松蘿讀てマツノコケといふ事見に註す、〉今も俗に蛇また魚の鱗をコケといふ也、此語その苔の如くなるによりて云ひしにや、また苔をコケといふ事は、鱗に似たるに因りてかく云ひしにや其詳なる事は知るべからず、

〔倭訓栞前編九〕こけ　古事記に蘿をよみ、倭名抄に苔をよめり、木毛の義なるべし、或は苺をよめり、靈會に苔也と見ゆ、苔は水衣也と注せり、されど地衣草もいへり、又石衣をちいさきこけとよめり、石髮も同じ、束皙が詩に空餘石髮挂魚衣といへれば、水衣も通じいふべし、又松蘿をまつのこけ、屋遊をやのへのこけとよめり、こけ衣、こけ席など資みたてたる詞也、苔の袖、苔の袂など、桑門によめり、苔の戶、苔の庵などは、閑居の體をいふ也、

地衣

〔和漢三才圖會九十七〕地衣〔仰天皮 掬天皮〕
本綱、地衣、乃陰濕地被日晒、起苔蘚、如草狀者也、
氣味〔苦冷微毒〕 取停水濕處乾卷皮爲末、傅於陸上粟瘡、治之神効、

〔重修本草綱目啓蒙十六〕地衣草　ヒカリグサ〔古歌〕　ザゴケ　アヲゴケ　ビロウドゴケ　一名青蘚〔事物紺珠〕
陰地上ニ一面ニ生ズル綠苔ナリ、形甚毛氈ノ如シ、數品アリ、土部仰天皮ハ、陰方ノ停水濕處ノ乾卷皮ト云フト同ク、水ノツキタルアト日照ルトキハ、ソノ土皮トナリ、起テ乾キ反卷スル者ナリ、此ヲ聖濟總錄ニ日袞沙ト云ヒ、外臺秘要ニ乾卷地皮ト云フ、地衣草トハ別ナリ、

石蕊

〔重修本草綱目啓蒙十六〕石蕊　ハナゴケ　シラゴケ　一名石蕊花〔本草會編〕　石雲茶〔同上〕　雲茶〔滇東〕
〔隱語〕
山中土石上ニ生ズ、高サ二三寸叢生シ、白色形花蕊ノ如シ、圓細ニシテ枝叉ヲ分ツ、內空シ、採リ研テ茶トナシ飮べシ、

紫衣

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕昨葉何草〇中略

附錄、紫衣 ムラサキゴケ、アカゴケ、濕地上及ビ古木ニ生ズ、ソノ狀泥土ノ如クシテ紫色ナリ、又雨ノ後陰地上ニ多シ、

松蘿

〔本草和名十三木〕松蘿、一名女蘿、本條一名蔦蘿、一名蔣蒙、一名玉女、已上出兼名苑一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女蘿、出雜要訣一名菟絲、出爾雅和名末都乃古介、

〔倭名類聚抄二十苔〕松蘿 辨要決云、松蘿一名女蘿、和名萬豆乃古介、一云佐留乎加世、

〔箋注倭名類聚抄十苔〕本草和名云、松蘿一名女蘿、本條、一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女蘿、出雜要訣、則知女蘿之名本草所載、蔦蘿以下三名出雜要訣也、此女蘿上恐脫蔓字、或源君引本草二名、誤爲出雜要訣也、別錄、松蘿、生熊耳山川谷松樹上、陶注、松蘿多生雜樹上、而以松上者爲眞、小雅頍弁正義引陸氏義疏云、松蘿自蔓松上、生枝正青、萬豆乃古介依輔仁、又見元輔歌、按萬豆乃古介謂松苔也、又六帖歌謂萬都乃岐乃古介、躬恒歌謂之萬都爾加々禮留古介、本草和名無佐留乎加世之名、按乎加世、麻栫也、以栫所績之麻縷爲麻栫、今俗亦有加世絲之名、是物在深山、其狀似麻栫、故云猿麻栫也、栫訓加世、比古今集物名有左賀利古計、即此物、故日本紀纂疏云、蘿謂垂苔也、或名數都爾乃乎賀世、今周防俗呼佐留乃乎賀世、南部俗呼佐留賀世、

〔重修本草綱目啓蒙二十六寓木〕松蘿 マツノコケ和名抄 サルヲガセ同上 サルノヲガセ同州 ヤマウバノフクズ同上 ヤマウバノヲガセ伯州 サルガセ南部 キリサルカセ駿州富士 クモノハナ日光 キヒゲ紀州 ハナゴケ泉州 キツネノモトユヒ 一名松上藤藥性奇方 蔣蒙正字通 象主名物法言 檖蘿事物紺珠 藤蘿秘傳花鏡

松皮ニ附テ生ズ、然レドモ松ニ限ラズ、深山ニテハ諸木共ニアリ、又樫木躑躅等ノ小木ニモアリ、京師ノ者ハ短小ニシテ僅ニ二三寸、形細圓ニシテ絲ノ如シ、木皮ニ生ズル處ハ、一筋ニシテフト

シ、末ニ枝多ク分レ、下垂シテフサノ如シ、白色ニシテ微綠ヲ帶ブ、フトキ處ヲ採ルシゴケハ、皮細カニ碎ケ堅レズ、内ニ強キ心アル故、數珠ノ形ノ如シ、故ニ俗ニ弘法ノ數珠ノ變化ト云、和州芳野高野山、野州日光山殊ニ多シ、長サ三五尺ニシテ垂テフトシ、雨中ニハ自ラ切レテ落ツ、

〔和漢三才圖會〕九十七 垣衣　鼠韭　昔邪　垣嬴　天韭　和名之。乃。布。久。佐。　土馬騣　乃。木。乃。之。能。布。

本綱垣衣卽磚牆城垣上青苔衣也、〇中略

按垣衣乃非草類、只垣牆苔、以字義可解也、土馬騣乃〈俗云乃木之乃不〉生古屋上及樹梢、其葉二三寸、濶二三分、似鳳尾草、面色淺、背有筋、不彎、面有細點、背色稍淺、冬月亦不凋、無花實、

〇按ズルニ倭名類聚抄ニハ垣衣ヲ之乃布久佐ト註セリ、但シ恐草ハ漢名海州骨碎補トスルヲ允ト爲ス、宜シク恐草及ビ骨碎補ノ條ヲ參看スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙〕十六 垣衣　カ。キ。ノ。コ。ケ。　フ。イ。デ。ノ。コ。ケ。　一名蘭香〈[illegible]〉　籬衣〈外臺秘要〉　墻上青衣〈千金方〉

地衣草ノ垣墻ニ生ズル者ナリ、垣ハタカベイ、墻ハツイヂ、

〔倭名類聚抄〕二十 屋遊　蘇敬本草注云、屋遊〈和名夜。乃。倍。乃。古。介。〉屋瓦上青苔衣也、

〔箋注倭名類聚抄〕十 按此屋瓦上苔、則輔仁所謂爲正、字倍者云倍、猶尾上謂之乎能宇倍、見萬葉集、者云乎能倍、諸書多爾、故源君云夜乃倍耳、又或急呼、夜禰、古今六帖貫之雨歌、今俗稱同、但俗書作屋根者假借耳、〇中略 證類本草中品云、屋遊生屋上陰處、無蘇注引陶隱居、與此同、唯屋瓦側上有此字爲異耳、本草和名同、源君引爲蘇注誤、醫心方亦引陶注、而無此字、與此同、

〔重修本草綱目啓蒙〕十六 屋遊　ヤ。ノ。ヘ。ノ。コ。ケ。〈和名抄〉　ヤ。ネ。ノ。コ。ケ。

古瓦屋上ニ生ズ、又板屋ニモ日ノアタラザル處ニ生ズ、

石衣

〔倭名類聚抄 二十 苔〕石衣　本草云、石衣、一名石髮、和名知比佐木古介、

〔箋注倭名類聚抄 十 苔〕所引文、千金翼方、證類本草並不載、證類本草下品烏韭條、引唐本注云、此物即石衣也、亦曰石苔、又名石髮、本草和名亦云、烏韭、一名石衣、一名石苔、一名石髮、已上三名出蘇敬注、是石衣石髮並出蘇注也、○中略 爾雅、薚、石衣、郭璞注云、水苔也、一名石髮、江東食之、本草云、烏韭、生山谷石上、蘇注云、生巖石陰不見日處、與卷栢相類也、陳藏器云、烏韭生大石及木間陰處、靑翠茸々者、似苔而非苔也、日華子云、石衣、此即是陰濕處、山石上苔、長者可四五寸、又名烏韭、陶云、垣衣亦名烏韭、而爲療異、非是此種類也、

桑花

〔重修本草綱目啓蒙 十六 苔〕桑花　クハノコケ　一名、桑樹上白蘚花附方

クハノキノ皮ニ附テ生ズルゼニゴケナリ、

艾納

附錄、艾納、マツノゼニゴケ、マツノコケ、一名松蘚通雅松納衣墨娥小錄松綠衣東醫寶鑑松雪天祿識餘

松樹皮ニ著テ生ズ、薄シテ堅ク皮ノ如シ、白綠色、

土馬騣

〔重修本草綱目啓蒙 十六 苔〕土馬騣　スギゴケ

山中陰處ニ多ク生ジテ地ニ滿ツ、採テ茶室ノ庭ニウユ、高サ三寸許、枝ナク綠ノ如キ細葉多ク附テ杉ノ如シ、長サ三四分深綠色ナリ、一種白色ヲ帶テ莖直ナラズシテ獸尾ノ如クナル者ヲトラゴケト云フ、又スギゴケノ一種短クシテ石上ニ生ズルヲ、イハゴケト云フ、是石馬騣ナリ、

垣衣

〔倭名類聚抄 二十 苔〕垣衣　本草云、垣衣、一名烏韭、和名之乃布久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十 苔〕千金翼方、證類本草中品韭作圭、本草和名與本書同、○中略 本草和名云、一云古介、西山經云、小華之山、其草有萆荔、狀如烏韭、廣雅、昔邪、烏韭也、在屋曰昔邪、在牆曰垣衣、本草、垣衣、生古垣牆陰或屋上、陶注、俗中少有見者、蘇云、此即古牆北陰靑苔衣也、其生石上者名昔邪、一名烏韭、江南少牆、陶故云少見、屋上者名屋遊、形並相似、是訓古介爲允、按八雲抄謂忍草其葉狹長有星、

則嘗以瓦韋亮之、瓦韋其狀見石韋條、

〔饅頭屋本節用集草之七〕垣衣(シノブ) 萱

〔玉珠庵雜記〕しのぶ草に三つあり、ひとつには、垣衣つねの如し、ふたつには忘草を又はしのぶ草といふよし、大和物がたりに見えたり、これに付きて先達多くあやまりて、垣衣をわすれ草とこころ得られたるもあり、又垣衣の外にわすれ草といふ物の、軒におふるよしによめるもあり、わすれぐさおふる野べとは見るらめどと、業平のよめる物を、いかで軒の草とはいふべき、又伊勢物語の心は、一草二名とは聞えず、業平のしのぶとはいひつゝ、忘れたるを、女うらみてこれをわすれ草ともやいふとて、しのぶ草を出だして、思ふ心をふたつの草の名にそへたり、下の心はしのぶをばわすれ草とは申さぬものをといへるなり、三つには、萬葉に萱をもしのぶ草とよめり、しのび草とよめるは、かたらひ草のたぐひなり、重之集に、ことのはにいひ置く露もなかりけりしのび草にはねをのみぞなく、元輔集に、行く先のしのび草にもなるやとて露のかたみにおかんとぞ思ふ、

〔頭書〕眞淵云、伊勢物語にいへるは、わざと名をかへいひて、男のいはんにつけて、うらみんとまうけたる事、此人のいふがごとし、大和物語の頃にしも、誤る人ありつらん、まのぶ草は、枕の草子に、くちたる物のはしなどに生ふるがをかしきよしいへれば、軒に生ふる苔の類にて、さる物のあるなり、わすれ草は、萬葉にも萱草と書き、かの忘憂草の意によみたり、且枕冊子に、六月わすれ草の花の咲きたるよしありて、萱草にうたがひなし、又萬葉に萱をしのぶ草とよめるといふは、しのぶ草ははへてましをとよめるをいふなり、然れども、それ物語種の意をかたらひ草といふがごとく、したはる・思ひ草をはらへ捨てましをといふにて、萱をいふにはあらず、
續古今戀五、わする丶もしのぶも同じ古郷ののきばの草の名にこそありけれ、眞淵云、こは理

をいふ時は忍び種なれど、猶忍ぶ草とよみて、さる心とも聞ゆべければ、いかゞあらん、古きよき本にしのびと書きてあるにや、後の本はたのみがたし、

〔回珠庵雜記〕志のぶ草をこ。と。な。し。草といふ、異名なり、後撰集つまに生ふることなし草をみるからにたのむ心ぞかつまさりける、新勅撰集、君みすてはどぞふるやのひさしにはあふことなしの草ぞおひける、

〔伊勢物語下〕むかし男、後凉殿のはざまをわたりければ、あるやんごとなき人の、御つぼねより、忘草をしのぶ草とやいふとて、いださせ給へりければ、給りて、

忘草おふる野邊とは見るらめどこはしのぶなりのちもたのまん

〔大和物語下〕在中將うちにさぶらふに、みやすん所の御かたより、わすれ草をなん、これは何とかいふとて給へりければ、中將、

わすれ草生ふるのべとは見るらめど、こはしのぶなりのちもたのまんとなんありける、おなじ草を、しのぶ草わすれ草といへば、それによりてなんよみたりける、

〔玉勝間五〕し。の。ぶ。も。ぢ。ず。り。

しのぶもぢずりといひし物は、古今集の河原左大臣の歌の顯昭の注に、陸奧國の信夫郡にもちずりとて、髮をみだしたるやうにすりたるをしのぶずりといふといひ、宗沖が勢語臆斷にも、信夫郡よりむかし摺て出したる名物なりといへるがごとし、然るを師〔眞淵○眞淵翁〕のいせ物語古意に、垣衣草の形を、紫の色もて摺たるをいふと見えたり、陸奧國に石二つある、其石にてすりたるよしいふは僞言なり、むかしのすり衣は家々にてこそすりたれとて、己が家々にてすりたりし證を出し、さて垣衣草の形の亂れたるをもて、おのが戀のみだれにたぐへたりといはれたるはいかにぞや、いせ物がたりの歌にては、さ聞ゆることも有べかめれど、そは次に古今集なる河原大

臣の歌を出して、といふ歌のこゝろばへなりといへり、これしのぶのみだれとよめるは、しのぶすりの亂れといふ意也としらせたる也、かの紫の色こきときはといふ歌の次に、むさし野のこころなるべしといへるをもおもひ合すべし、もししのぶ草のかたをすりたるをよめるならば、古今の歌を引出たるは用なきいたづらごと也、又摺衣草のかたならんには、かの古今の歌、軒に生るなどこそよむべけれ、みちのくのとよめるは何のよしぞや、かの國に信夫郡といふがあればとて、さる遠き國の名をとり出て、よしもなき摺衣草の枕詞にはおくべき物かは、又みだるゝよしをいはむに、しのぶ草はいとも似つかはしからず、かの草のさまは、さいふばかりみだれたる物にはあらず、それも摺たる形は亂れてもあるべけれど、すりたるにつけてみだれたらんは、いづれの物のかたにても同じことなるべし、いたく物よりことに亂れたる形ならではかなはず、又摺衣はとり分て摺染などにすべき物にもあらざるをや、さて又かの信夫郡より出といふことを被りて、布など染たるを、諸國より貢ることは古見えずといはれたるもたがへり、延喜の大藏內藏などの式にも、諸國所貢染布の色々など見えたるをや、すり衣は、おのが家々にてこそ摺たれといはるれども、さりとて外より摺ていだすこともなどかなからん、國々より出て名ある物を、めで用ふることは、今も昔も同じこと也、さて信夫郡に石の有しにてすれりといふはいかゞ有けむ、されどまことに然なりけんもしりがたきを、ひたぶるに僞言也とはいふべくもあらず、その石の事はとまれかくまれ、信夫郡より出せりしことは論なきをや、

〔新著聞集 四三 畦〕奥州信夫文字摺石

奥州信夫郡に信夫文字摺の石あり、福島より貳里ばかり行て、瀬の上といふ所の山の下の畠にあり、此石の面を摺てみれば、死せる親族の形あらはるゝとて、人々あつまりて、田畠の損亡多かりければ、今はその畠の中に埋みをきし、

骨碎補

〔和漢三才圖會九十八石草〕骨碎補　石毛薑　胡孫薑　石花蘭　猴薑〇中略

按、骨碎補、出於紀州熊野者良、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕骨碎補　詳ナラズ〇中略

證類本草ニ載スル所ノ海州骨碎補ハシノブグサナリ、山谷土石上ニ蔓延ス、根ハ箸ノ大サノ如クシテ褐毛アリ、卽蔓ナリ、春宿根ヨリ葉ヲ生ズ、形甚細碎ニシテ海金沙ノ梢葉ノ如シ、花實ナシ、增、唐種ノ骨碎補ト云モノアリ、木石上ニ蔓延ス、高サ一尺餘、葉ハ蛇眼草ニ似テ直葉アリ、面背共ニ深綠色ニシテ、光澤アリ、葉心ノ縱脈黑色ヲ帶ブ、大小變葉多シ、根ハ圓扁ニシテ青色褐毛アリ、阿州海部郡處處ニ多シ、牟岐浦ノ海中出羽島殊ニ多シ、若水翁釋名ノ胡孫薑石毛薑ノ二名ヲサルノセウガニ充ツ、一名、ハヒセウガ、アヲチカヅラトモ云、深山石上ニ生ズ、根ノ形小雉尾草ニ似テ橫行盤屈シテ繁茂ス、青綠色ニシテ毛ナシ、根ハ悉ク外ニ出ヅ、冬モ葉枯レズ、梅雨ノ時舊葉落ツ、五六月新葉ヲ生ズ、形ムカデグサノ如ニシテ薄ク毛茸アリ、一葉ヅヽ垂下ル、背ニ細キ金星ヲ生ズ、此レ花ナリ、一種大樹枝上ニ生ズルアリ、形少ク異ナリ、根ノ色微褐色ニシテ青綠ナラズシテ、ツリモノニ作ルニ、根苔中ヲクヾリテ外ヘ出デズ、葉狹クシテ毛ナシ、背ニハ金星アリ、下品ナリ、

烏韭

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕烏韭

石上ニ生ズルコケノ總名ナリ、蘇恭ノ說ハ、ホヲシノブナリ、洞窟中或ハ石間陰處ニ生ジ、形チ海州骨碎補ニ似テ淡黑褐色、又微青ヲ帶ル者アリ、俱ニ長サ二三寸、

石韋

〔新撰字鏡草〕石韋（鹿耳草、又云鹿舌、一云以波乃加志波、）

〔本草和名八草〕石韋（陶景注云、葉如皮、故名ニ石韋一、）一名石皸（楊玄操音之夜反）一名石皮、一名瓦韋（生ニ瓦屋上一）一名石產（出ニ釋藥性一）又有ニ木韋、（生ニ木上一、出ニ雜要訣一）和名以波乃加波、一名以波之、一名以波久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕石韋　陶隱居本草注云、石韋〈和名以波乃加波、一云以波久美、〉其葉如皮、故以名之、生瓦屋上、謂之瓦韋、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按本草和名又云、卷栢和名伊波久美、一云以波古介、本書卷栢和名與輔仁同、此伊波久美、恐伊波久佐之譌、○中略 證類本草中品引作蔓延石上、生、葉如韋、故名石韋、本草和名同、蘇云、此物叢生石傍陰處、不蔓延生、圖經云、葉如柳、背有毛而斑點、時珍曰、其葉長者近尺、濶寸餘、柔靭如皮、背有黃毛、亦有金星者、名金星草、葉多不濶、又一種如杏葉者、亦生石上、○中略 所引〈生瓦屋上、謂之瓦韋〉之文、陶注證類本草不載、引唐本注云、生古瓦屋上、蘇君併引爲陶注、非是、本草和名引瓦屋上殿古字、源君從之、方爲是、

〔類聚名義抄 八艸〕石韋〈イハノカハ、一云イハドミ、〉

〔大和本草 九雜草〕石韋　石ノ側及陰濕ノ地ニ生ズ、好事ノ者庭ニウヘテ石ニ伴ハレム、

〔和漢三才圖會 九十八石草〕石韋　石𩌁　石皮　石蘭〈和名以波乃加波、一名以波久美、俗云比登豆波、○中略〉

按石韋、丹波、伊豫處處有之、其葉厚柔靭、深綠色、面有微黃粉、如毛、背淺白而如有白毛也、不黃毛、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕石韋　イハノカハ〈和名鈔〉　イハノカハ〈同上〉　イワガシワ〈古名〉　ヒトツバ
カラヒトツバ　一名石花〈[illegible]月令〉

山陰土石上ニ生ズ、根ハ長ク蔓ニシテ繁茂ス、處處ニ葉ヲ生ズ、濶サ一寸餘、長サ六七寸、勁厚ニシテ深綠色、背ニ褐毛斜紋アリ、肥タル者ハ葉長サ一尺ニ過グ、冬ヲ經テ枯レズ、夏月新葉ヲ生ズ、初ハ色白シ、長ズレバ漸ク綠ニ變ズ、根ヲ採リ窖東シテツリモノトス、藤水ヲ濯ゲバ年ヲ經テ彌繁茂ス、一種葉短ク二寸許ナル者ヲキンナジト呼ブ、本草彙言ニ謂ユル杏葉石韋ナリ、一種葉長シテ本ニ兩岐アリテ、慈姑葉ノ形ナルヲイハオモダカト呼ブ、一科ニ叢生ス、根ハ蔓ヲナサズ、一名トキハノオモダカ〈丹州、湖南〉集解瓦韋ハノキシノブト呼ブ、一名マツフウラン〈[illegible]州〉カラスノワス

レグサ、加州ワスレグサ、同上ヒトツバ、越前ヤツメグサ、舊樹皮或ハ枝間ニ生ジテ下垂ス、土石間ニモアリ、一根ニ叢生ス、葉ハ濶サ二三分、長サ三五寸、甚厚シテ深緑色、背ニ金星兩對ス、大サ一分許、冬ヲ經テ枯レズ、年久キ者ハ葉長サ七八寸ニモ至ル、

增、一種葉ノ長サ一尺許ニシテ厚ク、幅五六分、一科ニ數葉叢生スル者アリ、深山幽谷ニ產ス、花戶ニテアツイタト呼ブ、一種長サ六七寸、幅六七分ニシテ厚キ者アリ、初生ノ形匙頭ノ如シ、ナジラント名ク、一種葉ノ長サ一尺許、濶サ二三分許ニシテ、麥門冬葉ノ如キモノアリ、深山陰崗ノ地ニ生ズ、又一種ミルラント云アリ、深山ノ石面ニ生ズ、葉ノ形瓦葦ニ似テ厚ク、長サ二三寸、濶サ一分餘、面背共ニ毛茸アリ、水松ノ形ノ如ク、其色茶褐色、根ハ細クシテ石葦根ノ如ク蔓延ス、一種深山ニシシラント云アリ、葉厚クシテ濶サ四五分、長サ一尺許、

金星草

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

近江國七十三種、〇中略 石韋五斤、

〔採藥使記 中 駿州〕重康曰、駿州富士山ノ中宮ニ石韋ヲ出ス、

光生按ズルニ、石韋和名ヒトツ葉ト云フ、丹波伊豫ナドヨリモ出ル、葉白芨ノ葉ニ似テ厚ク、一枚ヅヽ、岩石ノ間ニ生ズ、葉ノ面ニ微黃ノ粉アリテ毛ノ如シ、背ハ淺白色ニシテ、白毛アルガ如シ、

〔多識編 二 石草〕金星草、今案加良比登豆波、異名鳳尾草 綱目

〔大和本草 九 雜草〕金星草　石韋ト一類ニテ相似タリ、ウラニ黃星多シ、是與二石韋一異、カラヒトツバト訓ズルハアヤマレリ、本邦ニモトヨリアリ、山城西山處々ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 石草〕金星草　ヒトツバ　ウラボン(ン恐シ誤)筑前　一名金星石韋 本草彙言　希聖草 醫學集要　金星鳳尾草 同上　出髮草 典籍便覽

山陰ニ生ズ、多ハ崖壁ニアリテ葉下垂ス、一根數葉、莖甚細クシテ堅シ、葉ハ濶サ五六分、長サ三寸許、亦硬シ、面深綠色、背ハ色淺クシテ小金星多シ、又瓦韋ノ如ク、星大ナル者モアリ、葉多ヲ經テ枯レズ、一種葉三ツニ分レ、鷄脚ノ如キ者アリ、ミフデウラボシト呼ブ、藥性要大全ニ謂ユル金鷄脚是ナリ、又一種大葉ノ金星草アリ、和州紀州山中ニ生ズ、根ハ蔓ニシテ石韋根ノ如ク土中ニ延ブ、處處ニ一葉生ジ、莖長サ一尺ニ近シ、葉長キ者ハ二尺、濶サ三寸、薄ク硬クシテ尋常ノ金星草ノ如シ、背ニ小金星多キコト、又尋常ノ者ニ同ジ、即集解ニ說クトコロノ者是ナリ、

〔佐渡志物産四〕金星草 方言ウラボシ 山中崖壁ニ生ズ、一種方言タニワタシアリ、

〔新撰字鏡草〕石長生[illegible]

〔本草和名十一草〕石長生、一名丹草、一名齡[illegible]草、市人用之、仁諝音力丁反、出蘇敬注、

〔大和本草九草〕石長生 莖黑ク紫色、細莖ナリ、葉似蕨又似檜、四時不凋、多生石岩下、又生山陰、苗高尺許、今按本草弘景時珍所說ノ石長生ノ形狀、ヨクシノブニ合ヘリ、

和草〇中略 篤信云、和草是ニ云ハコヂ草ナルベシ、箱根草ハシノブニ似テ小ナリ、葉細シ、莖紫色、光アリ、莖堅シ、又黑色ナルモアリ、相州箱根山ニ多シ、他州ニモ岩上古墻石壁ナドニ生ズ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕箱根草 本名未詳

按箱根草相州箱根山有之、小草苗高六七寸、細莖褐色、葉形似銀杏葉而小、其根細如絲而短、未知其本名、相傳云、能治產前產後諸血症及痰飲、

往年阿蘭陀人見之稱有良草、謂採得之、甚以爲珍、

〔和漢三才圖會九十八石草〕石長生 丹草 丹沙草 俗云加豆閒夏岐、又云[illegible]牟岐、〇中略

按石長生生溪澗井石間、狀似蕨而面背青、夏背著子茶褐色、如虎尾草子、莖紫黑、爲折傷及痰咳隔噎藥、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 石草〕石長生　ハコネグサ　オランダサウ武州　クロハギ加州　ヨメノハハキ江州　ヨメガハ、キ新校正　ヨメガハシ甲州　イシ、ダ駿州　ホウヲウハギ同上　イチヤウシノブ同州　イチヤウグサ伯州

一名丹陽草本草原始　増、一名小蕨萁幼幼集成　鳳尾草同上

幽谷石上ニ生ズ、春新葉ヲ生ズル時紅色ニシテ美シ、一科ニ叢生ス、莖ノ高サ一二尺、黒色ニシテ光リアリ、漆ノ如シ、上ニ枝叉多ク分レ、叉ゴトニ一葉アリ、形三角ニシテ鴨脚葉ノ如シ、大サ三四分、深緑色、秋ニ至レバ葉背ノ末ニ、一ツノ小褐片ヲ生ズ、卽其花ナリ、葉冬ヲ經テ枯レズ、巳ニ落葉スル者ハ、枝ヲ連テ東テ帚トス、タマハ、キト名ク、然レドモ莖脆クシテ折レ易シ、此草元祿中、紅毛人相州箱根ニ於テトリ得テ、產前後ニ殊効アリト云ルニ因テ、ハコネグサト名ク、然ドモ箱根ニ限ラズ、諸州山中ニ多シ、一種ヌリパシト呼プ者アリ、一名カラスノアシ越後アシナガ江州クジヤクサウ花戸ヨメノハシ總州キツネノカンザシ總州ヨメノカンザシ、ヨメノヌリパシ共同上、山ノ幽谷ニ多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ一二尺、叢生ス、莖ノ色黒漆ノ如ク微ク紅ヲ帶プ、莖上ニ長枝十餘並ビ分チ、枝ニ小葉兩邊ニ連生シテ、孔雀ノ尾ノ如シ、花ハ開カズ、秋後苗枯ル、春ノ嫩葉紅色ニシテ美ハシ、是又石長生ノ一種ナリ、

〔採藥使記 中 相州〕重康曰、相州箱根アシガラノ關ノアタリニ、箱根草ト云フヲ出ス、土人ノ曰、元祿ノ頃、紅毛人江都參府ノ時、此草ヲ見テ曰、是レカツヘレヘンネレスト云フテ、難產ノ藥ニ妙アリトテ採ラセケル、故ニ一名ヲオランダ草トモ云フ、コレ本艸ニ載スル處ノ石長生ナルヨシ、

先生按ズルニ、箱根草此比參府ノ紅毛人ヤンヘツキト云ヘル醫ニ問ヒシニ、此艸本國ニテフランチリイリヨト云フ、此國トムマヘヤト云フ二ケ國ヨリ外ニナシ、故ニ兩國ニ來ル時、採リ持行ト云フ、此艸專ラ產後產前ノ諸病ニ黒燒トシテ白湯ニテ用ユ、又湯火傷、アルヒハ髮ノ兀タルニハ、末トシ、ホルトガルノ油ニテトキ、付ルト云フ、

白龍鬚

〔重修本草綱目啓蒙石草十六〕白龍鬚（鬚ハ鬚ノ本字）ホヤ　シラコケ　シラガゴケ
深山古木枝上ニ生ズ、白色ニシテ細絲ノ如シ、長サ二三寸、多ク叢生シテ枝ヲ掩フ、甚松蘿ニ似テ柔ニ、心ナクシテ斷ヤスシ、

虎尾

〔大和本草雑草九〕虎尾　小草ナリ、箱根草ヨリ細ニシテ柔ナリ最美、箱根草ニ相似テ不同、蠻語ニカツテイラトモ、ペンサレストモ云、狀如此、（圖略）蠻人産後ニ紅夷人コレヲ用ユ、日本人ハ四物湯ト等分ニ合セ、産前後ニ用テ驗アリ、カゲボレニスル、又腫症ニ此草トアメンダウス氷沙糖三種等分ニ合セ服ス、甚驗アリ、シノブ、ハコネ草、虎ノ尾三物相似テ不同、三才圖繪草木五曰、地柏根黄狀如絲莖細、上有黄點子、無花、葉三月生長四五寸許、四月採暴乾用、主臟毒下血神速、今按此亦石長生之類歟、

〔和漢三才圖會石草九十八〕虎尾草　俗稱（王字未考、蓋草有同名、）
按虎尾草生石縫間及竹籔中、草似大葉鳳尾草、而甚厚硬、微反無枝椏、其背有茶褐色粉點、無花實、彼粉點若是蓋子乎、其散布處自隔二三尺、亦自然出生、一莖僅寸許、頂有一葉、似蒼麥葉而微尖、三秋尋黄、二葉、此時無黄、虎尾草之苗者、綠莖葉全備亦一異也、人家亦栽之、

雁足

〔大和本草雑草九〕雁足　深山ノ内ニアリ、初度ニシダノゴトクナル葉イヅ、兩々相對ス、ワラビノ葉ニ似タリ、後ニ心ヨリソダツニ似タル葉生ズ、初度ノ葉トハ各別ノモノ也、立花ニ用ユル物也、鞍馬山ニモアリ、又鬼レダト云物アリ、雁足ニ似タリ、共ニ漢名未詳、

螺厴草

〔多識編石草二〕螺厴草、今案加加美久左、俗稱岐岐佐宇、

〔和爾雅草木七〕螺厴草（カヾミグサ　鏡面草）

〔大和本草雑草八〕螺厴草　ツルニパイノフタノヤウナル葉連リツケリ、又大豆ヲ二ユワリタル形ニ似タリ、陰處石ニ附テ生ズ、本艸石草類ニ載ス、功能多シ、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕鵜抱（まめづる）　俗云末女古介

本綱、鵜抱生山林中、附石而生、作蔓似大豆、其根形似萊菔（タイコン）、大者如三升器、小者如拳、二八月采根切片陰乾、

氣味（苦寒）　治風熱上壅咽喉腫痛、

按鵜抱葉圓扁徑三分許、栽之盆鉢石傍、則延蔓、一面蔽石、如撒敷青豆、其根最細小、所謂如萊菔者未見、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕螺厴草　マメゴケ　アラマメゴケ　マメヅタ（筑前雲州）　イシマメ（長州）　サヂカブラ（雲州）　イハマメ（讃州播州）　カベミゴケ（山城加茂）

山中古木及石上ニ延ク、葉圓、厚ク大サ三四分、綠色ニシテ光リアリ、相思子（トウアヅキ）ノ形ノ如ク、綠大豆ノ瓣ノ如シ、互生ス、蔓ハ細クシテ黑色、春間梢ニ長葉ヲ生ズ、背ニ微黑毛アリ、是其花ナリ、

蛇眼草

〔重修本草綱目啓蒙十六雜草〕蛇眼草　カナピキサウ　イハガチサウ　オホシダ（江州）山足ニ多ク生ズ、蔽葉ニ似テ大ニシテ厚ク枝少シ、又枝ナキモアリ、深綠色、冬ヲ經テ枯レズ、花實ナシ、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕仙人掌草（略〇中）

增、蘭山翁コノ條ノ仙人掌草ト、花鏡ノ仙人掌ヲ同物トスルハ誤ナリ、本條ハイワガチサウ、一名カナビキサウ、江州ニテオホシダト云、葉細長クシテ井口邊草（トリノアシ）葉ニ似テ厚ク、大ニシテ枝少ナク、掌指ヲ張タルガ如シ、其色深綠ニシテ光澤アリ、四時枯レズ、廣東新語ニ、仙人掌多依石壁而生、其葉勁而長ト云、集解ニモ葉細而長ト云、卽雜草部ノ蛇眼草是ナリ、

蕨

〔新撰字鏡草〕蕨（古月反、和〇良〇比〇、）　竈丸（和良比乃根、著如大豆、又如芋核、）

〔本草和名十八菜〕蕨菜、（黑者）一名綦、（白者）一名蘩、（紫者也、出崔禹、）和名和良比、

〔倭名類聚抄十七野菜〕薇蕨　爾雅注云、薇蕨（薇蕨二音、和名和良比、）初生無葉而可食之、崔禹錫食經云、白者曰紫綦（綦音）

鼈者曰蕨、栄者曰薇、〈骨節〉薇蕨過中令熟、然後可啖之、

〔箋注倭名類聚抄 九〕按史記伯夷傳、登彼西山兮、采其薇矣、是亦謂毛詩爾雅之薇、而陳蔵器又云、夷齊食蕨而夭、與史記三秦記異、蓋以毛詩四月篇云、山有蕨薇、蕨薇並稱、謂薇是蕨類、故唐俗有蕨類名薇者、陳氏亦誤、以夷齊所食之薇為蕨、源君亦同其誤、故連引薇蕨二字、訓和良比、其實爾雅薇蕨二字不連牽也、

〔易林本節用集 和 草木〕薇(ワラビ) 蕨(同)

〔和爾雅 七 草〕蕨(ワラビ) 一名 蕨萁(ワラビ)

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者當坐ニ迷惑スベキ者哉、○中略ワタ〳〵シハフタク、蕨ハワラ、蕨ハウツホ、如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔東雅 十三 穀蔬〕薇蕨ワラビ　倭名鈔に爾雅注を引て、薇蕨二字引合せ讀てワラビといひ、貫衆讀てヲニワラビといふと註せり、爾雅及び陳蔵器李東璧等の本草に據るに、薇と蕨とは相類して同じからざる事、猶貫衆と薇蕨との如し、倭名鈔に載せし所によれば、古の時には薇蕨の類、總稱してワラビと云ひしと見えたり、今俗にワラビといふ物は卽蕨也、ゼンマイといふものは卽薇也、ワラビといふ義不詳、ゼンマイといふが如きも亦不詳、オニワラビと云ひしは、そのワラビにして大きなるを云ひし也、ゼンマイは、錢に似たるなり、

〔倭訓栞 前編 二十八〕わらび　新撰字鏡に蕨をよめり、歌に藁火にもよせてよめり、藁火の字通鑑に見えたり、蕨も萌出る事の遠なれば、藁火もて呼しにや、歌にさわらび、したわらび、かぎわらびなどよめり、根もて餅とし、又其からを繩とす、新撰字鏡に、狗脊を大わらびとも、山わらびとも訓せ

り花わらび又秋わらびと稱するは、陰地蕨也、紫塵嫩蕨人拳手といふ嫩は、わかきとよむべし、芽出しをいふ也、獲集抄にものよきとよめるは、草書をもて誤りたる也、郭璞も紫蕨拳曲繁盛すといへり、

〔本朝食鑑三菜〕蕨和良比

釋名蕨薇二字、古併訓和良比、(中略)薇大(平野)按、薇則一種也、案者蕨初生無葉類藿、故書曰薇、今見蕨之初生、皆青紫色、無黑者、食經所言白者未詳、源順不分薇蕨、從崔氏食經、而不與、則以國俗說者乎、

集解、處處山中岡野有之、二三月生芽拳曲、狀如小兒拳、山野之人、多日燒山野、其火連日不消、其跡至春生蕨最多、春初先生者號早蕨、(サワラビ)自古歌人賞詠之、若欲食生蕨者、先用灰湯煮去滑涎、取出投水洗淨、蔌又作蔬、不然則必致中毒、今世采其嫩芽、醃藏而貢獻之、野人多采收之、作淹作乾以貨于四方、信州野州三越之諸山、常之秋田、羽之莊內、奧之仙臺、南部等處最佳、津輕之產腴肥、味殊美、駿遠參尾濃勢、及畿內西州處處多有、或晒乾作蔬煮食稍佳、其芽既長、則展開如鳳尾焦、高三四尺、其根去紫色、皮內有白粉、擣爛數次、洗澄取粉、水飛晒乾、煉湯作餅、狀如葛餅、而色紫黑、味不減葛餅、世以爲珍、此亦貢獻饋贈之品也、采其粉後、采根之筋條、擣碎作繩、呼稱蕨繩、勁强不減鐵鏁、而千年不朽、世以爲土木之具、此亦民間之最貨物也、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕蕨　ヤマネグサ古歌　ホドロ同上　ワラビ　シドケ土州　ヨメノサ勢州　イ中鳴　春宿根ヨリ葉ヲ生ズ、初ハ卷曲シテ拳ノ如シ、コレヲサワラビト云ヒ、カキワラビト云フ、採リ煮テ食用トス、或ハ醃シ或ハ乾ス、乾ス者ハ奧州三越信濃東北國ノ產ヲ良トス、形肥大ニシテ柔軟ナリ、葉長ズレバ莖ノ長サ三四尺、老莖ヲ用テ箸トス、凡一根數莖ヲ生ズ、冬ニ至テ苗枯ル、山人根ヲ掘リ製シテ粉トス、コレ蕨粉(授時通考)ナリ、一名山粉、(溫州府志)烏桵、(通雅)俗名ワラビノコ、古歌ニムラサ

キノチヤリト云、一名カチノコ備前作州、チハナノコ羽州コレヲ饑トナシ食フ、ワラビモチト云、南部ニクチモチト云、物理小識ニ謂ユル蕨霜ナシ、巳ニ粉ヲ採リタル滓筋ヲ乾シテ饑トナスヲ、ワラビナハト云、色黒クシテ能ク水ニ耐ユ、

〔農業全書 五 山野菜〕蕨

蕨紫蕨薇(わらびぜんまい)是皆山中に生じ、田圃に作る物にあらず、此ゆへに委しく記さず、蕨は生にては性あしく味もよからず、醬づけよし、ほしたるは出羽の秋田より出る物、柔にして味よし、せんまいも食様は右に同じ、加賀より出る味尤よし、

〔廣益國產考 四〕蕨を掘丼に製する事

わらびを掘には、先蕨の肥て生ずる所を見すまし、尖鍬にて掘、其根を縄にてくゝり、家に持かへり、水にて土を洗らひ落し、偖藁打石のごとく、面よき石の大きなるを居置、其根を石の上にのせ、かたき木にて拵へたる、柄の長き槌をもて、兩人向ひ合せに居てたゝきひしぎ、四斗樽ぐらゐの桶の口に、箱をのせ、その中にたゝきひしぎたる根を入、壹人は杓にて水をかけ、一人は兩手にてもめば、粕の筋は箱に殘り、桶の中は鼠色の水と成る也、偖木綿の豆腐袋のごとく縫たるを、別の桶の中に入、其袋の中に、右鼠色の濁りたる水を入漉せば、袋の中に細なる粕たまる也、其粕は日にほし置、あらき水嚢にてふるひ、飯を焚に其飯の上に木引頃入置、かきまぜ食すれば糧のたしとなるもの也、偖桶の中にたまりたる水は、其まゝ半日ほど置ば、薄にごりの水となる也、桶をかたむけ、是をもすたみ捨れば、粉は底にかたまり付居るなり、又少し水を入、棒をもてかきまぜ、堅まりなくなるとき、水を桶九分目ぐらゐに入、棒もて水をくる〳〵まぜ、又半日ほど置ば、元のごとく粉底に付、水はすみて上にうくを、又すたみとり、又元のごとくすると、三返もすれば、粉の色白くなる也、白くなるとても、葛天花粉などのごとく白くはならざるものなり、偖桶そこにおり

濡りたる粉を、庖丁にて起しとり、灰を土邊に厚さ貳寸程にひろげ、その上に木綿の二布半ぐらゐなる風呂敷樣のものを敷、その上に置ば、半時ほどにして水氣はこと〳〵く灰に吸とり、粉乾くなり、是を糀ぶたやうのものに入、日にほし乾かし、紙の袋に入、俵として問屋に出し商ふ也、偖右叩きひしぎて桶に入、もみたる粕の筋は、又水をかけよくあらひ、日にほし置、雨の日など取出し、水にひたし置、和らかに成たる時、水氣の乾きしを綯になひ、束とし貫べし、此繩を則ち世間にてわらび繩と呼びて、垣などを結に用ふるに、雨に濡ても腐ることなし、又風流の垣を結には綠礬を水にて煮、その中に此繩を入て引上れば、眞黑に染る也、

偖蕨粉は、反もの、糊と成り、傘をはる糊とし、油紙桐油等の糊、又は求肥わらび餠等になるなり、飢饉の時には、いろ〳〵の物をまぜ餠となし糧とするに、葛と同樣の功あり、多く生ずる所の山里にては、常に掘り糧ともし、粉ともして利を得べし、

〔宜禁本草乾玉菜〕蕨菜　甘寒滑、壅經絡筋骨間毒氣、令人脚弱不能行、消陽事、令眼暗、鼻塞、髮落、冷氣人食之、多腹脹、令人睡、小兒食之、脚弱不行、山人作茹食之、不可生食、日用本草云、蕨根搗洗、澄淸成粉、可以充飢、性冷、不可久食、

〔毛吹草三〕信濃　干蕨　出羽　干蕨　但馬　干蕨　同繩　紀伊　干蕨

〔奥羽觀蹟聞老志三陸奧土產〕薇蕨　所生于玉造郡大口村田切邑尤佳、其長三尺、其莖如矢、

蕨粉　所出于伊澤郡鬼首村尤好、

〔藝備國郡志上安藝土產〕蕨索　山縣郡山中農民、到秋掘蕨根、以槌擣之、取其心、水飛以爲蕨粉、以其皮綯索、名曰蕨索、其形堅剛而堪水濕、其色淡黑而不鄙野、用之成鑄墻或籬椅、又合作帆綱、又攝代椶櫚、其所爲用幾許不及枚擧矣、

蕨粉　出山縣郡、蕨根洗淨、以槌碎之、水浸一夜、漉其滓脚、以其汁器盛水飛、則其白汁凝滯如葛粉、陰

乾、致遠方、水練作餅、名曰蕨餅、

〔寛政四年武鑑〕松平肥後守容頌（○會津）時獻上（八月）漬蕨

青山大膳亮幸完（○美濃八幡）時獻上（八月）干蕨一箱　九鬼定五郎隆鄕（○丹波綾部）時獻上（四月）蕨粉

〔延喜式三十九内膳〕漬年料雜菜

蕨二石（料鹽一斗○中略）　右漬春菜料

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造佛所作物帳斷簡（○原缺年記、不詳、按續修文書四十五卷所收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、）

買蕨菜直錢廿一貫七百十六文（○中略）

蕨五千二百九十六把、直一貫三百廿四文、（文別四把）

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木（○中略）蕨、

〔萬葉集八春雜歌〕志貴皇子懽御歌一首

石激垂見之上乃、左和良妣乃、毛要出春爾、成來鴨、

〔古今和歌六帖六〕わらび

みよし野の山の霞をけさみればわらびのもゆる煙なりけり

〔古今著聞集十二偸盜〕花山院の粟田口殿の山のわらびを、あまりに人のぬすみければ、こもり縫淨法師よみ侍ける、

山守のひましなければかきわらびぬす人にこそいまはまかすれ

〔古今著聞集十八飮食〕別當入道北しら川にすみ侍ける比、山のわらびをおりて、相國の許へつかはせり、返事に、

思ひやる二木の松の下わらびおりてきつらんみねぞしらるゝ、

貫衆

〔兼好法師集〕ほりかはのおほいまうちきみ(源具守)〇をいはくらの山荘におさめたてまつりにし又の春、そのわたりのわらびをとりて、雨ふる日申つかはし侍し、
さわらびのもゆる山邊を來てみればきえしけぶりの跡ぞかなしき

〔本草和名 十草〕貫衆、(仁諝音古亂反)一名貫節、一名貫渠、一名百頭、一名虎卷、一名扁苻、(仁諝音補典反)一名伯萍、(楊玄操音薄彭反)一名藥藻、(仁諝音藻)一名草鴟頭、(陶景注云、形似老鴟頭、故以名之、)一名貫來、一名貫中、一名渠母、一名貫鐘、一名渠、一名黃鐘、(已上六名出雜要訣)一名頭實、(出兼名苑)一名貫草、(出雜要訣)和名於保和良比、

〔倭名類聚抄 二十草〕貫衆　本草云、貫衆、(和名於保和良比)

〔康頼本草 草中〕貫衆　(味苦微寒、有毒、和名於保和良比、又云於仁和良比、二月八月採根陰乾、)

〔倭訓栞 前編 十八 於〕おにわらび　枕草紙に見ゆ、倭名抄に貫衆を訓せり、今おほわらびともいへり、新撰字鏡に、般擧をおにわらび、土般擧をほしわらびによめるは、似たるをもて呼るなるべし、般擧は鐘乳の根、土般擧は土中に凝たる者也、

〔藥經太素 下〕貫衆　微寒味苦
白水ニ浸シテ剉焙、能散熱、主除寸白、殺三蟲、破癥、仍治金瘡痛、細末湯調、止鼻洪、

〔枕草子 八〕名おそろしき物
をにわらび

ムカデグサ

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕地蜈蚣草
名ニヨリテムカデグサニ充ル説ハ穩ナラズ、ムカデグサハ貫衆ノ一種ナリ、地蜈蚣草ハ紀州熊野山中ニ生ジ、土人ムカデラント呼ブモノコレニ近シ、ソノ草ハ樹皮ニ緊纏シテ螺厴(マメゴケ)草ノ樹石ニ附著スルガ如シ、莖ハ螺厴草ヨリ粗シ、葉ハ佛甲草葉ノ如クニシテ狭小、質厚クシテ微シ彎リ互生ス、葉ハ深緑色、一葉ゴトニ一根ヲ生ジテ樹皮ニ粘ス、花實ハ蘭ニ類シテ極メテ小シ、此草

形ヨク蜈蚣ニ似タレドモ、味苦カラズ、故ニ的當ニ非ズ、

〔下學集 下草木〕苔シノブ 正月用之

〔重修本草綱目啓蒙 十三草〕格注草 詳ナラズ

シダニ充ルハ穩ナラズ、シダハ大小二種アリ、草ニシダト云時ハ、オホシダニシテ、ホナガ一名ウラジロト云、歳首ニ籠ニ餝ル者コレナリ、又名ヤマクサ(薩州)スダ(讃州)モロムキ(勢州)ムロムキ(同上)モロモキ(肥州)ヤマノクサ(備前)ヘゴ(紀州、今ハ隱州ヘゴト呼アリ)、別ニ一種小シダト云草ハ形小シ、松耳ノ下シキニレ、又立花ニ用ユルモノコレナリ、コレヲ長崎ニテハ小ヘゴト云、京ニテコシダト云、

増、一種クモノスシダト云モノアリ、深山幽谷巖石間ニ生ズ、ソノ葉多ヲ經テ枯レズ、春ヨリ夏ニ至テ、漸漸嫩葉ヲ生ズ、葉ノ形金星草ニ似テ細嫩ナリ、葉背ニ金星ヲ生ズ、コレ其花ナリ、葉ノ末細長クシテ絲ノ如シ、夏月葉ノ末ニ小塊ヲ結ビ、遂レテ地ニ着テ根ヲ下シテ苗ヲ生ズ、江州八日市ヨリ勢州桑名ヘ通行スル、八風越ト云處ニ多シ、草木性譜ニ圖スルトコロコレナリ、一種タマシダト云フモノアリ、葉ノ形アフギカブラ一名ナルノシロウダノ葉ニ能ク似タリ、ソノ根ニ正圓ノ塊アリ、形半夏ノ如シ、夏月別ニ叢帶ノ本ヨリ細絲ヲ生ジテ嫩芽ヲ別チ生ズ、多ヲ經テ枯レズ、然レドモ甚ダ寒氣ヲ恐ル、又フヂシダト云フモノアリ、鐵脚鳳尾草ノ類ナリ、形チ相似テ甚長ク小葉繁密ス、又葉ノ疎ナルモノモアリ、形狀一ナラズ、コレモ夏月葉ノ末ニ小塊ヲ結ビ、地ニ着テ苗ヲ生ズ、多ヲ經テ枯レズ、

〔草木育種 下蕨實類べきもの〕をにしだ 俗に海蝦青と云と、未是非を詳にせず、二種あり、雄しだは葉厚して短し、雌しだは葉長し、黒ぼく土の陰地に栽、折々米泔水を灌てよし、總てしだの類は葉の背褐色になり、或星を生ず、此しだの實なり、此葉を採採て、陰地のこけむしたる所へ振て置ば、生るものなり、

海金沙

薇

〔出雲風土記意宇郡〕砥神嶋（中略）有二椎、松、莘、薺頭、蒿、都。波。、師。太。等草木一也、

〔多識編二草〕海金沙、今案須。那。久。左。、異名竹園荽、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕海金沙

ス。ナ。グ。サ。　カ。ニ。グ。サ。（大和本草ニ京師ノ名トス、然レドモ今ハコノ名ヲ呼バズ、）カ。ン。ヅ。ル。同上　カ。ニ。ヅ。ル。　カ。ナ。ヅ。ル。　イ。ト。カ。ヅ。ラ。江州　タ。ヽ。キ。グ。サ。同上　ハ。ナ。カ。ヅ。ラ。四国　サ。ミ。セ。ン。カ。ヅ。ラ。同上　フ。ル。シ。ノ。ブ。江戸　サ。ミ。セ。ン。ヅ。ル。和州　リ。ン。キ。ヤ。ウ。グ。サ。用薬須知後編　カ。ニ。コ。グ。サ。紀州

原野ニ極テ多シ蔓草ナリ、三月宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一二尺マデハ直立シテ草本ノ如シ、故ニ萬錫說初生作小株高一二尺ト云、今ノ本ニ初ノ字ヲ脱ス、宜ク補ベシ、苗長ジテ藤蔓細ク堅シ、長ク草木上ニ纏フ、其蔓ヲ採リ外皮ヲ剝、サレバ中ニ堅キ心アリ、黄色ニシテ光アリ、三弦ノ線ノ如シ、小兒戯ニ兩端ヲ引テ彈ズレバ聲アリ、故ニサミセンヅルト云、葉ハ井口邊草（トリノアシクサ）ノ葉ニ似テ深綠色、夏已後蔓ノ末ニ生ズル葉ハ甚細ニシテ、海州骨碎補（シノブ）葉ニ似テ脚葉ノ形ト異ナリ、秋ニ至テ葉背ゴトニ皆邊ニソヒテ高ク皺ミ、卷カヘシタル狀ノ如ク見ユ、其中ニ金沙ヲ含ム、脚葉ニハ沙ナシ、其梢葉ヲ採リ紙ヲ襯キ、日乾スレバ細沙自ラ落テ紙上ニアリ、收メ貯ヘ藥用ニ入ル、

〔和漢三才圖會九十八石草〕蟹草（かにくさ）俗稱

按蟹草山谷石縫間有之、人家盆盎際栽之、高一尺許、莖細硬、葉細長區如韭葉樣、面有叉、表裏蒼、四時不凋、無花實、

〔新撰字鏡草〕薇（先非反、菜豊木也、白薇、万可古、又）狗脊（大。和。良。比。、又云山。和。良。比。、）

〔本草和名八草〕狗脊、（蘇敬注云、狀如狗脊、）一名百枝、一名強膂、一名扶蓋、一名扶筋、（已上出本條）一名狗青、一名草薢、一名赤節、（已上三名出釋藥性）和名於。爾。和。良。比。、一名以奴和良比、

〔饅頭屋本節用集草木〕前麻伊（ゼンマイ）

〔和爾雅七草〕紫萁（ゼンマイ）本綱、紫萁一名月爾、綦、迷蕨、今按俗以紫萁為ゼンマイ者誤、又有月爾、月爾、一名紫綦、迷蕨

〔倭訓栞前編十〕ぜんまい　薇をいふ、錢餅の義、嫩芽の錢の形して廻轉せるをいふなるべし、古書にせんまひの名なし、倭名抄にも爾雅を引て、薇蕨をあはせてわらびと訓せり、○中略いぬせんまひは毛蕨なりといへり、又ひのきせんまひあり、

〔本朝食鑑三柔滑〕狗脊（ゼンマイ）

集解、古來圃作蔬用之者、近世多用之、出自國西諸州者、圓肥長大而軟脆、味亦美、畿中河内泉陽但播備諸州所產最佳、處處山野多生、春三四月生芽、如蕨而緣色、食之無滑涎、柔脆甘美、或醃藏、或曬乾、以貨販之、野人亦采貨于四方、京市最販之者多矣、既長如蕨莖、細葉似蕨而小圓、不尖有齒、面青有光、兩兩相對、其花至小而隨葉相對、其根黑色如狗之脊骨、又有黃毛如狗形者最少矣、

〔大和本草五草〕紫萁（ゼンマイ）　本艸蕨集解、一種紫萁似蕨有花而味苦、謂之迷蕨、初生亦可食、又曰、拳曲繁盛、今案ゼイマヒニ花アリ、又其ナキマガレリ、多ク繁生ス、フラビニ似テ味苦ク、初生ノ時可食、是紫萁ナル事分明ナリ、其苗ワカキ時採テ乾シテ食フ、ヤハラカニシテ蕨ニマサレリ、ゼンマイノ根ノ水飛ノ粉モチニ製シテ味ヨシ、蕨粉ニマサレリ、國俗狗脊ヲゼンマイト訓ズアヤマレリ、狗脊ハ別物也、中夏ヨリ來ル、誠ニ狗ノ脊ニ似タリ、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕薇　ゼ。ン。マ。イ。　ゼ。ン。ゴ。上總中略○

山足水旁ニ多ク生ズ、深山ニ生ズル者最大ナリ、春嫩芽ヲ採リ乾菜トス、コレヲ拳紫蕨朝鮮賦ト云、奥州三島ノ者、肥柔ニシテ上品トス、形拳曲シテ綿アリテコレヲ包ム、開ク時ハ紫藤（フヂ）葉ノ如ニシテ厚ク尖ラズ、枝多シ、莖長サ三尺許、數莖一根ニ叢ル、別ニ花穗ヲ出ス、高サ葉ト均シ、多ク枝ヲ分テ、黃褐色ノ穗ヲ布ク、長サ一寸許リ、秋後苗枯ル、根ハ則枯レズ、李時珍薇ヲ以テ、野豌豆、大巢菜ト爲ルハ是ナラズ、此二名ハ野豌豆ニ移シ入ルベシ、

イノテ

〔大和本草 五 菜蔬〕薇(イノテ)　召南草蟲詩云、陟彼南山、言采其薇、朱傳曰、薇似蕨而差大、有芒而味苦、山間人食之、謂之迷蕨、胡氏曰、疑卽莊子所謂迷陽者、本草彙箋曰、薇似蕨差大、味略苦、有芒亦潤大腸調中、尤消浮腫利水、イノテハ深山幽谷ノ内ニアリ、ワラビニ似テ大也、毛アリ、生ナルハ味苦シ、ホシテ食スベシ、其初生野猪ノ手ニ似タリ、故ニイノテト云、紫萁(ゼンマイ)ハ一根ヨリ多ク生ズ、薇ハ然ラズ、似蕨而大ニ、有芒而味苦キコト、朱子詩傳ニ云ヘルガ如シ、ゼンマヒニ不同、三才圖繪ニイヘルモ同、只本草綱目ニ薇トイヘルハ別ノ物ナリ、イノテニハ非ズ、本草ニ紫萁ノ一名ヲ迷蕨ト云、朱子ノ詩傳ニ別名ヲ又迷蕨ト云ヘリ、然レバゼンマヒモイノテモ同迷蕨ト云ナルベシ、カヤウノ同名異物多シ、

木賊

〔倭名類聚抄 十五 漆具〕木賊　辨色立成云、木賊(度久散)

〔箋注倭名類聚抄 五 工具〕木賊出嘉祐本草、云、木賊苗長尺許、叢生、每根一莖無花葉、寸々有節色青、凌冬不凋、圖經云、獨莖苗如箭笴、李時珍曰、此草有節面糙澀、治木骨者、用之磋擦則光淨、猶云木之賊也、按度久佐礪草也、

〔下學集 下 草木〕砥艸(トクサ 異名木賊)

〔新猿樂記〕四郎君者、受領郎等刺史執鞭之圖也、(中略)得万民追從、宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂(中略)信濃梨子、(又木賊)(中略)

〔和漢三才圖會 九十四 本 濕草〕木賊　和名度久散(中略)

按木賊磋物如砥、故稱砥草矣、多出於丹波、

〔重修本草綱目啓蒙 十 隰草〕木賊　トクサ　一名銼草(盛京通志)

山谷水邊ニ生ズ、人家庭際ニモ多ク栽ユ、苗ノ形麻黃ニ似テ大ナリ、徑二分餘箸ノ如シ、直立スルコト二三尺叢生ス、色深綠ニシテ束鍼道アリ、糙澀ニシテ木骨ヲ磋スベシ、寸餘ゴトニ節アリ、夏

月宜梢ニ花ヲ發ス、筆頭狀ニ開ク、コノ草宜ニ枝ナシ、若シ梢ヲ摘去ル時ハ、節ニ對シテ細枝ヲ生ズ、今梓人用ル所ノ者ハ、鹽湯ヲ以略煮過シテ、乾シタルモノ故、藥用ニ入ルヽニ堪ズ、生ナルヲ乾シテ用ユベシ、一種木ドクサハ形長大ニシテ節ゴトニ枝ヲ生ズ、又シノマモ木ドクサト云、同名ナリ、

〔農業全書十藥種之類〕木賊

木賊は藥にも用ゆ、細工につかふ時はとくさと云、庭にうへてもめづらし、正月に舊莖を悉く切取べし、新莖生じて美なり、本草曰、四月に取べし、又曰、取に時なし、うゆる地は、細かなる肥地の、やはらかなるにうへ、またば〳〵水をそゝげば、くきふとくのびやかにして用ゆるにたへたり、

〔草木六部耕種法八〕木賊ハ砂質土ノ少シク濕氣アル地ニ宜シ、地ノ堅ク實シタルニ宜カラズ、根ヲ分植ルニハ、秋分頃ヲ時トス、既ニ活付タルノ後ハ、魚洗水米泔水等時々澆ルトキハ、莖能ク肥太叢生スル者ナリ、毎年ノ早春舊莖ヲ悉ク刈採ベシ、蜜莖新ニ生ロク其色甚ダ美ナリ、

〔令義解三賦役〕凡○中略 其調副物○註略 正丁一人○中略 木賊六兩、

〔延喜式十三大舍人〕木賊六斤、木賊十五兩、十二月五日申省、

〔延喜式十五內藏〕年中所造御鞍三百六十六枚○註略 所須○中略 木賊大三兩、鍛冶四合、三月中旬具數申省、

〔延喜式十七內匠〕御斗帳一具、○中略 洗刷料鹿四合、木賊四兩、

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物 信濃國(中略)○中略 木賊二 右別貢雜物依前件、

〔延喜式三十四木工〕年料 伊賀國五圍、木賊大二斤、御床家

〔延喜式四十九兵庫〕凡御梓弓一張、○中略 木賊小一兩三分、繕梓弓料

〔枕草子三〕草は

とくさといふ物は、風にふかれたらん音こそ、いかならんとおもひやられておかしけれ、

土筆

〔新勅撰和歌集雜十九〕題しらず　寂蓮法師
とくさかるきそのあさ衣袖ぬれてみがかぬ露も玉と置けり

〔新續古今和歌集雜歌十九〕とくさに露のおきたるを見て　三條院女藏人左近
しなののや木賊にをけるしら露はみがける玉とみゆるなりけり

〔雨窓閑話〕觀世一代能の事并木賊刈の事
百性共申すは、我等事は信州のその原と申す所の土民に候、今日木賊刈の能興行有るよし承り及び、我等も木賊かる者共なれば、なぐさみながら見物して、〇中略心なき賤の我々ども、感心して、面白く侍る、去りながら只今遊ばされたる内、いで〳〵とくさからうよと申す所、鎌の御手、我等がしなれたるとは、聊替はりある故、申す事にて候といへば、觀世の曰く、それはいと面白き見咎めやうなり、いかにして汝等はかるかと尋ねければ、さればとくさはむかふへ一刀切りにかり申し候に、今遊ばされたるを拜見いたし候へば、同じ所を前の方へ二刀にて、御かりなされ候を見申して候、あれにてはとくさはかられ申すまじく候と云ひければ、〇下略

〔毛吹草三〕信濃　曾原木賊

〔伊呂波字類抄都植物附植物異〕土筆ツクヽシ

〔運歩色葉集津〕土筆ツクヽシ

〔易林本節用集都草木〕天花菜ツクヽシ　土筆同

〔書言字考節用集六生植〕天花菜ツクヽシ　土筆同　天花菜ツクバナ又云土筆

〔藻鹽草草八〕土筆
筆つ花、異名也、春のやけ野にと云と云々、つくづくともよめり、かた山のしづがこもりに生にけりすぎなまじりのつくづくしかな、さほひめのふでかとぞみるつくづくし雪かきわけて分る春のけしきは、

〔倭訓栞 後編十二〕つく〳〵し　筆頭菜をいへり、東國につくしともいふ、作州にははふしといへり、突出の意也、
片山のしづがこもりに生にけり杉菜交りのつく〳〵しかも
すぎなは杉菜也、接續草をいふ、こもりはこもりたる所をいふなるべし、杉菜の花也、土筆は和名也、西土に土筆と云は禿筆也、爲家卿、
さは姫の筆かとぞ見るつく〳〵し雪かき分る春の景色を

〔婦人養草〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付タ被召事也、一向不存知者、當坐ニ迷惑スベキ者歟、○中略 ツク〳〵シハフクタ、○中略 如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔多識編 二草部〕問荊、今案左宇知久、

〔本朝食鑑 三華和〕土筆 訓都久都久志
集解、土筆者、如筆狀、土面生、杉菜多處之地、又有與杉菜並生者、有土筆滿處、杉菜生、其根者、故或謂此與杉菜同根一種也、處處原野圃地多有、二三月穿土面出、高四五寸、或六七寸、其筆頭初黃綠有細紋、老而紋作紫黑斑子、莖節有鞘、節上著青皮、此亦老而作白皮、嫩時採枚去節上褌皮而煮食、味甘淡可愛、既老則頭先裂硬、不可食之、然菜之最晩時有筆頭者希、此野人所謂、野鍵摩擦土筆頭之故也、南方諸州早生、暖陽地或十一二月及正月采之、或多日穿土得之、俱野民競求請售、以貪價之故也、

〔重修本草綱目啓蒙 十三濕草〕木賊 ○中略
問荊　スギナ　マツナ備後　トウナ駿州　ツクノツハ若州　ツギマツ土州　マツブキ播州
フデグサ仙臺　一名簑同上　牛膝同上　水蕨通雅　續斷通雅　相思草遵生八牋　斷腸草　葱
婦草　筆草　寒莎救荒同上　賣菜毛詩集解　水草通雅正字

石松

水邊沙地ニ多ク叢生ス、春舊根ヨリ先ヅ花ヲ生ズ、莖高數寸梢ニ花アリ、筆頭ノ形ノ如シ、故ニ筆頭菜ト名ク、慶陽府志ニ見タリ、花ノ名ヲフデツグサ、古歌フデツバナ同上ト云、今ハツクヅクシト云、ツクシ、東京ホウシコ、加州ホウシ、備前ツク〳〵ボウシ、和州ホシコ、讃州嫩時二三寸ナルヲ早春食用ニス、今ハ多ノ中ヨリ出ス、花終テ葉出ヅ、是スギナ也、形イヌドクサニ似テ細ク短クシテ八九寸、節ゴトニ細枝叢生ス、是モ嫩ナルトキ食ベシ、此根黑色土ニ入ルコト甚深クシテ、本根ハ堀リ得ガタシ、

〔源氏物語早蕨四十八〕あざりのもとより、年あらたまりては、なにことかおはしますらん、御いのりはたゆみなくつかうまつり侍り、今はひと所の御ことをなん、やすからずねんじきこえさするなと聞えて、わらびつく〳〵し、おかしきこにいれて、これはわらはべのくやうじて侍る、はつほ成とて奉れり、

〔夫木和歌抄二十八土筆〕貞應三年百首草　民部卿爲家

さほひめのふでかとぞみるつく〳〵し雪かきわくる春のけしきは

〔宣胤卿記〕文明十二年二月十三日甲子、橋本羽林相伴、行河原取土筆、○中略今日於河東令切荊、指東北渚上、橋本羽林來、夕喰土筆食飯之、

〔殿中申次記〕正月八日

同〇永正十三

一土筆　一折○中略　若王子例年進上之

〔藝備國郡志安藝土産上〕大芝土筆　中華書未見其名、其形似筆故名之、春末生矣、蠶婦之合菩食、又作羹可也、大芝屬佐東郡、

〔倭名類聚抄二十〕薡　唐韻云、薡、音何反、日本紀私記云、薡、比加介、○　女薡也、

〔箋注倭名類聚抄十〕薡見神代紀上、訓注云、薡此云比阿礙、古語拾遺、薡葛、比可氣、齋宮式作日蔭、按、是草可作鬘、謂日影、故云日蔭、○中略本草和名云、松蘿、一名女蘿、本條、一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女

羅、出綱要訣、則知女羅之名、本草所載、蔦羅以下三名出綱要訣也、此女羅上恐脫蔓字、或源君引本草二名、誤爲出綱要訣也、則爾、松羅生雄耳山川谷松樹上、陶注、松羅多生雜樹上、而以松上者爲眞、小雅頍弁正義引陸氏義疏云、松羅自蔓松上、生枝正靑、萬豆乃古介、依輔仁、又見元輔歌、按萬豆乃古介、謂松苔也、又六帖歌謂萬都乃岐乃古介、新撰歌謂之萬都爾加々禮留古介、本草和名無佐留乎加世之名、按乎加世麻枠也、以枠所績之麻縷爲麻枠、今俗亦有加世縷之名、是物在深山、其狀似麻枠、故云縷麻枠也、枠謂加世、此古今集物名有左賀利古計、卽此物、故日本紀纂疏云、蘿謂垂苔也、或名麻都乃乎賀世、今周防俗呼佐留乃乎賀世、南部俗呼佐留加世、

〔圖珠庵雜記〕こけをひかげといへど、なべてみないふにはあらず、ひかげをまたかげともいへり、萬葉にみえたり、

（頭書）眞淵云、ひかげは深き山などのきにかゝれる蘿をがせてふものなり、萬葉に松のこけとよみしもこの事なるべし、さるを契沖は雜木の下の地などに長くはふ苔のあるを、それなりと思へるよし、あるものに書きたり、そは誤なり、和名抄、祭祀具、蘿蔓〈和名云、比加介加都良、〉同苔類、蘿〈日本紀私記云、蘿比加介、〉女蘿也、松蘿一名女蘿、〈和名萬豆乃古介、一云、佐留乎加世、〉宣長云、萬葉十四に、夜麻可都良加氣麻之波爾母、衣可多伎可氣乎、これに加氣とよめるもひかげなり、二に山蘰影爾所見乍とあるも、山かづらを枕言として影はひかげの意につゞけたるを、この十四の歌にて知るべし、

〔重修本草綱目啓蒙〕〈十六苔〉石松　キツネノヲガセ〈新校正〉　ヒカゲノカヅラ　カミダスキ　サガリゴケ〈新古今、[illegible]抄〉　ヒカゲグサ〈同上〉　ヤマカヅラ〈共ニ同上〉　キツネノタスキ〈但州〉　ヤマウバノタスキ〈雲州〉　シヽノネバ〈土州〉　キツネノケサ〈雲州〉　ハイタロ〈越前〉　サルヲガセ　タンダノタスキ〈江戸〉

玉柏

山中地ニハヒテ生ズ、其蔓長サ五七尺、枝多ク分ル、葉ハ土馬騣ニ似テ黄綠色ナリ、四月枝ノ梢ゴトニ穗ヲ生ズ玉柏ニ異ナラズ、

〔重修本草綱目啓蒙 苔十六〕玉柏　マンネングサ 新校正　日光ノマンネングサ　マンネンスギ 花戸　ピロウドスギ 同上

卽次ノ條ノ石松ノ草本ナル者ナリ、深山幽谷ニ生ズ、一莖直上ス、高サ五七寸、上ニ枝ヲ多ク分チ、土馬騣ノ如キ細葉多ク着テ石松ニ異ナラズ、夏已後枝頂ニ穗ヲ生ズ、長サ一寸許、濶サ三分許、周圍細鱗アリテ、葉ノ形ニ異ナラズ、黄白色ソノ苗多ヲ經テ枯レズ、故ニ千年柏萬年松ノ名アリ、又別ニ一種高野ノマンネングサト呼ブ者アリ、苔ノ類ナリ、根ハ蔓ニシテ長ク地上ニ延ク、處處ニ莖立テ、地衣ノ如キ細葉簇生ス、深綠色ナリ、採リ貯ヘ久シクシテ乾キタル者水ニ浸セバ、便チ綠ニ反リ生ノ如シ、是物理小識ノ千年松ナリ、埔、衡嶽志曰、萬年松出祝融峯懸崖上、本草類也、高者三四寸許、凌冬不凋、連根拔之收巾笥中、歷數年、取而植之、蒼翠如故、又拔收之、再經歲月復植、亦復如是、海內名勝志云、蒙自山中有仙草、葉圓枝細、採其葉乾之一二年、熏以泉井或呵之、復鮮如故、此亦大和山萬年松之屬也、

一種カサゴケト呼ブモノアリ、莖細クシテ高サ僅ニ二寸許、一莖直上シテ枝ナク、頂ニ葉ヲ生ジ傘ノ狀ヲナス、徑リ一寸餘、ソノ色踏綠色ニシテ、潟ヲ澆タルガ如シ、深山幽谷石苔中ニ混ジ生ズ、

松葉蘭

〔草木育種 下 草實植べきもの〕松葉蘭　中山傳信錄の松蘭竹蘭の類なるべし、九州伊豆安房等の高山岩石の間に生ず、石を削て是を採也、植るも盆の水拔の穴を大くあけ、陶器の闕を伏へごを刻て入、或ハ棕櫚の毛を入、其上へ山の黄土の塊を入て、山の樹の根などを掘たる赤土へ、へごを粗く刻てませ植てよし、常に北陰に置、北風をよく通し折々米泔水を澆べし、霖雨の節ハ内へ取入べし、冬ハ土藏へ入るなり、

卷柏

〔草木六部耕種法十二〕松葉蘭ハ琉球國ヨリ多ク舶來ス、又薩摩、大隅、伊豆、安房等ノ海岸ニモ稀ニハ有リ、八丈島等ニハ殊ニ多シ、凡ソ此種類ハ甚ダ寒氣ニ傷ム者ナレドモ、日光ヲ忌ミ北風ヲ好ム、故ニ夏ハ陰地ノ北風能ク通ル處ニ置ク、稍々盛養水或ハ米泔水ヲ時々澆ギテ露雨ヲ避ケ、九月下旬ヨリ三月マデノ間ハ、閉藏シテ霜ト寒風トヲ嚴ク防グヲ良トス、

〔倭名類聚抄二十草〕卷柏 本草云、卷柏、〈和名伊波久美、一云伊波古介、〉

〔東雅十五草卉〕卷柏イハグミ 倭名抄に、卷柏イハグミ、一にイハゴケといひ、石韋イハノカハ、一にイハグミといふと見えたり、これ二物にして、並同じくイハグミの名あるなり、イハグミの義不詳、イハゴケとは石苔也、今俗にイハヒバといふ是也、イハノカハとは即石韋の字の訓をもて呼ぶ也、今俗にイハガシハとも、ヒトツバともいふ是也、〈ヒトツバといひ、カシハといふ義、下に註す、〉

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕卷柏 イハクミ〈和名抄〉 イハゴケ〈同上〉 イハヒバ〈京〉 イハマツ〈豫州〉 コケマツ〈[illegible]州〉 タンゴノモトマリ〈[illegible]〉 クサヒバ 一名長生草〈秘傳花鏡〉 萬年松〈同下〉 麻臣

釋名 不死草〈王宇〉 陰蒼〈同上〉 蒼松〈[illegible]〉 石卷柏〈本草〉 生卷柏〈天台山方外志〉

深山ニ生ズ、採テ假山ニ栽ユ、年久シキ者ハ幹フトク、高サ一二尺、葉繁密、形扁柏ニ似テ薄ク勁シ、多ヲ經テ枯レズ、乾ク時ハ葉卷屈シテ鷄ノ足ノ如シ、潤ヘバ開テモトノ如シ、其葉短クシテツマリタルハ、トクゲヒバト云フ、葉ノ長キハ、スソノヒバト云フ、一種淺山ニ生ジ、只一葉ノミナルヲヒメヒバト云フ、一名ノヒバ、〈勢州〉カタヒバ、〈同上〉是紹興本草ノ兗州卷柏ナリ、

地柏

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕卷柏

附錄、地柏 アタゴ、ヽケ、ヤウラクゴケ、深山陰地ニ自生アリ、移シテ家庭ニ栽レバ、盛ニ蔓延シテ地ヲ掩フ、莖ハ細クシテ絲ノ如ク、葉ハ扁柏ニ似テ薄シ、多ハ色黄赤ニ變ジテ枯レズ、

古事類苑

植物部二十八

藻

藻類ニハ、採リテ食用ニ供シ、肥料ニ充ツルモノ少ナカラズ、就中昆布、和布、荒布、海松、石花菜、海髮、海蘿、鹿角菜等ハ、其主要ナルモノナリ、

〔運歩色葉集〕藻(モ)

〔重修本草綱目啓蒙〕十六水草 水藻〇中略 水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名ナリ

海藻〇中略 海中藻類ノ總名ナリ

〔和漢三才圖會〕九十七 海藻〇中略

按生海島水上者曰藻、生海中石上者曰苔、今藻苔共通曰苔、而海苔類以充食品者、凡三四十種、隨形色及所出地立名、不能悉記、

〔延喜式〕八祝詞 祈年祭

奧津藻菜、邊津藻菜爾至〇中略 〇稱辭竟奉久、

〔萬葉集〕三雜歌 石川少郎歌一首

然之海人者、軍布刈鹽燒、無暇髮梳乃少櫛、取毛不見久爾、

〔倭訓栞〕前編三十二 め〇中略 海布をいふは、もの轉語なるべし、又草木の芽の柔なるより出たるにや、萬葉集に軍布をよめり、軍布は昆布と意同じ、混渾通じ書るが如きにや、和布、荒布、搗布

昆布

などと倭名抄に見え、建武年中行事にめの御汁ものといひ、又後拾遺集にめをつゝみてつかはしたりとみえたり、

〔藻鹽草 草八〕藻

いつもの花 河上のいつもの花といへり、たゞのものなし云也、 をきつ藻、河藻、玉藻、 玉もかりしくとよめり、是につき異儀あり、或はもをかりくうと云説あり、それも玉も刈食とかけるによりて、かりはむと云り、又はしくといへば、もをかりしくなども得たり、しかれども、これいづれもわろし、玉もをかりしとたゞ云也、く文字はたすけことば也と云々、

なびき藻、すが藻、しき藻かる藻、 あまの也、 たく藻、 生と云り、又はあまのたくもとも云、 つくも、 老たる藻のかみによす、 すく藻、 是はもにあらず、むまうしの食物也、すくもたくなどもよめり、 かる藻、 これぬのしいのかぐ物まことのもにあらず鮮也、 なつげ藻、 眞菅藻とかけり、しかれ共、これをなのりそとよめり、 藻くづ、みだれ藻、ながれ藻、玉藻かづく、ひじき藻、 伊勢物語ひじきものには袖をしつゝもとよめり、海藻の中にひずきもと云物をば鹿尾菜、ひずきも六味菜同、倭俗にはひじきもと云これら也、しかればひじきもといふ物をやるとて、ひじきものには袖をしつゝもとそへたる也、しきものは、中にひじきものと云べき様なしと云々、 河菜草 異名也 玉藻の花、をきの藻くづ、うち河に生る菅、万

〔本草和名 九草〕昆布、乾苔 性熱 柔苔 性冷 昆布一名綸布 出崔禹 和名比呂女、一名衣比須女、

〔倭名類聚抄 十七海菜〕昆布 本草云、昆布味鹹寒無毒、生東海、 和名比呂米、一名衣比須女、 陶隱居注云、黄黑色柔韌可食、

〔箋注倭名類聚抄 九〕按是物於諸海藻中最闊大、故云比呂米、產蝦夷地、故云衣比須女也、〇中略 證類本草引作柔靭、證類本草又引陳藏器云、生南海、葉如手、乾紫赤色、大似薄葦、陶云、出新羅、黄黑色葉柔細、陶解昆布、乃是馬尾藻也、按陳氏所見陶注作柔細、故云乃是馬尾藻、若作柔靭、何以陶所言爲馬尾藻乎、源君所據、或與陳氏同、今不從改、然其爲柔靭之誤、無容疑、宜從證類本改正、

〔下學集 下草木〕昆布(コンブ)

〔尺素往來〕當日早晨之粥汁者、干蕨、大根、同菜者炙和布、炙昆布、醋鹹、烏梅、幷唐納豆之内兩三種、〇中略 茶子者、〇中略 結昆布、

〔東雅 十三穀蔬〕略○中倭名抄に、略○中昆布をヒロメとも、エビスメともいふ、(中略)ヒロメといふは、其闊きをいふなり、エビスメとは、蝦夷地方より出るをいふなり、俗に昆布を蝦夷の物なりなどいふは、ヒロメの名に取りしなり、ロコンブの義なりなどいふは、近俗に出し所なり、

〔倭訓栞 前編九古〕こぶ　昆布の音也、古名はひろめといへり、倭名抄に見えたり、古へ陸奥蝦夷貢獻して民部省に納む、索こぶ細こぶ廣こぶの名あり、延喜式に宇賀昆布見えたり、宇賀は箱館の外海の名也、今石附といふ、赤きを上品とす、烏こぶと稱するものあり、海へちまの類にて、食ふべき物にあらず、

〔宜禁本草 乾五〕昆布　鹹寒無毒、主十二水腫癭瘤結氣瘻瘡、生東海、凡海中菜皆療癭瘤結氣、青苔紫菜皆亦然、昆布主陰瘡、含之嚥汁、(海島人眼病不生、北人食之病皆生、)水土不宜爾、

〔本朝食鑑 三水菜〕昆布(今昆布訓如字、又訓古布、和名比呂米、一名衣比須女、)集解、昆布生於奥之松前及蝦夷海中、形類海帶、廣四五寸、長數丈餘、或二三尺亦有、倚石生而浮于水上、如浣布隨波漂搖、其色黃黑、兩端薄帶蒼色、中厚黃色、海人采之曬乾、以貢于四方、其表出白鹽、而如霜如粉、此亦兩片蒼黑色而稍中黃赤色而厚、煮熟亦同色、但厚者倍生乾、爾古者陸奥蝦夷貢獻之、以納民部省大膳寮、有索昆布細昆布廣昆布之名、近代奥之仙臺南部津輕松前之守吏供貢獻之、或自松前傳送于敦賀、自敦賀傳送于若州、若州小濱市人製之、號若狹昆布、自若狹傳送于京師、京師市上製之、號京昆布、其味最爲勝、松前若州不相及、故作上品乾果、凡昆布作大饗嘉儀之贈、祝冠昏壽生之賀、俗稱古布、以假歡賀之和調、每作庖厨茶會之菜果、或齋日取煎汁代鰹魚汁、僧家亦以煎汁調羹而逐甜味、又作菓及油具、大抵煮昆布不用銅鐺、則色黑不美、用銅鐺、則兩端純青中赤而佳、海藻及鹿角菜之類亦若許矣、

氣味、甘鹹微酸、滑寒無毒、主治、破積堅、利水腫、消痰癭瘤瘻瘡、

附方口舌生瘡、(用好昆布燒黑、爲末傅瘡上、)痰結小癭、(皮園黑黒者用昆布、細切洗淨待乾、日日服上、則小者消大者軟而愈、)

〔和漢三才圖會〕九十七 藻 昆布　綸布（音關　綸青絲綬也、誤爲昆耳、和名比呂米、一名衣比須女、○中略）

按昆布生東海、蝦夷松前及奧州海底附生於石、蝦夷島有龜田之地、凡三十餘里海中、寸地亦無不有之、其大者一株而成林、葉長二三丈謂之長昆布、大抵幅四五寸長二三尺、海人用鎌刈取之、挾腰乃需干身、則使繩挽浮却、凡蝦夷松前之產、黃赤色而味甚美爲最上、津輕之產厚而味不美、但焙食或爲油煠即佳也、南部產稍黑而味亦劣矣、並傳送之若狹、同州小濱市人能調製之、以送四方、其製法以爲家秘、今京師亦能之、故京若狹共得名、

〔日本山海名產圖會〕五 昆布（こんぶ　和名ヒロメ、一名蝦夷（かいふ）布、）

是は六月土用中にして、常に採ることとなし、同じく蝦夷、松前、江刺、箱館などにも採れり、小舟に乘り鎌を持ち、水中に暫くありて昆布を抱、是につられて浮む、皆海底の石に生ひて、長さ三四尺より十間計のものあり、たまたまには石とともにあぐるもあれども、十日計にして根自ら離る、長きはよき程に切りて、蝦夷松前の海濱の砂上家の上、往來の道に至るまで、一日乾すこと、實に錐を立るの隙もなし、暮に納めて小家に積み、其上に筵を覆ふこと一夜にして、汐浮きたるを荒昆布と云、（世俗に蝦夷の家は、昆布をもつて葺くと云は、此乾したるを見たるなるべし、家はすべて板葺し板圍ひなり、）色赤きを上品として、僅かに其階級をわかてり、又八九月の比自然打あぐるを寄せ昆布と云、

〔蝦夷行記〕五月よりはまた昆布にかゝり、其場所々々へ船出せり、昆布は西海路にはなく、東海路箱館の外海より蝦夷地へかけて、四五十里の間昆布の場所あり、是を取事いと心安き業にて、海底より薙取、濱邊へしきならべて、干あぐるまでの事なり、此業六月中迄に仕廻て、七月よりは一同に休み、○下略

〔延喜式〕二十三 民部 交易雜物

陸奧國（中略）昆布六百斤、索昆布六百斤、細昆布一千斤、○中略

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式大膳三十三〕正月最勝王經齋會供養料、〈略○〉並僧別日菓菜料、〈略○中〉細昆布、〈以二一把一充二廿口一〉索昆布二條、昆布〈以二一帖一充二卅口一〉

仁王經齋會供養料

僧一口料、〈略○中〉細昆布〈以二一把一充二六口一〉廣昆布〈以二一帖一充二卅口一〉〈○中略〉　右一日供料依前件、

〔延喜式內膳三十九〕年料

陸奧國〈索昆布廿斤、細昆布百廿斤、廣昆布廿斤、○中略〉　右諸國所貢、並依前件、仍收貢殿供御、

〔執政所抄上正月〕十五日

粥御節供事

御菜二前〈略○中〉　一折敷　瓜、昆布、通根、蕪、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄、御對面御祝已下之事、

一今朝〈○九月九日〉より御粥まいる、又燒栗九、昆布たきれ、〈四一寸〉いも、[illegible]百日參候、

〔[illegible]記〕昆布の事、中より折たる所を向にして一把宛竪に雄羽に置かけ積べし、雄羽とは右より左へ積事也、如此重候へば、上座へ披露の時に、貴人の右の方、上へ成によりて雄羽と云なり、

一歸傳に、上は五十把、中は卅把、下に十把也、十把以下は、紙に一把宛包、積たる事も有、

〔南留別志三〕一いはひの時、昆布の切様に、ひきまたといふ事あり、かへるのまたに象るといふは心得がたし、匹またなるべし、二端の布をひとつにつらねて、兩のはしよりまきて、おきたる形なり、夫婦をいはふなるべし、

〔續日本紀七元正〕靈龜元年十月丁丑、蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下、相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閇村便建郡家、同百姓共率親族、永不闕貢、並許之、

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

海帶

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略
一僧供　導師一人料、〇中略　昆布二帖、
〔權中納言定賴卿集〕あまうへの御もとより、ひ。ろ。め。といふ物たてまつり給けり、つゝみにかきつけて、をきたまひける、〇歌略
〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、〇中略　宇。賀。昆。布。
〔毛吹草〕三出羽　昆布
〔雍州府志〕六土產昆布　出羽國松前宇賀出者、其狀編薄、其色黃赤、其味甘而帶微酸、又若狹召。昆。布。爲宜、倭俗高貴之所食、是謂召上、其味美而堪高貴之所食、故謂召昆布、今悉在京極西竹屋町、
〔寬政四年武鑑〕松平豐後守齊宣〇薩摩鹿兒島　時獻上二月昆布　宗對馬守義功〇對馬府中　時獻上二月昆布
松前志摩守道廣〇松前福山　時獻上昆布
〔採藥使記〕上奧州照任曰、奧州田奈富松津川ニ昆布ヲ產ス、大キナルモノ三五丈、幅ハ三四尺アリ、土人屋ヲ葺テ暑雨ヲ除ク、
〔見た京物語〕昆布をみ。づ。か。ら。と呼びて、ことの外に用ゆ、芝居にても饅頭や水辛と賣る、
〔庖廚備用倭名本草〕四水菜昆布〇中略　元升〇向井曰、洛下ニ一人昆布ヲ生ニテ過食シタル者アリ、夜ニ入テ此ノ昆布ウルホヒフクレテ、胸腹脹痛ス、甚シキ時ハ、胸中ニセメ上リ悶絕セントス、半時ガホド身ヲ休ルコトアタハズ、薑湯ニテ錦袋子ヲ多ク用テ嘔吐ス、吐タルモノハ皆昆布ニテ、痰ト倶ニ出タリ、吐ツクシテ則安眠セリ、昆布生ニテ多食スベカラズ、
〔重修本草綱目啓蒙〕十六水草海。帶。　ホソメ南部　ミヅメ備前　ミヅワカメ生　ボンメ共同上、乾一
名多士麻村家方

和布

奥州ニ産ス、濶サ六七分、或ハ一寸許、厚シテ昆布ノ如ク、味モ似タリ、賤民ノ食ナリ、貯置ケバ白キ粉ヲ生ズ、水ニ入ルレバ青黄色、燈火ノ障ヲ張ルニ用テ甚ダヨシト云、此條ヲアラメト訓ズルハ非ナリ、アラメハ黑菜ナリ、

〔本草和名九藻〕海藻、一名藻首、一名薄(仁諝音倉反)、石帆(楊玄操音凡)水松(状如松)、一名海藻、一名海蘿(已上三名出雜要決)一名海藻一名藫(出雜要決)一名青苔(出兼名苑)一名海髮(状如亂髮、在海中、作藫字)、一名鹿茸(似鹿茸)水紫菜(状似紫帛)一名神仙菜、藻菜(似藻而大、已上五名出崔禹)石帆、一名石連理(出兼名苑)和名之末毛、一名爾木女、一名於古、

〔倭名類聚抄十七〕海藻 本草云、海藻味苦鹹寒無毒、(和名爾木米、俗用和布二字、)

〔古名錄二十七〕今案、古書ワカメニ海藻ノ字ヲ誤リ用ヒ来レリ、海藻ハホタハラニシテ裙帶菜(ワカメ)ニ非ズ、

〔東雅十三穀蔬〕藻モ(中略)倭名抄に、(中略)海藻をニギメといふ、俗用和布字、本朝令に滑海藻をアラメといひ俗用荒布字(中略、ニギといひアラといふは、古語に荒和などいひし如くに、其義文の義なりとして分ち呼びしなり、ニギメなれば、又ワカメといひて、萬葉集には、和海藻、蕃藻の字を用ひたり、)

〔古事記傳十四〕和名抄には爾木米と阿良米とを出して、別に和加米と云をば出さず、又名も和加米に爾岐米とは、一の如く思はるれども、延喜式に、海藻、稚海藻、滑海藻、又和布、海藻、荒布と、三を並べて擧たる所々あれば別なり、かくて式の和布は(海藻と分てれば)和加米なるに、和名抄には、海藻を俗に和布と書よしあるを以思へば、總ては爾岐米と云を、其中にて細に柔なるを分て、別に和加米とも云へるにや、(中略)海藻は米の總名なるに、此字を又爾岐米に用たるを思へば、種々の米の中に爾岐米を主とするにや、(下略)

〔宜禁本草乾五菜〕海帶(ワカメ) 催生下水、療婦人風、此海藻更麁、柔靭而長、乾之以束器物、

〔庖厨備用倭名本草木四菜〕裙帶菜(ワカメ)(中略)元升(中略)曰、(中略)余西國海邊ニ住スルコト年久シ、毎春和

布ヲ食セリ、海中石間ニ生ズ、其ヒロサ二三寸或三四寸、長サハ五六寸或ハ尺ニアマリ、二尺ニ及ブモアリ、其色初メテ取タルトキ青シ、是ヲ煮レバ、イヨイヨ青鮮也、サラシテ其ノ色黄黒也、生ニテモ煮テモ食スベシ、柔滑ニシテ味美也、勢州ヨリ出ル和布ハ柔滑ナラズ、味モ亦西國ノモノニスグレタリ、壹州ノ和布最ヨシ、

〔本朝食鑑三水菜〕和布訓和加女

釋名、海藻藻類和名雖未詳、俗用和布多矣、(平野)按、本朝式有和布海藻、而難分、暫從于通俗、或曰和布者蕪也、未詳、

集解、狀似昆布之葉端而細薄柔靱、長不過一二尺、色青、其根如荒布根而蒼黑剛堅、可造剪刀靶及器、附石而生、其葉浮于水上、味美而甘鹹不減昆布、以爲上饌、本朝式大膳寮載之、一種有極細如紐者、產于伊勢海濱、此和布初者尋常和布、漁人細割成絲條、故稱伊勢和布、最美味、世以賞之、兩種俱生乾同可食之、南海諸州晒乾貨于四方、西海北海諸州亦所在有之、又海上有青佐、青昆布等物、皆不足食、若嘗之則身腫痒痛也、

氣味、甘鹹平無毒、主治、利水解酒毒、

〔大和本草八海草〕裙帶菜　食物本草載之、和名抄曰、ニギメ、處々海中ニ多シ、二月ニトル、伊勢ノ海ニ產スルヲ好トス、又紀州ノ賀多ニ產スルハ、脆クシテ味ヨシ、珍賞ス、爲茹而食ス、煮爲羹亦可也、生ナルヲモ食ス、又莖ヲモ食フ、莖ハコトニ甘滑ナリ、莖ノ傍ニツキテ厚ク、耳ノ如ナルヲメミヽト云、莖モメミヽモ美トシ、又鹽醬ニツケテ食ス、性寒味甘シ、有虫積患腹痛人不可食、或曰、本草二十八卷ニ、所載ノ石蓴是ナルベシト云、生薑ト醋ニ和シテ食ヘバ無腹痛之患、ワカメヲ食テ腹痛スル者モ亦可食之、

〔令義解三賦役〕凡調中略○正丁一人、絹絁八尺五寸、中略○若輸雜物者、中略○海藻一百卅斤、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

長門國(中略)海藻一百五十斤、○中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

(延喜式二十四主計)凡諸國輸調、○中略　一丁、○中略　海藻、海松各卅三斤、(但隱岐國三斤五兩、)

凡中男一人輸作物、○中略　鹿角菜、大凝菜、海藻各六斤、(細海藻十一斤一兩、)

(延喜式三十三大膳)正月最勝王經齋會供養料、○中略　僧別日菜料、○中略　海藻二兩、○中略　稚海藻三兩、○中略　滑海藻二兩二分、

正月修眞言法料、○中略　滑海藻、和布各五十五斤、

試海印三昧寺年分度者料、○中略　和布五斤、(二斤試僧料、三斤供料、)海藻二斤、(試僧料、)　蒐布一束、(使料、)

安祥寺試年分度者、證師六人菜料、○中略　和布三連、鹽三升、使料、○中略　和布二連、

仁王經齋會供養料、僧一口別、○中略　海藻二兩四銖、(和布二分一銖、滑海藻一兩二分、)○中略　右一日供料依前件、

(延喜式三十九内膳)供御月料

海藻廿二斤八兩、○中略　右月料、小月減卅分之一、

年料

參河國、(若海藻八十斤、…)○中略　遠江國、(…)下總國、(…)○中略　若狹國(中略)十二斤、○中略　越前國(…)能登國、(…)○中略　越中國、(…)○中略　佐渡國、(…)○中略　但馬國、(…)因幡國、(…)○中略　伯耆國、(…)○中略　長門國、(…)○中略　右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿、

歌　和歌

(萬葉集十四相聞)

比多我多能伊蘇乃和可米乃多知美多要和乎可麻都那毛伎倍毛己余必母、

(萬葉集十六有由緣并雜歌)角島之迫門乃稚海藻者人之共荒有之可杼吾共者和海藻、

(類聚三代格一)太政官符

定准犯科祓例事

一大祓料物廿八種略○中　海藻六斤　滑海藻六斤　一上祓料物廿六種略○中　海藻三斤　滑海藻三斤　一中祓料物廿二種略○中　海藻一斤　滑海藻一斤　一下祓料物廿二種略○中　海藻六兩　滑海藻六兩

延暦廿年五月十四日

〔三代實錄四清和〕貞觀二年五月十一日庚申、天皇及皇太夫人、以米六百斛、略○中海藻三萬三千三百三十斤、新錢一十二萬五十文、施僧尼優婆塞優婆夷及隱居飢窮之輩二萬九千六百七十四人、以助修淳和太后齋會也、

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、略○中

一僧供　導師一人供料、略○中　海藻六帖、略○中　法用千僧供一人料、略○中　海藻一連、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、略○中　諸國工匠役夫、米鹽之外加給醴魚和布等、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年六月七日乙卯、勅唐僧湛譽供料、日白米三升二合、略○中　海藻二兩、滑海藻二兩、節料白米十斛、每年五月十二日、以近江國正稅充之、

〔和泉式部集續集下〕春の初比、和布と云ふ物を、梅花につけて、人のおこせたるに、

花みればこのめも春になりにけり耳のまもなし鶯のこゑ

〔朝野群載七攝家〕御齋會加供解文

左大臣家　奉送　八省御齋會加供事

合略○中　精進物、青苔曳干　和布曳干　海松　昆布略○中

右奉送如件

大治二年正月日　宮主肥後權中原盛實

〔古今著聞集八好色〕藏人丈のびやかに、此女房參り侍よし奏し申ければ、うれしく思しめされて、やがてめされにけり、○中略彼少將は隱遁なりけるを、あらぬかたにつけてめし出されて、よろづに御情をかけられて、近習の人數にくはへられなどして、程なく中將になされにけり、つゝむとすれど、をのづから世にもれ聞へて、人の口のさがなさは、其比のことわざには、なるとの中將とぞ申ける、なるとのわかめとて、よきめののぼる所なればかゝる異名を付たりけるとかや、

〔八幡宮本紀三〕長門國豐浦郡住吉に坐荒御魂神社、○中略十二月晦日の夜は、和布刈とて、神秘の神事あり、これは晦日の夜半ばかりに、此御社の下神人、豐前國波夜止毛の沖に出る、はやともよりも又神人出向ふ、此時潮はるかに退て雙方の神人各々海底にいたるゆゑ互に松明の光も見え、聲も聞ゆる程にて、ともに和布をかり取、○註これを元日の朝御供にそなふ、波夜止毛にても同事となり、此祭今にたえず、いにしへは其刈取たる神職等、今も猶此夜にも神事せしとかや、

〔延喜式四十二東西市〕海藻廛○中略右五十一廛東市　海藻廛○中略右卅三廛西市

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略宅常贄、諸國土產、貯蓄豐也、所謂○中略丹後和布、

〔毛吹草三〕伊勢　國崎若和布　同和布耳
志摩　和布
三河　和布（ワカメ）
若狹　若和布
出雲　加々浦若和布
紀伊　賀太浦賀太和布
阿波　鳴門和布
肥前　若和布

〔寬政四年武鑑〕松平下總守忠功桑名○伊勢　時獻上三月　洗水和布
松平主計頭忠篤島原○肥前　時獻上三月　若和布
稻垣攝津守長以鳥羽○志摩　時獻上四月　洗わかめ

〔雲錦隨筆二〕阿波鳴戶といふは、阿波國板東郡の端と、淡路國三原郡金崎ト鳴戶崎と、雙相迫りて海を夾む、○中略因云、和布は當地の名產にして鳴門和布といふ、是を採て灰に積し干乾を、灰干の和

布と號す、幾許の年を重ぬ共濕ることなく、用ゆる時は熱湯をかくれば、忽ち和かになり、色よく味かはらず美也、福良の浦人多く製して名物とす、

〔狗猧集一春〕若和布

汁の子もうみ出てよきわかめかな　貞徳

かづきするあまの妻も若めかな　重勝

海藻根

〔令義解三賦役〕凡調、(中略)正丁一人、絹絁八尺五寸、(中略)若輸雜物者、(中略)海藻根八斗、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國(中略)海藻根十斤、(中略)　參河國(中略)海藻根十斤、(中略)　遠江國(中略)海藻根十斤、(中略)　出雲國(中略)海藻根十斤、(中略)　石見國(中略)海藻根十斤、(中略)　紀伊國(中略)海藻根十斤、(中略)　阿波國(中略)海藻根□□、(中略)　伊豫國(中略)海藻根十斤、(中略)　右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、(中略)一丁、(中略)紫菜、海藻根各十六斤、

凡中男一人輸作物、(中略)海藻根(マナカエ)四斤、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別、(中略)海藻根一兩三分、(中略)　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九内膳〕年料

伯耆國(中略)海藻根一擔十籠、(中略)　右諸國所貢、並依前件、仍收貢殿擬供御、

烏頭布

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、(中略)醍醐烏頭布、

〔庭訓往來諸抄大成〕烏頭布　黑和布なり

〔庭訓往來諸抄大成扶翼〕貞丈(伊勢)云、十月の狀にも、昆布、烏頭布、荒布と見えたり、然れば烏頭布は海草なり、醍醐は山にて海なければ、海草の生ずべき理なし、然れども烏頭布を他所より求

めて、食料に調味して出すを名物とするなるべし、西山にて心太を製し出すと同義なるべし、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕滑海藻 本朝令云、滑海藻、〈阿良女、俗用荒布、〉

〔箋注倭名類聚抄 九 藻類〕按本草圖經云、東海又有一種海帶、似海藻而麁且長、登州人取乾之、柔韌可以繫束物、醫家用下水、速於海藻昆布之類、是可以充阿良米、

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、〈中略〉菜者、〈中略〉荒布、

〔本朝食鑑 三 水菜〕荒布〈訓阿良女〉

集解、荒布處處海濱多采之、附石而生、狀似昆布、細狹而厚、色深黑如墨、淤滑、有縱皺文、粗柔韌而長、長者不過四五尺許、有枝株而扁圓、或圓長或蟬扇亦有、其皮上黑有細皺、中黃黑色、俗稱荒布、木而剛堅、然不可食之、好事之人造器耳、荒布最不宜生食、采之曝乾煮熟可食、古者伊勢志摩紀伊等州貢獻于大膳寮、今時海南海西諸州及海東亦所在有之、〈中略〉

氣味、甘鹹寒滑無毒、主治、婦人諸病及血證能利水、消癭瘤痰塊、

〔本朝食鑑 三 華和異同〕荒布

荒布海帶也、崔禹錫曰、出東海水中石上、似海藻而粗柔韌而長、今登州人乾之以束器物、然則荒布之類乎、

〔大和本草 八 草〕海帶〈アラメ〉〈中略〉 今按海帶ハ海中ノ石ニ附テ生ズ、扁クシテタタナ皺アリ、性冷利ナリ、虚人食スレバ滑利ス、祛飲血積消瘤毒治痔疾、壯實人食之無害、虚冷人勿食、煮ルニ醋ヲ加フレバヨクニユル、アラメヲ煮テ雨水ヲソヽゲバ大蛙トナル、〈中略〉俗ニ是ヲ竿頭ニ多ツケテ、火ヲケス器トス、

〔令義解 三 賦役〕凡調、〈中略〉正丁一人、絹絁八尺五寸、〈中略〉若輸雜物者、〈中略〉滑海藻二百六十斤、

〔延喜式 二十四 主計〕凡諸國輸調、〈中略〉一丁〈中略〉滑海藻八十六斤十兩、

凡中男一人輸作物、略○中滑海藻十二斤、

伊勢國略○中中男作物、略○中滑海藻、志摩國略○中潤略○中滑海藻、

〔延喜式大膳三十三〕試海印三昧寺年分度者料、略○中荒布一束、使料

安祥寺試年分度者、略○中使料、略○中荒布一束、

仁王經齋會供養料 僧一口別、略○中滑海藻二兩、○好物料中略 右一日供料依前件

〔延喜式内膳三十九〕供御月料

滑海藻十三斤八兩、略○中 右月料、小月減卅分之一、

〔土左日記〕元日○承平五年正月 なほおなじとまりなり、略○中芋もあらめもはがためもなし、かうやうの物なきくになり、もとめもおかず、

〔平家物語三〕有王しまくだりの事

磯のかたより、かげろうなんどのごとくに、やせおとろへたるもの、よろぼひ出來たり、略○中かた手にはあらめをもち、かた手にうほをもろうてもち、あゆむやうにはしけれども、はかも行ずよろよろとしてぞ出來る、

〔毛吹草三〕伊勢 荒和布 紀伊 三穗荒和布

〔倭名類聚抄海菜十七〕滑海藻附末 本朝令云、略○中末滑海藻、加知女、俗用搗布、搗者搗末之義也、

搗布
相良布

〔本朝食鑑水菜三〕荒布略○中

搗布似荒布而細狹、有細皺文、粗硬味不佳、不足爲上饌耳、

和布略○中

佐加良布 傳稱本出於遠州相良之海濱、故以其地名而冠之、狀似和布而粗硬、稍廣、曬乾則葉卷不伸、味亦略似和布而劣、世俗所賞、此亦能解酒毒、

〔大和本草海草八〕カヂメ 又サガラメト云、海帯ニ似テ細ク狹シ、皺アリ、ホシタルヲキザミテ羹ニ

加レバチバル、賤民ノ食也、又此物年頭ニ多クツケタ、火ニ用ユ、火ニモエズシテヨシ、アラメニ同ジ、

(令義解三賦役)凡調、略○中正丁一人、絹絁八尺五寸、略○中若輸雑物者、略○中末滑海藻一石、

(続修東大寺正倉院文書後集四十)写経司解　申請用事

合所請銭貳仟文壹

買物合十六種略○中　末滑海藻四升　直銭七文略○中

以前銭並状幷買物顕注如前、以解、

天平十一年八月十一日　　史生高屋連赤麻呂略○以下

(毛吹草三)遠江　同(出羽)○略　鵜和布

(寛政四年武鑑)太田備中守資愛(遠江掛川)○　時献上(三月)相良和布

(倭名類聚抄十七藻類)莫鳴菜　本朝式云、莫鳴菜、(奈乃里曾、漢語抄云、神馬藻、三字云奈乃里曾、今案本文未詳、但神馬莫騎之義也、)

(箋注倭名類聚抄九)按民部省式作奈乃利曾、大膳式作名乗曾、然有作莫鳴菜者、此所引蓋是弘仁貞観式文、略○中萬葉集作莫告藻、蓋本義也、用神馬藻字、神馬莫騎之義訓耳、源重之歌云、毛速振、出石乃宮乃、神乃駒、努莫騎曾也、崇毛曾須留、是其義、用莫鳴者、以一聲之轉假借也、按陶注、海藻云、生海島上、黒色如亂髮而大小許葉、大都似藻葉、詳其形状、是可以充奈能利曾、

(下學集下草木)神馬草(ジンバサウ)(神功皇后攻三韓時、船中無馬糧、取海中之藻飼馬、故云神馬草也、)

(庭訓往来)御札之旨、大概之趣、心事難申盡候、略○中昨菜者、略○中神馬藻曳干、

(塵袋三)一神馬草ト云フモノヲナノリソト云フ心如何

万葉集等ニハ名ノリスルニ、ヨソヘタ歌ニモヨメリ、但本朝式ニハ莫鳴菜ト書ク、ナヽリソトヨメリ、食スル時ハヨク〳〵トナルガ六借クレバ、ナヽリソト制スル心也、ナトノトハ通音ナレバ、ナ

ナリソヲ今ハナノリソト云ヒナシタル也、順ガ和名ニハ神馬莫騎之義也ト云ヘリ、恐アレバ神馬ヲバ人用ニアツルコトナケレバ、ナノリソト云フ心ニテ、神馬草トハカキナセリ、

〔倭訓栞前編二十八保〕ほだはら　海藻なり、穂俵の義、魚の胖の如き物の多くつくをもて名く、古へのなのりそもなりといへり、春盤に用るは穂俵を祝するなり、下品のものをかじもといふとぞ、

〔宜禁本草乾五菜〕海藻　苦寒鹹、主癭瘤氣頸下核、破散結氣癰腫癥瘕堅氣腹中上下鳴、下十二水腫、療皮間積聚暴㿗留氣結熱、利小便、反甘草、治石淋、黒如亂髮、大小都似藻葉、生淺水浸去鹹、主宿食不消、五膈痰壅、脚氣賁豚氣、治頷下瘰癧如梅李、宜速消之、海藻酒漬數日稍々飮之、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻今訓保多和良

集解、海中之藻、生于石上、狀似葦、莖色青微長、一二尺、有節、有莖、莖上有細尖小葉、而卷縮不伸、葉間有小泡子、似花而不開、似實而圓空、味甘鹹而粘滑、或稱保多和良、或作穂俵、又作本俵、俵字彙書有俵散之義、無裹囊之義、而未詳所據、本邦自古綴稲草收米粒、呼號俵子、一俵有三斗五升四斗五升之分者也、今海藻用俵字者、祝米俵多積之義、以供年始之賀膳、爲蓬萊盤之具也、本朝式有海藻根、訓麻奈加志、參河、伊勢、紀伊、志摩、阿波、伊豫、長門、出雲等州貢獻之、疑是今之保多和良乎、或曰、保多和良者、邪乃利曾也、本朝式亦有邪乃利曾、而伊勢、紀伊、播磨、伊豫等州、貢獻于民部省、又曰、莫鳴菜、源順曰、奈奈利曾、漢語抄曰、神馬藻三字云奈乃利曾、今按但神馬莫騎之義也、此說未詳、保多和良之名古亦有之、近時略供菜膳稍佳、處處海濱多有、十二月海國多運轉于都市而販之、爲年初之用、此時多除之以書用、或醫家與昆布同入散圓消痰之劑耳、

氣味甘鹹滑寒無毒、主治、利水泄熱、消癭瘤結核陰㿗之堅、

〔本朝食鑑三華和異同〕海藻海蘊

海藻者海中之藻、細黒色略似水藻、故爲本邦之本俵、予〇平野必大往年聞之華僧、亦指本俵爲海藻也、

〔和漢三才圖會〕九十七水草海藻 ${}$

〔和漢三才圖會九十七水草〕海藻、〈唐音〉海藻（ハイツア）　〈落首〉海藻（ホンダハラ）　大葉藻

本綱、海藻乃生海島之藻也、黑色如亂髮而太少許、葉大都似藻葉也、有二種、生淺水中如短馬尾細黑色者馬尾藻也、生深海中及新羅、葉如水藻而大者大葉藻也、海人以繩繫腰沒水取之、

海藻〈苦鹹寒〉　氣味厚純陰而沈也、〈反甘草〉治癭瘤馬刀諸瘡堅而不潰者、利小便、下水腫、治五膈痰壅、

[illegible]

〔重修本草綱目啓蒙〕十六水草海藻

海中藻類ノ總名ナリ、馬尾藻大葉藻ノ兩種アリ、藥ニ入ルヽニハ、馬尾藻ヲ上トス、故ニ方書ニ海藻ト云フハ、馬尾藻ヲ用ユベシ、

馬尾藻ナノリソ〈萬葉集〉ナヽリソ〈和名鈔〉ジンメサウ、ジンバサウ〈雲州〉タワラ〈同上〉ギンバサウ〈備後〉ギバサ〈同上〉キバサ〈佐州〉ホンダワラ〈同上〉ホダワラ〈京〉ホンダワラ〈同上〉タワラモ〈勢州〉一名馬尾藻〈外臺秘要〉

海中ニ生ズ、長サ三四尺、蔓細ク枝多クシゲク細小葉互生ス、一分餘ノ圓實ヲクヽリ中空シ、コレヲツブセバ聲アリ、故ニ小兒コレヲシタシミツブシト云フ、叢生ナル時ハ黒色ナリ、藥ニ入ルレバ綠色トナル、正月春盤ニコレヲ用ユ、

〔延喜式〕二十三民部交易雜物

伊勢國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　參河國〈中略〉海藻根五十斤〈○中略〉　播磨國〈中略〉海藻根廿斤〈○中略〉　紀伊國〈中略〉海藻根五十斤〈○中略〉

伊豫國〈中略〉海藻根五十斤〈○中略〉　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式〕三十二大膳閏月〈○正月〉修太元帥法料〈○中略〉於期名乘曾、烏坂苔、若海藻根各廿四斤、

〔日本書紀〕十三允恭十一年三月丙午、幸於茅渟宮、衣通郎姫歌之曰、等虛辭陪邇、枳彌母阿閉椰毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、時天皇謂衣通郎姫曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱藻、謂奈能利曾毛也、

鹿尾菜

〔萬葉集 三 雜歌〕山部宿禰赤人歌六首(〇五首略)
美沙居、石轉爾生、名乘藻乃、名者告志五餘、親者知友、

〔萬葉集 七 譬喩歌〕梓弓、引津邊在、莫謂花、及採、不相有目八方、勿謂花
海底、奧玉藻之、名乘曾花、妹與吾、此荷有跡、莫語之花、

右二十三首、(〇二十一首略)柿本朝臣人麿之歌集出、

〔催馬樂〕律　伊勢海(一段、拍子十、每段拍子一、)
いせのうみの、いせのうみの、きよきなぎさの、しほがひに、なのりそやつまん、かひやひろはん、玉やひろはん、

〔毛吹草 三〕和泉　石津神馬藻

〔蘐園群談 十六 名物土産〕住吉神馬艸　同郡(〇東成)住吉浦ニアリ、年始ノ飾、世云穗俵ハ、是神馬艸ヲ設ケ所造之也、

〔日次紀事 正月〕蓬萊臺(俗謂新年三寶臺、置二海老數斗昆布穗俵等一、先供二賓客一、謂二新年一、是謂二蓬萊臺一、)

〔食物和歌本草 一〕海藻
神馬草は結氣を散ず女子癥瘕上下に鳴かたく痛に　神馬草は疝氣やむには常にくへ又大きんのくすりなりけり　神馬草は石淋に吉又水腫皮の間のかたまりぞ治す　神馬草は肝氣胃積藥也宿食を去腸をよく去

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕鹿尾菜　辨色立成云、六味菜、(比〇須〇木〇毛〇)楊氏漢語抄云、鹿尾菜、

〔箋注倭名類聚抄 九 藻〕比須歧毛、或云比之歧毛、見伊勢物語、今俗省呼比自歧、按圖書云、羊栖菜生海石上、長四五寸、微黑色、出津浦、是可以充之、

〔東雅 十三 穀蔬〕藻(モ〇中略)倭名抄に、(〇中略)辨色立成の六味菜、漢語抄の鹿尾菜、幷にヒスキモといふ、義

不詳、ヒジキモといふは其語の轉せしなり、〈鹿尾とは鹿角に對し云ふなるべし、大略は鹿尾の音を誤れるにや、〉

〔庖廚備用倭名本草〕四水菜 海藻〈ヒジキ〉○中略 元升〈○向井〉曰、○中略 西國海邊ニ此ヒジキモヲ取テヨク煮テ、日ニ晒乾シテ、ヨク枯レタルヲフキタヾキ、米粒ノゴトクナシテ、米ト同ジク飯ニカシギテ飢荒ヲスクフ、貧家ハ常ノ食ニモ用フ、米飯ハ白ク、海藻ハ黑シ、ムラ〳〵白飯ミエタルヲ、タハフレテ燒野ノ雪ノムラキエト云、米飯ヲ下ニモリ、海藻飯ヲ上ニモリタルヲバ、ヌリガサキタルト云、

〔本朝食鑑〕三水菜 鹿尾菜〈訓比須木、比之木毛、今略、〉

釋名、六味菜〈賤民號之、其色立紫黑不詳之、必大〈平野〉按、羊栖菜之乎、未詳、或曰、鹿尾菜、其形似鹿尾也、〉

集解、海濱石上生、長二三寸、如鹿尾之形、枝頭末細尖、色蒼黑、曬乾變作純黑色、味甘脆、俗謂能收血、未試之、今用乾者、貴于四方、伊勢、志摩、尾張、參河等州多有、此是古在業平之所詠也、

〔大和本草〕八海草 鹿尾菜○中略 海中石ニ附テ生ズ、圓ニシテ末尖ル、乾セバ黑色ナリ、煮テ食ス、貧民米ニマジエテ飯トシ糧ヲ助ク、

〔伊勢物語〕上 昔男ありけり、けさうしける女の許に、ひじきもと云物をやるとて、

思ひあらばむぐらの宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも、二條の后の、まだみかどにもつかうまつり給はで、たゞ人にておはしけるときのことなり、

〔毛吹草〕三 伊勢 鹿尾藻 紀伊 鹿尾藻 阿波 鹿尾藻

〔寛政四年武鑑〕本多伊豫守忠京〈○伊勢神戸〉 時獻上四月鹿尾菜 宗對馬守義功〈○對馬府中〉 時獻上暑中長鹿尾藻

松平備前守正升〈○上總大多喜〉 時獻上八月鹿尾菜 松平主計頭忠馮〈○肥前島原〉 時獻上九月鹿尾菜

松浦壹岐守清〈○肥前平戸〉 時獻上〈御在所年寒中〉長鹿尾藻

〔倭名類聚抄〕十七 水雲 漢語抄云、水雲〈毛豆久、○今按、所出未詳、〉

〔箋注倭名類聚抄九藻〕按本草拾遺云、海藴生大海中、細葉如馬尾、似海藻而短也、李時珍曰、組亂絲也、其葉似之、故名、

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、〇中略海雲等海藻折櫃百合、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻〇中略海雲今訓毛豆久、〇中略必大(平野)按、或作海藴、俱未詳、然以形之相似暫謂之、其狀如亂絲、有莖、青黑色面滑、長數尺、浮于水上、如流、味柔脆、生食煮亦佳、一種極細如亂髮、而青黑色、阿波鳴戸海雲最多、故俗稱鳴戸海雲、攝西處處有、安房二總之海濱多有、一種肥大如水松之大、而長有莖、蒼黑色、泉州海上多有、故俗稱和泉太海雲、此亦肥長可愛、然不及鳴戸之細、或曰鳴戸海雲者、俗多和雜之花也、不住海園、故未知其僞矣、

〔本朝食鑑三華和異同〕海藻海藴

海藴、藴亂絲也、其葉似之、今爲水雲、然水雲無葉則難名、本邦稱海雲與水雲同、

〔和漢三才圖會九十六藻類〕海藴　水雲俗名　和名毛豆久、俗用海雲二字、

本綱、組亂絲也、其葉似之、故名海藴、鹹寒　治癭瘤結氣在喉間、能下水、

按海藴狀如亂絲、青黑色柔滑、長數尺、生石上浮水上、易採之而滑利難得、仍用鮑空貝刮取之、阿州鳴戸、泉州岸和田、及對州之產、肥大如索麪而有枝、安房、上總、下總、備前亦多有之、皆和薑醋食之、微有海臭腸氣而能醒酒醉、或未醬汁煮之、粘滑似蓴菜汁而佳、値溫氣則易敗也、藏之用海藴一升去水鹽三合、密封則耐久、用時暫漬水出鹽食、

〔延喜式三十九内膳〕年料

若狹國〇中略毛都久〇中略　右諸國所貢、並依前件、仍收食殿擬供御、

〔毛吹草三〕紀伊　若浦海雲モヅク

〔寛政四年武鑑〕松平主計頭忠馮〇肥前島原　時獻上三月　海藴

松藻

〔大和本草八雜草〕松藻 松杉ノ葉ニ似テ青シ、石上ニ生ズ、生ニテモ乾テモ可食、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻略○中 松藻 參州遠州勢州有之、狀似松杉葉、而生海中石上、綠色、生乾倶可食、久食則無病患、

海松

〔倭名類聚抄十七海菜〕海松 崔禹錫食經云、水松狀如松而無葉、(和名美流)〇本朝式用之 楊氏漢語抄云、海松、(和名上同、本朝式用之、)

〔倭訓栞前編三十〕みる略○中 倭名抄に海松をよめり、ふかみる、うきみる、みるぶさなどもよめり、細縄菜ともいへり、岩に生てかつ色かへぬ物なれば、伊勢物語につれなくはとよめり、深海松万葉集によめり、延喜式諸國の貢にも長海松深海松あり、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕水松 ミル

ウミマツト訓ズルハ非ナリ、物理小識ニ、本草水松ハ水中若芻トノ文ニ據リテ、ミルト訓ズベシ、ミルハ海中石上ニ生ズ、藻類ナリ、徑リ二分許、形圓ク枝多シテ棒菊ノ如ニシテ綠色ナリ、長サ六七寸食用トス、一種ナガミルハ長サ四五尺アリ、讚州ノ產ナリ、一種ヒラミルト呼ブモノアリ、一名ラシヤノリト云フ、濶サ五六分ニシテ長サ一尺許、深綠色ニシテ形蠶蛻ノ皮ノ如シ、春月採テ灰ヲ纏ニ、日ニ乾シタル者ニ寄ス、コレヲハイボシミルト云、阿州鳴門ノ名產ナリ、

〔令義解三賦役〕凡調略○中 正丁一人、絹絁八尺五寸、略○中 若輸雜物者、略○中 海松一百卅斤、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國(中略)海松五十斤○中略 參河國(中略)海松五十斤○中略 出雲國(中略)海松一百斤○中略 石見國(中略)海松一百斤○中略 紀伊國(中略)海松卅斤○中略 右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、略○中 一丁、略○中 海藻、海松各卅三斤、(隱岐國三斤五兩)

凡中男一人輸作物、略○中 海松五斤、

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別、〈○中略〉海松一兩、〈○中略海藻料〉右一日供料依前件、

〔延喜式内膳三十九〕供御月料

海松二斤四兩、〈○中略〉右月料、小月減卅分之一、

年料

志摩國〈○深海松○中略〉右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿、擬供御、

〔執政所抄上正月〕二日

臨時客

御料次第〈○中略〉三獻鳩羹　追物生蚫、浮海松、鳩足、酢𤭖、〈无海松時用白根〉

〔萬葉集相聞十三〕神風之、伊勢乃海之、朝奈伎爾、來依深海松、暮奈藝爾、來因俟海松、深海松乃、深目師吾乎、俟海松乃、復去反、都麻等不言登可聞、思保世流君、

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〈○中略〉

一僧供　導師一人供料、〈○中略〉海松五帖、〈○中略〉　法用千僧供　一人料、〈○中略〉海松六把、

〔伊勢物語下〕昔男〈○中略〉うせにし宮内卿もちよしが家の前くるに日くれぬ、〈○中略〉みなみの風吹て、波いとたかし、つとめてその家のめのこども出て、うき海松の波によせられたるひろひて、家のうちにもてきぬ、女がたより、そのみるをたかつきにもりて、かしはをおほひて出したるかしはにかけり、

わたつ海のかざしにさすといはふも、君が爲にはおしまざりけり、ゐなか人の歌にては、あまれりやたらずや、

（住吉物語）住吉にゆきたれば、○中略南は一むらの里ほのかに見えて、とまやどもにみ。る。め。かりはし、○下略

（源平盛衰記十一）有王俊寛問答事
僧都○俊寛宣ケルハ、○中略浪タヽヌ日ハ磯ニ出テ、岩ノ苔ヲムシリテ、潮ニ洗テ食物トシ、汀ニ寄タル海松和布ヲ取、和カナル所ヲカミテ明シ暮ス、

（海道記）十三日○貞應二年四月、中略此浦（江尻津）を遙に見渡して行ば、海松はなみの岩ねに、根をはなれたる草、海月は潮のうへに水にうつるかげ、ともにこれうき世を論じて、人をいましめたり、

（御湯殿の上の日記）慶長十四年五月七日、い。た。く。ら。み。る。一おりまん上申、

（常陸國風土記行方郡）郡西津濟、所謂行方之海、生海松及燒鹽之藻、

（出雲風土記島根郡）凡南入海所在雜物、○中略海松、

凡北海所捕雜物、○中略海松、

（毛吹草三）伊勢　海松　丹後　久美海松

（後奈良院御撰何曾）ぬれよみ　　　ほしみる

（本草和名九）陟釐（陶景注云、出益州、又謂之石髪、又）一名水中苔、一名河中側梨、一名水中魚苔、（已上二名出雑要訣）一名藫毛、一名衣、（已上出雑要訣）一名水衣、（出兼名苑）一名水苔、（出兼名苑）和名阿。乎。乃。利。

（倭名類聚抄十七）陟釐　本草云、陟釐（陟音、一本作厘、和名阿乎乃利）

（箋注倭名類聚抄九）按本草和名引楊玄操云、音繩、又音釐、畫本草本作厘、與此所引同、厘釐通字、見干祿字書、又釐字俗省作厘、見集韻、故音繩又音釐、若作釐不得音繩、作釐不得音釐、千金翼方、證類本草作釐者、蓋宋人所改、本草和名作釐、亦係傳寫者校改、伊呂波字類抄引本草和名作厘、醫心方亦作厘、可以見作釐非輔仁之舊、○中略與類聚名義抄作陟厘、音繩、撮壤集引此亦作陟厘合、則作釐

作鑒皆非是、俚俗譌字、鬣俗萓字、見于韻字書、鬐俗鬛字、見類聚名義抄、龍龕手鑑作鬐、少異耳、○中略
按本草云、陟釐生江南地澤、蘇注云、此物乃水中苔、小品方云、水中麤苔也、范東陽方云、水中石上生、如毛緑色者、藥對云、河中側梨、李時珍曰、陟釐者、有水中石上生者、蒙茸如髪、有水汚無石而自生者、纏牽如絲綿之狀、俗名水綿、依以上諸說、陟釐是生淡水中、今俗呼加波毛豆久、或呼阿乎美土呂者、蓋是、江賦云、緑苔鬖髿乎研上、郭璞注、風土記曰、石髪水苔也、青緑色、皆生於石、又本草圖經、青苔可以作脯食之、閩書南產志有海苔、緑色如亂絲、生海泥中、其細嫩者名濕苔、是等可以充阿乎乃利、小野氏以乾苔充之、乾苔見本草拾遺、

〔下學集 下草木〕青海苔(アヲノリ)

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、○中略 酢菜者、○中略 青苔、

〔異制庭訓往來〕酒肴等儀無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、○中略 陟釐丸苔、

〔宜禁本草 乾玉巻〕陟釐　甘溫、溫中消穀、强胃氣、止泄痢、衍義曰、陟釐令人事治爲苔脯堪啗、治渇疾、禁食今
按此卽石髪也、陟釐甘溫、生淡水中石上、水苔浮水中、性冷、在屋謂之屋遊瓦苔、在墻垣謂之垣衣土馬騣、在地謂之地衣、在井則謂之井苔、在水中石上謂之陟釐、大抵苔類也、以其所附不同、故立名與主療亦異、

〔庖廚備用倭名本草 四水菜〕乾苔(カンタイ アヲノリ)　倭名抄ニ乾苔ナシ、多識篇ニアヲノリ、考本草此レ海苔也、彼ノ人トリカハカシテ脯トナス、海水ハシハヽユシ、故ニ陟釐ト同ジカラズ、張華博物志云、石髪海中ニ生ズルハ、長サ尺餘、大小韭葉ノ如シ、肉ヲ以テアツメ、ムシテ食シテ極テヨシ、元升弁○略曰、此註ヲミレバ勢州ヨリ出ルアヲノリハ、其味シハヽユシ、乾苔ナル事ウタガヒナシ、其形狀ハ陟釐ト同ジキニヤ、陟釐ハ水中ニ生ジ、乾苔ハ海水ニ生ズ、又乾苔ハ味シハヽユシ、性寒ナリ、陟釐ハ味甘タ大温ナリ、性味各別ナリ、サレバ陟釐ハアマノリト云ベキモノナリ、又西國海中ニアヲサト云苔アリ、色味乾苔ト同ジ、但長サハ三四寸ニハ過ズ、魚肉ト羮ニシテ甚ダヨシ、乾苔ノタグヒナルベ

シ、

〔本朝食鑑 三水菜〕青苔

釋名、陟釐、(源順曰、和名阿乎乃利、俗用青苔字、)大(平)野(佐)比、本朝式亦用青苔字、

集解、青苔有水中石上生者、有水汚無石面自生者、緑柔如絲綿之狀、海人采乾如綿、其色深緑以貢于四方、三河、伊勢、志摩、紀伊海濱多有就中勢志之產最爲勝、本朝式亦伊勢、紀伊、播磨、阿波、出雲、石見等州貢獻于民部省、近世華人織造氈、韓人造書藍紙、亦此類乎、

氣味、甘鹹冷無毒、主治止渴解酒毒、鎮瘧疔毒痛瘡、或調傳金傷能留血、

〔大和本草 草附錄 一〕肥後八代川苔 色緑美長一尺餘、味佳、長崎ノ海ニ青苔アリ、八代苔ヨリ短シ、味尤ヨシ、〇中略 青苔ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六〕乾苔〇 アヲノリ イトアヲサ(佐渡) カハナ(南部) 一名苔脯 柔苔

(同上、) 青苔(綱目啓蒙下) 緑苔(文選註) 海苔菜(本草彙言)

海中ニ生ズ、纖細緑色陟釐ノ如シ、收メ乾シテ方物トス、勢州多ク出ス、諸州出ス所各小異アリ、尾州ノ長アヲノリハ長サ一尺餘、土州四萬十川ノ產ハ長サ五六尺、尾州ノサヽハノリハ形篇蓄ノ葉ノ如ク乾シナス、播州網干ノナサヽノリモ同形ナリ、コレヲ一名アヲシノリ、サヽノハノリトモ云、淡州ヨリモ出、アヲノリニ極テ細キト粗トアリ、サヽノリハ粗シ、其粗ナル者ヲガニノス(備前)、ト云、一名アヲサ(紀州)、阿州ノアヲノリハ微黑色ヲ帶ビ、小豆島ノ產ハ短クシテ濃シ、防州土州ノ產ハ濃シテ長ク緑色深シ、

集解、江籬〇〇ハ尾州ノヲゴ〇〇ノリナリ、一名ワンゴ(紀州)ウゴ、(讚州高原村)ウゴ、ブ、(同上淡路)形圓ク細クシテウミ索麪ノ如シ、瓜色微青ナリ、灰ヲ加ヘ煮ル時ハ緑色トナル、晒シ乾セバ白色トナリ、甚細ク麻ノ如シ、或ハ五色ニ染賣ル、江籬一名頭髮菜、(閩書)(偶奇)

〔延喜式 民部二十三〕交易雜物

伊勢國(中略)青苔五十斤〇中略　參河國(中略)青苔五十斤〇中略　出雲國(中略)青苔卅斤〇中略　石見國(中略)青苔卅斤〇中略　播磨國(中略)青苔卅斤〇中略　紀伊國(中略)青苔十斤〇中略　阿波國(中略)青苔廿斤〇中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔東大寺要錄 三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略

一僧供　導師一人供料、〇中略　青苔六帖、〇中略　法用千僧供　一人料、〇中略　青苔五把、

〔海道記〕十三日〇貞應二年四月、中略、江尻の浦をすぐれば、青苔石におひ、somewhat

〔殿中申次記〕正月八日

同〇永正十三

一土產　一折　青海苔　一折　山芋一折　若王子例年進上之

〔毛吹草 三〕伊勢　馬瀨靑苔アヲノリ　土佐　本川靑苔

〔雍州府志 名物土產 十六〕同島〇網　青苔　同所〇西成郡大坂町ノ東網島町ヨリ川口木津勝間住吉ノ浦邊マデ、船ヲ通ヒ漉之、於手是製シテ以テ青苔トナシ、市店ニ出ス、

陟釐

〔重修本草綱目啓蒙 十六〕陟釐　カハモヅク　カハアヲノリ　ヤヲヤダヲシ　アヲツ　アヲサ

同名一名水中細苔 東醫寶鑑　増、一名石馬 正字通　石花 同上

流水中石上ニ生ズ、極テ細ク絲ノ如シ、綠色、流ニ隨テ靡ク、肆人採リ乾シテ青苔ニ偽ル、

一種止水中或ハ川ノ淀ニ生ジ、水面ニアリテ綿ノ如ク綠色ナルヲ、時珍ノ說ニ水綿ト云フ、俗名アヲミドロ、一名アヲミドリ、アミドロ、備前二品共ニ久旱ニシテ水涸ク時ハ、乾テ紙ノ如シ、コレヲ苔紙ト云、又唐山ニハ陟釐ヲ用テ紙ヲ抄クト云フ、

〔新撰字鏡 草〕薻 徒含反、水衣、加支豆毛、

紫菜

〔古名錄 海藻 二十七〕按ニ常陸國風土記ニ、上色如靑紺加支川爾ト云、加木豆波太、加木豆波奈等皆紫

紺色ヲ云ニシテ、紫菜ノ色也、正字通澤字注曰、生海中者曰紫藚、本草綱目紫菜釋名紫藚ト見ユ

レイ、加支豆毛ハ、爲紫菜可證也、

〔本草和名十八〕紫菜(生海水中石上)　乾苔(出崔禹)　柔苔(冷、出崔禹)和名須。牟。乃。利。

〔倭名類聚抄十七(菜類)〕紫苔　養生秘要云、補益食胡菜紫苔、(和名須。無。乃。利。見食經海菜類、胡菜未詳、)

〔倭名類聚抄十七(藻類)〕神仙菜　崔禹錫食經云、紫菜狀如紫帛、叢生石上、是物有三四種、以紫色爲勝、俗呼

曰神仙菜、(漢語抄云、阿。末。乃。里。俗用甘苔、)

〔箋注倭名類聚抄九(藻類)〕按江賦、紫菜熒曄以叢被、郭璞注、紫菜色紫、狀似鹿角菜而細、生海中、本草圖經

云、青苔紫菜皆似綸、並非是物、吳都賦、綸組紫絳、劉注云、紫紫菜也、生海水中、正青附石生、取乾則紫

色、臨海常獻之、本草圖經又云、紫菜附石生海上、正青、取乾之則紫色、南海有之、當是崔氏所云三四

種之一、

〔倭名類聚抄十七(海菜類)〕紫菜　漢名苑云、紫菜一名石衣、(和名無。良。佐。木。乃。里。俗用紫苔、)

〔箋注倭名類聚抄九(藻類)〕按崔氏食經所載紫菜、漢名苑所載紫菜、同異未詳、

〔下學集下(草木)〕海苔　紫菜

〔書言字考節用集六(生植)〕苔　石髮(同、石衣、水綿、陟釐、)　海菜(同、本字、水苔)

〔庭訓往來〕御札之旨、大概之趣、心事難中盡候、(略)〇(中略)酢菜者(略)〇(中略)甘苔、鹽苔、

〔尺素往來〕菓子者、荔枝、龍眼、(略)〇(中略)海苔、

〔倭訓栞(前編二十三乃)〕のり(略)〇(中略)海苔をのりといふは、眞苔より出たる辭なるべし、皆滑かなる

類をいへり、よて堅のりの名もあり、延喜式に海菜とも見ゆ、

〔宜禁本草(乾五菜)〕紫菜　甘寒、多食令人腹痛、發氣吐白沫、飲少熱醋消之、食療曰、多食脹人、下熱煩氣療

癭瘤結氣、

〔本朝食鑑三水菜〕淺草苔

釋名、紫菜、(本朝式)神仙菜、(源順)甘苔、(源語抄)甘海苔、(東鑑)葛西苔、(俗稱、(中略)東鑑、伊豆國以甘海苔獻于鎌倉、賴朝奉進于京、必大(平野)按、此今之淺草苔、淺草者武之江都東邊之地名、隅田川上之村也、此苔本總州葛西海中多生、土人采之傳送于淺草村市、葛西土人亦多賣之、武之品川亦有之、其土俗同以地名而冠其苔上、故諸州呼其名、)

集解、苔如拆紙製帛而投于水中、泛浪漂流、漁人立于岸上、投竹竿而繫采之、以入簏來、兒女掛著以攤于葦簀而曬乾之、生時蒼色、乾後紫蒼色者爲上、淺草葛西之苔是也、故世以賞美之、品川之苔者、生時乾後淡青黑、略龜而不密、故味亦不美、甘苔者相豆海濱多有、此亦一物、稍似品川苔紫赤色、亦粗而不密、源賴朝公毎獻于京城者是也、古者志摩、出雲、石見、隱岐等州貢之、載于本朝式、近代豐後有之而不佳、故京師及海西海北悉以武之產爲珍、予往年使于二荒山中獲乾苔、土人曰、此采于大谷川中、其狀略似海苔而青黑色、性粗而不粘、味亦淡而微甘、與海中之紫苔遙相隔焉、有松苔者、狀似紫苔之碎松葉之細齒、青灰色、味亦稍佳、久煮則凝滑如昆布之煮熟而不佳、奧之南部津輕等之海濱有之、有雪苔者、狀如石耳之細剉而輕薄似紙、生青乾紫、味淡可愛、佐渡越後海濱石上生者也、

氣味、甘冷無毒、(多食發瘡疥、或令吐白沫、飲熱醋少許即消、)主治、咽喉痛癭瘤脚氣、消積痰、

發明、通俗妄食紫苔、則發蟲積嘔吐不止、竟到死、予昔見一士人娘子年十五傷食嘔吐、一晝夜不知幾回、遂且吐暴物鮮血而覺殞、侍女曰、此食生紫苔一碗以發病、予意疑紫苔鹹能軟堅、故可追積塊而無發蟲積之理、後有一仕官食生紫苔、食畢忽吐鮮血而卒倒、侍童與藥即甦、急招予乞治、先見其所吐物、則血中有小蟲、細撲之則水蛭之子也、故新製一劑令煎服、經日而痊、於是初識昔日娘子亦誤食苔中之毒蟲而終命焉、嗚呼悼哉、凡水中之叢苔有水蛭河豚之毒物、而必留子、人未曉之、苦不洗淨而遇毒、最可戒愼哉、

鷄冠菜〇中略

品川苔、(此亦武之品川海濱石上生、狀似鷄冠而柔滑、似海蘿鹿角而稍粗、末紅本白、味亦淡甘、久煮則凝結、今曬乾亦貨于四方、氣味主治未詳、必大按、海藻鹽鹹不可食、自古所食者此苔也乎、)

〔本朝食鑑三華和異同〕紫菜

孟詵曰、正青色、取而乾之則紫色、李時珍曰、其色正紫、亦石衣之屬也、此則本邦之甘苔淺草苔也、

〔大和本草八雜草〕紫菜(アマノリ)　本草水菜類ニ載タリ、海中石ニ付テ生ズ、青色ナリ、取テ乾セバ色紫ナリ、又ホシテ色青キモアリ、味甘シ、處々ニ多シ、武州ノ淺草ノリ、品川苔、下總ノ葛西ノリ、雲州ノ十六島(ウツフルヒ)モ青紫菜ノ類ナリ、ウツフルヒトハ海中ノ苔ヲトリ、霰ヲ打フルヒテホス故ニ名ヅクト云、コノ苔ノ名ニヨリテ、其島ノ名ヲモウツフルヒト云、凡此ノリ諸州有之、地ニヨリテ形色少カハル、紫菜ヲ食シテ腹痛スルニ、鹹醋ヲ少ノメバヨシト本草ニ見エタリ、略○中

黒ノリ　若狹ノ海ニアリ、岩ニ生ズ、臘月ニトル、黒クウルハシ、味ヨシ、

鰹ノヒモ　見布ニ似テ小也、廣二三寸、長五六寸バカリ、食スレバ脆ク味ヨシ、醋ミソニテ食ス、

鮫皮苔　ヨコ五分許、長二三寸、青色ナリ、鮫皮ノ如ナル星多クシテ、其處少高シ、味ハ鰹ノ紐ヨリヨシ、稀有ナリ、略○中

興津海苔　廣六七分、或七八分、長五六七寸許、頗厚可食、紫色、水ニ洗ヒ曝日則變爲黃白色、駿州奧津ニアリ、

〔大和本草附錄一〕牡丹苔　長崎ノ海ニアリ、牡丹ノ葩ノ如シ、色潔白可食、

櫻苔　壹岐ノ島海岸ニ産ス、其色紅白似櫻花、片々相屬、浸醋豉而食之、脆美而潔清味亦佳、

〔和漢三才圖會九十七〕十六島苔　宇豆布留伊俗云苔

按此苔出於雲州十六島、故名、略○中國守使海人取之、入海底採爲腰帶而上、其所得賜三分一於海人、最爲苔中之珍品、

雪苔　按雪苔雲州加加浦有之、略似十六島苔、而短紫色、多附石面、乍變爲苔、到取之、至夏則難貯、丹後亦有之、略○中

櫻苔(さくらのり)　俗稱

按櫻紀州海濱出之、色黄白或淡紫、而似櫻花凋落乾狀、故名、又有松苔、黄白色、大於櫻苔、形微似松花、

紫菜(あまのり)　紫蓛音軟　神仙菜　和名同未乃里、俗用甘苔字、○中略

按甘苔者總名、而隨所出之地異名、色味亦稍異也、總州之葛西苔、武陽之淺草苔、並紫蒼色而味甘美也、紀州之妹背苔次之、武陽之品川苔不紫色、味亦遙劣、伊豆相模之海濱亦多出之、只稱甘苔、紫赤色而不細密、味亦不佳、

〔重修本草綱目啓蒙〕二十水菜　紫菜　○スムノリ和名鈔　○ムラサキノリ同上　○アマノリ新校正　○アマモ佐州

一名索菜津州府志

凡ソ紫菜ハ冬月海中ノ石ニ著テ生ズ、緑色ナリ、又海面ニ浮テ浮萍ノ如シ、海畔ニ小竹ヲ多ク立テ置テ、トリ得テ乾ス時ハ、色紫ニシテ味甘シ、焙ル時ハ褐色トナル、紫菜ハ紫色ノ海苔ヲ云、總名ナリ、品類甚ダ多シ、國ゴトニ形色異ナリ、大抵武州淺草ノリヲ第一トス、精粗アリ、精ナル者ハ形小ク厚ク、色深シテ黑ミアリ、品川ニテ紫菜ヲ採リ、淺草川ニテ製ス、故ニ淺草ノリト云、粗ナル者ハ形大ニシテ色淺シ、ソノ赤色ヲ帶ル者ハ、上總ノ小瀧ノリナリト云、諸州ノ紫菜數多ク枚擧スベカラズ、下總ニ葛西ノリアリ、東葛西ノ桑川、舟渡、長島、二ノ江、今井等ノ村ニテ採製スルヲ云フ、紀州ニ妹背ノリアリ、同アマノリアリ、勢州ニマドノリアリ、一名格子ノリ、ジヤウジノリ、是ハ細長キノリヲ、一筋ヅヽ縱橫ニ格子ノ如ク並ベタルヲ云、雲州ノ十六島(うつぷるひ)ノリハ、質細ク絲ノ如クニシテ靭ナリ、○中略ソノ大ナル大抵二三尺、至テ大ナルハ丈餘ナルモアリ、大ナル者ヲ上トス、又潤サ一寸許ニシテ、長ク劈キテ乾タルヲカモヂノリト云、又至テ下品ナルヲ、カキノリト云、又ミサキノリハ、勢州ノマドノリノ如クニ製シ、色深紫ニシテ光リアリ、コレヲ洗ノリトモ云、又九十九(つくも)ノ

リアリ、石州ノカモザノリハ、雲州ノカモザノリト同ジ、又ハチノスノリアリ、塊ニ竅穴多クシテ蜂窩ノ形ノ如シ、隠州ノ黒島ノリ、同廣島ノリ、一名仁保ノリ、泉州ノムシロノリ、若州ノナマノリ、但州ノ瀬戸ノリ、一名但馬ノリ、城崎ノリ、同ハカリノリ、長州ノムカツクノリ、對馬ノアマノリ、同佐護ノリ、同鴨崎ノリ、越後ノ室島ノリ、丹後ノ袖石ノリ、備前ノフヂトノリ、一名ウキスノリ、防州ノ三島ノリ、肥後ノ満願寺ノリ、豊前ノ小倉ノリ、豆州ノ三島ノリ、奥州ノ仙臺ノリ、此外諸州ニ紫菜アリ、朝鮮ニハ紫衣ト云、又嚴寒ノ時雪中ニ採ヲユキノリト云、丹後、越前越後等ニアリ、其紫黒色ナルヲ黒ノリト云、紀州、石州、丹後、若州、越前、雲州等ニアリ、

〔廣益國産考六〕海苔

海苔は何處の海河にも生ずるものなれども、其品いろ〳〵のわかちあり、先九州にては水前寺海苔と稱し、肥後の國より出る、是は水に生ずるよしにて佳品也、又同じのりにて筑前國秋月より出る也、又但馬國木の崎邊の海より、淺草海苔に似たるものを產せり、紀州加多邊よりも出、三州渥見郡より和治海苔と號し、淺草同種のもの出れども製あらし、爰に近年遠州舞坂の海に、大森同樣に遠淺の所へ、ならの枝朶をさし、海苔を付る事を覺え、取て製し諸國にも賣、京大坂へ送るよし、一ケ年に三千兩餘の金子を收納するよしにて、舞坂の產物となれり、大森にて製する淺草海苔に付方製法方同流にて、其味ひも又替る事なし、世間に上品の海苔多しといへども、所の產物となり、調へる程の事なし、淺草海苔は大金を收納するよし也、擬て舞坂も收納多くなるよし也、此海苔は味ひ美にして世間に多く出來たりとも、淺草舞坂などを押へて、害となることあるまじとおもへるまゝ、海苔をとりて利を得るは、漁をなし或は蠶を飼、又山より種々の金銀銅鐵鉛錫を堀出す道理にて、新田を開くもあたるべしと思ひこめしまゝ、海苔の付方等を聞書るままを記すになん、

先海苔を付るは、内海の清らかなる砂地にて、大風雨の時、隰より砂をよせ、又海水深きは忌べし、遠淺の引潮には深、貳尺位、滿潮にはさしたる篊の末、ひた〳〵になり、又なかばの引潮には未壹尺五寸位、水際よりあらはるゝ土地を見立べし、　扨篊といへるは、檜木をよしとす、此木の元にてひと攫位にて、枝のよくつきて、たけの五六尺に伐たるを、剛葉を不殘むしりて、四五本づつ元を揃へ、下より壹尺程上を堅くくゝりて、元二尺程の所を先ほそりにけづりて、多く拵へ置、十月比迄に、下に圖する(○圖略)通の木と、篊とを船に積、(のり取小ふね)汐の干たるを考へ漕行、船の入位に聞置、畑の畦を立たる如く篊を置さすべし、さすには先穴明を圖(○圖略)のごとくして足にて踏、またの所迄ふみ込、引ぬきて其穴へ篊の元をさしこみ〳〵して植べし、扨如此して其浦の家々にて持場ありて、其所へは凡三反の持場誰方の分是よりさきまで凡五反歩程と、海中の地面を割て持場とする事也、汐の滿たる時は、篊の末ひた〳〵に成か、壹尺位汐の上にのりたる位になるやうに篊の長短をすべし、然して置ば十月より海苔付初る也、寒中に取たるのりを極上とし、春三月まではは付ども、暖氣になる程海苔も色さえず味おとれり、淺草海苔と稱すれ共、品川より壹里程西、大森の海に篊をさして取、淺草にてひさぐゆゑ、淺草のりと稱するなるべし、淺草海苔同性のもの、諸國にて生ずれども、是を篊に付てとり製する事をしらずと見えたり、依て爰にその製法の事を記すといへども、予(○大藏永常)先年試たる一通りを記せば、おち〳〵なる事ぞ多かるべし、右の如くさしたる篊に、追々海苔付也、能十分に付たると思ふ時、小船に兩人のり、一人は棹さし、一人は此ごとき笊(○圖略)を左りの手に持、右の手にて篊の枝々に付たる海苔をとりては、笊に入〳〵して持かへり、俎の上にて塵を箸もてより除き、鉋丁の刃にて少したたき、四斗樽やうの桶に淸水を入、竹の棒もてかき交、扨夫より左に圖(○圖略)する如く棚に簀を置、其上に簍をおき、升にて桶の中なる海苔を、棒にてかき交てすくひ、簍の中に一面行渡るやうの

心得にて、さつと打明れば、水は下にもれて、海苔は簀へとゞまる也、干揚るには、簀の儘干臺に圖略○圖の通り並べてほす也、乾あがりたるは取入片て重ねて、上に板を置重しを置、さつとりと成たるを、一枚づゝよく見てかさのべし、或は塵はこり小貝の殻杯付あるは、小刀の先にてはね除き、十枚を一帖とし、二ッに折て多く重く重ね、兩方より板にて挟べし、然して雨風に當ざるやう、箱に入貯ふべし、又久しく貯ふには、大きなる壺を澁紙にて外よりはりたる中に入、口を濃封じ置べし、如此して貯ふれば夏を越ても少しも色かはる事なし、

〔令義解三賦役〕凡調略○中正丁一人、絹絁八尺五寸、略○中若輸雜物者、略○中紫菜卅八斤、

〔延喜式五齋宮〕月料略○中小月減卅分之一、紫菜海松各二斤十三兩

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

土佐國中略紫菜一百五十斤○中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、略○中一丁、略○中紫菜、海藻根各十六斤、

凡中男一人輸作物、略○中莫、紫菜各二斤、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別、略○中紫菜一兩二分四銖、沙彌料一兩二分四銖、○中略汁物料　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九內膳〕供御月料

紫菜十二兩略○中　右月料、小月減卅分之一、

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文略○中　用一十七貫五百六十文略○中　卅文紫菜二升直升別廿文○中略

以前、起去潤三月一日、盡今月廿九日、請用雜物幷殘等、顯注如件、以解、

寶龜二年五月廿九日　散位正六位上上村主馬養〇以下署名略

〔東大寺要錄 三〕供養東大寺盧舍那大佛記文
貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略
一僧供　導師一人供料、〇中略　紫苔一升、

〔吾妻鏡 八〕文治四年四月二日戊辰、藍摺供御甘苔等、被進仙洞云云、

〔毛吹草 三〕伊勢　甘苔　駿河　富士苔山中谷川ニ有之　安房　小湊苔　ハヾ苔　生家ノ紐苔
下總　葛西苔是ヲ淺草苔ト云　下野　日光苔川ニ有之　若狹　靑井堅苔　能登　絓紐苔
丹後　內堅苔　出雲　十六島苔　備前　藤戸苔　長門　向津奥苔向津ノ奥ノ入江ノサヽ波ニ苔カタア
肥前　松苔　肥後　菊池苔川ニ有之　百足苔海ニ有　對馬　コブ苔
マノ鵜ナヌレケン、人丸ノ詠歌ト云、

〔食物知新 首〕日域諸國名產
苔類　靑苔勢州　甘苔同上　香多苔紀州　堅苔丹後　墨苔駿州　藤戸苔備前　菊池苔肥後　蜈蚣苔同上　富士苔駿河　水泉苔肥後　品川苔武州　葛西苔同上　鷄冠苔志摩　牡丹苔肥前　櫻苔同上　波婆苔遠州

〔寛政四年武鑑〕松平出羽守治郷〇松江出雲　時獻上　二月　十六島海苔　加賀中將治脩〇金澤加賀
時獻上　三月　紺海苔　五月　紅葉海苔歸國御禮　紅葉海苔　九月　島海苔　細川越中守齊茲〇熊本肥後
時獻上　八月　淸水苔　十一月　菊池海苔

〔吾妻鏡 六〕文治二年二月十九日丁卯、供御甘苔自伊豆國到來于鎌倉、彼國土產也、仍任例差專使被京進之云云、

〔吾妻鏡 九〕文治五年十一月一日丁巳、供御甘苔十合、令進上京都給、是伊豆國乃貢也、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年正月卅日壬辰、伊豆國海苔被進京都、藤色吉野三郞爲御使云云、

〔增訂豆州志稿 七土產〕海苔　海邊ヨリ多ク產出ス、色皆黑シ、井田村ノ產特ニ佳品ナルヲ以テ、繖ネ

井田ヲ冒稱ス、鎌倉ノ時供御甘苔ト稱シ、天朝ニ獻ゼリ、○略 註一種糊海苔、鹹味アリ、食フ可シ、粟ト云フ海苔、雲見村ヨリ出ヅ、色テ粟粒ノ大サノ如シ、等アリ、
鬼頭苔　下田ノ大浦及白濱村邊ニ產ス、生ハ青ク乾ケバ白ク、鹹湯ニ投ズレバ則青ニ復ス、尤佳品ナリ、

〔伊豆七島調書〕大島

一女は多より春迄海苔を取、又漁事手傳いたし渡世仕候、

神津島

一此島稼には、男は○中略 多は海苔を取、江戸へ出し渡世仕、○下略

〔續江戸砂子　一〕江府名產 并近在名產

淺草海苔　雷神門の邊にて製之、二三月の比さかん也、

品川生海苔　品川大森の海邊にて取ル、淺草にてせいする所ののりは、則此所ののり也、

葛西海苔　葛飾郡桑川舟端二の江今井これらの所にて取り、其所にて製す名產也、淺草のりに似て又異也、

〔江戸總鹿子新增大全　七〕江府名物 并 近國近在土產

淺草海苔　淺草雷神門前　四郎左衞門（本やう）

此淺くさ海苔と云は、元來品川大森の海邊にて取たる海苔を、淺草にて製し、尊貴の御膳にも奉る故、猶更其根元の家を吟味して調べき事也、當時此所に海苔屋餘多有といえども、此四郎左衞門を根元とす、○下略

〔續百一錄〕延享五年五月八日卯、黃檗萬壽院ヨリ日光御土產、○中略 實速院様へ紗綾壹卷、淺草海苔十五枚一折來ル、

〔江戸名物詩初編〕永楽屋干海苔浅草雷神門前

帖帖乾来積如紙、年年売出早春風、白魚豚物豆腐汁、纔有一枚味不同、

〔守貞漫稿五編生業〕紫海苔ノ看板略〇図

今世モ猶浅草海苔ヲ諸国通名トシ、江戸ニテモ称之、而テ其産大森ヲ専トシ、此辺ヲ本場ト云、其招牌図ノ如ク、然モ粗製ニテ面白、紙張墨書、或ハ白紙ニ藍紙ノ縁ヲ付ケ、或ハ字白藍石摺仕立モアリ、皆必ラズ唐紙屋ニテ紙張也、又専ラ官家ニ因テ菊御紋ヲ描キ、店ニ畳ク種類モ白紙張菊紋、又包紙必ラズ綱入紙ニ菊紋ヲ摺キ、新干海苔ト書シ、左右ニ地名家号ヲ記ス、近年其包ヲ精ニシ、四方包トシ、因ツ手ト唱フ物多シ、江戸ニテ売ルモ、看板包紙其他皆然リ、

〔守貞漫稿六編生業〕江戸ニ在テ京坂ニ無キ陌上ノ売人略〇中乾海苔売

大路中多以後春ニ至リ売之、乾海苔ハ今世大森村ヲ昌トス、然ドモ尚浅草海苔ヲ通名トス、又売之者江人稀ニシテ、多クハ信人也、彼国雪深クシテ、冬季産ニ傾シキヲ以テ、出府シテ売之、図ノ如キ略〇図筥ヲ枴ヲ以テ擔売アリ、或ハ張籠ニ納テ、風呂シキ裹ミニシテ負モアリ、又多春ノ間、店売モ多シ、蓋他売ノ兼売多シ干物店鰹節店ヲ専トシ、其他ノ店ニモ売之、店売ノ者ハ筥ニ十六範ノ菊ノ記号ヲ描ク、是官家ニ献進ヲ憚ル也、

〔常陸国風土記信太郡〕古老曰、倭武天皇巡幸海辺、行至乗浜、于時浜浦之上多乾海苔、俗曰乃理由是名能理波麻之村、

〔出雲風土記島根郡〕凡北海所捕雑物、略〇中紫菜、

〔親元日記〕文明十五年五月廿三日乙卯、三御方へ雲州海苔一折進上之、近年は毎年進上之、為先例之間上進云々、

〔藝備国郡志安芸郡上土産〕海苔　出安南郡仁保島之海浜、潮乾則採之、或生用之、又陰乾送遠方也、

川苔

〔紀伊國名所圖會 二 海部郡〕妹背海苔　又和歌海苔ともいふ、此邊の磯にあり、此海苔をとるには、初冬より春の彼岸に終る、霜月臘月などの寒氣凜冽なるときとるを最上とす、

〔大和本草 八 水草〕川苔　川苔モ海苔ニ似タリ、處々ニアリ、富士山ノ麓柴川ニ柴川苔アリ、富士ノリトモ云、日光苔ハ野州日光ノ川ニ生ズ、菊池苔ハ肥後ノ菊池川ヨリイヅ、ホシテ遠ニヲクル、アマノリニ似タリ、肥後水前寺苔ハ水前寺村ノ川ニ生ズ、乾シテ厚キ紙ノ如ナルヲ、切テ水ニ浸シ用ユ、此類諸州ニアリ、○中略

鵜苔　山川ノ石ニ生ズ、煖タレテ褐色、熱湯ニ浸セバ青クナル、軟滑ニシテ食フベシ、清潔ナリ稀ナリ、

〔和漢三才圖會 九十七 水草〕○中略

富士苔　富士山之麓、精進川村出之、形狀似紫菜、青綠色、味極美、

水前寺苔　出於肥後、色似富士苔、而方形、煮之不爛、味甘美、近頃不多出、但一一如菜葉、相粘作方形耳、

〔雍州府志 六 土産〕苔類　古出宇治川、載在萬葉集、今不聞有之、凡海苔海藻之所產、其種類甚多、總謂海苔、今謂川苔、又唯稱海苔、川海苔之所出、大和布留川、安藝吉田川、肥後水前寺、斯外亦在處々、

〔春遊談 三 下〕貴船の川苔

洛北鞍馬の西、貴船明神は水神にして、加茂の攝社にして、世に名高き靈地なり、此御前の川瀬の石に、六月いと暑き頃、川苔の少とあるを取集て、日に干かはかして、江戸の淺草海苔のごとく用ゆるに、風味かくべつにして、富士川苔よりもよし、ある年東山にて物產會せしに、此川淺草におとらじとて、もてはやしけることなり、去かし多くは得がたし、

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕一川苔　都留郡桂川ヨリ產スル者、富士山ノ餘液ナリ、此水靈アリ、里人引

鷄冠菜

テ淡麥飯ハ貴賤ニ賞レリ、他所未見ナリト云、川苔ハ駿州ノ芝川ニ同ジケレドモ、採ル者多カラズ、一ノ宮ノ御手洗川ヨリ生ズルハ尤少シ、

〔藝備國郡志安藝土産上〕河苔　倭俗海苔總曰苔、凡海中生苔處々出之、河水生苔者稀矣、高田郡吉田川多月生苔、形狀風味似海苔、柔脆堪食、又生河鮭、倭俗謂爾奈、其形小如螺、其味淡似蜆、吉田村多治井生芹、其根白如緒、風味勝他產、民間傳言、右鰛三物、吉田之名產、而毛利元就知州之日、以此三物獻朝廷云爾、

〔倭名類聚抄海菜十七〕鷄冠菜　楊氏漢語抄云、鷄冠菜、土里佐加乃里、式文用鳥坂苔、

〔尺素往來〕點心菜者不要多矣、生蘿蔔、鷄冠苔、冬瓜、藕根、蘘荷、酸夾等之內、三種計可設之、

〔本朝食鑑水菜三〕鷄冠菜今訓土里佐加乃里、之豈左加也、

集解、狀如鷄冠、有小齒、有深刻、深紅色味不美、以淡味而愛、此亦海濱石上生、古者參河、伊勢、志摩、紀伊、石見等州、貢獻于民部省、今亦處處多有之、氣味主治未詳、

〔和漢三才圖會海藻九十七〕鷄冠菜とさかのり〇中略　和名止里佐加乃里、正字未詳者名鷄苔、

按鷄冠菜處處海濱石上生之、〇中略　如今肥州天草多出之、伊豆次之、志摩亦少出之、用薑醋食之、又色相似而國者名楊梅苔やまもゝのり、

〔重修本草綱目啓蒙水菜二十〕石花菜〇中略

鷄脚菜　トサカノリ和名抄　鷄冠菜同上　海中ニ生ズ、赤白黃綠紫黑ノ數色アリ、高サ一二寸、鷄脚ノ叢ノ如ニシテ極テ小シ、其刻缺鷄冠ニ類ス、採テ食用トス、

〔延喜式民部二十三〕交易雜物

伊勢國(中略)〇五斤、鳥坂苔　參河國(中略)〇十斤、鳥坂苔五　出雲國(中略)〇五斤、鳥坂苔　石見國(中略)〇五斤、鳥坂苔　紀伊國(中略)〇五斤、鳥坂苔

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

於期菜

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別(○中略)島蒜菜二分、(生菜料各四銖○中略)　右一日供料依前件、

〔文祿四年御成記〕一初獻御盃參候(○中略)　御六獻　鷄冠苔

〔毛吹草三〕志摩　鷄冠苔

〔倭名類聚抄十七海菜〕於期菜　本朝式云、於期菜、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻(○中略)

於期菜、(集解、於期菜、生於海中石上、亦如鹿角菜、長不過一二尺、青色、采之時變黄黑色、常之用、氣味甘鹹、寒、無毒、主治未詳、多食損胃化痰、酔酒樵壊、古者)(伊勢、尾張、紀伊、參河等州貢之、民部書、今亦三河、遠江、駿河、伊豆、安房、下總等海邊多産之、武大平野)能、曾着石衣也、本邦所謂水藻之名、乃前此赤字時珍所謂石衣、亦石衣之屬也、於是觀用者焉、)

〔大和本草八海草〕於期ノリ　海中石上ニ生ズ、亂髮ノ如シ、青黑色、ナゴヤヨリ大ニ、ヒジキヨリ小也、飯ニ加ヘ食スル事、ヒジキノ如ニス、性滑瀉、虚冷ノ人不可食、發腹痛、性不良、

〔和漢三才圖會九十七〕於期菜　(和名於古乃里、俗云於期菜也、)

按於胡菜生海中石上、(○中略)東海諸州多有之、備前及淡州亦多、晒乾爲白藻、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國(○中略)於期菜卅斤(○中略)　參河國(○中略)於期菜卅斤(○中略)　播磨國(○中略)於期菜廿斤(○中略)　紀伊國(○中略)於期菜卅斤(○中略)　阿波國(○中略)於期菜六斗(○中略)　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調(○中略)一丁(○中略)於期菜廿六斤十兩、

志摩國(○中略)調(○中略)於期菜、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別(○中略)於期菜二兩、(好物料各一兩、生菜料○中略)　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九内膳〕供御月料

石花菜

於期五斤四兩〈○中略〉　右月料、小月減卅分之一、

年料

若狹國〈中略○中略〉於巳　右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿、擬供御、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕大凝菜　本朝式云、凝海藻、〈古留毛波、俗用心太二字、云古々呂布止、〉楊氏漢語抄云、大凝菜、

〔箋注倭名類聚抄 九 藻〕本居氏曰、凝訓古留、或云古呂、淤能碁呂島、自凝之義、心訓古々呂者、古呂古呂之省、凝凝也、故以肝向爲心之枕詞、肝向言臟腑相集對也、〈○中略〉閩書云、石花菜生海礁上、性寒、夏月煮之成凍、本草綱目、石花菜生南海砂石間、高二三寸、狀如珊瑚、有紅白二色、枝上有細齒、以沸湯泡去砂屑、沃以薑醋、食之甚脆、久浸化成膠凍也、

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、〈○中略〉東山糵、西山心太、

〔庭訓往來諸抄大成扶翼〕貞〈貞丈○伊勢〉云、西山は山にて海なし、心太は海草なり、山に生ずべき理なし、然れども心太を他所より求て、それを煎じて、こゝろぶとに作て出す、佳品なる故名物とするなり、

〔七十一番歌合〕七十一番　右　心太うり

うらぼんのなかばの秋のよもすがら月にすますや我心てい

右はうらぼんのよもすがら、心ぶとうること去かり、心ていきく心地す、

〔布留別志 一〕一職人歌合に、太凝菜を賣る人の、こゝろていとよぶといふ事あり、それより又ところてんとなれるなり、

〔東雅 十三 海藻〕海髮イギス〈○中略〉イギスの義不詳、コルモは卽凝海藻也、コゝロブトとは、コゝロは凝也、フトは太也、卽大凝菜也、今も俗に凝をいひてコゞルなどいふ也、

〔本朝食鑑 三 水菜〕凝海藻〈古訓古古呂布止、今訓古古呂天、〉

釋名小凝菜、凝草、(式)大凝菜、(源順曰、楊氏漢語抄云、大凝菜和名古古呂布止、俗用心太二字、今大(平聲)按本朝式訓古○○毛○○波、又曰比○不○○毛○○波、)
集解、此生于處處海濱沙石間、高二三寸、狀如珊瑚、有紅白二色、枝上有細齒、其根埋于沙中、則可再生、一種有似鷄爪者、二物相同、漉水去砂屑及枯黑者、而曝乾者久收、出入水則凝成膠凍、如蒟蒻之凝、而透明清白、作膾可食、和醬汁、最加薑芥香椒砂糖豆粉而食之、或浸梅醋汁而越年、則作珊瑚琥珀色可愛、或用此菜煎汁塗紙上而晒乾、如雲母紙、久而不損傷、近世夏月通俗食之、謂能消暑、僧家亦用之、古者尾張、志摩、紀伊、阿波等州貢獻于民部省、今亦勢尾參河等州最多矣、
氣味、甘寒滑無毒、主治、去上焦胸膈之煩熱及胃熱、止渴消暑解酒毒、凡下焦虛寒之人不宜用、

(本朝食鑑三華和異同)凝海藻
李時珍所謂石花菜、鹿角菜、倶今有之、即訓登古呂天者也、

(和漢三才圖會九十七)石花菜(ところてん)　瑪枝(本綱)　大凝菜(本朝式)　凝海藻(同)(和名古々呂毛波、俗云心太、古々呂布止、○中略)
按石花菜今云止古呂低、或云小凝草、豐州宇和島之產爲最勝、相州鎌倉、豐州佐賀關之產次之、豆州海濱、紀州熊野浦亦多出之、
造法、夏月曝乾、又注水曬乾、凡十日許、成白色、水煮冷定則凝凍、如葛餅而不粘、用薑醋沙糖等食之、能避暑也、冬月嚴寒夜煮之、露宿則凝凍甚輕虛、俗謂之寒天、或用蘇方木煎汁染之、赤色最鮮可愛、謂之色寒天、城州伏見里製之、僧家爲調菜必用也、又用其濃汁塗于紙晒乾、則如雲母紙、而久不損、

僞以他國產

(令義解三賦役)凡調(○中略)正丁一人、絹絁八尺五寸、(○中略)若輸雜物者、(○中略)凝海菜一百廿斤、

(延喜式二十三民部)交易雜物
伊勢國(中略)凝海菜(廿斤○中略)　志摩國(大凝菜廿斤、白玉千顆、)　尾張國(中略)凝海菜(廿斤○中略)　參河國(中略)凝海菜(廿斤○中略)　遠江國(中略)凝海菜(廿斤○中略)　紀伊國(中略)大凝菜一百斤(○中略)
右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、○中略一丁、○中略大凝菜、小凝菜、角俣菜各卌斤、

凡中男一人輸作物、○中略鹿角菜、大凝菜、海藻各六斤、(相模國一斤十二兩)

上總國○中略　中男作物、○中略凝海藻、　若狹國○中略　調、○中略凝菜、　阿波國○中略　中男作物、○中略

凝海菜

〔延喜式三十三大膳〕同月(○正月)修太元帥法料、心太一斗九升、

仁王經齋會供養料

僧一口別、○中略大凝菜六兩一分四銖、(廿物料○中略)　右一日供料依前件

〔延喜式三十九内膳〕供御月料

大凝菜四斤八兩○中略　右月料、小月減卅分之一、

〔出雲風土記島根郡〕凡北海所捕雜物、○中略凝海藻、

〔續修東大寺正倉院文書後集四十〕寫經司解　申錢用事

合所請錢貳仟文(書)

買物合十六種○中略　心太一村　直錢、十文○中略

以前錢並狀并買物、顯注如前、以解、

天平十一年八月十一日　史生高屋連赤麻呂(署名以下略)

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文○中略

用一十七貫五百六十文○中略　一百文大凝菜二斗直(斗別五十文)○中略

以前、起去潤三月一日、盡今月廿九日、請用雜物并殘等、顯注如件、以解、

寶龜二年五月廿九日　散位正六位上上村主馬養(署名以下略)

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、○中略

一僧供 講師一人供料、○中略 心太三升、○中略 法用千僧供 一人料、○中略 心太三合、

〔延喜式四十二東西市司〕心太鄽、○中略 右五十一鄽東市 心太鄽、○中略 右卅三鄽西市

〔毛吹草三〕紀伊 [illegible]凝草二月之

〔伊豆七島調書〕八丈島

一此島稼には、男は○中略 海藻之內海苔は▽、芋、ところてん草の類を取、○中略 渡世仕候、

〔守貞漫稿六生業〕夏月專ラ賣遍ル者ハ、○中略 心太賣、

心太トコロテント訓ズ、三都トモニ夏月賣之、蓋京坂心太ヲ晒シタルヲ水鑢ト號ク、心太一箇一文、水鑢二文、買ク後ニ砂糖ヲカケ食之、江戸心太價二文、又晒之ヲ寒天ト云、價四文、或ハ白糖ヲカケ、或ハ醬油ヲカケ食之、京坂ハ醬油ヲ用ヒズ、又晒之乾キタルヲ寒天ト云、煮之ヲ水鑢ト云、江戸ハ乾物煮物トモニ寒天ト云、

〔倭名類聚抄十七海菜類〕海髮 崔禹錫食經云、海髮味鹹小冷、其色黑狀如亂髮、和名以木須○此間云、小凝菜

〔箋注倭名類聚抄九〕本草和名海藻條引云、一名海髮、狀如亂髮也、按本草和名海髮附錄海藻條者、以類聚故耳、一名字恐衍、據其云狀如亂髮、則是亦當於海菜之類、恐非伊岐須、或曰、又按本草陶注云、海藻生海島上、黑色如亂髮而大小許葉、大都似藻葉、合二書見之、海髮即海藻之一名、源君分之爲伊岐須非是、

〔和漢三才圖會九十七藻類〕海髮 小凝菜抄 馬尾藻 和名以木須○中略

按海髮本草所謂馬尾藻乎、阿州、淡州、備州、泉州有之、淡州者爲勝、長尺餘青色而甚細纖也、乾則紫黑色如亂髮、注水曝晒則潔白、煮之則凝凍如石花菜鹿角餠之類、蓋淺凝冷定、而纖栽之和酢未醬食之、

ウケウト

角俣菜

味淡甘美、最爲上品、俗傳曰、煮之者勿語、如吐戯言則不成也、漢語抄謂之小凝菜、以石花謂大凝菜者最當矣、

〔延喜式 主計 二十四〕凡諸國輸調、略○中 一丁、略○中 大凝菜、小凝菜、角俣菜各卅斤、

凡中男一人輸作物、略○中 小凝菜、雜海菜各八斤、

志摩國 略○中 調、略○中 小凝菜、

〔延喜式 内膳 三十九〕供御月料

伊祇須九斤 略○中 右月料、小月減卅分之一、

〔大和本草 附錄 一 草〕ウケウト 海草也、煮テトコロテンノ如クカタマル、コンニヤクノ色ナルモアリ、非佳品、不可食、

〔本草和名 菜 十八〕鹿角菜、狀如鹿角、赤紫色、一名猴葵、出七卷食經 和名都乃末多

〔倭名類聚抄 海菜 十七〕鹿角菜 崔禹錫食經云、鹿茸狀似水松、和名豆乃萬太 文選江賦注云、鹿角菜、漢語抄云、和名闕、上、

〔箋注倭名類聚抄 藻 九〕江賦、紫菜熒曄以叢被、李善注、紫菜色紫、狀似鹿角菜而細、此所引即是、按嘉祐本草云、鹿角菜出海州、登萊沂密州並有、生海中、李時珍曰、鹿角菜生東南海中石厓間、長三四寸、大如鐵線、分了如鹿角狀、紫黄色、土人采曝、貨爲海錯、以水洗醋拌、則脹起如新、味極美、若久浸則化如膠狀、女人用以梳髮、粘而不亂、

〔庖廚備用倭名本草 水菜 四〕鹿角菜 ロクカクサイ ツノマタ 略○中 元升 ○向井 曰、西國ニロクカクサイト云アリ、モトハ大明商客ノ持來ル、近キ比ヨリ天草邊ノ海中ニ出ルトイヘリ、其ナリアヒ鹿ノ角ノ如シ、其色或ハ白キアリ、或紫黄ナルアリ、本草註ノ說ノ如シ、是卽鹿角菜ナルコト明ラケシ、今俗音ニ隨テロクカタサイトイヒナ、ツノマタト云、和名ヲシラズ、日本モ古ヨリ此菜ヲ食シタルナルベシ、多識篇ニヒジキト云ハ誤レリ、

〔本朝食鑑三水菜〕鷄冠菜〈〇中略〉
角{ツノ}股{マタ}菜〈此亦本朝式所謂貢民部書、又狀似鹿角、嘗灰色、乾則白色、無氣味、鹿尾菜、味亦淡、似鹿不煮佳、今亦處處有、其氣味主治未詳、〉

〔大和本草八草〕鹿角菜　本草水菜ニ載ス、大寒無毒所載、然ドモ性不良、其形鹿角ニ似テ小ナリ、海中岩間ニ生ズ、乾シ收メ用ル時、水ニ浸シ醋ニ和シテ食フ、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物
伊勢國〈中略〉鹿角菜二石〈〇中略〉　尾張國〈中略〉鹿角菜三石〈〇中略〉　參河國〈中略〉鹿角菜二石〈〇中略〉　播磨國〈中略〉鹿角菜二石〈〇中略〉　紀伊國〈中略〉鹿角菜二石〈〇中略〉　阿波國〈中略〉鹿角菜二石〈〇中略〉　右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔延喜式二十主計〕凡諸國輸調〈〇中略〉一丁〈〇中略〉大凝菜、小凝菜、角{ツノ}俣{マタ}菜各卅斤〈〇中略〉鹿{フ}角{ノ}菜{リ}卅三斤五兩、
凡中男一人輸作物〈〇中略〉鹿角菜、大凝菜、海藻各六斤〈絁一丁十一斤〉

〔延喜式三十三大膳〕同月〈〇正月〉修太元帥法料〈〇中略〉鹿角菜一斛九斗〈〇中略〉海松、角俣菜各廿四斤、
志摩國〈〇中略〉調〈〇中略〉角俣菜、
仁王經齋會供養料
僧一口料〈〇中略〉鹿角菜〈好物料〇中略〉角俣菜一兩二分〈好物料一兩、雜菜料二分、〇中略〉　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九内膳〕供御月料
鹿角菜十二斤〈〇中略〉　右月料、小月減卅分之一、

〇按ズルニ、延喜式ニ角俣菜、鹿角菜ヲ並ベ載セタ二物トス、然ルニ本草和名、倭名類聚抄等ニハ、鹿角菜ヲツノマタト訓ジタレバ、鹿角菜ト角俣菜トヲ同物ト爲シタルガ如シ、但シ本朝食鑑ハ延喜式ノ訓ニ據リテ、鹿角菜ヲ海蘿{フノリ}トス、

〔倭名類聚抄十七海菜〕海蘿　崔禹錫食經云、味澁鹹大冷無毒、其性滑滑然、主九竅、〈和名不乃利、俗用布海苔、〉

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、〈〇中略〉海蘿、

〔東雅十三穀蔬〕海蘿フノリ　倭名抄に崔禹錫食經を引て、海蘿其性滑也、フノリといふ、俗用布苔字と註せり、猶銅糊といふが如し、其滑にして物を粘著すべき銅糊の如くなるをいふ也、略○中註凡海苔の類、又呼びてノリといふは、皆その滑なるをいふ也、

〔本朝食鑑三水菜〕雞冠菜略○中

海蘿和名鈔訓布乃里、(中略)參大、平野)按、本草亦謂甘大寒滑無毒、然近時無食之者、鹽鹹粘不堪食之乎、是物生海中石上、長三四寸、大如鹿角狀、紫黃色、土人采曝乾于四方、大抵用紙作巧者、兼海蘿以爲糊用、縫布裏者亦用之、本朝式鹿角菜訓布乃里、參河、尾張、伊勢、紀伊、阿波等州貢獻于民部省、此供食物歟、用工巧之事歟、未詳、

〔本朝食鑑三華和異同〕海蘿

即鹿角菜也、古人食之、近世唯爲紙匠之用、而無食之者、李時珍所謂女人用以梳髮、粘而不亂、亦然焉、今婦人産難用之、爲滑胎之利、亦可也、

〔和漢三才圖會九十七藻類〕鹿角菜　猴葵本綱　海蘿食經　和名不乃利略○中

按倭名抄載食經云、海蘿鹹寒大冷其性滑滑然主九竅、則海蘿與鹿角菜一物也、倭名抄以爲二物者非也、

凡海蘿生者和諸未嘗食之、稱生海蘿、訓古不乃利處處多出之、似石花菜而黃紫色、肥州五島之産爲最上、朝鮮次之、志摩、伊豆、對馬、阿波、肥州平戸、紀州熊野之産爲中、奥州松前、仙臺、南部、及防州、土州之産爲下品、但奥州之産甚多也、曝乾用時煮之爲糊、紙工家用治紙、或和石灰爲堊塗城櫓壁、産前催生、及胞衣不下者、用布苔煮汁服之、又傳痔脫肛即平安、皆取性滑利也、婦人用洗髮則舊油不脫而垢能去、又織綿布者塗之則簇易行、

造法、洗水去砂礫于筵上、以稗帚洒水、晒乾則成、裁爲方形販之、其功用最多大致民之利、

燒海蘿法　用乾海蘿、漬水去鹽握丸、裹紙煨之擂爛、和柹漆爲糊最佳、

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文略○中

用一十七貫五百六十文〈○中略〉三百卅文。布。乃。利七斗五升直〈四斗升別五文、三斗五升升別四文、○中略〉

以前起去閏三月一日、盡今月廿九日、請用雜物幷殘等、顯注如件、以解、

寶龜二年五月廿九日　　散位正六位上上村主馬養〈○以下署名略〉

(東大寺要錄三)供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〈○中略〉

一僧供　導師一人供料、〈○中略〉布。苔。三升、〈○中略〉　法用千僧供　一人料、〈○中略〉布。苔。六合、

(諸色直段引下〈具〉)諸色引下ゲ直段書

生布海苔　　今般〈○中略〉再應利解之上直段ニ居置

〈去子年六月書上直段會所ニ付上中下平均六貫目替〉

一朝鮮生布海苔

一〈豐州肥前筑州五島〉生布海苔　　但當時品無之候

〈右同斷上中下平均會所ニ付六貫六百六拾匁替〉

一〈駿州紀州阿州土州〉生布海苔　　〈右同斷(引下直違)〉六貫百六拾六匁替

但當時直段六貫六拾六匁、百目直下ゲ、

〈右同斷八貫目替〉

一〈伊豆相模房州〉生布海苔　　〈右同斷〉七貫八百三拾三匁替

但同斷七貫五百六拾六匁、二百六拾七匁直下ゲ、

〈右同斷七貫目替〉

一仙臺生布海苔　　〈右同斷〉七貫目替

但同斷六貫六百六拾四匁、三百三十四匁直下ゲ、

〈右同斷七貫五百目替〉

一〈武州松前〉生布海苔　　〈右同斷〉八貫五百目替

但同斷八貫六拾六匁、四百三拾四匁直下ゲ、

(毛吹草三)伊勢　海蘿〈フノリ〉　紀伊　布苔〈フノリ〉　土佐　海蘿　豐後　海蘿　肥前　海蘿

(本草和名十八)石蓴〈崔禹錫食經云、味鹹小冷、〉一名海蓴〈出崔禹〉和名古。毛。

〔倭名類聚抄 藻類十七〕石蓴 唐韻云、蓴〈常倫反、又、漢語抄云、石蓴、古毛、一云、水雲菜〉水葵也、辨色立成云、海蓴、〈和名上同〉

〔箋注倭名類聚抄 九藻〕按本草和名云、石蓴一名海蓴、出崔禹、和名古毛、與漢語抄辨色立成合、但水葵是蓴一名、詳見下文、漢語抄以爲石蓴一名誤、本草拾遺云、石蓴生南海石上、南越志云、似紫菜色青、臨海異物志曰、附石生也、小野氏曰、是可以充今俗呼阿乎左者、然則以石蓴充古毛非是、〇中略 毛詩釋文引鄭小同曰、莕或名水葵、江南人名之蓴菜、正義引陸璣疏云、江東人謂之蓴菜、或謂之水葵、蓴即蓴字、本草和名云、蘋立言音義蓴蓴同、按本草和名云、蓴和名奴奈波、又云、石蓴和名古毛、明是蓴石蓴非一物也、漢語抄誤云石蓴一名水葵菜、源君以蓴石蓴爲一物、引唐韻蓴字注、非是、

〔倭訓栞 前編九古〕こも〇中略 倭名抄に海蓴を訓せり、古事記にも見ゆ、ほだわらに似て丸きもの多くつけり、蒼藻也といへり、小藻の義成べし、著聞集にこものこをさかなにまけると見えたるは、此を紛にまたるにや、庭訓に菰子と書るはいかゞ、

〔庖厨備用倭名本草 四水菜〕石蓴（サイレン） 倭名抄ニコモ海蓴ノ二字ヲ用フ、〈蓴與蘋同〉多識篇藻ニシテ、考本草、南海石ニ附テ生ズ、莖ノ長サ二三寸イロアヲシ、涎滑アリテ筋ノ如シ、又光瑩ニシテ水晶ノ如シ、葉ノ間ニ莖アリ、莖中ニ花アリ、形圓ニシテ豆ノ如シ、其葉莖ヨリ大ニシテ帯タリ、慈姑ノ葉ノ如シ、莖脆ニテ堅テ甚ダ美ナリ、晉張翰ガ思シ蓴鱸ノ蓴ハ即是也、元升〇中略 曰、西國ニコモト云海草アリ、其ノ樣本草ノ說ノゴトシ、コマカニキザミタヽキテ、シヤウユウ、サカシホニテ調レバ、子バリナメラカニシテ筋ノ如シ、シヤウガクルミナドキザミ入テ甚美ナリ、山葵ノトロヽ汁ニマサレリ、サレバ石蓴ハコモナルコトウタガヒナシ、多識篇アヤマレリ、又コモノ長ジテ老タルハ、色變ジテ紫ニナル、正月ノカザリニ用フルホダハラハ、此コモノ老タルナルベシ、

〔大和本草 八海草〕コモ 細莖長クシテ、穗ノ如クナル小ニシテ丸キ物多クツケリ、タヽキテ食トス、ホダハラニ似タリ、又蓴ハ水草ナリ、別ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十水草〕石蓴 アヲサ ナヽノリ阿州

海中石ニ著テ生ズ、紫菜ト形状同クシテ緑色、乾シテ紫色ニ變ゼズ、チバリアリ食料トス、讃州共ニアリ、闕ニヨリ貼セザル者モアリ、一種海中石上ニ生ジテ、車前葉ノ如ク淡緑色ナルヲ、泉州ニテアヲサト云、勢州ニテニガアヲサト云、肥前ニテニガアヲサト云、賤民ノ食ナリ、今勢州ニモコレヲ賣ル、下品ノ者ナリ、又アヲノリノ闊キ者モ、紀州ニテアヲサト云、又膠葦樟姉モアヲサト云、皆同名アリ、

〔古事記 上〕於出雲國之多藝志之小濱、造天之御舎、(多藝志三字以音)而、水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫、獻天御饗之時、(中略)○中略 鎌海布之柄、作燧臼、以海蓴之柄、作燧杵而鑽出火、

〔古事記傳 十四〕海蓴は古毛と訓べし、(中略)○中略 大嘗祭式に、紀伊國所獻云々、都志毛古毛各六籠云々、並令賣多磨女十人、量程採備、とある古毛も是なるべし、さて此海蓴と云物、いかなる物にか未考得ず、(和名抄に、海藻は、本草に古毛と云物あり、今の世にも、されども海藻の字をあてたるは、なるべし、然ばこ、海藻に生て、莖に似たる物なくて、茎なる物多くつけくは、ゆへ、又は、稀に作れる物なるべし、)なほよく考ぬべし、

〔延喜式 三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、(中略)○中略 僧別日菓菜料、(中略)○中略 青海菜(二合五勺)一合、白(二十口)古毛一合、

〔萬葉集 中〕白藻、

〔和爾雅 七草〕龍鬚菜(又鹿角菜、龍鬚、一名鹿角菜、)

〔和漢三才圖會 九十七〕龍鬚菜 (俗云白藻、又云、或云、和名抄、)

〔庖廚備用倭名本草 四水草〕龍鬚菜 倭名抄ニ龍鬚菜ナシ、多識篇カタノリ、考本草、東南海邊ノ石上ニ生ズ、叢生シテ枝葉ナシ、ナリアヒ綱根ノヒゲノ如シ、長キハ一尺餘、色白シ、醋ニヒタシ、肉ニ和シテ蒸シ食シテ皆ヨシ、一名ハ石髪、元升(升)○向 曰、此註ヲミレバ、西國俗ニ云シラモ也、多識篇ニカタノリト云フハ、穏當ナラザルニヤ、

鷓鴣菜

海索麪

〔本朝食鑑 三水菜〕海藻 中略○
白藻、狀如髮、如馬鬣、而有莖、長一二尺許、附石面生、生時淡紫色、連日晒乾則變白、若陰雨時、漬水取出、暴風亦變白、其味脆好、精潔生食可愛耳、備前海濱多有、豐後及海西諸州亦有之、

〔大和本草 八海草〕龍鬚菜　王氏彙苑曰、生海中石上、莖如絲、長僅尺許、色始青、居人取之沃於水乃白、又名絹菜、人頗珍之、今按備前ニ白藻アリ、絹絲ノ如ニシテ、青白水ニ浸セバ白クナル、煮食シ、或水ニヒタシスミソニテ食ス、潔白ナリ、若水曰、又北土及他州ニモ有之、ソウナト云、

〔毛吹草 三〕備前　堅海白藻　伊豫　來島白藻

〔寛政四年武鑑〕松平伯耆守貴承○丹後宮津　時獻上十月　白藻

〔和爾雅 七菜蔬〕鷓鴣菜 出于閩書

〔倭訓栞 中編二十四〕まくり　海苔の類にいへり、鷓鴣菜也といへり、海菜也ともいへり、世に海仁草ともいひ、或は蔗をよめり、小兒の腹痛などに用ひて虫を下す、まくり甘草合せ用う、古方なり、

〔大和本草 八海草〕鷓鴣菜　閩書曰、生海石上、散碎色微黑、小兒腹中有蟲病、少食能愈、甘草ト同煎シ用ユレバ、小兒腹中ノ蟲ヲ殺ス、初生ニモ用ユ、

〔和漢三才圖會 九十七〕海人草　俗云末久利
按海人草生琉球海邊藻花也、多出於薩州、販于四方、黃色微帶黑、長一二寸有枝無根髭、而有微毛茸、輕虛、味甘微鹹能瀉胎毒、一夜浸水去土砂　小兒初生三日中先用海人草甘草二味、或加蕗根、包帛浸湯令吮之、呼曰甜物、此方不知始於何時、本朝通俗必用之藥也、呑之兒吐涎沫、謂之吐穢汁、可以去膈上胎毒、既及吃乳則不吐、用加味五香湯可下、

〔本朝食鑑 三水菜〕海藻 中略○
海索麪 古未聞此名、近世通俗以相似索麪名、狀似未熟之亂、青色柔脆、嚼之如有聲、其味脆好、京師近畿最多、江東希有、伊豆、參河、安房、下總等海濱時有之爾、氣味主治未詳、然世人食之、證中者少矣、

〔大和本草八海草〕索麪苔　サウメンニ似テ長キ叢也、色黒シ味甘シテ美ナリ、鹽ニツケ或灰ニ和シテホシ用ユ、煮テ食ス、或薑醋ニ浸シ食フ、其漢名ト性ト未詳、冷滑ノ物不益于人、

〔和漢三才圖會九十七海藻〕海索麪（ウミサウメン）　俗稱

按近世西海四國及因幡丹後多有之、細長狀似索麪、而青黑色、故名海索麪、乾送于四方、用時盛漆器、少時浸水復、亦用漆器、則縮不敗、用熱湯或醋食之、味淡甘脆、若盛磁器、則潰爛而失味、東海亦間有之、

〔毛吹草三〕因幡　海索麪（名產）

石帆

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕石帆　ウミヒバ　一名海松（中山傳信錄）　礁松（同上）　鐵樹（東雅、同名多シ、）　落樹

同上

海底ノ石上ニ生ズ、大ナル者ハ高サ四五尺、小ナル者ハ數寸、枝叉甚ダ多クシテ網羅ノ如シ、皆左右ニ枝出テ扁ク、帆ノ形ノ如ク、又佛ノ後光ノ如シ、紅黃紫白靑黑褐ノ數色アリ、小ナル者ハ海邊ニ於テ拾ヒ得、或ハ漁人ノ網ニ挂ル、用テ盆供トス、ソノ紅ナルモノハ、外ハ柔ニシテ赤土ヲ塗ガ如シ、外ノ柔ナルヲ削リ去ル時ハ、骨甚硬ク石ノ如シ、赤色ニシテ縱道アリテ、珊瑚ニ異ナラズ、然レドモ枝ゴトニ自ラ斷タ痕ヲナサズ、長サ三四分許、コレヲ珊瑚砂ト云、又海濱ニテ拾ヒ得ル者アリ、其黃色ナル者モ又然リ、他色ノ者ハ骨軟ニシテ珊瑚ノ狀ヲナサズ、

一種ウミマツアリ、又海中石上ニ生ズ、枝少ク扁ナラズ、黑澤ニシテ甚硬シ、枝ノ梢稀ニ葉アリ、杉葉ノ如ニシテ極テ細ク長シ、播州ニテヤメヂト云、鎌倉ニテヤガト云フ、漢名鐵樹、（通雅）一名黑珊瑚、（物理小識）海苔樹、（廣東新語）一種ウミスギハ枝多ク葉叢シ、杉葉ニ似テ細小淺黑褐色ナリ、此外海產樹形ナル者甚ダ多シ。

水苔

〔倭名類聚抄十七水菜〕水苔　辨色立成云、水苔一名河苔、（和名加波奈）

〔箋注倭名類聚抄九藻〕按水苔疑今俗呼加波毛豆久、卽是、當以陟釐充之、今南部呼加波奈者、海產同

乎乃利也、

〔倭訓栞前編六〕かはな　倭名抄に水苔をよめり、川菜の義なるべし、祝詞式にもしか書り、芹の名とす、古今集のかはなぐさも、是をいふなるべし、殿にも此藻をかき、或は彫は、火を防ぐ意、

〔大和本草八水草〕河薀(カハモヅク)　處々小流ニアリ、海薀(モヅク)ニ似テ其色青ク、糸ヲツカネタルガ如クニシテウルハシ、美トシ、或ハ酢ニテ食ス、味ヨシ、但小瘡ヲ發シ身ヲ痒カラシム、病人及有瘡人食スベカラズ、北ニ向テ流ルヽ小河ニアリ、他方ニ向テ流ルヽ川ニハナシト云、漢名未詳、凡水苔ノ類ノ中ニ蛭蟇ナド毒虫ノ子アリ、食之則吐血而死ス、ヨク擇ブベシ、妄ニ食フベカラズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕水藻　カハモ　イブモノハナ古歌　カハナグサ同上　一名碁藻典籍便覽　雲藻同上　鳥藻同上　聚藻一名薀藻埤雅　馬藻一名柳葉菹救荒本草　菹草同上

水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名ナリ、集解兩種ニ分ツ、其一ハ聚藻フサモ江州キンギヨモ、エビノス紀州ノボリ、信州クジヤクモ、勢州スヾモ、土州流水底ニ生ジ、水ニ隨テ靡キ流ルヽコト長ク、數尺ニ至ル、葉ハ至テ細ク線ノ如シ、節ゴトニ多聚リテ、蓬子菜(カハラマツバ)ノ如シ、二月白花ヲ開ク、五瓣黃蘂、大サ三四分、水上ニ出テ開ク、其一ハ馬藻、ヤナギモ、ナヽモ、溝瀆流水中ニ多シ、此モ水底ヨリ生ジテ、水ニ隨ヒ靡キ流ルヽコト數尺、葉ハ長サ二三寸、濶サ一二分、兩對シテ生ズ、又一種互生スル者アリ、

〔延喜式八祝詞〕鎮火祭

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱、〇中略吾名妹能命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知牟止申氏、石隱給氏、與美津枚坂爾至坐氏、所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氏來奴止宣氏、返坐氏、更生子水神、匏、川菜、埴山姬四種物乎生給氏、此能心惡子乃心荒比留波、水神、匏、埴山姬、川菜乎持氏、鎮奉止事敎悟給支、

〔萬葉集十三相聞〕紀伊國之、室之江邊爾、千年爾、障事無、万世爾、是將有登、大舟乃、思恃而、出立之、淸瀲爾、朝名寸二、來依深海松、夕菜寸二、來依繩法、深海松之、深目思子等、繩法之、引者絶登夜、〈○下略〉

〔萬葉集十五〕海邊望月作歌九首〈○八首略〉

和多都美能、於伎都奈波能里、久流等伎登、伊毛我麻都良牟、月者倍爾都追、

〔文祿四年御成記〕一初獻御盃參候〈○中略〉　御肴　鹽海藻、

〔大和本草八雜草〕鳥ノ足　一根ニ枝多シ、短シ、葉形如海松、只蒼黑褐色、節ニ兩叉アリ、煮テ可食、

〔毛吹草三〕紀伊　鳥足〈鳥ノ足ニ似ル藻云〉　鼠藻、

〔大和本草八雜草〕ナゴヤ　海藻ニ似タマルシ、枝多ク細長シ、色青シ或褐色也、煮食ス、又沸湯ニユビキテ、味噌ニ和シテ食ス、性アシヽ、往々發腹痛、不可食、

〔令義解三賦役〕凡調〈○中略〉正丁一人、紫菜八尺五寸、〈○中略〉若輸雜物者、〈○中略〉雜海藻一百六十斤、

〔常陸國風土記多珂郡〕郡南背里、藻島驛家、〈○中略〉昔倭武天皇乘舟浮海、御覽島礒、種種海藻多生茂繁、因名、今亦然、

〔豐後風土記海部郡〕穗門鄕〈在郡南〉昔者纏向日代宮御宇天皇〈景行〉御船泊於此門、海底多生海藻而長美、天皇勅曰、取最勝海藻、〈謂保都米〉便令以進御、因曰最勝海藻門、今謂穗門者訛也、

〔肥前風土記三根郡〕米多鄕〈在郡南〉此鄕之中有井、名曰米多井、水味鹹、纏者海藻生於此井之底、纏向日代宮御宇天皇巡狩之時、御覽井底海藻、卽勅賜名曰海藻生井、今訛米多井、以爲鄕名、

〔延喜式四十二東西市司〕海藻廛〈○中略〉　右五十一廛東市

〔枕草子四〕さとにまかでたるに、殿上人などのくるも、やすからずぞ人々いひなすなる、〈○中略〉左衛

門の文とてふみをもてきたり、みなねたるに火ちかくとりよせて見れば、あすみどきやうのけちぐはんにて、宰相中將の御物いみにこもり給へるに、いもうとのあり所申せとせめらるゝに、すぢなし、さらにえかくし申まじき、そことやきかせ奉るべき、いかに仰せにしたがはんとぞいひたる、返事もかゝで、めを一寸ばかりかみにつゝみてやりつ、さて後にきて、一夜せめてとはれて、すゞろなる所にゐてありき奉りて、まめやかにさいなむにいとからし、さてとかくも御かへりのなくて、そゞろなるめのはしをつゝみて給へりしかば、とりたがへたるにやといふに、あやしのたがへ物や、人のもとにさる物つゝみてをくる人やはある、いさゝかもこゝろえざりけると、みるがにくければ、物もいはで、すゞりのあるかみのはしに、

かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん、とかきていだしたれば、歌よませ給ひつるが、さらに見侍らじとて、あふぎかへしてにげていぬ、

〔淸良記七上〕養草之事

一海藻類○中略

一是等は草木の內にても多して、勝れたる養也、此外不可勝計、

職名	位階・學位	氏名
編修總裁	從二位文學博士男爵	細川潤次郎
編修長	正七位文學博士	佐藤誠實
編修副長兼校訂長	從六位文學博士	松本愛重
編修	正七位	廣池千九郎
編修兼校訂		加藤才次郎
編修兼校訂		山本信哉
編修兼校訂		村尾節三
編修	從六位	佐伯有義
編修兼校訂		三浦千畝
校訂		竹島寛
校合員		齋藤松太郎
校合員		平川清水

編修顧問　従三位文學博士　本居豊穎
編修顧問　従五位文學博士　木村正辭
編修顧問兼校勘　従五位文學博士　井上頼圀

古事類苑

金石部目錄

金石部一
鑛山上
金石部二
鑛山下
金石部三
金屬
金石部四
玉石上
金石部五
玉石下
沙土

古事類苑

金石部一

鑛山上

鑛度 二
採鑛所 八
鑛會所 九
山相法 金山相銀山相銅山相鐵山相錫山相鉛山相水銀山相[illegible]寶山相 同
鑛山探索 三二
鑛質 三三
分析 三六
僞鑛 同
淘汰鍛鍊 四〇
灰吹 五二
開掘法 五五
鑛坑(附圖) 六四
鑛山家屋 七二
鑛山職員工夫 七四

工夫作業時限 八四
鑛山器具 八五

金石部二

鑛山下

鑛山所在 八九
金山 駿河國金山 伊豆國金山 常陸國金山 陸奧國仙臺金山 南部金山 出羽國阿仁金山 杉澤金山 佐渡國金山 但馬國金山 長門國金山 九〇
銀山 攝津國多田銀山 下野國足尾銀山 陸奧國仙臺銀山 半田銀山 出羽國院內銀山 箕川銀山 阿仁銀山 增田銀山 [illegible]銀山 佐渡國銀山 但馬國生野銀山 石見國銀山 對馬國銀山 一〇七
銅山 山城國銅山 常陸國銅山 美濃國銅山 下野國足尾銅山 陸奧國尾去澤銅山 白根銅山 和貫澤銅山 [illegible]銅山 出羽國阿仁銅山 佐渡國銅山 但馬國銅山 石見國銅山 播磨國銅山 美作國銅山 備前國銅山 備中國銅山 備後國銅山 長門國銅山 紀伊國銅山 伊豫國別子銅山 豐前國銅山 一三四
鐵山 一五一
鉛山 一五二
錫山 一五三
硫黃山 一五四
石炭山 伊賀國石炭山 甲斐國石炭山 常陸國石炭山 近江國石炭山 長門國石炭山 紀伊國石炭山 筑後國石炭山 同
鑛物產出額 一五七

鑛物賣買 一六一
鑛山運上 一六七
雜載 一七〇

金石部三

金屬

總載 一七二
金 [illegible] 一七三
銀 [illegible] 一八三
銅 [illegible] 一八六
鐵 [illegible] 一九七
錫 白鑞 二〇六
鉛 [illegible] 二〇九
亞鉛 二一二
水銀 辰沙 二一三

金石部四

玉石上

珠　二二〇
玉 璞　同
水晶 火精 石英　二二四
瑠璃 玻璃　二三二
珊瑚　二三四
琥珀　二三七
硨磲　二三九
瑪瑙 舍利石鐵嘴 石石榴石　二四〇
石 細石鏡石藤石村名 石寄石〔圖〕嶋石鐵石〕　二四四
庭石　二六七
盆石　二六八
麥飯石　同
試金石　二六九
砥石　同
ミガキ石　二七四
藥石　同
碁石　二七六
硯石　二七七
溫石　同
凝水石 石膏寒水石理石　二七八

長石 方解石 三稜石 二八一
螢石 二八三
礬石 二八五

金石部五

玉石下

砒石 礜石 特生石 二八七
滑石 二九六
消石 朴消 芒消 二九七
陽起石 三〇〇
砥石 金牙石 金食石。 銅牙石 金牙石 三〇一
雄黄 雌黄 三〇三
禹餘糧 太一餘糧 石中黄子 三〇五
金星石 三〇七
礞石 同
花乳石 三〇八
石芝 同
雷斧石 三〇九
石鍾 鵝管石 三一〇

玄精石　三一〇

石脳（イシノアブラ）　石髓　桃花　石　石蕈　同

代赭石　赭石　三一四

無名異（ゴメイ）　三一五

石鐘乳　殷孽（キツネノマクラ）　孔公孽（イシノチノヒコバエ）　土殷孽（コンゴウレキ）　同

金剛石　合玉石　三二三

空青　三二四

玉英　三二六

白羊石　黒羊石　三二七

雲母（キラ）、　同

玫瑰　三二九

硫黄　金線石　三三〇

礬石（シヤウバン）　緑礬（ロウハ）、白礬　黄礬（キシヤウバン）　三三三

膽礬　三三九

石炭　泥炭（スクモ）　三四〇

墨石　白石　淺黄石　白墨石　青石　赤石　三四三

葡萄石　三四五

花斑石　同

菊銘石　同

亀甲石　三四六

蛇骨石	同
馬骨石	同
人肌石	同
浮石	同
化石（蛇石 石蟹 樟石 木葉石 ブナノキ石 芝石 石 石蠶 ソテノキ石 石鼈 石 燒米石 櫻石）	三四八
雜載	三五七

沙土

沙	三五九
金沙	三六一
鐵沙	三六二
蓬沙	同
土沙	三六三
土（土塊 鹹）	同
白土	三六九
赤土	三七一
黄土	三七二
黑土	三七三
紫土	同
土紺青	同

土綠青 三七四

鎢土 同

玉子土 同

石灰 同

鹼土 三七八

雜載 同

古事類苑

金石部一

鑛山上

鑛山ノ我邦ニ開ケシハ、其時代詳ナラズ、史ニ神代既ニ銅鑛ヲ山中ニ採ルノ事ヲ載セタリト雖モ、未ダ鑛山ノ開掘ト稱スルニ足ラズ、其後對馬ヨリ金銀ヲ出シ、尋デ陸奥ヨリ金ヲ出ス、是ヨリ漸ク鑛山ノ事盛ニシテ、大寶令ニハ其制度アリ、

鑛山開掘ノ法ハ、德川幕府時代ニ至リテ始テ精シク、殊ニ佐藤信淵ノ家ニテハ、箕裘相襲ギテ、鑛山學ヲ興シ、鑛物含有ノ山脈ハ、一定ノ山相ヲ具シ、而シテ金、銀、銅、鐵等、皆各、其固有ノ山相アルヲ論シ、大ニ鑛山開掘術ニ貢獻スル所アリキ、當時鑛山ハ幕府ノ所管ニ係ルモノト、諸侯ノ所有ニ係ルモノト、人民ノ所有ニ係ルモノトノ別アリテ、其鑛内ノ經營設備、亦多少ノ差違アリシト雖モ、其開鑛ノ方法、採鑛、淘汰ノ方法、及ビ職員工夫ノ執務、生活ノ狀態等ハ、各坑概シテ相似タリシモノヽ如シ、

諸國ノ鑛山ハ、金山ニテハ、佐渡及ビ陸奥ノ南部、仙臺尤モ著ハレ、銀山ニテハ、石見及ビ佐渡ノ相川、出羽ノ院内、但馬ノ生野尤モ著ハレ、銅山ニテハ、下野ノ足尾、伊豫ノ別子、陸奥ノ尾去澤等尤モ著ハレ、硫黄山ニテハ信濃ノ淺間ケ嶽、越中ノ立山、薩摩ノ硫黄ケ嶽等最モ著ハレ、炭坑ニテハ長門、筑前等最モ著ハル、而シテ我邦ハ銅鑛ノ出量尤モ多クシテ、德川幕府時代ニ於ケル輸出品中、鑛物ニテハ獨リ銅ノ輸出アルノミナリキ、サレド其中葉以後、銅ノ産出

年々ニ減ジ、幕府ノ理財家大ニ苦心焦慮ヲ重ネタル事アリキ、尙ホ鑛山ノ事ハ、金屬篇及ビ玉石篇ヲ參照スベシ、

〔令義解 雜十〕凡國内有出銅鐵處、官未採者、聽百姓私採、謂、文云官未採、即採之後、百姓不可私採、若納銅鐵、折充庸調者聽、自餘非禁處者、山川藪澤之利、公私共之、

凡知山澤有異寶異木、謂、異寶者、馬腦虎魄之類也、異木者、沈香白檀蘇芳之類也、及金玉銀彩色雜物、謂、異寶異木之外、諸處、堪供國用者、皆申太政官奏聞、

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年五月甲子、畿内七道諸國郡鄕名著好字、其郡内所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目、及土地沃塉、山川原野、名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上、

〔鑛山聞書〕諸國御山例之事

一喧嘩口論令停止事

一諸勝負博奕堅令停止事

一公儀御定御法式可相守事

一他山より買石令停止事

一他山江賣石令停止事

一山師山先之外、山内刀脇差入間敷事、

但公用たりとも、諸士山用之外、山内入間敷事、

一諸勸進乞食入間敷事

一御山例堅可相守事

一惡黨者抱置間敷事

右條々堅可相守、若相背候者於有之者、可爲曲事者也、

年號月日　奉行

御目安札

一山内取扱非道之義有之歟、又ハ訴申出候義、上ニ難屆義有之候ハヽ、此箱ニ訴狀ヲ入可申出事、

一金銀之盛ニ當リ、山師者勿論、買石歷害ニ掘取、御買山不相立有之者、早速訴可申出候、譬同類たりとも其科ゆるし、褒美可被下候事、

以上

年號月日　奉行

右御札江高サ貳尺、長サ三尺、幅壹尺之箱、上ニ長キ穴ヲ明、錠ヲ卸シ、御札場ニ有之、但御目安ハ入候もの、、名判無之時者、御取立無之事、

壹重封ハ御奉行、二重封者御老中迄上ル、三重封者御直訴也、鍵ハ御上ニ納ル也、

右御制札、御目安箱共、今ニ秋田銅山之内、小澤銅山、眞木澤銅山、銀山町ハ御代頭三ヶ所ニ有之候、

〔足尾銅山舊記〕御定法

一山例五拾三ヶ條之儀者、於駿州日除澤堤、當時將軍家康公被仰付候上意ハ、金銀銅鉛之四寶山者、何方ニ出來候共、右其山師金監職分之權者、野武士之格式与被仰付候、依之諸國通行之節、不限御領私領、所々御關所之儀者、右四品之山荒見石を以可致通行、貿是亦被仰渡候御事、

一山師金監師、何國ニ而見立山仕候共、御領所ハ御勘定所、私領者其國主領主方ニ、其山師江其所之邑役人相副、不限晝夜早速可為注進事、

一右總之御定例被下置候得共、於公儀御預り置被為成候、右ニ付、本書御證札之寫を以、諸國通行可致事、

右之通、天正年中從公儀被仰出候間、往來旅行之砌、大切ニ可致所持者也、

天正十六戊子歲閏五月　本多中務少輔

〔足尾銅山舊記〕銅山御奉行

一慶長十五庚戌同十九寅迄五ヶ年、藤川庄次郎樣御支配、是レハ丑年ヨリ銅御買上被仰付候、御奉行品川庄次郎樣、寅年冬大坂陣ニ御出立被遊候ニ付、其節御金三百兩、銅山師ニ拜借被仰付、大坂ニテ萬一之儀有之候共、右三百兩御貸付ノ儀、急度御勘定相立候樣、銅山師江被仰渡、御銅山引渡之儀、小林重郎左衛門樣ヘ御引渡被遊候由申傳候、

銅山御代官

一元和元卯より寬永元子迄十ヶ年、小林重郎左衛門樣御支配、辰三月より酉年迄、銅御用無御座、御留山ニ被仰付、六ヶ年過戌年ニ至、御銅御開後、戌寅子迄銅御買上被仰付候由申傳候、

銅山御代官

一寬永二丑より同三寅迄二ヶ年、小林盡五郎樣御支配、丑より卯迄銅御用無御座、御留メ山ニ被仰付候處、諸稼ノ者家業無御座難儀仕候ニ付、奉願辰巳兩年、日光大僧正銅御買上ゲ被遊候由申傳候、

〔陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷內働方仕方書上帳〕鑛場憲法廿七箇條

一鑿角迄候者　誅伐之科ニ準

一金格子破候者　關所破之科ニ準

一番欠切羽明ヶ候者　出仕供先欠候科ニ準

右三ヶ條之科ハ、至テ重き故、是を三法と申候而、山內引廻之上、耳鼻取、片鬢剃、追山永代張紙之法ニ御座候、

一人殺ハ　死罪ニ相行候

一金道具盗、盗賊之科也、是ハ引筋切、片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一喧嘩口論仕、為怪我候者、相手薄手ニ候ヘハ、両追放、相手深手ニ候ヘハ、藥用申付、快氣見届之上為怪我致候者、片鬢剃、朱を差追山之法ニ御座候、但及死命候時ハ、人殺之科ニ準、

一樋流し研通　片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一人釣出し候者　片鬢剃耳鼻取、追山之法ニ御座候、

一鋪外、欠落、通し者、　鋪下ニシテ追山、尤科之輕重有之、山内相稼申候、

一他役所掛之者ニ無調法、諸役者之遠慮、山方ニ不申出、相惡、當所諸役所相臨し候者、理非ニ不拘片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一留切羽掘候入尻掘候者　片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一諸國之徒黨又ハ越訴

右者片鬢剃、耳鼻取、追山、永代張紙之法ニ御座候、

一他山ゟ買石、他山ニ賣石、

右者片鬢剃耳鼻取、追山永代張紙、金工買師ハ家財闕下取上之法ニ御座候、

一金工買師自分拘之者、無調法有之節ハ、一澤組合相斷床屋并撿斷可願迄申出候ハヽ、山方役所迄訴、其上科之輕重ニ隨ひ、鋪下ニいたし可致仕置事、

我儘ニ仕置いたし、怪我又ハ命に相拘時ハ、金工買師之者可為越度事、組合加談を得、一澤之取扱ニ相及、鋪下にいたし候はヽ、家並より番を付可取扱、

科之輕重は山方ニ訴之上可取計定に御座候、

一鋪下研通し棚切流之者　鋪下ニシテ追山之法ニ御座候

但金工買師ハ、爲過料其鋪取明ケ、留方可申付定ニ御座候、

一買金銀　似掛砂　似山色　隱荷

右者片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一金工買師欠落ハ、永代山塞ぎ張紙之法ニ御座候、

一金工買師無調法有之、追山之節、未進貸有之時ハ、梁下押取上之法ニ御座候、

一鋪内不働役人下知を背候者、金工買師召放、腰縄下ニシテ追山之法ニ御座候、

一他所他山にて科いたし、又は人を痛メ、盗等致候者たりとも、其山内に不拘義は無構、召拘爲働申候、但追人參り候ハヽ、召捕遣メ間敷法令也、

一鋪之者無調法有之、縄下に及候共、鍛冶屋江駈込候はヾ、追込取押申間敷事、

一喧嘩有之共、大工部屋江無斷役人駈込、怪我致候ても、役人之越度に御座候、

一間夫密通之御法は、兩追放に御座候、

一諸勝負博奕之喧嘩は、宿致候者可爲越度、縄下にして追山之法に御座候、

一刃物を以喧嘩致候者、鉤縄を懸片鬢剃、追山之法に御座候、

一山内出入之義は、帶刀令停止候事、總而無用之者不可入事等は、山例に有之通、相犯候者は取押追山之法に御座候、

一背持留課門番所十分一番所之義は、札表に隨ひ、門制箇條有之事に御座候、

○按ズルニ、赤穗滿矩ノ礦山聞書ニ、右ノ御山法ト云フモノヲ引キテ、其終ニ五十三個條ト云トモ、是ヨリ外不用、右山法大略有來候法式也、ト記セルヲ見レバ、此山法ト云フモノハ、固ニ尾去澤銅山ノミノ規定ニテハナカリシ事ヲ知ルニ足ル、

(梅津主馬政景日記)元和三年七月十九日、○中略町中○内民法度書五ケ條書札を立申候、

札

一喧嘩口論仕間敷事

一諸勝負堅停止之事

一山師町人入籠に小屋不可掛事

一山師商人諸細工、大工、はりこ石はたき、板取等之外宿致間敷事、

一盗賊人於有之は、注進可仕、たとへ同類たりといふとも、其罪をゆるし、ほうび可出事、

右之旨於相背輩は、可為曲事者也、仍如件、

元和三年七月十九日

宍戸勘解由

湯尾嘉右衛門

海津主馬

（銅山受負書記）山法〇中略

一金格子破之事

一柱根堀之事

一鏨先窺之事

右三ヶ條之儀於相背者、急度山例ニ可取行者也、

一舗内江出家無用之事

一腰ノ物決而無用

　侍タリトモ堅無用

右之通相守可申候、若於相背者、山例法式之通可申附者也、

一御公儀様ヨリ被仰出候御法度之儀者不申及、御役人中江慮外仕間敷事、

一山先衆江不屆之儀無之樣、兼而可相心得事、
一火之元用心第一大切ニ可仕事
一喧嘩口論仕間舖事
右之通、山内之者共、堅相守可申事、

四ツ留格合

一四本柱ハ四ツ留ニ可依
一化粧木四ツ留次第
四ツ留柱格并四ツ留格式七五三ニ可結○中略

格式之事

一山先、其身一代、苗字帶刀ハ不申及、乘馬挾箱御免、
一山師、苗字帶刀御免、
一山廻子、右同斷、
一御公儀樣ヨリ、山先之者江歷舖料被下置候旨、其外諸役人給金、山師相對可致事、
○按ズルニ、右ノ小泉銅山ノ記錄ハ、末文ニ慶長十六年閏五月十二日、德川家康ノ定メシ事ヲ記スレド、其文甚ダ疑ハシキヲ以テ之ヲ略ス、

採銅所

〔壬生家文書　一〕左辨官下　採○銅○所○
應早進上銅參佰斤事
右權大納言藤原朝臣家宣、奉勅、件物爲宛伊勢豐受太神宮遷宮神寶用途料、宜仰彼所早令進上者、所宜承知、依宣行之、
建曆元年七月九日　　右大史中原朝臣花押

銅會所

中井藤原朝臣花押

〔御勘定所より御尋に付書上扣〕文化五辰正月書上、銅山御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、○中略

一足尾銅山銅會所之儀、江戸淺草猿屋町ニオヰテ、御用地五百坪餘被下置、銅御用相勤候儀ニ御座候得共、年曆之儀者、寛文享保之頃、兩度足尾大火ニテ、書物等燒失仕、委敷儀相分リ不申候、其後銅會所小網町ニ有之候處、淺草御藏に手寄合宜敷無御座ニ付、諏訪町江會所替仕候段、天明貳寅年川崎平右衞門様御支配之節モ奉申上候、其後寛政三亥年右場所引拂、本所表町江借宅仕、御用相勤候處、銅山師共困窮ニ罷成、諸入用ニ差支難儀仕候ニ付、享和元酉年、右場所引拂申候、當此五辰迄凡百六拾年餘以前より會所有之候ニハ相違無御座候、

山相法

〔山相秘錄上〕總論第一

凡ソ諸金含有ノ山ハ、皆必ズ岩石ヲ負フ者ナリ、而シテ其岩石ヲ負フ正面、背後、左擁、右擁、及西南二面、西北二面、東南二面、東北二面、前後二面、左右二面、前左右三面、後左右三面、左前後三面、右前後ノ三面、四方四面ノ十五相アリ、此ノ諸相ノ中ニ於テ、左擁ノ山ヲ以テ第一羸相トシ、正面此ニ次ギ、東北ノ二面ヲ第三トシ、東南二面ヲ第四トシ、左前後三面ヲ第五トス、以上五箇ノ相ノ山ハ、大抵皆繁昌スル者ナリ、其他ノ十相ノ山ハ、假令諸金ヲ含有スルトモ、永クハ繁昌セザル者多シ、

山相ハ必ズ北方ヨリ觀ル者ナルガ故ニ、正面ハ北向ニテ、背後ハ南向ナリ、左擁トハ東ノ方ニ岩ヲ負ヒタルニテ、右擁トハ西ノ方ニ岩ヲ負タルナリ、凡ソ諸金ハ山ヲ東北ニ負ル者多シ、此モ又山相家ノ古來精究シタル說ナリ、

凡諸金含藏ノ山ニハ、必ズ五種ノ熖樣石ト、諸種ノ鉛石トヲ吹キ出シテ、各其有ル所ノ諸金ノ徵ヲ現ハシ、以テ彼ノ夜中ニ蒸發シタル精氣ト、暗ニ相ヒ應ズルガ如キ者ナリ、所謂ル含有諸金ノ徵ヲ現ストハ、熖樣石ニ其形色ヲ發出ス、卽チ聚石ニ紫斑ハ黃金アルノ徵、褐石黑斑ハ銀ノ徵、暗灰

ニ精砂ノ斑ハ銅ヲ含ムノ徴、淡青微黄ニ皆ヲ帶タルハ鉛ノ徴、淡紅ニ白斑ハ錫ノ徴ナリ、山ニ其金アレバ、其上必ズ其徴ノ爐様石ヲ發出ル、人世ヲシテ各其需ル所ヲ得ルニ易カラシム、造物ノ妙工至ル哉、

爐様石淡土ニ餅石ニ作ル、其形チ燒タルガ如ク、砕ケ易クシテ質ノ脆キ石ナリ、此物ハ諸山ノ岩石ノ外邊ニ苔ノ如ク被リテ吹キ出シ、其厚キ一二寸許ニ過リタル者ナリ、五種共ニ少シク皆ノ氣アリテ、或ハ光ルモアリ、凡金山ニ在ル者ハ、或ハ暗灰黎色ニシテ、此ヲ破レバ中ニ紫紺色ノ細砂ヲ混ジ微小ナル斑ヲナス、銀山ニ在ルハ茶褐色、或灰色ニ黑砂ヲ混ズ、又銅山ニ在ルハ灰白色ニ紫砂ヲ混ズ、鉛山ノ爐様石ハ微青、或ハ微黄色ニシテ、暗淡タル皆ヲ帶ビ、此ヲ破リテモ砂ヲ混ズルコトナク、全ク鉛石ト同質ナリ、又錫山ノ徴ハ淡紅色ノ軟岩ニテ、破レバ白キ斑點アリ、若シ又藍青色ノ石ニ白キ間道ノ如キ條理ヲ爲ス者ノアルナラバ、極テ錫ノ多キ山ナリ、然レドモマレナル者ナリ、圖ニ其趣ヲ畫セリ、校合シテ理會スベシ、

鉛石モ山中含藏ノ諸金ヨリ煙氣蒸發シテ、岩石ヲ重鑄シタルモノナリ、十餘色アリ、能ク見覺ベシ、諸金山皆此物アリト雖モ、然レドモ銀山ト銅山ニハ、殊ニ色ノ異ナル者多シ、

鉛石ニ、金光皆、銀光皆、紅皆、紫皆、蜥蜴皆、瑠璃皆、早天皆、蒼空皆、白皆、青皆、黑皆、荏種皆、鬼雲皆等十三種アリテ、詳ニ上巻ニ圖スルガ如シ、其他モ胸冥色ナル者アルベシ、銅鑛モマタ苔ダヨク此ノ鉛石ニ似タル者ニテ、共ニ此ヲ皆石シ、及ビ金岩山色等ノ俗稱アリ、然レドモ銅鑛ハ煎煉スレバ銅ト爲リ、又此鉛石ヲ炭火ニ投ズルトキハ、硫黄ノ臭ヲ發シ燃テ青キ火焔起リ、悉ク灰ト爲リ、終ニハ漸々消ヘ失セテ、跡ニハ何モ殘ルコトナク、大ニ銅鑛ト異ナリ、金老皆、紅鉛、紫鉐、蜥蜴鉐ノ四種ハ、金山ニ多シ、銅山ニモ有リ、銅ニハ必ズ黄金ヲ含蓄スルガ故ナリ、然レドモ銅山ノ鉐ハ下品ナル者ナリ、又銀光鉐、早天鉐、蒼空鉐、青鉐ノ四種ハ、銀山ニ多シ、銅ニモ又是ヲ吹キ

出ス。銅ニハ銀ヲ含ムコトモ多ケレバ也。又黄色ニシテ白光アルヲ、黄鉑トモ孫子鉑トモ云。鬼雲鉑ハ黄鉑ノ質ニ自然ニ鬼雲ノ如キ紋理アリテ、破リテモ其紋アル者ナリ。暗闇鉑ハソノ色黎暗シテ光アリ。此三種ハ銅山ニ多シ。然レドモ銅山ハ銅鉑ニ種々ノ異形異色アルガ如ク、鉑石モ種々ノ異色ヲ混淆スルコトアリ。又白色鉑、蒼鷹鉑、早天鉑、淡青鉑等ハ鉛山ニ多シ。鉛ニモ又銀ヲ含ムガ為ナリ。又黒鉑ハ暗闇鉑ノ色濃者ナリ。錫山ニ生ズ。錫山ニハ淡青色、早天色等ノ鉑ヲモ生ズルコトアリ。圖ヲ校合シテ能ク其色ヲ見習フベシ。

凡山相家ニ於テ、一子相傳ノ大事トスル所ノ三ケノ秘訣アリ。此秘訣ヲ知ル者ハ、一タビ金山ノ相ヲ鑒定スレバ、則チ其金ヲ藏有スルノ多少ト、在ル處ノ高低ト、土石ノ深淺トノ三要ヲ暗算シテ、豫メ皆前知スルヲ以テ、其金山ニ從事スルノ利害損益ヲ明ニスルガ故ニ、開坑ノ業得テ與スベシ。若シ夫レ三要ヲ前知スルノ秘訣ヲ得ザル者ハ、山ニ金アルコト迄ハ能ク察シ得タリト雖モ、三要ノ前算ニ暗キヲ以テ、茫乎トシテ手ヲ出スコトモナラザル者ナリ。故ニ無妄ニ金山ヲ開テ、大ニ財用ヲ損失スルモノ往々ニコレ有リ。

三箇ノ秘訣トハ、一ハ金山ノ相ヲ觀テ、即チ其山ニ藏有スル諸金ノ多少ヲ前知ス、二ハ其山ノ相ヲ審ニシテ、諸金有ル所ノ高下ヲ前知ス、三ハ其金ニ掘リ著ル迄ノ土石ノ淺深ヲ前知ス、此三事ハ皆山外ヨリ相シテ、山ノ土石中ニ在ル諸金多少ト、高下ト淺深トヲ豫メ皆暗算シテ、前知スルノ法ナルヲ以テ、金山ノ業ニ於テハ極テ大切ナル事也。故ニ此ヲ山相ノ三要ト名ク。

諸金含有ノ多少ヲ前知スルニハ、各其山ノ鉑石ヲ撿シ、此ヲ量レバ即チ知ル。其秘訣ヲ、四贏三持、二闕一亡ト云。又其在處ノ高低ヲ前知スルニハ、各其山ノ兀地ヲ撿シ、此ヲ量レバ即チ知ル。其秘訣ヲバ上十下一、下十上一ト云フ。又其金ノ在ル處ニ掘リ著ル迄ノ淺深ヲ前知スルニハ、各其山ノ岩石ニ附タル碧苔ヲ採テ、此ヲ量レバ即チ知ル。其秘訣ヲ寸チ内分億外ト云フ。是レ皆一子相

傳ノ秘訣ナリ、

鉐石ハ此ヲ燒ケバ消ヘ失ル者ナリ、故ニ此ヲ燒ニモ深秘アリ、四嬴三持二闕一亡ト云フハ皆隱語ナリ、又兀地トハ草木ノ生ゼザル土地ヲ云フ、凡ソ石山ノ上ニ草木ヲ生ズルコト能ハザルヲ上渴ト名ク、卽チ上禿ナリ、又頂上ニ草木茂リテ下ノ禿地ナル石山ヲ下渴ト名ク、又上下共ニ樹木茂リ、中ノ禿地ナルヲ中渴ト云フ、此ニモ一面渴、二面渴、三面渴、四面渴等ノ十二相アリ、然レドモ畢竟ハ樹木繁榮スル山ハ水氣多ク、禿山ニハ水ノ少キコト論ナキナリ、今ニ禿地ヲ量テ、諸金藏處ノ高下ヲ知ルニ、上十下一、下十上一ト云フモ又隱語ナリ、岩石ニハヨク碧色ノ苔ノ着モノナリ、此ヲ採テ諸金ノ在ル處ニ掘リ着ル迄ノ淺サ深サヲ量ルニ、卽チ内分德外ト云フモ、亦皆隱語ナリ、凡ソ隱語ハ必ズ口授スベキ秘訣ナルヲ以テ、其解ハ茲ニ記セザルナリ、又諸金各色ノ鉐石、及ビ山ノ上渴下渴等ノ趣キ、其形其色ハ圖ニ詳ナルヲ以テ互考シテ略記スベシ、

凡ソ金坑銀場ニ事アラントスル者ハ、先ヅ上ニ記シタル諸訴ヲ審カニシテ、而シテ後ニ山鑛各爐ヲ鑿テ以テ國家ヲ富實スベシ、山相ノ奧儀ヲモ講究セズシテ、疎放ニ事ニ從テ破產ノ患ヲ招クコトナカレ、

〔見聞雜記三十四〕佐州相川金銀山立テ合の名　薄身南方の事　立テ合五枚但壹篇の事を壹枚と云

大薄身　本立テ合　唐島　七枚棚　白かね立テ合

中山通リ立テ合七枚

黑物　本立テ合　寺澤　猿松　ねは立テ合　なみ介　厚身黑物

厚身北方の事立テ合九枚

松木　樋屋　與市　嘉左衞門　勘兵衞　與四郎　淺右衞門　逢合　虎の皮

右之立ヶ合東西へ引渡り、古來ヶ諸山にて大盛穿候、此備りを考へ、立ヶ合迫、或は横貫に、間切立始め候、此所を間歩口共、釜の口共云、次第に穿入候て、鋪に切當相稼候處を敷と云、依之金銀山の總名を間歩と唱、或は青盤間歩、甚五間歩杯と云、其間歩の敷所も場所をわけ、是又清吉敷、或は岡平敷杯と名目をかへ、鋪穿出し候、山師と云は右間歩一體を預り差配いたし候者ゆへ、已前は山主と云、かなこと云は、間歩の内前段の通り字をわけ、何敷東西何丈何尺は誰稼所と定め、是を敷領分と唱ふ、一鋪分と云は、大概壹丈八尺、二丈三尺、致敷稼候者故一敷の主也、

〔鑛山口傳書〕口傳書〇中略

尾去澤銅山之内

田郡澤　　元山澤

一片肉薄山の片硃山といふ、一肉薄山の曾硃山と云、　赤澤　　小赤澤　　鹿澤

一肉厚山と云、一片硃山と云、一曾硃山と云、　永坂　　西道并寄山

一肉厚山と云、一肉厚山と云、右ニ準じ見樣心得可有事、

〔鑛山口傳書〕口傳書

肉厚山

一肉厚山は体に而、金鉒㶱勢盛也、別面大体み入鉒㶱大に盛也、

肉薄山

一肉薄山は、前後突替シテ、鉒㶱盛也、

普㶱山

一鉒㶱顯テ、雜石館定り顯たる山に有、圖にて鉒㶱勢盛なるか、裏は有所は見ゆる、前後左右鉒㶱、山の大小に寄て見樣口傳、

肉厚山

鉒摧山の大休み走ニテ勢盛也、平休みて盛なるも有、山の嶺に入、鉒摧亂テ柴鉒摧トナル事有嶺に入、澤切に落テ鉒摧不足ト云、

肉厚片狹山

山大イニシテ、前年肉無ニ脫タル山ハ実落、其前平狹たる事有、山如斯なる山は後肉有て大成と雖モ、前平計ニテ川上川下埏山ゟ館鈹リニ而、鉒摧前平実卸計勢盛也、後山大成とも頼母しからずといふ、

前後皆狹山

山登りも鉒摧勢盛にして顯有山は、鉒摧行向に澤有、切れ深きは屛風となりて、鉒摧山川上下磐石ニ消る也、川上山厚身ニ入鉒摧盛也、

山澤形ニ片狹山

山大成とも前平にし、片狹山は鉒摧ともに澤形に通たるは、大割は鉒摧にて前平にて勢見能、川に入ては鉒摧細く成、或は柴鉒摧下成事多く有、是を澤渡り大割と云、都而如斯山不宜、

山大にして前平中山に計鉒摧有、跡先澤切て通したる鉒摧は、裏表貫通館と云、

一前平中山狹て見能き山にて、鉒摧も中山にて勢盛也、山川上に入切柴鉒摧にては、川下の澤埏山と成頼母しからず、

皆狹山埏山轉館、或は岩山中山に顯れて鉒摧有山、

一山皆はげにて埏山多き山に岩山中山にあり、鉒摧通有を鞍掛館と云秘傳第一也、

鉒摧勢盛にして大に吉鉒摧通は岩山分り、埏山の所は館頭計にて鉒摧通不分、都而如斯山は柴鉒摧たて多く盛山也、岩山とては鉒摧定て盛也、見様口傳、

右肉厚山、肉薄山、皆砕片砕山、岩山の砕山に寄、金勢盛なる所、見分候事口傳也と云、前分之傳不知して、金銀銅鉛山見立る力なく、依而口傳第一に心得知る時は、其違迹なく見立る也、一子相傳にして秘貧理と云、

金銀銅鉛山東西南北に鉱脈通、善悪見様の事、

一西脊負東を抱き、北高ケ南跡に見る山、登体に入て鉱脈盛也、西を抱き東を脊負、北高く南に澤の深き有は、登と鉱脈盛也、行向深き澤切有は屏風舗となりて、山川上にて下盤ニ鉱脈それて盛也、

一北を抱き南を脊負て西高く東澤へ走り来〻ハ、平休み落雁金舗とも云なり、岩砕山にて鉱盛定り盛成山なり、見様第一口傳有、

一東高く北高く南切定りたる平山は、鉱脈南を脊負、北を抱き、平澤僅に通たるは、澤突落舗にて盛也、此西平山落突落畳枚舗は末頼母しからすと云、東を抱き西を脊負、北高く南澤深く切たる山、鉱脈的落落し多く有金盛成は、山堅に鉱脈定ると云、

一東高く北高く西澤深く走りたる山、鉱脈西を脊負、東を抱きて能山也、平落にて盛たると云、

一西高く南高く北低く片走にして脱たる山、東深く澤切多して休み鉱脈盛也、嶺に入て細るなり裏有休走り吉と云、

一肉厚山、肉薄山、皆脱山砕山にても鉱脈山を真直に通ては、例山に而も不宜、皆大割の鉱脈にて頼母しからずといふ、見様口傳、

〔金銀山取扱一件〕總じて金銀山有之所の様子は、山高く峰組にして、立合東西に引渡り用水有之所を能山所と云、谷川流れの末などに鑓石有之候鑓をば金銀銅も有之、右を云、斯のごとき水上には必金銀山有之候、平山に立合有之所は、谷浅く候故浅きものにて、深く穿下り候得ば、無

程水敷に成候而、水切貫候所無之、能所とは難申候、

一立合と云は、何れの岩山の中にも白き筋の引渡りたる事を云、東西江引渡りたるを、當國銀山の根元の立合と云、凡二十壹筋あり、立合の名末に記す、右の外南北江引渡り、或は馳割れて白き筋引渡り有之、是は鏈有之候而も、長く不續ものに定メ置候、土山の中にも金銀のねば(ヘナ土ノ事)立合出候事有之、此ねばに金銀有之候を、ねば鏈と云、古來より大盛致し候事幾度も有之候、右立合の備りを相考へ、東西より穿候を立合追と云、南北より穿候を横貫と云、涌上りと云は、草際より立合引渡り、鏈石見へ候を云、總じて立合無之山所には、金銀銅ともに鏈石は無之候、畢竟立合白石は鏈之道しるべに候、併白石巾貳寸三寸有之をば立合とは申がたく候、

一常の岩山を總じて盤と唱へ、其内青盤とて、山色品之名の替り有之、此青盤の内へ立合引渡候、銀山功者と云は、右青盤の目利肝要之よし古來より申傳候、

青盤の名大概如左

中石青盤　猿つら青盤　餅草青盤　ろ色青盤　肌青盤　黒ばろ　燒盤　とや青盤　須灰盤　皮鏡盤　星青盤(そばと云)　皮くさ青盤　貝空盤

一吹破風穴石間とて、立合の内穿通り候、内五寸壹尺、或は四尺五尺程の空出候、是を吹破と云、其所は必地堅く、金銀氣強く、地山を吹破候哉、此吹破出候跡にて、盛を得候事古來ゟ度々有之候、吹破之内には水晶石有之、風穴と云は吹破の小きを云、到而小きには鼠風穴と云、石間とは、立合の内にも盤の内にも、一ト片宛肌有之、是をへたと云、ケ樣の所は水を溜メ候得ば自然と吸取候、又地山を扣き候得ば鏈音な近く聞へ候、是を石間と云、○下略

〔鑛山口傳書〕南來秘傳

一東ゟ西江嶺走り、山南を間切れば、山一體、平品と云、金無來、是秘傳也、

一世に柔晶と云事、金銀銅鉛山見る時、平晶と云事は、山の大庭を云也、金無山と云事不成、日の本に、金銀銅鉛山多く有に、實無山と云事俗言也、依而柔晶と云事、柔晶と云て金の鉒掘通しても、金無山故に、柔晶と名付たりといふ、南を開切山に限り、横走り長くして、開切る也、總而南には磁石多有外に金少し、依而磁石を南に向を北に向るといふ事にして、日本にて超過ス、南に多き金故に陽山に鑛北の方に頭向る也、多くは磁石尻の方に帰付たる磁石故に南に向き生る也、右陽之方ゟ陰の方へ来り、日本にて重寶ス、是を皆世に傳て同様にて南に當りては皆崩れ和らかなる石也、

元山にては夏山牛頭天王社根後道ゟ横拜、観音堂の後下澤新切鋪口迄、釜山の大柔晶なり、鉱谷數新切鋪には川下向の鉒通り有之とも宜數場無之、昔ゟ切所は今に無之といふ、

一元山は青柳三人組、古數平より、野澤鋪口丹波澤落合迄、前平延山の館臺りと云山也、胡麻母衣實切無也、

一元山湯上り、館畑前通ゟ化物石鍋山古鋪澤流に限り、一體延山と見得たり、奥深き所に無之山也、

一元山石疊ゟ厚山、昔角力取場通、大本數米藏前通り迄、死山と見得たり、依之鉒通皆金藏鉒ェ落入候事に見得たり、

一西道番刀屋敷より笹小屋庵の落合迄延山にて死山と見得たり、

一赤澤水晶木林前通大澤古鋪口の上嶺走より、道雛澤水抜大切敷ェ落合迄の山大柔晶と云山也、延山胡麻母衣石也、鉒の通らぬ山と云、

一小赤澤獅子堂上り口鳥居、當時の大平の本番役所の上道ゟ、床屋向道長根春木澤嶺笹小屋稲荷堂落合迄、皆柔晶にて鑛通りなき山と見得たり、右柔晶と云山には、金鉒掘通りても前平計

勢ありて鏈の通り候事多し、土底に入勢害ひ、體矢の行向なき事多く有て、見立山には朱晶見る事第一口傳とす、

一金銀銅鉛山は、東を受て北を指て居る、山は金銀銅鉛山何れも生の足き金とす、西北に請て有金銀銅鉛山は何れも不足と可知事、

一山は陰にして陽を請たるは吉とす、陽にして陰を受たるが凶とす、

一春は館頭、秋は金の有所見樣第一口傳

一金の有所落の體圖を能く見定候事

一金の裏ひ有體圖を見定る事

一山の堅品有體圖見定る事

一石前合せたるを見定る事

一水の有所見を定る事

　銀ヶ金を絞る事

一銀を松葉灰の上にトカシ、ヨク湯ニ成候節、女檜木を以て湯をかき廻し、ホドヨキ節水を打行にしてへぎ候得ば、跡へ金は殘るも、

右金ㇾ古銅脚入候得者、上金と成候、右加減口傳有、

〔山相秘錄上〕總論第一

第三ノ寶貨ナル金類ト稱スル者ハ、卽チ金、銀、銅、鉛、鐵、錫、水銀ノ七種ニテ、此書ノ主トシテ論ズル所ナリ、〇中略今此書ニ精究スル處ハ、七金ヲ含有スル山ノ山相ヲ鑑定シテ、金カ、銀カ、或ハ銅カ、鉛カヲ知リ、且ツ其諸金ノ中ニ於テ、何レノ金ニテモ、其山ニ藏有スル多少ヨリ、藏處ノ、上下深淺マデヲ、山外ヨリ觀察シテ、悉ク前知スルノ術アル、神傳ノ秘訣アル者ニアラザレバ、焉ンゾ能ク此

域ニ入ルコトヲ得ン哉、故ニ山相ノ學ハ、古來其名ノミ有テ、其法ノ傳ラザルコト久シ、不昧軒翁少年ノ時ヨリ、此學ニ志スコト極テ篤ク、諸國ノ坑場ヲ遊歷シテ、辛苦數十年、神魂ヲ山嶽ニ飛シテ、寢食ヲ忘ルヽニ至ル、古語ニモ云ヘルガ如ク、此ヲ思ヒ此ヲ思テ止ザレバ、神明コレニ通ズルノ妙ニテ、遂ニ異人ニ遇テ秘訣ヲ受ルコト有テ、始テ山相ノ學ヲ開基シ、玄明窩翁ニ授タ、玄明窩翁モマタ其志ヲ繼テ、益々此ヲ精究セリ、於是乎開坑ノ業、以テ國土ノ利益ヲ興スニ至レリ、出羽國阿仁銅山、及ビ院內銀山ノ繁昌スルモ、佐渡金山ノ起リシモ、予ガ祖父ノ功多カラズトセズ、今是ヨリ後ニ高ク書シタルハ、即チ祖父不昧軒翁ノ語ニシテ、一字低ニ書シタルハ、即チ先考玄明窩翁ノ語ナリ、讀者熟讀互考シテ山相ノ自然ヲ理會スベシ、此ヨリ前ハ信淵ガ論ナリ

凡ソ山相ヲ觀ルニハ、必ズ其山ノ太祖ヲ正南ニ當テ、正北ノ方ヨリ相スルコト、古ヨリノ定法ナリ、月ハ五六七ヲ上トシ、日ハ雨ノ新ニ晴タルヲ上トシ、時ハ巳ヨリ未ノ間ヲ上トス、暑中雨ノ新ニ晴タルトキニ南山ヲ遠望スレバ、雲消シ霧滅シテ、諸峯ノ顏色、宿酒ノ頓ニ醒タルガ如キ者ナリ、是ノトキニ當テ、太祖大宗ヨリ兒孫マデノ層巒ヲ熟觀スルニ、青翠ノ中ニ別ニ霞光瑞靄ヲ發シテ、鮮明他ニ異ナル所ナルハ、即チ諸金含有ノ山相ナリ、此ヲ最初遠見ノ法ト名ク、

○中

最初遠見法ヲ行テ、靈光瑞靄ノ發スルヲ審定得ルコト有ラバ、ヨク其層巒ノ重複ヲ熟觀シテ、審ニ此峯叢樹タルノ表的ヲ諳記スベシ、而後ニ夜中ニ復幾度モ其表的ヲ著タル所ヲ窺ニ、其山ニ含有スル諸金ヨリ蒸發スル精氣ヲ望見ヲ、金ナルカ銀ナルカ、或ハ銅鉛錫等ナルカヲ觀定ムベシ、

此ヲ中夜望氣ノ法ト名ク、

此中夜望氣法ヲ行フモ、外山ノ足ヲ距離スルコト二十町ニ過ベカラズ、

凡中夜望氣ノ法ヲ行フニハ、五月ヨリ八月迄ノ間ニ宜シ、諸金精氣ノ出現スルハ、大抵夜半子ノ

時ナル者ナリ、月ノナキ能ク晴タル夜ヲ撰ブベシ、月ノ明カナル夜ハ、出現シテモ甚ダ見得ガタキ者ナリ、且ツ又北風ノ吹ク夜カ、或ハ山岳ノ上中ニ故障アリテ、蒸發セザル夜モ有ル者ナリ、故ニ幾度モ此ヲ伺フコト有リ、

此法ノ五月ヨリ八月迄ノ間ヲ宜シトスルコトハ、二月頃迄ハ山ハ寒キガ故ニ、金精ノ蒸發スルコト稀ナリ、且又霜根引タコト有リ、又九月頃ヨリ霜雪降ルノ山寒キガ故ニ、未精氣ヲ發出スルコトナキヲ以ナリ、又月ノナキ夜トハ、毎月朔日ヨリ六日ノ夜迄ト、二十五日ヨリ晦日迄ノ夜ハ、夜半子ノ時ニハ月ノ必ズナキ夜ナリ、蓋シ夜半子ノ時ニハ日輪ハ大地ノ正下ニ在リテ、大地ノ下面ヨリ熱炙スルヲ以テ、土中自然ニ熱拂ス、故ニ山中含藏ノ諸金、其熱沸ノ醸化ニ因テ、各々其色ノ精氣ヲ蒸發シテ、此ヲ地上ニ出現シ、以テ人世ニ其徴シヲ示ス、此等ノ事ヲ推究シテモ、天地ノ洪恩ヲ欣戴スベシ、

凡山中含藏ノ諸金、其精氣ヲ蒸發スルニ、各々定レル形色アリテ、甚ダ著明ノモノナリ、金精ハ華ノ如ク、銀精ハ龍ノ如ク、銅精ハ虹ノ如ク、鉛精ハ煙ノ如ク、錫精ハ霧ノ如シ、金銀銅ノ精ハ高ク升ルモノハ二十丈上ヘ出デ、鉛精ハ風ニ順ヒ、錫ノ精ハ風ニ逆フ、卽チ是レ諸金蒸發ノ精氣、各自ノ形色ニシテ、古來山相家一子相傳ノ秘法ナリ、

〔鑛山閑書〕一諸山見分するとき心得べき事

先其山に行て、山の居樣を見るに、朝日に當り、かた日當り歟、澤の切れ、山の厚身、峯の續き、能見るべし、扨木炭の寄方、竹の寄方を考見るべし、朝日當りは金山銅山に吉、夕日當りは銀山鉛山に吉、扨亦澤平らの兩平より、峯續出たる山、左前右前迚、合有もの也、右前合ハ吉、左前合たる山ハ末遂ることなし、

一其山の澤口に休み、川石を心付て見るべし、決て其山中の砒の通り、何石にても、何の山色有と

云こと知るもの也、金有ても、石に寄て僅かの山有物也、又川岸を掛樋にて掛て見るべし、銅山ハ石色赤ふけ、青石、田土かびらけ、礬石、是等ハ大敵にて寄も有物也、硯ごまはろみかけ、死石、粕石、鐵鋼銀石、是等之石、山色有ても渡世に合ぬ物也、鉛山ハ、硯粕石も育大略右に准じ知るべき也、青地は少合のなきもの也、赤ふけは寄も大きく、知合吉、

一古鏈見分する樣ハ第一昔鏈たる跡を能く心を付見るべし、何石にては途切に當り、何石にてハ、直りに當り掘たるか、又寄身に寄有歟、厚身に寄有歟、鏈の折目にて掘たる歟、鏈目に金を持たる歟、巨細に心を付て、以前掘たる跡を念入て見るときハ、其山の普請所、根合草木歟、切所取明け、共に早く心付物也、然るときハ無用の切山費なき物也、是ハ其山の鏈體と云物也、是を不知ときは、不少損失あるもの也、

一鏈居る山にても平生敵の道、何れの峯より何れの峯え通り、何れの澤の敵、何の長根を越て何所の澤に落たると、常て敵の通りを細かに知りて、是を心付、平生四山の度毎に見るべし、春ハ其敵通り雪早く消て草生早し、何金にても、直りの有所へ、必草早く青む、是金生水の成す所歟、水生木の理有歟、夏ハ朝霞其所より早且に立物也、秋ハ草木の葉早く黄ばむ、枯るゝも早し、雨晴には此所より霧立始る物也、冬ハ雪に欠明きて、其所が透消て雪薄し、入梅頃ハ、至て霧深消難し、草木の色も他の所と異なり、必金を貯ふる所と心を付て引割見るべし、予○本書著者若年の頃トツコ三右衛門と云金堀の名人の云し事を聞て、度々利を得たり、此三右衛門と云ハ、山の高みに登、四五日も其所に居て、春夏秋冬の造花を篤と樣して、其所に引割を付て金掘たるなり、

一山師山方第一心掛べき事、敵押籠入共に朝夕其山の踏出し山畫峯嶺し等の堅かり能々心を付て、何ことより切時ハ何取の鏈目に掛り、堅かり有、何より切ときハ、構に入の境を工夫して、

切山釜の口を付べし、立入百間にて入る所、堅かりを除き百五十間にて釜の口付ても、百間切より早砒に入所有、入用も減るもの也、砒押百間にて落に入所五十間の立入、早速館入切るハ、大に誤り也、百間の砒押ハ、石の欄にて、其上砒押の内には大小落し有物也、昔百年以前迄ハ、館入たる山はなし、寛文二年、大坂より館入始る、唯砒追のみ切たる也、其後水抜烟抜合などの為に立入を切たる也、

一横敷の切山と云こと有、是は釣たる砒の内根合に落し有とき、厚身に釣ときは、上磐に大端に入、砒に添て卸也、五丈にても十丈にても、卸とめにて、砒に入ように釣を考て、切入る也、水有時は、樋の心持、蛇腹の心を以可切ものなり、

附銅山は休み落しなし、張目に落し有、大休有故、決して落有と云、皆誤りなり、張目折目を心付べし、

〔山相秘録上〕金山第二

凡ソ黄金ヲ多ク含有スルノ山ハ、大半下渇レノ相ニシテ、處々ニ黎色カ暗灰色ノ婦様石アリテ、此ヲ破レバ中ニ紫紺色ノ細カナル斑點ヲ為シ、且ヲ金色、紫色、紅色、蛇蝎色等ノ飾石アル者、キタ又其山下ノ渓川ニ、必ズ金精銀精ノ石有テ、其水極テ清潔ニシテ、其味少シク辛キガ如キ者ナリ、若シ此諸徴ヲ備ルコト有ラバ、其渓川ノ瀬ノ最急流ノ處ノ、水底ノ土泥ヲ採テ陶汰シテ視ニ、必ズ金砂ナルベシ、若シ渓川ノ底ニ金砂アラバ、假令諸徴備ハラズト雖モ、能ク其水浮ノ深山幽谷ヲ探索スベシ、或ハ純金ノ塊ヲ為シタル者ヲ得ルコトナリ、

金精石、銀精石ノ形狀ハ、圖ノ巻ニ詳カナリ、砂金ヲ採ルニハ、席筵ノ類トモ抄ニ取ベシ、凡ソ黄金ノ有ル山ハ、太抵下渇レノ相ニ多シト言傳ルコトナレドモ、上ハ渇シ、中渇ノ山ニモ頗ル金ノ多キ處アリ、然レドモ下渇ノ相ノ山ニアラザレバ、水泉ニ湧ルコト多クシテ、鑛ヲ鑿採ルニ、

鑛脈ナルコト有ルヲ以テ、諸金山皆共ニ下濁ノ相ヲ第一トスルコトナリ、

黄金ノ自然ニ塊ヲ爲シタルニ、種々異形アリ、其形ノ竹筍ノ如クナルヲ天生牙ト名ク、或ハ氷柱ノ如ク、或ハ碁子ノ如クナルヲ黄牙ト名ク、或ハ圓クシテ佛掌藷ノ如ク、或ハ土芝ノ如クナルニ、狗頭金、馬蹄金、橄欖金等ノ名アリ、又其零餘子ノ如ク、或ハ蠶豆ノ如クナルモ、蠶豆金、豆粒金等ノ名アリ、總テ此ヲ印子ト呼ブ、上品ナリ、又此ヨリ以下細粒ナル者ニ、麻子金、瓜子金等ノ名アリ、其極細ナル者ニ、麩金、麪沙金、糖金等ノ名アリ、總テ此ヲ砂金ト呼ブ、次品ナリ、

黄金ノ自然ニ凝塊シタル黄牙アルモノ、先年和州吉野ノ金峯山ヨリ出タリ、又狗頭、馬蹄、豆粒等諸金ハ、出羽國雄勝ノ松岡山ヨリ出タリ、凡ソ溪川ノ水底ニ砂金アル處アラバ、精ク其水源ヲ探索スベシ、務テ天工ヲ毀磨スルコト勿レ、又皇國ノ俗ニ印子ト云フハ、極上品ナル黄金ノコトニテ、漢土通用ノ印子金トハ同名ニテ異物ナリ、漢土ノ印子金ト云フモノハ、長サ二寸餘幅一寸餘ニテ、其形圓ニシテ楕ノ饅頭ノ如キ者ナリ、重サハ五十錢目ト百錢目ノ二品アリ、此印子ニハ類ル他物ノ雜リタル金ニテ、色ハ美ナレドモ純金ニ非ルナリ、

〔鑛山聞書〕金山之山色之事

一光り付　一桔梗　一更付　一ざゝ砒石　一青地付　一羽柄　一硯盤　一鳥の子　一宗

一鬱塲　一鐵羽色　一石喰　一石金付　一硝土砒石　一腐砒石

きおうとて、金に似たる掛砂あり、吹て見れば金なし、掛かゝにつばきを入れて掛れば、浮て流るゝなりといふてんと云もあり、同じ心也、

〔山相秘錄上〕鑛山第三

凡ソ鑛山ヲ開發スルモ、上ノ總論、及ビ金山ノ條下ニ說ルガ如ク、先ブ山相ノ法ヲ以テ、審ニ鑛ヲ含藏スルヤ否ノ徵ヲ鑒定シ、而シテ後ニ、尙其內實前知ノ秘訣ニ因ルニ、礪石ノ灰ノ秤量已ニ應

ジ、且其山ノ禿地モ順ニ碧苔ノ根モ宜キヲ得バ、信ニ大福ノ山ナリト知ベシ、乃チ探索シテ銀礦ヲ掘採ベシ、○中略

銀礦モ、他物ノ氣ヲ混淆シテ種々異色多シ、然レドモ銀ヲ含有スル山ノ軟岩硬岩ヲ探テ、地ヲ破テ見ルニ、中ニ黑色ノ細砂ヲ混淆スルコト胡麻鹽ノ如クニシテ、日ニ映ズレバ、其細砂ノ點悉ク白キ光リ有ル者、卽チ是レ銀礦ナリ、

銀礦、所謂ル鉼石ニ、他物ノ氣混合シテ、種々ノ異色アリトハ、礦ニ礬石ノ氣ヲ混ズレバ、淡黑色ニ微シク赤ヲ帶ビ、或ハ淡紫黑モアリ、又硫黃ノ氣ヲ混ズレバ、淡灰色ニ微シ青ヲ帶ビ、鐵ヲ混ジタルハ、灰白色ニ微シ黃ヲ帶ビ、鉛ヲ混ズレバ、黯灰色ニ微シ青キヲ帶ブ、然レドモ其淡黑細砂ノ斑點多ク、其斑點日ニ映ズレバ白キ光リヲ發スルコトハ、何レモ皆同樣ナリ、扨其諸種ノ中ニ於テ、淡灰色ニ微青ヲ帶タルヲ冬瓜苗ト云ヒ、灰白色ニ微黃ヲ帶タル、瞎苗ト云ヒ、黯灰色ニ黑斑色帶タルヲ胡麻ノ鹽苗ト云ヒ、淡紫黑ノ色ナルヲ桔梗苗ト云フ、胡麻鹽苗ト瞎苗ハ出羽、奥州、越後等ニ多ク、桔梗苗冬瓜苗ハ石見、安藝、周防、長門等ニアリ、

〔鑛山聞書〕鑛山之山色　凡二百餘品有と云

一粘目　一鵜ノ目やに　一黃爐粕　一巻どふし　一堅氣　一羽売砒石　一留粕　一綠青透

一濱レやに　一小白目　一にすみ　一鳥の返し　一ふけ透　一黃土光　一茶の葉　一茶なのは　一べにがら　一似タリのり目　一六方　一朱石　一山鍰　一道明地　一雲母　一綠青茶の葉　一のし目　一紺青羽色　一牙砒石　一しかみ雲母　一鐵のりめ　一鉼子銀

一鐺はた　一とりけ茶ノ葉　一針金どふし　一鳥の子　一さい白目　一小さいの目　一鼠白子　一末粉銀　一丹から　一黑柿　一赤柿　一玉子ねば　一返り銀　一返り茶の葉　一血綿　一黑物　一桔梗　一透りやに　一黑羽色　一血石　一眞鉛銀　一丸銅至　一白鉛

一白穂　一赤穂　一あい白穂　一紋面

〔山相秘録〕銅山第四

銅山ヲ相スルノ法ハ、大抵上ノ總論篇ノ中ニ說タルガ如シ、且銅ヲ含有スル山ニハ、諸青ヲ蒸發スルノミナラズ、種々異形異色ナル自然銅、及ビ鉐石、金牙石、蛇含石等ヲ生ジ、此數種ノ諸石ハ、何モ皆能ク銅礦ニ似テ見分ガタキ者也、然レドモ此ノ數種ノ諸石アル山ハ、必ズ銅有ルコトハ疑ナシ、

自然銅ハ銅アル山ニハ必ズ生ズル者ニテ、此ヲ銅苗ト云ンモ可也、此物ニ異形凡ソ七種アリ、其一ハ四角六面ニシテ雙六ノ骰子ノ如ク、大ナル者ハ一二尺ニ至ル、此ヲ破ハ悉ク四角六面ノ小塊ニ崩レ、何程細カニ砕ケテモ皆方形トナル、此ヲ方解石樣ノ自然銅ト云フ、其二ハ圓タレテ蘿蔔根ノ如ク頗ル大ナル者アリ、此ヲ破バ其外殼剝ゲ、其中ハ亦圓形ニシテ幾重剝テモ其中實ハ圓レ、此ヲ蘿蔔樣ノ自然銅ト云フ、其三ハ方形ナレ共、先尖リ錐先キノ如ク、亦將碁ノ駒ニ似タリ、大小齊シカラズ、此ヲ碁子樣ノ自然銅ト云フ、其四ハ細長クシテ針金ノ如シ、此ヲ鍼銅絲樣ノ自然銅ト云フ、其五ハ長キ條ノ如クナレドモ、頗ル太クシテ繩ヲ結ヒタルニ似タリ、此ヲ結繩樣ノ自然銅ト云フ、其六ハ其形圓キモ有リ、稍圓ナルモ有テ、大ナルハ蠶豆ノ如ク、小ナルハ麻ノ子ノ如ク、破レバ砕ケテ細砂ト爲テ、其中ニ實ハ圓キモアラズ、此ヲ零餘子樣ノ自然銅ト云フ、其七ハ圓キコト紫芋ノ如ニシテ、圓キ枝根多シ、全ク生姜ノ根ニ似タリ、故ニ此ヲ生姜樣ノ自然銅ト云、其色モ異ナルモノ六種アリ、銀色、鍮鍮色、赤色、黑色、鐵色、紫色是也、鉐石ニモ銅礦ニモ、皆此ノ七形六色有リ、又碁子樣ニハ或ハ金牙石アリ、零餘子樣ニハ蛇含石モ有ル者、然レドモ銅礦ハ風筛ニ掛トキハ銅ト爲リ、他物ハ銅アルコトナシ、此一形六色ノコトハ圖巻ニ詳ナリ、

凡ソ銅山ハ石山モ有ドモ、大抵ハ土ト石ト錯雜リタル山多キ者也、故ニ此ヲ堅リ採ノニハ、銀山坑ノ如ク、檣木ヲ立テ梁棟ヲ載テ、鳥居ノ樣ニ坑中ニ組立テ、普請ヲ丈夫ニセザレバ必崩ル者也、脊崙ナル故事ヲ行テ禍ヲ受ルコト勿レ、銅山ヲ發撿スルハ、金山銀山ノ如ク、前撿ノ難キ者ニアラズ、凡ソ土石ニ諸青ヲ現ス處有ハ、皆銅ヲ含藏スル山也、譬バ諸青ヲ蒸發セルヲ見付ズトモ、岩石ノ間カ、或ハ溪川ノ中等ニ、爐樣石ノ銹石ノ箱ヲ現スコト有ヲ、其小ヲ探索シテ所謂ル自然銅ヲ見出スニ及テハ、無造作ニ銅鑛ヲ採得ラルヽ者ニテ、金銀ノ如ク深ク堀入ラズニ、山ヲ開ノ損益ハ知ラルヽ者アリ、深山幽谷ノ奥ニハ、石墨ノ如ニ銅鑛ノ有ル處多シ、唯是レ人ノ深索セザルヲ患ルノミ、

奥州南部ト、出羽ノ秋田郡トノ間ノ山奥、飛驒ト加賀トノ間ノ谷底、及ビ伊豫ノ立川ノ深谷、肥後ノ米良ト日向ノ縣領ノ界ナル山中ノ谷川等ニハ、往々ニ銅鑛ノ生姜根ノ形ナルモノ、石原ノ如クニ多ク現ジテ在ル處アリ、

凡ソ銅鑛ニハ七種ノ異形有リト雖モ、何レノ銅ノ山ニモ生姜根ノミ多キ者也、色ハ生姜根ニモ六色トモ皆有リ、此ヲ採テ鼓鞴テ銅ト爲レバ、必シモ金銀ノ鑛ノ如ク擣ヲ米ニシテ淘汰スルニモ及ズ、唯其土ヲ擇ビ去テ、爐ニ入テ鼓鞴トキハ、大抵皆銅ト爲テ、金銀ノ如クニ糟粕ノ多キ者ハ絶テナキコトナリ、且銅鑛ニ鉛ノ混ズル有リ、銀ノ混ズル有リ、或ハ黄金ノ混ズル者アリ、故ニ爐ノ種々ニ錬テ其諸種ト金ヲ分離ス、即チ是レ人力ヲ以テ天工ノ足ラザル所ヲ補フナリ、精究セズンバアル可カラズ、

銅鑛ニハ多少ハアレドモ、何レ鉛氣及ビ金銀ノ氣ヲ含有スル者ナリ、然レドモ皇國諸州ノ銅ニ鉛ヲ多ク混ズルハ稀ナリ、銀ヲ含蓄スルノ銅ハ甚タ多、故ニ外國ニテ日本銅ヲ貴ブコト世界ノ第一トス、日本銅ヲ得トキハ、則チ又此ノ爐ニ入テ煎煉シ、乃チ其零ル銀ヲトル、近來出羽

國阿仁山ヨリ出ル銅ヲ、彼ノ山ニ於テ南蠻鉑ニ煉テ銀ヲ絞リトリ、而シテ後ニ銅ヲ大坂ニ輸ス、大坂ノ銅局ニ於テ再ビ其銅ヲ鎔煉シ、又其銀ヲ搾リ取リ、而シテ此ヲ異國ニ出ス、異國人其銅ヲ得テ人此ヲ煉テ搾ル、銀ヲ採リ利ヲ得ルコト頗ル、大抵日本銅ノ銀ヲ多ク含ムコト、此ヲ以テ察スベキ也、

〔鑛山聞書〕銅山之山色

一のし目鉑　一鐵鉑　一皮鉑　一炎灰鉑　一綠青鉑　一茶鉑　一豆の粉鉑　一あみた鉑

一割羽鉑　一榎柄鉑　一桑の葉鉑　一川ちか鉑　一光鉑　一猿の尻鉑　一芋の子鉑　一紫鉑　一とかけ鉑　一夢のしめ　一春のし目　一銅至　一葉から鉑　一田土鉑　一留粕銅至

一粘目鉑　一かね付鉑

〔山相秘錄〕鐵山第五

鐵ハ諸金ノ中ニ於テ別ニ一種ノ異物ナリ、其子細ト云ハ、諸金ハ皆必ズ岩石ノ質中ニ含ンデ生ズ、皆必ズ其有所ノ岩石ニ精氣ヲ貫徹シテ、各々其種ノ鉑ヲ現ス者ナリ、然ルニ此鐵ハ土砂ノ中ニ混ジテ生ジテ、岩石中ニ生ゼザルヲ以テ、絶テ苗ヲ現スコトモ無シ、夜中ニ其精ヲ發出シテ人ニ其有ル所ヲ示ス等ノ事ナク、凡ソ鑛鉑黒紫青緑泥ヲ除クノ外ハ、何ノ土地ニモ必鐵砂ノ混リ有ル者也、即チ黒色、赤色、或ハ鐵色ニテモ磨テ、日ニ映ズレバ光ノ有モノ是ナリ、又其鐵砂ノ自然ニ石ノ如ク大塊ヲナシタル者アリ、此ヲ土錠鐵ト名ク、此ノ土錠鐵ハ頗ル大ナルモアル者ナリ、

土錠鐵ハ武州鐵入ニアリ、土錠鐵ハ其性頗ル玄石ニ近キ者ニテ、玄石ヨリハ少シク砕ケ難シ、玄石トハ慈石鐵ヲ吸ハザル者ヲ云フ、山海經及ビ管子等ニ、山上ニ赭アレバ其下必ズ鐵アリト云フ、必ズシモ然ラザル也、赭ノナキ處ニモ鐵ノ生ズルコト甚ダ多シ、然レ共鐵多ク凝結シ

タルハ、太抵赭色ナル者ナリ、其赭色土ノ下ニ鐵アルニ非ズシテ、赭色土ハ卽チ皆鐵ナリ、

凡ソ鐵ヲ採ルノ法ハ、土砂ヲ急流ノ水ニテ洗フニ、先ヅ一升ノ土ヲ陶法ノ鐵砂一勺ヲ得レバ土ノ場トスルコト也、故ニ土山ニ鐵砂多キ者有ハ、其山ヲ土ヲ洗テ鐵砂ヲ採ルニモ宜シ、山ヨリ鐵砂ヲ採ハ、洗フニ便利ニシテ、其鐵モ又上品ナリ、海濱ハ土砂ヲ洗フニ不便ナルヲ以テ、極テ鐵ノ多キニ非バ利益ニハ成ザル者也、且海濱ヨリ出ル鐵ハ、銹ヲ生ジ易クシテ其性モ亦下品也、

山ヨリ鐵砂ヲ採ルヲ便利ナルコトハ、凡ソ鐵砂ノ多キ山ノ麓ニ、濠ヲ堀出シテ急流ノ溪川ト爲シ、山ヨリ其溪川ヘ土ヲ崩シテ此ヲ洗フトキハ、土ハ皆急流ニ流出テ、鐵砂ハ水底ニ殘ル者ナリ、此ヲ採テ二三遍モ淘汰シ、筵蓙ニ入テ駄荷ニ造リ、此ヲ精錬ニ聚メ以テ鼓鞴ノ用ニ供フ、

又海濱ノ土砂ヨリ鐵ヲ採ルニハ、鐵砂ノ多キニ砂ノ流レ川ノアル處マデ持運テ、此ヲ洗フ事ナルヲ以テ、極テ鐵砂ノ多キ處ニ非レバ、雜費カヽリテ損多シ、又海濱ノ鐵ノ銹易キコトハ、鹽氣ヲ含ルコト多キ故也、

(山相秘錄下)錫山第七

錫山ノ相ハ上ニ論ジタル如ク、燐樸石ニモ其形ヲ現ス者アレドモ、皇國ノ中ニ亦タ此物ヲ蓄ニ出ス處ナシ、開物家ノ探索スベキノ布ナリ、然レドモ此錫ト云者ハ、諸金ノ出ル山中ニハ多少ハアレドモ何レノ處ニモ有ル者ナリ、且綠色、白色、黑色ノ石ニハ、皆必ズ錫ヲ含有ガ故ニ、右二色ノ沙ニテモ石ニテモ、少シノ透明ナルヲ採テ、烘爐ニ炭火ト生木楠ヲ和シテ鼓鞴ルトキハ、錫ヲ得ル者也、然レドモ此業ヲ興スト雖ドモ、國家ノ利益ト爲スベキ程ニ、多分ノ錫ハ出ルコト稀ナリ、故ニ錫ヲ多分ニ含ミタル鑛石ノ有ル處ヲ探索シテ、新ニ山ヲ開發スベシ、錫鑛ニモ種々ノ異色マジハリテ、石癖ノ有ルモ有リ、或ハ頗ル透明ナルガ如クニシテ、手ニ觸レバ油氣ノアルニ似タルハ殊ニ上品ナリ、此ノ上品ナル錫鑛ハ、野州仁田本村ニ在リ、此ノ仁田本村ニハ紫黑色ト綠黑

色ノ鑛モ赤多シ、又豐後日向ノ錫鑛ハ、其形柘榴ノ如クニシテ、黒色ニ淡青ヲ帶ブ、伊豫ノ西條鑛ハ、黒色ニシテ大塊ヲ爲ス、鳥海山、月山、及ビ阿蘇山、白山等ノ鑛ノ溪川ニ、往々錫ヲ含ミタル小石アリテ、小ナルハ綠豆ノ如ク、大ナルハ番瓜ノ如ク、其色淡藍ニシテ白條アリ、總テ大山ノ澗中ニハ、極上ナル錫鑛アル處多シ、能ク探索スル者アラバ、必ズ錫ノ極テ多キ處ナラン、

錫山ヲ開發スルニハ、山相家ニ於テ一箇ノ秘事有リ、茲ニ其大略ヲ論ズレバ、凡ソ錫ヲ產スル山有リト雖モ、其鑛ニ砒石ヲ含マザル鑛ナラバ、其山ヲ開ク共大ナル利益ハ決シテナキ者ナリ、砒石ノアル鑛ヲ試ルニハ、先ヅ堝ニ炭火ヲ熾ニ起シ、其上ニ鑛石ヲ投ジ炭ヲ加ヘ、又其上ニヨク覆タル蓋竈ヲ發セテ、火ノ消次第ニシテ捨置ベシ、翌日火ノ消タル時ニ、其蓋竈ノ燒タル灰ヲ熟視シ、灰中ニ粒點ノ如キ凝固シタル者アルハ、卽チ紅砒ナル者也、此紅砒ナル鑛ナレバ、錫石ヲ含有スルノ證ナリ、此ナキハ錫石モナキコト必セリ、

凡ソ錫ノ山高キ處ヨリ出ルヲ山錫ト云ヒ、溪川ノ中ヨリ出ルヲ水錫ト云フ、山錫ハ其光リ清ク、水錫ハ其光リ混濁シ易キヲ以、山錫ヲ上品トス、且又此ヲ爐ニ吹タル際アルヲ沙利ト名ク、純粹ノ錫ナリ、雜ナキ者ハ鉛ノ混ジタルナリ、凡ソ錫鑛ノ火塊ナルヲ錫爪ト云ヒ、彩碎ナルヲ錫砂ト云フ、此ヲ煎スルノ法ハ、大抵鉛ニ異ナルコトナシ、唯タ其炭火ニ生水楷ヲ錯ヘ加テ鼓鞴ヲ異トスルノミ、或ハ錫鑛モ其性ニ因テ極テ熔化シ難キ者アリ、其時ハ鉛少シ許リヲ上ヨリ投ズレバ、卽チヨク溶解スル者ナリ、開物ニ志アル者、務テ此物ヲ多ク出セヨ、

(山相秘錄下)鉛山第六

鉛ヲ含有スル山ハ氣シテ立コトハ、既ニ總論ニ述タリ、且爆樣石ノ形色モ圖ニ詳ニセリ、且又紡石ノ色モ其光リノ淺キ者ナリ、金銀及ビ銅ノ出ル山ニハ、其傍ラ必ズ鉛ヲ生ズル者ナリ、凡ソ鉛鑛銀礦ノ苗ヲ山上ニ出現スルガ如ク、現レテ見スルコト多シ、其苗ノ現レ出タル處ヨリ、漸々堀

テ前進スルコトハ、銀山ヲ堀リ銀礎ヲ振ル法ニ異ナルコト有ルコトナシ、然レドモ銀山ヲ堀ル如ク、深ク遠ク堀ルニモ及バズ、鉛鑛ハ繁多ナル者也、其大ナルハ板石ノ如クニ鈍鉛ヲ出スコト有リ、或ハ大豆ノ如キ有リ、裙帯豆ノ如ク長キモノ有リ、或ハ碁石ノ如キ有リ、竹ノ根ノ如キ有、且其鑛ニ硬ト軟ト二種アリ、色ニモ、深黒、淡黒、灰白、黄赤、深緑等ノ異アリ、其深黒色ノ鑛ヨリ取タル鉛ハ、光澤美麗ニシテ極上品ナリ、然レドモ黒色ノ鑛ハ、其性甚ダ硬クシテ、鎔化スルコト容易スカラズ、厳ル炭火トチカラヲ費スコト也、宜ク諸金ヲ速ニ鎔スノ法ヲ行ベシ、

凡ソ鉛鑛ヲ煎煉シテ、石ト鉛トヲ分離スル法ハ、銅ニ異ナルコトナシ、且鉛ハ其質甚ダ柔軟ニシテ、火ニ爆タトキハ速ニ鎔化シ、鼓鞴力ヲ勞スルニモ及ズ、故ニ爐ノ下穴ヲ塞ズシテ炭火ヲ盛クシテ、上ヨリ鉛鑛ヲ投ズルトキハ、鎔化ルニ從テ穴ヨリ流レ出ル者ナリ、宜ク穴ノ下ニ型ヲ造リ置テ、意ノ欲スル如ク其形ヲ鑄造スベシ、抑モ此鉛ト云フ者ハ、諸金ヲ自在ニ變化スルノ功能アルノミナラズ、水休屋根瓦杵鑑鐵炮丸ヲ造リ、且白粉ト爲リ、黄丹ト爲リ、蜜陀ト爲リ、白蠟ト爲リ、其他種々ノ藥物ト爲テ、醫師、畫師、染師、陶工、漆工等ニハ極テ要用ナルヤフナレドモ、餘リ多ク掘リ出テハ、此ヲ賣ニ甚ダ困窮スルコト有、太平ノ世ニハ殊ニ入用ノ少キ者ナリ、故ニ鉛山ヲ開クニハ、此ノ論辨ヲ爲スベキコト、此レ亦開物家ノ一技ナリ、

近來佐竹家ニテ鉛ヲ多ク堀出シ、其中ヲ三百五十萬斤程ヲ大坂ニ運送セシニ、大坂ニハ一向ニ望ム者ナク、年々少シ許リハ賣捌シカドモ、仲二百萬斤モ買者ナキガ故ニ、今ニ布屋丁ノ藏屋舗ニ山ノ如ニ積テアリ、

（鑛山聞書）鉛山之山色

一大碁石金　一小碁石金　一鍮青白子　一羽から白子　一牙白子　一爐粕白子　一砥の粉白子　一烏返し白子　一きわた白子　一ふけ白子　一石金白子　一石青白子　一透り白子

一蓬白子　一寸炭白子　一鼠白子　一茶の葉白子　似たり（明色にすみ、道地とふ白、）かねにならぬもの也

〔山相秘錄〕水銀第八

水銀ハ朱砂ト同様ノ物ナリ、故ニ土地ノ赤色ナル處ニハ必水銀ヲ含有スル者ナリ、且又水銀ヲ多ク含畜スル地ハ、其處ノ砂石自然ニ折裂シテ碎崩スル者ナリ、凡ソ山ニ水銀ヲ含有スルヲ相シ得バ、先ズ其土ヲ掘テ水銀ノ苗ヲ求ムベシ、苗トハ即チ水銀ヲ含タル鑛石ヲ云フ、水銀ノ鑛ハ白色ナル者、淡青色ナル有リ、或ハ黄色ニ丹色モアリ、赤土ヲ坑ヲ鑿テ折裂シタル石ヲ得バ此ヲ採ニ升煉ノ法ヲ行ヒ、實ニ水銀ノ有無ヲ試ムベシ、若シ升煉ヲ法ニ行テ少シデモ水銀ヲ得ルコトアリ、金銀山ニ說タル如ク、栗丸太ヲ以檣木ヲ立テ、棟梁ヲ架シテ、上ヲ崩壞ザル備ヲ爲シ、次第ニ其苗ヲ逐テ前進シ、地ヲ穿ルコト數十丈ニ至ルモ可ナリ、若シ夫レ鑛石ノ丹色鮮明ナル者ヲ得ルコト有ラバ、皆朱水銀シテ朱砂ヲ製スベシ、朱砂ノ價ハ大ニ水銀ヨリ貴キ者ナリ、又純赤色、淡白色、黄色雜青色等ノ鑛ハ悉ク升煉シテ水銀ヲ採ルベシ、又水銀ニ硫黄ヲ混ジ煆煉シテ朱ト爲ス法アリ、然レドモ此ハ製煉術ノ事ニシテ山相ノ事ニ關ラザルヲ以テ茲ニハ論ゼズ、

按ズルニ、水銀ハ磐石ノ精液ナリ、故ニ其性ヨク硫黄ニ合體ス、水銀ト硫黄ト合和スルトキハ、即チ黑色ノ塊ヲ爲ス所謂ル黑色ノ塊ニ鉛ヲ混ズレバ、青色ヲ發ス、或ハ磐石ノ氣ヲ混ズルトキハ法。白色ニシ、或ハ硫氣ノ氣多ケレバ微黄色ヲ帶タル塊ト爲シ、此等ノ理ヲ推テ水銀鑛ニ種々ノ異色アルコトヲ察スベシ、又水銀ト硫黄ノ混合シタル黑色ノ塊ヲ、火氣ヲ以テ假テ此ヲ薰蒸スル乎、或ハ自然ニ土地ヨリ僅ス熱氣ヲ含ムトキハ、必赤色ノ發スルコト、即チ是產靈ノ神天地鎔造ノ妙機ナリ、水銀ト硫黄ヲ煆煉シテ朱ヲ製スルノ法ハ、即チ妙機ハ擬タル者也、此等ノ神理ヲ合セ攷フルトキハ、水銀ヲ含畜スル土地自然ニ赤色ニ發スルコトモ、然シテ察ス

硫黃山相

ルニ足レリ、

(山相秘錄下)硫黃第九

自然火ノ常ニ燃ル山ヨリ硫黃ヲ出スコトハ、皆人ノ知ル所ナリ、燒山ニ硫黃ヲ多ク吹キ出シテ、圖ノ如クナルヲ、土俗ニ廻屋地獄ト云フ、俗ニ山ノ常ニ火ノ燃ル所ヲ地獄ト云ヒ、硫黃ノ多ク吹出タル形狀ハ、麪ニ似タル者ナルガ故ナリ、其麪ノ如クナルヲ採テ少ワト煮テ土透ヲ去タルヲ煮硫黃ト名ク、又山ノ燃ル處ニ、桶カ、盥類ヲ覆置トキハ、五七日ノ中ニ、其内ニ硫黃溜ル者ナリ、此ヲ生硫黃ト名ク、總テ硫黃ノ白色ナルヲ鷹ノ目ト稱ス、上品也、黃色ナルヲ鶉目ト呼ブ、中品ナリ、靑色ナルハ下品ナリ、鷹ノ目鶉ノ目ハ、藥用ト鐵炮ノ火藥ニ用ユ、下品ハ引火品ノ用トスル、

鑛山掘采

(譜牒餘錄後編三十八處士之下)渡邊七右衞門　同善左衞門○中略

一傳馬貳疋無相違可相立候、是者金銀鉛山見立ニ遣者也、仍如件、

慶長拾壹年六月十八日

大宿中

是ハ國々ヘ、御使ニ被遣候證據ニ被下候御朱印之寫ニ而御座候、○中略乍恐、備後先祖之儀者、百年以前天正之時分迄ハ、周防國久我郡高森之城主、石州鹿足郡諏訪野村三本松之城二ケ所之城主ニ而、證據に古き城跡于今御座候、○中略其以後此城はなれ、普代之者共、被近所ニ百姓ニ罷成居申候、備後儀は、權現樣江、御陣之砌は、罷出相勤申候、○中略慶長十一年六月十八日、御朱印壹通、御傳馬貳疋被爲下候、○中略其時分者、御陣多く、銀なまり竹たばたけ無油斷才覺仕、御用に走廻り申候、次には國々所々江罷越、鉛山を見立申候とて城之要害見置、御尋之砌は、樣子言上候、歲若き時分より御用に走廻り申候而、其以後御傳馬貳疋之御朱印頂戴仕候、是は大坂御陣九年以前に被爲下候、

鑛實

〔重松錄〕差上申起請文之事

一今度諸國金銀銅鐵鉛山爲御見分御順山私共被召連候に付諸向慮外ヶ間敷儀無之樣急度相慎御法度之趣堅相守聊以御後闇儀不仕諸事大切入念御事公可相勤候尤重心を以申合一味同心仕間敷候若左樣之義申懸候ものの御座候はゝ早速可申上事

附傍輩と中惡敷不仕宜趣遺恨等不相含隨分正路實體可相勤事

一御事之儀は不依何事有體可申上候御隱密之義承候はゝ縱親子兄弟に而も一切他言仕間敷事

但御爲筋と奉存候義は輕き儀に而も御用人中江可申上事

一山師掘子下財百姓町人何れよりも金銀米錢衣類諸道具其外輕き品に而も一切受用不仕押賣押買借貸仕間敷候勿論酒肴何に而も馳走ヶ間敷義請申間敷事

但此度順山之役人中御侍衆に至迄御行跡不宜義見及候はゝ密々可申上事

一三笠博奕總而賭之諸勝負一切仕間敷候御旅行御見分中御威光を以相掠候樣成儀無之樣急度相愼各ヶ間敷義不仕好色不作法仕間敷事

〔銀山舊記〕鑛品附

一銀寄生　鑛筋の内銀氣付候處ガマ杯の内に有之又は石に生れ候も有之候至而宜敷鑛にて不吹其儘の銀にて御座候但鏈と申は土石の内に鑛有之筋を鏈と申たとへば海中へ大河の水筋立候樣に土石の内に土石の筋相分り申候ガマと申候は石中少し宛空に成候處御座候儀ガマと申候銀銅杯に成候石を鑛と申候

一白髮銀寄生　銀寄生種類品々御座候内シラガに似寄候故白髮銀寄生と申上品の鑛に御座候

一牙銀寄生、右同斷、牙に似寄候故、如此名付申候、上品の鏈に御座候、

一二黃目地花銀寄生蛾子(ニカウメヂハナギントザアリノコ)　黃色なる所も鏈にて、二黃目と唱へ、白タ、ヒラ〳〵立候もの、花の如き銀氣生にて花寄生と申、黑く付候處は形蛾子に似寄候故、アリノコと申、何れも銀氣多く上品の分に御座候、

一六方　銀氣生類にて、銀氣至て强、六角に生候も有之、其種類に御座候へば六方と唱へ申、銀氣多く、上品の鏈に御座候、

一靑氣六方　右同樣に御座候へども、色靑く御座候ゆへ、如此唱へ申候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一ビク　此鏈は吹熔し銀に成候湯、ビク〳〵致し候に付、如此相唱へ申候、銀寄生に續候て、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一靑氣ビク　右同樣に御座候へども、色靑く御座候ゆへ、如斯相唱へ申候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一二黃目絹張　二黃目の譯は四番に相記し候如く、少し白き所、絹を張候樣成處を、絹張と唱へ申候、銀氣多き上品の鏈に御座候、

一黑　色黑く、格別に光候處相見へず候へども、銀氣多く、上品の鏈に御座候、

一茶色鉛　鉛と申候は、金銀の鉛に似寄候色を鉛と唱へ來り申候、茶色に相見へ候銅氣銀氣多く、上品の鏈に御座候、

一卵石　たまごの如き石大小不同有之候へども、何れも內に鏈を包み候て、外へは鏈氣不相見候を目利致し、撰取打割候へば、內鏈有之候、其樣子卵の內外に替り候に似寄候故、如此相唱へ申候、銀氣多、上品の鏈に御座候、

一炭地　此鏈は炭に似寄候故、如斯相唱へ申候、地と申は、炭の地合に似寄候と申事に御座候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一シロニ地ピク　シロニ地と申義は、薄黑き所に、シロニと申鳥羽色に似寄候故、如此唱へ申候、地と申は拾三番に註し候通に御座候、シロニの地色成る鏈と申事に御座候、ピクの義も前に註し候へば略之候、

一石地銀寄生　銀寄生の譯は、前に記し申候、此鏈石地にて鏈に銀氣生付候故、如此相唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、石地と申義は拾三番に相斷申候地とは少し違ひ、石に添ひ申候鏈に御座候、つて地と申事、此段相記し申候分も、右兩樣の内に御座候、

一燒味噌地　燒ケ焦ゲ候味噌の如き鏈にて、如此相唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、

一ビヤクヌメ　青白き所は、白綠色に似寄候故、ビヤクと唱へ申候、光り候所銑のツヤに似寄候故ヌメと唱へ、銀氣多き鏈に御座候、

一性鋼地青氣　薄黑く白き所を性鋼地と申、青き所を青きと申候て、鏈氣多き鏈に御座候、

一鱗地　鏈の肌、魚鱗に似寄候故、如此唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、

一鼠紙地燒付銀寄生　地色鼠紙に似寄、銀寄生を燒付候樣に相見へ候て、銀氣多分有之鏈に御座候、

一青氣吹アラレ　壹番に相斷候通り、石中少し寫空に成候所に有之鏈を吹あらしと申、青き所は銀氣多く御座候を青氣と申、銀氣多き鏈に御座候、

一ガゼ地青氣鏈　ガゼと申具に似寄候石肌故、名付候也、青氣鏈は前に相斷候通りに、銀氣は多く有之候へども、右石に交り候に付、銀氣劣り、中品の鏈に御座候、

一朱色　色合赤き故如此唱へ候、銀氣中品の鏈に御座候、

一ヤニ地銀寄生　草木の脂に似寄候故、ヤニ地と申、銀寄生は宜候へども、地合不宜に付銀氣中、中品の鏈に御座候、

分析

〔居龍工隨筆〕銅を堀たる者の物語に、山の土少くして、僅に人夫の糧に當たるのみにして、骨折たる所の益なかりければ、金をしぼり見んとて、其法のごとくにしてしぼりたるに、流石に金は出ながら殊外に微にして、炭薪の價、人夫の費をつくのひて、彼是共に餘に徳分なかりければ、勞して功なしとて、金をしぼる事を止たりしといヽしに、實にやルスン、カボチャの夷國の大木古木いやが上に生ひ茂りて、炭薪の値賤しく、金のあたひ高所にて、銅をしぼり金を出さんには、其利分幾倍あらんも知らず、されば長崎へ年々來る蠻船紅毛船の、多く銅を得たく思へども、官より御定ありて、銀何貫目、銅何貫目、代る物何貫目の數量ありて、其外に出る事あらざれば、大なる藥鏈を夥敷買て歸るは能智惠なりとぞ

選鑛

〔見聞雜記三十四〕一鏈石撰候者を石撰と云、女の業なり、かなこの者雇ひ入申候て、鏈撰せ候者也、賃錢鏈石多少に不拘、一日に三時計り三拾貳錢ゟ貳拾六錢位迄なり、明六ツより暮六ツ迄撰詰候へば、貳枚肩とて、右の一倍違し候、

一鏈入置候物を鏈箱立といふ、竪六尺横四尺、深サ五尺、厚板にて箱を指、土中へ貳尺堀込、上の蓋に鎖前を付候物也、此中へ總じて鏈を入、かなこ荷印附置候、此外諸品入置候箱立も有之、是は油を第一に致し候故、總名を油箱立と云、此箱立と云譯は、古來銀山大盛いたし候節者、鏈數多ヶ樣の締も屆かね候に付、筵を立圍ひ、其內へ入置候、其後箱に入候ゆへ箱立と云由、建物と云も、右箱立差置候所故、名付候由申傳候、

一總じて鏈石入取扱候物をかますと云、是はかます筵とて、筵を荒く織候ものにて、大小有之、大は大概幅壹尺六寸位、竪四尺五寸位、是を拾四貫目と云、小は大概幅壹尺五寸位、竪四尺位、是を並

かますと云、或は三ッに疊み四ッに疊て、袋の如く底側を鎚にて縫ひ、鏈を入候て、口をも右之通縫ひ納め候、此鏈を縫鏈と云、

一敷内より揚ゲ候て、いまだ不選分鏈を穿込鏈といふ、鋪内にて穿込の内、大概上鏈にも可成。と致候には、かます印をつけ揚候故、印揚といふ、

一鏈石撰方と云は、前段水揚へ仕込たる鏈石を撰床へ坐候て、上鏈中鏈(中より少し鏈目に見へ候を木中といふ)中鏈をば仲中と云、(仲中より少し劣候をば、又中と云、此下有之ヶ下中と云、)か様に鏈の段を分候一段を鏈壹本と云、扨ばう鏈にも上に成候ばうも中に見へ候ばうも有之、細鏈も右に同じ、依之素石とて石計りに致候鏈も有之、石ばうこま𛂦三色交候鏈も有之、ばう計りこま計り出候鏈も有之、是は其時々かなこの者目利にて、石計りにて買候得者、直段能候得共、石目少くばうを交候へ者、直段は安く候得共、鏈買目多く相成、代銀間方に過分有之と申儀にて、右之通交合候、此儀はかなこの者第一に功者の入候事也、尤臨氣應變に致し候事故、十日ニ鏈取方違ひ候事有之候、取方とは右之通鏈の段を究候事を云、上中下共分難き鏈をば取交、一本に致し買候ゆへ、取込鏈といふ、鏈念を入、悉く撰候事を詰るといふ、

一鏈石撰候内白石勝なるを除置、外鏈撰仕廻跡にて白石を鎚にて打落し、上中を撰分候をかうひと云、右白石を打落し候鏈をからみ鏈と云、

一ばうの中に有之候白石を撰捨候事をばうをはくと云、細鏈は笊にて通し、土氣等取候て製法致し候、是をこまを通すと云、ばうこま共に用立ず捨り候物をかすと云、

一鏈段々撰候て用立ず捨り候石をはじきと云、尤此中に薄き鏈有之も交候得共、かなこ手前より撰分候ては、諸掛も過分に相掛り、其上右撰立候鏈の位に劣り候へば、薄き物ゆへはじき捨候、此はじき石をどべの者、かなこより買ひ候て、精々手を詰、下鏈と名付、買石へ賣申候、此はじきをど

べの者へ遣し候故無給にて小遣に致し候どべの者鏈撰立候所をどべ小屋と云御番所外に有之どべの者自分にて建置候下鏈撰取候跡を川へ捨候を又川にて女子共撰拾ひ候是を拾ひ石と云銀山外濱川にも古來より自然と流れ出候故鏈石有之是をも拾ひ取買石へ賣申候此鏈を買商賣に致候を拾ひ石買と云

鏈石の名大概

キロン鏈又ぎら鏈共云

金有之鏈を筋鏈共又銀通り鏈共云銀有之鏈を白銀鏈と云銅有之鏈を銅鏈と云鉛有之鏈を

筋鏈之分

やしや筋の位は能候得共見く鏈ざる物也　銀通り吹味能鏈なり　かすけ筋鏈の最上也　燵子の頭　金皮ねば　すれ目

くるみ石黑　硯直り　紫地　血腸物

右之外

川砂　唐島　燒刃　びろうど　烏の目　狐　蛇體此類の鏈古來は出候由近年出ず

銀鏈の分

黑物　すばい黑物　路色地　銀陰目　白征　かはらけ　ふすま黑物　堅地ふすま　ぎうん

淺黄地　ぬめ地　かる石　赤ほら　髮色　とたん　蠅のふん　さかみ　くさ　そは皮

牛の皮ねば　はゝかすけ　のた付是はごふんの如く鏈石にればの実り候なのた付といふ　ほう鏈石よろしく相見へ候得共吹上候鏈無之候しかし直り候へば盛に成申候

右の外

松の皮　青さ　はゞ　ほうはゞ　虎の子　ちゞみねば　かすけ黑物　路つほうトザの堅りたるを云

とぢ白トケ　鉛トザ　きら陰目　ちやりとぢ　のりめとぢ

是は白鏈の内白石の所芯、鉛の如くなる物入込居候をとぢと云、右とぢを當にあて候得者、ひらたく相成候、しやりとぢは、當ざわりさら〳〵と致し候、いづれも吹立候へば、白銀に相成候、

水筋　鐵筋　茄子實　羽色筋（しやく鏈にあり、多く）

是は筋鏈をはたき候てゆり候へば、金粉の如く見へ候、則金也、是を水筋といふ、

鉢物

角ぎん　すがめぎん　粟の葉ぎん　青　まぎん　白ぎん　すぎん赤目ぎん　惡

是は鏈石をはたきゆり候へば、鏈色の處見へ候、是をはいろと云、白銀に成候也、又白は色と云は灰色也、きうはいろと云は鉛に相成候、

〔銀山舊記〕鏈吹方取扱

一鏈搗と申は、嵐より上り候荒鏈を、半切と申、深一尺一二寸、差渡二尺四五寸の桶に水を入、ゑよと申底の狭り候目荒のざるに入、右桶の内にて洗候へば、鏈に付候土石、水底に溜り申候、右ざるの内に留り候鏈に選ひ候石を、鎚の嘴と申物にて砕き、石と鏈とを分け、石を捨て申候、右水底に留り候土砂交りの鏈は、ゆり鉢と申て、差渡二尺計り、深さ三寸計の木地鉢に、右鏈を入れ、水につけ、ゆりて土石を去り、正味鏈に相成候を、ざるの内に殘り候石を去り候鏈と、一緒に打込み、荒鏈十貫目に付、正味何百何十目と相成申候、

一鏈吹方の儀、前々大盛の節は、正味鏈五百貫目に、こわりあへ百五十貫目宛、三百貫目、合せ都合八百貫目を、大吹一間入ッ吹流しに吹候へば、當時は小吹にて、大概正味鏈六十貫目に鏈四十三貫目、但こわりと申は、鐵氣無之白面と申石也、あへ七貫目、但鉛鏈の事也、からみ拾貫目、但からみは吹からみ也、都合百二十貫目を一日吹入ッ吹と申候、但あへからみは、鏈吹床にて、かわき解棄候をとかし候爲に、合せ申候、こわりは吹床ねばり候を、さやかに致し候に用ひ候、尤鏈柄により、

淘汰圖錄

合せ物加減有之候、
一吹屋建樣　鏈を吹候上は、屋根に四尺四方程の空を明け、屋根のうへ迄、煙窖と申、四五尺四方を石壁にして、屋根より下一方は土壁、三方は壁なしに調る、
一吹床は、右煙窖の下深さ三尺に、廻り七尺程穴に堀り、炭を碎き、土を煉り、右穴の目を厚さ貳尺程にぬり上げ、其後ロ土壁にして、穴を二ッ明け、其前には口と申物を置、右爐の內へ、吉き炭を入、其上に矢炭を横に渡し吹立、其上に合せ鏈を置、土壁の後より吹子貳挺にて吹込申候へば、合鏈湯となる、强く吹候へば、追々上へ浮候て、流れ捨り候、是をからみと申、幾度も浮候からみを去り候へば、床尻と申、鉛と銀と一緒に堅まり、底に殘り候を、水を打候て上げ、床尻鉛と申候、
一銅絞の儀は、先き上りに拵へ、壹床に吹込、銅八貫目程宛入、其上へ炭を入、頭より吹子を仕かけ、吹立、右銅、火色に相成候節、鉛をさし候へば、鉛熔け流出候をゑぶりと申物にておし返し候へば、銅和らぎ候內より露の如く鉛湧流れ申候、尤鉛銅の內、銀氣連れ卸し候を、たり鉛と稱ふ右たり鉛、幷に前條に有之候床尻と一緒にして、四五十貫目又は百貫目計宛灰吹仕候、○中略
一裏目仕樣は、裏目床と申爐模の樣に拵、灰を入、其上に又うわ灰を置、九寸廻り程丸にくぼめ、其內へふり灰と申爐滓を碎候て入置、右灰吹銀入置、其上に吉き炭を入、松の木炭を置、小吹子を以吹解し、其湯色を見合せ、吹子を止め、撞棒と申樣木の細きを以、灰吹の上をならし、水を打冷し、引上げ申候、是を裏目吹とも淸吹とも申候、當時御定法七步三六入の灰吹は、花降上銀と申、裏目吹湯色花の樣なる物出候を、目當淸吹致し候、尤其節は掛り役人兩人宛相詰、吹方見屆、位相改、包立封印を付、銀吹へ相渡候へば翌日役所へ持參稱定致し、引替銀相渡申候、
〔日本山海名物圖繪一〕金山淘汰繪
金山はほり出したるはく石をくだきて、石うすにてひき、からうすにてつき、猫田ながしにかけ

て、その上を板ゆりにかくる也、此はたらき人は貨をとらず、衣裳にしみ付たる金の粉を取て、その日のいとなみとなる也、昔はとぢ金といふて、黄金一かたまりにかたまりたるが出けれども、今はそれは甚だまれにて、唯はくいしばかりなり、いにしへみちのく山にこがね花さくといへるはとぢ金なるべし、

〔日本山海名物圖繪一〕銀山淘汰の繪

銀山の鉑石、上の繪にあらはすごとく、打くだきて粉となして、水にてゆる也、金山の板ゆりのごとく、但銀は水ゆりにすることなく、直に燒釜にてやく也、淘汰の仕やうは、半切桶に水を汲入、かなめ鉑を鉢にいれ、水にてゆれば、土石は皆半切桶の水におちて、銀は鉢の中にのこるなり、たいていは金山の板ゆりと同じことなり、

〔山相秘錄上〕銀山第三

凡ソ坑夫等ニ貫鑛ヲ與ヘ、且其堅硬タル銀礦ヲ打碎テ、此ヲ淘汰スル等ノコトハ、大抵金山ノ條下ニ說タルニ異ナルコトナシ、只其洪爐ノ築キ樣ハ、金山ヨリ大ニスベシ、土堝ハ高サ九尺、横二間餘、厚サ二三尺ナレバ、宜キ者ナリ、風窩ハ四尺五六寸ヨリ五尺許ナルヲ三管スニベシ、風ゼ透シノ管ヲバ土器ヲ以テ造リ、其組樣ハ土堝ニ近キ風窩ノ管ヲ上ニシテ、其次々ヲ漸々下ニシ、此ヲ三段ニ組累テ、土堝ノ下ニテ合シテ一管トナシ、以テ其風穴ヲ火處ニ達ス、火處ト爲スベキ處ヲバ、愛テ溫氣ナキ土地ヲ擇ビ、深サ二間許リニ坑ヲ掘リ、下二間程ニ炭ヲ粉ヲ實シ、其上一間ニハ埴土ト砂トヲ谷半混ニシテ、能ク煉テ擣キ固メ、其上ニ高サ五尺、徑リ五尺許ニ、爐竈ヲ築クベシ、是レ一度ニ多クノ銀礦ヲ鼓鞴ニ用ル者ナリ、若又一石許リブヽノ銀礦ヲ吹ニハ、土堝ノ前五尺四五寸ノ處ヲ正中トシテ、四方二尺四五寸、深サ一二寸ノ圓キ稻坎ヲ爲シ、土墩ナシニ吹モ又宜シ、此土墩ナシノ火處ハ、炭ハ費多ケレドモ、甚ダ手輕ノ宜キ者ナリ、○中略

凡風箱ヲ並ベテ洪爐ヲ鼓鞴ニハ、甚ダ警ムベキノ大事アリ、何トナレバ、炭火ノ既ニ熾ンナルニ當テ、其三箇ノ風箱ノ内ニ、其若シ鞴棒ヲ進退スルコト万一齊シカラザル者ナレバ、其風箱忽チ破裂シテ、事ノ成ラザルニ至ル者ナリ、故ニ風箱ヲ並ベテ吹トキハ、鞴夫等、分身一體ニ爲、チカラヲ合セ、心ヲ同クシ、掛聲ヲ均クシテ、皆謹テ其鞴棒ヲ一齊ニ進退スベシ遲遲ニシテ事ヲ誤ルコト勿レ、凡ソ礦砂ヲ荒破スルニハ、先ヅ鉛十斤餘ヲ、火處ニ安置シ、其上ニ炭ノ木ヲ興シ、且硬炭五六圓ヲ加テ、此ヲ鼓鞴シ、其赤クナラントスルトキ、淘洗ヒタル礦砂二斗許リヲ上ニ投ジ、又其上ニ炭ヲ加ヘ、其炭ノ赤色ヲ發スルトキニ、又礦砂ニ投ジテ炭ヲ加ヘ、斯クノ如クスルコト四五度、大約礦砂一石ニ炭二十圓餘モ用テ、鼓鞴ルコト四時餘ニモ至ルトキハ、礦砂皆悉ク鎔化シテ、鉛ノ如キ質トナル、俗ニ此ヲ鉛ト名ク礦砂アリ、鎔化ルトキハ、石中ニ含有スル所ノ銀ハ、石ヨリ分離シテ下ニ脫出テ、流レテ鉛ノ中ニ混ズル者ナリ、若シ其礦砂ノ鎔化スルコト十分ナラザルハ、益々炭ヲ加テ此ヲ吹キ、其適宜ノ時ニ至リテ、水ヲ灌ギ火ヲ消シ、銀ヲ鉛ニ混ジタルヲトル、此ヲ荒吹ト名ブタ、

礦砂モ天性自然ニ、初ヨリ鉛ヲ多ク混ジタル者アリ、銅ヲ混ジタルアリ、鉛ノ多ク混ジタル火處ニ鉛ヲ置ニモ及バズ、然レドモ皇國ノ銀礦ニハ鉛ノ多ク混ジタルハ稀ナリ、凡ソ銀礦ノ末ダ荒吹セザル者ヲ新味ト名ク、既ニ荒味ノ經テ鉛ニナリタルヲ枯味ト名ク、枯味ニモ當銀ヲ頗ル含メル有リ、幾度モ打チ碎キテ末トナシ、新味ニ和シテ荒吹スベシ、枯味ノ質ハ硝子ト同性ナル者ナリ、銀氣ノ煎採タル後ハ爐ヲ製スルモ宜シ、

凡ソ鉛ニ銀ヲ混ジタルヲ分ツニハ、蝦蟇爐ヲ用テ此ヲ分ツ、蝦蟇爐又分金爐トモ名ク、此ノ爐ヲ造ルノ法ハ、大小ハ意ニ任セ、一箇ノ古釜ヲ地上ニ居ヘ、其中ニハ松木ノ灰ヲ充實シ、固ク押シテ上ヲ平カニシ、其中央ヲ少シ凹ニナラシメ、其凹ノ外ニ彼ノ銀ノ混ジタル鉛ヲ安置シ、四方ニ炭

ノ火ノ赤キヲ積ミ累ネ、其上ニ大抵同ジ大キサノ釜ニ底ヲ開タルヲ取テ覆ヒテ蓋ト爲シ、小キ風箱ヲ用タ、此ヲ鼓鞴アホグトキハ、銀モ鉛モ鎔化シテ圓月ノ如シ、トキニ炭火ヲ加テ暫ク此ヲ吹クトキハ、鉛ハ漸々灰ノ中ニ沈ミ、後ニハ銀ノミ多クナリテ、二物ノ金色分明能ク見ユル者ナリ、其鉛ノ色ノ盡ルヲ度トシテ、即チ火ヲ消シテ此ヲ採ル、此レ純銀ナリ、此ヲ灰吹ト名ク、凡ソ灰吹スルノ法ハ、金モ銀ニ皆同ジ、又其銀ノ灰中ニ沈ミタルハ、灰ト共ニ凝結シ、一團ノ塊ヲナス者ナリ、此ヲ密陀僧ト名ク、所謂ル金密陀、銀密陀ハ、其混ジタル金ニ因ルノ名ニテ、皆鉛ノ灰ニ混ジテ凝聚ミタルナリ、故ニ爐ニ入レテ煉ルトキハ再ビ復鉛トナル、然レドモ密陀僧モ術家ノ諸悪ヲ治シ、黄鐵ヲ煉ニモ必用アリ、其他醫子輩ノ油ニ混ズレバ、凝厚ニ爲リテ漆ノゴトシ、五色ノ丹青ヲ和スルニ甚ダ美ナリ、故ニ紙烟草嚢及ビ紙合羽等ヲ製スル家ノ要用ノ物ナリ、

〔日本山海名物圖繪一〕銅山床家

釜家にて燒たるあらがねを湯にわかして、丸銅に仕あぐる所を床家といふ也、銅を湯にわかす時、銅うへに吹いでたるをかわをりといひ、又そこにこりかたまりたるをとこじりと云て、二品あり、又石土の湯となりたるをからみといふ、又どよともいふ、わかしたるあらがねをひやす所をどよがといふなり、○中略

南蠻鞴

なんばんふきは、たゝらかべにつけ、はぐちをして、二てうふいごにてふく也、銅よりなまりをしぼり取に用ゆる也、又銅より銀をしぼり取にもこれを用ゆる也、

〔山相秘錄下〕銅山第四

凡ソ銅礦ヲ煎煉スルノ爐ハ、高サ六七尺、徑リ四五尺ニシテ、鑄造爐ノ如ク下ニ孔ヲ穿ツベシ、土堺及ビ風箱ヲ安置ルナリ、大抵金山銀山ニ同、最初ヨリ火爐ニ鉛ヲ納置ルニモ及バズ、唯炭火ヲ

入レ炭ヲ加テ、火ニ熾ンニ吹キ起シ、上ヨリ銅鑛一二斗ヲ投ジテ、炭ヲ加ヘ頻ニ鼓鞴テ、又鑛ヲ投ジ炭ヲ加ヘ、此ヲ煎スルコト四五時、銅ヲヨク鎔化シテ湯ノ如クナルニ至リテ、乃チ杉木ノ竿ヲ以テ爐ノ下ノ穴ヲ衝(フキ)開(アケ)リテ、其鎔タル銅ヲ流ストキハ、鎔銅ハ泉ノ湧出ガ如ク流ル者ナリ、豫テ其流下ニ垣生ト砂トヲ煉リ混レル上ニテ、數多ノ型ヲ造リ置テ、其型ニ流シ入レテ、方長キ板ト爲コト、古來諸銅山皆ナ常例ノ如シ、

〔鼓銅圖錄〕鼓銅錄

本邦銅山〇中略鼓鑄之法亦以異、銅有受鍾鍛者、有可冶鑄者、大率夾銀鉛者性柔、鍾作瓦片、抽成條線、如夾白目者質剛、鍾卽拆裂、不堪爲線瓦用、若剛柔合錬、則亦不妨、鉛錫之類參和者爲響銅、中鐃鈸之用、亦各有制云、若夫坑採鼓鞴之方、概列於左、

鑛氣（鑛氣俗用銕字、言也計）

凡銅山有石夾土者、有純石者、碉中有銅璞、其上必現鑛氣、其色赤黑、土石皆然、綿連成一條路、或長或短、或廣或狹、有濃淡、有淺深、隨銅璞多少、蓋銅精所素成云、採工審察焉、以辨銅之多少美惡、

採璞（璞俗用鉑字、言波久）

山上鑛佳者、其下數丈鑿穴、逶迤而入、隨入樹槽柱、橫板架其頂、石屑塡其間空、以防崩壓、（坑門俗用四字、言奥津豊女）採工提燭燈、遂鑿施鑽、入十丈或二十丈、工程不可日月計、然或過或不過、有過而斷者、有斷而復續者、有綿連不斷者、有深入漸窄者、有忽小忽大者、有枝分者、有一幹無枝者、包褁銅璞之石、形狀不一、爲棄置無用物、其璞有黃黑紫赤光暗種々之別、得銅之多寡亦各異、然土性之不均、不得執一以概其美惡、撿璞細碎、揀去其非者、曰碎女、（碎女俗加奈臭）大凡璞之美者、十而得銅一、賤者不過二十得一矣、

煆璞（璞煆過者俗謂之也燒流久）

凡煆璞、屋下作竈、（竈俗謂之加末也）竈底布薪、而布璞、一薪一璞、重疊到上、其下鑿竇、透風於火、烟有硫黃氣、撲

身不可近火、純熱旬日而後冷定、取出、隨礦質小異、此其大略耳、

取鉟（[illegible]）

凡取鉟、爐下設爐甑（[illegible]）、即前洪爐（[illegible]古）、爐前通一槽道、豪置二座、安置壚背、將爐礦放之爐炭之上、二人執高鼓鞴、一人立于爐頭、手把長鐵杖、分撥安排、及風火力到鎔化、盈科、其土滓（俗名之土[illegible]）輕浮、津々然流注槽道、隨出冷結、或灑水取而棄之、礦盡更鑑炭耗復加、候其良者滿爐、乃撥除土滓炭火、故灑水於爐面、令鎔汁隨冷結作皮起狀（[illegible]）、用鐵鉤剔而取之、且灑且剔、鉟已盡焉、爐底自有銅一塊、（[illegible]之）

豐古[illegible]礦之最者或無有耳、

取銅（[illegible]）

鎔鉟取銅、略同鼓礦取鉟之法、但及鎔汁、爲爐土塗蓋洪爐、穿留一小孔、入炭鞴之、有滓輒去之、候觀其熟銅、爐悉除其紅炭土滓、待熱勢退、灑水取之、亦似取鉟之狀耳、

右自坑採至始成銅者、悉屬之銅山焉、官制銅不許私賣、皆令輸之濱華銅局、令爐戶鼓鑄、而後定其甲乙、配其價值、銅有供長崎和市之貴者、如別子秋田南部是也、有充市井鑄造之用者、三處之外皆是、爐戶亦有定額、不得叨增損、蓋防其姦也、銅之夾鉛夾白目者、與純銅不雜者、爐法有二途、具列于後、

再鍊（鍊銅之處不雜）

各邸所出銅、再鍊之於洪爐、既熔化、去土滓、出紅炭、更鼓鞴、屬落汁、待熱勢稍退、灑水冷結、用鐵杖取之、是爲再鍊銅、徑尺餘、厚五分許、爐底漸小、略如取鉟法、大約一爐受貳佰伍拾斤許、日鎔三爐而止、

三火（鍊銅之法不雜）

將再鍊銅、放之於爐中坩鍋上、鎔之、側貯一桶湯、設方板池、池中置模、模上布厚亭布、銅既化矣、去滓鎔火、注湯於池、則極熱湯盈于模、鑄工執大鐵鉗、鉗定坩鍋、傾于模上、先灑湯者、恐其激迸也、（[illegible]）

數數遍、因此、暫傷飴者、亦時有之、可畏、既而置水冷結、用小鑑〈本ヘ〉鉄篩取之、〈一傾成十數枚、長七八寸許、枚重拾十兩、〉約十數傾而盡、日銘十數鍋而止、是爲佐銅、供長崎和市之用者也、

右純銅不雜者、煉法至此而盡、又有再煉銅銘煉、傾于方圓各模者、〈詳見于後條〉而其法大同、作佐銅之方、〇中略

附銀銅白目淘汰〇中略

淘汰者、零銅粘著土滓埴鍋之類者、舂篩水濆汰而取銅也、

〔銅山稼并粉成吹取扱一件〕一三番彈鏈取揚方之義、天明三卯年迄は、鳥越間歩本途稼ゟ穿出候銀鏈之内懐き合ニ相成、銅氣有之分、銀鏈ニ不取交、建場外川通江取捨候ニ付、銅稼掛ゟ石撰雇入、銅氣有之分拾ひ取、粉成吹仕候得共、御益少ニ付、中絶いたし候處、寛政元酉年猶又伺之上取揚仕、本途銅鏈同樣粉成吹仕、御入用之義、本途御買上代ニ而は引足不申候ニ付、別段被仰上、金直一歪を目當ニ御金藏ゟ請取、出來銀銅は本途同樣取計申候、

但三番彈鏈と申候は、敷内ゟ穿上候鏈石を一番に鏈ゟむだ石を撰分、其次むだ石中も薄鏈有之候ニ付、猶又撰取、其次ニ至、銀銅至而少く、本途稼之御差引ニ叶ひ難く候ニ付、御番所外川通江彈捨、是を手入之上撰立候を、三番彈鏈と唱へ、銀銅ニ吹立申候、且金直之儀、以前は灰吹銀壹貫目ニ付、金三拾四兩三分餘ヲ目當ニ仕候處、南鐐吹立之積りを以、金直追々改候、當時金五拾五兩餘ヲ目當ニ粉吹仕候、

銅鏈粉成方之事

一毎十日致山下ケ候銅鏈荷藏江入置候分、又貫目改帳面ニ記し、石扣之ものへ相渡、金場ニ而細ニ扣きさく旅と名付候丸旅ニ而揮ひ通し、右扣粉溜置、追而板取之者へ相渡申候、金場補理方之儀は、本途勝場粉成方同樣ニ御座候、

一石和之者さく床ニ而篩ひ通し、溜置候粉を貫目掛改、帳面に記し、七拾五貫目宛相渡候ヲ、元汰渡しと唱へ、其分立桶と申ものへ入、杓子を以掻廻し、桶之側を杓子にて幾度も叩き候得ば、荒砂は桶底ニ居付、細か成砂は上通り江居付、至而之こま砂は濁水に浮ミ候間、其程見計ひ濁水をば上船と申へ汲込置、暫々居付せ、段々ニ栓ヲ抜、悉く上は水ヲ吐キ、右之居付候こま砂を取揚、ねこまニ而流させ板ニ掛ケ汰物取揚候をこみと唱へ申候、又以前之立桶底ニ居付候砂を板ニ而ゆり汰物取揚候を元鍰と唱へ申候、其上通りへ居付候こま砂をつらと唱へ、是又汰物取揚、是ヲ元面と唱へ申候、

一右元面之節、板先江汰り落し候砂を先砂と唱へ、磨挽之者へ相渡、當時溜鏈歩ニ付一日ニ付八拾四貫宛挽洗させ申候、右之先砂を立桶へ入、元汰り同様に立杓子ニ而掻廻し砂ヲ居付せ、荒物と面とを取分ケ、此つらを磨面と唱へ、是又汰物取揚申候、濁水ハ前同様上船へ汲込置、此分ヲ溜者と唱へ、元汰之こみ同様居付せ候を取揚、ねこ場ニ而流し、板ニ掛ケ汰物取揚申候、扨又右之立桶ニ居付候荒砂を取揚、板ニ掛ケ汰物取揚、是ヲ中実儀面分砂子と汰分ケ、小板鉢と申桶江溜置、小板揚と名付、其汰物を又汰返し候へば、汰物之内ニ少し残り候、砂は先へ落し汰物は板之中程ニ溜り候ニ付、器物ニ入置申候、右之通り毎日取揚候汰物鏈場仕舞ニ目形掛改、帳面記し箱鎖江入掛役人符印附置申候、

一板取之者汰物取揚候節、板先へ汰落し候砂を一ト通り磨江掛、前文之通り中実汰物取揚候先砂は溜置、追而川ニ而流返し汰物取揚申候、流し方之儀は筵或はねこだを敷、流し留候而溜置、是又板ニ掛、汰物取揚申候、且銅鏈粉成方之儀は、本途磨場銀鏈と違ひ、一體銅氣重ニ而銀氣ハ薄候ニ付、先き〱砂之分細害ニ挽返候而者御入用ニ引合不申候間、右之通取計ひ申候、然れ共鏈石善悪ニ寄、其時々見計ひ銀粉成同様ニも取扱申候、磨場補理方之儀ハ、本途粉成方同様ニ御座候、

尤上之分ハ扣粉馬之尾ふるひに而ふるわせ申候、

一水筋取揚方之儀、馬之尾篩ニ而ふるい候扣粉之元汰幷さくの粉こま共、霧突銀元銀溜置候分、一日限り板取汰直し候得者、板之手前江寄候物者則金氣故、能々ゆり詰鐵氣ヲ去り候ため、磁石を以掻廻し取揚、器物に移（此手頭筋砂採むと申候）ヲ是ヲ元筋と唱へ、總而先砂之類磨ニ掛ケ候、度々中突銀取揚候節、是又汰返し筋砂取揚候儀、右同樣ニ御座候、是ヲ磨筋ト唱へ元筋と打込申候、且汰物之内、元汰中突銀共荒き方を手挽之石磨を以（則銀磨之類ひ）挽返し細かになし、筋砂取揚候節直有之候、

一ねこ場之儀、先ツ横ぶと之木綿を敷、衆而上船と申江汲込置候濁水を流し候得者、銀銅氣無之砂は輕く候而、ねこ場之前へ流れ落、銀銅氣有之分は重き故、則木綿之織目へ止り候ニ付、程歷て木綿とも取揚、水を入候桶ニ而濯込候を打込と唱へ、右之打込ニ溜り候砂を澄し板ニ掛ケ、摺物幷右板先きヲ直流返し、こまかなる汰物取揚申候、此外砂先之流し方ハ鏈石之善惡ニ應じ、程々見計ひ、宜分ハ引込と申船江落し、濁水居付せ候得者、亦々取揚流返し汰物取揚、宜からざる分ハ流捨ニ直仕候、但ねこ場、補理方幷諸道具とも、本途勝場同樣ニ而御座候、

一生汰物燒入方之儀者、日々取揚溜置候先き〳〵迄之分打合せ、能々切交燒立申候、此燒方之儀、先土ニ而高サ三尺四方餘ニ塗立候竈江炭火を入、右之汰物貫目掛改帳面江記し候上ニ而握り堅め、右竈之内江積込、其上江濡れ筵を掛候得者、竈之下口ゟ風吹込、自然と蒸燒ニ相成申候、燒濟候得者、煙も立止候ニ付、得斗火氣ヲ醒し、竈ゟ取揚、猶又貫目掛改候得者、凡貳割程欠ニ相成、是ヲ燒汰物と唱へ、追而吹入申候、

〔山相秘錄下〕鐵山第五

凡ソ鐵砂ヲ煎煉スルノ爐場ハ、諸金中ニ於テ最モ大ナル者也、鐵砂ハ諸金中ノ最モ烊化シ難キ者ナルガ故ナリ、且又極テ濕氣ヲ惡ム者ナルヲ以テ、火處ヲ築クニ精ク、高燥ノ土地ヲ撰ブベシ、

火處ヲ築ベキ場所アバ、地下ヲ掘テ炭ヲ埋ムルニ宜シ、此ヲ鼓鞴ルニモ、風箱ノ風勢ニテハ、迚モ鐵砂ヲ鎔化スルニ及バズ、宜ク大宗蹈鞴ヲ用テ此ヲ鼓鞴ベシ、炭モ夥ク費ル者ナリ、故ニ其事ヲ廣ク業シテ、此業ニ便利ナル土地ニ築クベシ、

鐵山ノ業ヲ始ルニハ、迚モ小キコトニテハ利益ノ與ラザル者ナリ、故ニ何レノ鐵山ニテモ人夫三四百人ヨリ少キハナシ、大ナルハ八九百人ヨリ二千人ニ及ブ處モ有ルコトナリ、鐵砂ハ何レノ國モ在者ナレドモ、鑪場ヲ建ルニハ、精ク土地ヲ撰バズンバアルベカラズ、先ブ火處ヲフタベキ處ハ、高燥ハ勿論ノコト、其火處ハ地ヲ堀ルコト一丈許リ、其土ヲ取除テ、悉ク硬炭ヲ埋メテ搗固シテ、其上ニ埴土ヲ五尺許リニ疊テ搗固メ、其上ニ爐ヲ築クベシ、凡ソ人夫三四百人モアラバ、爐ヲ七箇モ築ク、爐ノ大サハ横リ三尺五寸位ヨリ四尺餘ニモシ圓クシテ、高サ六尺五寸位迄ニ築キ、爐ト爐トノ間ハ近クスル程利益多シ、略○圖

長爐ハ長サ七八間、幅七尺ヨニシテ、多々羅七挺ニテ吹ベシ、火爐ト多々羅ノ間ニハ、高サ二間厚サ一間、長サ二十間許リノ土壁ヲ築クベシ、然ラザレバ火熱極メテ甚シク、動モスレバ病人多キ者ナリ、又圓口爐ヲ並築テ吹モ、此ト大抵同キ者ナリ、凡ソ長爐ハ炭ノ費ヘ少ク、彼レ是レ利益アレドモ、下ノ穴ヨリ熱鐵ノ湧キ出ル勢ガ極テ強クシテ、不便利ナルコト多シ、土地ノ樣子ニ因テ損得アルベキコトナリ、故ニ七百尺以上ニ非ザレバ圓爐ヲ用ルコト古法也、

凡ソ鐵砂ヲ煎煉スルニハ、炭ヲ用ルコト甚ダ多キ者ニテ、常ニ鐵砂ノ駄數ヨリ三倍モ四倍モ費ルコト、心得ベシ、炭ヲ費スコト三四倍ニシテ煉リ成タルハ、即チ生鐵ナリ、所謂ル生鐵ヲ熟鐵ニ製スルニハ、六七倍ノ炭ヲ費ス者ナリ、又生鐵ヲ鋼鐵ニ煉成テ、炭ヲ費スコト、或ハ其駄數ノ十餘倍ニ至ル、故ニ鐵ノ爐場ヲ建ルニハ、山深ク樹木ノ極テ茂リタル土地ニ非レバ、絕テ爲スベカラザル者也、

鐵砂ニ十駄ヲ煎煉シテ生鐵ト爲スニ、常ニ六七十駄ノ炭ヲ費ス、且鐵砂ノ性ニ因テ熔化易キモ有リ、又極テ烊解シガタキモ有テ、夥シク炭ヲ費スコトアリ、殊ニ少シデモ溫氣ノ有ル土ハ何程炭ヲ費シ、精ヲ出シテ長ク吹ト雖モ、鐵砂ハ絶テ熔化ニ流ルコトノナキ者ナリ、故ニ溫地ヲ嚴シク忌ムコトナリ、溫地ニモ非ズシテ性ノ堅キ鐵砂ハ、玄明灰ヲ上ヨリ投ズルトキハ、卽チ鎔解ルコト妙ナリ、　凡ソ炭吹ヲ強クシテ鐵砂ヲ鼓鞴ルトキハ、其渣上ニ湧揚ル、俗ニ此ヲ津與志ト云フ、卽チ鐵屎ナリ、鐵ハ其質ノ重キガ故ニ漸々鐵屎ト分レテ下ニ沈ム、朝六ツ半時ヨリ吹キ始テ、日ノ暮レ方ニ下ノ穴ヲ決テ、其鎔化タル鐵湯ヲ流シ出ス、此レヲ生鐵ト名ク、卽チ俗ニ云フ鍋金是ナリ、　又下ノ穴ヲ決ズシテ、翌日モ三日目モ其ヨモ火ヲ消サズシテ取ニ、稍々ト此ヲ鼓鞴テ能ク煉ラシ、六日目七日目頃迄ニ少シヅヽ流レ出シテ、其色ノ赤キトキニ鐵脉ノ上ニ載セ、大鐵鎚ニテ鍵鍛ヲ長條ト爲シタル者ヲ、俗ニ氣羅ト名ク、卽熟鐵ニテ奈眞鐵トモ菊伊鐵トモ云フ者是ナリ、又爐內ニ炭火ヲ強クシテ、鐵砂ヲ入テ扇爐ヲ鼓鞴コト一日一夜、宵モ其火ヲ消サズシテ、時々コレヲ鼓鞴ツヽ、十日餘リモ煎煉シ、穴ヨリ流シ出ス時ハ、卽チ鋼鐵ト爲ル、故ニ鋼鐵ヲ製スルニハ、炭ノ費ルコト最多ク、鐵モ亦鐵屎ト爲テ減少スルコト半ニ過ル者ナリ、且又鋼鐵ヲ製スルニハ、種々ノ法ノ有コトナレドモ、皆製煉術ノ業ニシテ、山相ノ事ニ明カナラザルヲ以、此ニハ其ノ論ヲ擧ゲザルナリ、

〔日本山海名物圖繪 一〕鉑石くだく繪

山よりほり出したる鉑石をもち出して、うちくだく、これをかなめといふ、故にその槌をかなめつちと云也、鉑をくだくはおほくは女の所作なり、鉑を入て背負うつは物をゑぶといふ、ゑぶの正字はいまだ詳ならず、又はくも鉑の字正字にあらず、鉑は金鉑銀鉑のはくなり、字彙にいはく、鉑古猛切、音礦、金銀鐵璞也とあり、本字は礦なるべし、

鐵山の繪

鐵は堀出したる土ながらに水にながして鐵を取るなり、あさき流川にむしろをしき、その上へほりだしたる山土をながしかくれば、鐵はむしろの上にとまり、土は皆ながれ行なり、　石見、備中、備後の三ヶ國おほく鐵あり、備中に眞金ふくといへる歌あり、古今集にのせたり、延喜天皇の御時、すでに備中におほくかねを堀たると見へたり、かねは金銀銅鐵の總名にて、鐵は黑金也、鐵肝鍋、

鐵をふくには、ふいごにては湯になりにくし、故にたゝらにかけて湯にわかすなり、

歌　ひとすぢにはげむ心の力なわまがねもつゐに湯とぞなりける

まがねふくしづのいとなみいとまなや身のいたづきも思ひしらずて

〔山相秘錄下〕水銀篇八〇中略

凡ソ水銀ヲ升煉スルコトハ、先辰砂石ヲ搗テ細末ト爲シ、此ヲ竈内納テ升煉ス、其竈ヲ造ル法ハ、壇土ニ砂ヲ和シテ透間隙間ニ其泥ヲ塡シ、外圍ヲ板石ト瓦塼ヲ用テ墻トシ、其内ヲバ壇土ヲ以テ塗リ、高五尺許リ、徑リ三尺五寸許リノ圓竈ニ造リ、竈ノ中ニ深サ一尺四五寸、徑リ二尺許ノ鐵釜ヲ塗リ込ミ、竈ノ下方ニ火ヲ燒ク穴ヲ開キ、其[illegible]ノ内ニ、水銀鑛ノ細末ト極上石灰トヲ等分ノ合和シタルヲ釜ノ七分許ニ納レ、上ヨリ鐵釜ノ底方一寸ヨリ孔アルヲ以覆テ蓋ト爲シ、其縫合ヲ三和土ヲ用テ固密ニ塗リ塞ギ、其上釜ノ底ノ孔ニ圖ノ如ク弓形ニ作リタル土管ヲ動カザル樣能ク縛リ著テ、鹽泥ヲ三和土ニテ塗固メテ氣ノ漏レザル樣ニシ、略〇圖其弓形管ノ端ヲ半分許リモ水ニ入レヲキ、而後ニ下ノ穴ヨリ强ク火ヲ燒クコト四五時ニ至ルトキハ、含有ノ水銀悉ク上釜ノ小孔ヨリ飛ビ升テ、弓形ノ管ヲ通リ、別器ノ水中ニ溜ル者ナリ、此ヲヨク冷シテ二釜ヲ取除ベシ、上釜ト下釜ノ合縫ト上釜ト弓形管ノ合縫シ、少シニテモ氣ノ漏ル所アルトキハ、水銀ハ悉

灰吹

ク其透隙ヨリ飛ビ去テ、水中ニハ集リ溜ラザル者ナリ、能々意ヲ用テ封固スベシ、

〔山相秘錄上〕金山第二

凡ソ灰吹ノ法ヲ行テ純金ヲ取ルコトハ、近來銀ノミニ用フ、金ニハ行フ者少シ、故ニ此ノ法ハ銀山ノ條下ニ此ヲ講明スベシ、凡ソ金ノ山中岩石ヨリ採タル者ヲ山金ト名ク、其色深黄ニシテ甚ダ美ナリ、又土中、井中、海砂中、流水中ヨリ出タル者ヲ水金ト名ク、其色淡黄ナリ、故ニ山金ヲ第一等トシ、水金ヲ第二等トス、

凡ソ黄金ノ出タル儘ニテ、未ダ燒煉セザル者ヲ生金ト云フ、生金ハ試石ニ著ザル者ナリ、既ニ煉煉ヲ歷タル者ヲ熟金ト云フ、熟金モ初煉ハ色尙淡シ、其煉數ノ累ルニ從ヒ其色益深シ、故ニ七青、八黄、九紫、十赤等ノ品級アリテ、試石ノ上ニ塗ルトキハ、皆ダ分明ニシテ、立ニ其級ノ現ル者ナリ、

〔銀山舊記〕鏈灰吹方取扱略○中

一灰吹銀仕様は、灰吹床と申土間に、差渡し三尺程の丸の内に、くぼみを付、其内に厚さ七寸程灰を入、其上厚壹寸、中灰と申灰を入、其上厚三寸程上灰と申灰を入れ、但上灰は海邊にて鹽燒候松葉灰也、此上に水を打、わらを敷、床尻鉛を置、其縁廻りぬれ筵を以詰め、鉛の上吉き炭を置、火を入、吹立候へば、鉛解候時、樸椿樫類の三尺廻り程の木を貳本渡し、其上にぬれ筵石灰等を置、火氣もれざる樣に致し候へば、右木炭の火勢にて、鉛と灰は引、正銀は留り申候を引上げこま〴〵に切り、大概目方貳百六十目宛程を裏目銀壹枚に心當、右濟吹に持參致候、凡上銀貳百五拾目位に相成申候、

〔銀山方覺書〕灰吹之事

一床凡四尺四方

右者重モ灰、輕灰を等分ニ合、すいのふニ而能振ひ、右床之内へ入置、炭火を入、隨分灰を燒キ、爐作

りと申鐵道具を以押かため、鑪之尾ニ而差を直し、右南蛮屋鉛壹れ至蒸候、銀鉛交候荒鉛を鑪之内江入、其上へ炭火を置、吹子壹挺ニ而吹解し、吹解候ニ隨ひ、寄火箸と申平ラナル鐵道具を以、右湯之中江灰を少々宛すくい込、鑪之ふちへ次第塗付候得者、鉛は不殘灰へ吸込、銀は其上ニ丸く相成候ニ付、暫ク吹子差當候得者、銀之湯色顯れ、かぶり候とて、赤々湯色一面引渡し候ニ付、直ニ吹子相止メ火を取除、吹子ニ而吹さまし、又は水を掛ケ、火箸を以網起し申候、右之銀を荒灰吹と唱、六才銀ニ上灰吹ニ吹立申候、灰内江吸込候鉛を留鉛と唱、留鉛流しと申候而正鉛ニ吹立申候、

上灰吹之事

一荒灰吹を上銀ニ吹立候儀は、三四升入之鍋ニ灰を入、眞中ニ爐作りと申灰吹多少ニ應じ爐形を入廻之、灰ニ水を打能く押かため、右爐形を拔取、其内江灰吹を入、廻りニ長四五寸ゟ七八寸位之宜堅石を四方ニ積置、中江も小まかナル炭火を入、小吹子壹挺ニ而暫ク差當候得ば、灰吹銀吹解候ニ付、鉛を少々差加、此鉛ニ而銀湯をさやし、猶又さやし木と申候而、凡長貳尺位之はうその木を、銀湯之上ニ而燃し候得ば湯色さへ、玉湯と申露の樣成湯色顯れ、又々紫之樣成湯色顯れ候ニ付、吹子ヲ相止メ炭火を取除、上銀さめ候節、火箸ニ而廻りを寛ゲ、鉄を以取上ゲ申候、右荒灰吹ゟ上銀ニ吹立候吹欠、凡壹割位ニ御座候

(銅山稼幷鉛成吹取扱一件)灰吹之事

一下り地壹貫貳三百目より四五百目程迄壹枚

右南蛮床幷銀床ニ而絞取候下り地、銘々目形掛改候而ニ記し、灰吹床江廻し申候、灰吹床之補理方ハ、本途同樣眞中ニ鍋を置、其中へ灰ニ而爐を丸く造り、其中へ右之卸地を入、上ニ火を置、能吹解候節、火を除、鞴羽口之所ゟ向江短なる渡し鐵を置、其上へ大ぶり之炭を渡し掛て、火をも乘せて、靜ニ鞴を差し吹解、火箸之先ニ而少しづゝ、灰をすくい入、火箸ニ而掻廻し候得者、鉛氣ハ段々

灰ニまみ、幾度もいたし候へば鉛氣灰ニ染切、山吹銀眞中ニ殘り候、是をかふると唱へ申候、其時輔を强くさし吹すわり候節火を除、水を打、能冷し取揚候上、裏ニ付居候爐滓を落し、掛り役人江差出候ニ付、目形掛役帳面ニ記し申候、鉛氣之灰ニ染込候を爐滓と唱へ、是又帳面ニ記し汰物吹立候節、鉛之代りニ遣ひ申候、

〔上杉編年文書〕銀中入候、仍諸國銀子灰吹、并筋金吹分之事、堅御法度御座候、其意趣は、灰吹或筋金吹分候とて、つくり銀を致候により、右之通被仰出候條、御領分急度可被仰付候、若背御法度吹候もの於有之は、可被成御成敗旨御諚候、恐々謹言、

慶長十四(朱書)
五月三日

大　石見守
村　茂助
成　隼人
安　帶刀
本　上野介

直江山城守殿

〔銀座由緒書 家傳史料所收〕往古者、白銀位不相定、諸國銀山ゟ堀出候灰吹銀之儘を以通用仕、國々銀之位不同ニ付、諸國一途ニ可被爲成旨、權現樣思召を以、慶長六丑年五月、銀座御取建被爲成、先祖之者共座人ニ被爲仰付、手本銀として、銀位上中下、角一文字、夷一文字、大黑極印等之率備御上覽候處、大黑極印之銀可然旨被爲仰出、則堺町人大黑屋常是と申もの、吹人ニ相定、追々吹立、天下一統大黑極印慶長度之銀通用と罷成申候、

右之通にて、世上に通用仕罷在候灰吹銀、并山方ゟ堀出し候銀等、追々銀座御役所へ引替取候而、

慶長之銀に吹立申候、略○下

〔朝野群載　三〕對馬貢銀記

對馬島者在本朝之西極、中略 其採銀之地極爲險難、多年穿堀、坑中漸深、自口入底二三許里、日月之光不得照之、三人連手以爲一番、一人秉燭以炊炬把、里許也、不能久居、一人採器、一人持鑵取之、數畢歸入常法三人、其後量於斗斛、置之於高山四面受風之處、以松樹薪燒之數十日、以水洗之、解別定、其率法、其灰爲鉛錫、滿千二百兩以爲年輸、推其事功、不可勝計、若不追之時、雨水口壞、三四百人連塵於坑中、役水出坑猶如行者、三里之水漸々傳出、費民力、盡人功、可長大息、其人夫所須年穀米二千二百餘斛、支分於管内諸國、皮幣海向、絶域濟之最重也、

〔金銀山取扱一件〕間切と云は、前段立チ合引方を考へ、新タニ草際より穿候を草見立と云、又何間歩にても、其山ニ引來り候立筋を考へ、鋪所の外新規の所江穿候事を間切と云、畢竟敷内の大道を開くの儀故、大道間切と云、段々切延候跡にて、左右ニ入候事を横貫と云、是は延尺ニ隨ひ段に達候故歩捜と云、歩とは鏈の替名なり、扨切始め候時、山師立筋相考、或は立合追とも横貫とも極メ候而、切形方尺或は丸形間切は差渡し何尺、脇基類は中か也何尺ニ左右高何尺抔と相定メ、此積りを以切延の丈尺一ヶ月ニ何程と請負ニ而爲切候、尤山の堅サ和らかさにて、一ヶ月之入用高多少有之候、右間切場所申上候得ば、御入用を以御切被下候、依之來月分延請負入札之前、頭數役人井穿鑿下掛り數役人より切手帳差出申候、都而穿鑿懸り取扱請負延尺少したりとも切不足致し候得ば、割合を以御入用引上、延尺壹割以上切不足相立候得ば、割合通り引上ゲ候は勿論、其外過怠引として御入用高之内壹割引上ゲ爲相納申候、

鉢合穿と云は、間切之延を穿候もの勝負を論じ、出精致し穿候事をいふ、是は定メ之賃錢之外ニ褒美銀として增をかけ、一はち合と云を三晝夜ニ定め、延尺穿勝候方へは、穿劣り候もの方

より、定之賃錢不殘相渡し、負候者は三晝夜分計り取申候、是を聞こはち合と云、

一步鉢合と云は、穿石貫目之多少を論じ候事を云、火繩鉢合は數々ニ火繩を立テ、長何寸立チ候內穿石貫目何程と、大工ども銘々の精粗を記し置、貫目多之者江褒美銀を掛ク爲ニ切候、是等は三晝夜ニ不限、晝計りニ而も夜計りニ而も致し候事故、小き鉢合ニ而候、

一間切場所之向ふを引立、天井を冠と云、同左右の角を隅々と云、急度角どを立候義也、

一間切延候內出候、右ニ交り有之候薄鏈をのみへず鏈といふ、切山と云も間切の小き事ニ候、是も切方方尺、并賃錢相極メ一十を日ニ延、何尺切可申爲縄候事なり、且當時は大工何人分と定め延尺爲縄申候、總而間切之山とも、請負の日限仕舞候得ば、山方役、御目付役、穿鑿掛、御番所役并山師、振矩師、右場所江罷越延尺相改メ、鑿角にて切結之所ニ小き穴を穿、穴之外升形とて、四角ニ印を穿付候、是は古鑿角不紛ため之目印ニ致し候事なり、

但、間切にても切山にても、切形竪橫之方尺改め候定矩を板かせと云、又鉢合穿に而晝夜左右江穿分ケ候節は、壹番先江穿候所を半分之定矩ニ而改メ候、是を割かけと云、本文之通り、右切形改メ相濟ノミ角打候義切結、其所ニ而は難打候ニ付、貸間とて切結より少し手前にのみ角升形附置候を、此のみ角より切結迄之寸尺を請人江貸し置、重ネて請前延穿仕舞、改メ之節のみ角ゟ切延まで總延之內、右貸間を引、殘正延相極メ申候、拐本間切には傍示とて木を角ニ削リ、間切之始メ切終リ之月日、并延尺書付鑿角之所に立て置候古法に候、

一釜之口と云は、間歩口釜之口に假候義を以名付候歟、此釜之口之補理左右に柱を立、桁を渡し、拐左右とも畑木をならべ、土石の不落樣に圍ひ、屋根之所を細木を木口を揃へ並べ、上に石垣を小高く並べよく築、是を釜ノ口化粧棚と云、此間歩口を柱四本建候而山を留候故、以前は四ツ留とも云、間歩口より外と、御番所廻り之義を總而岡廻りと云、

一廊下と云は、釜ノ口より內江段々穿入、立合ニ切り當候得ば（立合ニ切留候事なし、鏈ニ付と云、鏈ニ切當候事なし、鏈ニ付と云、）其立合をまるべに、東西とも南北とも間切を立直し切候故、自然と三方、或は四方江別れ候、是を三ツ辻の心ニ而三ツ合と云、此三ツ合迄之通り筋平地之間を廊下と云、併間切ニ而鏈ニ切留稼所を敷と云、是は先ニ有之通り、かなこのも一概分ブ、分ケ候て相稼候、是を一株とも云、鏈穿出し候所を切場とも云、穿場所とも云、右稼所ニ而天井の事を冠とも操上ゲとも云、向ふ所を引立タと云、右之方を鍵手、左之方を鑿手と云、下タニ踏候所を臺と云、左右の地山を方手と云、敷內にて下た江下り踏候所を臺通りと云、中通りを中敷と云、上通りを上敷と云、　敷內土氣無之、岩計りを穿抜候をかなぐりと云、地山堅き所をかたかり、和か成をやわらぎと云、

〔見聞集記三十四〕一稼所鏈引細く成候は、又者鏈の有樣にて稼方により穿場手狹く成、大工の働難成候へば、鏈穿候外に大工をかけ、左右前後切廣ゲ候、是を切廣ゲと云、是又本文之通、六ツの鏈四ツの鏈共致し候へ共、六人分賃銀を入用高にて請請に致し、鏈帽并歩はち合の鏈にも致し候、

一普請と云は、切廣ゲの鏈には候得共、切廣ゲは切場一體を廣く致候義、普請穿は鏈をか穿留、左右の地山を穿候て、鏈の穿勝手の能樣に致候を云、依之入山ゟ五六の日迄普請致し、七の日鏈穿候て、八の日の荷賣出し、又其跡普請穿致し、荷分前日ゟ鏈を穿申候、毎十日如此相成候、前方は翌十日の仕込として、二の日かなこ共自分大工にて敷々普請致候得共、敷內不景氣にて鏈出來劣候節は、かなこ自分大工にて、其十日の鏈を穿せ申候、

一貫目穿と云は、歩はち合に似候得共、是は大工穿歩、假令貫目壹貫目に付、賃銀何程と究爲穿候得者、強き大工も弱き情次第穿申候、尤地山堅さ和さにより、賃銀の高下は有之候、

一さつさ穿と云は、急に穿らせ不申候では不叶と云時に、褒美銀を多くかけ、大工を大勢いれ、頭大工の者、役に付居候て被不申候、一情ブ、入替爲穿申候、是をにぎり替り共云、貫目穿、さつさ穿

とも、切場に限り候事にも無之候得共、間切切山等に者多く無之稼に候、

一一十日中其數々へ可入極めにいたし候大工を差組大工と云、此約束を違ひ、不參の大工を迯大工と云、一十日の内一日にても、無謂不參の大工を番欠大工と云、番欠大工の代りに外より雇入候をかけ穿大工と云、外よりかけ持にいたし候と云意也、壹番は差組の山に勤め、夜番は他山へ參候をまたぎ大工と云、是もかけ持の意也、打かへ大工と云は、一の日迄は御入用大工を入レ、荷分ヶの日、かなこ自分入用の大工を入爲穿候事を云、前夜迄は差組の大工穿候に、かなこ大工入代り候を打守と云意にて名付候事也、頭大工(數頭 兩頭)と云は、大工の内にて慥成者差働も有之勿論、大工の業も勝れ、穿場大工の掛引も功者に致し候者にて、一數に壹人貳人ブヽかなこの者目利にて申付、大工の頭取に極置候、是を數頭と云、兩頭と云も右同様ながら、是は立場向差働入用物等取締鏈積方、其外一體建場の諸用かなこに替り相足候程に致候、依之賃錢も並の大工よりは增候て、かなこ共より取せ候、

一き横

是は土器に燈心を多く入、火口をふとくいたし燈し候を云、

一もみ横

是はしもみ燈心とて、燈心を繩の如く大きに致し、釣の中に燈し候事を云、

一すひ口

是は板の上に土器を二ッ三ッも寄せ、火口を一所に致し燈候、

一重手

是は土器を重ね候て、上にも下にも火を燈し候事を云、

一集

是は丸箱の中をへな土にて、右土器の總廻りゟ段々に並べ上ゲ、眞中に穴を明け候て、穴の中ゟ火登り出候樣に致候事也、其形鳥の巢の如く成と云事にて巢と云、右き横ゟ是迄にけたへ候場所に致候事にて、不斷は是なし、

一矩定場

是は敷内に木を渡し、板を張り、筵を敷、頭大工の者罷在、大工の穿候鏈石貫目等相改候處也、大工共休居候處をも、右に准ジ矩定場と云、

一右敷々にて穿候鏈石を荷揚穿子負揚候得者、御番所庭にて貫目相改候、是は右荷揚穿子の賃錢相極候ため掛改め御番所役帳面に記し置、一十日相濟候得ば、穿子名別銘々貫目仕譯賃錢相極、穿子入立請方の者賃錢相渡申候、

但賃錢極方の儀、穿子請負人方へは、縱令大工拾人にて相稼候敷へは、荷揚穿子何人入立候と云定にて、壹人分の賃錢何程と極め、御入用請取置、且本文鏈貫目にて賃錢相極候と云は、前段に有之、上敷中敷敷通りと敷内遠近を分け、右場所により貫目何程負候得者、壹人分賃錢相渡候と云定にて、一十日分負揚候鏈貫目を、右三段の貫目に割付、錢は上敷何百貫目負候故、何人分取候と極、急而請負人受取置候、御入用錢を以請負人方ゟ相渡候、

右御番所にて掛改候鏈建場へ遣候、此建場と云は、御番所内裏に有之、かなこの者自分入用ヲ以建置、平日此所へ相詰罷在、諸御用相勤一體稼方諸道具等差置、鏈石撰立等致候所を建場小屋と云、且右鏈建場に而、又々かなこの者壹荷々に貫目を改め、敷内より書付入遣し候、大工名前を分ケ記し置候、（是は前段大工貫目極置候爲也）御番所にて貫目改候得共、是は荷揚穿子敷内ゟ五荷七荷拾荷程ヅツ一度に負出、總貫目計りを知候故、建場にて　又々一荷ヅヽ銘々掛改候、掛改濟候得者、さく旅とて大きなる旅に打明ケ、水桶の中にて沾り洗ひ候得者、細か成旅の下にぬけ候、是をこま鏈と

云、旅に留り候大振成は水場とて、三四尺の四角なる箱を扒置、此中へ打明ケ候時、又旅に細かなる鏈發り候、是をばら鏈と云、別に致し置候、ケ様に手配り致候事を鏈を仕込と云、鏈石仕込候より、總じて建揚廻りにて相働候者を、どべの者と云、どべは泥土の事を云ならはしたるか、かなこの者、無給にて小遣に致候者なり、猶末に志るす、

〔見聞雜記三十四〕一吹破　風穴　石間　連立テ合の內穿通り候內五寸、壹尺、或は三四尺程の穴出候、是を吹破と云、其所は必地山堅く候、金氣强く地山を吹割候也、此吹破出候跡にて盛を得候事、古來ゟ度々有之候、吹破の內には水晶石有之、風穴と云は吹破の小きを云、至て小きをば鼠風穴と云、石間と云は、立テ合の內にても、磐の內にも一片づゝ隔有之、是をへだてと云、ケ様の所は水を溜候へば自然と吸取候、亦地山を扣き候へば、鏈音抔ちかく聞候、是を石間と云、

〔梅津主馬政景日記〕元和三年三月二十八日、略○中院內銀山大切山水貫四ッ五ッ久敷番請致、今少に候得共、山仕共、すり切ぎりやう不叶候間、鋪に付候事不能成候間、捨に被成置、御米に借被置候て可然かと申上候へば御合點に候間、山仕共にふしんを仕、今一度相尋罷歸候上申上候へと、伊外記に申理り候間可参由申候、

〔鑛山聞書序〕予幼年之頃、父母に隨て銅山に養れ、父祖より相傳處の下財の業を聞覺、猶壯年に至て、名有金場に每事尋聞て、其道を學び、是を我胸中に秘して、唯一身の日用たりなんの望みを思ひて、舊溜たる事一ッもなし、然れ共愚息に傳ふべきの爲に、今既に方寸の胸を開集め書す、下財を營み世を渡る者、農工商の道には、曾て不知、十國十山を家として一生を送る、然れ共其利筋に暗き時は、必諸人の先達に立がたからんか、慶長年中に東照權現御定之法式、往昔明曆二年、出羽國秋田郡向銀山に定足場、伊豫國別洲立川、佐渡國金山、紀州熊野銅山、丹波國雙野銅山等に定流義、夫より諸國諸山に法式を定、中ニモ日本の始は、金花山より黃金を內裏に奉りし式を集、今世に

行はゝ、流儀は、岩戸開き、外記流、振袖流とて、三派有り、中にも岩戸開きは宗元にして、専神道を學び還す、以て數を世に殘す、然るに予既に五十歲に及び、餘命久しからざる事を思ひ、依之胸中に貯たる所の九牛が一毛、愚子の愛情におぼれ、後人の誹をも不顧、一冊として微言を筆にとゞめ殘して、金堀の一助とす、汝是を常に修錬して闕たるを補ひ誤れるを正し、他見する事不可有之、是則人の薄智微言を笑はん事を恐れ可避而巳、

于時天明五年乙巳正月吉日　　赤穂氏滿矩

〔山相秘錄上〕金山第二〇中略

凡ソ金山ヲ開發スルニ、含有ノ金ノ多少ト、其鑛有スル處ノ高下ト、土石ヲ穿ルノ淺深トヲ豫メ知ル術算三要ノ秘訣ハ既ニ上ノ總論篇ニ記載セリ、術算既ニ定テ開坑ニ事アラント欲セバ、先ヅ其山ヨリ湧キ出ル處ノ水泉ノ脈絡ヲ審ニシ、窩水ノ水平ヲ測量シテ、流作リ樋ヲ架ス等ノ難易ヲ計リ、且ツ又近傍ニ炭ヲ燒キ出スベキ山ノ有無遠近迄ヲ熟察シ、精々利害損益ヲ詳辨シテ、而シテ後ニ開坑ノ業ニ從事スベキナリ、

蓋金含有ノ山ハ、水ヲ含有スルコトモ極テ多キ者也、故ニ先ヅ其水ヲ窩スルノ策ナケレバ、其水悉ク坑内ニ聚リ來テ、金鑛ヲ掘ルコトハ扨ヲキ、鑛夫等ノ出入スルコトモ能ハザル者ナリ、故ニ別ニ窩水ノ法アリ、又金鑛ヲ堀出シテ此ヲ鼓韛ニ及テハ、夥シク炭火ヲ用ルコトナリ、故ニ先ヅ此ニ事ヲ豫メ計リ置ニアラザレバ、必ズ手寄スルコトナリ、

凡ソ金山ヲ開發スルニハ、數多ノ鑛夫及ビ匠人、柚、炭燒、土鍛冶等ヲ會シ、先ヅ役所ヲ建テ、小屋ニ作リ、周圍ニ悉ク柵欄ヲ丈夫ニ結ヒ、門ヲ立テ番所ヲ居、嚴ク出スモノヲ考覆スベシ、入ル者ヲバ尤メズシテ、出ル者ヲ禁ズルハ、古來金山ノ定法ナリ、且又人數ヲ役フコトハ、其ノ秘事多シ、故ニ別ニ鑛場法律ト名クル一子相傳ノ秘書アリ、凡ソ鑛場ハ其法律ヲ善ク查スニアラザレバ、或ハ

人氣和セズシテ、爭論一揆等起テ騷動ニ及、或ハ鑛夫、鼓鞴、諸職人等、其山ニ居ルコトヲ樂ズシテ悉ク離散シ、或ハ財用甚多ク費テ、其損毛補フコト能ハズシテ、遂ニ廢山ト爲ル者ナリ、殊ニ山開ノ最初大祭禮ヲ行フコト、金山第一ノ大事ナリ、

我ガ翁ノ山ニ祭ノ法ニハ、皆世人ノ意外ニ出タル奇妙ナルコトアリ、故ニ神人共ニ歡喜娛樂シテ金ノ出ルコトモ多ク、其山大ニ繁昌セリ、

凡ソ金坑ヲ開クニハ、出石ノ在ル處ヲ逐ニ漸々深ク穿入コトナルヲ以テ、土石崩壓ノ患ナキコト能ハズ、故ニ地ノ門首ヨリ左右ニ周圍三尺許ノ栗丸太ヲ搘木立テ、上ニモ丈夫ナル木ヲ棟ニ架シ、其形ヲ華表ノ如クニ組上テ、以テ土石ノ崩壞ヲ防ギ、次第ニ進テ金鑛ヲ鑿採ルコトナリ、若シ泉ノ湧キ出ル處アレバ、卽チ樋ヲ用テ其水ヲ左右ニ流ス、故ニ坑中ノ路ノ左右ハ、皆必ズ小溝ナルモノナリ、門首ヨリ五六間モ深ク入ルトキハ、坑ノ中ハ眞ノ暗闇ナルモノ、坑鑛夫等ハ細キ篠竹ノ一方端ヲ燃シテ篝火トナシ、其竹ノ方端ヲ各々ニ齒ニ加テ、往來奔走シテ其業ヲ勵ム、故ニ坑內ハ頗ル煙氣ノ苦シキ者ナリ、

○銀山第三○中略

旣ニ銀礦ヲ探索得タラバ、先ヅ其礦ヲ末ト爲シテ、風箱ニ掛テ此ヲ吹キ、銀ヲ含有スルノ多少ヲ試ムベシ、此ヲ間吹ト名ク、間吹ノ法ハ、礦砂一升ヲ吹キ、銀六分得ルヲ上等トシ、四分得ルヲ中等トシ、三分得ルヲ下等トシ、若シ又銀九分得ルヲ小滿ト名ク、一匁二分ヲ中滿トシ、一匁五分以上得ルヲ大滿ト名ク、古來間吹ニ大滿ヲ得タル銀山アリシ例ヲ聞カズ、大抵中等下等ナル者ナリ、抑モ間ヒ吹ハ、山外ニ現レタル如キ膚近キ石ノコトナレバ、銀ノ多ク出ルハ實ニ稀ナルコトナリ、故ヲ以テ下等以上ノ山ナラバ、其銀少キ礦ヲ鑿リ採テ、漸々深ク堀リ入ルトキハ、大ニ山ノ直ルコト多シ、故ニ此山外ニ現レ出タル銀ノ少キ鉡石ヲ銀苗ト名ク、銀礦ノ地上ニ出タル端首ナ

ルガ故ナリ、且又鉱苗ヲ始テ穿鑿タル上ニ、此ヲ間ヒ吹スルニハ、知ラデハ叶ハザルノ一大事アリ、其一大事ト云フハ、外ノコトニアラズ、其間吹ニ用ル鉱礦ハ監採ルモ、末ニスルモ、此ヲ風宮ニ掛ケ吹キ立ルモ、親密ノ手人ヲ用テ坑夫等ニ総テ任カスルコト勿レ、此間吹ノ一大事ナリ、○中略凡ソ鉱山ノ坑ヲ鑿ルニハ、門首ヨリ能ク念ヲ入テ金山ノ坑ヨリハ、格別ニ丈夫ニ普請スベシ、鉱ハ金ヨリモ数十倍多ク出ル者ナルヲ以、礦砂ヲ鑿リ出スコト甚ダ大ニシテ、金鉱ニ比スベキ類ニアラズ、故ニ縦丸太節材木モ、三四尺圍ノ以上ナルヲ用テ、積木棟梁等ヲ手厚クシ、以テ崩壓ノ患ヲ防ギ、其坑内ヲ廣ク掘リ、泉ノ湧出ル處ニハ樋ヲ架シテ、左右ニ落トシ、坑路ノ左右ニ溝ヲ通シテ、其水ヲ坑ノ外ニ流出シテ坑夫ト運夫ト諸職人等ノ奔走ニ便ズベシ、

銀鉱ノ極テ多ク出ル山ハ、其山ノ一二分通ヲ悉ク鑿トル者アリ、故ニ坑ノ普請ハ堅固ニスルニアラザレバ、或ハ崩壊ノ患アル者ナリ、且又泉ノ湧キ出ル浮モ、山ノ模様ニ因テ、鉱坑ノ外ニ水溜ギ穴ヲ掘ラザレバ、叶ハザル事モアル者ナリ、故ニ鉱山ノ開発ハ頗ル廣大ナル業ナリ、

〔鼓銅圖録〕礦石を採る圖

銅を出す山には必鏈と云もの有、鏈は銅の精氣にして、蔓筋の山上に現はれ出るなり、鏈に種々あり、色赤黒く軽く軟にして、條路東西に延たるを好とす、山金司此鏈を見分ちて矢板樋柱など云ものを用て、四ッ留を作らしむ、四ッ留は坑口なり、さて鎚鑿を用て切こみ、石を切すて礦石を採る、漸々深く入りて、坑中を鋪と云、蝋燭を燃し、切たる石を籠に入背負出す、堀たる跡へは、矢板樋柱を用て留め、崩壓を防ぐなり、礦石に善悪種々あり、鋪深くありては風通はず、氣こもりて燈燃らぬゆゑ、鋪石の上の方に又四ッ留を作り、切込み、本鋪と今あけたる鋪と、所々切透すを、尺八と云、風氣を通はす爲なり、これを風廻しといふ、

〔蒹葭堂雜録五〕石。石炭は中國九州等より多出せり、俗に五平太といふ、按に、其初五平太といへる者

鑛坑

の掘出せしものならん乎、鹽濱の薪に代てこれを用ゆ、其石炭を取こと金銀を掘出すに同く、山を鑿、穴を爲て、左右上等に丸木を以て圍とし、漸に鑿入こと數十丈、取得て外に出るに、穴の口上低きゆへ、石炭を入たる籃を引て、四這になりて出る、其形勢圖するが如し、尤此掘出す者は、其土地の產の農民などには非ず、五平太鑿とて、別にありて、諸國を廻て、石炭ある山を鑑定て、價を極め買切て鑿ち取事のよし聞ゆ、尤此石燒とき、臭氣ありて、家事の日用には用ひがたし、異名煤炭、石墨、鐵炭、焦石、烏金石と號、本草綱目に所謂、南北諸山出處多、古則書字故名之、今以代薪炊爨、煅錬鐵石、大爲民利、土人皆鑿山、爲穴橫入十餘丈取之、有大塊如石、光者有疎散如炭末者、俱作硫黃氣といふもの、則これなり、

〔見聞雜記三十四〕一釜の口と云は、間歩口、竈の口に似候儀を以名付候て、此釜の口の補理左右に柱を立、桁を渡し、さて左右共、細き木を並べて、土石の落ざる樣に圍ひ、家根の所を細き木を木口を揃ひならべて、上に石垣を小高く並、能築上ゲ候、是を釜の口化粧棚と云、又此間歩口を柱四本建候て山を留候ゆへ、已前は四ツ留共云、間歩口ゟ外御番所廻りの義を總じて岡廻りと云、

一廊下と云は、釜の口ゟ内へ段々穿入、立テ合に切當候へば、(立テ合に切當り候事を竝に付と云、鏈に切當り候事も竝に付といふ、)共立合をえるべに、東西共南北とも間切を取直し切候故、自然と三方或は四方へ別れ候、是を三ツ辻の心にて、三ツ合と云、此三ツ合迄の通り筋平地の間を廊下と云、さて間切にて鏈に切當り稼候所を敷と云、委細前件に有之通り、かなこの者一領分ヅヽ分ケ候て相稼候、是を一株共云、鏈穿出候處を切場共穿場共云、右稼所にて天井の事を冠共操上ゲ共云、向ふ所を引立と云、右の方を鏈手、左の方を鑿手と云、下に踏候處を臺と云、左右の地山をほてと云、敷內にて下へ下り詰候處を敷通りと云、中通を中敷と云、上通りを上敷と云、

一鋪內土氣無之岩計りを穿拔候處を、かなぐりと云、地山堅き事をかたかり、和らか成事を和ら

ぎと云。
一けたへとて、敷內稼所風廻り惡敷、或は石煙又は人大勢入込、油煙深く相成、稼候者悶候て、鏈穿不相成事有之、是をけたへと云、依之鏈穿候者氣絶る心にて氣絶共云、又稼を忘る心にて懈怠共書候由申傳へ候、然共風廻り惡敷候へば、自然と敷內の地氣順環致さぬゆへ、燈一切ともり不申候、然者敷內の氣絶へと云事可也、しらけたへとて煙も無之燈ともり不申事有之、思はず此けたへに行掛り候へば必ず死すなり、右煙深く相成けたへ候て、稼の障に成候へば、外ゟ切山致し風道を付、煙を拔申候、是を煙拔間切と云、水の障を外へ切貫を水貫間切といふ、
一敷內にて崩藥の如く雫の落候を、しづりと云、
一鋪內にて穿捨候金銀無之石、總て圓廻りに捨有之土石を柄山と云、薄鏈少々ヅヽは有之ニ付、掛柄山と名付、圓の上敷內より取揚、自分にて粉成吹立金銀賣上候、是を外吹と云、出柄山と云は、圓山に古來ゟ穿捨有之柄山を、前段之通自分入用にて粉成吹立候事也、（中略）

當時御稼間歩 幷 銀山內一體之事

一割間歩　總敷地坪數七百貳拾五坪、御番所建坪四坪、
御稼は無之候得共、當時御直山六ヶ所の內、此間歩之義者、相川銀山最初の間歩にて、慶長六丑年開發以後、度々大盛致候處、延寶八申年、銀山川通大水の節、間歩口ゟ水馳り込、此節第一にいたし候七枚鏈と申敷の稼所、水下に相成捨り申候、然共上通りにて相稼候處、年々不景氣に相成、中絶も有之候得共、寶暦元未年迄は、少々御稼有之處、是又至て不景氣に付、御稼相止候、併此間歩の義は、諸間歩敷內の水流出候大水貫に付、水道のため御立被置候諸間歩水道の記、大概左に記之、
山師三人

味方孫大夫　和田十郎左衛門　味方與次右衛門　山留頭壹人　山留貳人

當山之儀者、一體地低成處ゆへ、古來より諸間歩水吐の爲メ、上水廊下、中水廊下、下水廊下と三段に諸山の水請宜鋪樣水道を切置、諸間歩の水を請、當山にて水上輪樋を以て引捨候、然れば諸間歩共段々敷通りへ稼下り候に付、是迄の水道勾配、却て地高に成り吐方無之、諸間歩共敷內に水湛し、此分に而者、後世諸間歩之稼相止み可申義歷然に付、元祿四未年、荻原近江守殿當國御支配の內、諸間歩之總水貫として、右割間歩下水廊下ゟ南澤瀧の下と云處迄、間數四百九拾七間餘間切御切被下候、是にても未水吐方不宜候に付、猶又右瀧の下ゟ門前町と云處へ、間數百九間餘御切被下候、此地形海面ニ押並び候故、切貫相濟候へば、諸山に湛候水一同に割間歩へ落合ひ、此水貫へ出申候、尤割間歩に有之候水上輪樋も、此節三拾餘艘不用ニ相成候由申傳候、誠に以此水貫御切貫被下候に付、諸間歩共水の障無之、御稼長久致候、萬一此水貫痛處等有之水差滯候へば、諸間歩の咽喉を留候同意にて、御稼一時に退轉致候、大事の大水貫なり、門前町へ水出候口を水戸口と云、此水戸口より水道甚五境と云所迄間數千四百三拾七間有之、

一靑盤間歩　一甚五間歩　一鳥越間歩　一中尾間歩　一雲子間歩　一清次間歩　一新間歩

右者慶長年中ゟ追々開發有之、今以相稼候澤、并總敷地坪御番所建坪、其外掛り之者名面等略之、

一相川銀山と云は、東向左澤右澤の中に山を隔、兩澤有、此兩澤の左右に釜の口を結ひ、古來ゟ相稼候、左澤入口間山口左澤入口を六拾枚口と云、兩所共口留御番所有、是ゟ內へはみだりに無用之者入候儀不相成、勿論、牛馬入候義御停止に候、

一銀山地所之義は、左澤の川筋を境北に付は下直川村、南に付は羽田村の內と申傳へ候共、何れを銀山と村との境目と定候儀、古來ゟ申傳も無之候、畢竟釜の口を結ひ穿入候事故、以前は岡山の地所等貪著なく、銀山立候義に有之候、

鶴子地所之義、澤根村之内に而御代官支配に付、去ル寅年、石谷備後守殿當國御支配之節、御代官所ゟ銀山一體引渡之節、鶴子銀山向後取扱之儀御掛合有之、池田喜八郎殿ゟ御勘定所江同之上申來候由に而、翌卯年、喜八郎殿ゟ申來候趣に付、備後守殿ゟ返翰被遣掛合濟、

鶴子銀山向後取扱之義ニ付、先達而御對談に及候趣、御勘定所江御申達之處、地所家數人別者、彌御代官所深根村へ附候筈に申來候由、依之以來鋪者共支配町人百姓に而も、右鶴子之内、新切山并右間歩稼場柄山出柄山等之類人有之節者、地所吟味之義者其許江申達、村方障有無之儀、御糺御申越可相成由、右地處ゟ取揚候金銀稼方鉑吹立等之儀者、鋪者共支配町人百姓者不申及、其支配所之者に而も、都而金銀稼に付職分一體之吟味者此方支配に而取扱、尤其支配之者に而も右職に付ての咎メ御仕置等者、鋪者共方にて可申付儀と御心得被成由致承知候、

〔日本山海名物圖繪　一〕金山鋪口の圖

金山の鋪口を鋪口とも又間府(まぶ)ともいふ、吉日をゑらび、神まつりをして普請にとりかゝる也、かな山のはたらき人を下財といふ、凡金銀銅鐵通じて金山といふ、我朝に金の出ることは、人王四十六代孝謙天皇天平勝寶年中にはじめて陸奧の國よりほり出す、白銀は人皇四十代天武天皇の御時はじめて對馬の國よりほり出す、銅鐵は神代より有と云傳へたり、

〔日本山海名物圖繪　一〕金山鋪口

金銀銅鐵皆ほりかたは同じ、仕上はすこしづゝのちがいあり、金山ほり入ル口を鋪口といふ、四本柱をたてゝ、上と右左の三方に鼠株を入るゝ也、此鼠株を矢といふ、三方ともに矢の數は十六本づゝなり、上の矢の上にわたす木をけしやう木といふ、此鋪口を四つどめといふ、此わきの方に風廻し口をあくるなり、これはいき出しなり、是にて鋪の中のあかりを取ル也、大切口は水ぬき也、役所小家掘子の小屋は鋪の外にあり、



（日本山海名物圖繪二）
金山鋪口圖

〔日本山海名物圖繪一〕金山鋪の中の繪

鋪口より段々ほり入、上と兩方とには皆鋪口の繪のごとく矢をいれて、土石のくづれぬやうにする也、下財は皆あたまをつゝみ額に圓座をつけさゞいがらに油を入、ひやうそくに火をともして持行也、此火にてあかりを取てはたらく也、風廻し口なければ、此火ともりがたし、又水わく時は戸樋にて水を引上ゲ、大切口へおとす也、金はり鉑石を取ば、ゑよ引はこび出す也、石目とて大金有所はげんのうにて打はづすなり、

〔見聞雜記三十四〕一留木段々の名〇金銀銅山

壹丈五尺長壹丈五尺、廻り壹丈七寸、　大壹丈長壹丈、廻り一尺七寸、　九尺長九尺、廻り一尺、　大貳間長貳間、廻り一尺六寸、

矢木長六尺、廻り壹尺四寸、

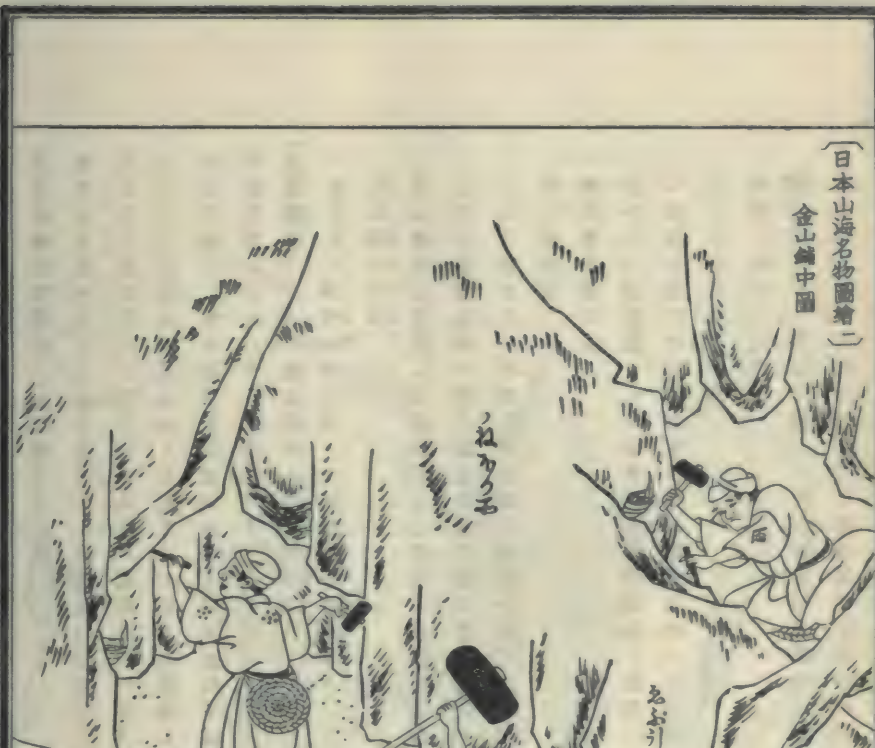
是は數國共普請に相用候材木に而、多く栗檜の木を用ひ、留山場所により柱を立候を殿木と云、桁を渡候を押へ木と云、貫の如く横に渡候を須かせと云、柱との間不動樣に入候を間切張と云、土砂おさへの爲矢來を細く割、須かせの外へ差並べ候をさし矢と云、天井をさしふさぎ候を鎹日矢と云、

一鋪內普請場の名

打かへ　是は數々へ登候通路の內、井の如く立穴にて、階子も及びかね候所は、穴の口差渡程に留木を横に打込、段々下り安き樣に足がゝりに打候事を打込を張と云、穴の廣狹に寄り、留木の大小ヲ相用ひ候、

栖樓　落穴　立穴

栖樓は天井へ眞直に鑿上ゲ、登り候處を云、落穴は敷通へ深く下り候を云、立穴は眞直に井の如く穿り下り候處を云、ケ樣の處は階子を筋違に張り、或打かへ、又者留木を四方に張り、足掛



（日本山海名物圖繪二）
金山鋪中圖

りに致し、仕舞いたし候岩石を右之通穿通りたるは、其儘地山に打がいに張候へ共、土山の中を右の通り穿下り候へば、四方ゟ土石押出候に寄り、四方に股木を立、須かせを引、矢木を遣、留山に致し、段々下り候、是を四ツ枠と云、平地を右の通り留山にて間切の如く延候をば四ツ留と云、此普請致候事を棚を継と云、棚一枚と云は向へ四人継出し候事を云、三尺棚、貳尺棚と云も、場所によりて有之、

棚　是は前段地山弱く落石杯有之處を、留木を以て下ゟ丈夫に留候を留棚と云、敷内土留山落込候處有之、段々向へ留にて、取明或は繕候を継棚共、継返し共云、土石落かゝり候處前に留木を立、矢木を渡し、落込ざる様闘ひ候事を後棚と云、敷内住還の階子段々下へ掛置候處には、階子の掛り無之に付、階子一通に棚壹ヶ所ヅヽ、附候て、棚ゟ棚へ階子を掛置候、是を歩行棚と云、又敷内住還の内、古来穿捨候て、深穴の様成、通り難き所は、縁の如く棚を付候、是をも歩行棚と云、右體打がいにて通路致し候處は、通り打がいと云、

土佐木　是は何れの間歩にても段々穿候て、他山へぬけ合候節は、其境目又は一間歩の内にても、境目異論有之場所には、木戸を結候て、双方御番所役山師立會封印付候を土佐木と云、何と申儀か如何申来候、

龍頭　是は敷内にて双方の境、又は地山弱く穿取候へ者崩れ落、大痛に成候ゆへ、鏈有之所も地山の弱みに穿り残し置候をいふ、依之留龍頭と名付、手を付不申候、敷内廣き所は數年相立候内には、自然と地山に割目出来、水通り候へば落込候物ゆへ、ケ様の所へは留木にて圍ひを付、わざと穿捨候石を詰置候、是を柄山龍頭と云、地山弱きと云は一片ヅヽの石間有之、水通り候得者、自然とへげ落候、是をへだ落と云、土山の事をも弱き山所といふ、

〔日本靈異記〕下將寫法花經建願人斷日暗穴賴願力得全命縁第十三



鑛山家屋

美作國英多郡都内有官取鐵之山、帝姫阿階天皇御代、其國司召發役夫十人、令入鐵山、入穴堀取鐵、時山穴口忽然崩塞、役夫驚恐、從穴競出、九人僅出、一人有後出、彼穴口塞合留、國司上下思之所壓而死、故偶恨之、妻子哭慰、圖繪觀音像寫經、追贈福力而逕七日巳訖、于時獨居穴裏念、吾先日願奉寫法花大乘、而未寫斷、我命全給我必奉、果居于闇穴而偶恨之自生長時、至于今日無逃此哀、彼穴戸隙指刺許開、日光被至、故有一沙彌自隙入來、鉢飯饌食以與之語、汝之妻子供我飲食、雇吾勸救、汝復哭愁、故我來之、自隙出去、去後不久、當于居頂而穴開通日光照被及也、穴開通廣方二尺餘、高五丈許、于時卅餘人、取葛入山自穴邊往、穴底人見人影叫言、取我手云、山人側聞如蚊音、即聞佐之、取葛繋石下底而試、底人取引明知人也、結葛爲繩編葛爲籠、以四葛繩籠四角構立穴門漸下、穴底底人乘籠、以核牽上、持送親家、親屬見之哀喜無比、○下略

(日本山海名物圖繪一)鑛山床家

釜屋にて燒たるあらがねを湯にわかして、丸銅に仕あぐる所を床家といふ也、

(銀山方覺書)吹床壹挺分

一立家　表口三間 奥行貳間半

此譯

梁間貳間半

内

吹子座五尺

煙巻四尺　鳥内かふ也 但風道之事

吹床　但湯溜り

口廣　横壹尺四五寸位 竪同斷

庭様　壹尺五六寸位〇中略

南蠻屋灰吹屋

一立家　間口貳間奥行貳間〇中略

內

壹間半爐壹挺之內　南蠻屋灰吹屋

〔見聞雜記三十四〕銀山內に有之候家居をば總じて小屋と云、此小屋に住居致候者共、切支丹宗之義は前段に有之候小屋頭之者人別相改書出候へば、青盤領分は青盤間歩山師、甚五領分は甚五間歩山師と、此外も準之、領分限り山師之者吟味いたし、相違無之旨、名前紙面に奥印いたし、山方役所へ差出候を、猶又山方役相糺候上、小屋數幷男女人數書付、御役所江差上候、

一銀山內に有之候諸商物御役銀は、名主の者是を取立、每月地方役所へ相納候、當時山內に有之候商人、左之通、

一請酒商人三人　一餠商人壹人

一相川町ゟ銀山內へ入候諸商人、賣藥を初、魚類、八百屋、豆腐、地製煎餠、團子、酒、其外諸品小間物類は、何商人何町誰と記し、御役所之燒印有之鑑札ヲ山方役所ゟ相渡置、兩口留御番所に而改通行致させ候、此御役銀は相川町小役銀之內に而、銀山へは不拘候、

〔佐渡州金銀銅山幷寺社舊記〕役屋舖幷所々役人預家普請之事

一役屋敷幷手代長屋共

是ハ小破時ハ人足町日役賃遣、壹万材木竹繩等、藏廠ゟ出シ遣候、〇中略其外作料板代等御入用ニ立、但臨時銀を以拂來ル、大破之時は修復料之儀、御勘定所へ申上、人足も御入用ニ立、

一口御米藏　三ケ所〇中略　一奥御米藏　壹ケ所〇中略　一播磨口但馬口番所〇中略　一

礦山暇具工夫

貳軒　運上役貳人〈略○中〉　一三軒　勘定役三人　一三軒　山使役三人　一壹軒　鉛藏役壹人　一壹軒　雜藏役壹人　一貳軒　同吹屋役貳人　一壹軒　口藏役壹人〈略○中〉

一三軒　奧藏役三人　一三軒　敷廻役三人　一三軒　播磨口役三人　一三軒　但馬口役三人　一貳軒　口白口役貳人　一壹軒　小野口番所　一貳軒　同所役貳人

右預家普請之儀、人足町日役を遣、萱万材木は竹縄等、雜藏ゟ出し遣、其外作料板釘等御入用、但臨時は銀を以拂來ル、新規建出候時も同斷、〈略○下〉

〔傳宣草〕一下辨官宣旨〈常事左辨官宣、內事右辨官宣〉

年中事〈略○中〉

採銅使事

〔三代實錄〈二清和〉〕貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂、爲採銅使、詔三箇年內所進銅鉛年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內不減此數者、隨爲眞、

〔三代實錄〈十六清和〉〕貞觀十一年二月、太政官處分停遣採長門國銅使、付國宰採進焉、

〔三代實錄〈七清和〉〕貞觀五年十月二日辛酉、勅長門國採銅所雜色四人預節祿、

〔三代實錄〈四十光孝〉〕仁和元年三月十日乙丑、太政官處分、下知長門國、進銅手一人、堀穴手一人、於豐前國採銅使許、以豐前國民未習其術也、

〔七十一番歌合〈下〉〕五十六番　左　金ほり

ながむとて金もほらぬつんさひのさびてぞみゆる秋夜の月

みつかねの草に儼かとみゆる哉露にやどれる月の光を

左歌月みるとて金ほらねば、つんさひのさびたるらんことはり叶て聞ゆ、つんさひとは、金ほる具足にや、右もにせ物によみかなへたれど、强て申さば左可勝也、

一棹にあまるこがねのおもはかり員目ともなく人ぞみらる、
あおきなやにふのみ山にはるかねのみづから人に思ひいりぬる
左歌、たくみ我、右、水とかねとを二にいひまりて、題のこゝろおもひ入たるにたり、仍爲持、

（上杉編年文書三十二）從〇中略

一他國へ金。堀。ニ出候者、毎年雖御法度ニ候、猶以其村中にて可致政道候、若壹人成共他國へ相越においては其一在所悉可被仰付事、〇中略

以上

右條々觸下肝煎、百姓等に堅爲申聞、一在所へ一ッ宛書寫レ可相渡者也、

慶長九年閏八月二日

山城守〇直江兼續

（銅山請負書記）藤方彦一郎殿御代官所備中川上郡小泉銅山受負中之書記

山法書

諸國金銀山定法山例ヶ條之事

定

一山例五十三ヶ條之儀者、駿州日陰澤ニ而、從東照宮家康公被仰出候、御法之儀者、小野金堀師之儀者、野武士ト被仰出候、諸國御關所ニ而、其見石許御改御通被成候事、

一山。師。金。堀。師。之儀者、何國ニ而見立山仕候共、領主者不申及、村役人、山。先。相添、不限晝夜、可致注進事、

山例金銀賣高格合

一一日ニ壹貫文ヨリ拾貫文迄者運上差上不申事、

拾貫文ヨリ百貫文以上迄、賣高之錢、十歩一差上、百貫文ヨリ千貫文賣上仕候得者、御公儀樣ヨ

リ御屋舗被下置候事、

定法吹方

一山色前　山神宮奉納　鐵納御造酒料

一掛砂先　鍛冶注文

一送荷　飯焚注文

留大工給金格合

一留大工一ヶ月壹人前、給金壹兩貳歩、

一一日ニ壹貫文之處、賣商仕候得者、御領主者格別、

御國主ヨリ金山之場所、御替地被下置候事、

一御國主ヨリ金銀山御取立有之候得者、山中働之者共江爲御褒美御事判紙并御判物被下置候事、

座席之次第

一御掛改御役人

疊一重下リ

左座

山先　山師　買石　檢斷　檢斷　床屋頭　買石師

右座

當番頭　當番　鍛頭　留大工　次ノ間　大工　足輕　堀師頭

役堀子　并堀子　四ツ番目附　小使之者　風呂番　飯焚

一鉛鐵山者、不有格合、

〔鑛山聞書〕一山先と云は、其山初て見立て注進致たる者、貴賤を不撰被仰付、其山盛に及ぶ時、御扶持被下、右山御見分御用公儀御役人御出之節、山先案内申也、是を金山古人と云、勤方宜敷時ハ、山かたな迚、帶刀御免被下置候、然共御祝儀被下候節、御代官江相詰候にも、山師山方より下座之役なり、

一御下代當番役、横目山師より上座なり、

一鋪山三役と申は、山方、鋪方、床屋、是を云、山内之重役也、本番役と申は諸御用一切御山内中取次吟味致也、御大切之御用、此役筋之者不立寄、内は萬事不片付、三役、本番役取扱内事に相濟候上は、他筋より批判不相成候、總而内役者皆三役より下座なり、

一慶長年中、東照宮、日本國中下財（山師ノ類ヲ云）金御免之御焼印六拾四枚被下候内、奥羽兩國ニ貳拾四枚被下、仙臺外記と申者、其頃定番頭被仰付、此時山法大略定る、

但雲州日影澤、山師六拾四人に被下候也、

一下財諸國往來關所番所は、手山色を以通行可致御免許也、

一諸國神社佛閣、堂舍、居下并留山、田畑たりとも、金之殘筋於有之者、鋪口候義、御料私領共ニ異儀不可有之御免許也、

一鋪内斧之外、刃物鉄側之事、

〔見聞雜記三十四〕山師、繪圖師、振矩師、數園御雇之者、其外銀山一體に拘り候者銘目、并御宛行之譯、

一山師拾貳人

一五人扶持　味方孫大夫	一三人扶持　味方與次右衞門
一三人扶持　松木久右衞門	一三人扶持　秋田權右衞門
一三人扶持　小川吉郎右衞門	一三人扶持　村上善十郎

一三人扶持　和田十郎右衛門

一四人扶持　下田清次郎　大坂仁市郎　島川惣兵衛

一三人扶持　喜多政四郎

一三人扶持　寺崎太郎右衛門

右山師之儀、古來他國ゟ銀山功者成者罷越、山所を見立、自分入用を以て間切をきり、間歩口を開、數ヶ所大盛を得、銀山長久致し候、尤困窮致し候者へは、御公儀ゟ御手當も有之候へ共、全體自分にて切出候山の義故、其節は山主と唱へ、當時敷岡御雇の者等も手前にて抱へ、かなこと云も下代同前に抱置、敷所稼を預ヶ世話爲致候事にて、御公儀へは山所により鏈代御分ヶの譯有之、上納鏈代差上相稼申候處、後に山主自分に而者、稼方相續がたき趣に而、山所不殘御公儀へ差上、是ゟ御直山に相成、山師の義者、由緒ある者共も有之、其上先祖の者ゟ大功有之義を以て、銀山一體御預ヶ敷岡の差配いたし候樣被仰付、數代相續いたし相勤申候、席順之儀等、山師仲ヶ間家柄に而年功の差別なく、右之通、定席に相成居り申候間、歩々へ分ヶ候ては、又其間分にて勤功に寄り、古來ゟ山師へは、領前とて出鏈の内十分一被下置候處、銀山不盛打續、被下候領前も少分に相成、困窮いたし、勤續がたき體に付、十三年以前、寶暦元未年御手當として、右銘々御扶持方被下候中に、御手當無之山師之義は、當時も領前鏈代宜申請候との事にて不被下候、

一繪圖師壹人　壹ヶ月貳人扶持、御給銀壹貫三百七拾貳文、　山尾御守

是は銀山一體繪圖御用相勤候者に而、見分等有之節者、山方役差圖を以、敷岡共其場所へ罷越相勤申候、

一振矩師壹人　壹ヶ月貳人扶持、御給銀壹貫三百四拾貳文、　山下數右衛門

是は銀山間切切山煙貫等、總じて振矩下ゲ墨にて、中石高下等之丈尺相極候勤方に而、依之敷內領分等引分ヶ、御間切延改等之節、山方役差圖を請、場所へ罷越、御用相勤申候、

一、帳付壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀五百四拾壹文、
是は帳番所へ相詰罷在、諸御用書物いたし、荷責荷分ヶ之節、尤其場所江罷出、御定書留等致し
候、
一、油番壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀百三拾六文、
是は御入用油鐵燈心等預り、數々かなこ共へ、右入用品、御番所役帳面に記し相渡申候、度々差
圖の通り油計り渡し候、尤荷責の本封鍵も、油番鍵ヶ改、箱立へ入、買石共へ封印爲致、預り荷分
ヶ之節封切、かなこ共へ相渡候、以前之御番所内入口に詰罷在、出入の者改候古法に候、
一、鋪役人頭 穿子遣頭 壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀五百四拾壹文
　　　　　 山留頭 壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀七百三十八文
是は穿子遣山留之内功者成者を撰み、頭に致置候、御稼方其外諸事敷岡を跡いたし、穿子遣山
留の働方、并穿子之遣方等差圖致し候、
一、穿子遣壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀百三拾六文
是は敷内へ罷越、穿子の働方差圖致候者也、且敷廻りとて此穿子遣、并山留之内貳三人ヅヽ、壹
夜敷々相廻り、大工穿子の働方相改、并敷々の容子御番所へ相斷候、荷分之節も、右之者共の内
鋪作り候場所へ出世話致し候、是を鋪番と云、壹人宛當番を極相勤候、
一、山留壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給銀五百四拾八文
是は敷々御普請、其外岡山、或は川通り御普請に罷越手傳、穿子の者差圖致し相勤候者也、
一、樋番匠壹人壹ヶ月 御扶持方貳斗、御給銀五百文
是は御入用の樋を拵、敷内にて樋痛申候時は、晝夜に限らず敷内へ罷越繕立候、當時は樋是な
く候得共、右鋪川通り其外諸破損物繕ひ等致し候、

一小。遣。壹人　壹ヶ月　御給錢壹貫五百八拾四文

是は御番所詰之者、食事夜具等持運び、其外小用相達候、

一荷。之。者。壹人　壹ヶ月　御給錢貳百六拾七文

是は巳前は別段に記候通り、上納前の鏈山口丸く候得者、四ノ日迄預り相守候者に候處、近來は御番所の內に鏈差置候に付、御番所へ相詰、是を取扱世話幷御番相勤候、

一鍛。冶。壹人　一ヶ月　御扶持三斗　御給錢四百四十八文

是は鋪々御稼鏨を燒、幷鐵道具等拵候、一晝夜宛入代り相勤候、功者成者壹人頭に定置、鑛炭一體の世話爲致候間、歩々に付居候鍛冶を地鍛冶と云、鍛冶の外不足にて雇入候をば、當分雇と云、是は給米給錢日割にて渡之、

一名。主。　無給

是は銀山內諸役物取扱ひ致候者にて、御稼方には不拘候、近來相始り候名目なり、

一小。屋。頭。　無給

是は銀山間歩限りに一傾分と名付候境有之、其所々に有之候小屋を取扱ひ候、町方の名主同前に鏈流し等の儀申斷、總じて小屋中ふしまり等の義心付者にて、御稼方には拘り不申、古來ゟ有之名目也、

一かな。こ。

是は前段の通り、一間歩の內領地を極め、稼所を持相稼候者にて、山師の手に付、相勤一數の主也、

一穿。子。請。

是は諸穿子人數人立請負罷在、日々御番所へ爲相詰候者なり、

一穿子頭。
是は功者成者總穿子の頭に極置、穿子不參等無之樣每日相働、山元へ召れ罷登り、夫々差組等いたし候者にて、穿子頭の下代なり、

一手傳穿子。
是は山留の手傳いたし相勤候者、普請之樣子見習、功者に成候得者、山留に相成候、並之穿子と違御雇者岡前に而、働方も山留に准候也、

一丁場穿子。
是は敷内普請の節、山留手傳に差添罷越、普請場所土石等取除相働候者也、總じて敷内普請有之處を丁場と云、依之右場所へ罷越相働候者故、丁場穿子と云、又敷内の土石を岡へ持出させ候處を跡向とは、段々向え穿行候跡を云、

一鏈通穿子。
是は敷内穿場へ鏈持運び候者にて、一晝夜ブヽに代り合、度々往返致候、尤鏈數多運び候敷所へは貳人三人ブヽ差組、鏈數少き敷處へは、壹人に而二敷三敷もかけ持相勤候、

一鞴指穿子。
是は鍛冶小屋にて、鏨燒候培土一ヶに壹人ブヽ罷在、鞴指候者なり、

一荷揚穿子。
是は前段に有之、敷内より穿歩負揚候者也、手傳ゟ此荷揚迄の總名代五段穿子と云、以前は此名なく、大穿子小穿子と賃錢をわけ、品々に違ひ候處、近來五段に別れ候、且深敷にて鏈負揚、勝手惡敷所は、場所の上に車を仕掛、鏈を釣あげ候、是を歩つり穿子と云、深敷に限り有之候、當時は右車仕掛の場所無之、

一水替穿子

是は敷内稼所に水有之候へば、切場水替と云て、其所に付居り、稼方に水障らざる樣汲捨候者をいふ、右水替の持候水汲桶を鐵桶と云、鐵に輪掛候桶也、切場の脇に請船とて、四角なる箱を居置、是へ鐵桶にて水汲込候跡は、又外の水替請船より汲揚、外の船へ汲かへ、如此順々に水流し捨候所迄、幾つも請船を居へ置、水汲送り候、是を手繰と云、水流し捨候も滑らず、平地の處を水廊下と云、此水廊下迄汲送り候に手繰に不相成、下ゟ上へ揚ゲ候處は、井車を仕掛、段々と汲上ゲ候、右水廊下迄揚納候所を引捨と云、場所により請船居置難き處は、木を横に渡し、壁の如くねば土にて除ケ、或は板にて張り、水の洩ざる樣に致し、水を汲溜候をにがいと云、請船居置候處を船屋敷と云、水替病氣差合等にて不參の時、急に雇入候代りの人をあんこと云、水替の内に頭を定置、水替の住所等能存居りて、何町誰々と人を差雇入、世話致候者を人さしと云、稼所に有之所六尺穿下り候へば、水替穿子貳人ヅヽ相增候定法にて、是を出人と云、

〔日本山海名物圖繪一〕銅山鍛冶〇中略山の役あまたあり

鋪役人　床家　手子（てこ）　山留役人　燒出（やきだし）　鉑持（はくもち）　鍛冶　釜大工　素吹（すぶき）大工　間吹（まぶき）大工〇中略

南蠻𥳑

金山の下財辛苦して寶をほり出しての世はたり、唯おのれが口を養ふのみ、多分の利は皆金山司の德用となれり、唐の羅隱が詩に、採得百花成蜜後、不知辛苦爲誰甘、といへる蜂の身の上と同じかるべし、

〔嬉遊笑覽十二附錄〕古く金ほるものをゲサイといへり、庭訓に鑿才とかけるは假字なるべし、思ふに埃囊抄に、蠖蛞才といふことを載て、虫の得たるさえの事に注せり、是も假名書にて、虫の事には

あらじ、けらのらもじは郎字か、助字か、これ又下才なるべし、東海道名所記に、八瀬の人の詞をいふに、我らも出てニャア今から京へ来たらニャアとあり、東雛子に、矢脊大原の土民おのれゲラをと云は下郎なるべしと云り、今もまかいふにこそ、然らざれば鄙才聞え難し、

〔銅山稼并鉑成吹取扱一件〕一掛役人之義、寛政二戌年迄は、山方役壹人、定役壹人、御目付役壹人、並役壹人、年々掛り被仰付置、取扱来候處、御僉儀之上、同年八月より、右掛り相止、主役ニ而銅稼掛り定役壹人、同並役四人、同定助壹人被仰付、其外山方役壹人、御目付役壹人、一ヶ年限り掛り被仰付、勤方之儀、山方役は日々登山、重ニ敷内稼方鋪引吟味仕、山許諸御用向等取扱、御用達之節は銅床屋江も折々出府、鉑銅吹方等承合、出來形ニ寄、主役打合評議之上取計ひ申候、定役は銅床屋江法會鉑成吹方重ニ掛引仕、鉑場床屋之御用向取扱、諸御入用向取扱、諸帳面相改、夫々調印仕、引取之節は御鉑場所江符印附置申候、且床屋之方御用達之節は折々登山、敷下り仕、山方役江評議之上、稼方懸引仕、並役と申合壹人は帳面方引請諸御入用物買揚仕、貳人は床屋鉑場江附張鉑成吹方見廻諸向出役等仕、貳人は山許江詰合、時々敷下り仕、稼方之儀、山役江評議之上取計ひ、惣而廉立候御用向は一同江相合候義ニ御座候、且銅鉑撰立方之儀、島縫聞歩御番所御關内江建場補理、日々石撰人足入立、晝夜敷内より穿出候鉑、翌日荷場穿子負揚候ニ付、上下石並下石花滓より段階を附爲撰分、大工共多穿之節、置所狹廉ニ相成候を以ニ詰、是又負揚、大盥ニ水ヲ入、笊を以汰通し、底江居附候分をこまと唱へ、壹荷拾貫目入ニ作立、一十日分荷數出來揃候上、山方役符印いたし、山下ゲ之上、銅床屋荷藏へ鉑置場之事入置、御目付役、定役並役立會、荷數并貫目等相改候上、追々鉑成吹仕候、且銅鉑之義、鍛鉑と詮ひ、買石之者共、手廻不申候ニ付、鍛銅多少之目利難仕廉ニ付、折々様吹仕、可成丈ヶ御損失不相成様掛引仕候得共、石中之儀、優劣革難計、自然出方と御差引不都合仕候節は、御稼方夫々評議仕、御差圖を受取計申候、御稼御入用之義、元御崎一ヶ年大工高三万人之内御

仕點相成候ニ付、掛り山方役定役並役連名手形差出□御藏々ゟ請取上納鏈代之義は、年分御仕掛大工高井ニ銀銅出來高相極候上、御金藏江上納仕候、且前文銅鏈猥分候節、銀鏈有之候得ば、別廉ニいたし、本途山出鏈同樣荷買之節、御番所江差出、買石共江目利爲致、出來銀積り之上、荷分ニ至り石買目ニ應じ代銀相極、金銀改役江相渡、定御間吹所ニおゐて粉成吹仕、出來銀は鋪床屋江受取、年分出來高江組込、粉成吹御入用は定御間所へ相渡候義之處、鏈之御銀高ニ而は却而御失墜ニ付、文化十酉年ゟ別段粉成吹之義差止相成申候、

工夫作業時限

〔見聞雜記三十四〕一鋪々に而鏈石穿候者を大工と云、右鏈數ゟ負出候者を荷揚穿子(ほりこ)と云、是は鏈石を叺(かます)に入、荷作り負候ゆへ荷揚と云、總じて銀山敷岡にて御稼方、幷普請等の節相働候者を穿子と云、是は人數入立方請負人有之、每日入立候者品、猶末に記す、

一鋪々稼方と云は、晝の稼を晝番、夜の稼を夜番と云、三ノ日ゟ二ノ日迄を一十日と定め、一ケ月を三十を日に切、三日ゟ十二日迄を初十日、十三日ゟ廿二日迄を中十日、廿三日ゟ翌月二日迄を末十日と定め相稼候、三の日を入山と云、八の日左澤九の日右澤荷賣る二の日を荷分日と云、此荷分日は御稼無之に付、正一十日之稼を九日稼と云、小の月ノ末十日は八日稼なり、荷賣幷荷分の義末に記す、扨入山三の日明六ッ時に大工敷へ遣候を、朝一番と名附ケ、大工六ッ時ゟ四ッ時迄二時穿、二番の大工入代り、四ッ時ゟ八ッ時迄穿、三番の大工、八ッ時ゟ暮六ッ時迄穿、是を大工三人にて六時穿候故、六ッの稼と云、大工貳人にて朝五ッ時ゟ二時ブヽにて代り合、七時迄四時穿候を四ッの稼と云、併右之通三時ブヽにて酉代りには成兼候間、三人にて一時代りに致候を六ッの鎚と云也、夜の稼も右に准じ、大工壹人にて穿候數をばすつほうト云、

但大工壹人二時の仕事を一枚肩と云、此穿石貫目大概壹貫五六百目位ゟ三貫目位迄、是は頭大工之者、上中下之大工わけ候て、其程々を計ひ、地山堅さ和さにて貫目極候に付、一枚に付賃

候當時九拾五文に候へば、百文貳百文又者五拾錢七拾錢取候者も有之候、此壹枚屑多く取らせ候を増掛共と云、尤敷内ノ稼者の内へ大工の名を記し候木札を、頭大工の者入遣し候、是を以穿石の貫目を糺、大工の賃錢相極メ候、

〔陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷内働方仕法書上候覺〕略○中

一鉑堀所働方取扱之事

田郡金工四拾三軒、元山金工五拾軒、赤澤金工四拾五軒、合百三拾八軒、譬ば田郡ニ而四拾三軒は、人數壹夜大三格と申て、朝未明より八ッ時迄一格、八ッ時より暮五ッ時迄一格、五ッ時より翌朝迄一格、都合三格、是を小分ケニ仕り、初手方踏方と申て一格を貳分ニ仕、都合六拾ニ相成申候、總人數を六拾二タ時代リニ割候へば、七人組、五拾八人組一格、都合六拾ニ而、四拾三人相廻り、右一格之内、鉑堀所之番割有之候間、ケ所之内宜敷鉑堀所は鎚之順相廻り、五番鎚迄次第有之候得共、三番鎚之外は大抵鉑性左迄之甲乙も無之候、今日朝番之者ハ明日夜番ニ入、今日八ツ番之者は明日八ツ番ニ入之定メニ而、右次第を以追廻し鋪入仕候、朝番之者明日之夜番前打返し圖法堀と申て、明き切羽之鉑堀處式は手傳堀、又は手普請働等仕候事ニ御座候、又は八ツ番之者番前朝之内圖法堀江入候歟、又は夜番江折返し働仕候義も御座候、折返し働と申は、番前働之外再度鋪入仕候義ニ御座候、日々番前の働無據ニ而無怠候、數入仕候義、不容易事ニ御座候所、折返し働等日々追立責打候義にては、自然煙毒之疲勞ニ相成候譯は、身ニ冷濕を受、鉑氣石粉竹烟共ニ呼吸ニつれ、腸臓江引候ゆへ痰咳を發し、短命仕候ものニ御座候、前文之堀出し鉑之背數金場役所にて相改メ、番格之出入嚴敷吟味仕候事ニ御座候、

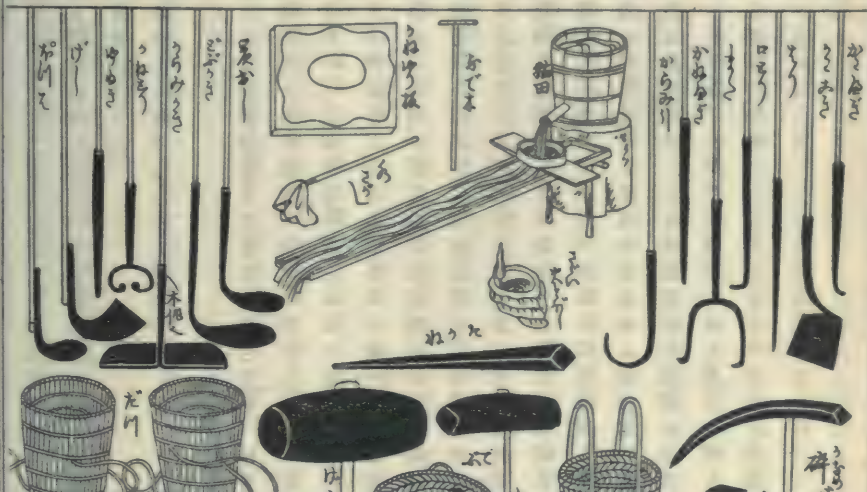
右之通御座候、以上、

〔日本山海名物圖繪 一〕銅山鍛冶

鋪の中にて用ゆる道具あまたあり、皆山にてこしらゆるなり、故に鍛冶屋をたて丶、その職人をかゝへ、あらたに道具をこしらゆるのみにあらず、そこねやぶれたるをなおしつくらふなり、其道具の品々は、次に繪圖あり、見合すべし、○中略

金山諸道具

金銀銅鐵通してかな山と云、いはゆる金はきがね、銀はしろかね、銅はあかゞね、鐵はくろがね、鉛は青がね也、いづれもすこしづゝかわりめあれども、大やうは同じこと也、金をほり入るあなを鋪といひ、鋪よりほり出



したる鉑をくだきて、焼釜にてやき、湯にわかして丸がねに仕上る也、此所を床家と云、それぐ〵に用ゆる道具は繪圖のごとし、此道具を通じて床屋道具といふ也、上の繪にあらはす銅山鍛冶のきたひこしらゆる所なり、

〔見聞雜記三十四〕一水上輪樋

是は古來敷内の水を引揚候樋にて、敷々淺深廣狹により、百本も貳百本も順々に達べ、壹本に人壹人掛にて水引揚ゲ候、是に依て其節迄は、當時の水替樋引と云、其後右の樋にては、入用過分相かゝり候に付、中ごろよりつるべにて汲あげ候事を仕出し、水汲あげの勝手宜を得たり、

古事類苑

金石部二

鑛山下

〔一話一言三十八〕諸國銀銅山名

一野州足尾銅山　吉川永左衛門

一石州銀山　阿久澤修理

一攝州多田銅山　石原庄三郎

一備中國吉岡銅山　松平越後守御預所

一奥州半田銀山　寺西重次郎

一但州生野銀山　恩田新八郎

一出羽國幸生銅山　池田仙九郎

一陸奧國叶津村出銅　松平肥後守御預所

〔金銀銅山等箇所書〕金銀山之事

一松前之内シリウチと申所ニ金山有之、慶長元和之比ハ専相稼夥敷出候ニ付、公儀江戸運上差出、黄金百枚獻上仕候處、金山運上御免被成下、其以來松前志摩守手前掘リニ申付候處、家中爭論有之相止、當時も掘リ候ハヾ出可申候事、○中略

一東蝦夷地之内ユウラツプニ銀山有之、西蝦夷地より掘候得ば近ク御座候由、拾五六年以前、江差湊岸田三右衛門と申町人相稼、餘程出候得ども、自分之ためハ少ク、山師共計之德用ニ相成候ニ付相止候事、○中略

一箱館在上エノ川ニ銅山

一東西蝦夷地之内、所々ニ鐵砂御座候、○中略

金山爲見分、同月〇明和三年五月十四日、松前出立、差添候役人、

御用聞年寄役　鈴木庄兵衛

上下　八人

手代　森佐右衛門〇中略

右之ものども差添罷下り、其日ハ福島村泊、翌十五日シリウチ金山網はい野を見分受掘セ候處、砂。金。少々出申候、夫より箱館ニ手段を以廿五六日逗留、爽地之内小屋掛ケ等手配出來いたし候ニ付、右之衆中を八月十六日ニクンヌイ江同道いたし、所々掘セ爲見、少々砂金を出し相渡シ、松前をれ歸り、金山其外無段申達候得ば、江戶表江被相歸候、〇中略右之通、所々ニ金山等も有之、稼候はゞ、出來方も可有候哉、心掛ケ候ものは承受候得共、一體稼方不存故、其儘ニ成行申候、以上、

五月

〔毛吹草三〕山城　金銀　攝津　銀銅(ギンドウ)　伊勢　丹生山水銀(ニウヤマノミヅカネ)當國ノ外ニ有所　飛驒　銀銅(ギンドウ)　下野　銅(アカガネ)　陸奧　沙金(シヤキン)　出羽　錫鉛(スヾナマリ)銀　越前　鉛(ナマリ)　加賀　白山硫黃(ハクサンノイワウ)　越中　鉛(ナマリ)

越後　鉛(ナマリ)　佐渡　金銀(キンギン)　松前　沙金(シヤキン)　但馬　銀　伯耆　鐵(クロガネ)　出雲　鑪(タヽラ)

石見　銀(ギン)　チカナノ錫鉛(スヾナマリ)　播磨　完粟鐵(シソウテツ)　刃金(ハガネ)　長門　銀(ギン)　銅(ドウ)　舟木石炭(フナキノイシズミ)千津ニ假、當所讃灯ニ用レ之、

豐後　錫鉛(スヾナマリ)

金山　駿河國金山

〔駿國雜志六〕金堀場　金堀場は安倍郡猪河村笹金山にあり、慶長年中、神祖御在城の時、此山に於て金を堀て試み給ふ、果して金あり、海野彌兵衛尉信典是を奉行す、

伊豆國金山

〔[illegible]餘錄三編下二〕こがねの湯

伊豆國加茂郡西土肥村安樂寺の山にいで湯有、そも〳〵この湯のわきいでしは、慶長十あまり五のとしかのえいぬ、この山にこがねあるべきよしにて、公より御つかひしてほらせられしに、そこより湯わき出て、事なりがたかりければ、こがねはることはとゞめさせ給ひつ、しかありしより、とことはにわき出つゝ、絶ることなければ、田かへし、すなどり、糸ひき、ぬのおるをとこをみな、おのがじゝよるとなく、晝となくゆあみし、はたもろ〳〵の病に志るしあること、これそこのをはたからのために、天地のさきはひたまふなるべし、こがねはほり得てしも、つくる時ありなめど、いで湯は、この山のいはついはむらとともに、ときはにかきはにわき出ざらめや、かくしつゝ、千とせの後、この湯のわき初し年の識、そのゆゑよししる人なくなりなんことを思ふからに、をみなわらはべまでも、しりやすからんため、かく石ぶみにしるせるものなり、

〔增訂豆州志稿七鑛山〕黃金白銀

天正丁丑(五年)ノ頃ヨリ土肥村ニテ始メテ、金坑ヲ開堀ス、相繼デ湯ケ島繩地、瓜生野、修善寺等ヨリ出ヅ、(繩地ヨリ出ル者多シ、)大抵五十餘年ニシテ止ム、貞享ヨリ寶永ニ至ル間、毛倉野、青野、土肥甘金山等ヨリ出ヅ、寶貨事略ニ云、伊豆國ヨリ黃金白銀ヲ出ス、古ハ此國ヨリ出スコトモ聞エズ、慶長十年ノ頃ヨリ盛ニ出タ、其數大概佐渡ヨリ出ルガ如シ、然ルニ程ナク出ル事多カラズ、采ルコトヲ止メタルト、

常陸國金山

〔地藏菩薩三國靈驗記十〕常州ヨリ北ノ方ニ金山アリ、其山ノ金ヲ堀男アリ、家ハヲノヅカラ豐ニシテ一子モナカリケリ、女房ハ慳貪邪見ニシテ後生ト云コトヲシラズ、夫ハ是ヲスヽメケレバ、腹立シケルホドニハ恐ケレドモ、言ニイハザリケレバ、ウトキ人ニ向ニ似タリ、

〔新編常陸國誌六十一土産〕黃金(砂石附出和名古加禰)

黃金

久慈郡金澤山八溝山洞坂ノ（大子小川兩村ノ間ニアリ）等古黃金ヲ堀シ所ナリ、各山中ニ金穴アリ、（八溝洞坂ノ間ニモ金澤ト云村アリ、前ノ金澤山トハ同ジカラズ、共ニ黃金ヲ出セルニヨリタル名ト見エタリ、溝ノ出ル所ヲ溝澤ト云ニ同ジ、）殊ニ八溝ハ黃金神社ノアル所ニテ、古代ヨリノ金山ナリ、續日本後紀ニ、承和三年正月乙丑、詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戶二烟、以應國司之禱、令採得砂金、其數倍常、能助遣唐之資、トアリ、是山及洞坂ハ、古陸奧白河郡ノ內ニテ依上保ニ屬セリ、故ニ國史ニハ陸奧國八溝ト記セシナリ、（永正以後國ニ屬ス）本白河結城文書延元四年狀ニ、依上保ハ吉野殿御領ニテ、貢金ヲ召サレシコト見ユ、此比モ黃金ヲ採タルコト是狀ニヲ知ラレタリ、（吉野殿トハ南朝ヲ云）父老ノ傳說ニ、洞坂ハ近キ世マデモ金ヲ堀タリトテ、其時ノ役所ノ趾、番所ノ趾ナド今ニ存ス、又金ヲ挽タル石臼ナリトテ、山中所々ニ現存セリ、（大子村ノ鄕士益子氏ハ、當時其事ヲ管セシ者ノ後ト云フ、）慶長年中、茨城郡上藤田村ノ山ヨリ黃金ヲ出シテ、工商集會セシコトアリ、松平重貞領主ノ時ナリ、笠間城記ニ見ユ、上藤ハ古新治郡ノ內ナリ、蜷川親俊記ニ、天文二十四年、多珂郡龍子山ノ大塚信濃守上洛ノ時、黃金十兩其他樽色々進上セシコトアリ、吉田藥王院文書、永祿三年藥師堂棟上日記に、こがねみつゝみトアリ、又同時ノ別日記ニハ、小金三りやうトアリ、同文書天正中、靑蓮院家人林垣玄通ヨリ藥王院へ贈レル狀ニ、價正口宜之爲御禮禁裏樣へ黃金、（三兩金目）田御門跡樣同貳分、院家へ同貳分御進上候云々トアリ、（小金ハ黃金ノ假字ナリ、コナリハ共ニ砂金ナリ、）古ハスベテ砂金ヲ以テ世用トス、豐臣氏ヨリ以後判金ヲ鑄テ世ニ行フ、爰ニ至テ砂金廢シテ行ハレズ、（砂金ヲ加禰左古トスルヘ、鹿島ノ風俗[illegible]勒歌ニ、ヒトヨヒハマイリマウシテカ子ノサコテマカサヨ、カ子サコハオ[illegible]ヒゴザラヌ、ヨ子ノサコテマカウヨ、ナニゴトモカナヘタマヘ、ヒメテカレマノカミガミト、云ニヨレリ、左古ハ伊左古ノ約マレルナリ、貳ハ三合ノ義トスルハ、ヨロシカラズ、石川久徵云、サコハ散貝ナリト、亦一說ナリ、）世ニ土浦小判ト云ヘル判金アリ、本國土浦ニテ鑄タル所ナレド、何レノ世ナルコト詳ナラズ、思フニ慶長年間ノ物ト見エタリ、（慶長ノ初年、結城秀康領、嘗テ土浦ニテ鑄セラル、恐ラクハ其比ノコトナルベシ、）洞坂ノ金ハ今ノ水戶侯ノ時ニモ多ク堀ラレタリシガ、正保萬治ノ頃ヨリ出ルコトナクナリシナリ、（其地ハ今ノ槻津新田ト云テ、）

ワナナリ、大子村ノ、金澤入澤洞坂柵田共ニ、當世黄金ヲ出スコトナシ、今那珂郡玉川ノ水中ヨリ砂金ヲ出ス、然レドモ多ラカザレバ國用トナスニタラズ、コレハ水中砂金堀ノ中ヨリ得ルモノニテ、堀テ得ル砂金ノコトニハアラズ、

陸奥國仙臺金山

（仙臺封內名蹟志一刈田郡）井崎金窟址

往昔出金之古窟也、近于湯刈田、其石堅剛如銅如鐵、石色朱紫黒碧青黄相雜、慶長中出黄金、有水脈、面不克穿故息、是地乃其時鑿師之所穿、縱横屈曲、上下相貫、左右相通、奇巧妙術、彷彿蜂房相聯、而恰其跡如艸、

南部金山

（鏡消私記乾）鹿角金山はじまる事

今度不來方（○盛岡古名）之仰に依て、秋田境目爲檢分、北十左衞門、鹿角郡へ打越、白根邊に旅宿して居たりしが、其邊の百姓共奉行へ目見得せんとて、手々に進物をさゝげ、奉行の宿所へ群をなす、其中に年の頃七十餘りの老婦、幼き男子二人具して、十左衞門が前に來り、涙を流し云けるは、此兄弟は太郎子、二郎子と申て、某が孫にて候、彼等が兩親、數年以前に相果候、孤子となりしを、某が懷にて漸く成長し仕候、先祖相傳の田地は、兄弟の成長の頃迄は、母方の伯父にて候もの身帶仕候、約束の年貢をも一毫だに年濟不仕候得ば、老之力を以只今迄漸く彼等を育候、某が命は明日に、も知れ申さねば、死て後伯父の心も無覺束、彼等路道に迷ひ申さんも口惜敷候得ば、某の命の內に、何とぞ田地を取かへし、兄弟に分度候、偏に此事奉願候、委敷此人々も知玉ぺしと、前後に並居たる郷民共に向て云終て、側成籠式を拐て、此度見參に何ぞ奉度なれども、貧の某に而候得ば、乍麁散、是は孫共を供ひ身が心盡して作候とて、いもを獻す、一包の書物を取出し奉行へ進せけり、十左衞門不審に思ひ、上包をほどき見れば、田地業譜の證文なり、此等先祖と見得、將監と云しもの、時代にや、長久手取合之比高名ありしと見得、國主より感狀之趣に持地何石之內何程、永代無役手作可令よし、永禄年中の證文有、其外色々之書付有之、近郷之長の子孫と慥に相見得候間、

御座に百姓共に尋られければ、老婦申處に少しも不違ざりければ、今日は諸人の見廻にて、取込ぬれば、追て裁許し與ん、心底不便に候迚、彼老婦をば被歸けり、其後彼の兄弟が伯父を招、委細糺明せられければ、件の犯人陳ずるに無據、有樣に白狀す、仍て押領の田畑をば、悉く兄弟へ返し、其上科金三兩を出し、如元己が住居に塗塞せしめける、扨其後十左衛門彼老母が進せける包物不審に思ひ、差式に被開ければ、斯是こそ迚持來るを見るに、長さ四尺許の薯蕷なり、其美事奥の芋にも猶增りて見得ければ、目録の內よりゑり出し、是をば屋形樣江送申さんとて能々見られければ、芋に纏たる赤土之內に、鉛の樣成ル光り砂有り、不思議に思ひ鉢に入れてあらわれけるに、鉛かと見得しは皆砂金にて、十左衛門大に心驚き、扨は彼の女めが、訴訟はやく裁許を得んために、某に賂して、芋の土に金を入れしよな、兎角彼を呼て此芋を返んと被思けるが、否々此邊に金有山より堀たる芋か、あれ程の貧女にて、是程の行跡は思ひも不寄、兎角呼んで尋んとて彼招、色色馳走して尋ければ、老婦か曰、昔より此處に砂金と申ものの有之由聞傳候得共、可堀すべも存ねば、只音のみにて目には今に見不申候、傳聞上代の事に候はん、此處江都より人來り給ひ、其有山を知て、其時國主と內談し、砂金數千斤を求てけり、其年の國役に、禁裏江上ければ、幸其年奈良大佛造營の比にて、彼金泥を以、大佛を彩色奉り候由、其後段々堀傳候しが、當國の主阿陪殿とやらの亡し時より、一切に盡失けり、絶て久しき事なれば、唯物語のみにて候、又某等が祖父抔の云傳に、あの山の奥にて其邊に童子朝草刈に行たりしが、草の葉一字金色の露上て、其光目を遮り、不覺倒伏しけるが、少時有て息吹出見れば、最早光りものも消失、漸々人心地付て、直に家に歸りけるが、親ども不思議に思ひ、彼上なる物の露をおとせば、皆金色の砂粉あり、是こそ金といふものにて有べく、上方へ遣、數拾貫之代物に替て、多くの田畑を買求、大福人と成、其子孫今にあり、其後彼等を始め、近鄉うらやみて尋見れども、重而左樣の不思議なし、近年迄羽州より折々旅人來、藥

にするとて、此邊之土を取行けると世上申候、是より外何之覺も無之候與語りければ、十左衛門
さてこそと思ひ、日を過てせんなしとて、彼老婦が宅へ行、浮世之物語して、夫より姥先達て、いも
畑處を見んとて、後ろの山へ參候、見ければ、皆砂金にて候得ば、十左衛門大喜、老婦に向被申候は、
其方か手山のいも、其味尋常ならず思ふなり、土地之模樣格別なり、從今後は此山をば某に與候
へ、代をば望次第遣可申と、數拾貫の代物をあたへければ、老婦大に喜、從是彼山を姥がふところ
と名付、日々夜々に芋を掘、其土を俵にして奉行所へ納置、扨土民共は何之辨へもなく、扨も芋數
寄な賤にこそ被送、從是後は我も芋を奉らん、寶き貴物とて、日々夜々に持來りぬれば、芋の山を積
置たり、其事數日之間に誰知ともなく、世上沙汰しければ、隱密難叶迄、屋形へ被露しければ、屋形
大に喜、其場目見分事終て、各は早速立歸り、其旨可申上、十左衛門は殘居て其地の事を存分にまか
せ、知行可致由被申候、其邊所永々の勤不便とて、子息十歳計り、淸水屋敷に（今の御新丸御田屋淸水の上にあり、十左衛門が屋宅也、）殘し置れ、妻を始、鹿角へ引越、居ながら金山奉行せられけり、

鹿角金山繁昌附駿河へ言上之事

奧州鹿角白根西道等之金山をば、北十左衛門不思議の緣に而被見立、慶長七年之春之頃より被
掘ければ、七百目に金四五拾目より、七八拾目を限り出る、其金色厚く淸し、仍而不來方の下知を
以、領内之山子共を集、日々夜々に掘ければ、此事諸國へ風聞し、近國は不申及、上は京、大坂、堺を始、
商買しければ、行衛も知れぬ浪々者、或は浦々の船頭共、當座の渡世有ざれば、彼金山へ來り、山子
と成堀程に、慶長九年之夏之頃には、みよしと云、小麥或は火石大豆程の金入交り、繩へもかけず直
に俵へ入ける、如斯之繁昌、開闢以來日本無雙にて有べしと、諸人申合り、依而伏見、大坂、大津、堺、其
外所々より商人も馳下り、金銀、絹布、或錢抔商替し、近邊に家を建、色々之賣物、誠に美々敷見得に
ける、町中に、風呂湯屋迄貳三ケ所に建並、遊山町とて、諸方之戲氣女を呼集、田舍吟之小謳歌はせ

遊びければ、無程上方より小謡、三味線、今様之上手共が歌舞妓女を伴て、數十人下りしかば、當山日を追ふて繁昌し、晝夜亂舞遊曲しけり、斯しかば不來方之仰を以、組之同心二拾人召れ、警固のために來りけり、斯て利直公より兼而金山出來之事、井伊兵部殿迄内々に被訴置けれども、頃日以之外美々敷成、伏見大坂之者迄下りければ、言上せねば不可然とて、慶長九年の秋の頃にや、駿河へ參勤せられし折節、此事を言上せられ、當山之爲運上黄金千枚、砂金五十斤被獻けり、江戸へも獻上可有所に、井伊兵部殿御異見有て被停ける、駿府之御所大に御感ありて、此度於領内金山出來候由、早速之注進神妙候、殊に運上金指上候得共、此度之爲褒美被下候、彌々運滑無之候様、下知可申付よし被仰下ければ、利直公尊命の趣辱謝、無言只項を垂れ平伏して罷立、其後北十左衛門は彼上方者と内談し、大津、堺、伏見、大坂、所々に問屋を定め、鹿角郡米代川より川舟に而、秋田領能代之湊へ下げ、爰にも問屋を定めて、或は北國廻し、東國廻し迚、上方へ爲登、金銀を引替ける、末世に至りて目出たかりし事共なり、

〔南部家記錄五〕慶長九年甲辰、鹿角郡白根金山は、慶長初年より始也、慶長九年より始候由覺ニ有古書に見得申事に候、其節の金山奉行相勤候は、北重左衛門なるべし、

但尾去澤銅山も白根金山出來候以來成べし、慶長初年より金山は出來申事、可成は公義江被獻候儀見得候キ、○下略

〔鹿角古實集北鹿古傳所載〕慶長九年、白根金山初而黄金堀、慶長拾七年十二月二十日、將軍秀忠公江戸櫻田之屋敷御入之節、領内白根吹金五拾枚、御馬貳疋獻上、○中略寛文九年より銅山と成る、

同十年、西道金山堀始、寛文六年より銅山に成、○下略

〔南部盛岡家譜一〕利直　慶長十三年二月、始テ黄金ヲ鹿角郡ニ得タリ、

〔南部家記錄六〕是年○慶長十四年御領内於鹿角郡金山出來、從先年連々掘來候之處ニ、一兩年以來者相

慶出來、四月、右之鑛錢上聞、且運上金差上候之處、信濃守利直領内仕置宜候之段被二聞召一、神妙之旨
依二上意一運上金被レ返レ下候旨有レ之、

但白根金山奉行北重左衞門別記に有レ之と古書見得申候、定而慶長元和年中之内たるべし、國
元より出候金山金被レ獻候處、又拜領被二仰付一候御儀は、御證跡相見得申候御事は、松平安藝守樣
御先祖淺野彈正少弼長吉君之後長晟君之御事也御嫡子、淺野紀伊守幸長君より之御返翰之御書事見
得候之通、○下略

〔南部家記錄六〕一御國本にて出候御金山之金御上ゲ候處、其内當年始候而出候金山之金百三十
枚餘御拜領之由、誠樣なる御仕合無二比類一候、併先年御手柄御奉公故に候、此方にて拙者家來之者
共忝目出度と悅申候、○中略

十一月十七日慶長十四年　　幸長淺野○

南部信濃守樣利直

〔遠野古事記三〕往昔遠野小友村に小松と云者有、天性金掘候儀を好み、家業の作働をせず、毎日し
やくしを持て村中を廻り、目利之場所を掘候へ共、一向不レ當候處に、極月晦日不圖夥敷掘出し、
○中略予、小友村之里人に、小松者何十年程以前之人にて、金を掘候場所は何方と聞傳候哉と尋候
へば、金掘候場所は借ヶ澤と申所之由、今鑛小松子孫之家、小友村には無レ之候故、何程早き時代之
人に候哉不二相知一と語候、本朝寶貨通用事略と云書に、慶長十三年之比、奥州の南部より黄金多く
出候處に、間もなく不レ出と書て、金の出たる場所は何方と云事なし、若し借ヶ澤繁昌之時之事を
書出し候歟、遠野十二郷、南部樣御領に成候は、慶長六七年之比、利直樣御代と云古說有、右兩說を
以て考候得ば、小松は慶長年中之人にて、於二高野山南部御領一諸人之石塔場を興置候而○中略も此
時代ならん歟と致二察候一、

出羽國阿仁金山

（梅津主馬政景日記）元和三年三月廿八日、阿仁金山両替の儀に付而、山仕山先去月より罷有、御佗申に付て、一割御なをし被仰付候様にと、右近殿御同心申、夕部御しん之時分申上候得ば、御合點被成候間、今朝森田次右衛門に申渡し候間前に天秤屋我等所へよび申候て申付候、　四年二月十五日、阿仁金山より山先太兵衛・備前・總右衛門、爲佗言參候、様子は、只今之けと場、間歩へ遠御座候而、荷歩申候駄賃過分にかゝり候て、迷惑に候間、本三枚三両之山之方に、廣き地所御座候間、けと移度由、佗言致候、又金両替之事、高ク御めし候様にと申候、又御米之ねやすく被仰付被下候様にと申候、其書物今日讀日にて、右近殿へ我等も參候間、山撿部に持被參候へと申理、右近殿へ懸出、右三ヶ條之御挨拶御談合申候、けと場之儀は御撿使被遣、地形御覽候而可被仰付由、両替之事は相場次第之儀に候間、江戸之両替直候はゞ直し可被遣由、御米之事、只今迄は四十五石之ねに御座候を、五十石に直し可被下由、則御藏衆へ右近殿御狀被遣候、

杉澤金山

（梅津主馬政景日記）元和四年二月十三日、杉澤金山より平澤伊右衛門、堀尾加右衛門書、中山先二郎兵衛持參候、様子ハ、御米之ね、院内並ニ被仰付候様ニと、山師共佗言申候由、其段右近殿へ申上候へバ、御心得之由ニ候て、院内なみに六十石ニ拂候様ニと、右両人衆へ右近殿御狀有、我等も其段書中指越候、

佐渡國金山

（今昔物語二十六）能登國堀鐵者行佐渡國堀金語第十五

今昔、能登ノ國ニハ鐵ノ鐵ト云ナル物ヲ取テ、國ノ司ニ弁ズル事ヲナンスナル、其□ト云ケル守ノ任ニ、其鐵取ル者六人有ケルガ、長也ケル者ノ己等ガドチ物語シケル次ニ、佐渡ノ國ニコソ金ノ花榮タル所ハ有シカト云ケルヲ、守自ラ傳へ聞テ彼長ヲ呼寄テ、物ナド取セテ問ケレバ、長ノ云ク、佐渡ノ國ニハ金ノ候フニヤ、金ノ候ナメリト見テ給ヘシ所ノ候シヲ、事ノ次デニ己ガドチ申シ候シヲ、聞食タルニコソ候ナレト、守然ラバ其然見エケム可行ニ取テ來ナンヤト云ヘバ、

長遣サバ罷ナント云、守何物カ可入ト問ヘバ、長人ヲバ給ハリ候ハジ、唯小船一ツ糧少トヲ給ハリテ罷渡テ、若ヤト試候ハント云ヘバ、只彼ガ云ニ隨テ、人ニモ不知セシテ、船一ト可食物少シトヲ取セツ、長其ヲ得テ佐渡ノ國ニ渡ニケリ、其後二十日餘リ一月許リ有テ、守打忘レタル程ニ、彼長急ト出來テ、守ノ見ハニ居タル所ニ見エタリケレバ、守心得テ人傳ニハ不聞シテ、離タル所ニ自ラ出會タリケレバ、長黑バミタル[ ]ニ裹タル物ヲ守ノ袖ノ上ニ打置タレバ、守重氣ニ提テ入ニケリ、其後此長何チトモ无テ失ニケリ、守人ヲ分テ東西ニ尋サセケレドモ、遂ニ行方ヲ不知テ止ニケリ、何カニ思テ失タリト云事ヲ不知、彼金ノ有所尋ネ問ヤ爲ルト思ケルニヤトゾ疑ヒケル、其金千兩有ケリトゾ語リ傳ヘタル、然レバ佐渡ノ國ニ金ハ有ベシト、能登國ノ人云ケル也、其長ノ後ニモ必ズ掘ケンカシ、遂ニ不聞エダ止ニケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔佐渡志物産五〕金

昔能登ノ國司、此國ヘ人ヲ遣シテ砂金ヲ採リシトイフコト、宇治大納言物語ニ出タレバ、年久シキコトニアルベケレドモ、年暦記テマレバ何時ノ頃トイフコト知ルベカラズ、越後ノ舊傳、佐渡ノ金ヲ採テ軍國ノ用ヲ辨ゼシトイフモ、多クハ西三川村ノ砂金ナリ、慶長六年ヨリ後、相川ノ中山立合トイフ山ヨリ穿リ得ル處ノ金、悉ク上納セシト見ヘタリ、是熟金ニシテ上品ナリ、中ニモ最上ノ物ヲ紫金ト名付ク、其厚薄ヲ分ツニ、紀州奈智ノ黑石ニスリ附テ試ル秘事、

〔佐渡年代記拔書三〕慶長九甲辰年、大久保石見守、此石見守、元猿樂ニ而、○中略或時駿府岩淵にて、神君於御前御夜噺之節、天下をも被知召候へども、御心儘に不成は金銀之事之由、御物語を被遊候を承り、御夜噺引後、御年寄土井大炊頭江大倉大夫申けるハ、先刻金銀の事御心ニ不被任旨上意ニ候處、其儀ニ付、聊存寄有之旨申之ニ付、則大炊頭言上ニ被及候處、存寄之趣相尋候樣上意ニ付、被尋候處、土中ニ有之金銀可取出工夫有之ニ付、其奉行被仰付候ハヾ、才覺を以諸國より金銀を

穿出可申旨申上ニ付、則御當家江被召出、大久保十兵衛ト改、伊豆銀山、石見銀山等取立、其後佐渡銀山取立、於佐州ハ莫大之大盛穿致候ニ付、追々御加増被下、高三萬石トモ、六萬石トモ、拾三萬石共説々多シ、武州於瀧山城主ニ被成下、石見守と受領有之、其後諸國總御代官頭被仰付、百二十萬石支配之由申傳石見守死後隱謀露顯、一族不殘御仕置ニ成斷絶ト云、

〔佐渡年代記 一〕慶長九甲辰年、大久保石見守長安、今年四月十日佐渡國松ケ崎へ著岸、夫より相川江移り、所々巡見し、銀山地方の事を沙汰し畢而、八月十日伏見に至り、佐渡國山岳、金銀を出す事益夥き旨言上すといふ、

高木筑後、今年石見守と來り、又具せられて歸ると聞ゆ、

横地所左衛門、原土佐、吉岡出雲等、石見守に從ひ來る、所左衛門ハ赤泊に住し、水津迄の郷村を預り、土佐ハ小木の古城に住し、西三川迄を預り、出雲ハ銀山の事沙汰す、

石見守言上して、浪人の筋目を糺し、佐州へ遣し、夫々の役に當つ、今年具し來りし者の內、保科喜右衛門ハ鶴子銀山を預り、堀口彌左衛門ハ河原田城付地方を預り、鳥井嘉左衛門ハ夷組大野組代官となり、何れも俸米百俵已上三百俵迄を給ると云、又野田監物川村覺助と云者を相川の町奉行とすと云、

金銀山間歩々々役人を四ッ留番人といふ、(間歩の入口を四ッ留と云し故也)御切米貳拾俵三人扶持づゝを被下し也、是を四ッ留扶持と云、持高多きものも時代移り替り、幼若等のものは高を減じて四ッ留扶持となせし、又以前は四ッ留扶持之もの追々加増せし事もあり、　但四ッ留番人を、今は番所役と云、

今年同心九拾五人御抱入となる、是を島同心といふ也、此もの共住し所を、山崎町と言し故、後には山崎同心といひし由聞ゆ、

山崎町は今の會津町の事なれども、古老の物語には、慶長の頃山崎町といひしは、今の上相川茶屋坂の邊を山崎町といふて繁榮なりしを、寛永の頃にもありけん、今の會津町へ移して山崎町と言しとなり、○中略

金銀山の内、山仕共を雇ひ、御入用を以穿出す處を御直山と云、山仕之入用を以稼間歩を、自分山と云、此時御直山三十六ヶ處ありて、右之山仕三十六人へ扶米百俵宛を與へ、幷留木、鐵、松蠟燭等十分に渡せしと也、（松蠟燭は、松やにを竹の皮にて包み、間内へ灯す、）この山仕ども、多くは伊豆石見より來りしと云、割間歩をはじめ、數十ヶ所の間歩々々繁昌せしにより、石見守言上せしにや、味方但馬、原淡路、西山丹波など云山仕共御目見をも被仰付しといふ、味方但馬は生國江州三方郷より出しものにて、京師江戸の內、數ヶ所屋敷を構へ、佐渡郷中にも田畑數多有りしなり、

一說、御直山の山仕三十六人に極しは、慶長十二年の事也共云、山仕の手に附、坑内の掛ヶ引をなすものを鋪山衆と云、（後に至りて、かなことあらたむ、）又鏈石買取て金銀を吹立るものを買石といふ、山買石、こき買石杯とて、市中に數百人有り、せり入にて鏈を買取る上、此もの共が業をなす所をせり場と云、

山仕共自分山をば、運上金銀を出して稼ぎし也、山の出方により運上も同じからず、此頃ハ世上通用の金銀錢乏敷、金銀山稼方の諸拂につかへし所、山出の銀を薄く打延べ置、入用の程を見はからひ、鋏み切て權衡にかけ通用せし也、是を灰吹銀といふ、

金銀山出鏈の内、荷分と云事、此頃より始りしと見へたり、是は出方の多少、亦は山仕の貧富により、出鏈の内、或は半分に引分け、又は三分の一、四分の一など、、割合を計ひて、たとへば半分をば公納とし、殘りを山仕かなこへ宛行ふ事なり、水間歩などにて諸拂多く、山仕難儀の所は、三分の一、又は四分の一を公納と定め、殘りを山仕へ渡す、其時々之計を以定めたる由聞ゆ、今年青盤十

左衞門といふもの、間歩を切開き、青盤間歩と云しが、十間計り切延たる儘にて手を引しゆへ、後に至りて味方但馬が弟與次右衞門（佐渡志、味方與次右衞門トアリ、）切繼、大ニ盛を得しといふ、

〔佐渡記〕慶長九年辰年仕置

大久保石見守長安

本多又十郎

家老　小川又左衞門

御直山三拾六ヶ所三拾六人ノ山師共、壹人ニ付米百俵宛、毎年仕置之内御合力ニ被下、鐵炭、留木、蠟燭被下、山仕もの共には集之地子町役御赦免、〇下略

〔佐渡風土記中〕大久保石見守殿由緒之事

大久保石見守長安、初號大和國大藏大夫、甲州信玄猿樂金春方之能師に而、信玄逝去之後、勝頼に含恨逐電、甲州を去、參川に居住、其頃大久保相模守忠隣舞曲を好、政事暇僅遊興、長安緣を求、忠隣に取入、出頭合力を得、忠隣之伯父大久保次右衞門忠佐より名字ヲ給リ、大藏大夫大久保重兵衞（與）改、甲州之案内を致、或時權現樣於駿州岩淵に、金銀山御稼方之次第、御價之役人青山藤藏を以達上聞、仍而御台前（江）被召御上意を蒙り、其後御家人に成、段々出頭し、武州八王子邊ニ而三萬石を被下、同國瀧山に居住、從五位之下大久保石見守に昇進し、其頃御郡代伊奈備前守（初號熊藏、）〇此兩人御領地御藏を預る、諸國金銀山支配、別而佐渡銀山ハ日本第一之用山成故、一年に兩度宛來著可致由被仰付、慶長八（卯）年より支配、翌年辰五月總勢百三拾人に而佐渡（江）渡海、支配十一年、〇中略相川府中と成、府中開發之事、銀山次第に盛出るより、間歩口數拾個所に及べり、依之他國より大勢來り、所緣を求て爰に住ん事を願ふ、夫迄はしか〳〵家居も不定、銀山をかせぐ者は、其所に於てはへ木を伐、其を以て堀立に住居を拵、稼所變あれば崩し、又稼所に立て住居せり、則是を山小

屋と云、其後人家定り家居と成事は去年依台命、大久保石見守當國奉行職を蒙れり、夫迄は陣屋鶴子に有つる所、同年先遣而宗岡彌右衛門(岡、佐讃)を渡し、陣屋を相川江移す事になれり、石州ハ今年渡海有、山林を伐、田畑を埋、平地とし、陣屋を始、それ〳〵に構を立たり、銀山猶々盛たれば、銀山の掟を定め、由緒有者人を他國より招き饒之、其々の役人となしぬ、是當國役人之根元なり、又石州家來之内、地方銀山と分け兼役を被申付ける、

地方　大久保山城　銀山　宗岡佐渡

〔但馬考 四〕中瀬金山

天正元年、八木但馬守豐信領知ノ時、中瀬大日寺ノ僧ニ沙金アリ、因州ノモノ來リ、コレヲ見テ、其山ニ金アル事ヲシレリ、其後ヲ尋テコレヲホル、翌年堀出ス、金穴ヲ石間風ト云、コレ金ヲ得タル始ナリ、モト金石ヲマブト云事ナルヲ、コノ國ニテハ金穴ヲマブトイフ故ニコノ名アリ、

同三年、別ニ又一穴ヲホル、金ノ出ル事甚多シ、一日ニ七兩ヲ運上ス、故ニ七兩金穴ト云、

同五年、太閤コノ郡ヲ征伐シ玉フ、八木但馬守防ギエズ、城ヲ棄テ出奔ス、太閤ヨリ別所某ヲ八木城ニ移置クコノ奉行トス、

同十年、別所ヲ丹後へ移サル、コレヨリ生野ニ屬ス、同年ノ秋、宮井村ノ内百六十八石九升一合ノ地ヲ分テ吏民ノ宅地トス、以後金山町ト云、

慶長五年、東都ヨリ間宮新左衛門ヲ生野ニ置テコレヲ奉行伊藤石見守、同十二年百合山ヲ堀ル、司ラシム、コノ時須田鶴山兩庄ヲ繞ス、以來、コノ地ハタヾ小吏ノミアリテ諸務ヲ司ル、故ニ奉行等生野ノ下ニ記ス、

〔但播州金銀銅山并寺社舊記〕但州養父郡中瀬金山之事

一中瀬金山は川戸邊ニ而仕出由候得共年數不分明、但百貳拾年以前天正元酉年、但州次田庄八

木之城主八木但馬守、中瀬邊支配之時、大日寺邊ニ百姓八人罷在耕作ス、此節因州之もの來テ前前之樣子を相考、川戸邊ニ而砂金を見出し、是をつなぎ金鋌を切出ス、是ゟ下財集リ候哉、戌年右間步出來ス、同三亥年七兩間步出來ス、但一日ニ運上七兩ブヽ上ル、依之七兩間步と云、是ゟ段々出來ス、

一百拾六年巳前天正五丑年、羽柴筑前守但州發向ス、八木但馬守城ヲ明、因州江立退牢人ス、此跡岡所別所豐後守丹後國由良江被遣、其跡生野奉行伊藤石見守支配被成、同年秋、吉井村高之内百六拾八石九升壹合、中瀬金山屋敷間步小屋屋敷ニ引ケ中瀬金山と號、同年田路助右衞門と申者中瀬を請ル、同十二申年ゟ中瀬之山師共請取を破リ運上上ゲ、山師共心次第之稼と成、此時分ハ貢山ニ而運上取ル、○中略

右金山之内、稼可然場所三ケ所有、第一ニ中ノかや間步樋七拾貳挺取込候ハヽ中程かたきもの有之候、敷通ニハ金切出候得共、けたへの時分故捨つ、其時之樣子存候もの手今貳三人も中瀬罷在候、取込入用金子五百兩程之積候得共、中程かたきものに取付候ハヽ、入用減可申由、第二ニ白岩間步、此水拔近年百姓共行事ニ而、取申候銀を以川戸ゟ水拔を仕掛申、貳百四拾尋餘切申候得共、白岩四ヲ留之地形ゟ三拾長ケ程下江參候積リ、内九拾六尋やわらきニ而、壹ケ年之内ニ切ル、今三尋餘も切候ハヽ、金筋を切出スべくと積候處、右かたかりニ而一ケ年之内漸く貳尋餘切、稼料つきて捨置候、殘百四拾四尋程之處、此以後切拔ニ而入用金千五百兩餘之積、五六ケ年寅掛可申候、然共鉉内ヲ參候間、此道筋上々にて金筋相見、是ニ切當候ハヽ、入用も減、亦道ニ而大盛ニも可成候、第三ニ行事間步、是ハ近年百姓稼捨候所、拾七挺樋を引迄今三四尋盛出可申候、其わけハ上ニ而もときれを貳拾挺餘切候ハヽ盛、此入用金貳百兩餘之積、是又水拔を切候ハヽ百九拾尋餘西ノ方ニ可然處有、是ゟ切候へば貳拾挺下迄、此入用金五百兩餘之積、三ケ年程掛可申候、是寅

鋪內を參候間、金筋ニ切當リ候ハヾ入用も被可申候、

〔但播州金銀銅山并寺社舊記〕阿瀬奥金山○但馬國氣多郡之事

一此金山、伊藤石見守支配之時、文祿四未年ゟ出來ス、元祿五申年迄九拾八年ニ相成、此金山初リハ、文祿四未年關白秀次公御遁心之由、同年七月於高野山御切腹、是ニ組仕候もの御咎メニ而、堀久太郎家來欠落仕、阿瀬奥山江忍隱候、其頃は源大夫屋りゟ奥は甚深山ニ而、人倫通路無之處、此落人上下貳百人餘、此所を切明隱候落度之者故、金山之通り谷川ゟ砂金を差出し是をつなぎ、金山を仕出ス、追付御赦免にて、右之者どもハ、古郷江歸候、段々大盛ニ成、其頃は貳年三年御請座ニ極運上取、寬永元子ゟ請座を止メ、役人を遣し置、同巳年迄六ケ年之間、生野同前之仕形也、不盛ニなり、同七午年請座成、源大夫屋りゟ貳拾丁奥ニ家七軒有、男女三拾四人有之、平右衛門と申もの久敷罷在、所々案內能存候、此邊之儀相尋候時ハ此ものを召寄候、○中略

但州氣多郡樣之內殿金山之事

一古は小出大隅守知行所也、慶長十九寅年金山出來、其年ゟ公儀江被召上、生野奉行間宮新左衛門支配成、元祿五申年迄七拾九年成、役人共御運上取、○中略

但州養父郡日畑金山之事

一間宮新左衛門支配之時、八拾九年以前慶長八卯年金山出來、役人遣し置運上取ル、五六年之內盛止、此時七拾九ケ年以前妙見社領ニ渡リ、於于今請座之由也、此金山稼可然處有之哉と、前々ゟ吟味仕候へ共、案內存候もの無之候、

但州氣多郡小出大隅守知行所万場金山之事

一元小出大隅守知行所也、八拾三年以前慶長十五戌年金山出來候ニ付、翌亥年ゟ生野奉行間宮新左衛門支配ニ成、口屋四ケ所建、役人共を遣置、右戌年ゟ拾五年盛り、其後とぎれニ付、口屋を引、

長門國金山

夫々於テ今請座之内也、此村庄屋四郎左衛門、年寄三右衛門、與左衛門、此金山立木有、猥リニ仕間鋪旨、右庄屋年寄ニ、先役酒井七郎左衛門申付置候、

〔大日本府縣志 礦物篇〕曼海山鉾九十九　大切山 秋より二里半あり 幷千人間夫壓死之事

抑此長州赤銅山といふは、日本に名高き金山にして、古來より金を掘こと、世に人の知る所也、其山の總名を大切山といふ、中にいろ〳〵の小名あり、或は三本松、或は白金山、或は千人まぶ、中にも此千人まぶは、古より次第繁昌にして、人家軒を連ね賑は敷處なりしに、享保十乙巳のとし五月十六日に、山崩れ人うたれて、九百九拾九人死す、扨此由來をたづぬるに、此山の習にて、年の中は三日の忌日有、是をトキといふ、又空時ともいふ、其トキといふは、正月十六日、五月十六日、九月十六日の三日なり、此日むかしより山は鳴動有て、山へ入ことを忌む、人若山にいれば、山靈祟りをなすと言傳へしなり、然にこのとし五月十六日いかゞしたりけん、稼方の者一統にいひけるには、今日山に入て平日の如く稼ぐべしとて、いつもの如く支度致しけるに、中に一人のゲゲョウの 金堀事 云、けふは必入るべからずとて、此者色々に諫めけれども、多勢のことなれば更に聞いれず、彼ゲゲョウが云、今日一日稼ずして何ぞ餓死せんや、我祟をおそれて餓死をおそれずといふて、此者は殘りぬ、其餘の人々はいつもの如く山入せしに、果して鳴動甚くなりて、山崩れ打れ死したり、其後其者共の妻子のみ殘りて數多尼となれり、今は金吹屋も少くなりて、漸々三十六軒となりたり、

此山は草木生せず、入口の高さ、上見霞ほどに高し、是より奥に入る事二百町許也、拳螺殼に火をともして通行す、此器珍ら敷ものなれば、孫市が贈るべしと約せり、

礦を取の儀は、網目鉛の條下の説に大かた同事なれば略す、又礦脈をたづぬるに、日の陰陽を見て種々の金に鑑識あれども、ゲゲョウの口授なれば略す、

（輶軒小録）銀坑之事

日本には東奥州生金、西對州生銀と云ふこと、列代の史傳に多く載す、續日本紀、天武天皇三年三月、對馬國司守忍海造大國と云ふもの、當國より初めて銀を出だす由言上して、銀を貢上す、依之小錦下の位を授けて褒美し給ふ、其銀を諸神に奉じ、宮人小錦以上大夫等に頒ち給ひきとなり、日本銀有ることを知るは、天武帝の時を初とし、始めて對馬より出づ、近世對州より銀の出づるを聞かず、近代は佐州より銀を堀り出だす事、其名尤あらはる、前年其國の學生横山怡白來り學ぶ、依りて何の比より堀り出だすと尋ぬれば、中古越後長尾氏に屬す、其後公領と成り、天正の比より銀堀り出だすと云へり、然れば銀の出づること甚近世なり、其國の地理遠近大方知れたることなれば、記すに及ばず、其國牛馬犬猫の屬は有りて、妖怪猛獸毒物なく、盜賊の患もなし、海中の一島なれば左もあるべし、按ずるに、本國金有ることを知るは、聖武帝の時に初まる、何れも唐の世全盛の時に中る、

攝津國多田銀山

（吹塵錄二十四銀山）攝州多田銀山豫州立川銅山起立

攝州多田銀山起立

寛文二寅年、永井日向守御分銀山并銀山附四拾ヶ村高八千貳百拾石餘上知被仰付之、

下野國足尾銀山

（日光山志四）銀山、足尾町より西に當り、二里餘、地形四五町程なる場所なり、銀山は日光御門主御持山となれり、運上を奉り村民等稼の山なりしかど、今は銀出ざるゆゑ、吹方を休て、此所に司るものを命じ置り、

陸奥國仙臺銀山

（東遊雜記二）此地〇石母田村より七八丁隔て、辨慶の硯石とて方三尺余の凹なる岩あり、是を硯にして著到を記せしと云、手水鉢などにせば、至てよき石なり、水の貳斗も入べき雅石也、是より一里餘西南に平田村と云に、公義の銀山あり、今仙臺の御預り山也、慶長七年より元文年中まで繁昌せし山にて、今は大に衰へしと云、銀鑛見候、銀みふかせ御吟味ある事なり、

〔半田銀山志〕銀鑛發見

半田山發銀之端、莫知其詳、蓋在於大同年間云、俗傳、有一覡、行拜神祠、到此地、投宿民家、見銀塊於爐灰中、異之、卽知所燕樹根爲挾、往采薪所見之、則得露頭錢神阜是也、

鑛業來由

自慶長至萬治五十年間、盛發銀鑛於錢神阜及八丁立、八丁立者、錢神阜迤東也、寬文年間、上杉播磨守綱勝朝臣、使其臣伊達半十郎司鑛山事、無幾削封爲松平宮内少輔所食、又修其業、正德二年、北半田邑野村鶴右衛門營開本砦坑、享保八年、達鑛脈大得贏利、家世其業、其後佐久間六郎右衛門代之坑深水出、開大剪坑以疏積水、寬保元年十一月起業、至延享三年而成、發銀豐盛、四年九月、征夷府直轄半田鑛事、置代官衙于桑折驛管理焉、辟解鑛務者、徒自佐渡、以爲吏員、寶曆四年、代官小林彌四郎言、半田人佐久間盛永請營開岸坑、北半田人齋藤六之助營開澤坑、許之、此時大剪本砦澤三坑鑛脈衰殺、營業不能支、辨有乞解業者、營業者曰之鑛山師、負擔坑事、使役職工、有司治之而耳、小林彌四郎建議、自去歲以來、鑛脈衰殺、物價騰貴、得不償失、鑛山師逡巡引去、布令募案、未有應者、願使有司管理以待有應募者、府從其議、給費經理焉、又上疏言、大剪坑十三番壁有良鑛、爲積水所沒、不能採堀、望請去坑口下一百五十步開疏水坑長四百二十步、坑道以高　尺五尺爲步以涸大剪積水、良鑛可得也、桑折人平左衛門、將擔當工事幷本坑與鳳坑四百二十五步、費金八百二十八兩、米六百八十石、期三年可開鑿也、幕府可之、元疏水是也、所鑿鳳坑會有良鑛、名曰新砦坑、

新疏水坑開鑿

安永四年、幕府附伊達郡于松平陸奥守重村朝臣、預管轄之、天明四年、幕府使支配勘定格石崎淸之丞、點撿半田鑛山、石崎上便宜事曰、諸坑深長、爲水所沒、非開一疏水坑則不可爲也、請自南半田邑輪奈手進鑿七百五十步、用金一千五百六十兩、米九百二十六石、用材五千三百九十枚、則土功可成、剩

水可得去也、幕府從其議、六年二月、初有事于輪奈手、仙臺侯使臣屬董其工事、寬政元年、罷仙臺管轄、復代官、以岸本彌三郎爲之、岸本乃上言、臣以七月十九日、承乎田工事、見時開鑿坑道四百七十九步、鑿坑四百七十八步強、聞仙臺吏人言、所須費用過定額、金五百二十兩、米五百七十石、究其原由、出於石崎豫算不精、臣承事以來、自七月二十日至今年五月晦日、所開鑿三十一步六寸、準定額金六十四兩強、米三十八石、而其實所費、金三百五十四兩、米九十四石、會計如此、坑道決不可成、且地有剛柔、日夜所穿柔則六尺、至於剛則止七寸、用力不齊、費亦倍蓰、値農桑之時、人夫專劇、非募以厚利、勢必不行、坑道未成、計二百四十步、非須金二千六百有餘兩、不能竟也、請命主司、發府庫金給焉、從之、此年請增本鑿大剪工役夫、言天明四年、幕府遣石崎清之丞、監乎田鑛山、定用役夫員、本鑿工夫六人、大剪三十八人、監理三十六人、人少事繁、勤至荒廢、且乎田鑛業、不相連續、各成一房、曰之鋪鑛、及前房未盡、豫採後房、曰之青鑛、人少事繁、則不暇給、於青鑛處房已盡、無鑛可穿、買石之徒、束手失業、往々離散、留者僅九人、凋弊如此、何以謀公家之利、伏望增益役夫定員、令無荒廢之患、經理雜役三十二人、用坑夫一萬三萬五千四百人、以爲定制、今如所請、然採鑛不盛、岸本乃歎曰、鑛鑛已盡矣、享和元年、竹內平右衛門爲代官、奮欲興鑛事、稟請貸金開鑿之、文化四年正月、新疏水坑、得達鑛脈、（乎田鑛之鑛脈、作二月六日）自天明六年起業、至此二十二年、大獲銀鑛、幕府實鑄造貨幣云、

享和年間、銀額不過一萬錢、岸本之所長大息也、文化之初、得達新鑛、歛五千貫、夥矣哉、世傳德川氏之盛、極於此時、此其一端也、自寬政十年、至文化元年、得銀之數如左、

寬政十年	一萬六千八百六十九錢
十一年	九千七百九十六錢
十二年	七千二百五十錢
享和元年	一萬一千七百七十七錢

二年　四千九百四十七錢

三年　三千三百三十二錢

文化元年　九百四十三錢

二年　三萬七千九百六十七錢○中略

再光坑開鑿

文政四年代官寺西重次郎上言、臣所管半田銀山、見今所掘採、栗林、澤、本谷、大剪、新疏水、諸坑、漸東漸下、量其坑極底下、於我口、略十二三丈、水益深、業益難、處亦無良鑛、奧柄、鍰神皐、古稱銀穴、爲半田最上等、而未發其蘊也、臣圖奧柄、鍰神皐、矢倍、岩下三坑、因其故道、進鑿各二百步、必將有良鑛矣、幕府允許、開鑿久之無功、至文政九年罷之、十年寺西藏太爲代官、十二年正月上言、昨十一年、半田產銀頗多、自正月至五月、筋金一萬千七百九十四錢五分、折金六百七十六兩五分、永樂錢六十五文五分、灰吹銀十二萬九千六百六十二錢五分、折金七千百九十三兩五分、永樂十五文六分自六月至十二月所得筋金七萬六千九百八十八錢五分、折金四千四百十六兩二分五厘、永樂二十五文九分、灰吹銀三十萬零七千九百五十五錢、折金一萬七千三百二十二兩二分五厘、永樂二百十八文八分、鏈價金六千零三十一兩二分五厘、永樂四十二文、稅金十六兩五分、永樂九十四文、都三萬五千七百五十兩七分五厘、永樂六十四文四分、此其所入也、所出金一萬八千二百五十七兩五分、永樂四十八文四分、比較得贏金一萬七千四百九十九兩二分五厘、永樂十六文、旺盛如此、請陳其由、自今歲己丑、前六年甲申測量坑道、知新疏水坑傾斜向上、底高於口六丈、於是入坑口六十步、從九ヶ瀨轉進三百八十步、得一良鑛、此致旺盛之因也、其後鑿道漸下、湧水急於泉、且掘且鑿、自此以往、雖有至寶、不可得採也、臣議按地形、參酌老吏言、距新疏水坑口、東四百步、有地可辟疏水竇、字曰再光、卑二十餘丈、此竇一成、則坑中之水可涸、底下之贏可竭也、然延長不下千步、非經四五年之久、則不能成功矣、所採取贏鑛、未至乏絕、

可以支數年、底及今時、實以他年之有歲、嘗者決意遂鑿九ヶ所、故有今日之盛、苟不決意勇往、何以望向來之隆、方今人意銷阻、皆欲開水貫洞及鑿未竣、而財餘絀、至若費用、要須二千五百兩、今所請書鍵價千五百兩、加以從來所得鍵價、聽不仰府庫度支、可以成實矣、懇府允之、天保元年載事于再光、嘗聞千二百步、經十七年、弘化三年、得達鑛脈、坑銀豐盛、六月間所得以償十七年工費之大矣、嘗是之時、牢田殷賑、前代無比、再光之盛邪、奉盛者、二十餘年不衰、但所得山吹銀之數、

弘化元年　五十三萬九千百六十錢

二年　二十二萬五千零九十四錢

三年　三十二萬九千九百零九錢

四年　一十九萬八千零十五錢

出羽國院内銀山

〔秋田風土記雄勝郡〕銀山は慶長年中より始ると云ふ、其已前より有りと雖も其を知るものなし、山は上新町の川向にあり、堂あり不動堂あり、絶頂に觀音の社地岩穴にあり、山中二町程林中法度山日張澤橋元一歩一番所有とぞ、西は天狗坂と云、又すみ川と云にも番處ありとぞ、今はなし、昔は御直山に非ず、他國の者入込、山師せしと云、是も又昔の跡のみ、慥なる事をしらず、○中略

雄勝郡　銀山町（上院内より一里八町、長倉より六町ほど行て、本道の大切通あり、中頭ト云白岩あり、銀山は今の所の山なりとぞ、依て此所を水揚とすといへり、）拾歩一番所、矢島領銀山通路を爲て足輕二人（大山長門守支配）守之、一人一日六合扶持三十日交代、西は矢島領大澤越、南は銀山道なり、三町ほど行て立石あり、右の山上にあり、奇石なり、又主鈴坂と云石垣の坂あり、昔銀山奉行衆各主鈴此道をひらく、故に名とす、臺所御未廠あり、入口に番所あり、家居三十戸、人三百餘口、（昔は千戸、人五千餘と云、）庫屋あり、銀山は慶長年中、村上宗兵衛（飯田の城主大谷刑部大輔吉次が家士なりと云、）大谷没落して後當國に下り居す、靈夢によりて此山を見出すと云、澁江内膳命じて山先きとす、今子孫なし、慶長十三年、院内の守僕矢田野安房守支配す、組下飯土井豊岐守を（院内給士）銀山に附置く、梅

津主馬來り代る、北平は矢島領笹根子に出る道あり、依て番所あり、湯澤の給士守之、(南左衞門組下)今銀山衰て止む、然れども道猶あり、是を北平越と云、此道北平鉛澤と云に出て、大澤道に出て矢島領に至る、又近年同領蘆莚に銀山あり、間道の小道を開く、依之御境方其道を堀切止むと云、

〔秋田沿革史大成上〕慶長十二年、院內銀山運上銀、駿府將軍家康ニ獻ズ、家士信太兵部少輔其使節タリ、以降年々之レヲ納ム、而シテ此銀山開掘ノ原因タル、伊勢國人林治郎左衞門、會津ノ住人渡邊勝左衞門、仙北ノ住人石山傳助、越前敦賀大谷吉次ノ家臣村山宗兵衞等、慶長五年關ケ原ノ戰ヒ負ケテ本藩ニ遁レ來リ、雄勝郡小野村ノ知人佐々木某方ヘ潛伏セシ折柄、村人ノ語ルヲ聞キテ、此村ノ山ニ砂銀ヲ掘リ出ス所アリト、因テ其山ヲ普請シ、同八年頃ヨリ十年ノ冬季マデ、岩ニ砂銀ヲ採リ居リシニ、村山宗兵衞ナルモノ或夜靈夢ヲ得、獨リ小野村ノ山ヲ出テ、是ヨリ西ニ方ル實龍館ノ奥山ニ入リ、長倉ト云フ里ヲ過ギテ、又入ルコト二里餘、而シテ靈夢ノ如キ銀鉱ノ萌ヲ發見シ、小野村ニ歸リ、渡邊、林、石山等ノ三氏ニ其奇異ナルヲ語リ、同十一年ニ至リ、數十人ノ坑夫ヲシテ掘ラシムルニ、同秋ニ至リ銀鉱ニ當リ、之レヲ問ヒ吹キセシニ、全ク銀鑛ナルヲ以テ、當時執政澁江內膳政光ニ告グ、直チニ義宣ニ上言シ、則チ政光ニ命ジテ、彼ノ村山宗兵衞外三名ニ、其山先キタルベキ證文ヲ下附シテ、追々開山セシヲ以テ、將軍家ヘ具申シ開掘ノ免許ヲ得タリ、

〔奈良文書羽後〕新城之銀山よく成候由其聞候、少宛も山に似合候て、役以下可申付候、はやく役以下申付候得者、ほりこども出候などゝ申候て、遲申付間敷候、金が出候得者、何と役を申付候得而も、ほりこは出間敷候、役を不申付候共、金が不出候得ば、ほりこは可出候間、大略に候者早役等可申付候、重而之便に山之樣子具ニ可申登候、儀之奉行申付、念を入可申候、新敷山に候間高をつ可有之候間、無油斷可申付候、謹言、

六月(〇慶長十二年)二十九日　　義宣花押

(秋田家紀年)慶長十二年丁未、今年ヨリ院内銀山運上銀初ル、駿府ニ御運上致指上、御使者信太兵部少輔、同十七年迄御運上銀高不相知、

(渋江文書)駿府之御徙移、今月末か来月始にて候はん由候、然ば院内御運上之事、可持参候間、銀子今まで請取候分、無残可相上候、九右衛門か勝右衛門両人間、一人置取にて可差添候、さ候へば、御運上か、り跡より上候事は、見角六ヶ敷候間、去年分之儀は、今まで済候銀子とり集、霜月極月分成共、さん用仕入候て、候様可差上候、此書状参着明時より申付、算用以下相極、早々可差上候、いかやうに候ても、霜元逗留中参着候やうに可申付候、恐々謹言、

正月五日(十〇慶長十三年歟)　義宣花押

渋江内膳殿

又申遣候、霜元大方二月中には相立可下候、さ候へば下前北城之元へ御越なきやうに才覚尤候、惣別在々島之法度堅可申付候、

(梅津主馬政景日記)慶長十九年四月九日、眞崎長右衛門山より、嘉兵衛我等之處へ之名付ニ而書中有、其様子は、院内銀山、近日暴敷罷成、水取候事も不成候間、御米借シ被下候様、内膳殿へ申上候へと被申越候、嘉兵衛方へ我等申分は、右如申候、當年之儀、山役之義御佗言可申と存候間、何事もかまひ申間敷候間、貴所計内膳殿へ御出候而御申可然由、山掃振舞之所ニ而申理候へバ、尤之由被申候、　八月廿七日、窪田へ我等罷帰ニ付、板木澤山師共佗言有、其様子ハ、睦七拾枚間分御運上三拾五枚か、り候分、掃部きつく催促之儀迷惑致候、石かね無之候間、石かね罷出候まで遅候様ニと申候、我等申分ハ、其身共不屆也、其様子ハ、右百貳拾六荷半之石かね之内六拾荷、其身共へ相渡候儀ハ、三拾五枚之御運上可為済用所也、石かね壹荷貳拾貳はいあるよし、其身共申候、壹はい壹吹ニくべ候由及聞候、壹吹ニ金壹匁宛ニ候へば、壹荷には拾貳匁有、六拾荷の石かねニ而吹候

荒川銀山
阿仁銀山

金ハ、大形三拾五枚之御運上も可有之候と申候へば、又申分は、御米かい其外入用に指引候へば、思はしからざる儀候由申候、我等申分は、入用菟角御米をかい候と申候儀不屆也、六拾荷之石かね不渡候はゞ、只今迄に御米をはなにゝてかい候はんや、御米をば右之心得ニ而借銀を致候而もかひ、御運上をだてざる儀、不屆之由申候へば、尤之由挨拶罷歸候、水無山師先共、侘言申分は、新山ニ而、皆々手づまりにて御座候處に、御米たかくにて迷惑致候、やすく罷成候様に、於窪田御披露頼入候と申候、我等挨拶申分は、御奉行衆へ申上儀成間敷候、其故ハ、院内銀山之儀は、仙北三郡之御藏米つどい候へども、爰元之ね、同前也、當山之儀者、阿仁檜内に御米無し、近所は窪田分、大かたは仙北之御米、湊へ御下被成、野城へ御廻、野城より小舟ニ而日數を取と候所に候間、院内銀山より一はいにうらせられ候ても、院内銀山同前に可當候處に、院内なみに安御うり候儀、いかゞに候間、せう／＼は爰元之山の御米之ね御あげ候か、院内山之御米之ね安あられ可然と申上度候へ共、當山之儀は、新山又は來春之山之姿に候間、延引する事候、もし以來も當山之御米様子よりねを御あげ候へと申上儀は不知候、只今より安被仰付候様には、主馬におゐては申上間敷と挨拶致候へば、いか様にも山々つゞき申様に賴入由申候て、一日にあまし罷歸候、　九月廿四日、院内銀山御運上銀負之内、去年秋、役持申候者共違判を致、尾張次右衛門を以、我等方へ申越分は、荷分間歩ニ付而、總山明申候故、御役も調不申候、秋役之内御免し被下候様に申上候様にと申越候、若我等於不申上は、目安を以屋形様へ可申上と申ニ付而、内膳殿、右近殿へ、右之様子眞長右同道致申上候へば、夜に入候て御城へ罷出候へと被仰候間、罷出候へば、御兩所御披露被成候、未進負之銀目御尋候へば、川加兵衛請取分候間、銀目ハ不存由申上候へば、院内ニ而加兵衛ニ御尋被成、少は御免可被下由被仰出候間、其段返答致返申候、加兵衛所より添狀候間、其段返答申候、

〔梅津主馬政景日記〕元和三年三月十日、慶長十八年荒川銀山間歩諸役御運上銀、同銀代銀遣銀間

増田銀山
藤澤銀山

次銀請とり捲、御算用沼井藤右衛門、根岸捲内分濟、但間歩請役ノ未進四拾三貫百七匁有、慶長十七年阿仁銀山入役御算用片岡九兵衛、太野金右衛門分濟、慶長十六年増田銀山未御番屋御算用畳間慶人、豊田左馬允濟、慶長十五年杉澤御運上金銀請取御算用青柳播部助分濟、但無帳一紙計にて、惣帳は火事に在所にてやき候由、右之鋪人太野金右衛門藤吉、　廿六日、慶長十六年より同十七十八十九まで藤澤銀山奉行森田次右衛門、片岡久右衛門、御算用帳をば内藤殿衆極候由、慶予畑正助手ニ而一紙有、其一紙之面ばかり御見申様申候、但森田次右衛門請取之内、慶長十六十七銘御運上貳千百貳拾五貫八百五十目は、山子に未進之由、小一紙之内ゟ、太一紙にはつれ候を御出し候、未進帳書付申候外に、六千八百八拾貫八百八拾目は、太一紙之内、淺藤藤に有候の由、兩人之手前分之又未進帳に有、此鋪人山口清左衛門、太和田彦左衛門、金戸正吉、古谷長七、右之小帳、内藤殿御之時分、正助一紙かき候由申ニ付而、此度も次右衛門、久右衛門、岡崎に御露見申候、一紙之面に御買銀之儀、御未の儀割付不見へ候間、正助に書付させ申候、但小帳は一冊も請取不申候、

佐渡國銀山

〔佐渡志五物産〕銀

天文十一年ノ夏、越後ノ國ノ商船澤根ノ濱ニ纜ヲ繋テ、終夜天色ヲ望ムニ、金銀ノ氣空中ヲ衝クヲ怪ミ、逆旅ノ主人ニ相議リテ、鶴子本間氏ニ告ゲ、礦脈ヲ尋ネテ鶴子山ヲ開キケレドモ、功イマダ成ザルヲ嘆キ、後越後ノ國ノ領主上杉謙信ニ訴ヘケレバ、入道ガ下知トシテ、同國魚沼郡上田村ノ金穿リ人夫數百人ヲ渡ラシメテ、天文ノ末弘治ノ頃マデニ銀鋼ヲ得タルナカニ、金モ少シク交リタレドモ、費用ヲ補フニ至ラズ、年經テ慶長六年、關東ノ御料ニ併セラレシヨリ、天臺德ニ成リケルニヤ、金銀ヲ出スコト年ニ多ク、中ニモ相川ノ中山通リトイフ礦脈連綿トシテ出ル處ノ銀ニハ、多クハ金ヲ帶ビタリ、此中ヨリ出ル金ハ、異邦ニ稱スル處ノ煉金ニシテ、銀トジトイフハ、生レノマヽノ銀ニテ上品ナリ、其餘ハ雜碎百煉シテ銀トナルナリ、委クハ金銀山志ニ見ヘタ

り、

〔佐渡年代記十三〕慶長十二丁未年、佐州銀山、其出る事を減る故、大久保石見守是を糺斷すべきため、五月二日駿府を發す、今年は路次の國々貢賦の事を沙汰して佐州へ到らす、慶長十三戊申年、今年二月、大久保石見守佐州へ渡海し、金山を撿斷する處、掘返し地形と、海の深さ均しきゆへ、水涌出て、金穿等も詮方なく、其術計を失ふ趣、書を呈して言上すと云、長安は猶佐州に留りて、來夏越後田畑廣狹を改、信州を歷て、美濃國中經界を按撿すと聞ゆ、

但掘返せしと云は、西三川金山の事ならんか、或鶴子銀山をさして言しも云るべからす、

〔當代記〕慶長十二年五月二日、午ノ終ヨリ大雨水、此頃大久保石見守佐渡ニ下、銀山仕置可仕之由、依仰、駿州ヲ立、伊豆ノ金山銀、シカ〳〵コノ比不出ト也、　十三年四月十日、大久保石見守去月佐渡國へ下、銀子當年ハ曾テ不出、依之爲水流シノ溝ヲ深ク掘、色々被了簡ケル、間歩ノ穴、海ノ地形ト對揚歟、水間歩ニ多シテ難掘ト云々、

〔吹塵錄二十四鑛山〕卯（〇寶曆九年）十二月二十四日、相模守殿江御直ニ備後守上ル、同廿六日、安藝守與七郎江御渡、

辰（〇年）十二月二十五日添書いたし上ル、同十月十日、相模守殿御直、備後守助九郎江、別紙御書付御渡し承付致し、同十三日、上村政四郎を以上ル、（〇以上本書）

書面、石谷備後守伺之通可仕旨被仰渡奉畏候、

十月十日　荒川助九郎

佐州山出金銀と、稼方御入用差引之儀ニ付、存寄申上候書付、

石谷備後守

書面伺之通、佐渡奉行江被仰渡候段奉畏候、

十月十日　一色安藝守、石谷備後守、小野左大夫、古坂與七郎、天野助次郎、

佐州相川銀山出方と、御入用差引仕候儀、前々之御相糺候處、古來より金銀山之儀は、石中を穿取候事故、十日之内にも盛衰有之、宜敷鏈に當候得ば、出方少く御座候而も、格別之御徳用も有之、鏈薄く相成候得ば、多く穿出候而も、御拂直段下り候ニ付、御損失も有之事故、年々盛衰に任せ置、御入用と出方差引仕候儀、前々より無御座候ニ付、九年以前未年之頃迄は、御入用と出方之差引ニ而は、何れにも御損分而已に而、御益之筋無御座候處、當時は出方と御入用差引ニ而、御益も多く相見候儀を專ニ仕候取計ニ而御座候、尤御益之進み候樣取計候儀ハ、專一之儀ニ御座候得共、御益多仕候ニハ、出方宜敷場所計撰穿ニ仕、出方薄き御入用ニ不引合場所江ハ、大工仕掛も少く、當時ハ御入用を掛稼候御直山五ヶ所之内、出方相應之場所壹ヶ所御座候ニ付、此所重ニ相稼候故、萬一右宜敷所、山崩落石等之變ニ而も出來仕候得バ、銀山稼一度之斷絶同意ニ可罷成哉ニ奉存候、石中ニ殘り有之金銀を穿出候得バ、誠國土之寶新ニ相増、御入用相立候金銀ハ、其儘世上之通用ニ罷成候ニ付、銀山稼之儀ハ、一ヶ年銀山方之諸御入用と、則其年一ヶ年出方之金銀之差引同樣程ニも罷成、御損さへ無御座候ハヾ、左而已御益之差引無頓着、多く穿出候樣ニ取計候ハヾ、變事ハ格別、是迄之景氣ニ而は、一體之出方、金銀共相増可申哉ニ奉存候、右之通ニ罷成候得バ、御損失も無御座、殘り有之金銀ハ出方相増、夫ニ隨ひ鉑成吹立等ニ掛候大勢之者渡世ニ罷成、自然と下之甘きに可罷成哉ニ奉存候、依之存寄之趣申上候、以上、

寳曆九年卯十二月

石谷備後守差上候

佐州銀山稼方之儀ニ付申上候書付寫

一色安藝守、古坂與七郎、御勘定方、

舊臘二十六日御渡被遊候、石谷備後守差上候、佐州銀山稼方之儀ニ付、書付一覧仕候處、右銀山之儀、當時ハ出方と御入用と差引、御益之多く相見候儀を專ニ仕候ニ付、出方宜場所計採穿ニ仕、出方薄場所江は大工仕掛も少く、當時出方相應之場所壹ヶ所ならでハ無御座候ニ付、右場所萬一山崩落石等之變ニ而も出來仕候ハヽ、銀山壹度ニ斷絶同樣之儀ニも可罷成ニ付、以來ハ一ヶ年出方と御入用差引同樣程ニも相成、御損失さへ無御座候ハヽ、差引ニ無貪著、多く穿出候樣取計候ハヽ、一體之出方相增、夫ニ隨ひ銀粉成吹立等ニ掛候大勢之者迄、甘きに可相成と之書面ニ御座候、

右之儀評議仕候處、去未年以來、出方と御入用差引、御益之進み候樣取計來候處、是迄差而差支ニ相成候趣にも無御座候、前書備後守申上候趣ハ、若銀山違變之儀も出來仕候節ハ、斷絶同樣ニも可及と、右之儀を氣遣ひ、出方と御入用當分ニも候ハヽ、御益ニ不拘、御入用掛ケ、稼手廣仕度趣意第一ニ相聞申候、備後守申上候通、石中ニ有之候金銀堀出候儀故、出方さへ御座候ハヽ、御入用相增候而も可然候、併當時間歩五ヶ所に而、出方と御入用差引、四千八百兩餘御益有之儀ニ御座候、一體出方相增候樣仕候ハヽ、當時不盛之場所も大工多仕掛候ニ付而は、又々直りにも切當可申儀も可有之故、銀山之儀ハ日々ニも盛衰有之候者故、其場所ニ而敷內等之樣子巨細ニ吟味之上大工仕掛候儀故、書面計ニ而は御入用指引ニ不拘、穿出候樣取計可然共難申極奉存候、然共備後守儀ハ場所見分仕、若斷絶同樣ニも可相成哉と申上候趣も見越候樣ニ御座候得共、先爲試、一兩年も出方と御入用差引同樣程ニも大工仕掛候樣ニも可被仰付候哉、則御渡被遊候書付返上仕候、以上、

辰二月

右辰二月二十五日、相模守殿江藝州與七立會被上候由、○中略

石谷備後守存寄之通、一ヶ年之出方と御入用差引同様程ニも相成候ハヽ、多穿出候儀可ν爲伺之
趣候、

右辰十月十日、相模守殿御直ニ、石谷備州、助九郎天野助次江御渡被成候由、〇以上朱書

（朱書、荻川助九郎在府、(以上)石谷備後守在勤）寳暦八寅年（灰吹銀金直、百目ニ付、三兩壹分、永貳百四拾五文、但元文三午年卯銀江戸表ニ於而、御極之上、正銀文銀ニ相直候勘定ナリ、）

一小判六千九百六拾貳兩、永四文、　一灰吹銀三百貳拾六貫五百八拾四匁貳分、此金直壹萬百九拾三兩、永拾四文、

一上納鏈代千三百八拾八兩、永百四拾五文、　一銀山諸御拂物代拾貳兩三分、永三拾五文、

〆金壹萬八千五百五拾五兩三分、永百九拾八文餘、　納方

一金壹萬三千七百拾六兩三分、永六拾四文餘、　拂方

差引

四千八百三拾九兩、永百三拾四文餘、　御益

但享保十巳年迄ハ、一ヶ年限之出來金銀翌年上納致し候處、同十一午年より同年分出方之内を加へ候ニ付、出方御入用差引ハ、年分を積引分勘定致し候儀ニ而、寅年分とも卯年六月上納高ハ、金八千六拾六兩、半田筋金出來金三百拾五兩壹分、合八千三百八拾壹兩、灰吹銀三百五拾四貫七百六拾三匁六分、半田筋金より出候、灰吹銀四貫八百三拾壹匁三分、合三百五拾九貫五百九拾四匁九分ニ有之、本文金銀高ニ引合不申候、

（石谷備後守在府、(以上)荻川助九郎在勤）同九卯年（八月迄備後守在勤）

一金九千百七拾貳兩三分、永百五拾八文餘、　一灰吹銀三百七拾貫八百四拾貳匁壹分

此金直壹萬千五百七拾四兩壹分、永九拾九文餘、

一上納鏈代貳千貳百四拾七兩、永百四拾文餘、　一銀山諸運上物御拂代拾三兩貳分、永五拾文餘、

（小判所ニ而吹不足之分）
一筋見買石價金拾壹兩三分

〆貳萬三千拾九兩貳分、永百九拾七文餘、　納方

一金壹萬六千七百三拾兩三分、永百九拾壹文餘、　拂方

差引

金六千貳百八拾八兩三分、永六文、　御益

但右同斷之處、卯九月、石谷備後守御伺之上、同年之義ハ、十二月分迄之金銀翌年上納致し候得〆、辰年上納高ハ相減候得共、巳年より全前年一ヶ年分上納ニ相成候ニ付、右之通取計候積御下知相濟、辰年上納高金六千九百四拾三兩、灰吹銀貳百三拾三貫八百七拾七匁七分ニ有之、本文金銀高ニ引合不申候、○中略

嘉永元申七月二十三日差立、同八月二日阿伊勢守殿江志賀金八郎を以進達致し候旨、同十六日出、同九月六日晩到來之御用狀ニ申來ル、○以上朱書

同九月晦日御書取御添、前同人を以御下ゲ有之候ニ付、承諾付取調、翌十月朔日、前同人を以返上致し候旨、同二日附、同二十三日晩到來之御用狀ニ申來ル、○以上朱書

書面伺之通、仕入金貳千貳百五拾九兩貳分餘江戸御金藏ニ而御下ゲ戻之積可相心得旨被仰渡、奉承知候、

申十月朔日　中川飛驒守

伊勢守殿

佐州金銀山自分稼所、去未年分金銀出來形幷御入用遣方、其外御入用金御下ゲ戻之儀申上候書付、

中川飛驒守

中島平四郎

佐州金銀山之儀、近年打續不盛ニ而、年分上納金銀高相劣り、此姿ニ而ハ終ニ文化之不盛ニも可相至哉、山方衰微致し候而ハ、上納金銀自然相減候樣成行、其上銘々渡世を失ひ、一國之安危にも拘り候儀ニ付、私共深心配仕、何れニも一體之御益相進ミ候主法も可有之哉と、其筋之者共見込をも相尋、銘々存意爲申立候處、當時稼鋪ニ相成居候、古間歩之內、山所見立穿方入用、幷鏈石粉成吹入用目當を極、夫々規則相立相稼、三千兩之仕入金致し候ハヾ、四千兩丈之金銀穿出、千兩之御益相立可申、勿論右千兩之御益而已ならず、穿出候四千兩分之金銀ハ、全土中ニ埋レ候分、新に世上之實貨と相成、其上右數に相稼候內には、追々出方取直、格別之御益相立候樣罷成可申、左候得ハ御直山にも可相成、金銀山稼之末を繼候一端にも可有之旨申立候ニ付、御差引勘定合之儀、再再應爲取調候處、不相當之譯にも無御座、千兩之御益相立候儀ハ無相違、見居も附候儀ニ而、別段御拂切之御入用等不申上、且金銀山稼永續之仕法を兼候兩全之主法と奉存候ニ付、去冬中委細に取調相伺候處、伺之通御下知相濟、尤昨年中より右之趣を以稼方爲取計、出鏈之分ハ先般不殘金銀ニ吹立相濟候處、兼而申立候目當より御益も相進ミ、別紙差引書之通、仕入金ハ貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分ニ而、出方ハ三千貳百六拾三兩、永五拾五文九分と罷成、差引千三兩壹分、永百八文壹分御益相立、兼而申上候御益金割合外、別段之御益相立候ニ付、伺濟之通、自分稼所ニ而穿出候金銀ハ、今般遠路御金藏江別上納ニ仕候、右ハ掛役人共ニも新規之儀ニ付、萬一見込引違候而は不容易儀と深存込、格別入はまり、都而誠實に取扱候故、右之手順ニも相至候ニ付、猶此上之主法相續仕候儀、兩方精々申渡置候、且前書仕入金貳千貳百五拾九兩餘之分ハ、先般御下知濟之通、御下ゲ戻之儀、御勘定奉行江御斷御座候樣仕度、依之別紙金銀出來形御入用遣方差引書付、幷御藏斷相添此段申上候、以上、

申七月　中川飛驒守
中島平四郎

佐州金銀山自分稼所未年分金銀出來形幷御入用遣方書付　中川飛驒守
中島平四郎

覺

一焼金壹貫一四拾六匁七分　此小判積三百七拾九兩壹分、永貳百文六分、

一灰吹銀貳拾八貫九百目　此金直貳千八百八拾三兩貳分、永百五文三分、

〆金三千貳百六拾三兩、永五拾五文九分、　出方

内

金貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分、　拂方

是ハ山方稼入用幷成吹入用、幷金銀吹分所小判所入用、其外數内不時入用等之分、

差引

金千三兩壹分、永百八文壹分、　御益

内七百五拾三兩、永貳百三拾貳文五分、御仕入金三千兩ニ付千兩之割合御益、
貳百五拾兩、永百貳拾五文六分、割合外御益

右之通御座候、以上、

申七月　中川飛驒守
中島平四郎

佐州金銀山自分稼所去未年分御仕入金御下戻方御藏斷

一金貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分、

但馬國生野銀山

右ハ佐州金銀山自分稼所、去未年分御仕入金、書面之通御座候間、愛而御下知濟之通、私共斷次第、
運上金、御金藏より相濟候樣、御勘定奉行江御斷被成可被下候、以上、

申七月

中川飛驒守

中島平四郎

〔延喜式雜五十〕凡對馬島銀者、任聽百姓私採、但馬國司不在此例、

〔但馬考三〕生野銀山

此山ヨリ銀ノ出ルコト其始メ定カナラズ、世ニハ大同ノ頃トイヒ傳フレド、タシカニ記セルモノナシ、延喜雜式曰、凡對島ノ銀ハ百姓ノ私ニ採ニマカセ、但馬ノ國司ハ此例ニアラズト、此文ヲ以テ考レバ、延喜ノ時スデニ貢上セシ也、中華へ傳ハリシモ久シキコトニヤ、明人ノ兩朝平攘錄ニ、但馬銀ヲ出ストアリ、又圖書編ニ、日本ノ國ヲ載シニモ、但馬ニハ此所銀ヲ出スト記セリ、今此山ニ傳フル記錄ニハ、山名右衞門佐祐豐守護ノ時、天文十一年壬寅二月、始テ舖イデシカド、銀トナスコトヲシラズ、祐豐沒落シテ、信長公ヨリ生駒左兵衞ヲ代官トシテ置カル、時ニ石見ノ商人來テ鑛ヲカヒ、國ニ歸テ銀ニ吹シヨリ盛ニナリシト、太閤ノ時ハ伊藤石見守奉行ス、中澤金山モコレ以前ニ出テ、別ニ代官アリシヲ此時兼領ス、慶長三年、始テ江戸ヨリ代官ヲ置タマフ、間宮新左衞門ト云、同十九年、大坂冬陣ヲコリ、總堀ノ水拔ベキトテ銀堀ヲメサル、間宮其人數ヲ率テ參ロ、陣中ニテ病死ス、難波戰記ニモ此事ヲ載テ築地ヲ堀シトアリ、是ヨリ代々ノ奉行ハ略之、河合尭章ガ道ノ記曰、但馬播磨ノ境ハ生野嶺ニアリ、渴島川ノ源コヽニ止マリ、此嶺ヨリ分レテ南へ落ルハ、姬路ノ東ノ町口一ノ郷ト云川ヘナガレ出ルナリ、生野ノ村ハ嶺ヨリ東ニアリテ道筋ニハアラズ、其奧ハ銀山也、此山ハ往古ヨリ銀ノ出ルコト絶ルコトナシ、今ニ至テ年々銀ヲ鑿出シテ獻上ス、故ニ東武ノ役人常ニ居住ノ陣屋アリ、

〔吹塵錄二十四鑛山〕但州生野銀山之記

但州生野銀山

一灰吹銀御買上二十双替
一大山師拾人、小山師貳拾壹人、
一諸山より堀出候石類、總而鏈(クサリ)と唱申候、
一皆石、鏈銀氣多分有之石を唱申候、
一珀石、鏈銅氣多分有之石を唱申候、
一石銀、鏈鉛氣多分有之石を唱申候、
一素切雜石銀銅鉛共不含品ニ付、最寄谷間、又は川等江捨申候、

〔但播州金銀銅山幷寺社舊記〕但州朝來郡(生野領)神子畑銀山之事

一此銀山生野奉行間宮新左衛門支配之時、元和元卯年こまもち間歩ゟ出來ス、元祿五申迄七拾八年ニ成、役人共ヲ遣置、生野同前之取計ニ而、十ヶ年盛ル、其後請座ニ成、右下財屋鋪高貳拾九石八升五合前々ゟ引申候、銀山不盛以後下財屋敷跡ゟ壹ヶ年ニ大豆拾六石ヅヽ請主方へ渡ス、此所前々ゟ明延銅山ニ一所ニ請ル、能案內存候もの無之、

但州氣多郡羽尻村之內
阿瀬河畑銀山
同　奧金山

一此貳ヶ所　信長公家來垣屋播磨守知行也、阿瀬銀山ハ永祿五戌年桑ざこと申所ニ初而銀山出來、元祿五申年迄百三拾壹年ニ成、貳ヶ所共天正五丑年ゟ別所石見守支配、元祿五年申迄百拾壹年ニ成、段々大盛ニ成ル、其頃は貳年三年切ニ請座極る、運上取候ハ寛永元子年ゟ請座を相止

メ役人共を遣置、同六巳迄六ヶ年之内生野同前之仕形も、不盛ニ成、同七午年ゟ請座ニ成、但請座稼候而も、請主方ゟ不稼處を其分ニ捨置候儀は不可然候間、所々分届ケ無之もの有之候ハヽ白札可遣置、先事行申渡、拾ヶ年以來惣長兵衞山、八拾枚山大分稼水抜候得共、兩所共ニ不宜候、此外木戸丼と申古間歩水抜仕掛、可然處有之、入用大積り貳拾〆目程之積り、

一右阿瀬銀山屋舗ニ高九石壹斗、前々ゟ羽尻村との内ニ而引來、

一阿瀬ニ德兵衞と申もの久敷罷在、年寄役仕候、銀子之様子能存候、用事有之時は此ものを召寄候、

〔石州銀山紀聞〕銀山舊記

抑石見國銀山開起ノ由來ヲ尋ルニ、人王九十代後宇陀院建治二年ニ、蒙古ノ使日本ヘ來リシニ、如何成故有シカ鎌倉ニテ彼使ヲ殺シケリ、○中略愛ニ防州氷上山ニ祭ル北辰星ハ、代々大内家ノ守護神タリ、大内介ニ託宣シテ曰ク、石州ノ仙ノ山多ク銀ヲ出ス、彼銀ヲ取テ百濟ノ軍兵ニ與宥歸シメヨ、彼ノ仙ノ山亦銀峯山共言、我ガ應現ノ地ナリ、故ニ生銀ヲ湧シ、本朝ノ危時ヲ救ト新ニ託宣アリケリ、弘幸卿ノ告ニ任セ、石州銀峯山ニ登リ見レバ、山下山上皆皓々然トシテ、冬ノ日向山ノ雪ヲ踏ムガ如ク、大ニ粹銀ヲ得、百濟ノ軍兵ニ與ヘ遣シケレバ、蒙古憤ヲ宥、悦ビ國ヘ歸リケリ、是ヨリ銀峯山相續テ銀ヲ出シ、大キニ盛ケレバ、隣國ノ大小名各是ヲ取ントテ、其間ヲ窺ヒケリ、是ヲ以テ山吹山ニ城郭ヲ築而、銀山ヲ護リ、其後建武延元ノ大亂ニ、足利右兵衞佐直冬、當國ヲ攻テ四十八城ヲ陷シイレ、銀山ヲ押領ス、此時悉ク銀ヲ取盡シケリ、此時迄ハ地ヲ掘リ間歩ヲ開事ヲ不知シ故、上鉉ノ銀取ツクシ、如此山衰ヘタリ、大永年中ニ、大内介義興當國ヲ領スル時、筑前ノ博多ニ神谷壽亭ト云者有、雲州ヘ行ントテ一ツノ船ニ乘リ、石見ノ國ノ海ヲ渡ル、ハルカニ南山ヲ望ムニ、赫然タル光リアリ、壽亭船子ニ、彼南山ノ赤クアキラカ成光リアルハ、何故ニヤト問

ケレバ、船郎答テ申ケルハ、是ハ石見ノ銀峯山ナリト語リ傳フ、彼峯昔シ銀ヲ出セシガ今ハ絶タリ、唯觀音ノ靈像ノミ有テ此山ヲ鎮ス、寺ヲ清水寺ト申ス、時々此應現アリ、此山二度銀ヲ出ス奇瑞ナルカ、今夕ノ靈光常ノ時ヨリ十倍ス、量知ル貴公ノ信心、觀音大士ニ通ジケルナラント、懸ニコソ語リケレ、壽亭大ニ悦ビ帆ヲ卷キ纜ヲ繫ギ温泉ノ湊ニ入テ、夫ヨリ銀峯山ニ登リ、觀音ヲ拜ミ奉リ、亦船ニ乘テ雲州ノ鷺浦ニ入ケリ、彼浦ニ銅山有ケレバ、壽亭赤金ヲ商賣センガ爲、銅山主三島清右衛門ニ逢テ、(清右衛門ハ雲州國田儀ノ住人ナリ)石州銀峯山ノ靈光ノ事ヲ物語リシケリ、三島是ヲ聞テ申ケルハ、定而白銀ナランカ、二百年前周防ノ大主大内弘幸北辰ノ託宣ヲ感ジテ、大ニ銀ヲ得タル事有、今ニ至ル迄人毎ニ言傳フ如何樣ニモ疑フベカラズ、願クハ彼峯ニ登テ銀ナルヤ否ヲ試、亦靈佛ヲモ拜奉ラントテ、神谷三島相共ニ大永六(丙)戌三月二十三日ニ、三人ノ穿通子吉田三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門ヲ引連テ、銀峯山ノ谷々ニテ石ヲ穿チ地ヲ掘テ、大ニ銀ヲ取、壽亭皆收取リ、九州ニ歸リケリ、是ヨリシテコソ石見國馬路村ノ灘古柳稱ガ岩ノ浦ヘ、賈船多ク來リテ、銀ノ鏈ヲ買取テ、壽亭ガ家富從類廣ク榮ヘケリ、銀山モ亦諸國ヨリ人多ク集リテ花ノ都ノ如クナリ、享祿元年、大内義興矢瀧ノ城主ヲ以テ銀山ノ押トス、(矢瀧城、銀山ヨリ一里計リ南)此時小笠原長隆、志谷修理大夫、平田加賀守ヲ以テ矢瀧ノ城ヲ攻落ス、頃ハ享祿四年卯二月下旬也、長隆銀山ヲ領スル事三年ノ中、銀ヲ出ス事夥シ、天文二年、大内復銀山ヲ取返シテ、吉田若狹守、飯田石見守兩人ニ仰テ、銀山ヲ守護シケリ、此年壽亭博多ヨリ宗丹桂壽ト言者ヲ將ヒ來リ、八月五日相談シテ、鏈(銀ト石ト相マロハル物テ鏈ト云ナリ)ヲ吹落、銀ヲ成ス事仕出セリ、是ヲ銀吹始成、大工ハ釆女之丞、大藏之丞ナリ、吉田若狹守、飯田石見守是ヲ奉行シ、毎年銀子百枚ヲ大内ニ貢納ス、其後天文六年八月十六日、雲州ノ尼子、銀山ヲ攻、吉田飯田ヲ誅戮ス、吹大工釆女、尼子ニ從ヒテ銀ヲ吹ク、小笠原、福屋、三隅、益田等ノ諸士、皆尼子晴久ノ旗下ニ成ケリ、天文八年五月下旬、大内介復銀山ヲ責テ取返シ、正重ヲ以テ奉行

トナシ、大森之丞、坂治郎、釆女之丞等、見在山谷ニテ銀ヲ吹、毎年ノ運上銀五百枚ナリ、亦天文九年九月十八日、小笠原蜂起シテ大久保肥前守、大谷遠江守ニ仰、銀山ヲ騒動ス、數度攻戰フトイヘドモ不叶シテ終ニ奉行内田正重自害シテ、銀山亦小笠原ニ屬ヒケリ、同十一年、小笠原長隆死去、同年下旬、小笠原兵部大輔長徳、山吹城ニ入ル、同年八月四日、大風雨有テ人多ク死ス、同十六年八月廿一日、長徳死ス、其子長雄、明年三月城ニ入、享祿四年ヨリ永祿三年ニ至リ二十年餘ノ間、小笠原銀山ヲ領ス、其以後毛利元就銀山ヲ取、平賀山城守、高畑源四郎ヲ山吹ノ城ニ置ク、時ハ永祿四年五月ナリ、尼子本城越中守、其子五人ニ五千餘騎ヲ副ヘ、須佐ノ高屋倉ニ差置テ、藝州石州ノ通路ヲ塞シカバ、銀山是ヨリ糧ヲ絶ツ、是ニ依テ毛利二万八千人ヲ以テ、別府忍原ニ於テ尼子ト合戰ス、毛利ガ軍利ナクシテ、大將大森左衞門尉討死シテ、尼子討勝、山吹ヲ攻落シ、平賀高畑ヲ自害セシム、頃ハ永祿四年ノ秋ナリ、是ヨリ尼子伊賀守義久銀山ヲ領シ、本城越中守ヲ以テ山吹ノ城ヲ守ラシム、此時銀ヲ出ス事大ナリ、毛利銀山ヲ取返サン爲、三年ノ間忍ビ者ヲ忍原村銅山鬼茶臼ノ谷々ニ置、隙ヲ窺フトイヘドモ、尼子大軍ノ故、スベキ樣ナカリケリ、元就力ヲ以テ取リガタキヲ知リ、謀ヲ以テ本城ヲ降人トナサシメ、戰ハズシテ終ニ銀山ヲ取リ、吉川元春家臣森脇市郎左衞門ヲ以テ銀山ヲ守ラシム、元龜二年六月十四日、元就死ス、其嫡孫元相續テ銀山ヲ領ス、其後天正中、秀吉公ヨリノ上使近實若狹守、毛利家ヨリノ使三井善兵衞銀山ヲ奉行ス、慶長一統ノ後、彥坂小刑部、大久保十兵衞ヲ奉行トシ給フ、慶長十四年、永田大隅守、同十五年、三坂枝源藏、同十六年、增島佐内、銀山ノ御目付トシテ下リ給フヨシ傳ヘ承ル、天正年中ニ、安原田兵衞草壁眞人知種ト云者有、備中早島ノ人也、來リテ本谷ニ住居セリ、久敷銀山ニ心ヲ盡シケレ共、金銀費ノミマシテ、外ニ方術モナカリシカバ、常ニ歩ヲハコブ清水ノ觀音ヘ祈奉ルベシトテ、七日精神潔齋シ、誠ヲ盡シ祈シガ、第七日ト申曉ガタニ、銀ノ釜ヲ賜ルト靈夢ヲ得、時ノ御奉行大久保石見守殿ニ言

上ス、此石見守殿ト申ハ、東照宮ヨリ六十餘州金銀山ノ奉行タルベキノ旨、仰ヲ蒙リ居給シ故、諸國金銀山興衰ノ訴有ル時ニハ、公儀ヨリ當國ニ扶持シ置給フ諸士ノ內、銀山ノ事ニ預ル者ヲ以テ諸國ニ馳行シメ、其行時ハ必ズ御朱印ヲ頂戴、（今吉岡氏ノ子孫是ヲ以テ寶トス）サテ石見守殿、彼安原ガ夢ヲ聞、大ニ驚言ヒケルハ、我モ亦瑞夢ヲ得タリ、疑フ所ニアラズトテ、多クノ金銀財寶ヲ賜リ、安原間歩ヲ掘ケルガ、靈夢ニタガハズ、夥敷鏈ヲ掘出シ、無双ノ福人ト成ル、是併ナガラ觀音ノ御惠ナリト悅ビ、鏈ヲ出ス間歩ハ、觀音ノ夢ノ御告ニ形取、釜屋間歩トゾ名付ケル、此間歩ヨリ納ル所ノ運上銀一年三千六百貫也、御奉行石見守殿、此旨ヲ御上ヘ奏達有ケレバ、甚ダ御感マシ〳〵、ヤガテ安原ヲ召レケリ、安原召ニ應ジ伏見ノ御所ヘ罷登、頃ハ慶長八年七月ナリ、八朔ノ節句ニハ、大御所樣ノ御目見ヲ許シ給ヒ、壹間四面ノ盤ノ上ニ銀ノ粹精ヲ積立、車ヲ以テ引、是ヲ獻上シ奉ル、去バ今ニ至ルマデ、石見國銀山ノ運上銀ヲ大坂御城納ニ、車ニ載テ引事ハ、此吉例ト承ル、大御所樣（現樣樣チ言フナリ）イヨ〳〵感ジ給ヒ、受領ヲ御免有テ、備中ト申ベキ由仰有、其上自ラ著給フ所ノ上服井御屈子（今清水寺ニアリ）賜ヒケリ、亦彼大坂陣ノ時、水道ヲ塞ギ堀水ヲ拔トテ、當國ノ掘子ヲ召給フ此時ノ御奉行竹村丹後守殿、銀山諸士ノ內山中市兵衞國村、田中久右衞門重時、厚東多左衞門村尙ヲ撰出シ、安原備中、渡邊備後、此兩人ノ手下ノ掘子三百人ノ大將トシテ、備中備後ハ宰領人トシテ大坂ヘ送リ遣シ、水道ヲ切斷、堀水ヲ拔シカバ、落城ニ及ビシ事比類ナキ功ナリト、大御所樣ノ御感有、其時ノ書物、山中氏ガ子孫今ニ是ヲ傳ヘタリ、凡銀山開起ヨリ多クノ年月ヲ經ル、其間或ハ衰、或ハ盛ル事幾度ゾヤ、就中慶長ノ頃ヨリ、寬永年中ノ大盛、士稼ノ人數二十萬人、一日米穀ヲ費ス事千五石餘、車馬ノ往來晝夜ヲイハズ、家ハ家ノ上ニ建、軒ハ軒ノ下ニ連ナリ、去レバ銀山ノ近キ津々浦々ヘ、四方ノ大船競ヒ繫、五穀ノ類ハ言ニ不及、和漢ノ珍器重寶ニ至ルマデ、多ク集リ來ル事、恐ク今日本ノ內、此銀山ニ勝ルマジト申傳ヘ侍リ、

〔佐渡相川砂子二相川町〕山師由緒　慶長十二未年、伊豆、石。見。兩國銀山方ノ町人三拾六人召サレ、壹人ニ間歩口壹ヶ所宛配分ノ外、御米貳百俵、毎年其上様方入用ノ品下サレ、〇下略

〔銀山舊記〕慶長一統ノ後、垂坂小刑部、大久保十兵衛ヲ奉行トシ給フ、〇以上二十四字、據石州銀山紀聞所載本補、右銀山仙の山と申は、纏廻り二里餘、高さ三百間の大山に、數多の柱筋東西に行渡り候を心懸、所所より間歩を開き、相稼夥敷得益、家數貳萬六千軒餘、寺百ヶ寺程も有之由申傳ふ、尤當時にても名跡殘り存す、勿論往古は出灰吹銀御引上にも不相成、上納物計灰吹銀にて相納、餘は當時通用銀の様に壹匁貳匁、或ハ拾匁二十匁と申様に、悉く切銀にいたし融通に遣ひ候故、一ヶ年灰吹銀何程と申出高相知れ不申候得共、寛永元子年に千貳百貫目餘之諸運上灰吹銀を以上納仕候趣ハ、其節の銀山奉行竹村丹後守、幷に役人之内連名之御勘定様に有之候、右様大盛之砌ハ山内取締として銀山纏廻り、山之峯續き垣を結ひ、出口入口には番所八ヶ所有之候處、右垣年々修復入用相掛り候に付、寛永十八巳年杉田九郎兵衛銀山奉行の節、右垣を相止め、其跡へ並木に松を植付、當時垣松と相唱へ、大木に相成居申候、〇中略銀山支配之儀、慶長五子年以前は聢と相しれ不申候得共、慶長六丑年より大久保石見守銀山奉行被仰付、延寶三卯年永田作大夫迄七十五ヶ年の間、奉行所にて同年柘植傳兵衛より御代官に相成、當時迄は御代官所に御座候、

〔石州銀山紀聞〕

御羽織拜納書

夫ニ人王一百八代太上天皇ノ御宇、武將相國源ノ家康公ト奉申、武勇蓋世草如風加悉偃、握六合掌、依政道正直、萬民歸正路、天下治一統、諫鼓苔深面鳥不驚御代成者、四海波靜、野之末山奥迄産圍繞渦仰之頌、首事不淺、唐賢王御代ニハ麒麟鳳凰出現ス、日域聖朝幸ニシテ諸國金銀涌出ノ山多シ、就夫當石州銀山爲御奉行大久保石見守殿、三枝源藏尉殿、垂坂小刑部少輔殿、御成御下著、然

所ニ私常信觀音當國清水寺致建立所ニ、或夜不思議ノ靈夢、汝心直而發心越人、本谷釜屋間歩水道ノ御訴訟、御守護所江申上ル者ナラバ、天下可得其名、慥成任御告、御奉行江參シ、御靈夢ノ趣具ニ言上ス、就中石見守殿聞召御勸行被爲成、我モ從清水有御告、於此山繁榮无疑、則御入目被下頓而御山繁昌夥シ、依之自分ニ召使者及千餘人、國々人群集貳十萬餘、谷々ニ銀鏈充滿而六分寃(ツフロギ)超過、日比屋作家風尋常ニ非、佛閣甍ヲ雙ベ六時之鐘ヲ鳴シ、或ハ太鼓ヲ打テ晝夜賑事不異京堺、或時石見守殿、公方樣於御前石州安原傳兵衞ト申者、觀世音ノ依御夢想、御山盛成由被仰上者、公方樣御尊意、古ヘ景清盛久社觀音ノ蒙利生、至末世浩ル瑞夢奇特也ト御感ノ餘ニ、急其安原呼上セ可被成御覽、依テ御上意下ルニ、慶長八年七月上旬ニ罷上ル、此節繁榮ノ山壁有數多、取分釜屋間歩ノ鏈靈驗之故勝自餘、銀性之美麗成事相似瑤珞、則是ヲ致持參、八月朔日於伏見ノ御所、大久保石見守殿以御披露御目見仕ル時、竪橫一間之折洲濱作リ、其中ニ彼銀性如蓬萊積事御尊前江奉捧、其時御上意ニ、元來雖金銀珠玉、直成銀性之花麗初テ御覽被爲成、御感不斜、御前ニ被成御詰諸大名衆、古今無雙之珍物哉と各驚目給事無比類、同三日小堀新助尉殿爲御上使、大久保石見守殿江御入來被成、公方樣御上意ニ、傳兵衞受領被爲仰付、則備中ニ被成下、雖有仕合、生涯之面目何事カ如之、同五日御禮ニ登城仕ル、忝モ上樣被爲成御召、御羽織御扇子御直ニ下シ給フ、雖有御事更々巨演言語、同二十一日亦爲御上使小堀新助殿、石見守殿江御入來被成、御上意明日四座御能被仰付之間、備中召行登城可仕由依御上意下ルニ、石見守殿御供申登城仕、備中爲凡卑身、諸御高位之御座ニ非被召出而已剩從公方樣御羽織致拜領事、雖有仕合不過之、日本諸大名衆驚目、天晴冥加至極安原預御褒美事、是偏觀世音ノ御佛力之故也、御羽織御扇子、安原子々孫々家傳之譜重寶ト、一ニハ爲名利恐相構テ々々不可疎ニ、予雖短才愚智、爲備後胤之龜鏡所草愚意此記錄留置者也、

于時慶長十年乙巳三月十七日　安原備中因繁花押

御奉納書物

乍恐謹而言上

石州邇摩郡本谷安原十郎兵衛と申者に而御座候、私祖父安原備中と申者、石州於銀山、奉親昔靈夢之依、御山之儀、大久保石見守様へ奉願候處石見守様にも、右之靈度々御靈夢之由に而被仰付、其時より御山盛、御運上金倉々年三千六百貫目宛三年差上、其以後も千貫目、貳千貫宛數年差上候、因之石見守様、右之趣被達御上聞、慶長八年八月朔日於伏見御所、乍恐大御所様江被爲召出、御目見被爲仰付、則備中に被成下、爲御褒美忝も御羽織、御扇子、御直拜領仕候儀、偏佛神三寶之御加護と難有頂戴仕候、備中并世伜主税助、私迄三代年數八十餘年所持仕候、○中略

貞享元年甲子卯月十四日　安原十郎兵衛印

世伜　權三郎印

同　清右衛門印

御奉行所様

（銀山舊記）無名異取扱

無名異の儀は、慶長の頃、山師木原吉左衛門と申者、初て無名異鉉に堀當り、功能は、打撲、切疵、婦人產前後、腫瘍、其外進上の諸症、又牛馬鳥類の病に効ある趣、其節銀山奉行大久保石見守より申立、御廐御馬の御用にも相立候趣、申傳へ候、竹村丹後守、杉田又兵衛奉行の節より、米貳拾俵宛、年々山師へ被下、無名異竟鉉六七拾貫目宛、九月比堀出し、室中に製法仕、目方三百目宛、鉛壺に入、段々に三通箱に入、其外琉球表包にして、荷造り仕、翌正月十一日定日にて、宿繼御證文を以、江戸表へ繼送り、支配役所より、御納戸へ相納申候、然る處延享四卯年より、右上納相止み、山主へ米被下候

儀も相止、一ＨA銀四分宛、番給被下候處、寛延年中、天野助次郎支配の節より、右番給も相止、間歩口は錠仕鎔封印附置、折々相改罷在、延享四卯より明和元申迄、十八ヶ年の間、獻上中絶仕候處、右同年川崎平右衛門支配の節、以前の始末申上、翌酉より前々仕來の通上納、并に釜屋間歩と申外間歩より出候下品の無名異有之、此分は世上御救のため、賣弘被仰付候、尤製法の儀は、前條の通、九十月の頃、無名異荒鏈六七拾貫目堀出し、寒中に至り、役人兩人宛相掛、身分清淨に相愼み、清水を以晒上げ、前條の趣を以上納仕候、

〔見聞雜記三十四〕銀山壹ヶ年分御入用大概

一錢三万四千貳貫六百貳拾五文

是は大工穿子賃、鍛冶給錢、炭代揚駄賃、水替賃、筋見繪圖師、振矩師、敷岡御雇之者給錢、銀山六ヶ所番所に入用、後藤掛賃、御祈禱料、御手當役金、小者給、銀山付諸役所小入用小遣給錢等之分、

○按ズルニ、右ハ石見ノ銀山ナリ、

〔銀山舊記〕銀山御囲村の事

一銀山稼方吹方差支無之爲、銀山御囲村と稱へ、往古より邇摩郡、邑智郡、安濃郡、右郡にて三十二ヶ村より、留木、燒木、渡木、入用次第差出、尤切張の儀は、長五尺五寸、末口三本持は三尺廻り、六本持は壹尺五寸廻り、九本持は壹尺廻り、十貳本持は七寸五分廻り、右の通壹駄に付三本より十貳本迄、木數の多少は有之候へども、代銀は何れも貳匁貳分五厘の定直段に相渡申候、尤山師共切張入用の節は、村方と相對にて買入候分は直段も相對次第、其外燒木渡木は大森町薪直段を以、銀吹方へ買入申候、吹炭の儀は、前條三十二ヶ村の內、銀山最寄村にて、炭方六ヶ村と相極、吹炭韛次第差出、定直段壹駄に付拾匁宛にて銀吹買入申候、

〔銀山舊記〕銀山稼入用御下ゲ金并ニ拜借略〇中

安永六酉年川崎市の遂取計伺、左に記す、

私支配石州銀山の儀は、年來不盛打續、山師相衰へ、仔寄の鋪所有之候ても、取明相稼候儀、自力に不相叶、無是非打捨置候故、堀子下財ら追々離散仕、灰吹銀出高相減候に付、亡父平右衛門支配の節、明和三戌年、銀山役人并山師共相糺、右稼方爲御手當、戌より子迄十五年の間、灰吹銀出高の內壹割通、山師へ被下置候ハヽ、右引替銀を以、仔寄の所普請仕、相稼候積り奉伺候處、翌亥年、平右衛門儀は退役仕、其跡私支配被仰付、銀山稼方手當の儀も、平右衛門伺置候年季の通、灰吹銀出高の內壹割通、山師へ被下候筈を、私方へは下知被仰渡候に付、兼て心懸、貳所寸法切延、八ヶ所間歩取明、八田山修復八ヶ所、都合十六ヶ所普請仕立候處、年々灰吹銀出高相進ミ、去丑年は灰吹銀百八十貫餘、大坂御金藏へ上納仕候、然處私儀、同年奥州へ場所替、石州の儀は銀山針、私支配ニ被仰付置候ニ付、手代附置、銀山稼方并に鑛山涌方諸運上共、取立方相進み候樣取計申候、就夫當時は銀山相稼候間歩六ヶ所有之、年久相稼候根戸故、鋪所通路遠く、殊に土中の儀に付、濕氣强、八田木屋早く、六ヶ所間歩互ひ違ひ不絶修復不仕候ては水引差支、火氣たへの障り出來、稼差支候に付、銀山役人并手代數ニ入、見分爲仕候處、右普請仕立候には、大造の入用可相懸趣、其上前條八ヶ所取明候間歩の儀も、追々修復不仕候ては、稼難相成、尤何れも前々堀候根戸續にて、見込厚場所、若落潰候ては、是迄御手當を以普請仕候詮無之は、不益に被成候、右の外、柑子谷泉山大水拔より、佐藤本鉎迄、新規大切水道尺八切延、稼候積り、彼是取合候ては、夥敷事敷に付、此上不絶普請可仕手當無候ては、稼方相續難仕候、就夫何卒御入用等不率伺、銀山相續取計方も可有之哉と段々相考、此度私存寄の趣左に奉伺候、〇下略

〔朝野群載 三〕對島貢銀記

對馬島者在本朝之西極、屬於太宰府、孤立海中、四面絶壁、其名彙見於隋唐史籍、自筑前國博多津、西

銀山

面覺帆一日、到壹岐島、自斯又到對馬島、一日、自非大風不得渡矣、略〇中島中珍貨充溢、白銀、鉛、山、眞珠、金漆之類、長爲調貢、略〇中其來於太宰府、敢不遲留、殊發行李、遞麁人所、自島到府用海路、著五十丈綱、以備入海、自府致京用陸路、運送之間、人不敢近之、遂呼都鳥之口、見於漢家、賢王臺主殊不爲用、愼本務末、以銀遊手、匯桑之外、絶無生民、殆不異沙石之故也、然而千載之事、一旦難改而已、

〔延喜式主計二十四〕對馬島略〇中　調銀

〔延喜式雜五十〕凡對馬島銀者、任聽百姓私採、但馬國司不在此例、

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年八月十五日癸亥、太宰府言、對馬島銀穴在下縣郡、自高山底、穿鑿嚴堀入四十許丈、白金鉅面得入、頃年以來處々崩塞、無費人功、而去夏霖雨、穴底水滿、計其功力、非可輕易、司望穿開、望請准延暦十五年例、以彼島例擧大豆通百斛并租地子穀百斛、且充其料、令穿開、許之、

〔誠齋雜記平文庫本〕花園漫抄

對州銀礦　慶安三年庚寅五月、於對州佐須開銀山、始穿鑿、寬文七年丁未秋、於對州佐護村奧山開銀山、又於峯村開銀山、佐護山開年而止、於峯村永續之處、至延寶二年、佐須銀山再盛、於是止峯村銀山、

〔鼓銅圖錄〕鼓銅總論

本邦銅山、其大者豫之別子、奧之南部、羽之秋田、其次則羽之村山、但之生野、其下則石之銀山、簸谷、備之吉岡、紀之貝股、佐之金山、豐之大野、陸之多田等處、時多時少、或開或閉、其餘少出者甚多、難以枚擧、蓋生氣有限、苗脈中絶、或所得僅々不償工費、或惜而未盡、或係累不盡者、亦多有之、銅礦有夾銀鉛者、有純銅不雜者、有夾白目者、白目名未詳銀鉛之類、

〔吹塵錄外二十二札〕天保十五辰年正月十二日
竹札
御勘定奉行江

諸國銅山之儀、追々出銅も有之、猶々出精候事ニ付、御國用は勿論唐紅毛江も相渡、國々より差支之儀は無之候得共、當時盛山ニ候共、往々ニは衰山に可相成事ニ付、若後年ニ至り、國中之諸山不首出銅無之様相成候數とは、國中銅用、外國江相渡候斤高は追々相減、右代り儀品相渡候歟、又は更ニ銅は貨幣之外器物品類等は如何可有之儀、諸銅可被申聞候事、

山城國銅山

(三代實錄 十一)貞觀七年九月廿六日甲辰、勅、木工寮採銅於山城國相樂郡岡田鄕、賽鑄錢司止、

常陸國銅山

(新編常陸國誌 六十一 土產)銅

久慈郡ノ内ヨリ出ヅ、然レドモ今ハ僅ニ採ルノコトナレ、然ルニ同郡町屋久慈郡宮田村ノ傍ニ、銅山元禄十一寅年、上河合村右衛門方へ江戸岡屋新次郎(◯中略)以下

美濃國銅山

(大日本府縣志 物産部)平鑄錢　明治三年閏十二月廿二日

一濃州武儀郡板取村之内、白谷山ニ銅有之由ニ而、大坂之者共申候處銅無之、同郡金山村ニ銅有之由ニ付、又々掘試候處、

下野國足尾銅山

(日光山志 四)足尾鄕　日光山内より裏に當り行程六里餘、細尾峠を越して、同國阿蘇郡に屬す、足尾拾四ヶ村を上下に分つ、古は赤澤子赤澤の二村を足尾千野の戸數と唱へ、銅山銀山の兩登あるに依て、銅山より採集して繁昌せしが、延享寛延の末より漸々衰て、今は家數も三百戸許、村居は皆山谷の辿り及山麓に村民家居せり、二銀の路は南北へ通ずる道なり、廣狹東西三里、南北一里許、其餘四ヶ村といふは、國義、赤倉、久藏、松木、仁田元、原木、神子内、以上の村々を上分の村と唱ふ、掛水、赤澤、餘澤子、中居、渡下、唐風呂、以上の村々を下分の村と唱ふ、此所より銅を出せる繁次あり、上州へ二里、

銅山繁昌　古坑數百ヶ所あり、此銅山の地形は、足尾鄕中の眞中にある山にて、足尾の四境凡五六里も有べし、其銅山周廻凡三里拾八町に亘り、銅山は皆岩石にて、山頂に樹木生せず、銅山掘始め

たるは、慶長十五年の事にて、備前の國の者此地へ來り、銅山なる事を見定め、其頃座禪院の領所なるゆゑ、其下知を得て掘初けるに、澤山に銅を掘得て、同吹銅を公廳へ奉りし頃、御三代將軍家初て御肴召させ給ふ、御恐悅の折柄ゆゑ、吉事なる銅山との事にて、夫より御用山となり、貢賦の事は、日光の支配なれど、銅山は御代官の指揮となり、替々支配し、享保年中拜借御下金等莫大のこと度々なり、又元文の初に、御用銅の外に錢鑄座被仰付、暫錢鑄吹立ける由、錢の裏に足の字をすゑしは、彼にて鑄造せしものなり、其以來は御下金相止貸吹に成、夫より銅山衰微し、錢鑄座も御免を願ひ、殆困窮に及ぶといふ、されども今も銅貸吹御代官掛りにて、障屋有て手代在住することはもとの如し、當所銅山を見立し備前のもの、大に貸殖し、國へ歸らんとせし時、此所の新梁子村の淨土宗にて、大園寺といへる坑內へ石碑造立し、開國の來由を銘じ置けるが、今は無住ゆゑ、寺も荒廢し、石碑も又倒落し、文字知れざるよし、當時も障屋の側に銅吹分小屋四五戸相雙べり、

〔銅山書上〕文政四巳年十二月

乍恐以書付奉願上候、野州足尾御銅山之儀、近來不盛打續、追々出銅相減ジ、次第ニ衰微仕、銅山師共幷貸吹、其外及困窮候段、爲及御聽、格別之御仕法ヲ以、去ル子年ヨリ、御手山被仰付、御銅山內、古來申傳有之場所之內、悉御撰之上、山面敷內鏈筋等、分間水盛ヲ以、巨細御糺夫々御取摘、御普請被成下、稼方被仰付、少々出銅出方ハ有之候へ共、大直リニモ相當不申、最早御入用金御遣拂ニ相成候ニ付、此上ノ儀ハ、先規之通、銅山師ニ取扱被仰付、貸吹之者共ヨリ、荒銅買上ゲ山丁銅ニ吹立、御上納仕、御買納、其他山方一式取計、先規之通、私引受相勤可申旨、御利害之趣、難有逐一承知仕候、然所、御手山中、山元其外御取締方等、嚴重ニ被仰付、稼方御取計被遊候ヲモ、出方無甲斐、未盛山之時不至儀ニモ可有御座候得共、右體御丹精被成下候ニモ出銅無御座、實未熟之私、先規之振ヲ以、總

請御引請仕候ヲ、此上盛山之程モ難見極候ヘ共、厚キ御利害モ御座候儀、右ニ付奉申上候ハ
恐多候得共、一體足尾御銅山之儀ハ、慶長十五戌年初ヲ見出シ、日光座禪院ヘ申立、翌亥年、酒井雅
樂頭様御取次御披露被成下、東照宮様御治世、大猷院様御持尊之節、開吹銅奉差上候處、御代
長久吉事之御銅山ト御褒詞被成下置、夫ヨリ御用山被仰付、銅方諸御用向相勤候間、江戸、大坂、長
崎三ケ所ニ銅會所相立、阿蘭陀御渡銅五ケ一、足尾銅相渡候間、日ノ九ニ五ケ一ト相記候御儀御
見被下置、十七ケ年之間、阿蘭陀渡シ仕、其後右買名代五ケ一之銭、大坂表和泉屋吉左衛門、大坂屋
久左衛門方ヘ相渡、壹ケ年ニ金三百五拾兩宛受取、江戸會所并山元相賄入用金ニ仕、其後於大坂
表銅座被仰付候節ヨリ、右得用金相止メ候由ニ御座候、其後元禄年中、御城内御普請御用ニ付、御
銅瓦製、御瓦銅共ニ延立方被仰付、足尾山元ニテ延立、夫ヨリ御屋根葺方共ニ被仰付、相勤候、猶又
御城内日光山并江戸御用山寛大之御普請ニ付、銅一式御用相勤來候處、銅山方盛衰之度々御救
金等被下置候、寶永元申年、野田三郎左衛門様御陣屋大破仕、普請其外難及自力、御救奉願上、
候所、金三千五百兩被下切ニ被下置、正徳四午年、池田喜八郎様御吟味之節、出銅不仕候所、出頭方御
吟味之上、困窮五ケ所ニテ御救被仰、金貳千七拾兩御救被下、被下切ニ被下置、其外拝借金御救金
等被仰付候儀ハ、凡貳百年來之内、數度之御儀ニテ、難盡申上、其外別段御手當、山元ニ於テ御銭
座吹方被仰付、五ケ年之間相勤候儀有之、尤江戸表相對ヲ以、銅町拂等被仰付、御仁惠ヲ以、足尾山
方相續仕候段、莫加至極難有仕合奉存候、且御銅繪圖、上州前島河岸マデ附送候村々、澤入村外四ケ
村之内ヘ、壹人ブヽ、五ケ所ヘ御用銅問屋被仰付、苗字帶刀御免、御扶持方迄被下置候、今以無滯相
勤候儀ニテ、他國ニ無之誉成御由緒有之候御山ニテ、丁銅ト申銘目ハ、江戸、大坂、足尾御銅山之外
無之候事、承知當時之要ニテハ、丁銅ト申銘目消滅仕、外山間様荒銅ト唱候様被成候、數々數事存候、
且日光御神領足尾十二ケ村高七百五拾石余之内、在中拾貳ケ村之内ニモ、買吹稼仕候モノ有之

候ヘ共、多分ハ農業重ニテ、間々炭薪山稼等仕、夕ハ下財ト唱、銅山稼之モノ幷銅山諸職人手傳等仕來候所、當時新梁子赤澤兩所之儀ハ、往古大盛之頃ヨリ引續兩町地內吹所數ヶ立置、銅鉑搗碎篩立、山丁銅迄吹立候ニ付、右仕所之類、大雨之節、追々畑地ニ流込、又ハ肥等ニ交入候儀、年來ヲ重候上、銅氣强場所ハ、作物毒付、一旦生立候トモ、實法不至候由、立枯ニ相成、用立不申地面而已多、農業一式之稼ニテ、渡世難出來、先年ヨリ買吹幷下財稼床屋向諸職人等相稼、曾而銅山方ニ片寄、是迄渡世仕候ヨリ外、稼方無之土地ニ御座候間、毎度農事ニ付、日光御奉行樣ヨリ厚御利害嚴重ニ被仰渡御座候得共、右申上候譯故、中々以農業一通リニテ、御年貢諸向等相勤不申候間、此上御銅山御衰微仕候上ハ、拾四ヶ村退轉仕候儀ハ、眼前之義、既足尾千軒ト申傳候土地ニ御座候得共、御銅山追々不盛ニ付、當時軒別漸七拾軒程ナラデハ無之、悉離散退轉仕、銅山師四拾餘人モ御座候所、當時私壹人ト罷成候段、誠以歎ヶ敷次第ニ御座候、尙此上休山相成候テハ、都テ銅山方而已ニ片寄、渡世仕來候新梁子赤澤兩町之者共、取續ハ勿論、郷中村々之者共、炭薪賣場無御座、餘業ニ相離、難困窮ニ落入、退轉可仕義ト、是又歎ヶ敷次第ニ奉存候間、被仰付候得共、當時買吹其外極困窮ニ及ビ、銅山稼衰微仕候故、他所稼日雇等ニ罷出、取續罷在候仕合ニ付、格別之御憐愍無御座候テイハ、買吹共稼ニ難取付、尤取懸リ候迄、銘々早速鉑所ニ堀當リ候ト申ニモ無御座候得共、大卒之御銅山堀盡候故、出銅無之ト申譯ハ曾以無御座、全時運ニ不宜、取上ノ場所ニ堀當不申故之義ト奉存候間、何分此上之儀ハ、格別御憐愍之御沙汰無御座候テハ、中々先規之振合ヲ以、稼方ニ難取付御座候間、往古ヨリ衰微之節ハ、御救方被仰付候御例モ度々御座候御義故、何卒當買吹稼之者四拾餘人御座候間、右之者共江、以來年々御扶持米被下置候樣仕度、右ニ付候テハ、通堀日數相改メ、都テ取締等致シ、御扶持米渡シ方迄取計候義ニ付、銅山方惣名主役之者共江モ、別紙仕出帳之通、年々御手當被下置候樣仕度奉願上候、且又先年淺草橋場町ニ於テ、左右五百坪拜借地被仰付、御

用銅吹立幷御叺延立仕候儀有之候所、凡八拾ケ年程以前、右地所差上候得共、先年之通御當地ニ於ケ銅吹場所、本所右銅吹所之振合ヲ以、御用地被仰付、右銅吹替之分、右同所之振ヲ以、吹方被仰付被下置候得ハ、山丁銅之分、荒銅ニテ相纏レ、右場所ニテ直ニ地丁銅ニ吹立、其儘御廻納仕候様罷成、是迄金登所ニ付、山丁銅四貫五百目ヲ御買上相成候處、地丁銅ニ吹立ニハ吹減レ、吹貫銀等相掛、金登所ニ付、三貫七百六拾四匁餘ニ相當リ候所、右場所ニテ、地丁銅ニ吹立、金登所ニ付、四貫目ニ御買上ゲ、上納仕度奉存候、左候ヘハ御益筋ニモ相成可申、其上足尾山元手明之者共連寄セ、吹職人之手傳爲致、自然ト見習爲仕、猶ニ吹炭等モ下直之場所ニ御座候得者、右炭山元ヨリ相廻シ吹方仕、可相成丈ケ手數不相掛様仕法相立、吹立仕候ハヾ、年々吹貫銀等之内ニテ、餘金出來仕候様取計、右餘金ヲ以、御銅山右闕少大破仕場所普請仕、貫吹共一同相續様方之足合ニ仕度奉存候、且銅御叺延方之儀、格別之御益筋ヲ以、往古ヨリ于今御用被仰付、聊有相勤候所、大坂表ヨリ御叺銅御渡下レニ相成、間分丁銅ニテ御廻レ被下置度、尤正徳之頃御叺延立被仰付候節、足尾銅不足ニテ、大坂表ヨリ被下レ、御用相勤候儀御座候間、地丁銅之儀ハ、矢張大坂表ヨリ御仕入之上、御叺銅延立方之分ハ、先前之通御當地ニテ被爲仰付被下置候様奉願上候、左候ニヨリ、淺草御藏御用銅請向御渡方之儀ハ、其時ニ御出御用向相勤候ニ付、乍恐奉承知、大坂表ヨリ御渡下之御叺銅之内、目方ハ總符之通相違無御座候ヘ共、枚數不足等間々有之、右不足之分ハ、外銅之内ヨリ足銅ニ相成、底板帯板等多分有之、目方不同ニ付、請向御渡方御勝利ニテ不宜候方ニモ格別相違仕、御渡方之節、右底板帯板等ハ撰出レ、御返納ニ相成候様ニテ、乍恐多分之御不益ニモ相立可申奉存候間、於江戸表、御叺銅延方被仰付被下置候得ハ、格別目方不同無之様延立、枚數不足外底板等御座候節ハ、早速引替上納仕候ハヾ、御不益ニ不相成、大坂御叺銅ヨリハ運賃延方其外諸失却不相掛、格別御益筋ニ罷成候儀ト奉存候、猶亦吉蔵之通、江戸表古銅吹替幷御叺銅延方被仰付被下置候上

陸奥國尾去澤銅山

ハ、右有餘金ヲ以、御銅山古來ヨリ申傳之古敷ハ數ヶ所有之候得バ、貫吹共稼ニチハ、取明普請難及大等之場所、年々手當仕、取明彌見込稼所手廣ニ相成、御銅山稼方仕候ハヾ、出銅相進、足尾拾四ヶ村之者、其渡世ヲ不失、妻子離散不仕、御年貢諸役共無滯相納、永續可仕義ト奉存候間、格別之御仁惠ヲ以、右三ヶ條願之通、御聞屆被成下置候樣、偏ニ奉願上候、然ル上ハ淺草御藏納銅御渡シ方御用相勤候義ハ、先規之通リ、御手當頂戴不仕候テモ相勤リ候樣罷成、右三ヶ條願之通被仰付候上ハ、江戸表吹所幷山元取締方等之義ハ、御差圖次第、如何樣ニモ嚴重取極候樣可仕候、且御仕法替之儀、吹所世話役被仰付候武州本庄宿森田助左衛門外五人之者共ハ、是迄之通爲御取締吹所世話役被仰付被下置候樣仕度、何分ニモ前書願之三ヶ條御取上ニ不相成候上ハ、奉恐入候儀ニ御座候得共、所詮私式ノ身分ヲ以、先規之通、御銅山一手御引請、御用向相勤候儀會以無御座、幾重ニモ貳百年來連綿仕候御由緒厚御用山斷絕不仕、一鄕大勢之者共不致離散、只々御慈悲御沙汰而已偏奉願上候、依之別紙御手當仕出候壹冊相添、此段奉願上候、以上、

文政四巳年十二月　野州足尾　田中意松

吉川榮左衛門樣御役所

〔陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷內働方仕法書上帳〕覺

一御銅山御境內東西壹里貳拾町程、南北三拾五町程、右之內ニ金銅鉳之通數十枚有之、嶺之通リゆたかに長樣引續き、前後澤數有之候也、尤當時之鋪口幷古間府諸方ニ有之候、其中ニ大數鋪と申當時之御普請所、壹澤ニ壹ヶ所宛有之候、第一山向ニ隨ひ堀れ所々之繪圖を考ひ、鋪岡繩續等之仕法を以、高低遠近之見込を定めて、其上鋪中古き堀所之圖合江引合せ、御普請所切延し候義は、御山先役ニ付、專ら日頃之鍛錬ニ而看定仕るゆへ、續而御山方役御鋪手代寸甫共迄

も夫々見圖を受け、鋪中堅組り中ニも山ゆるミ危き場所〻方に急卒之事ニ付、日々堀研之分、間ニ存負出させ候様之吟味致、無用捨不遂吟味候而は累年之出鉑堀續き連綿引出候儀、不容易事ニ御座候、

一御普請所堀方之儀、本番御役所ニ而堀大工番割を定め、堀子人數を極、ケ所〻〻ニ相廻し、五日目〻〻に堀延間數取調定ニ入候事、箇所堅横定夫ハ通例如斯か勢を定め候也、

但大割之か勢定メは、堅竪丈ニ横八尺、夫ゟ堅六尺ニ横四尺、又は堅五尺、横三尺迄之割合ニ御座候、

何れも右之堅き和らかに寄、堀方割合を付候事、追堀堀と中有之、又人數增減火繩堀等之働方有之、晝夜無違大工を繼し、貫立無切延候事ニ御座候、

一御普請之ケ所、鉑勢宜相成候へば、金工働之者ニ割渡申候、左候得ば金工共晝夜番格之定メニ而、鉑之青鑿一二之順を以、何數堀出し、金場御役所ニて改メを得、無差障様相働候ことニ御座候、

一火繩堀働之仕様、會敷立人數九人内、大工五人、堀子三人、番番壹人、先以普請ケ所見立、間數何程と全入相考、山向載り場所ニ取掛申候、但し所ニ寄へんたい鑛石大か勢等にても、分外ニ和らかに候得ば、追堀堀にても延方早候、取火繩堀に不及ニ御座候、山之堅和に隨ひ割突込を定メ筈に堅石ニ候得ば、壹寸五分捨割抔として押山引立を如斯捨ニ割、其割し壹ツを突込、壹寸五分堀貫候を壹方と相唱申候、極堅石ニ候得ば、其以上之割も有之候、和らかき石に候へば、貳寸捨割より三寸四寸之捨割抔、夫々割合定メ有之候、鏨番之者横筋之中ニ矢を敷、其上ニ火繩長く置、傍ニ尺子を据置候、定外之柱ニ割附板を掛置、火繩大工之者鋪入之時ニ火繩ニ火を移し、鋪ニ置を仕舞番之者相知居候、最初鋪入之大工を掛と云、次ニ入大工を受と云、

掛之大工定メ之小割壹ッ殘り少ナニ相成候砌、堀子を以代り合を告しむ、堀子急ぎ判番前ニ來り高聲ニ火繩之代り合ひと號ふゆへ、次之大工既ニ壹竹鐵道具用意相待ゆへ、早速香番前之割判板を取鋪入仕、先大工小割堀濟、次之大工へ讓、先大工割判板を受取走り出、香番前ニ而割判と呼び板を納む、香番之者火繩箱之蓋を取り燈り消ゆ、火繩寸を見て、僅〆貳寸五分とも直ニ香番之者御帳江上ゲ掛二寸五分讀を記し、大工心得判番江入、次之大工先方之如く比合を以代りを告げ、三番方之大工ニ代り合、驅出香番前にて割判と呼び、譬ば燈り寸貳寸三分トハ有體ニ答ふ、燈りと相尋候得ば則貳寸五分也、受貳寸三分讀と記し、貳分之勝ニ相成、落火繩とて褒美錢は拾文爲取申候、勝方之者共前之如く代り〲掛受を次第し、燈り寸を爭ひ褒美を取、晝夜寸隙なく切羽之鎚休み不申、勢ひ盛て堀延しゆへ行延際立相進み、晝夜方數三拾方位も相運候得ば、拾五方は定目、殘り拾五方は落火繩褒美と相成、役方之者代り〲附添、日々堀延相改、尙五日一ト日毎ニは總延坪取勘定ニ入改を受申候、

一追通堀働の仕樣、壹挺立人數七人、內大工四人、堀子三人を壹組と定メ、切延割合定目之義は、火繩堀ニ相記し候如く、突込何寸何割と右換樣を相定メ、大工之者晝夜代り〲鋪入、無透間追通し、小割數堀延し申候、大工四人日限之定目四方宛之外は、方數轉役褒美と相成、壹方ニ付五拾文宛、五日一ト日毎ニ相延し、受取書研之分は、日々堀子共脊負出し申候、切羽元堅橫之定夫持を引、無滯を以切延受取勘定ニ入れ申候、

一間堀働之義は、追通ケ所引起不足ニ付、差急ぎ候御手合之ため、大工番明きを以堀延し候事ニ御座候、尤石之堅和ニ隨ひ、壹間ニ付、拾七貫文ゟ三拾四貫文位迄、尙大堅石ニても是非爲切延可申、御場所は御直數定りも無之、鐵鋼竹鑑總而入用之品、役屋通を以御貸渡被成候事ニ付、延方と相成候分は、追通堀ゟは格別御益ニ相成申候、大工ニも勝手ニ相成候事ニ御座候、

(石見國所務內實試記)延寶八年ヨリ天和二十二月迄

白根銅山
知賀瀬銅山
錫銅山

一白根銅山　床一丁金二拾兩、銅ハ十分一、

一知賀瀬銅山　床一丁金三兩貳歩、銅十分一、

天和二年戌ヨリ三年亥迄

一錫銅山床　壹丁三兩貳歩、增金拾七兩貳分宛、銅ハ十分一、

但一兩ニ拾六貫匁之積金子上ル筈

出羽國阿仁銅山

(東遊記後編三)銅山

出羽國秋田領城下より東南の方嶮道を行く十八里の所に阿仁といふ所あり、此阿仁に銅山あり、當時此山より夥敷銅を掘出す事也、掘入ル穴の中をシキナイといふ、甚奥深く掘入ること也、入る者皆アマイ鉢に燈をともし持入るなり、凡數十町奥深く掘入り、世界の風氣通はざる所に至りぬれば、其燈火たちまちにきゆる也、燈火きゆれば人も亦呼吸の氣息たちまちに絶て死する也、此ゆゑに燈火きゆる所に至れば、急に逃歸る事とぞ、此事醫學事に大に益に成る事にして、人の死生物の生滅の始を知べし、余も此穴の中に入り試んと欲せしかども、甚險難の山路十八里、其上往來の人稀といふも聞く、殊更穴の中は金石の毒氣ありて、他邦の人常に其氣に觸ざる者は、毒氣にあたり死する者多しといひ、又其國の禁制にて旅人などは、みだりに銅山のあたり徘徊するを許さゞれば無據もだしぬ、右のごとく奥深く入れば死すれども、又奥深く銅多くして入らで叶ざる時は、穴の入口より下に樋を伏せ、風氣通るやうにして幾十丁にても入る也、是を風通しと云、かくのごとくして入れば何程入りても燈火きゆる事なく、人も死する事なしと也、是亦其妙用を知るべし、

佐渡國銅山

(佐渡志物産二)銅

鶴子山ヨリ產スル銅ヲ以テ錢鑄タルコトハ、食貨ノ部ニ云ル如シ、寬政ノ頃、相川鳥越山ヨリ銅出ルコト多シ、幾程ナクシテ銀山トモニ衰ヘタリ、

〔但馬金銀山舊記〕乍恐口上書ヲ以奉御願申上候

但州生野御代官所平岡彥兵衞樣御預リ所

瀨谷銅山師
彌助印

瀨谷銅山師彌助申上候、私儀、但州川筋、武州葛飾郡鹿有村淸右衞門御請所、高瀨舟通船方山口村會所支配仕、年來但州ニ住居仕候ニ付、去ル寶曆九卯年、生野御役所へ奉願上、同國養父郡和田村二ツ尾銅山稼相建、巳ノ年迄相稼候內、少々宛出銅仕候得共、仕當ニ難成事存候故、又候同十年辰年、同國同郡明ケ延銅山之內小名瀨谷と申所奉願上、唯今相稼罷在候得共、何分瀨谷ノ內計ニテハ、手狹ニ御座候ニ付、存寄ノ通、壹山出來仕間敷と奉存候間、左ニ御願申上候、乍恐近年諸國共銅山鮮ク御座候故、銅山御吟味被為遊候由奉承知候、

一明ケ延銅山の儀は、大同元年より相始り、唯今迄相續、銅山稼相建候、古來は殊外繁昌仕候處に御座候へども、三四拾ケ年以前より、次第衰微仕候而、銅山町下財共見取百姓に相成、少々宛畑作、其間葛蕨根堀渡世に仕候て、漸其日相立罷在候內、乍恐私儀近年山近に入込、少々稼相建申に付、御吟味有之候間、明ケ延銅山も、近年は出銅も相增申候得共、元來只今明延銀山御請負山師生野銀山和泉屋佐兵衞、同所掛屋元次郞、同掛屋長四郞三人、御請所仕居候へ共、元次郞、長四郞儀は、佐兵衞に預け置、佐兵衞壹人稼に御座候、右佐兵衞と申者、山方出精仕候而、稼申者に無之候、結構成銅山、此節稼捨、同前に仕差置候儀に御座候間、佐兵衞御請所の內、私江入込稼、乍恐被為仰付被下候はゞ、決て壹山取立可申候、勿論明延銅山山役銀の儀は、御役所より被仰付候通無相違御運上御上納可仕候、右佐兵衞相稼申候鋪、其外見立に至迄、私稼申度と申御儀には

無御座候、佐兵衛持置候場所事、願上候、

一同國同郡田野銅山儀、五六拾年以前より休山仕罷在候、三四拾年此方、銀鉛稼事、願上、銀鉛山御請所仕罷有候、近年銀鉛衰申候ても仕當不申候故、相休中に付、其儘捨置候義、殘念に奉存候、故寶暦十二年より銅山取立、銀鉛師五兵衛山先にて、右銅山相稼、只今迄申候、然共五兵衛山先仕、私銅山稼仕候ても、私存寄の通に難仕御座候間、御吟味の上、銀鉛山の儀は、又兵衛相稼、銅山稼の儀は、私江分け山に稼被為仰付被下候はゞ、隨分出精仕候て、銅山取立仕候、

一同國同郡中瀬金山の内、中野かや銅山、至極宜敷通りに御座候故、相稼申度奉存候に付、中瀬金山、百姓役人迄、相對仕候所、中瀬金山師は不及申上、銅百姓迄も承知仕候得共、本村吉井村百姓分の内二三人不得心に付、相對相調不申候、右相對相調不申候ては御願申上候ても、御取上無御座候由、右銅山相稼候ても、田畑用水等の差障に少も相成不申候儀に御座候間、何卒御山相稼候はゞ、是又難有奉存候得共、右の通百姓共印形無之候ては御取上無御座候に付、何分御吟味の上被為仰付被下度奉願上候、此外銀山銅山御取立可被遊被為思召上候はゞ、百姓相對不仕候て、御山被為仰付被下置候儀相成候はゞ、生野御支配の内にても、近年の内數ヶ所取立候銅出精仕、取出可申候、

一生野銅山中の儀は、下財買吹は不及申、諸商人に至迄、日々人別に貳合六勺宛の御藏米被下置、其上山師江は買請米被下置候、右私願上候銅山江も下財幷手子の者共計江、日々壹升づゝ、御藏米被下置、下財幷引手子共江、五合宛被下置、御藏米御直段を以、最寄りの村方より扶持米人別被為下候はゞ、乍恐出銅直段格別引下げ、御用銅御請負上納可仕候、右願之通、以御慈悲御吟味の上被為仰付被下置候はゞ、難有仕合に奉存候、以上、

　　北八丁堀長嶋町兵庫屋喜兵衛方に罷在候

明和元申年九月

願人　彌助

御奉行所樣

(但播州金銀銅山幷寺社舊記)但州養父郡明延銅山之事

一大興元戌年ゟ初而、當申迄八百七拾六年中、右銅山中絶仕候由、此所別所豊後守領分ニ而候處、九拾四年以前慶長四亥年、豊後守丹後由良へ被遣、同年ゟ生野奉行間宮新左衛門支配成、其頃ゟ奥山中所ニ銀山出來大盛之由、役人どもを遣候處、生野同前之取計ニ而運上取ル、其ゟ貳拾枚間歩、谷床間歩、合木谷白岩所々ニ銀山出來ス、藤川喜左衛門支配之時、六拾四年以前寛永六巳年ゟ請座成、前々ゟ五年ヵ三年ヵニ入札爲仕候、先奉行支配之時、天和二戌年分入札存之外下直ニ仕候而請座を相止メ、戌年ゟ辰年迄七ヶ年は役人を遣置、口屋ニ而入運上取、山は何ものニ而も掘次第爲稼、吹立出銅拾分一ブヽ運上取申候、然る所山稼の者少く、運上亥少く候ニ付、元祿二巳年ゟ又請所ニ申付ル、

但州入麻村請主　喜右衛門

同請人　六右衛門

元祿二巳ゟ未迄三ヶ年

上銀拾三貫貳百五拾三匁壹分　山目

内　拾貳貫貳百三匁壹分　明延分

壹貫五十目　神子畑銀山分

但シ神子畑銀山へ、前々ゟ明延と壹所ニ爲請申候、

右銀高ニ銀六拾枚増以後三年請負度者、右同人願之、吟味之上申付ル、○下略

(三代實錄三十九陽成)元慶三年三月七日乙卯、散位從五位上陽侯忌寸永岑言、石見國美濃郡都茂郷丸

播磨國銅山

山麓石鋒崎嶸、綿數十里、銅工頭伴當麻呂異變家廣世等言曰、此山出銅、仍採砂石試以鼓鑄、遂得其銅、

(但馬州金銀銅山并寺社舊記)播州多可郡銅山之事

一妙見山　　牧野新町之上ニ有

一かは堀　　觀音寺村之上ニ有

一寺谷　　豐部村之上ニ有

右三ヶ所銅ﾘ不知、本多美濃守知行所之時七拾三年以前元祿六酉年ﾖﾘ江戶忠入と中山師、右三ヶ所共ニ稼、拾壹年歲失ﾀ稼もの無之、又小野長左衞門支配之時、三拾年以前寬文三卯年ﾖﾘ、大坂十兵衞と中山師、右三ヶ所共ニ稼之、亦松波五郞左衞門支配之時、延寶元丑年ﾖﾘ巳年迄稼盛ル、其後稼方無之候、先年行之時、大坂之者寺谷を五年ニ銀五拾枚之運上ニ而一坐、其所相續申候處、少分之儀と被仰付不申候、當國銅山遂申候得ば、下々村々迷惑仕候由中居處、去未年江戶ﾖﾘ岩城屋長左衞門と中山師、生野へ參、播州銅山も見分仕候、其節右庄屋三人願、其外之山師ニ稼せら、ハ惡水之はり無沙汰ニ仕候間、寺谷銅山五ヶ年ニ銀百枚之御運上ニ而願、右三人として稼度旨願書差上候、御勘定所江差上置申、御府之時分裏侯樣被仰候、

美作國銅山
備前國銅山

(三代實錄三十一)元慶元年二月廿三日乙未、美作國進銅大十一斤九兩、先是從七位上伴宿禰吉備麻呂言、美作國眞島郡加夫良和利山、大庭郡比智奈井山、備前國津高郡佐々山有銅、故吉備麻呂遣採、其實銅試但內匠大允正六位上布勢朝臣貴奉、與國宰、監地檢按、鑿採、今安基遂向進、所採之銅、

備中國銅山
備後國銅山

(三代實錄十七)貞觀十二年二月二十五日丁未、令備中備後兩國採進鑄錢料銅、

○按ズルニ備中國吹屋村銅山ノ事ハ、伊豫國別子銅山條ニ收ムル所ノ豫州銅山師泉屋吉次

郎由緒書ニ見エタリ、

長門國銅山

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂、爲採銅使、詔三箇年內所進銅鉛年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內不闕此數者隨爲眞、

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年二月廿日戊申、太政官處分、停遣採長門國銅使、付國宰採進焉、

紀伊國銅山

〔紀伊續風土記 物産一〕自然銅 本草

那智及楊枝村銅山、また日高郡川上莊江川村山中より出づ、鉑本より形小なり、

伊豫國別子銅山

〔愛媛面影 一宇摩郡〕銅山

別子山、足谷といふ所に在り、元祿四年より開發せり、又新居郡立川山長谷と云所にあり、舊は一柳家の領地なりしを、後西條領となりて、金子村人專開發せし由、其後又公料となりて、浪花住友某の支配となりたり、

銅を含たる石を鉑と名く、鉑を堀出す横穴を鋪と云、又間符(まぶ)とも云、間符の內に材木を建幷て、穴の潰れざる構を爲たり、水拔間符あり、是は鋪內に水の溜るを流出す爲に設る所也、又風廻間符あり、こは風の通はん爲に設る所なり、鋪內は晝も闇夜の如し、依て榮螺殼に鯨油をもり、綿にしませ、火を點して入に、此風廻穴なければ、燈消てともらずと云、間符口に小屋を構て、鋪內より堀出したる鉑をあらため、あしきを去り、よきを撰て、細に碎き、そを燒竈といふ物に入て燒なり、鉑石千貫目に薪三百貫より四五百貫目ばかり燒て、日數三十日ばかり過て、火氣の失たるを窺ひ、床屋といふに運て吹立るなり、○中略 此床屋にて始て吹を鉑吹と云、吹上たるを鈹と云、此鈹を銅に吹上るを眞吹と云、兩度の吹立には、銅千貫目に炭七千貫目餘を費す、

燒竈二百八拾枚　床屋廿五軒 鉑吹十五軒 眞吹拾軒

鉑石、兩山より掘出す所、一日凡四五千貫目、鉑石一仕鋪に千貫目、鉑四百八拾貫を得べし、是を三吹にして、荒銅五六拾貫目、床尻銅凡一貫目より六七貫ありと云、其鉑一仕鋪に、鉑百貫目、銅廿五六貫目より、四拾貫目ありと云、但し鉑の善惡によりて、あらかじめ定めがたし、

（吹塵錄二十四）豫州別子立川銅山起立

寶永元甲申年、松平左京大夫領分銅山幷銅山附拾四ヶ村高千七百九石餘上知被仰付之、

（鼓銅圖錄）本邦自古人始獻銅和銅紀年、距于元明天正之際、殆千年、其間各郡所出、雖金三品頗多、然未有以鉛攣銀於銅者、開闢以來、唯天正以前所造銅器、毀者鎔之、必得銀焉、此其證也、而當時所用之鑛、蓋成銀鉑坑中者云、天正之末、有蠻賈語於泉之左右、傳收銀法於住友蘇我、寬永辛卯之歲、九十也明崇禎中、宋應星所著天工開物、亦述收銀法而其法不同、蓋在辛卯之後四十年、住友氏自發濟以來、以採銅鼓鑄爲業、富國裕民之後、曰友信、元祿年間、始出銅山於豫州、請官開礦、每歲所出不下七十萬斤、至今百餘年、連綿不絕、七世于茲、爲銅舖戶長、以其鑿買號白水、故今稱字、以泉爲屋號、本邦取銀於銅、實權于住友氏、其世人多不之知、故此詳之、

（豫州銅山師泉屋吉次郎由緒書）一元祿十五壬午年、私先祖吉左衛門江戶江御召下シ被成、異國御渡銅御手支ニ付、前々ゟ奉願候趣被聞召、豫州別子銅山、幷中吹屋村銅山稼方出銅增益之儀被仰付、存寄之趣申上候ハ、右兩銅山共大山ニ御座候、分而別子銅山之儀、鉑繕成御山ニ而御座候得ば、普請丈夫ニ取立、職人相增出精仕候ばゞ、兩山共出銅抜群相增可申候得共、當中銅山之儀者、大水抜普請不仕候而者、存分之稼難相成御座候、豫州別子御銅山之儀者、片邊故、飯米之調方甚不自由、殊ニ嶮岨高山ニ而、九十月ゟ翌三四月頃迄雪深ク、通路時々相止ミ候儀ニ付、多春迄之入用米者、夏中山內江相圍候儀ニ仕候、常々馬車之通路迄者一圓無之、山上迄米貳斗程宛、人夫を

豐前國銅山

以脊負上ゲ申候ニ付、運送賃銀過分相懸リ、殊之外米高直ニ相當リ、候儀ニ付、大勢之人數相集メ候面者、飯米ニ手支申候、其上兩銅山普請方存分ニ仕立申候ニ者、夥數物入相懸リ候儀ニ付、當前ニ而は自力相應之仕入ニ而稼方仕候、此上兩銅山普請丈夫ニ仕立、飯米無手支用意仕相稼候はゞ、出銅抜群出増可申段存寄申上候處、御吟味之上、右兩銅山爲水抜普請料、午年ゟ十ヶ年之間、御金壹万兩拜借被仰付、此內五千兩者、備中銅山普請仕入御引當テ殘五千兩者、豫州銅山普請料御引當テ、猶又豫州銅山江は、格外ニ御物成米之內、六千石宛買受被仰付、尤御直段之儀は、所相場之內、御廻米御運賃幷銅山江脊負上ゲ候掛リ物分、御用捨被爲成下、定御直段壹石ニ付、五拾目替ニ而、尤代銀十ヶ月延納之積を以、御銅山相稼候內買請被仰付候、此御陰を以、飯米無手支、人數夥數相增、水抜普請夫レ〱存分ニ仕立、猶數千餘人江前銀丈夫ニ相渡、稼方晝夜無間斷出精仕、翌未年ゟ銅高抜群出增、御用銅差出、年々大分之御運上奉上納候、

但備中銅山之儀、段々大普請取立稼方種々雖弁仕候得共、何分水夥數相湛、存入之稼方難仕ニ付、享保元申年御山差上候ニ付、右拜借之內五千兩者、同年返上納仕候、且別子銅山江拜借金五千兩者、銅山繁昌仕候ニ付、御定十ヶ年返上納之積ニ候得共、五ヶ年目ニ皆上納仕候事、

○中略

一享保十五戌年、別子元舖取失候儀有之、御願奉申上候而、元舖抜數內普請爲御助成、例外ニ御米九千石拜借被仰付、其後九ヶ年ニ奉返納候、○中略

右者寬永年中已來當時迄、先祖ゟ年久敷兩銅山御用無滯相勤候處、奉入御覽ニ度、乍恐由緒之儀奉書上候、以上、

未　二月　　泉屋吉次郎

〔三代實錄 陽成 三十三〕元慶二年三月五日辛丑、詔令大宰府採豐前國規矩郡銅、充彼郡徭夫百人爲採銅

鑄作、先窯滿香氣中、多入蠟大香爐窯、

(雍州府志上六土產)鐵 鐵兩州處々山出、○下略

(本草綱目譯義八金)鐵 クロガネ マガネ 古歌ニマガネト云 和名抄ニアリト云 鐵ハ土中ニ生ズルモノナリ、金銀銅ナドニハチガウタ、土中ニ深クアルモノニアラズ、上ニ浮テアルモノナリ、鐵解ニ是鐵與金銀銅一樣種ト云ハ誤リナリ、金山銀山ニハナキモノナリ、鐵ハ諸國ヨリ出ヅ、雲州播州ヲ上品トス、奧州備中、備州ヲ次トス、但馬ヲ下品トスト云、金ノ類ハ天工開物ニクワシク出タリ、本草綱ニハ產類多シ、天工開物ニ質有土錠碎砂ト云々土錠ハ土錠鐵ト云モノナリ、碎沙ノ說ニ錠鐵ト云モノ是ナリ、碎沙ト云ハ水中ニ自然ニ大小カタマリタアルモノナリ、日本ニモ備後武藏ニアリ、砂鐵ト云モノナリ、天工開物ニ見タリ、日本ニテハ鐵沙ト云ハ和名ナリ、備後ニテハカンナト云、此アラ金ハ鋼カタク黑シタキラヽキアリ、鐵山アルモノナリ、鐵ヲ取ラヌ處ニモ多クアリ、和州ノ山ナドニモアルナリ、然レドモ鋼ヲ取ラズ、土上ニ浮テアリ、鐵ヲ取ニハ山ノスソニミゾ川ヲ付ケ、山ヲ水ニテ流ストキハ、土ハ輕キユヘ流ル、ナリ、鐵ハ重キユヘ流レズ下ニタマリタアルモノナリ、取ニハ獸ノ皮岸並取ルナリ、鐵作ノクヤマニナラヌ鐵ナリ、播州ノ佐用郡ニテ取ルハ、木ニテトユヲコシラヘ、トユニ五寸ブ、ニ横木ヲワタシテキ、水ヲレタ流ストキハ、鐵ハ横木ニノコルナリ、クワニテカキヨセ取ルナリ、備後ニテ取ルハ、土多クマジリアル故アレ、備州ニテ取ル法ハ、土マジラズシテヨシ、此ヲユリワケテ、ルツボヘ入テ、タ、ラヒカケ之ヲワカス時ハ、金クツハ上ニアフマリアルナリ、備後ニテカラミト云、金クツヲ取タワキタル鐵ノアンバトヲ考ヘタ下ニ口ヲアケタ流ス、此金ヲズクト云、和字ニハ銑ヲズクト調ズ、先ニ取ル故ニ銑ト云、唐ニテハ金ノ上品ヲ銑ト云、金ノ純澤者ト云註アリ、此鐵ハ甚堅レナベカマニナスナリ、生鐵ト云モノナリ、ナベガチハヤスリモ立ズト云ナリ、タ、ラヲ以タワカ

スモ、七日ホドトカストキハ、熟シテヤワラカニナルナリ、方言ニケラト云、鉧ノ字ヲ和訓ニケラト云、唐ニテハ熟鐵柔鐵ナド、云ナリ、ナマガネトモ云、ケラヲ取出シテ火ニカケテハタ、キ、火ニカケテハタ、キスルトキハ、堅クナルナリ、此ヲ器物トナスナリ、

〔日本靈異記上序〕於是諾樂藥師寺沙門景戒、熟瞰世人、才好鄙行、覓利養貪財物、過磐石於峯鐵山以嘘鐵、略○下

〔續日本紀文武三〕大寶三年九月辛卯、賜四品志紀親王近江國鐵穴、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十二月戊子、令近江國司禁、有勢之家專貪鐵穴、貧賤之民不得採用、

〔三代實錄清和十一〕貞觀六年八月十七日、備後國神石、奴可、甲努、惠蘇、世良、三谿、三次、三上八郡居山間、土宜採鐵、逢年旱疾、黎庶弊亡、四年之間、毎年四郡更復課役、

〔今昔物語二十六〕能登國掘鐵者行佐渡國掘金語第十五

今昔、能登ノ國ニハ鐵ノ鏁ト云ナル物ヲ取テ、國ノ司ニ辨ズル事ヲナンスナル、其□□ト云ケル守ノ任ニ、其鐵取ル者六人有ケルガ、長也ケル者ノ己等ガドチ物語シケル次ニ、略○下

鉛山

〔紀伊續風土記物產一〕鉛本草、本草和名ニ久呂加禰、和名鈔ニ錫訓、　牟婁郡那智妙法山に產す

〔本草綱目啓蒙金八〕鉛ナマリ

ナマリハ日本ニテモ處々ヨリ出ヅ、先ヅ出羽、對馬、加賀、紀州、豐後、越前、其外處々ヨリ出ヅ、銅山ヨリモ出ヅ、鉛ニ三種アリ、

〔雍州府志六土產〕鉛　多出自銀山之邊者爲好、豐後州之所出爲勝、其色似銀、略○中凡錫銀山邊所出爲良、銅金山側所堀爲佳、

〔佐渡志五物產〕鉛

加茂郡入川村ノ深山ニ產ス、下品ニシテ亦出ルコトモ少シ、

〔延喜式 二十三 民部〕凡鑄錢年料銅鉛者、備中長門豐前等國、毎年採送鑄錢司、國以司返抄勘會調庸抄帳、鑄錢銅鉛見鑄錢式、

〔三代實錄 二十 貞觀元年二月廿五日辛亥〕以長門國醫師從八位下海部男種麻呂、爲採銅使、彼國三箇年內所進銅鉛年料各足三千斤者、預借授五位、其後三年內不違此數者、聽爲眞、

〔紀伊續風土記 物產 一〕鉛 本草和名、和名抄、紀伊國

古來牟婁郡田邊莊鉛山村より出すといひ傳ふ、今は楊枝村銅山に產す、

〔紀伊續風土記 物產 一〕山鉛

文化年中日高郡寒川莊の山中より出づ、形色鉛に似て、長き條理あり、或は黑色のアンチモニーカムなりといふ、其說非なり、按ずるに續紀、神護二年の條に、丹波國より出る錫礦といふ者と同物なるべし、

〔紀伊續風土記 物產 一〕釣鐵鉛 本草

牟婁郡荒智山溪澗沙中に產す、自然鉛にして長さ二三寸、熨斗の如く黑色なり、土人採りて釣絲の錘となす、

〔本草綱目譯義 八 金〕鉛 ナマリ、鉛本字、

鉛ハ山中ニアルモノナリ、日本ニタクハ豐後日向アタリ多ク出ヅ、其外諸國ニアリ、天工開物ニ鉛ニ山鉛、水鉛ノ二ツアリ、山鉛ハ山中ニ自然ニ大タカタマリアルアリ、又細ク砂ノ如キアリ、鉛瓜ト分ツナリ、水鉛ハ水中ニ生ズ鉛沙ト間タレタ沙トハ別一カワニナリタ沙中ニアリ、是ヲユリヤクタ取ナリ、自然トカタマリタ鉛瓜トナリタルハ、ブキワクルニ及バズ、鉛ハ甚堅キモノナリ、雜物ニナスニハ鉛ヲ雜ゼルナリ、雜ゼヌヲシヤタト云、ヤワラカキヲマドロト云、鉛ノ多クマゴリタルハタガネニ易シ、雜リノ少キヲ上品トス、　一名　鉛錫 鑛ノ誤ナリ、訓蒙字會

ニ錫鑞ニ作ル、華錫〈同〉唐ノ俗名ナリ　鼠沓嘅〈石藥爾雅〉　亮錫都字〈事物異名〉

硫黃山

〔新編常陸國誌〈土產六十一〉〕山錫

那珂郡上檜澤村ヨリ出

〔大和本草〈金玉土石三〉〕硫黃

凡溫泉アル處皆硫黃アリ、信州淺間ガ嶽、越中立山、越後妙香山、肥後阿蘇山、日向霧島、肥前島原、スベテ山ノヤケ熱湯ノ出ルハ皆硫黃ナリ、伊豆大島ノヤケタルモ硫黃ナリト云、信濃草津ニ溫泉アリ、知死期ニ滿盈ルト云、湯ノ沫ヲトリ煮レバ、卽硫黃トナル、其地ニ藥師堂アリ、鐘ヲ十年ニ一度鑄カユル、硫黃氣ニテタヽナル故ナリ、旅人ノ刀、古身ハナサビズ、新身ハ黑サビ出ヅ、湯ノ穴ニ錢ヲ置バ湯トナル、是硫黃ノ氣銅鐵ヲ腐ラカスナリ、倭硫黃ヲ中華ニモ好品トセリ、

〔增訂豆州志稿〈土石七〉〕硫黃〈ユワウ〉

那賀郡檜原山、宇久須村八公山、東浦白田川ノ上流等ヨリ產ス、硝、硫酸、火藥等製造ニ用ウ、

石炭山

〔本草綱目啓蒙〈石九〉〕石炭〈中略〉

石炭ハ和產多シ、京ニハナシ、筑前ノ黑崎村ト云ガ、日本デ初テ石炭ヲ堀出シタル處ナリ、今ハ長州ノ舟木村、江州藏王村、岩根村、加州白山、濃州養老村、伊賀古山村、奥州南部、信州、備後、大和春日山、上總釣子浦〈ツルシウラ〉、相州由井ケ濱、紀州濱宮、山城ノ木津川ナドニ皆アリ、皆山ヲ深ク堀リ入リテ取ルナリ、

伊賀國石炭山

〔本朝奇跡談〈上〉〕伊賀國阿拜郡〈ごほり〉にて鍬手村、津領、此邊の村々にてウニと云もの地より出る、墨の樣なる土を堀出て、常の薪となす、上下の品有て、上のうには拾貫目に付價百錢、下のうには綿うにと云て、錢七八拾銅を過ず、又同國土中より赤く光る石の樣なる土を出す、是を鳥と云、田畑の養ひとす、〈下略〉

甲斐國石炭山

常陸國石炭山

近江國石炭山
長門國石炭山

(甲斐國志物產部二十三)一石炭 中山ノ夜子澤久成村ノ城ニアリ、木ノ土中ニテ化スル者ナリ、都留郡初鹿ニモアリ

(新編常陸國誌六十一土產)石炭

那珂郡長倉村ヨリ出ツ、伊賀ノ土人コレヲクセト云、上ウセハトウセノ二種アリ、史記考異ニ、龍川山ニ從ヲ出ス、形炭ニ似タリ、形モ文字モ似タル故、從ヲ炭ト誤レリ、蓋誤ガ呑タ亞ト成レモ、是從亀炭ニ非ズト云、又燃土トモ多珂郡秋山村ヨリ出ヅ、其色黒クシテ堅キコト岩ノ如シ、土人タンドン岩ト云、コレヲ燒ケバ臭氣甚シ、松岡郡秋山村ノ舊云、享保三戌二月新闢ノ邊ニブンドク岩トテ、前ニ在燃岩有之、珍敷品ニ候間、人上覧候様中來、國上候、惜大に燒盡候得者、燃中候、分嗣岩ト云ものへ、左ニ記す燃土ならん歟、色形共ニ左之品にたがわす、燃る石は又別品なし、和漢三才圖會燃土とも、様に、燃土、江州栗太郡山野掘取之、土塊黑色帶微赤、以代薪、亦臭(石炭臭同不聞)遲但燃木、石炭石ナリ、燒健有之云々トアリ、ナレ、古ヘブンドク岩ト聞エシヲ、今ハタンドント云ト見エタリ、

(笈日記六)國々にて替たる國の事○中略

一江州の武佐にて土を薪にして燒なり

一長州の舟木にては石を薪にして燒なり、

(西遊雜記十五)赤間町の近邊よりは石炭をうがちいだす所多し、此故に至て下直成もの也、百姓家のこりなく朝夕のたきものとす、此地より出るは色黒くして、往來旅へ年々おち散し、石炭にて道筋黒くして、雨中などは、往來の人手足黒く染付く事也、

(東遊筆記上)長門國舟木山ニ石アリ、色黒シ、之ヲ燒ニ、能ク燃ユル、土人薪ノ代ニ炊爨ス、夜ハ燈トナス、頗ル硫黄ノ氣アリ、余曾山下ニ一宿ス、親見ル所ナリ、然ニ是前ニ所謂石脳ノ黒キコト[illegible]

ノ如シト云者ノ類歟、山民皆言フ、神功皇后昔三韓ヲ伐トシテ、先ヅ此山ニ材ヲ採テ以テ戰艦ヲ造ル、是レ此山ニ船木ノ名アル所以ナリ、其材化シテ土石トナル、卽是ナリト、或人ノ曰、此石乾漆ニ似タリ、故ニ近世藥肆詐テ乾漆ニ充テ、以テ醫人ヲ欺ク、醫人豈知ラザル可ケンヤ、

〔採藥使記下長州〕重康曰、長州舟木村ト云フ所ヨリ石炭ト云フ物ヲ出ス、又アラス石トモ云フ、土人山ヲ掘テ是ヲ取リ、薪ニ代ヘ用ユ、其甚ダ臭シ、

光生按ズルニ、是本草ニ載ル所ノ石炭ナルベシ、又筑前黑崎村ヨリモ出ル、又伊賀島持ト云フ所ニモ有リ、俗ニ是ヲ乾漆ニ僞リ用ユ、毒アリ、猥ミ用ユベカラズ、其色黑クシテ、漆ノ乾キタルニ似タリ、老學庵筆記ニ曰、豫章郡ヨリ石ヲ出ス、燃テ薪トスベシト云ヘルモ是ナリ、

〔西遊雜記二〕舟木の驛に至り、此所に石膽の數多出る所にして、近鄕の百姓此石を燒木とせる事也、馬一駄にて價僅に七十錢位の物にて、至て便利の燒物也、併し臭氣甚敷、中以下の百姓ならでは燈木にはせぬ事と云、此地に大樹數多有しを、神功皇后三韓御征伐の時、軍船になし給ひしより、地名を舟木と號して、其木の殘りしが化して石と成しと也、解しがたし、石膽は諸國に出る所多し、

〔長防產物名寄土石〕石炭

厚狹郡末益村ノ內、小松尾山、　同郡舟木村ノ內、小野ノ谷、　同郡同村ノ內、羽山ノ谷、　同郡同村ノ內カリマタ山、　同郡有帆村ノ內、メクリ田山、　同郡同村ノ內、マツチ山、同ヒキヨミ山、　同高畑ノ內、前カナコ山、同權左畑、同ロウガナコ、

右此外厚狹郡四邊ニ有之、分下品、

紀伊國石炭山

〔紀伊續風土記物產一〕石炭本草

牟婁郡西山鄕平谷村に產す、多くはなし、此石中國九州邊に多く產す、燒けば能燃ゆるを以て

キユイルともいひて、土人油に代へ用ふ、其焼きたる滓堀捜し来れるを、本書那田邊庄邊にて拾ひ得て、瀝青と呼び、目炭の類なりといふ、實に異ふべき事の甚しきなり、元来瀝土にて製する墨に、松煙鹿皮汁をもてする者を、目炭の類とするを、黒炭同類なるより石炭の焼滓なることを知らず、瀝土より採挽の器なりとしてかく誤るなり、

〔輶軒小録〕石炭之事

西國に燃ゆる石あり、其色黒く光あり、地中より掘出し、人家炊爨の用に供す、多くたけば其臭あしとなり、筑前黒崎邊、先年初めて錢僕久留米へ官して行く、上京の次、小なる物四五塊を持ち来りて見す、火爐に入れ、烟草の用に供すれば、臭のはこる如く、暫時に通紅になり、小塊故か、さのみ臭しき臭もなし、彼近邊には所々にありと云ふ、本草を見れば、たしかに石炭なり、李時珍曰、石炭即烏金石、上古以書字故謂之石墨、今俗呼爲煤炭、煤墨音相近也、拾遺記言焦石如炭、雑衆録言、廣州有焦石穴、即此也、亦云石炭南北諸山産處亦多、昔人不用故識之者少、今則人以代薪炊爨、煅煉鐵石、大爲民利、土人皆鑿山爲穴、横入十餘丈取之、有大塊如石而光者、有疎散如炭末者、俱作硫黄氣、以酒噴之則解、入藥用堅塊如石者、昔人言夷陵黒土爲劫灰者、即此疎散者也、孝經援神契云、王者德至山陵則出黒丹云々、

〔三代實録二十四〕貞観元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師従八位下海部男種麻呂爲採銅使、部三箇年内所造銅、約年別各足三千斤者、須待授五位、其後三年内不減此數者隨爲賞、

〔銅鑛草大島〕銅山

貞享二乙丑年八月、吉從長崎商賣唐船ニ而銀六千貫目、阿蘭陀ニ而銀三千貫目可仕由被仰出候、數多之船ニ御針御付被成候、商賣止申候、銅屋拾三人より江戸へ御訴訟申上候書付、

此書附長崎ニ而も秘し候事、行計外へハ一見無之候、ひそかに寫、

銅山三拾四ヶ所目錄

一日本銅山三拾四ヶ所より每年銅出方

九百萬斤程ヅヽ　但棹にて

内（百萬斤日本向 八百萬斤異國向）

此代金拾五萬兩程

右之節、銅吹屋ニ而ほり申候者、白銀七百貫目程、金ニ而貳萬八千三百兩程、

一三拾四ヶ所之銅山の人數貳拾萬人幷銅山之近國在々より炭燒出申候、大坂吹屋に而遣申候炭、近國より燒出申候俵數百四十四萬俵程、炭燒人數拾萬人程、大坂吹屋之職人壹萬人、總合三拾壹萬人程、

每年異國江渡候銅、凡五百萬斤程、　此代金九萬千六百兩

銅よりしぼり候白銀、金に而　貳萬八千三百兩程、

合拾壹萬九千九百兩程ヅヽ、銅ニ而異國へ商賣之銀高之内、日本へ止リ申候、

〔折たく柴の記　下〕此年（正德三年）の冬、前代の御遺志をつがれ、長崎の事御沙汰有べき由議定有けり、此御沙汰の事起りしは、前代御世を嗣れし初より、海舶互市の料とすべき銅の數足らずして、事ゆかず、地下人等産業をうしなひて、飢餓に及べき由、長崎奉行所より注進す、（中略）其事の御沙汰ありて銅運送すべき事承りし銀座のもの共に催促しぬれど、諸國の銅山より産する所、年々に減じて、其價騰り貴く、其價を增し加へらるべしなど申事にて事ゆかず、正德元年辛卯に至りて、銀座の者共、銅四百五拾萬斤をば運送すべきよしを申す、其數足らざらむ所をば承るべしと、望申すものありしかば、（中川六左衛門といふ商人也）望む所をゆるされしに、銅の價なほ騰り貴くなりて、是も其利をうしないて事ゆかず、我國にて用ふべき所の銅も用ひたらず、明れば二年壬辰の二月に至

れども、銅座の者共運送すべきと申せし所の數にもたらざる所百五十萬斤なれば、同三月十七日、銅座のものに兼ねしめられし銅座の事を停められ、同十九日に、大坂吹屋のもの共に此事を仰下されぬ、されど去年己卯、諸國銅山より產する所の銅六百四十萬斤に過ず、たとひ我國の用百六十萬斤を除くの外、長崎に運送すべき所百四十萬斤には過べからず、是その價の賤り貴ければ、銅を商ふ者共たやすくは賣渡すべからざるが故なりと申す、

〔政事録 二十二 阿蘭陀〕慶長已降、定額を定め、長崎に於て、支那和蘭江渡すものは如左

和蘭賣渡銅定高

阿蘭陀方賣渡銅左之通、

一元祿十一寅年より賣渡御定高貳百五拾万斤、

一正德五未年より享保五子年迄、賣渡銅御免高百五拾万斤、御定銀高三千四百貫目、船數貳艘、

一享保六丑年より寛保二戌年迄　右同斷百万斤　御定銀千七百貫目

一寛保三亥年より延享二丑年迄　右同斷六拾万斤　同十九寅年より御定銀千百貫目

一延享三寅年より明和元申年迄　右同斷百拾万斤　同年より御定銀高五百五拾貫目

一明和二酉年より同四亥年迄　右同斷八拾万斤

一明和五子年より寛政二戌年迄　右同斷九拾万斤

一寛政二戌年より、銅六拾万斤宛賣渡被仰付、當時迄、右高賣渡候儀ニ御座候得共、以、[illegible]賣候銅之内追々賣渡被仰付候、

一阿蘭陀方賣渡物之儀、寛永十七辰年、阿蘭陀人是迄平戸江入津、同所ニ而商賣相濟、大判三百兩、金壹万兩、銀四千貫目賣渡候由御座候、尤同年、向後長崎湊江可致入船旨被仰渡、同十八丑年より長崎湊江年々入船有之、商賣相濟、金銀使銅樟腦白米麥等賣渡候由ニ有之候得共、年久敷儀ニ

而買渡高相分兼申候、

一正德五未年より延享二丑年迄、一ヶ年金壹万六七千兩より貳三千兩宛、年々買渡金高不同有之、延享三寅年より寶暦十二午年迄、文金千兩宛年々買渡申候、

一寶暦十三未年より、金千兩、代銅七万斤宛買渡被仰付候、

〔天保集成絲綸錄 九十〕寬政九巳年五月

大目付江

近年、諸山出銅不進之上、一體銅方不取締ニ付、此度大坂表ニ有之長崎銅會所を改銅座ニ申付、諸國之出銅一手ニ引受させ候間、大坂表ニ而銅取來候問屋吹屋中買、據而正銅取扱之儀者、銅座より可致差配候、依之國々銅山稼來分ハ不及申、此上致出精相稼、新山等開堀致し、銅出方掛出銅少く候共外買不致、不殘銅座江相廻し、古地銅ニ至迄銅座江可相廻候趣、以來銅座江買入候銅代者無口錢ニ而、御錢拂之筈ニ候事、

〔御勘定所より御尋に付書上扣〕文化五辰正月書上、銅山〇足尾 御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、〇中略

一荒銅拾六万七千貫目餘

是者享保三戌年より延享四卯迄六ヶ年之間、於足尾鑄錢座被仰付候節、御買上之外同所江相渡申候、

一荒銅五万五千貫目餘

是者天明四辰年より安永四巳迄七ヶ年之間、龜井戸鑄錢座江御買上之外相渡申候、

一眞吹銅三万五千貫目餘

是者安永貳巳より同戌迄六年閒之間、十万坪、鑄錢座江御買上之外相渡申候、

〔吹塵錄 鑛山 二十四〕天保元寅年より同十四卯年迄 石州灰吹銀井銅出高

石州灰吹銀出高

天保元寅年　一灰吹銀八拾貫八百目　同二卯年　一同九拾貫九拾貳匁　同三辰年　一同九拾六貫目　同四巳年　一同七拾貫七百目　同五午年　一同七拾五貫目　同六未年　一同七拾貫目　同七申年　一同六拾五貫目　同八酉年　一同六拾七貫目　同九戌年　一同五拾五貫目　同十亥年　一同五拾貳貫目　同十一子年　一同五拾貫目　同十二丑年　一同五拾貳貫目　同十三寅年　一同五拾貫目　同十四卯年　一同四拾五貫目

一灰吹銀壹貫目ニ付、御買上直段貳貫百八拾貳匁、

石州銅出高

天保元寅年　一荒銅壹萬八千斤　同二卯年　一同貳萬千斤　同三辰年　一同貳萬五千六百八拾斤餘　同四巳年　一同貳萬千八百五拾斤　同五午年　一同壹萬九千五百斤　同六未年　一同貳萬貳百五拾斤　同七申年　一同壹萬六千五百斤　同八酉年　一同壹萬五千七百五拾斤　同九戌年　一同壹萬貳千斤　同十亥年　一同七千五百斤　同十一子年　一同七千五百斤　同十二丑年　一同六千斤　同十三寅年　一同五千貳百五拾斤　同十四卯年　一同六千斤

一銅百斤代銀百五拾七匁外手當銀貳拾匁、都合百七拾匁、

〔金銀山出鏈絞灰吹方取扱一件〕本途買石共銀山ニ而鏈目利仕樣之事

一毎月七八九ノ日鏈目利日ニ御座候ニ付、本途買石ども不殘銀山江罷登り、御番所庭ニ洗ひ板と中を敷有之候ニ付、買石共右之所江相詰罷在候得ば、間歩之鏈場小屋よりかなこ共上中下の鏈を御番所江持出、一ト口之鏈の上江打明ケ申候、是を本歩鏈と申候、右本歩鏈を買石共召連候、鏈旦和人足鏈と申所人之もの共、銘々笊ニ入れ、買石共罷在候所江持參仕候而、何敷上中下

の鑛を申聞せ候ニ付、買石共請取之、洗ひ桶と申に水を入れ、其中か江笊ともに鑛を入れ能洗ひ、鑛石の善惡を目利仕、其上おつつかみと申候而、大概鑛五拾目程つかみ取、鐵皿扣之もの江渡し、鐵皿と申候者、差渡六七寸丸く中くぼに鐵にて仕立候物に入、叢にて組候輪懸蓋にいたし、壹鑛と申候而、廻り三寸、長六七寸許り之鐵鎚にて打砕き申候、細かに成候節杓子ニ入れ、水にて汰り流し候得ば、砂は先きへ流寄、水筋汰物は板子ニ相殘り申候、此杓子と申は、差渡五六寸、丸くおのれとくぼく柄三寸許り附候柄ニ御座候、右杓子面ニ殘り候水筋汰物目形、大概何程と勘定いたし候、鑛石おつつかみ五拾目は、鑛五貫目入壹荷之割合壹厘之宛りを以、壹荷には水筋汰物何程、左候得ば筋金何程、山吹銀何程吹立可申と相考へ、山吹銀筋金御買上代、御藏請取宛りを以、五貫目入鑛壹荷ニ付、銀何拾何貫文相懸り可申と相積り、御金藏請取御入用を賄へ、元印銀相場銀壹匁四拾八文之宛りを以、元印銀ニ直し、鑛五貫目入壹荷ニ付、鑛代何拾何匁何分、吹歩三割九分之積りを以目利仕候、出來銀と唱へ候義は、筋金と山吹銀と打合候を申候、縦令鑛壹荷ニ付筋金拾匁、山吹銀百四匁吹立可申と目利仕候得者、筋金拾匁者、山吹銀三拾五匁ニ成代り候と申定法を以、出來銀百三拾九匁ト目利仕候儀ニ付、出來銀と唱へ申候、且山代と申候は、右之鑛代之事ニ候、右之通、數々上中下の鑛目利仕、五貫入鑛壹荷ニ付、何數何鑛ハ何程と申儀を書付仕候而、御番所江差出し候ニ付、御給人山方役、御目付役、金銀改役、其間歩之御番所役立會之上、帳付之もの讀之候ニ付、鑛壹荷代何程と申儀を帳面ニ記し申候、右本歩鑛叺ニ入、金銀改役荷數相改、上鑛之分は御番所箱建江入れ、其外御番所庭ニ埒を立、繩を以總廻り仕、箱建幷總廻り江符印附置引拂申候、

鑛荷分之事

一毎月二三四ノ日、荷分と唱へ、一十ヲ日分之鑛相改メ、鑛代相極メ候ニ付、荷賣鑛目利之節之通

り、買石とも鋪山江罷登り、鋪場よりかなこ共、追荷留御番所庭江持出し鏈を敷、上中下之鏈相分ケ候ニ付、買石ども先達而目利之節見置候本歩鏈ニ引合せ、同様ニ御座候得者、本歩鏈追荷鏈打崩セ作り立、夫々鏈判分ケ鏈荷數相改申候、尤追荷鏈銘柄宜候得ハ、鏈代相增申候、右鏈掛ケ改之節御番所ニ而、御給人山方役、御目付役、金銀改役、御番所役立會之上、鋪山御屋之もの、買石壁ケ改中候かなこ買石とも立合、秤目見屆申候、勿論鏈荷數少き者、壹荷餘壁ケ改め、荷數多以鏈しを取、買目を改メ、鏈番引之、正買目を以、荷數ニ應じ、目形相究目利之節、壹荷宛り之鏈代を以、鏈買目ニ應じ、鋪山鏈付之もの勘定いたし相濟ノ候ニ付、山方役、金銀改役、鏈面ニ記し、再鏈相改メ、一十ヲ目鏈代高相極メ申候、鏈臥ニハ山方役、金銀改役、連判仕、山下ゲ爲致申候、其節山方役より鋪山口御番所辰巳口御番所江鏈員數書付印形仕候切手差遣候、右切手ニ引合セ、御番所改相濟し申候、鏈之儀ハ四ノ日ゟ追々山下ゲいたし、日々下り候分、間歩之御番所より荷數切手金銀改出張役所江差し候ニ付、右切手ニ引合、辰巳口御番所内江鏈持運び爲濟候得者、荷數相改、鏈置場江入れ置、辰巳口御番所定番役、山方役、金銀改定役、封印附置、三十ヲ日相濟候上ニ而、鏈ヲ廣間役、御給人、御目付役、金銀改定役、金銀改役立合、猶又荷數相改メ、戸前封印仕、右鏈拂直入候節ハ、是又同樣立合開封仕、買石共ヘ相渡申候、右鏈掛ケ改之節、山元ニ而相用候斤量之儀、箱ニ入、御給人、山方役、御目付役、金銀改役、連判印數シ、量目掛ケ改之節、右役々立會開封仕相濟候得者、猶又前文之鏈ニ始末仕候申候、

（鑛山聞書）一金銀山御買山之法

一壹荷代鏈荷拾〆文より五拾〆文買迄ハ、壹日御運上十分一之御定也、

一同六拾〆文より百〆文迄ハ、壹日御運上十分二也、貳分ハ御公儀に上る、

一同百拾〆文より百五拾〆文迄ハ、七分三釐分け、三分ハ御公儀、七分ハ山師、

一同百六拾〆文より三百〆文迄ハ、四分六ニ御堀分け、四分ハ御公儀、六分ハ山師、

一同三百貫文以上者、御直山御法也、但直山と云は御運上せり上て切刃を取也、

一普請所金に當り、御訴申上度節は堀取十日御免也、

一普請所、金に當り、隱密に堀候はゞ、切刃被召上、御追山之御法也、

一千貫文賣ハ、御公山御格合也、御公山と云は、公方様御山也、

賣山割合七分三の時は、御運上引残、跡七分を割、十分の四山師、但し金主割合山師の内なり十分の二大工、

十分の一堀子鍛冶、

一堀荷より、砕荷壹荷除、跡賣山、

一役人、數内より手山色掛砂は荷持留取押候義不相成、御免許也、

一出荷より、山師荷壹荷相除、賣山立るなり、

一砂手物掛、砂篩打、香箱、帳付飯焚、小使四廻り、風呂番割合也、

一草末御證文ハ、壹箇年に可限事、

右慶長巳來被定置候御法に候へ共、時之國主に隨ひ不同有之候事、

(銀山舊記)銀鉸銅

一灰吹銀の儀は、前年十月より、翌年九月中迄の出銀、十月中迄に吹立候を、壹ヶ年分に相極、月に出來灰吹銀高は、御届申上、御銀藏へ入置候分、悉清懸致し壹包に五百五匁宛に包立、十月下旬、大森差立申候、尤仕來にて、雲州赤穴より、備後三次迄、松平佐渡守より繼送り、同所より備後尾道迄繼送り、并同所より船積いたし、播州室津迄、松平安藝守より相廻し、同所より大坂安治川迄、酒井雅樂頭手船にて相廻し、安治川より高麗橋迄、大坂上荷船にて相廻し申候、右灰吹銀丁銀并銀鉸銅共、大森陣屋より、大坂迄無賃にて附送申候、尤年々十月中旬、右銀銅駄數取極、前條三ヶ所領主

家老へ御代官より遣し有之、上得銘の儀は、大坂町奉行へ御達有之、書状宰領蓄勝の節持參仕候、

一右灰吹銀、高麗橋より水揚致し銀座へ持參候節、掛輪と申灰吹銀百貫目或貳百貫目有之、内五百五匁包四ッ五ッ程も掛候て、銀座役の預り手形差出申候、宰領兩人、右預り書付請取、旅宿へ附、翌三日の内、銀座より案内有之、罷越候時、御勘定御普請役宰領兩人幷に銀座銀見當是立會の上、灰吹銀不足候節より出し、見分の上切銀等いたし、位を相極、御定位より相劣り候へば、此方より足銀差出、五百包にて立會封印を付、尚又銀座へ預り、定日に至り、京橋口、凡玉造口へ、右灰吹銀、幷引替銀有之候へば、丁銀共持參、御金奉行御勘定出席の所へ相渡候て、納札は江戸引請元〆窺に封直に差立申候、

一銀山出銅の儀は、右灰吹銀同樣、道中船中共銅主より相送り、大坂着船の節、安治川より渡船津節吹屋迄、上得銘の者、無賃にて相廻し、吹屋へ相渡置、右灰吹銀上納相済候跡にて、於銅座掛ケ御普請役幷銅座役人、此方より參候事例立會掛改、帳面に連印致し、右代銀請取、持歸候事も有之、又は預ケ置地方は、年貢銀に差引候事も有之候、右代銀の内貳拾歩一宛運上取立申候、文化十二亥年出銅高六百箇有之内、定式入用掛欠等を引候殘四万貳千八百貳拾四斤五歩、但(百斤二付百七拾貳匁七分ヅ)銅代銀七拾三貫九百五拾七匁九分壹厘貳毛、外拾四貫五百六拾目三分三厘、御手當銀但百斤に付三拾四匁宛、都合百斤に付貳百六匁七分の御買上に相當申候、且鹿足郡笹ヶ谷銅山師ども相稼候出銅は、當銀山と違ひ、山元より長州より濱通津出し致し、夫より便船積に致し、海陸とも駄賃銀山師より相辨、大坂へ相廻し、御買上直段御手當とも、百斤に付百九拾七匁貳分相當申候、

(豫州銅山師泉屋吉次郎由緒書)一寬永十五戊寅年、私先祖吉左衞門御當地江參上、異國人江銅直賣之儀、御訴訟申上候處、於御評定所松平伊豆守樣、阿部豐後守樣御出座ニ而、如先例異國人

江　銅賣渡候儀、御赦免被成下、其後相續銅賣渡來候事、

一同十八辛巳年ゟ、異國人所々江著船之儀者、御差止メニ被爲成、長崎江初而著船被仰付、從是御目附樣方、一年代リニ御勤、其後長崎御奉行樣御極リ被爲成候事、

一寬文八戊申年三月、異國人江諸商賣物御停止被仰付、其節寅銅商賣之儀者、數代家業之儀ニ御座候故、先祖吉左衞門出府仕、四月廿二日御評定所江奉願上候處、五月六日被召出被仰渡候者、猥リケ間敷商賣寅可仕敷旨、被爲思召上、御停止被爲仰付候得共、銅之儀者數代無恙、商賣勤來候御趣を以、奉歎御赦免候、其節新規企を以、壹人ニ而寅銅商賣取立候儀、堅ク仕間敷旨、大坂町御奉行石丸石見守樣、長崎御奉行松平甚三郎樣江寅被爲仰渡候事、

一寬文十二壬子年、長崎江罷下リ候諸商人共、銅屋共儀、御詮儀之上、天々ニ貨物之割賦被仰付候事、

一元祿十四辛巳年、銀座爲加役銅座被仰付、則從銅座異國人江直賣ニ相成候ニ付、古來ゟ私共ゟ異國人直賣相止ミ、銅座へ銅賣上ゲ申候、其後正德元辛卯年、同二壬辰年、享保元丙申年、同七壬寅年、以上四度、右銅渡方之儀御改替、元文三戊午年ゟ又々銀座爲加役銅座被仰付、異國人江直賣ニ成候ニ付、私御請負之山々出銅之分寅悉銅座江賣上ゲ申候事、○中略

一寬延三午年、長崎御奉行松浦河内守樣之節迄者銅百斤ニ付代銀百八拾目平均ニ奉賣上候處、格外之御直下ゲ被仰出、百斤ニ付、百三拾九兩四分八厘之御買上ニ被成、色々奉歎候得共、無御聞濟、一兩年寅御意之通承伏相勤候は丶、其內ニは御直增可被爲仰付之由、不得止事奉畏、其後御代リ度毎ニ奉願上候得共、曾以御聞屆不被下、其後明和六丑年、石谷備後守樣之節、段々奉歎訴候處、種々御吟味之上、爲御手當年々御銀九拾貫目宛被下置、難有仕合奉存候、然レども元御直段百八拾目と差引仕候得者、百斤ニ付、貳拾八匁餘宛相違仕候ニ付、年分御定高七拾貳万斤

之高ニ罷有、貳百壹貫七百餘貫匁寛延三午年巳来、年々御用代相減候ニ付、大急成儀高ニ罷成候得共、其後御直段増等之儀不罷置、是迄出精仕、右御定直段ヲ以率買上候御儀ニ御座候、
右者寛永年中巳来当時迄、先祖ゟ年久敷開銅山御用無滞相勤候趣、率入御覧ニ度、乍恐由緒之儀奉申上候、以上、

未　二月　泉屋吉次郎

（慶長見聞集七）諸国ニ金山有事

当君〔徳川家康〕の御時代には諸国に金山出来、金銀の御運上を牛車に引ならべ、馬に付ならべ、まい日をこたらずなかんづく佐渡島はたゞ金ぎんをもつてつき立たる宝の山なり、此金銀を一箇に十二貫目入、合百箇を五十駄つみの舟につみ、毎年五艘十艘づゝ、佐渡国に佐渡島より越後のみなとへ着岸す、是を江城へ持はこぶ、おびたゞしき事、昔をたとへてもなし、民百姓までも金銀をとりあつかふ事、有がたき御時代なり、

（金銀銅山等留所書）金銀山之部

一松前之内レリウナと申所ニ金山有之、慶長元和之比ハ専相稼夥敷出候ニ付、公儀〔江戸〕運上差出、實金百枚献上仕候處、金山運上御免被成下、其以来松前志摩守手前掘りニ申付候處、家中争論有之相止、當時も掘り候ハゞ出可申候事、

（鉱物社記乾）鹿角金山某[illegible]附駿河へ言上之事

奥州鹿角白根、西道等之金山をば、北十左衛門不思議の縁ニ而發見立、（中略）斯て利直公より数面金山出来之事、并伊兵衛殿迄内々に披露有けれども、頃日以之外美々敷成、伏見大坂之者迄下りければ、言上せねば不可然とて、慶長九年の秋の頃にや、駿河へ参勤せられし折節、此事を言上せられ、當山之為運上黄金千枚砂金五十斤献上けり

(梅津主馬政景日記)元和三年二月十四日、慶長十九年山々金銀御運上、大御所様○德川家康より御拜領、元和二年山々金銀御運上、將軍樣○秀忠より御拜領被成置候分、御國替之時分、御供仕、其年爰元まで罷下候ものどもに、銀子被下置て、其外慶長十九、大坂御陣にて打死仕候者ども之親子などは、知行ニ被遂添被下置候、右銀都合五千四百枚あまりにて御座候、夜ニ入候而各々へ知行被下候、其內梅津長三郎ニ知行貳百石被下候、御算用今日は不仕候、　八年正月廿一日、銀山御運上六箇所之分、灰吹銀百三拾九貫百六拾目貳分ハ院內山分、外ニ三貫六百八拾九匁八分之足目有、灰吹六貫三百六拾壹匁八分ハ寬川山分、外ニ三拾八匁貳分之足目有、灰吹貳百三十目ハ畑山分、灰吹百目ハ水澤山分、都合百五拾貫目也、右仁ッ、一紙山々之壹紙受狀候共ニ御前江差上申候、

昨日從秋田御運上金銀罷登ニ付、壹紙極候へと被仰付候間、帳共搆書付申候、金山御運上四ヶ所之分、判金十三枚ハ大葛山分、吹金四拾四兩貳步ハ杉澤山分、外ニ仁步之足目有、吹金壹枚七兩三匁八分ハ阿仁山分、外ニ六兩仁步之足目有、砂金貳枚壹兩ハ檜木內山分、都合貳十貳枚、

寬永二年六月十三日、今朝も銀山へ登見申候得共、當月之內などは、御山に可罷成體に無之候間、當月中は穿取に致候へと、總山中之者に申付候、並出候はヾ、十荷壹を山先兩人に出候へと申付候、來月朔日ゟは、直御運上山に可申付由、山先山師に申付、其ゟ只今之地形は、山こやまでに候間、山師町人之屋敷に可罷成所、奉行屋敷御藏屋敷籠所まで見申候、忠左衛門、助右衛門には、町屋敷之檢を折、只今まで家作立候山師町人之家數帳に付、其ゟ山道黑川虹川江之新道留候はん間、見被申候而、明日成共、明後日成共、被罷歸候へと申渡候、此中付置候高根久左衛門、駒木根五郎右衛門をば同心致罷歸候、半右衛門へ、おまた銀山之樣子具に爲申聞候、

(貨幣秘錄)金銀山の事

羽州秋田銀山は、佐竹右京大夫領內にあり、古來より運上として每年灰吹銀一貫四百目づゝ貢

献す、

(但馬州金銀銅山并寺社舊記)但州養父郡中瀬金山之事〔○中略〕

一中瀬金山寛永之頃上ル、中野吉兵衛支配之時分六拾年以前、寛永拾四年ゟ同拾七辰迄八年之内ニ、〔○中略〕凡壹ケ年之運上金子千両餘外ニ銀斉請座銀三十六貫目餘、入本口入役銀三拾貫目餘有之由、〔○下略〕

但州養父郡明延銅山之事〔○中略〕

天和二戌年分入札存之外下直ニ仕候間、諸運上を被止ノ戌年ゟ辰年迄七ケ年に役人を遣し、口屋ニ而入運上取、山には何もの一而も前々同様吹立出銅拾分一ブヽ運上取申候、然る所山稼の者少く運上も少く候ニ付、元禄二巳年ゟ又請所ニ申付ル、

(享保貳拾年卯九月池田新兵衛様御掛御銅山事御中上候書付)覺

一足尾銅山御運上之儀御尋被遊候、先年ヨリ御運上ト申差上申候儀者無御座候得共、御代官様御代々町直段御吟味被遊、御益用御加へ、山元御直段被仰付候、於當御支配、〔寛〕町直段御吟味被遊候處、金壹兩ニ付七貫目買御座候、貫銅五歩之御運上爲差上、又直段壹兩ニ付、八貫五拾匁ニ被仰付候、御蔵買銀之儀、當時町直段銅拾貫目ニ付銀六拾貳匁ニ御座候、山師共御請合仕候へ、銅拾貫目ニ付三拾九匁九分ニ御座候、去寅年御蔵御用銅ニ六拾貫目餘被仰付候處、右御益町直段引合金高三百三拾兩餘、御益用相見江申候、右新兵衛様野田三郎左衛門様御支配之節迄ハ、壹ケ年銅出高貳拾万貫目、或ハ拾五六万貫目程宛ハ仕出シ、御用相勤申候、近年御用も讓山師共困窮仕銅山稼方手セマニ罷成、年々銅減少仕、右百貳拾年餘御用相務申候御蔵作迄不少御儀ト奉存候、以上、

享保貳拾年卯九月　　屋野忠左衛門

田中徳兵衛

池田新兵衛様

御役所

〔草木六部耕種法序〕至曾祖父不昧軒翁、遍遊歴四方數十年、發明我學、苦心專思、著土性辨及勸農要錄、水陸經營秘錄、開物新書、通移開闢法、垂統法話等、元祿年中、開出羽國松岡山金鑛、及阿尼銅山、寶永中、開下野國足尾、仁田本村錫山、享保中、開豊後國竹田錫山、晚年推究山澤含藏金玉者、必日中吐精氣、夜半發火事、且生苗兒之明證、著山相秘錄、實維先賢未曾知之寶徵、而坑冶家之鴻寶也、至今奧羽兩州有鑛山相學者、大抵以我曾祖翁、爲開山手云、

〔ドンロドリゴデビベーロ報告〕ドン、ロドリゴが皇帝に要求したる條項、

皇帝が求むる所の五十人の礦夫の事に關しては、予は之を陛下并に新西班牙總督に申立つべきも、其實行を容易ならしめんが爲めに、皇帝は左の諸件を承諾せざるべからず、

諸礦山より採掘する所の半は礦夫に與へ、殘餘はドン、フエリペ王と日本皇帝との間に等分し、陛下は右所得を管理する爲め、事務員を日本に派遣し、何派の宣敎師たりとも之に伴ひ、公開の敎堂に於て祭事を執行し得べき事、右事項は本條の末段に置きたれども、予の考にては、實は主眼にして、他は皆之に附隨したるものなりき、次に予が請求せしは、左の如くなりしと思惟す、曰く日本皇帝はドンフエリペ王と親交を有し、帝王は互に其約したる所を確守すべきものとす、而して兩敵は並び立つこと能はざるものなれば、今西班牙と交を結ぶについては、皇帝は蘭人に退去を命せざるべからず、蓋し蘭人依然として國内に在らば西班牙王及び其船は日本に於て安んずること能はざればなり、

古事類苑

金石部三

金屬

金銀銅鐵錫ヲ五金ト云ヒ、總シテ金ヲ以テ五金ノ長ト爲ス、蓋シ其光澤不變ニシテ、且ツ其產出ノ少量ナルニ因ルモノナラン、

金ハ其色ニ由リテ黄金ト云ヒ、和名之ヲコガネト云フ、文武天皇大寶元年、對馬國ヨリ貢セシヲ以テ、我邦ニ金ノ產セシ古キ例ト爲ス而シテ沙中ニ含有スル所ノ金ヲ沙金ト云フ、

銀ハ其色ニ由リテ白金ト云ヒ、和名之ヲシロガネト云フ、天武天皇三年、對馬國ヨリ始テ之ヲ貢ス、

銅ハ其色ニ由リテ赤金ト云ヒ、和名之ヲアカガネト云フ、神代ノ時、既ニ銅ヲ山中ニ得タル事見ユ、元明天皇和銅元年、武藏國ヨリ銅ヲ獻ズ、因テ改元シテ和銅ト云ヒ、又銅錢ヲ鑄ル、

鐵ハ其色ニ由リテ黑金ト云ヒ、和名之ヲクロガネト云フ、神代ノ時既ニ其名見ユレド、我邦ニハ古來鐵ヲ產スルコト多カラズ、

錫ハ和名之ヲシロナマリト云フ、鉛ト合金シテ白鑞ヲ生ズ、但シ伊勢白鑞ト稱スルモノハ今ノ謂ユル眞鍮ナルベシ、

鉛ハ青金ト云ヒ、和名之ヲナマリト云フ、金屬ノ最モ賤キモノナリ、而シテ密陀僧ハ又ロタスト云フ、鉛ト錫トノ合金ニシテ、多ク銀山ヨリ出ヅ、或ハ金銀ヲ吹キ分タル際ニ之ヲ得ト云フ、

水銀ハミヅカネト云フ、是ニ人工ヲ加ヘタル物ト、自然物トアリ、

金屬ハ、之ヲ鑛山、玉石ト沙土ノ諸篇ト參照スベシ、

〔類聚名義抄 八 金〕金 今、カネ、正、音今、

〔伊呂波字類抄 加 雜物〕金 カネ

〔日本釋名 中 水火土石金玉〕金 コガネ　かたくねる也、石中にあるかねのまゞをくだきて、かたくねる也、

〔倭訓栞 前編 六 加〕かね ○中略　金をいふは堅錬の義なるべし、金は五金の總名也、口語にいふも然り、されど東國にて、もはらいふものは黃金也、京師にてもはらいふは銀なり、

〔東雅 七 器用〕金カネ　義不詳、我國太古の世には、珠玉をもて寶とし、金銀を寶となせし事は見えず、陰陽二神天降ませし始に矛劍の類ありと見えたれば、銅鐵の如き、すでに其用ありしことと疑ふべからず、正しく其物の名見えし始は、日神天磐屋戸にこもり給ひし時、天金山の銅を採りて矛造り、天香山の銅を採りて鐸造りしといふ事、舊事紀に見えしを、古事記には、天金山の鐵を取て鍛造りしと記せしが如き即是也、鍛此よりさき天鐵事といふも、舊事記に見えたり、金銀の如き、神功皇后新羅を征し給ひし初に、彼國王進貢の物に始て見えて、これよりして後、彼國をば寶の國と稱したりける也、（中略）古語にヤクといふ事を、カといひしなり、詳なる事は靈の註に見えたり、ネといふは、ネリといふ語の意なる也、凡五金の類、燒鍊りて鍛なしてあるを、ネと云ひしと見えたり、鐵をネリといふも鍊也、其の堅きをいふ、鋼を百鍊鐵といふが如し、鉛をナマリといふは生也、堅からざるをいふなり、今も物のなまくして堅からざるをば、ナマルなどいふなり、鐵錆をサビといふ義不詳、但しサビといふものゝ鐵にのみあるにはあらず、

〔傍廂 後篇〕金の五色

和名抄、金古加禰黃金也、之路加禰白金也、銅阿加加禰赤金也、鐵久路加禰黑金也、鉛奈万利青金也とあり、皇朝には、神代上古より鐵のみありて、あだし金はなかりしなり、さる故に鐵、今は交金なれど、いにしへは鐵なり、劍、刀、甲、冑、其外農工商の器にても、鐵を以て質とし、あだし金は裝とす、金銀はもとなかりしを、素盞嗚の尊、天

上より下り給ふ時に、新羅國を見給ひて、かの國にはこがね白がねあり、この皇國にとりよせんには、浮寶なくはあるべからずとのたまひて、身に生るべき木を始め、あまた木種を播し給ひし事、神代紀に委しくあり、其後仲哀天皇神功皇后御みづから神主と成り給ひ、神祭畢りて、新羅へわたり給ひ、百濟高麗と共に三韓を從へ、三王を皇朝の馬飼奴僕と定め給ひ、金銀を始め、あまたの珍寶もてかへり給ひしより、金銀の氣土中に滿ちて、天武天皇の三年に、對馬の國にて、始めて銀出でたり、また元明天皇和銅元年、武藏國より銅出でたり、依りて始めて錢を鑄て、和銅開珍と號し、年號を和銅と云ふ、聖武天皇の天平廿一年、陸奧國より始めて黄金を奉る、續きて同年駿河國にも金を獻て奉る、それより國々の土中に充滿して、中々に新羅國には絶えてなくなりつゝ、たゞいやしげなる砂のみぞのこりける、是皆神のみしわざなれば、人力、人智の及ぶべきかぎりにあらず、あなかしこ、あなくすし、

〔本草綱目譯義〕八金〇中略五金ノ分チアリ、金銀銅鐵錫是ナリ、

〔倭名類聚抄〕十一金銀 金 爾雅云、黄金謂之璗、音蕩、其美者謂之鏐、力幽反、四聲字苑云、金寶也、説文云、錢、[illegible]古加禰、金之最有光澤也、

〔箋注倭名類聚抄〕三金銀 五字原書注、今依正文、説文云、金五色金也、黄爲之長、久薶不生衣、百鍊不輕、从革不違、西方之行、生於土、从土、左右注、象金在土中形、今聲、按下總本、有和名二字、按古加禰、黄金也、銅鐵錫古有黄赤白黑之稱、[illegible]古加禰之稱、[illegible]古波加禰之稱、同原書金部云、錢金之精者、與此引少異、按、爾雅郭注云、鏐即紫磨金、是鏐有光澤也、似此所引誤脱、

〔翻譯名義集〕三七寶篇 一般七寶、凡有二種、一者七種珍寶、二者七種王寶、七種珍寶、輔引、佛地論云、一金、二銀、三吠瑠璃、四頗胝迦、五牟娑洛揭拉婆、六遏濕摩揭婆、七赤眞珠、無量壽

金寶藏

經云、金、銀、琉璃、頗梨、瑪瑙、硨磲、恒水經云、金、銀、瑠璃、眞珠、硨磲、明月珠、摩尼珠、大論云、有七種寶、金、銀、毘瑠璃、頗梨、硨磲、碼碯、赤眞珠、二七種王寶者、替摩尊最經云、王得道時、於其正殿、婇女園繞、七寶自至、一金輪寶、名勝自在、二象寶名、曰青山、三紺馬寶名曰勇疾風、四神珠寶名光藏雲、五主藏臣寶名曰大財、六玉女寶名淨妙德、七主兵臣寶名離垢眼、得是七寶於閻浮提作轉輪王、

〔倭訓栞前編九〕こがね　金をよめるも黃金の義也、俗に黃金を音によぶは大判也、本草に波斯、紫磨金東夷、青金と見ゆ、青金は日本の產を指にや、紫磨黃金といふは、孔融が聖人優劣論に金之精者名曰紫磨、猶人之有聖と見ゆ、埃嚢抄に須彌山の頂の閻浮樹の實落て金となるの說より、閻浮檀金といふといへり、〇下略

〔令義解三賦役〕凡諸國貢獻物者、(謂案賦役令云、調雜物貢獻物、今此令無朝集使字、即知不必附朝集使、亦當副附他使也、)皆盡當土所出、其金、銀、珠玉、皮、革、〇下略

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

砂金百五十兩下野國所進

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

下野國(中略)砂金百五十兩、練金八十四兩、〇中略　陸奧國(中略)砂金三百五十兩、〇下略

〔日本書紀二十九天武〕十年十月乙酉、新羅遣沙喙一吉飡金忠平、大奈末金壹世、貢調金、銀、銅、鐵、錦、絹、鹿皮、細布之類、各有數、別獻天皇皇后太子、金、銀、霞錦、幡、皮之類、各有數、

〔續日本紀一文武〕二年十二月辛卯、令對馬島冶金鑛、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、對馬島貢金、建元爲大寶元年、　八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬島、冶成黃金、至是詔授五瀬正六位上、賜封五十戶、田十町、幷絁綿布鍬、仍免雜戶之名、對馬島司及郡司主典已上、進位一階、其出金郡司者二階、獲金人家部宮道授正八位上、幷賜

絁綿布鍬、復其戸終身、免調三年、又贈右大臣大伴宿禰御行首遣五瀬冶金、因賜大臣子封百戸、田四

十町、〔[illegible]〕

(續日本紀二文武)大寶元年三月戊子、遣追大肆凡海宿禰麁鎌于陸奥冶金、

(續日本紀十七聖武)天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、〇中略從三位中務卿石上朝臣乙

麻呂宣、〇中略陸奥國乃小田郡爾金出在止奏弖進禮利、〇下略

(萬葉集十八)賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌

葦原能美豆保國乎安麻久太利之良志賣之家流須賣呂伎能神乃美許等能御代可佐禰天乃日嗣

等之良志久流伎美能御代御代之伎座流四方國爾波山河乎比呂美安都美等多弖麻都流御調

寶波可蘇倍衣受都久之毛可禰都之加禮騰母吾大王能毛呂比登乎伊射奈比多麻比善事乎波自

米多麻比弖久我禰可毛多能之氣久安良牟登於母保之弖之多奈夜麻須爾鷄鳴東國能美知能久

乃小田在山爾金有等麻宇之多麻敝禮〇下略

反歌三首〇中略二

須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知乃久夜麻爾金花佐久

(續日本紀十八孝謙)天平勝寶二年三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於部內廬原郡多胡浦濱

獲黃金獻之、練金一分、沙金一分、於是東人等賜勤臣姓、又賜中衞員外少將從五位下田邊史難波等上毛野君姓、

(多識編一金石)金 古加禰、又云[illegible]加禰、異名、黃牙、太眞、生金、今案須那加禰、又云阿良加禰、 沙金 美豆

乃那加乃須那加禰、 [illegible]金[illegible]豆加禰、 山金 也末加禰、 馬蹄金 牟末乃比豆米加禰、 [illegible]

顆金加良久多毛乃加禰、 胯子金 瓜子金 宇利乃佐禰加禰、 麩金 牟岐古加禰、 葉子金

古乃波加禰、 [illegible]金 宇豆和毛乃仁豆久利加禰、又云豆加仁宇豆美加禰、 還丹金 愛可岐須那

加禰、 金屑 古加禰乃須里久須、 金箔 今云岐牟波久、 金漿 古加禰乃豆久利美豆、 金

汁、古加禰乃志留、

〔大和本草 金三 玉土石〕金

五金ノ長トス、久ク土ニ埋テ不朽、百度火ニ煉テモ不減、昔日本ニ黄金アル事ヲシラズ、異國ヨリ來ル、續日本紀、聖武天皇天平二十二年、陸奧國ヨリ初貢黄金、此後日本諸州ヨリ多ク出ヅ、礦ハ時珍云、礦麁也、五金皆有礦石、銜之、金銀ナド皆石中ニマジリ有之ヲ、其石ヲクダキエリテ金銀ヲトル、其石ヲ礦ト云、印子金、精金ナリ、古ヘ中華ヨリ來ル、其形餅子ノ如シ、又他ノ器ニ製セルモアリ、沈存中ガ筆談ト云書ニ此事ヲノセタリ、上ニ篆文劉主ノ字アリト云、或曰、印子金ハ精錬鑄レリ、非精金、山金ヲ精煉シタル是眞金ナリ、器ニ製スベシ、范成大ガ桂海虞衡志ニ云、生金生山谷田野沙土中、不由礦出也、大者如麥粒、小者如麩片、便鍛則是熟金、日本ニモ有之、沙土ヲユリテ取之、甚煩勞ナリト是精金ナリ、

〔本草綱目譯義 金八〕金　コガネ　キガネ

五金ノ分チアリ、金銀銅鐵錫是ナリ、五色ノ中尤モ貴キモノナリ、黄色ナル故ニキガネト云、〇中略奧州佐渡其外諸國ニ出レドモ、奧州佐渡ヨリ盛ニ出ヅ、金ニモイクトヲリモアリ、集解ニモ時珍ノ說ニ、金有山金、沙金二種ト云、本草彙言ニハ山金、土金、沙金、石金、水金ノ五金アリト云、此五ツモヲシメテ云トキハ山金沙金ニ過ズ、其外ニ土金ト云モノアリ、山金ハ山ヲ深堀テ取タルナリ、金モアラ金ハ光ラズ、一通ノ石ノ如クチズミ色ニシテ、細キ金砂入レマジリテヲルナリ、夫ヲフキワケテ取ルナリ、沙金ハ流水中ニ交リアルナリ、沙ノ如シ、此ハフキワクルニ及バズ、大河ノ流ルソコニアルモノナリ、之ヲ生金ト云、又山中ニ自然ニ形ヲ爲テ塊アルアリ、土金ナリ、和名ニインスト云モノナリ、唐ニテハ熟金ヲインストト云、日本トハチガウナリ、印子金ト云ハ通用金ニテ熟金ナリ、印子金ノ形ハ、ブスマノヒキテノ如ク、少シ長ク中ニ凹ミアリ、百目ノモノアリ、五十目位

金

ノモアリ、天工開物ハ、山石中所出、大者名馬蹄金、中者名橄欖金帶胯金、小者名瓜子金ト云モノ一ハ、和名ニイシンニト云モノナリ、水沙中所出、大者名狗頭金、小者名麩麥金糠金ト云モノハ、沙金ノコトヲ云ナリ、日本ニモ奥州佐渡ヨリ出ヅ、又伊豆ニモアリ、茎子ノ如キモアリ、又少リザキナスビザキノ如キアリ、其中大ナルハマレナリ、コマカキ碎金ト云方ノモノ多シ、沙金ハ生金ナリ、麩金ハ一名麩片、

金本草綱目　麩麩金天工開物　ツクタイフキワクタズニ、自然生ノモノヲ生金ト云、毒アリ、佐渡ヨリ出ル、フキワケタル金ヲ熟金ト云、毒ナシ、通用スル金子、或ハ飾ニシタルモノ、或ハ金箔ヲ薬用トナスベシ、蜜陀ニハ金ヲ粗ク用ユ、水銀一名、黄物事物異名　嬌娘同　女古黄帝雑要　文殊ノ方言ナリ　阿迦羅字書具字ノ注言ナリ　陳亭石薬爾雅　天真同　東南陽日同　男

石上火同

〔宇治拾遺物語十四〕今はむかし、兵衛佐なる人ありけり、冠のあげをのながゝりければ、世の人あげをのぬしとなんつけたりける、西の八條と京極との畠の中に、あやしの小家あり、そのまへを行ほどに夕だちのしければ、この家に馬よりおりていりぬ、みれば女ひとりあり、馬を引入て夕立をすごすとて、ひらなる小辛櫃のやうなる石のあるに尻をうちかけてゐたり、小石をもちてこの石を手まさぐりにたゝきゐたれば、うたれてくぼみたるところをみれば、金色になりぬ、希有のことかなとおもひて、はげたるところに土をぬりかくして女にとふやう、この石はなぞの石ぞ、女のいふやう、何の石にか侍らん、むかしよりかくて侍るなり、昔長者の家なむ侍りける、この家は倉どものあとにて候なりと、誠にみれば大なる石ずへの石どもあり、さてその尻かけさせ給へる石は、その倉のあとをはたけにつくるとて、うねほる間に土の下より堀出されて侍るなり、それがかくやのうちに侍れば、かきのけんと思侍れど、女はちからよわし、かきのくべきや

金屑

沙金

うもなければ、にくむ〳〵かくておき侍るなりといひければ、われこのいしとりてん、後に目くせあるものもぞみつくるとおもひて、女にいふやう、この石我とりてんよといひければ、よき事に侍りといひければ、そのへんにまりたる下人をむな車をかりにやりて、つみていでんとするほどに、綿絹をぬぎて、たゞにとらんがつみえがましければ、この女にとらせつ、心もえでさはぎまどふ、この石は女どもこそよしなし物と思ひたれども、我家にもていきてつかふべきやうのあるなり、されば、たゞにとらんがつみえがましければ、かく衣をとらするなりといへば、おもひがけぬことなり、ふようの石のかはりにいみじきたからのをんぞの、わたのいみじき給らん物とはあなおそろしといひて、るはのあるにかけておがむ、さて車にかきのせて家にかへりて、うちかきうちかきうりて物どもをかふに、米錢絹綾などあまたにうりえて、おびたゞしき徳人になりぬれば、(略)○下

〔本草和名 四 玉石〕金屑　生金(陶景注云、作屑謂之生金、)金沙(陶景注云、建平有之金沙、)一名太眞(出僊方之名)一名黄金(陶景注云、古書名金爲黄金、)金屑者日之精也、(出兼名苑)和名古加禰、　出陸奥國、

〔倭名類聚抄 十一 金〕金屑　陶隱居曰、金屑一名生金、(和名古加禰、乃須利久賀禰、)

〔箋注倭名類聚抄 三 金〕隋書云、梁有陶隱居本草十卷、亡、新唐書云、陶弘景集注神農本草七卷、今無傳本、新修本草玉石部中品、陶注云、出水沙中、作屑、謂之生金、此云一名、蓋源君所隱括、昌平本、下總本、有和名二字、按、陶氏所説謂水沙中自然作屑者、非經磨研、故謂之生金、不與經屑之研屑粉同、輔仁單謂古加禰、是也、源君引陶注、爲須利久豆、依屑字誤訓也、又按、本草衍義云、不曰金而更加屑字者、是已經磨屑可用之義、如玉漿之義同、二經不解屑、爲未盡、其説與源君所訓偶合、然陶説不爾也、

〔重修本草綱目啓蒙 四 金〕金　キガネ　コガネ(キガネナ[illegible]クテコガネト云フ○中略)

佐州及ビ奥州ノ松前、豫州ノ古野川等ヨリ出ル沙金ニ、瓜子金、麸金、糠金ノ品アリ、凡ソ沙金ハ色

淘シ、鉱師二等トスト云、生金ハ即チ砂金ナリ是ヲ鎔鍛スレハ熟金トナル、生金ハ試金石ニ著カ
ズ、本草彙言ニ、石金トアルハ、鉱師ノ謂ル鉱ノ山金ナリ、今佐州ニテ山ヲ深ク鑿リ入リ、黄青黒ナ
ル石ニ、金沙錯リアルヲ採リ細ニ研キ、水ニ淘シ石末ヲ去テ、ソノ金沙ヲ鎔化スレハ、金ト石ト分
レテ、金ハ一塊ニアツマル是レ熟金ナリ又自然ト金ノミ塊ヲナシ、冰柱ノ形如キハ、黄牙ト云、俗
名イシヌ、鉱山ニテ印子金ト云トハ別ナリ、コレハ鉱山ノ通用金ニシテ形紙門ノ鐶鐶ノ如クス、
重五十銭ナルアリ、百銭ナルアリ、色ハ美ナレドモ品ハ下ナリト云、鉱ニハ熟金ヲ用ユ、沙金黄牙
等ノ生金ニハ雑アリ、鉱ニ錯ニ入レズ、熟金ヲ用ルニハ、金箔ヲ用ユベシ、箔ニ品類多シ、大鏡ヲ上
品トス、中鏡ヲ次トス、鏡師箔青箔ハ皆マゼモノアリ、鉱ニ入ルトニ堪ズ、鏡師箔ハ十分一鉄ヲ雑
ユル故、色淡シ青箔ハ三分ノ一鉄ヲ加ユル故ニ、青色ヲ帯ブ、讃岐ノ箔ハ、小サ寸四一ニシテ厚シ、本邦
ノ箔ハ、大サ四寸二ヘシテ薄シ鉱磨箔十枚ニハ和箔二十枚用ベシ、(中略)
鉱解二(中)沙金ハ佐州西見川及雲州三角ヶ島陸ノ右野川ノ水底ニアリ、ムシロニテスクヒトル、
大ニ人力ヲ費シテ得少レト云試石ハフクイシ、ナチグロ、物理小識ニ試金石ト云フ、
(續日本後紀四)承和二年二月戊戌、下野國武茂神奉授從五位下、此神坐採沙金之山、
(下野國誌十二産物)砂金
内藏寮式に、砂金百五十兩下野國所進とあり、民部式にも、砂金百五十兩練金八十四兩とみえ
たり、八雲御抄にも、金の部に那須の御社金みゆ、續日本後紀に、承和二年下野國武茂神奉授從
五位下此神坐採沙金之山とありて、那須郡に今も武茂の神社あり其邊に金洗澤と云所など
もあり、歌枕名寄にも那須のゆりかねの歌二首あり、名所部に擧たり、
(續日本後紀五)承和三年正月乙丑、詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黄金神封戸二烟、
以應國司之禱令採得砂金、其數倍常、能助遣唐之資也、

〔台記〕仁平三年九月十四日庚子、去々年既令人長勝近貞爲使、下向奥州、先年可增奥州高鞍庄年貢之由、觸聞（禪閤、父忠實）被仰基衡、（金五十兩、布千段、馬三疋、）基衡不肯增之、久安四年禪閤以五ヶ庄讓余、同五年以雜色源國元爲使、仰基衡曰、可增高鞍金五十兩、布千段、馬三疋、（本數金十兩、細布十段、馬二疋、）大曾禰布七百段、馬二疋、（本數布二百段、馬二疋、）本良金五十兩、布二百段、馬四疋、（本數金十兩、所分金五兩、馬一疋、）屋代布二百段、漆二斗、馬三疋、（本數布百段、漆一斗、馬二疋、）遊佐金十兩、鷲羽十尻、馬二疋、（本數金五兩、鷲羽三尻、馬一疋、）基衡不聽、國元其性弱、不能責之、空以上洛、重遣延貞責之、去年基衡申曰、不得增所仰之數、可增進高鞍金十兩、細布十段、布三百段、御馬三疋、大曾禰布二百段、水豹皮五枚、御馬二疋、遊佐金十兩、鷲羽五尻、御馬一疋、屋代布百五十段、漆一斗五升、御馬三疋、本良金二十兩、布五十段、御馬三疋者、仰曰、三ヶ所（本良、遊佐、屋代、）所申非無其理、依請、至于高鞍大曾禰兩庄者、田多地廣、所增不幾、猶減本數、可進高鞍馬三疋、金廿五兩、布五百段、大曾禰馬二疋、布三百段者、今日任此數延貞持來三ヶ年貢（久安六、仁平元年、二）年來貢本數、然而返却不受、今年相合三ヶ年、歟、受之、增年貢事、成隆朝臣（高鞍）使通（本良）所勸進也、

〔源平盛衰記十一〕育王山送金事

我朝ノ三寶ニ財寶ヲ拋チ給ノミニ非、異國ノ佛陀ニモ志ヲゾ運給ケル、奥州知行ノ時、氣仙郡ヨリ金千三百兩金ヲ進タリケルヲ、妙典ト云唐人ノ筑紫ニ有ケルヲ召テ、百兩ノ金ヲ賜テ仰ケルハ、千二百兩ノ金ヲ大唐ヘ渡ベシ、其内二百兩ヲバ育王山ノ衆徒ニ與ヘ、千兩ヲバ帝ニ獻テ、當山ニ小堂ヲ建立シテ、供米所ヲ寄進セラレ、重盛ガ菩提ヲ弔テ給ルベシト可申トテ、檜木材木一艘ニ積渡ベキ由ヲ下知シ給ケレバ、妙典承テ材木砂金取具シテ、事故ナク渡唐シテ、二百兩ヲ僧衆ニ施テ、千兩ヲ帝ニ獻ジテ、事ノ子細ヲ奏ケレバ、御門其深キ志ヲ隨喜シテ、一國ノ送物猶以テ默止ガタシ、況千金ノ重寶ヲヤトテ、御檜木ノ材木ヲ以テ、寶形作ノ御堂ヲ立テ、五百町ノ供米田ヲ被育王山ヘゾ寄ラレケル、

（慶長日件録）慶長八年二月十二日己亥、次官勝右大史孝亮朝臣官符持参、入﹅蔵、大澤侍従基宿所□□取之、昼□□箔之間、前□之西ノ縁ノ方ニ、砂金箔相納之、長井右近砂金ヲ取ター入置直、大澤侍従取、高□□給之、次大外記師生、右大臣宣旨持参、入﹅蔵、其後伯耆軍宣旨、

（東遊雑記　三）蝦夷の地には砂金のある所数十里につゞき、黄金の出る山も多しと記しある書もあり、是甚しき虚説也、蝦夷の地へは松前の商人を初、諸州の商舶至らざる所なし、砂金あるを絵図べきや、蝦夷人も拾ひて日本の産物に交易せん、是其虚説を知るべき也、林子平翁もなき事のみ板本とし、世に弘むる事心有りての事ならん、賢者の信ずべきにあらざれど、一犬の虚より萬なる人は實とおもひ、砂金を拾ひ得んとはるぐ蝦夷に至りし人もありと、松前にて風聞有し也、是等誠ならば林子平翁罪人といふべきなり、

〇按ズルニ、砂金ノ事ハ、鉱業部金鉱篇ニ在リ、

（寳貨事略）□用金箔［illegible］

（和漢三才図会　五十九）金箔［illegible］

按以金鎚打薄之、挟紙敲、故曰金箔、有数種、今用金箔二品、入箔宜用金、凡唐箔方寸許、倭箔方二寸許、其厚也六倍於唐箔、色劣於唐三分之一許、故倭方寸箔五百枚、唐箔五十枚可約量矣、箔極薄時［illegible］事、金箔用調度器有数品、［illegible］上名大焼箔、［illegible］中焼箔、［illegible］工用之、凡十分一、［illegible］之中加銀、江戸色、［illegible］青箔［illegible］

薄箔　貴金者也、箔一枚用金七釐、［illegible］貴之焼金色、箔重陽少［illegible］青色、其法深秘無、［illegible］寛永年中京師人習得於大明人、以来多作之、其畫器物等用之、凡打箔於紙、其素紙數引、油煮、而可打、吾朋箔清、

（宇治拾遺物語　二）今はむかし七條に箔うちあり、みたけまうでしけり、まゐりてかなくづれをは

金鑄錢

いてみれば、まことの金の様にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて、家にかへりぬ、おろしてみければ、きら〳〵として、まことの金なりければ、ふしぎの事也、此金とれば、神なりちしん雨ふりなどして、えとらざんなるに、これはさる事もなし、この後も、此金をとりて、世中をすぐべしと、うれしくて、はかりにかけてみれば、十八両ぞ有ける、これをはくにうつに七八千枚にうちつ、これをまろげて、みなかはんひともがなと思て、しばらくもちたるほどに、検非違使なる人の、東寺の佛つくらんとて、はくをおほくかはんといふとつぐるものありけり、よろこびて、ふところにさし入て行ぬ、はくやめすといひければ、いくらばかりもちたるぞとひければ、七八千枚ばかり候といひければ、もちてまゐりたるかといへば、候とて、ふところよりかみにつゝみたるをとり出したり、みれば、やれずひろく色いみじかりければ、ひろげてかぞへんとてみれば、ちいさき文字にて、金御嶽云々と、ことごとくかゝれたり、心もえで、このかきつけは何のれうのかきつけぞととへば、はくうち、かきつけも候はず、何のれうの書つけかは候はんといへば、げんにあり、これをみよとて、みするに、薄うちみれば、まことに有あさましき事かなとおもひて、口もえあかず、検非違使、これはたゞごとにあらず、様あるべきとて、友をよびぐして、金をば、かどのおさにもたせて、薄打ぐして、内裏のもとへまゐりぬ、件の事共をかたり奉れば、別當おどろきて、はやく河原に出ゆいて、とへといはれければ、検非違使ども、かはらにゆいて、よせばしらほりたてゝ、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさ〳〵となりてありけるを、かさねて獄に入たりければ、わづかに十日ばかりありて死にけり、薄をば金峯山にかへして、もとの所におきけると、かたりつたへたり、それよりして、人おぢて、いよ〳〵件の金とらんとおもふ人なし、あなおそろし、

〔令義解 職一 員〕典鑄司

五一入〔illegible〕金〔illegible〕、〔illegible〕三作、且工戸戸口未詳事、

〔塵添壒囊抄〕閻浮檀金ナンド云ハ何金ゾ

言ニ敎網トモ言ス、閻浮樹ナヤ言レトニヘモ、只金ノ上品ナルヲヤ閻浮ニ云、金ノ美ナル謂、之鐐云

也、又說文ニハ鐐ヲ白金也ト釋セリ、閻浮檀金モ又金也、然共實ハ明朝并日本ノ金銀ニ非ズ、須彌山ノ

南ノ閻浮樹之實落テ成ル金ト、經ニ云ト云々、凡金ハ三國ニ有共、昔ハ此國ニハ無也、サレバ聖武天

皇東大寺御建立ノ時、大佛ノ爲ノ料ニ金ヲ求メ給フニ無カリシカバ、和州金峯山ハ金ノ山也ト

申セバトテ、良辨僧正ニ仰テ、藏王權現ニ申請ナセ給ヒケルニ、夢中示シテ曰、我山ノ金ハ慈尊出

現世ノ時、大地ニ布ン爲ナレバ、取事不叶、近江國志賀郡水海岸ノ南一山アリ、大聖垂迹ノ處也、彼

ニ行テ祈可申ト、仍僧正彼山ヲ尋給フ處、老翁有テ釣ヲ垂ケルガ、良辨ニ語テ曰、此山之上、一之靈

石アリ、八葉之蓮花ノ如シ、常ニ觀音ヲ安置、是觀音利生地也、我ハ赤當山ノ地主比良ノ明神

也トテ失ニ隱給ヌ、則此由ヲ奏聞セラレケレバ、御門御本尊ヲ造シ賜テ、彼石山ニ籠テ草庵ヲ構

テ祈請シ給ヒケルニ、則天平廿一年二月、陸奧ヨリ砂金ヲ掘出テ、始官庫ニ納メ奉ル、是ニ依テ天

平ニ感寶ノ二字ヲ加ヘテ、天平廿一年ヲ天平感寶トゾ申ケル、其後ノ年孝謙天皇位ニ卽テ改元ア

リケルヲモ天平勝寶ト申ス、是金ヲ勝タル寶トシ給故也、サレバ大伴家持中納言ニ詔書有テ歌

ヲ召シヽカバ、

皇ノ御代サカエント東ナル陸奧山ニ金サキ花開ト云々、讀テ此歌ヲ萬葉集ニ入ラレタリ、是藏

王權現ノ告ニ依テ、我朝ノ金ハ多成ル物也、然ニ彼金峯山ノ靈山ナル由說多ク侍リ、

〔倭名類聚抄十一〕金類 爾雅云、白金謂之銀、〔音〕其美者謂之鐐、〔力彫反、和名之路加禰〕

〔箋注倭名類聚抄〕說文、銀白金也、鐐白金也、昌平本下總本有和名二字、

〔本草綱目釋義〕銀〔シロガネ〕

銀貢獻

五色ノ中ニテ銀ハ白ニ配ス、故ニシロガネト云、又白金トモ云ナリ、釋名ニイブ、銀ハ日本ニテハ四十代天武天皇白鳳三年、自對馬國初出銀、以所貢銀悉奉神祇トアリ、此ヨリ以前カラアリタルコト、見ヘテ、二十四代顯宗天皇ノ時ニ銀錢ノコト出タリ、其後ハ諸國ヨリ出ヅ、攝州、但馬、長門、石見、其外ニモイブ、赤ガチノ中ヨリモ取ルナリ、但馬ヨリ赤ガチノ中ヨリ取タル銀ヲ出ス、石見ニ產スルハ生銀ナリ、銀ヲ堀ハ金ヲホルト同ジ、銀ノ出ル處ニスジアリ、ツルトモ云、又シロガチノスジトモ云ナリ、唐デハツハフ銀苗ト云、天工開物龍口トモ云、廣東新語

〔重修本草綱目啓蒙八金石〕銀　シロガチ○中略

附錄黃銀　瑞物トモ云ヒ、又瑞物ニ非ズトモ云、通雅ニ、按、高似孫引、丹砂伏火化爲黃金、日華子載、雄黃銀、雌黃銀、丹砂雄黃殺精魅、太宗賜如晦曰、鬼畏者若非丹砂銀、其雌雄黃銀乎、此レヲ以テ見レバ、辰砂ヲ以テ作ル黃銀カ、此黃銀、雄黃銀カ、分明ナラズト見タリ、辰砂ヲ燒テ黃銀ニスルコトハ、丹砂ノ發明ニ出ヅ、又自然ノ黃銀ノ說、庚辭便覽、華夷珍玩考ニ見ヘタリ、時珍ノ說ニ、世人以鍮石爲黃金、非也、鍮石銅爐炭成黃銅也、此鍮石ハ和名ノシンチウナリ、唐山ノ眞鍮トハ別ナリ、コ　ニ和名ノシンチウヲ黃銀トスルハ誤ナルコトヲ云フ、シンチウヲチウシヤクト云ハ、コノ鍮石ノ音ナリ、色黃ナル故ニ、黃銅ト云、又假鍮トモ云フ、古今秘苑ニ出ヅ、造法ハ赤銅ノ下ニ見タリ、

〔日本書紀持統三十五年七月庚午、是日、伊豫國司田中朝臣法麻呂等獻、宇和郡御馬山白。銀。三斤八兩、鉑アラガチ○籠原作錢、據書紀通證、類聚國史改一籠、

〔日本書紀天武二十九三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦同賜小錦以上大夫等、

〔續日本紀文武三大寶三年五月己亥、令紀伊國奈我名草二郡停布調、獻絲、但阿提、飯高、牟漏三郡獻銀也、

銀名

〔多識編 二〕銀志呂加禰、異名白金、白金

銀鑛今云志呂加禰乃末布、又云志呂加禰乃阿良加禰、　老翁鬚今案志呂加禰乃那注、　生銀、黑末

加禰又云阿良加禰又云於乃豆加良加禰、　銀膏　銀綠利加禰、　銀芽　銀薄　銀液　黄銀、岐伊

呂乃志呂加禰、　銀屑　鳥銀今案伊志呂加禰

〔大和本草 金玉土石〕銀

白金ト云、鑛ヨリ出ルアリ、鉛鑛レタ銀トナル、又鉛ヨリ不出金穴ノ中、土石ノ中ニモ交リタ、或銀

細粒鍛状、ナ人謂之老翁鬚ト中華ノ書ニイヘリ、國俗ニ是ヲ銀ノフルト云、爾雅云、銀美者謂之鐐、

或作鐐、時珍云、其美者曰鐐、今謂銀之美者曰南鐐、日本紀、天武帝三年、對馬國銀始出、

銀屑

〔本草和名 四玉石〕銀屑　一名白銀、黄銀、本草、銀屑者月之精也、　和名之呂加禰

出對馬國

〔倭名類聚抄 十一金銀〕銀屑　陶隱居曰、銀屑、一名銀、和名乃

〔箋注倭名類聚抄 金銀〕原書本草玉石部中品銀屑條、陶注、不載銀屑之名、本草正文及蘇敬注、本草

和名皆無是名、注本草和名銀屑條、一名白銀、宋注、陶景注云、銀名白銀、又黄銀、宋注、蘇敬注云、

又有黄銀載符、本草和名所引之所見本院正文黄字注銀字誤為正文、遂以銀屑為銀屑一名也、

昌平本有和名二字、補仁曰、之呂加禰、按陶注云、為屑當以水銀研令消也、蘇注云、方家用銀屑當

取見成銀箔、以水銀消之為泥、合消石及鹽研為粉、燒出水銀、淘去鹽石、為粉極細、用之乃佳、不得已

銷取屑、實仗二說、銀屑必經研磨者、不與金屑同、則訓銀乃須利久豆為穩、伊勢本是條附于上

條、

砂銀

〔武德編年集成 五十〕慶長九年八月十日、大久保石見守長安伏見ニ至タ、其司ル所ノ佐渡山岳、益砂

銀ヲ出スコト夥シク、背言上ス、五年以前庚子歳、上杉景勝佐州ヲ領セシ時ハ、僅ニ砂銀出タルガ、

辛丑ニ幹君ノ公領トナリ、石見守検撿シタ、壬寅一ケ年ニ出ル所萬貫目也、且石州銀山モ庚子迄、毛利輝元領分也其時ハ銀僅ニ出ケルダ、辛丑以來公領ト成ル、長安撿斷シテ、壬寅年中、砂銀出ルコト四千貫目ニ及ベリ、遂ニ天既ニ幹君ノ德ニ感ズルユヘ也、

〔甕尻三十二〕一此春〇三月十九日ニ府下富士塚町淺岡氏の濱井を堀修めしに、取面ひかりきらめき、紫色彩をなすと、いよかしく堀程に、物ありてあたるを出せば、銅のつるべなりし、濱底をうがつ程に、砂銀〇夥しく泥水に交り、日々に出侍る、蝦夷より出る砂金と一般の物也、水銀伏道ありて流れすに皆ことあるにや、

〔書言字考節用集財七〕爾金、鐐、鏐〇並見本草、並倭寶、

〔和漢三才圖會五十九金〕鉛〇中略

銀鉛　白色以塗於金可飾諸器、經數十年變黒、

〔倭名類聚抄十一金〕銅　說文云、銅、音同、和名阿加々禰、赤金也、

〔箋注倭名類聚抄三金〕所引金部文、時珍曰、銅與金同、故字從金同、

〔本草綱目譯義八金〕赤銅アカヾネ

五金ノ中五色ニ配等シテ赤キ故ニ、赤金ト云、所名銅末、銅花銅粉銅砂トアルハ、アカ金ノヤスリ粉ナリ、赤金ハ日本ニテハ文武天皇二年、周防國、因幡國ヨリ銅鑛ヲ獻ズルコトアリ、其後元明天皇和銅二年ニ武藏ノ國ヨリ獻ズ、日本赤金ノ初ナリ、其後ハ所々ヨリ皆出ヅ、近國ニテハ攝州ヨリ出ヅ、遠國ニテハ、南部、仙臺、羽州ノ最上、外諸國ヨリ出ヅ、アラ金ヲ取テフキワケルナリ、アラ金ヨリ赤金自然ニフキ出タルモアリ、集解ニモ不經陶冶而生者也トアリ、〇中略

自然銅

イク通リモ品類アリ、集解ニタワシ、唐ヨリ渡ルニ二有、ソノ形チ四角ニシテ、雙六ノサイノ如ク

銀鉛

銅名稱

レタ、四方ニハチノノスロアリ、大ナルハ圍五分アルモアリ、小ナルモアリ、カヂノ如ク重レタ金色ニ光ルモアリ、銅ノサビタルヤウナモアリ、和産ハ信州ニアリ、ブドノ石ト云、又武石トモ云フ、武石村ト云アリ、武石峠ニアル故ニ此名アリ、又キリノ石トモ云、皆信州ノ方言ナリ、鐵ニ因タ形小ナルモノ出ルモアリ、信州諏訪郡ヨリ出ルモノハ形大ナリ、飛騨ニテハナイサキト云、銀山ヲ掘ルニ隨テホッタ此物出ルトキハ專金ノアル金出ルト云タロロロブナリ、故ニ此名アリ、備前ノヤク島ノモノハ形大ニシテ薄ナリ、上品藝州ヨリ出ルハ小ナリ、方言ニマス石ト云、藝ニ國クワイロロクト云フ、諏訪ニテハ山ノカミノゼニト云フ、銅ノサビ色ナリ、四角ノモノハ方圓標ノモノナリ、此ニマギラワシキモノアリ、同ジ形ニシテ金色又ハ鐵ノサビタル色ニシタ圓ロヤウナリ、此則ハ火ニ入タナンボレタモ、モユルモノアリ、其ノ自然銅ナリ、火ニ入タ青キ烟出タ、試實ノハタイアリタ、鐵ニハ無ニナルアリ。

〔重修本草綱目啓蒙　金石部〕自然銅　アカマキ　一名石髓鉛土〔本草〕　黄鐵〔名物法言〕　丹陽〔石鑑〕　瓊英精〔庚辛玉冊〕　和氣子〔輟耕錄〕　偃公〔同上〕　舟子〔同上〕　鄧陽砂〔本草綱目〕　見香尾〔同上〕　英青〔中山經註〕

自然銅　一名金山力士〔輟耕錄〕　金力士〔庚辛玉冊〕　嵌佐黑〔本草綱目〕

舶來二種アリ、一種ハ形方ニシタ、雙陸ノ骰子ノ如シ、大サ三分許、或ハ五七分許、大小齊シカラズ、色ハ赤黑タレタ光リ少シ、又レンヂクノ如キ色ニシタ、光リ有モアリ、皆質堅ク重シ、和産ハ信州武石村ノ武石峠ニアリ、方言ブドノイシ、又ブセキトモ云フ、又奧州羽州ニモアリ、奧州ノ銅山ニテハナイサキト云フ、又富士山ニテハカドイシト云フ、以上皆舶來ト同クシテ、大サ四五分、此等皆方解石様ノ自然銅ナリ、又藝州ノモノハ形小ニシテ一分許、方言マスイシ、又アナイジロロクト呼ブ所モアリ、又防州山口ノ産ハ、大サ二分許、方言ヤマノカミノゼニ、又備後山縣郡ノ産ハ、大サ一分半許、又小ナルモノ多シ、方言カドイシ、又一種ハ舶來ニ形チ圓ニシテ蛇含ノ實ノ如キア

リ、大ナルハ一寸許、小ナルモノハ五分許、大小齊シカラズ、質堅ク重シ、赤黑色、周圍ニ一分許ノイボ多シ、此レヲ破レバ內金色ニシテ、束針紋アリ、此レ禹餘糧樣ノ自然銅ナリ、然レドモ唐山ヨリハ皆蛇含石ト名ク來ル、破テ內ノ色ヲ見テ別ツベシ、內ノ色白クシテ、錫ノ色ノ如キモノハ、蛇含石ナリ、コノ自然銅、和產モアリ、遠州ニナカヂイシト云フ、集解頌ノ說ニ、品類ヲ多クアグ、其信州火山軍銅坑中云々ト云フハ、舶來無シ、和產アリ、銅絲ハハリガネ也、羽州秋田阿仁銅山ニ、細キハリガネヲ束ネタル如クシテ綠色ナルモノアリ、方言ナワデ、是亂銅絲樣ノ自然銅ナリ、又火山軍出者顆塊云々、謂之鈋石、鈋石ニ品類多シ、皆自然銅ニ混ジ易スキモノナリ、下ニ詳ニス、一體大如麻鞋ト云ハ、細カナル自然銅ナリ、播州ノマスイシノ類ヲ指ス、纍々相綴至、如斗大云々、此レハ四角ニシテ骰子ノ形ノ如キモノ多ク聚リ、大塊トナルヲ云フ、金色ナルト、同色ニシテ青光アルトアリテ、玩物ニシテ見事ナルモノナリ、此レヲ生薑樣ノ自然銅ト云フ、一體如薑鐵屎之類ト云フハ、枝多クアリテ、薑樣ノ形ノ如キモノヲ云フ、卽チ上文ト同ジクシテ、唯大小ト、光リノ有無ヲ以テ別チタルナリ、今市人多以鈋石爲自然銅、燒之成青焰、如硫黃者是也ト云ハ、鈋石ノコトナリ、和產アリテ、舶來ナシ、形チ自然銅ト同クシテ、方ナルモ圓ナルモ細ナルモアリ、自然銅ト鈋石トノ別チハ、燒テ試ムベシ、自然銅ハ火ニテ燒クニ飛バズ、燃ズシテ火トナリ、此レヲ冷セバ、モトノ形トナル、鈋石ハ火上ニ置ケバ、青キ火モエテ、硫黃ノ臭アリテ、灰トナリテ、モトノ形チノコラズ、一種有殼如禹餘糧擊破其中光明如鑑、色黃類鍮石也ト云フハ、禹餘糧樣ノ鈋石ナリ、圓ニシテ自然銅ノ形ト同ジ、紀州熊野ニアリ、方言ギンカド、濃州ニテキンブクロト云フ、又豆州ニモアリ、一種青黃而有墻壁、或文如束針ト云フハ、方ニシテヤスリメノ有ルヲ云フ、此レ方解石樣ノ鈋石ナリ、此レヲサイロツボウト云フ、一種碎理如團云々ト云フハ、形チ細小ニシテ、方ナルモノ、多ク塊ヲナスモノヲ云フ、又粒々離レタルモアリ、金色、或鐵色、或青黃ニシテ、赤ミアルモ有リ、皆火ニイル

レバ青キ大トナリテモ、江州勢多ノ大瀬川ニ形小ニシテ緑色ナルモノ鵜ニ有リ、皆石中ニ胎ニ、又丹波ノ産ハ一二分許アリ、又讃州ヨリモ出ヅ、豆州ノ鯨ニタロヤカト云フ、是皆理鑛石ナリ、此外自然銅ニ石ノ品類甚多シ、雄ニアグルモノハ大略也、又眉ノ本條ニ金牙石アリ、通名方金牙、此レモ骰子ノ如ク方皆ニシテ、自然銅ハ鍍ジ易シ、火ニテ焼テ焼ビ赤ルヲ以テ辨別スベシ、又讃州ヨリ出ル黄鐵ノママメナル四角ナルアリ、黄色モ金色モアリ、細ナルハ粟ノ如ク、大ナルハ骰子ノ如シ、此金牙石、自然銅、礦石ノ三物也、此ノ中ニ四角ニ限ラズ、ヤリコノ形ヲナシタルモアリ、故ニ誤リテヤリコズナトモ云ヒ、モリコイレトモ云ノ、

鑛所見審備部馬物也、和名カニリダケ、大蛇石大ヒナル礦石ナリ、

〔續日本紀 一文武〕二年三月乙巳、因幡國獻銅鑛、　九月壬午、周芳國獻銅鑛、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞宣、高天原由天降坐之天皇御世乎始而、中今爾至麻弖爾、天皇御世御世天豆日嗣高御座爾坐而、治賜慈賜來食國天下之業止奈母、隨神所念行佐久止詔命乎、衆聞宣、如是治賜慈賜來留天豆日嗣之業、今皇朕御世爾當而坐者、天地之心乎勞彌重彌辱彌恐彌坐爾、聞看食國中乃東方武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、此物者天坐神地坐祇乃相于豆奈比奉福波倍奉事爾依而、顯久出多留寶爾在羅之止奈母、神隨所念行須、是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波久止詔命乎、衆聞宣、故改慶雲五年而和銅元年爲而、御世年號止定賜、是以天下爾慶命詔久、冠位上可賜人々治賜、大赦天下、自和銅元年正月十一日昧爽以前大辟罪已下、罪无輕重、已發覺未發覺、繫囚見徒、咸赦除之、其犯八虐、故殺人、謀殺人已殺、賊盜常赦所不免者、不在赦限、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、高年百姓、百歲以上賜籾三斛、九十以上二斛、八十以上一斛、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、優復三年、鰥寡惸獨、不能自存者、賜籾一斛、賜百官人等祿各有差、諸國之郡司加

位一階、其正六位上以上不在進限、免武藏國今年庸、當郡調、詔、天皇命ヲ衆聞宜、

(本草綱目譯義入金)銅礦石

赤金ノアカガネナリ、此ヲハク石ト云、ハクトモ云ナリ、銅山ヲ深ク堀バ此石アリ、石ニ金箔ヲヌリタル如ク光リアルアリ、一面ニ光ラズシテ赤金色星アルモアリ、黄色ニ光モノアリ、青キ光ノイブルモアリ、是ヲトカクバクト云、紫ニ光リアルヲペンニハクト云、此等ノ箔石ハ上品ニシテ、ワカメ銅ヲ取タルハ銀此中ヨリ多ク出ルナリ、黄色ノモノハ銀ノ出ルコト少シト云フ、

(重修本草綱目啓蒙四金)赤銅〇中略

銅ニ品類アリ、アカヾネノミ、カタマリ生ズルモアリ、又アラガネヲ鍛煉シテ出スモアリ、今通用ノモノ皆コレナリ、又金ト混ジタルモアリ、銀ト混ジタルモアリ、天工開物ニ、凡銅質有數種、有全體皆銅不夾鉛銀者、洪爐單煉而成、有與鉛同體者、其煎煉爐法、傍通高低二孔、鉛質先化、從上孔流出、銅質後化、從下孔流出、東夷銅又有托體銀礦內者、入爐煉時、銀結于面、銅沈于下、商舶漂入中國、名曰日本銅、其形為方長板條、漳郡人得之、有以煉再煉取出零銀、然後寫成薄餅、如川銅一樣貨賣者、本邦ニテハ、文武天皇二年、因幡、周防ヨリ銅鑛ヲ貢ス、ソノ後元明天皇和銅元年、武藏國ヨリ初テ和銅ヲ奉ル、故ニ慶雲五年ヲ改テ和銅元年トス、今世銅ノ出處、攝州多田、奥州南部、仙臺、羽州秋田、最上、越前、肥前、豫州、日州、備中、濃州、其外諸州ヨリ出、大抵四十ケ國ホドナリ、越前ヲ上品トス、〇中略

銅鑛石　アカヾネノアラガネ　ハクイシ

石ニ金星アツテ、紫色ニ光リアルヲ、ペニハクト云、青キ光リアルヲ、トカケバクト云、皆上品ナリ、黄色ニシテ光リアルヲ黄ハクト云ヒ、又ナタネバタトモ云フ、コレ下品ナリ、色ノアサキヲサウデンハクト云、上品ノ銅礦ヲ鎔化シタトリシ銅ヨリハ銀多ク出ヅ、下品ノ銅鑛ヨリトリタル銅ニハ銀少シ、銅ノ長サ一尺半許、幅五六寸ニヒラタクシタルヲ、平銅ト云、天工開物ニ謂ユル方長

銅合金

鑞銅ナリ、

(倭名類聚抄十一)白鑞　唐韻云、鑞(盧盍反)錫鑞也、

(壬生家文書)(一)左辨官下　伊勢國

應早進上熟銅陸佰斤金青佰兩緑青佰兩事

右左大臣宣、奉勅、件熟銅等、爲充伊勢豐受太神宮二十年一度遷宮神寶用途料、宜仰彼所早令進上、

者所宜承知依宣行之、用途有限、不得延怠、

寛永四年四月　日　　右大史高橋　花押

權右中辨平朝臣　花押

(鑄銅圖說)鎔合銅鉛(　)

銅夫錫如白目、或加鉛、鎔之爐上、鼓鞴鎔化、金土爲黄、紅爲黒、用鐵器、貼著取之、形如碑面、是謂合銅、大抵

銅居十之八、鉛居十之二、錫鉛隨多寡耳、錫多則脆、之爲則鎔之、

分銅鉛(　)

鑄合銅鐵之前、當質(　)加鐵數々鎔之、用曲鐵杖攪之、如泥不合、鎔化成汁、其鉛則

化成汁、沈下、澆出、則鉛夾雜而出、如其有白目、者亦攪、使工人挾鐵杖分攪、抑止、令不與鉛混、白目常

在鉛銅之間、鉛氣(白目)所乜、取之、白目(白目)、鉛則再以被置水取、銅(　)、其鉛則

下在爐底、鉛氣一鎔、此時鐵器鉛中、尚未全銷、銅其并鉛分三等、亦可謂巧矣、

(本草綱目譯義八)赤銅(　)中

白銅ハ白鑞ト白キモノニアラズ、青銅モ白鑞ノモノニアラズ、黄銅ハ和名シンチウナリ、是赤金

ニマゼモノアレタルナリ、爐甘石ヲ雜ヘタル法アリ、コレハ鍍ヲ出來ニクシ、夫故トタンヲ雜ル

ナリ、天工ニクワシ、トタンハ倭名倭鉛ト云モノナリ、物理小識ニ、赤銅以爐甘、或倭鉛參和爲黄銅、

注ニ銅十斤、爐甘石六斤、用和鉛四、則紅銅六トアリ、日本ニテスルハ少々チガウナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 四金〕赤銅　アカヾチ○中略

銅ヲ以テ造作者多シ、時珍ノ說ニ、白銅出雲南、青銅出南番、ト、此レハ自然ノモノナリ、舶來ナシ、人以爐甘石煉爲黃、煉黃銅ハ假鍮ニシテ、和名ノシンチウナリ、其法、物理小識曰、赤銅以爐甘或倭鉛(トタン)參和爲黃銅、(銅十斤、爐甘石六斤、用和鉛四、則紅銅六、)和ノシンチウハ銅七百錢、倭鉛二百錢、鉛三百錢ナリ、カクノ如ク鉛ヲ入レテ倭鉛ヲ少クスルユヘ、唐シンチウヨリ色淺シ、砒石煉爲白銅、ト云ハ、造作シロミ銅ヲ云フ、和製無シ、物理小識ニハ、以砒霜等藥制煉爲白銅、ト云フ、礬、錫煉爲響銅、ト云ハサハリ也、物理小識、廣錫參和爲響銅、(銅八、錫二、)ト云、和ノサハリハ銅一斤、鉛五分ノ一、錫十分之一ヲ以テ製ス、銅ト錫ト等分ニスレバ鏡トナリテ、サハリニナラズ、別ニ靑。銅。ト云フモノアリ、物理小識ニ、礬硝等藥制煉爲青銅、此レカラカネナリ、本邦ニテハ銅一斤ニ鉛五分之一ヲ入レテ製スト云フ、銅。青。ハナラロクセウ、石。綠。ハイハロクセウ、即綠。青。ナリ、石。青。ハイハコンゼウ、即扁青ナリ、白。青。ハグンゼウ、コンゼウノ色淺キモノナリ、鐵。銅。ハシヤクドウノ如キモノナリ、シ。ヤ。ク。ド。ウ。ハ紫金也、格古要論ニ出ヅ、又黃金モ紫金ト云同名ナリ、

增、ク。ロ。メ。一名ニ。グ。ロ。メ。ノ法ハ、銅百錢ニ鉛三十錢ヲ鎔化ス、シ。ヤ。ク。ド。ウ。ハクロメ百錢、金四錢ヲ加テ煉化シ、膽十六錢、綠青四錢、水一斤ヲ合煎シタル汁ニ浸シ置ケバ、紫黑色ト成ル、又鑄物ハ銅ヲ以テ其汁ニ漬シ、硫黃ニテ熏ズルナリ、

〔倭名類聚抄 十一五〕鍮。石。　考聲切韻云、鍮(他侯反、字亦作鋀、鍮石二音、俗云中尺、)鍮石似金、西域以金鐵雜藥合爲之、

〔箋注倭名類聚抄 三五石〕慧琳音義引同、廣本石上有鍮字、按玉篇、鍮、鍮石似金也、有鍮字似是、下總本、金上有者字、格古要論、鍮石自然銅之精也、今爐甘石煉成者假鍮也、崔昉曰、銅一斤、爐甘石一斤、煉之成鍮石、眞鍮生波斯國者、如黃金、燒之赤色不黑、今俗謂假鍮爲眞。鍮。、

〔大和本草 金玉土石〕鍮石
字彙曰、銅似金、司馬溫公謂五代日本刀歌曰、黄白閒雜鍮與銅、註曰、眞人云、眞鍮似金、眞銅似銀、時珍曰、俗人以鍮石爲黄銅非也、鍮石即眞鍮、黄銅也、

〔和漢三才圖會 五十九 金類〕鍮石 眞鍮 和名抄云、中尺、
字彙云、鍮石似金、今考韻會云、鍮石似金、西域以銅鐵雜藥合爲之、
按鍮石以銅爲之、古者不知鑄法、近年始爲之、未精、故自中華來者爲眞鍮、今多造之、鑄作、鍮眞鍮之法、銅一斤亞鉛三分之一、鉛六分之一、或錫鐵或者爲上、俗名唐眞鍮、亞鉛
鍮銅性柔五分一者爲次、凡眞鍮器甚久則色黯黝之、用鹽灰洗新、

〔本草綱目譯説 八〕鍮○中略
俗人以鍮石爲黄銅、トアル鍮石ハ、和名レンテクナリ、又トウロンテウト云、一和名ノレンテク黄。銅。也、赤。銅。ノ下ニレンテクノ法アリ、赤銅ハトタンヲ雜タ爲リ、或ハ爐甘石ヲマゼタモナスナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 八 金石〕金○中略
鍮石金ハ眞鍮ナリ、和俗レンテクト呼ブモノナリ、眞黄青金。ハアカミダチタル金ナリ、別ニ青金ト云ハ鉛ナリ、紫色赤金。ハ赤山ヨリ出ル金ナリ、アカガチニアクズ、

〔和漢三才圖會 五十九 金類〕青金
按青金即自中華來、其色似鐵、而比鐵者尚比銅色稍黒、未知其名、俗呼爲青金乎、今本邦專製之、
製法銅一斤、鉛五分之一、或錫鎔之、
黄金。　用銅鉛青金分量加用亞鉛六分之一、則色帶黄亞眞鍮、
白銅。　用青金分量加用錫十分之一、是亦作鉢具、或作鋤刀、腰於眞鍮刀、凡飾鐵者用之良、

〔和漢三才圖會 五十九 金類〕赤銅○中略

綠靑

銅落、世謂之眞鍮落者非也、眞鍮雖作落、其銅落早變色也、忌鹽及醋、鹿角菜、止用飯糊、

〔本草和名 玉石三〕綠靑　一名碧靑陶景注云、畫工用之、一名石綠蘇敬注云、畫工用之、　出長門國

〔和漢三才圖會 五十九 金〕銅靑　一名銅綠、俗云銅乃綠靑、

本綱、銅靑則銅器生綠色者也、近時人以醋製銅生綠、取收晒乾貨之、抱朴子云、銅靑塗木、入水不腐、

氣味酸平微毒　能入肝膽、明目殺疳、又頭上生虱者、用銅靑明礬末摻之、又治臁瘡頑癬、用銅綠七分黃蠟一兩化熬以厚紙拖過表裏、別以紙隔貼之、出水妙、亦治楊梅瘡、

〔本草綱目譯說 十 石〕綠靑

ロクセウト通名ナリ、ロクセウト云ニ二ツアリ、ナ°ラ°ロ°ク°セ°ウ°ト云ハ、銅ノカビヲ取リタルナリ、ナラロクセウニ分ツ爲ニ、本條ヲイ°ワ°ロ°ク°セ°ウ°ト云ナリ、コレハ銅山ノ產ニテ、攝州多田、羽州阿仁、石見、長門、上野、下野、奧州會津、其外銅山ニハアリ、銅ノ精氣ヨリ生ズルナリ、コレニモ色々アリ、初ヨリ大ニ堅マリ、表ニ疵アリテ、破レバノギスヂアリテ、石羔ノワリタルヲ見ル如クシテ、色モエギニレタ黑ミアリ、コレ上品ナリ、コレヲ芥子園畫傳ニ蝦蟆背ト云ナリ、雲林石譜ニ如刷糸ト云コレナリ、ノギスヂノアルコトヲ云ナリ、コノ上品ナルハ希ナリ、宗奭ノ說ニ、其色深綠色者佳ト云如ク、初ハ黑ミアルヲ上品トス、初ヨリ綠色ナルハ中品ナリ、畫ノ具ニ用レバ粉ニスルナリ、コレヲ粉ニスルニ、初メ粗末ニシテ取リタル粉ヲ一番ロクセウト云、コレヲ漢名頭綠ト云、其次ノ粉ヲ二番ロクセウト云、漢名二綠ト云、其次ヲ三番ロクセウト云、漢名三綠ト云、芥子園畫傳ニ出、コレハ細カニスル程色淺クナルモノナリ、故ニ初メ黑ミアルハ、三番迄モトリテモ色綠ナリ、故ニ上品ナリ、初ヨリ綠色ナルハ三番粉ニモナレバ、白ケテ綠色ナラズ、故ニ下品ナリ、コノ白ケタルヲピ°ヤ°ク°ロ°ク°ト云ナリ、今紅夷ヨリ孔雀石和名ナリト云モノ渡ル、コレ蝦蟆背ノ中ノ下品ニシテ、初ヨリ綠色ナルナリ、下品ナレドモ舶來ニテアレバ、世人壓口ナドニシテ重寶スルナリ、又初

ヨリ色濃キアリ、コレハ雲林石譜ニ銅鑛石ト云ナリ、コレヲアラハリ置ノ上ニタ水ヲ付タスレバ、キコマイ色ノ汁出、コレヲ筆ノ先ヘ塗レバ、筆ヨクナルナリ、故ニコノ石ヲ和名ニ筆石ト云フナリ、唐ニモコノコトアリ、雲林石譜ニ、色淺緑不甚堅、名銅鑛石、土人取以潤筆頭、其色可潤筆、云々、筆ノ舌ハ漢名筆ト云ナリ、又ロクセウト云、二種賞ノ石ニ砂ノ如クナリタ吹出タアルアリ、又土ノ如クレタ石ニ付イ生ジタアルモアリ、銅鑛ニ脱緑ト云コレナリ、又コンゼウト、ロクセウト変リタアルアリ、コレハ両方トモニ上品ニタモ下品ニナルナリ、コレハ分別レ難キ故ナリ、又石ノ変リアルハ銅更下品ナリ、又和方書ニ銅緑ニ用タアルハ、青ナラロクセウナリ、漢名ハ銅青ト云ナリ、

(重訂本草綱目啓蒙　八金石)銅青　ナラロクセウ　アヲサビノロクセウ　一名黄銅汁

和州南都ニテ造ル故ナラロクセウト云フ、畫家サイシキニモ用ユ、アカヾネニ緑ヲツク、火ニテアタヽムレバ青キサビヲ生ズルヲ、コソゲ取リ水飛スル物ナリ、和ノ顔料ノ書ニロクセウト云フハ青コノ銅青ナリ、石緑ニアラズ、天工開物ニハ、ジンテウニタトル法ヲ言ヒ、本草彙言ニハ、銅ニタ取ル法ヲ言フ、イヅレニテモトレ易レ、銅緑、石緑ハイワロクセウ、即自然生ノロクセウナリ、銅緑青ノモノ上品ナリ、

(壬生家文書一)左辨官下[illegible]國

應早進上熟銅陸佰斤金青佰斤緑青佰斤事

右左大臣宣、奉勅、件物等、爲充伊勢太神宮二十年一度遷宮神寶用途料、宜仰彼國、早令進上者、國宜承知、依宣行之、用途有限、不得延怠、

康永二年七月　日　　右大史安倍朝臣在判

右中辨藤原朝臣在判

(毛吹草一)大和　竹緑青　　攝津　緑青　　長門　長登緑青

〔佐渡志 物産 五〕緑青　方言イワロクセウ

百枚ト名ヅクル銀坑ニ產ス、相川鳥越ノ坑中ニモ稀ニ出ルナリ、

〔長防産物名寄 土石〕緑青

美禰郡長登村ノ内、瀧ノ下山、　同郡同村ノ内、烏帽子岩山、　同郡同村ノ内、尻ナシ山、

同郡同村ノ内、花ビラ山、　同郡太田村、水瀧山、　同郡同村、濱ノ宮山、

〔大日本府縣志 攝津 物産 下〕黒澤山產 九十九 緑青は自然の石也、其内は空青まとひ附て圖の如し、○圖略

是を小刀にて鑿り出す也、故に緑青は多し、空青は少し、

此圖の如く、岩緑青の中より空青を鑿り出して、後に緑青を粉にして、是を幾度も水飛する也、水飛に上中下の三品の別あり、略す、

製造の緑青と云ものは、銅屑を醋に浸して腐せ造る、又浪花にて製するものは、赤がねの板に醋を塗り、青(サビ)を生ずるを、小刀にて剥下し造る、是銅の精華にして銅青といふもの是也、又南良緑青といふものは、舶来粉にて造る、

空青の僞造は、烏賊甲の中へ靛花(アヰ)を合せ造る、舶来の物には空緑あり、空緑は銅目屑青の滓に出又ピードロの細末の僞造あり、

長州にては似せを造らず、長登村に製法屋四軒有りて、いづれも岩緑青屋といふ、津森姓の者也、漸々四軒ばかりなれば僞造の暇あらず、暇あれば野に出て農業す、扨此眞僞を分つには、火中にて試み知るべし、二青とも元より銅の自然の精苗なれば、是を鎔すときは銅となるなり、又灰毒(ハイドク)も火に入れ試むべし、眞は烟となる、雜物あれば、火をはじく也、烟臭は酸し、

〔紀伊續風土記 物產 一〕緑青(ロクシヤウ)本草綱目方言ヒム、　牟婁郡銅山處々に產す

〔毛吹草 三〕攝津　多田紺青

(日本山海名物圖繪 二)銅青緑青製法

銅山銅山の精氣より出生するもの、慶長年中備州多田の銅山よりほり出す、それよりして諸國に
おほくほり出すもの、其以前は唐よりわたるばかりにて、日本には掘出す事なし、但シ元明天皇和
銅六年、上野國より緑青を獻上し、後朱雀院長久二年に、攝津國より緑青を獻上すること、扶桑略記
に見えたれば、昔より我國にあることを知べし、製法は山より掘出したるをうすにてつきくだき、
水飛するもの、

採銅

(佐渡事略對話)一、雑州にて銀を鍛候跡の島田畠にして、高五百石計の所、其後何を植ても不生、亡
所に成て有之所、下野の金山師通り、土地に鑵の耳をすり申赤銅所有之段を考、土地を穿、銅を取
可申間三ヶ年の内運上千兩可有之、左候得ば跡は物も出來能候事と存候間、被仰上可被下候旨
相申候間、之何れも相談、運上無之とても、以來田畑に成候得ば能候、只今亡所永代如此にては無
詮候間、相申候を幸と、相伺ひ申處に、留に任せ可申旨、被仰渡候、役者に申渡候處に、土地を穿
ち申事七尺、其土をあぐくふるひに掛け、鉢中より赤金を求め申樣にいたし、五百石の土地を不殘
穿申候、三ヶ年目に運上金千兩上之申候、以上五ヶ年程懸り、悉く赤金を掘出し、過分儲申候由、其
後田を植申候に、心能生立申候、土を穿申時分は、度々見物に行たるなり、

鐵名稱

(倭名類聚抄 十一 金器)鐵　説文云、鐵、黑金也、唐韻云、鏶、鐵爲刀甚利、

(箋注倭名類聚抄 金器)昌平本下總本、有和名二字、按仁德紀、鐵訓久呂加禰、枕草子亦有是名、即黑
金之義、神功紀、鐵、孝德紀、齊明紀、鐵、並從字、鐵字、皆訓阿良加禰、蓋鐵之義、又按新修本草、生鐵
生鐵、剛鐵、本草和名、熟生鐵一條、唯有鐵剛鐵二條、云、剛鐵和名介?加禰、鐵和名阿良加禰、陶注
云、生鐵是不被鎔鉄之者、剛鐵是雜鍊生鍒作刀鎌者、蘇注云、單言鐵者鍒鐵也、然則輔仁必不訓
鐵爲阿良加禰、恐源君誤、以鐵爲阿良加禰、今本傳寫、脫鍒鐵和名、及生鐵名、故生鐵和名合

在鐵條也、則知此訓禰利、依輔仁也、然禰利不爲語、當依新撰字鏡及日本紀訓云禰利加禰也、今俗生鐵呼豆久、或呼奈倍賀禰、柔鐵呼介良、或呼奈萬賀禰、鋼鐵呼波賀禰、證類本草舉鐵生鐵鋼鐵三種、圖經云、初鍊去鑛、用以鑄瀉器物者爲生鐵、再三銷拍可以作鍱者爲鍱鐵、亦謂之熟鐵、以生柔相雜、和用以作刀劍鋒刃者爲鋼鐵、時珍曰、鐵截也、剛可截物也、〇中略那波本鐵上有鑌字、與廣韻合、按、本草綱目引寶藏論云、鐵有五種云々、賓鐵出波斯、堅利可切金玉、則知鑌鐵當用賓字、从金俗字、廣本標目鐵下有鑌字、

〔八雲御抄三下物〕金　あら　まかね　鐵事也　くろ

〔和漢三才圖會金五十九〕鐵音帖　烏金　黑金　銕古文　鐡俗字　和名久呂加禰

本綱、鐵於五金屬水、故名黑金、凡上有礬、下有鐵、秦晉淮楚湖南閩廣諸山中皆産鐵、以廣鐵爲良、又西番波斯國賓鐵尤勝、堅利可切金玉、甘肅州錠鐵色黑、性堅、宜作刀劍、當陽刹鐵、色紫面堅利、上饒鐵次之、

鐵辛平有毒　畏慈石、皂莢、猪犬脂、乳香、朴硝、硇砂、鹽鹵、荔枝、古今醫統云、用鐵末和藥、忌食蒜角韮枝、同研藥鹿脯、畏食鐵而蛟龍畏鐵、

〔本草綱目譯義金八〕鐵クロカネ、古歌ニマカネト云、マカネ、　和名抄ニクロカネト云　鐵ハ土中ニ生ズルモノナリ、金銀銅ナドハチガウテ、土中ニ深クアルモノニアラズ、上ニ浮テアルモノナリ、集解ニ、是鐵與金銀同一根源ト云ハ誤リナリ、金山銀山ニハナキモノナリ、

〔令義解九賦役〕凡職事官薨卒賻物謂、京官及國司等、同死物曰賻也、正從一位絁三十疋、布一百二十端、鐵十連、

〔日本書紀天武二十九〕十四年〇刊本作十一年、今據書紀集解改、十一月甲辰、是日筑紫太宰請儲用物、絁一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百常、鐵一万斤、箭竹二千連、送下於筑紫、

〔多識編金一〕鐵、久呂加禰、異名、黑金、鐵文烏金、　鑐鐵、今案、阿和世久呂加禰、　熟鐵、禰里久呂加禰、　鋼鐵、今案、波加禰、　精鐵今案、美多伊加禰、　生鐵、今案、那末加禰、又云、阿良加禰、　團鋼、豆豆美波加禰、

鐵屑今案乃久曾乃[illegible]、鐵精波加禰乃音比須利久豆、鐵砂今案波利加禰乃須利久豆、鐵落久呂加禰今案久呂加禰乃音比久須、鐵精久呂加禰乃加利、鐵華粉久呂加禰乃古介波、鐵鏽久呂加禰乃佐新志類、

〔和漢三才圖會 五十九〕生鐵 [illegible] 按有先合純粹者也、俗作爲生鐵之字、訓豆久又云鍋金、

本綱凡和鐵皆鑄成、用以鑄器物者爲生鐵、

利川武鐵云、生鐵出廣東福建、火鎔則化如銅錫之流走、今人鑄鍋以爲鍋釜之類是也、廣東鐵者精鍋鐵鐵有鍋鐵廣東鐵價貴

土宿本草云、鐵石百五十年而成鐵石、二百年孕而成鐵、又二百年不經采鍊而成銅、銅復化爲白金、白金化爲黃金、是鐵與金銀同一根源也、今取鐵石鑄之內有鐵片可驗矣、

按鐵與金銀銅錫之類非也、蓋金銀銅錫皆附生於岩石鑛中、生於土、本朝鐵山始于備州、而後來[illegible]出金銀銅錫之山亦不出鐵、是其證也、

凡取鐵者、置鐵砂小川鐵山土鐵流砂、土與鐵相間、取砂鐵置爐、以鞴鼓吹化之、浮者砂渣也、俗云加[illegible]可取鐵之、 大鐵所用分量而爐下穿小孔、則鐵液流出於孔、則以鐵器[illegible]而中以土鐵者承之、本草所謂生鐵、○俗云久[illegible]、 俗云鐵、是也、[illegible]化先後之義、用銑字爲鍋釜、故又名之鍋鐵、○性脆而堅、鐵以不克研鍛以不能切也、 七日不止、鐵則鍛成土錬鐵爐于底、一爲大塊、名之介羅、俗用鉧字、取出再三鍛煉、則爲熟鐵、 取其爲鍋不取出、十一日鐵則色青堅、名鋼鐵、再三鍛煉用刀劍之鋒刃、故稱刃金、俗用鋼字、三種本一、或鉎多鍋少、或鍋多鉎少、[illegible]

〔和漢三才圖會 五十九〕熟金 讀曾軟俗止之鐵、又云柔金、訓末加禰、

本綱再三鍛拍可以作鍱者爲熟鐵、

武備日、熟鐵出福建溫州及雲南山西四川皆有之、出山西及四川溫州者甚精、然南人罕用之、不能知

沙鐵

其悉熱鎔多黄滓、入火則化如豆貨、不流走、冶工以竹夾夾出、以木捶捶使成塊、或以竹刀就鎔中畫面開之、今人用以造刀銃器皿之類是也、其名有三、曰方鐵、曰把鐵、曰條鐵、

按、熟鐵出於雲州播州者爲上、備後備中及奥州仙臺藝州廣島者次之、伯州作州石州及日向鐵亦次之、但馬鐵爲最下、皆鎔粕出之、有千割、小千割、山形割、平割、長割、十六割、万割、小割之數品、所謂方鐵把鐵條鐵是乎、

〔本草綱目譯義八金〕鋼鐵

ハガチナリ、鋼鐵ハ前ノ沙鐵ヲ集テ、ルツボニ入テワカス時ハ、イヨ〱熟シテ、ハガチトナルナリ、ヤイタハタ、キ、ヤイタハタ、キスル時ハ堅クナルナリ、集解ニ云、純鋼ト云モノ此ナリ、ヤスキモノハ、皆柔鐵ノ中ニ生鐵ヲサシコンデコシラヘトギスルモノナリ、集解ニ團鋼ト云モノ此ナリ、小刀ニハ表ニ柔鐵ヲツク、ウラニ生鐵ヲ付テウチタルモノ、ニセハガチナリ、唐ノハモノヲ打ツ法ハ、日本ノ法トハチガウナリ、天工開物ニ出タリ、夫故日本ノヨリハキレアヂヲトルナリ、ハガチハ播州ヲ上品トス、雲州伯州作州ヲ次トス、石州ハ其次ナリ、　一名　鉅鐵

〔類聚三代格八〕太政官符

應停止備前國進鍫鐵事

右得大納言正三位紀朝臣古佐美宜偁、奉勅、納貢之本、任於土宜、物非所出、民是爲患、今聞、件國元無鍫鐵、每至貢調、常買比國、自今以後、宜停收鐵、非絹則絲、隨便令輸、

延暦十五年十一月十三日

〔常陸風土記香島郡〕郡東二三里高松濱大海濱邊流著砂貝積成高丘、松林自生、椎柴交雜、既如山野、東西松下出泉、可八九步、淸淳太好、慶雲元年、國司采女朝臣、卜率鍛冶佐備大麻呂等、採若松濱之鐵、以造劔之、自此以南至輕野里若松濱之間、可三十餘里、（中略）其若松浦卽常陸下總二國之堺、安是湖

之所有沙鐵、造劍大利、然爲香島之神山、不得輒入伐松穿鐵也、

〔新編常陸國誌 五十八 土産〕沙鐵

風土記鹿島郡條云、若松〔二三〕字高松濱、中略、

今モ鹿島郡ノ東海濱ニ砂鐵アリ、風土記ノ高松濱ハ今ノ高天原、松下出泉トハ今ノ末無川ナ

リ、阪東モコノ川ノ砂ノコナタクタ砂鐵ヲトリヨルモノアリ、高天原ノ以南ノ海邊凡テ鐵アリト

云ヘドモ常ニ採ルモノナシ、鹿島ノ邊出ス處ノ砂鐵上品ナラズ、多珂郡名古曾關ノ邊ヨリ出

ス處ノモノコレニ勝レリト云、

〔倭名類聚抄 十一〕鐵精 陶隱居曰、鐵精一名鐵漿、加禰乃佐比、鍛竈中紅塵者也、

〔箋注倭名類聚抄 五 金〕按證類本草石部中品注文、陶隱居作鐵落是染皂鐵漿、鐵精出鍛竈中云々、其

文不同、鐵精鐵漿二物、本草和名云、鐵精一名鐵漿、出陶景注、依之源君所引、陶景注原作鐵精、陶注

鐵落陶氏以鐵精鐵漿爲二物者是也、蓋源君所云、蓋從之耳、但陶氏以鐵漿爲鐵落者誤、故蘇敬

曰、大明鐵精鐵液並不入藥、唐本草取鐵汁用之、若以漿爲鐵落、鐵漿生之汁復何別、鐵落是鍛皮墮於鍛

鐵陶隱居可以染皂、云是鐵落誤矣、是以爲鐵漿可染皂者、鐵漿真鐵取漿者、證類本草引陳藏器云、

鐵漿取諸鐵於器中、以水浸之、經久色青沫出、即堪染皂、又引日華子云、鐵漿即是以生鐵漬水、服

餌者日取飲、旋入新水、日久鐵上生黃膏、則力愈勝、令人肌體輕健、唐太妃所服者乃此也、若以染皂

者爲漿、其酸苦臭澀、安可近、況爲服食也、按今染家染皂、即陳氏所謂鐵漿之染皂者、銀漿之鐵漿、

服食之鐵漿、蓋不同也、然服食之鐵漿、亦有證漬二說、皆不本下總本有和名二字、加禰乃佐比依輔

仁新撰字鏡、鐵加禰乃佐比、下總本作下有者字、廣本同、原書作鐵精出鍛竈中、如塵紫色輕者爲佳、

據之只鍛竈上脫出字、又出鍛竈中四字句、如塵紫色輕者爲佳八字句、故君引以如塵二字屬上句、

亦非、按依陶說鐵精所如鍛竈中如塵紫者、故圖經云、可以磨瑩銅器、則加禰乃佐比非是、本草拾

鐵粉　鐵落　鍼砂

道云、鐵鏽、此鐵上衣也、是可レ訓二加祢乃佐比一、

〔和漢三才圖會 五十九金〕鏽 俗云佐比 鐵上赤衣也、刮下和レ油塗二惡瘡疥癬一乃治、又蜘蛛蜈蚣所レ咬、塗レ之可、

〔延喜式 十七内匠〕御鏡一面 方七寸料、〇中略 鐵精二分、〇下略

〔和漢三才圖會 五十九金〕鐵粉　鐵落 鐵液、鐵屑、鐵蛾同、　鍼砂 鋼砂同、一名鐵衣、

鐵粉、鹹平 鋼鐵飛練而成者也、人多取二雜鐵一作レ屑飛レ之、其體重、眞鋼者不レ爾而良、

鐵落、辛平 是鍛家燒レ鐵赤沸砧上鍛レ之、皮甲落者能平レ肝去レ怯、凡醫藥用二鐵鍛及鍼砂一入二丸子一者、一生須

斷二鹽一、蓋鹽性潤、服者再作不レ可レ爲矣、又云、鐵落浸レ醋、書二字於紙背一、後塗レ墨、如二碑字一也、

鍼砂、辛平 針屑乃 音 作二鍼家磨鑢細末一也、須二眞鋼砂一乃堪レ用、人多以二柔鐵砂一雜二和之一、飛爲レ粉、人莫二能辨一也、

染二白鬚髮一藥　鍼砂、一兩炒七次 訶子 白芨 各四錢 百藥煎 六錢 綠礬 二錢 爲レ末、用二熱醋一調、刷二鬚髮一、菜葉包

住、次早酸漿洗去、此不レ損レ鬚、亦不レ作レ紅、又有レ方、

〔倭名類聚抄 十一金〕鐵落　本草云、鐵落、一名鐵液、和名鐵乃波太、一云加奈久曾 蘇敬曰、是鍛家燒レ鐵、赤沸砧上鍛レ之、皮

甲落也、

〔箋注倭名類聚抄 三金器〕所レ引玉石部中品文、昌平本下總本、有二和名二字一、訓作レ云、波太皮也、加奈久曾

鐵糞也、按本草和名云、鐵落、和名久呂加祢乃波太、又云鐵精、和名加奈久曾、一名加祢乃佐比、源君

以二加奈久曾一爲二鐵落一名一、恐誤、今俗呼二鐵落一爲二加奈久曾一、原書也上有二者字一、按蘇敬又曰、鐵皮滋液、黑

於二餘鐵一、是所二以一名二鐵液一也、

〔本草綱目譯義 八金〕鐵落 カナクソ ナベカネノクソ

生鐵ヲヤイタタヽクトキ飛タルタズナリ、時珍ノ說ニ、今煙火家用レ之ト云ハ、煙火ハハナビナリ、

〇下略

〔重修本草綱目啓蒙 四金〕金 〇中略

豐鮮金鑛ハ、タナアツ石州方言アコレ、銀貫ハ銀ニ生ズルテルノコレカク、金汁ハコガネノ黄汁、又人糞汁ヲモ金汁ト云コトアリ、金汁行ト云、聞進金ハカタマリタル金、伴金石ハ即紛子石ナリ、

磁石

〔倭名類聚抄 一石〕慈石 本草云、慈石吸鐵、此間云之□ 慈正俗石作磁、見唐韻、

〔箋注倭名類聚抄 四一石〕原書序例中、有慈石吸針文、按陶注云、今南方亦有、其好者能懸吸針、虚連三四五爲佳、山田本總目正文作磁石、與下金瘡方磁同、本草和名引本草亦作慈石、本草和名同、類聚名義抄同、日本紀和銅六年紀亦作慈石、則知作磁者、後人所改、非唐本草之舊、又非源君之舊、本草綱目云、磁石毛鐵之母也、取鐵如母之招子焉、由此觀本此間云作磁云、按廣韻、磁石可引針也、與云作磁見唐韻合、然說文不載磁字、古只用慈字、管子地數篇上有慈石者下有銅金、呂氏春秋精通篇慈石召鐵、淮南子說山訓、慈石能引鐵、皆不從石、本草亦單作慈石、從石者俗字耳、源君以磁爲正字誤、

〔倭訓栞 前編十一〕じしやく 磁石は慈石の事也、翻譯名義集六に見ゆ、一念受生の寳屬磁毛石の鐵を吸が如しといへり、

〔大和本草 三金玉土石〕磁石 釋義云、嶺南針用磁石磨針則能處常指南、日本ニ異邦ヨリ磁石多ク來ル、好否アリ、好ハアツキ鐵ヤキモノナドヲヘダツトイヘドモ鐵ヲ吸フ、小刀ノ鋒ヲ磁石ニフケタナブレバ、其小刀久シク鐵ヲ吸フ、針ノテキモ同、

〔本草綱目啓蒙 六石〕慈石 通名ナリ、ジシヤクト呼ブ、又ハリスイイシトモ云、慈石ハ色黒クシテ鐵ノ如ク、少シ光リアリ、又中ニ小キ細砂ヲ挾タアルアリ、外ノ方ハ處々ニ小キ穴アリテミツチヤノ如キ眼ナリ、其外ノ小

キ穴ノ内ハ黄赤色ニシテ鐵ノサビノ如シ、慈石ハ皆鐵ヤ針ヲ吸ヨセルモノナリ、其中ニ品等アリ、鐵ヲ吸ヨセル力ツヨクシテ、針ヲ十本モ二十本モ連ネテ吸ヨセ、又ハ鐵ノ千斤(ジャットコ)剪刀(ハサミ)ナドノ如キ類ヲ吸上ゲ、上ヘアゲテモ落ヌヤウナルヲ上品トス、一通リノ品モ小キ針位ノモノハ吸上ゲテ、ブラ〳〵シテ落ヌモノナリ、然ドモ大ナル鐵器ヲ吸ヒ、上ヘ上グレバ落ルナリ、コノ落ルハ皆下品ナリ、上品ノ石ハ小ニシテモ力ツヨキモノナリ、石ノ大ナル時ハ力ツヨクシテ、小ク砕ケバ力弱クナルアリ、コレ下品ナリ、又石ノ中ニ吸處ト吸ヌ處トアリ、コレ石ノ中ノ首尾ナリ、吸處ハ石ノ首ナリ、吸ヌ處ハ石ノ尾ナリ、コノ石ヲ針ニスリ付テ水ニ入ルレバ、自然ト針ノ頭南ニ向ナリ、故ニ一名指南石ト云、今コノ石ヲ以テ方角ヲ見ル器ニ作ル、コノ器ヲ漢名、定時羅ト云、江南通志ニ出、極上品ノ慈石ニテモ燒ケレバ石死シテ益ナキモノナリ、又コノ石ハ至テ烟草ヲ惡ム、烟草ノヤニ、或ハ烟リ石ニ付バ、上品モ下品ニナルナリ、又常ニコノ石ヲ貯置ニハ、鐵砂ヲ入レテ養フナリ、コノ石ノ傍ニ鐵砂ヲ置バ、鐵砂集リ付テ毛ノ生タル如クナルナリ、落シテモ去ヌナリ、又鐵砂ヲ紙或ハ板ノ上ニ置キ、下ニコノ石ヲ付レバ上ノ鐵砂針ノ如ク立テ、下ノ石ヲ動セバ上ノ砂モ付テ動ナリ、續日本紀ニ元明天皇和銅六年、近江國獻慈石云々、今ハ江州ニハ慈石ナシ、今ハ仙臺、南部、備前產ヲ上品トス、甲州ノ產ヲ次トス、濃州ノ產ハ下品ナリ、舶來ニハ至テ上品アリ、一名指南石(綱目名ナリ)引鐵石(同性奇方)吸鐵石(本草通)鑽針石(八閩通志)陵石(通雅)承石(同)磁石(異名)綠伏石(圖經衍義)磁毛石(外丹)

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、〇中略近江慈石、

〔輶軒小錄〕磁石之事

享保丁未の年(〇十二年)十月晦日、西三伯醫人の子德元、磁石を持ち來り示す、近年丹羽正伯を召し出だされ、諸國藥物御吟味に付き、處々巡行食養の處、奧州南部の管內に、閉伊郡大槌と云ふ處あり、

其山より掘出すとなん、四五寸許の一塊石色黑し、一方の小口せん鐵を付くれば、蝟毛の如く聚ひ付き、針或釘を付くれば、五つ程つれ下る、南をさすこと聞し、余一塊求めし由、南の方をたしかにさす、と云へり、鐵錢等の類を近付くれば、飛び付きて自付くとなん、江戶へ持ち歸り候由にて、是を不見聞等一個見せらる、色黑潤なり、琥珀も出づる由、磁石日本に產すること、前代未聞珍しきことなり、

〔春波樓筆記〕磁石の妙なる事いまだ解し得がたき處あり、石を水中に浮べ見るに、南北ありて東西なし、然るに針を以て南と北との氣を絶し、赤水に浮よるに、南は北を轉し北は南を轉す、石と磁極す、此理未解せず、赤針二を以て北の一方に附し、石を離るゝや否や、第二の針合せず、北は南につき南は北につく、是天の雲氣の引く處にして、南北極地球の經軸天に係りて旋る故なり、北かれば赤道以北は〈北[illegible]緯ヲ〉[illegible]を頂とし赤道以南は〈南[illegible]緯ヲ〉[illegible]を頂とす、故に地球の四面に人居立し、地より上を以て天とす、ヱレキテルを以て此の理を知るべし、

〔松屋筆記 百十五〕羅經磁石盤、旱羅盤、水羅盤、

今世ジシヤクと稱ものは磁石盤也、羅盤といふ、鄭曉代類編二十三卷に、旱羅盤、水羅盤見ゆ、水羅盤は鍼に磁石の氣をうつし、中間に木或は藁しべなどを貫き、器に水を盛て、その上に浮て見れば甚易にて、鍼のめぐりも見よき也、旱羅盤は常の磁石盤也、

〔毛吹草 五〕松前　磁石、

〔[illegible]使記 續上〕熊作日、薩州南部蓑ノドト云フ所ノ山中ヨリ磁石ヲ出ス、玄。石。モ礦リタ出ル、分別ハ色ヘタハリ有リ、卽チ官府ニ納ム、

先生性ズルム、南部ヘリヤラズ、備前國津高郡野々口村ノ金剛谷ト云フ所ヨリモ磁石ヲ出ス、大テハ豆位ノドムクヲ吸フコト甚ダ弱シ、和州ニモ所々處ニ出ストイヘドモ、何レモ鐵ヲ吸フ

コトヨハシ、能ク針ナドヲ吸フユヘニ、八閩通志建寧府ノ下ニモ、磁石ノ異名ヲ攝針石ト名ヅク、

〔本草一家言〈四石〉〕磁石

近世採藥使到奥州南部閉伊郡久志村、有山自古相傳云、產磁石、其山童而不生草木、但產種々石藥、理石佳石明礬等、其品不一、最後山名久志、此山專產磁石、予親目擊之、則其色墨赤褐而有星點、能吸鐵、不異漢渡者、其餘膽礬石英水精產此山云、

玄石

〔倭名類聚抄〈一石〉〕玄石　本草云、玄石一名玄水石、今按、慈石、又有玄石之名、

〔箋注倭名類聚抄〈一山石〉〕所引中品文、陶注云、本經慈石、一名玄石、別錄各種、蘇注云、此物鐵液也、但不能拾針、慈石中有細孔、孔中黃赤色、其無孔光澤純黑、玄石也、不能懸針也、李時珍曰、慈石生山之陰有鐵處、玄石生山之陽有銅處、雖形相似、性則不同、故玄石不能吸鐵、小野氏曰、生慈石之山、皆有玄石、李說未必然、按本草又云、慈石、一名玄石、此注所云卽是、

〔本草綱目譯義〈十石〉〕玄石　慈石ノ下品ニシテ針ヲ吸ヌナリ、形色慈石ニ同ジ、慈石鐵ノ生ズル山ニアリ、コノ石モ慈石ノ生ズル處ニアリ、

錫

〔倭名類聚抄〈十一金〉〕錫　唐韻云、錫〈先擊反〉鉛錫、爾雅云、錫謂之鈏〈羊晉反〉兼名苑云、一名白鑞〈盧盍反、和名之路奈萬利、〉

〔箋注倭名類聚抄〈三金〉〕按郭璞注爾雅錫謂之鈏云、白鑞、兼名苑蓋本之、周禮職方氏注、錫鑞也、急就篇注、錫在銀鉛之閒、卽今白鑞也、皆與郭璞同、本草和名、錫銅鏡鼻條云、鉛一名白鑞、已上二名出蘇敬注、一名鈏、出兼名苑、而不載兼名苑錫有白鑞之名、然以源君載白鑞之名見之、蓋兼名苑錫有白鑞之名、輔仁以蘇敬注已云鉛一名白鑞、不及舉之也、然蘇敬以白鑞爲鉛一名、其說與鄭玄郭璞顏師古不同、故源君引兼名苑、不引本草注也、按蘇敬曰、臨賀出者名鉛、一名白鑞、唯此一處、資天下用、其錫出銀處皆有之、圖經乃云、鉛今有銀坑處皆有之、而臨賀出錫尤盛、亦謂之白鑞、與蘇相反、李時珍曰、蘇敬不識鉛錫、以錫爲鉛、以鉛爲錫、其謂黃丹胡粉爲炒錫、皆由其不識故也、故源君不從蘇說、

也、昌平本下總本、有和名二字、按新撰字鏡鑞同鑞仁鑞單鑞奈末利、新撰字鏡單鑞奈万利、曾被其言

之也、鎔錫鑄之称、以錫鑞鎔者謂之鑞、鑞一斤、錫剩十兩、錫與者謂之志呂末乃、皇國古語所云白鑞、

即志呂末也、

〔和漢三才圖會 五十九〕錫 音昔 白鑞 本綱 俗云 質 白錫 鑞鑞 質也、和名之呂奈万利、俗云須須、俗用錫字錫音

字、音昔之謂錫也、

本綱錫者銀鉛之間也、受太陰之氣而生、二百年不動成砒、砒二百年而錫始生、錫禀陰氣、故其質柔、

二百年不動、遇太陽之氣乃成銀、是錫於新錫器內、盛酒日久、能殺人者、以砒能化錫、歲月尚近、便被采

取、其中蘊毒故也、

錫制如錫於山谷中、往往取錫不得、鍛錬成、俗名日本錫、

氣味 甘寒 微毒 有治惡毒風瘡之功、無他藥 錫能製砒、錫已 花、汁、於斷錫、錫

錫器

古今醫統云、錫能化人水銀、凡錫器以爲酒器者、用高陸、能使用流之、能殺伯哉、

按錫者似銀而柔、以作錫及錫器盆之器皿也、〔○中略〕

近世肥州日向出錫、凡錫鉛者不佳、其器皿陶盤成凸凹、其異錫器俗稱志也、凡鎖錠之器皆須鑞者用、

學南蛮錫之、以錫為佳之用、錫器木製可試、 醫故所謂高陸、使來試之、最佳矣、

〔續日本紀 一 文武〕四年二月庚子、令丹波國獻錫、

〔和漢三才圖會 五十九〕錫〔○中略〕

錫箔 近年製之、未久、漸一月變色、故今不用、〔○中略〕其先黃銀箔之類、

〔本草啓蒙 一 金石〕錫石〔○中略〕

今ノ人錫器ヲ入ル、ニ多ク錫ノ圓器ヲ用ユ、大ニ誤ナリ、今人不知之シテ用ルハ是モナリ、醫家

白鑞

トナリテ、此ノ香合ヲ用ル人多ク有之、シカノミナラズ藥ヲ脩治スルニハ、銅鐵ヲ忌テ、煎熬スルニハ蒙昧ノ病家、カラカ子鍋ヲ以テスレドモ、銀鍋瓦鐺ニ代ヲト敎ル醫人ナシ、誠ニ可歎哉、

(和漢三才圖會 金五 十九)白鑞 俗云之呂女。　錫上品者名白鑞、與此同名異品也、

按白鑞造法、鉛一斤、唐錫十兩、相和鎔成、每用之、錮銅鐵之耳鐶、銅鍋釜之脫漏、或注藥罐裏、否則其湯銅臭不可吃、錫工必用之物也、如用倭錫者不佳、僞者止用鉛一味、故遇火則沸失、但錫多鉛少者雖遇火不沸、其鑞不敗耳、

(鼓銅圖錄)附錄銅白目陶汰、○中略

白。目。者無別用、止可參於鎔鑄火爐之銅、銅得此不滯脫模、刻畫分明、

(延喜式 彈正 四十一)凡純素金銀及白鑞鏤、爲五位已上服用之飾、

(延喜式 内匠 十七)御鏡一面方七寸料、熟銅大四斤、白鑞大一斤四兩、錫大十二兩、○中略

内印一面料、熟銅大一斤八兩、白鑞大三斤、○中略

小行障四具料、○中略 白。鑞。薄。六枚、方八寸 ○中略

大醫筥二合料、○中略 白。鑞。薄。十枚、方八寸 ○下略

(續日本紀 文武 一)二年七月乙亥、下野備前二國獻赤烏、伊豫國獻白鑞、　乙酉、伊豫國獻鑞鑛、

(愛媛面影 一 新居郡)白鑞　大生院村大野山一川と云所より出す、上品也、俗に伊。豫。白。鑞。と名く、

○按ズルニ、伊豫白鑞ハ、今謂フ所ノアンチモニーナリ、

(續日本紀 文武 一)二年十一月辛酉、伊勢國獻白鑞、

(大安寺伽藍緣起幷流記資財帳)合白鑞壹阡玖佰貳拾壹斤拾五兩 小

肆拾斤陸兩 大 ○中略

天平廿年六月十七日 ○署名略

(東大寺大佛記)金銅盧舍那佛像一軀結跏坐高五丈三尺五寸、○中略 用熟銅七十三万九千五百六十

斤、白鑞一万二千六百十八斤、○中略 鑄鐘高各八丈八尺二寸、用熟銅七万五千五百二斤五兩、白鑞四百九斤十兩、○中略

鐘一口高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚八寸、用熟銅五万二千六百八十斤、白鑞二千三百斤、

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年七月己卯、近江國志賀團大毅少初位上建部公伊賀麻呂、賜姓朝臣、散位從七位上昆解宮成得白鑞似者以獻、言曰、是丹波國天田郡華浪山所出也、和鑄諸器、不劣唐錫、因呈眞白鑞所鑄之鏡、其後勅以外從五位下、復興役採之、單功數百、得十餘斤、或曰是似鉛非鉛、未知所名、時召鑄工、與宮成雜鑄之、宮成途窮無所施姧、然猶以其似白鑞、固爭不肯伏、寶龜八年入唐准判官羽栗翼齎之以示揚州鑄工、僉曰是鈍隱也、此間私鑄濫錢者、時或用之、

〔倭名類聚抄 十五 金〕鉛 說文云、鉛音沿、和名奈末利、青金也、

〔箋注倭名類聚抄 三 金〕昌平本下總本有和名二字、新井氏曰、生之諸用者、謂質不堅剛也、鉛之不堅剛曰奈末、奈末猶生也、又謂愚鈍之未全乾者、亦爲奈末、俗呼奈万不之、直俗呼奈万利不之、新撰字鏡、鉛須奈万利、時珍曰、鉛爲白錫、故此爲奈万利、本鉛錫之總稱、所以呼之、鉛須久呂奈万利、錫須之路奈万利、後鉛專奈万利之名也、所引金部文、按後漢書郡國志注、鉛似錫而色青、時珍曰、鉛易沿流、故謂之鉛、

〔日本山海名物圖繪 一〕鉛

說文にいはく、鉛は青金なり、錫の類と云々、管子にいはく、山上に鉛あればその下に銀あり、山上に銀あればその下に丹ありといへり、此丹は丹砂とて、すなはち朱砂のことなり、今繪の具に用ゆる丹に、別に鉛を燒てこしらゆるなり、又白粉も鉛をやきて製するなり、各製法あり、別卷にしるす、

鉛は山よりほり出し鍋にわかして流せば竿と成、○中略 大形をこしらへ、底に筋をつけて其上わ

かしたる鉛をながすなり、

〔和漢三才圖會 金五十九〕鉛(なまり)(音延)　青金　黑錫　金公　水中金　和名奈萬利

本綱、鉛生山穴石間、人挾油燈、入至數里、隨礦脈上下曲折斫取之、其氣毒人、若連月不出、則皮膚萎黃、腹脹不能食、多致疾而死矣、山草青莖赤、其下多鉛、鉛錫之精爲老婦、鉛有數種、波斯鉛堅白爲天下第一、倭鉛可勾金、

鉛乃五金之祖、故雄黃乃金之苗、而中有鉛氣、是黃金之祖矣、銀坑有鉛、是白金之祖矣、信州鉛雜銅、是赤金之祖矣、與錫同氣、是青金之祖矣、硃砂伏于鉛而死于硫、硫黃戀于鉛而伏于硇、鐵戀于磁而死于鉛、雄黃戀于鉛而死于五知、故其變化最多、一變而成胡粉、再變而成黃丹、三變而成密陀僧、四變而爲白霜、鉛性又能入肉、故女子以鉛珠紝耳、即自穿孔、實女無竅者、以鉛作鋌、逐日紝之、久久自開、又鑄爲錢、銃、錫器、令光黑、

按、鉛(音延)說文云青金也、鈆(音緣)美鐵也、然俗誤以爲同字、且本草綱目亦用鈆、或析其字爲金公者、時珍之誤矣、本朝出鉛山不少、對州、羽州、賀州、紀州、豐州皆有之、

〔鼓銅圖錄〕沈鉛取銀(圖之說詳不贅)取銀先作灰爐、(天工開物曰、灰池其製、以爐灰篩於爐上、今四可徑尺鍋、置中央、精選)安鉛入炭火、又將濕灰環築如隄防、前鑿一竇、設戶扇(鞴名、此云大鞴)而其上蓋乾土板、濕灰塗其隙、然後緩々鼓鞴、火熱功到、鉛汁漸滲入于灰中、爲底子、(俗謂之曽加須鑄化滓)(灰鉛)則世寶凝然成小圓片在中央、此銀名灰吹銀、

右取銀法畫于此、

〔和漢三才圖會 金五十九〕鉛○中略

錫薄　近年製之、未過一月變色、故今不用、鉛薄亦然也、共此爲銀薄之贋、

鉛霜(なまりのしも)　一名鉛白霜　白粉(おしろい)　見于容飾具下

本綱取鉛霜法、以鉛打成錢、穿成串、瓦盆盛生醋、以串横盆中、離醋三寸、以瓦盆覆之、置陰處、候生霜刷下收之、

氣味甘酸冷無毒　墜痰去熱定驚有奇效、但非久服之物、又被製令人瀉、但用鉛霜包使日月後之勝於象者、

（大和本草　金玉土石）鉛粉

又定粉、水粉、胡粉トモ云、今國俗唐ノ土ト云、婦人ノ面ニヌルモノ也、鉛ニテヤクノ、俗ニ水粉ヲ高粉ト云モノアリ、アヤマレリ、

口授メルハ鉛粉ノ事ハ莊用無常飾具躍白粉條ニ在リ、

（本草綱目啓蒙　金石）鉛丹

タンナリ、俗ニタ丹ト云ハ反語ノコトナリ、鉛ヲヤイテナス丹ハ黄赤色ナル故ニ、黄丹ト云ナリ、日本ニテハ丹トバカリ云方書ニ黄丹トアルヲ誤リテ、別ニ黄丹ト云モノアリト心得テ、藥店ヲ尋ヌル人アリ、夫故藥店ニテモ別ニ鉛ヲナマヤキニシテ黄丹ト云テ賣ル、大ナル誤リナリ、鉛丹ハナマリヲ粉ニシテ、焼テ赤クナレタルモノアリ、泉州界ヨリモ出ス、界ニ長吉ト云モノ、鐵出スヲ長吉丹ト云テ上品ナリ、光明丹ト云ハ下品ナリ、錫鑞ヲ取タル鉛ノカスヲヤキタルモノ故下品ナリ、今ハ甚兵衛丹ハナシ、菊丹ト云テ包ミ紙ニ菊ノ印アルアリ、下品ノモノナリ、

（和漢三才圖會　金類五十九）蜜陀僧　沒多僧　爐底

本綱蜜陀僧出波斯國、今嶺南閩中銀銅冶處亦有之、是銀鉛脚也、其初采礦時、銀銅相雜、先以鉛同煎煉、銀隨鉛出、又采山木葉燒灰、開地作爐、填灰其中、謂之灰池、置銀鉛於灰上、更加大火煅、鉛滲灰下、銀住灰上、罷火候冷出銀、其灰池感鉛銀氣、積久成此物、亦皆銀冶所出最良、而今貨者、乃造黄丹者以脚滓鍊成蜜陀僧、

氣味鹹辛平有小毒　止痃面皯肝治反胃久痢食噎、中用治諸瘡、爲末除胡臭、染髭髮、小兒口瘡不能吮乳者

亞鉛

用之、醋調塗足心、(汗急洗去)鼻齄赤皰(密陀僧二兩細研、人乳調、夜塗旦洗、)痘瘡瘢黶(方同上)鼾黯斑點(方同上)陰汗濕痒(密陀僧末傅之、或加蛇床子末、)

按、密陀僧、灰吹之渣也、有金密陀僧、銀密陀僧二種、以黃白色別之、用於煎湯藥中希也、阿蘭陀流阿房須膏藥中入用、或桐油漆方中入之、近世本朝亦多出之、長州萩、及豐後出之、

(本草綱目啓蒙入金)密陀僧

通名ナリ、外科ニ多ク、丹工金密陀、銀密陀ノ分チアリ色ヲ以テ分ツナリ、銀密陀ハ日本ニモタタンアリ、長州ノ萩、豐後、出羽ノ秋田、其外銀山ヨリ出ヅ、銀ト鉛ト一ツニアルモノヲフベ、イツキニ入テ吹クベ、ナマリハ早クトケル故、下ニアリ、銀ハ上ニノコル、密陀僧ハ銀ト鉛ノカスナリ、シツポノ底ニアツマリアルナリ、ソコロカスト云モノナリ、鉛ノ如クニシテ黑ミアリテ白ク光リアリ、ノギスジアリテ重キモノナリ、金密陀ト云ハ舶來ナリ、今渡ラズ、藥店ニモ少ナシ、赤ガチノ如クノギスジアリ、條解ニ形似黃龍齒而堅重ト云モノ此ナリ、外傘ニ貴ブナリ、金密陀ヲ古今醫統ニ金爐ト云、

本條一名　陀僧(本草必讀)　爐陀僧(銀譜鍊法)　灰坏(本草蒙筌)　甜面淳子(銀鉄錄)

(佐渡志五物產)金密陀僧　方言ロカス

小判所トテ、通用金ヲ製スル所ヨリ出ヅ、官禁嚴ニシテ得ガタシ、

銀密陀僧

吹分所トテ、金銀ヲ分ル所ヨリ出ヅ、官禁ノ嚴ナルコト前ノゴトシ、

(和漢三才圖會五十九金)亞鉛　止多牟、番語也、

按此未知何物、蓋類鉛、故稱亞鉛、長尺許、幅五六寸、厚不及寸、鎔冶作成者也、或有藥研形或如花瓣者、出於廣東者爲上、東京暨牛之產次之、今造唐金眞鍮諸器者、並不加亞鉛則不成寶、此重寶也、恐是爐

甘石煉成者爲眞、本草謂爐甘石與銅和爲鍮石、則鍮石非自然生者、亦可知矣、

(本草綱目啓蒙八)赤銅(中略)

トタンハ眞名倭鉛ト云モノナリ、物理小識ニ赤銅以爐甘、或倭鉛參和爲黃銅、(略)銅十斤、爐甘石六斤、則知倭鉛即爐甘石六トアリ、日本ニテ云ルハ今ノ[illegible]ナリ、

(本草和名十)水銀 一名汞(出丹朴子) 一名澒(出[illegible])水銀滓(出[illegible]) 一名金 一名上(出[illegible]) 一名白虎(出[illegible]) 一名姹女(出[illegible]) 一名沙汞、一名子明、一名鉛(出[illegible])水銀者丹砂之精也、和名美都加禰、

(倭名類聚抄十一)水銀 唐韻云、澒(音[illegible])水銀滓也、

(箋注倭名類聚抄四)下總本、胡作古、按胡孔與澒合、同巳古韻、見廣韻、其音不同、則作胡似誤、尚學本下總本、有和名二字、蓋後人所增、又見本草和名、廣韻上聲一董云、水銀滓之汞、廣韻亦本之、(略)說文云、澒、丹沙所化爲水銀也、與此所引不同、又有汞字、云水銀滓、與氣合、則正文澒字當作汞、按說文汞作澒、作水銀滓、本草和名、引新修云、水銀滓之汞、今本廣韻作汞、則知汞卽澒字之省文、(略)則出汞字訓爲水銀滓者、豈無據哉、云云、或以爲二字之誤也、

(本草綱目啓蒙八)水銀 ミヅカネ

コレハ辰砂ヲ焼キ製スル者ニモ製ヲ要ス云ヘリ、又天工開物ニハ、本草ノ取リ法ハ非ナリト云ヲ、則ニ取ル法ヲ云タアリ、其法ハ蒸餾ト異ク、則物ニ合セ蒸キ失ニトイフカク、其後ニ水銀ノ入ルヤウハレタアリ、又蒸餾ニ水銀鍋ト云モノアルコトヲ云、コレハ器ヲ作リタ者タルナルベシ、物理小識ニ、走馬質水銀眞走馬射何物皆者其說耳ト云ナリ、又集解頌ノ說ニ、馬齒莧ヨリ水銀ヲトリタルヲ草汞ト名ト云ヘリ、コレモ誤リナルベシ、天工開物ニ、凡水銀與朱更無他出、其澒爲草

須之說無ㇾ稽、狂妄耳、又方書云、馬齒莧取ㇾ草錫、者妄言也云々、皆出來ヌコトヽ見ルナリ、水銀ハ長崎大坂ナドニテ辰砂ヲヤキトルナリ、舶來多ク上品ナリ、又本ト伊勢ヨリ上品出シナリ、今ハ出ズ、コレハ自然ト土中ヨリ出シト云ナリ、

〔蒹葭堂雜錄三〕一說に、草より汞を取法あり、又拂林國の水銀は、海中に有といへり、本邦往昔は山中より掘出せし物と見へて、和銅六年、伊勢國より水銀を獻すること、續日本紀に見たり、又延喜式に、伊勢國の貢の數中に水銀あり、又百練抄に、承曆元年五月、宋國へ賜二水銀五十兩一と有、然ば當時水銀を採得ること夥大なることの證なり、又草根集題名所杣、

根を絕てきらぬ草木もあれぬべしみづかねをほる丹生のそま山

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

水銀小四百斤(伊勢國所進)

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、令二大倭參河並獻一雲母、伊勢水銀、(○下略)

〔大安寺伽藍緣起流記資財帳〕合水銀貳佰三拾壹斤伍兩(雜物中略)○

天平廿年六月十七日(○署名略)

〔七十一番歌合下〕五十六番　右

みづかねの草の葉かとみゆる秋霜にやどれる月の光を　汞ほり

〔大和本草三金玉土石〕水銀(○中略)

今鏡匠、以二此磨一鏡、

〔毛吹草三〕伊勢　丹生山水銀(異國ノ外當所ニ有)

〔採藥使記下勢州〕重康曰、勢州山田伊勢ノ砂中ヨリ水銀ヲ出ス、砂石ヲユリテ採ル、和邦ムカシヨリ水銀出ス事、他所ニナシト云ヘリ、

先生謂ズル、知粥ニ水銀ヲ出ス事ハ、延喜式等ニモ載セタレバ疑ナキ事ナリ、伊勢ヨリ細穀ヲ生ゼシ、知粥ノ一賓物ナルベシ、中華ニモ水銀三種アリト見ヘタリ、朱砂ヲ焼テ取リ、又馬齒莧ヲ焼テ取リ、又砂石中ヨリ取ルモアリ、又怪シキ説モアリ、廣西通志ニ曰ク、梧州ト云フ所ニテ水銀ヲ取ルニハ、銀鑛ヨリ人ヲ買ヒ、水銀アル地ニ首バカリ出シテ埋メ、三日計置テ其人甚ダ痩アリテ賓呼スル時首ヲ截リ土ヲカケ埋ミ、十日計過テ掘出セバ、頭顱胸胃骨髓ノ中尽ク水銀アリト云フ、

〔本草和名 玉石〕丹砂、一名眞朱、一名朱砂、一名巴砂、一名越砂、一名雲母砂、一名馬齒砂、一名豆砂、一名末砂、一名土砂、一名光明砂、一名馬牙砂、一名無重砂、一名鏡面砂、一名赤帝砂、一名鏡々朱子、一名錦綾朱、一名朱兒、一名針砂、一名波丹、丹砂者日精也、和名爾、唐又出伊勢國、

〔倭名類聚抄 十一〕丹砂 小品方云、丹砂、錬朱砂爲水銀、其上品謂名也、

〔大和本草 金玉土石〕辰砂

辰州ヨリ出ルヲ良トス、故ニ辰砂ト云、本名ハ丹砂ト云、其ニ眞丹アリ、不可服、辰砂ハ石類ナリ、辰砂ノ大ナルヲ神農ニ入療ニ曾レバ、代赭及銀砂ナシ、錬成實砂ナリ、名醫別錄ニ出タリ、辰砂ニハ銀朱アヨリタルアリ、錬洗タ爲、未水銀シタ可用、無火水銀ニタ焼アメ銀朱ト云、毒アリ、不可服餌

〔本草綱目譯義 石〕丹砂

今ハ辰砂ト通名ナリ、眞ダ辰州ヨリ出ルヲ上品トスル故ニ辰砂ト云ナリ、舶來ニ古渡新渡ノ分アアリ、古渡ハ形大ナリ、一寸位ニシタ大サモ疎ハ三五ノモアリ、色々アリ、鰹魚子ノ大サナルア、藥店ニタアブ辰砂ト云、形丸キモアリ、一分位ノ大サアリ、茄子種ト藥店ニ云ナリ、色赤黑シタ、キラ

キラ光リアリ、コレヲ上品トス、コレヲ粉ニスレバ、米ノ如ク赤キナリ、下品ニハ黑ミアリ、故ニ外エ朱ヲヌリテ僞ルナリ、コレハ藥ニ用ルニヨリ、朱ヲ洗ヒ去ベシ、本ト辰砂ニハ無毒ナリ、コレヲ水銀ニスレバ甚毒アリ、朱ハ水銀ニテヤキタルモノ故ニ、甚毒アルナリ、今ハ大ナル辰砂ハ渡ラズ、皆細末ニナリタルナリ、其中ニ雄黃鐵砂交ルナリ、故ニ日本ニテ水干シテコレヲテルナリ、水干スレバ、雄黃ハ上エ浮ビ分チ易シ、鐵砂ハ同ク沈ミ分チ難シ、且鐵砂ハ形色モ辰砂ニ似タリ、然レドモ鐵砂ハ黑ク光リアリ、辰砂ハ赤黑シテ光リアルナリ、故ニ分チ易キナリ、今藥店ニ水干辰砂ト云、水干シテ雄黃鐵砂去リタルト云コトナリ、日本ニモ辰砂ハ發ナリ、然ドモ藥店ニ未出ナリ、昔若水先生ノ吟味セラレシ時ハ、豐前ノ下毛郡草本村ヨリ出シナリ、コレハ朱砂ナリ、其ノチ大和ノ芳野ノ川上ト云處ヨリモ出、コレモ朱砂ナリ、然モ豐前ノヨリハ赤ミ多、上品ナリ、又近年ハ奧州仙臺ノ方ニ、古渡ノ如ク塊ヲナシタルガ出ルト云、コレハ上品ナルベシ、然ドモ未京エハ出ズ、本ト丹ト計リ云ハ、辰砂ノ本名ナリ、故ニ附方ノ中ニモ、眞丹ノ名アリ、今寺社ナドノ彩色ヲスル、赤黃色ナルヲ丹ト云ハ和名ナリ、コレハ鉛ヲヤキテ製ス、故鉛。丹。ト云ナリ、又辰砂ニ比レバ、黃ナル故ニ黃。丹。トモ云、

(重修本草綱目啓蒙石五)靈。砂。　一名二氣丹本草蒙筌　氣砂古今醫統

靈砂ノ煉法ハ、醫宗粹言ニ詳ナリ、舶來ノハリ辰砂是ナリ、形辰砂ノ如クニシテ、京針紋アリテ東針ノ如シ、色赤黑ニシテ銀光アリ、和ニ朱砂ト呼モノアリ、今ハ水銀燼ト呼ブ、コレハ銀硃ヲ燒タル鍋中ニアルモノナリ、靈砂ト銀朱ト、煉法氣味相同ジ、只硫黃ノ量異ナルノミ、故ニ水銀燼ヲ以テ靈砂ニ代用ルモ可ナリ、

(續日本紀文武一)二年九月乙酉、令近江國獻金青、伊勢國朱砂、雄黃、常陸國、備前、伊豫、日向國朱砂、安藝長門二國金青、綠青、豐後國眞朱、

〔探鑛使記中〕辰任日勢州丹生ノクノキクボト云フ所ヨリ辰砂ヲ出ス、又丹生ノ内勝田ト云フ
所ヨリモ出ル、又南部ノロウナザト云フ所ヨリ少々出ル、金山ノ内ノ間穴ヨリ採リ出スナリ、
先生按ズルニ、辰土ヨリ取ル長州ノ物ヲ長砂ト稱スベシ、

〔文政雜影 四〕研石〇 按、伊勢國往古朱砂を出し事著し、然れども近世絶て所在をしらず、大和
實に惜むべし、小野蘭山の本草啓蒙に、朱砂近年和產あり、然れども僅に出す程に及ばず、大和
吉野川上に出す、上品也、豐前國東本村に出す、岩水先生の時々驗あるものなり、黑赤色にして下品
也など見たり、物產にあらむ者は力を竭して探索なば、必在る所を得べし、

〔倭名類聚抄 金 十一〕寶貨 陶隱居日、汞乃水銀 崔禹錫食經云、汞上之名也、倭名之水。銀。汞。

〔箋注倭名類聚抄 金 寶貨〕新修本草玉石部中品作銀屑、圖經上原名載、輕粉呼爲水銀粉、下總本之
名作汞名、俗名之作汞云、水銀粉下有粗鑛金玉四字、按四字疑新修本草陶注有之、恐是後人依原
書校補者、本草和名所引亦無、對取本無此二字、寶

〔大和本草 金玉土石〕輕。粉。
又瓶粉ト云、水銀粉ト云、多漢種、水銀ニテ所製ナリ、其法本草及入門等ニアリ、本邦ニテ平安城及
伊勢ニテ製之、有毒、能殺蟲、瘡瘍家多用之、服之久者損齒、慎勿妄用、

〔本草綱目譯義 石 八〕水。銀。粉。
伊勢ヲシロイ、勢州ヨリ多出ル故ナリ、續日本紀元明天皇和銅六年伊勢國獻水銀粉ト云ナリ、コノ時
ハ伊勢ニ自生ノ水銀多アリシナリ、故ニ丈ヲヤキタルナルベシ、今モ勢州ノ射和(伊勢)ト云
處ヨリ多出、伊澤ノ次郎兵衞ト云人ノヤキタルヲ上品ト云、今ハ伊勢ニ水銀ナシ、京ヨリ水銀ヲ
下シ、彼地ニテヤキ、又上ルナリ、今ハ京大坂邊ニテモヤクドモ、勢州ニ及バズト云、焼ク法ハ秘治
ノ秘アリ、唐ノハ変ゼモノアレドモ、日本ノ法ハ、水銀ニ水ヲ交モヤキ灰ス計リナリ、

○按ズルニ、水銀粉ノ事ハ、尙ホ器用部容飾具篇白粉種類條ニ在リ、

古事類苑

金石部四

玉石上

玉石ハ玉ト石トナリ、サレド玉ト石トノ區別ハ甚ダ詳ナラズ、蓋シ支那ニ在リテハ、玉ヲ璞、玉璞ニ分チ、海ヨリ得ルモノヲ珠ト云ヒ、陸ヨリ出ルモノヲ玉ト云ヒ、其未ダ磨カザルモノヲ璞ト云フ、或ハ自生ヲ珠ト云ヒ、磨ケルヲ玉ト云フト云フ說モアリ、我邦ニテハ、珠、玉璞ヲレンクユレラタマ、シラタマ、アラタマト云フ、倭名類聚抄ニハ、水晶、瑠璃、瑪瑙、琥珀、硨磲、馬瑙ヲ玉ト爲セドモ、本草綱目ハ皆之ヲ石ト爲セリ、蓋シ瑠璃ハ之ヲ西域ノ山中ニ產スト云ヘルニ據レバ、コハ正ニ珠ニ當ルナリ、

石ハ其種類甚ダ多クシテ、其名稱一ニアラズ、或ハ其形ニ依リテ名ヅクルモノアリ、或ハ其效用ニ依リテ名ヅクルモノアリ、或ハ其產地ニ依リテ名ヅクルモノアリ、

我邦ノ山中ニハ石材ヲ出ス所甚ダ多シ、石材ニハ御影石、白河石、伊豆石等、海内ニ聞エ、寶石ニ、金剛石ノ名アルモノ一二ノ地ニ出ヅト雖モ其質稱スルニ足ラズ、蓋シ溫泉地ニハ多ク硫黃、礬石ノ類ヲ產シ、中國九州各地ニハ多ク石炭ヲ產ス、

化石ハ動植物ノ土中ニ埋リテ石ト變レルモノニテ、往々其原形ヲ存ス、即チ貝石、松石、蟹石、木葉石、燒木石等ノ名アル所以ナリ、此他海内各地奇石ニ乏シカラズ、鳴鏑石ハ音響ヲ反射スル石ニシテ、本邦各地ニ多シ、

珠玉

〔倭名類聚抄十一玉〕珠　白虎通云、海出明珠、〈日本紀私記云、眞珠之太麻、〉

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕所引白虎通封禪篇文、說文、珠、蚌中陰精也、本草圖經所載生於珠牡、珠牡、蚌類也者、珠牡俗謂珠母、六帖詠海士歌、借西行歌所詠阿古也是也、故宇治拾遺物語謂之阿古也乃太麻、今俗眞珠音讀、謂鰒魚中得者爲鮑之眞珠、眞珠見允恭十四年紀、按允恭紀所載眞珠鰒魚中所得、見書紀武烈天皇御歌云、阿波寐之羅陀魔、萬葉集所詠鰒珠皆是、陶弘景云、石決明、是鰒魚甲、內亦含珠者是也、下總本眞珠下有潤字、按眞珠見雜式、又大神宮儀式帳、內藏寮式、民部省式、萬葉集、又大安寺資財帳所云白玉卽是、非下條所載白玉、

○眞珠ノ事ハ、動物部介篇ニ在リ、參看スベシ、

〔古事記上〕此時伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子而、於生終得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇〈此四字以音、下效此、〉取由良迦志而、賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣、事依而賜也、故其御頸珠名謂御倉板擧之神、〈訓板擧云多那、〉〇下略

○頸珠ノ事ハ、服飾部服飾雜載篇ニ在リ、

〔令義解一職員〕內藏寮

頭一人〈掌金銀珠玉、〈謂、白珠、生珠、瑪瑙、水精作玉也、〉〇下略〉

〔東雅七器用〕珠〈タマ〉　玉〈タマ〉　並に義不詳、我國太古の俗、珠玉をもて寶とす、されば凡物を美する詞に、玉をもて加稱せし少からず、又ヌといひ、ニと云ひしが如きも玉也、舊事紀には瓊の字を借用ひられしかど、古事記にはこれに因らずして、沼の字を借用ひたり、日本紀私記には、師說を引て瓊赤玉也と云ひしかど、越後國風土記には、八坂丹、玉名、謂玉色靑、故云靑八坂丹玉也と見えたり、ヌといひ、ニといふが如きは、其轉語と見えたれど、或は赤玉とし、或に靑玉とす、其詳なる事を知らず、〈舊說には、玉とは、タは高也、マは圓也、其價高く、其形圓なるをいふ也と云ひけり、またヌといひ、ニといふが如きも、舊事紀には古語に赤色をニといふ事のあるに因りて、瓊は玉の〉

[illegible]

假名抄に見えし玉の類、多くは其字の音をもて呼びし所なれば、其義を解するに及ばず、瑠璃の如き、俗にビイドロといふが如きは、吠瑠璃也、梵には瑠璃を一に毘瑠璃ともいふと見えし、即是也、[illegible]キウ、といふは、重説にキウ〳〵なり、重なる音は下を略し呼ぶ事ありといふ同是也、

〔倭訓栞前編十八〕たま　珠玉をよめり、海に出るを珠とし、山に出るを玉とす、令義解には自然の物を玉とし、造作に出るを珠とせり、〇中略　明和元年の春、紀州みの島に、水手の妻出産しぬ、其生児の左手握りて開かず、十日に及び親あみせし時開きたり、手中に握り居たる玉ありて、形三角色白く、水精の如くにして光彩あり、大さ六七分ばかり也、波多氏親く見て来り、予に語りぬ、摂州廣田の社の珠は、中に紛彩あり、國紋事には是を神功皇后の如意珠とす、萬葉集にも、西宮御珠、紀[illegible]之書顯るとみえたり、〇中略　攝津高砂社に寶ありて明玉あり、大さ鶏卵の如しとぞ、神宮寶館に貝の、如くにて両面に突あり、重さ三兩ばかりなる玉あり、

〔倭名類聚抄十一〕玉　四聲字苑云、玉、[illegible]寶石也、兼名苑云、璞、[illegible]琳、琅玕、[illegible]瑪瑙、[illegible]璃、[illegible]青黄玉名也、

〔箋注倭名類聚抄三〕玉、按玉篇、山海田所出之物、皇國不レ産、故玉者音讀、不レ曰ニ多麻一、乃書古所云之真多麻、蓋皆眞珠、非ニ白玉一也、〇中略　本草和名玉石部下云、青琅玕、一名璧、一名琅瑪、一名珠琳、一名瑠璞、一名瑪瑙、已上五名出ニ兼名苑一、按琅琳琅玕瑪瑙、並見ニ尚書禹貢一、琅璞見ニ尚書顧命一、兼名苑蓋本ニ於此一、

則作琨瑤、似誤倒、然吳都賦有琨瑤、則瑤琨或可謂琨瑤也、又按、淮南子墜形訓注云、球琳瑯玕、皆美玉也、禹貢孔傳云、瑤琨皆美玉、淮南子說山訓注云、琬琰美玉也、故云皆美玉名也、又是五字、蓋兼名苑注文、說文、球玉磬也、琳美玉也、琅玕似珠者、瑤玉之美者、琨石之美者、琬圭有琬者、琰璧上起美色也、

〔本草綱目譯義 八金〕玉 和訓タマ

玉ト云ハ別ニ一種タチアリ、水精ノ如クニスキ通ルモノニアラズ、孟子ニ溫純含蓄ト云ヘリ、日ニスカス時ハ光リアリテ馬瑙ニ似ルモノナリ、玉ハ唐ヨリ器ニシテ渡ルナリ、玉ト馬瑙トノ分チハ、馬瑙ハタヽイテモ音ナシ、玉ハフトノスルモノナリ、白キアリ、ウス靑キアリ、モヘギ色アリ、唐ヨリ器物ニシテ渡ルニ、水入レ或ハ石ノフビナドニシテ、スカシノホリタルモノアリ、玉ナリ、本條ニ玉ト云時ハ、白玉ヲ指テ云ナリ、日本コトバニ、ナニヽテモ丸クナシタルヲタマト云、唐ニモ此例アリ、此ニ玉ト云ハ夫ニアラズ、白玉ヲ云、

〔重修本草綱目啓蒙 五五金石〕玉 タマ

本條ハ白玉ヲナス、和產加州豐後等ニ出ルモノハ、多クハ瑪瑙ニシテ、玉ニ非ズ、舶來器物ニ作リタル玉ニ白色アリ、アサギ色アリ、綠色アリ、凡玉ハタヽケバ聲アリテ金ノ如シ、同ジ狀ナレドモ、聲無キモノハ瑪瑙ナリ、水晶ハヨクスキトヲリ、玉ハスキトヲラズシテ、溫潤含蓄ノ氣象アリ、玉ノコトハ、天工開物ニ詳ナリ、又典籍便覽ニ靑。玉。倭國ヨリ出ト云、

〔延喜式 四十一彈正〕凡白玉腰帶、聽三位以上及四位參議著用、

〔蝦夷國風俗記 四蝦夷拾遺〕產物

靑。玉。　世俗一名虫。ノ。巢。玉。トモ唱海底ニ生ズト云、荒井君美ノ蝦夷志ニモ、是ヲ以靑琅玕ヲ生ズト云誤ナリ、全タエゾノ產ニ非ズ、マンデウヨリ山丹ヲ經テ、カラフト島へ渡シテ、カラフトノ

碧

ヱゾソウヤヘ持来リ、又二三ツ以来入升ニタヽエ、玉ニ大小五色アリ、各気韻アルモノ多シ、蝦夷ノ内地ヨリ細工ナサシメシモノナリ、

其霊験ヲ火ニアタレバ、温ナ持タタルニヨリ、渇ヲ試ルニトロケタ徳ル、時珍本草ニ北方ニ鎮ヲ玉アリ、常自ニレタ気韻有リ、万病鎮成スル者不拘ハ不可、有然ドモ甚温潤ナレトアル

其霊ナル故以上其羽毛虎脳ノ如キ青玉ノ類ヘ、蝦夷上国ニ貢ノナセ、志摩守方エ買求ク、商人ヨリ蝦ニ他国ニ貢出スコトヲ禁ズト雖、利欲ノ商人何能守之、年々商人ノ手ヨリ抜出ルコト可推知、

(本草一家言 四)虫乃宝

生深渓谷中、大如小児丸、圓小青色中有一孔、無虫居之、故得名、好事者以為有邑厭口而珍之、又一種
歌羅不土産、金銅虫乃宝亦虫之窟、天竺語歌羅不土大青也、歌羅不土國名、此玉出自其國、故名、又以
虎魄口用玉、若木云、二物全一物、大保大青也、若虫乃窟古昔蕃人携得物載、互市日本時、通過訳譯無
理、増損其色状、説為此虫居窟、有二種、有訳以為天竺也、苗蒿入日久、故昔居虫居之、其孔本異
無口、設名其窟、一物各明、但有新古之異耳、猶大青也、又圓者以為青石、製作者甚珍、

(倭名類聚抄 十一)碧　野王案、碧(音璧、和名阿乎太末)、玉深青色也、

(箋注倭名類聚抄 三)碧、原本作碧、按今本玉篇、合類節用集並同、字書無碧字、與碧不同、作碧非是、
且下總本有和名二字、其書缺日、碧、說文、無碧字、云石之青美者、碧按、從王作
碧字、亦今本玉篇玉部作碧、按碧所見碧字、說碧本字、說碧字、說碧、說碧色、

(年々随筆 三)あら玉のとしとつゞけ、あらがねのつちとつゞくる事は、其説いまだ詳ならず、万づあら玉を與謝はあら玉は明玉としてでらしの的てらしの的はいかなるをか、なりといへど、例のまひごとなり、明をあらといふ事あるべくもなし、證據あり、ぎぬの書に、有證を引たれど、みなあたらず、その中に、或説を引たるは、あま

りくろしけ也、松坂の故先生○本居宣長はあたら〳〵まのいふ事也とて、長々しき說あれど迂遠なり、○中略正明おもふに、あら玉は璞いまだみがゝざる玉也、そは砥をもてみがく故とかゝる、あらがねは鐵いまだ鍛はざる金也、そは鎚もてきたふ故つちとかゝる、あら玉はふるき說にありしにや、あらがねは今やはじめならん、此二ついひかゝりたるさま、もはらおなじければ、相てらして心得べし、

〔新編常陸國誌六十土產一〕水晶　郡珂郡油河內村多珂郡大久保村ヨリ出、常陸考云、大久保ノ山中往々拾得水晶、寬政元年八月多珂郡秋山村ノ民、板本山ニ入テ薪ヲ採ル璞ヲ得タリ、携テ人ニ示ス、人曰、玉ナリ、後再ビ行テ其地ヲ掘ル、水晶ヲ得タリ、傳說ス、寶永天明ノ間、コノ村ノ土人、玉ヲ得ル者二人アリト云、

〔倭名類聚抄十一玉〕水精　兼名苑云、水玉、一名月珠、和名美豆止利太萬水精也、

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕昌平本、下總本、有和名二字、水取玉見平康頼寶物集、按南山經云、堂庭之山多水玉、注、水玉今水精也、兼名苑蓋本於此、月珠之名未見所出、水精也三字、蓋兼名苑注文、下條火精也同、神祇式鎭新宮地祭、水玉五十枚、時珍曰、水精亦頗黎之屬、有黑白二色、倭國多水精、第一南水精白、北水精黑、時珍又釋水精名云、瑩澈晶光、如水之精英、

〔倭訓栞中編二十五〕みづとるたま　和名抄に、水精をよめり、神祇式鎭新宮地祭に、金銀各五兩、銅鐵各五十斤、水玉五十枚と見えたるは、水精の一名なり、月の水をとるに用う、よて月珠ともいへり、

〔延喜式三臨時祭〕鎭新宮地祭　金銀各五兩、銅鐵各五十斤、水玉五十枚、○下略

〔本草綱目譯義八玉〕水精スイシヤウ

水精ハビイドロノ如クニテ透ル石ナリ、和産タクサンアリ、諸國共ニ多シ、蠻舶ニモ佛國多水精トアリ、人藏實記ニモ有青紅白三色ト云ヘリ、今案ト白ト黒キハアレドモ、青ト黄色ハ至テ少シ、本書ハ一石義ノ一種ヲ別ニ出ス、異物ヲ分ツハ誤リナリ、此物日本諸國ヨリ產ス、器物トナシ又一種數ナドハナルナリ、昔レ人造レタル偏石義ノ數數ヲ以テユキシニ、彼ニテ水精ノ珠數ト云ヲハコトアリ、水精ハ本ト石ノ花ナリ、六角ニナリアルモノナリ、石英トモ云ナリ、スキ透ルヲ上品トス、又中ハ水ノアルアリ、ユキ通ルハ下品ナリ、又中ニ色々ノモノ入タルアリ、本ト木ノ時ニ入タルモノ、偏ゼズハアルナリ、物理小識ニ、紅者曰火晶、可取火、白者曰水晶、可取水、赤可取火云云、水精ハヲモビイドロハ内ノナルモノハ水火ノ取レルモノナリ、紅白ニテ取ルト云說ハ誤ナリ、此注ニ硝子ト云ハ、ビイドロノコトナリ、舶來ニテハ此ノワカレタルヲコシタ器物ニスル故アヤナクスモ通リテ見事ナリ、此ヲ水精ダト云ナリ、水精ハ水中白石鉛錫類ニテ製ス、此スキ通ルワケハ天工開物ニ詳ナリ、

(白石退考八)玉石

水晶　鄙言に所謂水玉也、一說に玻璃の類也と云、中國の諸蕃より出る所多し、其中日本國より出るを第一とすと見へたり、

(大和本草三金玉土石)水晶　日本ニ多シ、処ニ國影ト云フ、大小皆六角ナリ、昔マレナリ、水晶ノ念珠、貴人高僧ナラデハ不能用、今ハ火打石ニモ用之、山州ニテハ愛宕郡有品雲寺山ニ多シ、近江ニモアリ、東角州皆有之、日向ニ最多シト云、天晴タル時水精ヲヨクユリアタヽメテ、日ニ向ワテ火ヲトルト云、又ヲ以テ火ヲトクノベシ、艾ヲ點ヌル火トス、倭青日札曰、日本國有青水晶、紅水晶、烏水晶、篤信曰、蠻書往々載紫水晶、ロコレニモ紫水晶ヲヨシトス、本草時珍曰、倭國多水精、第一韃靼、留青日札曰、雲南如大秦質潤透明如硝子石、如琉璃色如雪、爭文章曰力皆備、不甚細

齋、以此掩目、精神不散、筆畫倍明、中用綾絹聯之縛于腦後、出于西域滿剌國、靉靆ハ眼鏡ナリ、紅夷ヨリ來ルハ硝子ヲ用ユ、日本ニテ製スルハ水晶ヲ用ユ、硝子ハクダケヤスク、水晶ハワレガタシ、水晶尤ヨシ、水晶ヲスダフニハ絹及ラシヤヲ用ユ、硝子ヲスダフニハ燈心ヲ用ユ、老人ノ昏眊ヲ助クル日用ノ重器也、好品ヲ可擇用、

〔屠龍工隨筆〕水晶は金山に必ずあるものにて、安藝の彌仙、奧州の金花山にあり、各六角にして高サ五尺計といへり、

〔毛吹草三〕陸奧　南部水精(外ヨリ宣ト云)　安藝　水晶　豐前　水精　豐後　水精

〔甲斐國志百二十三附錄〕一水精(御岳奧夏土俗大万)　和名抄云、水玉一名月珠、水精也、水精ト石英トハ一物二種ナリ、時珍云、水精有黑白二色、倭國多水精、第一南水精白、北水精黑、東璧ノ曰、石英大如指、長二三寸、六面如削、白徹有光、長五六寸者彌佳也、平賀國倫云、石英ニ五色アリ、大小皆六面、如削上鋭レリ、水精ハ顆塊定ル形ナレト、金峯ノ水晶、邊布水晶澤ヨリ產スル者大小皆六面ナリ、東山ノ玉小屋ト云處ノ產ハ長大美好ナリト云、

栗原筋石森丘熊野權現ノ社地ヨリ石英ヲ產ス、水晶澤ト云處アリ、竹森村玉宮社地ヨリモ多產ス、黃紫赤白黑アリ、當村舊作玉森、玉井鄕ト號セシ處ナリ、玉山等ノ事ハ古跡部ニ委シ、玉宮神殿中ニ藏、蓋者ハ周リ五尺許、高七尺餘、地中ヨリ生ジタリト云、秘封シテ今觀者ナシ、又雲母ヲ產ス、田野山入リ天目ノ邊ヨリ產スル水精上品ニシテ、稀ニハ苔入、松葉入リモアリ、牛奧通明神ノ社境、河浦村ノ雷平、香石英アリ、北山筋石水寺山及塚原ノ金子峠ニ水晶金礦アリ、

逸見筋淺川村ニ水晶山アリ、石英モ產ス、此處ハ多麻ノ莊トテ、津金山ノ續キナリ、須玉川ト云モアリ、以金玉爲名ユヱハ、卽チ是レナルベシ、甘利ノ莊苗敷山、又流レ川ノ上流ヨリモ產ス、皆ナ石英ナリ、

火精

〔近江國輿地志略 九十九〕水晶
水晶が嶽(□□郡)よりこれを出す、此外蒲生郡岡本より出すものあり、本朝の水晶西土よりまされり、本草綱目、居家必用、留青日札等に其ことをしるせり、
〔木曾路名所圖會 三〕信濃水晶
水精山　諏訪が丘前の事たり、其地むかしより水精出る、又金鑛を掘穴あり、今に至て金鑛なをあり、然れども眞金に非ず、
〔長防産物名寄 土石〕水精石
阿武郡嘉年村ノ枝郷川上村ノ內、立野ノ奥ヶ畑山、長谷口ノ奥長野ノ山頂有自然銅、和名キリノ石、厚狹郡西ノ小野村ノ內、小野トウノロ山、同郡万倉村ノ內、水晶ガ嶽山、同郡末本郷村ノ內、キャクタンドタ山
〔紀伊續風土記 物産 一〕水晶(本草、和名抄、共ニ水精ト載)
牟婁郡周參見莊廣瀨山、及見老津村の山中に産す、皆形小にして、鍼水晶、針水晶と呼ぶものなり、大なるはいまだ見ず、
〔土州淵岳志 中〕水精
高岡西ノ郡佐川山中ニ水精石アリ、長サ一二寸ニシテ六角ナリ、端ノ夕尖鋭澄澈ニシテ愛玩スベシ、幡多郡ノ山邊溪澗ニモアリ、幡多郡ニテハ星ノ數ト云、空ヨリ降リタル樣ニ思ユル、隣國里人說ニハノコルハ信州岩村田ノ邊ニ、星ノ數トイフ石アリト云フモ、コノ水精石ノコトナリ、本草ニ白石英アリ、土上ニアルヲ水精ト云ヒ、土中ニアルヲ石英ト云フ、石英ニ紫ノ異ナルアリト載レドモ土上土中ニ不拘皆水精也、
〔倭名類聚抄 十一〕火精　兼名苑云、火珠、一名陽燧(比乃太萬、和名)、火精也、

〔箋注倭名類聚抄　三玉石〕昌平本下總本、有和名二字、百錬抄云、以火取玉寫陽燧、火取玉又見寶物集、按、舊唐書南蠻傳、林邑國、漢日南象林之地、在交州南千餘里、貞觀四年、其王范頭黎遣使獻火珠、大如鷄卵、圓白皎潔、光明數尺、狀如水精、隋唐嘉話、貞觀初、林邑獻火珠、狀如水精、云得於羅刹國、正午向日、以艾蒸之卽火燃、按和羅國、去廣州五月日行、貞觀二十三年、遣使獻象牙火珠、波斯國在京師西一萬五千三百里、出火珠、時珍曰、今占城國有火珠、名朝霞大火珠、又按、湯璲卽陽燧俗字、燧通作遂、見周禮司烜氏注、正義云、取火於日、故名陽遂、又禮記内則篇有金燧、鄭注、金遂可取火於日、周禮考工記、金錫半謂之鑑燧之齊、說文作陽鐆、其字从金、是陽燧金器、非玉石類、然論衡亂龍篇云、陽燧取火於天、五月丙午日中之時、消鍊五石、鑄以爲器、乃能得火、則鍊石以取火、亦名陽燧、故俗从玉、遂與說文璲圭字、及毛詩鞙々佩璲字混無別、火精之名未見所出、新唐書西域傳、天竺貞觀十五年、獻火珠、舊失於出師子、天寶初獻火珠、

〔重修本草綱目啓蒙　六〕水精附錄、火珠、ヒ゜ト゜リ゜ダ゜マ゜

水精ヲ圓形ニスリタル玉ヲ、俗ニ水゜晶゜輪゜ト云、人物コレニ向テ照セバ、ソノ形必倒ニウツルモノナリ、此ニテ日輪ノ陽火ヲ取ルベク、月中ノ陰水ヲ取ベシ、故ニ火トリダマ、水゜ト゜リ゜ダ゜マ゜ト呼ブ、就中陽火トレヤスキ故ニ、火珠ト云、然ドモ水精ニカギラズ、凡透明ナルモノ、硝子或ハ氷ニテモ、凸ニ製タルモノニテ皆火ヲトルベシ、物理小識曰、紅者曰火晶、可取火、白者曰水晶、可取水、亦可取火、

〔寶物集　一〕傍ヨリ人々、玉ハ寶ナリト云ドモ、末代ノ凡夫ノ爲ニハ寶ト云ベカラズ、我朝ニハ火゜取゜玉゜、水゜取゜玉゜ノ外ニ德ヲアラハス玉ナシ、下略

石英

〔本草綱目譯義　八玉〕白石英　水精ノ白キモノナリ、水精石英二物ニハアラズ、シロズイシヤウ、ケンジヤリ　クンサキノジヤリ播州　カブトズイシヤウ　カザブクロ佐渡　フキワレイシ同　山ノカミノタガネ奥州　ホシクソ土佐

白石英ハ、日本諸國ニアリ、山城ノ中ニハ小ナルヘアリ下品ナリ江州ニハ多ク生ズ、水精ノ生ズ
ルヘハ一ハモアリ砂山ニ生ズルモノナリ、砂針ノ山ニテ上ウレ、又處々水レヤウノフダト云フ、一
脉モアロジダアヲモ穴トヤウニキリタアル處ニ生ジタリアリ砂山ノ近處ニハ開アダリニ露タ
アルコトアリ、又石ノ上ニ吹出タモノアリ、イヅレトモ六角ニナリ、先ハ尖基ノコマノ如ク、トガ
リタル物ニテヨリ成タルガ如シ又砂中ニイカイコトマジマリ生ズルハグス基色ノ床アリタ、上
ニアツマリ生ズ又一ツハヤレヤアトヤモ開ジコトニ實ルモアリ又三ツ四ツ開タアルモアリ、
色々ナリ、コクヨモ透ルモノアリ上品トス、江州ヘタクサンアレドモ、スキ通ルモノハ少シ白キア
リ黒キアリウス黒モアリ少シ青モアリ少シ黄色モ雜ルアリ、紫アリ、大ナルハ稀ガタシ、此レニ
ク雜物ハナシタルモノ水精ノ雜ナリ別ニ水精ト云モノアルニアラズ、又雲モニモ白キニモ内
ニ水ノ入タアルモアリ、ヨモシヲ見レバ水ハ上ニアガルモノナリ是ヲ含水水精ト云ナリ、青影ト
云青ハ出タリ、水ノアル處ハ空處ナリ雜物ニナラズ、鐵鑛ナドニハヤノニ立タズ、此ハ本ト水ナ
リ、カタマルトキハ中ニハノコリタルナリ水ノナタリルコトナタ夏ニモアリ又木ノ葉マタ虫ナ
ドノ入タルモアリ、水精ノ中ニハ人タアルニヘ、虫ナドモナシ年立タモ形狀ノ變ズルコトナシ雷
斧ノ山ニハヤノズイレヤウト云アリ、白クヒカリタモ石ウツムタニナリタアリ、夫ヲアゲタ見レ
ハ、ウタハアメノヤウニ一マモクイクワモ叢ヲアリ、此物ヲ生ズル處ニハ、外ノ水精ハ生ゼズ、此
モ砂山ニアルモノナリ、鐵鑛ニハ大ナルモモアリ、又ムシ長キ水精ノ石ノ上ニナランダ生ズルア
リ、處ニハナシ、ヌジタイハマジリタアルモノナリ、此ヲ下本ズイレヤウト云、鑛カタイカイコト
生ズルモアリ、此ヲハリイレウト云、此ハ白キニ多クアルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙〕八金石　白石英　シロズイセウ　飼倉料　ケンテキノレヤリ　阿讃宮州　カザブノロ
仙州　山ノカミノタガヤ　奥州　カブトバイセウ　一名廣石　白州　白

素飛龍（石藥爾雅）、素玉女、銀華、水精（共同上）

本邦ニテ皆水精ト呼ブ、諸國ニ生ズ、舶來上品和產モ上品アリ、皆六稜アリテ削リ成スガ如シ、明徹ナルヲ良トス、ウルミタルモノ、或ハ內ニヘダテアルハ下品ナリ、五色アリ、紅ト靑トハ稀ナリ、黃ト紫トハ少シ、黑ト白トハ多シ、佐州、石州上品、江州田上山、鏡山、三上山等ニ多ク有レドモ、上品ハ少シ、一床ニ五色雜リ生ズル者甚少シ、山城ノ愛宕山、及樫原ノ山ニ生ズル者ハ、鮫○水○晶○ト云、短小ナル水精多ク床上ニ簇リ生ジテ、鮫魚皮ノ形ノ如シ、凡四方諸州ミナ石英アリ、和州ノ大峯、信〔〇信濃、上野國〕州ノ妙義山ニハ、黃色ニシテ大ナルヲ產ス、又ヘリ水晶アリ、黃色モアリ、長サ一寸許、甚細クシテ多ク床上ニ亂レ生ズ、江州大塀村相谷ノ奥ニ水精ガ嶽アリ、千本水精ヲ生ズ、長サ二三寸許、濶サ二三分許ナル者多ク亂レ生ズ、又出羽ノ東園ニ水晶ノ井ト呼ブアリ、自然ノ洞穴ニシテ、其中四面ニ水晶生ジ盈テ、牡丹ノ花ノ如シ、錢ヲ以テソノ中ニ投ズレバ、落ルコト遲ク、鳴ルコト久シ、コレ井深ク花ノ如キ水晶多クシテ、錢コレニ觸テ聲ヲナス也、（出羽人語ル）又石英ノ中、空ニシテ水アルアリ、是ヲ側轉スレバ、必水上ニ升ル、是レ水下ニアリテ沫升ルナリ、一滴ノ水ナレドモ、數十年乾カズ、玩石家コレヲ貴ブ、俗ニ水入リノ水晶ト呼ブ、因樹屋書影ニ之ヲ含水水精ト云、又水精ズナハ、羽州米澤觀音山、筑前御笠郡、丹後乙訓、及讚州ニ產、色白徹ナリ、和州南都ニハ砂中ニ雜リアリ、城州稻荷山モ亦然リ、

〔本草和名三玉石〕白○石○英○　一名、白素飛龍（出丹口訣）黃石英（黃色）赤石英（赤色）靑石英（靑色）黑石英（黑色）一名、白坿（出雜要訣、出兼名苑）出太宰備中國、

〔佐渡志五物產〕白石英　方言吹ワレ

金銀坑中ニ生ズ、大小長短均シカラズ、上品ハ至テ稀ナリ、中品以下ハ時ニ出ルコトアリ、皆六稜アリ、土人水アリタ水晶ト稱スルモ、石貫水ヲ含テコレヲ轉側スレバ、其水升降スルニ似タリ、世

佐藤嶺トユ、青樹子ノ鐵坑ヨリ紫石英ヲ出ス、今中尾ノ鐵坑ニ紫石ヲ出スコト多ケレドモ、石英ニハアラザル也、

(本草和名)紫石英 一名紫鹽文錢、(出雜要訣)一名南城石、青絲石、林邑石、(已上出釋藥性)一名五石之精、一名陽起之雲精、(出神仙服餌方)出陸奥國

(本草綱目啓蒙)紫石英

ムラサキ水精ナリ、唐ノ白石英ト同類ニシテ、色紫ナリ、ムラサキズイシヤウト云フハ、江州ニモアリ、色アサクモアリ、ウスモアリ、下ハ白クシテ尖リメカリ紫ナルアリ、此ハ下品ナリ、ミナ紫ニシテ、スケザルノ上品ナリ、江州東外郡ハモ上品アリ、蠻ヨリ渡リ舶店ニアル紫石英ハ、紫ト緑色トマジリタアリ、日本ノトハタガウナリ、日本ノ産ノハユキ通ラズ、異物ニシテ透ルハ、スキ通ルアリ、上品ナリ、舶ハ少ク、紫ノ處ヲ取テ紫石英ト云、緑色ノ處ヲ取テ青石英、緑石英ト云テ賣ル、日本ノ紫石ヨリハヤワラカナリ、火紋金ケハ少シ、

(重修本草綱目啓蒙)紫石英 ムラサキズイセウ ドウノウジア 蜀、一名紫鹽文錢、(七寶)

内外倶ニ紫ニシテ透明ナルヲ貴ブ、外ハ紫ナルハ下品トス、ソノ形チ、ミナ六稜ナリ、蠻舶及ビ本邦處處ニ五稜ト云ハ、脊輪リナリ、白石英出ル國々ニ皆アリ、佐州石州ニ上品アリ、江州奥州南部、越州諸國ニモ上品アリ、ソノ兩頭尖ヘル者ハ様ナベレ、白石英、黒石英ニモ此形アレドモ、其品ノ藏ニ兩頭細尖類ト云、國ニモ兩頭尖ノ者ヲ貴ブ、故紫石英ニ於テ此形アルヲ貴ブナリ、含水ノ紫石英アリ、又舶來ノ紫石英古渡ハ甚ダ上品ニシテ明瑩ナリ、今來ルモノハ緑色ト紫色ト相雜リ、或ハナキリ、ザラザラ石ノ如クニシテ、瑩モナク、透明ナラザルモ雜レリ、下品ナリ、故ニ和産ヲ勝レリトス、

陶弘景曰、青綿石ハ黒色ノ者ヲ云、寰宇記ハ義駐亀茲子天下錦ニ出、

增サラサイシハ美濃赤坂ヨリ出ス、石質蠟石ノ如ニシテ、溫潤ニシテ光澤アリ、白色ニシテ黃色ヲ交ヘ、紅點アリテ、朱砂ノ如ク、青紫色ヲ帶テ紋理ノ如シ、五色相雜ルコト、恰モ印華布ニ似タリ、故ニサラサイシト云フ、近年豐後ニ出ル者、北野菅公ノ廟ニ在リ、甚觀美ナリ、是レ昌化縣志ノ圖書石ナリ、曰、圖書石紅點若硃砂、亦有青紫、如玳瑁、良可愛玩、近則罕得矣、

〔新編常陸國誌 六土產 十一〕石英 久慈郡瑞龍村、多珂郡諏訪村ヨリ出、

〔本草綱目啓蒙 十石〕水中白石 メクライシ　メツブシ　水イシ　メクラ水精、コレハ流水中ニ多シ、水底ニアリ、見キメ白キ石ナリ、形大小アリ、取テ日ニ映ジテスカシテ見レバ、瑪瑙ノ如クスク色、水精ホドニハ透明ナラズ、故ニメクラ水精ト名アリ、コレヲ糞燒ノ藥ニモ用、又硝子ニモ用、故ニビイドロ石トモ云、唐ニテハコノ石ヲ仙術家ニ服スト云ナリ、

一名 水中石子 證類 水中圓石 同

〔紀伊續風土記 物產 一〕水中白石 本草

牟婁郡田邊莊鉛山村湯崎サキの濱に產す、

〔採藥使記 信州 下〕黑任曰、信州和田峠ト云フ所ニ星石ト云フ物アリ、其色黑クシテ水晶ノ如ク透キ、其中ニ白キ星ノ形アリ、 丈生按ズルニ、是レ西國ニテ墨水晶ト云フ石アリ、此ノ類ナルベシ、

〔倭名類聚抄 十一 玉〕瑠璃 野王按、瑠璃、（璢璃二字、俗云留利）青色而如玉者也、

〔箋注倭名類聚抄 三 玉石〕見職員令典鑄司掌、空物器吹上上等、所引文今本玉篇不載、按漢書西域傳、罽賓國出珠璣瑠璃虎魄璧流離、注、孟康曰、流離青色如玉、顏氏畫本之、顏師古曰、魏略云、大秦國出赤白黑黃青綠縹紺紅紫十種流離、孟言青色、不博通也、此蓋自然之物、采澤光潤、踰於衆玉、其色不恒、今俗所用、皆銷冶石汁、加以衆藥、灌而爲之、尤虛脆不貞實、非眞物、又按、瑠璃胡語、言璧流離、又漢書地理志西域傳、漢碑武梁祠堂畫象、吳國山碑皆同、或省言璧瑠、見說文、或省言流離、見揚雄羽獵

賦彼塗作瑠璃字也、今俗所謂瑠璃、土呂知利氏所謂瑠璃、不貞實者、蓋頗黎利也之譌轉也、梵書亦然、佛經所説作吠瑠璃、一作毘琉璃、吠琉璃也、不空羂索經作吠瑠璃、梵語翻名作吠琉璃野、玄奘所譯諸經作吠瑠璃、又譯曰吠瑠璃者、言其國有此寶也、或云吠瑠璃、亦作鞞瑠璃、皆梵音之譌轉也、今我俗呼瑠璃曰比伊杜嚕、比伊杜嚕、其梵書所謂吠瑠璃、皇國今俗呼爲以土呂、亦是譌轉也、

〔倭訓栞前編三十五〕るり　瑠璃也、○瑠璃大秦國に出て、金銀、瑠璃及五色の品あり、天竺の玉也、宋史日本傳に、成尋の獻る内に、白瑠璃あり、續氏にも見ゆ、今世に用るは多くは硝子也、凡そ瑠璃といふは紺碧を帶ていふ辭なるを、世に紺瑠璃のみを其色とす、是名義集に瑠璃此云青色寶の寶玉類にも瑠璃青色猶如玉者也と見ゆ、紺青色也といへり、梵書に吠瑠璃とも見えたり、

〔和漢三才圖會六十玉石〕瑠璃　火齊　與火珠同名

本綱瑠璃、其本是石、以自然灰治之可爲器、石不得此則不可釋、其色有白黃黑青綠碧縹紅紫十種、此乃自然之物、澤潤光采、踰於衆玉、今俗所用者、皆鎔石汁以衆藥灌而成之、虛脆不貞、佛經所謂七寶者、琉璃、車渠、瑪瑙、玻瓈、眞珠是也、格古論云、石琉璃出高麗、刀刮不動、色白厚半寸許、可點燈明於牛角者、

山高み我立杣に立置しるりのとばそはくもるともなし　家隆

按瑠璃本有數色、今人以爲玻瓈、唯玻璃稍綠色也、然未見眞琉璃與玻瓈之二石、多是硝子以僞者也、中華亦然、

〔和漢三才圖會六十玉石〕火珠　火齊珠　火齊珠　比止利太末

本綱引唐書云、東南海中有羅刹國、出火齊珠、大者如雞卵、狀類水精、圓白照數尺、日中以艾承之則得火、用灸艾炷、不傷人、今占城國有之、名朝霞大火珠、

按火珠、卽水精圓成者也、舟人用爲洋中之寶、其珠如有少疵則不成、今用硝子作之亦能得火、其圖

玻璃

白中實、或乎圓面徵凸、如眼鏡者有之、蓋火珠則水精也、

〔令義解一職員〕典鑄司

正一人（掌下造ニ鑄金銀銅鐵、塗ニ飾瑠璃、玉作、及工戸戸口名籍事上、謂、瑠○璃○、大○寶○珠也、）

〔本草綱目譯義入玉〕玻璃

ルリト云ナリ、和產ナシ、天竺ニハアリ、七寶ノ中ニ入テアリ、七寶ニモ說アリ、金銀、琉璃、玻璃、馬腦、珍珠、瑪瑙、（諸說ノ說）

〔大和本草三金玉土石〕硝子

玻璃ハ大秦國ニ出ヅ、五色アリ、是石質ニテ自然ノモノナリ、非人巧、今俗所用硝子ヲモ玻璃ト云、是ハ藥物ヲ以作ル、玻璃ノニセ物ナリ、近來此製法中華ニ傳リ、玻璃器、火齊珠、南蠻珠、大秦珠等ノ名アリ、皆ビイドロ也、日本ニモ玻璃ノ製法アリ、通鑑綱目ノ註ニ曰、玻璃ハ近世亦有火成者、尤瑩蓋不被也、又遵生八牋ニ、硝子ト云物即是也、本草水精ノ集解ニ、藥燒成者有氣眼、謂之硝子、一名海水精、又玻璃ノ集解云、今ノ俗所用皆鎔冶石汁、以衆藥灌而爲之、虛脆不眞ト、今按皆是ビイドロナリ、

〔白石遺考入〕玉考

玻璃　此物玻瓈と一物に而西國の寶也、玉石の類にて土中に生すると云、亞爭の地より出る由、後漢書に見へ、大秦國より出る由、魏略に見ゆ、今世にある物は、藥玉とて藥にて製れる物と見へたり、（番語にビイドロといふ事也）

○玻璃ノ事ハ、猶本產業部玉工篇硝子ノ條ニ在リ、

瑠璃

〔倭名類聚抄十一玉〕瑠璃　說文云、瑠璃（留利二音）色赤玉、出於海底山中也、

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕原書玉部、作色赤生於海、或生於山、太平御覽引同、而海下有中字、希麟音義

引作生海中、圖本色白、琅玕青色、引作圖本色、琅玕生於海底、或出山石中、色各少異、蘇恭本草注云、假玉紅潤、中多有孔、亦有無孔者、琅玕生海底、作枝柯狀、明潤如紅玉、中多有孔、亦有無孔者、枝柯多者更難得、上林賦郭璞注、珊瑚生水底石邊、大者樹高三尺餘、枝格交錯、無有葉、開元占經四艦占篇、引海物異名記云、王莽時有……出太平御覽、引作珊瑚鉤…一脊之蚨、蓋是網誤、

(重修本草綱目啓蒙〈三十八〉石類)珊瑚 サンゴ 一名赤珊瑚〈[illegible]〉 烽火樹〈[illegible]〉 烽火柏〈[illegible]〉 紅珊

珊瑚〈[illegible]〉

海底ノ石ニ生ズ、海中ニアリテハ軟ナリ、水ヲ離レテ風ニアタレバ、堅クナルコト石ノ如シ、舶來ノ品ニ阿蘭陀ト云アリ、色濃紅賓ニシテ光アリ、縦ニ木賊ノ如キ細ナル紋アリ、コレヲ上品トス、宗渡珊瑚有紅油色者、細縦文可愛ト云モノ是ナリ、廣東新語ニ、紋細縦皆色纖紅、如血絲者有光澤者爲貴ト云、紀州熊野ニ微紅色ナルモノアリ、舶來ニ一種白ダマト云アリ、色深赤縦理ナレ、是レ下品ナリ、凡舶ニアル類アルヲ眞トス、錐ナキヲ僞トス、又舶僞成ハ鹿角ヲ用テ、紅花汁ニテ煮染ル者アリ、又珊瑚ニ似タル玉南京ヨリ來ル、紙ク石ト云、是モ骨縦理ナレ、此外蠻物ニテ種々僞物アリ、其ノ珊瑚ハ紀州、勢州、豐州ニテ、海ニ網ヲ下シテ網ニ掛リテ上ルコトモアレドモ、皆至テ小キ枝ノ折レタルナリ、僅ニ尺リ二三分許、長サ五六寸アリ、又白珊瑚アリ、是ハ微クレタ、赤ガ紅ナラザルモノナリ、外ニ縦文有テ、折レバ其心微紅色ナリ、消魂白魚齒ト云フ是ナリ、漢名白珊瑚〈[illegible]〉相州ノ江島、紀州ノ熊野ヨリ海ニ出、又海濱ニ二三分許ニ砕タルモノアルヲ拾ヒ集メテ、珊瑚ズナト云、又別ニ海ヒバアリ、漢名ハ石帆ト云〈[illegible]〉枝多ク網ノ如クナリテ叢ナレ、外朱ニシテ内ハ硬ク骨アリ、五色トモニアリ、赤黄二色ノモノハ其骨皆珊瑚ナリ、故ニ石帆ヲ砕キ、砂盆ニ入レ、水ヲ加ヘ、磨スレバ、皮ハ皆脱レ去テ骨バカリ殘リ、長サ二三分アリ、コレヲモ珊瑚ズナト云フ、盆玩ノマキ砂ニ用ユ、其價賤ナル者ナリ、其餘ハ骨ノ黑ク白キ骨ナレ、故ニ枝ナレ、マダ海中ニテ淵水ニ晒セラレタ、

自然ニ成リタルモノアリ、最モ佳ナリ、又時珍曰有黒色者ト、是物理小識ノ黒珊瑚ニシテ、諸州ヨリ出ルウミマツト云モノ也、色黒クシテ硬ク光アリ、又琉球珊瑚、一名島珊瑚、一名又熊野珊瑚トモ云、形珊瑚ト同シテ、膚ニ細カナル穴アリ、漢名海松ト云、物理小識曰、海松全相似、惟有鍼眼、

〔白石遺考八〕玉考

珊瑚　此物經傳の中には見へず、漢の代より此名聞えたる歟、山に在て琅玕と云ひ、海に在て珊瑚と云由見えたり、さらば此物もと一物にて、其生する所に而其名異なるにや、禹貢爾雅等に琅玕の事見へたり、其代に南海の物いまだ中國に至らざるなるべし、琅玕と一物ならんには、是も右の玉にするもの也、一説に又海中の樹也、これを火樹とも云由見ゆ、

〔紀伊續風土記物産一〕珊瑚(本草和名鈔綱目ノ二種)　牟婁郡田邊庄、海中に大なる者を產すといひ傳ふれども詳ならず、小なる者は總に牟婁郡海中處々に產す、今珊瑚砂といひて、盆石にそふる者、多くは石帆の碎けたる者にして眞物は少し、

熊野珊瑚(玩石家にて、琉球珊瑚、牟婁郡にてサビ、紅、緑珊瑚と同形にして、黒細帶しからず、南に針鐵あり、物理小識に海松といふ、)　牟婁郡海中に多く　黒珊瑚(物理小識、色黒く堅くして光あり)　本國海中處々に多し

〔佐渡志物産五〕珊瑚

土人佐渡珊瑚樹ト名ヅケ、海底ノ石ニ生ズルモノ、漁網ニカヽリテ上ルコトアレドモ、桃紅色ニテ美トスルニタラズ、所謂似テ非ナル物ナルベシ、

黒珊瑚トモ云ベキモノ、漁網ニ掛リテ上ルヲ、方言海松トイフ、土人琢磨キテ愛翫スルナリ、前ノ佐渡珊瑚樹ニ比スレバ、尤澤麗ハシキモノ也、

〔西遊記三〕珊瑚

又珊瑚珠も熊野の海中より出づ、是も甚小にして、緒ジメなどの玉には造りがたし、これを以て

見れば寶鏡より勝る事ある故實し、替玉國をとらしと請求めなば、あらざるも叶ふも有べからず、

〔重修本草綱目啓蒙 八 石〕青琅玕 アヲキイシ 一名青珊瑚(物理小識) 青珠琅玕(同上) 白珊瑚(石譜)

釋名 石闌干(綱目) 石珠(別錄)

形狀ハ珊瑚ニ同ジクシテ青色ナルモノ也、古ハ舶來アリト云、今ハナシ、本邦ニテ呼ブモノハ、青色ノ礫子ニテ石ノ上ニ從テ生ジ、透明ナラザル礫ニ貫クルモノナリ、又近來ハ本邦瑪瑙ノ生ズル山ヨリ種類アリテ出ス、鍾乳ノ形ノ如クナルモノヲ出ス、留眞ト云フ瑪瑙ノ類ナリ、南人圖ニシタ類ナルヲ石髓トシ、其クシタ類ノ微ニ青色ヲ帶ルモノヲ青琅玕トス、是ハ既ニアリ、然レドモ眞ニ非ズ、刺京ヨリ來リシ青瑪瑙ナドノ類ナレドモ枝ナシ、集解珊瑚ハ玉ノ美ナルモノナリ、

〔倭名類聚抄 十一 珠玉〕琥珀 兼名苑云、琥珀、〈虎白二音〉一名江珠、

〔箋注倭名類聚抄 五 珠玉〕古本注本部琥珀讀久波久、曾我物語二集山府君說亦云久波久、並與此所載同、本草和名云、和名阿加多末、一名阿末多末、本草和名引同、按博物志云、琥珀一名江珠、兼名苑亦本之、琥珀古作虎魄、漢書西域傳、罽賓國出虎魄、急就篇、係臂琅玕虎魄龍、後漢書西南夷傳、哀牢夷出虎魄、又王符傳及廣雅皆作虎魄、後人从玉、與瑪瑙之瑪同、陶弘景曰、舊說云、是松脂淪入地千年所化、今燒之亦作松氣、亦有煮雞子及青魚枕作者、並非眞、惟以拾芥爲驗、證類本草引蜀本注云、又說一說楓脂入地千年變爲琥珀云々、陳藏器曰、琥珀之爲物、乃是木脂入地千年者所化也、但松木不及楓木有脂而多經年歲、故不自其下[illegible]也、

〔曾我物語 二〕たいざんふくんの事

大こくに大わうあり、ろふかくをすきたまひて、おけくれくうでんをつくり給ふ、〈中略〉にはにはさんごこはくをしきみて、〈下略〉

〔重修本草綱目啓蒙 二十八 木〕琥珀 コハク(和名抄) 今通名 一名松精(名物法言) 拾芥先生(事物異名) 大蟲

琥珀外國略要　虎珀珠同上　頓牟草物譜錄

舶來アリ、和產アリ、其品一ナラズ、時珍ノ說ニ、色紅而且黃者名明珀ト、本草原始ニハ、紅透者名明珀、俗呼血珀ト云、本草彙言ニ、血珀深紅如血色ト云、此ヲ血ズキト云、金珀ト云、上品トス、正字通ニハ、淡者名金珀ト云、通雅ニハ、從雲南來、而淡者曰金珀ト云リ、是ハ和ニ銀珀ト呼ビ、次品トス、卽ココニ色黃而明瑩者名蠟珀ト云者ナリ、又コレニ次テ淡黃ナルヲ、和ニ蠟珀ト云、行厨集ニ、色蠟黃者曰黃珀、卽俗所謂蜜蠟也ト云、本草彙言ニ、一種蜜蠟珀、臭之有蜜蠟香、色黃白ト云リ、凡ソ舶來ノ琥珀ハ皆透明ナリ、和產ハ濁テ透明ナラザル者多シ、是ミナ奧州鹿角郡南部久慈村山中ノ產ナリ、金蠟黑色淺深アリ、燒時ハ臭氣アリ、然レドモ高麗倭國者尤好ト、時珍云ヘリ、舶來ノ者ハ燒バ香氣アリ、是所謂ル香珀ナリ、琥珀ノ中、蜂蟻蠅蚋等ノ入リタルアリ、形色生ノ如シ、卽殼ノ說ノ物象珀ナリ、本草彙言ニハ、象物珀ニ作ル、和ノ琥珀ノ中、黑色ヲ帶ル者ヲ、俗間ニテ薰陸ト名ケ貴ル、唐山ヨリモ薰陸トナシ渡ス故ナリ、然レドモ是ナラズ、黑色ヲ帶ル者ハ琥珀ノ下品ナリ、其深黑色ナル者ハ次ノ條ノ瑿ナリ、唐山ニテ古ヨリ、松脂入地千年而成ト云ヒ、或ハ茯苓千年而化ト云、或ハ海松木中津液ト云ヒ、或ハ楓木脂膏所化ト云ヒ、或ハ桃膠化ト云フ、本草彙言ニハ、楓脂珀桃珀ヲ載セ、惟東南海外、諸木脂化珀者有之、西北方無有也ト云、然レドモ久慈村ノ山ハ樹木ナク、燒山ノ如シ、其山ヲ掘リ、兩石ノ間ニ介レテ、長ク脈理ノ如ク續キテアルヲ穿テ出スト云又松化石ノ中心ノ脂ノ化シタル者、紅黃白數品アリ、皆琥珀ノ如ニシテ、堅ク、瑪瑙ニ同ジ、是石珀ナリ、慈石鍼ヲ吸ヒ、琥珀芥ヲ拾フハ、古ヨリ云ヒ傳ルコトナレドモ、拾芥ハ琥珀ニ限ラザルコトナリ、今肆中ニ下等ノ硫黃ヲ他物ノ末ト合セ、塊トナスモノアリ、金蠟石ト名ク、布上ニテ磨リ溫テ、塵埃ノミナラズ、檳扇烟管ノ類ヲモ吸ヒ寄ス、

瑿　タ。ロ。ゴ。ハ。タ。

奥州南部ヨリ出ル琥珀ノ中ニ深黒色ナル者アリ、コレ硻ナリ、時珍ノ説ニ従フベシ、蘇恭ノ説ノ
木堅及曹微ノ説ハ皆石異ナリ、蘇恭ノ説ノ石堅ハ烏石ナリ、

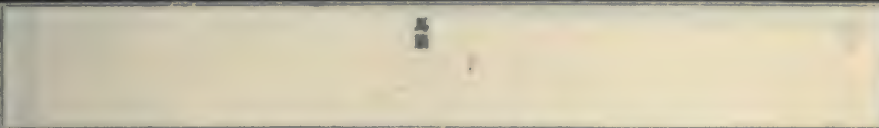
〔本草綱目啓蒙〕琥珀、
今所渡ノ者、金珀蠟珀鱉珀ノ三種アリ、皆黄色ニ依テ名ク、
時珍曰、茯苓千年化琥珀之説誤也、格古論云、楓木津液多年所化、色黄而明瑩者名蠟珀、色若松香
紅而且黄者名明珀、有香者名香珀、出高麗倭國者色深紅、有蜂蟻松枝者尤好、
倭國深紅ト云者ハ、是日本ノ薫陸ノコトナルベシ、外ニ琥珀ト云ベキ者無シ、内ニ蜂蟻モアリ、
蓋ワモ松脂類蘇木ト云ヘドモ平中ニ樹リタ不冷然レドモ火ニ焚タ時ニ、琥珀ノ香ヨリ来ル者
ト知ノ薫陸ト香気甚別ナリ、時珍モ不知之歟、
薫陸ノ中ニ質ノ金珀ニ似タル者アリ、焚クベ気別ナリ、香ヨリ来ル者ハ香レノ如ハ臭シ、又蠟珀
ニ似タル者モアレドモ質タ不透明、

〔白石遺考八〕玉考
琥珀 石心翁也又松脂楓脂の地に入て化する所とも、又純仁見鉄の化する所とも、又蟻血の化
する所とも云、今は純粋の脂にて造りなすもの多く見へたり、

〔採薬使記上〕野呂任曰、奥州南部久慈村ヨリ琥珀ヲ出ス、黄色晶レル所ノ者ハ是ヲ薫陸ト云フ、或ハ
黄白色ノ物モアリ、山ヲ穿タ掘リ出スナリ、其時大石アリタ、其間ニ琥珀ノ如ク長ク繍タト云フ、
其山ノ樹木ナク、禿山ノ如シ、
先生按ズルニ、黄色晶レト云ヘルハ、本草ニ載スル所ノ蠟ナルベシ、和俗ニ黒水晶ト云フ

〔毛吹草四〕陸奥 琥珀、

〔倭名類聚抄十一〕瑪瑙 唐韻云、瑪瑙〔音馬腦〕、石次玉也、



馬腦

〔箋注倭名類聚抄 三玉石〕玉篇硨磲石次玉、陸氏蓋依之、所引釋地文今本作硨磲、俗字、藝文類聚、太平御覽引並不從石、與此合、證類本草引海藥云、車渠、集韻云、生西國、是玉石之類、形似蚌蛤、有文理、沈存中筆談、海物有車渠、蛤屬也、大者如箕、背有渠壟、如蚶殼、故以爲器、緻如白玉、生南海、尚書大傳曰、文王囚於羑里、散宜生得大貝、如車渠、以獻紂、鄭康成乃解之曰、渠車罔也、蓋康成不識車渠、謬解耳、尚書顧命、胤之舞衣大貝鼖鼓在西房、孔傳、大貝如車渠、正義云、伏生書傳云、散宜生之江淮取大貝、如大車之渠、是言大小如車渠也、考工記、謂車罔爲渠、大小如車罔、其貝形曲如車罔、故比之也、

〔類聚名義抄 三〕車渠洛胡拉渠 或本作璖、車渠、此云白色寶、今名蚌璖、之故名車渠也、倭人字加玉石、 尚書大傳云、大貝如車渠、又似蚌之故名車渠也、

〔謡曲〕椰告

上歌同

庭の砂に金銀の〳〵、玉をつらねて敷妙の、いはへの錦や瑠璃の扉、硨磲の行桁瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山もよそならず、君の恵みぞ有難き〳〵、

〔倭名類聚抄 十一玉〕馬腦　廣雅云、馬腦、俗音女石之次玉也

〔箋注倭名類聚抄 三玉石〕今本作碼碯、玉篇碼碯石次玉也、然藝文類聚、太平御覽引並不從石、與此合、從石俗字、按證類本草引新補云、馬腦紅色似馬腦、赤美石之類、重寶也、生西國玉石間、來中國者皆以爲器、

〔本草綱目譯義 八玉〕馬腦 雛名ナリ

馬腦ハ唐ヨリモ渡ル、上品ナリ、日本ニモタクサンアリ、加賀越中北國ヨリ上品ノモノ出ヅ、又奥州津輕ヨリモ出ヅ、雲州ノ玉造ト云處ヨリモ出ヅ、水戸ヨリモイヅ、江戸ニテ多ク火打石ニ用ユルモノナリ、加賀ノヲ上品トス、越中ノ奥ニ馬腦山アリト云、今ハ此山ニ入ルコトナラズト云、品類多シ、玉ニヨク似タルモノナリ、水精ノ如クニムカウヘハスキトウラズ、玉ノ如シ、堅クシテ切ルコトアタワズ、コンガウシヤニテスルナリ、唐ニテハヤワラカニスル法アルニヤ、色々ノ細工

ワレタ處ニテナリ、日本ニテハツロメニコル計リナリ、時珍ノ說品類ヲ多クアゲ、有柏枝瑪瑙ト云ハ、白キ瑪瑙ノ中ニ、自然トシノブノタグヒアルモノアリ、シノブ石ト云、シノブヨリハ細ク、コクノ如ク枝ヲ分レタアルナリ、如此モアリ、纏絲ヨリ來ルモノ別レタ見ゴトナリ、有夾胎瑪瑙ト云モノハ、スカシテ見ルトキハ、赤ク見ユルモノ此ナリ、截子瑪瑙ト云ハ、黑ト白トマジリタアリ、黃褐寶ニ巾子瑪瑙ト云モノナリ、合子瑪瑙ト云ハ、黑キ瑪瑙ニ白キスヂアリ、ロヤク王寺硯石ノ如キ縞アリ、錦江瑪瑙ト云フハ、錦ノヤウニ斑文アリ、纏絲瑪瑙ト云ハ、赤ト白トマジリタル絲スヂノ如クイトマキ寄タルヤウナルスヂアリ、此ヲクズ瑪瑙ト云、上品ノモノナリ、

〔多識編〕瑪瑙今案久末乃美豆伊呂乃多末

柏枝瑪瑙花　夾胎瑪瑙　截子瑪瑙　合子瑪瑙　錦紅瑪瑙　纏絲瑪瑙

〔[illegible]工錄〕今瑪瑙といふものを見る、偏に雲津硯石なり、公卿の用ひ給ふめなふの帶といふは、いかなる物にや、

〔秋長日記十二〕瑪瑙石

秋田阿仁山中產含水石、土人常覓石而采之、圓白如瑪瑙、大小不一、承明視之、其內皆含水、或有如龍者在其中、龜腹之間蜿蜒上下、余嘗得數枚、然大者絕少、此物瑰環石也、周公謹雲煙過眼錄曰、瑪瑙石嘗水石、瑪瑙色二寸許、通透石其、觀之有水在內、搖之則上下滾動、明曾典有鑿水玉、蓋亦此物、又格古要論曰、瑪瑙有鑿水花紋、謂之鑿水瑪瑙、今考此物、此瑪瑙一種、亦含水者、

〔增訂豆州志稿七上石〕瑪瑙

重寺田下仁科本郷下賀茂等ニ少ク產ス、本郷及下賀茂ニ產スルハ大石ヲ割リタ之ヲ得、其色或ハ黃或ハ黑、

〔佐渡志五物產〕玉髓

金剛石　猫睛石　石榴石

加茂郡山谷ノ中ニテ稀ニ得ルモノヲ見タリ、多クハ瑪瑙ノ吹出タルナリ、又羽茂西三川椿尾村山中ノ砂石ノ中ニ生ズルモノ、土人石槻トイフハ今ハ甚稀ナリ、

〔紀伊續風土記物産一〕瑪瑙（本草和名鈔、倭名女奈字）國中海邊處々にあり、白瑪瑙、貴瑪瑙は多く、竹葉瑪瑙、纏絲瑪瑙は稀なり、

〔重修本草綱目啓蒙五玉石〕寶石

津輕舍利ノ種類

猜、一名亞姑（輟耕錄）　星孥鐵（事物紺珠）　同々石（事物異名）　猫睛石、一名猫兒眼（留青日札）　走水石（明[illegible]上、下品ノ名、）

鶻負（[illegible]）　石榴子、一名紅馬肯的石（輟耕錄）

津輕舍利ハ、奥州津輕今別母衣月ノ海中ニ舍利ヲヤト云石アリ、瑪瑙ノ類ナリ、舍利コレヨリ生出シテ、海濱ニフク、ソノ形圓小ニシテ透明ナリ、ソノ色白、或黄白色、或紅色、或斑駁、數種アリ、波ニユラレテ海底ニ沈ルモノ、又波ニテ磯邊ヘウチ揚グルヲ拾ヒ得テ書齋スレバ、年ヲ經テ子ヲ生ズ、即瑪瑙ノ花ナリ、佛家舍利塔中ニ收ムルモノ多ハコレ也、又寶石ノコト、天工開物ニ詳ナリ、ソノ玫瑰ト云ハ、津輕舍利ノコト也、他書ニ玫瑰ト云ハ赤キ玉ノコトナリ、ハマナスヲ玫瑰花ト云モ、實ノ色赤玉ノ如キヲ以テ名ク、其ノ寶石ハ坑井中ヨリトリ出スト云、種類多ク、五色共ニ數名アリ、輿地便覽及類書纂要ニ詳ナリ、舶來ニ葡萄石ト云モノアリ、是物理小識ノ螺旋頭ナリ、津輕舍利ノ類ニシテ、大サ葡萄ノ如シ、故ニ名ク、今別ノ海邊ノワダル石モ葡萄石ノルイニシテ即馬腦ナリ、又寶石ノ一種ニザクロ石ト云アリ、又ジヤクロ砂トモ云、コレハ紅毛ヨリ來ル、其形安石榴ノ子ノ如ク、色赤シ、又黒ヲ帶ルモアリ、壺玩ニ用ヒテ最美麗ナリ、此即集解ノ石榴子ナリ、然レドモ硝子ニテ僞ルモノ多ク、眞物ハ稀ナリ、奥州舍利濱、讃州鉄子口、及蝦夷等ニ、鑽産ニ似テ下品ナルモノアリ、又舶來ニトンボウ玉ト云アリ、コレハ黄白色ニシテ、正中ニ猫睛ノ如キ點アリ、是

蠻師ノ錫謂石ナリ、又淡青色ノ硝子ニテタツヲノ如クモノアロレタヘ、形花ノ意アルアリ、俗ニタコリ玉ト云、是ヲトンボダ玉ト云ハ非ナリ、是蠻人ノ衣服ノ粧飾ナリ、蠻語石ノコトハ、良質硬寶、物理小識ニ詳ナリ、物理小識曰、寶石出西番、中有生水中者、中含紹光一種黃酒色者曰貓睛、大者虎睛、又有四種、赤有曾青綠水色黑色、又無紹光曰翡子姆鵝醬走水石、

貓睛石ハ、寶石ノ黃色ナルモノヲ云、奧州杜前ヨリ出ス、ムレノストト云者、コレニ似タレドモ、別ナリ、ヘレノスハ奧州ノ方言アタダマ、又杜前ダマトモ云、青緑モノナリ、然ドモ真物スクナレ、

〔東遊記後編一〕舍利濱

奧州外が濱にウトウといふ所あり、此海邊に舍利濱あり、小石濱なるが、其中に舍利石まじれり、白きあり、飴色なるあり、大さ豆のごとく、米粒のごとく、明徹潤澤甚愛すべし、此所を通りし日は天氣殊に朗なりしかば、濱邊に遊し舍利石をひろひ遊べり、同國近付の者杯は、此舍利石をひろひ、大に賞翫する事なり、殊に奇なる事は、此濱の磯近く海中に、長さ五十間程の舍利母石あり、此舍利母石より常々舍利を産し、其舍利をもて此濱に打あげ、古今絶せず、此故に舍利多しとぞ、其舍利母石、水際より餘程深く沈み隔て、濱邊よりは見えがたし、此邊の漁父に頼めば、海底に沈入して、鑿にて打缺り取あがる事なり、此故に此舍利母石を得る事は難かりし、されど珍敷物なれば、余も種々の舍利の舍利母石貳ツ三ツを得て歸れり、其全體の色は薄黑く、土の化したる石のごとくにして、其中に米粒のごとき小舍利夥數孕めり、誠に奇なる石なり、又此舍利濱の先きに今別といふ所あり、貳三里も隔れり、此所の濱を瑪瑙濱といふ、此濱に入る前後に、自然の石門あり、甚奇境なり、夫より內凡半里餘瑪瑙石の濱なり、尤常體の石も半まじれり、凡石も瑪瑙も大さ大抵拳の指より雞卵或は小きは豌豆のごとし、皆々甚明徹にして、京都にて細工にするもの多く、世に津輕玉といひ、又は寶石ともいふ、人馬往來する濱なれば、足元に玉石みち〳〵、殊に日

光にきらめきて目眩する計也、其うるはしきに心留りて過行べくも覺えず、程よきはひろひ取りて袖に入る程に、雨の袂やぶるゝ計也、されど長き旅路携へ歸りがたく、毎夜三ツ四ツづゝ人に與へ、京まで携へ歸れるは纔ばかり也、かくのごとき濱京近くにあらましかば、守る人も嚴敷門戶抔もありて、みだりに見る事だにも許さまじきを、かゝる人なき邊地なれば、道行人の取に任せ、誰壹人禁ずる者なし、めづらしき地なり、

〔本草一家言四石〕貓睛石。

和名猫睛玉、曹昭格古要論曰、猫睛出南番、性堅質如酒色、睛活者、中間有一道白横搭轉側分明、與猫兒眼睛一般者爲佳、故云、若眼睛散、及死面不活者、或青黑色者、皆不爲奇、大如指面者尤好、小者價輕、

〔紀伊續風土記物産一〕猫睛石ヽガメ、ヲヤマ、格古論ト同じ、與ノ釜形なり、牟婁郡那智并二色濱に稀にあり

〔本草一家言石四〕石榴子。

倭奈呼、榴石、以充鷹口用、曹昭格古要論曰、石榴子出南蕃、類瑪瑙、色紅而明瑩、如石榴肉相似、故名石榴子、

〔倭名類聚抄一石〕石　陸詞云、石䃮土也、常尺反、和名之

〔箋注倭名類聚抄一山石〕藝文類聚引、楊泉物理論云、土精爲石、說文石山石也、在厂之下、口象形、釋名、山體曰石、石格也、堅捍格也、

〔類聚名義抄六石〕石常隻反、イシ、アナ、アクレ、

〔伊呂波字類抄伊地儀〕石イシ、土也、盤石、

〔日本釋名中水火土石金玉〕石　仙覺が曰、いは發語の詞、しはまつむ也、篤信謂、いやしと云意なるべし、石は金玉よりいやしきゆへ也、中を略せり、

〔東雅二地理〕石イシ　義不詳、舊說に石をイシといふは、イは發語之詞、シといふは石はちひさけれ

ども、水に浮ぶことはなし、必ず沈むが故に、シといふなりといへり、[illegible]
[illegible]、されど丹といひ、石といひ、磯といふが如きは、其語の轉せしに
て、其實は異なるとも見えず、石の字イへとも讀み、イソとも讀む、天石窟戸、石上振之社などしるさ
れし即此也、[illegible]
[illegible]
[illegible]、又礫石をサヾレシとも、サヾレイシともいひて、礫の字を用ゆるは、サとは細なり小なり、サヾと
いひしは小にして小しきに細にして細かなるをいふ也、レといふは助語也、レは即石也、亦萬葉
集抄に、古の時に石をタリといひしは、山陰の方言なりと見えけり、仁徳天皇の御歌に、イクリと
いふ事のあるを、釋にはクリは石をいふなり、イとは助語也と見えしかば、此語國來る所久しき
事也、[illegible]土塊をツチクレといふも、土の石に似たるをいふ也、[illegible]
〔倭訓栞 前編 二 伊〕いし 石をいふ、いは發語、しは下也といへり、日本紀に下をしとよめり、下津石根
などいふ、此義也とぞ、
〔雅言名物考 十 九〕石 いし
今思ふに、伊志の訓は伊知之の中略歟、又いはとも相通にして訓めり、
〔和漢三才圖會 五十 九〕金石
本草綱目曰、石者氣之核、土之骨也、大則爲岩巖、細則爲砂塵、其精爲金爲玉、其毒爲礬爲砒、氣之凝也
則結而爲丹青、氣之化也、則液而爲礬汞、其變也、或自柔而剛、乳鹵成石是也、或自動而靜、草木成石是
也、飛走含靈之爲石、自有情而之無情也、雷震星隕之爲石、自無形而成有形也、[illegible]日本本草
綱目所載金石凡四類、曰金、曰玉、曰石、曰鹵、[illegible]
按石[illegible]者土也、大石曰磐、[illegible]爲山骨、水火土石爲地之四象、凡石表其皮便枯槁、不復潤澤生、髙

者也、凡在土中水中石皆能長、

水中細石、和名佐々禮以之、雖庵爲岩、伊波保、俗以岩爲巖之訓、○中略

凡磨石欲切鑿者、煉芋塗於石上、乘熱切則易、又用金剛石琢磨則石肌美好、如有墨著於石難脱、用菱蔛根可擂之、

凡石藥火煅紅入醋能爲末、

凡煮石法、用胡葱搗爛、以砂鍋煮之、水減則加水、煮三伏時以石柔爲度、用其石泥作器、再以甘草水煮一伏時則堅硬如故、見事林廣記、○下略

〔日本山海名產圖會二〕石品

石は山骨なり、物理論云、土精石となる石は氣の核なり、氣の石を生ずるは人の筋絡爪牙のごとし云々、されども其石質においては、萬國萬山の物悉く等からず、是風土の變更なれば、卽氣をゝつて生ずることまかり、又草木魚介皆よく化して石となれり、本草に松化石、宋書に柏化石、稗史に竹化石あり、代醉編に、陽泉夫餘山の北にある靑塞數十步草木を過て皆化して石となる、又イタリヤの內の一國に一異泉あり、何の物といふことなく、其中に墜れば半月にして便ち石皮を生じ、其物を裹、又歐邏巴の西國に一湖有り、木を內に插さんで土に入る、一段化して鐵となる、水中は一段化して石となるといへり、本朝又かゝる所多し、凡塞國の海濱湖涯いづれもまかりす べて器物等の化石を其所になると知るべし、又石に雜うちて雨を降し、雨をやむる陰陽石あり て、日本にても寶龜七年、仁和元年、及東鑑等にも其例見えたり、江州石山は、本草にいへる陽起石にて、天下の奇巖たり、又日本紀雄略の皇女伊勢齋宮にたゝせ給ひしに、邪陰の御うたがひによりて、皇女の腹中を開かせ給ひしに、物ありて水のごとし、水中に石ありといふことみゆ、是醫書に云石瘕なるべし、然ば物の疑なること、理においては一なり、品類におゐては鐘乳石、蘇石、寒石、

滑石、紫石、雨石、方解石、寒水石、浮石、其他の奇石、怪石、動物などは、殊に近江の人の編作せる雲根志に載られば、爰に略するに及ばず。

いさごといふ和訓は、しといふが本語にて、シャリ、シブム等にレフタリなどいふごとく、物の碎り定りたるの意なり、いさへとは石の碎なり、細の字を書ならへり、かならず大石にて齒牙のごとく鋭利の意なり、いへるとは鋭の字に充て、細、石鋭々といひて、おなじく尖どく立たる意なり、風雲には石鋭しとかきて岩出るの義なり、又いははろともいへり、かたく、總じて總てをいひしとも、いはとも、いははとも通じていへり。日本にして器用に用る物すくなからず、就中五畿内、周防に産するがうちに、御影石、立山石、豊島石等は材用に供し人用に益して賤物にあらず、故に其三四種類を下に擧て其餘を略す。和泉石には色白青く石理精にして、紋文等を刻す、又阿州より近年出するの是に類す、其石にふよ川に似て色緑に、石紫片たるがごとし、石質は硬からず、又城州にては鞍馬石、加茂川石、糺森石等、是を庭中の飾石、盆石に置く、水を保たせ翠色を賞し、凡て貴人高家の翫物に備ふ。

〔新撰字鏡 石〕磧〈…〉

〔倭名類聚抄 一 石〕細石 説文云、礫〈音歴、和名佐々禮以之〉水中細石也、

〔箋注倭名類聚抄 一 石〕佐々禮以之見萬葉集、新撰字鏡、磧佐々良石又小石、礫佐々禮以之、小石之義、礫訓見續日本紀、今俗呼佐々利、出川乃阿左利見萬葉集、○中略原書石部云、礫小石也、與所引異、疑此傳寫誤、礫下續漢書郡國志注引釋名、小石曰礫、礫料也、小石相枝柱、其間料々然出内氣也、

〔類聚名義抄 石〕礫〈サヽレイシ、イサコ、サヽレ、イシ、ツフテ〉

〔日本釋名 中 水火土石金〕細石 さゞれ さゞは小也、細などの類也、れはやすめ字なり、細石をざゞれと云も、此ことばよりいづ。

〔倭訓栞前編十一〕さゞれいし　日本紀、倭名鈔に砂礫を訓せり、新撰字鏡に磧をさゝら石とよめり、萬葉集に小石と書てさゞれとのみもよみ、又さゞれしとも見えたり、細石の義れは助語也といへり、筑紫人はされといふも是也とぞ、俗に水にされたる石をもいへり、磧石破礎などをよめる是也、

〔年々隨筆三〕俗間に小石をざりといふ、歌にさゞれとよむと同言なるべし、さゞれもざりも、さらさらさやり〳〵といふ音を形容したる也、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

佐射禮伊思爾古馬乎波佐世氐己許呂伊多美安我毛布伊毛我伊敝乃安多里可聞、

〔古今和歌集七賀〕題しらず　讀人しらず

我君は千世にやちよにさゞれ石のいはほと成て苔のむすまで

〔日本靈異記上〕序

瑕礫

〔日本靈異記中〕觀音銅像反化鷺形示奇表緣第十七

礫

〔倭訓栞前編十四〕たびし　日本靈異記に、礫をたびいしとよめり、たびはとぶと通ず、飛礫の義也、貫之が白川大相亭春子日會序に、草枕たびしがはらまで松の千歳は君にのみ祈り、花のさかえをば人の爲にとおもふとみえ、枕草紙に、そさめみかはやうど、たびしがはらといふまで、源氏に、たびしがはらまで悦び思ふなるといひ、類聚に、山がつたびしがはらまでもと見ゆ、瓦礫の訓也、元輔家集に、筑紫にて大貳の御門に菩提子奉り上らるゝに、

みがくらん玉の光をたのむかな數にもあらぬたびしがはらも、百姓をいふとある說は、右の

草木果實まで、といへる歌より轉じて、すべて下賤の者をいひし詞となれるにや、

（狹衣物語 一の下）御侍從御曹司のわたりにたちよりてそわうの君にものいひなどするに、わきいで、たる水を見て、

かはべなるいしの思ひのうえにはや岩の中より水のわくらん、たびしがはらといふとても、

（枕草子 一）女房のずんざども、そのさとよりくるものども、おさめみかはやうど、たびしがはらと
いふまで、いつかはこれをはぢかくれたりし、

（源氏物語 十五 ○○）としごろあらぬさまなる御ありさまを、かなしういみじきことを思ひながら、もえいづ
る春にあひ給はなんと、ねんじわたりつれど、たびしがはらなどまでよろこび思ふなる、御くら
ゐあらたまりなどするを、よそにのみきくべきなりけり、

（源氏物語湖月抄 十五）たびしがはらなどまで ○賤者也、いやしき人々迄の心也、ゆたみしと
もたびし共聞えぬやうに讀べし、

（倭名類聚抄 一 石）礫 陸詞云、礫大石也、音歷、日本紀云、下人可引礫石、[illegible]

（箋注倭名類聚抄 一 石）廣韻同、按玉篇礫大石也、陸氏蓋依之、按說文無礫字、先秦書所用皆石、[illegible]
礫者蓋石之大者也、[illegible]之礫石、後作礫从石、色王引之曰、周易豫卦[illegible]、[illegible]史記所載[illegible]
作[illegible]古文[illegible]、[illegible]又[illegible]古[illegible]王[illegible]以[illegible]不[illegible]是[illegible]字亦本古
可證、舊本可證[illegible]文所載一本作、[illegible]下人所引礫石、見神代紀上、[illegible]千比岐乃伊八、此則以之、
然後[illegible]萬葉集下引乃石、則以之[illegible]所[illegible]記作以之、然則萬葉集亦从之也、

（類聚名義抄 六 石）礫 音歷、イシ、サヽレ、イサコ、イシナコ、イシ、

（伊呂波字類抄 以 地儀）礫 [illegible]

〔倭訓栞前編三〕いは　磐又磐石をよめり、岩も同じ、大石なり、石齒の義といへり、古事記、万葉集に石をもよめり、今伊勢の俗いふ所の物は、石と土との間なる物をいへり、伊賀にては是をすねといへり、小網にいはといふも重石なり、大網にては直に網石といへば、いはも石の義成べし、今鐵を用うるも名を同うす、歌にいはおろすなどよめり、いやといふ所もあり、念力岩を通すといふ諺は經書に、李廣出獵見草中石以爲虎也、射之中沒鏃、視之石也といふが如し、

〔古事記上〕最後其妹伊邪那美命、身自追來焉、爾千引石引塞其黃泉比良坂、其石置中、各對立而度事戸之時、略〇下

〔古事記傳六〕千引石は知備伎伊波と訓べし、（知備伎能とよまぬぞ古言の格なる）此を書紀に、千人所引磐石と書れたるは、稱の意を顯せるなり、略〇下

〔日本書紀神代一〕一書曰、略〇中 遂拔所帶十握劒、斬軻遇突智、爲三段、此各化成神也、復劒刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也、卽此經津主神之祖矣、略〇中 泉津日狹女、將渡其水之間、伊弉諾尊已至泉津平坂、故便以千人所引磐石、塞其坂路、與伊弉冊尊相向而立、遂建絕妻之誓、

〔日本書紀神武三〕戊午年十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之糧、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、是役也、天皇志存必克、乃爲御謠之曰、伽牟伽筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍離、之多々瀰能、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智氐之夜莽務、于智氐之夜莽務、謠意以大石喩其國見丘也、

〔本朝奇跡談中〕紀伊國牟婁郡相瀨村に、日本に一ツの大石也と云あり、（高サ七拾五間、横二百六拾間餘、）此石古座川と云川の傍に在、

〔紀伊續風土記物産一〕海内一大石　牟婁郡三前郷相瀨村山中溪側にあり、土人一枚岩といふ、高さ七十間餘、横二百四十間餘、壁立す、

享保年中に、備村左平次といふ者の家の三人石舍を建て、庭内を掘崩す是庭内一の大石と

いふ、

〔新撰字鏡〕巖〈五咸反、峻也、又山〉磐〈伊波保〉

〔倭名類聚抄 一 石〕巖 唐韻云、巖〈五銜反、又作嵒、和名伊波保〉

〔箋注倭名類聚抄 一 石〕按說文作巖、岸也、从山嚴聲、又云、嵒石山也、二字不同、蓋主謂

山巖上訓石、則謂伊波保、石謂字、專謂字、高也、从品山、下訓今、上林賦巖陀甗錡、皆假巖爲嵒、

今本說文、巖作嵒、今從太平御覽所引訂、新撰字鏡訓大伊波保、按伊波保即伊波穗之義、萬葉集、

訓多佐豆也、又巖險見說文傳注、引杜預左氏傳注曰巖險也、今人皆從之、

〔類聚名義抄〕巖 イハホ

〔伊呂波字類抄〕以 地儀 巖 イハホ〈石也〉 [illegible] 巖已上同

〔倭訓栞〕前編 いははは 神代紀に石窟を巖とよめり、萬葉集に石穗と見えたり、いははは秀出の

意、新撰字鏡に巖を大いははとよめり、いははほとも、いへり、ほは齣の謂也、をとめ子がなづる、い

はほ、歌によめるは天人の羽衣もて巖石をなでゝ、下を盤石一劫といふ、事實書に見えたり、

〔萬葉集 三 挽歌〕

石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌〈中略〉

久堅乃天川原爾出立而潔身而麻之乎高山乃石穗乃上爾伊座都類香物、

反歌

逆言之狂言等可聞高山之石穗乃上爾君之臥有、

〔萬葉集 十四 東歌〕相聞

伊波保呂乃蘇比能和可麻都可藝里登也伎美我伎麻左奴宇良毛等奈久毛

石材

〔雍州府志 六土產〕石　凡山城國處々出者有佳品、上粟田北白川山土中悉白石也、村民農業之暇、事石工、故隨其用而斫取之、大縣採者至長二三丈、凡朝廷宮殿之柱礎、市鄽溝渠之界石、井石壁、石橋、井欄礎石、碑碣、石塔等物無不用之、其鑿穿時所碎散之砂石、至白是謂白砂、禁廷及行路敷之而清道、是常撒砂、高貴來臨處門前左右、各一堆高盛砂、是號立砂、又北白川山北、淨土寺山、并鹿谷有一種石、其狀多平扁而淺紫色也、宜置庭園、洛北高野川石其色青、其狀堅硬而沈重也、然無砂礫之累、故酒店榨酒糟時以此石貼酒嚢之上、置槽於其下、而承其汁、又山科郷小山邊多大石、其色紫黑、方廣寺大佛殿之樓門左右石壁多採於斯處云、西山嵯峨大井川石其狀有大者、其色純青而間有白條、宜置假山、又其小者有宜硯者、有安盆者、洛東清閑寺山石高低孤嶂、自有峯巒之體勢、且孤潤而含水氣、自然凹處堪植樹木、貯水於平盆、安其內、是稱盆山、爲座上之觀、又小者自有存峯巒之體勢者、敷白砂於盆裏、安其上、是謂盆石、多有其名、故或謂名石、撒白砂於盆中、俗謂打、言打成之謂乎、打之有式、凡石之大小有峯巒之體者、置假山其經營之人稱庭作、又大小石面平者比置露地、賓主取次、蹈之而趨行、是稱飛石、倭俗家園謂露地、凡飛石之安排布置、多倩好事之茶人、而使置之、是謂作露地、又謂直石、倭俗萬事布置適宜謂直、使爲正直之謂乎、又所敷露地之青小石是稱青石、莵神河原并二條河原人、擇拾之而賣其求、近世取河邊砂石、以竹簀篩過取大小齊者、撒庭園、是謂豆砂、以其形狀相似而稱之、又洛西紙屋川赤小石敷園面可也、是稱紙屋川石、此外近江國木戶石、紀伊國海青石、攝津州御影山石、備前國小豆島石之類、悉於二條河原町賣之、

〔毛利氏四代實錄考證論斷〕慶長十五年九月二十三日

考證

福原家證文

幸便候條致啓上候、御手前御普請相濟、福原越後守殿被罷下候、大石大小千御進上、其內角石三拾、

於然右之被仰渡候趣入念情出候に不及申上ニ、何様之者已下も相済申候間、御心安可被思召候、猶細巨細原殿可被仰上候恐惶謹言、

九月廿三日

村田権右衛門
佐久間河内守
瀧川豊前守
牧　助右衛門

松　長州侯

(當代記)慶長十二年八月廿二日ヨリ江戸普請有、關東衆勤之、先當萬石役ニ、一人ヨリ石二十坪也、縱ヲ以可積、其運送トテ五萬石分五艘宛タレ遣ハ、上野國中瀬邊ヨリ運之、一坪ト云ハ、一間四方ノ築ニ一ツナリ、中瀬ヨリ一ケ月ニ兩度此舟江戸へ上下、

當月〇慶長十九年二月廿日ヨリ江戸普請、關八州并奧州信濃越後奧州出羽衆勤之、關東衆百萬石ヲ五手ニ分、八十萬石ニタ石ヲヨセ、二十萬石ニタ殿守之石垣被仰付、奧州伊達正宗、米澤景勝、會津蒲生飛驒、最上山形出羽守、今秋田ニ住佐竹義ノ、堀久太郎、同國溝口伯耆、村上周防守、右ノ衆ハ百萬石之外、何も御普請勤之、此比關東普請衆ニ扶持被下、二月ヨリ之勘定ニ出也、此年ノ石垣高サ八間也、六間ハ常ノ石、二間ハ切石ナリ、此切石ヲ積ク、又二間築上、其上ニ右ノ切石ヲ積合、十間殿守也、築土并モ二間アゲタレ、合八間ノ石垣也、殿主臺ハ二十間四方也、

(蒲生文書)覺切角石之覺

一角石拾貳間　長さ八尺より七尺、はゞあつさ三尺、

一角脇拾貳　長さ五尺より六尺ノ内外、はゞあつさ三尺、但はゞは貳尺五寸にても不苦、

右角わきは何かと御座候大石之中をせんさく仕、取合無之分切たし可申候也、

卯月（慶長十一年）二十六日　長政判

麻生三右衛門どのへ

長濱新太郎どのへ

角脇割符之事

一角石三（長さ八尺より七尺ノ間、はゞあつさ三尺、）　毛利但馬殿くみ　大島又右衛門殿

一角脇三（長さ五尺六尺内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、）　同組　同　人

一角石三（長さ八尺七尺ノ間、はゞあつさ三尺、）　桐山丹波殿くみ　黒田安大夫殿

一角脇三（長さ五尺六尺ノ内外、はゞあつさ三尺、はゞは弐尺五寸にても不苦、）　同組　同　人

一角石三（長さ八尺より七尺ノ間、はゞあつさ三尺、）　黒田美作殿くみ　池田九兵衛殿

一角脇三（長さ五尺六尺ノ内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、）　同組　同　人

一角石三（長さ八尺より七尺内外、あつさはゞ三尺、）　井上周防殿くみ　阿波宇右衛門殿

古井武左衛門殿

一角脇三（長さ五尺六尺内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、）　同組　同　人

右之分無御油断明日二十八日より可被仰付候、則穴太参候間、石之様子御たづね候て可被仰付候已上、

卯月（慶長十一年）二十七日

麻生三右衛門（花押）

長濱新太郎（花押）

〔毛吹草三〕山城　切石（かたくし）　近江　木戸石（きどいし切石ニ用之）　越前　北荘切石（ほくしやうのきりいし）

〔笈埃随筆八〕鴨川石は唐土にて沙汰せる名産なり、硯とし盆山とす、千鳥石といふて至て真黒なり、今は拾ひ盡してなく、此石を以て始て茶碗を焼し、則是黒の楽焼なり、今其石なければ自ら其

罌も甕の如くならずとなり〇中略〇肥前伊万里焼陶器には白石を用ひて製す、故に火に損る時は裂るなり〇下略

(新編常陸國誌六十土産一)玉川石

風土記云、久慈郡助川驛、東是有小水、丹石交錯、色似琥珀、火鑽尤好、因以號玉川、今玉川ハ多珂郡ニ屬ス、今ハ堅ク崗ロノ石ヲ產ス、赤玉ナリ、俗玉川石ト稱ス、人取テ以テ玉ニ作ル、下品ナルモノハ燧石ニ用フ、國字附近ノ二村ヨリ出ルト云フ、猶ハ行方郡久慈郡ニ玉造村アリ、蓋古玉造部ノ居ル所ナリ、本國往古玉ヲ貢セシコトアルハ證ヲ知ベシ、

(日本山海名產圖會二)豐島石

大坂より五十里讚州小豆島の邊にて、周圍三里の島山なり、家の浦かろうと村こう村の三村あり、家の浦は家數三百軒許、かろうと村、こう村は各百七八十軒ばかり、中にもかろうとより出る物は少硬くして、島井土間の踏足を以て名製す、さて此山は他山にことかはりて、一山の裏より行切鑿取には、口口喉山に穴して金山の鉱場に似たり、洞口を開きて奥深く堀入り、數口を縦横に切拔き、十町二十町の道をなす、採工は明を照しぬれば、穴中眞黒にして石及土とも分ちがたく、採工も常の人色とは異なり、かく堀入ことを如何となれば、元此石には皮ありて至て硬し、是今はよ川と謂て出す物にて(これよ川は伊豫の國)矢を入れ鑿取にまかせず、たゞ鑿資にて片ざわるもののみなり、他所の豐島石は其石の實なり、故に皮を除て堀入る事恵かり、中にも家の浦には數穴七ッ有、されども一山を持えて掘る所なれば、器物の大器を山中に製して鑿出せり、水鉢、水走、火爐一ッ竈なりの類にて、格別大なる物はなし、かろう村は漁村なれども石もかろうとの所より鑿出す石工は山下に群居す、但し讚州の山は悉く此石のみにて、弘法青通寺、大師の旧窟も此石にて造れり、

石理は　礀溜のあつまり凝たるがごとく、浮石に似て石理麁なり、故水盤などに製しては水溜りて保ことなし、されども火に觸ては損壊せず、下野宇都宮に出せるもの、此石に似て少しは美なり、浮石。は海中の沫の化したる物にて、伊豫、薩摩、紀州、相模に産す、されば此山も海中の島山なれば、開闢以後汐の凝たる物ともうたがはれ侍る、塩飽の名も若は塩泡の轉じたるにか、塩飽石。は御館山となりて、今夫と號くる物は多く、貝附を賞す、是其邊の礒石にて、石理靜木のごとくにて質は堅し、礎石、水鉢、捨石等に用て、早く苔の生ふるを詮とす、礒石。は波に穿たれて偏奇異形を珍賞す、

〔日本山海名産圖會〕二御影石

攝州武庫菟原の二郡の山谷より出せり、山下の海濱御影村に石工ありて、是を器物にも製して積出す、故に御影石とはいへり、御影山の名は城州加茂あふひを採る山にして、此國に山名あるにあらず、たゞ村中は御影の松有て、續古今集に基俊卿の古詠あり、元此山は海濱にて、往昔は牛車などに負ふすることはなかりしに、今は海濱次第に便埋て、山に遠ざかり、石も山口の物は取盡ぬれば、今は奥深く採りて、二十町も上の住よし村より牛車を以て轉て御影村へ出せり、有馬街道生瀬川原などの石も、此奥山とはなれり、此上品の石といふは至て色白く黒文なし、是は昔に出て今は鮮なし、されども其費用をだに厭はずして、高嶽深谷に入ては得ざるべきにあらずといへども、運送車力の便なき所のみ多し、

石質　文理は京白川石に似て至て硬し、故に器物に製するに、微細の稜尖も手練に應ず、白川は洒落して工に任せず、石工大なる物に至ては、難波天王寺の鳥井などをはじめ、城廓、石塀、佛像墓牌、燈籠に造り、琢磨しては皮膚のごとし、是萬代不易の器材、天下の至寶なり、

品數　直塊は大鉢、中鉢、小鉢、鉢とは手水鉢に用るにより本器とはすれども、桂礎濡石などをはじめその用多し、頭無しは大さ大抵一

尺五六寸にして、其上の物を一ッ石と號く、又六人といふは、一背に六箇の名あり、頭石は小石にして、大簀の時には山谷に轉び落る物中へ石に類なし、是は[illegible]石等に用ゆ、[illegible]

[illegible]

割石は大割、中割、小割[illegible]石[illegible]いづれも[illegible]石[illegible]土居なと其用多し、又石橋に架る物、備州より出石も有なり、切取には矢穴を堀て矢を入れ、なげ石をもつくひゃりの人たるを手鎚を以て鑿取を打隔割といふ、又横一文字に割をすくい割とはいふなり、

〔日本山海名產圖會 三〕[illegible]山石

攝州に產して、一山一塊の石なる故に樹木すくなし、往々此石山多けれども、運送の便よき所を切出して、今は深山中うになれども、運送不便の山はいたづらに存して切入る事なし、石の實性は[illegible]山石にして、其處を便所として專ら切出し、[illegible]すべてかはることなし、故に國も賑せり、色は五品を具す、切て形を成す事[illegible]方[illegible]にのみあり、[illegible]水の[illegible]、[illegible]の數石、敷居の土居[illegible]等の用に依て、人の[illegible]物に[illegible]することとなし、大なるは三四尺より七八尺にも及び、方五寸に六寸の物を五六といひ、五寸に七寸を五七といひて、皆大なる品數あり、[illegible]の[illegible]に石工あり、[illegible]の[illegible]に[illegible]といひて、[illegible]に[illegible]たる[illegible]といふ、

〔[illegible]のすさび 三〕一石材

白川[illegible]士[illegible]の[illegible]中に、[illegible]馬木の[illegible]の[illegible]に石[illegible]あり、[illegible]山[illegible]これに名づけて、玄武[illegible]といふよし、其[illegible]に[illegible]玄[illegible]といふ[illegible]あり、此[illegible]へ[illegible]名せんとて、先年[illegible]之[illegible]を小生[illegible]ひ來し間、さらば何方へ[illegible]し、如何樣にて宜しき[illegible]し[illegible]所此[illegible]を[illegible]、[illegible]此に[illegible]すべき[illegible]之[illegible]此[illegible]の[illegible]に[illegible]石有之、此石にも[illegible]るべき[illegible]と[illegible]り[illegible]、[illegible]此之[illegible]ゆゑ、[illegible]中[illegible]上[illegible]

可趣所も可有之と申遣候へども、決斷して未來申候、備後よりは數十里隔り候へ共、臨其地、この窟を見たる人も可有歟、先生へ御相談申上候、奥州南部蝦夷を望候地に、材木村といふあり、其村邊、山野海島に至る迄皆材木のごとし、方四五寸ばかり、村民これを取りて、屋下の床に用ひ、或は橋に架し候、石質堅く、鐵に類し、又奥州出羽の界に、小坂峠といふ所有之候、此山中材木石あり、岨崩れ落ちか丶るを見れば、半倒れ掛りて、扇の骨を立つるごとし、長數丈なり、亦四五寸角なり、同州會津邊にも材木石あり、土人橋に作り、欄干に作り、皆此石を用ふ、對馬にも木板石あり、長四尺許、廣四尺許、厚三四寸、土人橋となし、疊になす、天然の板石なり、此石重疊して、對馬一島をなすと申事に候、木の鱗の石窟も、また此等の類か、件の石邊竹の節のごとき者見え申候、圖を以て考ふるに、此節間の處より欠落候者歟と被存候云々、此書によりておもふに、筑前にも一島、皆石にて束ねたる柱を積みたるがごときあり、内は洞穴にして船出入す、福岡より西にて遠からず、備後の山野村といふに、面背平かにて、厚二寸餘にして、かんなにて削れるが如くなる石あり、庭の飛石などに宜しけれど、取り用ふる人少し、

〔新編常陸國誌 六十一土産〕礫崎石

那珂郡平磯村ノ礫崎ヨリ出、以テ名トス、國人敢テ出ザレバ採コトヲ得ズ、

〔紀伊續風土記 物産 一〕曾根石

牟婁郡曾根莊曾根浦に産す、石質御影石に似たり、先年山城御幸宮の鳥居を此石にて造るといふ、

〔長防産物名寄 土石〕筋ケ濱石　其品細石、豐浦郡大坪村ノ内、筋ケ濱、

〔新編常陸國誌 六十一土産〕雌石

多珂郡笠石新田ヨリ出、堅クシテ下品ナリ、世ニ所謂ル水戸雌石コレナリ、

〔日本書紀 七景行〕十二年十月，天皇初將討賊，次于柏峽大野，其野有石，長六尺，廣三尺，厚一尺五寸，天皇祈之曰，朕得滅土蜘蛛者，將蹶茲石，如柏葉而擧焉，因蹶之，則如柏上於大虛，故號其石曰蹈石也，

〔日本書紀 九神功〕九年○中略九月己卯，令諸國集船舶練兵甲，○中略于時也，適當皇后之開胎，皇后則取石插腰而祈之曰，事竟還日，産於茲土，其石今在于伊都縣道邊，

〔萬葉集 五雜歌〕山上臣憶良詠鎭懷石歌一首幷短歌

筑前國怡土郡深江村子負原，臨海丘上有二石，大者長一尺二寸六分，圍一尺八寸六分，重十八斤五兩，小者長一尺一寸，圍一尺八寸，重十六斤十兩，並皆楕圓，狀如鷄子，其美好者不可勝論，所謂徑尺璧是也，或云，此二石者肥前國彼杵郡平敷之石，當占而取之，去深江驛家二十許里，近在路頭，公私往來，莫不下馬跪拜，古老相傳曰，往者息長足日女命征討新羅國之時，用茲兩石，插著御袖之中，以爲鎭懷，實是御裳中矣，所以行人敬拜此石，乃作歌曰，歌略

右事傳言，那珂郡伊知鄕蓑島人建部牛麻呂是也，

〔播磨風土記 印南郡〕大國里○中略息長帶日女命，率石作連大來，而求讃伎國羽若石也，自彼度賜，未定御廬之時，大來見顯，故曰美保山，山西有原，名曰池之原，原中有池，故曰池之原，原南有作石，形如屋，長二丈，廣一丈五尺，高亦如之，名號曰大石，傳云，聖德王御世，弓削大連所造之石也，

〔和漢三才圖會 八十五〕常陸

鹿島大明神在鹿島郡○中略

其境端有石，名要石，大如杌，出於地二三尺，人皆稱要石，千人掘之不能出，其入地深不知幾丈，實此鎭石也，

〔採藥使記 下日州〕重蠻曰，江州見上山ニ烏帽子石ト云フ大石小石皆烏帽子ノ形ニテ，或ハ赤ク，或ハ白ク，或ハ黑ク，立ニモアレ，或ハ臥所モ烏帽子ノ形ナリ，

奇石

先生按ズルニ、此類諸州ニ間々アリ、西國ニテ團子石蛤石ナドノ類ナルベシ、

〔南紀名勝略志日高郡〕屈石。四十一

三尾庄三尾村ノ西南三十餘丁海邊ニ有、高十八九間、周廻二十七八間計有、伏テ人ノ腰ヲ屈ルガ如シ、仍テ名トセリ、

〔鈴毛の硯八〕琵琶湖のほとりに小繁といへる隱士ありて、性來癖ありて、奇石をたくはふること數千品にあまれり、小繁年少き時は、里正のつかさして家富り、その比貪吏罪あるに連及せられて、微賤の身となる、三年の星月をふるに、その同僚皆々やまふにかゝりて死す、小繁その妻とつとに晝夜はいぬるまで石玩し、起居動止まめやかにして、三年の星月ふる事を忘れて、石を手ずさみ賞しみければ、身にいさゝかのなやみなく、夫妻ともにすこやか也、其後に罪をゆるされて石を好事もとの如し、常に人に語りて曰、吾石を玩する癖なくば、必病にかゝりて身なくならましを、石の我を冥助する事いとあつしとものがたりぬ、此隱士近頃佐野山陰にはかりて、石山寺に石亭の書屋をきづかんとて、石をあまた集えらびしと、佐野氏の物語り也、未若また世に出といふべし、

〔日光山志四〕牛石。　寂木門に至る路傍九〇日にあり、牛の臥たる貌に似たり、七尺五六寸に六尺許、脊の高き所三尺程、是も巫女石の如く、牛馬を繋する山上へ、牽來れるが忽に四足すくみて石となれる山、鼻と覺しき穴ある所へ、繩もて繋ぎたる體になせり、

〔雲根志前編一〕雨候石。中二〇

雨ふらんとする時忽然と汗を生ず、みづから雨候石と號す、野客叢書に出る鶴紋花石の類ならんか、

〔拾遺記〕怪石　周北一村里曰、仁保、有小阜、出石、大如鶏子、形圓色淡白、中皆有鯛、其色黑、土人呼曰

雌黄石。其地又産小鵝石。通幽石。小鵝石者色如鵝黄形如小鵝卵。通幽石者通孔如竅形有通侯區

小島石出石將軍。怪奇如劍本業之所名勝也。

〔笈埃隨筆 五〕奇石　伊勢國多氣郡は、大和より伊勢へ越る所なり、伊勢國司として、北畠の唱名た、る北畠家の舊城あり、此の山の麓に具書院とて小寺に境墓もあり、土人は今に國司といふ、宣長紀行日、名張は國境より三里かたへの山にも川にもいと珍らかなる巖ども多かり、山の峰より川中迄續り出たる岩がねのいと大きなる上を傳へ行く所、右の山より足本に覆落しなどしてえもいはず面白き所なり、又いと高く見上る岩穴のひたひに物よりはなれて巖の上へ壹丈計り突出たる下ゆく所は、巖の上にも落かゝりぬべくて、いと危し、少し行過てつく〴〵と顧れば、いと怪き見物になん有ける、さるは此わたりの人獅子岩といひける、さて其山を上りて下らんとする處、石地藏あり、伊賀と大和との境なり、大野寺といふ寺のほとりに、又怪しき岩あり、道より二三丁左に見へたり、行て見るに、實殊更に作りて立たらんやうなる巖の上の方に、佛彫りて高く立てり、後は山にて、杉川の岸をへだて見るなり、

〔諸國里錄 四〕沙本鄕有二左盤一石下有二一小孔一常傳聞有二米出一一夕之出自足以充食人一日之食有貧窶者、往多穀寺大之某以竊、自後無復出云、宋朝香譜云、紹興一士大夫家有異石、庭某之時有一穴中有水、歷旬自生以之爲研滴

〔見聞小記〕風客の異石。

春秋傳に、石の物いひし事を載せて、神靈の憑りたるよしを論せり、古來其例多ければ、今贅するに及ばず、仲舍〔八木〕鷺が住める麻布の邸に、見聞せし異石五種あり、其一は秋月家の園中に三尺許なる寒山拾得の石像、いつの比にや、村夜の卒の邸より盜ひ來けるを斬り損ひけりとて、其疵痕を存す、其二は長谷寺の内に、五六尺許なる夜叉神の石像、經來の諸願をかくるに其驗多し、是

も件の園中に在りしに、長谷の住持靈夢によりて、爰に移すといふ、其三は山崎家の邸内の陰陽石、これを結の神に比して、その願をきくとぞ、其四は五島家の門前大路の中央に、徑尺餘の頭石凸起してあり、道普請の礙りなりとて掘りけるに、其根金輪際までも入りたりとて、元の如く捨て置きぬ、往來の人靈を手向て、足の願をかくる事、牛島御門内の石に同じ、其五は、森川家の別墅に、二尺餘なる烏帽子形の石に、日月の像顯れ出でたる有り、件の園丁茂左衛門といふ者、靈夢によりて、その郷里越後國頸城郡吉城村の谷より得たりといふ、目出たき石と申すべきか、以上の五石は、麻布の地に現存して、人皆これを禮拜すること、米家の昔に異ならず、余天下を巡遊して、異石を歷觀せしこと多し、遠き諸州の灼然を略して、近き麻布の靈徴を表するのみ江都の廣き、本所の駒留石、牛天神の牛石、其餘地藏觀音に至りては、僕を更ふとも其說盡しがたかるべし、

〔野翁物語　二〕豐前國團子石の事

一豐前國中津と云ふ所に、團子石とて、山を堀ればに土にて丸めたる石の大さ、榛子のごとく、或は饅頭子のごとく、土とも石ともわかたぬもの、土中より幾つともなく出る、皆鼠色なり、とりて見れば、團子に餡を入たるがごとく、紫色の土を包み入ながら、わざと丸めたるやうなる小石なり、此一山、皆土中團子石なり、此石は本草に說く禹の餘糧の類ならんかといへり、又豐後國東野と云ふ處の鐵山に、紫石と云ふ物あり金を堀岩穴より、この石を出すなり、鼠色にして、一片一片うすく、へぎ平にへげ目あり、石中に木の葉の形ち、枝ともにありありと其紋備る也、猶あやしきは、錦の金襴備へたる紋あり、いづれも石は鼠色にして、其紋は薄墨の色也、多くは其紋栗の葉、椎柴のかたち也、此石筑前の國宗像郡にも有といへり、

〔倭訓栞 中編 二〕いしだんご　石團子の義、石中黃なりといへり、禹餘糧を產する地にありて、黃土を含む、饅頭石といふにも此品あり、甲斐國巨麻郡より產する物もまた同種也、

(大和本草金石土石)饅頭石

長州ノ海邊ニアリ、其形饅頭ノ如ク大小アリ、外ハ淨石ノ如シ、内ハ赤クシタマンヂウノアンノ如シ、一所ニ多シ、奇物ナリ、

(續耕小說)饅頭石之事

總州佐倉の城下一里計り有る處に、饅頭石と云ふ石あり、昔饅頭野より來る人、履底に付け來ると云ひ傳ふ、此石年々に成長し、今は大なる物となれり、其形饅頭の如しと云ふ、ある人、廿年計見來るに、其間三寸も長ぜりと云へり、此は天中記にのする異石なるべし、唐衣手の嶋に、筑前龍山の山上に丸き石數多あり、其形饅頭の大きさの如し、土人これを饅頭石と云ふ、外白く薄皮の如くにて中に赤き物あり、饅頭のあんの如しと、此は異饅類にても有るべし、右二件丹州龜山中村大進氏の物語なり、

(紀伊續風土記物産一上)豆石(マメイシ)

牟婁郡湯崎莊湯崎村の濱に多く産す、俗に豆石といひて、此所の名品とす、白色の小石にて、水晶の如く、瑩徹するもの少れり、按するに、雲林石譜に登州石、登州海岸沙土中出石、瑩白、或瑩徹者、質如實、狀は圖經所謂大者或如彈子、土人謂之彈子窩、久而見風漸數而生といへる類なるべし、

(紀伊續風土記物産一)試劍石(タメシギリイシ)

石灰嶺に所々に大刀あとの如く割レこみ多き者なり、國中諸山にあり、

(紀伊續風土記物産一)蟲喰石(ムシクヒイシ)

牟婁郡太田莊鰹上村にあり、鼠色の大石、海に臨みて聳立し、石面に蟲の喰ひたる跡あり、(蟲の巣穴、蟲巣に似たり、)

(甲斐國志物産部二十三)雲母石(キラライシ)

初鹿野村ノ路上鶴瀬驛ノ西ヨリ産ス、其色黄黒ニシテ小粒ナ

リ、火中ニ投ズレバ、如活動ニシテ伸ブ、其狀蛭ニ似タリ、因テ以テ名トス、燒末シテ昇降ヲ植フベシ、

〔紀伊續風土記物產一〕石卵（天工開物）

牟婁郡大田莊鉛白村の土器產、名品なり、（鉛白村の條に詳なり）又在田郡廣莊名島村に下品を產す、

〔新編常陸國誌六十一土產〕卵石（又玉子石ノ字ヲ用フ）

多珂郡水付村（今諏訪村）ヨリ出、殼ヲ出ザレバ採コトヲ得ズ、

〔甲斐國志百二十三產物部〕鳳卵石　市川入、泥別所郷ノ南金山ニ在リ、形卵ニシテ帶金斑、大小アリ、

〔紀伊續風土記物產一〕柏石（本草）

牟婁郡海中所々より出づ

〔本草綱目譯義十一〕薑石

セタカイシ　ウシセウガ　コレハ讃州屛風浦ノ名產ナリ、又越後、相州、奧州、松前等ヨリモ出、又能登ノ山中ノ喜多石ノアル處ニモ混ジタアリ、其外諸國ニモアリ、皆形扁フシテ枝アリテ生薑ノ形ノ如シ、又佛掌薯ノ如キモアリ、コノ中ニテ白色ナルヲ和名ニ乾薑石ト云、漢名ニ白薑石ト云ナリ、

〔紀伊續風土記物產一〕石梅（□□金石臺□邊□下にて、皮を剝きありて、□牙といふはあやまりなり、）

牟婁郡海中所々より出づ

〔筆のすさび一〕一石分娩、　豫州三津濱何某が家に盆石あり、それを裏座敷の違棚の上に置しに、文政庚辰の大三十日に一小石を產む、翌日見るに、傍にありて、其形母石に少しもかはらず、白き筋などもありありと見へて、小なるのみ、正月中見る人市をなししと、同國松山人岸惠造が辛巳二月廿五日に語る、

〔鹽尻 四十七〕出羽國最上郡羽黑山の麓、中島村舊野の社は、文祿年中に、村民某、舊野七度參詣せし所替の跡にて、一ツの小石を拾ひ歸國せし、年月を經て石大きになり、行程に八十年來、今石は一抱あまりに成り、形岩窟の如しとて、鍵石といふ、此石より覺石分れする事、貳千餘、皆是石ひろごり、大小有り、小石は背神の形に似たり、是を集めて、今舊野といふ由か、ることもあるにや、

〔拾椎雜記 四〕越後國三嶋ノ左ニ一ツミ石村ト云フ所アリ、其村ノ中ニ一石アリ、年毎ニ一ツ宛丸キ石ヲ產ス、其色黑ク其ガ堅シ、里人呼タ是ヲ鮑石トス、

〔佐渡志 五〕寶石　方言舍利石

加茂郡月布施村ノ鳥居ヘアリ、羽州神明ノ社ト同ジク、木葉ニ似レル紋明ナリ、其色ハ白黃ニ殿ルナリ、鈴ヲ振ルノ、年ヲ經テ子ヲ生ズ、子ガ正シク見ルトコロナリ、

〔勢陽雜記 四十九〕ものいひいは　伊勢度會郡一志郡にあり、今鸚鵡石といふ、雲林石譜にも鸚鵡石あり、名くるゆゑ異れり、凡そ韻鏡實韻歌曲ふ品併せ奏するに、其響き至て静かによくわかれて、こなたの方よりもうつれる方の音却て遠くきこゆ、響石中の最たるものなり、音のうつりは少し遅きをいふかる人侍れど、是は其音の二重にうつれるが故也、海内奇觀、雲林石譜ともに鸚鵡石あり、一は形を以て名け、一は色を以て名く、關暗岩井郡天童にも鸚鵡石あり、是も同じ、常州加波山に呼石とて數丈の岩あり、此に向てものいへば石中に聲あつて、それを一々にいへり、僧來て心經を誦したるに、讀了る時石中より一句を繰るや讀たるといへり、

〔本朝奇跡談〕志摩國鳥羽領答志郡村鸚鵡村、此弐ケ村に鸚鵡石有、此石にむかひて謡をうたひ、淨瑠璃をかたり、三味線其外物の音曲まで鸚石に響きて其音節をなす事偏に鸚鵡のごとく、此外駿州宮川の上駒ケ野村と云所にも鸚鵡石有、諸奇觀書士にて響石と云よし、

〔寶暦圖集 三〕鸚鵡石　駿州宮川の上五里計りに靈石あり、五十步計り隔て、人詠歌すれば、同じく

石中にもうたふ、音節曲譜恰も違たるが如く、中々響には思はれず、昔日、鼓三絃笙篳篥等の響悉く移らずといふ事なし、故に鸚鵡石と號す、或人語りけるは、勢州桑名より尾州宮へ渡る時、風あしくして、伊勢路のとある島に舟を寄、おの〳〵陸に上り、そこゝ遊歩しけるに、舟人此邊の事能知りていふ樣、此山影にあふむ石あり、宮川の上にあるとは、甲乙何れにくらべ難き程なり、いざ見せばやとて、半里計り具して行ぬ、則鳴物は所持もせざれば、只唄ひ淨瑠璃などにて止ぬ、聞しに勝りて能移れりと語りにき、

〔東遊記 二〕言葉石(ことばいし)

予が越前國敦賀にありし頃は、十月の初なりしが、例よりは暖かにして、北國ながらも、小春の空るしとて、打續き天氣うらゝかなれば、彼地の人々にいざなはれ、其地にて人の言葉石といふを見にまかりぬ、敦賀の町を離れ、西の方に出ればきれいなる松原あり、是を一夜松原といふ、むかし神功皇后の御時、唐土より賊船多く襲ひ來りしに、此海濱に、此松原一夜の間に生ひ出て、樹に鷺の多くむれ集りしを、敵の目には、夥敷軍兵の旗差物と見えて、驚き恐れ逃去れりといひ傳ふ、誠に松の木立より眞砂の白きさま、北國には珍敷土地なり、夫より五十丁計にて、常宮といふあり、入海を隔てゝ、敦賀の町と向ひ合せたれば南おもての地にて、風景殊に勝れ、此あたりの人の遊興の所なり、宮は仲哀天皇を祭れる大社なり、遊行上人など、此國を經歷の時も、必此社へ詣でらるゝ事なりとて、遊行上人代々奉納の和歌など有り、此宮のうしろに高き山あり、凡京の比叡ばかりにも見ゆ、さゝいが嶽と名付く、此山に登ること二十八丁にして、言葉石の下に至る、三十年計前までは知れる人も無かりしが、ふと木をきるものゝ、己言葉のひゞくを怪しめるより、ここかしこいひ傳へて、敦賀よりも人々登り見る事に成り、今にては若狹侯も遊觀の所となりたり、石の高さ十三間、横二十間といふ、山の七八合目とも思ふ所に、南をもてに有り、甚大なるもの

鏡石

庭石

なり、其間十五六間も隔て、此石に向ひ呼に、其聲の響すること石の物いふかと怪しまる、人乗すくなくして來る時は何となくものすごしといふ、かやうの石、伊勢國にも有り、彼地にては鸚鵡石と名付く、關東又は九州邊にては聞も及ばず、其日は天氣も晴れ、殊に親しき友人大勢にて杯盤のたすけもあれば、一しほの興にぞ有ける、すべて此邊は勝地多く、此山の北東の麓を色の濱といふ、西行芭蕉なども遊べる地にて、ますほ貝名高し今も砂子にまじりて有り、むかしにならひ、人々歌などよみ、詩ともして旅宿に歸りぬ、

〔土州郡志 吾川〕鸚鵡石

長岡郡穴内村枝鍋ノ少シ右ノ山ノ中間ニアリ、高六間バカリ、廣サ十間ホドニ見エ、人ノ言フコトニ應ズ、コダマノ如ニアラズ、同郡本山郷行見川ノ端ニモ鸚鵡石アリト云フ、伊勢一ノ瀬ノ鸚鵡石ノ類ナランカ、

〔雍州名物考 十七〕鏡石 かゞみいし

以國俗稱鏡 京師鳴瀧鹿苑寺東北岸下有一巨石、其淨潔高麗國人影、天陰則影見益明、因名鏡石、故謂御室文殊、宮本鏡邊山間有石數枚、影照明可以鑑人面之石、其河原記石鏡、山東有一鏡石、臨序明淨、照見人影、且傳月鏡影、見于繪圖記、亦鏡石之類、可考矣、

〔百練抄 十五 後嵯峨〕寛元二年三月廿六日丙寅、被行軒廊御卜、松尾社司注進云、去正月廿七日辰時近邊山鳴、是大井河底擾之間、本社宗像社鏡石損落異、

〔毛吹草 三〕山城 庭石 鳴瀧砥石 攝津 御影砥石 相模 鎌倉川砥石 紀伊 大崎庭石

〔近江國輿地志略 九十七〕庭石

是も本木戸村の出す所を可とす、假山泉水を好む者甚愛す、事實部にあり

〔江談抄 三〕致忠買石事

又談云、備後守致忠〈元方カ男〉買閑院爲家、欲施泉石之風流、未能得立石、則以金一兩買石一。件事風聞洛中、件事爲業之者、傳聞此事、爭運致奇巖恠石、以至其家欲賣、爰致忠答云、今者不買云々、賣石之人則捨門前云々、然後猶其有風流者立之云々、

〔見聞談叢〕買石

江談抄に云く、備後守致忠〈元方カ男〉買閑院爲家、欲施泉石之風流、未能得立石、則以金一兩買石一〈○中略〉云々と、これ過分の價を以て求めし故に、爭ひて持來るとみゆ、此時の一兩は十匁なるべければ、慶長金の二兩餘に當り、さして過分の價にあらず、昔は諸物の價賤しきことと考へみるべし、かくの如くなれば古へ官の富めるも宜なり、

盆石

〔毛吹草 三〕相模　大磯盆山數石〈ボンサンスヾレイシ五色ノ石有之〉　上野　盆山石〈ボンサンセキ〉　伊豫　盆山石〈ボンサンセキ〉同數石〈五色有之〉。

〔土州淵岳志 中〕盆石

幡多郡四万十川ノ河原ニ盆石多シ、寸法能ク叶ヘル石ナリ、稀石ニテ極メテミゴトナリ、近年ハ好事ノ者取リ盡シテ、金ゴロニ求メザレバ得ガタシト云フ、

○盆石ノ事ハ、遊戯部盆石篇ニ詳ナリ、

麥飯石

〔重修本草綱目啓蒙 六石〕麥飯石〈飯、諸生八ト二作ル、誤字也〉　ムギメシイシ

ツノ石灰色ト白色ト淡駁ニシテ、麥飯團ノ狀色ノ如シ、柔軟ナルヲ良トス、城州鴨河ニ在リ、白河石ニ充ル、古說ハ穩ナラズ、

集解麻石〈一〉窓アル石ヲ云

增、集解、若無此石、但以舊麪磨、近曾處石代之ト云ハ誤ナリ、本條ハ麥飯ニ似タル石ナリ、麪ヲ磨スル石臼ノ麥性アルヲ以テ代用スベキ者ニ非ズ、

試金石

〔土州淵岳志中〕香美鐵石
乃チ幾内及ビ石臼ニ用ル石ナリ、高岡郡戸波村ニアリ、

〔大和本草 金玉土石〕試金石
ツケイシ、カナヤドモ金銀ノ眞僞ヲ分ツモノナリ、天工開物ト云書ニ詳ニノセタリ、色黑漆ノ如シ、紀州熊野ニ多シ、其他處處ニモ石アマタアレドモ、スレタル此石ノミアリト云、那智黑石如碁子、其天工如人工彫作、金銀ヲ以此石ニスレバ、僞金銀ハ其黑色ワク、眞金銀ハ其色ワク、是ヲ以テ眞僞ヲ試ム、

〔紀伊續風土記物産一〕試金石 牟婁郡
本草匯言那智黑の名處なり、近年は上品少し、

〔毛吹草 五〕紀伊 金付石

砥石

〔伊呂波字類抄 止植物〕砥 トイシ 砥石

〔令義解 三賦役〕凡調絹絁絲綿布、並隨鄉土所出、〇中略 砥 一顆

〔延喜式 兵庫〕凡諸國年料二時所進器仗修理并雜用料
砥一百顆、〇中略 近江國
兵庫寮造器仗料并雜用料
砥三十顆、〇中略 砥二顆

〔雍州府志 七土産〕砥 凡砥石有數品、鳴瀧砥石稱所謂眞鳴瀧、此砥石稱所謂間鳴瀧、梅ヶ畑稱所謂青砥石也、鳴瀧砥石、特嵯峨鳴瀧山之所出爲良也、鳴瀧砥石、然最爲稀用、凡本阿彌一家、自中古以來從公方家磨刀之事、專用鳴瀧砥、然近世稀少、砥貴、故高雄之邊間又用之、依然鳴瀧人濫取之、是謂止山、言止砥不使取用之謂也、依梅山之於材木及炭薪也、川之於砂石并魚鼈、主人獨取用之、遏他取之、總謂止山止川、又開刈採摘、當是謂錄、河内國狭野右士上置野鳩地所、外人之盜伐爲禁也、故稱禁野之類也、凡

鳴瀧山地中悉石也、其色淡白、面間有紅條理、石性柔也、故鑿之、則必爲一片、大小長短從所欲取來耳、

假山安置地、

〔本草綱目啓蒙十〕越砥

越砥ト云ハ　カミソリド　アワセドト云テ、細キ上品ノ磨石ナリ、越國ノ產上品ナリ、故ニ越砥ト名、釋名ノ磨刀石ト云ハトイシノ總名ナリ、礪石ト云ハ、アラト、云テ粗キトイシナリ、カミソリドハ、山城デハ鳴瀧ノ產上品ナリ、又高尾ヨリモ出、又鷹峯ノ金地院ノ領分ヨリモ出、又濃州ヨリモ出、コレヲ戸澤ドト云、コレモ上品ナリ、丹波ヨリ出ルヲ大内ドト云、コレ其次品ナリ、江州ヨリモ出、コレモ次品ナリ、以上ハ皆カミソリドナリ、又刀劍ヲ磨ク磨石ハカミソリド、同ク、越砥ナレドモ潤ナリ、コレハ和州ノ春日山ノ產ヲ上品トス、春日ドト云ナリ、コレハ色白ク少シウルミアリ、今ハ出ナズ、又三河ニ名倉ド、云アリ、コレモ上品ナリ、山城デハ鳴瀧ヨリ出ルウチグモリト云ヲ上トス、名倉ドノ次品ナリ、又越前ノ常慶寺ドト云アリ、コレヲ俗ニジヨウケンジドト云、コレ又次品ナリ、コノ外又リドラウヒキドナド云アリ、皆漢名ハ越砥ナリ、又漆塗リノフシヲシガキワトス磨石アリ、コレハ對州ヨリ出、ムシクイド　フシマド　トギイシト云、薄青黒ニシテ肌細ナリ、コレニハ小キ穴多シ、故ニムシクイドト云、コレ釋名ノ羊肝石ト云ナリ、一名雞肝石ト云、輟耕錄ニ出、又嵯峨ノ臨川寺ノ邊ノ河原ニアル磨石ヲ臨川寺ドト云、コレハ薄黒シテ少シ黄ミアリ、一分位ヅヽニ細カニヘゲルモノナリ、雞肝石ノ一種ト見ルナリ、又アヲドト云テ青黒色ナルアリ、コレハ庖丁ヲ磨ニ用ユ、故ニホウチヨウドトモ云、コレハ山城デハ木屋川ド、三ツイシド、云ク上品トス、又丹波ノ產ノ山ノ產ヲ虛ノ山ド、云、防州岩國ノ產ヲ岩國ド、云、京ノ清閑寺ノ產ヲ清閑寺ド、云、紀州神子ガ濱ノ產ヲミコド、云、以上皆庖丁ドナドナリ、漢名ハ玄礁ト云、山海經ニ出、硍礪トモ云、正字通ニ出、又釋名ノ礪石ト云ハ、アラトナリ、コレハ肥前ノ島原、

ヽ事ノ產ヲ上品トス、コレハアラトノ中ニテ、肌細カニシテ薄黄色ニシテ黄色ノ筋アリ、コレヲ髮ニモスル、然ドモ髮ニシテハ肌細ニシテ下品ナリ、コレヲ天草ドヽ云ナリ、又肥後ヨリ出ルアマクサドアリ、コレハ肥前ノ產ヨリ肌細ナリ、又肥前ノ呼子、杵島宮用ヨリモ出、唐津ヨリモ出下品ナリ、又豊州ヨリモ出、コレハ肥細カナリ、又土州ヨリモ出、コレモ肌細カナリ、其次品ナリ、又紀州ノ神子ノ濱ヨリ出ルアリ、下品ナリ、又丹波ノ佐伯ヨリ出ルサイキドアリ、コレハ肌粗ナリ、又丹波ノ綾倉ヨリ出ルサイキドアリ、又綾部ドヽ云アリ、皆肌粗ナリ、此本草ニ載ズ、先砥石ハカミツリド、　第一條　砥石[illegible]　礪[illegible]

(大和本草[illegible]土石)砥石

時珍曰、爲質鮮[illegible]者爲名礪、[illegible]者[illegible]、今細砥石ハ山州鳴瀧ニ出ヅ、青砥寺砥、及丹後對馬砥一名[illegible]砥、上野砥、ジヤウアン寺砥ハ越前ヨリ出、名倉砥ハ三河ヨリ出ヅ、砥砥[illegible]ニ出ヅ石[illegible]ヽ[illegible]イカリ[illegible]用、或内グモリ、或アアゾ、或[illegible]又[illegible]アビ、又白砥、此外ウハ引砥、又リ砥等アリ、又草砥ハ肥後天草ヨリ出ヅ、

(日本山海名產圖會二)砥[illegible]

砥に砥は王城五里を離れず、皆京に近て產すと云も、定ことにもあらずかし、昔和州春日山の奥より出せし白色の物は刀劍の磨石なりしが、今は絕ことなく、其跡のみ殘れり、今は城州嵯峨邊鳴瀧高尾に出す物、天下の上品、尤他に類ひ鮮し、是山城丹波の境原山に產し、内曇又淺黄ともいふ、又丹波の青谷にも出り、是等ともに刀劍の磨石、或剃刀、其餘大工小工皆是を用ゆ、又上州戸澤砥は水を用ひずして磨べき上品にて、參河名倉砥は淡白色に斑あり、越前砥は俗に常慶寺と唱ふるもの、内曇には劣れり、以上磨石の品にして、本草是を越砥と云、[illegible]
[illegible]

青砥は平尾、梅田、南村、門前、中村、井手、黒鍋等なり、中にも南村、門前は京より七里ばかり東北にありて、周廻七里の山なり、丹波に猪倉、佐伯、直野山、扇谷、長谷、大淵、岩谷、宮川、其外品數多、肥前に天草、　豫州に白赤等すべてを中砥とも云、尤各美悪の品類盡く辨ずるに遑あらず、右磨石中砥ともに青山の土石に接る物なれば、山口に坑穴を穿、深く堀入て所々に窟をひらき、柴燭の煙をたへて石面を逐ひ、全く金山の鏈を採るに等し、石盡ぬればかの措架木を取捨て其山を崩せり、故に常も大中崩るべきやうに見へて恐ろしく、其職工にあらざる者は、窺がふて身の毛を立てり、　石質によりて其工用に充るものは下に別記す、中にも鏡磨、又塗物の蒔磨くには、對馬の虫喰砥なり、是水に入りては破損物なれば、刀磨には用ざれども、錺細工の模鎔には適用とす、但し銅の鉄金などを鋳る、鎔には伊豫の白砥を用ゆ、此白砥は又一奇品にして、谷中に散集りし石屑久敷すればともに和合し、再たび一顆塊の全石となるなり、故に偶木の葉を挿て和合し、奇石の木の葉石となるもの、多くは此山に得る所なり、

鳴石　肥前の唐津鈸口、紀州茅が中神子が濱、或は豫州に出すものは石理細緻し、是等皆擢取にはあらず、一塊を山下へ切落、それを幾千挺の數にも割て出す、

工用は　刀劔鍛冶に臺口、磨工に青茅、　白馬　茶神子　天草　伊豫　又淨慶寺等次第に精を經て、猪食内曇に合て後、上引をもって青雲の光艶を出す、（上引とは、内曇りの石屑なり、但し鳴瀧の進艶ともいひて、猪食の前に用ゆるとあり、鳴加土ともいふ、）　剃刀は　荒磨を唐津　白馬　青神子　茶神子　天草に經て鳴瀧高尾等に合せ用ちゆ、　庖丁は、たばこ包丁は臺口中砥、平尾、梅田等に磨て磨石にには及ばず、又薄刃菜刀の類は荒磨は臺口、　白馬　青神子　茶神子　白伊豫、上は引にて色付とす、　鉄は唐津　神子濱に磨ぎて豫州の赤にて琢けり、

大工（并）箱細工指物等は、門前平尾、梅田の青砥にかけて、鳴瀧高尾等に磨す、　料理庖丁は、山城

の貴、小刀は奥村、竹細工は天草、針毛拔は豊前を土佐にて、豫州白赤に限く、彩形は豫州
の白、鰹節は紀田、大鰹かくのごとし、凡工用とする所鍛き物は衆知なるに、鍛て最鍛なるは砥
きに尚とはいへども、なほ金質石質相知する目鏡ありて、一概には定めがたし、
〔毛吹草二〕山城　鳴瀧砥　砥取砥　三河　名倉砥　近江
砥石　越前　常慶寺砥　丹後　佐伯砥　但馬　青砥　紀伊　神子濱砥　肥
後　天草砥　對馬　青砥
〔延喜式二十三〕交易雜物
伊豫國
〔伊豫古語志二〕砥部色一石圓山背砥色圓岸日砥山作外山赤濱砥其石直研刀白色謂之日
伊豫砥
〔壬生家文書一〕太政官符中務省
應令進砥事
右得正二位行太宰權帥藤原朝臣光隆今月十九日奏狀偁、朝官使去十月十三日解狀稱、
當年　符到奉行
伊豫砥事　大　
右太宰府申請砥内匠寮所請仰件
建久四年十一月廿八日
權中納言藤原朝臣宣宣奉之　右少辨藤原朝臣
〔佐渡志五〕砥石　方言トイシ
加茂郡上横山ヨリ多ク出ヅ、淡黒色ナリ、又黄色ナルアリ、カミソリド、稱ス、性細ナルア

礪石ト稱ス、兩品トモ國用アマリアリ、

（新編常陸國誌六十土產一）砥石

多珂郡介川村大久保村ヨリ出　常陸考云、助川有出礪山、民出稅採之、

（紀伊續風土記物產一）砥石（本草和名鈔）　牟婁郡田邊莊近き山に產す、上品なり、

礪石（本草和名鈔、同上）　在田郡湯淺莊山田村、及牟婁郡田邊莊瀨戶村、富田莊才野村、安宅莊日置浦、那智莊樫川村、色川鄕陸山村等に產す、

鞋肝石（鹽棉）　牟婁郡大邊路處々に產す

鎌砥石　伊都郡官省符莊田原村の山に產す

（長防產物名寄土石）砥石

阿武郡椿村山田ノ内小原、　同郡同村ノ枝鄕川上村ノ内高瀨ノ大形山、　厚狹郡鴨庄村ノ内、平沼田山、

（增訂豆州志稿七土石）礪

大仁（畷山）箕作（來山）字久須（大瀨山）伊濱（波多山）等ヨリ產出ス、皆下品ナリ、

ミガキ石

（大和本草金玉土石三）ミガキ石

近江ノスリ針嶺ヨリ出ヅ、他州ヨリモ出ヅ、形土器ノ粉ヲ堅メタルニ似タリ、金石ノ類ヲミガケバ光澤ヲ生ズ、

樂石

（見聞漫錄）樂石

先年あるひと、樂石と云ふはいかなる石ぞと問ひしに、樂石は樂器に用ふる石なるべしと答ふ、其後、古文苑をみれば、秦の始皇の嶧山の碑を載す、その碑文の終りの剜、此樂石以著經紀と云ふところに、樂石の注ありて、樂器に用ふる石たることあきらかなり、注文左のごとし、

磬石[illegible]

さて磬山の磬は史記にのせず、古文尾に載せて註解つまびらかなり、

(雲根志後編三)磬石の事

磬と云物は磬石にして、石を以て作たる物故、磬の字の六書は諧聲の字ながら、石に従ひ聲に従ふて、會意をも含みたる字なり、[illegible]

[illegible]國土にては和漢より出る事、書紀の異質に見え、日本にては讃州白峯の一山は、山皆悉く磬石にして、大小数百千萬の磬重り上りたる山にして、夫に土の皮を被り居て、其土に草木覆ひ茂りたる山とも、此山其高さは三里許りにして、麓の愛宕山権現の境内、山のなだれ口、又は崖の崩れ口等は悉く石の磬石にして、四五寸より尺余り又大なるは二尺三尺四尺位のも有て、厚さは四五分より一二寸又厚きは七八寸より尺二三寸位までのも有ことなり、形ちは丸きも三角なるも、長きも短きも種々にして、定らざれ共皆金鐵の音にして、全く常の磬の音ながら、石毎に響きて十が十ながら同じ音はなし、調分律に能合も有べし、先輩き程音色よしと也、少しにても缺損じ有時は、音の響きなく、決して金鐵の音をなさず、然共十が七八迄は頑多にして、金玉なるは堅て稀なりといへり、其石色は鼠色にして、砂土を付たる如き鮫肌の石面にて、缺口は光澤なる黒色なり、同國の阿野郡高西村に纏石家の高橋白峯と云者、[illegible]掘り、近江の石亭にも未知らざる種の妖石家故、此石の缺石を、鐵を厭はずして自身に磨き試るに、石質堅て堅く、玉の如き光澤出て、極上品の鐵色の如き色出て、全く赤銅のごとく、無類なる見事の石と成りたると也、其堅き事は金鐵の如くなれども、勿論金にてはなし、石なり、元来遠國の山中の事なれば、昔より磬石と云事は知ずして過來り居たるに、天明に大内貴上の後、御所の磬鍛たりとて、白峯へ取に來りて彼一山の石は磬石にて有たりと云事を所の者も初て知たり、夫迄

碁石

は土俗かね石とのみ唱へ來りしとなり、日本の内にまだ餘國にも磬を生する山も有べきか、珍敷石も有ものなり、茶政家の合圖の鳴物など、せば、珍重かぎりなき物なるべしと思はる、然共御所にて右の石を磬となし給ひたる工匠の直ひは、夥敷懸りたるとの風聞、讃州へも追て聞へたる由、左も有べき事か、今禪密兩宗等の佛家にて用る所の磬は、皆悉く銅磬にして、石磬を用る事なきは、彫琢の直ひ尋常ならざる故か、予山（◌註略）中年の頃までは、樂器に用ゆる磬は石なる事をしらずして、磬といふは銅にてのみ拵へたる物を、磬の字は金に從はずして、石に從がふは、金と石とを取違へたる物なるかなどおもひ居たりしは、恥敷ことにて有し、何事もしらぬ事のみにて打過、殘り多く思ふまゝ、せめては聞にまかせて記し置て、童蒙へ示さんと思ふのみ、

鐵緣家細川林谷奇石を好、磬石數品を藏す、（略註）石質も大同小異にして、音も又種々ながら、いづれも金鐵の音なり、

予が友内藤廣鳥（◌註略）此石を一つ所持なし居たり、色は白目なる灰鼠にて、石肌荒く魚にして鮫肌なれども、缺口は如何にも眞密にて、磨けば蠟色塗の如く成るに相違なし、此石片面の端の所に少し缺疵有、此疵の方を下になし釣るして打と鳴らず、又疵の方を上になして釣るして打と、全く金の音にて、其響き丁當として先鉦などに近き音なり

或人云、唐土には種々の磬石有る事ときけり、濠州の青石磬、其長一丈、輕き事鴻毛の如しなど云事有を見れば、其昔も種々有べし、讃州の石質は至て堅密なれば、其音金玉に近し、彼楊貴妃の弄せし藍田の綠玉磬などの類なるべしと也、

〔毛吹草　三〕山城　碁石　若狹　スカ濱黑碁石　石見　高津白黑碁石　長門　筋濱黑碁石　紀伊　那智碁石　豐後　碁石　肥後　志岐白碁石

〔大和本草　三　金玉土石〕天巧碁子

紀州幸崎浦ノ南北一里許ノ濱ト云處ニ、天然ノ碁子ノ五色ナルアリ、人工ニアラズ、又紀州ノ那智ノ黒色モ、碁子ト爲ス、但人工、

(常陸風土記多珂郡)藻島驛家、東南濱碁子、色如珠玉、所謂常陸國所有麗碁子、唯是濱耳、昔倭武天皇乘舟、浮海御覽島磯、種種海藻多生茂、因名、今亦然、

(新編常陸國誌土産十一)碁子

風土記云、多珂郡藻島驛家東南濱碁子、色如珠玉、所謂常陸國所有麗碁子、唯是濱耳、今ノ伊師町伊師本郷石濱伊師濱ハ、昔右ノ藻島ナリ、伊師ヲ名トスルハ、蓋碁子ヲ出スユヘナリ、コノ碁子ヲ出ス濱ハ川尻村ノ字里東ヘヤリ、川尻ハ伊師濱ノ南ニアリ、小貝ノ濱トモ碁石濱トモ稱ス、種々ノ小貝五色ノ小石アリ、砂モ常ノ砂ヨリハ甚大粒ニシテ金銀ノ光アリ、

(佐渡志四土産)天巧碁石 方言レヤウレンセウ

外海府真更川村ノ海濱ニアリ、色黒ク微青ヲ帶ク光澤アリ、圓ナルモアリ、又微長ナルモアリ、大ナラズ、稍ハ大ナルモノヲ擇リ碁材トナスベシ

(土佐州郡志幡多郡)碁石

碁石ノハ石ナリ、幡多郡清水港ノ西貴崎ト云フ濱ニアリ、自然石ニテ、少シ細工セバ碁石トナル、京都ヘハリム遣セバ、二石ヲ一石價直シ、貢ハ代物ヲバトラヌト云フ、

(萬金產業袋一)硯石

上佐石、水尾、高田、石王寺、若狹、紫雲石、高島、佐渡石

此外所々よりいづる石は品數々多しといへども、よき石に製したる計を取まじへ爰に記す、

○硯石ノ事ハ、文學部硯石條石硯條ニ在リ、參看スベシ、

(本草一家言石類)磁石

凝水石 石膏 寒水石

和漢供呼、其上品者色淡青、質細膩、有光澤、可以彫刻印篆、奥州二本松藥師山所產者是也、此卽山東通志所載者、又有粗品者、質粗厲帶白石色、丹後普甲山邊生之、又可用也、凡試溫石法、觸肌不冷者眞也、覺冷者僞也、又近世以瓦屑鍊成者、乏時亦可用、稻若水云、漢人所稱日本國者冷暖碁子、冬則暖、夏則冷、恐指此上好者乎、觸肌而不覺冷者爲暖、然質本石、故雖夏日則不溫、故呼爲冷煖碁子、漢人以其名異爲奇物耳、說見于徐氏象棋圖攬括注等書、又有天巧碁子、卽那智黑、一名試金石、不磨珠而自扁圓黑色成碁子形、今多用之、出于紀州那智山、故名那智黑、其大者免鍛鍊取以爲試金石、和名金附石、又有人肌石、出于相州鎌倉江島、蓋溫石類也、損軒以充暖冷碁子、亦是也、又肥前國有稱白濱黑濱處、黑白成界限而生、人盧混黑白則變化歸于本色、是又天巧碁子之一也、物之種類不一、或相倍蓰、或相什佰千萬者不可勝數、格物之學無窮、嗚呼實哉、

○溫石ノ事ハ、方技部醫術篇治方條ニ在リ、

〔倭名類聚抄 一石〕凝水石 本草云、凝水石一名寒水石、此石末置水中、夏月能爲氷、或云、縱理爲寒水橫理爲凝水、

〔箋注倭名類聚抄 一山石〕所引此石以下、陶注文、或云以下、蘇注文、證類本草引蘇注、二水下並有石字、係後人羼補、按、本草云、色如雲母、可析者良、鹽之精也、生常山山谷又中水縣及邯鄲、陶注云、常山中水縣邯鄲、地皆鹹鹵、故云鹽精、而碎之亦似朴消也、蘇注云、色清明者爲佳、今出同州韓城、色青黃、理如雲母爲良、出澄城者、斜理文、色白爲劣也、李時珍曰、凝水卽鹽精石也、生於鹵地積鹽之下、精液滲入土中、年久至泉、結而成石、大塊有齒稜、如馬牙消、清瑩如水精、亦有帶青黑色者、皆至暑月回潤、入水浸久亦化、又曰、寒水石有二、一是軟石膏、一是凝水石、惟陶弘景所注、是凝水之寒水石、與本文相合、蘇敬所說是軟石膏之寒水石、

〔多識編 一石〕石膏 一名、寒水石、志良伊之、異名細理石、別錄 硬石膏、加多无志良伊之、 軟石膏 理石、今

豆岐阿毛乃志良伊之、　白脂石、志良阿毛乃伊之、　長石、今案可多岐志良以之、　方解石、今案計太乃志良以之、

（大和本草金玉土石）石膏

儒家大熱之病、非用此不能愈、時醫畏用而不用、故不能救者往々有之、陰症ニ附子ヲ不用不能救ガ如シ、本草蒙筌曰、能損人真、用ヲ畏ル人ハ熊ニ膽ヲ抱セ炒ル、或細研、貝母細末ニセタシ炒ルベシ、或曰粗末、砂鍋ヲ炒、炒ク後砂鍋ヲ去ベシ、

（本草綱目啓蒙石五）石膏ヤウイシ古名、

今ハ通名アリ、硬石膏、軟石膏ノ分アリ、硬石膏ハ古ノ長石ノコトナリ、軟石膏ト云ガ薬用ノ石膏ナリ、コレハ舶来上品ナリ、色白シテ少シ黄青ヲ帯、ワレバトコ能モ直針文アリ、粉ニシテハ潔白ナリ、又ヘシテクダク品々モノナリ、コレハ和産モ多シ、尾州智多郡、奥州南部岩手郡深内村ナドヨリ出、潔白ニシテ直針文アリ、透明ナルモアリ、粉ニスレバ舶来ト同ジ、又越後国山ノ下ノ邊ヨリ出ルハ舶来ト同形ナリ、然ドモ薬店ニ出ズ、唯尾州奥州ヨリ出ルナリ、其中理石交リアルナリ、理石ハ直針文細ヘシテ長ク細クナリ、石膏ハ直針文粗ニシテ短シ、分チ用ベシ、然ドモ同類故ニ交エ用ヒテモ可ナリ、

（佐渡志物産五）石膏　通名シラクイシ

金銀坑中青盤トイフ處ヨリ出ス、下品ナリ、

（甲斐國志百二十三物産）寒水石　寒水石　鳳凰山白峯ヨリ出ス

（新編常陸國誌土産七）寒水石　寒水石異名、

久慈郡眞弓村多珂郡諸澤村ヨリ出、又一種アリ、久慈郡ニ高貫村ヨリ稱寒水石ト云、前代伽ニ久慈郡眞弓山ハ、舊ヨリ一郡鎭ニシテ山上ニ要ル、山嶺ニシテ岩石ヲ帶ヘ、権現ノ前ヘ出ルニ五尺七尺

二尺程ノ塞水石アリ、絶頂ハ皆岩石ナリ、其上ニ社頭本社拜殿結構ナル莊嚴ナリ、岩城道中記ニ、諏訪ノ水穴ハ太平田ト云處ノ山ノ麓ナリ、太平田ハ諏訪村ノ内ナリ、入口三四間ノ處ハ漸ク入候樣ナルセマキ穴ナリ、夫ヨリ三四間ノ間ハ七八疊敷程ノ廣サニテ、上モ高ク水モ深ク眼通リ位ナリ、其上ダン〳〵ト狹ク、上モ亦ヒクシ、カヾミテ行ニ漸ク二人立位ナリ、此邊水深ク際ナシ、位ドリ、十五間程入先ハマタ〳〵穴狹ク見ユ、併水淺ク底ニ塞水石ノ鍾石ノ樣ナル見ヘ候、穴ノ内左右上下共ニイブク迄モ塞水石ナリ、尤入口三四間ノ間ハ水一向ナシ、又下穴トテ此入口ヨリ七八間北ニ口アリ、其所ヨリ穴中ノ水ハ外ヘ流レ出ルナリ、

〔大和本草〕(金玉土石)塞水石
出羽ノ湯殿山ヲ越テ月山ト云谷ニ有塞水石、木ノ葉石モ多シト云、

〔本草一家言〕(四石)塞水石
播州明石鹿鹽沙地多有之、形似水精、而質軟無稜角、收貯之器、不温潤融解、蓋鹽鹵積年凝結者也、藥家多以方解石僞之、試之浸水久乃化爲水者是眞也、如方解石打解碎々方解、其性本石、何入水可化乎、用者宜辨擇、大觀見宜舊支眞普所惠予、故以爲左劵、

理石

〔倭名類聚抄〕(一石)理石　本草云、理石一名立制石、今按、寒石又有理石之名、

〔箋注倭名類聚抄〕(一山石)所引中品文、本草云、理石如石膏、順理而細、蘇注云、此石夾兩石間、如石脈、打用之、或在土中、重疊而生、皮黃赤肉白、作針理文、全不似石膏、李時珍曰、理石卽石膏中之長文細直、如絲而明潔、色帶微青者、唐人石膏爲寒水石、長石爲石膏、故蘇言其不似石膏也、此石與軟石膏、一類二色、亦可通用、按、本草又云、寒石一名立制石、此注所云卽是、

〔重修本草綱目啓蒙〕(五石)理石
一名肌石(神農本草)

石膏ノ理類ナリ、依ニ通ジテ硬石膏ト云、石膏ハ直線紋粗ニシテ短シ、硬石ハ直線紋細密ニシテ長ク通リタルモノナリ、和産尾州濃州ヨリ出ヅ、又微青ヲ帶ブル者アリ、又古渡モアリ、

〔倭名類聚抄 十〕長石　本草云、長石一名方石、

〔箋注倭名類聚抄 十〕所引中品文、本草云、理如馬齒、方而潤澤玉色、陶注云、此石狀同石膏而厚大、縱理而長、文似馬齒、李時珍曰、長石即俗呼硬石膏者、狀似軟石膏而塊不扁、性堅硬潔白、有粗理、起齒稜、擊之則片片橫碎、光瑩如雲母白石英、亦有墻壁、似方解石、但不作方塊耳、燒之亦不粉爛而易散、方解燒之亦然、但烈成塊耳、昔人以此為石膏、又以為寒水石、皆誤矣、但與方解乃一類二種、故亦名方石、

〔本草綱目啓蒙 五〕長石

今ハ舶來ナシ、藥舗ニハ古渡ノ手本アリ、形細キ石英ヲ並タル如シ、巾一分長サ五分餘、タヽケバ馬ノ齒ノ形ニナルナリ、故ニ馬牙石ノ名アリ、淡茶色ニシテ少シ透明ナルナリ、和産モアリ、土佐濃州赤坂ニモアリ、白キモアリ、白キハ伊吹山ニモアリ、コレヲ青礞石トモ、水精石江州トモ云、舊和名ナリ、下品ハ京ノ山ニモ多シ、愛宕ノ大クヤ石ノ中ニモ馬齒ノ形ナルモアリ、稀ニヨリ本水晶ノ如キモアリ、色々ナルアリ、其外ニモアリ、青白色ナリ、藥店ニ長石ト云アリ、コレハ石墨ヲ巾一分長サ三寸ニ切リ製ルナリ、

〔紀伊續風土記 物産 一〕長石 本草

牟婁郡相賀莊[illegible]津村山中の產上品なり、又同郡周參見莊見老津村山中にも產す、

〔倭名類聚抄 十〕方解石　本草云、方解石一名黃石、

〔箋注倭名類聚抄 十〕所引下品文、陶注云、本草、長石一名方石、療體亦相似、疑是此也、石膏條蘇注云、石膏方解石大體相似、石膏生於石實、其方解石不因石而生、端然獨處、大者如升、小者如拳、或

在土中、或生溪水、其上皮隨土及水苔色、擘之方解、大者方尺、李時珍曰、方解石與硬石膏相似、皆光潔如白石英、但以敲之段々片碎者、爲硬石膏、塊々方稜者、爲方解石、蓋一類二種、按、說文、匚受物之器、讀若方、方併船也、象兩舟省總頭形、二字不同、方圖之方、當作匚、俗人借方爲匚、匚字逐廢、

（本草綱目譯義石九）方解石

通名ナリ、イヽキリト云ハ佐渡ノ方言ナリ、イキリト書シハ、イヽキリノ誤也、藥店ニ誤リタコレヲ寒水石ト云、寒水石ハ凝水石ト石膏トノ一名ナリ、唐デモ方解石ヲ寒水石ト誤リ云シコトアリ、今茶碗藥ナド用ル寒水石ト云ハ、皆方解石ノコトナリ、方解石舶來二品アリ、白シテ透明ナルガ上品ナリ、茶色ニシテ透明ナラザルガ下品ナリ、方解石ハ和產モ多シ、京ニハナシ、諸國ニアリ、上品モ下品モアリ、形四角ナリ、雙箇ニ碎キテモ四角ナリ、細末ニシテ角ナシ、濃州赤坂ノ山ニ茶色ニシテ透明ナラヌアリ、舶來ノ下品ト同ジ、勢州ニモコノ通リナルアリ、其中ニモ上品ハ少ナシ、透通ルナリ、國ニヨリ隨分上品ノ透明ナルモアルナリ、又先年ハ黑色透明ナルヲ赤坂ヨリ出ス、

（大和本草金玉土石三）方解石

常州ニ多シト云、一山悉是ナル所アリ、タダケバ皆箇々方石トナル、

（新編常陸國志土產六十一）方解石

那珂郡島子村ヨリ出　大和本草云、方解石常州ニ多シト云、一山悉是ナル所アリタダケバ皆箇箇方石トナルト云々、　平賀鳩溪物類品隲第二ニ、方解和名イヽキリ、讚產上品、常陸產上品、出羽庄內產中品、讚岐屋島產中品、栗田維良云、或人云、多珂郡ニアリ、

（佐渡志物產五）方解石　方言イヽキリ　處々ニアリ

（本草一家言石四）方解石

佐渡銀山多產之、土人呼伊々鐵利石、崖上重疊而生、精瑩如水晶、而不光潤、打碎之則片々方解、蓋自

然獨之阿須賀島燧家以爲燧袋燧水石者赤色所見燧水石焉、

〔長防産物名寄 土石〕方解石

美禰郡長登村　赤村　青景村　ヶ村　秋吉村　已上五ヶ村、嘉山ノ岩穴ニ有之、

同郡大嶺村ノ枝郷河原村ノ内石原針山、

〔紀伊續風土記 物産 一〕方解石 [illegible]

右牟婁郡銅山所々より出づ

〔紀伊續風土記 物産 一〕三稜石 [illegible]

右牟婁郡銅山所々より出づ

〔新撰字鏡 石〕磐 [illegible] 火之石、

〔伊勢參宮名所圖會 [illegible]〕ひうち石 [illegible]　新撰字鏡に磐をひうち石とよめり、今諸國に産す、本草にいふ玉火石なるべし、伊勢度會郡の村石に火打石あり、

〔和漢三才圖會 一〕燧子を切るには、火打石の角にて横切べし、[illegible] 右いづれもためしたる露木が説也、

〔毛吹草 三〕山城　燧石　紀伊　燧　阿波　火打鋼燧石　肥後　大川火打石、

〔雍州府志 六 土産〕燧石　處々出、然鞍馬山之產最佳、凡鞍馬杜尾東山麓邊小堂一人居其内、號長嶋、於鳥貫市往來之人、則卽是貫於往來之路頭、有求燧石則多少量其心入錢於香内、於茲置燧石於賓内、其價之多少自量燧石於賓内、再覆之、買者取得之而歸、是謂鞍馬賣下、凡鞍馬山下土豪多剽、變故當鞍馬坊主僧俗關信賴坊主、其後寺剽變者總謂坊主、鄙俗稱貴者、土豪坊主中二三家主斯事、或又賣市中、

〔新編常陸國誌 六十一〕火石

久慈郡諸澤村、町田、下小瀬村、賀村、鯨島村ヨリ出ス、燧石ナリ、世ニ水戸火打ト云、諸澤村ノ採

所ノモノハ、金砂山ニ產スルモノナリ、封内遙見記ニ、鑑澤ニ火打石山アリ、上ルコト一里半バカリ、高山ヲ峯ノ方ヨリ次第ニ切採テ、山下ニ至ル、石切ノ者鐵槌ヲ以テ碎キ、品ノ上下ヲ撰ブ、商客稅ヲ出シテコレヲトル、殊ニヨロシキ年ハ、五百兩餘ノ金ヲ出スト云、

〔佐渡志物產五〕玉火石　方言火。ウ。チ。カ。ド。

三郡所々ニアリ、一種羽茂郡西三川村山中ニ出ル、センペイ火打石、小野蘭山翁ノ考ニ、瑪瑙ノ天然薄片ナルモノトイヘリ、

〔長防產物名寄土石〕火打石

大津郡津黃村後畑ノ内、山角、又ミアメ色青色

〔紀伊續風土記物產一〕玉火石本草

牟婁郡赤羽鄉の山谷、及那賀郡貴志莊北山村に產す、皆白色なり、

〔重修本草綱目啓蒙玉石〕石膏、附錄、玉火石、　火ウチイシ　カ。ド。イ。シ。

阿州勝浦郡大田井ノ田井村ノ火打石ヨク的當ス、方言オホタイカド、京師ニテ阿波ノ火打石ト云、白石微青ナリ、鐵椎ニテ打バ破ヤスクシテ、稜ツヨシ、暫ク用テ鈍クナレバ、又破リ用ユ、火打イシハ國々ニテ異ナリ、城州鞍馬ノ產ハ色黑シ、上賀茂ノ產ハ色赤、愛宕ノ產ハ色白シ、雲州ヨリ來ルモノハ綠瑪瑙ナリ、玉造イシト云、江戶ノ火打イシハ、水戶ノ白馬瑙ナリ、又國ニヨリ馬瑙ニ非ズシテ白色ナルモノアリ、白キモノハ唐山ニテ磧石ト云、外臺秘要ニ出ヅ、又杏仁ノ修治ニ白火石ノ名アリ、火打イシヲ火石ト云フコト、天工開物ニ出ヅ、江州ニテハ石英ヲ用ヒ、濃州ニテハ石絮ヲ用ユ、佐州ノセンペ火打イシハ、馬瑙ノ天然薄片ナルモノナリ、　龍石膏ハ詳ナラズ

增、阿波ノ火打石ハ、那賀郡太田井村ノ山中ヨリ掘出シ、諸國ニ送ル、勝浦郡ニ田井村等ノ名ナシ、

〔土州淵岳志中產物〕燧石

鳥海山ニコレアリ、飽海郡吹浦山ノ北ノ麓ニ南場ト云フ所ニ高二間バカリ闊七八間バカリノ石アリ、此石ノ下石ヘリ火ノ出ルコト他ニマアレリ、傭人ノ吉田ガクテニ南場カド云コレナリ、

〔本草綱目啓蒙 十石〕一名石鏃 備後 ...

附錄 石砮 矢ノ根イシ タミノヤノキ 天狗ノヤノネイシ 紀州 コレハ矢ノ根ノ形ニ作リタル石ナリ、形ハ丸ク扁キモ竹葉ノ如キモ、タリマタモアリ、大小モアリ、其石ハ碼碯ナリ、碼碯ハ細工ノ出来ヨキモノナレドモ、コノ矢ノ根ハ至極ヨキ細工ニテ、コノ羽ヲ付タアリ、色モ五色アリ、上品ハ透明ナルナリ、白キハ顯レタヨクミユルナリ、形小ナルハ多ク、大ナルハ稀ナリ、東北國ニ多レ、皆大同ノ山野ニテ拾取ルナリ、故ニ俗ニ神軍ノ矢ノ根ト云ナリ、間ニハ朽タル矢ガラノ付タルモアリ、陸奥出羽ノ新庄ノ鳥ガ岡、上谷地、城國モ、飽海ノ内ノ大物忌大明神ノ社地、飯盛嶽、秋田ノ雄川郡石濱佐渡國雙羽ノ鹿島郡雙郡上野下野越前越中越後ナドヨリ出ルナリ、又雲州赤穴ノ鹿杏鹿山ニモアリ、コレハ下品ナリ、ヨキトウラズ、其外常陸、尾張、備前、阿波、讃州、作州、雲州、紀州等ニモアリ、然レ共ノ國ヨタハ少レ、佐渡ニハ其地ノ微雨ノ日、若大風雨ニタ、其翌日ニ石砮多露タアルト云ナリ、

一名 水晶石 大同一統志 砮石 東国志 石鏃 ... 鐵石 ...

〔本草綱目啓蒙 十石〕砭石 イシハリ

石ヲ針ニシテ病ヲ刺スナリ、今ハコノ法傳ハラズ、コノ針ニ作ル石ヲ砭石ト云ナリ、東國ニハ石砮之類、冗之鏃ト云、物理小識ニハ、雷ナ石砮ト云ナリ、

〔新編常陸國誌 六十 土産〕鏃石

久慈郡松平村多珂郡大森村ヨリ出、下野那須郡松野村馬頭村 古名武茂村 ヨリモ出 白石手簡云、石鏃三ツアタ〳〵送レタ惡作候、此物ノ事ハ、本朝ノ國史ニ二處カ三處カ見エ候、某方ニモ鹿島ノ滿、

出羽由利郡、能登珠洲郡ヨリ出候ト、此度被下候ト合テ十二認成候、南部ニ居候親類ドモヨリモ、南部ノ物ヲ可遣候ト申約候、此物俗間ニ申ス神軍ノ矢根ニテ候、極テ古キ物ニテ候、御書經ニ候砮、孔子家語、國語ナドニハ石砮ニテ肅愼ノ物ニ候、既ニ國史ニモ肅愼國ノ者佐渡ニ入犯シ候事モ候、蝦夷地ヨリ入犯ス事モ候、次ニ壺碑ニ靺鞨國ヘ道程モ見エ候、マカツハ古肅愼ノ地ニテ候、天平ノ比迄モ本邦ヨリノ往來ノ通路タシカニアリタルト見エ候、太古ノ時ニ彼國ノ者共入犯シ候ハ云ニ及バズ、東奥常陸、又ハ越後等ノ地ニ候、其軍有之候時ニカチ得候ナ、カノ軍役ヲホリ埋メ、又ハ塚ナドニシ候ガ、急雨ノ時ニ、ハジキ出サレ候ヲ、國史ニハ降候ト心得候ナ、記シ置レ候ト見エ候、最初ニモ西南地方ニナキ物ニ候ヲ以テ、彌以テ肅愼ノ楛矢石砮孔子ノ御覽及バレ候モノト存候ヘバ、珍重ノ物ニ候、右某所藏ノ内、十ノ内、貴樣ヨリ被下候ホド、シホラシキハ無之候、鹿島ヨリ來候ハ事ノ外ニ珍敷候、青石ニテ透トホリ候ホド麗シク候、所謂青砮ト存候、南部ニハカリマタわたくりも、ト申候、親類共モカハリ候形製ノ物ヲト尋テ候由申來候、能登ヨリ來候ハ、太平樣ニテ黒キモノニ候、細工ワロキモノニ候、(白石書ニ佐久間洞巖ニ書、按ニ洞巖ハ仙臺ノ儒ナリ、)

〔見聞漫錄〕石奴石

羽州佐州の海濱にて拾ひ得る矢根石にて、硝子および今里茶碗形むは、阿蘭陀のちやまんの類と見ゆ、いまの人ぎやまんと云は誤なり、

〔佐渡志五物産〕石鏃　方言矢ノ根石

鏃形ノ石ナリ、其形一ナラズ、或ハ蟇股、或ハ尖、或ハ平根等ノ品々、ミナ瑪瑙ノ類ニ似タリ、五色アリ、白キ者最透明ナリ、又灰色ニシテ光澤ナキモノアリ、上品ナルモノ少ク、中品下品ノモノ多シ、俗說ニ、毎年二月十(〇十、本作九)一日、空中ヨリ降下ルモノニテ、神軍ナリト云テ其日ハ山ニ入ラズ、十一(〇一、本作九)一日ノ朝ヨリコレヲ拾得ルトイフ、

古事類苑

金石部五

玉石下

〔大和本草 五金玉土石〕砒石 中夏ノ信州ヨリ出ル故信石トモ云、信ノ字ヲ分ツテ人言ト云、鍛タルヲ砒霜ト云大熱大毒アリ、人服事一錢許少モ死ス、鼠蚤食少許即死ス、昔ハ日本ニワタル、近年唐船ニ持來ラズ、那須野ノ殺生石ハ砒石ナル歟、攝州有馬ノ温泉ニ近キ山中ニ毒水アリ、諸鳥此水ヲ飲メハ死スト云、土人稱之爲鳥之地獄、越後ノ妙香山ニ有、地獄鳥其水ヲノメハ皆死ス、俱ハ砒石ノ毒アルカ、越後ノ鷺川ノ邊ニ石アリ、鼠色也、鳥雀又ハ鶏鼠ノ類此石ノマジレル飯ヲ食ヘハ立ドコロニ死ス、故ニ名ヅケテ鼠コロシト云、又鼠コロシトモ云、高野山奥ノ院ヘユク道ニ、玉川ト云小流アリ、此水毒アリト云、其水上ニ砒石アルカ、弘法ノ歌ニ、ワスレテモ汲ヤシツラン旅人ノ高野ノヲクノ玉川ノ水、此水毒アルヲ知ラシメント也、本草ニ又礜石ヲ載ス、是亦砒石ノ類、有毒石ニ所記礜石ノ毒ナル歟、

〔本草綱目啓蒙 七石〕砒石 今砒霜石ト云ナリ、生ハ砒石ト云、コレヲ鍛タルハ砒霜ト云、砒霜ニスル石ト云コトニヨテ、砒霜石ト云ナリ、和產ナシ、舶來ナリ、コレハ生ノ時ハ色黄色、故ニ集解ニ砒黄ノ名アリ、其中赤ミ多キヲ上品トス、コレハ土中ニ生ジテ石ニモ土ニモ似タルモノナリ、故ニ集解ニ、似石非石、似土非土ト云、天工開物ニハ一名信石、一名人言ト云、又本經逢原ニ、色白有黄暈者名金脚砒、色紅者最劣不堪

入藥云云、コレハ一說ナリ、然ドモコノ紅者ト云ハ、紅砒ノコトヲ云ナルベシ、紅砒ト云ハ別物ナリ、

今藥店ニ礬。石。ト云モノモ、砒石ト云モノモアリ、コレハ皆長州、石州ナドノ、銀山、銅山ヨリ出ルモノナリ、眞ノ礬石、砒石ニハアラズ、コレハ銀礦、銅礦ヲ吹分ル時、鑛ノ毒氣集リタルナリ、凡テ銅銀等ヲ吹分ル上ニ覆タルコモヲ重テ置クナリ、火盛ニナレバ、コモ燒テ後灰ニナル也、コノ灰ノ中ニ今礬石砒石ト云モノ、トロリト流堅マリテアリ、コノ火ノ烟ハ甚毒アリテ、臭氣アルモノナリ、コノ烟ノカヽリタル草木ハ皆枯レルナリ、又人ノ鼻ニ入レバ、鼻ムセンデ咽腫レルナリ、至テ惡臭アル烟ナリ、コノ灰ニ集リアルモノニ色々アリ、白キモ赤キモ黑ミアルモアリ、コレヲ皆鼠。コ。ロ。シ。ト。モ。鼬。コ。ロ。シ。ト。モ云、コレハ漢名紅。砒。ト云ナリ、天工開物紅砒則分金爐內、銀銅腦氣、有閃成者云々、コレナリ、今コノ鼠コロシヲ礬石ト云テ、黴瘡秘錄ノ生々乳ナドニ用ユ、毒ハ甚アルモノナリ又コノ鼠コロシノ中ニテ、上品ニシテ肌理美ニシテ色赤黃ナルヲ、眞ノ舶來ノ砒石ト云備ルナリ、鼠コロシモ色々アリ、肌粗ク石ノ如ク見苦キモアリ、輕キモアリ、ノギスヂアルモアリ、コレ等ハ皆礬石ト云テ、外治ニ多用ルナリ、コノ鼠コロシノ中ニ黑キ灰アリ、コレハ藁ノ灰ノ交リタルナリ、コノ藁ノ灰ヲ銅山ノス。パ。イ。ト云、甚毒アリ、鼠コロシニ用ユ、コレヲ川ヘ流セバ川ノ魚虫皆死スト云、

高野山ニ玉川ト云テ水アリ、毒水ト云ク弘法ノ歌モアリ、コノ水源ニハ毒石アル故ナルベシ、然ドモ未ダ源ヲ尋ズ、又攝州有馬ノ溫泉ノ邊ニ、鳥ノ地獄ト云テ、少シ凹ニナリテ白砂タマリタル處アリ、コノ處ニ鳥入レバ忽死スト云、コノ砂ヲ取リ田虫ニ付テヨク腐リテ治スルナリ、

砒石ヲ燒テ鐘乳石ノ如クシテ、白クナリタルヲ砒霜ト云、コノ燒法ハ修治ニモ出テアリ、然ドモ天工開物ニ、本草ノ修治ハ甚粗ニシテ益ナシト云テ、委ク法ヲ說テ圖モ出シテアリ、

一名[illegible]〈[illegible]〉　[illegible]石[illegible]　[illegible]〈[illegible]〉

〈本草綱目啓蒙[illegible]〉礜石

[illegible]ナル[illegible]〈時珍曰、此乃[illegible]之[illegible]、[illegible]人[illegible]〉

〈大日本府県志[illegible]〉[illegible]山[illegible]九十九　礜石考

寛政二庚戌の年四月、長門国大切山の麓なる峯部長登村、[illegible]山屋権左衛門の倅、津森某市といふ者、同所嵩[illegible]と謀議して、尾張の国名古屋に来り、岩緑青空青を商ふ、其頃彼某市なる者又ば〳〵下摺緑のものを思ふによつて予[illegible]が家に来りて薬を求む、石薬[illegible]中に、[illegible]其地の風俗及び金山緑方緑青、空青、礜石等の製法をたづねけるに、彼者其五六年以前迄へ、山稼をも致せしものにて、委敷其さまを語りける、然れ共同人一代々緑青屋とて、二青を製して京大坂に持来る商人也とし給ふにさらず中の頃にハ、京三条通に松屋庄兵衛なるもの、かたに来りぬ、予また兼てより本草綱目の礜石を考るに、砒霜の二石[illegible]ならず、是をいかでか正さんと思ふ折ふし、彼[illegible]人の物語にて、初て[illegible]することの[illegible]ばしければ、日々筆とりて委敷書るし置るものなり、これをもて綱目、天工開物等を考へ、砒霜の二石を明らかに知ることを得たり、依て文の拙きを顧らず、ありのまゝを録るのみ、猶は他日長州に遊んで是を正さん、

〈採薬使記[illegible]〉[illegible]任日、奥州南部オソレ山ヨリ礜石ヲ出ス、其色浅紅色ナリ、土人ノ曰、此石生ル所鳥類[illegible]上ヲ過ルニ[illegible]チ[illegible]ヲ死ルト云フ

先生按ズルニ、是レ真ノ礜石ナルヤイブカシ、中華ニモ所々ニ多ク生ル物ニアハナシ、和邦ニモ所々ニ礜石アリト聞ドモ、多クハ石ノ毒ニアラズ、其土地ノ毒気常ニ[illegible]ク蒸上セルニ、生類ノ傷メルコトアリト云フ、是モ此ノ類ナルベシ、

〈大日本府県志[illegible]〉[illegible]山[illegible]九十九　礦を焼て銅鉛[illegible]を取るの法　釜の風下には草木絶て生

せず、

右に圖せるが如く、土にて竈上げ内に薪を入、又四方にも薪を積み、又其内に青松葉を敷き、其眞中へクサリを入れ、上に古き藁席を幾重も被せ覆ひ、其上を泥にて塗り、扨烟穴より火を入、また烟穴をも土にて塗り塞ぎ、むし燒にする也、かくの如くすれば、クサリの中なる金かたまりて、砒霜上へ登る也、扨幾日も燒盡して、後火の消るを篤と窺ひて、夫より十五六日も過てのち、上の土を鍬にて堀發し見るに、むしろの裏に貼て五六寸ばかりある石の如き物あり、則砒霜なり、至りて火の氣强し當りたる所ハ赤く、雞冠雄黃の色の濃が如し、是をシヤサといふ、（信州玉山の砒井の砒に同じ）又火のぬるき所ハ色黃也、（雌黃の如し）或ハ白きあり、白きを白灰毒と云、毒至てつよしと云傳ふ、（所謂銀子色者）是也、（是色、雌雄黃及白色者、器耳、故餘に同じ、）又灰色の物ハ土石を夾て下品なり、（所謂加細層と是なり、按に土竈の下に溜る物歟、）扨釜を堀發すときハ、臍下鼻下手先などに米茶を採りて堀る事なり、是へ毒に中らざる用心なり、然れども初て堀る者ハ、少しづゝ毒に中る、毒にあたれバ腫脹て食す事能はず、手先鼻の下額などへ瘡茄を發し、毎々中れバ後々ハ中らず、然れども毒人を害するほどの物故、山稼の者さへ是を懼るゝことかくの如し、況や常の人ハ猶更つゝしみ懼るべき事也、（略）○中　砒霜（和名あししのいし）　灰毒（フサリを燒製する故灰毒と云、又色の灰たる故、）

灰石（鐵上に同じ、形石の如し）　鐵毒（鐵の多き所にては鐵にふりかけ置く、其上に來りて死す、是とりもちにてとるに同じ、）

鼠殺（是は鼠に毒する故也、鐵目にも盛と云、鐵共に有、天工開物に田中の鼠の害を除と云、鐵と同じ、）

シヤチ（紫色の者を云、上品なり、）　白灰毒（白光にして文理あるもの）　ヒソウセキ（總名也）

此石金山にて百匁を一斤といふ、價百文也、又萩の城下にて小賣する者四匁を一兩と云、價十六銅也、是ハ所々にて蠅をとり、又ハ鼠をとる、又ハ魚を取るものは水に流し、鳥を取ものは食に合す、是を以市肆に鬻ぐあり、利を嗜ものハ不仁なるかな、人若是をしらずして其魚鳥を食せバ、何

ど其毒にあたらざるんや、時珍曰、礜ハ人熱大毒也、礜石ハ毒に尤烈也、鼠喜少しばかりを食ハ即死、猫犬鼠害をくらへハ亦斃し、此之謂也、

此石多く九州へ賣り、買九州の商人異國に異國へうり渡すと見談有、予按るに、日本ハ銅山多く毎年銅を多く外國へ渡る故、礜石ハ銅の精気なり、我國に銅の多ければ、礜も又多きことを知らけし、然れ共此事の物と少し異なるハ疑ある事なり、左に委ハ知るべし、養数ハ本草綱目、天工開物、及び予が著所の蕃石考等を参考すべし、

〔本草和名 玉石〕礜石 一名青分石、一名立制石、一名固羊石、一名白礜石、一名太白石、一名澤乳、一名食鹽、已上出本草 一名鼠卿、一名青礜石、已上出釋藥性 出長門國、

〔倭名類聚抄 一 石〕礜石 兼名苑云、礜石礬石也、音與、本草云、一名澤乳、蠶食之肥、鼠食之死、今按、又有特生礜石、

〔箋注倭名類聚抄 一 石〕廣本礜作礬、是也、與醫心方合、神農本草三卷、見新修本草所引文、證類載新修本草玉石部下品、〇今案、又有特生礜石、見呉氏本草、所引唐韻文、證類引、按西山經、皐塗之山有白石焉、其名曰礜、可以毒鼠、郭璞注云、今礜石殺鼠、蠶食之而肥、按呉氏本之、證與普本草六卷、載在七錄、見隋書經籍志、有呉氏本草圖六卷、蓋呉普撰圖是、今無傳本、據新修本草礜石、今證類有傳者、留之總錄六卷、又玉石部下品、載礜石特生礜石、證類引本草、皆倣新修本草、今不引之、而引呉氏、可疑、廣本無見音以下五字、說文、礜、毒石也、出漢中、本草、礜石一名白礜石、陶注云、生礜石內水中、令水不冰、蘇注云、此石鍊之、大久亦可、但解散、不可、燒之、又堅、本草又云、特生礜石、一名蒼礜石、陶注云、舊云鸛巢中者最佳、鸛恒入水冷、故取以壅卵令熱、今不可得、唯用出漢中者、其外形紫赤色、內白如霜、中央有臼形、狀如齒者佳、蘇注云、陶所說特生、今出梁州北馬道戍澗中、有之、形塊小於白礜、而曠粒大數倍、乃如大小豆許、白礜石粒細、若粟米耳、

（本草綱目譯義石十）礜石

通名ナリ、和產知レズ、今ハ唐ヨリモ渡ラズ、昔ハ渡リシナリ、京ニモ若水ノ時吟味セラレシガ、一塊殘リタアリ、形細砂ヲツクネタル如クシテ、肌理粗ニシテ、色白シテ、少シ鼠ヲ帶ルナリ、コレハ毒石故ニ、藥店ニ賣買ハ法度ナリ、越後ニ鼠コロシト云石アリ、コレモ毒石ト云コトハ、土人知リタアリ、今ハ埋メテ石ハ見ヘズ、故ニ礜石ヤラ何ヤラ知ズ、礜石ハ砒石ヨリハ毒薄シ、故ニ方藥ニモ用、尤モ砒石モ藥ニ用ルコトモアレドモ、コレハ希ナルコト也、日本諸國ニ毒石ト云傳ルモノ處々ニアリ、然ドモ毒物故ニ眞僞ヲ試ムルコトナラズ、故ニ何ヤラ知レズ、

一名　定風石（綱目啓蒙性大全）　與石（同）　白虎（綱目石藥）　白龍（同）　秋石（同）（同名アリ、人ノ部ノ秋石ハ小便ニテ作リシナリ、）

（重修本草綱目啓蒙石六）礜石　一名　與石（綱目啓蒙性大全）　定風石（同上）　白虎（石藥爾雅）　白龍（同上）　秋石（同上）（同名アリ）　立志石（山海經廣註）

漢渡ナシ、和產モ未ダ詳ナラズ、越後ニ鼠コロシト云石アリ、是礜石ナルヤ、未ダ詳ナラズ、和ニ砒石、或ハ礜石ト呼ブモノ、長州長登、石州銀山ヨリ出ヅ、自然生ニハアラズ、銅礦ヲフキ分ル時、ソノ石ノ毒氣流レ出テ凝結シタルモノ也、初メ石ヲヤク時、上ニ濕薦（ヌレゴモ）ヲ覆フ、火盛ナルニ及テ、其コモ燒ケテ黑灰トナル、コレヲスバイト云、其灰中ニ此塊アリ、色赤シテ甚臭氣アリ、冷ル時ハ變ジテ數色トナル、コレヲ鼠コロシ、又ハイコロシトモ云、外科ニ多ク此ヲ用ユ、然ドモ眞ノ砒石ニ非ズ、赤礜石ニ非ズ、是紅砒ナリ、天工開物ニ、紅砒則分ニ金爐內ニ、銀銅腦氣有閃成者ト云、ソノスペイヲ河水中ニ投レバ、魚蟲盡ク死ス、其毒知ベシ、礜石ハ砒石ヨリハ毒薄シト云、然ルニ此ノ如キ毒物ヲ俗ニ礜石ト稱シ、服藥トスル者、不仁ノ甚シキナリ、（中略）故ニ、寬文年間、嚴命アリテ、礜石ノ舶來ヲ禁ズ、今絕テ有ルコトナシ、故ニ外科者流、紅砒ヲ以テ礜石ニ代フ、

〔大日本府縣志[illegible]〕[illegible]山[illegible]九十九 礜石釋名　白礜石　太白石　立制石　青分石　固羊石　石鹽　澤乳　鼠鄉　西山經皐塗山注云、鼠食則死、蠶食而肥、則鄉之意以此、
特生礜石　蒼礜石　蒼石　鼠毒
弘景曰、特生礜石、一名蒼礜石、梁州礜石、亦有青者、漢中人亦以毒鼠、　宗奭曰、礜石特生礜石、止是一物、但以特生不特生爲異耳、　時珍曰、礜石有數種、白礜石、蒼礜石、紫礜石、紅皮礜石、桃花礜石、金星礜石、銀星礜石、特生礜石、俱是一物、但以形色立名、其性皆熱毒、並可毒鼠、又云、礜石性氣與砒石相近、蓋亦其類也、

[illegible]礜石　一名化公石、一名石鹽、[illegible]

按に、礜石ハ同物なり、或ハ形を以し、或ハ色をもてす、或ハ自然生あり、或ハ井中に得るもの有、或ハ製造の物あり、皆一物也、但礜石のみ異れり、[illegible]往に礜石ハ[illegible]來のヒフタリヨウルシアルビーなり、是を紛匿にて白丹礬といふ、くわしき事ハ礜石考に出せば、此に費さす、蓋ハ[illegible]すべきものにあらず、[illegible]科の要領なり、此書ハ[illegible]すべきものにあらず、下[illegible]の[illegible]料の為に是をあらはして、同志の者に示すのみ、

寛政四壬子年三月　　尾張　原道圓齋

〔本草綱目譯說 五〕特生礜石
和産知レズ、唐ヨリモ渡ラズ、丹後宮津ニ、ハヌケジヤリト云モノアリ、コレヲ昔ヨリ本條ニ充レドモ充ラズ、ハヌケロヤリト云モノハ、鼠頭椎ニシテ、白川石ノ如キ立タ三四分位ニ砕ケタアリタ、皆ノヌケタル如レ、故ニ、ハヌケロヤリト云ナリ、濃州ノ岩屋ニモロノ砂アリ、コレヲ岩屋ロヤリト云、骨毒アルモノ故ニ、トメ石ニナリタ、取ルコトハナラズ、コノ石モ、漢名ハ知レズ、礜石ニハ充ラズ、

殺生石

握雪礬石

和產知レズ、蘇恭ノ說デハ、石膽ノコトナリ、コレハ時珍ノ說ヨク分タアリ、時珍說デハ、石間ニ生ズル油ナリ、コレハ和產知レズ、然ドモコレハ毒ナキモノト云、故ニ時珍モ握雪礬石ノ誤ナラント疑タアリ、

〔紀伊續風土記物產一〕蜘蛛血石

那賀郡貴志莊尾寺村の白石谷は、其地南面にして、數十の大白石、溪澗を夾みて、數百步の際に連續す、中にも陰陽石、冠石、獅子口石等の土名あるもの至りて大なり、冬月石上に脂液重蒸して、鐵に丹青をなすが如し、俗に蜘蛛血石といふ、相傳ふ、昔此山に大蜘蛛ありて、往來の人を惱ます、此間貴志正平といふ者、此を退治す、蜘蛛の骨、石となるとは不經の說なり、每に、早晨石上に赤き脂液湧出す、又鐵色及青白色も交れり、赤液は日を見れば即乾く、鐵色又青白色は日を經て風霜を蒙る者なり、此液四時あれども、冬月殊に多し、採りて金瘡敗瘡に傅くれば、極めて効あり、土人いふ、山神これを惜み、妄に採れば災を下すとて、其液を採るものは、神酒を備へて採る、按ずるに、此石液は、即本草綱目に載せたる握雪礬石なり、時珍曰、謹按、丹房鑑源云、握雪礬石、出曲蘿澤、盛寒時有鐵生于石上、可采一分結永十兩、又按、岣嶁神書云、石液即丹礬之脂液也、此石出襄陽曲蘿澤中、或在山、或在水、色白面粗糯、至冬月、有脂液出其上、且則見日而伏、當于日未出時、以銅刀刮置器內、火煅通赤、取出搗汁爲丸、其液沾處、便如鐵色、以液一銖、制水銀四兩、答中火之立乾、但此液亦不多得、乃神理所惜、采時須用白雞清酒祭之、此石華山高山皆出、而有脂液者、惟此曲蘿又貫越集亦言、丹山礬十兩可乾永十兩、此乃入格物之精、奪天地之秘也、據三書所引、則握雪礬石、乃石之液、非土中石膽也、蘇恭所說、自是石膽、其說與別錄及陶弘景所註石膽相合、不當復注于此、又曰、氣味甘溫無毒、治大風瘡とあり、又古說に、此液赤色なるを以て、雄黃に充つるは誤なり、

〔本朝奇跡談中〕下野國那須郡の殺生石、那須野が嶽の麓に在、此所湯本と云、彼殺生石を打割

樋子を見又是を嘗て味を試るに、更に常の石に異なる事なし、此石の有所、硫黄盆と見ゆる、此山の温泉噴出る時殺生石ある場所に行逢ふ時は、貪獸に至迄悉死と云り、予彼殺生石を打割て持参し、二ツ三ツ書上る、那須野の原七里四方有と云、昔は廻り百貳拾三里有と村老の云傳ふと云、おの十里は今の曾里計に當れば、斯云たるべし、

(採藥使記中)一野州那須野ノ殺生石、其大サ牛ノ如ク、二間アリ、一種ハ其色潔青シ、一種ハ白クヤヽ黄赤色アリ、其ガ間アリ、蟲蛇ノ類コレニ觸ルレバ乍チ死ス、蓋毒蛇ノ類、年ヲ經タルモ聚テ積イズト云フ、是レ毒石ノ類ニシテ、眞ノ礦石ニアラズ、此生藍イルハ、陸奥下野ノ堺ニ那川アリ、是ヨリ南ヲ那須野ト云フ、南ニ三ツノ高山アリ、茶臼嶽、朝日嶽、毘沙門嶽ト云フ、此所多ク硫黄ヲ生ズ、其土青黄色ニシテ、穴多クアリタ、常ニ火煙ヲ出ス故ニ毒石ヲ生ズルカ、少レ山ニ登レバ殺生石アリ、今モ蟲ヲ捉ヘテ石面ニ置クベ、乍チ死スト云フ、

(雲根志三十九)一下野國那須野にて、毒石を解散せし僧玄翁を能照禪師といふ、法を峨山の碩公に得ルと云々、石を割る鎚を玄翁といふ事、彼僧殺生石を破りし事よりいふ、

實按此說關東に限りて玄翁といふ、上方邊にては一振入といふ、是此鎚を用り始し人の名をいふと見へたり、關東にて右のもの名を知らず、僧杯に聞し時、殺生石の話を思ひ出し、自廬に石を割道具ゆへ、玄翁と名付しと見へたり、殺生石の事、玉藻前の譬といふ事、正史實錄に無之事也、石は尋常石に相違なきよし、破れも不殺草村の中に現在也、

(松屋筆記百四)殺生石靈神

玄翁和尚、那須野の殺生石を鎮し事は、玉藻草子、鎌倉志などに見ゆ、謠曲にも殺生石あり、こは當代の總寧寺和尚が、峨山の靈靈を射消せしによれる附會にや、總寧和尚の事は、大光明藏一卷十五下に見ゆ、

〔本草和名 玉石三〕滑石　一名液石、一名脆石、一名番石、仁諝音[illegible]冷石、出[illegible]注一名汋石、一名夜共者、一名民月石、一名夜石、一名畷烙冷石、一名切齒、中略、軟滑、凡此石切齒立盡、故名之、已上七名出釋藥性、出紀伊國、

〔倭名類聚抄 十一 石〕滑石　本草云、滑石、一名脆石、蘇敬云、極軟滑、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 一 山石〕千金翼方、證類本草上品、並作一名脆石、本草和名、是字半缺、唯存肉傍、按蘇軟滑之義、則作脆似是、中山經云、卑山泉水出焉、其中多脆石、或是也、按證類本草引蘇敬注云、此石所在皆有、嶺南始安出者、白如凝脂、極軟滑、此注所引即是、然蘇恭曰、滑石處所在有之、出於嶺南始安者極軟脆也、非釋滑石名義、源君引之、增故以名之四字、非是、李時珍曰、今人亦以刻圖書、不甚堅牢、則知今俗呼蠟石者是也、下總本注十字爲正文、廣本同、按千金翼方本草部各條、與新修本草證類本草正文全同、其次叙亦與新修本草、本草和名無異、則知是亦唐本草之正文、故本書引本草正文、而今邉者亦取據之、

〔本草綱目譯義 九 石〕滑石

通名ナリ、舶來ニ古渡新渡二品アリ、其中石軟ニシテ光リ多ク、滑ニ見ルヲ上品トスルナリ、色モ品數アレドモ、白キヲ上品トス、青キヲ帯、黄ヲ帯ルヲ下品トスルナリ、本草原始ニ、形大小不同、色白光潤者良、黄色青者劣ト云々、本經逢原ニ、色青赤者有毒ト云々、舶來ニ僞物アリ、形ヨク似テモ土ノ味アルハ僞物ナリ、味甘ヲ眞物トスルナリ、和產アリ、備前ノ八木山ノ西南ノ角ニ白キ石アリ、印材ニモ用ユ、コレヲ誤テヤケ岩ト云、コノ石ハ舶來ノ滑石ヨリハ堅ケレドモ、ロウ石ヨリハ軟カニシテ、光リ多アリ、コレ滑石ナリ、先醒齋筆記ニ、滑石堅白者良ト云々、然トキハ堅キモ上品ナリ、又肥後或ハ越前大虫ナドヨリ出ル滑石ハ、白色ニシテ、軟カニシテ、舶來ト同ジ、又一種石ワタト云モノアリ、ヨク滑石ニ似タリ、ロウ石ノ如クシテ、ロウ石ヨリ軟ニシテ、薄青黑シテ、黑斑アルモ、又黄斑アルモアリ、コレヲ粉ニシテハ潔白ナリ、コレヲ血止メ、或ハ油ヲトシニ用ユ、コレハ舶

消石

家ヨモアリ、又尾州濃州上野伊勢ナドヨリモ出ルナリ、又豫州三角寺ノ路傍ニハ、五色ノ石ワタア
リ、方言ハ又ノリワンジヤクト云、〈雲母ノ石ハ、故〉又石ワタハ總ジテ通名ハ冷滑石ト云ナリ、然ドモ石ワ
タニハ同名多シ、本石膽モ石ワタト云、又閃ニ石類ニ石ワタト云モノアリ、コレハ備後ノ奴可郡
ノ產名物ナリ、勢州ニモアリ、コレハ全體青黑ク堅キ石ノ中ニ、二分位ハ巾ノ白キ筋アリ、ソノ筋
ノ處ワタノ如レ、コレヲ石ワタト云、コレ紅毛ヨリモ渡ルナリ、蕃名ゼクペイントト云、漢名ハ石絨
ト云、事物紺珠ニ出、石絨ハ草ニモ石ニモ同名アリ、

〔本草和名　玉石〕消石　一名芒消、一名北帝玄珠、〈出丹口訣〉一名化石、〈出太清經〉一名見鹽羅、〈出太清經〉出雜注經、

〔倭名類聚抄　一石〕消石　丹口訣云、消石一名芒消、藥決云、朴消一名石朴、今按、消石朴消是一物也、要
方云、消石者芒消之根盤、芒消者鍊之成芒消是也、

〔箋注倭名類聚抄　一山石〕今按、消石朴消是一物也、要方云、朴消者芒消之大者也、消石者芒消之根盤
者鍊之成芒消是也、隋書云、丹砂訣一卷、開元二十二年上、見在書目錄、有丹決一卷、所引丹口訣蓋
是、見在書目錄、又有藥靑決一卷、所引藥決或是、二書今並無傳本、按、本草和名云、消石一名芒消、一
名北帝玄珠、出丹口訣、又云、朴消一名消石朴、一名東野、出藥決、千金翼方、證類本草、消石一名芒
消、及朴消一名消石朴、皆本草正文、則北帝玄珠之名、出丹口訣、東野之名、出藥決、亦誤、以本草和
名芒消下消石朴下並不載出典例、本草諸名爲出丹口訣藥決、誤也、山田本、昌平本、要方云、作要用
方、曲直瀨本無要方云三字、注末是也、作見要方三字、按隋書有本草要方三卷、甘濬之撰、見在書目
錄、有要方十二卷、唐書有要用二卷、今並無傳本、未知要方要用方以孰爲是、本草陶注云、取石
脾與消石、以水煑之、一斛得三斗、正白如雪、以水投中、卽消、故名消石、蘇注云、消石卽芒消是也、今按、
鹹鹵朴消、淋取汁煎鍊、作芒消、卽是消石、本草圖經云、朴消、消石、芒消、舊說三物同種、初採得其苗、以
水淋取汁、煎鍊而成、乃朴消也、一名消石朴、以消石出於其中、又鍊朴消或地霜而成、堅白如石者、乃

朴消　芒消

消石、一名芒消、又取朴消、以煖水淋汁煉之、減半投於盆中、經宿而有細芒生、乃芒消也、今醫方家所用、但以末煉成塊微青色者、爲朴消、煉成盆中、上有芒者爲芒消、亦謂之盆消、其芒消底澄凝者爲消石、按消石芒消、本草所說多淆、要之有水火二消、火消生古屋內地板下燥土上、狀如俗呼霜柱者、今俗呼焰消是也、水消生鹵鹽之地、如末鹽狀、今俗呼爲芒消是也、水火二消煎煉皆爲芒硝、其末煎煉者並名朴消、又名消石朴也、要方以朴消爲芒消之大者、以消石爲芒硝之根盤者、未知所本、

（重修本草綱目啓蒙 六石）消石　焰消 漢名　シロエンセウ　シラエンセウ　鹽石 和方書　一名河東野 石藥爾雅　化金石 同上

焰消ハ多年古屋內地板下燥ケル地上ニ生ズ、新宅ニハ生ゼズ、色白クシテ霜バシラノ立タルガ如シ、或ハ鍋ニ結シテ方塊ヲ成スモアリ、火ヲ點ズレバ必燃ヘテ下ニ移ル、又日ノヨクアタル陽地上ニモ生ズ、此白霜ヲ取リ煎煉スルコト朴消ノ如クシテ、馬牙消芒消ヲ凝結ス、コレヲシラエンセウト云、味辛甘ヲ良トス、末トナシ、硫黃杉炭ニ和シテ、火藥トスルヲ、クロエンセウト云、舶來ノ消石上品ナリ、和產ハ加州、越中、飛州ヲ上品トス、筑前、豐後、作州、泉州、藝州、勢州之ニ次グ、近海ノ地ニ生ズルモノハ鹽氣アリ、下品トス、

正誤、假。消。石。ハ贋セノ消石ナリ、

（毛吹草 三）飛驒　鹽硝エンセウ　越中　鹽硝エンセウ　美作　鹽硝エンセウ　安藝　鹽硝エンセウ　豐後　鹽硝エンセウ

（愛媛面影 四浮穴郡）硝石　野尻村多焰硝を出す、製して諸國に商ふ、俗に久万焰硝と名く、

（本草和名 三玉石）朴。消。　一名消石朴　一名東野 出雜要訣　出若狹備中國、○中略

芒。消。　石脾　石膽 已上二物陶景注云、不知何物　一名單青 出雜要訣　出太宰、

（倭名類聚抄 一石）朴消　要方云、朴消者芒消之大者也、

（重修本草綱目啓蒙 六石）朴消　一名大消尊者 藥譜　東野 石藥爾雅　海末　單丹 同上、決二　女鹽 通山志 同

馬牙消　一名馬牙石〈○中略〉　剛膏消〈同上〉　[illegible]

本邦ニ謂タ朴消トユルモノハ、芒消馬牙消ノ總稱ニシテ、下ニ結シタ粗朴ナル者ヲ朴消トスル
ヲ謂ニアラズ、本條ニモ[illegible]消ノ名アリ、山地ニ生ズル故アリ、火藥ニ用ユルモノハ、焰消ト書ス、前
消石ナリ、[illegible]然和骨相同ジ混ズルコトナカレ、形狀モ相似レドモ、消石ハ古屋內地板ノ下ニ生ジ
ヨク鹹ユ、朴消ハ山地ニ生ジテ鹹ヘズ、水火ノ別アリ、消石ハ火消〈即消石下〉ニ、朴消ハ水消ナリ、山地
ニアルハ土トモニ採ルモノ細末アリ、鹹地ニテ無鹽ノ芒消ト云、本草彙言ニ、コレヲ曹ト云、ソノ
曹ヲ鍋釜ニ盛リ、下ハ器ヲ受ケ、上ヨリ白湯ヲ注ゲバ、曹皆解ケテ下ノ器ニ落テ、滓渣ノミ鍋釜ノ
底ニ殘ル、其器ノ水ハ釜盆ニ入レ煎ジ、稍稠ノ器ニ傾ケ入レ、置スルコト一宿ナル時ハ、凝結シタ
塊ヲナス、是朴消ナリ、又清水ヲ入淨タシ、濁水ヲ去リテ再煎シテ置スルコト一宿ナル時ハ、再ビ
凝結ス、ソノ上ニアルモノハ形大ニシテ、棱アリテ石英ノ如ク、縱橫ニ相重ル、是レ馬牙消ナリ、ソ
ノ底ニ着結タレタ針芒ノ如キアリ、是レ芒消ナリ、ソノ底ニ塊ヲナスモノハ盆消ナリ、此盆消ヲ
再煎煉シテ又芒消牙消ヲ結ユベシ、皆冬月寒氣ノ時ヲ以テ製ス、今藥舖ニ芒消ト呼モノハ皆馬
牙消ナリ。

續日本紀ニ、光仁天皇天應元年六月、[illegible]合物、朴消ト云ヘリ、然レドモ此ハ焰消ヲ
誤リ、朴消ト書タルナルベシ、近年備前芒消ト云モノアリ、淡州海濱ヨリ製シ出ス、其法鹽竈ノ
鹹土ヲ静トシ、汲汁ヲ煮汁ニシ、芒消ヲ製スル如クス、其形全ク馬牙芒消ニ似タリ、又近年阿州撫
養ヨリモ製シ出ス。

〔土州淵岳志〈中略〉〕芒消石

土佐郡朝倉神社ノ御庭同ジク別當一和尚ノ弘法大師ノ堂前ノ土中ニモアリ、昔シハ赤山ニア
リシガ今ハ少ナシ、色ハ鼠色ニテ板或柱ナドニアル字ヲ消スニヨク消ユル、又堅キ紙ニ一二字

ノ豐書ナドハ、能ク見ユル、大サハ一寸四分又ハ二寸ホドモアリ、

〔倭名類聚抄一山石〕陽起石　本草云、陽起石、一名羊起石、

〔箋注倭名類聚抄一山石〕所引中品文、下總本下有雲母根也四字、與原書合、按、本草云、陽起石主陰痿不起補不足、生齊山々谷及琅邪或雲山陽起山、陶注云、此所出卽與雲母同、而甚似雲母、但原實耳、今用乃出益州、與礜石同處、色小黃黑、卽礜石、雲母根未、知何者、蘇注云、此石以白色肌理似殷孽、仍挾帶雲母滋潤者爲良、李時珍曰、以能命名、按、陽羊同音假借、

〔本草綱目譯義十石〕陽起石

通名ナリ、藥店ニウルハ皆舶來ナリ、和產ハ藥店ニウラズ、コノ石ハ白クシテ光リアルモノ上品ナリ、青キト黃ナルトハ下品ナリ、肌ニ細ニ直針文アリテ、甚柔ナルモノナリ、碎易シテ多シ强ク、テワレバ糸ノ如ク碎ルモノナリ、本草原始ニ、雲頭毛者、眞云云ノギスヂノアルコトヲ云ナリ、コノ形ハ色々アリ、先ブサキ尖リ、牙形ニシテ一ツ分レテアルガ上品ナリ、集解ニ如狼牙者上ト云コレナリ、コレハ舶來ニモアリ、又數多ク集リ大ナルアリ、集解ニ鋪茸茸角ト云コレナリ、下品ナリ、又雲頭ト云ハ、丸シテ多集リ生クテ尖リナキナリ、コレモ舶來ノ中ニ希ニアリ、集解ニハ、陽起石ヲ雲母ノ根ト云ヘドモ、雲母ノ生ズル山ニハ陽起石ハナシ、雲母ハ白キ石ヨリ生ズ、其雲母ノ生テアル石、陽起石ニ似タリ、故ニ集解ニ誤ルト見ルナリ、舶來ノ自然銅ノ中ニ陽起石ノ付テアルアリ、コレヲ見レバ銅山ニ生ズルモノト見ルナリ、近年ハ江州石部、濃州赤坂ヨリ上品陽起石出ル、舶來ニ同ジ、

一名五精金(［illegible］)五精陸華(石藥爾雅)五色芙蓉(同)

〔新編常陸國誌六十一土產〕陽起石(和名波々久理、俗名天狗爪、又龍爪、又龍牙、)多珂郡笠石新田ヨリ出、同郡矢指村飛龍山ノ岩中ヨリモ出、他ノ村ヨリモ間々出ルコトナリ、俗

[illegible]

ニ龍牙又龍爪、天狗爪ナド云、明和安永ノ比多珂郡河原子村ノ海邊ノ岩崩レタル中ヨリ、コノ石大小二三出タリ、天明中那珂郡大内村ノ岩ノウガタルヽコトアリシ時ニモ、コレヲ得タリ、同比水戸ノ城西神崎ニテ岩ヲ切ル、青赤ノ石一箇ヲ得タリト云、凡其體牛角ノ如クニシテ、尤深アリ、色青クシテ本邊ニ似タル處アリ、又節アリテ牛角ニ類ス、本太ク小口ハ色稍黒クシテ紫色ノ處アリ、末ハ尖リテ牙ノ如シ、コノ石多クハ岩石ノ内ニ挾マレタリト云、新撰字鏡ニハ、車渠ニ圓蛇石〈以波比〉トモ出リ、石ヲタリト云コトハ、日本紀神代ノ歌ニアリ、但岩石ノコトニハアラズ丸石ノコトヽ見ユ、今ノ俗ニモ丸キモノヽ形ヲ云ニ、タリ〳〵トセレナド云コトアルハコレナリ〈一説ノ實ヲ、一ケニタリトモ圓實ナリトス〉

〔本草綱目啓蒙〕八自然銅〇集解ニモ今市人多以鍮石爲自然銅、燒之成青焔、如硫黄者是也トアリ、別物ナリ、又火ニ入テ燃モノアリ、金牙石ト云モノナリ、方金牙トモ云、又一種ハ唐ヨリ渡ル、自然銅ニ形丸キモアリ、蛇含石ト同クシテ丸クヒラタク、三分ホドアリテムカゴノ如シ、色ハ鐵ノサビ色ナリ、マワリニイカイコトイボアリ、マダラワレタモノナリ、蛇含石ト云アリ、蛇黄ト本書ニイブ、本ノ說ニ似蛇含大トアリ、唐ヨリハ別ニ渡ラズ、蛇含石ノ中ニマジリテ渡ルナリ、ワリテ見ルニ堅クシテ、金色ニスジノアルモノ眞ナリ、内白ク鍮ノ如ク光ルモノハ蛇含石ナリ、和産モアリ、カナキ石ト云、遠州ノ方言ナリ、又ナワダノ自然銅ト云アリ、集解ニ信州出一種如亂銅絲狀ト云、銅絲ハハリガネノコトナリ、銅山ニアルモノナリ、アカガネノトコトモ云フナリ、アカガネノ吹出タルモノト云フ、細クハリガネノ如シ、又丘髪様ノ自然銅ト云モノアリ、色々ノ形ニナリテ出タリ、ヒキコンダリ一カタマリニナリテ、生髪ノ如キナリ、鑛石ニモ品類多シ、紀州ノ熊野ニタギンヤト云、美濃ニタギンブクロト云フ、雙六ノサイノ如クシタ、一ツニアフマリタ塊ヲ爲タルアリ、サイロフボウト云、又コマカ

蛇含石

金牙石
錫牙石
銅牙石

ウトツタアツマリ生ズルモアリ、四角ノ形ナリ、ジヤカト云フ、伊豆ノ方言ナリ、山城ニテハ嵯峨ノ大井川ニアリ、石ノ中ニ空虛ナル處アリテ、其中ニ大小雜ナアルナリ、礬石ナリ、ヤケバモヘルナリ、他國ノ產ハ石ノ內ニハナシ、伊豆ト山シロ計也、

一名金山ダ土〔[illegible]〕　金ダ土〔[illegible]〕

（重修本草綱目啓蒙石六）金牙石〇中略

凡、金牙石、自然銅、礬石ノ三物、ミナ通ジテキリコズナト呼ブ、形モ相同クシテ、混ジヤスシ、火ニテ燒テ爆シ飛ブモノハ金牙石ナリ、飛ズ燃ザルハ自然銅也、燃テ灰トナルモノハ礬石ナリ、

（本草綱目譯義石十）蛇黃

本草ニテハ蛇黃ト蛇含石トヲ二ツニ分タアリ、コレハ非ナリ、本草彙言、蛇黃一名蛇含石云云、コノ說是ナリ、今蛇含石舶來アリ、形丸ク扁シ、大ナルハ一寸、小ナルハ五六分、重モキモノナリ、黃獨(カシウイモ)ノムカゴノ如シ、茶色ニシテ黑ミアリ、外ニイボ多シ、至テ堅キモノナリ、ワレバ中白ニシテ光リアリテ、鐵ノ如シ、又外色ハ同シテ內金色ニシテノギスデアルアリ、コレハ自然銅ナリ、唐ヨリモコレヲ混ジタ昔蛇含石ト云タ渡スナリ、破リテ分別スベシ、

（佐渡志物產五）蛇含石

所々ニアリ、礬石ト混ジ、又自然銅ト形相似テ辨別シガタシ、羽茂郡山田村譯臺山ニ出ルモノ、眞ノ蛇含石ナルベシ、

（本草和名玉石五）金牙　一名白虎脫齒（出丹口訣）銅牙、（陶景注云又有銅牙）金牙一名黃石牙（出小品方）出但馬上野國、

（多識編石一）金牙石、古加禰乃米伊志、

（本草綱目譯義石十）金牙石

通名ナリ、又方金牙トモ通名ナリ、方金牙ノ名ハ自然銅ノ集解ニ出、タナザコ（伊豆）ドウキン（但馬）

雄黃

トモ云ナリ、コレハ皆形正四角ナリ、雙六ノサイノ如キモノアリ、又大ナルモ小ナルモアリ、コレニ金色ニヒカリ甚美ナルアリ、コレヲ方金牙ト云ナリ、和産ハ佐渡銀鑛ヨリ出、又舶來モアリ、又銀色ニシテ光アルヲ和名ニ方銀牙ト云、コレハ漢名ニタヘナケレドモ、方金牙ノ例ニヨリ名タルナリ、漢名ハ銀牙石ト云ナリ、形ハ本條ニ同ク、コレハ和産ハ、大和伊勢金河ヨリ出、本條ト自然銅ト蛇含石ト三物同類ナリ、色モ同ク紛レ易シ、能ク見レバヨク分ツナリ、本條ハ燒クモモエズ、然ドモ爽ブナリ、自然銅ハ燒クモモエズ、蛇含石ハ燒モユテ灰ニナルナリ、

一名　白虎殿金

〔採藥使記 中〕鹽谷任田、常州山中所々ヨリ金銀牙石ヲ出ス、鎌倉領ノ內竹之下ト云フ所ヨリ出ル、圖ヲ獻上ス、

先生按ズルニ銅牙石ハ亂ク所々ヨリ出ル、金銀牙石ハ稀ナリ、

〔佐渡志 物產〕金牙石

所々山谷ノ間ニアリ、羽茂郡山田村野高山ノ側ニ多シ、

〔紀伊續風土記 物產 一〕金牙石

牟婁郡那智荘濱宮村及海部郡雜賀荘田邊に產す、中品なり、

〔本草和名 四 石〕雄黃　武都仇池者爲雄黃、已上二種出蘇敬注、一名玄臺月華 出丹口訣　一名帝女血 出太清經　一名金液 出丹訣　一名黃石金 出兼名苑　出備中國、

〔本草綱目譯說 石〕雄黃

通名ナリ、ヲウヲウ トモ云、續日本紀、文武天皇二年、伊勢獻雄黃ト云、今モ勢州丹生村ニ雄黃ノ小タク砂ニナリタルアリ、又石ニ血ノツキタル如クナリ、赤キ雄黃アリ、然ドモ唐ヨリ來ル如キ大ニ堅リタルハナシ、又常陸ノ高岡原ニ血石ト云アリ、コレハ至テ赤キ雄黃ノ粉ノ土ニ變リア

ルナリ、又鹿島ト云處ハタモノテト云モノアリ、コレモ石ニ少シ雄黄ノ付テアルナリ、又紀州長郡岸庄ト云處ノ山ノ白キ石ニ、血ノ付タル如ク赤キ雄黄ツキタルアリ、タモ石ト云、又奥州仙臺三輪山ニ石ニツキタル雄黄アリ、又仙臺文字川ノ岸ニ雄黄多ク出テ堅マリタルアリテ川底ヲホレバ雞冠雄黄多アルト云、何レモ皆藥店エハ未出ヌナリ、舶來ノ雄黄ニ古渡新渡アリ、古渡ハ蕃ノ説ニ雞冠雄黄ト云ナリ、和名雞冠石ト云ナリ、コレハ濃紅ニシテ黒ミアリテ光リアリ、臭氣黒色ナシ、コレ眞物ナリ、大ナルハ六七寸、或ハ三寸、一寸位ノ大サナリ、コレヲ人形出ノ雄黄ト云、自然ト人形ナルモアリ、又作リテ人形ニスルモアリ、新渡ハ黄色ニシテ臭氣アリ、中ニ赤ミ交ルナリ、新渡中ニテ上品トスルナリ、コレモ臭氣アリ、コレハ總テ臭黄ト云ナリ、下品ニシテ藥ニハ難用ナリ、然ドモ新渡故ニ多キナリ、多キ中ニテコレハ一斤中ニ上品二兩モアルナリ、コレヲワリ出シト云又雞冠石トモ云ウルナリ、然ドモ赤ミ淡シテ黒ミナシ、又今渡ルニ墨アルアリ、コレハ薫黄ト云ナリ、下品ナリ、

雌黄

唐ヨリ昔渡ル、藥店ニアリ、今ハ渡ラズ、雌黄鷹ノ目ノ硫黄ノ如キ形ナリ、眞黄ニシテ金色ノ如ク光リアリ、タダク臭キモノナリ、大ナルハ三寸モアリ、コレニ赤ミアルナリ、コレ弘景ノ說ノ仇池黄ト云アリ、上品ナリ、赤ミナキハ多シ、崑崙黄ト云ナリ、次品ナリ、又黒ミヲ帶ルアリ、下品ナリ、數說ニ、如鐵色不可用ト云ナリ、續日本紀、文武天皇二年、下野國獻雌黄ト云ヘリ、然ドモ今ハ下野ノ國ヨリ出ズ、藥店ニハ雌黄ヲ石雌黄ト云、コレハ畫具ニスル雌黄ト云モノニ分ツタメナリ、畫ノ具ニスル雌黄ト云ハ和名ナリ、漢名ハ藤黄ト云、蔓草類ニアリ、コレハ蕃國ノ藤類ノ脂ナリ、コレハ赤黄色ニシテ堅マリタルモノナリ、水ニ入レトキテ黄色ノ彩色ヲスルナリ、コレハ和産ナシ、蕃國ヨリ來ルナリ、雌黄ヲ和方書ニハ金液ト書テアリ、

〔續日本紀 一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金青、伊勢國朱沙雄黃、 三年三月己未、下野國獻雌黃、

〔本草和名 玉石〕禹餘糧〈[illegible]〉一名白餘、一名天師食、〈[illegible]〉一名白禹餘糧、〈[illegible]〉出太宰、

〔本草綱目譯義 十石〕禹餘糧

殼モナイレ〈奧州〉 ハワタイ石〈土州〉 ハワメイイレ〈讃州〉 イレナガンゴ〈同〉

殼厚モアリ、殼薄ノ大サ一二三寸位ニシテ、形ハ圓モ玉子ナリモ、扁キモ、方ナルモ、長キモ、内ニ二三重ニヘダテアルモアリ、茶色ニシテ黑ミ少シアリ、破レバ堅クシテ厚サ三分モアリ、破リ小口ハ鐵ノ如ク光リアリ、内ハ空虛粉入リテアリ、コノ粉ハ黃極細カナルガ上品ナリ、ジヤキワカズ白キヲ上品トス、濃黃モ淡黃色モ黃モアリ、コレ次品ナリ、黑ミアルハ下品ナリ、殼ニハ一ノ粉計リヲ用ルナリ、藥店ニウルニ全キハ稀ナリ、多破レテアリ、又殼計リアワルアリ、コレハ非ナリ、殼ニハ粉計リヲ用ルナリ、殼ハ別ニ主治アルモノナリ、和產ハ大和、能登、豐前、越中、作州、甲州、泉州、江州、賀州、濃州等ニアリ、凡ソ赤土ノハゲ山ニハ諸所ニ出テアリ、形チハ壺ノ小口ノ如ク色々アリ、大ナルハ三尺ニシテ、中ニハヘダテ多シ、又圓ニシテ二三寸又ハ四五分位ノモノアリ、色ハ種々アリ、和產モ藥分通用シテヨキナリ、

〔採藥使記 上奧州〕宣晟曰、奧州津輕ノ内所々ニ禹餘糧ヲ出ス、先生教ズルニ禹餘糧ハ江東ニモ所々ノ山ノ手ノ方ニハコレ有リ、和州生駒山邊ニハ多ク出ス、土人殼ヲボト云フ、金剛山ニテハ是ヲ鳴石ト云フ、佐州ニテハ俗ニハワタイ石ト云フ、

〔本草一家言 石五〕禹餘糧

多產于土佐州、呼爲饅頭石、有大小二種、大者不過雞丸、外色黃白、内含白瓜土、試以指拈之、粘手似白石脂、小者如木槵子、大内常品粉如饅頭、而氣苦芬香、如細砂氣、津輕大守越中公領内山中出者爲上、

如土佐州產者無香氣爲下品、(主頭集)

〔紀伊續風土記物產一〕禹餘糧(本草)

牟婁郡山中處々より出づ、又日高郡南部莊山田村の產上品なり、又古は海部郡加太莊加太浦の海邊に下品の者を多く產す、今は稀なり、

〔本草綱目啓蒙石十〕太一餘糧

禹餘糧ノ一種ナリ、舶來ナシ、和產ハ所々ニアリ、黃土ノハゲ山ニアリ、コレモ形狀ハ種々アリ、大小モ定ラズ、蠶(殼字)ノ大サノモ桃ヤ栗ノ大ナノモアリ、禹餘糧ニヨク似タリ、外ノ皮ニ石付テアリ、色ハ黃黑色又ハ茶色ノ變ルモ黑ミ變ルモアリ、肌ハ至極粗ニシテ、小石ヤ砂ヤ付テアリ、禹餘糧ハ肌ノ細カナルモノナリ、太一餘糧ノ外ニ、小石付ナ肌粗シ、集解ニ外多粉糎碎石ト云、コノコトナリ、コノ殼ハ甚シ、多鐵色ノ如シ、コノ外ニ付テアル石ハ、久ク貯置バ自然ト落チ易キモノナリ、コノ中ハ空ナリ、空ノ處ハ肌細カニシテ栗ノ如キ色ナリ、空中ニ粉アリ、茶色ニシテ少シ黑ミアリ、又黃ヲ帶タルモアリ、コノ全キ時ニフルレバ、中ノ粉殼ニ當リ、ゴロ〳〵トナルナリ、コノ全キ一方ニ小穴ヲアケ、粉ヲ出シ、水瀨ニ作、又大ナルハ置花生ナドニ用、又形ノ扁キモアリ、コノ破レタル殼ノ自然ニ砂ニモナルナリ、又大ニシテ臼ノ大サノハ鉢ニモナルナリ、故ニコレヲタル石ト云方言アリ、又イワツボ、　ワニノツブテ　フタロイシ　ヨロイシ(同州)ナド、コノ大ナルヲ云ナリ、凡テ禹餘糧、太一餘糧トモニ、中ノ粉ハ初ハ水ニシテ後、粉ニナルナリ、又後ニハ堅マリテ石ニナル、桃栗ノ大サニシテ、中ニ石アルアリ、コレヲフレバ鳴ル故鈴石(スヾいし)ト云ナリ、太一餘糧ハ泉州、紀州、讃州、和州、城州ナドニアリ、其中和州生駒山ニ多シ、

集解ニ石中黃、卵石黃ノ名アリ、卵石黃ハ和名マンヂュウ石、土ダンゴ、　ダンゴ石　ダンゴイワ(土州)ト云アリ、コレハ京ニハナシ奧州津輕、豐前中津、安房引上郡、防州、伯州、與州、甲州、能州ナドニ

石中黄子

金星石
銀石

アリ、其外ニモアルベシ、大ナルハ二三寸、小ナルハ五六分、形圓長色々アリ、青黄白色ニシテ、細土ヲ塡メタル如シ、タダニ付ク暗黒ク、破レバ内ニ空キ微黒ノアンノ如キモノアリ、故ニマンヂュウイシト云、

一名饅頭石雲根石譜　天經或問石譜[illegible]　山中[illegible]

(本草綱目啓蒙石十)石中黄子

釋名ノ注ニ、手官作水ト云、黄色、禹餘糧ト一類ニシテ、初ハ殻中ニ水アルナリ、故ニ水堅マリタ後ニナルコノ後ニナリタルガ餘糧ナリ、コノ餘糧ニ堅マリタ石ニナル、コレヲ石中黄ト云ナリ、コノ本條ハ未ダ後ニナラヌ中ノ水ヲ指タ云ナリ、故ニ水ニ作ルベキナリ、

(本草綱目啓蒙石十)金。星。石。

通名ナリ、和産アリ、灰色ノ石ニ金色ノ細星點内外ニビッシリトアリ、溝タヘグ島タ、硯ナドニナルヤウニ大ニモヘダルナリ、和州ノ三山邊ニハ、寺ナドノ礎ニシタアリ、又灰色ニシタ、銀色ノ細星點アルアリ、コレハ銀。星。ト云、南方トモニ江州田上八幡ノ邊ニアリ、本條ノ同名ヲ集解ニ登タ云ヘリ、銀石ニモ金星石ト云アリ、又集解ノ綠ニ金銀精石ト金銀星石ト同物ナルヤ否ヤト云タアリ、本草原始ニハ、直ニ本條ヲ金精石ニ作リタアリ、然レバ同物也、

附錄　金。石。　和産アリ、コレハ金星石ノ下品ニシタ、星光クズ、但星茶色ナルナリ、又銀星石ヲ燒タ金星石ニナルアリ、又初ヨリ金星ナルモアリ、

青。礞。石。　通名ナリ、唐ヨリ渡ルニ二ツアリ、古渡ヲ上品トス、然ドモ甚稀ナリ、新渡ハ下品ナリ、且ツ偽物多シ、上品ハ石軟ニシテ、碎易タ、綠色ニシテ、黑ミアリテ、銀星多キナリ、コレヲ燒バ銀星變ジタ金星ニナルナリ、故ニ方書ニ金青礞石ト書タアリ、又今唐ヨリ渡ルニ、金。礞。石。ト云アリ、コレハ初ヨリ金。星。ナリ、コレハ別ナリ、即チ前條ノ金。星。石。ナリ、又金礞石ト云タ渡ル中ニ、厚紙ヲ重タ

ル如クシテ、硬ク金色ニシテ、金箔ヲ貫タル如クシテ、石ノ如ク見エズ、薄クヘゲルアリ、コレハ和產モアリ、金クシボトモ、ヒル石トモ云ナリ、（ニ金ワシ貫名ナレバ、）コレヲ小ク切リ、火上ニ置バフクレテ大ニナルナリ、コレニ又銀色アルモアリ、コレハ青礞石ニアラズ、僞物ナリ、本草原始ニ、市多以金精石充之云ナリ、和產ノ青礞石、藥店ニアリ、舶來ノ上品少ナキ故ニ、今ハ多和產ヲウルナリ、上品ハ和州ノ下牧村ヨリ出、コレハ舶來ノ古渡ニ同ク、藥店ノハ何レヨリ出ルカ、下品ニシテ色淡シ、新渡ノ礞石ニ同ジ、又河内ノ墨地ト云處ニ牛ノタイシト云石アリ、コレハ本條ノ下品ナリ、又仙臺ヨリ上品ノ礞石出ルト云ヘリ、

一名　青金剛（留青日札）

〔紀伊續風土記（物產一）〕青礞石（本草）那賀郡貴志莊白石谷、名草郡仲宮郷鳴神山等に產す、皆下品なり、

花乳石

〔本草綱目譯義（石十）〕花乳石

花蕊石ト云フ、藥店ニアリ、和名アワモチ石ト云、白石ニ濃黃ノ粟ノ大サノ斑アルガ上品ナリ、コレ古渡ナリ、今ハ絕テナシ、新渡ハ斑薄黃色ナリ、コレ中品ナリ、下品ハ正白ニシテ、白キ斑アリ、コレニ息ヲ吹カタレバ、薄黃ニナルナリ、然ドモ乾バ又白クナルナリ、本草原始ニ、白中間有黃點、如花中黃蕊、因名花蕊石ト云ナリ、近年古渡蠟石ノ如クスケルモノヲ渡ス、下品ナリ、

〔採藥使記（中奧州）〕照任曰、奧州遠野ト云フ所ヨリ花蕊石ヲ出ス、白色ナル物多シ、又五色ナルモ稀ニアリ、則チ官府ニ納ム、

先生按ズルニ、近年佐州ヨリモ花蕊石、桃花石出ルト云フ、

石芝

〔本草綱目譯義（石九）〕石芝　タサビライシ　龍宮ノサイハイダケ

集解ニ、抱朴志ヲ引クハ、皆怪誕ナリ、石芝ト云ハ海中ノ石ニ生ズル松茸ノ如キ石ナリ、紀州、相州

ナドニ出レドモ形小ナリ、奥州ヨリ出ルハ形大ナリ、上品ナリ、凡ソ形ハ鉄斧ト同シク、堅クシテカサノ表ニ刃アリ、裏ニハ刃ナシ、色白クシテ、タヽケバ鳴モノナリ、コノ石石ニ付テ生ズ、其ノ質長シテ鋒アルモ希ニアルナリ、又カサ計リヘレタル鐵ノ一向ニ鈍キアリ、コレハ多シ、鐵ノ長ノ鉄斧ノ質位ナルハ少シ希ナルナリ、又色茶色ニシテ切レアリ、表ニイボノ多キアリ、裏ハ平ナリ、コレハ何鎗石ト云、又菊花ノ形ニシテ小ナルアリ、コレハ石菊ト云、又一方ハ菊ノ如クシテ、一方ハ角或ハ牙ノ如キアリ、コレヲ菊角ト云、又寺ニアル鐵製ノ手洗鉢ノ如キアリ、

(紀伊續風土記物産二)石芝　石菊

牟婁郡中所々より出づ

(本草綱目啓蒙石十)霹靂碪

キラヰノマサカリ　天狗ノマサカリ（奥州）コレハ形長ク扁ノ墨ノ如シ、本トハ丸クシテ、末ハ段段薄レテ、ヤキニハ刃付アリ、カンナノ如キモノナリ、小ナルハ長サ一寸位、大ナルハ長サ六七寸、石ハ堅クシテ緻密カナリ、タブレハ少レブ、タブレ、胆沢川石ノ立ナリ、色黒モ青モ茶色モアリ、奥州津軽領其外東北國ニアリ、又備前美濃ヨリモ出、東北ノ産上品ナリ、昔大閤後山ノ崩タル處ヨリ拾フナリ、或者コレヲ好ムナリ、故ニキツネノマサカリト名ヅク、コレハ自然ノ物ニアラズ、作リタルモノナリ、然ドモ作リタルモノ、何物ヤク知レズ、又庖丁ナドノ形ニシテ、一尺モアルアリ、コレハ石堅シ礪ナリ、コレハ石弩ノ如クタヽケバ鳴ルモノナリ、然解ニ劍刀者ト云、コレナリ、又モロ刃ニシテ、錍ノ如キアリ、コレハ石弩ノ大ナルナリ、

一名　雷公石（月令廣義）　石楔（本草中記）　霹靂砌（同）

(佐渡志物産)霹靂碪　方言雷斧石

其形扁長ニシテ、本ハ厚ク末ハ薄ク刃アルニ似タリ、小ナルモノハ長サ一二寸、大ナルモノハ長

サ六七寸、性堅ク肌緻密ニシテ、試金石ノゴトシ、其色一ナラズ、或ハ深黒、或ハ淺黒、又灰色褐色青石ナルモアリ、形狀異ナルモノ亦少ナカラズ、羽茂本鄕西濱邊ノ田野山中雨後ニ必拾ヒ得トイフ、

石麪

〔本草綱目譯義九石〕石麪

土中ヨリ湧出タル白キ粉ナリ、溫飩(ウドン)粉ノ如ク、白クシテ至テ細カナルモノナリ、コレヲ取堅メテ置、白石脂ノ如シ、先年肥後ノ益城(マシキ)郡ニ石麪ノ出タルコトアリ、コノ年肥後饑饉ナリシ故ニ、コレヲ採リ、溫飩料理ニシテ食セシトナリ、其時京ヘモ上セシナリ、至テ白クシテ、味淡ク、土氣ナシ、其後北國ニモ湧出タルコトアリ、コノ年モ饑饉ニテアリシナリ、石麪ハ、日ヲ經レバ、外ノ色紫ニナルナリ、内ハ色變ゼズ、又雲州武州ニモ出タルコトアリ、皆凶年ナリ、集解ニモコノ出タル年ハ凶年ト云、和漢トモ云同例ナリ、

〔佐渡志五物產〕石麪

羽茂郡中坂山中ニ出ヅ、幾何ナフシテ凶饑ノコトアリ、是ヨリ土人採コトナシトイヘリ、

〔紀伊續風土記物產一〕石麪(本草、冷水浦にてイシノメンといふ、同名多し、)名草郡大野莊冷水浦の山の土中より出づ、上品なり、

觀音石

〔大和本草三金玉土石〕觀音石

倭俗所名也、沙中ニ有之、大ナルハ稻米ヲ三四合セタルガ如シ、色赤シ、軟ナリ、味淡シ、小兒食之、綱目石麪ヲ載ス、是觀音石ノ類乎、

玄精石

〔採藥使記上奧州〕黑任曰、奧州津輕ノ領內松前ヘ行ク道ノ山陰ニ、土人蛇ノ苔ト云石アリ、是則玄精石ナリ、取リテ官府ニ納ム、

石髓

〔本草綱目譯義九石〕五色石髓

石脂ハ五色ヲ分ツモ、其中赤白ヲ最ニ用ユ、其中ニテモ赤ヲ最モ多ク用ルナリ、赤石脂舊ヨリモ渡ル品多シ、古渡ハ上品ナリ、今渡ルハ純色ノ物ノ如キモノナリ、白キ處モ交リアリ、コレハ偽物ナルベシ、石脂ハ金鑛石ノ中或ハ土ノ中ニ生ズ、國ニヨリ異ナリ、鹿角爪ダスヲ滑石ノ如ク光アルヲ上品トス、今渡ルハ光リナク、赤白交リアリ、コレハ土ト見ルナリ、コノ通ノ土、防州ニアルナリ、赤石脂ハ和產色々アリ、佐渡ヘ出ル上品ナリ、方言ニ石。ワ。タ。ト云、コレハ石ノ間ヨリ乳ノ出ル如ク吹出ヲ凝堅マルナリ、色純花色ナルモ、又少シヨキモアリ、上品ナレドモ、東藥店ニ出ヌナリ、又出羽秋田ヨリ出ルアリ、コレハ蠟ノ如クナリタアリ、色ウスアカク、潤澤ニシテ光リアリ、コレモ佐渡ヨリモ上品ナリ、大坂藥店ニ出ルナリ、藥用ニハコレヲ用ヰヨキナリ、又伊豆ヨリ出アリ、コレハ佐渡ノ產ニ類シ色少シ劣レ、又緋緞ヨリモヨノ類ノ出ルナリ、尤上品ナレドモ、藥店ヘ出ヌナリ、又京ノ愛宕鞍馬ニアルハ、脂石ノ如ク軟ナリ、コレモ爪ニテスリタ光リアルヲ上品トスルナリ、ヨレハ佐渡秋田ノ產ノ蠟ノ如ク堅マリタナレ、白石脂ハ別ニ渡ラズ、赤石脂ノ中ニ交リアル白キナリ、コレモ秋田ヨリ出ルハ蠟ノ如クシタ白キナリ、上品ナリ、黃石脂ハ舊ヨリ渡ラズ、紅毛ノ人持來ルアリ、蘭名ボウリスアルメニヤト云、〈ボウリスハ土ト云、アルメニヤハ國ノ名ナリ〉コレハ肥前長崎肥後宇土郡ハ和產アリ、舶來ト同形ナリ、青石脂ハ舶來ナシ、和產アレドモ下品ナリ、黑石脂ハ京ノ山ニモアリ、谷ノ切岸ノ處ノ水ノワク處ニアリ、黑ノ土ノ如シ、コノ砂交ラヌ處ヲ用ルナリ、黑ケレドモ子細青クアルモノナリ、コレヲトリ石墨ニ作リタクルナリ、大和本草ニ牛尾山ノ黑土ト云ハ、コノコトナリ、

〔本草一家言四〕五。色。石。脂。

本草蒙筌之白石脂、赤石脂、黑石脂、黃石脂、青石脂是也、赤石脂色淡紅、質細膩、舐之有膠、粘手者眞也、佐渡銀山中產之、土人名石綿者眞也、其白石脂諸山往々產之、似白善土、而膩粘是也、黑石脂自濱所渡

石髓

石筆石墨是也、一種京北貴船山谷山一種、石色黑質軟、粘手稍近、眞乏時可用、但勿用和石筆、多以硯石末屑僞造之也、眞石脂卽白石脂之帶黃色者是也、如青石脂未詳、俟他日講究、文鼎集

(佐渡志物産五)石脂　方言イシワタ

赤石脂、雜太郎相川ノ東上相川ト云トコロヨリ出ルモノ、桃花色及ビ黃白ノ石脂モ交レリ、青石脂ハ同郡姫津村水ジロトイフ所ニ產ス、前山倉ノ佐州ヨリ出ルヲ上品トスト記セシハ、今北山中ニ產スルモノナルベシ、

(大和本草金玉土石三)黑石脂

別錄云、一名石墨、時珍云、此乃石脂之黑者亦可爲墨、　篤信謂、今人削之爲筆、懷之書文字、如用黑、圖俗石筆ト云、　五色ノ石脂アリ、赤白ノ二種ヲ藥ニ用ユ、

(重修本草綱目啓蒙金石五)滑石○中略

集解、冷滑石ハ、今唐山ヨリ滑石中ニ雜リ來ルヲ揀ビ出シテ、油ヲトシ或ハイシワタト云モノナリ、形狀靑田石ニ似テ柔ク、淡綠色ニシテ黑キ斑點アリ、和ハ尾州勢州讃州上州越中ノ山中ニアリ、石絨ノイシワタトハ別ナリ、

(本草綱目譯義石九)石髓

得テ知レズ、日本ノ內ニ空アリテ水ノアル石希ニアリ、石ヲ破リテ水流出ヌ、風當レバ水化シテ石トナルナリ、コノ水石髓ノ類ナリ、先年下野ノ山ニテ此石アリシナリ、其後モ又アリシナリ、コノ石ハ至テ堅シ、色茶色モ白色モアリ、又集解ニ北史ニ云々ト云ヘリ、コノコトニ似タルコト、日本ニモアリ、勢州內宮傍鬼谷ノ谷川ノ水底ニ茶色ノ油ノ如キモノ一面ニアリ、水底ノ石ヲ取リ上レバ、油ノ如キモノ石ヲ包テアリ、コレハ流水中ニ共ニ流レテアルガ、自然ト石ニ付タルナリ、コノ物北史ノ文ニヨク似タルコトナリ、又讃州阿野郡川東村ノ奥村ト云處ニ大ナル石髓アリ、

其ノ一丈計リ上ノ石間ヨリ水流出タ、水ニ乳ノ如キモノ交リアリ、コレヲ石ノ乳ト云ナリ、專ラ火傷ニ付タ妙藥ナリト云ナリ、コノ石ノ乳ヲトリ置バ、コチタルヤウニナリ、白石脂ノ如シ、然ドモ白石脂トハ違タ光リナレ、コレハ色無ノ脂本草ニ云地脂ノ類ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙〈七石〉〕石髄

石ヲ破リシ内ニ、水ノ如キモノ有テ、風ニ當レバ硬キ石トナルアリ、此其類ナリ、又石髄ハ石ノ髄液ナリ、流レ出テ風ニ當レバ即時ニ凝結シテ石トナル、阿州名東郡上八萬村三好郡足代村等ヨリ産ス、又越前大野郡打波村ノ溪水ニ、草木ノ枝葉、或ハ器物何ニヨラズ、浸シ置タル時ハ、皆其形ニ隨テ白色ニ凝結シテ石ニ化ス、ソノ風ヲ見テ直ニ石ト成ル者ハ、髄液ノ力强クシテ純粹ナル故ナリ、物ヲ浸テ漸ク凝テ石ニ化スル者ハ、水ニ混ジテ髄液ノ力弱クナル故ナリ、其他蛤蜊蟹等ノ化石多クハ髄液ノ氣ニ凝結セラレ、腐敗セズシテ石ニ化ス、美濃國ニ産スルリノ鐵、目ノ鐵等モコノ類ナリ、又性力弱クシテ風日ヲ見テモ凝結セザルアリ、讃州河東村安原村ノ石ノ乳ト云モノハ、數丈絶壁ノ石間ヨリ常ニ乳汁ノ如キモノ流レ出ヅ、土人取テ湯火傷ニヌリテ、奇效アリト云フ、

〔倭名類聚抄一石〕純花石　本草云、純花石、色如純花、故以名之、此間云〈未詳〉

〔箋注倭名類聚抄一石〕原書中品有純花石、不載所引文、證類注云、似赤石脂、但不著舌、亦無所引文、此恐有誤、按證類本草引南海藥譜云、其狀亦似黄石、其若純花、則此蓋引南海藥譜、誤爲本草也、南海藥譜二卷、不著撰人名氏、似唐末人所作、見證類本草序例、本草衍義云、純花石有赤白兩等、有赤地淡白點、如純花片者、有淡白地有淡赤點、如純花片者、人往々鐫磨爲器用、李時珍曰、此即赤白石脂之不粘舌、堅而有花點者、非別一物也、

〔本草綱目釋義〈九石〉〕純花石

通名ナリ、コレハ赤石脂ノ中ナリ、赤石脂ハ軟ニシテ實テ舌ニ粘スルナリ、赤石脂ニシテ堅クシリ舌ニ粘セヌヲ桃花石ト云ナリ、昔ヨリ別ニ渡ラズ、赤石脂ニ交リアリ、色濃ヲ赤キモ薄赤キモ紅白交ルモアリ、和產モアルモノナリ、赤石脂ノ下品ニシテ、舌ニ粘ヌナリ、コレニ同名アリ、

〔本草一家言 石四〕桃花石

按、本草似有二種、古來多以赤石脂之淡紅者充之、佐渡州金山所產石腸、其色淡紅而不甚赤、是乃桃花石也、一種深紅者即赤石脂也、又按仲景治痢有桃花湯、方中用赤石脂、無桃花石也、並知桃花石赤石脂色淡者也、本草以粘舌者為赤石脂、不粘者為桃花石者、强分別耳、當以深紅淡紅為辨也、

石筆

〔奇遊談 二〕牛尾山石筆

山科の東牛尾山法嚴寺は、觀音の靈場にして、淸水寺の奧の院といふ、此山に黑石脂を產す、俗に石筆といひて、懷中の筆墨にかへ用ゆ、

〔雲根志 前編 二、石筆 十二〕中略 赤き石筆あり、遠江國島田より二里ばかり北千葉村にあり、江府平賀氏考へ出して、今專らはそく切て、懷中の筆に用ゆ、

代赭石

〔本草綱目譯義 石十〕代赭石

通名ナリ、和ノ方書ニハ、多ク大。砂。石。ト書テアリ、コノ石ハ藥店ニアルハ皆舶來ナリ、コレニ二品アリ、古渡ハ赤黑シテ、軟ニシテ二寸計リノ大サニ堅マリアリテ、碎ケバ碎易クシテ、手ニ付ナリ、コレ下品ナリ、新渡ハ一尺位ニ堅マリ、扁シテ至テ堅ク、ダヽキワリテ用ユ、手ニ付クコトナク、外ノ肌ニ七八分ノイボノ如キモノ付テアリ、故ニコレヲイボ出ノ代赭石ト云、マメヂノ代赭石トモ云、コレ丁頭代赭ナリ、上品ナリ、集解浮漚丁ト云ハ、タギカタシ、又ハピヨウクギナドノ類、コトナリ、外ニ肌ノ如キモノアルコトヲ云ナリ、コノイボ出ノ方ハ、色黑赤ニシテ、破レバ堅クシテ、薄クヘゲルナリ、切リ小口ハ鐵ノ如ク光リアルナリ、和產ハ濃州赤坂ニアリ、然ドモ未藥店へ出

ズ、一名大禹石、同一名ナリ　黄禹石同上同物　糸石[illegible]　紫朱同方

附録　赤石　代赭石ハ、代郡ノ産ニシテ、雁門ヨリ出ルナリ、赤キ石或ハ土ハ、日本ニモ處々ニアリ、故ニ此ノ類ハ多シ、

〔紀伊續風土記物産一〕代赭石〔本草〕

日高郡富安莊鑑山に産す、質柔にして碎け易く下品なり、

〔佐渡志物産五〕赭石。

金北山中ニ出ヅ、ソノ餘所々ニ産ス、

〔重修本草綱目啓蒙石五〕禹余粮　通名　一名土子〔外科[illegible]〕

舶來アリ、先[illegible]ニシテ、大小相雜ル、大ナル者僅ニ一分許、小ナルモノハ至テ細ニシテ、栗ノ如シ、皆黄色ニシテ、黒ヲ帶タ尤リアリ、中實ス、碎ケ末スレバ黄褐色、外科ニ用ユ、和産ハ濃州ニアリ、舶來ト同ジクシテ鐵ヲ含ナリ、禹余粮同名多シ、南京燒ノ茶碗ノ青キ文彩ヲナス、藥ヲモ禹余粮ト云、又良ヲ久シク焼タル處ニ、下ハ黒色ノ塊ヲ生ズルヲ、禹木屑ト云、此モ禹余粮ノ名アリ、物理小識ニ詳ナリ、石州銀山ヨリ出ス禹余粮ハ、和名ニシテ眞名詳ナラズ、石上ニ褐色ノ土ノ如クモノアタタルヲ取リ、水飛シテ四方ニ貨ス、又佐州濃州豆州ヨリモ出ス、用テ盆ドメトス、偽物多シ、

○禹余粮ノ事ハ、前ニ産業部陶工篇陶器名稱條ニ在リ、

〔佐渡志物産五〕禹余粮

雜太郡中尾山羽茂郡飯川山ニ産ス、舶來ノモノト形状同ジカラズシテ、功能ハ却テ勝レリト云、

〔紀伊續風土記物産一〕禹余粮〔本草〕

海部郡加太莊友ケ島に産す、陶家にホヽ手と呼ぶ者にして下品なり、

〔本草和名玉石〕石鐘乳　一名公乳、一名蘆石、一名夏石、一名盧中〔出雜要決〕一名孔公孔、石鐘乳者水精也、

已上出神仙服餌方石鍾乳者石精也、出范汪方出備中國、

〔倭名類聚抄一石〕鍾乳 新鈔本草云、石鍾乳出備中國英賀郡、和名以之乃知

〔箋注倭名類聚抄山石一〕新抄本草、謂本草和名、原書今本玉石部上無英賀郡三字、又不載和名、醫心方並有之、蓋今本本草和名、傳寫偶脫也、當依此所引補正、按三代實錄貞觀元年二月二日、於備中國採石鍾乳、不載所出郡名、然延喜神名式、備中國英賀郡二座、比賣坂鍾乳穴神社、井戸鍾乳穴神社、是可以證石鍾乳出於英賀郡也、又按、醫心方諸藥和名、似鈔節本草和名者、而至註藥石所出國郡、反詳於本草和名、今所傳本草和名、或是舊本耶、原本出備中國英賀郡七字爲正文、似是、曲直瀨本鍾作鐘、伊勢廣本同、按、李時珍曰、石之津氣、鍾聚成乳、滴溜成石、故名石鍾乳、則知作鍾爲正、本草和名亦作鍾、證類本草引吳普云、鍾乳一名虛中、生山谷陰處岸下、溜汁成如乳、汁黃白色、空中相通、陶注云、通中輕薄、如鵝翎管、碎之如爪甲、中無鴈齒、光明者爲善、長挺乃有一二尺者、色黃、以苦酒洗刷則白、蘇注云、陶云、鍾乳一二尺者謬說、本草圖經云、長者六七寸、色白微紅、

〔本草綱目譯義九石〕石鍾乳ツラヽ、イシ、イシノツラヽ、石ノ[illegible]レ、イシノチ[illegible]、石ノチヽ、土[illegible]鍾乳石トモ云ナリ、草多、積タル所ニ、竇ニ風穴ト云ナ、洞穴アルモノナリ、コレハ必奥ヒロク、或ハ深クシテ、先分ラレズ、或ハ横ヘ廣ク通ズルモアリ、コノ洞穴ノ奥ニハ、諸國トモニ鍾乳アルモノナリ、コレハ石間ヨリ石ノ脂ノ年々滴リ、堅マリタルナリ、形ツラヽノ如ク、上エヨリ下ヘ垂レテアルアリ、又柱ノ如ク下迄トヾキテアルモアリ、形ハ色々ニナリアリ、年久キハ追々ニ上ヘヨリ乳水下リテ、甚太クナリタルモアリ、和州大峯ニハ、別シテ鍾乳生ズル穴多シ、江州ノ佐目村ニ、風穴ト云深キ洞アリ、時々風吹出ルナリ、コノ穴ニモ生ズルナリ、コノ類諸國トモニアリ、勢州ニモアリ、又備中ノ鍾乳大明神ト云社ノ邊ニモ穴アリ、鍾乳石ニ色白クシテ透明ナルアリ、又透明ナラヌアリ、薄黃色ニシテ、透明ナルモ、透明ナラヌモアリ、薄赤キモアリ、藥店ニアルハ、小指ノ大サ

或ハ管ノ太サヘレヤ、多ク稜角ニシテ、透明ナル者、中ニ穴通リタアリ、コレ俗解ニ鵞管石ト云ナリ、又穴通ラザルモアリ、其角穴通リタ透明ナルヲ上品ナリ、コヽニ本經ニ比ベタ、孔公孽殷孽ヲ兼タアリ、コノ三物皆同物ナリ、コレハ時珍ノ說ノ如ク、三分ニ割リ、末ノ一分ヲ鍾乳石トシ、中ノ一分ヲ孔公孽トシ、本トノ一分石ニツキタルモノヲ殷孽トスルナリ、又今舶ヨリ鵞管石ト云フ渡リモノアリ、舶來ハ多シ、コレハ二三分ノ太サヘレタ、長サ二寸或ハ一寸位ニ折レタアリ、木賊ノ如キ形ニシタ節ナク、色白キモノナリ、其口ニ蜂窠ヲモタアリ、貝ノ如キモノナリ、コレハ海中ニ生ズルモノナリ、三本五本並ビ生ズルモアリ、又一本分レタ生ズルモアリ、本草原始ニ、口ノ圖ニ出タアリ、醫學入門藥性要略大全トモニ、別錄ニ出レタアリ、コレハ本經ト異ナル物ナリ、

(本草一家言四)石鍾乳　鵞管石　孔公孽　殷孽　土殷孽　乳石牀　石花

俱出本草、豫按鍾乳鵞管自二石類度和產莫有之、鍾乳出大峯山蝙蝠岩屋、及伊豫大洲、富士人穴、美濃養老山中、其餘諸山間有之、鵞管出伊勢丹生山中、有水鍾處、二物形狀必然、本草以爲一類矣、鍾乳有三種、又其次、皆細緻、色白、長纖、內有一線脈、直通于頭、形不甚大、長僅三四寸、難多得也、其次者質粗頭內有窊、甚長大、如牛角、長一二尺、其色黯白、似石乳牀色、是孔公孽也、其又次者附石而粗、不甚長大、是乃殷孽也、土殷孽者又其次也、此名以精粗生熟而判之、其實一物而品有高下、猶烏頭有烏喙天雄附子側子之別也、鵞管石狀如鵝翎管骨、又似竹管、有節色黃白、有縱文、長及四五寸、本草云、潔白尤潤、麗枝島蝙蝠窟者、及竹乳山洞邊生小竹、以竹汁滴爲乳、如竹狀者、皆正謂此者而言也、乳石狀者、生鍾乳之牀、類石也、石花者鍾乳生小、而四散如花、本草謂乳狀者也、辨別如此、自無疑惑之憂耳、

(大和本草三 金玉土石)石鍾乳

五十年前此石日本ニアル事ヲシラズ、江州ヨリ取出ス、ツイテ五畿內西國ニモ出ヅ、常州ニモアリト云、山ニヨリタ大小アリ、金銀銅山ノ古キ岩穴等ニモアリ、佐渡ノ石鍾乳尤良シ、今本邦ニ

アルハ、中華ヨリ來ルニマサレリ、

〔本草辨疑一金石〕石鐘乳

日本深山所々ニ有之、今藥舖者皆和ナリ、色稍白ク中ニ小穴アリ、末尖ニシテ水精ノ如ク白ク、透明シテ重ク、長短不定、今賣家ノ者ノ末ノ尖ナル所ナク、大方折取タル跡ナリ、

又一種鵞管石ト云者アリ、本綱ニ鐘乳異名トアリノ色白ク細ク、長一二寸、折之メ内ニ菊紋アリテ、中空ナリ、唐ヨリ來ル、

〔新編常陸國誌六十土産一〕石鐘乳

多珂郡大久保村ノ風穴ヨリ生ズ、又同郡助川村ノ風穴ニ生ズ、俗鐘乳石ト云、採藥使記云、照任曰、奥州岩泉ノ山穴ヨリ鐘乳石ヲ出ス、他國ヨリ出ルヨリモ形甚佳ナリ、光章按ニ、鐘乳和邦所々ニアリ、和州大峯ノ洞穴ニ產スル物佳ナリ、紀州熊野山中、又豫州佐州ヨリモ出ルナリ、赤クシテ飴色ナルヲ好トス、白色或ハ鼠色ナルハ下品ナリ、中略栗田維良曰、常州ニモアリト云ハ、按ニ、諏訪水穴ヨリ出スヲ云ナリ、ソノ外ニハアルコトヲ聞カズ、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州岩泉ノ山穴ヨリ鐘乳石ヲ出ス、他國ヨリ出ルヨリ形狀甚ダ佳ナリ、光生按ズルニ、鐘乳和邦所々アリ、和州大峯ノ洞穴ニ產スル物佳ナリ、紀州熊野山中ニモアリ、豫州ヨリモ佐州ヨリモ出ル、色赤クシテ飴色ナルヲ好トス、白色或ハ灰白色ナルハ下品ナリ、

〔佐渡志五物產〕石鐘乳イシノチ

其坑ハ海府土地村ニアリ、今ハ乳ヲ穿リ盡シテ、只官禁ノミ昔ノマヽニ嚴ナリトイフ、故舉ハ古世採タルモノ、タマ〳〵殘レルヲ持傳フルモノアリトゾ、

〔西遊記五〕鐘乳穴

備中國水田領の山中に、俗にかねち穴と稱する洞あなあり、かねちとは、鐘乳といふ事也、其洞あ

なの中ハ、鍾乳石の多くあれば、名付しなり、松山城下よりは、七八里をへだてたり、其穴、入り口はなはだ大にして、暫く入れば行當りて石壁あり、その石壁に小きあなあり其小きあなをくゞり入れば甚大にひろきところに至る、此所は少しの日光もなく、暗黒はなはだしき所也、案内の者松明を多くともし入ることとなり、其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし、此所に上より鍾乳石夥敷下り居る、又佛菩薩の像或は鳥獣の貌などいふ所あり、皆自然の石にて、其形をなせり、段々奥の方に入り行くに、又行當りに石壁あり、其石壁の上に横ざまに小穴あり、やう〳〵匍匐してくゞり入る程の小あななり、其あなをやう〳〵にしてぬけ出れば、又廣き所に至る、此所は二段になりて、高き所あり又低き所あり、窟に龍の背開の、松明をふり立てだん〳〵に進みゆくに、断岸のごとく嶮岨あり、其がけをやう〳〵にしてつたひ下れば、雪の流れの川ありて、水足首をひたす計なり、其川を渡り越へて暫すゝみゆけば又ゆき當りて石壁あり、其壁上に又小穴あり、それをもくぐり抜れば、又廣き所あり、此所は初の二ヶ所よりは大に狭くして、纔に五六疊ばかりと見ゆ、又其向ふの石壁に小穴あり、是よりおくへ、ついに恐れて入りたるものなし、其奥はいかなる所なりや、いまだ知る人なし、余が友喜竜先年此地に遊びて、其近邊の案内知れる老人を嚮導として、其穴に入りしに、嚮導の老人も精き頃より此穴の案内者して、数人を案内せしかども、かの二段目の嶮岨を下りし事はなく、臆りも傷ざりしに、喜竜好事の癖にて、勇あり、かねて文字の力もある人なれば、まひてすゝみて、三段目の廣き所までは入りしに、猶其奥を探らんとすゝみしに、嚮導の老人大におそれて、松明の用意少ければ万一穴の中にて松明盡なば再び人間に歸る事叶ふべからず、猶この奥にはいかなるものか住居らんもはかりがたき所なれば、速にいで給へとて、先に立て逃出しかば、喜竜も力なく出て歸れり、此事を記に作り、畫にも圖して余に示せり、余は望のつもり夥敷て、其地にいたり得ざりし、殘念なりき、いとめづらしき洞穴也、又美濃國郡上

の山中にも、天馬の窟とて甚ふかく奇異の洞穴ありて、數十丁奧までも至られ、其奧に石馬あり
といへり、先年其洞中の圖をみたりし事のありし、又近江國多賀の山中にも、鍾乳石多くある
穴ありといへり、
〔老牛餘喘中編中〕石鍾乳
十四五年まへに、備中國阿賀郡赤馬村の狩人二人、ある日獵をおふ、獵草深き所に迷入、其草をわ
け入れば大なる穴あり、村人もしらざりし穴なり、穴のうちにてりたる色の物、幾千箇といふ數
もしられず垂たる物あり、石鍾乳なり、こは寶蓋ずいといひて、石鍾乳の極たる品なり、狩師、獵を
おもはず、喜びてこれをとる、京大坂などに持のぼりて大に利を得つ、あたりなる者ども聞つた
へて穴に入てとる、その品はやゝ下りたれど、是らも利を得たり、其隣村西方村草間むらなどに
も古穴ありければ、この事きゝて穴さぐりをせりとぞ、おのれにも品は次なれど、形あるを二ッ
おくりたる人ありてもてり、
〔長防產物名寄土石〕鍾乳石
美禰郡ノ內、長登村、赤村、靑景村、カヽ村、秋吉村、已上五ケ村ノ臺山岩穴ニ有之、　同郡伊佐村ノ內、
江ノ上山、
〔紀伊續風土記物產一〕石鍾乳本草和名鍾乳之乃知
牟婁郡色川莊大雲取、潮崎莊古座黑島、四番莊大谷村の巖窟、日高郡志賀莊山中等に產す、又海部
郡衣奈莊白崎濱、千尋の巖壁上に產するは、數百年を經てなれる者なり、乳汁巖上より湧出し、下
は海際に流連して、儼に雪山の如く、白色光艶にして海面に映ず、他邦此の如く大なるをみず、實
に奇觀なり、
〔愛媛面影四浮穴郡〕羅漢窟

小瀬村の山中に在る窟なり、俗に羅漢穴と名く、側に千體佛とて羅漢の略幷びたる状に似たる所あるによりて名づけたるか、俗諺集に、肝穴と云名も此穴より付たるといへり、去文久元年辛酉十月此窟に入ける時の日記、從人の許に書送るしつ、十九日天氣好けれは、かの穴見んとて、案内者雇ひて、小瀬村の村長某立岡、渡川にそひて行ほど一里許にして、大窟と云所にいたる、こゝにて今一人の案内者呼出て、行人家より二三町ばかり離れて、路より下つかたの木立生茂りたる中に、大なる岩の立重りたる有て、其岩の下なひやがて窟なりける、前に格子やうの物したるが、半ば破れたり、案内者のいへらく、此穴に入れば必大風吹とて、人を入じと構へつるを、何者か破りて入初たるなりと云り、此所にて燈火ふたつともして入に、十間ばかりはすこし廣りて行、それより狹く廣し、すべて山骨ともいふべき石の下ざまの水流に觸ひて、おのづからうがたれたるなめり、或人はむかし鑛鏞出しけむ跡なるべしといへり、上も下も一面の白石にて、高き所は馬にも騎つべく、低き所には這ても這ふべし、所々水滴落て、鍾乳石といふものの形しくつりたり、穴の内幅稍多し、されど高容なれば、いはをにかゝりて飛び降ず、一丁ばかり行て獅子岩と云あり、俗に胎内くゞりと云とぞ、此所は下に水溜りたり、はらばひつゝ漸々こえ行に、かなたは又いと廣く高し、或は豎穴とて、丹をのぞきたらんやうに下りさまになりたる穴あり、こは昔より誰も入人なしとぞ、此獅子岩より廿四五間ばかりゆけば、千體佛とて鍾乳石の付たる石、左右にいくつともなく幷立てるさま、かの五百羅漢といふ物に似たれば、かくは名付たるなるべし、それより四五十間ばかり行て、烏帽子岩と云あり、そは鍾乳石の大さ、柱ばかりなるが、上より下まで降りつりて、左右に立たり、そこより四十間ばかり行ば中川と云所行て、水深く溜りたり、上はかの獅子岩の如くにて這はでは越がたし、此處をもこえゆかば、猶さまざま行べきを、何となく心細くなりて、此處より引かへしつ、此坑に入ん人は、蠟燭燈など必たくはへ行べし、若とかく

殷孽

して螢火の消なましかば、ふたゝび本の道に出ん事かたからまし、

〔本草和名 四玉石〕殷孽、(楊玄操音魚竭反)一名薑石、(蘇敬注云、如薑、故名之、)一名薑石、(出…名苑)一名景石、(出…雜性)出備中國、

〔本草綱目譯義 九石〕殷孽 ツラヽ、石ノ本トノ石ニ附テ生ズル處ナリ、

附錄　石狀　鍾乳ノ生ズル洞ノ中ノ乳水ノ多滴リ落テ下ニ溜マリ、下ヨリ上ヘ向ヒ生タルチリ、形筍ニ似タリ、故ニ石筍ノ名モアリ、コレハ奥州大渕ノ小田ノ洞穴ニ羅漢穴ト云アリ、中ニ十六羅漢形アルト云、コレハ色々ノ形ニナルモノナリ、爪ノ形ナルモアリ、菊ノ形ナルモアリ、和州大峯ノ菊加岩屋ト云テ、菊ノ花ノ形ニナリタルアリ、故ニ洞ヲ菊ノ岩屋ト云ナリ、

孔公孽

〔本草和名 四玉石〕孔公孽、(陶景注云、鍾乳床也、)今一名通石、(孔通、故名之、)出備中長門國、

〔多識編 一石〕孔公孽、今案伊志乃知乃比古波志、又云、伊志乃知乃宇豆於阿那、

土殷孽

〔本草綱目譯義 九石〕土殷孽　キツチノコマクラ　タダイシ　キツチノマクラ(筑後)　キツチノロタツタ(備中)

コレハ土中ニ生ズ、形細長ク、竹管ノ如シ、鍾乳石ノ小ナルニ似タリ、尤形ニハ大小長短色々アリ、大ナルハ大指ノ大サナルモアリ、一通リハ薄黄色ナリ、國ニヨリ色黒モ少シアルモアリ、栗毛モアリ、至テ黒キモアリ、背山ニ生ズ、大雨后山行スレバ、山ノ崖ノ崩タル跡ニ出テアリ、石ノ如ク至テ堅シ、理ニ細ト密トアリ、密理ニシテ一重ヅヽ皮ニナリ、ヘゲルガ上品ナリ、コレハ播州平ノ產ト云處ニアリ、播州ノ內ニモ處々ニアレドモ、皆粗理ニシテ堅ク碎ケズ下品ナリ、京ノ稻荷山ノ奥ニモ多シ、皆下品ナリ、コノ物形全キ時ハ、中空虛ニシテ、黄ナル粉入リテアリ、折レタルハ粉落テ孔通リテアルナリ、八幡山ニモコノ物アリ、至テ細シ、コノ物ハ色々ノ形ニナリタルアリ、先ヅ一通リハ直ニシテ、中ニ孔アルナリ、中ニ孔アリテ直ナル故ニ、タダ石ト名アリ、又形丸キモ、瓢ナリノモ、枝アルモ、枝アリテ人ノ形ナルモ、雞卵ノ如キモ甘藷(リウキウイモ)ノ如キモアリ、皆內ニ黄粉入リテア

リ、又甚ダ長大ナルアリ、コレハ中ニ節ナク實ノアル也、長サ一寸モアルアリ、形ナガイモノ如シ、
故ハ長イモ石ト云、又少シ形質ナルヲ口石大概角ノ化石ナド、名背ニヨリ名ルナリ、コレモ
實ノダ石ノアル山ニアル也、然ドモノダ石ト一處ニナシ、□□山ニモ多アル處アリ、

(紀伊續風土記物産 八)土殷孽本草

那賀郡名手莊市場村、日高郡寺尾莊山田村、牟婁郡田邊莊鉛山村等に產す、

(多識編 石)金剛石、今案多末伊志、又云金剛志毛宇乃多久伊、

(大和本草 金玉土石)金剛鑽

輿田雙寶日、一名ハ金剛砂、出西番深山之高頂人不可到云云、今人以之鑽玉補瓷故曰鑽、河内國金
剛山下ヨリ出、金剛砂ト云ハアヤマリナリ、コンガウシヤト云、同國葛城川ニモアリ、求問他土之所
產、大和ニモ葛城川アリ、ソレニハ產ス、是ヲ用テ玉ヲスリ石ヲミガク、

(本草綱目啓蒙 石)金剛石

ギヤマンセキト云、蠻名ヂヤマント云、ギヤマンデトモ云、コノ物ナリ、和產ナシ、紅毛人來ドモ、
甚ダ堅キモノナリ、舶ガヤノ物ナドハレタアリ、白キハ水精ノ如クレタ、水精ヨリハ光リア
リ、又紅毛人寶子ニハタ嵌ルアリ、コレハスカシタ見レバ氣量アリ、其物ヘワリタル角ニテ、玉ナド
モ切レルモノナリ、紅毛人フクタユニ毛ヲリワユルハ、コノギヤマンセキニタスルナリ、故ニコ
ノフラスコヲギヤマント云、ギヤマン石ニタ、ハリタルト云也、

一名 金剛砂 [illegible]

羅[illegible] 代[illegible] [illegible] [illegible]

(本草綱目譯義 石)金剛石

コンガウシヤクト云、又コンゴウシヤトモ云、俗名ナリ、金剛山ノフモトヨリ出ヅ、玉ヲ切ルニ此

空青

沙ト水トヲ合ワシテ、ハノナキ盤ニテ引ク時ハ、切レルナリ、此沙ハ茶色ニシテ光リアリ、讃岐ヨリ出ルハ大ニシテ、一分ホドアリ、河内ヨリ出ルハ細カシ、石ノ部ニ金剛石ト云モノアリ、唐ニテ一名ヲ金硬石ト云、夫故此ヲ中ツルモノアリ、誤ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 五玉五〕青玉　アヲダマ 略〇中

合玉石　コンゴウセウ、色赤黒キ砂ナリ、又黄赤色ナルモアリ、形多ク稜角アリテ、玉石ヲ切リ、或ハ磨クニ用ル砂ナリ、河州ノ金剛山、和州ノ生駒山等ヨリ出ス、又丹後、土州、及諸州ニアリ、濃州ニハ大塊四五分ナルモノアリ、又天工開物ニ解玉砂ト云ヒ、通雅ニ邪砂ト云モ、皆此物ナリ、

增、合玉石ハ、城州鳴瀧ヨリ出ス、鳴瀧砥ナルベシ、其質淡緑色ニシテ、淺褐色ノ筋アリ、俗ニウチグモリト云フ、即淮南子ニ、玉待礛諸而成器、注礛諸攻玉之石、又集韻ニ、礛諸治玉石、青礪也ト云、是ナリ、時珍モ此即礛玉砂也、玉須此石礪之乃光ト云、コンゴウセウニテ磨スレバ能クヘラズト雖ドモ、礛諸シテ光澤ナシ、故ニ玉ヲ切ニハ專ラ是ヲ用ユレドモ、光澤ヲ出スニハ、鳴瀧砥ヲ用ユ、大明一統志ニ、順德府解玉沙、大同府礛玉沙ト云時ハ、礛玉砂ト解玉沙ハ同物ニ非ズ、又天工開物ニ以解玉沙攻玉、永無耗折ト云トキハ、解玉沙ハ最トモ嚴密ナル越砥ニシテ、徐々ニ磨ケバ折ザルヲ云フ、

〔紀伊續風土記 物産 一〕合玉石(コンゴウシヤ) 本草

國中海邊處々沙中に產す、黄赤色にして甚細なり、

〔毛吹草 三〕河內　金剛山金剛砂(コンガウセンノコンガウシヤ)

〔大和本草 金玉土石 三〕空青

一名ハ曾青ト云、綠青ハ空青之最上也、昔自中華來、慶長ノ初攝州多田ノ銀山ヨリホリ出ス、綠青紺青、此二物多田山之產物也、又攝州河邊郡若宮村ノ山中ヨリ出、色ヨシ、元明帝和銅六年上野ヨ

リ、金青ヲ賜イ、扶桑略記、後朱雀院長久二年、自攝津國始獻紺青、シカレハ本邦ニモ昔ヨリ有之、一種花
紺青礦石ヲ以作ルビイドロノ細末、

〔本草綱目啓蒙〕七金石　空青

コンゼウノ品類ナリ、コンゼウト云ハ、ソラ色ノ石ナリ、コンゼウト云ハ、漢名扁青ト云ク、下ニ本條アリ、コレハ、ノ本條ハ、コンゼウノ内ニ水ヲ貯タアルナリ、コレニモ綠色ナルアリ、集解蘇恭ノ說ニ、大者如雞子、小者如豆、綠色ナルモ通ジテ空青トモ云ヘドモ、分テ云ヘバ綠色ナルハ空綠ナリ、碧藍色ナルハ空青ナリ、圓方トモニ丸キモ長キモ色々アリ、大小モ不同、先ヅ五六分位ナルガ通用ナリ、コノ中ノ水ヲ眼科ニ用ユ、コレヲ綠納青ト云ナリ、形楊梅ノ如キ故ニ名ルナリ、眞物價貴ハ、春夏水、秋多乾云云、品字箋ニ、圓無竅者取、全殼漿滿三五枚、自然作竹節可點瞳、可醫盲云々、コノ說ヲ見レバ水ノナキハ、水ヲ作リヤクアルモノト見ルナリ、蓋シ空青ハ古時貴レシ、本經逢原ニモ、天下有空青、人間無瞎目云々、本草蒙筌ニ、不怕人間多瞎眼、惟愁世上無空青云云、日本ダハ、昔銅山ニアリ、攝州多田銀銅ノ間、二ノ銅山ナドニアリ、然ドモ空青モ扁青モ一ツニ合レタ、畫ノ具店ヘ出レタ、畫ノ具店ニタ、一ツニ混ニスル故ニ、今藥店ニタ空青ト云モノハナレ、多田銅二ナドノ銅山ニタ時試スレバアルナリ、

一名青要中女〈石藥爾雅〉　青腰玉女〈同〉　青要女〈同上〉　天精〈丹書〉

曾青

イワコンゼウノ類ナリ、銅產アリ、曾青ノ形長クレタ高セタアリタ、連珠ニナリタルナリ、又貫連ナドノ如キ形ナルモアリ、コレハ多畫具ニ用ルナリ、(中略)

扁青

コンゼウ　イワコンゼウトモ云、紅毛ヨリ渡ルハナコンゼウト云ハ、下品ニシタ別物ナリ、本條

玉英

續日本紀ニ、金青出₂上野₁ト云、然ドモ今上野ヨリ出ルハ下品ナリ、上品ハ攝州多田、羽州阿二ヨリ出形ハ色々アリ、コレモ初ハ黑ミアルガ上品ナリ、初ヨリ青色ナルハ粉ニシテ、色淺クナルナリ、コノ淺キハ和名ニダンセウト云ナリ、上品ハ青黑色ナリ、コレモ細末ニスルニ、一番ヲ頭青ト云、二番ヲ二青ト云、三番ヲ三青ト云、コノ名ハ芥子園畫傳ニ出、又紅毛ヨリ來ル、ハナコンゼウト云ハ、細末ニナラズ、初渡リタル時ハ砂ノ如シ、コレヲ細末ニスレバ色白クナル故ニ、本ノ畫ノ具ニハ用ズ、粗末ニシテ看板ナドヲ繪スルナリ、光リアリテ見ゴトナリ、コレハ本ト何ヨリ生ジタルモノヤラ知ラズ、本條ノ類ニテハナシ、大和本草ニ大[illegible]ナラント云、コノ說近シ、

白青

タンゼウト云モノナリ、昔ハ渡ル、今ハ渡ラズ、日本ニテコンゼウノ下品ヲ細末ニシテ色白ケタルヲタンゼウト云、コレハ僞物ナリ、唐ヨリ渡リタルタンゼウト云ヘル物ハ、自然ノモノニテ、色白ケタルナリ、美ナルモノナリ、唐畫ノユリナドヲ綵レルモノコレナリ、

一名　目青 綱目

附錄　綠膚青　和產知レズ　碧石青　和產知レズ

(佐渡志 五 物產) 扁青　方言イワコンゼウ

海府入川鉛山ニ生ズ

(本草綱目譯義 五 入) 玉英 カヾミ石

常ノ石ノ形ニシテ、平ラカニシテ光アリテ、物ノウツルモノナリ、何ニモアリ、京ニテハ鷹ガ峯ノ近處ニ鷹ガ峯ト云處アリ、此ニカヾミ石アリ、人ノタケホドアリテ、人ノ通ルニ、鏡ノ如クニスガタウツルナリ、前牛馬ノ往來スルニ、此石ニタマゲタ害ニナル故ニ、今ハキズヲツケテアルナリ、諸國ニアルモノナリ、唐ニモアルコト、大明一統志ニ出タリ、卽チ鏡石ト云也、

(觀跡工隨筆)其州の岡のあんこ寺に鏡石といふあり、碁石卵のごとく、高サ三四尺計、南の方滑らかにして、色黒みどりにて、婦人の影を移こと鏡の如し、

(新編常陸國誌十九産物)月鍼石

風土記久慈郡條云、河内里東山石鏡、昔有魑魅、萃集翫見鏡、則自去、俗云疾鬼、面鏡自滅、今久慈郡生井澤村鏡山ト云處ニ月鍼石ト云アリ、昔年ハレタ光アリ、鏡鐵ノ如レ、近年人取リ以テ藥物トス、或ハ鳴ニ作ル、ノ村ハ古ノ河内郷ノ内ナレバ、風土記ニ所謂ル石鏡ハ即チノ月鍼石ナリ、

白羊石　黒羊石

(多識編一石)白羊石今案志呂岐比都曾伊之　黒羊石今案久呂岐比都曾伊之

(本草綱目啓蒙五石)白羊石

和産知レズ、舊ヨリ識ラズ、白羊ハ山ノ名ナリ、羊ハ陽ト音通、白陽山トモ書ナリ、黒羊石モ和産知レズ、黒羊山ノ産ナリ、博物綱目ニハ白石羊、黒石羊ニ作ル、コレハ誤リト見ルナリ、又和名ニ黒羊石ト云モノアリ、コレハ近江ノ方言ナリ、俗ニダヘウシ石トモ、スバスミトモ云モノナリ、正黒ニシテアラレハ中間ヲ高隆ノ形ナリ、故ニスルスミト云ナリ、コレハ漢名烏石ト云、格古論ニ出、

(佐賀志五物産)黒曜石

鍵太郎和泉村ノ山中或ハ一個ノ中ニアリ、ソノ質黒色ナリ、打碎クベ中ハ光澤アリテ漆ヲ塗リタルガ如レ、鍛タラズシタ鑿モタヲロレ、

雲母

(本草和名五玉石)雲母　一名雲珠、色多赤　一名雲華、五色具　一名雲英、色多青　一名雲液、色多白　一名雲沙、色多黃　一名磷石、色正白、已上出仁諝　一名雲膽、色黑　一名地涿、色雜黑、已上二出神農本草、陶景注　一名六甲父、出兼名苑　一名鴻光、出無和　一名石鏡、出太清經　雲母者陽精也、又云日精也、出本草外藥　和名岐良々、出陸奥國、

(倭名類聚抄十一)雲母　本草云、雲母、其五色具謂之雲華、多赤謂之雲珠、多青謂之雲英、多白謂之雲液、多黃謂之雲沙、

〔箋注倭名類聚抄 三玉石〕按和名依輔仁、以其光映歴鍊然、有是名、千金翼方、證類本草玉石部上品、作雲母一名雲珠、色多赤、一名雲華、五色具、一名雲英、色多青、一名雲液、色多白、一名雲砂、色青黄、一名磷石色正白、本草和名闕、唯作一名雲沙色多黄、與此所引合、按抱朴子僊藥篇云、雲母有五種、五色並具而多青者名雲英、五色並具而多赤者名雲珠、五色並具而多白者名雲液、五色並具而多黒者名雲母、但有青黄二色者名雲沙、晶々純白者名磷石、是葛洪所見本草、亦作青黄、則本草和名作多黄者誤、源君據彼篇也、陶磷石之名亦非是、圖經云、雲母生土石間、作片成層可析、明滑光白者爲上、江南生者多青黄色者、其片絶有大而瑩潔者、

〔大和本草 三金玉土石〕雲母

本草綱目、生土石間、作片成層可析、明滑光白者爲上、　弘景曰、以沙土養之、歳月生長、抱朴子曰、雲母有五種、時珍云、昔人言雲母壅尸亡人不朽、盗發馮貴人冢形貌如生、因共姦之、　今核匠用之爲粉面婦[illegible]粧、

〔和漢三才圖會 六十玉石〕雲母　雲華 雲液　雲珠 雲砂　雲英 磷石　和名岐良良

本綱、雲母生山石間、土人候雲所出之處于下掘取、無不大獲、有長五六尺可爲屏風者、但掘時忌作聲也、按此則此石乃雲之根、故名雲母、而雲母之根則陽起石也、凡有五種、雲母以向日看之、陰地不見雜色也、五色並具而多青者名雲英、五色並具而多赤者名雲珠、五色並具而多白者名雲液、五色並具而多黒者名雲母、但有青黄二色者名雲沙、晶々純白者名磷石、昔蜜湯煮之可爲粉也、凡他物埋即朽、著火即焦、而此五雲母入猛火中、經時不焦、埋之不腐、入水不濡、踐蹂不傷、故人用雲母壅尸亡人不朽、入藥以光瑩如冰色者爲上、

氣味甘平小毒、治中風寒熱如在車船上、除邪氣安五臟、明目久服輕身延年之藥、古蓋有服錬法、今人服者至少也、治一切惡瘡及金瘡出血、蛇之難產經日不生者、或橫逆者、萬不失一、雲母粉半兩、溫酒調服入口即產、

（本草綱目啓蒙八）雲母キラヽ

路シタヽラトモ云 此ハ山中ニ生ズ、續日本紀ニ、元明天皇和銅六年、令大和參河國並使獻雲母トアリ、今大和ノ葛城ノ東南ノ方ニ蜂尾ト云處ニ、昔雲母ヲ堀タルイワヤアリ、ハシモヒロク、奥タ深シ、内ニ入テ見ルニ、白キ石アリ、是ニ雲母マジリタアリ、一丁モ二丁モ奥ニ入テ見ルニ、奥ノ深サ測ルベカラズ、大和ニテハ今ハ堀ラズ、昔ホリタルアトアリ、今ハ參河ノ矢作郡吉良村ト云處ノ山ニ多シ、雲母山トモ云、上品ノモノハ鏡バン又ハ鏡葉ト云タ、昔ノ火ノ上ヘレタナリ、上品ハスキ透ルモノナリ、下品ハ筋ニレリ、鏡ニタカイ、又ハカラカミニフカウナリ、西ノ劔陀ニタ筋ニ黒ミルナリ、雲ニハ雲母上品ノ大ナルモノアリ、日本ニハ大ニレタスキ透ルモノハナシ、參河ヨリ出ルハ上品ナリ、江州信州ニモアリ、又外國ニアリ、石ナレドモイタフハモヘゾルモノナリ、阿蘭陀ヨリ來ルハ上品ナリ、厚サ一分ニドアルモノニテモ、ビイドロノ如クニタルナリ、玉鏡ノ如クアリニナニナリ、ビイドロハ手習ヲスルニ用フキアレ、此雲母ニテシタルハ器ヲキヨシイタアニモヘゾルナリ、雲名アラビヤカラアストト云、蠻解ニ五色ノ雲母アルコトヲ云、日本ニモイノ透リモアリ、白色ニレテスキ透ルモノハ上品ナリ、

（甲斐國志物產部十）一雲母 八王子嶺及ビ萩原ノ黒川山金坑中ヨリ出ヅ、

（採藥使記中下）同仕日羽州秋田ノ阿仁鳥手平ト云フ山ヨリ、紫雲母ヲ出ス、野州日光山近邊ヨリハ白雲母ヲ出ス、共ニ獻上ス、

先生按ズルニ雲母五色アリト云ヘドモ、白色ナルモノヲ上品トス、

（紀伊續風土記物產一）雲母本草綱目 本草綱目

伊都郡官省符莊慈尊院村近山に產す下品なり、

（倭名類聚抄十一）玫瑰 唐韻云、玫瑰〈枚回二音、今按俗說云、美石名、見漢語抄、〉火齊珠也、

硫黃

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕雲母火齊見西都賦西京賦、按南史夷貊傳云、火齊狀如雲母、色如紫金、有光耀、別之則薄如蟬翼、積之則如紗縠之重沓也、吳都賦注引異物志亦曰、火齊如雲母、重沓而可開、色黃赤似金、出日南、故其和名與雲母同也、今本文選訓多万、恐非古義、廣韻、按玉篇引倉頡篇云、玫瑰火齊珠也、源君蓋依之、慧琳引說文亦云、玫瑰火齊珠也、今本說文玫字注作火齊玫瑰、恐非、按玫瑰諸本草不載、不知其詳、但本草圖經雲母條云、西南天竺等國出一種石、謂之火齊、亦雲母之類也、色如紫金、離析之、如蟬翼、積之乃如紗縠重沓、又云、琉璃類也、寄籍入藥、李時珍於水精條載火珠云、說文謂之火齊珠、漢書謂之玫瑰者非、

〔本草和名四玉石〕石流黃　鵞子黃（陶景注云、如鵞子初出殻）一名王黃（出雜要訣）一名九靈黃童（出丹口訣）一名石亭脂（出丹訣）一名大陽（出範子計然）一名土精（出本草名集）一名留黃（出神仙服餌方）一名生黃（出太清經）和名由乃阿加、出太宰、

〔倭名類聚抄一玉石〕流黃　本草云、石流黃、焚石流也、（和名由乃阿和、俗云由王、）

〔倭訓栞前編十七由〕ゆわう　和名抄に硫黃俗に云由王といへり、硫の字の急呼なるべし、今ノ俗いわうともいへり、職人歌合にも、ゆわうをいふによせたり、硫黃の異音とせるをもゆといひと通す、和銅六年に令信濃國獻硫黃と見え、海東諸國記に、日本下野國有火井、產石硫黃と見え、庚辛玉冊に、石硫黃生南海琉球山中、倭硫黃亦佳と見えたり、琉球山中といへるは、武備志などに所謂硫黃が島を、中山傳信錄に硫黃山といへり、

〔本草綱目譯義十一石〕石硫黃　硫黃ノ上品鷹ノ目ト稱スルモノナリ、品類多シ、細ク云トキハ硫也、分ツテ云トキハ硫黃也、日本ニテモ三色ニ分ケルナリ、深黃ニシテスキタル如キモノヲ鷹目ト云、卽石硫黃也、黃ニシテ赤ミアルワウノメト云、コレ次ノ石硫赤也、此二品ハ上品ナリ、此ニ一說アリ、和漢三才圖會ニハ白キワタカメト云、淡黃色ナルワウノメトス、是ハ大ナル誤ナルベシ、又青ミアルモアリ、是

ヲ火口ト云、下品ナリ、藥舖ニ用ユ、コレ石硫青色緑色藥ニ用ルモノハ上品ノ石硫黄タカノメ及ビ石硫赤ナリ、日本諸國ニ出ヅ、皆山ノ土火氣アツク常ニ燃ルナリ、俗ニ地獄ト云、其處ニ取ヲウヤムツヤアトモハ火氣ニヲモ假ノ如ク燃ル色黄色ナリ、是ヲ生硫黄ト云、コレヲトリ、コレヲ鍋ニテ煮ツメ去ヘコレヲ煮硫黄ト云、諸國ヨリ京ニ出スモノハ皆煮硫黄也、肥前ノ温泉山ニ硫黄多シ、自然ニ吹出ルナリ、上品又舶來モ上品也、和產モ上品ナリ、藥舖ニ舶上佳硫黄亦佳ト云、日本ノ硫黄ナリ、万病回春舶硫黄ト云、正字通ニモ舶硫トアリ、皆日本ノ硫黄ヲ云也、續日本紀ニ文明天皇和銅六年相模信濃陸奥州獻硫黄トミユ、今ハ豐ク相州箱根信州淺間嶽奥州飯島ニ産ス、其外會津大網羽出羽秋田伊豆下野日光山賀州白山越中立山越後妙香山攝州有馬、伊豫土佐日向霧島薩摩肥前温泉嶽肥後阿蘇山豐後速見郡阿蘇郡辰等ノ處ヨリ出ルナリ、京都ニハ多ク豐後ヨリ出ヅ、

一名雲黄　黄硇　崑崙又黄英　九靈黄童　山不住　樂注

液黄　留黄　磂黄

○石硫赤

硫黄ノ赤キモノ透明ニシテタカノメト稱スルモノ上品也、釋名ニ石亭脂ノ名アリ、方書ニ石亭脂ト云ハ、多ハ硫黄ノ總名也、正字通ニ舶硫似蜜黄中有金紅色謂明如水晶有光云々、此舶ウノ目ナリ、

○石硫青

硫黄ノ青ミアルモノ、セグナト稱スル藥舖ニ用ユ下品ナリ、一名青硫正字通　附録　硫黄香

和產不知

〔重修本草綱目啓蒙　六石〕石硫黄　タカノメノイワウ

一名崑黄〔酉陽雜俎〕　黄硇砂〔正字通〕　流黄　留黄　礵黄〔共ニ同上〕　焰叟〔事物異名〕　黄英〔石藥爾雅〕　九霊黄童
〔同上〕　山不住〔同上〕

凡ソ硫黄ハ、温泉アル山ニ於テ、器物ヲ以テ、土常ニ燒ケ焫ニ地獄ト稱スル處ニ蓋ヒ置バ、焰氣器中ニ觸テ、燧ノワキタル如ク、純黄色ナル者アリ、此ヲ生イワウト云、取出シ、略煮テ土沫ヲ去ルヲ煮イワウト云、數種アリ、大抵三品ニ別ツ、色深黄ナルヲ鷹ノ目ト云、卽石硫黄ナリ、其色黄ニシテ微紅ヲ帶ルモノヲ、ウノメト云、卽石硫赤ナリ、共ニ光澤透明ノモノヲ上品トス、寺島氏、白色ヲ以テタカノメトシ、微黄色ヲ以テウノメトスルモノハ、是ニアラズ、其青色ヲ帶ルモノヲヒダチト呼ブ、卽石硫青ナリ、黄赤二ツノモノ藥ニ入レ、及銃藥ニ供ス、青色ノモノハ藥ニ入ル、ニ堪ヘズ、唯發燭ノ用ニ充ルノミ、唐山ニテハ銅炭ヲ燒テ硫黄ヲトルコト、天工開物ニ詳ニス、和產ト異ナリ、續日本紀ニ、元明天皇和銅六年、相模信濃陸奥硫黄ヲ獻ズト云、今モ相州箱根、信州淺間ケ嶽、奥州[illegible]島、同會津ノ大鹽ノ里ヨリ出、又羽州秋田、豐後玖珠郡、同速水郡ノ硫黄山、肥後ノ阿蘇山、越後ノ妙香山、越中ノ立山、加州ノ白山、野州ノ日光、豆州ノ大島、土州ノ湯ノ山ケ嶽、日州ノ霧島、肥前ノ島原、甲州、豫州道後(ドウゴ)ノ湯ノ山、薩州硫黄ケ嶽等ヨリ出ヅ、唐山ニテ和產ノ硫黄ヲ舶硫黄ト稱ス、萬病回春ニ出ヅ、又正字通ニ舶硫ト云フ、物理小識ニ日本土多硫黄、不可作竈、必取別島土、ト云ハ、笑ベキノ甚シキナリ、

集解、礬水石液、詳ナラズ、蘭子考ニ從テ、礬石水液ト做看ルベシ、增、集解、礬石水液ノ說ハ、北濱堀元厚先生ノ本草綱目ノ標注ニ見ヘタリ、今本草家相傳スル所ノ標注及側注等、多クハ堀家ヨリ出ヅ、ソノ後蘭山先生僅ニコレヲ補遺スルノミ、其他內經十部書、仲景ノ書等、各堀家ノ標注アリ、眞ニ大家ナリ、余亦違タツノ門ニ出ヅ、會士考ノ說ニ、薩州ノ鬼島硫黄島俱四處アリテ、自ラ硫黄ノ液ヲ生ズ、ソノ味極テ酸ナリ、土人硫黄醋ト云、取リ貯テ米醋ニ

代アロし、緑青石ハ五レト云、然レドモワレモ緑石ノ木葉ナルハ一ツ、水緑青ハ緑ノ花ナリ、

(諸手書實記下)有玉彼寶開書事

去年此人々謀リ上ダ其後ハ事間有モナク偽ヲ騒ル人モナクレバ、通ガ甲斐ナキ命ノ惜ケレバ、此人々ノ山ハタ中ノクワロダレナント云レヲ聞タ、カノ有レ程ハ昌ノ宿ノヌルヲ見習タ此山ノ石ハ登タ緑青ヲ取タ商人ノ食ノ畫タルハトタモタ、白鑞ノ代ヲ得タ、日ヲ送リ、命ヲ繼レカ其力縁リ身痩タ後ハ山ハ登事モ不叶、緑青ヲ取事モ力盡ヌ、

(七十一番歌合下)廿一番　右　　緑青掘

雲なれやよはの月ともいかゞゆわらは、りの面も雲なり候

我袖とゆわらは、りのいつとなく離れの中とおもはましかば

(重修本草綱目啓蒙二十五)緑青

今諸山中ハ下等ノ緑青ヲ他物ノ末ト合セ焼トナスモノアリ、金緑石ト名ク、市上ニタ鬻リ混ス、是銅ノミナラズ銅緑銅青ノ類ヲモ製シ賣ス、

(本草和名十玉石)緑石 一名緑瀏 一名羽碧 高宮銅之精 一名青要 一名白要 緑碧 一名羽碧 一名緑青 一名羽砂 一名武骨 一名羽碧

和名[illegible]

(倭名類聚抄一石)緑青　蘇敬曰緑石有青白黒綠黄五種其晉宜此間云阿乎石、

(箋注倭名類聚抄一石)山田本昌平本下總本尺作石、廣本同、恐非、○中略 蘇敬新修本草二十一卷、見唐書藝文志、同國見在書目、不載是書、知西土久亡、皇國所傳本亦多亡佚、存六卷、此所引在亡佚亡中、證類本草玉石部上品引蘇敬注云、緑石有五種、青緑白緑黄緑黒緑絳緑、此所引即是、按證類本草宋大觀中唐愼微所撰、於今所存諸本草中最爲古、其爲書以本草經作白字、文之以名醫別

條下列陶弘景蘇敬諸注、實足遡新修本草之舊、故本書所引本草注、逸亡之處、取以校之、蘇注又云、白礬多入藥用、靑黑二礬療疳及諸瘡、黃礬亦療瘡生肉、兼染皮用之、其絳礬本來綠色、新出窟、未見風者、正如瑠璃、燒之赤色、故名絳礬矣、按、白礬今俗呼明礬者、靑礬卽綠礬、今俗訛呼呂宇波、入染家用、李時珍曰、綠礬可以染皂色是也、黃礬今俗呼黃明礬、亦染家用之、絳礬卽燒綠礬者、今俗呼辨賀羅、黑礬惟出西戎、亦謂之皂礬、染鬚鬢藥或用之、見本草圖經、圖經又云、礬石初生皆石也、採得碎之、煎煉乃成礬、李時珍曰、礬者燔也、燔石而成也、按古本新修本草殘本、及醫心方作㶨石、本草和名作㶨石、續日本紀延喜式、北齊道興造像記並同、岡村氏通曰、作㶨爲是、㶨燒也、礬石煎煉乃成、故名礬石、不須以燔釋礬也、俟之作礬石、亦假借也、

〔和漢三才圖會六十一礬石〕明礬（涅石　羽涅　羽澤　巴石　其礬精礬蝴蝶者也、鷄屎礬白者也、）
按明礬古者未精、近世習製法於華人、今出豐後者、潔徹玲瓏、同于南京透明礬、故今和漢共用、凡染家茶色者無之則不成、

〔本草綱目啓蒙十一石〕礬石（ミヤウバン）
明礬ト書ス、中華ニテ明礬ト云ハ明徹ナルヲ云、上品ノ稱也、ドウス、ドウナ、明石、（和方書）礬石ヲ燒返シ、白キ粉トナシタルヲ、ヤキカエシト云、漢名ハ枯礬ト云、藥店ニ舶來モ和產モアリ、上品ナリ、日本ノ產モ明徹シテ上品也、南京ト云モノハ黑ミアリテ濁ル、染家ノ用ニ入ル、又唐ノスキ明礬ト云モノモ、白色ニシテ透徹ス、續日本紀天武天皇二年、近江國獻白礬、元明天皇和銅六年、令相模飛驒若狹讚岐貢白礬ト云、今江州ヨリ不出、京近國ニハ產スル地ナシ、今豐後鶴見ケ嶽、同國速水郡、肥前溫泉嶽、肥後阿蘇山、長門能登甲斐遠江奧州會津、其外諸國ヨリ出ヅ、溫泉アル土地ニハ土熱シテ焰燃出ル處アリ、コレヲ俗ニ地息地獄ト云、ソノ處ノ土ヲトリテ、礬ヲ製スルガ如クシ、土上ニマキテ、土ニ水ヲウチ

貫ヲ量リテ、土鍋ニテ自ラ蒸タテル、コレヲトリ、竹器ノイタキノ如キモノニ入レ、下ニ桶ノ口ヲ受ケ上ヨリ水ヲ淋シ下ニ受ル、又水中ニ木灰汁ヲ入レ煮ルコト三時計リニシテ取出シ、他ノ器ニ入レ冷シメ、礬ヲ礬石トナル、コレニ雲霧リアル故、再煮テコレヲ又煮テノチ冷ストキハ雪白ナリ、コレ鍋ニモ明礬ナリ、コレヲ上品トス、中等ニタハ挂肆ナリ、土中ノ石ヲトリ、石灰ニテ燒モテニ法ハ、天工開物ニ詳ナリ、圖モアリ、

(山梨縣舊[下])殺貫部八

礬石モ燒山ヨリ出ヅ、其透明ナルヲ俗ニ明礬ト呼ブ、凡ソ礬ノ製ヲ猛火ノ上ニ置ヲ俗ニ地獄ト云フ、其地獄ノ熱土ヲ採リ、寒ク冷水ヲ灑ギ上ニ覆蓋ヲ掛ケ置クトキハ、其土ニ宇畫ニ湯ノ花ノツクガ如クナル者ナリ、是ヲ陶器ニ盛リ、熱器ヲ上ヨリ覆伏ス置トキハ、礬液ハ下ニ滴レ、土滓ハ器裡ニ殘ル、其濾レ汁ヲ取リ、猶モ石灰汁ヲ和シ釜ニ入レ、三時ホド煎熬シ、桶ニ移シ、一夜冷定ストキハ氷ノ如クニ凝固スルモノ、明礬石ナリ、又其土滓ハ舊ノ燒山ニ散敷シ置トキハ、暫時ノ間ニ礬石氣ヲ帶ビ礬石ヲ採ルノ料トナル者ナリ。

(甲斐國志[百二十])一礬石　逸見尖山村畫久保ノ西七里許ノ中腹ニ、トウス岩ト云洞穴ヨリ出ス、洞口ノ廣サ六七尺、高サ一丈許、洞ヨリ漸々傾レ下ル、色白シ、武川筋柳澤村ノ山、及ビ鳳凰山、白峯所々ヨリ生ズル者モ白ク、岩ニ附レリ、河内領大嶋村平須村山ドウス澤ト云處ニ水アリ、砂石悉ク礬ヲ帶ナリ、大膳村ニ温泉ノ湧ク處アルモ礬氣ナリ、鹹澤ノ湧底ニモアリ、里人之ヲ採ルコトアリ、續日本紀延喜式ニ、甲州貢黃白礬石ヲ獻ゼシコト見エタリ、貝原篤信云、近年發明、甲斐、長門肥後豐後等ヨリ出ヅ、温泉アル處ニ礬氣アリ、地上ニワキ出タ、泥土オモ其土ヲ取メ、桶ニ入レ水ニ浸シタ上澄ズレハ、礬トナル、其モ燒礬ガ如シト、上品ノ透明ナルヲ明礬ト云、枯礬ハ煮熟ヲ煎ル汁ニ加ヘ、黒色ヲ染ム。

緑礬
黄礬
白礬

〔續日本紀 六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、伊勢水銀、相模石硫黄、白樊石、黄樊石、近江慈石、美濃青樊石、飛驒若狹並樊石、信濃石硫黄、上野金青、陸奧白石英、雲母、石硫黄、出雲黄樊石、讚岐白樊石、

〔和漢三才圖會 六十一 雜石〕緑礬　皂礬　青礬　俗云呂不波

按緑礬似明礬而緑色、故名、其深緑者勝、謂手、帶赤者名末謂手、爲次、出於長州萩者良、攝州多田及播州者次之、或染明礬爲淡青色、僞之、入藥用者可辨、惟染匠家彫金家多用之、北國之染匠家、好用末謂手、今自中華來者、多末謂手也、故以倭産眞者爲上、凡山兀面焦黑色石有之、取其石投銅鍋煮之、其湯汲取于桶、徐々投鐵、上澄水盡、至底如凝氷、面緑黑色者乃緑礬也、用之加染紫及茶色中帶黑色、凡染帛一疋、加緑礬一小匕可也、多則帛脆易敗、今多燒緑礬代朱脂砂、名二緑礬紅一

〔本草綱目啓蒙 十一 石〕緑礬 ロウハ

緑礬ノ唐音ロウパノ轉ナリ　アヲメウバン 豫州

明礬ニ似テ、透徹緑色ナルユヱ青メウバント云、上品ノモノ然リ、舶來ニモ近來ハ上品ナシ、和産ハ、長州萩、攝州多田、下野、播州、能登、美濃ヨリ出ヅ、藥店ニモ二品アリ、萌黄色ニシテ濃キモノヲ紺ダノロウハト云、透明ニシテ美也、和産ナリ、染物ノ黑ミヲフケルニ用ユ、然ドモ毒アリ、絹帛ヲ染テ遂脆ル也、藥ニ不用、又淡赤黄色ノモノアリ、ミソデノロウハト云、赤味噌ノ色ニ似タリ、舶來ノ緑礬ハ、風雷リ碎ケテ色變ジ、味噌ノ如ク粉トナル、緑色ニシテ塊二三寸ノモノモアリ、是ヲ藥用トス、唐ニテ緑礬ヲヤクハ石炭ヲホリ、穴ノ中ニ雞卵ノ如キモノアリ、コレヲ銅炭ト云、此ヲ以テヤク也、物理小識、煤中銅石可燒青礬ト云、煤トハ石炭也、石炭ニテ燒テ緑礬トナス、日本ニテハ製法異ナリ、山野ノ草木ナキ處ニ、黑クコゲタル石アリ、此ヲトリ、銅釜中ニ入レ、水ニテ煎ジ、及貯テ安カラシメ清メルモノヲ去リ、底ニツララノ如ク凝ル、コレヲトリ、紺櫃ノロウハト云、凡テ舶來

ノ緑青ヲヤヽ細ニ中色赤クナルヲ、同名緋緑ク紅ト云モノコレ也、瀉土ノモノハ銅板ノ上ニノ
セ火上ニ置タルトキハ黒赤色ニ變ズ、和産ハ火ヲ畏クモアレバ、色不純、焼ク赤クナレバ、色同ジ、
大坂ニシボリタルヲ以テ上トス、今ハシボリタト云、色赤黒シ、上品ハ碧紅ナリ、下品ハ細末ヲ焼キ粉トナ
レヨルモノナリ、ハシボリ、本ハ豊後ナリ、肥前銅鑛ヨリ出ルニワキト云赤土アリ、即碧紅ナリ、
蜀人持來ル、其鑛ノ名ヲ取リ名トス、大坂ヨリ出ル上品ハ紅碧ナリ、○
本邦ハ無産トアレドモ、和產ハ處々アリ、備用ニアル明礬ニテ焼ルモアリ、此ハ碧色ニシテ純ナラ
ズ、

〔山陽雑録〕緑青鑛九○

緑青ハ銅石ト同類ナルガ如クナレドモ、又同種類ヘ異也、此物ヲ生ズル處ハ銅山ノ近傍タリト
モ、火ノ氣ヲ絶ス氣アルノ地ニハ決シテナキモノナリ、凡ソ上品アル禿山ニ黒ク焦タル岩石アル處
ナリ、其黒焦タル岩石ノ黒色ナル石ヲ取來タ、鐵ノ鍋ニ入レ水ヲ以テ煎熬スルコト半日餘リニシ
テ、其上水ノ濁リタルヲ傾瀉シ去レバ、底ニ氷柱ノ如クナル者凝ル、即チ是レ緑青ナリ、

〔大和本草金玉土石〕緑青

畫工ノ染汁ニ和シテ緑色ヲアラハストイヘドモ、畫用稀ノナル、昔ハ日本ニアル事ヲシラズ、近
年本邦諸國ヨリ出ヅ、

〔本草一家言〕緑青

緑字讀書作色、人以爲和名緑青、和産銅處處之有、唐産者色淡又白綿相交、乾燥無潤者、此眞也、可入藥
用、圖東番緑呼總青、京師俗家呼稱呼下是也、和產大寄石也、色深青似銅緑、有濃潤能作藥物、圖東俗
總呼緑青、京師俗以呼青青者是也、不可入藥、用供畫用、有毒者之患、但供染家用耳、

〔日本山海名物圖繪〕緑青買方

礬石、白きは明ばんとなり、あをきはろうはとなる、山より堀出したる石をくだき、小屋の中にて水をかけ、くさらかして、これを釜にてたき、其あわをほし、ふたに入てほす也、中にも性のよきを緒手といふ、丹礬の色のごとし、其次をあさぎ手と云、色異青なり、下品はくろみあり、緒出、浅黄出のろうはは、外科の膏薬に用ゆる也、下品のろうはは、染物に用ゆ、染汁に是を加れば、くろみを出すといへども、染焼よはるなり、

〔紀伊續風土記物産一〕礬石本草綱目、和名鈔[illegible]

牟婁郡那智庄那浦村に産す、至りて稀なり、

黄礬本草、延喜式ニ[illegible]　日高郡花井庄楊枝谷に産す

緑礬本草　普通の品は、皆煎錬を假てなる物なり、牟婁郡栗栖川庄眞砂村山中に多く産す、又花井庄楊枝谷銅穴中に産する物は、自然生にして至りて上品なり、中には大塊のものあり、其色翠緑にして、透明玲瓏、恰瑠璃の如く、觀美なり、濱土にも自然生の品ありて、石膽混する事、天工開物に載せたり、

〔本草綱目譯義十一石〕黄礬キノミヨウバン

明礬ノ黄色ナルモノナリ、和漢倶ニアリ、京ノ藥店ニハナシ、江戸ノ藥店ニアル由、豊後、伊豆、出羽、相模ヨリ出スヨシ、

〔大和本草三金玉土石〕白礬。

楊升菴丹鉛總曰、温湯所在必白礬丹砂硫黄三物爲之根、乃蒸爲暖流耳、今按ニ、硫黄ノ氣ヨリ温泉出ル如ク、礬氣ヨリ温泉イヅ、續日本紀文武天皇二年六月、近江國獻白礬石、又元明天皇和銅六年、相模讃岐白礬石ヲ獻ズ、美濃ヨリ青礬石出、豊ヨリ黄礬石ヲ獻ズ、延喜式飛驒國貢白礬石、其後日本ニアル事ヲシラザリシニヤ、三四十年來日本ノ諸山ヨリ出ル、唐ハ性ブヨク和ハ性ヨハシ、飛

甲斐長門肥前豐後ナド所々ニアリ、石ニハアラズ、溫泉アル處ニ礬氣アリ、地上ニフキ出ルヲ土ヲイレヨセタク後黃土アタヽアワノ大桶ニ入水ヲ入ヒタレ土ヲコレ去水ヲスマシタ煮レバ礬石トナル、此礬ヲヤノ倒ニレタトル、本草ニ白礬ヲ煮法アノセズ、自然ノ石塊モアリヤイブカレ、白礬ヲ水ニ化シタ紙ニ字ヲ書タ乾カシ、其紙ヲ墨ニ染レバ字アル處ハ不染、紙ニ白字トナル、白礬ノ透明ナルヲ中華ノ書ニ明礬ト云、土器ノ上ニテヤキ、火ニタ燒タ白粉ヲ枯礬ト云、不假ヲ生礬ト云、礬石生礬トモニ爲礬多シ、本草可考、

(續日本紀一文武)二年六月丙申、近江國獻白礬石、

(大和本草金玉土石)石膽

石ノワタト云物アリ、カタマリタル石色少知ヲ色濃石ノ樣ナル石ノ内ニアリ、恰如綿ナル物ナリ、膽礬ヲ石膽ト云、眞否不聞、

(本草綱目譯義十)石膽

タンバント通名ナリ、和ノ方書ニ青石子ト書タアリ、舶來上品ナリ、藥店ノハ皆和產ナリ、和產ハ出羽秋田銀山所ニ下野ヨリ出、長サ一寸計リ石英ノ如ク六角ニシテ、透明碧ナリ、三四分ノ長サモアリ、長短定リナク、皆ヲ生ゼタアリ、色ハ[illegible]色ナリ、コレヲ一ツブヽ分レタアルヲ盆渡ノマキ砂ノ代ニ用、色悪ナレドモ、設クヤノルモノナリ、綠色ハヰラズヤメルト、淺黃ニナルナリ、銅礬ニ二ヲアリ、色黃ニシテソゝ色ニシテ透明ナルアリ、コレヲハタンバント云、コレハ大ニアブレベトタルナリ、コレハ下品ナリ、眞ノ膽礬ハ透明ナラズ、火ニカケタトクズ、コレハ自然ノモノニタ、上品ナリ、ヘタンバント云ハ、眞ヲ作リタルヲ云眞ナリ、眞ルト色ウツリタルナルナリ、

一名 黑膽礬本草綱目 銅子礬同上 鴨嘴青膽礬同 石液石藥爾雅 畢石綠持同

(倭讀要領五)膽礬

銅坑アルトコロ、銅子百枚及ビ鳥越山ヨリ出ヅ、下品ニシテ藥用ニアタリガタシ、

〔紀伊續風土記物産一〕石膽（形小く、鼓水晶の如く、碧緑色なり、）牟婁郡銅山處々に產す

〔本草和名玉石三〕石膽　一名畢石、一名黑石、一名碁石、（仁諝音碁、崔作）一名銅勒、一名立制石、（出范注）一名立制止、（出釋藥）出備中國、

〔多識編一石〕石炭、今案伊志乃阿良須美、又云毛乃加无須美、近江國栗本郡、掘地取土、加炭燃之代薪、曰須久毛、　燃石、今案毛惠伊志、

〔大和本草三金玉土石〕石炭

本草石部ニノセタリ、今按日本ニモ處々ニ多クアリ、其色黑クシテ如漆、堅キコト石ノ如ニシテ光アリ、火ニ燒ケバ黑烟極メテ明ナリ、能久シクモユ、本草ニノスル所ト同ジ、山ヲホリテトル、賤民コレヲホリテウル、コレヲ以テ薪ニ代フ、烟多ク臭惡シ、浴桶ノ小爐ニ燒之ナヨシ、コレヲタキタル臭衣ニウツレバ久シク散セズ、然レバ貝香ノ代トシ、百和香ニアハセタラバ、ヨク香ヲトマムベシト云、スタモト謂ズル說アリ、非是、スタモハ別也、スタモハ前ニ詳ニ見ハス、本邦ノ唐醫石炭ヲ以テ乾漆トス、大ナル誤也、或曰倭方乾漆ヲ用ヒバ石炭ヲ可用、老學菴筆記曰、石炭今西北所燒之煤、即石炭、漢ノ地理志豫章郡ヨリ出石、可燃爲薪、蘇軾集有石炭行、宋白石燭詩云、但喜明如蠟、何嫌色似黳、石燭出延安、予在南鄭數見之、其堅如石、照席極明、亦有淚、如蠟而煙濃、重汗帷幕衣服、故西人亦不貴之、程子外書曰、石炭穴中遺火、則連甍火不絕、故有數百千年、今火山蓋爲山中時有火光、必是此箇火時發於山間也、今按、石炭ヲホリタル穴ニ火入レバヤケテヤマズ、

〔倭訓栞前編三〕いはき　石木也、万葉集に見えたり、○中近江尾張などに、岩木といふ物あり、石炭也、木化石の柔らかなる物なれば、此名よろし、筑前にていはきともいへり、

〔本草綱目啓蒙九石〕石炭　カラスイシ　モエイシ　イシズミ筑前　イワキ長州　イワシバ筑前

備中國　ウダ〈伊江、伊賀〉ウダニ〈伊豆、伊賀ニテ、イシツヤ、ツヤ、ヒニ、ツチナト呼、其外品類多シ、和産多ク有アリ〉

コレハ今備前ニイフ乾漆ト云モノナリ、コノ形黒クレタ光リアリテ、乾漆ニ少シ似タリ、故ニ俗コリ乾漆ニ擬ルナリ、然ドモ乾漆ハ蝋ノ質ノ如ク孔アリテ軽虚ナリ、コノ石炭ハ孔ナクシテ堅ク重レ、分明ニ別ルナリ、然ドモ和ノ方書ニ乾漆ト云ハ石炭ノコトナリ、唐ノ書ニ乾漆トアルニハ石炭ヲ用ルハ大ニ非ナリ、石炭ハ和漢多シ、〇豊山ヲ深ク掘リ入リテ取ルナリ、コレヲ掘入ル時盛々ニ柱ノ如ク掘残シテ置キ、掘盡タル時ニ掘リノ柱ヲ取ルナリ、コノ柱ヲ取レバ必山崩レテ見ミモノナリ、凡テハゲ山ノ木ノナキ山ニハ必石炭ノアルト云ナリ、コノ石炭ト云モノハ、糟質ノ如ク真黒ニシテ光リアルモノナリ、コレニモ品類多シ、重クシテ色黒キガ上品ナリ、コレヲ窯口鍛冶ナドニ作リ用具ノ器物リノ如シ、軽キハ下品ナリ、又木理アリテヘゲルアリ、コレヲ木ウニト云ナリ、緊ク重キヲ石ウニト云、木目、色々ニ屈曲シタアルヲチヤウニト云、又黒レテ少レ茶色ヲ帯タルヲ数寄ニタトウタント云、コレハ下品ナリ、ドレモ皆ヨク燃テ、薪ノ代リニナルナリ、然ドモ火ヲヨウザルモノナリ、故ニ書ザハ鍛冶ニ用ユ、又石ヲ焼クニ用ルナリ、日本ニハ唯薪炭ノ代リニ用ル計リナリ、然ドモ臭気多ク煤多クシテ家ヲゴレル故ニ、上品ノ家ニハ用ズ、貧賤ニハコレヲ焼反シテ用ユ、サユレハ臭気少シ減ジテ食ヲ炊クニモ用ルナリ、コノ焼反タルハ軽虚ニシテ浮石ノ如シ、然ドモコレヲ焼タルニ、軽炭ヨリモ火ツヨシ、コノ灰ハ堅マリタリアリタ、白色ナルモノナリ、コレヲ石炭ノ代リニ用ルト云、数寄ニハコノ生ノ石炭ヲ生ズミト云ナリ、天工開物ニ石炭ノ品類ヲ委ク云ヘリ、明様砕様飯炭上品ナリ、鐵炭自来風銅炭ナドノ目アリ、形状モ委ク云ヘリ、又一様黒クシテ白キ細筋アリタ、余アマキタル如キアリ、コレハ漬名雲浪石ト云、雲林石譜ニ出、

一名　水和炭〈大明一統志〉　石墨〈本草綱目〉　臭煤〈物理小識〉

石炭

〔重修本草綱目啓蒙 五石〕石炭、附録然石、 詳ナラズ、〇中略 増、近年煙ヲ焚クニ、多ク石炭ヲ用ユ、其煙臭黒色ヲ帯ブ、下品ナリ、味噌醤油ニ製シテ、味變ジ易シ、宜ク擇ビ用ユベシ、又石炭ノ上品ニシテ、器物ニ作ル者、多クハ木ダチノ石炭ナリ、木ダチノモノハ、別ニ漢名木煤雲南通志ト云、雲南通志云、石炭一種、狀如樹面有錢理者、謂木煤、卽チ奥州大隈川及ビ同國鎌倉ノ埋木、豫州ヨリ出ル所ノ扶桑木、皆同物ナリ、又阿州麻植郡森藤村ニモ產ス、地ヲ掘ルコト二三尺、或ハ五六尺、其厚サ一尺許ニシテ横行スルコト數十間ニ及ブ、コノ物地中ニテ實ヲ結ブ、黑色ニシテ長サ六七分、徑リ四五分、大抵梨子ノ大ニシテ、豎ニ六稜アリテ、前後尖ル、其質鬆疎ニシテ、櫟炭ノ如シ、奇品ナリ、

〔日知録 三十二〕石炭

今人謂石炭爲煤、按水經注、冰井、臺井、深十五丈、藏冰及石墨、石墨可書、又然之難盡、亦謂之石炭、

是知石炭石墨一物也、有精麤爾、

〔松屋筆記 八十六〕麝土すくも

閲耆因巻十九丁[illegible]河底古木灰ノ條に、歲丙午、江南大旱、餘鄕河港皆赤裂、百餘日、居民多赴煙墩蕩中、掘黑泥和麩作餅、相傳此地本沈港與殿、積歲年久化爲泥也、鄕人以爲河底皆有黑泥、亦掘之、至五六尺許、輒得泥如石炭者、然不可食、以作薪火、乃終日不熄、其質非土非土、有大至數圍、須用斧劈者、有碎疊成塊、纍層々可揭者、細嚼之、則大者本巨木、層疊者則木葉所積、年久爛成塊也、江南人惟沿村、有樹河港之往、野者、学所植園有之、亦必取作器、小則戌爲薪、其熱有欲而棄諸河、意必淤荒以來、兩岸本多樹、隨山刋木時、始伐而投之、歷千萬年、故見耳、是亦數百里內、河港俱掘得、陽湖大數十里、湖底亦有之、余弟汝霖買數百斤、猶存云々、按に、舷後に新土あり、富士山に神代炭あり、吉田邊の人とりて炭にかへ、大に其利を得といへり、

〔大和本草 三 金玉土石〕スクモ　近江國野州郡老曾村ハ、觀音寺山ノ南ノ麓ニアリ、老曾ノ森モコ、

黒石
白ノ石
白黒石
黒ノ石
嶋貝石
實石

ニアリ、其邊ノ處ヲ掘レバ、コアタヽト云物多クイヅ、土ニアラズ石ニアラズ木ニアラズ、紫ノ黒ノ
クナリカヲヽリクルガ如ク、火ニクヽタヾ鑪ヤコニ、里人コレヲホリタ薪トシ、是ヲクリタ料ト
ス、總州ニモ此ニ有之、越背村ノ多クハコレヲ好マズ、中華、西ヘク未見之、

〔西遊記四〕佐賀の領は静なる地にして、九州にては端にて、伊豫の佐田の岬へ海上六里餘といふ、黒濱といふ所五六町ばかりの間◯是種の黒き小石のみ。白濱といふ所七八町も◯是種の小石のみ、黒きは至て黒々とせし光りあり、大小もなき石也、白きも至て白き光りある小石にて、外の石さらにまじらず、南の方は數万里の大海にして、大風の時には大浪を打よせて、山の際までも打かくる故中々に黒白の小石一ッにまじり合ふ事なるに、風やみて海濱靜になれば、いつとなく黒はくろ、白はしろと左右にわかりて、銘々に至る堺定木をもつてたち合せしやうに、黒白のむかうあきらか也、誠に不思議の所なり、予嘗不諸州を遊行して、いにしへより怪說をいふ地にも至りて数しく見聞せしに、虚說多不思議と思ふ所もなかりしに、此黒白の濱に於ていかなる理ありて、黒白を分て小石のみ數万石あつまる事やと、色々と考へ見しに其理更に解せず、造物者の作ならんと打過ぬ、主人のいふは、闇の夜に白ヶ濱に來りて、きびしく走りあゆめば、足下より火出て、外より見れば螢の飛まじる様に見ゆるといへり、是は石と石とのすれ合時に、石中より火出る事もあり、猶つぎきに手段の諸文字不明二郎の諸家調議と稱せる有何れも碁の縁記にして、黒ヶ濱白ヶ濱も唐人碁石濱ともいふ也、

〔日品考〕細白石 和名レクユナ ヒノイシ

怪石類細白石、爲文聖錦海濱砂土中別細長、實白作可愛、東坡詩序、試於文登海上、得白石數升、如芡實可作棋、

紀州熊野ニ勝浦ト云處アリ、此ノ石ヲ産ス、此處ノ名産ナリ、大サ豆ノ如ク、潔白ニシテ、透徹ス

ルガ如シ、甚奇麗ナリ、

〔土州淵岳志中産物〕沙石

長岡郡本山ノ川ヲ吉野川ト名ヅク、川上ハ本川ヨリ出ヅ、河原ニ釜山ノ霰砂トナル、白キ石アリ、打タダキタ大小柱ノ如クワリタ用ユ、又香川郡浦戸ノ外ノ濱桂濱ノ石モ釜山ノ砂トナル、

〔延喜式彈正四十一〕凡紀伊石帶隱文者、及定樣石帶、參議已上聽著用、紀伊石帶白晳者、六位已下不得用之、

〔紀伊續風土記物産一〕白石(シラシ)

海部郡濱中莊大崎村の中の方海濱を白神磯といふ、其所に白色の大巖あり、其質純白にして、磨すれば光澤出て、白蠟石の如く、堅硬なり、此白石、此磯のみならず、石脈東の方に通じて、村中の東山にもあり、昔より此石を誂て石帶に製す、和名鈔に、紀伊石帶といふ是なり、五位以上の腰帶の料に用ふ、延喜式彈正臺の條に云、凡紀伊石帶隱文者、〇中略とあり、又左大臣高明公の西宮記、及撰塵裝束鈔にも出たり、

〔東遊雜記三〕黑石にて見し、レトク三ツの内、一ツには曲玉を付しあり、(奧路圖樣にしるす)蝦夷地にも白玉は至て稀なるものにて夷人殊に秘藏せるよし、今見る曲玉は下品に見ゆ、日本にても好事家曲玉を愛翫せる人多し、京都及江州石亭大坂の蒹葭堂にても見しに、其形一樣ならず、(奧路圖樣にしるす)大小あり、制せし時代にもよるか、上品は至て美敷異の玉といふべき光り、つよくすき通るなり、色も青色を帶し、白きもあり、上世は讃州よりも曲玉に制せし石出し、予〇古河辰が見し石は異の石とは見へず、(奧路にし予が見し石は、異の石とは見へず、すべて實圖畫)世に曲玉の說多し、上世のたからものにて、今の金銀の如く安愚せし物と云、

〔甲斐國志附錄二十三〕一白堊石　宇津谷、森崎ノ間、釜無川鹽川ノ會注スル邊ニ多シ、採テ燒之、方言

灰石ト云、博物志云、燒白石作白灰、既是鍊事、總謂冷漏及水鍊、更煎熬能云々、今石灰ヲ燒
ニハ皆必要ノ燒料ヲ用ヰ、出大ニト有紋ナリ、
白堊　同郡銀山村貝塚ノ後ニ有ル青山麓ノ處ニアリ、屋壁ヲ塗ルニ石灰ニ相劣ラズ、

〔佐渡志 四五 物産〕赤玉石
加茂郡赤玉村ノ海濱ニ出ヅ、上品ナルハ一色朱ノ如シ、下品ナルハ丹黄色ヲ帶ブ、大ナルハ稀ニシテ小ナルモノ多シ、

〔新編常陸國誌 六十一 土産〕黄石
久慈郡國實村ヨリ出ヅ、色淡黄色ノ如クニシテ、硬カラズ、國人鍛ニ用ルコトヲユルナズ、コレモ青緑ノカタマリタルモノヽ如シ、

〔毛吹草 四〕山城　打鉤青石

青斑石

〔佐渡志 四五 物産〕瑪瑙
此國ノ產ナルモノ、誰レシ硯トシテ、昔日江州ノ人柚木大神ガ藏スルモノヲ見タリ、其ニ問フニ、北佳郡太郎ガ贈ルト答ヘタリ、思フニ加茂郡最崎村ニアル青斑石ナルモノ、土人小ナルヲ愛シテ大ナルモノヲ賤ム、其大ナルモノヲ硯ニ製セシト見ヘタリ、諺ニ云ゴトク、玉不琢無光シタ人知ルニ及ザルナルベシ、

花斑石

〔新編常陸國誌 六十一 土産〕花斑石
鹿島郡谷田部ノ沙山ヨリ出、小石ニシテ文アリ、俗ニハ小紋石ト云、

菊銘石

〔大和本草 三 金玉土石〕菊メイ石　其形菊花ノ如シ、是亦花紋石ノ類ナルベシ、

〔本草綱目啓蒙 五 金石〕菊銘石
南海紀州ヨリ出ヅ、本草ニ不見、紋ニ主能ヲ不知、和方金瘡丸ニ入ル事解シナリ、　石ニ菊ノ紋ア

リ、

〔佐渡志 物産 五〕浮石　方言カルイシ
雜太郡鹿伏村護王寺近邊ノ土中ヨリ出ヅ、一種菊銘石ナルモノアリ、石ニ似テ非ナルモノナリ、

〔紀伊續風土記 物産 一〕海花石 ウミノハナイシ 雜賀崎
牟婁郡海中所々より出づ

龜甲石 蛇骨石

〔本草一家言 石四〕龜。甲。石。
紀州熊野地園坂越有二一種石一、表裏俱有二龜背紋一、自二紀州武田氏一寄來、是赤花紋石一種也、

蛇。骨。
產二于和州吉野及相州箱根一、白碎石也、土人貨レ之爲二末藥一、金瘡傷處止血極效、又作州津山產レ之、按、廣輿記、楚雄府古蹟仙人骨、鎭南山有二碎石一、如二朽骨一、塡二面粉一之、以敷二瘡疾一立效、世傳仙人骨化于此云々、卽是物也、泉州脇浦寺洞亦以レ之充レ之、與二予之言一暗符、

馬骨石

〔土州淵岳志 中 產物〕馬。骨。石。
諸々山上ニアリ、色極メテ白キハ胡粉ニ製スベシ、長岡郡笠ノ川ノ山上ニアルハ望夫石ト云ヒワタフ、色キハメテ白シ、又按ズルニ、所々山頭ニ牡蠣ノカラノ岩ニ貼スルハ、カキガラニアラズ、石鍾石燕ナド云フ、燕石ニテ、形狀コタカキガラニ似タル物ナリ、當國城北鴻ノ森ノ西ニモ、牡蠣ノゴトキ石オホクアリ、

人肌石

〔大和本草 三 金玉土石〕人。肌。石。ヒトハダイシ
鎌倉ノ繪ノ島ニ人肌石有リ、寒天ニモ溫ナリ、杜陽雜編曰、唐大中中、日本國王子來朝、出二冷暖玉棋子一、多溫夏冷、故謂二之冷暖玉一、不レ由二製度一、自然黑白分焉、今按、是人肌石ノ類ナル乎、

浮石

〔倭名類聚抄 一 石〕浮石　交州記云、浮虛而輕、和名加留以之

〔箋注倭名類聚抄一石〕按文選注引、南越志、所引蓋是今無傳本、太平御覽引異充同、按異物志注、浮石體虛而輕、浮在海中、南海有之、〇是季、李時珍曰、浮石乃江海間細沙水沫凝聚日久結成者、狀如水沫及鍾乳石、有細孔如蛀窠、白色、小野氏曰、皇國山多石鍾、其浮石者、往年伊豆大島燒崩、崩島燒皆盡浮石、充滿海上、是可以磨、其體空以之磨石也、

〔多識編一石〕浮石、可留伊志、

輕石、今案於乃可多朱利伊志、

〔大和本草三金玉土石〕浮石

本草石類ニ載之、海邊ニアリ、潮ノ沫ト細沙トカタマリタ石トナレルモ、河水ノ沫モ浮石トナル、皮工コレヲ以皮ノ垢ヲスリミガク、用コト本草ニモノセタリ、甚多功能、

〔本草綱目譯義三石〕浮石　カルイシ　海南石和方書

海ニ浮ミアル石ナリ、色白ク又少シ黒ク、肌ニミツチヤアリテ重ク輕キ石ナリ、故ニ輕石ト云、集解ニハ細クナル沙ヤ沫ノ化タルナリト云ヘリ、先一通リハ沙ヤ沫ノ化ナレドモ、又山ノ石燒ケ浮石トナルコトアリ、先年伊豆大島ノ燒タル時、豆州邊ノ海邊ニハ浮石甚多流來ルト云、又豐州ノ櫻島ノ燒タル時モ、其近邊ニハ浮石多クアリレトナリ、コレ等ハ山ノ石ノ燒タ浮石ニ化タルナリ、又山ニ浮石ノアルコトアリ、江州ヤ木曾路ナドノ山中ニカル石ノアルコトアリ、故ニ沙ヤ沫ノ化スルニモ限ラヌナリ、先日本ダハ浮石ハ伊豆、豐前、相模、紀州ナドヨリ多出、其外海邊ニハ何レニモ多アルモノナリ、皮細工ヲスルニ、コレヲ以革ノヨゴレヲスルト、ナツハリト洗タル如クナルナリ、集解ニモ、皮作家用磨皮垢ト云、コレヲ以テ足ノ垢ヲスルナリ、集解ニ可以磨脚ト云コレナリ、唐ダハ名目ノアル石是ニテ足垢ヲ磨スルコトアリ、物類相感志ニ出、一種蜂ノ窠ノ如ノ大モノアルナリ、コレハ黒茶色ナリ、コレハ沫ノ化タルナリ、總中ニテハハチノス石ト

化石

云、コレ浮石ノ類ナリ、

〔採藥使記 中 奥州〕原任曰、奥州鹿角郡菅輪ト云フ城アリ、其山皆浮石ナリト云フ、或曰信州輕井澤ニ浮石多ク出ル故ニカルイ澤ト云フ、

先生按ズルニ、山中ニ海產ノ物生ルコト所々ニ有リ、江都ノ道灌山ニ牡蠣殼ヲ出シ、勢州ノ山田ノ西ニ波多瀨ト云フ山アリ、其山ニ蛤ヲ出ス、

〔毛吹草 三〕紀伊　浮石(カルイシ)　讃岐　浮石(カルイシ)

〔新編常陸國誌 六十一 土產〕化石

常陸考云、多珂郡大津鄕五浦蛇頭有鍾鼓洞、時或聞音樂之聲、土人云、是龍神所窟宅也、是日五浦蛇頭出奇石、有蛤石、大黑石等、以木投洞中化爲石、下野那須郡武茂川ヨリモ化石ヲ出ス、

〔東遊記 五〕化石溪

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり、余も彼地に遊ばんとせしかども、折節極月なりしかば、道路雪に閉られて至る事あたはざりき、その邊の人にくはしく尋問ふに、大野の城下より山道九里にして細き谷川あり、其水の流れに諸器物何にても、半月或は一月程入置時は皆石と成る、塵紙下駄草履、膳椀の類にても皆石となるとぞ、余京都にて先年木の枝に雪の積れるが、其雪ともに石となりたるを見たり、又半紙疊束をわらにてつかねたるが、其わらともに化して石と成りたるをも見たり、是皆此谷にて作りたるものとぞ、其頃思ひしは、極陰の地ゆゑ、水中に寒氣の時久敷漬置て、石と化するにやと考へしが、左にはあらず、夏日にても同敷石となるとぞ、それはいかにして化することぞと委敷尋究るに、谷川の水上より沫のごとき物流れ來りて、漸々に其物に粘着して石と成るとぞ、然れば其谷の奥に玉液有りて流れ出、物に付て石となるにやと思はる、蝦夷諸國の事を書し書を見し事の有りしが、其中にも蝦國

の内に鉱物の石に化することを載せり、此谷も其類にや、

〔甲斐国志　百二十三物産〕貝化石　河内領中山鉱村ノ山麓ニアル者ハ、堅キ石ヲ割レバ、其内ニ種々ノ貝殻ヲ化石ヲ〇如ク粘著シテアリ、黒金山ヨリ出ルハ、蛤蜊蚌蛤ノ化石也、又鎧土中之、其中ニ魚骨如石ナルアリ、亦堅重金ノ石ニシテ、片面ニ巻貝紋モノアリ、

〔駿陽産物名寄　上下〕子安貝石
大沢郡深川村ノ内堀川十輪山観音ヨリ行程十五町ホド、

〔紀伊続風土記　物産六〕鉄錆石　俗称いしかね
牟婁郡二川郷石垣村に産す、土砂結して石となる物なり、黄褐黄色にして、黒き條上り、頂に水の湧上る如き紋あり、故に名づく、

〔増訂豆州志稿　十三〕鳴水石
仁科郷村ノ汁浜多喚大平良石ナリ、是レ細砂凝結シテ成ル、其中ヲ開レテ水ヲ入レ、蔵レテ煎茶等ニ用フ、

〔見聞雑録〕鏡石
我昔先年使を奉じて、信州をめぐり、鏡台山に登り見れば、鏡石と云ふあり、鏡台の説一様ならざれども、鏡石の事みえず、近頃[illegible]と云ふ書を見れば、宮氏の説を挙げて、鏡石の事あり、その文左の如し、土人この説によりて、鏡石と云ふとみえたり、
鏡台山と申し侍るは信濃国にあり、昔衆尊のやうにて装ひたてる鏡を、妻のいふにつきて、其の男の月あかゝりける夜ゐて更科山に登りて捨てたりしより、鏡台山とは申すなり、其鏡の留金屋に石になりけるとなん、是は二条の宮氏の説なり、

〔大和本草　金玉土石〕松石　本草綱目不載木ノ附録ニアリ、松久ク化セク石トナル、亀頭弘代跡国

アナノキ石
シアノキ石
櫻石

十寒、松化シタル石ヲ記ス、白孔六帖ニモ見エタリ、日本ニモ多シ、又諸木ノ石トナルアリ、筑前州名島ト云處ノ海濱ニ、神功皇后ノ御船ノホバシラ石ニナリタルアリ、越前敦賀及佐渡ニプ。ナ。ノ。木。石。アリ、椋石アリ、皆是木ノ變ジテ石トナル也、近江ニ土。ノ。石。トナレル川アリ、

〔重修本草綱目啓蒙石五〕不灰木、附錄松石、マツイシ
一名松化石雲林石譜　康干石書書
松ノ木ノ化石也、本邦諸國ニアリ、就中九州ニ多シ、武州瀧上長榮山本門寺ニ松樹全身石トナルモノアリ、城州嵯峨大井川ニ松ノ化石アリト云ハ非ナリ、石ニ木理アリテ、松木ニ似タルモノナリ、又松脂ノ化石アリ、形色全ク琥珀ニ異ナラズシテカタシ、是石珀ナリ、紫苑群註ニ曰、僕骨東境、其地東北千餘里、有康干河、松木入水一二年、乃化爲石、其色青人謂之康干石、仍有松文、增、越前大島山ニ鑛泉アリ、此水ニ材木ヲ浸シ置タトキハ、石ニ化ス、松材最化シ易シ、又筑前粕子郡長谷山ノ土人松木ヲ伐リ山中ニ置ケバ、久シテ石トナルト云、

〔佐渡志物産五〕化石
松ノ化石ハ、羽茂郡新保村柳澤村ノ海邊ニ多シ、皆大石ナリ、又雜太郡橘村ノ海中ニモアリ、シ。デ。ノ。木。ノ。化。石。ハ、羽茂郡大杉村杉野浦村ノ邊ニ多シ、貝。ノ。化。石。ハ雜太郡戶中村平根崎トイフ海中ノ出岬ニアリ、一種小貝ノ化シタル玉質トナリタルモノ、羽茂郡澤手村ノ山中ニアリ、此數品ハ堅硬ナルモノナリ、又木。葉。石。鮎。石。ナド、云モノ所々ニアレドモ、石ニハアラズ、土ノ塊リタルニ其形陰々トシタ現ル、ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙石五〕桃花石○中略
增、丹波柹花ノ山中積善寺天滿宮ノ祠ノ邊ニ櫻。石。ト稱スル石アリ、其質黑褐色ニシテ、白色ノ櫻花片アリ、傳言コレヲ佩レバ雷ノ難ヲ逃ルト、土人其祠ヲ櫻天神ト云フ、又雲林石譜云、韶州桃花

石出,土中,其色紺紅紫明瑩可愛、黒成其紋ヨリノ品質重ク堅ク、蟹石ノ類ニシテ、文

蟹成ハ水注ニ造タル者、蟹石ニ養ヒ來ル、黄紅色ニシテ白斑點アリ、本條トハ別物ナリ、

〔新編常陸國誌〕十一 蟹石

多珂郡名古曽關ノ邊ヨリ出ヅ、蟹之化石ナリ、國家朝臣歌ニ、吹風モナコソノ關ト思ヘドモ道モセニチル山櫻カナ、又一種アリ、多賀郡ノ蟹川ヨリ出ヅ、蟹石ト云、又蟹川石トモ云、土人採テ硯ニ作ル、石色白クシテ斑アリ、質堅シ、

〔本草綱目啓蒙〕七 石燕

燕石ナリ、舶來ニ古質ナリ、石ノ形赤貝ノ如クシテ文ニヒダ多シ、赤貝ヨリ小ナリ、堅レタ膽黒シテ、少シ光アリ、小ナルハ三四分、大ナルハ一寸不足、ヒダニ細密アリ、又二ツ三ツ集リ付タアルアリ、紋縷アリ、中間モヒダ細クナリ、小ニシテ立ニ長ミアルガ雌ナリ、時珍ノ説ニ圖大者爲雄、長小者爲雌ト云ハ誤リナリ、本草彙言ノ説ハ、時珍ニ反シテアリ、彙言ニ從フヨシ、和産モアリ、尾州ノ宮ノ濱レノ海邊ニモアリ、熊野ニモ大和ニモアリ、

一名 陽燧圖子 鐵天蝶

〔重修本草綱目啓蒙〕石燕 一名鐵天蝶 陰陽圖書

形蝦介ノ殻ノ如ク、縱文アリテ堅レ、色淺褐紫黒、又二三相結スルモノアリ、ソノ形横ニ廣クシテ、大ナル者ハ雌ナリ、縱ニ長クシテ小ナル者ハ雄ナリ、本草彙言ノ説及本草原始ノ圖ニ從フベシ、時珍ノ説ニ圖大者爲雄、長小者爲雌ト云ハ非ナリ、藥舖ニ賣ルモノハ皆舶來ナリ、和産ハ尾州宮ノ海邊濃州紀州和州藝州ニモアリ、

増、土州ヘタハズハマグリ、一名イシハマグリト云アリ、蝦蛤ノ形チニ似タ、黄褐色ニシテ、横ニ細キ縱紋多ク、蝦蛤ノ瓦屋ノ如クナルト異ナリ、大サ一寸半、或ハ二寸許、常ニ口ヲ開クコト一

二分、中ニ淡黒色ノ瓦ノ如キモノ滿ツ、形ハ介ニ似タレドモ、其質石ナリ、本草達ニ、石蠶如蜆蛤之狀、色如土、重如石ト云是ナリ、一種玩石家ニ雲龍石一名カラタチ石ト呼ブ者アリ、阿州勝浦郡傍爾村ノ山中、蛇ガフトコロト云處ニ產ス、其質青黒色ニシテ、カラタチノ如キ紋アリ、長一寸半、幅一分餘、形半月ノ如クニシテ、白色甚ダ鮮明ナリ、鋼タチアフヒト云介ヲ石中ニ抱キ化シタルモノナリ、ソノ介側ノ壁ノ如キトコロ、濱潤象木ニ磨セラレテ、自ラカラタチノ形ヲ成スナリ、又同山中ニ介形石ト云アリ、介ノ形雲龍石ニ同ケレドモ、ソノ介已ニ脫シテ、獨リ空竅ヲ多ク存スルモノナリ、縱橫ニ碎クトモ亦然リ、共ニ奇品ナリ、

〔大和本草 金玉土石三〕木葉石　其石ノスヂメ木葉ノ如シ、會津羽黒山ノ北ノ麓、筑紫宗像大宮司宅ノアト、信濃善光寺ノ近所榊ト云處ニ、何レモ木ノ葉石アリ、其外諸州ニアリ、ワリテ中ニモ同紋アリ、硯ニスベシ、是花紋石ノ類ナルベシ、

〔甲斐國志 附錄百二十三〕一木葉石　都留郡初鹿驛ニアリ

〔新編常陸國誌 土產六十一〕木葉石　那珂郡東野村野上村寺田村ヨリ出、兩夜話ト云隨筆ニ、那珂郡野上村ト、上寺田村トノ境ノ山中ニ、笠敷山ト云所アリ、此所ハ餘程高キ所ニテ、此近邊東北ノ山々見エ渡リ、ヨキ景ナリ、然バ往還ノ人モ、笠打敷タ、爰ニ休ミ、眺望スルノ心ニテ、笠敷ト云、然ルニ此山ノ峯々ニ、岩ソビヘカカリシヲ、打タダキ見レバ、石ノヘゲタル所ニ、木葉ノ形オレタル樣ナリ、顯然トアルナリ、打割見レバ、又石ノ如レ、シカレ笠敷山ノ外ニハ左樣ノ石ハコレナシ、此山嶺ノ内バカリナリ、

〔愛媛面影 一 野間郡〕木葉石　我國木葉石を出す所多し、明河山より出る物尤奇品なり、此石の出る所は海上と云所にて、そこに豐巖權現祠あり、祠前に一石有て、側盤にはかならず潮の滿干あり

と云傳へたり、嘗て試るに、鹹味あり、と山路もいひたり、又儒醫士齋木某、紀州文士祇園南海に一顆を贈しに、南海詩を作て是を謝せり、且記文一篇有り、左に録す、

木黒石出雲州周布郡[illegible]之下、掘深千尺、土人謂[illegible]采、是以不可多獲云、其質頗細膩、灰黒色、[illegible]之片々皆謂木理、大者大五六寸、有[illegible]三五枝黒色[illegible]、表裏細文紋理[illegible]、適有[illegible]、彷彿如[illegible]、[illegible]曲屈之所有[illegible]、[illegible]可[illegible]也、[illegible]氏本草本[illegible]云出[illegible]州黒花紋石之類、不知其所言與此州出者同異如何、然其黒花紋石者亦不然、黒花紋石其紋自異、非木[illegible]化成者、李時珍所謂石之石注者皆自生者、[illegible]之類耳、若木黒石乃化成者、非其形然生、[illegible]谷陰[illegible]土偶變之久、遂土自[illegible]、成石、是本[illegible]化耳、其質[illegible]已化、形質猶舊、所以[illegible]之有[illegible]、其石[illegible]石[illegible]石自化者異類同[illegible]、嗚呼造化之妙不可測、[illegible]其理固不可[illegible]也、（中略）予於木黒石、亦有感焉、[illegible]以謝之、

延享二年清明前一日　祇園阮瑜記

彼此土ゟ[illegible]野等の[illegible]有て埋れたる木屋の久くして石質に化せるものならんか、

〔毛吹草〕三山城　清閑寺木石

〔大扶桑國考〕己上、中　[illegible]いにし年京都に物して、愛宕山に登上りて、[illegible]元より此山は疑なく檜栢の類なる大樹の立ながら化れる山なる事をまづ知りたりき、しか[illegible]（[illegible]）なり、然して紀伊國に物して、和歌山より伊太祁曾神社に詣けるに、其宇途より[illegible]々なる小山は更なり、道の長道も大抵は、一面の平石を敷たる如くなるを、熟々観れば、其小山また行く道の平石も、みな木化石にて、中にも楠木の化せるが多く、また道のほど半里許りがほど、右方に岳の崩けるを見れば、赤石にて、其を甲へる土の赤きを見るに、其また何木ならむ、赤色なる木の化れる岳にて、其中心は石と化り、外邊は赤土と化れるなり、（[illegible]）

芝石

てに、此も木の化れる山ぞと云ふに、信がてなる者も有るを、行つゝ見るに、岩の間になるを見て、其石に化はす、木も質を存して石に這なれるが有るを欠取りて、火に燃し試るに、皆の出るを見て、其者も始めて木化石なりと知りき、其にも今もいまいかりて持て有り、また和歌ノ浦に物して見るに、其一浦壹く綸木の一本その隨に化せるにて、其根は海底に深く廣くとほりて見ゆ、然して玉津島明神の坐す山を見るに、此は見紛ふべくも無き、松の大木の立ながら化れる山なり、皆なりし所、枝さしたる所など有のまゝに見ゆ、人々躍で見て知るべし、此ノ浦見遊れる時に、若山の殿人も國人ばかり伴ひたる、和歌浦なる平石こそ、綸木の化れると、木ノ國ちふ由緒など語るに、此山は松木ぞ、信る人も有りしかど、信ずる人も有けり、然れども國人も此山を、松山とぞ云ふなる、其はその木のまゝに見做されば、なり、新ても此邊の、綿なれど見て十人も、此山とも云へりと、始めて知たりき、其は觀に一筆に、紀に書き錦と言なり、新ては綿じく水化石なる故に、さて大和を經りて、伊勢國に出て、外宮へ參りて、内宮の方へ其が賤しく木の色なる由けり、參るに、外宮の社地より、謂ゆる天岩戸と云ふ邊へ行く處まで、一綸木の横はれる化石なり、後ノ二見浦も一綸木の、根は海に在りて、陸に出たる所は、山と化れるにて、大小二つの謂ゆる立岩も、その連きの欠て奇しく並立たるなり、凡木化石を見るに、常に種々の木理を見知り居て、其の石を熟々見には、大抵にこれ木の化れる石ぞと云ばかりの事は、國にも見留めらるゝ物なり、古事に意じ人には知いる事までに必々思べし、大かた余が見通れる國々の中に、木ノ國ばかり木化山の多きは無し、此は殊に深き由ある事なり、然の國々にも木化山は無きにあらねど、木ノ國のごとくは有らず、

〔蒹葭堂雑録〕芝石之事

西國に芝石と云ふものあり、京師にては人々木葉石と云ふ、石中に自然に木葉の紋あり、栗葉の如き物宛然たり、其石の色、褐紫色にして理麁なり、先年牛山老翁、一塊五七寸なるを贈らる、夫には蛤蜊殼石に成りたるが付けり、筑紫には處々にありと云へり、中國物産の諸書にも、此事ばかりは見當らず、頃日皇明文徵を檢するに、都穆が遊王喬洞記云、新安有王喬洞、洞在縣西廿里、石皆土所成、而樹之木葉形、交錯其間、文理具在、若影剜者、靈山石皆然、洞之上二木亦皆化石、而復產枝葉、與凡木類、予見之乃大駭、以爲寫遊圖之所未有碑言、昔神仙大丹之成、土木皆化爲石、其說似爲得之、此に依りて見れば、中國には其珍らしきことにて、定まりたる名稱もなし、因りて神仙の所爲な

と、其體を付くるなり、蓋思ふに、天地の陰陽の二氣、絪縕變化して、柔なる物變じて堅く成り、軟なる物凝りて塊となる、然れば土地の性により、或は陰陽變化の時に因りて、柔なる者木葉魚介の類の如き、水土と、もに變じ堅剛の石となると見えたり、本邦備前に熊山と云ふ處あり、其山白石を出だす、此石割破みて器物に造るべし、或は雲霧の紋理あり、或云滑石なりと、

〔大和本草〕三金玉土石 石蟹

三才圖會引石蟹出南海、今嶺南近海州郡皆有之、體質ハ石也、而都ク與蟹相似、或云是海蟹多年水沫、相著化爲石、今按ニ本邦諸處ノ軟石ノ内往々有之、蠣石燕ノカタクタル中ヨリ出ル事アリ、其石ハ細砂土ノカタマレルニテ、蟹ノ其内ヘアリシガ、其ニ化シタ石ニナリタルナルベシ、蟹ノ細沙ノ中ニアリテ不意出シテ石トナル時、諸本如此ナルベシ、

〔本草綱目啓蒙〕三十一石蟹

タハイレ　生タル蟹泥中ニ入リテ石ニ化シタルナリ、ソレハ泥土ガ石ニ化スル故ニ、中ニ居ル蟹モ共ニ化スルナリ、ソレハ蟹ノミニ限ラズ、貝ヤ虫ヤ魚ヤ木ノ葉花ヤ、骨胴ノコトナリ、石蟹モ大ナルハ一尺ナルモアリ、小ナルハ一寸位ナルモアリ、手足悉モ全ク備ワアルモアリ、半身アルモアリ、甲計リアルモアリ、爪計リアルモアリ、堅キ石ノ中ニアリテ、破リテ出ルアリ、又出テアルモアリ、コノ包ミアル石ハ甚堅キ石ナリ、石蟹和産アリ、漢ヨリ渡ルアリ、漢ノハ灰色ニシテ堅キモノナリ、長サ二三寸、巾一寸位ニシテ、脆キ石ナリ、小刀ニテタタブレバ中ニ蟹アルナリ、コレモ全身ナルモ半身ナルモアリ、和産ハ諸國ニアリ、備前日向讃岐尾張ノ日間賀島、越後ノ糸魚川、紀州住吉、信州アルガ峠、常州、防州、丹波、伊勢鈴鹿ノ貝石山、若州瀬井濱、作州其外方々ニアリ、諸々ニテ形異ナリ、胎ロタ蛤ノ石化シタルヲ石蛤ト云貝ナリ、田螺ノ石ニ化シタルヲ石螺ト云貝ナリ、コレ等ノアル處ニハ石蟹モアルモノナリ、又蠏ノ石ニ化シタルモ日向ニアルナリ、又石魚ト云ア

リ、コレハ魚ノ石ニ化タルナリ、石ヲ破レバ内ニ魚ノ形アルナリ、石魚ハ一名魚龍石トモ云、雲林石譜ニ出、宇治ノ宇治ダワラト云處ニ、鱸ノ石ニ化タルアリシコトアリ、又壹岐ノ國ノ勝本(カツモト)ノ海邊ニ、屛風岩ト云アリ、コノ處ニハ木葉ノ化石多シ、コノ石ハ柔カニシテ、ヨクヘゲル石ナリ、コノ處ニハ色々ノ石アリ、香魚ノ化石アリ、コレハ全身カタ石ニ付テアリ、又伊豫ノ襄府ガ嶽ニモ木葉化石アリ、コノ處モ石魚アリ、豐後ノ粟野ニモ、魚紋石多シ、和名ナリ、魚ノ形魚付テアルナリ、川筋ニアル丸キ扁キ石アリ、コレヲワレバ中ニ魚ノ形付テアリ、又ウナギノ形ノ石アリ、コレハ長州尾州ヨリ出ルコトアリ、其外諸國ヨリモ出、

一名　乳石本草彙言

石蠶

〔本草綱目譯義石十〕石。蠶。

スクホンノ形ノ石ナリ、和産知レズ、舶來ナシ、又蠶ノ石ニ化タルコト唐ニモアリ、北戸錄ニ、年代錄云、石季龍時、荊州綿谷縣山北濱中、有石蠶數千頭、璧山中、桑田苗、遂軍殘毀、至今蠶無顆毫云ナリ、コレハ蠶ノ直ニ石ニ成ルナリ、本條トハ別ナリ、

燒米石

〔大和本草金玉土石三〕燒米石

粳米ノヤケタルガ、地上ニアリテ石ニ成タル也、昔穀倉ノ燒タル地ニアリ、諸州ニアリ、伯耆國汗入郡名和莊名和伯耆守長年ガ宅ノアトノ土中ニモアリ、瘧ヲ患ル者一粒ヲ發日ノ早旦ニ水ニテ飮ム、ヨク愈ユ、酉陽雜俎十卷、燒米乾圖ニ、昔尸毗王倉庫爲火所燒、其中粳米燋者于今尙存、服一粒、永不患瘧、三才圖繪人物十三卷乾圖作乾陀國、

〔土州淵岳志中産物〕燒米石

香美郡佐古村ノ山中島ガ森ニ古城アリ、昔シ此地敵ノ爲ニ城ヲヤカレタ、兵糧ノ燒タル者ナリト云、大和本草ニ、伯耆國名和伯耆守ガ宅ノ跡ノ土中ニモアリ、瘧ヲ患ル者、一粒ヲ發リ日ノ且ニ

木ニタノム、ロク生ニ此ト云フ、

〔寺社談二〕嵐山鍾乳石

嵯峨嵐山のうへ十八丁に、永正四年細川右京大夫政元が家人香西又六建むし、こゝに城を設しほどなく香西又六亡し後、こゝに其質せしとりにおきし兵糧米の積うせしが、年へて石に化せしものあり、諸国ともに古き城跡にはまゝ、焼米石焼麦石出ることとなり、予□□□□も十五六歳の頃物産者香蕉東園と共に、嵐山の此の頃こゝにいたりさぐりもとめ得しなり、薬品に用ひて薄効あり用ひ試たることとなり、山下の大井川に木化石ありて、好事のともがら拾ひもてり、このわたり化石の産所なるべし、天龍寺の後山に石炭あり、

〔朝野群載二十一〕石呪

駿州府出馬野郡賈文、今患者患瘡攻於諸達之小石畠肥家、則其病果寳、而後他所拾之石又患一両石寳於国鬼犯するにもあこしにも、時後方云、此家為書呪法、曰執一石於水洗一夜呪云、替留國々、行路赤□取鬼急如律令、投於水不得顧見、とあり、

〔嶋陰叢書十二〕馬石記

去文化乙亥年十一月二十二日、白井君之愛馬石黄を生ズ、其形玉の如く、其色雌黄の如くにして、光有、今年丙子の春二月に携へ東都に来り、此一物を見るに及んで思ひ出せる事あり、寛文年中、豊州杵築城主松平家の城主細川家次郎左衛門藤原貫基一馬あり、此馬貫基が先祖より相続して飼養する駿馬にして、鹿毛と名付、長八寸に餘り、其価貴重なる事を知らずといへ共、健實なる事、本朝の生嘽(?)櫪(?)塲(?)の八駿九逸十駿の名馬にも劣るまじと、常に賞美したると也、ある夜貫基夢らく、彼馬来て曰て、我腹中に一玉を蔵、丈我壽巳に久し命且夕にあり、こゝを以、君に帰て、願くは君の子孫をして長久ならしめんとて、夢巳に覚たり、彼馬果一玉を得て、兩鏡の玉と號、珍蔵せしが、

兵火に遇といへども、終に逸亡せず、家益繁榮せり、代々至寶として傳來する事年久しく、藤家四郎左衞門資國の代に至て、猶武運長久のため、彼玉を讃州香西万福寺江奉納せし事、其家の馬玉の記に詳なり、則其記を模寫して奉呈す、且鵝鹿毛の事を評するに、彼馬玉は、死馬を割て得たりと云、今この馬石は、生ながら出產す、益珍重なるべし、其至寶なる事、鵝鹿毛の玉に增らん、彼馬玉の記ニ、和漢にて鮓答と云、天竺にてヘイサラバサラと云、或は旱魃に雨を祈ると驗あるなど云へる事あり、猶石糞の餘論あらば、記錄せよと固辭して命を得ず、愚が管見の淺きと、文筆の拙きを耻や、見聞の一二をあげて左ニ述ぶ、

按ずるに、石糞と稱するもの、馬墨と云、鮓答といふ、馬石と云、赭丹と云、遮伊佐良波佐良と云、或は鮓答石糞石矢の異名あり、今其出所を尋るに、本草綱目に、李時珍曰、鮓答生走獸及牛馬諸畜肝膽之間、有肉囊裹之と、東都馬醫の達人菊池武健、石糞の諸說をあげて云へるの文に、馬墨鮓答一物、生于馬胃中、日本云石糞、蓬軍目錄云、一名赭丹、紅毛云遮伊佐良波佐良、其形如牛黃者、因五塊疊結、成大塊、在于胃中、實如鼠魚疊合、鮓荅之名宜哉と、千野春岡道人の記に、鮓荅は諸獸の病塊也、始て出賴時餧、蓋又胡語也、馬墨馬石牡馬不得牝者、淫氣不能遂、濁精日積月累、凝結成形ト、又武健著すところ石糞矢辨と云へる書に、又有一物、名毬糞、其形如結毬、其大小色樣似石糞、鑿破面裏又如毬、若誤食砂石及代赭、而胃不能消化、再被日集結、逆成其物也、毬矢者因毒熱、石矢者因實熱、皆變異之塊、火氣猛烈、則生硬塊、火氣帶水氣、則生軟塊と見へたり、又此物を以て雨を祈るの說、武健の書には、杜撰可笑と見たりといへども、出所なき妄語にもあらざるにや、

〇按ズルニ、鮓答ノ事ハ、動物部獸篇獸總載條ニ詳ナリ、

〔雲錦隨筆　三〕大和國城上郡三輪明神の社頭の土砂の中に交りて、茶磨石と云へる小石あるよし、雲根志に見へたるを以て、彼地を遊歷の時節、社家に便つて此事を尋ねしが、幸ひ豫て拾ひ得た

る石ありとて予に與へられたり其色白く石質の如くにして上下平なり周圍圓く凡そ高さ一分半さしわたし一分半の丸にて、眞中に穴あり、實に奇なる物なり、永く所持せしが、近來畫師松川半山子に讓り與へぬ、

沙土

沙土ハ沙ト土トナリ、沙ハスナト云ヒ、古クハイサゴ又ハマナゴト云ヒ、其纖細ナルモノヲマナゴトモ云ヘリ、沙ニハ更ニ種類ノモノアリテ、金沙、銀沙、丹沙等ハ有名ナリ、而シテ丹沙ハ一ニ辰沙ト云フ、辰沙ノ事ハ金石部水銀條ニ載セタリ、土ハツチト云フ、土モ亦其色類異ナルモノハ、皆種々ノ用ニ供セラル、而シテ石灰ハ、石又ハ貝ヲ燒キテ作ル所ナリ、

〔新撰字鏡石〕砂沙〈同所加反、平、眞砂也、伊佐古、又須奈古、〉

〔倭名類聚抄一石〕砂　說文云、砂水中細礫也、所加反〈字亦作沙、以佐古、〉

〔箋注倭名類聚抄一石〕眞佐誤、見神功紀、讀之與散、新撰字鏡訓伊佐古、又須奈古、谷川氏曰、以佐古石小子之急呼、按同奈古蓋謂之子之轉、今俗呼須奈、〈中略〉按廣十卷、按本並類聚引書、今無傳本、按說文、沙水散石也、砂即沙俗、

〔倭名類聚抄一石〕繊砂　日本紀私記曰、繊砂〈萬奈古〉繊細也、

〔箋注倭名類聚抄一石〕万奈古、繊細也、本書神代紀上讀此、所引恐是古事記、作眞名子谷、與此所引私記訓合、眞渠猶作眞名子、麻奈古或假借愛子字、是亦可、用其訓眞奈古、万奈古、又見萬葉集沙鹿島社、按讀繊今訓眞沙眞奈古、今本本書紀訓眞左已、非是、按眞奈古、蓋眞須奈古

之省、或謂万左己、亦異須奈古之急呼、或異以左古之義、異稱其纖細也、

〔類聚名義抄 六石〕砂 音沙、イサコ、スナコ、俗沙、

〔伊呂波字類抄 須地儀付居處井屋宅具〕砂 スナコ マサコ

〔日本釋名 中水火土石金玉〕砂 いさご いさごよくこまかなる也、まさことは白砂のみにて、土のまじらざる正眞のすなご也、又すなごとは、すなは小也、すこしきなる也、こは粉也、細也、

〔東雅 二十地理〕沙スナゴ 太古の語には、スとのみ云ひしと見えたり、沙土根と申す神おはしましき、洲をスといふも、又これによれる也、イサゴといふは、石によりていひしなるべし、小見の細石をイサゴとよぶ歟 ナアリとも、イソナゴアリなどいふが如き成なり。 またマナゴとも、マサゴともいふ、古の俗、凡物を賞せし詞に、マといひ、マナといひし事多かり、眞冨黒沙にも、マナゴ地といふはうつくしきをいふ但といへり、眞の字を讀てマともマナともいふ、ナゴ、サゴなどいふは、其纖細をいひし詞なるべし、

〔倭訓栞 前編十二〕すな 砂をよめり、洲に生の義にや、すなごともいふは、砂子の義にや、新撰字鏡に淺もよめり、鞠ノ庭に乾きすなごを用意する事、徒然草に見ゆ、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作島、本名上津島、此島坐阿波神、是三島大社本后也、(中略)又南海邊有一石室、各長十許丈、廣四許丈、高三許丈、其裏五色稜石屏風立之、巖伏波、山川幾等、其形微妙難名、其前頭來細軟障、即有美麗濱、以五色沙成條、又南傍有一磯、如立屏風、其色三分之二悉金色、炎曜之狀、不可敢記、

〔百品考 下〕彈子窩石 和名ゴシキズナ(中略)

丹後鹽井ニ五色濱ト云處アリ、巖下ノ小石海水ノ爲ニユラレテ、其形正圓ニシテ、芡實ノ如ク、豌豆ノ如シ、大ナルハ彈丸ノ如キモアリ、青、黄、赤、白、黑、褐、紫等ノ色ヲ具フ、又相州大磯ニモ產ス、其他ニモ產スル處アリ、雲林石譜ニ載ル處ハ、其中ノ白色ノ者ヲ擇スナリ、

金砂

〔毛吹草 四〕攝津 諸國名物 住吉濱砂 備中 帝釋天盆山

〔大和本草 三 金玉土石〕備後砂

備後三上郡會野ノ濱邊ニアリ、鮮白ニシテ可愛、以盛置硯之、亦盆石庭用、水面其光彌潔白、得之者賞其上之、又肥後州ニモ赤濃有之、

〔毛吹草 四〕攝津 住吉山細砂

〔新編常陸國誌〕白砂

多珂郡沙畑村ヨリ出ス、以テ物ヲ磨クベシ、故ニ國人ミガキ砂トモ云、僅ヲ出アマレバ採コトヲ許サズ、

〔經濟使記〕云、重寶曰、河州石川郡二上ノ嶽ハ金剛砂ヲ出ス、先年始ハ金剛砂和州葛下郡逢坂村ニモ出ヘ、大平五年九月、大坂ノ沙ヘタ玉石ヲ磨ヌト云物是ナリ、

〔續毛の錦 一〕京師より伊勢の國にかよひて、物あきなふものあり、年のおはりに、御庭の砂を紙の袋にいれてまたしきもの、かたへおくりぬ、伊勢のものそれをうれしくおもひ、京師よりくだるを待うけて、家々にとゞめてあつくもてなし、交易たとあまたしてとくつきたり、年月へぬるうち、一とせ砂袋を忘れて、家を出ぬ、近江の國にてふと思ひ出しまゝ、路のかたへにある砂をとりて、紙袋にもりて、御庭の砂なりとて、かのまたしきかたへおくりぬ、皆いつはりとはしらで、悦びうけぬ、そのあくるとし、また伊勢に下りければ、またしきかたのものみな〳〵そのものを入ずし、去歳の砂は我々をあざむきしなり、かゝいつはりある人は、えこそ留まじとてこばみけり、あざむきし者はこれともえいはで、大に恐れをぞなしける、

〔土州淵岳志 中〕金砂

長岡郡豐永郷黑ノ谷ノ一ノ谷ノ川上ヨリタマ〳〵金砂流レ來ルト云フ、極メテ少ナレ、若狹

鐵砂

水ノアトニテ、潮水ノトキニ、里人之ヲ得ルト云フ、

〔大和本草 金玉土石 三〕鐵砂

黑色ニ光アル砂也、相模ノ大磯、又越後出羽等諸州ニアリ、物ヲミガクニヨシ、コレヲ多クアツメテ鐵トス、眞金ト古歌ニヨメルハ鐵ナリ、

〔甲斐國志 附錄 百二十三〕鐵砂　岩下ノ兜岩、又荒河、笛川ニモアリ、璧ヲ飾ルベシ、

〔增訂豆州志稿 七 產物〕鐵砂

內浦仁科邊海濱ノ山ニアリ、新島三宅島等ニハ尤多シ、

〔土州淵岳志 中 產物〕鐵砂

スナハチ、クロガネ山ノ砂ナリ、土州處々ノ山邊ニ多シ、幡多郡ニ出ルモノヲヨシトス、板ニスリツケ、又ハ木ノ木口ニツケテ、木刀摺刃ノルイヲミガクニ見ゴトヒカリヲ生ズ、

〔紀伊續風土記 物產 一〕砂鐵 天工開物

牟婁郡尾鷲鄕ニ產す、盆石にそへて觀美なり、

蓬砂

〔大和本草 金玉土石 三〕硼砂

蓬砂 同 二種アリ、透硼砂、油硼砂アリ、紅毛人持來ル、油アルニハ毒アリ、近キ比長崎ニテ油ヲヌク、油ヲ去レルハ白ク青シ、明礬ニ似タリ、油アルハ黑青黃色ナリ、和漢ノ工人硼砂ヲ以テ五金ヲ柔カニス、

〔重修本草綱目啓蒙 石 六〕蓬砂　ホウシヤ　一名旱水晶 綱目拾遺

和產ナシ、舶來二種アリ、一ツハ白色透明ニシテ、生礬ノ如シ、コレヲ透ボウシヤト云、上品ナリ、藥ニ入ルベシ、時珍ノ說ニ、西者白如明礬ト云是ナリ、本草原始ニ官硼トモ白硼トモ名ク、一ツハ青微黑色ヲ帶ク膩潤ナリ、コレヲアブラボウシヤト云、金銀銅器ヲ銲ニ用ユ、藥ニ入レズ、時珍ノ說

沙　土

一向ニ青黄白色錯雜ト云是ナリ、本草原始ニ青礞ト名ク、

硇砂、時珍曰、硇字從石、引嶺表錄、有時珍說出賀州山中石窟硇砂、亦大鹽硇砂、俗呼爲時珍藏者也ト云フ、

此說ニ從ベシ、

硇砂ノ眞僞ヲ試ルニ法先ヅ少許ヲ炭火ノ上ニ投ジ、燒ノ礬石ノ鎔化スルガ如ク、硼砂ノ如ク疏ク、炭火上ニ粘著スルモノヲ眞トス、

(毛吹草三)山城　鷹尾土砂、[illegible]

(雍州府志六土産)土砂　處々山有之、就中古時律僧取鷹尾山之土砂、以清水洗淨數遍、然後誦光明眞言、誦土七晝日夜加持之、是謂土砂加持、傳言、以加持土砂少許、於新死之尸、則其筋骨軟、雖經日不殭直、有便於納棺内也、

(倭名類聚抄)土　[illegible]

(伊呂波字類抄都地儀)土　ツチ

(神代巻鹽土傳抄)つちといふはひぢき、略せばき轉いやしき轉くだる轉、國儀をなはりて、陰道の義をあらはす、つちをちといふちは分轉にて、下の義なり、ちに闢をあめといふは天よりふるゆへに、天のことばを、そのまゝかりていふ、土をつちともいふ、これ又かりていふことばなり、

(東雅二地理)土ツチ　上古の語にヒヂといひツチといひ、フとといひ、赤ハニともいひけり、ヒヂといひしは泥沙之土をいふなるべし、泥土といひ、沙土といひしが如き即此也、水漬す所の土をヒヂといふなり、古語にヒヂといひヒヂチといふ、皆これ漬也、[illegible]漬をいひて、ヒヂといふは、泥をいひてヒルといふの反語なる也、[illegible]又ハニともいひしは、倭名抄に埴の字讀てハニといひ、釋名を引て土黄而細密曰埴と注したり、ハニといふ義詳ならず、古語にニといひしは、粘する義にして、ニといふ語轉じてヌ

といひ、ネといひ、ノといふ、赤黃黏するの義あるなり、說文に據るに、埴は黏土也と見えたれば、我國にしても、黃土を呼びてハニといふは、其黏じぬるをいふに似たり、埴をヘニといひ、黏をネヤニといひ、凡物を塗るをヌルといひ、黏るをネルといひ、黏をノリといふ、皆これ黏着の義にてあるなり、また黃櫨の字、ハニシと讀み、今の黃櫨也と注す、世にヘゾ色といふもの、卽此にて、黃色を染る木也、ヘニシといひ、ヘロといふ、異なる字にはあらず、たゞヘニとは土師の字ヘニシとい、ヘロとも讀むが如し、ヘニヘといひ、ヘロといふ、并にヘニの轉訛なり、又舊事紀、日本紀等に見えし天梔弓といふものは、古事記に天之波士弓とし るせしものも、これはタチナレの木をいふにあらず、桑の一年、樨なきを梔といふと見えし、山桑の木也、山桑をハゼといひしも、其木の色の黃なるによりてなり、すべて是等の如きは、黃土をハニといふによりて、其色の黃なるものをば、ハニシといひ、ハゼともいひし也、土の字讀てハニといふが如きは、黃土の名によりて、汎く土の事をばハニといひしと見えたり、古今の間に、かくの如くに相轉じていふ言、いくらもあるなり、よくよく心得べき事にや、

〔倭訓栞前編十六〕つち　土地の音の如くいへど、大地はいづくまでも一土塊なれば、つゞきの義、つき反ち也といへり、

〔古事記傳三〕地は都知なり、名義は是も思ひよれることあり、下に云べし、さて都知とはもと泥土の堅まりて、國土と成れるより云る名なる故に、小くも大きにも言り、小くはたゞ一撮の土をも云、又廣く海に對へて陸地をも云を、天に對へて天地と云ときは、なほ大きにして海をも包たり、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕徘徊、往來之里爾妹乎置而、心空在、土者蹈鞆、

〔萬葉集二十〕冬日幸于靱負御井之時、内命婦石川朝臣應詔賦雪歌一首、諱曰邑婆、
麻都我延乃、都知爾都久麻泥、布流由伎乎、美受氐也伊毛我、許母里乎流良牟、

〔空穗物語國讓下〕おとゞまいり給へれば、宮いりふし給へれば、えのぼり給はで、しもにたち給へれば、きみたちは、さながらつちにたち給へり、

土塊

〔枕草子 三〕人の家のまへをわたるに、さぶらひめきたる男、つちにゐるものなどして、をのこゞの十ばかりなるが、かみをかしげなるが、ひきはへてもさばきてたるも、(下略)

〔新撰字鏡 三〕𡎝 塊也、圡塊也、豆知久禮

〔倭名類聚抄 一 土〕土塊 黄色文成云、塊土片也、音會、和名豆知久禮

〔箋注倭名類聚抄 一 土〕新撰字鏡同訓、豆知久禮、又見枕草子、新井氏曰、豆知久禮謂土之似石者、豆知土也、久禮石也、謂細石為伊久里是也、仁徳天皇御歌萬葉集藤原宮之役民作歌、柿本人麻呂作石見國別妻上來時歌、山部赤人作歌、皆假借久禮為石、〇今本土部云、塊、塊也、林音義二引作土塊也、因引作土塊也、音與此不同、片字恐誤、原本說文作塊色文成土也、

〔類聚名義抄 中 土〕つちくれ 塊又墣をよめり、くれとはくりといひて、土の石に似たるなり、よて壽文經詞に塊をもいへり、延式式にも土村と見えたり、

〔延喜式 三 臨時祭〕凡塗調、(中略)外七寶、(中略)土塊、

〔宇治拾遺物語 八〕むかし天竺に信徳多といふ人ありけり、(中略)信徳多がつまにてありし、そうかたが家にきたりぬ、(中略)信徳多が家を出て、内裏に参て申やう、信徳多はわがとしごろの夫なり、それにわれをすてゝ、すまぬ事は、たれにかはうたへ申候はん、帝王これを理り給へと申に、公卿殿上人これをみて、かぎりなくめでまどはぬ人なし、帝きこしめしてのぞきて御覽ずるに、いはんかたなくらうたくし、そこばくの女御后を御らんじくらぶるに、みなつちくれのごとし、これは玉のごとし、(下略)

〔金葉和歌集 十 雜〕かはらやをみて　よみ人しらず

かはらやの板ぶきにても見ゆるかな

助成

つちくれしてや、つくりそめけん

〔倭名類聚抄　一塵土〕泥　孫愐云、土和水也、奴低反、和名比知利古、上云古比千、

〔箋注倭名類聚抄　一塵土〕比知利古、天武紀傍訓同、新井氏曰、土子之義、利助語、古典、砂訓須奈古之古、同、萬葉集水土手訓古比知、又見後撰集、今俗呼土呂、〇今廣韻作水和土也、廣韻注月具云、土得水而爲泥、即是義、按泥本水名、出北地郁郅北蠻中、見説文、以爲土泥字、所謂假借也、

〔類聚名義抄　五水〕泥　奴低反、又奈計反、アナクレ、ヒチリコ、ヒヂ、〇和音泥

〔伊呂波字類抄　古地儀〕泥　附同奴低反井居宅具　コヒヂ　〔同　比地儀〕泥　附同奴低反井居宅具　ヒヂリコ　水和土也

〔倭訓栞　前編二十比〕ひぢ　神代紀に泥字を訓せり、水土の義なるにや、ひぢはぬま也、土字をもよめり、土形の訓是也、歌に袖ひぢて、源氏になみだにひぢてと見ゆ、万葉集に所濕をよめり、ひたしての義、たし反ち也、よて漬字をもよめり、伊勢物語に、淺みこそ袖は漬らめとあるを、万葉集に、浮田川袖ばかり淺きをやと見ゆ、拾遺集詞書に、松の海にひたりたる所をとて、歌に海にのみひぢたる松とよめり、たり反ち也、万葉集に、ひづちを約めてひぢといへるも多し、

〔日本釋名　中水火土石金玉〕泥　ひちは水にひたる也、古歌に袖ひぢてと云がごとし、りはうつほ字、こは粉也、細也、細土の意、粉と同意、水にひたる細土也、又どろと云、どろくる也、かたまりたる土のとろけたる也、

〔東雅　二地理〕泥ヒヂリコ　倭名鈔にヒヂリコ、またコヒヂともいふと見えたり、ヒヂといふは土地、りと云ふは語助にて、コといふは、スナゴなどいふコの詞に同じき也、俗にはドロといふ、其義不詳、古事記にトロヽドといふ語見えたり、即今も俗にトロといふが如きは、滑なるをいふ也、其の滑かなるをいひしと見えたり、

〔倭訓栞　前編二十比〕ひぢりこ　和名鈔に泥をよめり、土粉の義、りは助語也、一説にひぢはぬまなり、りはにと通ふ、

〔倭訓栞 前編 十九 之〕こひぢ　倭名抄に泥を訓せり、ひぢともいへば、こは濃なるべし、歌に多く讀踏によせり、

〔倭訓栞 中編 三 宇〕うひぢ　神代紀に泥土をよめり、うくひぢの義也といへり、

〔倭訓栞 中編 十二 須〕すひぢ　神代紀に沙土をよめり、すなひぢの義なりといへり、或は浮泥に對し沈泥の義なりといへり、

〔日本書紀 一 神代〕一書曰、天地未生之時、譬猶海上浮雲無所根係、其中生一物、如葦牙之初生埿中也、便化爲人、號國常立尊、〇中略

次有神、埿土煑尊、〔埿土此云于毘尼〕沙土煑尊、〔沙土此云須毘尼、亦曰埿土根尊、沙土根尊、〕

〔日本書紀通證 二〕卜氏曰、埿土于毘尼也、沙土須毘尼也、

〔古事記 上〕次成神名、宇比地邇神、次妹須比智邇神、〇下略

〔古事記傳 三〕宇比地邇神、次妹須比智邇神、書紀に、埿土煑尊、沙土煑尊と書て、埿土此云于毘尼、沙土此云須毘尼と注されたり、[illegible]

宇比地は、[illegible]泥を宇伎と云ることあり是なり、[illegible]須は、土の本と分れたるを云、[illegible]

沙土とは、其泥と土と漸分れたるを云、[illegible]

[illegible]須は、又書紀に、二柱共に煑を根とも申すとあり、[illegible]

さて又師の説には、宇は浮なり、須は沈なり、[illegible]此は泥なりと云れつる、此も然るべし、

埴

此時は邇をば土の意として、(邇は土の名なり、故黏たる土を埴と云、赤土を丹と云、青き土を青丹と云類多し、)比地邇を泥土とも見べし、抑書紀の字と、師說と、比地の意異なり、書紀には土と作れたれば、土形儀埴などの比地にて、土の總名に取れるなり、師說にては、土と水と和りたるにて、泥字の意にて、和名抄に、泥和名比知利古、一云古比千と見え、(後歌に多く泥々ないひかけたり、)俗言に豆呂と云物なり、此二說、今一方に思定め難し、

〔運步色葉集 比〕泥(ひぢ)

〔倭訓栞 前編十八 登〕どろ　泥をいふ、土と水のとろけたる也、備後福山にてたべんといふ、(中略)○出羽に長瀞(とろ)あり、瀞は俗の造字也、

〔物類稱呼 一 天地〕泥 どろ　備後福山にて、だ゜べ゜ん゜と云、　今按に、金泥(こんでい)、銀泥(ぎんでい)などいふ物も此意成べし、可後篇、(和名ひぢりこ、又こひぢと云、俗語によそへて歌によめり、)

〔新撰字鏡 土〕埴(常力反、黏土也、黏也、)

〔倭名類聚抄 一 土〕埴　釋名云、土黄而細密曰埴、(常職反、和名波爾)

〔箋注倭名類聚抄 一 土〕所引釋地文、釋名又云、埴膩也、黏眤如脂之膩也、說文、埴黏土也、按土黄而密者必黏、尾張本職作職、按職埴同音、然常職與廣韻合、新撰字鏡、神代紀、萬葉集同訓、按古事記應神天皇御歌云、波都邇波、波陀阿可良氣美、志波邇波、邇具漏岐由惠、波都邇、謂初發掘之土、其色赤、志波邇、謂發掘下底之土、其色黑、然則波爾直初土之義、古事記、萬葉集、波邇用赤土字、與膚赤良氣美合、本居氏以爲光映土之義、恐非是、今俗呼倍。奈。者、直波爾之轉語也、

〔倭訓栞 前編 二十四 波〕はに　日本紀に埴又土をよめり、ねばにの略、にはつちの古語なるべし、埴は黄土也と注せり、万葉集に黄土も赤土もよめり、

〔古事記 上〕次於隷成神名、波邇夜須毘古神、(此神名以音)次波邇夜須毘賣神、(此神名亦以音)

〔古事記傳 三〕波邇夜須毘古神、波邇夜須毘賣神、名義は埴なり、字鏡に埴、粘土也、波爾、又須那と
あり、[illegible]
〔日本書紀 一神代〕一書曰、(略)時伊弉冊尊爲軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥生土神埴山姫及水
神罔象女、(略)
一書曰、(略)土神號埴安神、然後悉生萬物焉、
〔日本書紀 一神代〕一書曰、(略)是時素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處、乃興言
曰、此地吾不欲居、遂以埴土作舟、乘之東渡、到出雲國簸川上所在鳥上之峯、(下略)
〔日本書紀 三神武〕戊午年九月戊辰、是夜自祈而寢、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土、(香山、此云介遇夜摩、)以造
天平瓮八十枚、(略)時弟猾又奏曰、(略)宜今當取天香山埴、以造天平瓮、而祭天社國社之神、然後擊
[illegible]
己未年二月辛酉、天皇以前年秋九月、潛取天香山之埴土、以造八十平瓮、躬自齋戒祭諸神、遂得安定
區宇、故號取土之處曰埴安、
〔倭訓栞 前編二十 へ〕へな 土にもいへり、へなつちともいふ、或は泥をよめり、
〔倭名類聚抄 一 土〕堊 唐韻云、白土也、音惡、[illegible]
〔箋注倭名類聚抄 一 土〕唐韻同、按玄應音義引蒼頡篇、文選子虛賦注引張揖並云、堊白土也、孫氏書
後之、西山經云、大次之山、其陽多堊、注、堊似土色甚白、按說文、堊白涂也、本以白土涂白之字、轉謂白
土爲堊、堊亦見塗類、
〔重修本草綱目啓蒙 三 土〕白堊 イマリブチ ナンキンブチ アブラアトレ ミガキブチ ミガ
キズナ レラアチ ハミガキブチ ヤキワンブチ 一名白墡土[illegible]
肥前伊萬里及唐津ニテ茶碗類ヲ燒クヲ本山茶碗ト云、其上品ハ南京ノ僞物トス、此ニ用ル土ナ

ル故ニ、南京ワチノ名アリ、伊萬里ノ方言アワチト云、蓋ハ堊ノ字ニヨルカ、其他諸州ヨリモ出レドモ、肥前ヲ上品トス、安房ヨリ出ルモノハ房州砂トモ當磨砂トモ云フ、信濃ニモアリ、江州磨針峠ニ多クウルハ、即ツノ土ノ產也、方言磨キ砂ト云、又塊ヲ成スモアリ、此ヲミガキイシト云、今刀ヲ磨シタテピカリオトスモノ是ナリ、又白善土二品アリ、硬ヲ粳米土ト云、軟ヲ糯米土ト云、天工開物ニ、粳米土、其性堅硬、糯米土其性䝨軟、兩土和合、瓷器方成ト云、粳米土、肥州房州江州ヨリ出ル者是ナリ、糯米土、讃州ニアリ、糯米土ノミニテ器ヲ製スレバ、火ニ逢テ破裂シ易シ、故ニ粳米土ヲ合ス、讃岐ニ讃ノ土ト呼ニ二種アリ、上品ハ鉛粉色、[illegible]下品ハ白堊ニ下品ノ鉛粉ヲ少シ合スルモノ也、

集解、白瓷器ハ白ヂノ茶ワン坏ハ茶ワンノシタク、續日多白墨青黃堊、青堊黃堊俱ニ和產アリ、

增、一名白土、[illegible]　白墡土[illegible]

(日本山海名產圖會五)堊土　泉山に出て、國中の名產本朝他山に比類なし、中華は中國の五六處にも出せり、是土にして土にあらず、石にして石にあらず、其性甚堅硬し、掌碓をもつて打かき、金杵の雷水碓に是を舂しむ、(杵の幅一尺許、厚さ一尺五六寸、長さ一間半許、)最水勢つよくまかけて、碓の數多く連らね、よく末粉となりたるに、又他の土の柔軟なるを二三品和し合せて、家の内の溜池に深し、度々拌通し、よく和したるを飯櫃に漉し、又外の溜池へ移し、よく澄し、其上に浮たるものを細料とし、中を普通の上品に用ひ、底に下沈たるは取捨て不用、さて其水干の土を、素焼窯の脊に塗附、内の火力を借りて吹乾かす、最これによき程を候ひみて掻き落し、重て清水に調和し、かの團子のごとく粘和して、工人に與ふなり、是まで婦人の所爲なり、

(武藏國八王子住佐藤助十郎所藏文書)今度江戶御城御作事御用白。土。、武州上成木村北小曾木村山根より取寄候、御急之事に候間、其方御代官所三田領、加治領、御領、私領道中筋より、助馬出之、無

滑石并陶器御用可申付候、但□無懈怠有之者堅出し不申候様可申付候、以上。

慶長十一年午十一月　大　相模守

本　佐渡守

大久保石見守殿

貴書之通可相心得者也、

大　石見

上成木村白土焼

北小曾木村白土焼

〔新編常陸国誌 土産 十一〕白土

久慈郡常福寺村町田村ヨリ出ヅ、其ヲ出ダレバ採ヨトヲ称ス。

〔紀伊続風土記 物産 一〕白土

名草郡多田郷多田村、山東荘東谷村、平田荘北野村、那賀郡野上野荘東坂本村、在田郡山保田荘西原村等より出づ、陶器に用ひて上品なり。

赤土

〔本草和名 玉石〕代赭 一名須丸、一名血師、一名鉄朱、一名土心、一名土黄、一名赤土、和名阿加都知、出太宰。

〔重修本草綱目啓蒙 三 石〕赤土　アカツチ　山ヨリ出ル色赤キ土　一名絳壟

黄今俗ニ赤土ト云ハ黄土ナリ、黄土ヲ焼キタルヲ丹土ト云ヒ、彼ニ用ユ、蛮国持渡ル者ヲ以テ求タルヲ佳ハベンガラハワヤト云、略シテベンガラト云フ、此レハ緑礬ヲヤキテ赤クシタルモノニテ、卽チ鉄紅ナリ、今大坂近邊ニテ緑礬ノセンクブヲ焼テ水飛シタルヲ、ベンガラト云フ、此レハ鉄物ナリ、石部ノ條下ノ鐵丹ナリ。

黄土

増、一名鼠肝土、〔綱目〕　増、東醫寶鑑云、赤土止一切失血、殺精物、辟鬼魅、辟牛馬、辟瘟疫、即今好赤土也、ベンガラト云フ、染家偽リ用ユルモノ、銀山銅山ノ銀銅ノ氣ヲ帯タル赤土ヲ燒キ赤クシ賣ル、全ク鐵錆ノモノニ似タリ、

〔雍州府志六土産〕中山赭土　東山中山所有之土也、倭俗薬店謂八百屋、凡薬葉八百萬之物無不有、故號八百屋、蔵薬實生菓類書籍者、以此土塗廂之、則經月不腐、

〔甲斐國志百二十三物産部〕一顆爐　所在ニアリ、北山筋高成村ノ赤土尤モ佳ナリ、飾壁ベシ、

〔新編常陸國誌六十一土産〕赤土

茨城郡常葉村ヨリ出ヅ、コレヲ以テ鐵ニサビヲ付ルモノナリ、又久慈郡大平村高貫村ヨリ出、

〔紀伊續風土記物産一〕赤土本草

牟婁郡諸山及名草郡名草山より出て、藥品に用ふ、又名草郡和佐莊歓喜寺山の赤土は、瓷盆を燒きて、自然に雅趣あり、

〔重修本草綱目啓蒙三土〕黄土

黄土ハ山ツチノ色ノ黄ナルモノナリ、今黄土ト云フテ薬用トシ、水飛シテ繪ノ具トス、多ク江州ヨリ出ス、又染家ニテ象牙色ヲ染ムルニ用ユ、

附方、錢鑄黄土、フリガチノイカタニ用ヒシ黄土ナリ、

鐔鍔組孔中、黄土スキヲイルトキ、柄ヲイルヽ穴ノウチニ入タル黄土ナリ、鐔鍔倶ニスキノコトナリ、

増、刀工家ノ燒ヲツクタルニ用ユル土ハ、山城紙屋川ノ上流岸側ニアル鼠色ノ土ト、稲荷山ノ赤土ヲ水ニ和シタ用ユ、

〔新編常陸國誌六十一土産〕黄土

黒土

風土記久慈郡條云,谷會山,所有岸壁,形如磐石,色黄穿阬,獼猴集來,常宿喫噉云々,山田里大伴村有黃土色黃也,所以爲獼猴喫噉所食,故ニ谷會山ハ今ノ舊谷ナルベシ,山田里ハ今ノ松平村ノ邊ナリ,其邊ニ大作ト云所今ニ存ス,

(紀伊續風土記物産一)黃土

伊都郡山にあり,顔料となし又三和土に用ふ又水簸して繪具となし又染家に黄色を染るに用ふ,

(新撰字鏡)壚 黒土也,

(倭名類聚抄一)壚 釋名云,土色黒曰壚,音盧,和名久呂豆知,

(箋注倭名類聚抄一)原書作土黒曰壚,盧然解散也,按說文,壚,黑剛土也,

謂以口本亦同,本草和名土上有黒字,則知作壚爲是,又作墟,古字少假借也,新撰字鏡,壚,訓久呂豆知,

(倭名類聚抄一)涅 說文云,水中黒土也,奴結反,和名久利,

(箋注倭名類聚抄一)原書同,按說文,涅,黒土在水中也,徐鉉本之,

(雍州府志七土産)黒土 洛東圓福寺村土民所賣黒土,係古判,其色黒而粗,然若燒時,係古判,黒土之

也,又鋳工鋳刀時,取黒土塗刀面之處云,

靑土

(紀伊續風土記物産一)靑土

名草郡山東莊山奥にあり,陶器に用ふ,

土金青

(新編常陸國誌土産)空青

風土記久慈郡條云,河内里云々,所有土色如青紺,用畫麗之,時隨朝命,取而進納云云,

今里川郷町又村ヨリ出,色金青ノ如シ,俗土金青ト云,畫ニ用フルニ尤下品ナリ,且出ス所多カラズ,故ニコレヲ知ルモノ多カラズ,按ニ町又村ハ今全ク里川郷ニ屬スト云ヘドモ,古ノ地理ヲ以

タロレヲ攉ニ、久慈郡ノ西邊ニアリ、那珂久慈兩郡ノ接シタル地ニテ、河内郷ノ西南ニ當レリ、風土記ノ云處、蓋コノ地ナリ、採藥使記云、照任曰、丹州多田ノ山ヨリ空青ヲ出ス、或曰、長州ヨリ紺青ヲ出ス、未知其眞、先辜按ニ、和州所々金山ノ中ヨリ空青ヲ出スト雖、上品ハ稀ナリ、俗ニ花紺青ト云ハ、別種ニテ、番國ノ產物ナリ、　信名按ニ、青丹ヨシ奈良ト云ヘルハ、和州ヨリ出ルト云、空青ハ即青丹ナルベシ、和名抄ヲ考ルニ、空青ハ金青ノ下品ナルモノナリ、

〔紀伊續風土記物產一〕土紺青

伊都郡上官省符庄慶野村の奥山崖の崩れより出づ、土中に筆墨の塗りたる如きものあり、其中紺青の如し、

土綠青

〔紀伊續風土記物產一〕土綠青

在田郡湯淺庄の山に產す、土人淺黃土といふ、

鏽土

〔毛吹草三山城〕遊行澀土用之　鐵漿　生玉澀土

〔雍州府志六土產〕遊行鏽土　東山清水山之麓、法國寺邊、其土赭用之塗壁、則其色淡紅而有斑點、朽者採之茶事壁用之、然不及大坂之產、法國寺遊行一遍上人之澀也、故俗專稱遊行土、

玉子土

〔長防產物名寄土石〕玉子土

美禰郡大田村ノ內、トビノス、同郡赤村ノ內、ヒタガタコ、

石灰

〔倭訓栞前編二〕いしばひ　石を燒て灰とす、畿內に是を用ふ、沿海の地にては、蛤蜆等を灰とす、泉南雜志にも、泉无石灰、燒蠣房爲之と見えたり、

〔大和本草三金玉土石〕石灰

礦石ヲヤキタ灰トス、藥ニハ久シキヲ用ユ、醫書ニモ千年石灰トアリ、又新シキヲ用ユ、百年十年ナルヲモ用ユ、近江ニ多シ、白カベヲヌリ、棺ヲヌリ、小池ヲ作ル用多シ、槐木ナドノ色付ルニモ石

灰ヨレ、博物志曰、燒白石作白灰、既訖積著地、經日都冷、遇雨及水澆即更燃、煙焰起云云、　和俗ニ亦石灰ヲ馬ニ駄スルニハ必雨ヲ忌ブ、イカントナレバ、若路間ニ逢ヘバ、其石灰ヨリ火出テ馬ヤケ死スル故、火ノ出ヅル時、急ニ馬ノヲヘル石灰ヲ切ハナサントナリ、舟ニツム時モ亦火ノ用心スベシ、壁土ニ用ルモ堅ク物ヲ堅ムル為アルユヘ也、器物ニ入テ堅固ナラシム、形有ル物ヲカタムル故也、　壁ヲヌリ小船ヲヌルニ石灰三斗、細砂一斗、眞土一斗フルヒ合セ、煉調フムラナクカケ、フキタヽキノタメナル、是文禄慶長ノ方也、又方石灰一斗、細砂四升ヲ用ユ、右眞土ハネバリアル土ヲ用ユ、石灰ナケレバ蛤殻ヲ用ユルモヨシ、　女兒ノ陰門生付テ不開、只小便通ノミアル者アリ、鋼鐵ヲロクトヤキ切開キ、アトニ燒キ石灰ヲヌルベシ、此法蠻國方ニ出タリ、年不長時早ク開クベシ、時珍曰、石灰ハ止血神品也、但不可著水、著水即爛肉、　石灰ノ効能多ク本草ニ載ス、有奇效家可貯、

〔本草綱目譯說九〕石灰　イシバイ

石ヲ燒タ灰石ニシタルナリ、今本山石ベイト云コレナリ、江州伊吹山ノ近處伊吹太平寺村ト云處ニテ多燒キ諸國ヘ出ス、又江州石部近邊ニモ燒クナリ、又近年ハ貴舟ノ近處ニモヤク、コノ貴舟ニテ燒石ハ鞍馬ノ山中ヨリホリ出スナリ、鞍馬ノ僧正ガ谷ト云處ニ、義經師ヲ學ビシ處アリ、ヨヽニハ長法石ト云テ、自然ト色々ノ形ノ石アリ、コレニ少キズヽ細工ヲシテ、色々ノ名目ヲ付タアリ、コレ皆石灰ニ燒ク石ナリ、コノ石灰石ト云モノハ、皆自然ト色々ノ形ヲナシタアルモノナリ、外ヘアラビタル白色也、肉ハ鼠青シ、コレモ土ノ上ヘ出タアルハ灰ニ燒ニ宜カラズ、土中ヨリホリ出タルガ上品ナリ、コノ石ヲ細カニ碎キ燒キ灰トスルナリ、武州ニテハ八王寺、成木村等ニテヤク、武州ノ石ハ京ノ石灰石トハ少シ異ニシテ、色淡ク白ニシテ少シ黒ミアルナリ、凡石灰石ト云モノハ、皆タヽケバヨク燒ルモノナリ、故ニ灰ノ廻タヘザルハ諸石ニナルナリ、又コレヲ服ニ用、今加茂川石ト云ハ、皆コノ石灰石ナリ、色ハ種々ニナリタルモアリ、諸國トモニ石灰石

ハ硯ニロキモノナリ、土佐、豫州、越前、大和、作州、備後等ニモ石灰ヲ燒クナリ、其外石灰ト云テ多ケレドモ、僞物多シ、カキガラ、レイシ、カラス貝ノカラナドヲ燒タルナリ、コレハ貝石灰ト云、コレハ藥用ニモナラズ、壁タヽキ土ナドニモ下品ナリ、藥ニハ、本山石灰ノ中ノハナコト云ヲ用、ハナコト云ハ、細ニシテ、正白ニシテ、上品ナリ、貝石灰ハ漢名蚌灰トモ蜃灰トモ云ナリ、カキガラヲ石灰ニシタルハ、古井灰ト云ナリ、石灰ヲヤクコトハ、天工開物ニ委ク法ヲ舉テアリ、圖モ出シテアリ、唐デハ石或ハ金ヲヤクニハ石炭ヲ用、石炭ハ火ツヨクシテヨシ、日本ニハ皆木炭ニテ燒、火弱ニシテ不便ナリ、天工開物ニ、以青色者上、黄白次之、石必掩土内二三尺掘取、受燒土面見風者不用、燒灰云々、又云、最佳有曰礦灰、最悪者曰窯滓灰云々、銷解ニ、風化水化二種云々、風化ト云ハ、水ヲカケズ、自然ト碎テ粉ニナリタルナリ、凡石灰ハ燒テ當分ニ其マヽニテハ粉ニナラズ、コノ粉ニナラヌヲアラバイト云、コレヲ俵ニ入レ三十日程置バ、自然ト粉ニナルナリ、コレヲワケバイト云、コレ風化石灰ナリ、又燒テ熱シテアル時、直ニ水ヲカケルト忽粉ニナル、又燒テアラバイニナリタ冷タ、アルヲ、少シ濕メテ水ヲカケルモ粉ニナルナリ、コレ皆水化石灰ナリ、藥用ニハ風化ヲ用ユ、風化石灰ヲ略シテ風化灰トモ方書ニカキタアリ、

(重修本草綱目啓蒙石部)石灰○中略

石灰ノ礦石ハ、白質ニシテ微ク青色ヲ帶ブ、俗ニナドリセキト云、硯材ト成ス佳ナリ、其久シク土上ニ露ルヽモノハ、燒ト雖ドモ石灰ト成ラズシテ、黒褐色ニシテ輕虛ナル石炭ニ似タル石トナル、此物暴雨ゴトニ山中ヨリ流レ出テ海中ニ入ル、故ニ尋常ノ浮石ニ混ジテ海濱ニ多シ、俗ニカラスミイシト云、物理小識云、桐城有浮石、土中青石、燒作石灰、其不成灰者燒之、其汁如油、油盡則石枯、可以浮水上、是又一種浮石也ト是ナリ、又本山石灰ヲ正石灰ト云ヒ、單ニ正石トモ云、此レ介類ノ灰ニ對スルノ稱ナリ、介類ノ灰ハ火力ニ堪ヘズ、倉庫ヲ塗ルニハ正石ニ非レバ用ニベカラズ、

(日本山海名産図会)石灰　一名希灰　散灰　堊石

今近江の物上品とす。美濃又是に亜し。是舎密なる地なれば也。元は和州芳野高原に焼初て、其年月未詳といへども、本朝用ひりたることは古し。桓武天皇大内裏御造営御殿の時に石灰壇を造作らせたまひて天子親国方拝などの土座とす。其外、人用に益することども多し。先堂塔高楼の舟船堂萬の壁塔凡木を貴るの物類器器物に塗るまで、是に頼ざれば成らず、実に天下の至宝なり。誠に都なす外百里の内外土中かならずこの石を生ずといへり。

今江州伊吹山尾嶋又石部に焼物皆青石なり。山州聚馬に焼物は、灰色石にて青石には分れり。青白なるは是いずく石は土内に残よ事二三尺なるを堀取りあらはれて、風霜を見る物は取らず。伊吹山の貫晃嶋山は一嵐の青石なり。鳥部ある物は下品とす。堀出し、矢をもつて打破り、手鋤鶴木を以て二百間計の山を崩落せば、見掛けて地に付くくだけざる物はよしとせず。やよ川は舟にて渡せり。

蠣殻を焼くもの石灰に劣れり。

焼法は、竈の高さ三尺余周囲四間計。四土にて築る下に風の通する穴あり。先石を割打砕きて、能よく燃しめ其上へ炭を敷きならべて火を置き、火気満て、底に通るを候ひて火を消し灰を取出して幾度もまかり、又其上にて焼く。竈の方は異なり。焼窯といひて、高一丈周径三尺計、内は下程次第に細く三角になして焼たる灰を自然と底に落さんが為なり。石と炭とを夾みて築く重も積重、下より焼りて、火気を登せ、底よりさりへ焼落るを、横の穴より掻出せり。かくて次第に石と炭とを上へ積継て焼初むるより、凡百日計の間、昼夜絶る事なし。是中華の方のごとし。尤夏多は焼ことなく焼きて二十日許風中におけば、自に蒸せて自然吹化して粉となる。又急に用る者は水をそゝげば忽ち解散す。しかれども風化の物をよしとして、はじめより後に固めて風の

殼土

日晷

あたる處におき、貯へ置けば、其節に目も重く、灰も自然に倍し、はじめゆるき俵も後には張切る許とはなれり、是をフクルといふ、かくて一年づゝを越えて、かはる〴〵に市中へ繰り出だせり、さてかくなりて後は、大に水を忌めり、もし水を沃げば忽ち燃出て、いかんともする事なく、故に舟中には是を專と守り、又牛に負ふせて出るに、若雨にあひて、火出て、牛を損ずるを恐れ、常に牛飼の腰に鎌をさし、結たる繩を手ばやく切解の用意とす、

〔毛吹草　三〕攝津　阿波堀川石灰ノ灰ナリ、　近江　石灰、

〔紀伊續風土記　物產　一〕石灰本草綱目以之爲比、
石灰類は牟婁郡尾鷲鄕邊在田郡處々、名草郡多田鄕小野田村等に產す、今在田郡なる此石を燒き製し出す、即本山石灰にして、上品なり、

〔泉州府志　六十土產〕殼土　凡山間黃土之變謂殼、者是閩志。龜。殼。土。、採斯土加石灰少許、以水黏之、而數層下井幾百闌、以木槌緊擣之、其堅硬如石、是又他郡之所不爲也、斯土自泉州至晉井潯尾山間取來、

〔百品考　下〕巳初剃那　和名ロヤリ
農政全書三。和。之灰、今匠者多用之、其一則土也。○中略
三和ノ灰ハタ。ヽ。キ。ツ。チ。ノコトナリ、文公家禮ニ三和土ト云、人家小溝盆池等ニ作ルモノ是ナリ、京師東山ニロヤリト云土ヲ出ス、石灰ニ和シテタヽキツチニ作ル、若此土ナキ處ニテハ、細石黃土石灰ノ三物ヲ和シテ作ル、故ニ三和ト云、ロヤリハ、近山ノ土瘠タ草短キ處ニ出、細石ト黃土トヲ合セタル用アリ、故ニ石灰ト二物ニシテ三和土ノ功ヲナスナリ、又塊ノ大ナル者ハ槌ニテ碎キ、アラキ石ヲ去リ、石灰ニ和シテ用ユルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙　三土〕太陽土　日輪ノアル方角ノ土
時刻ニヨリテ、日ノアル處ノ位ヲ考ヘテ、其方ノツチヲトリ用ユルヲ云フ、譬ヘバ未ノ刻ナレバ、

中央ヨリ西ノ方ノフチヲトリ、巳ノ刻ナレバ中央ヨリ東ノ方ノフチヲトルナリ。

圭鍼九宮、四方四隅中央各圓ニ圓ヲ穿ツ、九宮ヲ描シテ、日輪ノアル方ノ下ノフチヲトルナリ。

〔毛吹草〕山城　黒谷墓入合土[illegible]　鶴鶴彩土[illegible]　白川眞砂瑠土[illegible]　美濃　赤

飯羽土

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎
編修長　正七位文學博士　佐藤誠實
編修副長彙校訂長　從六位文學博士　松本愛重
編修　正七位　廣池千九郎
編修彙校訂　加藤才次郎
編修彙校訂　山本信哉
編修彙校訂　村尾節三
編修　從六位　佐伯有義
編修彙校訂　三浦千畝
校訂　竹島寛
校合員　齋藤松太郎
校合員　平川清水

編修顧問　從三位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上頼圀

明治四十四年八月二十三日印刷
明治四十四年八月二十六日發行

版權所有

神宮司廳

（白石製本所　製本）

昭和十年八月一日印刷
昭和十年八月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川　一〇五四番　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 8990